朝夜グラフィティ。

浅井 哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朝夜グラフィティ。

【Ｎコード】
Ｎ６２７４Ｆ

【作者名】
浅井　哉

【あらすじ】
朝と夜が相対す様に、太陽と月が相対す様に。だからこそ僕等も、相対しているのかな――？　アサキとユウヤは双子なのに、姿も何も全く似る事のない兄弟だったり。そんな二人のグラフィティは、平凡に、時折波乱を迎えつつつらつらと日々を重ねる。「　更新不定期、最低でも一週間に一回は確実……だと言いたい。ｂｙ，浅井　」

1＋朝と夜。

こんにちは、初めまして。
ええと僕はヒコクアサキという者で、中学二年生の人間です。…
…まぁ其れだけ。

「アサ君アサ君アサくーん！！！！」

よく人からクールに見えると言われますが、あれは絶対無気力又は根暗の同義語なんだと思って疑わないません。

「アサ君てばー！！！！！」

だって仕方ないよ、自分は凄く苦労人だと惜しむ事なく言い張れる自信があるから。
……だから、まぁ、とりあえず――

「うるせぇ！！」

――先程から前に居る五月蝿い我が兄をどかそう。
さっきまで電話してたじゃないか此の人。……いや、兄と言っても双子なので年とか変わらないけれど。名前はユウヤ、まぁ気軽にクソ野郎とでも読んで上げてクダサイ。

「んで、何」

「俺のお話聞きなさい」

そう言ってよく分からないが差し出す手に僕はとりあえず飴をひとつ置いておいた。

「それあげるからちょっと黙って」

「俺は餓鬼か何かですかいアサ君や」

我が兄ながら彼は餓鬼だと思う。だって違うクラスの癖に毎休み時間弟に会いに来るってどういう事？

しかも滅茶苦茶、飛び抜けて、かなり、完璧に五月蝿くて、僕と少しも合わない部類の人間だから、出来ればもうちょっと大人しくして欲しいと言うのが本音だったり。

巷じゃブラコン兄貴とは有名な話だ。……今は家だけどさ。

「ていうか君は何故今お菓子を持っていたの」

「ユウヤ対策ザ・ベスト」

「意味分からないよ」

ご尤も。僕もよく分かってない。

という訳で僕は結局ユウヤの話を聞く羽目になる、其れが何時もの日常だ。

「今日さ、俺は凄く怖い夢を見たんだ」

「さよならそのまま死んで」

「何いきなりお兄ちゃんの人生終わらしてるのアサ君。ちゃんと聞

いてよ」

相変わらず五月蝿い兄だ。いや、双子だけど。

「聞いてやる、どんな夢だ」

「何とですね、聞いて驚き戦(おのの)くなよアサ君。何と……何とあのアサ君が笑顔で俺に駆け寄ってく――」

「――死ねば？」

「ああん！　やっぱり夢は夢で終わるのね！！」

何か此の兄貴は素で死ねばいいとか思う今日此の頃の僕。理由は二十三個くらいあるけどもう一概にまとめりゃ“五月蝿いから”の一言に尽きる。二十三は何処から弾き出した数字なのかは自分でも分からないから聞かないで。

「たまにはいーじゃん、お兄ちゃんって呼んでくれたって！！」

「気持ち悪いし。ユウヤが兄貴とか、学校じゃ知られてないからね」

「嘘ォ」

そこは素でびっくりしたらしいお兄ちゃん、ふっ、言葉には絶対してやんね。

学校でよく、「アサキ君がお兄さんだよね？」と聞かれる事早複数回。

「俺ってばこんなにあー君の事思ってるのに……」

とりあえず部屋に戻ろう、ビバ・逃走。
しかし着いてくるのは目に見えているのでもう気にしたら終わりだよねこう言うのって。

「んであー君」

「何クソ野郎」

「もう気にしないよ此の際」

「で？」

「――母さんがアサキに代わってって下の受話器で待ってる」

――此の人大事な用件は先に言わないんだよね。
僕はユウヤを足蹴にしつつ、上ってきた階段をダッシュで駆け降りた。

……そして母さんにやんわり怒られたのは、なかなか出なかった僕でしたと。

絶ッ対理不尽！

2＋馬鹿と天才は紙一重なんて嘘。

「ねぇアサ君、アサ君の頭は何で出来てるんだい？」

そうやって時折話題を振ってくるのは二：八の割合で圧倒的に我が片割れユウヤである。

こんばんは、きっと夜ですアサキです。また馬鹿が馬鹿言っています。

「何って言われても」

「アレでしょ、もしかして某アニメーション、略してアニメの中にありそうな改造手術を受けたからそんなに頭が良いんでしょ」

「馬鹿野郎」

サクッ。

「ぐふぉあほぁ！！！！」

変な奇声を上げるな馬鹿。僕が持っていたシャープペンシル、略してシャーペンをユウヤの脳天に突き立てた、いやマジで。

向かい合う様に座っていたユウヤはゴロゴロと地をはいずり回っている、何とはしたない。

「おいユウヤ、とっとと写し終えろ。僕が勉強出来ないでしょ」

「ふぁい」

只今僕等は二人で仲良く勉強中――コイツの半強制的に――……のはずなんだけど、大体はユウヤが僕のノート写してるだけ。何故かって？　只ノート提出が近いからだよ。何故近いかって？　――テストがあるからです。略してテスある。……これは略せねぇか。

「お兄ちゃんはアサ君みたいな優秀な弟を持って幸せですよ」

「そうだね馬鹿」

「アサ君が居なかったら今頃お兄ちゃんの成績に煙突が立ってしまう所でしたよ」

「そうだね馬鹿」

「アサ君は運動も出来るし凄いよね」

「そうだね馬鹿」

「……」

ＷＩＮ、僕。

……流石に可哀相なのでやめる事にした。でも授業中にフルカウント寝てるから最後只の棒球でアウトになんだよ、棒球だって分かってんだから僕みたいにツースリーでバスターしかけろし。……我ながら一部にしか判らない気がすると勘付く僕、野球好きなんだよ。

「でもさ、やっぱ血を分けた双子だというのに不公平だと思わぬかねアサ君」

「何が」

「アサ君は勉強出来て運動出来るのに俺は運動しか出来ない、これを不公平と呼ばす何と呼ぶ！？」

「努力」

「あー君努力なんてしてないでしょ！！！！」

「だったら僕だってユウヤの大量な体力が欲しいよ」

自慢じゃないが、僕の体力は激皆無だ。バスケでいうなれば、三分程でダウンする自信がある。に比べてユウヤは持久力に関しては恐らく二年でずば抜けて高い。何、何食ったの？　君こそ改造手術とかした？

「まーまーアサ君、良いじゃないですかアサ君。とりあえず今はテストに向けて勉強を頑張りましょうよ、略してテス頑」

「だったら早く写し終えてよ、僕それないと何も出来ないんだから、後、その略は無理があんだろ」

それだけ言うとユウヤはノートを写す作業に戻った。僕は暇な時間で何をしようか迷いつつ、結局無駄にぼーっとしてしまったのだが。

――数時間後。

「アサ君」

「……」

「あー君」

「……」

「アサちゃん」

「ちゃん言うなコラ」

起床。

やばい、寝てた。

「暇だからって寝るのやめようよアサ君」

「ちょっと自分でも油断した。……で、終わったの？」

「うい！」

そう元気に返事をして、僕に其れを見せてくるユウヤ。あらー、何か僕よりカラフリティな気がするけど此の際気にしないよ僕。此の所為でユウヤのノートの点数が僕より高いだなんて事知らないからね畜生。

「じゃ、ノート返すね」

「うん。……じゃ」

「……じゃ？」

「……寝る」

ノートを机の端に置いて部屋を後にする。勉強？　何それ食べれんの？

一度寝てしまったらやる気が失せた典型中の典型な僕。ユウヤの唖然とした顔、うん、予想されていた反応。

「ちょ、アサキ！？　勉強しないの！？」

「あー君眠くなってきたから明日にする」

自分でも変なテンションだと分かっている。しかし眠いと誰でもこうなっちゃうよね？

「いや、テスト明日だから、何時やる気なの其処のあー君！！！！」

「休み時間に決まってんだろうがー。……中学のテストなんて高が知れとろう、勉強なんざせんくともどうにでもなるわ！！」

全国のテスト嫌いの中学生様ごめんなさい、本音です。

授業とかちゃんと聞いて、問題集とかやればテストなんてどーにでもなるさ、はははははっ！

「……い、いーもんね！　僕アサ君より沢山勉強してアサ君より良い点数叩き出してやるから！！」

「出来るものならば出してみやがれってんだ！！」

そう言って、僕等の勉強会（？）は終わった。ちなみに言うと今回のテストは二学期の期末です。……凄く大事っぽい。

「ようユウヤ、何点だったよ」

「ん？　何の事ー？　あはははは」

と、学校の廊下で僕が話をはぐらかされるのはすぐ数日後の事。

3＋人類皆平等なんて聞いて呆れる。

「――人生は金だ」

急に何言い出すんだこの弟は。こんにちは、初めましてなユウヤです、何か弟が急に亡者みたいな事を炬燵（こたつ）の中で呟きました。

「……どったの？」

「いやぁね、小遣いが少な過ぎて来月まで漫画買えなくて」

我が弟を動かす事が出来るのは、大抵漫画かゲームです。今度もそうだったんだね……。

「ユウヤ君」

「なぁに」

「うちの小遣いは一ヶ月何円ですか」

「千円」

「少ねェんだよ」

こたつをダーンと叩いて感情をあらわにしますアサキ君。表情は一切変わっていないけれど、漫画の為に此処まで感情的になれるあー君もあー君だと思う。

「知ってますかユウヤ」

「いや、知らない」

「ですよね、じゃなくて教えますよ、僕の隣の席の赤の他人覚えてる？」

「いや、それカイト君じゃないの？　唯一の友達何赤の他人呼ばわりしてんのかな此の子は」

カイト君とは協調性皆無のアサ君と唯一会話が成り立つお友達。後は皆アサ君が遊んでる人だけかと。……後気分。

「まぁいいや、そのカイトの馬鹿野郎の小遣い知ってます？」

「知ってたら恐らく俺はストーカーだと思うよ」

「五月蝿い変態そろそろ普通の男の子に戻りなさい」

変態とか酷いわアサ君、私は女の子に生まれたかったのよ！！——冗談だけども、冗談だけどもね。趣味が女の子染みてるのは仕方ないじゃん。

……とか、今俺の話は置いといて。

「で、カイト君はいくらなのさ」

「五千円」

「高いねー」

「五千円あれば何出来ると思ってます？　漫画何冊買えると思って

ます？　千円じゃせいぜい二冊ですよ、高いの行くと一冊しか買えませんよ。ところがどうです、五千円あれば十冊ですよ。高いのでも五冊はいける！！　さぁ同じ人種なのにこの差は何だ！！！！」

「家庭？」

「死んでくれ」

「ぐは！　ちょ、それは痛い！！！！」

蜜柑の皮はダメだ！　柑橘系の汁を目に飛ばすなんてアサキめ俺の繊細な目になんて事を！！　しかも兄にそんな事をしておいてアサキの奴一人堕落を決め込んでんじゃねえか！

「絶対不公平、ユウヤみたいに金かけずに楽しめない僕はどうすれば良い」

「いや、まぁ確かに俺の可愛い服はマミーが買ってきますしね、勝手に」

「今更勝手とか付けた所で遅いぜ貴様、超乗り気な癖に」

「いいじゃん、似合うんだから」

ね、人の趣味は放っておいてよ。女の子の格好とかするの大好きよ？

――なんて討論が数十分続き、結局言いたかっただけのアサ君は炬燵に潜ってご就寝致しました。

言いたいだけとはこういう事、気まぐれだからね、我が弟は。

「……漫画ー……」

……今度から、少し買うの手伝ってあげよ、俺金使わないし。寝言でまで言われるとちょっと。

4＋大きくて、小さくて。

「《二年ヒコク、至急職員室に来い》」

っていう校内放送で目が覚めた僕。

こんにちは、朝から寝てるが未だ未だ眠いアサキです、何やら放送で呼び出しを喰らったみたいだ。――が。

「今のは僕か……？」

そう、ヒコクアサキと常々名乗っている僕ですが、そうなると勿論ヒコク君はもう一人居る訳で。

「アサキくーん、弟君が呼んでるよー」

「？」

クラスの女子が何やら言っている、つか確実にあれじゃん、あれ？　僕弟じゃん。……ああ、“兄”の事ですね分かります。窓際の席の僕に向かって、廊下から何やら手を振る奇妙な物体が一匹。

「うぉーい！！」

「……気の所為か」

「ちょ、待ちんしゃい。たまにはまともな話だから」

自分でもたまにはな自覚があるのかこの人は。そして廊下から僕

の呟きを聞き取るとは奇跡の聴力だな。

「今呼ばれたんはアサ君かい？」

「今日は特にヘマした覚えはないが」

するとまたも放送が鳴った。

「《あー、二年のじゃ二人居た。弟の方だ、以上》」

……僕でいいのか。

「でもちょっと待ってくれよアサ君」

「何だよ」

「俺は未だにアサ君の弟呼ばわりされてる訳であってだよ、先生も勘違いしているパターンはないかい？」

「……有り得るな」

「どうしますか」

という訳で色んな生徒を超越しての会話をやめ、仕方なく僕が廊下移動。よく分からない兄弟会議の始まり始まり。

「今の声ってさっちゃん先生だよね」

「人のクラスの担任をさっちゃん先生呼ばわりすな」

本名サクライイツキ。齢二十五歳の新任教師様。我がクラスの担任にして、何やら先生に見えないヤーさんチックにしてヤーさんにしか見えないヤーさんです。……あれ、結論がヤーさんだ。

「じゃあやっぱアサ君？」

「かなー」

しかし僕は今日、担任に呼び出しを喰らう様な行為をしただろうか……？　寝てただけなのに……其れか！

「むむ……」

「じゃーアサ君でいんじゃない？　何かよく考えると俺さっちゃん先生に呼び出し喰らう理由ないし」

「いや、あるな」

「何さ」

「存在」

「泣いていいかお兄ちゃん」

冗談だ。

「んじゃ行ってくる」

「違ったら言ってなー」

スタスタと歩き出した僕にヒラヒラ手を振ったユウヤは自クラスへと戻って行った。

「失礼します」

「あれ？　呼び出しは弟じゃなかったか？」

「僕です」

「あれ？　ユウヤ君じゃないの？」

「だから僕です」

「兄貴がどうした？」

「だから僕ですってば」

「おやユウヤじゃな――」

「この学校の教師に俺等の家族構成をしかと覚えてる奴は居ねぇのか」

職員室の中心で心中を叫ぶ。

某映画の様だが、悲しみの部類が大分違う。

「アサキ、こっちだこっちー」

「先生、僕のことですよね。決してあのユウヤ略してクソ馬鹿兄貴ではないですよね？　そして何故こんなにも僕は兄貴呼ばわりされているのでしょうか」

「嗚呼、あのユウヤ略してクソ変態兄貴ではない。知るか、俺が覚えてる限りはお前が弟だ」

うちの兄貴は数学の授業中何をやらかしたんだ――数学教師なサクライ先生――。

にしても先生、担任だけあって覚えていてくれたのか……！　じんわりと感動が滲み出る。しかし先生、注意所満載の僕の発言をツッコまないなんて貴方は一体何なんだ？

「でだ。これ運んどいてくれ、多少来るのが遅かった事は大目に見てやるから」

そう言って先生が渡して来たのは大量の書類の山。運べない量ではないが、何故に僕なんだろうか。

「分かりました」

「おう。ところでアサキ」

サクライ先生はクラスの皆を名前呼びする、何故かと前に聞いた所、

「苗字を覚えるのは苦手だが、最近の餓鬼共の名前は特徴的だから

覚えやすいんだ」

との事。

「お前が弟で合ってるんだよな？」

「はい、それが？」

「いや、何故か理解している俺でも……あれが兄貴にゃ見えない」

先生は親指を突き出して左の方を指差す様にスライドさせた。そっちは職員室入口……――

「……」

――何やらキラキラした目の変な物体が居た。

「先生、あれは僕の常識範疇に存在するものではありません。あれはクソ馬鹿変態野郎です」

「嗚呼そうか、あれはクソ馬鹿変態超ド級クズ野郎か」

「いいやもしかしたらクソ馬鹿変態超ド級クズで最低最悪カス野郎かもしれません」

「せんせー！！！！　何故か俺身内と先生にイジメられてます！！！！」

クソ馬鹿変態超ド級クズで最低最悪カス野郎略してユウヤが僕に続く職員室の中心で心中を叫んでいた。

「叫ぶな、はしたない」

「いやいやいや、誰がそうさせたのアサ君」

「はしたないな、変態」

「先生に至ってはまだ変態扱いですか俺は」

という事で一体落ち着きましょう。

「……うん、何の用……？」

あからさまに面倒そうに聞く僕に、ユウヤは元気良く答える。

「いや、暇だし結局アサ君で良かったのかなって」

「俺様が間違える訳ねぇでしょ」

先生、他の先生達が先生を意外そうな目で見てます。あれ、普段はクールが売りのサクライ先生は何処？

「他の先生は皆さん僕を兄と呼びましたが」

「だから俺様は他の先生とはココが違――ゴホンッ」

背後を通った校長先生の存在で、自分の頭を指差そうとしていた先生がやっと何時ものクールな先生に戻った。おかえり先生。

「まぁ、ちゃんと指摘を入れたんならもう間違われないだろ、うん」

「そうですね」

「むー、俺はそんなに頼りないかなー」

「ユウヤは稀に女の子の格好なんてするからだよ」

「何か言ったか？」

「何も言ってませんよ先生」

そして僕は先生より預かりし書類をユウヤに持たせて職員室を後にする。理不尽？　誰が？

手ぶらで廊下を歩く事少し。

「ねぇアサ君」

「何」

「この書類、俺のクラス用なんだけど」

「……」

僕等を見分けられても、書類を間違えてどうするんだ先生。

5＋栄養摂取も適度にいこう。

「ただいまー」

「お帰りー。ご飯にする？　お風呂にするー？　それともわ・た・し？」

「じゃあユウヤ」

「うわおツッコミ放棄はいけないと思う。俺びっくりしちゃうよ」

「たまにはツッコミもボケたいよ」

こんにちは、最近自分がボケなんだがツッコミなんだか分からないアサキです、なんか僕ボケなんじゃないかな。

「んであー君、遅いお帰りね」

「本屋さん潰す勢いで立ち読みしてきた」

「どんな勢いだよ」

潰す勢いで本読み漁ってきただけだ。つかまだ六時じゃないか。玄関で話すのも何なのでリビングのソファへとダーイブ。

「今日ご飯何」

「カロリー」

「カロリーのみかよ」

「メイト」

「メイト？　……嗚呼、……嫌だよ何が悲しくてカロリーメイトが夕飯だよ」

「よし、ツッコミ復活。てな訳でご飯にしましょー」

人のツッコミを復活させる為にボケをかますなボケ野郎。

「んで夕飯は」

「カロリーメイト」

「……え、夕飯マジで其れ？」

毎日両親共に仕事で居ないので、飯作りは毎日じゃんけんである。要するに毎日ユウヤです……不公平？　別にユウヤが毎回チョキ出す事を教えてあげないなんて事はないよはっはっは。

「うん、安かった」

「否、安かったじゃねぇよ、何故カロリーメイトだよ」

「チョコ味だよ？」

「やった……――じゃねぇよ。飯だぞ、栄養付けようよ」

「エネルギー補充だって聞いたもん」

そしてあからさまにポイッとカロリーメイトチョコ味を机に出したユウヤ。……僕に死ねと？

「栄養はつけられるのに……」

「まぁそうだけど。夕飯カロリーメイトの人、忙しくない人じゃ何処探しても居ないと思うんだが」

しょぼんとしながらカロリーメイトの箱をつっつく食事当番。……っなろう、落ち込みたいのはこっちだっつの。何故夕飯で栄養摂取に専念だ。

「ユウヤ、何でこうなったか聞いてやるから話しなさい」

「食べたかったから」

「……」

「待って、ちゃんと話すから何か手頃な殴る物探すのやめて」

バレたか。

すると何やら一枚の紙を取り出したユウヤは、それを僕に差し出した。

「母さんからよ」

「ふぅん……――あのクソ女が」

「あう」

受け取った紙をぐしゃりと丸めてユウヤの顔面へとぶちあてた。
完璧なる八つ当たりだが知った事か。

《今週の生活費、ユウ君に渡すの忘れちゃったから今日は適当に頑張って！》

なんて書かれた紙を見せられたら、僕はキレるさ。

「此れ何処で拾った紙だ」

「只今カロリーメイトがある場所です」

昼間に此れを家に置いて行ったという事くらい分かる。要するにあの母親は僕等を餓死させたいんだな。――帰って来たなら金置いていけ！！！！

……落ちた紙を見た。裏に何か書いてあｔｔ。

《Ｐ．Ｓ．　アサちゃん、ユウ君を怒っちゃダメだぞ☆》

うるせぇよ、俺はあんたにキレてるよ。

《Ｐ．Ｓ．つー　明日はお母さん休みなので、ご飯作るからね！》

知らんわ。今日で餓死したらそのイベントすら無に還るだろうが。
つか“つー”とかＰ．Ｓ．に付けんなよ、せめて数字にしろや。

《P．S．すりー　本当にごめんにゃー　＝＾＾＝》

「――――うるせぇえええええええええ！！！！！！！！！！」

「ちょ、あー君！？」

母親マジうぜェよ！！！！　何なんだよ最後のP．S．は！！！！
いらねぇ、ぜってェいらねぇよアレは。

「ま、そゆ事でカロリーメイトなんさ」

「……だからって何故チョイスがカロリーメイトなんだよ馬鹿兄貴
……」

僕は落胆に怒りを重ねていると、箱から一袋出してユウヤがカロリーメイトを食べ出した。
……何かもう疲れたからそれでいいや……。怒るのも疲れたから僕も食べて寝りゃいいや。

……ん？　まだP．S．が続いてる……。

《P．S．ふぉー　カロリーメイトくらい買うお金ならまだ残ってるかな？（笑）》

結局お前の入れ知恵の所為か！！！！！！！！！！

6＋買い物に行こう。／前編

「アサちゃーん、ユウくーん、おっきしてー！」

「一体僕等は幾つなんだ」

朝。

どなたかの年齢を明らかに間違えた起こされ方で起こされましたアサキです。反射的にツッコんでしまったけど、うーむ、やはり僕はツッコミなのだろうか。朝は苦手だけど今日は起きてしまった。

「おはよっ！　マイスウィートサン！！」

「……」

よっ！　と手を挙げて僕等――正確には僕だけ、だってユウヤ起きてないし――を起こしたのは他でもない、何でか家に居る母親です。

「何で家に居るかって？」

「いや、聞いてないし。心の声読んだみたいになってるからやめてくんない？」

「お母さん今日はお休みなの！！」

「だから聞いてないっつの、つか昨日あの奇妙な置き手紙で見たわ」

今日は稀にある母親の休みの日らしい。

……この人の職業は新聞記者。ネタがどーのこーの言って、僕等が起きるより先に出て夜中に帰ってくるという世話しない方だ。その代わりに休みも勝手に取ってこれるらしく、とにかく滅茶苦茶過ぎる方とはこの人の事を言う。ちなみに今日は土曜日なので僕等も休みだ。

「昨日はごめんなさいねアサちゃん、今日はお金ちゃんと置いていくから！」

「そうして。そうしないとアンタの息子が栄養取ってるのに栄養失調起こすから」

栄養取る食品を食べたのに何か物足りない食事だよ、あれは。

「――でっ！　ユウ君が起きないんだけど～？」

「……」

横を見る。其処でスヤスヤエヘエヘ（※偏見）してる我が片割れユウヤ。起こされたって起きない強者らしい。普段は間逆なんだけれど。

「ユウヤー」

「……ふにゃ……」

いや、ふにゃって何。揺らしたらそう言ったけどふにゃって何だよ。ふにゃふにゃなのはお前の頭だボケ。

「いいよ、ユウヤ起きないから放っとこ」

「そうね、今日お買い物行こうと思ったんだけど……。ユウ君にお洋服――」

「洋服！！！！」

どんな起床の仕方ですか。洋服という単語を聞いた瞬間に起き上がったユウヤは、髪を撥ねさせておはようございますした。

「マイマザー！　今俺にニュー服を買ってくれると言わなかったかい！？」

「おう、言ったさ！」

「言ってねぇよ、まだ洋服までしか言ってねぇ。つかニュー服て何、其処まで言ったなら服も英語にしろや」

グッと親指を突き立てる母親とユウヤにツッコむものの、まぁ聞いちゃいないんだろうな。案の定聞いてねぇ二人は何かキャイキャイと騒ぎ出しましたとさ。

「最近ユウ君にお洋服買ってなかったな～ってお母さん思った訳よ！」

「ああん！　マミー大好き！！　永遠に着いて行くよ！！」

その調子であの世まで憑いて逝けばいい。

「可愛いお洋服を買いましょ～う！」

「勿論！！！！」

「さて、僕はもう少し寝ましょうかね。行ってもつまらな――」

「あーちゃんには好きな本買ったげるのに」

「――くないと思うしやっぱ起きよっかな！　母さん大好きです」

という訳で被った毛布を再び剥ぐ。よし、早く着替えよう、早く行こう。

「アサ君って……」

「ほら、ボサッとすんなユウヤ。漫画買い行くぞ漫画……！！」

我ながら思うが、母親はやはり優しい。いや、漫画買ってくれるからじゃないよ？　だって……うん、まぁ漫画買ってくれっからで良いか。

そして僕等はショッピングモールへと急ぐのだった。

あれ、続くの？

7＋買い物に行こう。／中編

ショッピングモール駐車場に到着。一人テンションがローなアサキです。

「さぁ行こー！」「おー！！」」

「待て、待て待て待て！」

おー！　――じゃねぇよ二人して。何ノリ出してんだお前等は！

「何だよあー君、何か忘れ物？」

「やぁねぇ、ほら、お金だったらママが出すわよ？」

「ちっがう僕に非があるんじゃないって」

「じゃあ何よ～、アサちゃんったら……」

「たら……じゃない！　真顔で溜息着く前に先ず――ユウヤの格好見てみろ！！」

僕は助走を付け、ずびしっと効果音が付く勢いでユウヤを指差した。

「何、何か変な格好してる？」

不思議そうに言ってるけど、今のこの人

――只の女の子です。正確には只の女の子の格好です。

ユウヤの私服、一見可笑しいところなんてないんだけれど――いや、それがおかしいんだけど――。シンプルな水色のスカートに黒のスパッツ、ジー生地のボーイッシュな上着とくればもう――本当にこいつ、兄貴だったっけ？　とか思う。

「何も変じゃないわよユウちゃん、何時も通り可愛いわ～！」

「ありがとう母さん！」

母さんにニッコリと笑いかけるユウヤ。……畜生、興味薄な僕でも普段に可愛いとか思っちゃったじゃないか、懺悔したい。つか今までツッコまなかった僕を褒めろ誰か！

「いや、可愛いとかじゃなくてさ！　そろそろやめない、その格好で出掛けるの」

「何故？」

「ホワイ？」

「いちいち英語を出すな兄よ――じゃなくて、だって僕等もう中学生だよ？　何時までもそんな格好してたらいつか良からぬ方向へ――」

弟や息子の心配も露知らず、二人は声を揃えてこう言った。

「「似合うんだからいいよ」」

……泣いていいですか？

「そ・れ・に！　小さい時に女の子の格好をさせると健康に育つっていう慣わしがあるからユウ君にはそうさせてあげてるのよ」

僕等は既に中学生だと言った言葉が通じなかったようだ。

「そのお陰で今まで俺はインフルエンザにもかからなかったじゃないか！」

それはお前が只単に馬鹿だからだ。というか三歳で其の古臭い慣わしやめたらしい僕だってインフルエンザにゃかかってないわ。というか風邪引く確立僕の方が低いだろうが。……つかその格好で俺って言うな。

「てな訳で、早く行こうよアサくーん」

「今日は沢山本買ってあげるから……ねっ？」

「――良いでしょう」

そうして僕等は母親運転の車から降りた。……もう一度言うけど、物に釣られた訳じゃないからな？

「でもユウヤ、何時も言ってるけど絶対ユウヤだって知り合いにバレるなよ」

「はーいはい、分かってますよー」

学校の奴等だけにはバレたくない、変態兄貴がここまで変態な事を。言ったら二度とノート見せてやらないからなと言ってあるので、ユウヤからバラする事は恐らくないだろうと思う――ユウヤにとっては一大事だからな――。第一、ユウヤの女装は公認なんてされてない、公認してんの三人だから！　僕は公認してないから両親とマヒルのみなんだからな！　畜生！

そして引きずられる様にして、僕等はショッピングモール内へと入った。

8＋買い物に行こう。／後編

ふっ、燃えちまった……完全に燃え尽きちまったぜ。何燃え尽きちまったかって？

「おかーさん！　これどうかな？」

「あらユウちゃんったら……こんなに可愛くなって……」

「本当にお似合いですね～」

とか何とか僕の前で言ってる人達について行く事に燃え尽きちまったんだぜ俺は！　……と、何か聞いた事のある台詞でこんにちはアサキです。……ダメだ！　ツッコミがこれでどうする！　世界がボケで埋まる前に僕はツッコむんだ！！

……変な決意すんません、只今洋服売場の試着室前で一時間立ち尽くしています。

「アサ君！　どう？　似合ってるー？」

「あー似合ってる似合ってる」

浅はかな肯定を送って其の場を乗り切る僕。さっきからこんな感じです。ユウヤを素で女と思っている店員さんは乗り気だし、何時終わるんだか分かったもんじゃない。僕の本屋は未だ……？

「お客様、本当にお似合いです、可愛いって良いですよね～」

店員さん、其れは可愛くても男です。

「ですよねっ！　親としても可愛くて可愛くてもう馬鹿になっちゃいまして～！　もう可愛過ぎな娘ですみません！」

娘じゃない。

「可愛い娘さんに息子さん、羨ましいです～」

だから娘じゃな――そして僕は可愛くない！

大人がそんな話をして、僕がユウヤと服を選んでいる今の状態。

「あー君、どれが似合うと思うー？」

「此れで良いよ」

「ん～、確かに～」

なるたけ早く終わる様に、適当に良さそうなのを手に取る僕。ユウヤも満更ではない様なのでちゃっちゃと片付けたい所だ。

「んぁ、アサキー？」

「ん」

少しして。

僕を呼ぶ声がした。ショッピングモール内にある其の店から出た直ぐの通路に、見慣れた影を発見した。なので、

「あ、カイトく――」

バシッ！
ドカッ！

「え？　――キャー！！　ユウちゃん！？」

危ない危ない、とりあえずユウヤを蹴り飛ばして奥に追いやった。
何やら母親の悲鳴も聞こえたが気にしない。

「やっぱアサキだ」

「何だ、赤の他人」

先程の惨劇を目撃していないそいつは、スタスタと僕に歩み寄って来てはニヘランとしている。学校での僕の唯一の知り合い、カイトだった。

「いやあ奇遇だなアサキ、何してんの？　そして赤の他人言うな」

「買い物。そして黙れ赤の他人」

ははははと笑い合いながら何やら火花が散る僕等。ふむ、何時も通りだ。

「ちょ、アサちゃんユウ君にな――あらお友達？」

「違うよ母さん、これは赤の他人だよ」

「お友達でーす！」

素っ頓狂な声を出す母親。まぁ僕に友達が居るとか勘違いしてんだろうな、違うのに。

「あらー、アサ君のお友達だなんて素晴らしいわ！　始めて見た！」

どれだけハードな家庭だ僕は。友達出来ない程に暗い家庭で育った覚えはない。

「聞いて下さる？　息子に始めて友達が――」

そう言って再び親馬鹿開始。店員さんもノリ気で会話発展させちゃってるよ。

「あー君何するのー」

「馬鹿！　来んな！」

「およよ、アサキ何だよ其の子」

戻って来るなド畜生、折角蹴り飛ばしたのにあっさりカイトにバレてしまった！！！！

どうする、これユウヤだなんて口が裂けても言えない。……よし、知り合いの子という事に……

「知り合いのユウ――」

――って僕！　ユウまで言っちゃったよ！　どうしよう！！　オゥマイガット！（※英語的発音で）

「――従姉妹のユウリです！」

――誰だ。

冷や汗をかきながら頬に人差し指を突き立ててユウヤが言った。

っておいユウヤ！　ユウリって実在する従姉の名前じゃなかったか！？

「そっかーユウリちゃんかー、やっぱ血縁か、道理で似てる訳だよな、可愛いし」

騙されたよこの馬鹿。

「そ、そうそう、ユウリだよ」

この時ばかりはユウリにしとく。そしてごめんなさい本物のユウリ、この時だけ名前は貸して下さい。

「そっか、ユウリちゃんの服選びで来てるんだな。楽しそうじゃん」

何処ら辺が。

「楽しかったです～。今買い終わった所なんで」

心なし声のトーンを上げて喋るユウヤのナイス判断に落ち着き、何時買ったか分からない服を持ってさっさと退散した。というかカイトは何をしていたんだ……？

「何でカイト君にバレちゃいけないのー？」

「そうよアサ君、お兄ちゃんが恥ずかしいの？」

「恥ずかしいよ、とにかくバレたくないよ」

普通だよ其れが。だって女装趣味のある――ただただ少女趣味なだけなんだけどさ――双子の兄って普通どう思われるよ、ねぇ。

まぁ……嫌いな訳じゃないけどさ。

そして次なる本屋にて数冊の本（漫画）を買った僕は、何やら満足して家に帰りました。めでたしめでたし。

……ユウリに名前借りた事バレなければこのままめでたしめでたし。……バレない、よな……？

9＋一味沢山。

「何を言っているのよ貴方！」

「何をだと？　俺は俺の感じた事を言っているだけだ」

「何よそれ！　貴方はそんなだから甘いのよ！」

「五月蝿いな……甘い事の何が悪いってんだ！！！！」

「悪いに決まってるじゃない！！　そんなに甘いから彼だって居なくなってしまったのよ！！　私の彼を返して！！」

「アイツが消えたのは俺の所為じゃない！　君の方からだってアイツが居なくなったじゃないか！！」

「ええそうよ、私の愛しい彼は居なくなってしまった、此れから……これから私は何を頼りに此処に来ればいいと言うの！？」

「――ねぇ、何の話してんの？」

「「カレーの話」」

こんにちは、馬鹿の話を聞くのも疲れますアサキです。今昼飯をユウヤとカイトと食べに食堂に居ます。食べているのは勿論カレー。

「だってカイト君ったら甘口なんだよ？　お子ちゃま～！」

「何をう！　ユウヤは辛口なんて舌壊れそうなもんよく食えるよな！」

という事らしい。

「で、彼とかあいつとか言ってたのは？」

「「じゃがいもさん」」

二人揃ってじゃがいもにさんを付けるのは大丈夫なのだろうか。

僕の心配を余所に二人は悲しそうに自分達のカレーを見る。

「食堂のおばさま方……煮込み過ぎてじゃがいもさん溶かしてやんの」

「俺のじゃがいもさんカムバック！」

「いいじゃん、じゃがいもくらい……」

はぁ……とため息をついてカレーにぱくつく僕を横目にいじけている二人は本当にいじいじとカレーを食べている。早くしないと次の授業遅れるんだけど、僕も道連れ的に。

「じゃがさーん……うま」

「じゃが様ー……うま」

美味いなら良いじゃないか、じゃがいも居なくても美味いなら良いじゃない。

「うまうま」

「うまうまうま」

「……うまうまうまうま」

「……うまうまうまうまうま」

「張り合うな五月蝿いから」

どっちが美味かろうがどっちでも良いから。うまうま言ってると僕がアニメ方向に違う事考え出すから止めて。

「そういえばアサ君って甘口？　辛口？」

「勿論甘口だよな！」

「何おう！　双子なんだから辛口に決まってるさっ！」

「中辛」

「「……邪道」」

「中辛を馬鹿にすんな」

こんな奴等と食う飯は、何だかんだ楽しいです。

10＋一年程の勘違い。

こんちは！　俺だぜ！　……いや、詐欺じゃないから、俺俺詐欺とは違うから！！
あいつ曰く赤の他人ですよ、いや、違うけどね？　アサキの無二の親友です！

「アサキ、前から言いたかった事があるんだけどさ」

「何……？」

親友だから、お互いの事はもう沢山知ってる訳だが。
だけど、たったひとつだけ、未だに解けていないすれ違いがひとつ。いや、もしかして知っててやってる事なんだと思うんだけどさ！　何せユウヤも間違えてる事だしな。

「俺達って友達だよな？」

「それは……何て勘違い」

ちょぉおお！！！！！！　其処からの否定は俺様泣いちゃう！！

「ま、まぁ良い。でもひとつだけ、ひとつだけお前に言いたい」

「勿体振らずに言ったらいいじゃん、早く、時間が勿体ない」

「そう言う割には漫画から目を外そうとしないよなお前」

中学校に何を持って来てるんだ君は、サックラ先生に言い付けた

ろか。……後が怖いから止めよ。

「早く」

「いやね、多分気付いてるとは思うんだけどー……俺の名前――カイトじゃないから」

……間。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……間？」

「いや、人の心を読まなくていいから」

漫画を床に落としてポカーンと。何よ、どしたのこの子。

「――……カイトじゃないの？」

「やっぱ気付いてなかったか貴様！！！！！」

其処まで間を引っ張ったからそんなこったろうと思ったぜ！　首まで傾げやがって、普段見せない感じになっているぞコイツ！

「え、ええ？　カイトはカイトじゃないのか……？　じゃあ何だ、お前はカイトじゃなかったら何だってんだ、ネフェル○トーに改造されたんじゃなかったら何だってんだ」

「一部のジャン○ファンにしか分からないネタ使うの辞めろや」

ごめんね○ャンプ分からない人。というかジャ○プ分かってもハ○ター×○ンター分からなきゃ意味ないぜこれ。

「俺の名前さ、海吏なのは知ってるよな」

「うん、漢字は知ってる」

よく気付いたな畜生。

「海吏でカイリって読むんだけど」

「お前はどこのキ○ハーだ」

「だからゲームもよそうぜ」

このヲタクは止まりません。

「何を勘違いしたのかは知らないんだけど、俺の名前は最初からカイリだ」

「じゃあ……じゃあ何故最初に訂正しないんだよ、雰囲気とか先入観とかでずっとカイトって呼んじゃってたじゃないか」

「ですよね、一年くらい名前違ったってのも面白いから良いかなな

んて」

「馬鹿カイト、略してバカイト」

「だからカイリなんだけど」

「バカイリ。……や、もうカイトでいいじゃん」

「……だな」

という訳で、俺は未だ未だカイトです。

――追記、アサキ家にて。

「ユウヤ」

「何さ？」

「カイトの名前ってカイリだったの知ってた？」

「勿論」

「……」

「勿論知らないよ、何其れ」

「だよね」

「……カイト君で良いじゃん」

「だよね」

理不尽な奴等。

11＋正しい知識を身につけよう。

「避難訓練！」

凄く楽しそうな兄が居ます、何が楽しいのかさっぱり分からない僕としてはうざったいこと窮まりない。こんにちはアサキです、今日は肌寒い校庭にて、避難訓練があるらしいです。

「楽しみだな～、早く給食室燃え上がらないかな～」

「楽しみ其処かよ」

どうやら訓練の楽しみでは無くて、其処が楽しみな様だ。放火魔は皆そう思うんだろうな。

「三分で避難！　目標！」

「……」

「そして守るべきは“おかしも”の魔法！」

「そろそろ止めろ、恥ずかしい」

人のクラスで騒がないで、というか三分目標にしてるならとっとと自クラスに戻ってくれ、頼むから。

「そんなユウヤ君に問題！　“おかしも”の“か”は一体何でしょーか！」

そこに馬鹿ことカイトが加わった。畜生、僕にはもう対処不可能だ。という事で聞き流す事にしました。

「そんなの簡単！　“おかしも”の“か”は――悲しまない」

死ぬ前提か。

「ははっ、何になのかは分からないけど正解は“駆けない”だぜ？」

「え、そなの？　マヒル兄に聞いたんだけど」

あの馬鹿野郎、馬鹿に何馬鹿なこと教えてんだ馬鹿兄貴。

……分かりにくいとか言わない、どっちも兄貴なんだから仕方ないだろ！

「じゃあ“お”は？」

「起きない」

死ぬぞ。

「し」

「自殺しない」

大事だけどさ。濁点付いてるけどいいのか。

「も」

「揉めない」

だから何に。

……起きない悲しまない自殺しない揉めない……これは一人暮らしのおばあちゃんの火事発生から葬式後の遺産相続についての見解までの話なのか？

「うん、それ面白いからサックラ先生に言ってきてよ」

「よしきた」

カイトがそう言うと何によしきたのかユウヤは、一人暇そうに火事発生合図のサイレンを待つサクライ先生の元へ行った。

「さっちゃん先生」

「誰がさっちゃん先生だ馬鹿野郎、せめていっちー先生にしろ」

よく分からないよ先生。

「んじゃいっちー先生」

「何だ」

「起きない悲しまない自殺しない揉めない」

「誰かの祖母さんでも死んだのか」

「いや、火事に必要な“おかしも”なのですよ！」

「帰れ」

「よしきた」

帰ってきた馬鹿、上手い具合にあしらわれたらしいな。まぁ、まともな人はそう言うでしょうよ。

「言ってきたぜ！」

「ご苦労だぜ！」

僕と彼等の間には何かフォッサマグナ的線があると思う、あって欲しいと僕は願う。

……すると。

ウー――――――……

サイレンが鳴った。

「わー！」

「キャー！！」

「カイリ、ユウヤ、お前等地震じゃないから机の下に入るな！」

「ちょ、お二人さん、僕の机は二人も入る要領ないんだけど。カイト、お前は隣の机使えよ、自分のだろ」

もこもこする、下がもこもこする……！　僕が座ってる下に入ろ

うとするな！

『――ええと訓練、訓練。ただ今、給食室よりカサイ君が発生しました』

「「誰だよ」」

見事な僕とサクライ先生のハモり、下の二人とクラスの奴等は皆机の下に居ます。……馬鹿の影響って怖い。

『失礼しました、今回発生するのは一年二組のお馴染み給食泥棒カサイ君ではなく、火災でした』

どんな間違えをしているんだ先生、この声は多分二組のアヤメ先生だと思う。……流石ユウヤの担任。そしてそのカサイは毎回何をしているんだ。

『皆さん、クラスの担任の先生の指示に従って避難して下さい』

普通にそう言えばいいんだよ……。という事で僕は一人立ち上がって、未だわーわー机の下で騒ぐクラスメイトを放って避難をしよ――

『尚、二年二組の生徒は担任が私なので一組のサクライ先生にたかって下さいね、以上』

「なろっ、アヤメの奴……！！！！」

――うと思ったのに二組の奴等が沢山廊下に居て出れなかった。

「「先生ー！」」

「うるせェよ、とりあえずさっさと避難する事！　二組の奴等は先に並んで校庭行け！！」

投げやりだが指示を出したサクライ先生、二組の方々はわらわらと一組を後にし始めた。良かった、このままじゃ出れない所だった。

「じゃあ一組！　一組は反対側の螺旋階段から下りるからな！！」

「「わーわー」」

「ちゃんと着いて来なかったら――数学の成績落とす」

「「はい！！！！」」

職務乱用？　この先生にそんな言葉通用しませんよ。だってうちのクラスはそんな事をこの人に抗議出来る程勇敢な戦士は居ませんから。

「せんせ、俺二組だけど成績落とされますか？」

「いや、お前のは落とさん」

「やた！」

「もう落としようがないからな」

「――じゃねぇ！！　聞き捨てならぬ台詞が！！　俺もしかして煙突！？」

――兄の不甲斐ない成績が聞こえてきた所で、螺旋階段をぐーるぐる。こういうのって普段は使えないから少しだけ端の一組って得だなと思う。

「うはー、ぐーるぐるぐーるぐるー」

「ぐーるぐるなのはカイトの頭だよ」

「あー君、お兄ちゃん何か煙突立てられちゃったみたい」

「ドンマイ」

一人で二人を捌くのは辛いものがある、つかユウヤ、落ち込み過ぎだろ、さっきまでのテンションどこ行った。今更成績一が何だ。

校庭には沢山の生徒、僕等もこぞって並ぶとやっとユウヤが二組に戻って行った。

「学年委員、点呼」

「はーい」

面倒な作業だよな、学年委員。僕は未来永劫絶対やる気はない。よくやるよ、うちのクラス委員め。……嗚呼、カイトだったっけ。

そして長ったらしい話を聞き捨てて、僕等は教室に戻る訳だが。やっぱ面倒だよ訓練は……。でも無事に終わったならいっか。

「……あれ、おいコラ奉仕委員！　下駄箱に雑巾用意しとけって言っただろうが！」

「……あ」

僕だった。ちくしょー。

そして皆、本当の“おかしも”は“押さない”“駆けない”“喋らない”“戻らない”だからな、間違えてもあの馬鹿のことを信じるなよ！

12＋クリスマス・イヴイヴ。

「明日が何の日か知ってる？」

明日――クリスマス・イヴですかユウヤ。

ちは、アサキです。今日は休みだ、ありがとう天皇。そしてクリスマスだから何だっていうのだろうか。

「クリスマス――恋人達の祭典とも呼ばれる名誉の一日」

「興味ない、つーか所詮は。せいぜいリョー○君の誕生日くらいなもんだろう」

「其処！　一部しか分からない発言は慎むよーに！！」

さーせん。

「で、それが何？」

「だからさ、ケーキ食べたい」

「結局は己の私利私欲の為はお前は」

まぁ……クリスマスと言えばケーキ、それは分かるよ。でもうちは親も居なければ金すらおいてかない。それでどうしろと？

「いや、お金はパピーからくすねた」

「父さんから!?　くすねるな!」

「ねだったらくれた」

あの親馬鹿が。

「本当は帰って来て一緒に食べたかったって」

帰ってくるな、仕事頑張れ。

「という訳でケーキ作ろう!」

「すまない、経緯が掴めない」

今の文のどこにそんな要素があったってんだ。ケーキ作る――って、ユウヤがやりたいだけなんじゃ……。

「てな訳で材料の買い出しに――」

「そういう面倒なの一緒行かないよ」

「――行って来ました」

アウチ早いぜ。ガサッとビニール袋を出したユウヤ、何か……大量だな。

「一から作るからスポンジ作りから決行だぞ!　明日は早く帰って来てねアサ君?」

「僕も一緒に作らなきゃダメなの……？」

「ダーメ！　気分的問題で一緒に作るのだー！！」

「はいはい……」

ケーキなんて買ってくればいいのに。……口には出さないけどね、寂しそうにされたら面倒だから。

「アサ君チョコとショートどっち派？」

うん？　……ああ、ケーキの話か。ていうかショートって分かりにく。

「どっちでも食えるよ、今の気分的にショート」

「む、俺はチョコ派だ」

「じゃあチョコでいいよ」

「自分の意思を持てアサキ！！！！！」

何で僕怒られたんだろう。

「ま、じゃあチョコね」

だったら怒るなよ。

という訳で明日はクリスマス・イヴ、聖夜は明後日なのに盛り上がるのって大抵イヴだよね。でもユウヤは忘れてるみたいだから言わないけどさ、学校からのクリスマスプレゼントを忘れてない？

——通知表ってやつ。

13＋ママの憂鬱。

メリークリスマス・イヴ！　こんばんは、アサちゃんとユウ君の最愛のママ、シユウって言いますよ！！　え？　名前が変？　そんなのお母さんに言って下さい！！

今日はクリスマス・イヴですよね、だからいつも多忙で忙しいママですけど今日くらいはパパッと休みを――取れませんでした……、ガクッ。

会社の皆が休み取っちゃって、私は休めなくなっちゃったんですよぅ……。折角今日はアサちゃんとユウ君が作るという美味しい美味しい（予想）ケーキを食べながら一緒にクラッカー出来ると思ったのに！　二人も悲しんでるだろうなァ……――

その頃自宅――

「ケーキおいひ～」

「自分で作ったのを何を言う」

「本当うめぇな、これ」

「そして貴様はあたかも当然の如く居るなカイト」

――何か凄くエンジョイしている気がする。ユウ君くらいは残念がってくれるといいな……。……うん、気の所為よね！　そして何と言ってもやっぱりプレゼント！　わいわいやっている時に渡すの

が前提な我が家だけど、二人はまだ純粋だから私からとサンタさんに頼む二つが必要な訳！　結局私が二人ずつ買うんだけどね☆　だってサンタさん来ないし。

う～ん、大変は大変だけどパパからのお金もあるし、何より二人の夢を壊したくないもの。親としてね！

――自宅。

「アサキ、母さんからのプレゼント何頼んだ？」

「ゲーム」

「サンタさんと言う名の母さんには？」

「漫画十冊」

「アサキえげつねぇ」

――実は気付いてるパターンってないわよね。二人は純粋、そう、ピュアなのよ、ピュア。マヒルとは違うのよ！　……偏見とか言わないの、誰よ言ったの。気の所為気の所為！

にしても本当に残念だなぁ。でも普段からそうだし、でも夫君も帰れないし……淋しい思いしてないかな……――

――自宅。

「シャンパン一気飲み、カイトいきまーす！」

「「うぇーい！」」

――双子のテンションが何故か同調してる様な気がする。ううん、そんなはずないわよね。アサちゃんがユウ君のテンションに被る訳ないわよ！　だってアサちゃんだもん！（理屈じゃない）

だから気の所為よ！！

――自宅。

「アサキ何かテンション高くね？」

「アサ君は少しでもアルコールを摂取するとこんなになるの」

「あはははは！！！！！」

「ある意味恐怖だな、シャンパン」

――でもやっぱりママ忘れられてる気がする。気の所為気の所……はぁ。ふん！　いいのよ別に！　今年で四十歳迎えたママの事なんて忘れて立派に育てばいいのよ二人共！！（あくまで二人を否定しない）

「ヒコク、今日も無理入って悪かったな……」

シャラン（※ママ仕事モード切替の音）

「いえ、平気ですよ、仕事ですから」

「そうか、じゃあ今日は十一時まで宜しくな？」

「は……はい！」

部長の野郎ォおおおお！！！！

――帰宅。

「ただ今〜……」

なんてね、アサちゃんもユウ君も起きてる訳ないんだけどー。今時珍し過ぎる早寝っ子よね二人共……。アサちゃんの記念すべきオトモダチも泊まるらしいんだから少しくらい夜更かししてママに紹介してくれてもいいのに……。ショボン。

ま、いいのいいの、二人が健康なのは何より何より！　ママは淋しくたって構わないのよ〜！！　淋しくたって……淋しくたって……！！！！　淋しく、のは、やっぱり嫌ぁ……。アサちゃんの

「嫌なのかよ」

とかの冷たいツッコミが欲しいわぁ……。

「……めげててもしょうがないわ……さて、適当に食べて風呂入るっかなー……――ん？」

ぶつぶつ言いながらも食材を模索しようと冷蔵庫に手を伸ばせば。

……冷蔵庫に、何か？

“Ｈａｐｐｙ　Ｍｅｒｒｙ　Ｘ‘ｍａｓ！
母さんへ　ユウヤ　アサキ”

……うわぁぁああん！！！！
ユウ君もアサちゃんも大好きだぁぁあ！！！！　親離れなんてさせないわぁあああ！！！！
二人の作ったケーキとそんなメッセージカード。お母さんを感激させたって何も出て来ないんだからね！
……とか言いつつ二人の部屋へ直行して枕元にプレゼント（サンタさん用）を置いて去る私。そしてアサちゃんのオトモダチにも買っちゃったプレゼントを置く。私って基本子供大好きだからねっ！

「うう……美味しい……ケーキ。ママ嬉しい……」

そしてアサちゃんとオトモダチの間で持って来ちゃったケーキを食べる。美味しい、美味しいけどしょっぱいや、何でかな……あれ、何でか前が見えないや。
毎年私用に置いてあるケーキは二人の間で食べる私。だって二人は一度寝ると大体朝まで起きないからね、どうやらオトモダチもそうみたい、というか君お名前は？

「くー」
「すー」
「ぐー」
「りー？」

「何でやねん」

ふざけた様な寝息だけど、我が子だから可愛いわ、というか親から見ても二人は可愛いもん。美人なところはパパに似たのねふた…三人か。……いや、マヒルは突然変異だけど。……にしても寝ながらボケたりツッコんだりする我が子にびっくりよ。

「……お休み」

ふぅ、私も寝ないとね。ドアのノブに手をかけ、私は部屋を後にした。

２人とオトモダチ君、そして全ての子供達に――Ｍｅｒｒｙ Ｘ'ｍａｓ！

１４＋家族って普通に似る。

トン……トン……トン……

「我ながら下手だな僕」

朝です、アサキです。駄洒落かよって言った奴僕の前に倣え。
ただ今朝ご飯作成中。包丁の音が遅いとか言わない、普段はこれもユウヤに任せっきりなんだから。……最近食事当番決めのじゃんけんすらしてないな。という訳で……って訳ではないが、たまた ま早く起きちゃったし枕元に漫画やらゲームやらあったからテンションョン上がっちゃって。寝起きなのに機嫌がいいからってのが一番の理由。ちなみに料理は大の苦手だが何か？
というかもう九時なんだけど、何で起きてこないんだ

「今日は母さんも居るし、マヒルも帰って来るらしいし……」

まだ夢の中の休み軍団母と兄と赤の他人、それに朝方帰って来るらしいもう一人の兄の分も作ろうかと悪戦苦闘中な僕。此の不器用さは一体……。

「ふぁ～……ん、～あったか～い！　朝早くからゴメンねユウく……ってアサちゃん！？」

あ、起きて来た……ってそれはどういうこったいマイマザー？
僕がキッチンに居るのがそんなに珍しい、と？

「……」

「てっきりユウ君かと……ああんアサちゃんそんな泣きそうな顔しないで！　ママが悪かったわ！！」

泣きそうじゃないよ、キレそうなだけだよ。

「でも本当にどうしたの？　不器用とかはともかく、アサちゃんが自分からそんな面倒な事するとは思えな――」

「泣くぞ」

「くもなくもなくもないわよね！」

どっちだよ、多分否定してる……。ま、それは事実だから構わないさ、料理はどうも得意じゃない。下手な訳じゃない――と信じたい――けど、手際が良くないんだよ僕は。

「お母さん何か手伝う？」

「皿」

「はいは～い」

スタコラサッサと皿を取りに向かう母さん。すると次の奴等も起床した様だ。

「寝坊したー……ゴメンねご飯作って貰っちゃって母さ――ってうおわアサキ！？」

「うんにゃ、朝飯ゴチりますママ様ー……って違う、アサキ様ー」

そっくり同じ反応ありがとう兄。手持ちの包丁でどうしてくれようか。カイトは……まぁ許す。

「ちょ、アサ君がキッチンに居るの見るの久しぶり過ぎるよお兄ちゃん！」

「まぁ、そうだろな。普段はお前なんだから」

ウィンナー的ソーセージを切っていると隣にやってきたパジャマがわたわたしている、煩わしいぞパジャマ。

「俺代わろうか！？」

「平気だ、とっとと席着いてろ」

「とっとこー？」

「煩い何処ぞのハムスター」

カイトはまだ眠い様だ。ボケが三割増しで素な様で。

「アーサちゃん、はいお皿っ！」

「ありがと」

僕の料理は時間がかかるだけでまずい訳ではない。……はず。だから奴等を席に着かせて続き続きっと。

「あはは！」

「やぁねェこの人ったら～」

数分で既にテレビに夢中。流石単純親子というものだ。よっし焼けた焼けた、皿を運びましょー。

ガチャ

「ただ今ー」

おや、ジャストタイミング。馬鹿が帰っていらっしゃった。

「「誰だ？」」

「兄貴だろうが」

何故忘れてる、クリスマスに帰るって言ってただろう。リビングにスッタスッタとやってきた今風男児。

「たらいま」

「うお、マヒル兄何を」

「何を」

「いや、帰るっつったっしょ」

怠そうなマヒルが帰還。普段からそうではないが、見た目怖めな兄ちゃんな我が家の長男。口調もそうだからカイトがカチンコチンだよ、可哀相に……。

「ん、この子誰よ」

「んー？　アサきゅんのオトモダチだよー？」

「アサキの？　そういやアサキは――」

「こっち」

カイトを見て、ユウヤの説明を受け、キッチンから手を振る僕を見たマヒルは――とりあえず叫んだ。

「な、――何をしてるアサキ！！　其処は母さんかユウヤの居場所だろうが！！！！」

「貴様等皆同じ様な反応すんじゃねぇ！！」

良いじゃん僕が料理したって！　何がいけないのさ！
良い加減グレんぞ僕。

「もう出来たから自分等で運べよ馬鹿！　僕は先着替えてくるからなっ！　バーカ！！」

叫んでみた、や、怒ってないよ？　何時もの事だよコイツ等の扱いは。

「ちょ、待てアサキ！　俺が悪かった！！　折角離れて暮らしてる

のにボケのレパートリが増えてないのは凄く悪かったと思ってる！！！！」

「僕はんな事に怒ってねぇよ兄貴！！」

何だよそのツッコミの性。

そう、兄貴はそういう人。怖く見えても僕等にとってはただのブラコンなマヒル。僕の目の前まで来てわたわた、そんな姿はユウヤみたいではあるが。

「平気だ！　兄ちゃんはアサキの料理だってダークマターだって食べてやる！！」

「俺の料理をダークマターと並立の形に並べるなよ」

「僕もアサ君の料理なら次の日動けなくなったって食べるー！」

「だから俺の料理は毒物かよって」

「ママだって食べちゃうー！！」

もういい。

――という訳で改めて朝ご飯。

「普通に美味しいわよアサちゃん！」

「うん」

「腕を上げたねあー君、何かもう……凄く嬉しい」

「うん」

「お前が七歳の時に兄ちゃんに作ってくれたアレと比べると……うまくなったな……」

何と比べてるの兄貴　。僕覚えてないんだけど。

「な、アサキって大変だな」

隣に座るカイトがしみじみと言ってきた。一体何が……？

「家での役割とか」

「？」

「ツッコミとか」

……何とも言えねぇ。

そんなカンジな朝ご飯で一日が始まるのだった。

とにかく、……元気が一番だよね。

15＋健康なのが一番だよ。

「二人共、成績表は？」

このタイミングで来るのか母さん！

クリスマスが明けた次の日、休暇を満喫する母さんとマヒル兄の居る中、俺達はゲームをしています。だって暇なんだもん。という訳でこんにちは、ユウヤだったりします。

「何だ、お前等まだ見せてなかったのかよ」

「昨日は何にも言われなかったから」

「そーだそーだ！！」

マヒル兄の問いに少したりとも目を画面から離さないアサ君、ゲーマーは何か違う。兄弟三人でやってるはずなのに、何だろうこの実力の差。

「じゃあ今お母さんに見せてー」

「うん」

「うぇ……」

素直なアサ君と呻きにも聞こえる俺の声、だってあんな成績……。

「兄、ゲーム中断しといて」

「おうさ」

「一人で進めたらコ　ロ　ス」

「アサキよ、お兄ちゃんに何て事を言うんだ」

アサ君はゲームになると人が変わるから仕方ないんだよ、マヒル兄も学習能力がないなぁはっはっは。

二階から持ってきた各々の通知表を見て――母唖然。

「ユウ君……？」

「ごめんなさい」

先手必勝☆先に謝るぜ！！！！

「何何、俺も見るぜ」

後ろからマヒル兄も覗き込む。そして再び――唖然。

「「……」」

ザ・硬直。

そんなに？　僕の成績そんなに酷い？　いや、酷いけどさ、いっちー先生も譲歩して一じゃなくしてくれたしさっ、……ね？

「何か……変？」

「「凄く」」

口を合わせるなやい！！

「にしても……二人共並……って感じだよなァ……」

「並で悪いかぁ！！　ってアサキも？」

隣りでボーッとしてるアサ君の通知表を見ると、結構バラつきがあった。

俺達の学校の通知表は上から国語、数学、理科、社会、体育、英語、美術、音楽、技術家庭なんだけど、アサ君の通知表は……。

「3，5，5，3，2，5，3，4，4」

どうした実技の一部。

「寝れない教科が多くて」

寝れないのが高いんだろうな、数学とかいっちー先生だし。

「まぁ、アサちゃんは体育とか苦手だもんね？」

母さんがアサ君の頭をよしよしと撫でた。俺達中学生なんだけどな、母さん覚えてるのかな。そして黙って受けてるアサ君は慣れ過ぎて特に反応が無い。

其の横で僕の通知表を見て突っ立つマヒル兄。

「2，2，2，3，5，3，4，5，5」

え？　今のが何かって？　勿論俺の成績だよ？　前半おかしいって思った人はメッコメコにしたるぜ。

「まぁユウ君は実技得意だもんねぇ？」

そして母さんはおんなじ反応。見せても怒らない母さんが俺は大好きです。

「……こいつ等は母さんに似たんだろうなぁ……俺様父さん似で良かった」

「お兄ちゃんったら、ママと弟達が可愛くないの？　まー君？」

「その呼び方はやめい母親。そしてあんたは別に可愛くないだろうが」

何を嫌がるのかマヒル兄。家を出る数年前までずっとまー君だった癖に。

「まぁ、ママは別に成績は気にしないわ。1があったら別なんだけど」

ぎりぎりセーフ！！！！！

「私はこっちを見るのよ、ね？」

こっち……というのはすなわち通知表の右側。俺達の学校だけなのかは知らないが、そこには担任の先生が生徒を見定めた色々なコ

メントや〇印が載っている。俺の場合、大抵“健康”に〇が付いているんだ、ははっ。

「じゃあユウ君からね」

ぐはっ、俺自分でも見てないのに！　アヤメ先生何書いたんだろ……？

「“男女共に対等に仲良く出来、健康的且つ元気に日々を過ごしています。”」

何だ、普通。寧ろ俺にプラス。先生にしては何も――

「“出来ればその元気な力を勉学に持って行けると良いでしょう”」

――あるよね、うん。流石に2だけの三教科はキツイよ。自分でも思う。

「ユウヤ」

「何？」

「勉強しろ」

「よしきた」

マヒル兄からの一言でした。

「次」

「あーちゃんのね」

アサ君のは一体何が書かれているのだろうか……自分のよか数十倍気になる。

「“非常に優れた頭脳を持っている為、これといって勉学面に非はありません。”」

この人本当に俺の片割れなんだろうか。でも持っているのところに修正器が使われている。……うっすら“はず”って見える。……持っている“はず”。

「“多少の好奇心の無さが見られるものの、これは個性として受け止められるものです。”」

ほう、この無気力人間が個性だと。いっちー先生アサ君のコメント書くのにどれだけ頭を捻ったんだろう……。

「“後はもう少しの真面目さと協調性があると尚良し。素直さがあると尚尚良し。”」

「後半何やら希望が混ざってる様な気がすんのは兄ちゃんの気の所為か？」

「先生これでもオブラートに包んで書いたと思うよ、俺」

マヒルもアサキを見てれば分かるかもね。でもこんなアサ君がいいんだよ、うん。

「……うん、健康で頭良いならママはそれでオッケー！」

我ながらこの母親は何基準なのかよく分からない。アサキと俺が逆だったらいけないんだろうな……。

「あら、もう三時じゃない。おやつにしましょ！」

「「はーい」」

「……」

「何で一番下が一番やる気ないのかしらね家うちは」

いそいそゲームに戻るアサ君。花より団子逆バージョンの我が弟。

ま、そんなアサキだからいいんだけどね。

「視線が厚かましい」

心を読むな。

16十人に寄って出来る事。

昼です、良い天気です、ユウヤです。
昼飯を食べて部屋に戻ろうと階段をてけてけしている所です。アサキは未だ起きてないらしく下に降りて来てないから、母さんに起こしてくるよう頼まれました。

「アーサーキー！」

バーンと部屋の扉全開！
同じ部屋だから何とも言えないが。そしてベッドに居るアサキは――

「……」

――なんか漫画を読んでました。

「あら、あっ君起きてたの」

「……さっき」

「ふーん。母さんが昼用意してるよ？」

「うん、読み終わったら行く」

直ぐ読み終わるんかな……俺は深く考えずにそのままゲームを始めることにした。

――数十分後。

「……」

「……」

え、がっつり？
がっつり読みに入ってる？

「アサ君？」

「読み終わったら」

これ以上言うとキレるのでやめる、母さん待ってるんだけどなぁ……。パジャマ姿で借りて来たと思われる漫画をがっつり読む弟、もう一時過ぎなんだけど腹減らないのこの人。

――更に数十分後。

「アサキー？」

下からの母の声。やはり遅かったもんな……。とたとたと階段を上がってくる音、扉も開いてそこには母さんが現れた。

「あーちゃん、ご飯は――」

「読んでから」

「あ、あらそう……」

母さんは俺を見る、首を横に振ってやると母さんはため息をついて下に戻って行った。数冊ある漫画を読み終わるまでアサキは動きゃしない。誰の声も聞こえない――って訳じゃないんだけど。

「……」

「……」

今の状態の此の子を扱える其の人は未だ起きて来てないし、いーか。

――更に更に数十分後。

「アサちゃん、まだ下りて来ないのー？」

「うん、アレは読み終わるまで下りて来ないよー」

ゲームを止めて、リビングに参上した俺と母さんのぐだぐだな会話。暇な俺達は机に死んでぐでーっとなっている。

「おかーさん、もう二時だよー」

「そうねぇ……早く食べちゃってくれないかしらー。お母さんも早くお片付けしちゃいたいんだけどー」

「無理だよー、奴等はどっちかが覚醒しないといけないんだからー」

「そうねー」

ふっ、本当にぐだぐだ。にしても起きないし読み終わらないな奴

等基俺の兄弟達。

ちょっと変わってるんだよね、家って。癖の多い人が多いというか、今の場合アサキがああなったら俺と母さんには機嫌を損ねる方法でしかどうにも出来ないけど、今寝てる馬鹿兄貴ならば怒らせることなく普通に連れて来れる。かくゆう俺も、――滅多に無いけど――起きない時は家族にしか起こせないらしいぜっ！　ちなみにもう一つ言うと母さんが拗ねると父さんにしかどうにも出来ません。超万能型の父さんなら皆に対処出来るんだ。

「……ふぁ」

「「あ」」

そんなことを考えていればお兄ちゃんのおはようです。ちなみに今二時過ぎなんだけど寝過ぎだよね馬鹿兄貴。

「おっはよーう。マヒルさん超ハラヘリ也、飯を所望する～」

朝のテンションがおかしいのは家族の血筋。特にマヒル兄は眠いともう使い物にならない、格好良い今風の容姿イメージが全壊的に崩壊するぜ！

「焼きそばでいいかしら？」

「うい」

「じゃあ先にアサちゃん覚醒させてきてくれないかしらね？」

「アサキ？　おーう、お任せあれーい」

軽装なマヒル兄は軽い返事で部屋に行く。……どうやって覚醒させるのだろうか……俺に対しては話し掛けるだけでキレるのに……。
という訳で部屋の外から隙間越しに覗く俺。

『……』

『アーサキ、兄ちゃんと飯食うべ』

『……ん』

……あれ、普通。横に行って頭にポンッと手を置いて……あれ、普通に反応がある。

『何読んでたんだ？』

『カイトから借りてた漫画。明日返すから』

『ほぉ、カイトってんはこの前居た奴か』

『うん』

『今度兄ちゃんに紹介してくれよ、寂しいじゃねえかリトルブラザー』

『うん。テンションうざい』

……うん、分かった様な分からない様な。兄貴はアサ君の扱いが上手いんだな、そして何だかんだでアサ君はマヒル兄が嫌いじゃない、そんだけか。

「だから父さんは皆をどうとも出来るんだな、謎は全て解けた！」

「廊下で何言ってるのよユウ君」

「母さん、真実はいつも一つさ！」

「あらあら」

下りてきた俺に母さんはクスリと笑ってリビングに戻った。

今度ちゃんと覚醒チャレンジしよう、出来そうな気がする。

ね。

17＋夜は寝むたい年頃さ。

「アサ」

「今は夜だ」

「君を呼んだんだよアサキ君」

こんばんは、真っ暗な部屋で寝る準備万端なアサキです。隣のベッドから何やら声がしますが何か？

「何」

「寝れない」

「お休み」

「お兄ちゃんの話ちゃんと聞いてた？」

ユウヤ、貴様が寝れぬか寝れまいかなど今超絶寝たい僕には全く関係ないわ……！

「昼寝し過ぎた……」

「君が寝てた時間僕はゲームしてたから構いやしないお休み」

「流れで寝ないで！　独りにしないで！」

ちっ。いいじゃないか寝たって。六時間ゲームやってた身として

は明日の体力温存の為に早く寝ないとなんだ、時刻はただ今夜十二時程。僕等が起きてるなんて珍しい時間だ。

「アサ君、何かお話してよう」

「お前は五歳児か何かか」

「十三だよ」

「うるせぇ」

「寝られればこの際何でもいいやい」

ご尤も。じゃあ洒落もなくお伽話でもしようかと思ったが、やっぱりここはハードにいこう。

「じゃあ普通の学生が異世界に飛ばされた話でいい？」

「話の選択ミスが否めないがまぁいいや」

良いのか。良いよね、つか僕もう眠いんだけど。

「ある所に一人の少年が――」

「――そして彼は言いました。『ここでお前を倒す訳にもいかない。お前は俺が止める』――」

代わってユウヤです。何が変わったかって？　僕にも分からない事聞かないでよー。

にしてもアサ君の話すやつは本格的過ぎる。かれこれ一時間程この話が続いています。主人公とその友達達が修学旅行に行く飛行機から異世界に飛ばされた所から始まって今はその友達と何故か戦うシーンらしい。

何故曖昧かと聞かれても困る、何か途中からアサ君の話が曖昧になってるんだから。

「『俺を止められるなら止めてみろ、太郎』花子は言った」

何故俺なのに花子なんだろうね、てか主人公太郎って即興過ぎる。な割に内容濃いって何だこの話。

「『君は間違ってる！　俺には分かる、君もこんな事してはいけないと知っているはずだ！』」

太郎か、太郎なのか今のは。

「『僕は何も知らない、だから真実を求めていくのさ、タロー』」

なんか太郎のイントネーションが外国風になったのは気の所為か？　というか花子の方の設定が幾分格好良いだろ、頑張れ太郎。

「『待てよお前等』しかしそんな所に現れたのは過去二人の親友だった男、……えと、兄貴でいいや、真昼だった」

兄貴がやってきた、兄貴は本当に二人の親友だったのだろうか。

「『こんな所でお前等が争ってもこの世界は救えない、だから力を合わせてやっていこう』真昼はなんか格好良くそんな事を言って二人を和解させました。……でその世界を救って元の世界に戻りましたとさ」

あっさり!?　なんか兄貴出て来てあっさり終わっちゃった!?
結局危機に瀕したっぽい異世界は救われたんだよな!?

「……くー……」

「ありゃ、眠気が末期だったんかな……」

長々話したアサ君は夢の中にゴートゥーした様です。僕も丁度眠いカンジだし、寝よっかな。お休み。

次の日の朝。

「ね、マヒル兄」

「んぁ?」

「太郎と花子はうまくやってるのかい?」

「誰だそりゃ。一体何の話だ?」

聞いてみただけだもん。えへっ。

18＋生きる意味　思う事。

「……」

……。

「……」

……。

「……うう……」

Σ（ ゜Д ゜）

今の僕はこんな感じです。

って誰にも伝わらない悲しい沈黙でこんばんはです。いきなりな入りすみません、なんか……夕飯終えて部屋戻ったら……ＰＣに顔近付けて停止してる人が居たものでつい僕も停止してましたアサキです。

「あ、アサ君、ご飯終わったの？」

「うん」

あくまで冷静さを保つ僕。反応するな僕、頑張れ僕、兄が号泣してるからって反応したらいけない僕。

「……」

「……ねぇ」

「ん？」

「何泣いてるの？」

無理でした、聞いちゃいました。僕に泣いてる人を放っておける程の度胸はありませんでした。

「……聞いてくれるのかい……？」

「聞いてやるからＰＣから顔離せ、それ僕も使うんだから」

怖ず怖ずと此方に顔を向けたユウヤはなんか滅茶苦茶悲しそうにため息をついた。何があったんだコイツ。

「実はね、俺が行ってる掲示板の交流サイトの仲良い人がそこ来るの止めるって言うんだよ……」

「ほう」

「何でも学校での居場所とか、家での居場所が自分にはないとか。だからここに居ても迷惑だとか言って泣き言ばっかりな子なんだよ。前までは明るい子だったのになぁ……」

「ユウヤ、そいつ中学生だろ」

ザザッ

何か身じろいだ。

「な、何でそれを……！！」

「放っとけそんな奴。唯の思春期特有の中二病患者だ」

第一お前が行ってるその掲示板大半中学生って前お前が言ってただろ。

「思春期ってのは其れ特有に心の不安定からくる何かがあって、普段から情緒不安定になるらしいよ。だからその子も恐らく其れ。ユウヤが心配してやる事じゃなくて、そいつが自分でどうにかする事だ」

「でも～」

「でももかしこもない」

「かしこ」

シバくぞ。あえてスルーするがな。

「ネット相手にそういう事言ってる奴は僕は相手にしたくない。ユウヤが何か言いたいなら言ってあげれば？　その内『自分なんて生きてても仕方ない』とか『死にたい』とか言ってきても知らないけど」

「……アサ君って、何気酷い？」

「今更知ったの？　何年双子やってんだか」

「……」

何やらそれを最後に会話が途絶えた僕等。……これじゃあ何か、僕等が喧嘩しているみたいじゃないか。ユウヤは再びカタカタとタイピングを始めたが、僕がそれを見る訳もなく。

「……」

「……」

本当に会話ないな。

「アサキ」

「何」

うわお、急に話し掛けんな。会話無いと思った瞬間で僕がびっくりした。

「今ね、『俺はもっと君と話したい』って、うったんだ」

「……」

「『私も話したいけど、貴方に迷惑がかかる。私は生きてても意味のない人間だから』だって」

「……」

「……」

……予想的中、ってか。
何も言わない状態が続くと、ユウヤは何やらまたカタカタとタイピングし出した。

「……アサキ」

「ん」

「アサキもさ、昔の方が明るかったよね」

「ん」

「小六だったっけ、何かがあったの」

「……」

「……」

この馬鹿は本当……変な所ばっか覚えてるから……。
小六ね、今思い出すような内容じゃないんだけど、僕にとっての情緒不安定って奴は異様に早くやって来たって訳。

「……優しい言葉が欲しいだけなんだよ」

僕がそう口を開くと、ユウヤのタイピングの音も止む。ちゃんと聞いてくれている様だった。

「彼女は優しい言葉が欲しいだけ。彼女が言う程彼女の世界は壊れてないし、彼女が思う程周りは彼女を嫌っていない。唯、悲劇のヒ

ロインになりたいだけなんだよ。だから――」

チラリとユウヤを見た。さっき流してた涙はもうなくて、僕をぼうっと見つめてる。

「――優しい言葉をかけてやんなよ。彼女の気が止むまで。そして怒ってやんな、ユウヤの気が済むまで」

「……ん」

ユウヤはまたＰＣに向かい合う。僕とユウヤの違う所は、素直に物事が言える事だと思う。もっとあるけど、それが一番の違いだよ。僕には言えないから、――そんな言葉、掛けられないから。

「……アサ君」

「……」

「アサ君も、少しはこの子みたいに辛い事を――色々吐き出してくれればいいのに」

「……一体何の事やら」

ふと思う。普段は五月蝿いくらいなユウヤだけど、やっぱり僕等は双子なんだなと。

「またまた」

「さっぱりだ」

「ふふっ」

――いつか負けてしまいそうだ。ユウヤのたまに見せる慈しみの様な微笑に。

19＋続・生きる意味　思う事。

「兄ちゃん」

「いきなり昔の呼び方で呼ぶの止めない？　兄ちゃんびっくりするから」

こんばんは、ユウヤです。今日はマヒル兄と母さんから頼まれたお使いです。おせちの材料買い出しですよ。え、アサ君？　朝からカイト君ん家に行ってますよ。駄洒落かってんだ、何してんだか。

「じゃあクソ馬鹿兄貴がいい？」

「それはアサキの呼び方だから、ユウヤに呼ばれたら傷付く。てか兄ちゃんで良いよ、やっぱ兄ちゃんが憧れ」

「どうでも良いから気持ち悪い」

爽やかな笑顔で言ってやると何かショボンとした。マヒルの前だとやっぱりツッコミは俺だよな。ま、リバースしますが今は俺だね。

「んでね、話は昨日にまで遡るんだけど……――思春期って何なのかな？」

「話が読めない」

だよね。

「実は昨日――」

――昨日の会話を話し終えて。
決してサボった訳じゃないぜ？

「あぁ、アサキと喧嘩したのな」

「してないよ、人の話ちゃんと聞いてたのかな」

「聞いてたぜ？　でもお前等の会話があまり噛み合ってなくて大変だった事も分かった」

一歩間違えたらお前等が喧嘩する所だったんだろ？　……とマヒル兄は続けた。
何も言えない俺。

「大変だよなぁ……お前等くらいの年頃ってのはよ」

「そなの？」

「おう、アサキが話した通りに思春期は大変なんだよ。男子はあまりないんだがな……女子によく見るよな、そういうの」

ほう、やはりそうなのか。……ま、女子との交流多いけどよく分からない。

「俺はアサキが多分そうなると思ってた」

「は？」

「だから、その、アサキの言う、中二病？」

なぬ、アサ君が？　そりゃまたどうして。

「性格暗いし友達少ないし」

「何か色々無関心だし根暗っぽいし」

「アサキは良い子だ！」

「アサ君を悪く言うな！」

何だよ俺達。馬鹿みたいじゃん、店でそんな事叫んで。夕方頃で人も多いスーパーだった、ごめんなさい奥様方。

「話戻す。……アサキは分かりにくい可愛さがあるんだよ。良い子なのも分かりにくい、憎まれ口ばかり叩くしな」

「確かに」

「だーかーら、中学くらいまで来たら何かしら陰口とか叩かれたりして、そうなるんじゃねぇのかなー……と、兄ちゃんは思っていた訳さ」

「その心配はなっしんぐーよマヒル兄。アサ君ああ見えてかなり強い子だもん」

中一の時に虐められっ子を助けた経験だったあるんだぞ！　よく

喧嘩した友達の仲介だって――嫌々――するし！　友達って言っても、アサ君がそう思っているかは知らないけど。

「そっかー。そっかそっか、ならいいんだけど……」

「うんうん」

「……アサキは――抱え込むタイプだからなぁ……」

……うん？最後が聞こえなかったんだけどな？　アサキは……？

……ま、いっか。

「おしユウヤ、伊達巻き買って帰るぞー」

「よしきた、政宗！！！！」

「分かりにくいボケかますな」

アサ君はアサ君だし何でも良いや。生きてるんだし、アサ君は分かりにくいとこあるけどさ、俺は絶対見逃さないもんね。きっとアサ君もそう思ってくれてるし……うん、何か全部晴れた！

そして今は何よりおせちー！！！！　さっ、行くぞー！

「……ユウヤ、アサキはお前が居れば大丈夫だ」

一人で走った俺には、マヒル兄のそんな台詞が聞こえてる訳はないんだけどさ。

20＊閑話＋だらだら話しましょうか。

「明けましておめでとうございます！」

「ちなみに今から話す事は本編とは関係ないので気にしないでぐだぐだと聞いてくれればいいと思います」

「え、何の事かって？分からなくても仕方ないよね、だっていきなりなんだもん」

こんにちは、今回は年明けという事で“朝夜グラフィティ。”主人公二人でぐだぐだ作品裏秘話を話すという本編全く関係ないコーナーです。だから台詞だけなのでそこはご理解下さい。改めて言いますが、本作品の内容とは一切関係ありませんので。あれ、関係あるかも……まぁいいや。

「って言っても何話すよユウヤ」

「知らなーい」

「そんな吃る事なく言われても……」

「だって聞いてないもん、作品裏秘話ってどうすりゃいいのさ」

「デスヨネー、僕そういうの知らないし」

「ねー」

「ねー」

進まない。コイツ等に喋らせてたら進みゃしねェじゃないか。

「あれ、作者出て来ないんじゃなかったの」

「そーだそーだ」

貴様等がちゃんと進めれば出て来ませんて。適当に進行しちゃってくれ、頼む。アサキにゃ漫画やるから。

「おし、やるか」

「アサ君てお手軽だよね」

「黙れ」

「うい」

「じゃあ改めまして、こんにちは。何か……裏秘話ってか制作秘話話せ的話なので色々暴露っちゃいまーす」

「いえーい！」

「じゃあまず、題についての制作秘話」

「ふむふむ、それは一体！？」

「気分」

「コラ作者ァ！！」

何。

「制作秘話話せって割に話す話がないんだけど！！」

どまい。

「まぁまぁ、ちゃんと朝夜の由来はあるんだからいいじゃんかユウヤ」

「そなの？」

「直ちにゲームしに帰った作者によると、僕等の名前が由来なんだって」

「はい俺等の名前は？」

「ヒコクアサキと」

「ヒコクユウヤでーす」

「……はい」

「だから？」

「馬鹿」

「何さっ！？」

「漢字にすれば分かるんじゃないかな」

「……あ、あー……そゆ事ね」

「という訳で、僕等の名前を漢字にすると“燈刻朝杞”と“燈刻悠夜”なんですね、はい」

「朝夜……何でお兄ちゃんの俺が後なんだろう」

「そういう細かい所は考えないアバウト人間だからだよ」

「アサ君みたい」

「奴と僕を一緒にすな、それじゃなくても作者の友達に僕と作者似てる言われてるらしいんだから」

「べっつにいいじゃない、似てた方がキャラが動かしやすいんだってよ」

「あーら、何その俺様の自由自在みたいな言い草。作者ぶっつぶす」

「あー君どうどう」

話が逸れたから戻せィ。

「あ、ちょいちょい作者」

変な名前をつけないで欲しいな？

「馬ー鹿」

君から漫画を奪い去ってやろうか燈刻朝杞。

「ごめんなさい」

ならよし。

「アサ君って漫画の為ならプライドないよね」

「安っぽいプライドなんて持っちゃいませんよアサ君は」

自分でアサ君っていうと変だな。

「うっせ」

はい、そろそろ題の制作秘話に戻って下さい。

「「はーい」」

素直だな。

「では戻りますと、グラフィティ。という部分ですね普通にそのまま訳せば分かって貰えると思うので、特に何も言いません」

「言わないんだ」

「言う事ないもん」

「じゃあ長くなったから次の話で最後。更新比率について」

1番ついて欲しくない場所つきやがるなこの野郎。

「12月は結構な比率で毎日更新してたのに1月入っては今回が最初ですよね」

「はい作者言い訳をどーぞ」

ゲームにはまりましたすみません。

「何この正直人間」

「マジで馬鹿だよ」

悪いか畜生。
でも、本当不定期にお送り致しますので、はい。

「適当な人だよね、礼螺君って」

「何故僕を見ているのかなユウヤ？」

ではこの辺で長々しいだらだら話は終わりに致しましょう。

「「誰がさせたんだよ」」

僕ですね、すみません。
では今回はこの辺で。

「以上、裏秘話でも何でもない閑話タイムでしたー」

「ばーははーい」

古い。

21＋雪合戦で後の祭り。

『明日は雪、全国的に雪となるでしょう』

そんな予報を訊いたのは昨日の事だっただろうか。今家を出ようとしている僕の目の前は、銀一色に染まっていた。というか上からも来る銀、コレ……。

「あれー、今日始業式……」

「あー君見て見て雪だるまー！」

そう言って僕より早く外に出たユウヤが何故か雪だるまを作成し終えていた。

今から学校なのに何やってるんだこの餓鬼は。おはようございます、アサキです、雪です、死んでいいですか？

「五月蠅い、寒いから寄るな」

「俺があっためたげるー」

「消えろ、早くしないと先行くよ」

「あう」

何という事かうちの学校、雪くらいじゃ休校しません。畜生、休みだと思ったのに。

そう言って僕はスタスタと学校へと歩き始めた。

「冬休み、有意義に過ごせたかー。始業式は雪で寒いから中止で宿題集めるぞー。そういえばあれだ、何か年賀状とか大変だったんだよなーー」

サクライ先生のＳＨＲ（ショートホームルーム）開始。面倒な話が始まるよ――とか思わなくて結構。だって先生――

「――じゃ、終わり」

――長話しないもん。

凄い中途半端に話終わって気になるけど長話はないから生徒にとっては楽だよね。

「アサキー！　あけおめ☆」

「明けてから会ったじゃないか」

「いーのいーの！　もっかいやったって罰当たったりしやしねぇさっ！」

軽い奴だな、もしかしたら神様から馬鹿にされるかもしれないぞ。

というか、もう帰宅なんだから帰らせて、僕はもう三連休を楽しむんだから。

「カイトーアサキー外で雪合戦しようぜー！！」

「良いぜ！　俺はカイリだけど雪合戦ー！！！！」

「え、ちょ――」

僕、帰るんだけど。

クラスメイトに誘われてしまったので、断らないカイトダッシュ。

――手には僕の腕。

「アサキもたまには身体を動かすぞ！　どうせゲームとか漫画ばっかだったんだろうから」

ギク、何故分かる。

「あ、ついでにユウヤ呼ぶ？」

「いっそユウヤだけで僕は帰――」

「「却下！」」

……うん。

そして僕を呼んだ君、名前何だっけ？

「ダラッシャー！！」

「冷たッ！？　カイト容赦ねぇ！！」

「えへへへへへ」

「笑顔のままユウヤキター！！！！」

楽しー！　ユウヤです！　雪玉ドカドカ投げまくります。
一組男子軍団計十八人（※アサ君抜きで全員）に誘われて雪合戦に参戦中。結局かなり嫌がったはアサ君は見てるだけで許されたみたいです。だって寒いのダメだもんね……。

「畜生！！　どっちか押さえないと勝てないぞ！！！！」

「無理だろ！？　ユウヤもカイトも無理だ！？　この体力馬鹿達に勝てる気がしない！！！！」

「だ・か・ら、カイリだーッ！！！！」

「「グハァッ！！！！」」

俺＆amp;カイトＶＳ一組男子。
なのに俺達優勢ってこれは何なんだろう、奴等が弱いんだな。

「隊長！　ハルナ一等兵ダウンです！」

「仕方ない！　放っとけ！」

酷いな隊長、放っとくなんて。

「こうなったら、奴等の弱点を取れ！！」

「へーん！　俺とカイト君のコンビに弱点は無――」

「チアキ二等兵！　アサキを呼んで来い！！」

「「やめろ！！！！」」

痛い所をつかれた！　俺がアサキに雪玉！？　無理に決まってるじゃないか！！　カイト君ならいけそうだけど後が怖いからやっぱ無理そう。

そんな事でギャーギャー言っていたら朝礼台で一人漫画を読む（※此処学校とか行ったら終わり）アサキの元に……えーと、二等兵？　――が！！！！

無理矢理に連れて来られるアサキが来るぞ、やばい、アサキが来たら俺達はどうすれば……！

「ふははっ！　我等の勝ち――――グフッ！」

あ、威張ってた隊長が死んだ。どうやらカイトの雪玉がクリーンヒット☆

「ユウヤ、来る前に潰すＺＥ☆」

「Ｏｈ、ナイスアイディア☆」

（＃、∀、）ｂグッｄ（、∀、＃）

「「オラァアアあ！！！！！」」

「「ウワァアアあ！！！！！！！」」

「――で、調子乗ってうちのクラスの男子皆におもっきし雪玉顔面クリーンヒットさせた訳？」

「「はい」」

「……何か言いたい事は？」

「「ごめんなさい」」

「……やるべき事は？」

「「皆に謝ってきます」」

「行って来い」

「「はい」」

顎で差されてダッシュな俺達。アサ君に雪の上で正座の上説教を受け、教室に後戻りして冷え切った身体を温めていた男子皆に謝りに行った俺とカイト君。

「明日、風邪引くな」

そんなアサ君の予言が当たるかどうかは、明日になれば分かる事で。

22＋案の定って言葉はこの為にある。

三連休！

休み！　やっほーい！！　という訳でちわーッ！　ユウヤです！！　一日行ってまた休みだなんて、何という嬉しさ……目一杯遊ぶぞー！！！！！　――と思ったのに。

「寝てろ」

「あう」

熱出ました、昨日はしゃぎ過ぎました。てか原因は恐らく汗びっしょりのワイシャツ一枚の格好で、雪の中正座させられた所為だと思う。……けど言わない、いや言えない。

「……」

目の前で病人放ってＤＳカチカチやってるこいつの所為だなんてアサキの前で言ったら……うん、今言ったら間違いなくＤＳ投げられる。

「マジありえねぇ」

「ど、どしたの？」

「うるせ病人」

聞いただけなのに！！！！

「病人は労るべきだよ！」

「自業自得はだあってろ摂氏３８．５度」

「むー」

何やらゲームの進みが悪いみたいです。人が母親からベットから出ない様言われたからって酷いや。自分の勉強机の椅子に座り、机に両足を乗っけてザ☆ふてぶてしさを醸し出しているアサキは苛々している様です。

「畜生……鬱だ」

「急にどうしたのさ！？」

「折角五十階まで進んでボス倒せる後一歩で奥義出されたんだよ！！！！」

「……」

「俺が忘れてたのがいけないんだけど畜生！！！！　もうやらん！！！！」

「アサ君、キャラ崩れてる」

「五月蝿ぇ！！　もう死ねばいいのに！！」

駄目だこりゃ。アサキはゲームやら漫画やらのスイッチ入ると本当に駄目なんだよね。お兄ちゃんびっくり。

――Ｐｒｒｒ・・・
と、電話の子機が鳴る。どなたかしらね。
「――はい」
ちなみにアサ君が出ます、俺はベットから出たら母さんに心配されて捏ねくり回されて終わるからね！　母さんはやるって言ったらやるからね！
「……嗚呼、……へぇ……うん、了解……はい……」
対応適当だなおい。カチャリ、と子機を置くアサキ、一体誰から？
「カイト」
「カイト君？」
「お前と同じく風邪引いたそうだ、馬鹿は風邪引かないはずなのにな」
「はいはい、で？」
「やることが無さ過ぎて暇だからうち来るって」
「……風邪は？」
「さぁ？」

「おいーっす！」

元気じゃん。

「俺様が病原菌に負ける訳ないじゃーん！　熱があるだけだから暇で暇でー！！」

「それはそれで凄いな。ま、良いか」

カイト君かなり元気だ。フラフラな俺とは大違い……。

「んで、何しに来たのさカイト君？」

「ん？　暇潰し」

「違うだろ」

「あ、そだった。アサキに話しに来たんだった」

そう言うとカイト君は左手の人差し指を突き立てて笑顔で言った。

「うちのクラスに転校生が来るんだって！」

「「転校生？」！」

楽しそうな話題キター！！　転校生！？　女の子かな！？　男の子かな！？

「そ。んで、クラス委員の俺がいっちーから話を受けたんだけど」

クラス委員だったんだ。

「今ユウヤの考えが手に取る様に分かる」

「ゴメン」

「ちなみに僕も同じ事考えたと思う」

「お前は知っとけアサキ！！」

「アサ君は知っておこう、友達なんだから」

「赤の他人だよ」

「いい加減友達って言ってくんないとグレるぞ」

はい、数分この話題を討論した後話題は戻る。

「三月ぐらいから来るらしいんだよ、名前は忘れたんだけど」

「で？」

「アサキ」

「断る」

「俺の変わりに学校案な――否定早い！！！！」

この二人は学校生活で常にこんな調子なのかな。クラス遊びに行ってない間は何してるのか実に興味深い。

「面倒事は嫌いだ」

「無理承知で頼んでんだよ～、お前しか居ないし――頼む！　俺その日外せない用事があって……」

「何だよそれ」

「えっと、……父さんが、帰って来る」

そんな理由!?　そんなのでアサ君が動くはず――

「……仕方ないな……」

動いた……！！！！
めっずらしい事もあるもんだな……。

「さんきゅーアサキー！　心の友！！」

「五月蝿い」

むー、アサ君がよく分からない。
何故、ほわっつ。でも、まぁお友達と仲良くしてるのなんて中学入って稀に見る光景だからいっか。

とにかく、今日はとっても暇でした、え、オチ？　ないよんなの。

毎日変な暮らししてると思ったら大間違いだぞちくしょー。

23＋PCを使って遊ぼう。

「うそ●メーカー知ってる？」

何時の間にか風邪を完治させやがったユウヤが言った。お前、一日で治すのかよ馬鹿が。

「知ってるー！　でも家パソ子さんが居ないからやった事ねぇ」

「どなただよ」

つかカイト、休みに僕の家以外に行く場所ないんですか？

「最近やってないんだけどやってみよー！！！！」

どうやらPCを開いてたまたま見かけたメーカーをやろー……という企画らしい。

暇潰しにはなりそうだ。僕とカイトはユウヤの前にあるPCにたかる。

「な、な、俺の脳内のやつやってよ」

「いいよー。……カイト君本名何だっけ」

「覚えてねぇの！？　ユウヤとも一年くらいの付き合いなのに！！」

カイトがおいおいとわざとらしく嘆く。あら酷いなユウヤ。

「アサキ！　俺の名前分かるよな！？」

「……～♪」

口笛を吹いておくことにする。

「アサキー！！！！」

知らないもん、知らないんだもん。

「ねぇ！　二年だぜ！？　もうちょっとで二年の付き合いなんだけど！？」

「さ、やろっかユウヤ」

「だね、アサ君。あ、タイピング代わってよ、アサ君の方が早いから」

「ちょい！　ちょいって！！　俺の名前！！！！」

スルー。

「で、カイト本名は」

「……ロクジョーカイリですよ」

ロクジョー……カイリ……と。

結果。

幻、休、眠、愛が端に一つずつで、残り悩。

「カイト、お前は何を悩んでんだ」

「きっと名前を間違えられる事だよ」

「分かってるなら名前ちゃんと呼んでけれ」

次。

ヒコクアサキ、自分馴染みの名前をタイプ。

結果。

欲が嘘と金に囲まれてる。

「アサキ、お前が嘘なのは俺もよく知っている」

「五月蝿い」

「アサ君完璧にゲーム欲にさらされてる……」

「だから五月蝿い」

次。

ユウヤの名前をタイプ。

結果。
嘘と謎が悩と欲に囲まれてる。

「うわーユウヤ当たり過ぎてる」

「俺はそんなに嘘つきじゃないし欲もないもーん！」

「謎な部分は認めるんだな。つか悩みあったっけ」

「あー君酷い。俺にだって悩みのひとつやふたつ――」

「あんの？」

「ない☆」

「暇だし、違うのやってみない？」

とユウヤが言いやがるので、色々クリックククリック。

「あー、アサ君其れ其れ！」

「あ、確かに楽しそう」

ユウヤとカイトが目についたのが――つよさメーカー。

何だこれは。

「俺様の強さをを見極めようじゃないか！」

「俺も俺も！　寧ろ俺最初！」

カイトが何も言わないので、ユウヤから。

結果。

ＨＰ：１９２
ＭＰ：１２
攻撃力：９７
守備力：９９
素早さ：１
賢さ：１８
運：６
もどかしさ：９０

「体力多ッ」

「馬鹿だからな」

「そして素早さが半端なくないね、俺」

「賢さ１８だってよユウヤ」

「馬鹿だからな」

「アサ君、先程から其れしか言ってないよ」

「そしてのもどかしさ」

「馬鹿だからね」

「……もう……いいよ」

この診断何なんだ。面白いくらいに面白い。……よく分からないなんて言わないで。

次やろう、ユウヤが落ち込んでいる内に次。カイトだな……。

結果。

ＨＰ：７２
ＭＰ：２４９
攻撃力：３４
守備力：７８
素早さ：９７
かしこさ：９
運：１８
いじらしさ：７４

「カイト、お前のＭＰは何なんだ一体」

「カイト君ファイアとか使えるの？」

「無理だよ、俺様そんなの出ないから」

「んでカイトはユウヤより馬鹿、と」

「そしていじらしさ７４」

「俺は何て能力があるんでしょーか」

カイトが自分の能力について悩んでる内に次。

結果。

ＨＰ：２８
ＭＰ：１７２
攻撃力：８３
守備力：４９
素早さ：９５
かしこさ：８６
運：９９
妖艶さ：８８

「「ＨＰ２８」」

「口を合わせて食いつくな、自分でも分かってるから……！！」

「んで最後の妖艶さって……」

「８８……」

「ちょ、ユウヤ笑うなよ」

僕の強さって体力なさ過ぎじゃないだろうか……。他バランス良いのにあんまりだ……！！！！　当たり過ぎててびっくりだよ。

後、色々やって今日は終わりました。

僕の前世は体育会系の人とかホタテとかでした。なろー。

23＋PCを使って遊ぼう。（後書き）

※今回の話は某人気インターネットサイト“うそ●メーカー”の実際の結果をお借りしました。

２４＋夜な夜な作業。

「あー」

「どうした」

「宿題やり忘れてたー」

「気付いて良かったね」

「冬休みの」

グフッ！！

久しぶりに夜分にこんばんは、アサキです。今の効果音は僕が不甲斐ない兄を持った事に対して今更ながらダメージを受けた音です。

「――……とりあえず、ユウヤイケ」

「なんかイントネーション的に“逝け”だった気がするのはお兄ちゃんの気の所為かな？」

「気の所為だ」

多分。

「今何日だと思ってんのさ」

「十二。成人の日〜」

「死ね」

「うわお、直球。だって最初の授業までって言ってたからさー。アサ君はやってないのないのー？」

「ある訳な――」

記憶遡る事十五日程――

『ユウ君は宿題は終わったのかな？　遊びに行ってしまったけど……』

『未だに決まってる。って僕もやらなきゃー』

――母さんとそんな会話をして二階に行って――

『さて、今日は何終わらすかなー』

――んで机の上のゲーム機見つけて――

『……』

――そのままゲームして夕飯になって――

『明日でいっか』

――で、次の日やった気でいたのは――

「――くねぇええ！！！！　俺英語やってねぇええ！！！！」

「ほら見ろー！　俺の数学と同等な感じじゃないか！！」

遡りを終えてリアルに戻った僕は鞄から一冊の冊子を取り出した。
ああ、あの時これを机に置いておいたからやった気ＭＡＸだった…
…！！！！

「馬鹿野郎！　お前も早くやれってんだよ！」

「そだね、やろやろ。いっちー先生に怒られちまうさ」

「英語はアヤメ先生だから怒りはしないだろうけど急いでやらないと……」

何ページだっけ……。……十ページ？

時計確認、二十二時か……こうなったら。

「電話してくる」

「誰に？」

「カイト、やったの写させて貰うっきゃない」

「うわー！　アサキずりぃぜそりゃ！！」

「お前は僕のを写せばいいだろうが」

「良い案だ」

扱いやすい兄貴め。

僕は急いで下まで降りて、カイトの家に電話する。

「起きててくれよ……」

やり忘れが英語で助かった……。カイトは英語だけが取り柄の馬鹿だからな。

『――アサキ？』

「助かった！！」

『うえっ！？　何！？　急に……』

「お前の英語の宿題を僕に貸せ、取りに行くから」

『えー、いいぜー、でも外寒いぜー？』

「今はそれどころじゃないんだ、とにかく――」

『いいよ、俺が行く』

ブツッ

「……」

こういう時便利な友達だ。……いや、友達じゃないってば。

――数分後。

「お泊まりに来ました～」

何故そうなる。

「いらっしゃー」

ユウヤも招くな。

「実は俺数学やってなくて。あっ君写させて～！！」

「んなこったろうと思ったよ。まぁ今はどうでもいいから貸せ」

僕の明日がかかってるんだ……！！！！　という訳で、二人は居間でやらせて僕は一人部屋でやる事になった。部屋狭いし寒いからね。

『あ、俺最後だけてきとーだから最後は自分でやってけれうへへーい』

とカイト節で言われてから早一時間程。

……写すだけでこんなにかかるなんて……！！！！　恐るべし英語！！

……にしても、やっぱりカイトは英語だけ凄いな、凄くまともだ。
ちゃんとやった形跡もあるし、こりゃ他の教科もちゃんとやりゃいけるんじゃ……あ、数学は無理か。授業中に『すったかたー』とか言ってる奴だもんな。

「さて、後一ページ……やば、眠い」

普段は寝てる時間なんでね。ごめんなさいね、全国の夜更かし人間達よ、僕はもう眠いんだ。
と言ってる間にやってしまおう、……あぁ、カイトこっからちゃんとやってない様だ。明らかに字が変わった。下線部1の意味のとこA．そこに線があるから。

とか書いてある時点で分かったわボケが。
そして穴埋めの所に

（シャケハンズ）！

とか片仮名で書いてあるのはどういう了見だ？

――……まぁ、僕は穴埋めだけやって寝よ。

ちゃす、カイリっす。
そろそろ皆名前で呼んでよ、まだいっちー先生くらいしかちゃん

と呼んでくれてないってば。
んなこたぁなさておき。

「カイト君」

「なぁに？」

「アサ君って何でこんなに数学出来るのかねー」

「知りませぬねー」

「でもさ」

「うむ」

「この調子で行くとー」

「行くとー？」

「頭脳の良さ違い過ぎてアサ君と同い高校行けなさそう」

――……ああ、何か、色々サーッと心の中で引いていった気がしたけど一つ言いたい。

「それはいけない！」

「だよねっ！　俺アサ君と同い高校行きたい！！」

「俺も！　寧ろずっと一緒！！」

「よし！　じゃ、ちょいと勉強頑張ろー！！」

「其れかアサキの成績落とすぜー！！！！」

「あ、そりゃ良い」

自分で言って何だけど、そりゃ良い。

つー訳で、先ず此のアサキの宿題プリントをうりゃうりゃうりゃうりゃー（※ご想像にお任せします）

――明日どうなる事やら。

25＋一瞬キレそうになりました。

今日の数学の時間がやって参りました。

「アサキ、ちょっと良いか？」

何だか知らないけどサクライ先生に呼び出し喰らった。他の生徒は待ってろーと言った先生に連れられ、廊下で引き攣り笑顔の先生とご対面ですアサキです。

「何です先生」

「いや、な？　俺はお前が勉強面に関してナメてるけどナメてない事は知ってるんだ」

どっちッスか。

「宿題は忘れてたら、徹夜してでもやってくるくらいちゃんとしてくるのは了承済みだ」

「はい、其れが」

「今日朝提出してきた数学はどういう了見だ？」

……うん？

朝提出した数学プリントの事か……？　普通に出したつもりだったが……あ、一枚くらい出し忘れたのかな。

「すみません、ちょっと鞄から探して――」

「見ろ」

そう言って僕が身を翻そうかとした途端、サクライ先生が僕の宿題を突き付けてきました。

……なーんも変哲もないじゃないですか、つか普通に五枚あるじゃないです――

ん？

“名前　緋刻朝杞”

の隣に

“数学なんてちょろいＺＥ☆
俺様にかかりゃおちゃのこサイサイ”

とよく分からない表記を発見。そこでサクライ先生からプリントを掻っ払って二枚目を見てみる。

“ｘ＝怪盗だってそんなかんじ”

“おひゃひょーい”

とか書いてある。三枚目。

“数学なんて死ねばいいのに”

急に鬱だな。四枚目。

“にぱ☆”

五枚目。

数々ある計算式の最後に“４９”と書き足されていて莫大な数字になっている。

勿論全部、書いた覚えはない。

「……」

「アサキ、先生に分かる様に説め――」

「書き覚えはないですが、思い当たる節が二点ありますので待ってて下さい」

先生の言葉を遮って僕はニッコリ笑った。まぁニッコリだったかは分からないけど。もしかしたらニヤリかもしれん。

先生に預けて僕は向かう、思い当たる節に。

ガラッ

『あれ？アサキ君今授業中……』

『あれアサくーん！！　俺に逢いたくなっちゃったたたたた！！！！！！　アサキ！　アサキが今ゴミの如く掴んで引きずっているのは君のお兄さんだ！！』

『先生、私用でこれ借ります』

『私用じゃ駄目だよアサ君！？』

『ああ、良いですよ、ゴミですもんね』

『アヤメせんせー！！！！！』

「で、主犯はどっちだ」

「何がー？　――ごめんなさい言います言うから懐から護身用が当たり前みたいにカッター出さないで！」

「何だ、馬鹿兄貴の所為だったのか」

廊下にて。

隣のクラスで燻っていた兄を捕獲。そして――

「にゃー……」

あ、猫じゃないよこれ。怠そうに鳴いただけのカイトだから。

「確実にお前等貸した時に何かしただろ」

「あったり前だぜ！」

「自信満々に言うなカイリ」

親指突き立て元気に言われても僕は許さんぞ。ツッコミは先生に

任した。

「だってアサキの出来すぎててムカついたんだもーん」

「もーん！」

「死ねばいいのに」

「おいアサキ」

「何です先生」

「コイツ等に見せた後に確認すりゃ良かったのにな」

「誰がそんな面倒を」

「おい」

「てかいっちー先生の前で見せたとか言うなー！　見てやったのバレただろー！」

「いや、今までの全て見たって分かってるから安心しろ」

「良かったー――って安心出来なさ過ぎる！！！！」

グダグダ且つグダグダになって来たので方向修正。

「で、書いたのどっちだ」

「「どっちも」」

「先生コイツ等に煙突を」

「そうだな」

「待ってサクライ先生！！！！　ごめんなさいだから！！！！　流石に1あったら父さんの仕事に支障が出るから！！！！」

「うちも！　……いや、特に無いや」

ないのかロクジョー家。

「人の宿題に無闇に落書きはいけないぞお前等。今後気をつける様に」

「「はい」」

うん。まぁこんなもんで許してやろう。コイツ等が馬鹿なのはいつもの事だしな、僕がどう出来る訳でもないだろう。反省したならそれで良い。皆もそういうのはやめた方が良いよ、成績関連は下手したら友達を失うぞ。

「んじゃ授業戻れユウヤ」

「ういさ、んじゃーねアサくーん」

ゴミがゴミ箱に帰って逝く。

「帰らないよ」

だから心を読むな。

26＋体は大切にね。

「ねぇねぇねぇ」

「なーにさ？」

「何かやろーよー！」

「いーねー」

ちは、カイリッス。今日は体育でバスケをやるんでちょい楽しみだ！！　今は元気に十分間走！！　一、二組合同だからユウヤと走ってます。

「――……」

アサキも居るけど既に戦闘不能なんで話しかけられん、喋らないよこの子。生きてるのかな。

「じゃ、無難にしりとりやろーぜー！！」

この五分間アップペースで走ってた奴の双子の片割れとは到底思えないぜ俺は。ま、んな事は放っといて！

「おーっし！　んじゃあ何か条件付きでやろうぜー」

「そいじゃしりとりしながら喋ろう！！」

ユウヤの意見はいつも突飛だと思う。今日はツッコミが居るけどないから大変だな！！

「じゃ、しりとりのー」

「とー！」

「……微妙な……位置」

おおう、ボソッとアサキがツッコんだ……！　息切れ切れでもツッコむのか天性のツッコミは！！

「カイト君からー！」

「と？　とー……、とりあえず暇」

「まぁ楽しいからよくない？」

「……」

「……」

「……次アサ君だよ？」

「え……僕入ってんの……？」

「もち」

「――著しく生命活動の危機を感じる」

深い。
疲れて思考回ってないはずなのに深いってか濃い。
「類似点は感じるな」
「なら少し速度落とそうか？」
「確実にそれを望む」
「無理はすんな、そうしようぜ」
「絶対アサ君この後死ぬよね」
「熱出す事はないから安心しとけ」
「結構アサキ喋ってられるのね」
「ねー、俺意外。死ぬかと思ったよー」
「容易に人を殺せると思ったら大間違いだ」
「だからってアサキが生きてるのは奇跡」
「奇跡だよね、アサ君がもう十分走ってるよ」
「よく言うぜ、僕だって走りたくな――」
『終わりー！　集合ー！！』

ありゃ……案外早く終わったな……。おお、やっぱ喋ってると終わるの早いなー、ユウヤに至っては息すら上がってないからある意味怖い。……あ、俺もだった。

「はあ……あー……」

「ちょ、あー君真面目平気？」

「死ぬ……これ以上生命に衝撃を与えたら死ぬ……」

アサキフラフラだな。フラフラだよ、フラフラミンゴだよ……何でもねぇよ、ボケただけだよ……！！

「……」

「あー君真っ直ぐ歩こうよ、ぐったりし過ぎだと思うよお兄ちゃん」

「……」

「せんせー！！　アサキフラフラ過ぎなんで休ませていいですかー！！！！！！」

とりあえず俺は叫んでおいた。

所は変わりませんがユウヤです、アサ君が準備運動の時点で体育館のマットにぐったりしているのを見て流石に大丈夫か心配です。

にしても我が弟ながらやわっちーなーと思ったり思ったり。
ただ今一組バーサス二組でバスケの試合中ー。点数は六対二十。
え？　だって俺がフルカウントで出てるもん。

「うぉらー！！！！　ユウヤ引っ込めやー！！！！」

「誰が引っ込むかー！！！！　負けたら腕立て伏せとか嫌だもーん！！！！」

腕立て伏せなんていーやーだー！！　っていう感じからフルで出てますはい。

「だったら、此の俺様が相手だぜ！！」

『来たー！　行けーカイトー！！！！』

「俺はカイリだ覚えろクラスの取り巻き共！！！！」

お、一組切っての運動馬鹿がやってきましたね、ふふふ。……今人の事言えないって言った奴俺ん前に出てこいや。
カイト君の参上、ジャージをバサッと脱ぎ捨てて舞台から降りてきました。俺と勝負だと……？

「――君とはいつか決着をつけるべきだと思ってたんだ」

「――ああ、俺もだよ、ユウヤ」

ひゅおおおおー……（※風の音のつもり）

「……後十分だから急いだ方が……」

「「五月蝿い二等兵！！」」

「チアキだよ！！」

五月蝿いクラスメートに褐を入れた所で、試合かーいし！

五分後。

十五対二十四。……おお、カイト君強い。シュート率が無駄に高いよ。まぁ後五分だから追いつかれやしな――

「大佐！　残り五分です！！」

「よし来た！　報告ご苦労軍曹！！」

あ、この前雪合戦で隊長だった人。あの人位は軍曹だったんだ……カイト大佐……面白いね。

「選手交代！　奇跡のエースを最後の五分で入れるぜ！！　――アサキ！」

何！？　此処でアサ君を使ってくるとは……！！！！　相変わらずぐでってるから今回は出て来ないと思っていたものの……完璧な誤算だ！！

コートにすってけてーと現れたアサ君は何時もの倍かったるそう。

「五分なら保つだろ！」

「僕のバッテリーは三分が上等」

「何時からお前はカップラーメンだ」

と言いつつやる気満々なアサ君。あれ……何でこんなにやる気なのアサ君。奇跡のエース発動中はアサ君俺より運動神経良いしカイト君も居るんじゃ……――勝ち目なくね？

――シュパン

「え？」

「兄よ、試合は始まっているぞ」

そんな華麗に３Ｐシュート決めながら言われても。

――案の定負けました。

やっほ！　カイトに戻りましてカイリッス！　勝った勝ったー！！　見事な逆転勝ちー！！　二十九対二十八で勝ったやっほー！！！！

「そんなに喜ばないでよー、俺達が惨めになる」

「お前は腕立て伏せ終えるのが早い」

先生数分前に五十回って言ってたんだけどな？

「ねね、そういえば一組にあるあの軍のシステムみたいの何？」

「あー、ただの遊びだ。権力とか実力で勝手についたあだ名みたいな？」

確か最初に誰かがサックラ先生を「提督！」とか呼んだのが始めだったかな……？　つかもはやサクライ提督って凄ぇな……。

「楽しそー！！」

食いついちゃった。

「ねね、アサ君は何？」

「参謀」

「何それ」

「策士だよ、頭良いし。うちのクラスでずば抜けて頭良いんですよ彼」

他がほぼ馬鹿ばっかなのは秘密だ。

「ちなみにユウヤは皆“派遣”と呼んでいる」

「何故派遣」

「派遣社員な勢いでよく来るから」

ね、雪合戦っとか。

うちのクラスによく居るし。……って、そういやアサキは……？

「……」

あ、またマットでぐでってる。

「ロクジョー」

「はい」

「次の時間サボッていいから保健室に行け、とヒコクに伝えろ」

「イエッサー」

体育教師の判断でした。

無理は禁物だよ。例えクラスの頼みでもね。

27＋たまには環境に浸透を。

「「ガヤガヤ」」

なんかガヤガヤしてます、クラスがガヤガヤですユウヤです。たまには自分の席に着席してます、休み時間に俺が席についてるなんて奇跡だよね。……しかし自分で言うとなるとあれだ。

アサ君のクラスは今移動教室らしくって誰も居なかったんで大人しくしてるんだけど、やっぱり暇だからたまには二組の人と遊ぼう。

「誰か遊ぼー」

「「いいよー」」

あ、どっかから返事が来た。

隣の席の方からだ。

「……誰だっけ」

「「忘れんなや」」

ダブルだ、こいつ等ダブルスじゃないか！　何だい、本当に誰なんだい！！

「数週間に渡って君の隣の席の者なんだけど」

「その後ろです」

「ごめん、何も知らない」

ｏｒｚｏｒｚ↑彼等

だって二組の話ないんだもん。覚えてられる方が奇跡。

「な、名前も覚えてないのか？」

「たまに話したりしてたよな……？」

「ごめん、存在から忘れてた」

―ｌ―ｌｏｒｚ―ｌ―ｏｒｚｌ―ｌ―↑彼等

だからー、二組のモブなんて覚えてないもん。君等一体誰？

「「忘れてたのか！！！！」」

「へーん！　二組での俺の友達はアスカだけだもーん！！」

「――呼びましたか？」

おや、じゃすとたいみんぐーな感じでアスカがやっていらっしゃった。つか、今日来てたのね。アスカは俺の友達だけど、体がやわっちいのでたまにしか居ないんだよ。

「我が友アースカくーん！　久しぶりー！！　四日振りじゃないかー！！」

「そうですね、確かそんな感じです」

「でももう週末だけどね」

「はい、今週一日しか来てませんね俺」

アスカがちゃんと毎日学校来てたら俺だって毎日一組に行くなんて事しないのにー、……多分。

「ユウヤ、俺達の事は覚えてないのにアスカは覚えてるんだな」

「一日しか来てないのにな」

其処、五月蝿い。

「アスカー、身体は大丈夫なのー？」

「はい、今日は良い感じですよ。もう明日休みですけどね」

「流石はアスカって感じだよそれ。狙って体調操ってるんだろお前」

「ははははーそんな高等技術持ってませんよーははははー」

アスカが言うと胡散臭い。いつも笑ってるんだけど絶対腹の中に一物あるよ、さっすが俺の親☆友。

「……俺だってユウヤに会いたかったんですよ？　でも……このやわな身体が言う事を聞いてくれませんで……ずっと学校に来たかったのに……」

「アースーカー！！！！」

「ちょろいです」

大好きだよアスカー！　何か最後に聞こえたけど俺には聞こえないー！！！！！

「俺達毎日隣に居るのにな」

「だな」

だから五月蝿いぞダブル共。

「今日はアサキ君の所に行ってないんですね」

それを華麗にスルーするアスカも凄い。

「あー君移動教室みたいでねー。行ったけどまだ居なかったから机の上に落書きしといた」

「あー……ならそろそろ来るんじゃ――」

ガラッ

「――馬鹿兄貴出せ」

アスカがドアの方見た瞬間来た。すげ、アスカすげ。

「あー君！　俺をお兄ちゃんだと認めてくれたんだね！！」

「うるせぇ黙れとにかく机のあれ消せボケカス」

「相変わらずの毒舌ですね、アサキ君」

とりあえず面識有のあー君とアスカ。アサ君もアスカと会うのは久しぶりだから何か素っ頓狂な顔してる。

「ニカイドーだ」

「苗字じゃなくて結構ですってば」

「じゃあアスカ君か」

対人的記憶力を自主的に使わないアサ君でもアスカを覚えていた様だ。

「アサキ君も相変わらずな様ですね」

「いやいや、君の腹黒さには負けるさ」

「あれー其れは何が言いたいんでしょうね？」

そして此の二人のやり取りを見るのも久しぶりかもしれない、この何とも言えない寒気がする会話。俺入れる気がしない。

「あ、後で消すよ机のは」

「次の休み時間には消せ。――にしても、本当に久しぶりだね」

「ですね」

……おーやー？　二人で何か話に入っちゃった。何気二人って仲良いんだよな……カイト君に言ったらきっと妬くね、ふっ。

……仕方ない、この休み時間の間だけはアスカをアサ君に貸してあげよう。俺はさっきからまだブツブツ言ってるダブルのお相手でもしますかねー。

「ねぇダブル」

「「ダブルって誰だよ！」」

「君達だよ、さっきから台詞被り過ぎなんだよ！　名前もないモブの癖に！！！！」

ｏｒｚ　　ｏｒｚ　↑彼等

どんだけ繊細なのこの人達。つかここまでやっておいて未だ名前すら名乗ってないってどういう事？

「……ごめんなさい」

とりあえず謝っとけ俺。

「んでさ、名前は何なのさ」

「……同じクラスだったのに改めて名乗るとは思わなかったぜ俺」

「僕だって……」

「いいからはよせい」

グダグダ言ってると本当にモブにするぞ。

「セイカだよ」

「女!?」

「苗字だよ!!」

「ライテだよ……」

「……本名?」

「ここまで来て偽名名乗る訳ないだろうが!!!!」

此の二人の名前はまぁ……合格。……何のとかは聞かない、基本面白さだから。

「んー、駄目だ、二人共もう忘れた」

「「早いって!!」」

「だから被んなよ!!!!!」

ムカつくから!!!!!

――キーンコーンカーンコーン

あ、授業が始まる。

……何か下らない休み時間だったなー……。

「「酷い」」

「うるせ」

28＋たまには家から出てみよう。／前

ズルズルズルズル

決して何かを食べてる訳ではありません。寧ろ歩いているんでね。

アサキです。

「ふへー」

「……」

ズルズルズルズル

「あはー」

「……ユウヤ」

「ふへー？」

「自分で歩け」

何か……人の後ろから全体重かけて引っ掛かってる人が居るんですが。その人の足がズルズルズルズルしています。まぁ、ユウヤですけどねそりゃ。

「疲りたのさー」

「お前僕より体力あるだろうが」

何が疲りたーだ。
僕達はただ今とある家に行く最中。まぁとあるって言ってもカイトの家なんだけど。離れてくれないかな、人目があるんだから離れてくれないかな。

「もう着いたー？」

「自分で確認しろ」

重い、助けて。
というものの、着きました。カイトの家まで我が家より徒歩十分程。幾らユウヤかついで――と言うより引きずって――たって着きますよ。

ピーンポーン――

『はーい』

中からそんな声がして、カイトが登場――と思いきや。

「ありゃ、アサキ君」

「あ、おねーさん」

「やだー！　ウミって呼んでって言ってるじゃなーい☆」

という訳で、カイトのおねーさんのウミさんでした。

「やーんお久しぶりねーアサキ君。……と、その寄生虫は？」

「僕の双子の兄」

僕はその寄生虫を引きはがしつつ家の門を勝手にくぐる。

「あーアサキ君双子なんだって言ってたもんねー。私初めて会うけど……やっぱ似てるわねー」

そりゃ双子ですから。

「何をぅ！　俺はアサ君みたく根暗じゃないやい！！　第一こんなに目付き悪くないもん！！！！」

「シバくぞ」

「あらー、中身は正反対みたいねー」

ウミさんは相変わらず笑顔だ、つかカイトを出してよウミさん。

「始めましてアサキ君のお兄ちゃん君？」

「始めましてカイト君のお姉様！！」

「やーんお姉様だなんてかーわーいーいー！！！！」

「ぎゃ！！」

あ、ユウヤが抱き着かれた。まぁウミさんは基本抱き着き魔だから構わないんだけど、僕に害ないし。

「アサきゅん助けてー！！！！」

「きゅんゆーな馬鹿ユウヤ。いいじゃん、女の人だぞ」

「ユウヤ君って言うのかなっ！？　アサキ君も可愛いけどユウヤ君も可愛いー！！！！！」

この人に羞恥心は無いんですかね、会う度に思う。一つ確実なのは彼女とユウヤが同じ部類なのだという事で。……でカイトを出して下さいよ。

「――だァーッ！！！！」

叫び声。おや、この声は――

「ねーちゃん家の前で何弟の友達の兄弟に手ェ出してんだよ！！！！」

――勿論カイトであって。

「あ、カイちゃんお帰り」

「あ、ただ今。――じゃなくてねーちゃん！」

「カイト君所詮俺は君の友達の兄弟だったのかい！？」

「や、もう友達だけどさ？　――でもなくってユウヤ！！」

「僕は貴様の友達になった覚えはない」

「グレるぞ――でもなーい！！！！　馬鹿！　馬鹿アサキ！！」

ごめん、ちょっと弄んだ。にしても僕だけ酷くない……？

「ねーちゃんユウヤから離れろよ！　誰も居ないからって何してんだよー！！」

何やら買い物帰りルックなカイト。買い物行ってたから居なかったのか、つか自分から誘っておいて買い物に行くなよ。

ウミさんは渋々ユウヤから離れると、家の中に（やっと）通してくれた。珍しくユウヤぐったり、何というウミさん効果。

「ゆっくりしてってね～」

そう言って去って行ったウミさんだが、また来そうで怖い。

「カイト君、あんな強烈な隠しお姉様持ってただなんて……！！！」

隠し玉みたく言うな。

「隠してないけど。ねーちゃんが居る時にユウヤが家来た事なかっただけだろ？」

「そうとも言う」

そうとしか言わん。

「でも良いな～、俺もお姉ちゃん欲しかった……」

「その台詞マヒルが聞いたら泣くよ」

俺男に生まれてきてごめんって言い出す確率ざっと百二十％。

「良いじゃんかよーマヒルお兄さん。マジ格好良いじゃん！　俺は兄貴が欲しかった……」

「お姉ちゃんお姉ちゃんでごめんねカイ君……」

「「うわぁ！！！！」」

――なんてウミさんなら言うんだろ――って実物が居た。いつの間にか居た。

「お姉ちゃんいつかお兄ちゃんに慣れる様頑張るからね！」

「頑張らなくて良いからねーちゃん！！　ねーちゃんはねーちゃんのままで居て！！！！」

そんな力強く頑張るとか言われても、結果が悲しくなりそうで嫌だよな。というか何時も思う事を一つ言うと、学校でんなはっちゃけてるカイトがツッコミに回らなくちゃいけないこの環境……大変過ぎる。

そして、結局そんな感じで何をしようか試行錯誤。

……え、続きもの？

29＋たまには家から出てみよう。／後

「暇なら姉さんが遊びをひとつ授けよー」

ゲームをやりつくして漫画を読みつくしてやる事なくなってしまった僕等にそう言ったのは勿論――ずっと横でニコニコしていた――ウミさんでした。ちは、引き続きアサキです。

「命令ゲームって知ってる？」

あー……“命令”って言ってから言った指令は命令にちゃんと従って、“命令”って言わなかった指令に従っちゃいけないってゲームか。懐かしー。

「暇だしやるか」

「「おー！」」

こんな覇気のある掛け声こんなしょぼいゲームでは初めて聞いたよ。

「カイト君命令！　右手を上げよ！！」

「ういさ！」

カイトがピッと上げる。あー、楽しそう楽しそう。

「命令！　左手挙げぃ！！」

「ほぁあ！！」

何故掛け声が本気なんだ……？

「命令！　アサ君を蹴り飛ばせ！！」

「とー！！！！」

「は？」

「――りゃー……俺の負けだ」

は？　って言っただけなのにカイトが負けた様だ。まぁ、カイトに僕を蹴るだけの度胸は無いからな。

「ふっ、勝ったぜ」

「ずるいぜユウヤ！！　んなのお前なら出来るのかよー！！」

「そんなの無理に決まってるじゃないか！！！！」

無理なのかよ、弟くらい蹴れる度胸を持てよ。

「よし、ユウヤとアサキで決勝だな」

「待てカイト、僕は何故シード選手なんだ」

「だって強そうだもん」

ああそう。

「ふっ、アサ君や、今日こそ俺が勝つ！！！！」

ユウヤがそうやって毎回負けている様な台詞を吐くと、僕に命令の権利を譲ってきた。……こんな面倒なゲーム、とっとと終わらせるぜ。

「命令」

「おう！」

「死ね」

「すとーっぷ。ディープ過ぎるのは禁止」

ちっ、駄目か。

「命令」

「おう！」

「この世から消えろ」

「すとーっぷ、遠回しだけど同じだから駄目です」

たるい。もう辞めたいんだけど。

「右手挙げろ」

「おう！」

馬鹿が。手を挙げやがった。

「あ、ユウヤの負け～」

「ふぇ？」

「ユウヤ君ユウヤ君、アサキ君は命令って言ってないよ？」

「あ」

他に気を引かせるのなんて初級中の初級だろ？

「あー君ルール把握し過ぎだよ！！」

「まぁね」

「あーあ、もう終わっちゃったぜー」

それもそーさな。終わっちゃったし……どうしますか……――

「皆ー、お姉ちゃん今から夕飯を作ろうと思います。アサキ君とユウヤ君は食べていきませんか？」

――と、ウミさんが立ち上がってのそんな発言。

家は誰も居ないから基本自由にするんだけど……――

「どする、ユウヤ」

「ウミさんの料理っておいし？」

「絶品」

「じゃあ食ってこう！！」

ユウヤ、僕がまずいって言ったらどうしたんだ。

「俺ウミさんの料理手伝いまーす！」

「あら、ユウヤ君手伝ってくれるの～？　ありがと～！！」

「ぎゃー！　分かったから抱き着かないでー！！！！！！」

「……アサキ、泊まってけ」

「のつもり」

ウミさん、優しいけど恐るべき。

そして僕等は本当に花より団子だな。

30＋勢い余って止まらない。

「アンタがいけないのよ！！」

「別に僕何もしてないし」

ユウヤです、いつも通り一組に遊びに来ましたら何やら騒ぎが起きている様子です。

「どうかしたんですかね……？」

あ、今日はアスカも一緒に。

「アンタが其処に居たからモモが避けられなかったんでしょ！？一言くらい謝れないの！？」

「そんな理不尽な理由でいちゃもん付けないで欲しい。君が此のクラスで鬼ごっこじみた遊びをしていたのがいけないんじゃないかな」

「休み時間に遊ぶ事の何が悪いって訳！？」

「り、リョウちゃんもう良いよ……アサキ君だって悪気があった訳じゃ……」

「モモ！　何であんたはそうなのよ！！　私だってねぇ――」

「すとーっぷ！」

「ぐはっ！！」

何か波瀾万丈な雰囲気だったので乱入してみました☆
言い合っていた女の子とアサ君の間――に飛び込む勇気はなかったのでアサ君にダイブ。

「ちょ、ユウヤ……アサキ君が……」

「なーになに、何揉めとんの？　お兄さんも混ぜてぇな」

「退け、エセ訛り」

「あんた達何なのよ！！」

そりゃそうなりますよね、いきなり喧嘩吹っ掛けてた相手に変な加勢が現れたら。

「君がいちゃもんつけてるこの子のおにーちゃんです」

「そのお友達Ｂです～」

Ａが気になる所だよね！！

「離れろってったの聞こえなかった？　おにーちゃん？」

「ふぉあ！！！！　アサキ待つ！　そのまま一本背負いの勢いで持ってかないでよ！？」

「あはは～、そのまま頭打てば少し頭良くなりそうなもんですよね」

「ア・ン・タ・達！　人を差し置いて話してるんじゃないわよ！！
私は怒ってるの！！」

「リョウちゃん、良いってば～……」

「僕は眠い」

「俺は寒い」

「俺は疲れましたね」

「話を聞けー！！！！」

このままじゃなんか理不尽に可哀相なので話を聞いてあげる事に。

「そいつが――」

「ヒコクアサキです」

「……ヒコクアサキがモモを転ばしたのに一言も謝らないから怒ってるのよっ！！」

「……あー君この子転ばしたの？」

「勝手に転んだだけだっつの」

「そ、そうだよリョウちゃん、私自分で転んだだけなんだからアサキ君は悪くないよ？」

ふむ、そんだけの話なのか。見た所こっちのモモちゃんって子は

一組の子だね、たまに見かけるし。そしてこっちのリョウちゃんとかいう子はー……三組の子かな……一、二組で見た事ないし。昼休みに走り回っていちゃもんつれられましたー……な訳ですね。

「アサ君、そういやカイト君は？」

「出席停止、インフルエンザ」

あの人何に対しても免疫皆無だよね。

「でさ、君はアサ君にどうして欲しい訳？」

「モモに一言謝って」

「嫌だよ、自分に非がないのに何を謝れって言うんだよ」

「だ、だからリョウちゃん、私アサキ君を勝手に避けようとして勝手に転んだだけだから～……」

モモちゃんが必死にそう言うのに、リョウちゃんは聞いていないみたいで。うーん、アサ君も一言謝っちゃえばいいのに……なんて言ってもそういうの無理な性格してるのは知ってるんだけどさ。

「あんたがあんな所に不用意に立ってたからいけないんでしょ！？」

「あんな所って、親友の席の近くに立ってて何が悪い？」

「だ、誰も座ってなかったんだからその人来るまで席で待ってれば良かったじゃない！！」

「聞いてなかったかな、出停になってる親友に届ける為に机の中から配られたプリント取り出そうとしてたんですけど？」

「そ、そんなの放課後やりなさいよ！！」

「昨日其れやってプリント忘れたから早めに対処した僕は間違いだったかな？」

「ま、ま、間違っ……てないわよ……」

アサ君強い。てかカイト君を親友呼ばわりしてる事をカイト君に伝えてあげたい。

「も、もうリョウちゃんってば！！　アサキ君はこう見えて良い人なんだからこの辺にしとこ？」

「駄目よ！　だってモモ、足怪我したのよ！？」

擦り傷ね。

「第一、こんな鋭い目した、いかにも冷静沈着で真面目そうで、下手すればちょと根暗入ってる――性格酷そうな奴に負けたくないわよ！！」

――おーっと、お兄ちゃんの地雷ひとつ踏んだ。

「モモが怪我したのに――」

「ちょーっと待とっか、リョウちゃん？」

「――な、何よ……？　てかあんたいつから人の事名前で――」

「何を根拠に、アサキの性格酷そうとか言ってるの……かな？」

ザワッ

空気が止まる。何故かな。俺はいつもの表情を崩さない様にしてるつもりなんだけど……な？

「そ、其れは……」

「外見だけで人を判断して、其の人に何があったのか知らないのにそんな言葉を発して、自分が何かを守ってるから何言っても良いと思っちゃってる困ったちゃんなのかなぁ？」

「ユウヤがキレたみたいです」

横でアスカが何か言ってるけど、何も聞こえない。てか止められないから止めないよ？

「アサキが性格酷そう？　そんな人が友達の為にプリントなんか届ける？　第一、其の君が守ってると思ってるモモちゃん？　其の子

の話も少しも聞けない君が、アサキと対等に話せると思ったら大間違いだからね？　こんな所に――飛んだ偽善者が居たもんだ」

「――！！」

パァン！！

弾ける音。何が？　俺が。

誰かに叩かれた、誰に？　女の子、モモちゃんに。

何処を？　頬を。

その音がしたのは、リョウちゃんが泣き出す瞬間とほぼ同時だった。

「――リョウちゃんを傷付けたら、私、許さない」

「……」

辺りが静かだ。音と言えば、リョウちゃんが「そ、れは……私……」と呟いてからひっくひっくと喘ぐ音のみ。後はモモちゃんが一回だけ「リョウちゃん、ごめんね？」と呟いた声。

……俺は何をしてんだろ――

「ユウヤ」

「ん、何アサく――」

バキッ！！

ひゅー

ドカッ！！

はい、俺がアサ君に蹴り飛ばしを喰らった効果音三連打。いや、真面目に痛い。

「何やってんだ、テメェは」

「だって、アサ君を――」

そんな会話を始めようとする中、ドアまで吹き飛ばされた俺の横をすり抜けて――リョウちゃんが教室を出て行った。

「待ってよリョウちゃ――」

そう言って追い掛けようとしたモモちゃんよりも先に彼女の後を追ったのは柄にもなく――我が弟で。

私最悪。

あの、ユウヤって奴は悪くないのに。アイツが言ってたの、全部正論なのに。泣いたら相手が悪役になっちゃうのに。其れだけなら未だしも、その空気に堪えられなくて、教室出て来ちゃった。誰にも見られたくないから人の居ない所探して、こんな所まで来ちゃった。

此処は――非常階段、かな。

「何してるのよ、私」

「――カトウリョウコ！」

ふと振り向いた。泣いた顔なんて誰にも見られたくないけど、やっぱり名前を呼ばれたから。でも、そこに居たのは……え、ヒコクアサキ……？　何で私の名前……？

「な、な、な」

「おま……ッ……走り過ぎだ……。どんだけ……走りゃ、済む……」

滅茶苦茶息切れしてる。体力ないのねコイツ。まぁ根暗っぽ――だから……何で外見で決めるのよ私……駄目だって分かってるのに。いや、分かってないからこうなったのかな……。

出来ればもう――彼等と関わりたくないのに。

「ユウヤがごめん」

「――は？」

息を整えるなり、ヒコクアサキはそう言った。そして手に握り締めていたハンカチを私に差し出して停止。

「あいつ、ああなると酷い事とか止まらなくなるから」

「べ、別に……悪いのは私だから、あんた等が気にする事じゃないでしょ……」

「気にする事だろ！！」

反響。階段に反響するヒコクアサキの声。

何よ……そんなに叫ばなくったって。

「あいつはあんたを傷付けたから。だから、謝らなくちゃいけないけど――あいつは謝んなくて良いと思ってる」

だから僕が謝るんだ――と、よく分からない理屈を述べて、ヒコクアサキは小さく微笑んだ。

……何よ、よく分からないわよ……でも……、

「……ありがと」

「どう致しまして」

――あいつの言う通り、コイツ、酷い奴なんかじゃない。

キーンコーンカーンコーン――

その時、始業のチャイムがなった。やば、授業が始まった!!先生に怒られちゃう――

「あ、……まぁ良いや。ええと、カトウ、……一緒にサボる?」

――けど。

「……そーね、何か、アンタが倒れたとか言ってサボりましょ」

けど、ヒコクアサキの悪戯っ子みたいな笑顔見たら、もう少しコイツと話していたいと思っちゃった私は――

31＋来ちゃいました。

「う、ううう……」

「り、リョウちゃんどうかした……？」

どうしよ、来ちゃった……。

こ、こんにちは、昨日はお騒がせしました、リョウコです。皆からはリョウって呼ばれてます……ううう。

「リョウちゃんが行こうって言ったから来たんだよ……？」

「わ、分かってるわよ……？　でも、心の準備ってもんが……」

今、幼馴染で親友なモモと、ある一軒の家の前に立っています。表札には――“緋刻”という文字が。

「リョウちゃん、アサキ君にハンカチ借りて、返したいからって……」

「う、うん！　明日でもいっかなとか思ったけど、こういうのは……早めの方が……」

私は小さな袋に入れてあるハンカチを見た。昨日帰ってすぐ洗ってアイロンをかけたハンカチ……ま、まぁ借り物だからこれくらいは当然よねっ！！　いちいち二組の友達に聞いて家まで来たって当たり前よねっ！！

「――リョウちゃん可愛い」

「何か言った？」

「ううん、何も」

何でもいいわ、もう五分近く此処に居るんだもん。早くこのインターフォンを押して返して帰るのよ、私！

「じゃ……いくわよ……？」

「うん」

「……」

よし、押すわ、押すのよリョウコ！！　こんなちっぽけなボタン、私に押せない訳ないじゃない！！　さぁ！！

すぅー……はぁー……（※深呼吸）

「リョウちゃん、深呼吸って心を落ち着ける方法としては間違ってるらしいよ？」

「え、そうなの？」

「うん、テレビでやってた」

うわー、知識が増えたわー。――じゃなくて！！

よし今度こそ――

ガチャ

「行ってくるー！」

「「あ」」

「え？」

扉が開いた、私は未だ押してないのに。しかも其処に居たのは違う方。

「ヒコクユウヤだわ」

「だね」

「……」

間。

「えーっと――ごめんなさい！！！！」

バタンッ！！

「「……」」

えええええええええ！！！！

「ユウヤ君、昨日からずっとあんな感じなの。私見る度謝ってきて……謝るのは私なのに……」

それじゃあ二人でずっと謝り詰めじゃない！！　……其れは其れ

でとても面白そうだから見てみたかったわとか思ってないんだからね？

「とにかく、どうする？」

「どうしようか……」

少し考えていると。

ドタドタドタ

『ちょ、待て、押すな、こける』

『いーから！！　きっとアサ君に用があると信じたい！！』

『願望じゃねぇか』

ドタドタドタ

と中からこちらに走って来る音が斑（まだら）に聞こえる……。――えぇ！？　ヒコクユウヤの奴ヒコクアサキを連れて来ちゃったの！？　待ちなさいよ！　私まだ心の準備が……！！！！

ガチャ

「「あ」」

「り、リョウちゃん……？」

ヒコクアサキと私が同時に相手を見つけて一言。

扉のノブを持ったまま固まるヒコクアサキとその後ろで隠れてるヒコクユウヤ。

「どうしたの」

「うあ、えと……」

どうした私！　何時もの私らしく！！　はっきりズバッと物申すのよ！！！！

「……」

「――こ、これ返しに……ねっ？」

私はどこの乙女だぁあああああ！！！！

小さく微笑む様に私はヒコクアサキにハンカチを差し出す。いや、まぁこんなでいいのよ。渡せればこんなだって！！！！

「嗚呼……んなの明日で良かったのに……」

「“思い立ったら祝日”よ！」

「リョウちゃん、今日祝日じゃないよ……？」

「今日日曜日じゃなかった？」

「ラン、ユウヤ、そしてカトウ、それを言うなら“思い立ったが吉日”……だ」

ちょ、間違えた！　てか頭良いなコイツ！！

「と、とにかく返したんだからね！　後、ヒコクユウヤ！」

「は、はいリョウコ様！」

「様は要らない！　アンタは私に正しい事をしたんだから謝らないで！　次謝ったら今度は私が直々に殴ってやるんだから！！！！」

「分かりましたリョウコ様！！」

だから様は要らない！　敬礼するんじゃないわよ！！

「ちなみに私にも謝らないでねユウヤ君、私が、叩いちゃったんだから……」

「う、うん、分かった……」

そして私はすぐにその場を去――

「カトウ」

――れず。

「な、何？」

背を向けて、すぐに去ろうとした私を呼ぶ奴。ヒコクアサキ、あんたは一体何なのよ！！

「わざわざありがと」

……あ。

「あ、あ、あ……当たり前の事をしたまでなんだからね！！！！」

「え！？　ちょっと、リョウちゃん待ってよ～！！」

モモの言葉を聞く事なく、私はついダッシュした。な、何なのよリョウコ！！　何があったのリョウコ！！

私はそれが分からないまま、とりあえず家までダッシュした。

一方。

「アサ君」

「ん」

「リョウコ様――じゃなくてリョウちゃん、完璧に……ううん、何でもない」

「何、……そういえばユウヤ、お前アスカ君家行くんじゃないの？」

「……行く気ってか気力ってか無くなっちゃったからいいや。突撃するつもりだったんだけど」

「そ」

いつまでも平凡なヒコク家があったりする。

32＋日常会話。

「アンタ、何読んでるのよ」

「本」

「知ってるわよ！」

「戯言」

「酷い言い草ね……」

こんにちは、始めましてモモです。最近私は一人席に着いてニコニコしている事が多くなりました。何故かっていうと――

「……で、何？」

「な、何でもないわよ！　唯一人で何やってんのか見に来ただけ！悪い！？」

私の唯一のお友達、リョウちゃんが青春真っ只中だからです。本人はまだ無自覚みたいだけど。アサキ君……ロクジョーが来てないから一人なんだね。私は何時も一人なんだけど……リョウちゃん以外話す子居ないし……今度のスキー林間どうしようかな……。……じゃなくて。

「……ヒコクアサキ、あんたスキー班何班な訳？」

「何で」

「質問を質問で返すなんて感心しないわよ！」

――リョウちゃん可愛い。

二月に控えたスキー林間の班をアサキ君に聞いているらしいんだけど……一緒のにしたいらしいよ……アサキ君運動神経あってもガラスのエース（※体力が続かない）だから普通だからαくらいじゃ……――

「S」

「ランク高ッ！　流石に私はそこは無理よ！！」

「一緒じゃなくて当たり前でしょ」

「し、知ってる……わよ」

あ、リョウちゃんシュンとした。そんな所も可愛いなぁ……私は何処のお父さんなんでしょうか。

「僕だって本当はαにしたかったんだよ」

「じゃあどうしてよ？」

「提出の書類にユウヤが勝手にSって書いてもう提出しやがった」

「アーサーくーん！　あっそびーましょー！！！！」

凄いバットタイミングでやってきたユウヤ君、君にKY（死語）

で賞を授けます。
　リョウちゃんは案の定ユウヤ君を睨んで胸倉掴んでガッとなって私はあははって感じで……すみません、心の中だからって調子乗りました私。

「えぇ！？　な、何ですかリョウちゃんさん！？」

「ええい、ちゃんにさんを付けるんじゃない！！　何故アンタ達はそんなに運動神経が良いのよ！！！！」

「ごめんなさい！」

つい謝っちゃってるユウヤ君、君は悪くないと思うよ……？

「んー、S……僕疲れて疲れるかも」

「あー君、それは疲れてしかないね」

うー、私も会話に混ざろうかな……でも、混ぜてくれるかな……でも私なんかが入っていいかな……。

「モモさん、こんにちは」

ふぇ？

「こ、こんにちは……」

「こちらにいらして一緒に話しませんか？　そこに居ては一人でつまらないでしょうから」

「……うん」

ニコッと笑ってそう言ったのは、確かユウヤ君のお友達のニカイドー君。とても紳士的な人……私が混ざりたがってたのに気付いてくれたのかな……？

「ねぇ！　何で!?　アンタ達って運動神経良過ぎない!?　そう思うでしょももも!!」

「ふぁ？」

ももも？　……あぁ、モモもか。こんな名前でごめんなさい。

「うん、ユウヤ君もアサキ君も凄いよね～」

「アサキ君の体力持続時間、保っても最近は六分ですけどね」

「アスカ君、自分でも分かってるから言わないで、其れでも延びたんだから」

体育とかって男子の見れないから残念。とっても面白そうだもん。

「僭越ながらお聞きしたいのですが、モモさんとリョウコさんはスキー班どうなさるんです？」

ニカイドー君がよく分からない難しい言葉を使いながら聞いてくれた、馬鹿でごめんなさい、せんえつって何？

「私達は無難にαかしらね……」

「その方が良いと思うよリョウちゃん。ニカイドー君は……？」

「俺は……行けたらβです」

――え？　行けたらって……？

苦笑して言うニカイドー君に私は聞きそびれてしまったけど……

何でだろう、行けないのかな……？　……まぁいいか、私なんかが心配しても仕方ないもんね。

「ロクジョーカイリは？」

「カトウは何で皆フルネーム呼びなんだ……？　カイトは勿論Sだろ」

だよね、一組切っての運動馬鹿……馬鹿って言ってごめんねロクジョー君。

「あら、ニカイドーアスカβ一人？」

「いえ、二組の方が居るんでご心配なく」

「べ、別に心配はしてないわよ」

リョウちゃんは基本優しいからね……素直じゃないけど、そんなリョウちゃんだから良いんだよね。……だから私は何処のおじさん？

「つか、スキーの話ごときで盛り上がるな、僕の席の周りで」

「如きとはなんだアサ君！　神聖な林間学校なるぞ！？」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ二人を見ると、たまに本当に双子なのか疑問に思うんだよね……。こうやって話す様になったのは数日前だけど、似てるのに似てないアサキ君ユウヤ君兄弟。

絶対一旦足して二で割った方がいいと思うな。……こんな事言ってごめんなさい。

「はーい、授業始めますよー」

あら、もうそんな時間……？

教壇に居たアヤメ先生が手を叩いてそう合図、次は国語か～。

「やば、じゃあ私戻るわ、じゃねモモ」

「うん、じゃあね、リョウちゃん」

「ほらほら、隣に戻りますよー」

「うがー！　未だアサ君との勝負がー！！！！」

「次の数学でくたばれ」

ニカイドー君にズルズルされて行くユウヤ君。それにしてもアサキ君って凄く口悪いよね……。ごめんなさい。

こういう人って私余り得意じゃないんだよね……怖いから……でも――

「ほらラン、授業始まるから席戻れよ、アヤメ先生に笑顔で怒られるぜ？」

こうやって悪戯っ子みたいなアサキ君なら。――大丈夫だね、ほ

ら、全然怖くないから。

「うん、それじゃあまたね」

「おう」

少し、人付き合いが好きになりそうな予感。

33＋クラスに一人は居るよね、こういう奴。

ふっかーつ！　オス、オラカイリ！！　インフルエンザなんぞという菌にやられて学校を休んでいましたが、とうとう復帰☆
ふっふっふー、俺様が居ない間孤独なロンリーボーイ（※訳：孤独な孤独少年）が淋しがっていたはずさ！　そろそろ他人なんて言ってるアサきゅんも素直になるだろうなー！！！！

――というはうはな夢を見ていたらあっさり寝坊して三限目から登校。馬鹿って言った奴手ェ挙げろ。

「おっはー☆　俺様復活！」

「あ、カイトだー」

「本当だー、強い癖に休み日数半端ねェカイトだー」

うるせぇモブ共。ナイーブなカイリ君の身体は病に侵されやすいんだよ！！！！　つか俺はカイリだ、覚えとけ！

「モブじゃないよ！　俺チアキだよ！」

「知らん、俺が知っているのはチアキはチアキでも下っ端二等兵だけだ」

「俺だってモブじゃな――」

「五月蝿い一等兵」

所詮はモブなのさ、悔しかったら名前を貰え名前を。
一等兵――苗字何だっけ？

「畜生……何時か俺だって名前を……」

「軍曹なんて苗字すらないんだ……」

「ハルナ貴様気にしてる事を！！！！」

何やら友達同士の揉め事が勃発してるみたいですがスルーしてっと。
我が親友の元へ急ぐぜ☆　――と、思ったら。

「でもアサキ君って何でそんなに元気ないのかな……？」

「や、元気はバリバリだよ、僕バリバリ元気」

あっるぇ？　何かアサキが女の子と話してるー？　つか俺の席に座ってるー？

「ちょ、ちょちょちょ、アサキや」

「……やあ、赤の他人」

「それ久しぶりに聞いた！！」

未だ言うのかこの根暗ロンリーボーイは！！！！

「あ、あ、ごめんなさいロクジョー君、席を私なんかが借りちゃっ

て……直ちに退くからね？　ごめんなさい」

「いや！　構わねぇよ！？　何故そんなに平伏しの如く去って行くのかな！！」

「あーあ、カイト君が女の子泣かせたー」

やーん、俺としたことがー……

「って、違うがな！」

「心の中のボケにツッコまれても」

「アサキよく気付いたな」

少し見ない内にアサキが成長している、カイ君びっくり。……誰だそりゃ。

「とにかく！　別にまだ休み時間だから座っててていーって！　……えーっと、みだれ……」

「苗字、それじゃあ訓読みです……音読みでお願いします」

「あ、ごめんなさい」

正直特に面識ないから覚えてないんだよな……ラン……だっけ。

「じゃあ名前で呼ぶわ。……で、何故アサキとモモが一緒にお話を……？」

最初に抱いた疑問をやっと吐き出せた。アサキとモモに接点なんてこれっっっっ（※中略）っっぽっちもなさそうなのに。

「私のお友達のおかげで、少し話をさせて貰える様になりました」

「モモのお友達？」

――居たの？

「今心に抱いた言葉を無闇に口にしない方がいいぞ。ランのそのお友達が貴様に報復に――」

「分かった！　分かったから怖い事言わんといて！！！！」

「？」

アサキが妖しくふふふふとか笑いながら言うから実に怖くなったぜ！　モモが気付かなくて良かった！　つかそのお友達が怖ぇ！！

「嗚呼、カイトって大事な時に居ないよね」

「え、何かあったの？　楽しい事？」

「強いて言うならば騒ぎ」

「しくった！」

俺を差し置いて騒ぎだと！？　何だその楽しそうな事！！

結局退いてくれたモモが座っていた我が椅子に座り落ち込む俺。
ちきしょー。

「そ、そこは落ち込む所なのかな……？」

「カイトにとっちゃな、馬鹿だから」

ちきしょー、アサキ達が何か言ってるけど聞こえないー。

「馬ー鹿」

「何だと！」

「聞こえてるんじゃないか」

「ちきしょー！！！！　インフルエンザの馬鹿！　俺の楽しみを帰せ！」

「寧ろ死ななかった事を喜べよ、今年のは色々危ないらしいぞ」

「あー、お医者先生が言ってた。……あ、そして聞きたい事を思い出した。その病院の先生がさ――」

「ふ、二人とも！」

いつの間にか世間話化していた俺等に頑張って割って入ったモモのちょっとした大声。ん、何だい。

「次、化学室……」

「「……あ」」

移動だったそーな。――だったら早めに言って……！　しかしこれも口に出しちゃいけない気がしたのでやめとく。

後一分程だけど、結局遅れました、だってアサキ走らないんだもん。まぁいいや、ただいま学校！

――あれ、何かをアサキに聞きたかったんだけど……忘れたからいっか。

３４＋誰しも飽きる。

『次にスキー研修中の注意を、キクカワ先生から――』

暇だ。

……あ、すみませんアサキです。午後の授業使ってスキー林間に向けての集まりが暇なんだよ。

マイクからの響く五月蝿ぇサクライ先生の声。前の方に居る俺としては、んな怠そうにやるなら司会なんてやらなきゃ良いのにと思う。

『ではスキー研修についての話を私の方から――』

「ねぇアッサム君」

「誰が紅茶だよ」

体育館に集まるとなるとともかく隣に居る我が兄ユウヤ。隣女子列なのにそこに乱入してくる辺りが五月蝿さを醸し出していると思うよ、僕。

「アッサム美味しいよ」

「知ってるよ」

「じゃあ何が不満なんだね！！」

「紅茶じゃないからだよ」

『生徒静かに』

叫ぶなよ。サクライ先生がこっちに目だけ笑ってない笑顔を向けてるじゃないか。

「……んでさ、アサ君」

「何だよ。寧ろ後で聞くから列戻れ」

「嫌ーよ、アスカの居ない列なんてゲームを失った休日のアサ君だよ？」

あー、そりゃつまらん。って、何で例えが僕なんだ。そして久しぶりにアスカ君が休みな様だ、んー、暫く来ない予感。

「スキーまで一週間切った訳ですし、持ち物準備しなきゃだね！」

「それはそーだ、ゲームの充電ＭＡＸにせんと」

「……持ってく気なんだ」

『くれぐれも節度ある持ち物を――』

キクカワ先生め、丁度そんな注意を。

「俺はとりあえず父さんに言っておやつ代を貰――」

「また父さんかよ、父さんだってそうはくれな――」

「――いました」

「過去かよ」

コイツ本当に早いな動きが。

「がっつり五千円」

貰い過ぎだろ、あげすぎだろ。僕と分けたとしても多いよ。

何より清々しい顔で親指を突き立ててるユウヤうぜぇ。

「これでスキー中何も困らないね！」

「お前の心配は餓死だけ？」

『生徒喋るな』

おっとサクライ先生怖ぇ。先生達の前だからってクール装ってるつもりだろうが、安心して下さい。目が据わってますから。

「アサ君しーッ！」

「確実にお前だ下衆」

声を潜めて言われたって俺は騙されんぞ。

『インストラクターの人の話をよく聞いて――』

キクカワ先生、気持ちこっち向いてるのは気の所為でしょうか。

僕を馬鹿ユウヤと同じ目で見ないで、お願いします、僕この馬鹿と

は全然似てないんだから。

「うーむ、キクカワ先生話長い」

「聞いてないのにそういう事言っちゃうんだ君」

流石の馬鹿兄貴。それをキクカワ先生の前で言ったらお前の成績は確実に降下するだろうな。

『――では終わります』

――と、本当に話終わりやがった。

――余談。

「じゃ、帰ろー。今日ご飯何がい？」

「グラタン」

「そんな手間かかるもん要求しないでよアサ君」

「……軍曹」

「何だ、一等兵？」

「何故あの双子はあそこまでマイペースなんだろうな？」

「……参謀と派遣だからだろ」

――他人から見れば、充分似てるという扱いを受けているヒコク兄弟でもあった。

35＋突撃☆お宅訪問。／前

「抜き打ち☆大調査ー！！！！」

はいごめんなさい、アサキです。兄が騒いでごめんなさいアパートの皆さん。

「アサ君ったら何黙りこくっちゃってるのさー！！！！」

「お前が五月蝿いんだよカスが」

むー、と膨れて黙るユウヤを他所に、僕は二階建てのとあるアパートを見上げる。

ただ今僕等は隣県某所のアパートの前に居ます。誰の住む場所かと聞かれれば、他でもない我がもうひとりの兄であって。

「今日は暇だからマヒル兄の抜き打ち調査に来たんでしょ！　もっと張り切ろうよ！！」

「暇な時点でもう駄目な気がすんのは僕の気の所為か？」

と言う訳で、正月終わってそそくさ帰って――え、帰ったの知らなかった？――次春休みまで帰って来ないマヒルの家に突撃訪問する事にした双子の気まぐれ企画。……何してんだろ、僕等。

……ユウヤがノリノリだからまぁいいか。

「つっても鍵は？」

「大家さんに借りればいいんじゃん」

自由だな。

そして本当に鍵を借りたユウヤがマヒル兄の部屋まで前進。無駄な行動派だ。

確か、兄貴は二階の――あった。雑に書いた風なのに上手い兄貴の字で“緋刻”と書かれている。

「がちゃりんぬ」

変な効果音は要らん。ユウヤが鍵を開けて僕等は中に入る。……うーん、流石１ＬＫ、まずまずの広さ。つかマヒルにゃ勿体ない。

「マヒル兄、こんな良い部屋に一人暮らしだと!?　なんつー嫌味だ大学生の分際で!!」

「まぁ、金はあるからな」

うちだもん、大学くらいの金はありますよ。

「金ばかりの問題ではない！　一人暮らしにテレビなんていっつもったいない!!!!」

英語にするならちゃんと発音しろ。つかユウヤ五月蝿い、此処恐らく防音じゃないよ。

「ちきしょー!!」

ぼすん。

ユウヤがベッドにダイブしてじたばたしている。そんなに羨まし

いのだろうか。一人暮らしなんてかったるくて僕には無理だと思うよ。

「ユウヤ、何時まで居るの」

「マヒル兄帰って来るまでー」

「え、今日あいつ夜までバイトだって……」

さっき電話して確認したじゃないか。そんな時間まで居たら夕飯とかどうするんだよ……？

「いっそマヒル兄にたかろうぜ！」

「一人暮らしの大学生になんて負担を与えるんだ」

「まぁ良いじゃん」

「まぁ良いけどさ」

と言う訳で、マヒルが帰って来るまで僕は本でも読みますかな。

カンカンカン――

「およ」

階段を登る音。帰って来たか？

ガチャ、ガチャン

ユウヤが（何故かまた）締め直した鍵を開ける音。やはり兄貴だったらしい。先ずどんな反応をするんだか――

「ふー、やーっと着いたー」

――あれ？

「あれ」

「……」

「あ？」

ユウヤ、僕、そしてマヒルと同年代の――誰か。

「「――……誰？」」

髪を金糸に染めた大学生程度の誰かに僕等は言った。マヒルの部屋にやってきたこの人は一体――？

あ、続くんだ。

36＋突撃☆お宅訪問。／中

「はっはっはそーかそーか！！！！」

「そーだそーだ！！！！」

はいまたまたこんばんは、アサキです。ただ今人の部屋で叫びました二人は前者が金糸青年、後者が黒髪若干茶髪少年です。嗚呼、後者はユウヤな。

「いんやー、マッヒーに弟居たのなー！」

「居るぞ！　マッヒーにゃ弟の一人や二人居るっつーんだ！」

「そっかー、マッヒーにゃ居るのかー」

――会話がカオスティックバイオレンス。

あ、意味はない、適当だから。

出来事は数分前に遡ります。

――

『『誰？』』

『や、こちらこそ』

『マヒル兄の部屋に今風な不良が不法侵入！』

『捕まえろ』

『ぎゃー！　――ってなるかボケ！！！！　特にそっちのやる気なさ気の方！　ボケに覇気がないぞ覇気が！！』

『何故見ず知らずの貴方にそんな指摘をされにゃいけないんですか僕は』

――

という会話がなされた後に発覚しましたマヒルの弟ｰ　ｓという事で今に至ります。

「あ、俺マヒルのダチのセツってんだ」

「せっちー？」

「あだ名つけんな初対面の人に」

「せっちー、……うｎ、良いじゃねぇか。ユウヤっつったかお前？　全くマヒルに似てねぇな！」

「お褒めに預かり光栄です！」

褒められたのか其れは。寧ろ貶されてないか。

「俺たまにここ泊まり来てんだよ、家は家族がうっせぇからよ。マヒル、今日バイトで帰って来んの遅いんだぜ？」

「知ってるよー？　だから抜き打ちチェックしに来たとよ」

「あー、一人暮らしのか？　だよな、男の一人暮らしなんてちゃんと出来てるか心配だよな……！　健気な弟達だな……！！」

あーあ。遊び半分だなんて口が裂けても言えなくなった。どうやらセツさんはとても兄貴部類に入る人な様だ、兄貴同様見た目は格好良いのに。

「よし、じゃあマヒルが帰って来るまでこのセツお兄さんと待っていようではないか」

「よしきた！」

そして此の人は僕等が居座る気なの知ってるのね。――って貴方も居座るのね。……マヒル兄も大変な友達を。

「そいじゃあ夕飯でも……」

そう言ってセツさんは冷蔵庫をバタッと。……ってマヒル、立派な野郎冷蔵庫まであんのかよ、どんな大学生ライフ送ってんだちきしょー。

「ろくなもん入ってないから鍋にしようぜ、鍋」

「お、超イカす料理だ！」

「僕だって鍋が材料突っ込むだけの料理だって知ってるんだからな」

え、ちょっと違う？　良いんだよ、作らないんだから。

セツさんとユウヤは此処を兄貴の部屋だと覚えているのだろうか、そんな勢いでひょいひょい夕飯作りを開始してしまった。

そんな中――

――～♪（※着信音）

「お、電話？」

ユウヤがのんびりとキッチンから言う。誰の携帯とかだろ。

「こーんの着信音はマヒルかな？　悪いけどアサキ君取ってくれー」

同じくキッチンからの声。嗚呼、セツさんの携帯か。つか僕の名前を覚えてたのかあの人。部屋を這い蹲る要領で歩き、黄色な携帯を発見。……黄色……まぁ良いか。其の画面には“真昼”と表示されていた。何だよ、普通かよとツッコミを入れそうになったが普通の何が悪い自分……！！

「……」

「アサキ君？」

「あ、はい」

何となく携帯を見ていたら催促された。……よーし。

ピッ。

「もしもしマッヒー？」（※アサキです）

『あ、もしもしセツ？　マッヒーって言うな、今俺ん家？』

「うん、そうだけどどうかしたんか？」

『いや、あのさぁ――』

超ハイテンションで出てやったら気付きゃしねェぜマヒル兄……！

「あるぇ、ユウヤ君あれ誰？」

「知らないんですか？　マヒル兄の弟だよ？」

「ああそうか」

何やらキッチンからそんな会話が聞こえたが僕は知らん顔します、マヒル面白。

『さっき母さんからさ、もしかしたら弟がそっち行くかもー……って電話が来たんだが』

母さんバラしたのか。

『だから――』

「おーけーおーけー。その弟をどうすりゃ良い訳？　追い返すかー？」（※だからアサキです）

『――や、俺が帰るまで捕まえて』

「……」

『前話したじゃん？　双子の弟達。片方確実にすぐ帰りたがるからさ』

確実に僕だ。ていうかセツさん僕等のこと知らない風だったけど？

『んで片方は捕まえとかねェと騒音的問題が――』

確実にユウヤだ。

『つー訳で、早めに帰るから逃がさんといてな』

「……しっかたねェなぁ！　このセツ様がしかと捕らえておいてやるぜ！！　早く帰らないと飯食っちまうからなー！！！！　じゃ！」

（※何時までもアサキです）

『おう。じゃなー――って待て！　今飯つったか！？　もしかして俺の家の勝手に使う気――』

ピッ。ツー……ツー……。

「「気付かないんだマヒル（兄）」」

「電話越しだからな」

キッチンからの声を再び聞く。……まぁ、気付かなかったのはいいが、あの即興セツさんテンションがあっていたのが凄いと思う。

そして何か言ってたが知ーらね。

「セツさんセツ様とか言うキャラなの？」

「言う時もある」

言うんだやっぱり。

テンションがカイトっぽいからそうかと。

ま、それはさておきとして。僕は一人備え付けのテレビでアニメ鑑賞でもするとしよう、料理は専門外だから大人しく見てますよーだ。……別にグレてないやい。

「もう全部入れようぜユウヤ君」

「だねー。もう全部入れちゃおっかー」

「ダシ汁にこれとあれとこれとそちらと――」

「うん？　あ、じゃあお菓子入れよっか」

「最後に俺が持ってきた此れ入れようぜ！」

「え、あ？　……まぁ今日はいっか、どうせ休みだし」

――だから、言葉だけの見解が僕に分かる訳ないんだけどな。

37＋突撃☆お宅訪問。／後

やーっと、バイト終わったー。
時間的に規定時間に終わったけどさ、家に弟達来てるとなると何かもう早く帰りたいっていうな！　……は？　ブラコン？　知るかよ馬鹿が。あ、すません、マヒルッス、……初めまして？

「アサキにユウヤ、ちゃんと居るかなー、セツの野郎電話であのテンションだったからな……」

あんなテンションの奴がちゃんとやってくれてるか……え、何笑ってるの？　え、何か変な事言った？　だって電話……まぁ良いか。俺知らね。

「帰ったら家に誰か居る……ちくしょー嬉しいなこのやろー」

俺の通う大学は、家からじゃ遠くて流石に死ぬんだよな……。ああ、何故可愛い弟達と離れて暮らさにゃいけねぇんだ、俺……！
――今はそんな事どうでも良い、とりあえず早く部屋に行こう！

「ただいー――」

「「お帰りー！！！！」」

早いよ、言わせろよ。

「兄ちゃんおっかえりー！」

「あー、ただ今弟よー」

先に飯食っててテンションが上がっている弟が突っ込んできた。

ふっ、良い弟だ、何ていいんだ家族って……！！！！

って、何で人が帰る前に食ってんだ……？　待ってようぜ其処は、

何か悲しいじゃん。

「マヒルん先食ってるぜー！」

「うっぜぇぞセツ、テメェ人の家の食材適当に使いやがって！！」

「え、ダメだった？　アサキ君との電話じゃ何も言ってなかったじゃんけー？」

「そりゃお前が一方的に！　――ってちょい待ち。今誰って……？」

「アサキ君」

「……Ｐａｒｄｏｎ？（※訳：もう一回言ってください）」

「さっきの電話はアーサーキーくーん！！」

……。

「うっそぉ。俺あのテンションのアサキ君見た事ないよ？　十三年お兄さんやってんのに分からない」

そんな……あんなテンションのアサキが！？　――面白過ぎる、見てぇ……！！

「あ、だったらより楽しいアサキ君とユウヤ君が今なら見れるぜ？」

「は？」

何やらセツがニッコーと笑いながら何かをかっくらっている。ちょ、それ――

「ははっ、もっと持って来ーい！」

「テメェ未成年が酒かっくらってんじゃねェぞクソが！！！！」

何故未成年が酒盛りをしてる……！
人の部屋で人の食品で、この馬鹿野郎！！

「兄ちゃんったらー、鍋は美味かったぜー？」

「鍋が美味くてもな！　それは駄目なんだぞユウ――うん？」

そしてヘラッとしているが、未だ俺に突っ込んだままの弟の発言に反応をする、いや、しようとしたら……

「馬鹿兄ちゃーん、俺はユウヤじゃなーくーてアーサーキー！　似てるからって間違えんなよー？」

うぇおぁうぁあああああ！！！？

「ちょ！　お前アサッ、お前どうしたよ！？」

「何がー？」

「お前が自分からお兄ちゃんに突っ込んで来る訳ないでしょ！！」

「まぁ良いじゃん！　ねぇユウヤー？」

「ねぇユウヤー？　――じゃないから！　セツ！　俺の最愛のアサキに何やらかした！！」

「何って、一緒に鍋つっついてただけだぜ？　なー、アサキ君？」

「なー、せっちゃん！」

「ちっがう！　アサキがこんなテンションだなんて寧ろ気持ち悪い！！　ユウヤじゃん！　テンションだけユウヤじゃん！！」

ねー？　とか二人でやってんなよ馬鹿！　つかユウヤは！？　アサキがユウヤテンションになってるってことはユウヤはもしかして――

「……」

――あの、一人ローなテンションを醸し出してる人ってまさか……

「……ユウヤ君？」

「――んだよ？」

君だよなユウヤ！

何その冷めた眼……！　それはアサキの役目だろうが……！！

「あ、えっと、兄ちゃんが帰って来たー……」

「そう、で？」

「お帰りーとか？」

「永久に逝ってらっしゃればいいのにクソ兄貴が」

――アサキの数倍タチ悪ィ……！

ケッと言い飛ばしてくれやがりましたよええぇ、何なんだこりゃ、誰か助けて下さい！！

「二人共急にああなっちゃってさー、もー俺様びっくりって感じ？」

「驚いてんのか其れ、何したえぇ？　俺の愛すべき家族に何しやがった屑、カス、こんの外敵――」

「そんな罵倒の数々を並べんといて、流石にセツ君落ち込むから」

まぁ良い。それより二人は何故こうなった……？　アサキがニッコニコでユウヤがトッゲトゲ……あ、アサキはこれでも良いか――や、よくないか。

そして俺がふと眼に止めたもの、それは――

「……鍋？」

「んー、鍋」

「……セツ、これ何入れた？」

「具。――あ、ごめん、ちゃんと言う、だから睨まないで」

「――酒、とか入れてねぇよな？　……うん、そうだよな。未成年が食ってたんだもんな？　お前は良いとしてもアサキとユウヤは俺の弟だし？　そりゃー酒なんて飲ませた日には逆立ちして二十四時間そのまま腕立て伏せしつつごめんなさいって言わせ――」

「――ごめん、俺逆立ち出来ねぇや」

やったのか貴様ぁあああああ！！！！

「だ、だってユウヤ君なーんも――」

「ユウヤはほぼノリで出来てる種族だから仕方ないんだよ！　アサキもユウヤも酒ダメなんだから飲ますな屑が！！」

嗚呼、思い出した。昔あったな一回。昔父さんと四人で色々とあった思い出がフラッシュバッ――やめよ、これは良い、封印。アサキ可愛い過ぎるしユウヤ怖過ぎる。

「うー、そんな怒るなよー」

「金髪馬鹿がそう言っても可愛くも何ともねぇぜ、俺に其れが通じるのはユウヤだけだ」

アサキがやったら恐怖だからな。

「兄ちゃん、そんなせっちゃんを怒らないであげてよ……？」

――いや、アサキでも良いや。（※弱いブラコン本能）

その後双子反転は二人がすぐ寝たので元に戻った。

泊まってった三人の居る朝。

「あ〝ー、何か頭痛ぇ」

「アサ君ったら大丈夫？　まぁ俺もなんだけどー。……ってそれよりマヒル兄」

「ん、何？」

「何でせっちー腕立て伏せしてるの？」

「ごーめんーなさーい！」

「嗚呼、アレはあいつが逆立ち出来ねぇからだよユウヤ」

「？」

「セツさん……馬鹿？」

「……うん、やっぱりアサキとユウヤはこうでなくちゃ」

平和だ。やっぱり人ってキャラは大切だよ。

38＋そんな日常が素晴らしい。

「今日の体育は野球をやるぞー」

こんな寒空の最中何をやらせる気なんだこの体育教師は……！

こんにちはアサキです。体育で野球とか怠さ極まりない。うちのクラスは十九人だからー……二チームって訳か……。二組も合わせて四チーム……そんなに分けて沢山やって何が楽しい野球。いや、野球は大好きだけども。寒い時にやるもんじゃない。

「ねぇアサ君」

「何ユウヤ」

初心者ながら普通にヒットを打ったユウヤがただ今一塁ベースに立ってます。あ、僕ファーストなんで。ただ今一組守備。

「何でアサ君一塁に居るか当ててあげるよー」

「さぁ何故でしょう」

「動きたくないから」

大正解。

基本ファーストは塁に居ていいもんな。バントとかしても俺は動かない。ピッチャーのカイトに任す。

「もう眠いんだよ俺は」

「だよねー、俺も眠いのよ。昨日マヒル兄の家が幾分疲れた所為だよねー」

昨日はとても疲れた。マヒルの家から学校に来て、それだけで重労働だったのに頭痛いわ眠いわ……一体何があったと言うんだ、マヒルもセツさんも教えてくれやしないし。

カキーン！

「アサキ！」

「は？」

カイトが打たれました、僕の方に飛んできました。

――スルーだな。

『えええええええええ！！！！』

「ッるせぇんだよ！！！　外野内野共々叫ぶな！　ライト取りやがれ！！！！！」

「無理言うなよ！」

ライトからそんな声。あれ、ライトはハルナだったみたい。そしてランナーがダッシュしてる……って早、ユウヤもうサード回ってるよ。

『……』

「……なーいすバッティーング」

え？　クラスから変な眼で見られてる？　……知らないよそんなの。どうだって良い、動くのは嫌なんですよ。僕は動かないで取れる場所のしか取らん。

「選手交代！」

お、カイトが賢明にもそう叫びました。正しい判断だな、とっとと僕をベンチに入れろ。

「アサキピッチャーやれ」

「ふざけろ」

なめてんのか。

「だって動かないじゃねぇかよお前！」

「塁に飛んで来た球は取ってやってるだろ」

「其れだけしかしてないじゃねぇか！！」

五月蝿ぇな。取ればいいんだろ取れば。つーか、お前が打たれんのが悪い。

「アーサくーん！　皆様に迷惑かけちゃメッ！　だよー！！！！」

「五月蝿ぇド阿呆！！」

真反対の位置から叫んでくんな馬鹿！　何がメッ！　だ！　僕は幾つの餓鬼だよ！！

「良いなぁ……」

「何が？」

ところ変わって体育館です、外で男子が野球をやっているのを見ています。あ、こんにちは、モモです。

「男子って……楽しそうじゃない？」

「男子……っていうか、リョウちゃんはアサキ君が見たいだけでしょ？」

「ち、違うわよ！　何で私がヒコクアサキなんか……！！」

だったら何で授業サボってまで体育館に居るのかな、リョウちゃん……（※三組は別授業です）。

まぁ、まだ気持ちに気付いてないみたいだから仕方ないけどさ。

「はぁ……」

「ふふ、リョウちゃんったら……」

恋する乙女は大変だなぁ、リョウちゃん。……あ、そーだ。

「リョウちゃん」

「ん、何？」

「今度の土曜、一緒に買い物行こ？」

「土曜？　……あ、嗚呼、うん、そうね……家でいっかな？」

「うん、それが良いな！」

だよリョウちゃん。頑張ろうよ、リョウちゃん！

39＋転入生は突然に。

「――つー訳で、アサキ、頼んだぞ」

「え、何が？」

スパンッ

叩かれた。見事に頭をスパンッと。

「先生、頭を叩かないでくれないかい」

「担任にないかいとか言うな、ないかいとか」

だってないかいって気分じゃないかい。そうだ、僕はアサキじゃないかい、……もう良いよ僕。

「だから、今から来る転入生の案内をお前に任せるっつってんだ」

「何のご冗談を」

「カイリの奴がお前に任せたって言ってたぞ？」

転入生？　……嗚呼、何時の話だそんなの。めっきりすっきり忘れていたじゃないか。

「あーはいはい、了解でーす。じゃあ早めに終わらせたいので来たら早く連れて来て――」

「もう来てるぞ」

「下さい――って早いな」

流石に其の可能性は低いと思ったのに。

そんなこんなで担任サクライ先生は放課後残された僕を更に一人残して廊下へ行ってしまった。

「……チョロQ」

懐かしいな、呟いてみたけど特に意味はないよ。だって暇なんだもん。

「ニズベルグ」

これ何だっけ。ニズベルグ……駄目だ、何なんだか全く分からない。

「ムッソリーニ」

……誰だっけ？

「オーヴィル」

あ、此れはライト兄弟の兄貴の方か、……いや違う弟だ此れ。兄貴はオリバーか何かだ。……あれ、どっちだ？

「スルメイカ」

「お前さっきから何呟いてるんだ……？」

「アンポンタン」

「俺を見て言うな」

嗚呼、先生か。何処のスルメイカなアンポンタンかと思った。サクライ先生がキレかけているのでやめておこう、で、転入生は？

「入っていいぞ」

「はい、失礼致します」

先生の後から入って来たのは私服の餓鬼だった。未だ制服届いてないとかそんなオチか。

「つー訳で、コイツがうちのトップだから後はコイツに聞いてくれ」

「分かりました、先生」

そう返事をした私服を置いて先生は消えた。……全面的に僕に押し付けやがったな、あの野郎。

「フフッ、宜しく。私はサキネユキと言うんだ」

「あ？　ええと、僕はヒコクアサキだ」

ニコリと笑顔を作った奴――サキネ。何やらまた癖の強い奴女子が来たもんだ。

「君が此のクラスのクラス委員なのかい？」

「や、僕は奉仕委員、クラス委員はロクジョーって奴」

またの名を馬鹿と言う。しかし転入生に無駄に知識を入れるのは止そう。

「ロクジョー……さん？」

「君」

「嗚呼失礼。まぁ彼に挨拶をするのは君達がスキーから帰ってきてからにするとするよ」

「そうだな」

日曜日からのスキー林間だ、サキネが来るのはその後だと聞いている。とりあえずどうするか……。

「サキネ」

「ユキでいいよ、私もアサキと呼ばせて貰いたいからね。是非友達になって欲しいな」

「じゃあ……ユキ、何処に案内して欲しい？」

「うん、そうだね……私は読書が好きなんだ。図書室の場所が知りたいね」

「了解」

そう言ってからグータラとしていた席を立つ。実にかったるいがそういう訳にはいかないだろうしな。

「此処が図書室」

「うわぁ……沢山の蔵書があるんだね……！！」

図書室に案内すると、サキネ……否、ユキは眼を輝かせてそう言った。本が好き、と言った言葉に嘘はなかった様だ。

「アサキ、少し中を見せて貰っても構わないかい？」

「五分以内」

「実に良い配分だ」

そう言ってユキは中に入っていく。僕は嫌という程図書室の本は読み耽ったので、廊下で待つこととする。

「――あ、あれ、ヒコクアサキ？」

「その呼び方は」

横を見る。案の定そこに居たのはカトウだ。

「何よ、何でこんなところに居るのよアンタは……！　こんな格好見られちゃって凄くハズカシイんだけど……！！！！」

何かごちゃごちゃ言っているがあまり聞こえない、何言ってんだあいつ……？

カトウは部活中なのか、体育着にジャージ、そしてウインドブレーカーというセットを着込んでいた。

「カトウ」

「何よ！」

「お前何部だ？」

「私はバドミントン部よ！　何か問題ある！？」

ねぇよ。

「あ、貴方は何やってるのよ？　こんな所で……！」

「僕は――」

「アサキ、もう良い、待たせてすまないね」

「平気だ、ユキ」

良いタイミングで出て来たユキ。何やら一物ありそうな笑顔だ、

会った時からそんな感じ。

「うん？　こちらの運動部さんは君の友達かい？」

「ああ、とりあえず」

「……あ、え……？」

「そうか、ならば挨拶をしなければね」

ユキは相変わらずの笑顔でカトウに向き直って、

「私はサキネユキ、今後お世話になるよ」

そう述べましたとさ。

何故か唖然なカトウ、どうした。

「い、今……アサキって……？　そしてヒコクアサキはユキって呼び捨てで……何なのよ此の人……負けないんだから……！！！！」

カトウがまたブツブツ言っている、一体何を言っているんだ……？と思ったらダッシュで廊下を駆けていってしまった。……一体何だったんだあいつは。

「おや、一体どうしたというんだろうね、彼女は……？」

「さぁ」

「フフッ、アサキも分からないのか。何となくならば私にも分かったというのに……」

ならば教えて欲しいね。

「ではアサキ、次に行こうか。そうだな……施設は通い始めてから君に聞くとして、先程の彼女がやっているような部活が見たいね」

「お前、通い始めてって……全部僕に聞くつもりなのか？」

「駄目なのかい？」

「駄目じゃないけど……友達とか作って聞けば？」

「……嗚呼、そういうことか。アサキ、君は勘違いをしている様だね？　言っておくけれど私は――」

――確かに勘違いをしていたみたいだ。それを聞いて気付いた、そういう事か。というか、もしやカトウも勘違いを？

ま、それは転入日になればどうとでもなるか。

４０＊閑話＋再びダラダラな感じで。

「あらまたこんばんは！」

「閑話コーナー第２弾」

という訳で再びな閑話コーナーです。もう一度言いますが、本編とは全く、嫌、ほぼ関係ありませんのでご了承を。

「ほぼって何だよほぼって」

「知らないよ、お兄ちゃんに聞かないでよ」

「とにかく、確かにダラダラ更新でなかなか頑張っている作者ですが」

「ですが？」

「日曜日から本人がスキーに行く様だ、学校で」

「ああ、だからスキー話書く気なんだねー」

「ああ、夜とかに書くみたいだぜ」

「寝ようよ、そこは」

「作者はそういう時は寝ない人なんだよ」

まぁ、僕の話はいいから小説の話に移って頂けます……？

「「はーい」」

はい。

「んでは、ユウヤ君、何か言いたい事は」

「新キャラ多い」

言うな。

「２０話から４０話の間に増えたキャラは何人でしょうかアサキ君？」

「ウミさんにアスカ君にカトウにランにセツさんにユキ」

「ざっと考えても６人も居るね☆」

「いいのかこんなで」

「そしてモブ的キャラが可哀相だよ」

「ああ、ハルナとかチアキとかライテとか？」

「アサ君ライテ知ってたんだ」

「もう１人は忘れた」

「俺も」

モブいのが多いのは仕方ないんだよ、2組のキャラ少ないし、1組もアサキがずば抜けて冷静なのを知らしめる為に。

「僕の所為にしないでクダサーイ」

「ちなみに皆に名前あるの？1組の軍曹さんとか」

最近決めました。ちょいメモしてあるのを書き出してみましょうか、皆さんの名前。とりあえずヒコク家。

ヒコク　シンヤ
　　シユウ
　　マヒル
　　ユウヤ
　　アサキ

「5人家族です」

「父さん、出てきてないのに先に名前出て来ちゃったよ」

次、1組さん方。

ロクジョー　カイリ
ラン　モモ
ハルナ　ハジメ［一等兵］
チアキ　タク［二等兵］
ミトウ　セイタ［軍曹］
サキネ　ユキ

「あー、軍曹ミトウって言うんだ……」

「俺が解説。二等兵君達は最近まで全く名前が決まってなかったけど礼螺君の友達と可哀相だって話が上がったらしくって」

「まぁいいんだけどさ」

次は２組。

ニカイドー　アスカ
セイカ　コウスケ
ライテ　ソウ

「あー、頑張ったな、作者」

「考えるのにね……」

３組。

カトウ　リョウコ

後、先生。

サクライ　イツキ
アヤメ　マシロ
キクカワ　コクシ

「結構増えたなー」

「目指せ５０人！」

「急に張り切り過ぎな目標だよ、あの作者にそれだけの人数の管理は無理だよ」

そうだそうだ、今だってメモっとかないとこんがらがるんだから。ちなみにセツさんは後々本編でまだまだ出すから本名は伏せます。

「強がっちゃって」

「ねぇ？」

うるせー。

「名前はまぁ一風変わってる人が多いんだよねー」

「覚えやすさ重視らしいよ、変わってないと無理な作者ー。阿呆らし」

アサキ、うっせ。

「ではでは次」

「次ったってやる事ないんですけ――」

「アサ君、シッ！」

シッ！じゃねェよ、シッ！じゃ。聞こえてるからな、もうバリバリ聞こえてるからな。

「まぁ、雑談してりゃー、時間は潰れるさ」

「ですねー」

気楽過ぎるぞお前等……。
もういいもん、好きに語ってればいいじゃないか、くすん。

「くすんって泣いちゃったよ作し……行っちゃったよ」

「どこ逝っちゃったの」

「アサ君漢字表記違う！！！！！」

「さて、作者も消えた――又は消した――ので、今回は名前の話でお開きという方面で」

「身内が言うのも何だけどアサ君自由ー」

「それではヒコク兄弟がお送りしました閑話はこの辺でまたー」

「もういいや、ばばーい！」

ほんと自由に終わっちゃったな……。ＢＹ．作者

41＋寒さ際立つスキー林間。／壱

白い雪、白い空、何処までも白い視界。

「なぁアサキ」

「何だいカイト」

「俺達、スキーに来たんだよな……？」

「その通りだよ」

「じゃあさ――」

会話の通りスキーにやって来た僕等。長いバス移動を終えて――僕は爆睡だから知らない――ホテルのロビーにて外を見る僕等。スキーのウェアは着てません、だって――

ゴー――――――……

「な・ん・で、外吹雪なんだよ！！！！」

文字通り“ゴー”っと音を立てて吹きすさぶ雪があるから。そう、外は雪を越えて吹雪なんだよ。

「天候にいちゃもん付けるなよ」

「コラ二人、とっとと部屋行って地下に集まれ」

「あ、サックラせんせー！　スキー出来ないじゃん！　何で吹雪なんだよー！！！！」

「うっせ、天候にいちゃもん付けるな」

そして俺はサクライだ、とクールにも反論をしたサクライ先生。何やら吹雪で今日はスキーが出来ないらしい、……よっしゃあ。あ、聞いてりゃ分かる通りアサキです。

「お前等の部屋は上だろうが、とっとと行け」

「「はーい」」

ふむ、このスポーツ少年はさほどスキーをやりたかったんだと見える。別に良いじゃないかスキーなんて、僕は好きくないし。階段をふて腐れながらカツンカツン階段を鳴らすカイトはドラムバックを引きずって上る、重くないか其れ。

「明日があるじゃん」

「へん！　俺のコンディション的にゃ、今日からスキーだったんだよ！　何が楽しくて長時間乗って来たバスの後に蕎麦作り体験しなきゃいけない訳！？」

「良いだろ別に、僕蕎麦好きだし」

「そういう訳じゃねぇんだよ！！！！」

五月蝿いなこいつ。とりあえず部屋についた僕等は荷物を下ろして其処に待機。時間なんて何時か来るさ、嗚呼帰りたい。

「じゃ、俺班長会議いってくるなー」

「え、セイタって班長だったん？」

「カイト、書類に勝手に書いたお前が言うな」

「アサキがやった」

「人に押し付けるなよ！？」

「悪かったと思ってる」

「嘘付け」

とかなんとか言ってミトウは行った、と。

「ちなみにアサキは保健だから」

「何で僕が」

「一番似合わなそうだと思ったから」

唯の嫌がらせかよ。

という感じで、僕等の班はミトウこと軍曹――逆って言うな――と、

「うえーい！　吹雪ー！！」

「雪国育ち万ざーい！！」

何やらハイテンションなハルナとチアキと……って何が雪国育ちなんだよ。それと僕等の五人部屋。何気にこいつ等とはつるむな……とか思った僕は何か負けな気がするので何も言わない。

「――よし、暇だから遊び行ってくる！」

「へーい！！！！」

「切替早いなお前等」

雪国がどうとか言ってたと思ったらもう暇になったのかよ、早いよ、もっと雪国について語ってればいいじゃないかよ。

「「……」」

暇・だ。

いきなり二人になったらそりゃ見るものもなくなって暇でしょうが。

「よし、じゃあ菓子でも食いますか」

「早いが其れで良いか」

暇になったら何か食え。

カイトの案に乗って僕は鞄からお菓子（※二千五百円相当）を取り出した。絶対多い。

さくさくさくさくさくさくさくさく

「うまーい」

「お菓子だもん」

さくさくさくさくさくさくさくさく

「さくさくスナック」

「唯のポテトチップスなんだけど」

さくさくさくさくさくさくさくさ

「はーい」

「失礼しますね」

ノック音と共にやって来たのは久々に見る――アスカ君。……や、名前忘れてたとかないから、うん。

「あー、ユウヤのお友達じゃん、そして俺のお友達でもある……！」

勝手だ。

「はい、そうですね」

ニコリと笑ったアスカ君には後光が差している様に見える。すっげー。

「アスカ君、来れたんだね」

「はい、お蔭様で」

熱が下がったので、と心底嬉しそうに笑うアスカ君。実は腹黒なのに今回ばかりは本当に嬉しいみたいだ。というかユウヤが激テンションハイで居たから来たとは思ってたけど。

「でも今日は蕎麦作りと言いますから、スキーはおじゃんの様ですがね」

「そーなんだよあっすー！！！！」

誰だよ。

「この俺様カイト様はスキーなコンディションだったにも関わらず蕎麦作りだなんて……！！！！」

「お前だけだよそんなスキーに執着してんのは」

「いえ、もう一人……」

……うん？　もう一人……？

アスカ君はベッドに乗り出して孤高に語るカイトを尻目におずおずと述べた。

――脳裏に浮かぶは一人の身内。

「アスカ」

「はい」

「行くか」

「是非」

スタンドアップ。

「何処だ」

「ロビーです」

ウォーキング。

そしてカイトを置き去りに僕等は部屋を出た。

「スキーやーりーたーいー！！！！」

「仕方ないじゃないか。吹雪なんだよ？　こんな中行ったら流石のユウヤも死んじゃうって」

「分かってるよあーや先生！　でもでも何でこんなにこんななのさー！！！！」

はい案の定。

ロビーに着いたらアヤメ先生に向かって無駄に抗議を繰り広げるユウヤが居た。

――とりあえず飛び蹴りしておいた。

「オラァ！！」

「ぐはッ！！！！」

「元気ですね」

よし命中。

はっはっはと笑うアスカ君はやっぱり腹黒いと思う。

「公共のホテルのロビーで騒ぐな、みっともない」

「こ、公共のロビーで兄に飛び蹴りを喰らわすアサ君に言われなく

な――」

「うるせぇカス」

踏み。

「うひゃ！」

「アスカ君、アサキ君を連れて来てくれて助かったよ」

「いえいえ、ユウヤが騒ぎ出したのを止められるのはアサキ君だけですから」

笑顔でカオスな会話が横で繰り広げられているが、僕は全く気にしない。其れどころか本当邪魔だから、とにかく此れをとっとと蕎麦作り会場の現場にでも運んでしまおう。

「ほら行くぞー」

「ま、待ってアサく……アサキ！　痛ッ！！　ちょ、アサキそれはゴミじゃないんだよ！！　お兄ちゃんの右腕！！！！」

「知らん、僕には見分けつかないぜ。アスカ君も行こ」

「はーい」

あれ？　ゴミとユウヤって同音異義ならぬ異音同義語じゃなかったっけ？

僕はそんな事を考えつつ、ニッコニコアスカ君と連れて早めに会場に向かった。

「仲の良い兄弟ですねぇ……」

「アヤメ、お前目は確かか？」

「シロちゃん、イツキ君に心配されてる様じゃ危ないぞ？」

「キクカワ、テメェはもう駄目なんだな」

ロビーに居た他二人の担任教師。そんな三人を見送りつつそう呟いたとさ。

42＋寒さ際立つスキー林間。／弐

「何でスキー来たのにさー」

ズルズルズルズル

「んまい」

「だよなぁ。スキー来たんだからさぁ、スキーしてぇよなー。何で」

ズルズルズルズル

「んまい」

「「蕎麦食ってんのかね」」

ズルズルズルズル

「「んまい」」

「文句言いながら食べんの止せや」

「お二人らしいじゃないですか」

今晩は、アスカです。自分達で作った蕎麦をズルズルと食べる俺達。未だにスキーを引きずっているユウヤとカイリ君は文句を言いつつも美味しそうに蕎麦を食べています。アサキ君が居なかったら……こんな平和はなかったんでしょうね。

第一美味しいなら良いじゃないですか。

「此れは此れ、其れは其れ、蕎麦は蕎麦だぜ！」

「黙っとけカイト」

「スキーはスキー、そして蕎麦はそ――」

「ユウヤ、俺の蕎麦余ったので食べません？」

「食べます」

ズルズルズルズル

食べ終わって五月蝿かったので俺のあげました。そんなにお腹減ってないですし、何より食べてないと五月蝿いですから。

「良いなー」

「僕のをやるからとっとと黙れ」

「わーい」

カイリ君も黙りました。食べ物って偉大ですよね。

「アサキ君、あげちゃって良かったんですか？」

「別に。後数時間で飯だし」

「其れもそうですね」

この二人はこれだけ食べても夕食はいけるんでしょうね……。
するとそんな所に――

「ひ、ヒコクアサキ！」

「あ？」

「リョウコさん」

が現れました。にしても柄の悪いアサキ君ですね。

「カトウ、何。ランならそっちだぞ」

「分かってるわよ！　モモに用がある訳じゃないの！」

「ほー、で？」

「……」

おや、だんまりですね。
俺は水を差してはいけないと黙る事にしたのですが何やらもじもじとしていらっしゃる。……嗚呼。

「「おかわりー」」

二人共、空気を読んで下さい。黙って下さい。

「言うのよリョウコ、此処は流れで行くのよリョウコ、大丈夫、義理なんだからね、日頃の感謝よ、いや、感謝なんかしてないけど。いや、遅くなったけどちゃんと渡すのよリョウコ……！！！！」

何やら俺にはつつぬけな独り言を仰っていますが聞こえてしまっていて良いのでしょうか。
リョウコさんは意を決した様にアサキ君を見ると、言葉を紡ぐ。

「あのね！　これ――「「ごちそうさまー」」……」

だから空気を読みなさい馬鹿野郎共。

「……何？」

「な、何でもないわ！　あ、用事思い出したからまた後で！！」

そう言ってリョウコさんは走って行ってしまった。嗚呼、何やら馬鹿共に邪魔されてしまって可哀相に……。

「ふー、食った食った」

「元気百倍、アン●ンマーン」

コイツ等、人の気ってものを知っているんでしょうか。

「何だったんだあいつ……」

アサキ君は呆けた様にリョウコさんを見送りました。
……俺には、何か分かった気がしたんですがね。

――それから数時間後の自由時間。

「はぁ……」

「リョウちゃん、そんなに落ち込まなくても明日と明後日があるよ？」

「要するに、今日はもう無理って言いたいのかしらアンタは……」

ロビーからこんばんは、リョウコです。せ、せっかくチャンスだったのに私ったら……！　渡せなかった、渡せるチャンスだったのに……！！

「そ、そうじゃなくてだよ！？　リョウちゃんならきっと渡せるよ！　大丈夫だよ！？　さっきはタイミングが悪かったんだよ！　やっぱりアサキ君と二人の時が一番ベストだよ！」

慌てながら訂正を入れるモモ。ふんっ、ヒコクアサキがロクジョーカイリかヒコクユウヤと居ない時なんてあるのかしら……！

おまけにニカイドーアスカまで要るし……私はこのスキー中にあるものをヒコクアサキに渡さなきゃいけないのよ！！　此の――一週間過ぎた――

「義理だって言ってね！」

「そこは素直にならないんだね」

「当たり前よ！」

そ、そんな恥ずかしい事言えないわよ、ほ、本命とかそんなの…

……！！！！

だ、だって……恥ずかしいし……。

「リョウちゃんやっぱり可愛い」

「何か言った？」

「ううん何も」

最近モモは独り言が増えた気がするわ。

「リョウー、風呂行っちゃうよー？」

「え？　あ！　うん！　今行く！」

今の自由時間内に三組は風呂だったわね、すっかり忘れてたわ。

班員にそう声を掛けられ、ロビーのソファから私は立ち上がる。

「それじゃね、モモ」

「うん、お休みー、頑張ってねリョウちゃん」

モモはヒラヒラと手を振る。……私もあれくらい可愛かったらなぁ……――何考えてるのよ。

「明日、頑張ろ」

今日のところは敗北で決定。明日は晴れるらしいし、その時にどうにか頑張ろっと。

ฝฺ

43＋寒さ際立つスキー林間。／参

「“消灯時間は十時、それ以降は部屋からの外出は禁じ、次の日の事を考えて速やかに睡眠を取りましょう”」

「うわ、面倒ー」

「“因みに俺等教師が寝るのは十二時くらいだから、其れ以降だったら何しても構わないから其れまでは大人しくしている様に”。はい、これが班長会議の内容」

実にサクライ先生らしい。

「さっすがサックラ先生！　よし、じゃあ十二時まで寝ようぜ」

「やだよその二時間睡眠」

こんばんは、勿論アサキです。ミトウからそんな会議内容を聞いて、カイトが五月蝿いです。やっと寝れるんだから寝ようよ……寧ろ眠いよ……。

「何だよアサキー、お前はスキー林間だってのに易々と眠りに就く気なのかよー」

「十一時」

「何が」

「普段の就寝時間」

「「早」」

パジャマ姿でやいのやいのやっているハルナとチアキが唖然とツッコミを入れた。何だよ、一般人ナメんな。

「にしたって一時間ロスタイムあるじゃん、其処は二時間寝て後は遊ぼうぜー？」

「さーんせー！」

「俺もー！！」

「はい、ハジメとタクと俺で三対二で起きてる決定ー」

「あれ、俺と意見は聞かないんだ」

「セイタ軍曹はどうせすぐ寝ちゃうタイプだろ？」

「俺は朝までニ●ニ●動画を見ているか脱出ゲームを攻略してるタイプだ」

「「ヲタクかよ」」

「ハルナ、チアキ！　俺はヲタクじゃないぞ！？　不眠症で大変なだけなんだ！！！！」

「ヲータークー」

「カイトまで……参謀、君はどう思う……？」

「ぐっじょぶ」

「なら良いか」

セイタは軽いパソヲタ気味な事が今解明された。少し親近感が沸いた。

「でも、アサキが寝たいっていうなら寝かせてやれば良いじゃないか」

「何を言う軍曹！　皆で騒ぐからスキー林間なんだろうがばーか！！」

「「そーだそーだ！」」

「だ、だが明日だってあるし、寧ろ今日はスキーやってな――」

「それは禁句だ！」

「「そーだそーだ！」」

何やってんだこいつ等。

まだ消灯まで三十分あるけど、僕は一人毛布に包まってぬくぬくる（※無理矢理動詞シリーズ）。

「……ねむ」

「あー、其れあったかそう」

「む」

「俺もやる」

論議は終わったらしい、相変わらず熱しやすく冷めやすい連中だ。
カイトは隣の毛布に包まってみている、何か楽しそう。

「わふー」

「……」

げしっ

何か悦る顔にムカついたから毛布から出て蹴り飛ばしました。

「あ、俺も」

「俺も俺も」

「お前達、容赦ないな……」

「わふわふー」

次々とげしげし蹴られるカイトだが、毛布のお蔭で痛くない様だ。
何か余計ムカつくから――上から敷布団を全てかけてやった。

「――」

何言ってるか聞こえなくなったからいいや。このままにしておこ

う。

「……にしても、せっかくのスキーなのにスキーしねぇとかマジ最悪ー」

「本当だよなー。明日出来るといいんだけど……」

そんなハルナとチアキの台詞に外を見る。吹雪は止んだけど雪が降り止む様子はない。……まぁ唯の雪ならやるんじゃないかな。

「アサキとカイト、Sだよな？」

「うん、チアキは？」

「α。セイタとハジメもそうだったよな？」

無言の首肯。

「僕もαが良かったな……」

「何何！？　俺達と一緒が良かっ――」

「黙れ愚民一等兵」

「はい」

「ま、明日まで蕎麦作りになることはないだろうなぁ」

「蕎麦作りだったら俺グレて良い？」

「つか、もう消灯になるじゃん、タクちゃんもう眠ーい」

「お前キモーい」

「五月蝿ーい」

久しぶりな平和な会話。

寧ろチアキも眠いってんならもう寝ようよ……。因みに途中からチアキとハルナの会話です。

「――」

「カイト、喋るなら布団から出て来い」

聞こえない。

もぞもぞ動いてカイトが出て来る、お疲れ。

「じゃあ今日は寝るか」

――との事で。

始めからそう言ってくれりゃあいいんだよ、眠いんだから僕は。

時刻も消灯時間ですし、今日は寝ましょう、明日に向けて。

では。

「アサキ、誰に言ってんの？」

「お前まで心を読むなよミトウ」

４４＋寒さ際立つスキー林間。／四

おはよーございます！
結局ぐっすりしたセイタ軍曹率いる５０１号室の面子です！　ちなみに俺様カイリッス。
時刻は六時半、確かに起きるの早いけど、スキー林間とかだとテンション上がって清々しく起きれるもんだよなっ！！
セイタはとっくに起きてるし、タクもハジメもそんなセイタに起こされて

「……皿回し！」

とか

「……ねこそぎ頂き！」

とか、何か夢の延長線を見ながら起き始めた。……何見てたんだこいつ等。

さて、そんなこんなで問題はひとつ。先程――

『アサくーん！　あーさでーす――』

『うるせぇカス野郎』

『よー――……』

って言ってまた寝てしまったのだった。……え？　俺悪くないよ

ね……？　な、泣いてなんかないよ？　ちょっと目が霞んで前が見えないだけさ、ははっ。

「あ、アサキ君……？」

ゆさゆさと揺らしてみる。

パシン

手を払われました。

「あ〝？」

「……」

「珍しくカイトが落ち込んでる！！　ちょ、寝起きだからだよきっと！！！！」

「そうそう！　な、セイタ！？」

「あ、あぁ、多分そうだろ！」

落ち込んでなんかないもん、ちょっとナイーブなんだもん。アサキは起き上がって払ってまた寝てしまった。今あ〝？　って……濁点付けてあ〝って……。

「カイト君ハートブレイキンしたからもう三人で頑張ってな」

「えぇ！？　カイトで無理だったのを俺達で起こせと！？　――ハルナ」

「無理ですぜ軍曹」

「……チアキ」

「無理ですさ軍曹」

「……」

無理な様だ。

「アサキこあいよ～、誰か起こしてよ～」

「ええ……あ、そうだ」

ハルナがバタバタ、そんな中セイタが何か思い付いた様子。……アサキは一向に起きる気配がないけど。セイタがパチンッと指を鳴らす。

「一等兵、二等兵。こんな時こそ――派遣呼んで来い」

「「……おうさ」」

という訳で、そういう事になりました。

「おはよー皆様」

おざまーす、ユウヤでーす。起きましたー、アスカに起こされちゃえば流石の俺も起きちゃいますよー。
久々に一組軍部から要請を頂きましたー、指令は参謀を起こす事。
……Sランク任務……！！！！　アサ君を起こせだなんて……。

「頼むよぅ、あ゛？　だよ??　怖いよぅ」

カイト君がこんなだよ、何されたのカイト君。
最近名前を覚えたハジメ君とタッ君に呼ばれて来たものの――アサ君ガッツリ寝てるなぁ……。

「ユウヤー、お前コイツどうやって起こしてるんだ?」

「え、普通に……」

なので普通に揺らしてみました。

「アーサーくーん！　朝だよー！！　皆に迷惑かけちゃ駄目だよー！！　おーきーてー！！！！」

「クー……」

「……可愛いなぁ」

「「「おいブラコン兄貴」」」

ブレイキンハートしてるカイト以外からツッコミを喰らった。だってさぁ！　誰だって気持ち良く寝てる人を起こしくないでしょうよ！！！！

「むー。アサキー、起きろよー」

「……後五分」

「朝飯食いっぱぐれるぜー？」

「……要らん」

「……帰ったら出てる漫画の新巻買ってやろ――」

「おはよう」

「よし」

「「「……」」」

よーし、アサ君起きたから俺は帰るかなー。

「物かよ、物でつって起こすのかよ……」

ガバッと起きて眠気眼を擦るアサ君を尻目に、何かこの部屋の方々一同落ち込んでいます。こうすればそんなに怖くないんだよぅ。

「じゃ、帰るよー、愛しのアスカが待ってるからー」

「おう、ありがとなー」

セイタ君に感謝され帰る俺。ツッコミがないので微妙に悲しいけどいいよ、もう……。

朝から騒々しかったけど、今日はまさかの晴れだし、この後の詳細はスキーの時に聞こう。

45＋寒さ際立つスキー林間。／伍

「ひゃっほーう！！！！」

「へーい！！！！」

……。

「インストラクターさん、彼等は置いていきましょう」

「え、えぇ？　だ、駄目ですよ！　とりあえずインストラクターですから私！」

銀世界を滑走する二人。……インストラクターさん無視で。

……え？　誰何なんて聞かないでよ、言わなくなって分かるでしょうよ。

……こんにちは、昼になりましてスキーを始めた僕等ですが、案の定インストラクターの方に迷惑をかけること山の如しな我が兄と赤の他人。他の人唖然としてるからさ、帰って来てよ、いやマジで。

「いや、あの二人に関してはさっきサクライ先生からお言葉を言付かっています」

「え、そうなの？」

「《ユウヤとカイリは放っておけ、どうにかしようとしてもどうにもならないから》」

「……」

インストラクターさん――女性で、ピンクのウェアがとても似合う方――は唖然として、そして二人を見て納得した。そして結局Sクラスの僕等にこう言いました。

「皆、あれくらい滑れるみたいだから、好きに滑っちゃっていいわよ☆」

……わお、思い切った決断。

ズザァッ!!!!!

「……」

「ちょ！　アサ君こけた！　アサくーん!!!!」

「はっはっはー！　雑魚いぜアサキ！　俺様に着いて来れないってかー!?」

……こけたよ、嗚呼こけたさ、だから何だっつんだよ、初心者だもん、始めてなんだからこけたっていいじゃん!!

「アサ君立てる？　大丈夫？」

斜面で倒れたまま動かない僕の元に心配そうにユウヤが来る。お

前もそんなにスキー来てないだろうが、何でそんなに上手いんだよ馬鹿野郎。

「平気」

「そか！　じゃあお兄ちゃんと一緒に下まで直滑――」

と言って行ってしまった。つか直滑降って言いたかったんだろうけど滑って行っちゃったから聞こえなかったよ、もう嫌だよスキー……。あいつ等体力無尽蔵だし嫌い……！！！！

「……はぁ……」

「ほら」

ため息をつく僕。

そんな僕に手を差し延べたのはカイト、何だ、お前も滑ってっちゃったかと思った。

「俺がアサキを置いてく訳ねーでしょ」

「あるだろ」

ないとは言わせん。

「まぁ、行きやしょーやアサキ」

「……」

でも、そんな奴等に付き合っちゃう僕も、相当な嫌いだけど。

「……」

「おーい、ニカイドー？」

「――はい？」

下に滑るユウヤ達を見ていたら、ついぼうっとしてしまっていた様です。三人乗りリフトにコウスケ君達と乗る俺、アスカです。

「何かボーッとしてなかったか？」

「いえ、平気ですよコウスケ君」

「ならいいんだ、なっ、ソウ」

「まーね」

そんなに心配して頂かなくても……でも、感謝ですね。

「ユウヤに『アスカに何かあったらお前等地獄の果てに突き落とすからな☆』って言われてんだ、体調不良とかになったらすぐ言えよ？」

「大丈夫ですよ」

「俺達が駄目なんだよアスカ！！」

コウスケ君もソウ君も大変ですね……。
でもユウヤの笑顔が浮かぶ様で面白いです。

「あ、ちなみにコウスケ君はセイカ君でソウ君はライテ君ですからね？」

「「……？」」

ああ、皆様への説明に二人がクエスチョンが。

「でもよく来れたなーニカイドー」

「はい？」

「だって学校すら一週間普通に来れないお前が来れるなんて誰が思ったよ」

「……」

まぁ、それはそうでしょうね。俺だって来れると思わなかったし――来たいとも思わなかった。
昔から学校なんて煩わしいと思う場所でしかなかったですし、元々スキー林間だなんて来る気もなかったです。
でも俺が来る気に、来たいと思えたのはきっと――

「――アスカー！！！！」

「あ」

下からの声。勿論それは――

「――ユウヤー！！」

其の人の声で。

滑ったと思ってたのに何やら戻って来たらしいユウヤの声。下から俺に向けて叫ぶ声に、つい大声で答えてしまう。

大きく手を振って――そのままこけた。よく見えないけど、周りは恐らくアサキ君とカイリ君でしょう。

「ニカイドーでも叫ぶ事あるんだな」

「え？」

「確かに。俺そういうイメージなかったからよー」

彼のお蔭ですよ、それはきっと。

俺はコウスケ君とソウ君とリフトに乗りながら、クスリと笑った。

46＋寒さ際立つスキー林間。／禄

『反省文十枚と、朝までロビーで正座。……どっちがいいかお前が決めろ』

と、サクライ先生が僕等の部屋に来てカイトに言ったのは約十五分前の話。

……こうなるこったろうとは思ったよ僕は。

――あの後リフト乗り場近くに突っ込んでリフト運転停止にしたカイトと、坂から落ちて捜索届状態になったユウヤ。どちらも僕がサクライ先生に報告したら、先生は笑顔で「あいつ等死ねばいいのに」と呟いた。……二人がケロッとしてたのがより先生の怒りに触れた様だ。

馬鹿カイトは反省した態度皆無だったけど、そそくさと反省文を選んだ様だった。

まぁカイトがこうならユウヤもなんだろうな……。

『俺様が帰って来るまで寝んなよ！』

『アサキ、こいつが帰る事はないから寝ておけ』

とかなんとか言われたが……さて、どうするか。夕飯食って風呂入って、まだ十時だけど部屋の奴等は、

「「寝る」」

「お前達昨日の勢いはどうした！？　……まぁ俺も寝るんだが」

……だしな。

――Ｐｒｒ・・・

……ん？

何が鳴ってるんだ……嗚呼、携帯だ。と言っても僕のではない、心配性の母さんが使わない父さんの携帯を僕等に持たせたのだ。だからって何故父さんの……。

ユウヤが持って来るはずだったんだけど、

『ユウヤに持たせたら、ヘマった時先公にバレるからアサキが持った方がいいだろ』

というマヒル兄の冷静なツッコミで僕が持つ事に。……にしても誰から？　母さんかな……しかし見た事のない番号だ、とにかく出てみるか。

ピッ

「はい」

『あ、出てくれましたね。こんばんは、アサキ君』

「え……アスカ君？」

意外な人物からの電話だった。

『ご明察。気付いて頂けて何よりです』

「この番号……ユウヤから？」

『はい、ユウヤを待っている間暇なもので……どうせアサキ君も起きているんでしょう？』

「誰が。僕がカイトなんざ待つ訳ないじゃん」

『でも、寝ないんでしょう？』

……僕はアスカ君に勝てる気がしないね。何故携帯を？　と言った僕の質問に、アスカ君は無料料金が余り過ぎてるんです、と笑った。少し抜けているのは確かだ。

『一度聞いてみたかったんだけどさ』

電話越しのアサキ君の声にふと眠気が覚めました。……うわぁ、ざっと一時間話してますよ俺達。一時間しても帰って来ないという事は、本格的にユウヤ反省文に梃子（てこ）摺ってますね。

『アスカ君って――どうしてユウヤと仲良くなったの？』

アサキ君の質問。刹那の時をおいて俺は笑った。

「変わった質問ですね？　そんなの覚えてません――」

『覚えてる』

「……その確証はどこから？」

『アスカ君は覚えてるよ、絶対』

……ふふっ、凄いですね君は。

「――確かに覚えてますよ、でも――」

『……』

「あまり楽しい話にはなりませんよ？」

『良いよ、ユウヤなんかと仲良く出来るアスカ君は凄いなって思っただけだし』

兄に凄い言い草ですね。

「何故です？」

『欝陶しいじゃん』

「じゃあ、アサキ君は何故カイリ君と仲良くしてるんです？」

『何で……って？　カイトが何かあるか……？』

「だって欝陶しいじゃないですか」

「……ふふっ」

『……ははっ』

ユウヤよりも、アサキ君とは息が合う気がしますね。だから――話しても全然平気かと。

「――今度話しますよ。今日はもう遅いし、俺は眠くなっちゃいました」

『……実は僕も相当キテる。やっぱり待ってらんないよ』

「それじゃあ、また今度。お付き合いありがとうございました」

『うん、ユウヤに宜しく』

「はい」

そう言って俺達は電話を切りました。

ユウヤは未だ帰って来る気配はないですし、失礼して先に寝ましょうかね。明日も朝が早いし、体調を崩せば心配を掛けるだけですから――ね。

47＋寒さ際立つスキー林間。／七

「奥様聞きました？」

「ええ、聞いたわよ奥様」

「昨日ヒコクさん家のアサキ君ったら、人との約束も守らずにすやすやと寝てしまったんですってねぇ？」

「酷いですわよねぇ？　ニカイドーさん家のアスカ君は寝てしまっていましたが手紙を残して下さいましたのよ？」

「まぁまぁまぁ！　随分とお優しいお坊ちゃんですこと……！」

「だからごめんって言ってるじゃん」

おはようございます。朝起きたらカイトがグレ過ぎてこの上なくすっきり起きてしまったアサキです。

……眠かったんだから仕方ないじゃねぇかよ、寝かせてくれたって良いじゃん。

「三時までさ、頑張って反省文書いててさ、寂しくてさ、部屋帰っても寂しいってさ……」

「だからさ、僕が三時まで起きてられる訳ないじゃん」

「でもさ、アスカは手紙書いてくれたってさ」

「眠気ＭＡＸの僕が手紙なんか書いたら“遅ぇんだよ屑が、死ね”とかになるに決まってるじゃん」

さっきからカイトがこんな調子で、少しも滑れてません。最終日ってんでフリー滑走なのに、……うわぁ、雪だるま作り始めちゃってるよこの人。

ユウヤはアスカ君からの手紙のおかげで元気百倍、そのノリのままカイトに絡んでる所為で余計厄介だよ全く。

「ユウヤー、頭作って」

「良いよ～！」

初日あれだけスキースキー言ってた奴等がスキーウェア来て何故雪だるま作りだ。三人一組というルールに乗っ取ってるので、僕は二人と一緒に居なければならないのであって。

僕の件を抜いても……反省文、相当答えたんだなこりゃ。

「る～るるるる～」

カイトがこんだけ壊れたのは始めて見たぞ。

「ユウヤ」

「おいさー」

「雪だるま出来上がったら呼んで」

「ほいさー」

そして僕は出掛けました。
何処にって？　暇だから近くに居た先生の所。

「先生」

「ん？　……あれ、アサキか……？　……アサキ？」

「そうッスよ」

「ゴーグル外せ」

鳴呼、忘れてた。
寒かったんだもん。
サクライ先生は見張りというか監視というか、何ともふてぶてしい表情で僕を見る。隣のアヤメ先生は何時ものニコニコ顔、しかしい何時見ても凸凹コンビな先生達だ。そういえばもう一人は？

「サクライ先生、キクカワ先生は？」

「職務放棄してスキーしてる」

本当に職務放棄だな。

「アサキ君、君はスキーやらないんですか？」

隣のニコニコ顔――アヤメ先生が僕に言う。
黙って雪だるま作成中の二人を指差す。
先生達、黙って納得。

「何だ、あの陰険な奴等」

「サクライ先生の拷問が効いたんじゃないですかね」

「アヤメ貴様、拷問とは人聞きの悪い。俺は教育的指導をだな」

そんなに酷かったのか、サクライ先生の反省文を書かせる拷問は。

「まぁ奴等がそこに居るのは見張りやすくて助かるな」

「それは確かに。でも……アサキ君は暇でしょうに……」

「いえ、僕は運動嫌いなんで」

寧ろ早く帰りたいんだよ。

サクライ先生は呆気に僕を見てため息をついた、酷いなおい。

「お前ってよ、何でそうやる気ねぇんだよ」

「はい？」

「中学くらいならよ、もっとスキーやってたーい、とか思わないのかよ」

「思いません、あいらぶ家」

「其処まで言ったなら家も英語にしろ」

自由な言い合いだと自分でも思う。……先生じゃないけど、結局一日しかスキーやってないな僕。三日あったのに何だこの最短。

「あー君、雪だるさん出来たよー」

「どなたそれ」

ユウヤがスキー靴をざっくざっく踏み鳴らしてやってきた。雪だるさんってどなた。

「あ、先生達も雪だるさん見て見て」

――そこにはスキー板とストックを使った雪だるまが。

「お前等スキーをやる気は皆無なのか」

「えへへ」

折角のスキー板なのに足にされてしまって……。というか四本もスキー板足に使ってるのかよ、あれ普通に滑っちゃったりすんのかな……。

そして照れてる様だが褒めてないぞ先生は。

「雪だるまを作ったのはいいんですがね」

「ん、何何アヤちゃん」

「そろそろ帰る時間なので、壊して下さい」

「アヤちゃん薄情者！！！」

アヤメ先生は雪だるまを壊せと言っただけで薄情者にされてしま

いました。遠くのカイトですらこっちを見ている、……え、雪だるまってそんなに大事……？

「馬鹿野郎、雪だるまなんざスキー場のリフト近くに残せないだろうが」

「でもー……」

「でももかしこもねぇ」

「かしこ！」

「カイリ殴るぞゴラァ！！！！」

サクライ先生がキレた……！　遠くのカイトのボケにもツッコめるサクライ先生はやはりツッコミかな。（※どうでも良い思考えですが本人は至って真面目です）

つーかこのギャグ、昔ユウヤから聞いた。

「ほら、せめてお前等の手で葬ってやれ」

サクライ先生は最早二人の思考回路に合わせてそう言い、二人は雪だるまの方へと向かった。

「――短い付き合いだったね」

「思い出をありがとう……雪だるさん」

其処だけ空気が重い。

帰ってくれないかな、あれ。

「楽しかったよ、また何時か……いや、一年後、銀世界で会おう――」

「また、この空の下で会えたら……！」

「アサキ、いつ終わるんだありゃ」

「心配しなくても平気ですよ、終わりませんから」

ざっくざっくと二人に歩み寄る。ゴチャゴチャと未だ言っていたから、思いっきり――雪だるさんをキーック！

「「あー！！！！」」

「何時までやってんだよ馬鹿共！　早く行くぞコラ！！」

「あ、あ、アサ君の人で無し！」

「人殺し！」

「うっせバーカ！　雪だるまは雪だるまなんだよ！！！！」

ぐずぐず五月蠅い馬鹿共を引きずってスキー場を後にする僕。

「やっぱあの二人の扱いが一番上手いのはアサキだな」

「みたいですねぇ……。ユウヤが五月蠅い時、借りていいですか？」

そんな先生達の話はさておき、スキーの閉講式を終えて僕等は帰

りとなった。

……やっと終わるか、スキー林間。

48＋寒さ際立つスキー林間。／埜

……。

響くは動くバスの音、バスの中は――無音。

ちわ、カイリッス。スキーとか来た後の帰りって、大体皆こうなってるよな。俺達のバスも案の定で、耳を澄ませばすやすやと寝息が聞こえてこなくもない。

「……」

俺の隣の方――勿論アサキだ――も例外ではなく寝ていらっしゃる。しかも俺達の席は一番後ろａｎｄ二人だけだし前も居ないといった超孤立空間。何故って？　だってアサキが、

「五月蝿いのは嫌いだ」

とか言い出すんだもん。俺様偉いからそんな友達の要望聞いてやったんだぜ、偉くね？

それはそうとして――暇過ぎる。

一つＰＡ（パーキング・エリア）越えて次にもう着くけど、それから二時間程またバスらしい。アサキも起きないし起こしたくないから（※怖いから）暇ー！！！！

ユウヤが居れば何かあるだろうに、何故あいつと俺はクラスが違うんだ！　……や、アサキと同じクラスの方が良いからいいんだけどさ。双子って必然的に違うクラスだし。

――暇潰しに、この三日を振り返ってみよう。

行きのバスは皆テンション高かった――アサキはずっと低かったな、この低血圧――、菓子をがつがつ食っては騒いでた。俺は騒ぎに参加しようか迷ったけど、山道は揺れて今食うと大変だってアサキが言ってたから騒がないで大人しくしてみた。

案の定皆山道でダウン。一部を抜いて青白い顔した奴等を嘲笑えて楽しかったぜ。皆の傍ら、モモが平然としてたのが一番面白かったかもしれない。

スキーは……あれ、余り思い出がない。雪だるさんの思い出しかないってどういう？

リフトに突っ込んだのは……思い出にしたらサックラ先生に殴られそうだ。

――にしても、あの反省文は死ぬかと思った。先生を目の前に延々とシャーペンを動かす。普段二分も集中力が続かない俺にとっては――……あはははは！！　もう二度と思い出したくねぇぜ！！！

アサキは寝ちゃうし、あーあ、つまんなかったなー、スキー。

……でも、つまんなかった理由、少しだけ分かる。だって俺の日常って――他愛無い毎日の方が楽しいから。横で眠ってるこいつと仲良くなってからの毎日、つまらない日の方が少ないし。唯くっだらない日々が楽しいんだ、それなのにこれ以上楽しい事を求めるなんて罰が当たるぜ。

俺は――アサキと友達になれて良かったと思ってる。……まぁ、未だに他人とか言われるけどさぁ！

でも、楽しい毎日が送れるのって、アサキやユウヤ達のお陰だって思ってるし。……楽しいだけじゃないってのは分かってるぜ？

未だ無いだけで、絶対何かが起こるとは分かってる。でも俺は、其

れだって真っ向から受けるつもりでいる。
　自分が五月蝿いのとかは分かってるし。五月蝿い、とか言われたのはアサキ達が最初じゃないし、でも――こんなに楽しい気持ちになる友達は初めてだから。

「――……」

「お？」

　道を曲がったバス。どうやらＰＡに着いたみたいだな。その振動でアサキが俺の方にもたれ掛かってくる。……これは起こすべき……？

「集合は十五分後だからなー！　遅れたら置いてくぞー！！」

　サクライ先生のそんな声で、クラスの一部起床。ふっ、甘いなサクライ先生。アサキがその程度で起きると思うな！！　つーか寝てる人起こさなくてよくないか先生！！

「……アサキー」

「……」

　――ごめんなさい、俺に起こす勇気はありません。怖いもん、こんなに安らかに眠ってるのに起きたら絶対悪魔だもん。これ以上声張れないって……！！！！

「ロクジョーくー……ん？」

　クラスの女子より俺達と仲が良いモモがやってきた。

「アサキ君、起きないの？」

「起きないし、起こしたら後が怖い」

「そ、なんだ」

苦笑してモモが言う。

嗚呼、出来ればどうしたら良いのかの具体案を下さい。

「あっ君居るー！？」

具体案くれそうな奴来ました。

「何処だい何処だい、どうせアサ君が直ぐバスを出るなんていう元気な事してないだろい」

その通りだユウヤ。

「……お」

「ユウヤ様、これを起こして下さい。俺身動きしたら起きそうで」

「じゃあ動けばいいじゃなーい」

「だって殺されるでしょ！？」

此処で起こしたら確実に殺られる、逃げられる気がしねぇ……！！！！

モモはニコニコしてるし……ってユウヤもニコニコしてる。

「じゃ、動かないであげてよ」

……けど、何かいつもと違って柔らかい笑顔な気がする。

「アサ君昨日、十二時過ぎまで起きてたみたいだから眠いんだよ、多分」

「普通じゃねぇか」

「普段１１時前に寝ちゃうアサキだよ？　結構頑張った方だよ～、だからいじけないであげてねカイト君」

ユウヤは俺達の前の席から立て膝でこちらを見て、寝ているアサキの頭をポンポンと叩いた。勿論起きないけど。

「ほら、アサ君お子様だからさ！」

「そんな事言ったら殺され――「コロス」――起きてる！？」

……寝言みたいです。タイミングが恐ろしく丁度良い。

ユウヤは最後にボケたけど、やっぱりアサキの兄貴なんだなぁ……と、俺は思った。

「そういえばモモ、お前何か用あったんじゃねぇの？」

「あ、そうだったね」

ニコニコとアサキを見ていたモモは、席から持って来た小包を数個取り出した。

「此れを渡そうと思ってね」

「？」

「三人のあるよ～。はい、ユウヤ君とロクジョー君」

それはきっれーいにラッピングされていて、小さなカードにはこう書かれていた。

「……ヴァレティン？」

「ユウヤ、どんだけ英語苦手だよ――“バレンタイン”だろ」

俺様唯一得意科目英語でそう書かれていた。

「うん、遅くなっちゃったんだけどね、スキーの時に渡そうって、リョウちゃんと作ったの」

「うわぁ！　ありがと、モモちゃん！」

ユウヤはキラキラした目でペコペコしている。……甘い物って偉大だな。

「アサキ君にはリョウちゃんが渡したかったみたいなんだけどさ」

「あー……だろうな」

「だろうねー」

ユウヤも俺も流石に気付くわ。流石にリョウコちゃん……だっけ――余り面識がない俺ってどうよ――はあからさま過ぎる。

「でも勇気が無いみたいだから、来年頑張るんだって」

ほう、受験中に頑張るのか彼女は。

「ユウヤ君、もう一個、ニカイドー君に渡してもらえるかな？」

「うん、分かった。モモちゃんからだって伝えとくね」

「うん」

ニコニコと笑うモモは楽しそうだ。アサキは一向に眠ったままだから、鞄の上に置いておいた。

「ユウヤ君、そろそろバス出る時間だよ？」

「あ、本当だ」

モモが腕時計を見る。ユウヤはピョンと席から飛び降りてバスを後にする様だ。

「帰り、マヒル兄が迎えに来てくれるらしいから一緒帰ろーよカイト君！」

「おう、そうさせてもらうわ」

ユウヤはそれだけで満足みたいで、バスに戻って行った。

「ユウヤ達って元気だよね」

「だな」

それじゃ、とモモも席に戻って行った。

そんなに思い出ないスキー林間だったけど、

「――うん、楽しかった」

肩に多少の重さを感じつつ、手に持った小包を弄びながら俺は呟いた。

バスが出発する――楽しかったスキー林間から、より楽しい毎日へと。

49＋コマンドに従ってちゃシャレになんないよ。

スキー林間の次の日って事で、休みです。こんにちは、ユウヤですー。暇ですーやることないですー休みって何なんだよー。

「という訳で、市内探検中」

口に出してみても、悲しいくらい響く声。平日の昼の路地なんてこんなもんさ、人っ子一人居やしないぜ！

「うむむ、暇過ぎるから外に来たのに余計暇過ぎる」

こんな事なら大人しく家でゲームすべきだったかもしれない。

とかなんとか考えていると、少し奥の道から女の子が現れた。こんな時間に俺とそう歳の変わらない女の子……？

どうする？
話し掛ける
スルーする
↓様子を見る

――何だ今のコマンド。どうやら今日はそういうのでお送りしているらしい俺の脳内。

まぁ良いや、ここは脳内に現れたあのコマンドの言う通りにしよう。

「……」

「……あ、すみません。お聞きしたい事が――」

話し掛けられてしまった……！！！！！
おいコマンド！　話し掛けられてしまったよ！　次はどうするんだよ！！

次はどうする？
殴る
⇒蹴る
食べる

――出来るかぁぁあああ！！！！！
何で女の子蹴るのさ！！　というか最後の選択肢危ないし！　色々危ないし！！！！！　あ、意味の分からない子は、決してお母さんに意味を聞いちゃいけないよ～？
とにかく、スルーしよう。女の子じゃないぞ、コマンドをだ。

「何だい？」

「最近こちらに引っ越して来たのですが、知り合った友達が家を教えてくれなくて」

「何とも卑劣な友達だ！」

「この辺だと聞いたんだけど、此処ら辺に中学生が住んでるお宅ってありますか？」

俺は少し考える。んー……此処らに中学の女子が住んでる家なんてあったかなー……？　名前はプライバシー的に聞けないし……。

「多分ないと思うんだけど」

「そうですか……。まぁ、明日会うからいいんですけど」

「そうなんだ、その友達懲らしめちゃえ！」

「ふふっ、そうします」

凄く可愛い子だな、明日会うっていうからには、明日転入するのかな……？　ボーイッシュな服がとても似合う子だと俺は思った。

「この辺って事は、中学は空乃になるのかな？」

「はい、そこですね」

空乃中学校とは、俺達が通う中学であって。じゃあ、明日から同期生って事か。でも面白そうだから、明日会って驚かしてやろう。

……一年生だよね？

どうする？

聞く

聞かない

↓千鳥足

だから意味分からないよ！！

最後の選択肢が千鳥足な意味が分からないよ俺の脳内！！！！

俺の頭か？　俺の頭がふーらふら？　あー、確かになぁ……ってやかましいわ！

「それじゃあ私は行きますね、わざわざすみませんでした」

「ううん。平気。役に立たなくてごめんね」

そう言って彼女は行ってしまった。可愛いかったなー。

……後でアサ君に話そー。

どうする？

↓面白おかしくあることないこと話す

正直に話す

殴られる程話す

だからやかましい！！！！

最後まで変なやつ！！！！

そしてその“少女”はと言うと、

「ふむ、結局見つける事が出来なかったなぁ……。あの少年には悪い事をした。……明日聞くとしよう――アサキには」

そんなことを言っていた。

50＋スキーの後のカウンター攻撃。

「アッサくーん！」

「ん」

「そういや聞いてよ～！」

と言って、ユウヤの昨日の武勇伝を聞かされる憐れな僕。こんにちは、アサキです。久しぶりの学校がたるいです、もう少しで春休みだ、頑張れ僕。

ちなみに今日は一日テストです……え？　何の？　学年末だよ。スキー林間の後にテストとか、世界はどうなってるんだろうな、あははは。全てを捨て切ったユウヤは逆に開き直ってハイテンションだ、大丈夫かよコイツとツッコみたくなる。

「――って訳で、可愛い転入生来たよね？」

「可愛い転校生？　……あー、来た来た」

そう、テストは受けないけど今日から――と言ってももう春休みだけど――此のクラスに転入生が来たんだった。今カイトと図書室に行って……嗚呼、帰って来た。

「あいつだろ」

僕はそっちを指差す。カイトはだらし無くたらいまー、と声を上げる。ユウヤはそんなカイトと転入生――ユキを見て固まった。

「ただいまアサキ。やはり図書室というのは良いね、私にはうってつけの場所だよ。……って……君は昨日の……！」

「き、君……昨日の子……？」

ニコリと笑うユキを前に、ユウヤは口をパクパクと動かして指差した。どうやら唖然としている様だな。

――まぁ、間違えてたんだから仕方ない。

「嗚呼、また会えて嬉しいよ君。同じ学校なのならば言ってくれればば良かったのにね」

「あ、やー……びっくりさせよっかなー、と思ったらさ、俺がびっくりしちゃったよ」

「うん？　それは一体どういう……嗚呼、もしかして君も間違えていたのかな……――私が“女”だと」

そういう事だ。

サキネユキ――誰もが見惚れるんじゃないかというくらいの端正な顔立ちからは予想出来ない性別。そう、彼女――いや、彼は男だ。

「先程会ったばかりのカイリにも、同じ反応をされたよ。『お前男？』ってね」

「昨日会った時はてっきり女の子だと思ってた……！　ごめんね！？」

「いや、良いんだよ。私は慣れているからね」

ニコリ、と、ユキは特徴のある一物ありそうな笑みをユウヤに向けた。……まぁ、それがサキネユキって奴だから。

「ところでアサキ、それに昨日会った君も、二人はどういった関係なんだい？　私的に考えると、兄弟というのが妥当な線かな」

「正解。学年的に一緒だから双子だけどな」

「フフッ、良かった。名前を聞いてもいいかな？」

「俺？　俺はユウヤ、アサ君のお兄ちゃーん！　宜しくねー、ユキちゃん！」

ちゃんかよ。

「ああ、宜しく頼むよユウヤ。ちゃん、というのも斬新でいいかもしれないね」

お前もお前で否定しないのかよユキ。

「ふむ……アサキのお兄さんにしては元気が宜しい様だね。アサキのご家族は皆そうなのかな？　アサキは突然変異体？」

「「……？」」

「ユキ、その馬鹿共には捻った言い回しは通じない、脳内で漢字変換すら出来てないから」

ユウヤとカイトが首を傾げたので、僕はため息をひとつついて言

いやった。……相変わらずユキは楽しそうに笑ってるけど。

「実に楽しい学校生活が送れそうだ。クラスが別たれたとしても、是非仲良くしてくれよ、アサキ、カイリ、それにユウヤも」

「おー、ユキは頭良いらしいからな。アサキ以外にも頭良いキャラが増えて俺は助かってる」

要するに、写すノートの出所が増えたとカイトは言いたいらしい。

「ユキちゃん、女って思うと可愛くて、男って思うと美男子だよねー」

「うん？　何を言うんだいユウヤ。可愛いと言うならば自分の弟を見てみろ」

「ユッキー、登校初日で病院逝きになりたいのかな～？」

「ユキ、そのテのギャグは心してかまさないとアサキがこうなって殺られるぜ？」

「心したよ、カイリ」

クスクスと笑うユキ。反省の色は何処に行った。

……まぁ、楽しい仲間が増えたんだ。今日は許すとしよう。

とりあえず今は、目の前のテストを頑張りますかね。

51＋未来について考えた。

「つーかさ、絶対にあれはチートだろ」

「そりゃあだって……ねぇ？　でも俺から言わせれば、アサ君がやるキャラは皆チートだよ」

強いもん。

こんにちはー、ユウヤです。今日は休みなので昼過ぎてアサ君と買い出しに行って来ました。帰りだけど話題は何故かゲームの強いキャラについて。チート的強さのキャラって居るよね……アサ君はもう、何でも強いけど。

家に着くと玄関のドアを開ける。……あれ、靴が増えてらぁ。……そういや鍵閉めたはずなんだけど……？

「「お帰りー」」

ひょこ。

っと現れたのは何とマヒル兄とその友達のせっちー。

「……何」

「相変わらず冷たい反応ありがとうアサキ、大学は休みになったから帰って来たんだ」

「で、そっちは」

「そっち!?　俺そっち!?」

アサ君はこの前のお酒騒動（※内容はマヒル兄に聞きました）以来せっちーへの対応が酷い。……仕方ないけど。

「セツは身寄りがないから連れて来たんだ」

身寄りの使い方が違うよ。……セツさんほぼ居候らしいもんね。最近マジ自宅に帰らないらしいから。

「……家では飼えないよ、マヒル」

「いや、部屋で飼うからさ……ダメ……？」

「……ん？　いや、待て待て待て。アサキ君もアサキ君だが、友達を部屋で飼うとかナチュラルに何言っちゃってんのよマッヒー!?　ちょっとちょっと！　ユウヤ君、君の兄弟はなんて鬼畜なんだ!!」

「マヒル兄とアサ君だから、仕方ないってー」

しかも二人して真顔だから怖いよねぇ。俺も困らされるよあっははは。

まぁそんな方々は放っておいてっと。……普段はこのキャラ位置はアサ君の役目なんだけどな。

少ししてから四人でソファに座り、お茶を入れて団欒。うーむ、やっぱりマヒル兄が入れたお茶は美味い。

「大学生はいいねぇ……。俺達なんか未だ二週間あるのに……」

「ははっ、頑張れ中学生。来年は受験生だな」

ほのぼのとした空気に受験なんて言葉を持ってこないで欲しいね、せっちー。

「アサキもユウヤも、まだ志望校とかは決まってないんだろ？」

「うん」

「勿論だとも」

受験生か……一年後、俺は一体何処の高校に入る事になってるんだろうなぁ……。今の調子じゃ、アサ君が志望校落とさないと一緒にはいけないだろうし……アスカは……あの身体で高校行けるのかな？

「高校行きたくないよ俺」

「お前にしちゃあいきなりネガティヴな発言だな」

むー、と言う俺の発言に反応したのは他でもないマヒル兄。目の前のアサ君は、せっちーに絡まれて煩わしそうだ。

「だって友達と別れちゃうんでしょ？　俺そんなの絶対嫌だよー」

「まぁなぁ？　下手したら――しなくても、お前の場合アサキとも別れる事になるだろ」

「嫌だ！！！！」

叫んでみても虚しいだけ。だってマヒル以外聞いてないんだもん……！

「まぁ聞けや弟。まず、今のお前の頭を1としよう」

「うん」

「アサキの頭はどれくらい上だと思う？」

「１００」

「正解」

「正解！？　俺そんなに格下だったの！？」

「お前自分で言ったんじゃないかよ」

「ボケに決まってんじゃんかよぅ。俺はボケなんだからツッコミにさせんでよぅ」

久しぶりにマヒル兄と話すけど何だろうこの悲しさ。ツッコミって大変なんだな……アサ君お疲れ様。

「つー訳で話戻すぞ？　アサキと同じ高校に行きたいなら、お前にゃせめて５０の頭が必要という訳だ」

「いきなり５０倍の頭になれと」

「そう、まだ一年ある……なんて言ってっとお前死ぬぜ？」

「んー……勉強、か……」

馬鹿な自覚はあるけど、危ない自覚がないから無理なんだよなぁ。
どーしましょ。

「……もっと分かりやすく言ってやんよ。俺が見た感じのお前等の偏差値はアサキが６０前後でお前が４５くらいだ」

「落差あり過ぎじゃないッスか」

やばい、少し実感が沸いて来た……！！！！　数字って恐ろしい！
まさかアサ君と俺の間に１３の差があるとは……！！

「そう、お前等には１４の差がある」

……引き算をしくるとは思わなかった。

「しかもだ。今やる気皆無なアサキがもし、やる気出したとしたら？」

「……あれ？　突き放されて終わるんじゃね……？」

「正解」

そこも正解なんだ……！！！！　俺どうすりゃ良いんだろう！
しかし、焦る俺に意外や意外、

「――考え抜けよ」

「……？」

「お前が許せる選択肢に巡り会えるまで、考え抜け。無論、選択肢を作るのは――お前自身だけどな？」

「何だよ……セツの癖して良い事言うじゃねぇか」

せっちーがそんなことを言った。なーんてな、なんて後に付けて誤魔化してマヒル兄と絡んでるせっちーだけど、……うん、今のは格好良かったかも。

「……ま、頑張るのは今からでも遅くないよ、ユウヤ」

「……だね」

俺とアサ君は、そうやって笑った。

52＋場違いにも程がある話し合い。

『あーおーげーばーとーおーとーしー』

とか歌うのはいいと思うけど、卒業式って昔から基本泣けない。つー訳でただ今卒業式の真っ只中。未だ二年だから関係ないんだけどさ。アサキです。

『皆様、ご着席下さい』

教頭がんなことを言う前から座っていた僕は、名前の順的に隣のハルナを見た。

「なぁハルナ」

「何よ。式最中に私語は厳禁だぜ？」

「は？　お前誰に言ってんの？」

「ごめん、アサキにルールとか通じないんだった」

其処で引き下がられても悲しくなるからやめて欲しい。

「俺達来年卒業だぜ？　早くね？」

「別に」

「おおう。お前から話しかけてきといて会話即中断させんのやめよ

うぜ」

「悪いな、でもさ……卒業式って何が悲しい訳？」

「別れとか？」

「ありえない」

「雰囲気とか――」

「ノリかよ」

「出発と――」

「白々しい」

「人の意見をことごとく否定すんなよ！！！！」

シィン――。

ハルナの声が体育館に反響。

「「……」」

『ゴホンッ。続きまして――』

隣を見ると、真っ赤なハルナ君が居ました。

「お前なんか嫌いだ」

嫌われてしまった。……まぁ構わないんだけど。

「恥ずかしさのあまり俺は死ぬ。骨はアサキ、拾ってくれ」

「たりぃよそんなの。ユウヤに任せる」

「呼んだ？」

適当に名前を出してみたのだが、やはり居たかユウヤ。そりゃ後ろの席だから居るだろう。

「ハルナが死ぬって」

「ごしゅーしょー様」

「お前等嫌いだ……！」

兄弟揃って嫌われてしまった。……まぁやっぱりいいんだけど。

所かわって。

「ふぁ……」

「あー、駄目だよイツキ先生。とりあえず教師なんだから欠伸なんてしてちゃ……というかさっき叫んだのって先生のクラスじゃ……」

「そうだぞイツキ君。一組の皆は、君を見て将来大人になるんだからな！」

「うるせーシロクロコンビが。俺が何処で何しようが勝手だろーが」

此の人は自分が教師としての自覚があるのかな……。あ、初めまして、アヤメと言います。

パイプ椅子にかったるそうに座ってる彼は一体何故教師になったんだか。

「式中なんだけどなぁ……」

「卒業してんのは俺のクラスの餓鬼共じゃねぇ」

「てかあんたとシロちゃんは新任教師だったじゃーん。来年が楽しみ楽しみ……イツキ君、泣くかね」

「誰が泣くか。餓鬼共が卒業するくらいで泣く訳ねぇだろうが、これから何度卒業を見ると思ってんだよ」

「うわ、禁句を吐きやがった」

平和な同僚方です。特にイツキ先生は同期だけど、こんなにたくましい同期というのもどうかと……。クールを越えて、傍若無人って感じです。

というか二人共、今卒業式中なんですってば。

「悪いアヤメ、寝ていい？」

「駄目に決まってるでしょうが。後で色々仕事押し付けるよ？」

「嫌だ。お前マジ半端なく押し付けてくんだろ、絶対」

それくらい言わないと素で寝るからに決まってるでしょうが。
僕を挟む形でパイプ椅子に座っている二年担任教師。さっきからひそひそとよく分からない話で（※主に両端が）盛り上がっている。
……卒業する生徒の事なんて考えちゃいないよ此の人達。

「つーかさぁ、来年度どうするよ」

「何がだよキクカワ」

「クラス変えだよ、ク・ラ・ス・変・え。受験もあるし、出来ることなら頭良い奴欲しい」

「わー、コクシ先生黒い。コクシなだけに」

「お褒めの言葉ありがと、シロちゃん」

「褒めてねぇよ」

確かに褒めてないって、コクシ先生。

「とりあえず、ヒコク兄君はまたシロちゃんが持ってね」

「え、またですか。三年とも僕で良いのかな……」

「良いんじゃねぇの？　俺もユウヤは嫌いじゃねぇがクラスに居るのは嫌だ。……じゃあキクカワ、弟どうすんだ」

「あんた持ちなさいよ。……私でも良いけどあの子、すんごく扱いにくいんだから」

「ああ、お前国語だもんな。あいつ国語寝ちまうだろ」

「起こすの可愛いから無理」

「教師失格だな」

コクシ先生って可愛い子に甘いからなぁ……。小さいですからね、アサキ君は。……本人に言ったら睨まれそうだけど。英語は真面目に受けてくれるからまぁ良いか。

「最近転入してきた奴はアサキと仲良いから俺が持つか。あいつ頭良いし」

「うわ、何、あの子頭良かったの？　私ったら唯可愛いだけかと思ったわー……」

「嗚呼、じゃあアスカ君は僕に持たせて貰って構いませんか？」

「ああ。つかそうしねぇとユウヤがキレるだろ」

「そうねぇ……でも、新しい友達を作ったりしなきゃじゃないのかね」

「良いんじゃねぇのか？　……つーかもう、持ち上げちまおうぜ」

「え、良いの其れ」

「良いねー。私が校長締め上げ――ゴホンッ、言っておいてあげるわ」

今聞こえた台詞はスルーしてあげて下さい。僕も面倒ですから。

……って、あ。卒業式、終わっちゃった。

絶対。絶対絶対絶対に――校長室に呼び出しくらいそう。

53＋口下手、だけど狡猾じゃない少年は。

「カイリ、アサキ達の家は此処なのかい？」

「おう。何千何百回と来てるから間違えやしねぇぜ！」

「俺も久しぶりに来ましたね、ユウヤ達の家にはー」

「わ、わわわわ私も初めてよ……！　外から見るのは二度目だけど……」

「リョウちゃん、落ち着いて……」

ちーっす、カイリだ。

ただ今俺達はアサキとユウヤの家の前に平々凡々と佇んでいる。

発端はというと何でもユキが、

『アサキとユウヤが双子にも関わらずあれだけ性格に変格が訪れた、という事実は実に興味深い。是非お宅拝見といきたい所だね』

と語っていたから連れて来てみた。今日は半日だったから、二人を先に帰らせてから学校帰りにちょちょいとな。

んで、二人だけじゃつまらないなー、と。たまたま会ったアスカを誘ったらニッコニコでオーケー、自分から、

『あ、私もアサキ君達のお家行ってみたいな』

そう言ってモモがついて来て、連れにてリョウコがついて来たっ

て訳だ。

「何で私があんたに呼び捨てされなきゃいけないのよっ！」

「まだ呼んでねぇよ」

俺様にさん付けとかいうキャラ設定はねぇ、最初だけだそんなの。ま、それはさておき、とっとと乱入しましょうかねー。

俺は勝手にインターフォンをプッシュ。

ピーンポーン――

「突然お邪魔して平気なんでしょうか……」

「アスカは常識があるんだね、私は全くお構いなしで来てしまったよ」

アスカは多少苦笑しているが、ユキは完璧に爽笑。実に良い笑みだと思うよ。何時仲良くなったんだお前等。

「リョウちゃんリョウちゃん、アサキ君家だよ！」

「そ、そーね！　ご家族に挨拶しなきゃ……！！！！」

さっきまでユキが男だと知ってほっとしたりアサキん家ってんで緊張したりユキが男だと知ってほっとしたり（※大事なので復唱）してたリョウコが、モモとひそひそ話している。相変わらずで悪いんだが――駄々漏れ的に聞こえてるんだけど。

カチャ――

「《はい、どちら様です――何だカイト君、はいはい待っててー》」

ガチャン！！！！

「「「「……」」」」

「早いよ、恐らくマヒルさん……」

カメラ付きインターフォンなので名前を聞かずに切られた。後何故か勢い良く。

……マヒルさん、帰って来てたんだな……。

「ま、マヒルさんって何方（どなた）よロクジョーカイリ！！」

「え、二人の兄ちゃん」

唖然としていたリョウコが急に俺に聞いて来た。

「おに、おに、お兄様ですって！？」

「何か今の“鬼☆鬼☆お兄様”みたいだったね」

「黙りなさいサキネユキ！！！！」

ユキって実はボケなんだよな、絶対ツッコミだと思った俺爆笑。

と、くだらない事を話していると家の方から足音がひとつ。玄関

の扉が開き、其処からマヒルさんがやって来た。マヒルさんって怖いんだよなぁ、見た目がかなり。髪で隠れてても目付き悪いし、マジでアサキ達と血が繋がってるのかって感じの人だから――

「――悪ィ、今アサもユウも買い物行ってんだ……って、……？」

あ。

マヒルさんは――実にだっるそうな調子でパジャマ姿だった――地味な半袖半ズボンだ、寒くねぇのかな――。そして大人数な俺等に驚いている。……あ、隠れた。

「てめ、ダチ連れてんなら先言えよ！　うわー、マジショックじゃん、ダサい兄貴マジショックじゃん」

「言う時間すら与えてくれなかったじゃないッスか」

「うるせ」

俺を抜けばアスカを抜いて三人が唖然としていた。寝起きなのか目付きがかなり悪いマヒルお兄さんは、ダサい格好でも普通に恐ろしかった。……まぁ、始めは俺もそうだったし。

「何か少し遠くまで行くとか言ってたけど、どうすんだ、待つか？」

「待っててていいならー」

「じゃあ入れ。俺ァ着替えてくっから」

そうして俺達五人はマヒルお兄さんだけのヒコク家へと潜入した。

……いや、深い意味はないんだけど。

「へぇ……此処がアサキとユウヤの家か。一見何も変わらないじゃないか」

リビングでうろうろするユキ。モモとリョウコはちゃんとソファで大人しくしてるというのにユキは凄い好奇心だな。

「変わらないだろ、普通の家なんだから」

「まぁ、そういう事みたいだね。仕方ない、大人しくお兄さんを待つとするよ」

そして結局ソファへと座った。

ソファに座りきれないので、俺とアスカは普通の食卓机に座る。

暫くがやがやしていると、二階からマヒルお兄さんがやって来た。先程とは違いしっかりと今風の黒基調の私服を着て、ワックスで綺麗に整えた髪は凄く様になっている。……髪質はアサキ寄りなんだなマヒルお兄さん。

「マジ悪ィ、今日に限ってあいつ等出掛けちまってよ。あ、アスカ君お久ー」

「や、俺達が約束もなく来たのが悪ィんス」

アスカがお久しぶりです、と返してからマヒルお兄さんはそんな俺の言葉にニッと笑い、キッチンへと入っていった。

「冷たいんと温かいんどっちがいい？」

「冷たいの。皆はー？」

そう聞いたけど、皆頷いただけだった。女子（※ユキ込み）共はまだ緊張してる様だな。

しかしマヒルお兄さんはお構いってのがない。麦茶を持ってやって来るとガンガン喋り出す。

「なな、君等ってモモちゃんとリョウコちゃんとユキ君？」

「ふぇ？」

「は、ははは い」

「何故、私達の事を？」

「ビンゴ。いやぁな、弟達から色々聞いてるからよ、俺。あ、マヒル、俺マヒルっつーから気軽に呼べな？」

実に楽しそうにそれだけ言うと、ソファの方から戻って来て向かい合う俺とアスカの隣、一角の食卓席に座った。

「二人のダチが家に遊びに来るんなんて久しぶりだなー」

「え、俺が来てるじゃないスか」

「お前抜いてだよ馬鹿。アスカ君も最近来てなかったからなぁ」

「ええ、少し体調が言うこと利かない時が多くって。それにマヒルさんが一人暮らしを始めた影響もあるんじゃないですか？」

「違ぇねぇ！」

こっちだけ盛り上がりモード。

ソファの方の人達がシラケてそうだ……！！　しかしそんな所に気を遣えるのはマヒルお兄さんの特殊スキル。

「じゃさ。ユキ君は転入生なの知ってるけど、モモちゃんとリョウコちゃんは何でアサキ達と仲良くなったんだ？」

そんな話題をモモ達に振って話題を広げた。

「え、えと……色々ありまして……」

「私が、ヒコクア……アサキ君に喧嘩仕掛けました」

流石に身内前じゃあフルネームは止める様なリョウコ。しかしその言い方だと凄いぜおい。……つーか、俺もその話は知らないんだけど。

「喧嘩？　リョウコちゃんがアサキに？　ははは っ！　……普通に面白ぇよ其れ」

「あぁ、確かカイリ君が出席停止の時でしたね」

「そうそう、騒ぎを見逃すなんて俺様としたことが……！」

本当に惜しいことをした。

「わ、私達が走っていたらアサキ君にぶつかっちゃって……」

「それに私がカッとなっちゃってアサキ君悪くないのにキレちゃって……」

マヒルお兄さんは腹を抱えて笑い出した。……笑い過ぎだよマヒルお兄さん。続けて続けて、と言っているから、何か話す度落ち込んでいく二人は続ける。

「アサキ君に言葉で丸め込まれたのが悔しくなっちゃって……つい、酷いこと口走っちゃって……ユウヤ君とも喧嘩になっちゃって……」

「私がユウヤ君叩いちゃって……」

「私逃げちゃってユウヤ君もアサキ君も何も悪くないのにしかもアサキ君慰めてくれちゃってなのに私あああもうごめんなさぁああいいいぃぃ！！！！」

リョウコ発狂。

……マジで何があったんだろうか、居なかった俺には分からない。

――と、何時の間にかマヒルお兄さん、笑い止んでいた。

「まぁまぁ、リョウコちゃん落ち着いて」

「す、すみませんマヒルさん」

「いい、いい。結構波瀾万丈な出会いだったことは分かったよ。…

…アサキと口喧嘩なんて二度としない方が良いぜ？」

「私も、そう思います。……彼が話す言葉って、間違いがなかったから」

「あぁ。アサキは自分が悪いと思ったら口答えなんてしねぇからな。……ちなみにリョウコちゃん、何口走ったんだ？」

「……」

リョウコは流石に吃った。そりゃあな、ユウヤがキレた台詞を言う訳にもいかないだろう。するとその場に居たのであろうアスカが変わりに答えた。

“こんな性格悪そうな奴に負けたくない”……でしたっけ」

リョウコやモモの無言が、正解を差す。

「……」

マヒルお兄さんも黙った。表情は見えない、いや、見ない。怒ってたら嫌だから。

「……まー……見事にユウヤの地雷踏む様な台詞だな」

「……」

「ユウヤはキレないよ」

「……」

「でも例外で。――大切な人を傷付ける事は許さない、止まらない」

俺はアスカを見た。何時もの笑顔が少し曇っている気がした。

「だから、モモちゃんがユウヤを叩いたのは大正解。それくらいやらないと、ユウヤは止まらねぇよ」

「マヒル、さん……」

マヒルさんが笑顔だったから、モモは少し泣きそうだった。確かにマヒルさんは怖い風だけど、決して酷い人じゃない。物事をしっかり中心から見れる、凄く真っ直ぐで優しい人なのは、俺もよく知ってる。

「つか、寧ろそれだけじゃ止まらなかったんじゃないか……？」

「その後、ユウヤの事をアサキ君が思いっきり扉までぶっ飛ばしたんですよ」

見ていた中立者、アスカが語る。

「嗚呼、そんだけやりゃ流石に止まるか。モモちゃんにも被害が行っちゃうのを防いだんだな、アサキは」

「……」

やり過ぎなのが否めないが。

「でも、やっぱあれだな。そんな騒ぎが起こってもダチになれたん

なら……一件落着ってことなんじゃねぇの？　ぶっ飛ばしたって兄弟やってられる訳だし――」

「アサキだからな。本当はユウヤがキレた事についても嬉しかったんだろーなー……って、俺は思う」

きっと、いや、絶対。口には出さないけどアサキだって人間だ、傷付いたはず。ユウヤが怒ったことで少しは――和らいだんだろうな。

「つーかなカイリ君、テメェが居れば喧嘩とか起こらなかったかもしんねぇぞ？　親友が止めないで誰が止めんだっつーの」

「そりゃないッスよマヒルお兄さん。俺、未だアサキに他人呼ばわりされる時あるんスからー」

……ん？

何か、皆にキョトンとされた。……え？

そんな時。

「「たっだいまー」」

このタイミングで帰って来るとは、ナイスな奴等だ。

クイッ

およ、アスカに袖を引っ張られた。何だよ？

「ひとつだけ、教えてあげますね」

「……？」

「アサキ君がリョウコさんとの言い合い中に――アサキ君が漏らした言葉です。アサキ君はあの時、ある人がインフルエンザで休んでいたから、その人の机からプリントを取り出そうとしていたんです。その時モモさんとぶつかってしまって……その時何故そこに居たのか、ということに対して言ったんですよ？」

『親友の席の近くに立ってて何が悪い？』

「――……え？」

――“親友”？　そん時インフルエンザで休んでたのって。

「たっだいま、っておろ、皆。何してんの」

「お邪魔してますよ、ユウヤ」

「わ、アスカが家に居るの久しぶり！　ユキちゃん達って初めてだよね？」

「ふふっ、実に興味深い話を聞かせて貰っていたよ」

ユウヤが色々話してる。何話してるかなんて知らん。やばい、とにかく、

「……何やってんだカイト」

「や、えーと、その」

「うるせぇ吃んなカス」

普段がこんなだからか、目の前のアサキがそう言ったっていう話が信じられない。

「――あ、俺用事思い出した！　先帰るな！」

俺はそう言って慌ててリビングを後にした。皆ポカン、としてたのは分かる。でも何か、今此処に居たら――素で泣きそう。

「カイト！」

後ろを向く。案の定アサキだ。

「明日、本屋付き合え」

呑気な事言いやがってる。俺様は忙しいんだぜ？　そんなの勿論――

「おう！　任せろ！」

――行ってやんよ。だから今日はとにかく帰る。

嬉し過ぎて嬉し過ぎて。何かそのたった一言が嬉し過ぎて。馬鹿みたいだな、俺。そう思うけど、やっぱり唯嬉しくて。

「カイト君、どうしたんだろうねー」

ユウヤがそう述べました。
少し刺激が強かったですかね、カイリ君？　でも貴方には伝えてあげたかったんです、アサキ君にとっての貴方の存在について、気付いてなかったみたいだから。

「んー？　アスカ何笑ってんの？　何時も笑ってるけどさ」

「あ、分かりました？　――ユウヤくらいですよね、俺が笑ってるのに気付くのって」

普段から笑ってる所為ですかね。

「もっちろん分かるよー。アスカは親友だもーん」

「――はい」

カイリ君、アサキ君だって素直じゃないだけなんですよ？　俺にとってのユウヤがそうである様に、ユウヤだってそう言ってくれますから。だから貴方にとってアサキ君がそうである様に――アサキ君だってそう感じているんですよ？

本人は、無自覚かもしれませんけどね。

54＋面倒な日の面倒なこと。

「もう少しで……春休みだな」

「だなー」

「なのに何で土曜登校なんだろうな」

「だなー」

アサキです。ごめんなさい。……いや、何で謝ってんだ僕。違う、違うんだ、空気に呑まれただけなんだ。

土曜なのに学校に駆り出された僕は、のんびりと席について隣の席のカイトと会話をしている……のは良いんだが――何だかさっきからカイトがニコニコしてる。

「……カイト」

「んー？」

ニコニコニコ

って貰った時からなんっかニコニコしてたんだけどさ。
何故ですかナゼデスカなぜですか……？　本人に聞こうにも――

「……何で笑ってんの」

「え？　そりゃあもう……何でもないって～、な・い・しょ☆」

――こんなだし。何でもないのに内緒なんだ、あるんじゃん、何かあるんじゃん何なんだ……！！
外見クールを装う僕の心情なんか気付く訳もないカイトは、とりあえず放っておく事にした。……訳分かんね。

「アサキ、ちょっと良いかい？」

「ん」

カイトについてのふんぎりがついた所で、ユキが現れた。此方は何時だって一物ありそうな笑顔だから気にしない。……何やら手帳を持っているな……。

「春休みなんだが――勉強会を開かないかい？」

「勉強会？」

つい、素っ頓狂な声を上げてしまった。勉強会……勉強会……勉強会？

「休み明けにテストがあるのは知っているだろう？　実は私、引っ越しで幾分時間を裂かれてしまって、単元別にて出来ない場所があるのだよ。すまないがアサキ、私の家でご教授願えないだろうか…

…？」

「……」

「……？　アサキ、返事をくれやしないかい……？　迷惑なのは百も承知さ、断られても仕方ないとは思っているが――」

ガタンッ！！

「――是非やろう！！」

立ち上がってユキの手を掴んだ。

「あ、アサキ、良き返事を貰えた事は嬉しいのだが、アサキがそんなに嬉しそうに承諾してくれるとは思わなかったよ……」

「いや！　勉強が嬉しい訳じゃないさ！！　唯――真面目に勉強をやってくれそうな人に会えて嬉しいだけだ！！！！」

ユキは本当に「何言ってんのコイツ？」的視線で僕を見ているが構いません。だって知ってる？　世の中にはさ――教えても教えてもなーんにも理解してくれない人達だって……居るんだから……！！

「んー？　アサキ、俺の顔に何かついてる？」

「嗚呼、お前の顔には笑顔と嫌悪感を煽る何かがへばり付いてる」

「褒めんなよー！」

褒めてねぇよ。

カイトの顔は未だ笑顔だ。マジ直んねーかな、アレ。

「という訳で、是非皆も誘ってやろうじゃないか！　交流を深める意も込めて、お泊り会にしようと思うんだよ！」

「良いねー！　俺様大賛成！」

ありゃ当分直らな――直った。何時の間にか会話に参加してやがった此の野郎。

「春休みの宿題もこれで終わらせられるしな！　よーし、誰誘う誰誘う！？」

しかも当たり前にノリノリってどうよ。え、誰がお前誘うって言ったよ。まぁ結果そうなるんだろうから反論しても無駄なんだろうが。

「とりあえず勿論ユウヤを誘おうじゃないか。至極楽しくなりそうだからね」

「や、ユキ、いいのか？　あいつ来たらマジ五月蝿いよ……？　つーか、絶対に勉強にならない」

何処だろうが何だろうが騒ぐぞ……？　ユキの家だからって問答無用に騒ぐだろうし……。

「平気さ、自慢じゃないが、我が家は広いのだよ。後二～三人は誘えそうな所だが……どうだい？」

ユキ、お前は勇者だったんだな……ユウヤを家に誘うなんて……。

僕はそんなこんなで誰が良いかと考えてみた。
結果。

「僕にはそんな仲良い友達とか居ないんだけど」

「嗚呼そう――」

「アサキ君にとって、私って仲良い友達じゃなかったんだね……」

何ということになりました。
……ってうわぁ、いきなりランが現れた。

「そうだよね、私達まだ知り合って間もないものね」

「え、いや」

「厚かましいよね仲良いだなんて、ごめんなさい、ほんっとにごめんなさい」

「何を言っているんだいモモ、私とモモはとっくに親友だから安心したまえ」

「うん、ありがとうユキ君」

「だあっとれユキ」

ズーン、という完璧落ち込みモードのラン。何という気配の無さ、何時の間にやらカイトの横に現れた。

「じゃ、モモも来ねぇ？」

「何が？」

聞いてないのかい。落ち込んでたのに聞いてないのかい。カイトが折角そう言って誘ったのに何という笑顔で言うのだろうか。

「ユキの家で春休みの勉強会。今ならアサキの宿題写し放題！！」

「てめぇ」

「行くよ！　宿題写し放題なんて嬉しいな！」

「お前も乗るな」

絶対見せないからな、自分等でやれよコラ。ユキが満足そうに頷いているからいいんだけど、……ランが来るってことは……

「カトウも呼ぶ？」

ズザザッ！！

――何故か全面的に引かれた。え、何？

「あ、あ、アサキからリョウコを呼ぼうだなんてそんな……！！モモ、リョウコに言わなくていいのか！？」

「うん！　リョウちゃんに言わないと！！　リョウちゃーん！」

「ふむ、良い傾向みたいだね」

三者三様の反応をされ――僕は放っておくことにした。授業始まるし。

「ま、それはさておき。面子はアサキ達に任せるからね、好きに呼んでくれたまえ」

ユキの言葉にて一組集団解散。とりあえず勉強会の事は頭に入れたからどうにかなるだろうな。

今までやった勉強会の中で一番充実したものになりそうだ。一人でもやる気のある奴が居れば少しは違うだろうし、……さて、やるとなったらスパルタでいくから覚悟しとけな？

55＋思いがけない組み合わせ。／前

只今漫画を読んでいます。今日で学校が終わりという訳で午前にて帰宅な僕は――両親は仕事、兄達は出掛けている、要するに僕は一人という訳です。

「アッキー？」

……一人という訳です。

「アッキーってば。……わーったよ、ちゃんと呼びますよ、アーサキー？」

「何で何時までも貴方僕ん家に居るんですか」

一人、なはずでした。こんにちはアサキです、……何で一人じゃないんだよ。

「だから、マヒルがこっちの家に帰って来ちゃってるからだってば」

「自宅に帰りなさい」

忘れてた、この人居たんだった……！！　僕は身内でも何でもないセツさんに絡まれています、この人の苗字聞き出して自宅に送り返してやろうかな。

「皆居なくてつまんねぇよー、アサキ何か楽しい事ねぇの？」

人の話を聞いて欲しいよ。
まぁ仕方ない、この家にはまともな話を出来る人の方が少ないんだった。僕はパタンと漫画を閉じ、セツさんに向き合う。
「じゃあ遊びにでも行けばいいじゃないですか」
「何処によ。金なんざ持っちゃいねぇんだから無理無理」
「立ち読みにでも行けば」
「お前じゃないんだか――」
「殴るよ？」
「スマン、馬鹿にしてる訳じゃない」
俺には忍耐強さがないから立ってられないんだー！　と喚くセツさん。……本当、何で此の人帰らないのかな。つかマヒル、ちゃんと面倒見るって言った癖にもう放置か、放置なのか。
……此れがペットの世話をしない子供を持つ母親の気持ちか……！！
「で、何。僕に何しろっていう訳」
「俺様の暇に付き合――」
「は？」
「って下さいお願いします」

　此の人本当に年上なんだろうか。扱いが僕の中でカイト並に酷い。……酷いのは僕か。

「じゃあ、単刀直入に質問する。――セツさんの苗字って何？」

「お？　言ってなかったんだっけか」

「うん」

　どうせ暇なら聞いてみたかったことを聞いてみよう。だって暇だし。

「へっへっへー、気になるってか」

「それで良いや、気になるー、うわー僕すんごく気になるー」

「やる気ねぇなコラ」

　だって差ほど気にならないし……教えませんって言われたら構わないんだからいいよ。

「じゃあいーや。何時か――分かる時が来る」

「こういう所で何で少し格好良いめに言ったのさ」

　ベランダに繋がる窓の方見て黄昏れているセツさん、一体何が言いたいんだ。

　そしてそんな所に舞い込んでくるは――

ぴーんぽーん――

――というインターフォン。

「誰だよこんな真昼間に」

「知りませんよ……」

しかしとりあえず客人的なセツさんに出させる訳にはいかない。仕方がないので一階へと下りて玄関へ向かった。……どうせあれだろ、カイトとかだろ。

「はーい」

「こんにちは～！」

「え、あ……ウミさん？」

其処に居たのは珍しい人物。珍しいどころじゃない、初めての人物だ。……え？　ウミさん家知ってたんだ。

「ウミちゃんだよ！　お久しぶりねアサキくーん」

「お、お久しぶりです……が、何の用ッスか……？」

「うん、今日はアサキ君じゃなくてお兄ちゃんに用があるのよ」

兄？　兄貴……ユウヤ？

「ちなみにユウヤ君じゃないよ？　マヒルの方ね？」

「え……」

兄貴に用が……？　というかそれ以前に――

「ウミさん、兄貴の知り合いだったのか」

「あれ、言ってなかったかな？　同じ大学の同じ学科なのよ」

「へ、へぇ……」

全て初耳過ぎる。

「アサキ、コーヒー貰うぜー……って」

「うふふ……あれ、セツじゃない」

「ウミ、てめぇが何で居やがるんだ」

玄関でバッタリしました。そりゃマヒルとセツさんは同じ大学なんだから、ウミさんがマヒルの知り合いイコールセツさんの知り合いって可能性は低くないよな。

「アサキ君と弟が友達なのよ」

「弟……？　まぁどうでも良いか」

何やら言い争うかと思ったが其処までは無いらしい。セツさんはま、上がれや、とか言い出して勝手にウミさんを上げてしまった。

……せめて家主の許可取ってくれない？

「お邪魔しま～す」

そしてウミさんもお邪魔しちゃった。遠慮しといて欲しかったのは内緒にしておこうか。

セツさんがコーヒーを入れ出したのを見送ってから、ソファに座っているウミさんに言う。

「で、兄貴はもう少ししないと帰って来ないですよ」

「そう……レポートについての話したかったのになぁ……」

「俺には聞かねぇの？」

「自分と同等レベルの馬鹿に聞いて何かが進展するとは思ってないわよ～」

「そりゃそうだな」

馬鹿達が馬鹿を認める様は、実に滑稽である。ああみえてマヒルは頭が良いからな、文武両道、眉目秀麗……畜生、あいつ絶対に僕の兄貴じゃない。

「ウミさん、今日カイトは？」

「カイちゃん？　カイちゃんならお家で宿題やらせてるわよ～、アサキ君達とユキちゃん、って子の家でお勉強会するとは聞いたけど、出来るとこくらいやっちゃいなさいって言ってね」

「流石」

姉度は高い様だ。家の兄貴達なんか宿題は最終日、な奴等だからな……。

「おらウミ、コーヒー」

「ありがとうセツー。……でさ、何で君はこの家に居るんです？」

改めて聞いたこの話題。そうだよね、まず他人が何で居るか凄く気になるよね、僕も気になるよ。

セツさんはドカッと座り込み、そしてうーん、と考えているみたいだが、答えはこうだった。

「――家出してるから」

「家出してるんだ」

新事実だ。

「まぁまぁ、大きく出たのねセツも……」

「ま、俺様だからな」

「黙りなさい？」

「はい」

……セツさんが尻に引かれてる？　まぁ、どちらかというとウミさんが爽やか鬼畜キャラだったことの方が驚きだが。

マヒルが帰るまで待たせて貰うわね、と言ったウミさんと僕等は、暫し団欒と至った。

……続くらしい。

56＋思いがけない組み合わせ。／後

「たんだいまー」

俺☆帰宅。

……ごめんなさい、ふざけました。参考書を買いに行く、とか珍しくもまともな用で外出していました俺、ユウヤです。

玄関に入ったら何でしょう、靴が多い。

「……」

靴が多い……ということは――

「アサ君が増殖！？」

「何の勘違いだよ何だよ増殖したら靴増えるのかよ僕が増えたって誰一人外出しねぇよたりぃんだから」

「ごめんなさい、冗談だからマシンガンにツッコまないで」

冗談だってば。独り言のつもりだったのにアサ君ったらどこから沸いたの。

「ただいまー」

「あ、お帰りマヒル兄」

「帰り」

靴を脱いでたら、ちょうどマヒル兄も帰って来た。

「兄貴、客」

「え、俺？」

アサ君は其れだけ言うと、一人リビングに帰っていってしまった。

ほう、靴が多いのはそういう訳だったのか。誰だろうなー、と呟くマヒル兄と共にリビングに赴く俺達。

「あ、帰って来た！」

「お帰り～マヒル～」

其処に居たのはせっちーと……ウミさん？　ウミさんがお客さん……マヒル兄の知り合いだったんだね。そんなせっちーとウミさんが――何故か腕相撲している。

「オラァ！！！！」

「ふふ、セツごときが私に勝てると思ってるのかしら？」

しかもウミさんの圧勝。掛け声だけならせっちー完勝なのに……笑顔で腕を付き合わすウミさんすげぇ。

「おう、ウミじゃねぇか。俺ん家で何してんだ？」

「んふふっ、レポートの話がしたくてね」

それに動じないマヒル兄もすげぇ。

「レポート？　あぁ、あれだ、春期のやつか」

「そ。電話で話そうかと思ったんだけど……偶然に家知っちゃったからね」

相も変わらない笑顔でウミさんは言う。……良かった、流石にもう抱き着かれるのはごめんだよ。

「偶然？　……だよな、何で俺ん家知ってんだ？」

マヒル兄は心底不思議そう。俺からしてみれば当たり前な気がするけど――

「カイちゃんがお世話になってるでしょ？」

そう、ウミさんはカイト君のお姉ちゃんなんだから。

「カイちゃん……？　……カイト……あ、カイト。お前の弟か何か？」

「そうなのよ～！　自慢の弟よ～？」

「嗚呼、そういえば弟居るっつってたな。全く気付かなかったぜ俺」

まぁどちらかというとカイリな本名に対して何も言わない姉に気付くべきだぜマヒル兄。

「んじゃ、俺ん部屋で話は聞いてやるから来いよ」

「了かーい、さ、セツも行くわよ」

「ん？　俺も行くんかい？」

「か弱きレディを野蛮な男と二人きりにする気？」

「お前の何処がか弱――ぐふっ！！」

「うふふ～、行くわよ～」

「ウミテメェ今殴っただろ！？」

「あら、何の事かしら？」

　そして二階へと上がっていったマヒル兄達。せっちー、鳩尾殴られてたけど大丈夫かな……。何よりウミさんってあんなキャラだったという事実に驚いた。

「……」

「騒がしい友達だね」

「お前が言うか」

「はい」

だよね。

結局、ウミさんは夕刻まで家に居ました。最後に、

「また遊びに来ちゃうよ☆」

と言い残して。

「誰も待っていないから来なくていい――」

「また殴るよ？」

「はい。――ってやっぱ殴ったんじゃねぇか！！」

「ウミ、とっとと帰れ。カイト君が待ってんだろ」

「うん、じゃあねーマヒル、アサキ君とユウヤ君もね。……と、セツ」

「おまけかよ」

せっちーとウミさんは、とても仲が良いらしい、と理解した日だった。

57＋宿題の進め方。

ユウヤの場合。

「アサくーん、此処分からなーい」

「馬鹿が」

やるにはやるが分からないから進まない。

「これって二でいいのかな？」

「全然違うんだけど」

カイリの場合。

「なぁなぁ姉ちゃん」

「んー？　何ー？　カイちゃん」

「これこれ、難しくて出来ねぇ」

「あら、中学生の宿題？　キャー！　懐かしー！！」

「何？　……え、ちょ、姉ちゃん、宿題返して！」

ユウヤに同じく聞いてやろうとするが、教えてもらう人を間違えて出来ない。

「――あ、もしもしアサキ？　宿題教えてくれない？」

『家来い』

アスカの場合。

「そういえば休んでて宿題の範囲、聞き忘れちゃいました」

という訳で電話でユウヤに聞く。

「ユウヤ、宿題の範囲なんですが――」

『アスカ！？　聞いてよ聞いてよ酷いんだよアサキったら――』

数時間このまんま。

『――ふー、アスカに愚痴ったら元気になったよ！　そいじゃーね！』

「ふふっ、良かったです。それでは。――――って聞き忘れた……！　……ユウヤの馬鹿」

これ数回エンドレスの後、家まで聞きに行く羽目になる。

モモ、リョウコの場合。

「ねぇリョウちゃん、この文章題なんだけどさ」

「んー？」

どちらかの家で一緒にやります。

「何で王様が仲間を入れてめでたしめでたしってるのかな？」

「そうね、民を苦しめて自分達を殺そうとした訳よね？　しかも最初の一節が『メロスは激怒した』なのにメロス良いのかしら、もう怒りは晴れちゃったのかしら」

「そうなのかな……親友のセリヌンティウスだって張り付けだよ？　しかもメロスそこに裸で来た訳でしょ？」

「……そう考えると許せないわよね。今更心入れ換えたからって私なら許さないわ……！！」

「裸で公共の場なんかに出された日には泣くって、男の人だって……」

「そうよそうよ！　今更裸気遣って何かかけて貰ったって遅いわ！！」

「そうだよー……妹さんの結婚だってあったのにお兄さん全裸事件はイタいよー……」

物語に入れ込み過ぎて進まない。

「――って話なんだけど、何でなんだろうね？　アサキ君はどう思う？」

『ラン、お前等文章題時間足りなくて落ち込む派だろ』

「わ、よく分かったね～！」

『“走れメロス”くらい普通に読め』

ハジメ、タク、セイタの場合。

「タクー、疲れたから休憩しようぜ」

「良いねー、俺ゲーム持ってきたんだぜー。セイタもやろうぜ」

このまま帰るまでゲーム大会。

「お前達、終わらせる気ないだろ」

「「いざとなったらお前の写す」」

「おい！！」

セイタだけやる。

ソウ、コウスケの場合。

「「……」」

何気に黙々とやる。

ユキの場合。

「ふーむ、どれから手をつけようか迷うな……。まぁいい、皆でやる時にやろうか」

と言ってマジにやらない。皆でやる時にパパッと出来ちゃうのがサキネユキ。

「にしても暇だね、そうだ、今度の勉強会について電話をしよう。……――もしもし、サキネですがアサキ君は――」

そのまま長電話。

アサキの場合。

『おお、もうこんな時間か。長々しい電話すまなかったね、では』

「嗚呼」

出来るだけの知能とやる気はある。――が。

「さて、ユキの電話終わったし今度こそ――」

「アサキー！　カトウさんって友達から電話ー！！」

「……」

色々あって進まねぇ。

58＋勉強会、出動。／午前の部

「いらっしゃい、さぁ、入ってくれたまえ」

家に着くなりユキちゃんが迎えてくれました。こんにちは、ユウヤです。

とりあえずひと言――ユキちゃん家でけぇ。何じゃこりゃ。

「何を言ってるんだい？　ユウヤ達の家だって充分大きいじゃないか」

「そう、だけどさー」

うん、家も大きいよ？　父さんがそれなりの仕事してる訳だし。でもさ……ねぇ？

「アサキ、感想をどうぞ」

「三階良いな」

――という訳です。三階建てですってよ、奥さん！　何ですか三階って！　そんなの一般家庭にはないよね普通！！　……え、ある？　俺の家はないんだってば！

遠慮もクソもない俺達はそのままズカズカと入り込みました。

「ユキちゃんユキちゃん、ユキちゃんの部屋は何階だい？」

「ふふっ、そんなこと聞いてくれなくても分かっているよ、しかと三階にて勉強会をしようじゃないか。皆先に来ているからね」

「「よっしゃ」！！」

だって行きたいじゃん！　三階あるなら三階行きたいじゃん！！　見つけた階段をドタドタと上ると、三階唯一の部屋だと思われる部屋に入った。

「よーっす！」

「遅かったわね、ヒコクアサキにヒコクユウヤ」

「おはよ～アサキ君、ユウヤ君」

中に居たのは最初から順にカイト君リョウちゃんにモモちゃんだった。まぁ全員て言われたんだからそうだよね。

「皆来た訳だし、さぁやろうじゃないか」

最後に部屋に入ったユキちゃんは、ひとつ手を叩いてそう言った。そうそう！　勉強会だもんね！！　休み開けのテスト勉強！！

「とりあえずユキ、やってないってとこ教えてやるよ」

「そうだね、すまない」

お？　珍しいな、アサ君が率先して動くなんて……。

「それまでにユウヤ」

「うん？」

「どれでもいいから宿題終わらせろ」

「そんな無茶な」

ガツンッ

「痛ッ！　今の何！？　痛いよマジ！！」

「チッ、頭か……外した」

「おや、アサキ。今のは私の筆箱じゃないかい？」

「ユキちゃんの筆箱だと！？　つか頭で外したって君、何処当てる気だったの！？」

「目」

この弟は的確に急所を狙うし何なの本当。

「失明したらどうするのさ！！」

「ユウヤが失明ごときで大人しくなるとは思っていない！！！！」

「こんな事で声張り上げるなよ！」

こういうどうでもいい事に対して声張るんだから……。どんな

時も無表情な癖に。

「あのな、お前。どんだけ宿題終わってないと思ってるんだよ」

「……六つ」

「全体の宿題の量は」

「……六つ」

「全部じゃねぇか死ねばいいのに」

「ごめんなさい」

相変わらず酷いよ。春の現に浮かされて少しは緩和されないかな、この毒舌。

「ほらユウヤ！　英語だけなら俺様が教えてやんよ！」

「私もー、国語なら得意だよ～……時間があれば」

「化学は任せなさいよね！！」

「皆……何て良い人なんだ……！　アサ君とは大違――」

「刺すぞ」

「いではないですはいごめんなさい」

怖いよ、何か何時も以上に怖い。……いや、最近優しかったの

かも。うん、多分。

という感じで午前の部が始まりました。ユキちゃんとアサ君を抜いたら無論、俺の宿題潰しで終わったんだけど。

59＋勉強会、出動。／正午の部

「６０３年てーっと……十七条の憲法！」

「惜しい、それは一年後だね、皆分かるかい？」

「「「……」」」

「……アサキ？」

「冠位十二階じゃねぇの？」

「正解、流石はアサキだね！」

『さっすがー！！』

「テメェ等馬鹿にも程がないか」

ふふっ、やはり彼等は面白いね。こんにちは、かな、今は丁度正午を回る頃だからね。分かるとは思うが此の家の主、ユキだよ？

私の方の勉強はほぼ終わってしまったからね、皆の宿題を手伝っている所だよ。うん？　残り？　嫌だなぁ、午後からやるに決まっているだろう？

アサキは既に宿題を終わらせている様で、私の勉強机を陣取って頬杖ついてふて腐れているよ、ははっ。……おかげで私はベッドの上さ。

「歴史の宿題も終わった所で休憩といこうじゃないか、そろそろお

昼時だからね」

「おー！　飯飯！！」

一目散にカイリがシャーペンから手を離した。……まぁ、仕方ないね。

今日は私の家に誰も居ないもので、皆で昼食を作る、という素晴らしき予定を立てている訳なのさ。という訳で勉強は一旦やめて、一階に降りることになった。

「なぁユキ」

「ん、何だいアサキ？」

「僕料理とか出来ないよ」

おや、意外な欠点かい？　アサキは一向にふて腐れたまま私に言うものだから、何やら可愛いらしさまで伺えるね。

「アサ君は確かに苦手だよね、料理」

「あらーん、完全無欠のアサキ君にも苦手分野はあった訳だな」

「ということはやっぱり料理の出来る女の子にならないと……」

「リョウちゃん、考えがだだ漏れだよ？」

やはり皆の思考はユニークだね、特に三人目。キッチンに移動した私達は、作る予定のカレーの具と対面した訳だ。定番だな、カレー。

「じゃあアサ君はユキちゃんと一緒に玉葱切ってよ」

「うん」

「了解したよ」

アサキはユウヤに言われるがまま玉葱を手に取って私の方にやって来た。

「ユキ、玉葱ってひとつでいいのかな」

「うむ、いいんじゃないかな？」

正直私も其処まで得意じゃないんでね、玉葱だけで勘弁してくれたまえ。――他の話を聞く所、どうやらモモとリョウコが他野菜を切って、カイリとユウヤが鍋などを散らか――失礼、セッティングするらしい。

ユウヤは料理が出来るらしいからいいが……と、目を離したスキにアサキが玉葱を切り出していた。

トントントントントン――

――みじん切り？

「ストップアサキ」

「ん」

「カレーにみじん切りの玉葱が入っていた所を見た事がないんだがね？」

「……」

出来れば切る前に聞いて欲しかったよ。

「じゃあ何切り？」

「……くし切り、ではないか？」

「くし切り？　……知らないよ、どう切るの」

「……」

さて、お互い知らないパターンはどうすればいいのかな？

「……もう、適当に切ってしまわないかい？」

「賛成」

という訳で適当に行くことになった。

「アサくーん、ユキちゃーん、玉葱炒めるよー」

「はい」

「あんがとー――ってちょ、アサ君これ――」

「玉葱」

「知ってるけどさ、何この切り方様々オンパレードは」

「玉葱」

「ばっさばさに切り倒し――」

「黙って炒めろや」

「……うん、分かったよ」

ふむ、こうやってアサキの押し切り術が鍛えられた訳だね。……別名ごまかし術だなぁ。

ま、味は変わらないよはっはっは。

６０＊閑話＋本当に閑話なグダグダ感でごめんなさい。

「あー……６０話目……だっけ」

「だぁねぇ」

「３回目だもんね、このグダグダ閑話コーナー」

「だぁねぇ」

「ま、閑話なんだしグダグダしたって構いませんよねー」

「だぁねぇ」

ちょっと２人共、流石にグダグダし過ぎじゃね？

「いーんだよ、今までの話上、僕等が状況描写を言わなければ外には伝わらないんだからさー」

「だぁねぇ」

すみませーん、何か色々と放棄した双子を捨てたいんですが粗大ごみであってます？

――という訳で仕切り直して。

自己紹介と春休みについて何か一言。

「ちわー、何かもう春休み終わると思うと泣けてくるアサキです」

「ばんわー、さっき『だぁねぇ』しか言わなかったユウヤでーす。春休みの宿題素で終わらないんだけどどうしよう」

作者こと浅井でーす、春休みの宿題は抹消済みでーす、えへ☆

「死ねばいいのに」

「……おい、ちょ、こらユウヤ！　そんな台詞吐いたら僕が言ったみたいになるからやめろ！！」

あ、ユウヤだったんですか。てっきりアサキかと。

「ほらー間違えられたー」

「ごめんよアサ君。とにかくあれなんだ、宿題終わらないんだ」

「だから宿題やってるじゃん今」

「ああ、くし切り？」

「切るよ？」

前回話振り返らんでええからはよ進め。

「急に方言チックになりやがってあの野郎……。

まぁいい、とりあえず3回目ですよええ、物好きにもこれ読んでる

方々なら分かる通り、今まで通りグダグダとマル秘裏トーク、みないなことすると思いきや最後の最期までグダグダするだけさ」

「言ってるアサ君がもうグダグダだよね、てか漢字怖いよ」

「だって自分が言ってることの意味も分からねェもん」

「あら」

さて、でも今回はちゃんと言うことあるでしょーよ。

「そうだった」

「浅井さんが文章の書き方を学びました。これからはちゃんと書きます、少しずつ編集もしていきます。今までお見苦しくて申し訳ありませんでしたが今後これ以上見苦しくならぬ様、しかと進めていきたいと思っていますので皆様……アサ君、読めん」

「どれ、……せんえつだよ」

「ほう、皆様、僭越ながらお付き合いお願い申し上げます、以上」

「お前途中でカンペ読んだのバレたじゃん」

「仕方ないでしょー、俺にあんなムズい字読ます礼螺君が悪ーい」

「馬鹿なお前が悪ーい」

変な言い合いはいいからさ。

で、とりあえずマジ話ですよ、ろくな作品じゃないのは百も承知で

すが、少しは神をも思わす皆様の作品を見習っていけたらと思っておりますよ、ええ。

「おい浅井、神とか心にも思ってない言葉吐くなよ、気持ち悪い」

ちょ、イメージ下げる言い方しないでくんない？　思ってなかったとしても言うもんなんだよ。……あ。

「馬鹿だな」

「馬鹿だね」

双子なんて嫌いだ！！

「――まーた言っちゃったよ……。あの人すぐ逃走するよね」

「逃走癖でもあるんじゃねェの？　つか、全国の双子への冒涜だろさっきの」

「酷いなぁ礼螺君め」

「さて、まぁいいや、とりあえずグダグダながら進めよう」

「だなー。そういや俺達進級するね」

「するな、お前よく出来たな」

「ふっ、ぎりぎり☆」

「中学の時点でギリギリってお前な……高校行く気あるの……？」

「あ、あるに決まってるじゃないかふふふふ……」

「だったら僕の目を見て言って欲しいね」

「まーまー！　とりあえず話であった様に、クラス変えはないんでしょ？　うおっしアスカとまた同じクラスー！！」

「……カイトと同じクラス……ハァ……」

『見るも見事に正反対の反応されてますね』

『だなぁ』

「……今声しなかった？」

「したぉ。愛しい友たちの声がしたぉ」

シャッ（※カーテンを開けた音）

「わ、見つかっちゃいました」

「よう、我が永遠の親友よ！！」

シャッ（※カーテンを閉めた音）

「アサ君今誰か居なかっ――」

「居なかった、僕には見えなかった」

「「閉めないでよ」」

「あー、アスカにカイトくーん！」

「チッ」

「チッ！？　舌打ち！？　畜生！！」

「大変ですね、カイリ君は……」

「まーいすういーとふれーんどアスカー！！」

「そっちも大変だな」

「まぁ……」

「お前等、人の家に土足で上がり込むとは何事だ」

「え、靴脱いだよ。庭から入ったからって靴は脱いだぜ？」

「カイリ君、今のは表現方法のひとつかと……」

「俺様がそんな物に縛られると思ったかー！！」

「縛られろ馬鹿野郎常識だ」

貴様等俺が居ないと進まないな。

「お、作者様お帰り。そしていつにも増しておっとこ前」

ただいま。で、あのさ、進めよ？　カイリとアスカが居るのは気にしないからさ。

「「おじゃまします」」

「こら、人の家のこたつに入るな」

「いいじゃないかアサ君」

お前等の家未だにこたつ仕舞ってないのか。

「「あったかいから」」

うるさい、進めろ。

「ではー、ここ最近のマル秘裏トーク！！」

ぱちぱちぱち（※拍手）

「作者、腐海と化した兄弟共同部屋を掃除しました！！」

こちらの話をするな！！！！！　つか、腐海とか言うなよ！！

「ユウヤ、馬鹿やってないで進めるよ」

「ふーい」

腐海はスルーか畜生。

「じゃあ俺も話に加わりますね」

「どうぞアスカ君」

「では失礼して。――進級の話ですが、確実にあれ、面倒臭がりましたよね」

あ。

「あ、確かにー！　中学で進級時にクラス変えなしとかありえねー」

「そんなの当たり前じゃん、礼螺君が面倒臭がったに決まってるじゃん」

「別にいいじゃないか、クラス変えなんて面ど――」

「だよなっ！　おかげでまた俺様と同じクラスになれたもんなっ、親友☆」

「うだがやはりクラス変えは大事だよな」

「アサキー！？」

「ふふっ、アサキ君ったら……」

「ん？　アスカどうした？」

「いえ、何でも」

さって、何か無駄に長いからお開きにしないですか。

「自由過ぎる作者も考えものだな」

五月蝿い、仕方ないじゃないか。春休み終わるまでに勉強会話書き終わりたいんだから。

「あ、そかそか、じゃあ今度はユキちゃん呼ぼー」

「何でユ――テメェユウヤ、コイツ等呼んだのか」

「あ、ばれた」

まぁまぁ、賑やかなのは良いことだからね。
それではまたも挟まれたグダグダ閑話コーナーもお開きです、また８０話でお会いしましょう。たまには変わったことでもしましょうかねー。

「やめとけ、力量ないんだから」

畜生ｏｒｚ

「んじゃあばばーい☆」

61＋勉強会、出動。／午後の部

「さって、お腹も一杯になった訳だしなっ！　ちゃっちゃと宿題終わらせよー！！！！」

カイトがそう叫びやがった。というかこいつ等、本当に宿題終わってない訳……？

「カイト、お前宿題この前終わってなかったのかよ」

「おう」

「わざわざ家まで来たお前に教えてやったのに？」

「おう！」

「死ねばいい」

僕の苦労を返せ、午後です、午後でもアサキです。当たり前じゃないか。

「私たちは後数学だけだよ～、ね、リョウちゃん？」

「そうね。モモと一緒にやってたから数学余らしてたわ」

ランとカトウはそう言うと、数学の冊子を取り出した。只今の見解をいうと、僕とユキが終わってて、カイトとユウヤが全然。

「あいつ等マジで消えればいいのに」

「アサキ、口から考えがポロリと漏れているよ？」

あ、やべ。

「酷いや酷いや！　俺だって終わらせたくなくてやってない訳じゃあないんだぞ！！」

「俺様だってそうだぜ！！」

「じゃあやれや」

「「教えてよ」」

これが……殺意？　……くだらないことはさておき、仕方がないので教えてやろう。このまま帰ったら素で夜泣きつかれる可能性が高い。僕は寝不足で始業式に行くのは嫌だ。

「じゃ、理科やろう理科！」

「何処よ」

「こういうやつ」

……は？　何やらユウヤが右手で変な形を作っている。……何やってんの？　ピースに親指足した感じ。

「なんか、ばーん！！　みたいな」

「は？」

「分かれ、分かるんだアサキ！！　こういうんだ！！」

カイトまで何かやり出した。右手が可哀相だ、もう意味分からないんだが。

……嗚呼、あれか。

「あ、思い出したよ俺！　確かフラミン――」

「馬鹿野郎フレミングじゃボケ。初歩的なボケをかますな」

「あ、其れ其れ。フレミングだフレミング」

カイトは素で忘れてたらしく、ポン、と手を叩いて頷いた。なんだよフラミンゴって、マジで何なんだよ。

「んで、フラミンゴだかフレミングだか分からない其れを使ってやってるんだけど、ことごとく答えが間違ってるんだよー」

「俺も俺も」

「何でだよ、只の電流の問題じゃなくて？」

そういえばんな問題もあったっけな……何ひとつ当たってないしょぼい冊子を奪ってそれを見てみる。……本当に当たってなくて泣けてくるよ。

「――あ」

「「む」」

「……あー、お前等、間違ってる理由分かったぞ」

ガタガタッとバタバタッと騒ぐ二人、一瞬で理由が分かったのがそんなに凄いのかえぇ？

「お前等さ」

「「む」」

「フレミングの法則さ」

「「うん」」

「右手でやってるからだろ」

「「……あー！！！！」」

はい解決。

「これフレミング左手の法則だった！」

「通りで二択で外す訳だな、はっはー！」

「分かったならとっととやれ」

「「おう！」」

……はぁ。

まぁ、この後色々と続くと思うが、僕は退場したいな。ユキに任せよう。

――家に帰ったってどうせ教えることになるんだろうからな。明日から学校だし。

「「勿論さぁ！」」

「お前等、自分で勉強出来る様になったら……？　つか心を読むなよ」

62＋馬鹿だと言われる俺だけど。

新学期ですこんにちはっ！　ユウヤですよ！！
やっと新学期だよー、アサ君とユキちゃんと皆のおかげで珍しく宿題は終わってるし、何やらハッピーなユウヤです。ひとつ残念を言うのなら、マヒル兄が帰ってしまったことかな。今日の朝一で部屋に戻ってしまいました。

『また来るぜ！』

『来るな』

……違う違う、これはせっちーとアサ君の会話だ。思い出すの間違えた。

『またGWに戻るって。暇だったら出かけよーな』

なんだかんだでマヒル兄のことは嫌いじゃない――寧ろ大好きだ――のでちょっと悲しいよぅ。ま、仕方ないよねー、大学生だし。社会人になれたら家から通うらしいです。……何で戻って来るんだあの人？

「――という訳で皆さん、これからまた一年間宜しくお願いしますね」

ぐだぐだと思考をぐるぐるさせていたら、あーや先生の話が終わっていた。うん、クラス替えないもんね、何でだろう。

「せんせー！　何でですかー！」

「ヒコクユウヤ君、まず何に疑問を抱いているのか言ってから聞いてくれると助かるんだけど？」

おお、口に出すのを忘れていた。

「何故クラス替えしなかったんですかー！！」

「サクライ先生の傍若無人さと、キクカワ先生の唯我独尊が原因です」

あーや先生の表情は、笑顔なのに幸薄かった。この話題に触れるのは止そう。

「じゃあ、質問がない様なので委員会決めちゃうから、皆少し考えといてね」

勝手に質問時間削りやがったちくしょー。んー、今年は何入ろっかなー、前は体育だったしー、その前も体育だったしー……ん？体育ばっかりだぞ？

そうだ、アサ君と同じになれるか少し考えてみよう。アサ君は確か前が奉仕委員。缶回収の日に凄く柄の悪い回収の人が居たからよく覚えているよ、はっはっは。

「ユウヤは何やるんですか？　やはり体育？」

「そりゃユウヤ以外誰が体育委員なんてやるんだよ、なぁ？」

「だよなー、僕嫌だしねー」

其処にやってくるは我が親友にダブルス野郎共。久しぶりなまともな出演。口には出さないでおこう。

「んー、俺は何でも良いからさ、暇だしアサ君と被るにはどれに入ればいいかを考えていたのだよ」

「アサ君？　ああ、弟か」

ライテめ、我が弟の名を忘れていただと？　締め上げてやろうか。

「いたたたたた締まるマジ締まる」

「あ、ごめんごめん、締めようかと考えていたら本気で締めちゃってたよ」

ぱっ、と手を離すと再び考え出す。

「んー」

「ユウヤの弟ってあのー、ユウヤの弟とは思えない程真面目な奴だろ？」

「嗚呼、凄い真面目そうだよな、格好良いし」

「――テメェ等人の弟馬鹿にしてんじゃねェぞゴルァ！！！！」

「「馬鹿にしてねェよ！！」」

――叫びが届いた一組。

「……アサキ、黙らせに行きたかったら――」

「続けて下さい」

「何だ、馬鹿にしてなかったのか、ごめんね」

「寧ろ馬鹿にしてたのはお前のことだよ馬鹿」

「馬鹿」

そうだったのか、初めて知った。それはさておき。

「アスカー、アスカは何やるの？」

「俺は監査委員がいいかと。人気ない割にやることもないですから」

「そっか」

相変わらず腹黒さが滲み出ているけど、其処が良い。

「ダブルは」

「「ダブルじゃねぇって」」

「久しぶりに聞いた。――まぁなんでも良いから何やんの？」

「俺は図書」

「僕はやらないつもり」

ふむ……じゃあどうしよっかなぁ……。

「弟に聞いてくりゃいいじゃん、何入るか」

「此処で予想するのが楽しいんじゃないか」

「はは、ユウヤらしいですね」

むむむ、考えろユウヤ……！　アサキだよ、あのアサキだよ？

「面倒な委員会には絶対入らないし、かと言って委員会入らないという選択肢は成績的にありえない。体育とクラス委員は無しと見て、風紀委員もないな。監査は……楽さ的にやるかもしれない、奉仕は前やって面倒だと気付いたから無いな……」

「おお、ユウヤが今まで以上に頭をフル回転しているな」

「頑張れー。……そんなに弟と一緒がいいのかね」

「ユウヤはアサキ君が大好きですからねぇ……」

「真面目な弟が居ると、普通馬鹿な兄貴って嫌いになるもんじゃないのかな？」

「――だからアサ君馬鹿にすんなぁ！！！！」

「だから馬鹿にしたのはお前のことだよ！」

――またも一組。

「――アサキ……」

「続けて下さい、とにかく続けて下さい」

「何だ、馬鹿にしてなかったのか、俺ならまぁいいや」

「「いいのかよ」」

いいんだよ。馬鹿なの自覚してるんだから。

「ねーアスカー」

「そうですね、ユウヤはこれから頑張るんですもんね」

「うん！」

今年から受験生だもんね。俺、絶対頑張るって決めたもん。高校生になる為にね！

「まぁ、まともな弟の為に頑張れよ」

「まとも！？　アサ君がまとも！？　ない！　ないない！！　アサキがまともな訳ないでしょうが！！！！」

「え、そうなのか？　じゃあ何で――あ」

「そうだよ！　アサキはゲームばっかりだし鬼畜だし毒舌だしやる気ないしダメダメなん――」

「――誰が？」

「だからアサく……ん……あれ？」

「――俺、が？」

……わー――何で本人が居るんだ？　気付けばダブルは立ち去った後、畜生逃げやがった……！！

「隣のクラスまで、声が響いて五月蝿い。黙れ」

「は、はい」

「とにかく黙れ、とにかく消えろ、とにかく召されろ朽ち果てろ」

「ご、ごめんなさいごめんなさい怖いから、とにかく怖いから……！！」

ちょ、クラスの皆がシィンとして此方を見ているじゃないか！

とにかくその笑顔止めてください！！

「あっ君！　く、空気を読むのだ！」

「うるせぇカス。扉開いてんだから会話全て聞こえてるんだよ、うるせぇよ真面目で何が悪いテメェも少しは真面目になりやがれ馬鹿野郎」

其れだけ言うと、アサ君はスタスタと戻って行きました。……いっちー先生止めといてよ……。あれだけ言われると流石に凹む。嫌われてるんじゃないかな俺。……あ。

「――アサ君！」

「あ？　まだ何かあ――」

「委員会！　何入ったの！？」

「……何だと思う？」

廊下に慌てて飛び出ると、アサ君はクラスに入るところだった。

聞いた内容を理解するなり、アサ君は挑発的に口許を吊り上げる。

ふーむ、悪い顔。

「……保健？」

……間。……間違……た？

「……」

アサ君は、何を言うでもなく無言を貫き通したかと思うと、俺を見て――クスリと笑った。

「――よく分かったな」

「……」

教室に戻って行くアサ君。……うん、大丈夫だね。未だ笑ってくれる内は……嫌われてるなんて考える必要はないみたい。

「お帰りなさいユウヤ、どうかしましたか？」

「ううん、何でもない！　――せんせっー！　俺、保健委員やる！！」

そう言った俺に、珍しくも優しく、アスカがクスリと笑った。

63＋春の現と桜の舞。

「――眠い」

無意識に僕は呟いた。

……こんにちは、アサキですが眠いです。

「……ふむ、眠いというのも致し方ないのではないか？　春の現に浮かされている、と言ったところだね」

放課後、だというのにも関わらず、僕はユキと共にグダグダと教室でたむろっている。欠伸をした僕を見てかクスリと笑えば、ユキは読んでいた本を閉じて僕に向き直った。

「春は良いよね、とても暖かい。それに生じて開花した桜の吹雪が宙を舞えば――心底素敵な光景だと思わないかい？」

「――ユキはさ」

僕の前の席の机に座り、三階の高さから窓の外を一瞥したユキ。そんなユキの前で机で頬杖をついていた僕は、相変わらず眠そうに聞いてみた。

「ユキは、何時からそんな話し方してる訳？」

「……」

……返答がない。只の屍の様だ。

変な質問だから呆れていたりして。

「……」

「……おーい」

相変わらず返事がない。……何か気に障っただろうか。

「……ふふっ」

「……？」

「アサキが不思議そうにこちらを見るものだから可笑しくてね」

「……お前な。お前が返答しないからだろ」

「すまないすまない、何時からだったか考えていたのだよ。しかし……思い出せなかったさ」

「……つまり、昔からと？」

「だね」

ほう、昔からそんな喋り方の餓鬼なんか居たら僕は嫌だ。

「昔からえらくませた餓鬼、とは言われていたからね。その度に私は、早く大きくなりたいと願ったよ」

「僕等は未だ中学生だけどな」

「尤もだ」

自分でも分かる程度に薄く笑う僕に、ユキは苦笑で答えた。……普通に笑えば只の中学生なのになぁ。

「じゃあアサキ、君はどうなんだい？」

「……何が」

「君はいつからそう――ませた餓鬼をやっているのか、という事さ」

「……」

ませた……餓鬼、ねぇ？

やってるつもりはない。只の一中学生のつもりだ。でもやはり僕をはたから見たら――ませたクソ餓鬼に見えるのだろうか？

「……昔から」

「それじゃあ私達は、昔から大人を怒らす名人だった訳だね！」

「何だよ其れ」

大人びた餓鬼なんて本当の大人が愛でる訳ないから、ユキはそう言うんだろうなぁ。春の現に浮かされているからか、僕はろくに思考を回さずにつらつらと喋るユキの話を鵜呑みにした。

「二組のアスカも入れれば、三人揃ってませ餓鬼隊だと思うよ私は」

「アスカ君か、戦隊ものの色分けで言ったらブラックだね」

「それ以外彼に何が似合うというのだい？」

僕等大爆笑。ごめんアスカ君、テレパシーとか持ってないことを僕は願っとくよ。

でも、僕の分岐点を考えるなら、やっぱり小学生最後の年だったんだと思う。あの時と比べると、僕は少し暗くなったとユウヤは言う。自分が無自覚だから何とも言えないんだけど――引きずっている証拠と考えていいのだろうか。

「――あとアサキについて思うのは、人と距離を置こうとしていることかな」

「……距離？」

「ああ！　名前で呼び捨てているのなんてユウヤを抜いて私だけではないのか？　もっともっと友情を深めねばとは思わないのかい？　私のことだって私が言わなければ、今頃苗字呼びだっただろうに……」

「……」

「少しはカイリを見習いたまえ！　カイリの様に、“今日の敵は明日の友”、“君の友達は僕の友達”精神で日々友情を育むべきさ！」

カイトが何時そんなエキセントリックな精神をしてたのかは知らないが、僕には無理だろ。

「アサキ、君に問うが、かつて君個人から進んで呼び捨てた者は幾人程居るんだい！？」

おおう、何時の間にかユキのテンションが最骨頂だ。ついてけねぇが考えてみよう。

「……カイトを入れるなら二人」

「うん？　カイトとは何かのあだ名ではないのかい？」

「いや、単純に一年の時に呼び間違えたのをあいつが訂正しなかっただけ。一年は呼んでたから今更直すのも杓だしな」

「ふむ。――……では、もう一人は？」

「もう……ひと、り、は……」

ザァ――――

僕とユキは外を見た。大きな風が吹いて、舞い散る桜を取り纏めて吹く。

「――僕がもう――……名前では呼べない人、かね」

「――……アサキ？」

風に紛れて呟けば、見事にユキはキョトンとした。よく聞こえないでくれていたら本望、聞こえていても、其れはまた其れで。

「くだらない話はさておき、後何分待てばいいんだ？」

「……さて、どうだったか」

ため息をついてユキが言った。もしかしたら聞こえていたのかもしれないな。

「悪い！　遅くなっ、た……？」

やばいやばいやばいやばい、数分で終わるから待っててくれと言ったクラス委員会が見事一時間かかった。というカイリです。ユキはともかくアサキはキレてる、確実にキレてる……！！！　だから急いで教室に駆け込んだのに――ユキが口に人差し指を当てて微笑んだのが目に入っただけだった。

「……？」

ユキは無言のまま視線を落とす。そこには絶対キレてると思ったアサキの姿が……あれ、寝てる？

「春の現は素晴らしいね、鬼をも眠りにつかせてしまったよ」

「ユキ、今の台詞色々勇者だな」

ユキはぜったい勇者だ、危ない橋を自ら渡る勇者だ……！

「鬼、は正しくなかったかい？　それじゃあ悪魔、いや、罪を侵して地に堕ちた堕天使なんてどうだい？」

「ユキ、最近ボケのスキルが上がってるぜ」

元々ボケスキルしかない俺様にはキツイボケだ。天性のツッコミよ、起きろ！！

「――というか、待たせて悪かった！　アサキ起こして帰ろうぜ？」

「それもそうだね、暗くなってしまう」

「ほらアッサきゅーん、起きなさーい」

※ノリで起こしました。

「――その堕天使を救ったのは、その片割れと、地に住み着いていた一人間だった……という訳かな」

「ユキー、ボケてないで帰るぞー！」

「……」

起きたが覚醒していないアサキを引きずってユキに声をかける。

いつまでもボケてそうだからなー。

そんで俺は、待っててくれたことに感謝と謝罪をもう一度述べて

から、クラスを後にした。

64＋そんなチョークの痛みなど。

「此の問題の証明を書け、分からない奴が居たら聞くだけ聞いてやる」

相変わらず横暴な授業だ。サクライ先生の素晴らしき授業は今日も絶好調である。こんばんは、いい天気ですアサキです。という訳でお休みなさい。

「何がこんばんはだ、未だ朝だっつーの、寝てる奴この前のテストの点数バラすぞ」

何という横暴。数人の生徒が凄い勢いで起き上がった、おはよう。僕は気にせず寝るのだけれど。

「畜生……何でお前数学出来んだよ、起きろよ」

「バラしても構わないんで寝かせて下さい」

寝たい。眠い。しかし馬鹿言ってると殴られるので起きておくことにした。

「先生！」

「何だカイリ」

「証明って何スか！！」

「果てろ」

スコーン。

中三になってもカイトはカイトだった。三角形の証明とかやったじゃないかよ。見事カイトの額に白チョークをぶち当てた先生はシレッとして他の真面目な、真面目な生徒の元へ向かった。（※大事なので二度言いました）

「先生、白チョークの減りが早いって苦情が来――」

「んなの来ねぇよ」

「――てます」

来てんのかよ。遠くからの先生の声も多少びっくりしている、そりゃそうだ。

サクライ先生は、

「今度から赤チョークにする」

と、何の解決にもならない解決法を述べて先生らしく教えに戻った。先生らしく。（※大事なので二度言いましたパート2）

「ユキー」

「ふふっ、仕方がないね、私が教えてやろう」

どうやらカイトはユキに助けを求めた様だ。ちなみに言ってなかったが、ユキの席は僕の前。この前がっつり机に座ってたしな。ん、

何故僕に聞かないかって？　――僕にやる気がないからです。

「まず、証明する内容を――」

春って本当に暖かいな、と不意に思った。窓際の席をフル活用して外を眺めるが、桜の満開時期は過ぎてしまったから見えるのは青々とした空だけで。

――誰の声も遠ざかる。この季節になると――どうしても思い出してしまうんだ、あいつの名前が――奴の笑顔がそうさせるのか。

もう、三年も前の話になるのか。酷く懐かしい、既に過去になってしまう奴の存在。

「――き」

たった十二の餓鬼の時の話。たった三歳違うだけで、どうしてあれだけ餓鬼だったのかと笑えてくる。あいつは――あいつは元気なのかな、元気なら良い、僕のことなんか須らく忘れてたくれていればと――希（こいねが）うんだけれど。

「――アサキ？」

はっと。

我に還ったそこに居たのは――色素が薄いのかと、最初は思った茶髪の――少女な少年がひとり。

「……ん？」

「これで合っているよね？」

僕に公式の確認を取りたいのか、声をかけてきたユキと、横のカイトが僕を見ていた。頬杖をついていた僕はぐるりと視線をそちらに持っていき、正しく書かれたそれを見る。

「合ってるよ」

「なぁ、アサキー」

答えだけ確認して視線を戻そうと思ってたのに、今度はカイトに声をかけられた。何なんだ、まだ分からないのか。

「何」

「や、別に何でもねぇんだけどさ」

何だよ、何でもないなら呼ぶな。

つーか寝る、起こすなよ。

「これ分かる奴ー……って、寝るなよ」

「せんせ、良いじゃん、何時ものことじゃん」

そ、何時ものことだよ先生。最近何か上の空な、アサキは何時も通り。

だからこそ、聞いて良いのか駄目なのか、よく分からないから聞けないんだけど……さて、どうしようかなぁってな。

「じゃあ変わりにお前が解け」

「先生鬼畜！！！！」

ま、それくらいは受けるっきゃねぇよな。

……うん。……分からねぇ。

65＋優しさのコトダマ。

「ビバ☆街中探検隊！！」

「そういう恥ずかしいこと叫ぶなら帰って良いでしょうか？」

こんにちは、カイリっす。ただ今放課後、珍しくも俺は帰り道をアスカと共にしている。

「いや、いやいやいや、それは悲しいな」

「じゃあ、もう少し大人しめにお願いしますね」

こあいなぁ。

まぁ、先に行くとか言われちゃうと寂しいのでボルテージを少し落とすことにする。普通に帰るのも暇だ、アスカの体調も良好な様だし……という訳で街中探検を決行することにした俺達。

「あまりハードなのは着いて行けませんからね……？　普通に探検なら構いません」

「勿論よ！　アスカに何かあったら、俺様がユウヤに殺される」

冗談じゃない。あいつは殺るっつったら殺る。だから慎重に、って訳だ。

話は変わるが、何故今日アサキ達が居ないのかというと――うん、アサキが休みだから。

滅多にない現象、耳を疑った俺、あの万年皆勤賞が休みだなんて……！　ふて腐れてても毎日来ているアサキが！　しかし驚きながらも、最近様子がおかしかったのは熱の所為だったのか、と俺は納得。

『俺、先帰るね』

しかしアスカが居るにも関わらず、騒ぐことなく珍しく真面目に言ったユウヤも居たことだし……まぁ、何かあったのではないだろかとやはり俺心配。

「しかし俺様は何時も通りにハイテンション！」

「無理に上げなくても……。欠席日数はカイリ君の方が遥か上なんですから」

アスカが何か言っているが何もキコエナーイ！！！！

「――おや、常連客君」

――後ろから声がかかる。俺もアスカも振り返ると、そこには何度お世話になったか分からない見知った男の人が居た。

「――先生！」

「こんなところで油を売っていると、また風邪引いて私のところに来る羽目になりますよ？」

彼は医者先生。俺がよく――よく、じゃ本当は駄目なんだけど――お世話になる内科医の先生だ。

「先生……ですか？」

「うん、医者ー。先生ー、友達ー」

「こんにちは、お友達」

「あ、はい、こんにちは」

「ふふっ、カイリ君のお友達にしては礼儀正しそうだね」

先生ひでぇ。

先生は腕が立つ先生らしくて、今年で四十になるなんて到底思えない童顔さを保つベリーベリーカッコイイ先生なのだ。……笑顔が眩しい、これで三十九……無いわ。うちの親父に見せてやりてぇ。

「先生何してんの？」

「何って……夕方になったから家に帰るところです」

アンタは学生か。医者が日暮れに帰るなよ。

「最近帰ってなかったので、奥さんと子供に怒られてしまいそうで

すね」

「どのくらい帰ってなかったのですか？」

苦笑いも似合う先生にアスカが聞く。お医者さんって、帰るの遅くなったら泊まっちゃったりすんのかな……。だから帰れてないんだろうな、先生お疲れ様だ。

「ざっと――去年の夏休みだったでしょうか」

「帰らな過ぎだろ」

ざっと一年経っちゃうよ先生。

「そんなことしてっと、奥さんに逃げられちゃうぜー」

「いえ、奥さんもよく家を空ける人ですからね、それはないよ」

「そうですよカイリ君、“夫元気で留守がいい”という言葉が存在するんですから」

「おや。お友達は随分難しい言葉を知っているね」

「はい、ませてますから」

顔を見合わせて笑う二人。自分からませてますからって……アスカ自覚してんのかよ、と思った俺。

「ませてるなんて思いませんよ。博学だな、と思っただけで」

「そう、ですか？　大人の人って、俺みたいな子供をよく思わない……って思ってるのですが」

「確かに言ってたなー、俺の友達他二人も」

そういやアサキもユキも頭良いし、なんか俺の周りってませ餓鬼ばっかだ。……良い意味でだぜ？　そしてユウヤは例外。

不思議そうな俺達を見るなり先生はふふっ、と微笑んだ。そしてポンッ、と、俺達の頭に手を置く。

「――そんなことありません。そういう大人の人達は、自分が生きた分だけ偉くなっていると勘違いをしているんだよ」

「勘違い？」

「うん。だから自分より歳下な君達を見下して、ませているだの、可愛くないだの、沢山言うんだよ」

よしよし、と先生は俺達を撫でつつしゃがみ込んで、俺達と同じ目線になっても笑顔で続けた。先生、俺達此れでも中学生なんだけどな。

「博学なことの何が悪い？　敬語を扱うことの何が悪い？　同じ目線に立って、人と対等に言葉を交わすことがおかしいのかい？　人は大人になってから生意気になる、余計ませてくるのさ。だから、君達は忘れちゃいけない――そんな大人になっちゃ駄目だ」

「……」

「……」

「今の博学がませていると見なされるなら、存分にませなさい。ませてませて、もっとませて、そのまま大人になった時に世界を見て、周りに感化されないで、素敵な大人になって下さい。ませ方を間違えてはいけない、素敵に――ませて下さいね」

傲慢なませ方は駄目です、と最後に微笑んだ先生は、俺達の頭から手を離して立ち上がった。

「――おや、陽が落ちてしまう。僕は早く帰らねば」

左腕につけた金色の時計を見て、先生は慌てた。……様には見えないけど、慌てたみたいだ。

「用事あるのか？」

「いえ、そうじゃないんだけどね。子供達に早く逢いたいのさ」

首を傾げた俺に、先生は今までで一番、らしい笑顔で笑った。

そうだ、そういえば。

「せんせ、そういえば聞きたいことがあったんだけど」

「聞きますよ」

「先生の名前って？」

「……何度会ってるかも分からないくらい会っているのに、忘れた

んですか？」

唖然とされた、ゴメン先生。忘れた訳じゃないんだ、只――確かめたくて。

先生は考える様に眉を潜めると、すぐに笑顔で、

「次、会うまでに思い出して下さいね」

と、悪戯に笑った。

――嗚呼、やっぱり。俺は思った訳で。

「それではまた」

先生は身を翻して、最後まで爽やかに、笑って手を振った。

「あの、カイリ君」

「おう？」

「さっきの人、もしかして――」

「似てただろ？」

「……はい。とても――」

「ただいま」

「お帰――え!?　父さん!?　本物ですか!?」

「おや、久方振りに帰って来たパパに向かって何を言うんですか――ユウヤ」

「アサくーん!!!!!　パパが帰って来たー!!!!!!　明日雷雨だよ絶対!!!!!　つか槍降るって!!!!!」

「キショイよ父さん」

「酷いなぁアサキは」

「おおおおおおおお帰りとーさん!」

「ただいま。……アサキもただいま」

「……お帰り、父さん」

「――悪戯っぽく笑ったあの人、アサキ君にそっくりでしたね」

「普段の笑顔はユウヤにそっくりだ」

「あと、カッコイイ容姿は、マヒルさん似でしたね」

きっと今頃あの人は、暖かい家族に迎えられているのだろうか。

――と、俺は思った。

66＋好きの数だけ勘付けるってね。／前

漫画よし、お菓子よし、飲み物よし！

此れだけ買えばアサキも文句を言うまい！　こんちはユウヤです！　買い出しに来て、やっとこさ終わったのでチャリンコチャリチャリ帰宅中！！！！

ただいま買い込んだのは、全て自分のものではない。家で寝込まされている弟のものです。寝込まされている、というのは昨日帰って来た父さんの所為。

熱だからと言って本人は元気なつもりなアサ君は、冷静に本屋に行こうとしたが止められていた。そりゃ父さん医者だし、職業柄止めない訳にゃいかないし。つか、父さんだろうが何だろうが普通摂氏三十八度強ある人を止めない人は居ないだろう。そしたら、

『ユウヤ、新巻買って来て』

と、ふて腐れて俺に言うものだからふたつ返事でＯＫしました。なんか可哀相だから。……したら、

『ついでに菓子と飲み物』

と調子乗ってきやがった。

……まぁＯＫしてしまったが。家に居ても父さんと話すくらいしかやることないしさ。父さんも父さんで、

『あ、ユウヤ、今日は僕が夕食作るから遅くなっても構わないから

ね』

なんていうから素直に遊びに出た訳さ。ああ、久方ぶりの自由だ。普段は夕飯の為に六時には家に居なきゃだからね、アサ君は何か最近、作らないし……作れないし？

午後三時程に家を出て、ただいまの時刻は六時程。立ち読みしてたらこんなになっちゃったよ。まぁ、そろそろ帰って久方に父さんのご飯が食べたいなー、なんて考えていれば――通り掛かった公園に、見知った影を見つけた。

「あ、おーい！」

「――？　あ……な、何よヒコクユウヤ！！」

相変わらずなフルネーム呼びで俺の名を呼んだのは、勿論リョウちゃんです。なんか久しぶりに会った気がする。

自転車から降りて公園に侵入すると、リョウちゃんが座ってたブランコの近くに自転車を止めた。

「奇遇っすー」

「……そーね、奇遇ね」

リョウちゃんはブランコに乗っているのにブランコを漕いではいないらしい。

「一人で何してるの？」

「それは私の台詞よ、アンタ何してる訳？」

「愛しの弟の為の買い出し」

「体よく使われてんじゃない」

まぁね。というか愛しに反応してくれないリョウちゃん。ツッコんで欲しかった。

「で、リョウちゃんは？」

「私は……まぁ、何もしてないんだけどさ」

リョウちゃんは本当に何もしてなかったみたいで、何時もの慌てふためいた雰囲気とは違く笑っていた。

「何もしてないのに此処に居たの？」

「悪い？　私だって物思いに耽りたい時だってあるのよ」

中学生が何を言うんだか。

俺はリョウちゃんの隣のブランコに足を乗せ、思いっきり漕いでみた。リョウちゃんは何も言わないし……良いよね。

「でさ」

そして、ひとつ思ったことを言ってみた。

「何よ」

「リョウちゃんって――アサ君絡まないと大人しいね」

「ばっ！！！！」

前を見ていたリョウちゃんが、こちらを見た。まっかっかー。

「な、な、何言ってるのよ！　私は別に普段から大人しいわよ！！」

ほら、騒がしくなったよー。

「と、というか！　ヒコクアサキが何で出てくるのか分からないわ！！！！」

「……え？　気付かれてないとでも思ってるの……？」

「……え？」

「リョウがアサ君のことす――」

「わーわー！！！！」

そうだったみたい。悪いことをしたよ、はっはー。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。何で知ってる訳……？」

「寧ろ分からない人が重症だよ」

「ま、まさかヒコクアサキも気付いてるとか言わないわよね！？」

「言わない言わない、アサ君は自分に向けられた好意には一切気付かない鈍感野郎だから」

ブランコ漕ぎつつ右手で否定の意味を示してみたら、立ち上がって抗議したリョウちゃんはホッとしてまたもブランコに座り込んだ。

「――でもアサ君以外皆知ってる」

ガタンッ！！

――再び立ち上がったけど。

「モモちゃんもカイト君も、多分アスカも知ってるんじゃない？ついでにタッ君とかハジメ君とかセイタ君とかも――」

「もう良いわ！！！！」

指折りに言ったらリョウちゃんは再び真っ赤になりました。まっかっかー。

そして両手を自分の頬に当ててぶつぶつ呟き出した。

「うそ、そんな軽いモブ達にまでバレてるだなんて……！」

タッ君達モブ扱いですかリョウちゃん。

「何で……？」

「や、リョウちゃんの態度でモロバレだよ」

「何ですって！！」

「言い忘れてたけど、ユキちゃんは出会った瞬間気付いたみたいだ

よ？」

「ナンデスト！？」

「カタカナ表記！？」

リョウちゃん落ち着いて！　だってユキちゃんが言ってたよ！？

『私を女性と勘違いしたらしくってね、アサキと三人で出会った時に、恋仲として宣戦布告されてしまったよ』

って。リョウちゃんにそのまま伝えてあげたら、

「ぎゃー！！！！」

発狂された。

「リョウちゃーん、落ち着いてよー」

「無理！　アンタそんなこと言って私が落ち着けると思ってるの！？」

「思ってないよ？」

「思いなさい！！」

どっちよ。

「ま、アサ君をす――」

「言うなっ！！」

「えー、表現しづらいんですけど」

「そ、其処は頭を捻りなさい」

「――想ってることに対しては、凄いと思う」

「よし、それなら――って、え？」

リョウちゃんはキョトンとして俺を見た。何やら呆気って感じ。

「何よ、アンタ何時もアサ君アサ君五月蝿いのに、弟に自信ない訳？」

「ないよ」

「……ないの！？」

ないに決まってるじゃない。リョウちゃんは少し考えてから叫んだ。

「だってアサ君だよ？　素直さ零優しさ零だよ？」

「酷いわね」

「――でも、本当は零じゃないんだよ」

うん、零なんかじゃない。全然見えないだけ。

「零……な訳ないじゃん。アサキだよ、本当は友達思いだし家族思いだし、雨に打たれた猫が居たら、絶対連れて来ちゃいそうなアサキだよ。あんなお人良し、そう居ないってー」

「……連れて来たの？」

「比喩だよー、でもアサ君実は猫好きだよ」

寧ろ、そんなのに遭遇する訳ないじゃん。人生そう広くはないよ、ははっ。

「――そんなの、知ってるわよ」

「……」

「自分が泣かせた訳でもない、その日会ったばかりの人追い掛けてきちゃうくらいのお人良し、知らない訳ないじゃない」

……ふむ、リョウちゃんはそれに気付いたから、

「アサキが好きな訳だね」

「すっ、好きじゃないわよ！」

あれ？

「好きじゃないの？」

「ないわよ！　ない、ないわ……よ！！」

信用度零。

「べ、別にあんな奴好きじゃないわよ！！　あんなお人良し何時も見てないわ！！　何時も見てないから、何か最近元気なかったのも知らないし、前学校休んだことなんて知らないんだからね！？　心配とか、してないって言ってるでしょうが！！」

「うん、聞いてもないね」

うわー、リョウちゃん面白い。すんごく面白い。

「か、隠れてみてなんて居ないし、モモに会いに行った時ヒコクアサキの方見て、最近何か元気ないのが心配になって、ついこんな時間までここで考え耽ってなんて……ない、わよ」

「リョウちゃん？」

「……してないから」

「……」

どうやら、本気で心配だったみたいだ。

それよりも、最近知り合ったばかりのリョウちゃんが――アサキの様子がおかしいことに気付いたことに、ちょっと驚いた俺。

「……」

こんな健気な子、心配させたまま帰したら、男が廃るーって、カイト君なら言うかね。……俺は別にいいんだけど。

「……リョーウーちゃん」

「……何よ？」

「時間あるなら、俺の話聞くー？」

俺はブランコから飛び降りて振り向き、座ってるリョウちゃんを見てはとりあえず、ニコーっと笑ってみた。

67＋好きの数だけ勘付けるってね。／後

「――アサキね、ずっと引き摺ってることがあるんだよ」

ヒコクユウヤは改めてブランコに座り込み、キー、と音の鳴るブランコを揺らしながら話し始めた。

「引き摺ってること？」

「小学校の時、に遭ったことを、まーだ引きずってるみたい」

ヒコクユウヤはいつものニヘラ顔で言った。いっつもいっつもヘラヘラしてるのに、私がコイツから聞く話は何だかシリアスな話ばかりな気がする。

「其れって何なの……？」

「気になるー？」

ニコーッと、こいつはこっちを見て。ムカついたけど、やっぱり気になるから頷いた。

「……実は――」

「……」

「――俺もよく知らないのよー」

「……は？　……はぁ！？」

つい、声を荒げた。

「うん、知らねぇのよ、俺」

「あ、アンタ、あいつの兄貴でしょ！？」

「うん、お兄ちゃんだけど、リョウちゃん知っての通り、気難しい弟なので」

兄弟であっても何だか分からないことってあるのね。私はなるたけ興味なさそうに相槌を打った。

「何かあったことだけは分かったんだ、でも、俺もそんくらいの時――こんなにアサキと仲良くなかったからさ」

「――え？」

軽く耳を疑うものがあった。ヒコクアサキとコイツが――仲良くなかった？　今こんなにも仲の良い双子が、仲良くなかったですって……？

「ちょっと前に言われたんだよねー、真面目な弟とちゃらんぽらんな兄貴じゃあ……仲良いのって普通有り得ない、って」

……ちゃらんぽらんな自覚あったのね。今そんなこと言えないんだけど。

「同じ学校でも一緒に帰ってなかったし、同じ家で同じ部屋でも、

一緒に遊ぶことなんて少なくてさー」

「……」

「それでも、凄く楽しかったよ？　アサキ、今よりももっと、笑う奴だったし」

「わ、笑う！？　滅多にない行動じゃない！」

「うん。でも笑ってた、沢山沢山、ただいま、でも、お帰り、でも。たった一言の挨拶でだって……あの時のアサキは笑ってたよ」

そう言ってるヒコクユウヤの表情は、何かを思い出してる様ではある。……でも、それは悲しそうな顔に見えなくもなかった。

そんなにも――ヒコクアサキは変わったのかしら。

「リョウちゃんってさ、一年の時から俺達のこと知ってる？」

「知ってる……ちゃあ知ってるけど、アンタだけよ。目茶苦茶五月蝿い奴って」

「酷い！！」

「そんなアンタに――あんな弟が居るなんて、どれだけの人が知ってたでしょうね」

あんな、大人しくて頭が良い、運動は出来る、でも協調性の皆無な弟。常にクラスの中心で馬鹿やってるお調子者の弟がアレだなんて、誰が思うのか、って話。

「……あんなじゃ、なかったんだよ？　もっともっと、地味なりに元気な奴だった」

「地味、って……」

キーキーと揺らしていたブランコを揺らし止め、ヒコクユウヤは気持ち俯いた。

「あんまり話さないなりにさ、そん時から大切な弟だったんだよ。なのに、俺はなーんにも気付かなかったんだよねー。中学上がって何か少しずつだけど明るくなってきたアサキ見てて、俺って駄目だなー、とか思った」

中学から、一緒に居ることが増えたんだよね、と、ヒコクユウヤは続けた。同時に、俺が勝手に一緒に居たんだけど、とも言った。

「俺のおかげで少しは明るくなった」

「え？」

「――なんてこと、言う気はないよ」

ははっ、と笑うヒコクユウヤは、やっぱり何か悲しそう。私の見間違いということはない、はず。

「きっとそれは、俺の影響じゃあないんだ。俺じゃなくて――」

「――ロクジョーカイリ、ね」

「そのとーり」

あいつ――ロクジョーカイリが何時からヒコクアサキと一緒に居たかなんて知らない。でも、アイツがヒコクアサキと一緒に居て、――不満そうにしてるのなんて見たことが無いから。

「表情は、無表情だけどね」

「仕方ないよ、アサキは無表情が常なんだから」

無表情だから無愛想とか言われるのよ。無愛想なんかじゃなくて、ただ表情がないだけなのに。私は真っ暗になった空を見上げて、少しだけロクジョーカイリに嫉妬した。

何で私は、こんなにも遅く彼に出会ったのか、って。何でもっと早く――ヒコクアサキに出会えなかったのか、って。私が居たって何も出来ないって分かってるけど、その時傍に居れなかったっていう淋しさやら何やらが、心に募った。

「それとさ」

それでもうひとつだけ、言いたかったことを言った。

「アンタが居たことだって、ヒコクアサキに影響を与えたんじゃないかしら」

暗い外で、ヒコクユウヤは首を傾げた。――様な気がした。

「自分でそう思ってるだけでしょ。アンタは、絶対にヒコクアサキに影響を与えてた、って思う。……良い意味のね」

「……」

「あくまで、私が思うだけなんだけどさっ！！」

私は其れだけ言って立ち上がった。そろそろ帰らないと流石に怒られそうなので。

「リョウちゃん」

「何よ」

「アサ君を、好きになってくれてありがと」

そんな恥ずかしいことで感謝された。でも、声音がいつものヒコクユウヤに戻ってたから、私は真っ赤になりつつも――絶対赤い――笑うだけに留めた。

「ただいま」

「お帰りなさい、ユウヤ」

家に帰ったら、笑顔な父さんに迎えられた。

「随分とご機嫌だね、ご飯にしましょう」

「うん！　遅くなっちゃってごめんね？」

「それは僕じゃあなくて、リビングに居る暴君王子様に言ってくれると助かるかな」

うん？　嗚呼、アサ君か。父さんと話しながらリビングに行くと、ソファで寝転がる暴君王子様を見つけた。

「アサキー、遅くなってゴメー……ん？」

頭上から覗き込む。

「……」

あら、寝転がってる訳じゃあなかったらしい。――本格的に寝ているみたい。

父さんがアサ君の額に手を置いて、

「熱は下がり始めてるみたいだね、寝ちゃってるみたいだけど。……アサキー、ご飯は食べませんかー？」

と、控えめに声をかければあっさりと目を覚ましたアサ君。

「食う」

眠くても食うそうだ。父さんが満足気にキッチンに向かったので、

俺は起き上がったアサ君の横に一先ず座った。

「ただいま、んでおはようアサ君。頼まれてたやつー」

「遅い」

文句を言いながらもそれを受け取ると、アサ君はひとつ欠伸を漏らした。

「じゃ、俺父さん手伝ってくるー」

特に批判もない様なので、父さんを手伝おう。横に居ても寝起きのアサ君は何もしてくれなさそうだし。

とにかく今日のことも黙ったおこうかな、何か言われそうだし。そんなことと同時に、俺は本当にアサ君に良い影響を与えられたのかな、なんて考えつつアサ君を見たら、アサ君もこっちを見ていた。

「ん？」

「お帰り、ユウヤ」

「……」

少し唖然。だってちょっと、――薄く微笑まれた気がしたからさ。

「……」

「……ユウヤ？」

しかしこのまま唖然と黙り続けても変に思われるか、そう思った俺は、アサ君可愛いなぁとか思いつつも、

「ただいま、アサキー」

と、笑顔で返してからキッチンへ向かった。

67＋好きの数だけ勘付けるってね。／後（後書き）

シリアスに書こうとして、敢え無く撃沈ｏｒｚ

まぁ、浅井の文才なんてそんなもんですよ。（ふっ

68＋修羅場らばー？

「な、アサキー。コンビニ寄っていい？」

「は？」

カイトのそんなひと言。中学生が何を言うのか、というのに関しては僕とっくにツッコみませんアサキです。

「んで公園行こうぜー公園」

「一人でどうぞ」

僕は帰りたいんだ、とにかく帰りたい。家に帰って休んでいた間に進め始めたゲームを一刻も早く進めたい。カイトなんざに付き合っている時間は無い……！

「つれねぇなぁアサキー。たまにはいいだろー？」

「嫌だ」

「頼む！！」

「僕が何でお前に付き合わなきゃいけないんだよ」

「少しだからよー」

「……少し、な」

「よっしゃ行くぜ！！」

――折れるのは大低僕。このまま帰ってもふて腐れてずーっと黙り込んでウザイから仕方なく、仕方なくだからな。

勝手にコンビニに入って行くカイトを見て、僕は外で待つ。ろくなものを入れていない鞄を担ぎつつ、腕の疲れに堪える僕。

休みが明けて、熱も下がって。何時も通りに学校に通う自分。何やら気付かなかったが何時もより暗かったとユウヤは言っていた――今以上に暗いってどういう――。

迷惑かけたのかなー、とか。そう思ったりしたけど素直に感謝の言葉を述べられる程、僕は素直じゃないもので。心配してくれたんですか、と尋ねることも癪に障る。

「ひっでぇ性格」

自分で言えるから滑稽だ。

「俺のことか！？」

「！？」

いきなり現れたカイトにマジで驚いた。何時コンビニから出て来たんだお前は。

「はっはー！　アサキマジビビりー！！」

「五月蝿い馬鹿野郎」

指差すなカスが。僕は勝手に歩き出す、出て来たならもう此処に用はないっつーの。カイトは後ろからついて来ているらしく、足音が耳に響く。

「なー、アサキー」

「何」

「公園ー」

「分かってる」

このまま帰ってしまうとでも思ったのか、カイトが後ろから間延びした声を挙げる。……そこまで薄情じゃねぇッつーの。

公園に着く。公園なんて凄い久しぶりだな、マジで。僕はたるいのでベンチに座り込む、鞄は地面に置いて、離れて座ったカイトを見てから上に移した。

「肉まん様〜」

暖かい系の食べ物を買ったらしく、様付けして袋から取り出す、……季節間違えてないか。

「ほい、アサキー」

「……何」

「肉まんー」

何故か袋から二個目の肉まんを取り出した。それを僕に渡そうとしているところを見ると――

「くれんの？」

「おー」

――という訳らしい。遠慮？　何其れ、其れは美味しいの？　そんな味の分からないものよりか、僕は差し出された肉まんを食べます。

「美味し」

「やねぇ」

ふむ、平穏。部活無所属の僕等は普通の中学生よか帰りが早め。だから平穏なのだろうと、肉まん食いながら思う。人の金っていうのが一段と良い。

――まぁ、カイトが帰りに此処に連れて来た意図さえ読めなきゃ、より良かったとぼやきたい。

「カイト」

「んむ？」

「――“何でお前テンション低かったんだ？”って聞いたら殺すから」

「ぶはっ！！」

肉まん吐くな、汚い。
どうやら図星だった様子。

「おまへひひょはふぇっはふー！！！！！」

「口の中を洗浄してから喋れ馬鹿」

何言ってるか全く分からんぞ。

「むぐー。……――ッだから！　人が折角心配してやってんのに！！」

「あからさまに前文より長いじゃねぇかよ」

「延ばした」

「あそ」

話が逸れた、修正。

「お前如きに気付かれるくらい暗かったのか僕は」

「おう、通常三割増しって感じだった。外ばっか見てただろーお前」

「……」

考え事してたのが多かったからかな。普段は滅多に出さない熱まで出してしまった僕だ、そりゃあ考え過ぎた。

「ユキだって俺だって何考えてんのか不思議でしゃあなかったんだもん、少しくらい言ってくれたって――」

「言わない」

「――いいじゃ……否定が早い！！」

秘技、先手必勝。

「僕が何を考えて様がお前には関係ない」

「あるだろ！　俺等ダ――」

「勝手言ってろ。友達じゃない、結局は他人だ」

「でも、“赤の”ではないじゃんか」

「でも他人だ」

「そしたら家族だって他人じゃねぇかよ」

「嗚呼、だからユウヤだって他人だ。皆、世界中全て――他人だよ」

そしてこの言葉を置いた刹那、――カイトが叫んだ。

「――ふざけんじゃねぇよテメェ！　何時までもそうやってスカしたこと言ってんなよ馬鹿がっ！！！！」

正直、驚いた。ええ、驚きましたとも。ベンチから立ち上がってそう叫ぶものだから、口に運んでいた肉まん落としそうになりましたよ。

「……」

僕はポカーン、とカイトを見る。其れを勘違いしたのかカイトは、やばい、とでも言いた気に慌て出す。

「あ、いや、そーじゃなくてだな」

しかし僕も冷静になれば――結構酷いな事言われた……？　と理解。

「――……へー」

「あ、ちょってアサキ今のは――」

「スカした奴で結構。別に僕――俺は貴様のことを友達だとは認めていない訳だし、何言ってもらっても構わないよ」

「ちょ！　待ってってアサキ！　今のは違くて！！」

「何が違うのかは分からないが、今日は帰ろう。早く帰って大切なゲームをやらなきゃだから」

僕は鞄を持ってスタスタと歩き出す。カイトは恐らく知っている、僕の一人称が“俺”になるのは、テンションが上がり過ぎて狂ってしまった時か――喧嘩の時。

「あ、アサ――」

「肉まん、ご馳走様――ロクジョーカイリ君」

「!?」

カイトは追って来ない。そりゃそうだろうな。
クスリと笑ってフルネームで呼んでやれば、カイトは唖然と立ち止まってその場に佇んだ。

僕は気にせず帰るさ。ゲームやりたいし。
――何か辛いと思った感情が、気になるところではあるけれど。

69＋修羅場らばーは的外れ。

こんにちは、もうすぐこんばんはユウヤです。夕方ですよ、教室から素敵な日の入りが目の前に見えて気分は最高です。

「……」

――此の人が居なければ。

「ねぇカイト君」

「んー」

「そろそろ訳を話して俺を家に帰してよー」

何やら今日ずーっとテンションが低かったみたいで、放課後になった瞬間泣きついてきました、めっずらしー。しかし何を話すでもなくふて腐れてるので、俺は自席でのんびりと言葉を待っている状況。

ちなみに今まで聞けた状況は、アサ君と喧嘩した、ということのみ。

「喧嘩したなら謝ればいいじゃーん」

「あやまるチャンスもくれないんですもんあのひと」

幼児チックに話さないで欲しいよ。

「あさ、あやまろうとおもったらさ――」

『あ、アサキ昨日は悪かっ――』

『あ、おはよう――ロクジョー君』

「――って言われたんだよ」

「苗字呼びされただけじゃないの」

それで弱っててよく今までアサ君と友達やってたな。

「それに授業中にさ――」

『アサキ、そのー、教科書見せて？』

『いいよ、はい、ロクジョー君』

「――素直に教科書見せてくれちゃったんだぜ？」

「いや、そりゃ良かったじゃない」

そりゃアサ君じゃあ怖いけど、かえって良かったじゃないか。

「絶対怒ってる……！！　帰る最後の最後まで笑顔で『じゃあねロクジョー君』とか言われたもん！　どんだけ俺を蔑めれば――」

ロクジョー君は今日一日、とにかくアサ君のダイレクトアタックを数十回に渡って受けたらしい。半狂乱で騒ぐ姿はすんごく面白いぜロクジョー君☆

「まぁまぁ落ち着いてーロクジョー君」

「お前までロクジョー君言うな！」

「はいはい。で、カイト君どうやって怒らせた訳よー」

とっとと本題に入って欲しいです。普段おふざけ担当な俺はため息を尽きながらカイト君を見た。

「……言って、怒んねぇ？」

「何よ君、俺に言ってもキレることアサキに言った訳……？」

「言ってねぇ言ってねぇ！　怖ぇよお前！！　流石双子睨まんといて……！！！！」

えへへ、睨んでないよぅえへへへ……はは。

「で、何言ったの？　どうせ吹っかけたのはカイト君なんでしょ？」

「ふ、吹っかけた訳じゃねぇよ……まぁ、言ったのは俺だけど」

言ってんじゃない。

「違う！　俺はあいつが何にも言わないから！！」

「言うって……何が？」

「ほら……最近春現に浮かされてるかの如く、色々考えてたみたいだから……」

「……あー……カイト君も気付いてたんだ」

こりゃ駄目だよアサ君。君が悟られるのが悪いんじゃない？　俺は暢気にもそう解釈して、更にのんびりと続けた。

「アサ君が黙ーって何も言わないからカイト君はかっとなって――」

「スカしてんじゃねーって言いました」

「――テメェ誰の弟がスカしてるって……？」

「怖いから睨まんでって、つか、別にそういう悪い意味じゃないんだって！！」

ガタン、と立ち上がってカイト君をどう捻り潰すかと考えたけど、カイト君が慌てて否定するものだから動きを止めてしまった。

「じゃ、何？」

「そりゃ、アサキがそういう性格なのは知ってるけどさ……俺としてはもう二年の付き合いな訳で？　悩んでたりするなら、少しは、話して欲しいなー……とか思うのでして」

「つまり、“んなスカしてねぇで俺様に頼れってんだ馬鹿アサキー！！”……という訳ですね、カイトさん」

「うん、そういうこと」

「――ですって、アサキさん」

すんごく中途半端な体勢を直立に戻し、俺は俺達の後方、ドア枠に寄り掛かるアサ君を見てニッコリと笑った。

「ほー、余計なお節介この上ありませんね、ユウヤさん」

「――！？　あ、アサキ、お前、何時から――」

腕組みをしてため息をついたアサ君は、一度伏せた目を前方に向け、カイト君を見た。

「お前、バッカじゃねぇの？　一般人よか頭無ぇのに俺のこと心配？　出来る訳？　つーか放っとけば？」

「な、馬鹿っつーな！」

「他人だし、人とろくにまともな会話しないし、名前間違えるし」

「そりゃアサキが自主的に――」

「迷惑かけるし、つまらない奴だし、百害あって一利ないし」

「――其処は違うぞ馬鹿アサキ！　お前は害とか無ぇだろうが！！」

……ふむ、大丈夫そうだねもう。言い合う二人を横から見て、再び席に座った俺。

「とにかく、放っとけって言ってんの」

「……」

「……言いたくなったら、自分から言うからよ」

アサキは足元に置いていた鞄を拾うと、何時もの様に担ぎ込む。カイトは――というか俺も――ポカーン、としてアサ君を見てた。

「何、ボーッとしてないで早く帰ろうよ。――僕、帰ってゲームしたいんだけど」

あ、一人称が戻した。

俺は一人、俺も一緒に帰っていいんだなー、とか考えていたけども、隣の方は未だポカーン、としていらっしゃる。

「アーサ君、カイト君応答がないよ」

「何コイツ。……帰り、コンビニ寄って何か奢ってやろうかと思ったのにね」

「お？」

あ、反応有。俺はアサ君の隣に並ぶ。

「早く行こうよ、それとも何？　この僕の誘いを断る訳？　――カ

イトの癖に」

「い、……行くに決まってんだろバーカ！！」

さっきまでふて腐れてたのは何処へやら。カイト君は思い切り立ち上がって、アサキと俺の居る方へと走り込んで来た。

「俺肉まんがいい」

「また？　昨日食っただろ」

「あー君、俺も俺も」

「……何この安上がりコンビ」

「アサキ、本当はさ」

カイトと別れてから家路を歩く僕等。ユウヤは苦笑して僕を見た。

「――全然怒って、なかったでしょ？」

「分かったんだ」

流石、というべきなのか。ちょっとした他人のことの嘘には気付

かないのに、自分自身の感情的なことに関してユウヤには昔から何でもバレる。兄貴にも、父さんにも、隠してるつもりなのにバレる。

「そりゃー分かるよー。だってアサ君が怒ってたら、一人称なんて無意識に変わるじゃないかー」

そうか、あんな意図的に変えてちゃバレバレか。

「……じゃあ、何でだと思ったのさ」

「言ったら怒るから言わない」

「じゃあ其れ正解」

ユウヤは本当に買わせた肉まんを頬張りつつ笑った。絶対に言わないで欲しい、喧嘩の要因。

「余り俺の手を煩わせないでよねー」

「え、お前その台詞よく僕に言えたね？」

普段煩わせてくれるのは何処のドイツ？　と言いたかったが、確かに迷惑の大きさは僕が上な気がしたので言わなかった。こいつは普段ベタベタなのに、こういう時はマジに偉そうで、兄貴みたいに振る舞う。まるで――昔に戻ったみたいだと思った。

「ユウヤ」

そして不意に思う。何も聞かないで傍に居る様になったこいつに、昔から迷惑かけまくりだと。

「んー？」

「――ゴメン」

「――どったまー」

返事がおかしくないか。謝ったつもりなのに、どう致しましてって、おかしいだろ。

「いーの。アサ君のゴメンには、沢山色んな感情が篭ってるんだからねー。ありがとー、とかどけー、とか」

ヘラヘラしやがってコイツは……。

「今のはきっと、ありがとー、かなって」

「……」

ヘラヘラしてんのに――凄いから困る。

「ユウヤ」

「むい？」

「朽ち果てろ」

「――はい？」

僕は歩調を早めて歩き出す。後ろからは慌てたユウヤの声。

「ちょ、アサ君今のは何!?　朽ち果てろって、流石にお兄ちゃん分からないよ!?」

「そのままの意味です」

「酷い!!」

分かられて溜まるか。今のはカイトと喧嘩（※みたいなもの）の要因になったやつと同じなんだから。ユウヤが気付いたその要因、僕は暴言に混ぜたこの感情を、バレるもんかと無表情を装って歩いた。

カイトの方はユウヤにバレたけど、これはバレる訳にはいかない。

――“照れ隠し”だなんて、誰が言うもんか。

70＋雷かみなりゴーロゴロ。

こんにちは、モモです、お久しぶりです。今日は皆部活がなくて、皆で帰ることになってます。嬉しいなぁ。

リョウちゃんもアサキ君もロクジョー君も一緒、ニカイドー君もユウヤ君もユキ君も一緒なんだよー。……だけど――

――ザー――

「うわー、雨ー」

ロクジョー君が呟いた通り――大雨です。というか、

――ピシャン！　――……ゴロゴロ――

――雷雨です。

「キャ！！」

「……」

私の横で跳びはねたリョウちゃんと、無言で耳を塞ぎつつ座り込むアサキ君。アサキ君は怖い……のかな？

「何だよリョウコ、お前雷怖いん？」

「ばっ、馬鹿言わないで！　雷なんてただの音――」

ゴロゴロゴロゴロ――

「――……よ！！」

リョウちゃん、今の間説得力ないよ。

「あー君、下駄箱に座り込むのは邪魔だと思うんだけど」

「五月蝿い五月蝿い五月蝿い五月蝿い五月蝿い五月蝿い五月蝿」

「聞こえちゃいないか」

ブツブツ言って気を紛らわせているらしいアサキ君。雷、怖いんだね……リョウちゃんと似た者同士！　……だから何だろうごめんなさい。そしてユキ君は一人、楽しそうにアサキ君を見ている。

「つーか、これじゃあ帰れないんだけど」

「だねー、俺とかカイト君は別に帰ろうと思えば帰れるけど、アサ君とかアスカは無理だろうし。リョウちゃんも、モモちゃんユキちゃんもずぶ濡れちゃうよ」

ニカイドー君は体が弱いみたいだし、アサキ君は此れ、だし。私は濡れても平気だけど……リョウちゃんも此れ、だしなぁ……。ユキ君はやはり私達と同じ扱いなんだね、ユウヤ君。

夕方から悪化する、とは聞いていたけど、此処まで悪化するなんて聞いてないよお天気お姉さん。下駄箱には、私達と同じ様に帰れずグダグダしている人が大勢見受けられる。……はぁ。

「やむの待つ……というのは、得策ではないでしょうね……」

「だな、つかアスカは雷とか平気なのかよ？」

ロクジョー君の言葉に、ニカイドー君はニコリと笑って言う。

「雷？　ただの自然現象ですよ？　馬鹿なこと聞かないで下さいよ～」

現に二人程その自然現象で戦闘不能なんだけどなぁ。流石はニカイドー君。

「しゃあないから、家族に迎え頼むかー」

ロクジョー君はニカイドー君の言葉に苦笑を漏らしてから言った。

そうだね、車が一番だよね。

でも家、仕事共働きだから来てくれるかな……未だ帰ってないかも……。

「俺は姉ちゃんに頼むか」

「あ、携帯なら貸しますよ」

「え、ニカイドー君携帯学校持って来ちゃってるの？」

「こうなること、予想してましたから」

流石ニカイドー君……ユウヤ君が「流石腹黒☆」とか言ってるけどニカイドー君は動じません。すごーい。

「んじゃ借りるぜー」

「うわー、兄貴居れば来てくれただろうけど居ないしなー……」

ロクジョー君が電話を始めた中、ユウヤ君が落胆。嗚呼、マヒルお兄さんは今家に居ないんだよね。

「私の家もお父さん居ないから無理ね、お母さんペーパードライバーだから運転なんてさせらんないわ――キャア！！」

冷静に言ったリョウちゃんは雷で叫びつつも言ってくれました。叫んじゃって、女の子だなぁリョウちゃんったらー。

「家は無理ですね、共働きなので」

「あ、うちも」

ニカイドー君の家と同じだもんね、小さく手を挙げて言っておいた。

「てか、時間がかかったとしてマヒル兄に頼むでもいいんだけど、マヒル兄の携帯番号俺覚えてないんだよなー！」

「清々しい笑顔で言われても困りますよ」

携帯番号って長いものね……。私も自宅しか覚えてないや。ユウヤ君はアサキ君の前に座ると、「アサくーん、マヒル兄呼ぶー？」と叫んでいた。アサキ君に聞こえてるかは定かじゃないけど……。

「うし、姉貴来てくれるそーだ、誰か乗ってく？　二人くらいなら

乗れっけど」

カイト君帰郷。ちょっと違うけど気にしないよ。

「アサ君聞いちゃいないけど時間かかるが俺達はマヒル兄呼ぶよー。リョウちゃんとかモモちゃんは先にカイト君の家のに乗って帰っちゃったら？」

「あれ、マヒルお兄さん呼べるんですか？」

「アサ君から聞き出せば」

だからアスカは残っててー、と笑ったユウヤ君。今のアサキ君から聞くのは至難の技だと思った私。

「雷五月蝿い帰る帰る帰る帰る帰る帰る帰る」

もはやアサキ君の方が怖いよ。

「アーサーキー！！」

――勇者……！　勇者だよユウヤ君……！　こんな恐怖なアサキ君（※正しくは恐怖しているアサキ）の耳を塞ぐ手を引きはがして名前を叫ぶだなんて……！！

「んだよユウヤ！　俺はワンダーランドに逃げる！！！！」

「何処にあるのか分からないそんな所に逃げるのお兄ちゃん許しません！！」

「混乱してるアサキも面白いね」

此処で爽やかに笑うユキ君の方が面白いよ。あ、ごめんなさい。

「迎えに来て貰おうよ！　そうすればアサ君怖くないで――」

「別に怖い訳じゃない、五月蝿いだけ」

「この屁理屈男！　――じゃなくて、帰れるっしょー？」

「……そっか、父さん家に居るんだったな」

「――……あ」

あれ、マヒルお兄さんじゃなくて……？

「あー！　そうだった！　父さん帰ってるんだった……！！」

「え、お前まさかマヒルに迎え来させようとしてた訳？　三十分弱も待たせる気だった訳……？」

ユウヤ君はアハハ、と笑い飛ばしているがそそくさとニカイドー君の携帯番号を借りて家へと電話をしていた。

「ユウヤ、相変わらず馬鹿じゃな――」

――ピシャン！！！！

「……――」

また耳塞いじゃったアサキ君。

「完全無欠のアサキの、二つ目の弱点だね☆」

ユキ君……元気だね。

結局そんな感じでグダグダしつつ、私達は帰りの車を待ちました。

「――あ。姉ちゃんの車」

カイト君の声で、車が校門から入って来たのが見えた。そりゃカイト君の方が先に電話したし、家近いしね。

「んじゃ、俺先帰るな。アサキ～、俺様が居なくなって泣くなよ～」

「泣かないし、五月蝿いだけだし」

アサ君は耳を塞ぎつつもそう反論した。強がってます我が弟。雷雨の時は毎回こんな感じだから慣れてるよー。

「おー待たっ、カイちゃん！」

皆で笑ってたらウミさんがやって来た。ピンク色の傘を携えて化粧っ気なウミさんは、不覚にも綺麗だと思った。

「サンキュー姉ちゃん。んでさ、もう二人送ってやっても構わねぇ？」

「全然構わないわよ！　愛するカイちゃんのお友達なんだから！！」

「姉ちゃんうざい」

シュールな姉弟だ、とか思った。が、人のこと言えないので黙っておく。

「じゃ、アスカ、ユキ、行こうぜ」

「はい」

「ああ、済まないね、カイリ」

色々考えた結果、来る時間が大差ないなら近い家に送って貰おうということで、家がモモちゃんとリョウちゃんを送ることになりました。……まあそんなに大差無いんだけどね。

「じゃーねー！」

三人プラスウミさんに手を振ったら、また雨の音だけが耳に残った。他の人はもう帰っちゃったしね、雷は未だ鳴ってるけど。

「父さん遅いなー。こういう時程飛んで来て欲しいよ」

「ユウヤ君のお父様って優しいの？」

現在まともな会話が成り立つ唯一のモモちゃんにそう聞かれ、とりあえず首を縦に振った。

「凄く優しいよー。あんまり怒らないし」

「そっか、早く会いたいなぁ……」

「もうすぐ会え――あ、来た」

車が見えた。水色な中型車、ありゃ家の車だ。出口近くに立っておーいって手を振ったら、黒い傘差した父さんが笑顔でやって来た。雷でもやっぱ笑顔なんだね、父さん。

「ごめんね、遅くなって。平気だった？　いや――アサキ平気？」

「ううん、俺はへーき。――俺は」

そりゃ家族だからね、アサキが雷駄目なことは父さんもよく知っているってことでして。

「あ。父さん、こっちの二人送――」

「いいですよ」

「早いよ」

最後まで聞こうよ。

「可愛いらしいお友達ですね、ちゃんと送りますよ」

「あ、の、お願いします」

「お、お願いしますぃやあああ！！！！」

ジャストに雷が鳴ってリョウちゃんが悲鳴を上げた、こっちが怖いよう。

「大丈夫ですよ、雷なんて自然現象です」

――悲鳴を上げたリョウちゃんに、父さんは笑顔で手を頭に乗せた。――何だこのロリコンみたいな図。

「ロリコン」

待てアサキ、俺が言わずと頑張った台詞を吐くな、てか大丈夫かよ。

「父親に酷い言いようですね。とにかく、帰ろうか」

父さんは苦笑して、でも満面に笑ってそう言った。座り込んでいたアサキも渋々立ち上がり――立ち上がらなきゃ帰れないし――学校を後にした。

――予断。

「ヒコクアサキ達のお父様……素敵な方だったわね」

「そうだね、格好良いし紳士的だし、あんなお父様素敵だったね～」

そんな会話が、一組でなされたのは次の日で。

あり、リョウちゃん父さんに乗り換えですか。

71＋親心に子心。

「たーだいまー……っと」

ふー、今日も疲れたー。今日も一日仕事疲れたよーっと。ママです、シユウママですー。　相変わらずただいまーというものの、結局誰の返事も帰って来ないのよ――

「お帰りなさい、奥さん」

――あれ？

「こんな時間まで毎日お疲れ様です、あ、コーヒーでも飲みますか？　……嗚呼、眠れなくなるから紅茶にする？　あ、でも紅茶にもカフェインは入ってるよね……」

「ちょ、ちょちょちょちょー。……シンヤ君？」

「はい？」

あれー？　――凄く懐かしい夫さんが見える。ニコリとするその姿はまさしく我が愛する夫君、シンヤ君だ。

プルプルと震える人差し指をシンヤ君に向けて固まってしまった私。

「……あれ？　シンヤ君何で居るの……？」

「うん？　帰って来ちゃ駄目でした？」

「いや、ううん、全然いいんだけどね？　寧ろ一旦落ち着きたいから抱き着いていいかな？」

「良いですよ」

流石シンヤ君。とてとて、と疲れた体を引き摺り懐かしのシンヤ君に抱き着いてみた。

「疲れたよー、シンヤくーん」

「お疲れ様ー」

ぎゅー。えへへー、シンヤ君懐かしいー。一年振りくらいかなー。シンヤ君はポンポン、と私の背中を叩いてから

「はーい、リビング行きましょうね」

と、リビングへ連行した。体よく移動を強いられたけどまぁいいや。

「で、シンヤ君、いつ帰って来たの？」

「数日前ですね、ＧＷまで休もうかと思って」

「え、何その自由なお医者さん」

そんなノリでＧＷまで休んでいいのかしらね、夫君。その割に去年の夏休みから居なかったはずなんだけど。

「アサキが珍しく熱出したみたいだったから、一緒に部屋で寝てました」

「あー、だから居なかったんだね」

同じ部屋なのに居ないってどういうことなのかと思ってしまったわ。シンヤ君ったら、心配性なんだから。

「ま、其れがシンヤ君の良いところだけど！」

「内心が口から漏れてるよ奥さん」

いけないいけない。

「ふふっ……――ごめん、家のこと放ったらかせてて」

笑みを漏らしたシンヤ君。昔っから変わらない笑顔だけど、謝る時は何時も少しだけ笑顔が曇っちゃう。何時も明るいシンヤ君が好きなんだから謝らなくたっていいのにー。

「いいよいいよ、私もだし。アサちゃんとユウ君に謝るべきよ」

「もう謝ったよ。二人共『別にー』の一点張りだったけどね」

中学生で親がろくに居ないのって苦にならないのかな、なんて考えてはみるけど。アサちゃんもユウ君も良い子過ぎて、何も言ってくれないんだよなぁ……。

「マヒルにも久しぶりに電話したんだよ」

「あら、まー君に？」

「同じ様なこと言われたけどね」

『父さんも母さんも好きなことやってりゃいーの。もしもいざ、双子に何かあったとしたって、そん時ァ俺がどうにかしてやっからよ』

――マヒルは本当にしっかりし過ぎてるから。双子達よりも一人で、孤独な生活をさせてしまっていたはずなのに、見た目は不良だけど凄く、凄く良い子に育ってしまったと思う。

「マヒル、何であんな子に育ったのかしらね」

「奥さんの息子ですから」

「やぁね、確実にシンヤ君の血でしょ」

頭もルックスも優しさも、全部全部シンヤ君のもの。私の要素なんて全てユウヤに行ったわよ。

「じゃあ、アサキは？」

「アサちゃんはー……突然変異」

「息子に何を言うんですか」

ま、血が混ざり合って違うＤＮＡを生んだのよ。（※適当）

「でもアサちゃんも――すっごく良い子だからいいの」

「――ですね」

笑顔でまとめた私に、シンヤ君は笑顔で同意してくれた。

「でも、女の子が居ないのは貴女にとって悲しくはないですか？」

シンヤ君の入れた紅茶を飲んでほやほやしていると、ふとそう言われた。……ん？

「何言ってるのよシンヤ君。――ユウ君が居るから悲しくないわよ」

「……嗚呼」

「一緒に料理してくれるし、お洋服選びだって一緒にしてくれるし、娘とやってみたいことランキング上位は大抵出来るからね！」

……元気さを出してみたのに、何故か幸薄い顔をされました。…

…あれ、何か間違えたかしら……？

「ユウヤは男の子でも……か」

「何か言った？」

「いえ、別に」

腑に落ちない様かシンヤ君だけど、まぁ良いか！

「――ねぇ、奥さん」

机に立て肘をついて手を組み、シンヤ君は何時もの笑顔で笑った。

「たまには、皆で出掛けますか」

「うえ？」

「ＧＷですもん。久しぶりに、家族で遠出でもしませんか？」

「え、い、良いの？　貴重なお仕事休みだよ？」

「ええ、僕も皆で遊びたいから。駄目……かな？」

はうう！　首を傾げてこっち見ないでシンヤ君！！　可愛い……！！　断れる訳ないじゃないの！！！！

「勿論行くわ！　部長に電話して休み取って来るね！！」

「あ、でもマヒル達も予定あるかも……――」

私は携帯にがっつく。部長部長部長部長――（※現在ＰＭ：１１：３０）。え、シンヤ君が最後に何か言った？　私には何も聞

こえない。

『――嗚呼、そういう理由でこんな時間に電話寄越した訳』

「うん、久しぶりに二人共はしゃいでるみたいだから。正直激眠いけど、兄貴もGWは空けときなよ」

『おう、兄ちゃんも激眠ィ。分かったよ、じゃーなアサキ、お休みー』

電話が切れた。

先程トイレに行ったら、両親の話が聞こえたのでとりあえず我が兄に伝えておきました。

「うー……アサくーん？」

「ごめん、起こした。……ユウヤ、GW出掛ける予定ある？」

「アサ君とお出かけするよてー」

勝手な予定だ、聞いた覚えも承諾した覚えもない。

「じゃあ無いな、空けとけよ」

「んー、お休み――ぐー」

速ぇ。

――ま、たまには先手をうってあげてもいいよね、忙しい両親に、家族サービスってやつ。

72＋苦労、そして苦悩。

カッカッカッカッカッ――カタッ

「はい、この応用解け。当てずっぽうで当てるからな」

よう、ハジマシテ、じゃねぇか？　イツキだ。……は？　誰だか分からねぇ？　ナメてんじゃねぇぞコラ。一組担任のサクライイツキだっつーの。

今は聞いての通り数学の時間だ、選択教科で物好きにも数学を取った生徒共に数学を解かせてる訳だ。ちなみに言うが、さっきの音はチョークだからな。……選択なのに数学……ある意味馬鹿の集まりって訳だ。

「んじゃあ……カトウ、前来て解け」

「あ、はい！」

ずっと立っての授業なんざ怠ィだけだからな。生徒に解かせて俺ァ座る。

……ふむ、カトウリョウコ……キクカワのクラスの奴だったか？　数学で数少ない女子生徒の中じゃあ一番出来るとみた。答えも合ってるし、こいつァ伸びるな。

「よし、正解」

「ありがとうございました！」

礼儀もなってる、素晴らしい生徒だ。評定Ａランク間違えなしってな。

俺は立ち上がって更に黒板に問題を追加する。基本俺が喋ってない時は五月蝿くなければ喋っててもＯＫな俺流授業。其処に聞こえてきたのがこんな喋り声。

「――サクライ先生の授業ってさ、凄く分かりやすくて良いよね」

「うん！　数学、好きになれそう！！」

女子生徒か、まぁ好きになってくれれば嬉しいが、それに比例して成績が上がるか、と言われればそうでもない。

「え、でもうちのクラスの授業だと先生ちょっと怖いよ～」

「そう？」

「あ、確かに……」

「たまに先生怒ってるもんね……」

……一、二組の生徒の話だなそりゃ。

仕方ねぇじゃねぇか、一、二組には――少々問題児が居るんだから。しかももうひとつ言ってしまえば――

「ね、何で2をかけるの」

「知らねぇよ、気分ってことでいいじゃねぇか」

「――……」

――この選択授業には、その問題児が三人共揃っちまってるって話だ。

「2はいいとしてもさ、Bの筆記体の意味が真面目分からない」

「くるーんって感じな奴か？　あー、確かに。どれがどうなってアレなのか分からねぇ」

「あれー？　カイト君英語得意じゃーん」

「得意だからって分かると思うなよ！！」

数学なのに英語の話始めやがった。英語やりてぇならアヤメのところにでも行きやがれってんだ。

窓側一番前から――ユウヤ、カイリ。そしてユウヤの隣にアサキ。……あっそこが問題なんだよなァ。

「あ、カイト君見て見て。カイト君居るよ」

「え、嘘……あ、マジじゃん。俺様教科書デビュー！　カイリだけど！！」

「おいこらテメェ等、問題を解け」

問題を書き終えて、早急にコイツ等のところに来る俺。問題やらせなければいけないんだ。

「サックラ先生、俺にゃこんな高度な問題出来ません」

「同じく！」

「周りに聞いて良いっつってんじゃねーか」

「「周りが寝てます」」

――そうなんだよ。一、二年の時はそうでもなかったのに、三年になって新たに授業をあまりにも受けなくなった奴が居るんだよ。その名もヒコクアサキ。頭は良い、はずなんだが。

「――……」

あーらまぁ両腕を机一杯に組んで気持ち良さそうに眠ってくれちゃって……。

「――はぁ……」

「先生！　ため息は幸せが逃げるらしいよ！！」

「誰が逃がしてるんだ誰が」

アサキは結構頼みの綱なんだがな……。この馬鹿共を黙らす為には。……よし、起こすか。

「起きろ馬鹿野郎、誰の授業だと思ってやがる」

――スパンッ

強めに殴ってみた。

「ん……指輪の力は抑えられた……？」

――何の夢を見ていたんだコイツは。

「ああ、抑えられたから横二人にあの問題を教えた後、前出て答え書け」

「抑えられたのか、なら良かった」

「アサキ、寝ぼけてないで此れ教えろ」

「ああ？　……此れ√使って有理化、とか」

「んなアバウトに言われても～」

アサキにとって今のひと言でヒントは終わりだったらしい。とっとと前に出て、答えを書いてしまった。

「……テメェ、寝てた癖に問題は解けるんだな」

「頭良いから」

激ムカつく。しかし本当なので何もいうことはない。ひらり、と手を振ってアサキは席に戻ってしまう。……ってまた寝るんかい。

「――じゃあ、今日は此処まで」

しかし授業時間も結局ギリギリだったので、此処で終わりとした。
――今後此の選択で、俺はキレずに済む日はあるのだろうか――？

予断。
選択後の職員室。

「あ、選択ごっくろ～」

「お疲れ様です」

「チッ、厄介者が全部俺に来たからって……！！」

厄介者が居ない授業の国語（キクカワ）と英語（アヤメ）がニコニコして俺を迎えやがった。……畜生。

73＋春だから。

「ただいまー」

自宅のリビングにて、ゴロゴロと横になっていた僕。父さんも母さんもユウヤもいる、という何とも珍しい自宅状況の中誰かが帰って来ました、アサキです。

……いや、一人しか居ないんだけどさ。

ガチャ

「うわ、皆居やがる」

「お帰りーマヒル兄ー」

「あらマヒル」

「やあ、お帰りなさい」

勿論、マヒルな訳なんだが。

ソファに居座ってゲームをするユウヤとか、キッチンで何かしてる母さんとか、ただ笑ってる父さんとか……寧ろいきなり帰ってきた兄貴に驚けと言いたい。

「皆こんな真昼間から何やってんだよ」

「暇ー」

適当な対応だ。春だからな。

「祝日だからね、何をしようかな……と考えてたら皆こんな感じなんだよ」

「要するに体たらく家族」

「あー君それ言ったら終わりー」

だって本当じゃないか。皆してグダグダしやがって……僕もなんだけど。まぁ、春だから。

「――で。マヒル、何で帰って来た訳？」

「うわぁ、家に帰って来ただけなのに何で俺弟にんなこと言われてるんだ……？」

「マヒル兄ー、アサ君は何時ものことでしょーがー」

「そりゃそうか。あれだよ、GWだから帰って来ただけ、何か出掛けたりすんだろ？　アサキから電――」

「言うな消えろ」

「ええ！？　ま、まぁ良いや、とにかくそういう訳だ」

人が誰にもバレない様に電話したんだからバラさないでよ。

「「電？」」

父さんとユウヤがハモった、ヤメテ、追及しないでクダサイ。

「何でもねぇよ、んで父さん。今年はどっか出掛けんだろ？」

「あ、はい。そのつもりです……が、何でマヒルが知ってるんですか？」

「勘」

「はぁ」

勘。そう言っといてくれて本望。僕は知らんふりをして読んでいる漫画を読む。良いじゃん、春なんだから。

「三人共、予定などはない様なので、実家の方に帰ってみようかなっと」

「「「……実家？」」」

実家……実家……父さんの実家……？

あれか、店も電車も何もない――近くにはね――、あの田舎な地方のことを言っているのか此の人は。

「叔母さんの家に行きましょう。そしてのーんびりと余暇を過ごそう、と思うのですが……やっぱり今の子供達は嫌かな？」

「俺は構わねぇよ」

「俺もー」

「僕も」

我ながら張り合いのない息子達だ。

「うん、息子達ならそういうと思った。――奥さーん、叔母さんの家に決定しましたー」

自分も妹のことを叔母さんと呼べば、やはり息子達の思考を熟知していた父さんは満足気に笑って僕等を見た。後にキッチンに向かってそう叫んで、飛んで来た母さんもこんにちは。

「よっし！　じゃ、明日学校帰って来たらすぐ出発するから宜しくね！！　アサちゃん、ちゃっちゃと準備しちゃうのよ？」

「何で僕だけに言うの」

「ユウ君もまー君もこういうイベントの時ははしゃいで準備が既に終わっているパターンが多いからよ」

「まー君言うな、準備終わってるけど」

「俺も終わってるよ！」

何で終わってるんだよ……！　流石過ぎるよ……！！

「……分かった」

「よし！」

「――漫画とゲームと……――」

「アサキー、何しに行くんですかー」

父さんにツッコまれつつ、とりあえず準備をしてしまおうと思った僕だった。いいじゃん、遅くたって……春だし。

74＋GWはごーいんぐまいうぇいでは決してない。

水田、森、畑――。もう、此処本当に日本なのかな。
こんにちは、アサキです。父さんの素晴らしきドライビングテクニックを駆使して、夜な夜な此処までやってきましたアサキです、基ヒコク家一行。

「やっぱり空気がおいしーなー！！」

「だなー、まぁとりあえず眠いぜ兄ちゃんは……」

一目散に助手席から飛び降りた僕の隣には兄貴。そしてその隣には……――ユウヤ……？

「ねぇ、ユウヤ」

「何？」

「……ユウヤ？」

「コラー、お兄ちゃんの顔を忘れなーい」

忘れたくもなるよ、――そんな格好されちゃ。またも登場素敵な水色スカート。まぁそれは良い――よくないんだけどさ――として……髪の毛どうした。
普段は栗色にもなる短髪を撥ねはねさせている癖に、何故にロングストレート？

「ママが買っちゃいました☆」

「“買っちゃいました☆”じゃねぇよ馬鹿親」

何買ってるんだよこの野郎。

此処が田舎だから良いものの、もし此処が自宅だったら僕は引き篭りになっていたところだよ。

「え、アサキ何か言いました？」

「あ、いや、父さんじゃないから安心して」

「そうですか」

荷物をおろす父さんの邪魔をしてはいけない、とりあえずコイツを殺るのは今度にしよう。

「おーい！」

「……ん？　今声が聞こえた様な……」

「何言ってるんだいマヒル兄。何の声も聞こえないよ」

「そうだよ、聞こえない」

「おーい！　アサキユウヤマヒル兄貴～！！」

「え、名指しされてんじゃん、やっぱり――」

「「気の所為気の所為」」

「誰が気の所為じゃゴルァ！！！！」

「ぐふぁ！！！！」

兄貴が後ろに振り向くのと、ユウヤが前のめりにぶっ倒れたのはほぼ同時。

「ちょ、テメェ何しやがんだよバーカ！！」

「はん！　んな格好してあたしの前に現れるのがいけないんだよユウヤちゃんめ！　……畜生可愛いなァ！！」

「「褒めてるし」」

うわぁ、やっぱり現れたよこいつ。僕はひとつため息をついて、男らしくキレるユウヤを見てから其方に目をやった。マヒル兄はあー、またか、とでも言いたそうな顔をして二人を見ていた。てかユウリよ、女の子が男子に背後から飛び蹴りをするな。

「相変わらずだな……」

「――おお！　マヒル兄にアサキ！　お久し！！」

「久しぶり、――ユウリ」

ペタン、とユウヤの上で座って僕等を見る此の人はユウリ。僕やユウヤの従姉――誕生日的にだから同い年だけどね――、という奴だ。叔母さんの家に来たんだからそりゃ居るよなぁ。

「ちょ、ユウリ！　気の所為ってアサキだって言ったじゃん！！」

「アサキは良いんだよーだ！　アサキはあたしのマブダチだから！！」

「じゃあ俺は何な訳！？」

「下僕。てかアンタ、その格好で“俺”なんて言うなよ」

ユウリは何故かため息をついてユウヤから退く。

久しぶりに会ったがユウリは全く変わらない。元気なショートカットに動きやすそうな服。……同い年の女子にゃ見えません。

「なぁユウヤ、何でアンタそんなに可愛いのさ。あたしにも分けなさい」

「何を！？　何を分けろと！？」

「あ、ユウリちゃんじゃなーい」

ギャーギャーと騒いでいる二人に気付いてか、母さんがやって来た。そりゃ居ましたもんね、近場に居ましたもんね。

「あ、シユウ伯母様！！」

「お久しぶりね～、相変わらず可愛いわね」

「やだっ、叔母様ったら！　あたしなんて全然……ユウヤの方が可愛いですって！！」

「いえいえ、本物のレディには敵わないわ～」

母さんはぎゅー、っとユウリを抱きしめるなりべったべた、もうべったべたとくっつき続けた。……。

「ちょ、おいアサ！　勝手にどこかに行こうとすんな！！」

「此処に居たくない」

逃走はマヒルに止められてしまった。ちっ。　その内に女共は離れたけど。

「そいじゃあご家族！　改めて我が家へようこそ！　パパもママも仕事だからね！！　部屋はあるから適当にくつろいじゃってよ！！！！」

本当に改めるなりそう話すと、ユウリは家へと入っていった。其処まででは無いけど外は暑い、だから僕は即座に後に続いた。

「パパママが帰るのは夕方だからさ、そしたら夕飯にするって！

其れまでは自由にぱっぱーっとねー」

「「ぱっぱー」」

「五月蝿い双子」

ぱっぱーって何だろう。まぁ良いや。

とにかくやっと、GWの始まりだ。

75＋血の繋がりは否めない。

「ゆうたんあーたん行くぞ！！」

「「おー」」

やる気なく言ったのは俺の弟達です。はい、マヒルです。

「こらこらやる気がねーぞ！　そいじゃあ行ってきやすまーたん」

「“たん”を付けんな」

「じゃあマヒル兄貴行ってくるよ」

「おー」

そしてその弟達を引き連れて何処かに行こうとしてるのは、昨日やって来た父さんの実家に住む俺達の従妹、ユウリ。ユウヤよりも勇ましく、アサキよりも元気な従妹だ。……本当に元気だな。

「何処行くんだ？」

「裏の山に行って来るんだ、夜には帰るよ」

「そ。まぁ気をつけろや。アサキもユウヤもなー」

「ほーい」

「行きたくない」

片方否定してるが俺にゃ聞こえない。すまんアサキ、頑張れ。

「んー……ねみー……」

「あらまー君、一緒に行かなかったの？」

「だぁからまー君言うなっつーの。俺今年で成人なんだぜ？　行く訳ねぇだろ」

田舎過ぎるのかギーギー鳴る床を通り、玄関から戻った俺。朝っぱらから渋茶を啜る母さんの隣に座りひとつ欠伸をした。

「あら、マヒルったらもう成人？　早いわね～……」

「ま、実感は無ぇけど」

眠い。気候が幾分暖かいし、やる気起きねーよー。ごろーん、と身を伸ばしてまたひとつ欠伸。

「――マッヒルくーん、朝っぱらから寝てちゃあ夜寝れませんよー！！！！」

お。

障子をパタン、というかスパーン！！　と開け放ってやって来た方に名差しされた。

「あ、おはよーございまー」

「お休みスタイルで何を言うかなマヒル君！」

「眠いんスもん」

「相変わらず元気ねー、はーちゃんは」

「あ、義姉ちゃんもおはよっ！！」

この姉ちゃんはハザラさん。こーんな元気なのに実は父さんの妹って奴で俺等にとっての叔母さんに当たる訳だ。……何処が三十五歳なのかは本人に聞いてくれ。

「マヒル君マヒル君、あたしとデート行こう！」

「お断りします」

「えー！　何でよ！　出掛けるくらい良いじゃないかい！！」

「だーって、ハザラさんと絡むの色々うぜぇし」

「うざいだって！？　酷いよマヒル君！！　ユウもオトも付き合ってくれないんだから良いじゃないかー馬鹿ー！！」

「誰が馬鹿だって？」

うわい本人やって来たーい。

「ちょ、オト！　そうやって障子の陰からそうっとやってくるのやめて！？」

「……」

オト、と呼ばれたその子はススススッと入って来ては俺の隣に座り、見上げて「おはよ」と呟いた。

「おー君おはよ～」

「おはよう、シユウ伯母さん」

「オトワ、お前の母さんが騒いでんだけど」

「放っておくと五月蝿いから、マヒルお兄どうにかしてよ」

「俺かよ」

未だにぎゃーぎゃーと騒ぐハザラさんを見て、俺はため息をつく。母さんがどうどう、と宥めているが聞きゃしねぇ。

ちなみにこのオトワ、というのはハザラさんの息子でユウリの弟に当たる訳で。

「お前が買い物付き合ってやりゃあいいじゃねぇか」

「俺が……？　……嫌、つまんない」

アサキに似てる様な似てない様な奴、だが。

「じゃ、俺も着いてってやっから」

「マヒルお兄が？　……じゃ、行く」

「やったー！　マヒル君ありがとー！！」

アサキの数十倍素直な良い子だと俺は思う。まだ小学生だし、嬉しそうにしているところを見ると可愛いなーとかも思うしな。

飛び付いて来たハザラさんをかわし、俺はふわぁ、と欠伸を漏らす。

「行くなら早く行こうぜーハ、ザ、ラ、さん」

「うう、痛い、避けた癖に酷いよマヒル君……」

「お母さん、早く」

「はーい♪」

そしてハザラさんはうちの両親と同じく親バカだ。

本当にうちの家系にゃ親バカばっかりだ。用意をしに行ったハザラさんを見て俺は立ち上がる。

「んじゃ、母さん行ってくらァ」

「うん、いってらっしゃーい。逆ナンされない様に気をつけなさいよー、あんた格好良いんだから」

「息子に何言ってんのアンタ？」

田舎だからか、田舎に俺みてぇな都内っぽいのが居ないからんなこと言ってんだろ？　ええこら。

「大丈夫」

「あ？」

「マヒルお兄ならモテるよ」

「阿呆」

オトワまで何を言う。流石の俺も照れるぞ。

「あ～、マヒル君お顔が真っ赤～」

「うっせぇ母親！　行って来る！！」

「あ、待ってお兄」

トタタッと追って来るオトワを確認しつつ、俺は逃げる様に外に出た。そりゃ出たくなるでしょう、ええ。

「おっ、何かやる気だねぇマヒル君！　じゃ、義姉ちゃん行ってくんね！！」

「行ってらっしゃーい」

母さんに留守を預け、俺達は買い物に出掛けた訳で。

嗚呼、もう帰りたくなって来た。

76＋爽やかですが色々遇って。

こんにちは、引き続きマヒルです。過疎な地域にひっそりと君臨する商店街に来させられているんだが。

「あらー！！　もしかしてマヒルちゃん！？」

「あー、おばさんお久しぶりー」

「あらあらまぁまぁ！！　マヒルちゃんったらすっかり格好良くなっちゃって～！！」

「え、マヒルちゃんなの！？　あらホント！！」

――とまぁこんな具合に、おば様方に絡まれています。

「前会った時なんてこ～んなだったじゃないかしら！」

「やぁねぇアンタ！　それじゃあ見えないじゃないの！！」

俺のサイズをミジンコにして騒ぐおば様方。こんな過疎地の商店街だから人が変わることもなく、確かに見知ったおば様達ではあるんだが……元気だなぁこの人達……。

「マヒルちゃんったらあんまり来てくれないからおばさん達淋しかったわよ～。オトワちゃんと二人でお買い物かしら？」

「お母さんが居る」

隣のオトワがボソリと答えれば、おば様方は「オトワちゃんは可愛いわね～！」と騒ぐばかり。何だこの商店街、うちの近くの商店街とおんなじだな。

「マヒルちゃんとオトワちゃんが一緒ってなると、ユウリちゃんが弟ちゃん達と遊んでるのかしら？」

「「いや、あれは遊ばれているの間違いです」」

思わずハモった。ユウヤはともかくアサキは完璧に遊ばれ――いや、弄ばれている。

『よっしアサキユウヤ！　今日のノルマはツチノコだ！！　捕まえるまで帰れねぇと思えよ！！』

『アイサー隊長！』

『一生帰れねーよ』

――嗚呼、大丈夫かなアサキ。体育会系二人に振り回されてそうで怖ぇ。

ユウヤも今日は普段着で行ったからな……騒いでそうだ。（普段着＝“普通の”男物の服）

「マヒルくーん、オトー、待たせてごっめんねー！！」

其処へ走って来たのが我等が隊長、ハザラさん。おば様方も気付いた様で「こんにちは、ハザラちゃん！」などと声をかける。……三十五歳でもちゃん付けされてんだなハザラさん。

「ハザラちゃんったら良いわねぇ、こーんなイイ男とひとつ屋根の下だな・ん・て！」

「うふふっ、おばさん何言ってるのよ！　私は夫一筋なんだから～。あ、マヒル君フリーですよ」

「おいこら個人情報」

「あらっ、こんなイイ男がフリーだなんて！　世も末ね！！」

俺が彼女居ないだけで世も末なのか？

「マヒルお兄……自分の格好良さに気付いてないから……謙虚だから……」

「あらあらあら！　謙虚だなんてオクテねっ！！」

「あのさ、人の目の前で人を置いて話をするのやめよ？　な？」

もう先帰っていいですか。こんな時、冷静に本当にアサキとユウヤが居てくれたらとか思う俺。……やはりブラコンなのだろうか。

『隊長！　先に見えるあ奴は何でしょうか！！』

『おお！！あれは野生の兎だ！』

『兎くらい店で見れるし』

『追うぞ隊員共！！』

『アイアイサー！』

『え、ちょ、置いてかないでよ。迷子になるじゃん、……ねぇ！！』

何してるかなぁあいつ等……。

とまぁ、そんなおば様方と別れ帰路を行く俺達。ぼちぼち夕方、という感じな時間ですな。

「マヒル君！　案の定モテモテだったね！」

「ははは……」

確かにまぁ、おば様方からはな。

「ちらほら居た数少ない女の子達も……マヒルお兄の事見てた」

「は？　んな訳あるかよばーか」

冗談がましく笑って言えば、オトワもハザラさんも笑ってくれた。

「でもやっぱ皆でお買い物は楽しいね！　明日は皆でピクニックにでも行こうか！」

「そうだな、ピクニックくらいなら双子の片方も来るだろうな」

「いざとなったら俺が頼む。アサキお兄には」

そしてまたも皆で大爆笑、大爆笑は主にハザラさんだが。

明後日にはまたつまらねぇ学生生活な訳だし？　少しくらいのんびりしましょう、ってな。

「たっだいまー！」

「お帰りはーちゃん達！　しっかし、其れどころじゃなくってね」

家に着いたら母さんが満面の笑みだった。そして帰って来ていた

らしいユウヤとユウリちゃんの姿もあったんだけど――……あれ、アサキは？

「ん、どうしたんだい義姉ちゃん」

「えっとね、

――アサキが帰って来ないのよね？」

そんな事実に扱く慌てている中学生達と、笑顔な母さんを見て、慌てればいいのか笑えばいいのか分からなくなった。

77＋独り、雷雨の下。

「「……」」

「ユウリ、ユウヤ、兄ちゃんに言いたいことは……？」

「「ご、ごめんなさい」」

ユウヤです、ただ今正座をする俺とユウリを見下すは実兄マヒルさんであって。仁王立ちをして凄く素敵な笑顔を見せているけれど、其の笑顔は感情が無くとても無機質で、俺達を見下ろす普段はとても優しいお兄ちゃん。嗚呼――絶対怒ってる。其れじゃなくても容姿はそこそこ恐ろしいのに。

「ユウヤには何時も言ってるよな？　遊ぶのは覆いに結構、だが、ちゃんと周りを見ろ、って。なのによりにもよって――弟置いて来ました、だ……？」

「「……」」

「ふざけるのも大概にしようか、ユウリちゃん、ユウヤ？」

「ひぃっ！！！！」

「は、はい！！　ごめんなさい！　今後、いや、今から気をつけます！！！！」

怖い！　やっぱり怒ると一番怖いよマヒル兄！！！！

しかし……よし、と一言添えれば説教は終わりらしく、へにゃへにゃとした笑みで俺達を見ていた両親へと話は移される。

「で、父さんも母さんもなーんでそんなに余裕の表情してるんだ？」

「「アサキだから平気かなぁと」」

「去ね」

マヒル兄、先程から口調が更に荒れている様子。そりゃそうだよね、もうこんな時間な訳だし。

時刻は夜八時。どんなに遅くたって普通は帰って来る、そんな時間。

俺とユウリは野生動物を追い掛けている間にアサ君と逸れてしまった。なかなか奥地にまで広がっていた俺達の遊び場だから、もしかしたら呆れて先帰っちゃったんじゃないか……という見解に至って帰って来たら——こんな状態でして。

「うーん、田舎の山の天気は荒れ荒れだからねー。雨とか降らなきゃいいけどねぇ……」

へにゃへにゃ両親の横に居るハザラ叔母さんが空を見上げて呟いた。大丈夫、だよね……。——雷なんて、鳴らないよな？

「真面目に迷ってしまった」

アサキです、が、悠長に話してる場合じゃねェ。とりあえず――本気で何処だここ。

山に居たんだ、家から数キロも離れていない少しだけ荒れているそんな山に。ユウヤとユウリと……だが今はひとり。ひとり一人独り。

「……」

真っ暗で視界がはっきりしない。しかしユウヤやユウリに悪態を尽くことも出来ない、僕が勝手に先に帰ろうとして、誤って道を間違えてしまったのだから。間違えただけなら未だしも――

「……いて……」

――足までくじいたとなりゃあ歩く気にもなれない。

ええやりましたよ、木の根に足を引っ掛けて、そのままどーんとずっこけましたよええ。……元々運動には向いてないんだよ僕は、え？　運動出来るじゃないかって？　あんな瞬発力的な力なんて歩き疲れた僕じゃあ何にもなりませんって。

……こんなことになるなら仕方なくてもユウヤ達に着いてきゃ良かった……、と、今更悔いても仕方のない。さっきから歩けば歩く程奥地に追いやられてる気がする。

「……」

よし、探されるのを待とう。

「ユウヤは、ユウリちゃんとオトワ君と留守を頼みますね」
父さんがそう言って、俺はふて腐れながらも頷いた。

――空からは案の定、雨が降り始めた訳で。

アサ君は未だ帰って来ない。流石に父さんも母さんも心配し始めたみたいで、アサキを探しに行くことにしたらしい。俺も行きたかったけど……ユウリとオト君を二人には出来ない、とも思った。

「あたしがしっかり案内するよっ！　あの山はあたしの庭だかんね！」

「宜しくね、ハザラ。それじゃあ行ってくるね」

ハザラ叔母さんが意気揚々と言えば、両親とハザラ叔母さん、マヒル兄が家を出た。
アサ君のことだから、完璧既に捜索を待ってるんだろうなぁ……。迷ったら歩かない、もう迷子の鏡だよ。

「……アサキ、平気かな」

「ユウリ？」

ふと、ユウリが呟いた。珍しい、ユウリがそんな心配を。

「此の空、雨が降ったから多分……雷雨になると思う」

「ユウリお姉、ユウヤお兄に要らない心配かけちゃ駄目だよ」

「仕方ないじゃないか。こんな時間までアサキが帰って来ないんだ、あたしが悪い」

「別にユウリの所為じゃないって。俺だって周り見てなかった訳だし」

こっちでうだうだ言ってたって、どうにかなる訳はないんだけど。言ってないと、五月蝿く響く地面を叩く雨の音に呑まれそうだから、俺達は何かと話をしていた。

ユウリは知ってるのかもしれない、自然の恐怖を。俺達みたいな都会っ子――そんな都会でもないんだけど――には分からないくらいの――最低な結末を。

――空が鳴り響く。酷く、大きく轟いて。

78＋雨、雨、雷、そして。

「やっぱ俺、アサキ探しに行く」

そう言ってユウヤが立ち上がったのは、マヒル兄ちゃんやお母さん達が出て行ってから一時間以上経った頃だった。――空が轟き始めてから、ちょうど一時間くらい。

「あ……危ねぇから止した方良くね？」

「そうだよユウヤお兄、お母さん達に、任せるべきだよ」

あたしとオトワが止めるのを聞いても、ユウヤは元通り座る気はないみたいで。

「だってだって、あんな近場の山なのに、母さん達まだ帰って来ないんだよ！？」

「でもお母さん達は大人だし――」

空が光った、数秒後には五月蝿いくらいの轟音が。

「大人だって雷に撃たれたら死んじゃうだろ！！」

「だったらユウヤも同じだ！！」

もはや喧嘩の勢いで言い合いをしていたあたし等。五月蝿い雷に負けじと大声で喧嘩してたから、オトワが部屋を離れていたことに

も気付かなかった。

「ユウリお姉」

「何だよオトワ、今忙しい――」

「お母さん達から、電話」

はたと立ち止まったあたし等。そして、雷と大声の合間に聞こえた電子音を聞き逃さないでいてくれたオトワに、少し感謝と謝罪。慌てて差し出された受話器を手に取れば、そんな調子のまま「もしもし!?」と声を荒げた。

『あ、ユウ？　そっちは大丈夫？』

「平気！　もう全然全然！　ママ達は!?」

『平気よん♪　でも視界が悪くてね～。しかも兄ちゃんと義姉ちゃんがもー使い物にならなくて』

ケラケラ笑うお母さんの背後から、物凄いテンパり様で『あ、アサちゃんはもう居なくなっちゃったのかしらね？　あれ？　えへへっ!!』とか『はっはっはっは』とか、もう何か駄目じゃん、と言いたくなるくらいの音声が聞こえた。家じゃああれだけのんびりしてたのに親バカは此れだから使えないね。

『落ち着け馬鹿親共！！　あのアサキがこの雷雨の中慌てて走り回る訳ねぇだろうが！　平凡に雨宿りしてる確率百二十パーだっつーの！！！！』

ママの声じゃないコレは、マヒル兄ちゃんか。ブラコンな癖に冷静な声音が、凄いなぁとあたしを感心させた。

「ユウリ、俺に変わって。マヒル兄出して貰って」

「え、あ、うん」

手は差し出してくるし何時になく真剣だから、つい格好良いじゃねぇかコノヤロウとか思っちゃったじゃないか。あたしはお母さんにマヒルを出す様に言ってから、ユウヤに受話器を貸してやった。

『兄貴、そっち大丈夫なの？』

「あー、雨うぜぇし母さんうぜぇし父さん壊れてるしハザラさん笑ってるが大丈夫だ」

『それ大丈夫じゃないよ』

言うな弟。

ハザラさんから電話を代わられて、その先からする弟の声に悪態

を漏らした俺。大丈夫、親にもハザラさんにもこの雨の中じゃ聞こえてねぇ。

「なぁユウヤ、今お前達が言ってた場所の近くに居るんだけど、土砂がぬかるんでてあんま早く進めねぇんだ。んなところにアサキが雨にうたれながら立ち止まってると思うか？　もしかして歩き回ってたりしてな」

『思わない』

「だよな」

『――とは思うけど。もしかしたら立ち止まってるかも』

「え？」

『兄貴と一緒だもん、アサキは』

慌てふためく母さんを横目で見つつ、俺は何時になく冷静なユウヤの声に耳を傾けた。俺と一緒、何がだ。

『マヒル兄さ』

「おう」

『雷苦手だったよね』

ゴロゴロゴロゴロ――ピシャン！！！！

「――！？」

――ついしゃがみ込んだ。

……嗚呼、其の通りさ、今年で二十歳になりますけど？

――雷、超嫌いです。

『……マヒル兄？』

「な、何だよ、ちょい雷うぜぇなぁとか思っただけだし」

『……』

電話越しに冷めた弟の視線がある気がするのは気の所為であって欲しい。

「まぁ、もう何でも良いから何？」

『アサキは雷大嫌いだよ。雷鳴ると、しゃがみ込んでずっと耳塞いで固まっちゃうもん』

「……おい、じゃあ――」

『――鳴り始めた頃から、ずっとその場にいる可能性が高いんじゃないかな』

「そか、じゃあ歩いてないんだな。其れが聞ければもう良い」

俺は電話を切った。そのままハザラさんの携帯電話を閉じると騒

ぐ奴等の元にズカズカと歩を進める。

「ハザラさん、此れ」

「あ、うん」

「あああああアサキー！！！！」

「母さん、冷静になれっつーの」

自分が冷静になれてないのに何を言うのか。俺は素で苦手な雷の音に怯みながらも、真面目にそう言った。

「早く捜そうぜ？　早く見つけてやんねぇと、アサキが凍死する」

「え、あー君は雨宿りとかしてないのかい？」

ハザラさんが驚いた様に言うもんだから、ユウヤが言っていたことを簡潔に伝えてやった。一番反応があったのは、ぶっ壊れていた父さんで。

「アサキ、雷苦手でしたもんね……」

「忘れてたのかよ、父親の癖に」

「マヒルが雷苦手なのは覚えていたけ――」

「わーわー！　俺は良いから！！」

「じゃあ、もしかしたら近場に居てもアサキが気付いてないパター

ンが大きい訳……か」

今度は母さんが。やっと精神の不安定から帰って来た様だ。

「だな、つか最初っからユウヤに聞けば良かったんだよな。アサキの行動パターンはあいつが一番知ってるから」

「そうねー、というか家族の私達は知ってたはずよね。――アサキがこんな雨の中、こんな奥地まで歩かない」

「我が息子ながらあっぱれ」

ははは、と笑っていたらハザラさんが「じゃあ少し戻りましょう！」と歩き出した。

戻って少しすれば居るよな、アサキ――？

79＋見つけられたから良かったんだ。

――ザー……ゴロゴロゴロ……――

雨は一向に止む気配がない。雷も鳴り響き続けて未だ止まず。

「ちっくしょ……アサキの奴、マジで何処に居るんだよ……」

「ちょっとマヒル！　アンタも冷えてるわよ！！　だから傘差しなさいって――」

「うっせぇ！　んなの邪魔なんだよ！！」

傘を差すのは父さんと母さん、ハザラさんに至っては合羽を着ている始末だ。俺は途中に面倒になって閉じてしまったから、右手に其れを持っている。

「あーもー見つかんねぇよちくしょッ――！！」

――ドォオオン！！！！

「何、でしょうか」

思わず身を竦めてしまった。

良かった、誰も見てない。

「多分雷が墜ちたんでしょうね、危ない危ない」

冗談じゃない。それじゃなくても雷なんてゴメンなのに、墜ちた？　怖ッ！！

「とりあえず視界が悪いですから、目を凝らして捜す必要がありますね」

「折角の休みだってのに何やらせんだかなぁあの弟は……」

父さんの笑顔に苦笑で応えた俺は、煩わしい雨粒を拭って――拭っても意味ないんですけどね――歩き出した。

――時にやっと。

「――皆！　あそこ！！」

――ハザラさんが一方を指差して叫んだ。　木の根元でひっそりと座り込む――アサキを指差して。

「アサキ！！！！」

恐らく母さん達も叫んだんだろうな、でも俺には自分の声しか聞こえなくて。ぬかるんだ地面を蹴って走ったら、本人の目の前でこけそうになって木に手を付いた。

アサキは其処で俺達に気付いたのか、ぼうっとした様子で俺を見上げて――

「あ……兄、貴？」

と、のんびり呟いた。

――コノヤロウ、しみじみと呟きやがって……俺達がどんだけの時間探し歩いたと……――ん？

「兄貴だ」

「お、……え？」

心の中だけで悪態をついていたら、――アサキがこてん、と頭を俺の足にぶつけてきた。まさか、発熱とかしたんじゃないだろうな！？

「死ぬかと思ったんだけど。こんなところに置き去りにされて」

「まぁ、こんな奥じゃあ確かに置き去り喰らったら泣けてくるな」

「雨寒いし雷怖……いや、五月蝿いし雨寒いし」

とにかく雨が寒かったらしい。雷が怖いのは認めていない、という訳かこの野郎。俺だって苦手なんだぞ。

後からやって来た母さんと父さん、ハザラさんに滅茶苦茶な勢いで心配されたアサキは、欝陶しそうにしながらも、

「疲れた」

とだけ呟いた。熱とかはないみたいだな、流石元気っ子。だけど足を捻ったのかは知らないが痛いらしいので、

「おぶって帰らせてやろう」

「いや、普通俺の台詞だから」

「歩くのたるい」

「……はいはい」

と、普段通りのテンションを見せていた。まぁ、良かった良かった。ただ、――寂しかったんかな、と思ったのは秘密にしておく。

家に帰ると、俺とアサキがびしょ濡れだったから、ユウヤにいきなり叫ばれた。

「え!?　兄ちゃんとアサ君は何があったの!?　びっしょびしょ!?　ちょ、アサくーん!!!!!」

電話越しじゃあなかなかのクールな面を見せてくれたのに、元通りの馬鹿が居た。元通り弟だけ心配して俺を放置してくれる馬鹿が。

「アサキ、風呂沸かしておいてやったから入んな!」

「ユウリにしては気が効く」

「んだとこるァ！！」

うん、元気だ。

人の家だからってびしょ濡れのまま廊下を歩き出したアサキ――恐らく自宅でもやるだろうが――の後ろをオトワが黙々と拭いている映像は実にユニークだが――これでこそ我が家だと思った。

「マヒル！　アンタも入りなさいね！」

「分かってるっつーの、俺だって寒いったらありゃしねぇんだからよ」

そして俺は何故か怒られた。あしらったら「むきーっ！！」とか言い出したから此の親大丈夫かと本気で思って唖然とした。

したら父さんが、

「心配してるんですよ、マヒルのことを」

と耳打ちしてきたから、余計唖然とした。

「慣れないことすんな、馬鹿親」

笑って言ってやったら、余計怒った。何か、平和っていいな、と感じた。

「死ぬかと思った」

湯舟の中でそう呟いたら反響して自分に降り懸かった。あったけー。さっきまであんなところに居たんだから当たり前か――しみじみと僕は呟く。

「お疲れー」

独り言のつもりだったんだけど、返答が来た。外にユウヤが居るらしい。

「超たるい」

「ははっ、お風呂でぬくぬくするとヨロシ」

何処の人だお前は。

「……ねぇ、アサキ？」

「何」

「――ごめんな？」

扉越しに謝られた。何に謝ったのか分からなかったけど……何となくだけ分かった気もした。

「ツチノコなんて居る訳ないじゃん」

「うん」

「兎なんて店で見れるし」

「うん」

「……」

「……」

「僕とお前は、違うんだから、少しは気ィ遣ってクダサイ」

「……うん」

「遣うなら――また遊んでやるよ」

「……――うん！」

バタバタと走り去る音がした。ただ、其れを言いたいが為に居たという訳か。……僕が悪かったんだから、気にしなきゃ良いのにな、あいつも。

後でマヒルにも一言謝ろうかな、びしょ濡れだったし。……あ、僕が早く出ないとあの人風邪引くかも。

僕はそんなことを思いながらも、ゆっくり浸かってから湯舟から上がった。

８０＊閑話＋童話パロ始めました。

「第８０回目！　おめでとう作者こと浅井礼螺さん！」

「いつもの様にグダグダと話しても時間が潰れていいんですけど、今回は友達と考えた変な企画を始めるらしいです」

「友達居たんd」

殴るぞ。

「怖いよ！！」

「題して、“朝夜メンバー童話でパロディー”ー……」

「あー君お兄ちゃんは無視なのね。そしてやる気がないのはその沈黙の長さでよーく分かった」

「童話パロディって、何がしたいの馬鹿じゃないの」

「はいはい落ち着いてー。ではではー、俺達で場所を使っちゃうと行数半端なくなるからとっとと行っちゃおうと思いまーす。今回ナレーションを担当するのは我が兄貴ヒコクマヒル齢今年で２０歳。他の配役は……まぁ読んでからのお楽しみってことで」

「色々小説でぶっちゃけちゃいけないことぶっちゃけてるけどまぁいいよ。童話パロ、今回は赤ずきんちゃんらしいです。ちなみに今回はって続く訳？」

今からの話は一部、どころか二部三部四部弄っていますのでもうフィクションと思って下さいね、ではどーぞ！

「マヒル兄頑張っ！」

何で俺な訳よ。……まぁいいや。

昔々あるところに、それは可愛い男の子が居ました。

「ちょっと待て」

その子の名前は赤ずきんと言います。

「おい待てって」

……何。

「何で僕が赤ずきんなんだよ」

仕方ないだろ、作者の配役がお前なんだよアサキ。

「……」

……赤ずきんはお母さんに頼まれて、風邪で寝込むお祖母さんの元にお見舞いに行くことになりました。

「は？　誰が行くと思ってんの？」

行くことになりました。

「赤ずきん、行って来てね？」

「うわ母さん来たよ、仕事行けよ」

「行かないとお母さん泣くわよ」

「何それ、脅迫になってないんだけど」

とにかく行けよ！！　ナレーション進まねぇんだよ！！

「面倒だ――」

「行ってきてくれたら、お小遣あげるわよ？」

「――けど行って差し上げよう。そしてゲームを買おう」

……扱いやすい赤ずきんはお見舞いの品を片手に即座に家を出た。

……童話にゲームってどうよ。

「お見舞いなんてさっさと終わらす、さっさと終わらして帰る」

赤ずきんは途中、花畑を見つけました。

「ゲーム何買おうかな、やっぱりポケ●ンかな」

花が好きな赤ずきんはそこで花を摘んで――っておいアサ……赤ずきん！　花畑を通り過ぎるな！　花に興味を持て！！

「花なんてすぐに枯れて一生を終えるのさ――」

赤ずきんは少し感傷深い台詞を吐けば、花畑に向かいました。

「……」

向かいました。

「分かったよ、向かうよ、向かえばいいんでしょ」

ぶつぶつと文句を言いながらも赤ずきんは花を摘み始めました。

しかし、そんな可愛いらしい姿を背後から見ていた者が一匹――

「何で俺が狼な訳」

飢えた狼でした。

「うわ無視りやがったマヒルの野郎！　あとで覚えてろ！　勝手に

家ん中入ってビール買い貯めるからな！！」

未成年がビールを飲むな。買うなら普通の食品を入れておけ馬鹿セツ野郎。

「ふーい」

そしてそんな狼は可愛い赤ずきんを――

「あのふて腐れた姿が可愛いか……？」

俺の弟が可愛くないというのかい……？

「うわぁナレーションなのにこの威圧感何さ」

とにかく。

狼は可愛い赤ずきんを食べたくなったので、お祖母さんの家に先回りをしようと思いました。卑しい笑みを浮かべた狼は、赤ずきんにバレない様に――

「あ、セツさん何してるの」

「ようアサキ、今俺狼らしいから食べちゃうぞー」

「うざ」

――……ゴホンッ。バ・レ・な・い様にお祖母さんの家に行きました。

「ゴメンマヒル。行くから怒らんといて」

分かればいい。
そしてそんな狼に気付いていない赤ずきんは、綺麗な花を摘み終わり、お祖母さんの家へ向かいました。

「え、ちょ、お祖母さん役お前？」

「ウフフ、なぁにセツったら、仕方ないでしょ？　朝夜キャラにお祖母さんなんて居ないんだから。年齢を考えたら1番年上の私がやるっきゃないのよ、お分かり？」

「ああ、マヒルのママンはお母さん役だからな」

「もう1人居るらしいけど、脇役らしいからいいのよ、で、セツ狼さん？　私を食べようっての……？」

「……ああ、そっか、お祖母さんか、……え？　俺に自分よか強い人をのせと？」

「あらん、自覚があったのね♪」

「あのー、ナレーションか作者、配役ミスが否めねェ」

いや、俺に言われても。仕方ないならセツはウミ食ったってことにして――違う、狼さんはお祖母さんを食べてベッドに潜り込めば

――

ガチャ

「お祖母さん、お見舞いに来ましたよっと」

「「来ちゃった」」

速いよ赤ずきん。

「あれ、お祖母さんってウミさんなんだ」

「やっほーアサキ君！　お祖母さんのお見舞いに来てくれたのかな？　ウミ感激☆」

「ちょ、ウミ下がれって。今の流れ的にお前居たらまずいんだけど」

お、お祖母さんが狼に食べられる前に赤ずきんは家に到着してしまいました。

食べられそうなお祖母さんを見て赤ずきんは1言言いました。

「……？」

言え。

「お祖母さん、いつの間に狼に知り合いが出来たのさ」

そしてお祖母さんも1言。

「お祖母さんは人徳があるからね！」

赤ずきんじゃねェよもはやこれ。

「ナレーションがさじを投げるなよ、狼困っちゃう」

テメェが言っても可愛くねェよ。

「じゃあ俺が困っちゃう」

お前だ――ってユウヤお前何して――

「俺狩人役なんだけど狼がお祖母さん食わないと出てこれないんだよね」

「あら大変、ユウヤ君を困らせちゃったわね。セツ、代わりに貴方が死になさい」

「別にユウヤ死んでねェし!!　代わりに死ねって酷っ!!」

「セツが死んでも私とマヒルくらいしか困らないわよ」

「え、お前等困ってくれんのか？」

パシリが居なくなるのはキツいな。

「素で泣くぞ」

「男が泣いたって可愛くないのよ。あ、カイちゃんとユウヤ君とアサキ君は別よ？　ってあれ、そういえば2人は――」

以上、赤ずきんでした。

「後半ズタズタやん」

「はい、先に戻って来てた赤ずきんです」

「出番ほぼ皆無だった狩人です」

どうだったでしょうか――配役が大事ってよく分かったでしょ？

「あんたが決めたんだろ」

「俺の出番ないじゃん。てかアサ君がだらだらして3人が騒いで終わったよね、何この赤ずきんちゃん」

もう赤ずきんちゃんじゃないんだよ。

「「おい」」

ではでは、本当はもうひとつゲームパロをやりたかったんですが文字数と僕の就寝時間の関係で次回持ち越――

「馬鹿じゃないの？」

「８１話でやりなよ、どうせネタないんだし」

――最近キャラ達が独り歩き始めて怖いですが、めげずに頑張ろうと思います。

では今回はこの辺で。

「また１００話でお会いしましょう！」

「会えたらな」

おい。

81＋帰って来ました。

父さんの実家から帰って来ましたユウヤです。ただのＧＷなのに凄く長く感じたのは何でだろう？

「ね、何でかな」

「何がだよ」

脳内だけで話していたのでそう言われちゃいました。

「お前はちゃんとテスト勉強しろ」

「そっくりそのままお返ししたいね」

ふらふらとしていたら、何時の間にやらテスト前。死にたい気分がするんだけどまぁ頑張りますよ、ええ。

しかし漫画を読みながらふてぶてしく同じくテスト前のアサ君に言われても――説得力皆無さ！

「僕は一夜漬けだからいいんだよ、お前は一夜じゃあ何も漬からない」

「漬からない！？」

一夜漬けってそういう意味だったっけ！？

此方に帰って来て直ぐ、アサ君は父さんに病院に連行されてまし

た。打撲だったらしいです、良かった良かった。
でも休みが終わって父さんも母さんもマヒル兄も居なくなっちゃって……やっぱつまらないなぁ……。

「夏休みはフルで帰って来てやるって三人共言ってたけどな」

「それはそれでどうかと思うんだけど」

マヒル兄はともかく、両親は仕事して下さい。

「でもアサ君」

「何」

「双子で良かったよね」

「何が」

「毎日独りじゃないからだよ！」

独りだなんてつまらないもの！　俺毎日帰って来て独りだったら死んじゃう！！

「ユウヤって兎だったんだな」

「違うよ、第一兎って淋しくても死なないらしいよ」

「詐欺だな」

何がだよ。

まぁ――漫画を読みながらもこちらを目を向けてくれるアサ君が居るからいいんだけどさ。昔みたいにこんなに仲良くなかったとしても、只其処に居てくれるのが嬉しいんだから。

「ね、アサ君は独りの方が好きでしょ」

「よく分かったな」

「そりゃ分かるよ」

全身のオーラがそう言ってるもん。

「俺が居ない方が良かったとか思ってるだろー」

「……」

え、無言の肯定？　素で淋しくなるから辞めようよそういうの……！！

「――困る」

――と思ったけど、言葉が返って来た。

「居ないと、飯に困る」

自分の心配だったけど。結局其処なんだね、俺の立ち位置って。

「アサ君、ご飯くらい自分で頑張ろうとか思わない？」

「無理、刻むぞ」

「何を？」

「誰をの間違いだ」

「俺！？」

畜生！　刻まれる！！　これ以上言うのは止しておこう。

「ねぇユウヤ」

「んー？」

少し集中して勉強してたら、珍しくあちらから声がかかってきた。
ベットの上で漫画読んでるから、背後からの声。

「今日の夕飯何」

結局飯かい。

「カレーかシチュー」

「カレー」

「よしきた」

具は同じだからね。でもアサ君にずっと聞いてたらシチューの日ってなくなっちゃうんだけどな。俺はシチューの方が好きなんだけど。

「あ、そういえばカイト君来るんだっけ？」

「……あぁ」

その忘れてましたみたいな間は気付かなかったことにしとくね、カイト君の名誉の為にも。

「ウミさんが大学に泊まっちゃって飯がないからだろ」

「カイト君も実は大変な家庭なのかもねー」

「まぁな」

カイト君の家の事情はよく知らないけど、ウミさんが居ない時は大体うちに来るからなぁ。

両親はうち同様仕事なのかな？　アサ君は知ってるみたいだけど、ちゃんと聞いたことがないから分からない。寧ろ聞ける内容じゃなかったら嫌だから聞かないんだけど。

ガチャ

「おっ邪魔ー！！」

あ、来た。

「何であいつは我が物顔でうちに来るのかね」

下からした声に目敏く反応したアサ君は、ため息をつきながらも漫画を閉じた。うん、何だかんだなんだからね、アサ君は。

「アサキー？　ユウヤー？」

「いらっしゃーい！」

俺達は一階へと向かう。何があろうと楽しければいいよね。

そんなことを思って、俺はやっぱりシチューにしちゃおうと悪巧んだ。

82＋不審者尋ねて三千里。

るんたったーるんたったー。今日はテストだったぜいやっほー！
白紙に近い解答用紙を何枚も提出しましたユウヤです！　――絶対怒られる。
つか、五科目を一日だからありえないんだよー。無理に決まってるじゃーん。

「あ、ユウヤユウヤ」

「ん？」

独り淋しく考えていたら、廊下から声をかけられた。……誰だっけ。

「ライテだよ」

「ああ。あれ、今日は一人なんだね」

「僕が何時だってコウスケと一緒に居ると思うなよ」

「ふーん。……で、何だい？」

「そうだった、何かさっき校内に不審者が居るって聞いたんだよ」

何その面白い情報。

「ユウヤ好きそうかなって」

「大好き」

ナイスだよ、もう探しに行くしかないでしょ。
俺はライテ君家のそー君と別れてその不審者を探し始めた。

「不審者！」

「誰がだ」

いっちー先生でした。

「せんせ、せんせ、不審者が居るって本当？」

「不審者ァ？　んなのどこに居やがるんだよ」

あれ、先生の耳には入ってないんだね。俺はそー君に聞いた話を何時までもかったるそうないっちー先生――クールなんておこがましい――に言えば、やはり先生はかったるそうにしてため息をついた。

「まーた面倒な……」

「うわ、先生本音」

「ユウヤ、先生命令だ、そいつ捕まえて来い」

え、俺？　大歓迎だからいいんだけど生徒に頼んでいいんスか。

「じゃ」

いいのかなぁ……――って行っちゃったー。

……仕方ないなぁ、探そう。

「不審者発見！」

「ちょ！　五月蝿いヒコクユウヤ！！」

リョウちゃんが居ます。分かってますよ、でも真面目に不審者っぽくて。

「……何してるの、一組の教室前で」

「見れば分かるでしょ！！　入るに入れないでいるのよ！！」

覗いてるだけって滅茶苦茶不審者だよリョウちゃん。ほわい？

「て、てテスト勉強したかったから取り忘れたノートをモモに借りようとしたのよ」

「で？」

「も、モモも取ってなくて、そしたらヒコクアサキが貸してくれて……！」

「あらー」

「だから返す訳よ！」

「あはーん」

「――あんたちゃんと聞きなさいよ」

ふぁい。

聞いてないことがバレました。俺はつられて不審気味に教室を覗いてみた。

「……アサ君にカイト君にユキちゃんが居るね」

「余計な二人が居て返しにくいのよ！！」

そりゃ居るでしょうよ、取り巻きの如く。二人は基本暇人なんだから。

「別に居たっていいじゃんかー」

「ばっ、馬鹿じゃないの！？　あの二人は気付いてるんでしょ！？わ、私が――」

「ああうん気付いてるよリョウちゃんが好きなこと」

「言うなっての！！！！」

まどろっこしいのは嫌いなんさ！
しかしまぁ……ふむ、仕方ないなぁ。ここはお兄ちゃんが人肌脱いであげようではないかー！

「――カイトくーん、ユキちゃーん！！」

「はぁ！？」

――思いっきり叫びました。リョウちゃんは何かもう悲鳴に近い叫びをあげましたがまぁ良いよね。

「おやユウヤ、何時から其処に居たんだい？」

「しかもリョウコまで一緒じゃねェかよ、何か用か？」

「うわ、バレた！　ヒコクユウヤあんたの所為でバレたわよ！！」

「……」

うん、無反応な人が誰だか言わんとも分かるぞ☆　俺は爽やかに笑いながらリョウちゃんを無視して、

「校内に不審者が現れた！　いっちー先生よりそやつを捕まえろというミッションが下されたのだ！　我と共に行こうぞ！！！！」

と叫んでみた。

「「ＹＥＳ　ＢＯＳＳ！！！！」」

「馬鹿だろお前等」

良いノリだよね二人共。そして相変わらず冷めてるアサ君のツッコミを余所にカイト君とユキちゃんはこっちに来てくれるみたいだ。

「じゃあアサキ、行ってくるよ」

「学校の平和は俺が守ーる！」

そんなことを言ってアサ君への挨拶をすれば――あからさまにカイト君はおかしいけど――廊下にやってきた二人。

「じゃ、リョウちゃん行ってらっしゃい」

「へっ！？」

「ほら、俺達が不審者探しに行ってる間アサ君の暇潰しに付き合ってあげてよ」

「え、ちょ」

「ふむ、そういうことなら言ってくれれば良いのに。さぁ行こうかユウヤ、カイリ！」

「おー！！」

「ち、ちょっと待ちなさいよー！！！！！」

どういう訳で自分達を呼んだのかが分かった様子の二人は俺より先に歩き出しました。……只不審者騒動が楽しみっていうのもあるんだろうね、ははっ。

「不審者ー！！」

「叫んでも出て来ないと思うんだがね！」

俺以上にやる気なカイト君。なんてやる気なんだろう。本当に騒ぎが大好きなんだからな此の人は。

「情報が無いのなら聞いて回ろうじゃないか」

「其れが良いね、さっすがユキちゃん！」

という訳で、聞いてみよう。

一人目、キクカワ先生。

「んん？　不審者かぁ、生憎知らないなぁ、というかヒコク兄とロクジョー、貴様達はこんなところで油を売ってないで勉強を――」

「「ありがとうございましたー！！」」

二人目、モモちゃん。

「不審者？　あ、見た見た、何でも怖そうな人らしいよ？　遊ぶのも程々にね、三人共」

「ユウヤとカイリの枠に私も入れられてしまったね、はっはっは」

入るよ普通に。

三人目と四人目、タッ君にセイタ君。

「不審者？　職員室にでも行きゃ会えんじゃないか？　んなことよりハジメ知らない？」

「ハジメ君ならさっき廊下に居たよー」

「サンキュー。……って何処の廊下だ――速っ！！　あいつ等の去るスピード尋常じゃないな！！」

セイタ君が騒いでるけど知りません。俺達はいそいそと職員室に行くことにしました。

――そんな途中の廊下にて。

「――！？　ユウヤ、カイリ、あの人ではないか？」

先陣を切っていたユキちゃんが曲がり角で立ち止まった。覗いてみればあら不思議、見覚えのない大人が一人キョロキョロと廊下をさ迷っています。

「あれで間違いないな！　キョロキョロしてるのが実に挙動不審だ！！」

「確保だ！」

「判断が早過ぎではないかな？」

此の三人だとツッコミが居ないからナンセンスだと思ってたけどそうでも無いや。ユキちゃんがちゃんと意見を入れてくれるからね！引っ込めていた首をまた出して、目標の確認をする。……ふむ、大学生とみた、マヒル兄と同い年くらいかな？　髪の色が銀髪……不良か？　後ろ姿では其れしか解析が出来なかった俺。

「何やってるんです？」

しかも解析してたら、後ろから声をかけられてしまった。

「アヤメ先生、気配がなかったです」

「ははっ、ユウヤとカイリ君は分かるけど、其処にユキ君が居るなんて珍しいね」

ぬっ、と背後現れたのはアヤメ先生だった。よーし、こうなった

らアヤメ先生に不審者の報告だ！！　でも気配がなかったことをスルーした先生って何なんだろう。

「不審者？　……確かに見慣れない人だね」

「あーや先生と同じ銀髪です！　不良ですぜ！」

「うん？　其れは僕が不良って言いたいのかなユウヤ？」

いや、あーや先生はマフィアでしょ。

「英語の成績は1が良いのか――」

「ごめんなさい」

「素直が一番だね」

先生こええ。ある意味いっちー先生よりこええ。

「とにかく、先生が行って来るよ」

あーや先生は特有のスマイルを浮かべれば、そっちへと歩き出した。待ってろと言われた訳じゃあないので普通についていきます。

「あの、来賓の方でしょ――」

しかし流石に近場には行きたくないので、丸見えだけど廊下の隅

で観察することにしました。あーや先生は其の人に声をかけ――て固まってしまった。

「――あ」

「ユウヤ、どうかしたか？」

「何かあったのかい？」

二人が言うのはさておき、あーや先生に振り向いたその人の顔に――見覚えがあり過ぎて。

「――せっちー！！」

――思いきり叫んでおまけに指差し彼の人の名を呼んだ。

「ん？　おお、ユウヤじゃーん！　お前何でこんな――嗚呼、お前ここが学校な訳か」

せっちーことセツさんは、俺に気付いて笑顔で手を挙げた。気付かなかったぞ！！

「そうだぞ！　――じゃなくて、こんな学校で何やってんのさ！いい歳して不審者騒動起こすな！　そして髪の色が変わってるぞー！！」

「まぁそう一気に言うなって。髪は元がこの色なんだよ！　んで不審者になりに来た訳じゃなくて――コイツ探しに来ただーけ」

せっちーはそう言って、俺と自分の間に居る人――すなわち、あーや先生を指差した。
せっちーがあーや先生を？

「何ともミスマッチ」

「ですよね～」

「ちょ、こら！　お前が否定すんなよシロ！！」

機能停止気味だったあーや先生は再びのんびりと機能し始めた。
相変わらずのんびりだ。

「え、せっちーと先生って知り合いなの？」

「知り合いっつーか……こいつ俺の兄貴だもん」

「「「……え？」」」

今までかやの外だったカイト君とユキちゃんと見事にハモった。
……あーや先生とせっちーが……？　この万年のんびりたまに鬼畜なあーや先生とどーみても馬鹿まっしぐらなヘタレ不良が兄弟？

「「「ありえない」」」

「ですよね～」

「だからシロっ！　お前が言うなよ！！」

始めて会った人にだってありえないと言わせるせっちーとあーや先生の兄弟関係。……そうだ！

「俺とアサ君が双子なのとどっちが驚きかな！」

「それは――」

「「「お前だよ」」」

「畜生！　流石に勝てないか！！」

どんな兄弟にだったら俺達は勝てるんだ！（※勝てません）

「まぁ……不審者と言うものですから、セツで良かったよ。とりあえず応接室に居てくれるかな？」

「おーう」

案内は宜しくね、とあーや先生は言って職員室に入っていってしまった。うーむ、意外な話だったなぁ。

「ね、せっちー」

「何だ？」

「アヤメセツって言うの？」

「ああ。言わなかったか？」

「うん」

……今度からちゃんと名前を聞こう。

「俺達、やっぱ忘れられてる部類だよな」

「……仕方ないんじゃないかな？」

其処に居たはずなのに、出番があまりなかった方々の呟き――俺には聞こえてないんだけど。

83＋他に取り残された人。（前書き）

前話で取り残された、もう2人。

83＋他に取り残された人。

「……」

「……」

「……」

「……」

――会話がない！　せ、せっかくあの馬鹿三人衆――酷いとか言わない！――が無駄な気を遣ってくれたのに……。

こんにちは、一組に取り残されましたリョウコです！！！！

「……」

ちくしょー！　会話が続かないどころか会話に入れないわよ！

ああ、ああ、ヒコクアサキってば座ったままボーッと外見ちゃって！　私が居るの分かってるんだからせめてこっち見なさいよ！！

なんか侘しいじゃない！　おんなじ教室に居るのにこーんな距離開いちゃってさ！

「ねぇ」

こんな機会もう二度とないかもしれないのよ！？　何時も何時も取り巻かれちゃって私が話し掛けることなんて出来ないわよ！！

「ねぇってば、カートーウー」

てかそんなことより私は話しかけるのだなんて無理なんですけどね！　ハズカシイもの！！　ええそうよ！　無理よ！　笑えばいいじゃない！！　笑い転げててお腹がよじれちゃえばい――

「カトウリョウコー」

「ふぁひゃい！！」

「……そんなとこ居ないで、こっち来れば？」

い、何時の間にかヒコクアサキがこっちを見てるじゃない……！　私が一人で悶々としてるの見られた！？　うわわわもう帰っていいかしら！！！！（※テンパり過ぎて読みにくい文章でお送りしています）

と言いながらも、私は何とか冷静を装ってヒコクアサキの席に近付いた。そりゃ窓際のあいつの席と入口じゃ、距離あり過ぎるものね。

「……あ！」

そうだった！　ノートを返しに来たんだったわ！　これをネタに会話をするのよリョウコ！

「あの、これ、ありがとうね！」

「ああ、別に構わないけど」

「凄く分かりやすかったから、テスト勉強にも使わせて貰っちゃっ

た！」

「そ。お役に立てたならコイツも本望じゃないかな」

「は、ははっ！」

「……」

「……」

――会話終了。

って早いわよ！　まだものの三十秒よ!?

……今始めて、ヒコクユウヤ、ロクジョーカイリ、サキネユキの凄さを知った気がするわ。一対一じゃあ無理よ！　……でも、駄目よリョウコ、ここでめげたら試合終了だわ！！（※某漫画引用）

「ヒコクアサキ！」

「何」

「あ、えと、その、あーと」

「……」

「……何でもない」

「そ」

――もう泣いていいかしら。

そんな状態のまま、十五分は経ってしまった。
――私のばーか！！！！　てか馬鹿三人衆！　早く帰って来なさいよ！　二人っきりは……嬉しいけど――もう無理だから！！

「ねぇ」

と、あっちから声がかかった。

「な、何！？」

「何で何時もそんなに慌ててんの？」

「……」

「……？　……おーい」

――あんたの所為よ！！！！
って言ってやりたいんだけど、言ったら駄目だから言わない。そりゃ言えないでしょ！？
不思議そうに私を見るヒコクアサキに気を取られつつも、

「私はあんたみたいにのんびり生きてないからよ！」

とか言っておいた。――軽く流されたけど。特に興味ないみたい

ね、もう……。

「じゃあ別にもうひとつ」

「？」

「カトウはさ、どういう時に楽しい？」

少しびっくりした。そ、そんな質問が来るとは……！　どういう時？

「……んー、友達と話してる時とか、美味しいもの食べた時とか―好きな人のことを、考えている時……とか……」

軽く暴露してしまった。まぁ、うん、気付きゃしないわよ……多分！！

「……」

聞いといて反応なし！？　何なのよ此の人！！

「最近さ、」

と思ったら返って来た返事。タイミング考えて欲しいわ。

「最近、楽しいって思うことが増えたんだよね」

「増えた、って、あんた楽しい時あったの？」

「そりゃあるよ、僕だって悲しくも人間なんだから」

こいつが、楽しい――？　……ごめん、笑いそうになったわ。

「今、君が何考えてるか分かるんだけど」

「ごめん、忘れて」

「……良いんだけどさ。……忘れてた感覚な様な気がして、少し驚いた」

「忘れてた、ねぇ。じゃあ私も聞くけど、ヒコクアサキ、アンタってどうしてそう大人びてるのよ」

「何処が」

「全体的に。アンタがそんなだから話してると私が劣等感に苛まれる」

「んなこと言ったらユウヤとカイトどうすんの」

「言えてるわね」

何時の間にか普通に話が弾んでいた。他愛のない会話だけど、少しだけ嬉しかったりした私。……だけどさっきの質問だけが、頭の隅でどうも引っ掛かってる。

「ね、私と話してるの楽しい？」

「そこそこ」

「正直過ぎるわよ、仮にも女の子と話してるんだからお世辞でも楽しいって言いなさい」

「無理」

「……まぁ良いわ。でね、楽しい時は――ちゃんと笑いなさいよ」

あ、キョトンとしやがったわ。ちゃんと聞きなさいよ、話してるんだから。

「人間なんでしょ？　だったら楽しい時笑うの！　あんたいっつも仏頂面なんだから！！　私を追いかけて来てくれてサボろうって言った時のあの笑顔、何処行ったの？」

あの時の清々しい笑顔と言ったら何とも言えなかった。悪戯っ子の悪戯成功を思わせる笑顔、最近全く見ていない。

――何が邪魔してるのかしらね。

「あー……笑顔、ね。ま、ま、……何時か」

「適当ね！？」

相変わらず。

「笑顔、か……」

適当なのに、もう一度呟いたから、少しは頭に残してくれてるんだなぁ、と嬉しかった。

何時か、何時でも恥ずかしくなく、コイツの隣に居れる日が来るのかな――って!!　私何考えてるのよ!!　はずかしっ!!　もう恥ずかしくて死ぬんですけど!!!!!

「何一人で騒いでる訳？」

「な、何でもないわよ!!」

聞かないで、お願い……!!

……ま、こうやって馬鹿やってられる内はいっかな、なんて思う私だった。

８４＋先生達の休息？

「……はぁ」

「あらーんイツキ君、ため息なんてめっずらしー」

「ため息だって尽きたくなんだろうがよ、テストの丸付けなんて……」

ふふっ、こんばんはマシロです。ただいま僕とイツキ先生とコクシ先生は三人だけで職員室に居ます。まぁ、一種の残業というやつで。残業代も出ないのによくやるよね。

「イツキ先生が遅いんじゃない？」

「ばっ、アヤメテメェ数学をナメんじゃねぇぞ。英語と違って式の計算まで見なきゃなんだからな」

「そんなこと無いよ、僕の方だって文法を確かめなきゃなんだから」

「私だってそうだぞ！　文章問題なんて作らなきゃよかったと後悔している」

何故僕達は三教科の担当なのだろうか、イツキ先生じゃないけど採点面倒臭い。

「あーだりぃ」

「ふむ、でもあれみたいだな。やっぱり数学は少し採点が面倒みたいだな」

「だろー？　真面目にだりィ」

「明日に持ち越せばいいじゃないか、明日帰せという指令はない訳だしな」

「休み挟んでんのにまだ返さねぇんじゃそろそろ不満が飛んでくるだろ、アサキから」

「ヒコク弟限定かい？」

「あとユキに小言を言われる」

「イツキ君、君意外に弱いんじゃないか」

二人はくっちゃべっているのに手が止まらない。イツキ先生なんて未だ新人みたいなものなのに正直凄いなぁなんて関心してしまうよ。……性格が難だけど。

「アヤメー」

「ん？」

内心でも読まれたのかと思った。

「この前の不審者ってお前の知り合いだったんだって？」

「あ、うん、そうだよ」

「あらそうなの？　シロちゃんに似ても似つかないお友達か何かかしら？　学生に見えたけど……」

「弟ですよ」

――二人の手が止まった。

あれだけ話してて止まらなかった手が今止まった。そんなにセツと僕は似てないでしょうか……？

「え……アレか？　血的繋がりは――」

「あるよ、歴とした実弟ですもん、アヤメセツ君は」

「あらー、銀髪しか似てないわねー」

ＤＮＡだけか、僕とセツを繋ぐのは。

「で、其の弟君がわざわざ学校に？」

「セツとは二人暮らしなんだけど、たまにお友達の家に居候行っちゃうんだよね。――で、今もそうなんだけど……生活費の足しにしてって」

バイト代らしい封筒をおいて帰ってしまったセツ。自分で稼いだお金なんだから自分の為に遣っていいのに……。

「見かけによらず良い弟君なんだなぁ……くろちゃんかんどー」

「勝手にしとれ」

とりあえず、居候先のお友達の家もちゃんと聞けたし良いとしよう。僕は一旦手を止めて、その封筒と一緒に自分で書き留めたメモを机から取り出す。

えーと、――市の――アパート２０４の……うん？

「イツキ先生ー」

「んだよ、忙しいのによー……」

さっきから話してた癖に僕の話はそんなですか。僕は黙ったまま笑顔で、向かいのイツキにそのメモを差し出してみた。

「何だよ……？」

「弟が居候の如く乗り込んでいるお友達の住所と名前です」

「……？」

自分に見せる意味が分からない様だ。だけど空いている左手で受け取ってくれたイツキ先生。……少し待ってみよう。

「――市？　へぇ、車なら近いわなぁ……――は？」

「どうしたんだ、私にも教えてくれよ」

「――こいつ、アイツ等の血縁か？」

興味津々のコクシ先生にメモを渡せば、僕にそう言うイツキ先生。

「じゃないかな、お兄さんが居るとか聞いたことない？」

「ある」

「あるんだ」

じゃあお兄さんかな、そう言えばユウヤとセツが知り合いだったから……妙な関係だよね。

「でもアイツ等の兄貴か……どっち似だろうな……」

「あー……」

「ほー、――ヒコク兄弟のお兄ちゃんねー」

周りに回ったメモが僕に戻って来る。“緋刻真昼”君……どんな人かな。

「セツの友達……もしかしてあんな感じな不良だったりして……」

「ヒコクの血だからな、何があっても驚かないぜ俺は」

「うわー」

アサキ君が冷静で、ユウヤがわんぱく、お兄さんは……どうなんだろうな？　セツは未成年だし、保護者として会いに行ってみようかな。

「面白いな、俺も会ってみてぇ」

「ははっ！　イツキ君もシロちゃんもヒコク兄弟がお気に入りな様だねぇ」

「お気に入りっつか――」

呟いたイツキ先生がこちらを見る。僕とイツキ先生は同時に頷けば、

「「見てて面白い」」

そう言った。

やっぱり、面白いものね。

「えー、ヒコク兄は分かるけど、イツキ君は弟見てて楽しいのー？」

「ああ、あの歳に似合わないニヒルさとか」

「渋っ」

「二人のお兄さんってことは、もしかしたら二人を足してかけた感じかも」

「……」

我ながら想像したくないことを言った。上手くいけば頭が良くて人辺りのいい真面目だけどフレンドリーなお兄さんになるけど、下手したら――

「馬鹿で人の話聞かねぇで常にやる気がないていたらくな兄貴だな」

になってしまう。イツキ先生は自分で言ったのに凄く嫌そうにしているけど。

「今度あいつ等に聞いてみりゃいいんじゃねぇか？」

「……？」

「弟の友達、気になんだろ」

――妙なところが鋭い。同僚として未だ一年程の付き合いなのに此の人は全く……まあ、もっと昔に三程付き合いがあるんだけれど。普段はクールだけどふざけ度ＭＡＸな癖に、人が本気で弟の心配してるのを見抜かれてしまう。しかも其れは此の人の無意識で、真面目腐った顔で答案用紙を見ながらの言葉。

「……」

「イツキ君ムカつくわね」

「は？」

「シロちゃんの顔にそう書いてあるんだぞ！」

そして此の人もまたしかり。ふざけてるのに凄くて、僕だけ取り残す気なんだろうか。

「――っし終わりー！！」

「お疲れイツキくーん」

うだうだと話を続けている内にやっと目的の物が終わりました。

え、家に持って帰れ？　イツキ先生が一人でやったら終わらないよやる気ないんだから。

「よーし帰る、俺は帰る」

「あら何言ってるのイツキ君、今から飲みに行くに決まってるでしょう？」

「ちょ、キクカワおま、今何時だと――」

「あんたこそ何言ってるのよ、まだ十二時前だぞ？　未成年でも帰らんぞ！！」

楽しそうなキクカワ先生に引きずられてるイツキ先生。大変だねぇ。

「――逃がすかっ！！！！」

笑っていたら、腕捕まれました。

「アヤメ、テメェ一人逃げられると思うなよ！　こうなったら道連れだ阿呆！！」

「え！？」

「おお、シロちゃんも一緒かい！　それじゃあ今日は先輩が奢っちゃるぞ～！！」

「あの、ちょっと僕もですか……？」

引きずられるイツキ先生に引きずられる僕。慌てて足で追いかけるけど――内心は少し楽しい訳で。

お金になんてならない残業でも、この人達となら、一生飽きそうにないと思う僕はただの効率の悪い大人ですかね。

85＋戦隊ヒーローは何人が妥当か。

「空中レッドはこの俺だぜ！！」

「かっこいー！　カイト君ひゅーひゅー！！」

「「「……」」」

アサキだよこの野郎。何だ急にあの二人。

「文字にすると“くう”中レッドって見えるけどカッコイイぜカイト君！」

「それは嫌だ……！！」

どうでもいい。

ちなみに空中とはうちの中学の略称名。“あき”中と読んで欲しいところだ。

「アサキ、ユウヤとカイトが何か始めたが止めなくていいのかい？」

「面倒。アスカ君行ってよ」

「俺ですか？　久しぶりに会ったというのに酷い仕打ちですねアサキ君」

ませガキトリオと呼ばれそうな僕等は集まって暇潰しに雑誌を読んでいる、放課後に何してるんだ僕等。

「カイト君がレッドなら俺はマリンブルーがいい！！」

「マリンブルーかー、水色も良いよな！」

「何の色配分ですか？」

結局アスカ君が聞きに行った。寧ろ隣の席だから僕とユキにも聞こえるんだけど。

「戦隊ヒーローになった時の色配分だよ！」

「また随分と無駄なことを……」

「ちょ、アスカひどっ」

正しい。アスカ君が正しい。

「うーん……アサキはブルーだな」

「カイト、何勝手に人を巻き込んでんだよ」

「だねぇ、アサ君はヒーローズの頭脳、クールなブルーだ！！」

聞け。

「でもユウヤ、君がマリンブルーならばブルーは要らないんじゃな

いかい？」

「あ、そっか。でもいいよ、本当の戦隊ヒーローじゃないし」

の割に結構アバウト。ユキの的確な指摘にアバウトに答えるという。

「じゃあユウヤ、俺は何色？」

『ブラック』

「――今何人が同時に言ったんでしょう」

その笑顔がブラックだよアスカ君。君はブラック、さすらいの一匹狼――というよりは腹ぐ――

「アサキ君」

「ごめん」

怖っ、怖過ぎる笑顔だぞ此れ。軽く内心読まれてんじゃねぇの…？　つか僕だけ怒られたぞ畜生。

「私は何だろうね？」

「ユキちゃん？　ユキちゃんはー……ホワイト！」

「はっ、ユキっぽいな！！」

ユキは名前的にも白だろうな。アスカ君とは違う笑顔で爽笑がよく似合うしね。

「じゃあモモちゃんとかリョウちゃんは？」

徐々に話の幅が広がったきた。いつの間にか僕等も参加してるけど、この話し合い何の意味があるんだ……？

「モモがピンクで、リョウコが黄緑……あり、黄緑って英語で何て言うんだ？」

「Ｙｅｌｌｏｗ　ｇｒｅｅｎ．　そのままだよ」

「ユキちゃん発音綺麗だねー、イエローグリーン！」

「ユウヤは発音まんま日本語ですね」

「黄緑の戦隊ヒーローってどうよ」

「良いじゃないかよー、あとはサクラ先生が司令塔で完璧だな☆」

「ぐはっ、いっちー先生が司令ってすんごい任務来そうで嫌だ！！！」

「あの人司令塔にしたら確実に私情の任務来るぞ」

「だねぇ」

話題が何故か担任についてに変わってきているのは構わないとして、僕が思ったのは戦隊ヒーローが七人って――。

「おい馬鹿共」

『――噂をすれば影！！』

「な、何だテメェ等……」

と、見回りらしいサクライ先生が現れた。放課後の見回りか……下校時刻を大幅に過ぎているから当たり前という訳で。

「騒いでねぇでとっとと帰りやがれ――と、アサキ、学校に雑誌を持ってくんなっつってんだろうが」

「あ、やべバレた」

「バレバレだバレバレ、漫画も持ってくんなよ。俺に貸す以外」

「はーい」

「先生、借りちゃってる以上駄目ですよ」

机の上に放置された雑誌を見て言う先生は、アスカ君のツッコミなんて聞こえていないらしい。都合の良い耳だ。

適当に帰る準備を済ませ、僕等は皆教室を後にする――と思ったんだけど。

「カイリ、ちょっと」

「へい？」

寧ろ先陣を切って廊下に出ていたカイトが振り返る。手招きをされてカイトはサクライ先生の元へ行き――何時もの様にヘラリと笑った。

「悪ィ、先帰っていーや」

「ん？　何だいカイリ、成績のお話か何かかい？」

「うぎゃ、図星つくなよユキ～」

ニヤニヤと言うユキにヘラヘラと言うカイト。とにかく、カイトはサクライ先生と話があるらしいので、僕等は先に帰ることにした。

「アサキー」

最後尾の僕に声がかかって。

「また明日ー」

「……ん」

笑顔でそう言われたから、頷いてから皆の後を追った。

成績の話じゃないことくらい、カイトの顔を見れば分かったんだけど。

86＋不器用少年の呟き。

あの馬鹿に逢ったのは中学に上がって直ぐのことだった。最初はただ、アイツに似てると思った。見た目が、とかじゃなくて、馬鹿そうなところとか、クラスでも常に中心に居るところとか、馬鹿なところとか――主には馬鹿なところだけれど――色んなところが。

小学生も何も違う僕があんなのと関わるとは思ってなかったし、関わりたいとも思わなかった。だからそう思うだけで僕は一人、――窓際から空を見上げてのんびりと――孤独で居た。

初めてのクラス、違う学校から来た人達、そんな中で僕みたいのに関わろうとする奴なんて居ない訳で。そんなのどうでも良い、寧ろ一人で居たい僕からしても、一際目立たない様にする為には好都合だったから。

――だけど。

『なぁなぁ――ヒコクアサキだっけ？』

声をかけてきたのはあの馬鹿だった。

確か、アイツの名前の様な――五月後半になってからだったかな。

『変わった名前だよな？　あ、んなことどうでも良いんだけどよ！　お前、この前のテスト数学すっげぇ点数良かったよな！』

最初のテストだってのに、一年から担任だったサクライ先生に点数を暴露された日の次の日。サクライ先生はこの頃から自由な人だった。

『んで、勉強で聞きたいことがあるんだけど、教えてくんねぇ……？』

――確か、瞬時に断った覚えがある。しかしあの馬鹿は何を勘違いしたのか、

『今じゃなくていいって！　今日の放課後！　いっつも直ぐ帰っちまうけど、其れこそ中学入って直ぐだから暇だろ？　頼む！！』

そんなことを言い出した。

――直ぐ帰っちまうけど――少し唖然とした、僕みたいな空気的存在をモットーにしてる人でもちゃんと見てるんだな、と。面倒だ……そう考えていたのを承諾と取ったのか、あの馬鹿は、

『じゃあ放課後な！』

と言って何処かに行ってしまった。

結局その日、僕はあの馬鹿に数学のテスト直しに付き合うことになってしまったのだが。勝手に相手が決めたんだから、帰ってしまっても一向に構わなかったはずなのに。何故あの日の僕はあんな面倒なことに付き合ってしまったのだろうか。

其れからというもの、あの馬鹿は何だかんだで僕に付き纏う様に

なった。その頃から知っていたことだけど、あの馬鹿はクラスの中心には居るし、色んな人と仲が良いけど――ずっと一緒に居る様な友達が居ないらしい。

――なのに僕に付き纏う。何がしたいのか、全然分からなかった。何時も笑ってて、何時も楽しそうで、何時も嬉しそうで――何時も何時も、いつもいつも……――。

――何がこいつをそんなに笑顔にするんだろう。凄く不思議だった。其れと同時に、物凄いムカついたっけ。

――そんな時期だったはず、あの馬鹿に“あんな”ことが遇ったのは。

ちょっとした風邪をよく引いていた。だから其の日もそうなのだろうと、次の日にはまたあっけらかんとしてやって来るのだろうと――何時の間にかあの馬鹿のことをしかと友達と認めている自分が居ることに気付きもせず、僕は考えていた。

けど、あの馬鹿は来なかった。次の日も、其の次の日も。

柄にもなく、先生に原因を聞いたら、

『忌引だ、葬式葬式。明日までだけど土日挟むからなぁ、来週は来

るだろ。にしてもお前が他人を気にするなんて珍し――』

そう言われた。もう良かったから途中で切り上げたらあとで怒られた。

僕は生徒手帳を見た。数日――今日の時点でもう四日。そういえばあの馬鹿が一方的に僕に話してた時、祖父母も遠縁は居ないんだ、と豪語していた。なのに葬式、五日も――？

だからそれを見た時、少しだけ驚いたんだ。

――忌引可能日数、父母、五日。

まさか。まさかだ。

唐突に、そんな身近でこうも簡単に。

気付いた時にはもう、僕はあの馬鹿の家に向かっていた。父親が単身赴任、母と二人暮らし――あの馬鹿は個人情報を僕に漏らし過ぎだ――で、姉が一人暮らしだと言っていた気がする。勝手に話してたから、よく聞いていないんだけど。

『――あら、カイちゃんのお友達かしら……？　――入って』

家にはそのお姉さんらしき人が居た。笑顔が優しげで、其の笑顔のまま奥に通され、――あの馬鹿の部屋に通された。

『……あれ、』

そんな反応をされたけど。そりゃそうだ、友達でもない人間がいきなり来てもな。

『来てくれるとは思わなかったけど……どしたん？』

どしたん？　はこっちの台詞だと言いたかった。何時も笑ってた、何時も楽しそうだったのに、此の日見たあの馬鹿の笑顔は――見ているだけで嫌になった。

『おい』

『んー？　何なに？』

『ムカつくから笑うな』

『ひでーな』

『何時もムカついてたけど。けど今日はもっと――無理矢理笑ってるのが、ムカつく』

『……ッ……』

泣くかと思った。でも、ゆっくりとした、何時もとは違う雰囲気で、事実を話しただけだった。

――母親が亡くなったのだと。

交通事故だと、あの馬鹿は言った。其れだけで話は終わったけど――つくづく“事故”に縁が出来てしまっていて、何かをぶち壊したくなる程の衝動に駆られた。

其の日のことは其れ以上覚えていない。あの馬鹿に何を言う訳でもなく、そのまま自宅にとんぼ返りした気もするし、其処ら辺の公園に暫く居た気もがする。自宅に居たユウヤは何やら心配そうに声をかけてきたはずだけど、それすらも忘却の彼方に送り返した。

事故、他人の死、己の罪――全てが――“再び”――僕の思考へ割り込んできて、体中を駆け巡る。関係ないのに、僕は関係ないのに、こんなにも、狂う程の衝撃が己を襲った。

次の日、当然の如く学校を休んだ。
正確には――行ける状態ではなかった。もう何もかもが嫌になった。嫌いだった、あの馬鹿にあんなことが遇ったことも、過去のあの出来事も――それがありながら少しだけあの馬鹿と居るのが楽しいと、普通の学生の様に思ってしまったことも。

次の週の始め、嫌々言っていても仕方がなく。ユウヤに連れられる様にして学校に向かった。双子のこいつに心配をかけているとは分かっていたのに、どうすることも出来ないのが歯痒い。そんな力僕にはない――そんなの分かってる。

『――ヒコクアサキ！！』

そんな自己嫌悪に浸っていたら。

『おっはよー！！！！』

後ろから思っきし叩かれた。あの痛みは今だって忘れない。凄く痛かった。そのまま走る様に僕を抜かして学校に向かったあの馬鹿の後ろ姿を見て、隣のユウヤが笑ったんだ。

『元気な友達だね』

『……別に。ただの“赤の他人”だ』

『名前は？』

『……カイト、だったかな』

あの馬鹿は――また笑ってた。身近な人が居なくなっても。境遇までがあいつと一緒になってしまったのに。学校内でだって相も変わらず僕に付き纏う。もう会いたくもない、なんて僕が考えたこと、あの馬鹿は知る訳がないのだろうけど。

強いと思った、僕なんかに付き纏う意味が分からないくらい。強さの意味が知りたかった、付き纏う理由と共に。

だからもう少しだけ、あの馬鹿――ロクジョーカイリに付き纏わせてやろう、そう思った。

「もうちょっと――って軽く一年経ってるってどーよ、つかもう二年……」

僕は此方にやってくる足音に気付き、自嘲気味に展開させていた思考を一時取りやめた。校門の塀に寄り掛かって足音の方に視線をやる。

「遅い」

「……え、うえっ!?　何してんのアサキ!!」

案の定、やってきたのは待ち人カイトだった。腕を組みながらそこに立つ僕を見て、肩で担いでいた鞄を落としそうになっている。

「六時過ぎたんだけど」

「いや、だから先帰ってて良いって……」

「帰る」

凄い勢いでカイトの意見を全てスルーすれば、僕は一人先に歩き出した。

「待て!　此処まで待っといて先帰るな!!」

「待ってないし、別に待ってないし」

「思っきり待ってるじゃない」

さっきまで驚愕してたのに、もうニヤニヤした表情に戻ってる。

畜生、やっぱり先帰れば良かった。

「で、何の話だった訳」

ただ其れが気になっただけなんだけどさ。微妙な表情変化の先は何だったのか、予想はついているけれど、憶測の話をする気はない。

「あぁ、アレだ、三者面談」

「……へぇ」

「聞いといて無感動な奴。……ほら、うち姉ちゃんしか居ないじゃん？　だから父さんがいちいち帰って来るかどうかで話し合いを」

「そうなんだ」

それもそうか、息子の面談で帰って来れる程シングルファザーは甘くないか。

「そりゃ大変」

「――お前、昔からそんなだよな」

僕の棒読みに意外にも反応を見せたカイトは――やっぱり笑って

た。

「人が話し掛けてるのに大きな反応は見せないし、だから友達とか思ってくれてねぇのかなーとか思ったら――家まで心配して来てくれちゃうし」

「心配なんかしてない」

「嘘付けぇ！！　俺以上に蒼白な顔しやがったく――」

「それ以上言ったら直ちにお前のテストの点を用紙ごとウミさんに叩き付ける」

「頼む数学だけは勘弁してくれ」

一年以上交わしてる会話は、何時からカイトの一方的なものから対等なものになったのだろうか。僕は未だ色んなことがよく分からないけど、其れでもカイトと居るのが――全ての答だと思ってる。

……けど、もうひとつだけ。

――罪滅ぼしなんじゃないか。

と、自問するけど答は返って来ない、その答を見つけるまでは。

――またもう少しだけ――自分のもう少しが今度は何年になるのやら――この馬鹿と一緒に居てみよう、だなんて思ってしまうんだ。

どんな答にたどり着くことになったって、――今は其れで良い。

87＋悲惨な現状。

「此れだ！！」

「ふっ、甘いなユウヤ。それで勝てると思ったか！　俺にはまだスペードの3が残っていたのさ！！！！」

「な、何だってぇ！？　終盤に来てまだ3が残っているとは小賢しい！！　くそっ、流すしか……！！」

「はっはっは！　次で俺様は上が――」

「切る」

「「何だって！？」」

午前中に出掛けてました。そしたら何故か――自宅で戦争が起こってました。

「あーがり」

「うわっ、今まで何事もなかった様に気配を消していたと思いきや、この好機を謀ってたな！？」

「策士……流石はアサキの兄……！！」

「いや、お前も兄貴だろーが」

「――何やってんの」

「「大富豪」」

「あ、お帰りアサキ」

戦争は戦争でもトランプ戦争ですがね。こんにちは、アサキです。

……や、んなことはどうでもいい。

「ただいま、だけどさ――何で二人が家に居る訳？」

「ん？」

「お？」

何故居るんだ、マヒルにセツさんが。しかも人の部屋でのんびりと、又はハイテンションにトランプなんて。

「いや、暇だったから」

「自由ー」

「そりゃお前だけだ馬鹿。あれだよ、お前等の三者面談あるから」

「は……？」

お前等の三者面談？　それに何の関係が？

「今回の父さんも母さんも予定がつきそうにねェから俺が行けって」

「「却下」」

「おいこらテメェ等何即答で断ってんだ」

トランプをばらばら落としたユウヤと共に僕等は否定した。だって、三者面談に兄貴……？

「成人すらしてない兄貴が何故」

「阿呆、俺は今年で二十歳だ」

あ、そっか、兄貴はもう二十歳だったっけ☆　――……じゃなくて！！

「マヒル兄が来るの！？　不良真っ盛りなマヒル兄が！？」

「不良真っ盛りって言葉兄ちゃん初めて聞いたわ」

「うわー其れじゃなくても担任サクライ先生なのに兄貴と合わせたらなんか喧嘩になりそう」

「待てアサキ、お前の担任はヤクザか何かか？」

「あ、ユウヤの担任俺の兄貴だから宜しく」

「え……ちょ、お前の兄貴！？　待てやコラ馬鹿セツ！！」

兄貴のツッコミが大変そうなので、仕方ないからボケるのをやめてやることにする。

とりあえずトランプを終えた三人と共に一階に戻った。だってあの部屋じゃ億劫だし。

「兄貴か……うわ、成績とか……うわー……うわー」

ユウヤが何処かにトリップしてるのはさておき。

「父さんは当然の如く、母さんは行けるはずだったのに突然の取材が入ったらしくって。今更日を変えて貰う訳にも行かないのーってな」

「そっか。大変だね、マヒルも。スーツとか着るの？」

「そうでもねぇけど……スーツ……？　あ、そうか、どんな格好で行けば……」

あ、悩んでる。だよね、スーツとか着たことないもんね。何で来る気だったんだろう？

「マヒル兄は何時もの格好で良いと思うよ！！」

お前は保護者がこんなで良いと言うのかユウヤ。

「こんなとか言うなよー」

何か考えがバレた。

「とにかく、確かユウヤが火曜のアサキが水曜だったよな」

「うん、二人共最後」

「よーし、兄ちゃんちゃんと行くからなー。学校終わったら飛んでくから」

「ほんと!?　マヒル兄飛べんの!?」

「はっはっはユウヤ、お前は隠喩が分からんのか」

分からないよ、其れ馬鹿だから。

とにかく。マヒルは僕とユウヤの頭にポンッと手を置いて笑顔で言った。別に飛んで来ないと間に合わないくらい忙しいなら断れば良かったのに……そんなことを言わせてくれなさそうな言い方をしたからどうでもいいや。

「――あーちくしょ、この講義後から単位貰えるかな」

「――んなに悩むなら行かなきゃいいだろーが……」

セツ君です☆　……ごめんなさいふざけましたセツです。夜、まっひーの部屋で一人ゲームをしてる時、授業日程を確認しながらま

っひーが呟いた言葉。マヒルだって大変なんだから三者面談なんざ親に任しゃいいんに……。

「うっせ、行けねぇッてんだからしゃあねーだろうが馬鹿セツ」

「だからって息子に任せるのもどうかと思うぜ？」

「俺が行くっつったんだからいいんだ」

マヒルがよく分からない。取りたい授業おじゃんにしてまで弟の三者面談って……。

「大切な受験期だぜ？　両親じゃなくたって俺は誰かに来てほしいって思うしな」

「ん、それってまさかの実体験？」

「ビンゴ」

あぁそうなのか。だからか、と俺は少し納得。

「俺が中学の時なんか、全く休みがない二人の所為で三者面談夜中にやったからな」

「うわ、切なっ」

「授業参観とかも来てくれたことなかったし、忙しいの分かってても悲しかったし。俺が行けるなら行ってやりてぇのよ」

「……な、マヒル」

「何さ」

「お前って優しい奴だったんだな」

「あれ、知らなかった？」

悪戯に笑うマヒルを見て、こんなにも外見と中身が合わない人を見たのは初めてだと思った。自分に降り懸かったことをせめて愛する弟達には味あわせたくなっていう、――兄心？

「さって、とりあえず電話だ電話」

「誰によ」

「学校だよ、あわよくば先生に頼んで授業ズラす」

「わお、将来有望株は言うことがでかい」

「ははっ！！」

さて、その電話の先に――吉が出るのか出ないのか。

87＋悲惨な現状。（後書き）

シリアス的話が多過ぎるー／（＾Ｏ＾）＼

ギャグが書きたいのに、ギャグから急にシリアスにーｏｒｚ

……シリアスも過ぎなんですけどね。↑

88＋そんな話以前に。

「何故空が青いのか」

――急過ぎる。久しぶりだこのノリ、僕と二人だけの時に急に言ってくるパターンは最近人が多かったから久しぶりだ、アサキですが何か。

「ねぇアサ君、空は何故青いんだい」

「光の加減」

「じゃあ何故海は青いんだい」

「空が青いから」

「それじゃあ星は何故光ってるんだい」

「恒星だから」

「恒星って何？」

「光ってんだよ」

「何で？」

「水素とヘリウムの核融合によって」

「ほー」

面倒臭い。何なんだこの質問責めは。

何を思ってるのか僕に様々な質問をしてくるこの馬鹿ことユウヤ。

しかし何を目的か、なんて聞いても無駄なことを知っている、だって――こいつは何も考えてないんだから。

「――やっぱり理科って難しいね」

と思ったけど、何か考えていたらしい。

「むーん」

「ユウヤ」

だが。

「何ー？」

「それは理科じゃないだろ、地学じゃないか」

「むーん」

駄目だ分かってねぇ。中学生なんだから理科でいいか。

「で、其れがどうしたんだよ」

「あ、うんあのね、俺は理系なのか文系なのか、と思いまして」

「……」

どちらか選ぶ前にお前はどちらもどっこいどっこいの成績じゃないか……？　思い付いていても言わないでおこう。しかしひとつだけ言わせて貰おう。

「ユウヤ」

「何ー？」

「そんなこと考える暇があったら勉強しろ」

「はい」

分かってくれた様だ。というか、即座に机に向かって行った。今やれとは言ってないけど……まぁ良いか。

「アサ君！！」

「何」

「ひとつ言わせて貰おう、――俺一人でまともに勉強出来ると思うなよ！？」

よくねぇ、うぜぇ。

「威張るな」

「ふぁい」

一人で勉強出来ないだと？　中学生が何を言う。中学生の時点でそんなんでお前、高校どうする気なんだ。

「高校、行けるのかな……」

「今のご時世、選ばなきゃ入れる、安心しろ」

「アサ君と同じとこがいいー」

「僕がそんな高いとこ行くかよ、安心しろ」

「え、行かないの……？」

このままノリでいけると思ったが、そうは行かなかった。高いところになんて行きませんよ、何故かって？

「高いところなんて行ったらアンタ、七時間授業なんてなって帰るの遅くなるでしょうよ」

「ていたらくー」

ぐさっ

「ぐふぁ！！　この感覚久しぶり！！　角！　本の角で的確にっ！！！」

「高いところ行ったって良いよ。お前と同じとこじゃなくなるけど」

僕は別に一人だって構わないさ。なんかユウヤが行きたいって言ってるだけなんだから。

「いや！！　是非ていたらくでいてくれ！！」

「なんか複雑な言われよう」

「アサ君俺が居ないと絶ッ対根暗で終わるから！！　高校生活大事にしようよ！！」

「あれ、また複雑な言われようだぞ？」

泣いていいか、これは泣いていいのか。

「でさ」

話題変えやがった。

「ほんとのところ、アサ君ってどうするの？」

「ほんとのところって、……高校ならまだ決めてないけど」

「ふーん。今度の三者面談、未だ決めてなくていいよねー」

「未だ早い」

高校なんざ後々決めりゃいいんだよ。あー学校の話だりぃ。

僕は立ち上がってユウヤを見る。

「ユウヤ、出掛けるぞ」

「え、何処にだよ」

「堅苦しい話をして疲れたから散歩に」

「あ、それじゃ夕飯の買い出し付き合ってよー」

「仕方ない」

ユウヤは丁度良いと言わんばかりに続いて立ち上がった。僕が出掛けようと言ったんだから良いんだけど、さて。

今日の夕飯は何だろう。

89＋THE☆過剰反応。

「あの、アサキ君」

こんにちはアサキです、最近ずっとアサキです。……いや、何時でもアサキなんだけど。

昼休み、何故か教室に居座るサクライ先生と話していたらひょこりとアスカ君がやって来た。

「ん……？」

「ひとつ聞きたいことがあるんですけど……」

「何？」

「――今日朝からユウヤの元気が無い理由を知っていますか？」

そんなこったろうとは思ったけど見事そんなことだった。ユウヤが元気じゃない理由？　そんなのひとつしかないよ。

「今日が三者面談だから」

そういえばあいつ今日一回も此方のクラスに来ていない。平和な理由がよく分かった。

「三者面談っつったってそんな根詰める理由ねぇだろうが……」

ユウヤの事情を知らないサクライ先生はため息をついてそう言った。流石にあの成績だもんなぁ、僕だったら絶望する。

「ははっ！　俺は来るの姉ちゃんだから構わねー」

カイトもそんなことを言っている。ああ、結局はウミさんが来ることになったんだ。でもウミさんなら良いだろう、怒るとかしなさそうだし。

だが僕はウミさんで思い出す、そういえばうち、両親が来れないの言ってなかった。

「先生、うち両親来れません」

「おう、――って待て、えらく急に言いやがるな」

「だからうちも兄貴でいいですか」

「兄貴幾……や、成人してるんだったな、なら構わな――マヒル君か？」

おや？

「サクライ先生、何でうちの兄貴知ってるんですか」

しかも立て続けに色々と知ってる風だったし。

「あー。アヤメの弟からの情報だ」

「アヤメ……の弟って？」

「あれ、ユウヤの知り合いだったらしいがアサキは知らねぇのか？　アヤメに全然似てねェ不良っぽい銀髪だったらしいが」

「……」

うん、知らねぇ。銀髪？　誰か居たっけ……？（※この前会ったセツが銀髪だったのに金髪の先入観で気付かない）

――まぁ良いや。

「で、その兄貴でも大丈夫ですか」

「嗚呼、構わないぜ。歴とした保護者やってんのならな」

あのマヒルが保護者をやっているのかどうかはよく分からない。見た目は不良なんですが……三者面談くらいはちゃんとした格好で来ることを祈ろう。

「アヤメ先生にも伝えて下さい、あの状態のユウヤが伝えるか危ういんで」

「仕方ねぇな……」

サクライ先生はため息をつきながらも了承してくれた、良かった。

「アヤメ！　事件だ！！」

「何ですかイツキ先生、久しぶりに騒いでる様ですが」

「三者面談にヒコク兄が来るらしいぞ！！」

「え、ユウヤ？」

「ターコ、マヒル君の方だ」

「何ですって！？」

「何何？　お姉さんも話に混ぜないとグレるぞっ！！！」

職員室で珍しく一年担任トリオが騒いでいたという噂が広まったのは本人達は知らない。

90＋どうなるのでしょう三者面談。

昨日ダイジェスト、とまではいかないですけどユウヤです。三者面談って何ですか。

『ようユウヤ』

『……マヒル兄……？』

時間よりも早くやって来たマヒル兄は、教室の前でスーツとまでは言わなかったけど――白いワイシャツにネクタイまで巻いて、あと黒のジーパン、そして何の飾りっ気もなく、俺が見たことなんて一度とない服装と髪型でやって来た。何時でも真面目らしいけどね。

一部の生徒に、

『え、あの人誰のお父さん！？』

『若ーい！』

と勘違いされていたけど本人は楽しそうにしていた。マヒル兄がお父さんだったら五歳の時の子になるけど。

あとは平和に進みましたよ。

――ええ、本当に平和に。

『担任のアヤメと申します、弟がお世話になっているそうで』

『嗚呼、セツ君のお兄さんなんですよね。こちらこそ弟がお世話に

なっています』

『いえいえ。いやー、セツの友達なんていうものでしたからどんなお兄さんかと思いましたが、誠実そうなお兄様で』

『え？　誠実そうだなんて。世辞は嬉しいですが中身はそうでもありませんよ？』

『そんなご謙遜をー』

――マヒル兄が社交辞令完璧だと思わなかったよ。せっちーのお兄さんであるあーや先生も最初は意外そうに話してたし、……まぁ寧ろ気持ち悪いぜ！！

とか言ってる間に終わりました。何時成績のことでマヒル兄に怒られるかと冷や冷やしたけど、まだ怒られない様なんで良かったー。……このまま何も言わないって展開は――

『ある訳ないだろ』

だよね。あれ、回送なのに返事が来たぞ？

後からあーや先生に『お兄さん、真面目な人なんだね』とか言われたから、普段の大学での服装を見せてやりたいと思った。兄貴の名誉の為にやめておくけど。ネクタイの巻き方とか知ってたんだね、マヒル兄。

「で、今日もそんな格好で来る気なのあの人」

「さぁねー」

と、三者面談についてアサ君に愚痴っていた俺ですが。アサ君は今日だったよねー、あと数時間あるけど。

「嫌だ」

「いや、そう言われても……じゃ、何時もの格好で来て欲しい？」

「それも複雑」

机に頬杖を尽きながらアサ君はため息をついた。……良いよね、三者面談が苦でない人って！！

カイト君もアスカもユキちゃんも帰っちゃったしなー、暇だなー。

「お前も帰ればいいじゃん」

「何をいう！　アサ君をこんなぽつんと残せません！」

「昨日僕は残したけどな」

残されましたよ、ええ。

……はぁ。と、教室の扉が開く。

「ユウヤ、アサキ君、そろそろ三者面談始まるので」

「「はーい」」

あーや先生でした。二組の教室から追い出された俺達。

「ユウヤ」

「何ー？」

「図書室行こ」

「ほーい」

さて、アサ君の三者面談はどうなるやら。

91＋謝るよりも大切だから。

やばいやばいやばいやばいやばい！！
このままじゃアサキの三面に間に合わねぇ！　こんにちはとこんばんはは何時交代するのか未だによく分からないが分かる通りマヒルだよ！！！！
先生の馬鹿野郎ォ！　講義遅くても四時に終わるって言った癖にもうとっくに四時過ぎてるんだけど！？　嗚呼もう遅くても四時半には出てぇのによ！！　つか出なきゃ完璧遅れる！　車で行ったって此処から一時間はかかるんだからな馬鹿野郎！！！！　もう抜けんぞ、抜けるったら抜ける、もう単位なんざ知るか！

『――えー、という訳で――』

うん？　終わりか！？

『――あ、そうそう、この結果を元にするとこっちの――』

――馬鹿野郎！！！！　続けんじゃねェよクソ野郎！！！！
畜生、真面目にどうしよう、でもやっぱ此処まで聞いて抜けるのはな……。ユウヤだったら良かったのに、アサキ、怒るだろうな……。

「……マヒル兄遅いねー」

「そう？」

「だって昨日、始まる三十分前に居た人だよ？」

「……」

五分前行動を遥かに凌駕した行動力だ、我が兄ながら。アサキです、後五分程度で僕の面談時間だけど、案の定押して前の人がさっき入って行ったばかりです。廊下に並べられた二つ椅子には、僕と何故かユウヤが座っている。

「お前帰らないの？」

「んー、流石にそろそろ帰るかなー」

「じゃ」

「うん。あ、ねぇアサ君、マヒル兄今日うち帰って来るかな？」

「言えば帰るでしょ」

夕飯のことを言っているであろうユウヤにそういえば、今日はハンバーグーにしよー、と言った手間がかかるメニューが聞こえて少

しびっくり。
面倒なメニューを選んだな、僕は好きだけど。
「じゃ、存分に褒められなさーい」
「あいよ」
ユウヤは立ち上がって僕の鞄ごと持って後ろ手に手を振った。…
…此れで帰りは手ぶらだぜ。
ユウヤが居なくなると、其れはもう静寂で。他のクラスはこんな時間まで面談をしないらしい。うちの母さんが来れるはずだった時間も大分遅いもんな……。時刻はとっくに五時半を過ぎていた、未だ明るいけど――人が居ない所為で暗く見える。
――遅ぇな、兄貴。
「ちょ！　ウミストーップ！！」
「うふふっ、車は急に止まれないのよ～セツったら」

結局講義が終わったのは四時半を大幅に過ぎた五時半少し前だった。

――やばい、間に合わない。そう思いながらも全力で大学内を走って車に向かったら、キーを講義室に忘れるという大失態を侵した。

『もう、マヒルったらアサキ君を悲しませたら許さないわよっ！』

という訳で今に至る。え？　どう至るかって？　ウミが運転する暴れ車が車道を暴れ回ってるんだよ――！！

ウミの車で送ってもらうことになったのは良いとして、真面目に怖いんですけど。

「う、ウミ！　次左左！！」

「左ね～」

「――ぐぁふっ！！！！」

ぐわァンんッ！！　――と音声が聞こえてもいいかもしれない急カーブ。右の壁にダイレクトアタックした俺の全身。

「マヒル！？　死ぬな！！」

ナビゲーターで同席したセツにそう言われるけど――駄目だ此れ、めげる。

間に合うか間に合わないかの瀬戸際だけど、んなことよりひとつやばいのが――服装。何時も着ている黒いTシャツにジー生地の黒い上着、アクセサリーはやりたい放題だし髪も弄り放題なんだけど――家に帰って着替える時間はなさそうだ。

俺、この服で行くの……？

「次ー」

前の面談が終わったけど、未だマヒルの野郎が来ていない。前の生徒の顔を見て見たことないな、とか考えていた僕に、サクライ先生の声が聞こえた。

ひとつため息をついて教室に入れば、滅茶苦茶かったるそうな担任が居る。

「――ん、あれ、アサキお前お兄さんは――」

「来てない、遅れてるか――忘れてんじゃないの」

勝手に椅子に座れば、僕は子供がふて腐れたみたいにそう言った。何だよ僕、これじゃあまるで――絶対見に行くからって言ったお母さんが来てない一人の発表会みたいじゃないか。

「来てない、か。まぁ最後だから俺は別に構わないけど、電話してみるか……？」

そしてサクライ先生も僕がそんな感じの心境だとでも勘違いしたのだろう、自分の鞄から携帯を取り出して僕に差し出してきた。――先生、携帯は携帯しようよ。

「いいよ、別に」

「いいよ、じゃねぇよ。――“事故”とかだったら大変だろ」

「――……。……そんなことある訳ないじゃん」

「お兄さん大学から来るんだろ？　飛ばし過ぎてとか――」

「――ないって言ってるじゃん」

何時もの会話なのに。

何かムキになって言ってしまった。声音も強く、表情も強張ってるはず。先生もびっくりした様な表情をしているし――やってしまった。

「……」

「……まぁ、ならいい。少し待つか」

「……」

呆れた様に振る舞う先生だけど、多分内心どうしようか迷ってるんじゃないかと、勝手に憶測した。先生だって三者面談なんて初めてなはずだし、僕等が最初の生徒なはず。

ごめん先生、でも“事故”って単語だけは――僕の前で二度と言わないで。

「――遅ぇな」

五分くらいして、時計を見た先生が呟いた。予定の時間から既に三十分が過ぎている。僕がこのクラスに入ってからは十分だけど、遅過ぎる。あの野郎……来たら殴ってやる。

「な、アサキ」

「何ですか」

「お兄さんって、どんな人なんだ？」

唐突な話題だ。きっと場を保たす為の付け焼き刃な話題なんだろ

う、と理解した僕はその話題に乗ってみる。

「見た目は真面目で誠実そうで礼儀正しくて自慢の兄です」

――但し、昨日ユウヤから聞いた偽りの方で。

「アヤメが言ってた通りだな」

サクライ先生はおかしそうに笑うけど、視線がどこか違う方を向いていた。しかも笑いはすぐに止んで、その後に――

「――で、本当は？」

そう、言った訳で。

この人やっぱり本当にヤクザ出身なんじゃないか、人の心情を読むスペシャリストなんじゃないか。僕はため息をついてからニヤリと笑い頬杖をつくサクライ先生を見て素直な気持ちをあげてみた。

「マヒルは馬鹿で、運動出来るからって直ぐ無茶するし、目つきキツいし普段着が今風で不良そのものだからそう勘違いされるけど本当は別にそんなんじゃなくて――」

言おうと思えば言えるだけ言えることを知った。ほぼ暴言だけど。
色々言ったけど、最終的に言いたいのは――

「――だけど、僕やユウヤに迷惑をかけるくらいなら人生を捨てる、とも言い兼ねない弟想い、ってかブラコン野郎です」

「すんません！　遅れましたっ！！！！」

僕が言い切ったと同時に、静寂に包まれていた扉が思い切り開いた。

「はぁ、はぁ……」

「おいマヒル、廊下を走るな」

「そんなこと言ってられっか！　三十分もロスるなんてもう――」

「ヒコクアサキ君の、お兄さんですね？」

兄貴は普段着だった。昨日ユウヤに聞いた様な服装じゃなくて、何時も出掛ける時の、大学で着ている様な――世間体では認められ

ない様な――そんな格好。
荒い息をつく兄貴に、サクライ先生が今まで一度も聞いたことのない口調で声をかけた。
「私はアサキ君の担任のサクライイツキと言います、初めまして」
「あ、えと、初めましてです」
サクライ先生は思わず吹き出しそうな口調。キモい、でも、今はそんな雰囲気じゃない。
「すみませんでした先生。三十分も遅れてしまって、しかも、着替える時間すらなくてこんな格好で――」
「座って頂いて結構ですよ、お兄さん」
「あ、はい」
兄貴は謝罪を述べるも、サクライ先生は気持ち悪い笑顔で促す。
本当に気持ち悪い。
兄貴は少し気まずそうに僕を見れば、さらに気まずそうにゴメンな？　と僕に謝罪を述べる。遅れてきたことに対してか、服装についてかは分からないが、――来てくれたんだから構わないのに。
「今日は親御さんの代行、という形でお兄さんが？」
サクライ先生は未だキモい先生でそう言う。兄貴もそれに気付いてるか否か、笑顔で肯定した。やはり遅刻と服装とが気まずくさせているらしい。
――けど先生は。

「親御さんの代わりであったり、弟さんの為に其処まで急げたり。そんなことが出来るお兄さんって数少ないと思います、だから、、私は素敵だと思いますよ、――姿がどうであろうと」

間違いは誰にでもありますしね、と、先生は続けた。

兄貴がその言葉でポカン、としている間、先生は僕は一瞥してニヤリ、と笑った。何時もの先生が其処には居て、不覚にも僕は――担任が此の人で良かったと思ったんだ。

「アサキー」

「んー？」

「良い先生だな、お前等の担任の先生」

ウミさんに送ってもらったというマヒルは、僕と一緒に自宅へと

歩く。緊張していた様にも見えた気まずさはあれからなくなって、普通に面談が行われたのだが。

「サクライ先生、あんな口調じゃないぞ」

「んなの分かってるよ、あの人もっと俺様口調だろ？」

よく分かったな。そして、へらへら笑うマヒルはでも、と前置きをして、

「アサキとは珍しく、相性良い人だな」

と優しげに笑った。

――ったく、兄貴面しやがって。僕の考えが読める訳もないマヒルは自慢げに頷いて歩を進める。

確かに相性は良いと思う、僕も嫌いじゃない、だけど、

「ユウヤやあんたが兄貴なのも、充分相性良いと思ってるけどね」

「ん、何？　何つった？」

うん。二度は言わん。

「ちょ、アサキ？」

「マヒル、今日はハンバーグだぞ」

「え、やった、早く帰ろうぜ」

お前は餓鬼か、単純。

単純でも、頼れる兄貴なことに、変わりはないし――ね。

92＋女の子同士の帰り道。

こんにちは～、最近出番が無かったんですが覚えてますか？　モモです。

「はぁ……」

そして今、私の横でため息をついているのはお馴染みリョウちゃん。ふふー、リョウちゃん今度は何を悩んでるのかな～。

「ねぇリョウちゃん」

「んー？」

「リョウちゃん、今日ため息八回目だよ」

「そんな！？　というか何数えてるのよ！？」

「リョウちゃんのため息だよー」

「いや、そう言う意味じゃなくて……」

リョウちゃんは呆れた様に私を見てるけど、でもリョウちゃん、最近ため息多いんだよ？

「悩み？　それともアサキ君？」

「悩みにヒコクアサキは入らないのね！！」

リョウちゃんの中でアサキ君はもう独立してそうだし。

「……今回はそうじゃないわよ」

今回はって。――リョウちゃん、最近の悩みが9，９９９９９（※以下略）割アサキ君関連なことを自覚しているの凄い。

「――進路のことで、ね」

「リョウちゃん……」

――そんなまともなことで悩んでたんだ……。

「モモ？　さっき何考えた？」

「ごめんね出番少ないからでしゃばったの」

「まぁ良いわ」

で、進路、だよね。リョウちゃんって一体どんな学校に行くんだろう？

「私さ、何になりたいとか、少しも決めてないのよ、こう、抽象的というか。モモは決めてる？」

「んー、決めてないけど、私の学力じゃあ行けるところって限られてると思うんだよね～」

自慢じゃないけど、成績ならユウヤ君やロクジョー君にだって負けないよ！　……取り柄ないなぁ私。

「リョウちゃんはスポーツ推薦とかで行けないの？」

「ん、私バド続ける気はないわよ」

「え……あんなに強いのに！？」

「――私みたいなのは幾億人だって居るの。特別に強くないから、推薦なんて有り得ないわ」

リョウちゃんは何処か淋しそうにそう言えば、明るい笑顔で私を見た。……リョウちゃん可愛いなぁ……。

「私も、リョウちゃんみたいになりたいよ」

「え……？」

「リョウちゃんみたいに明るくて元気で頭良くて可愛くて――」

「待ちなさいモモ、頭良いなんて周りに比べたら並なんだからね？　しかも可愛くないし」

「なのに気取らないで誰にでも優しくて、其れでいて繊細だけど少し素直になれなくて――」

「いやぁ！！　私なんか凄い過大評価されてるわ！！！！」

リョウちゃんが何か言ってるけどさっぱり入ってこないよ～。
それで、私が言いたいのは。

「――私は、そんなリョウちゃんが大好きなんだよ」

「……」

それだけは言えるんだよ？　自分に自信がなくたって、それだけは絶対だって言えるの。えへへ。

「――馬鹿ね」

リョウちゃんにはため息を付かれたけど。ごめんねリョウちゃん、私みたいな愚図で何やっても駄目駄目な私がそんなこと言って。ごめんね。ごめん――

「そんなの、こっちの台詞よ」

――え？　それだけ言って視線を逸らしちゃったリョウちゃんの顔はきっと真っ赤っか。聞き間違いじゃなかったみたいだから、つい表情が緩んじゃったよ。

「リョウちゃん」

「何よ」

「私と友達になってくれてありがと～」

「……それも、こっちの台詞」

小学生の頃から友達少なかったからなぁ。ましてや親友なんて居なかったし。中学でリョウちゃんに会えて本当に嬉しかったんだよ？　だから最近、アサキ君ばかりを追いかけるリョウちゃんを見ているのは何だか淋しいけど、元気なリョウちゃんを見れるのはとても嬉しいことなんだ。

「で、リョウちゃん」

「ん……？」

「何時言うの？」

「何をよ？」

「アサキ君に――」

「その後の台詞は聞かずもがな分かったから言わないで！！！！」

リョウちゃん凄い。アサキ君って単語だけで何言いたいのか分か

るなんて。

「じゃあ言わないね。でもリョウちゃん、来年になったら違う高校なんだよ？」

「ま、未だ決まった訳じゃないでしょ？　もしかしたら同じ学校かも……とか」

「それでも、だよ。リョウちゃん、マヒルお兄さん見たでしょ？」

「見たけど……それが？」

ふっふっふ、リョウちゃんったら。マヒルお兄さんを見て真実に気付かないとはー！！　マヒルお兄さんはアサキ君のお兄さんなんだよ？　ということは――

「高校生になったら、アサキ君はマヒルお兄さんみたいに格好良くなっちゃうかもしれないんだよ～！！」

ズドーン！！！！（※心の中の何かが破壊された音）

「な、な、何ですって！？」

しかし今のはリョウちゃん脳内。（※恐らく）

アサキ君が高校生になる＋マヒルお兄さん格好良い＝アサキ君格好良くなる！＝言わずもがなモテる！＝ライバル増量！！　――みたいなことが起こってるはず。

「ヒコクアサキは元々格好良いわよ！！」

――凄く恥ずかしいこと口走っちゃったよリョウちゃん！！！！

確かにアサキ君は周りの男子に比べたら格好良いけどさ、ほら、周り餓鬼っぽいの多いし……あれ、私口悪くなった……？

「ま、まぁそういうことなんだよリョウちゃん！　リョウちゃんが中学の内に告白しちゃわないとなの」

「それもそう、ね！　――で、でもまだ早い気が――」

よし！　と思ったけどまた弱気に！！

「じゃあ告白はまだいいよ～。せめてあれだよリョウちゃん、修学旅行の自由行動くらい一緒になれなくちゃ」

「自由行動！？」

無難所をついたはずだったのに、モーションをつけて驚かれてしまった。そ、そんなに衝撃大きいこと言ったっけ……？

「ハードル高くないかしら！？　い、いや、でも修学旅行くらいには其れくらい仲良く――？」

リョウちゃんが何処かの世界にトリップしちゃったのでつまらなくなってしまいました。

でも、アサキ君やロクジョー君が一緒じゃないと、私クラスで喋

れる人あまり居ないんだよな……一番話せるクラスの友達が男子って……。

と、リョウちゃんがトリップしたままお別れになってしまいました。

「リョウちゃんリョウちゃん、お別れお別れ」

「え!?　あ、うん、……それじゃね！」

一瞬で帰ってきたリョウちゃんはきゃるん、と手を振ってくれました。うーん、可愛い。あれの何処が可愛くないのか私には分からないよ～。

――でもまぁ、アサキ君には分かって欲しいなぁ、そうすればきっとリョウちゃんはもっと可愛くなるから!!!!!

……私、ほんとにおじさんみたい。

93＋ませた少年、馬鹿な青年。

――此れは一体何なのだろう。

……ああすまない、ユキです。今私はもしかしたらピンチなのかもしれない。

「あーだりィ……」

「マジシケてんなぁ……」

そんなことを言う高校生程の集団が、私の進行方向に数人居る。しかも道一杯に。今から引き返す？　――逆に怪しまれるだろう。あからさまに良くない学生、不良だなあれは。このまま行くのか私は、そして絡まれるのか私は、というか先に誰かが絡まれているではないか……！！

「シケた金額しか持ってねぇなぁ？」

「はっはー、大学生なんてそんなもんスよ？」

しかも相手大学生!?　最近の大学生は弱いのだな……いや、高校生が強いのか？

「……はてさて、どうしたものか」

「――何だテメェは」

――考えてる内に着いてしまった。
最近、私は馬鹿なんじゃないかと思うのだがどうだろう。アサキにはよく言われるが、認めたら負けなのではないか？

「いや、そのー」

「あん？　テメェ中坊か？　今日は大学生やら中坊やらに絡まれる日だぜ」

絡んでる訳じゃありません、だから帰して下さい。

「あ、君学校に居た」

「え？　あ、貴方……」

火事場の馬鹿力か何かで逃げようかと思ったが、何やら声をかけられたのを聞いて其方を見た。声をかけてきたのは絡まれていた大学生。……ああ、この前学校に居た……

「ユウヤの知り合いの」

「セツだよ、ユウヤの友達君や」

セツさん、ユウヤも確かそう呼んでいたな。そうかそうか、この人があの――って何でこの人絡まれてるんだろうか。

「いやぁね、この高校生達がお金に困ってるっていうから」

「確実に困っているのは遊び金じゃ――」

『あぁ　ゞ!?』

しまった口が滑った。

「とにかく君、こんな怖いお兄さん方に絡まれたら大変だから何処かに行きなさーい」

「もう遅いと思うのですが……」

高校生の不良方々の視線は全て、私に向かっているのですが。うわー、もうどうすれば良いのやら。

するとセツさん――とお呼びすることにしよう――は、はぁ、とため息をついてにこり、と笑った――数人の視線は全て私に向かっているから、彼等にはきっと其れは見えていないのだろうが――。

「年上にガン飛ばすのは良いかなと思って大人しくしてたけど――年下相手にそんなことする人には容赦しねぇよ、おにーさん」

笑顔の其の手に見えたのが、木片だったのは私にも分かった。

「二度とカツアゲなんざすんじゃねーぞ！　わーったな!!」

『はい、兄貴！！！！』

「わーったら解散！！」

不良方々が本当に解散していった――一部血まみれで。

「ふー……。君、大丈夫？」

「え、あ、はい、ありがとう、ございます」

「へっへー！　そう畏まるなよー、痒くなるぜ！」

私としたことが……本気で驚いた。さっきまで財布カツアゲされてた人が、木片ひとつで数人の不良をのしてしまった。木片って……三十ｃｍ弱の木片で……え、此の人何でカツアゲされてたんだろうか。

「あの、セツさん」

「ん、何さ」

「何で黙ってカツアゲされてたんですか？」

「え？　――あ！　財布取り返し忘れた……！！」

……真面目に聞いたにも関わらず、なんかもう検討違いのことで目茶苦茶落ち込んでしまった。ああもう、さっきまで不良を蹴散らしてした貴方は何処に行ったんだい。

「畜生……グッバイ、今月の生活費……！」

「生活費と言ってもシケた金額しか入ってなかったんじゃないですか？」

寧ろさっき不良方々を手なずけるんだから呼び戻せばいいのでは。しかし何言っても聞いてくれはしなさそうなので、私は愛想笑いでもしておくことにする。

「仕方ない、今月もあいつの家に泊まるか……それじゃあな、君」

「結局何も言わずに去る気なんですね」

人の前で衝撃的光景を見せておいて何もしないのか。木片だけで人々を殺到させておいて……！

「ふむふむ、じゃあ君名前は？」

嗚呼自由だこの人、馬鹿なのかもしれないな、ははっ！　しかし馬鹿は扱い慣れているからね、私は。普段共にしているだけあるよ。

「サキネユキ、と言います」

「ユキちゃんね、ユキちゃん、覚えた覚えた」

じゃあね、ユキちゃーん！　と言って、結局彼は去っていってしまった。

なんというか、不思議な人。

「ぴーんぽーん！！」

「口で言うなよ」

「マヒルー、また金取られちゃった☆」

「ぐふっ！？　またかよお前！！　どんだけカツアゲされる回数多い訳！？」

「つー訳でシロに言えないから今月も泊ーめて、そして腹減った」

「はいはい。……で、今回は何したの」

「適度に血祭り」

「サツ行って来い」

「平気平気！　あいつ等はもはや俺の子分だぜ！」

「どんだけ不良を子分にするんだテメェ。ヘッドにでもなる気か」

「さぁな。でも今日はシめてやったんだよ、不良共が可愛らしい年下の女の子にまでカツアゲしようとしてたから」

「は、正義の鉄槌もまぁいいが、お前が財布取り上げ忘れてたかられる俺の身にもなれよ」

「肝に銘じまーす」

結局ユキは女の子に間違われているが、間違えられた本人も間違えた当人もそこんとこは未だ知らない。

９４＋悲惨な前日。

「あーした天気になーあれ！！」

カイト君はそう言って、自分の靴を遥か前方に素晴らしい角度で蹴り上げた。ブランコからの投球――いや、投げてないから蹴球？――のタイミングもピッタリ！　数ｍ先まで飛んで行った靴を俺は見つめた。ユウヤでっす！

「記録、木」

「よーっし！　俺の勝ちー！！」

「しかし靴の向きは横向きさ」

「うぉおおお……！」

そんな遠くからユキちゃんが言えば、カイト君が唸る。畜生負けた、俺の記録は鉄棒だったのに！！

配置を言えば鉄棒の奥に木、だ。

「曇りかよ～、折角なのに燃えねぇな……」

靴取ってー！　とカイト君が言うと、……お、其れを拾ったのは珍しくアサ君だ。

「先程の発言、僕に対しての宣戦布告とみた」

ぽーん――

「ちょ！！！！　アサキのばかー！！！！！」

アサ君は鬼畜にも、カイト君の靴を公園の外、即ち――車道に投げた。車に気付かれないカイト君の靴は車の下を何度か逝く。

「明日晴れろと願うだなんて、僕に喧嘩を売っているとしか思えないな」

「だからって靴を車道はないっしょ、なぁアサキ？」

靴を片足で取りに行ったカイト君。ベンチに座って物語るアサ君に精一杯の引き攣り笑いで応対している、頑張ってカイト君。

「ふふっ、皆元気ですね」

「そーお？　何時もこんなだから分からないやー！」

と、声をかけてきたのはアスカだった。今までニコニコ顔で見守ってたから急にびっくりしたよ。

「其れもそうですね。でも、ユウヤも明日が楽しみなんでしょう？」

「そりゃーもう！　勉強嫌いだけど、体育祭は大好きだしね！！」

「ユウヤらしいです」

アスカがまた笑う。会話から分かって頂ける様に、明日は体育祭だ。だからアサ君はあんなにアンニュくて、カイト君がハツラッてる訳だよね！

「アスカは明日、出れないんだっけ？」

「あ、はい。幾分体調が優れなくて……ごめんなさい、ユウヤに変わりに出て貰うことになっちゃって……」

「安心するといい！　此の、体力に関しては右に出るものが数人しか居ない俺に任せろ！　アスカの分もみるみるカバーだぜ！！」

ふっ、決まった。其れはそうと、本当に俺がカバー出来るから、アスカは余り心配しないでね？

「半サボりな癖に」

「バレました？」

「アサキ、アスカ。ユウヤ聞こえちゃうから」

何か聞こえたけど俺には何もキコエナーイ！！

「体育祭か……さしずめ、私達のクラスと二組の一騎打ちだろうね！」

そして聞こえてきたのはユキちゃんの言葉だった。……うん？

三組は？

「ユウヤかカイトが居ないクラスは論外だろ」

「「えへへ！！」」

「褒めてねぇよ人論外」

人論外って初めて聞く単語だぞアサ君。

「天気予報的には晴れなんだろ？　じゃあ出来るだろうなー」

「僕、途中から熱中症という名の自分探しの旅に出るから」

弟は一体何処に行こうというのか。

「大丈夫だろ！　アサキが抜けても支障は……――出る！　お前リレーアンカーだろうが！！」

「テメェがやれよ馬鹿」

「一番速い人がやんだよ！」

アサ君は単発競技じゃ期待の星だもんねぇ。抜けたらもう俺達の勝利さ！！

「ま、今年も二組が勝つもんね！」

「去年も二組が優勝だったのかい？」

ユキちゃんの問いにもっちろん！　と頷いた。ふっふっふ、今年も優勝貰うんだからな！！

「よーし！　とりあえず前祝いにケーキを買おう、アサ君何が良い？」

「他クラスと祝ってどうする、ショートが良い」

ツッコむ癖にちゃっかりしてるわこの子。

95＋必勝！　体育祭！／前

気温二十八℃、湿度四十％、降水確率五％。
朝の天気予報のお姉さんはそう言っていた。だからこそ今――

『《次は、全学年による障害物競争です》』

とまぁ、――晴々とした今に体育祭が行われている訳で。こんにちは、アサキです、とりあえず――帰っていいですか？

「よーし次俺様の出番だぜー！！」

其の台詞今日だけでもう四回目だけど。そう思わすのは横で騒ぐカイトその人以外に誰も居ない。
こいつどんだけ出るんだよ、たかが体育祭で何盛り上がってるんだっつの。ってぐらいテンションが上がっているカイト。え、ユウヤ？　係の仕事に行っていますが何か？

「あれ、そういえばアサキ、君は保健委員の仕事があったんじゃなかったのかい？」

「ユウヤにパスった」

「酷いな君は」

そういうことです。だって暑いもん、動きたくないんだってば。

あっついあっつい、皆何でそんな張り切れるのかよく分からない。
ユキは苦笑しながら此方を見るが、特にお咎めはないらしい。僕は被った帽子を被り直しつつそう言えば競技に行ってしまったカイトの後ろ姿を見送った。

「あともうひとつそういえばなんだが。――カイト、出場回数多くないかい？」

「嗚呼、ユキは知らないんだっけ？」

ユキがこれはまぁ可愛くキョトンとして僕を見る。ふっ、純粋な方に教えるのは忍びないが――僕は顎で斜め前を差します。

「カイリ！　テメェ負けたら承知しねぇぞ！！」

其処には真っ赤な旗を持ったジャージ姿のサクライ先生。普段のラフなワイシャツ姿から打って変わってだ。

「……先生が燃えているだなんて私は初めて見るよ」

「安心しろ、僕もだ」

なんでも、

「最下位になったらアヤメとキクカワに奢らなくちゃいけなくなるんだからな！！　最下位だけは絶対阻止！！！！」

とのこと。

――この先生達生徒をダシに使って何してるんだか。

「ふむ、だが心配せずとも三組が最下位なのではないか？」

「そう思ってたみたいだよ、先生も。だけど今年は団体種目が多くてやばいらしい」

そう、団体種目の首位を練習の時から三組が掻っ払っていってるのだ。個人でカイトや僕が取っても微妙なラインらしい。

「嗚呼、大変だね、先生も」

「嗚呼、大変だな、先生は」

僕等は気楽にサクライ先生を見ただけだった。

午後。

昼休憩。辺りにカメラを設置して、我が子を撮らんとする父兄が目立っていた場所には、無防備にカメラだけが残されている。勿論その中に、うちの父兄のがある訳ないが。来る訳ないし。

――と思ってたのに。

「アサキくーん！！」

見知った声に振り向く前に、背後から抱き着かれた。

「ぐは」

「あら、感動のない悲鳴ね？　其処が可愛いんだけど！」

「ウミー、それ以上やるとアサキが羽交い締めにされいだだだだだ！！！！」

「何か言ったかしらん？」

「よ、弟」

うちの兄貴も含めた仲良し三人組でした。何してんだよアンタ等。

「痛いよー、アサキ助けてー」

「暑苦しいから離れて下さい」

ウミさんが離れたと思ったらセツさんが纏わり付いてきた。マヒルが一番マシって凄いことだよ此れ。ウミさんにアイアンクローを喰らっていたセツさん、何時もこんなのかお前等。つかセツさん髪色何時から銀に？（※一斉に疑問が爆発中）

「私はカイちゃんの勇姿を見に来たのよ！！」

「俺はつられてお前等を見に」

「付き添いー」

セツさん存在意義ゼロだ。

しかし午前中から居たらしい三人は午後授業の為に早々に帰って行った。暇潰しかコラ。

体育祭の方はというと、順位は赤青黄の順。言い換えれば一組が首位だということだ。しかし青こと二組とは僅差だし、残りの黄、三組は午後の団体種目が残っている。

……どうなるやら。

そろそろ委員会の手伝いを押し付けたユウヤのところにでも行こうか、なんて考えて、午後の種目まであと数分しかないことに気付く。まだ居ないか、なんて。そう思っていたら前から見慣れない男子生徒達が走ってきた。

「「ヒコク！！」」

ベタに背後を見てみる。

「いや、お前だから！！」

「ベタなボケかましてんじゃねぇよ！」

「うわ、駄目出しされたよ」

ユウヤだって可能性も無じゃないだろうが。彼等は誰だ？　見た感じは同学年の青ハチマキ、二組の生徒二人だが。

「んなことより大変なんだって！！」

「何が」

「――ユウヤが倒れたんだよ！！！！」

――耳を疑った。

あの馬鹿が？　ありえないだろ、だけど、必死な彼等を見れば、尚必死に僕を探していたのは一目瞭然で。

「――は」

「え……？」

「あの馬鹿の居場所は、って聞いてんの」

どうせ寝不足とか、手違いとか、そんなだろうけど。彼等に言われた場所に僕は向かう、

肩に下げていたハチマキが落ちたことにも気付かずに。

96＋必勝！　体育祭！／中

「疲れたわ……」

「リョウちゃん２００ｍ走一番だったね！」

モモが言ってくれた様に、午後初っ端の競技は２００ｍ走でした。
一番取った……！　ちょっと嬉しい！　けどキクカワ先生に凄く褒められたのは何だったのかしら……？

「――あれ」

「ん？　どうかしたの？」

「いや、落とし物発見」

クラスの場所に戻る際に見つけたのは真っ赤なハチマキ。体育祭とかよく居るのよね、ハチマキなくす奴とか。
私はそれを拾えば番号を見て、

「モモ、あんたのクラスのよ、３１２３？　二十三番……って誰だか分かる？」

「え？　あ、本当だ。後で届けと――ん？　いや、リョウちゃんが届けて？」

と言ったのだけど。モモは其れを受け取ろうと手を伸ばす。が、何かに気付くとすぐに手を引っ込めて笑った。

「私、次出るから行くね？」

「え、ちょ、モモ！？」

――行っちゃった……。

んー？　３１２３……って、……あれ、まさか――？

「ユウヤ、大丈夫ですか？」

「ふふふふふ平気だよ～」

ふは多いけど平気だよ。委員会の仕事をせわしなくしていたはずなのに、気付いたら保健室に居ました。そしてアスカも居ました、クーラーガンガンな保健室でサボるだなんて羨ましいぞ！

「頑張り過ぎらしいですよ？　軽い熱中症に貧血だそうです」

「うわ、俺にしては重症。でもそろそろ戻らないと……」

そう、俺は戻らねばならないのさ。何故なら俺にはまだ個人種目で出番があるから。抜けたら負けちゃうしね、アスカのカバーもするって言ったのに倒れてちゃほんとに世話ないよ。

ベッドから起き上がろとする、けど、アスカが起こさせてくれない。

「まだ駄目ですよ」

「えー、もう大丈夫だよー」

「駄目です、熱中症を甘くみないで下さい」

顔真っ赤ですよ？　と苦笑してアスカが言うものだから、自分は青組なのにな、とか下らないことを考えてしまった。

その時、廊下に足音が聞こえる。先生かな？

――ガラッ

「おい死人」

「え」

違った、いきなり入ってきて死人呼ばわりする保健の先生は居ないはずだもの。

勿論我が弟、アサキでした。

「アサくーん！　お兄ちゃんのお見舞いかい！？　嬉しいよ！」

「お前が保健室だって知らない奴に聞いたから涼みに来た」

「ちくしょ、目的は其処かよ！！」

暑いからって！！　暑いからって人を無下にしちゃいけないよ！！

「で、二割本気だけど冗談はさておき」

本気なんじゃねぇか。

「何してんの？」

「ちょ、何不思議気に首傾げてるの！！　倒れたくらい聞いたでしょ！？　訝しげに聞くな馬鹿！！」

起き上がってツッコンだら、頭がクラクラした。ふあー。また寝転がると、聞こえるのはアスカの笑い声。

「だから、まだ駄目って言ってるじゃないですか」

「うー……」

「アサキ君も、悪ふざけはこの辺にして」

「へいへい」

どうやら悪ふざけだったらしい。まぁ、アサ君はツッコミだもんね、たまにはボケたいんだよね、でもせめて健康な時にお願いします。

「午後の種目、ユウヤのとこは変えたらしいよ」

「あ、そうなの？」

「全員リレーまで来なくていいって」

「最後の種目じゃん！！」

最後まで出れないの俺！？　残念……。

「リレーは出ろってアヤメ先生が言ってた」

「うん、分かったー。……って、アサ君は何か種目なかったっけ？」

平然とこの場に留まるアサ君だけど……？

「ユキとカイトに任せてきた、二人んとこ行ってそれから此処まで走って来て疲れたから」

「この軟弱男！！」

真面目体力無いなアサキは。

でもまぁ、体力ないのは仕方ないにしても、今さらりと嬉しいことを言ってくれたから良いや。本人は気付いてないみたいだけど。

「……」

「ん、アサ君どうしたの？」

一段落ついたかと思ったら、アサキがキョロキョロし始めた。何か探してるのかな。

「ハチマキ無くした」

「「……」」

無愛想に言うけど、そういうことらしい。走ってきたから落としたんじゃないの？

「……ま、良いや」

基本諦めが早いアサ君は凄まじい勢いで即座に諦めやがったけど、立ち上がって保健室を出ようとしてるところを見れば、恐らく探しに行くのだろうと分かった。

「じゃ、そのまま動くなよ馬鹿ユウヤ」

「分かったよー」

仕事は僕がやるから、と最後に付け足せば、一体何のことだか分からないのですが何ですか。

「委員会じゃないですか？」

黙っていたアスカが呟けば、それが解だと気付いてつい相槌を。

さて、リレーまではあと数時間ある。それまで体力温存といきますかー。

97＋必勝！　体育祭！／後

『いちについてー！　よーい！　――』

パァン！！

クライマックスです、復活！　ユウヤです！

とうとうやって来ました最後の種目、三年生による全員リレー！

！　ひゅーひゅーパフパフ！！！！

えへへ走るぞ走るぞ超走るぞ保健室なんかに居たから体力が有り余ってるぜえへへへへ。俺とユウヤは勿論アンカー！　絶対一番にテープを切ってみせ――

「ユウヤ！」

「ん～？」

「お前ニカイドーの分まで走るのに何でもう此処に居るんだよ！」

あ。しくった。あわあわとするコウスケ君はさておき、俺はのんびりと其方に向かった。トラックの反対側に移動するだけじゃない。一周のトラックを一人半周でひたすら走る、くだらないなんて思ってないぞ！　あ、やべ、アスカ三番目だった。

「ユウヤ、絶対勝ってね」

トラック内にあーや先生が居た。

「もっちろん！　絶対勝つよ！」

「勝ってくれないとあの馬鹿に酒飲むキクカワ先生に奢る羽目になっちゃうんだから」

完璧私情！

「まぁ、そういうのなしにしても、頑張ってね」

「ふぁーい」

先生は笑顔で去って行った。明るいよね、先生。

そんなこんなでアスカの代わりに走る俺。走り終わったら今度こそアンカーまで順番を待つ。疲れた？　一回走ったくらいで何のその！！

あ、そういえば一組はアサ君だっけ。滅茶苦茶かったるそうに座り込む弟を発見。……結局ハチマキどうしたんだろうか？

「遥か彼方へ旅に出た」

どうやらなくしたらしい。

って、おお、滅茶苦茶速い人居るじゃん――ってユキちゃん！？

あの滅茶苦茶速いのユキちゃんだ！！

「ユキは僕より速いぞ」

「え？　アサ君が速いからアンカーなんじゃ……？」

「タイム弄りやがったあの野郎」

鳴呼、体育委員なんだねユキちゃん。普段笑ってるから真面目に走るユキちゃんって新鮮ー。

ユキちゃんが十六番目らしいから、まだ半分以上あるよ！　つか全員リレーマジに全員でやるのやめない？　半分に分けろよ！　……今更な叫びかな。

「ハァ……ハァ……ふぅ、良い汗をかいたよ」

「ユキちゃん爽やかー」

息を切らせてユキちゃん参上、何時までも爽やかだ。すると、ユキちゃんはハチマキを外し出す。

「はい、アサキ。私ので良いのかい？」

「うん、なくしたから」

鳴呼、そういうこと。ハチマキなしは駄目だもんね。アサ君はハチマキを借りたらしい、なくしたんだから仕方ないよ。

「――って、あ、見てよアサ君ユキちゃん、リョウちゃん走ってるよー」

ふと三組を見たらリョウちゃんが走っている。……リョウちゃんも速いなー。

「……せーの」

「「リョウちゃーん！！！！」」

「うるさいわよ其処！！」

せーのって言っただけなのに一緒に叫んでくれるユキちゃん大好き！　そしてそんなくだらないことに走りながらツッコんでくれるリョウちゃんも大好きだ！！

「あ、アサ君が嫌いな訳じゃないからね！」

「何の話よ」

で。その後ろをモモちゃんが。……走る姿も予想通りだねこれ。

「アサキ君ごめんねー。リョウちゃんに抜かれちゃったよー」

「息すら乱れてないのに謝るのか君は」

モモちゃんがよく分からない。

ただいまの順位は黄が一番。リョウちゃん凄かったもんなぁ。ふっ、だがしかし！！　青組二番は絶対に抜いてやる！！　ほぉら次はもう俺のば――

カラン

……バトン落としちゃった☆

「憐れな兄よ、僕は先を行く」

とか何とか言ってアサ君行っちゃったし！　嗚呼畜生！！

「くぉら待てこの野郎ぉあ！！！！」

「誰が待つかばーか」

やべぇ、滅茶苦茶ムカついてきたようわぁ。

「運動で俺に勝てると思うなー！！」

「思ってねぇよたーこ！」

「リレーであれだけ叫んでる人初めて見たよ俺」

「私もさ」

「見世物よね、見世物」

「あはは～」

そんな会話がなされていたなんて知らないけど。

結局的に言えば、俺はアサ君には負けた。しかし、何時の間にやら一位だった黄の三組を抜いていたらしく二位に……！　何時抜いたんだ。

最終的結果も一位だったしね。……一組と同着だけど。

「楽しかったー！！」

「お疲れ様だね、皆～」

ニコニコなモモちゃんを横に、笑顔で終わった体育祭。本命のリレーは負けたけど、まーいいか！

「ユウヤ、今日夕飯何」

「アサキー、お前マジでユウヤに飯作らせてるんだな」

「いいだろ別に。僕出来ないんだから」

「俺が好きでやってるしね！」

「あ、ヒコクアサキ！」

おや、どこに行ってたかと思ったらリョウちゃん参上。しかもまともにアサ君を呼べる様になっている……！（※大事）

「ちょ、ちょっと来てくれない？」

……え？　この展開って……？　――告白ですか！？　告白なんですか！？

「……」

本人無言なのは何なんだアサキ！！

「リョウコ、告白？」

「寝言は寝て言いなさいロクジョーカイリ」

……うん、リョウちゃん違うみたい。図星をつかれたらテンパるリョウちゃんだもん。
アサ君はリョウちゃんに連れられ行ってしまった。

「何なんだろ……？」

「「さぁ？」」

「ふふっ」

モモちゃんだけが笑ってた。

98＋必勝！　体育祭！／おまけ

アサキです、体育祭疲れた。
なのに未だ帰れない。何でかって？　――カトウに呼び出されたからに決まってるじゃないか。それなのに此の人何も話さないで、ええと、とかあのー、とか接続詞のつもりな言葉ばかりを口走っている。正直早くして欲しいんだけど。

「だからねっ、そのー……」

「……」

何時まで続く、この吃り具合。

「あ、先にこれ」

「先にって……結局話は何処に――あ、此れ僕の……」

相変わらずカトウは話の段取りのない奴だったが、その手に握られているのは赤いハチマキだった。番号は２３番、……僕のじゃないか。

「昼に拾ったのよ！　それから返しそびれて、嗚呼もう遅れて悪かったわね！！」

「別に不平不満は漏らしてないんだけど……。でも、何で僕の出席番号知ってるのさ」

「それは……モモから聞いたからに決まってるじゃない……」

何故か自信無さげに言っているが、僕が気にする訳もなく。え？面倒だし？

「とりあえずありがとう。で、本題はこれ以外に何かあるの？」

「え？　あ、ええ、うん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

そう言ったカトウは今度こそ話すらしく、心意気を整えてからこちらを見た。

「あんた、高校とかもう決まってる……？」

「……は？」

――真面目な話来た！！

「は？　――じゃないわよ！　私は本気なの！　……もう夏になるってのに進路とか決まってなくて、先生には私なら良いところ狙えるって言われたのに決まらなくて……」

どうやら本当に本気な様だ。僕は不安そうにつらつらと話すカトウをジッと見ながらそう思った。

「やりたいことがないとか、そういうんじゃないのよ！！　でも、やっぱ色々あるじゃない！？　私優柔不断だから決められないし――」

「カトウ、君の将来の夢って何なの？」

「え――えと、私は、先生、かな」

「何の」

「学校の」

「どの」

「特に決めてないわよ！　何よその淡々とした物言いは！！」

「科目は」

「科学！　というか理数科！　好きな科目其れと体育しかないの！！」

理数系の女子って珍しい。

変わってるなぁ……。

「……今、変わってるとか思ったでしょ」

さーせん。

「でも、でもでも、高校からそういうこと考えるべきなのか分からなくて、私そういうの考えるの苦手だし……」

「未だ良いんじゃないの」

このままくどくどくどくど根暗トークされても何なので、簡潔に意見を言うことにした。

「高校から理数科行かなくても、大学からそういう方向に行けば充分。詳しいことよく分からないけど、女の子って高校生活エンジョイしたいだろ」

「……」

「第一夏休みって時間があるんだから、文化祭とか見に行って決めたら？　僕はそうするつもりだけど」

――反応がない、只の屍のよ――

「凄いわね」

――うだと思ったけど生きていた。

「私の周りってろくなこと言ってくれる人が居なくってね。アンタに聞いて良かったかも」

カトウはあっけらかんと言ってのければ、本当に清々しそうに帰りましょ！　と言った。誰の所為だと……まぁいいや。

「また今度、話聞いて貰ってもいい……？」

「……気が向いたら」

その後自宅でユウヤに質問攻めを喰らったけど、鳩尾に一発入れたら黙った。

何なんだよ一体。

99＋今日は何の日？

「父さん父さん！　はいっ、プレゼントー！！」

ゲームをやる僕と何も言わないけどテレビを見せて欲しい父さんの居る居間に、けたたましくやって来たのは勿論ユウヤ。今日は父さんが居ます、何でだろうアサキです。

「ん、何？」

「今日父の日だから花買ってきたんだよ！」

此の雨の日にご苦労なことだ。そうか、今日は父の日だったのか……父の日？　Ｆａｔｈｅｒ？　六月の第三日曜日……やべ、何をする気もない。

そう思って雨降り空を眺めれば、僕はユウヤに目をやる。白い花か、ユウヤにしてはセンスあ……

「「……」」

「どうしたんだい、二人共？」

ユウヤが持っている其れって。

「ユウヤ」

「何、アサ君」

「お前は父さんに死んで欲しいのか」

キクの花だぞ、真っ白な。

「……Ｏｈ　Ｍｙ　ガッ！！」

何処で止めてんだよ。

「と、父さんごめん！　キクかよ！！　其れキクかよ！！　俺てっきりキクに似た何かかと思ったんだよ！！」

「キクじゃなくてもキクに似た何かも嫌だろ」

「別に父さんに死んで欲しいとかのアレじゃないから！！！！」

普段知識人じゃないユウヤでも、白いキクの花の意味くらい知っているらしい。死人に送る花だぞお前。

「こんな花捨ててやるー！！」

「――良いよ、ユウヤ」

自暴自棄に花を振りかぶるユウヤを止めて、父さんは笑顔で花を受け取った。ユウヤは唖然としてるけど、父さんは非常に嬉しそうだ。

「ユウヤが僕の為に買ってきてくれたなら、キクだった構いませんよ」

「でもー……」

「ありがとう、ユウヤ」

「……うん！」

平和だ。

うちの父親は本当に出来た人間だと思うよ、何処から僕やユウヤが生まれたのか検討もつかない、遺伝子は全部マヒルに行ったんだな。

「で、アサ君父の日何かしないの？」

「雨の日に何をしろと」

「雨じゃあアサキは動いてくれませんよね」

よく分かっていらっしゃる、雨の日に何かしろって人がおかしいんだ。Ｒａｉｎｌｙ　ｄａｙだぞ？　ａが２つも入るんだぞ？　……まぁどうでも良いことはさておき、とりあえず本気で何も考えていませんが何か。

「アサ君ひどーい」

「勝手言ってろ、僕は母の日だって何もしなかった」

「奥さん可哀相に……」

うちでそういうイベントが好きなのは両親とユウヤだけだからな。

マヒルが居ない今、結構僕だけ仲間外れみたくなるがどういう了見だこら。

「「……」」

畜生野郎共無言になりやがった。何かするっていうまで動かないぞこいつ等。何かする？　何すればいいんだ？　僕はユウヤと違って大概のことが出来ないってのにどうすべきなのさ。

やっているゲームの内容が頭に入って来なくなるくらい背後から視線を感じる、見るなよこの野郎。

「「……」」

見てる見てる見てる。見ないで下さい。拝観料取るぞ。拝観料？　拝まれてはないよな、じゃあ何料？

「「……」」

「……分かったよ、何、何かすればいいのさ」

負けたよもう。

「よっしゃ！　アサ君の負け～」

「何に負けたのかもはや分からないよ」

振り返って叫べば嬉しそうな二人に御対面。もう、ゲームなんてやってらんないからいいっての……。電源を切ればリモコンを父さんに渡し、ユウヤが爽やかに笑うのを目に止める。

「アサ君」

「何」

「今日の昼食一緒に作ろっ！！」

「断る」

ばっさり。

「何でよー！！」

「僕が出来ないの知ってるだろうが」

「前に自分から作ってくれたじゃん！　えと、クリスマス辺りに！！」

嗚呼、懐かしい思い出。けどあれはクリスマスの勢いでやっただけであって、あれから凄い勢いで料理の腕が下がったから（※自覚有）やりたくないんだよ。

「大丈夫だって！　俺が居るんだからさぁ」

「でもさ」

「美味しくなくたっていいんだよ？　僕はアサキの料理が食べたいな」

……逃れられない台詞を吐きやがる！！　しかも美味しくなくていいって何かムカつくな。

僕は仕方なく、もう本当に仕方なく立ち上がって、

「失敗したら知らないから」

とだけ言ったら、嬉しそうにされた。

……本気で昼飯抜きでも知らないぞ。

「ただいま～……え、誰か亡くなったのかしら！？」

深夜近くに帰宅した母さんが、机上の花瓶のキクを見てそう言ったのは誰も知る由もなく。

１００＊閑話＋１００回？　いえ、特に何もありません。

「祝！　１００回！」

「はい勝手言ってろ」

相変わらず冷めている人はさておき、マジに１００回です、祝いです。

「ネ兄？」

分けるな、ねあにって言うな、ネ申みたいなことかアサキめ。ネット住人まっしぐらじゃないかお前。

「失敬な、僕は根っからゲーマーさ」

もうええ。

て訳でこんにちは！　１００回ありがとうございます！　読者である皆様の御蔭でここまでやってこれました……！

「勝手にやってただけだろ」

「だよね、読者とか関係ないよね」

うるせ双子。確かに特に何もしないけどさ。

「うわー、この人本当にアレだよ、もう止めちゃえよ」

「止めて楽になりなよ」

な、何この双子。作者差し置いて独り歩きし過ぎなんだけど。何で主人公が更新停止勧めてくる訳？

「「個性」」

逝けお前等、モブまで格下げしてやる。

「ユウヤみたいなうっさいキャラがモブになれる訳ないじゃん」

「そーだそーだ！」

「いや、けなしてるんだけど」

「え？」

もういいよ、そのまま半永久的にやってろよ。こちらはこちらで進めるから……！

という訳で！　もうこの切り替えし二度目だぞ畜生！！

１００回だからといって、本当に何も考えていませんでしたが、とりあえずいつもながらぐだぐだしながら考えていこっかなーと思っています。

「ユウヤ、醤油とって」

「ほい」

人の真後ろで昼飯始めやがったよ野郎共。自由過ぎるよ、なぁ、作者差し置いて自由過ぎるよ……！！
で、でもめげない！　では何しよう……？

「プロフィールでも言ってみたら？」

おお、アサキ、君は作者を見放してはなかったんだな！　ではキャラ達のプロフィールを――

「作者の」

高校生です、れっきとした、――って何で僕の自己紹介すんの！？
普通君等だろうがよ！！

「そんな面倒なことやる訳ないだろ……」

もうどうにかして……。

という訳で、少し落ち着いたので、再び進めます。

「飯終わったしね」

「うんうん」

はい進めます。

今回も、前回に続いて童話パロで行くことにしました。しかも連載式に。

「で、何の？」

――不思議の国のアリス。

「俺アリスやりたい！！」

「何でお前なんだよ、普通女――」

うん、いいよ。

「いいのかよ」

て訳でスペース足りなくなるので早めに行きますよ、今回から２０回ごとに行きます！！

ではどうぞ。

昔か昔じゃないかは知りませんが、あるひとつの草原で、アリスはお姉さんと一緒に本を読んでいました。

「ウミお姉ちゃん、本飽きたよ」

「うふふっ、アリスったら～まだ目次じゃないの～」

――しかしアリスは本に飽きてしまいました。目次で飽きてしまうくらい、アリスは読書が苦手でした。

「飽きたよー」

アリスはお姉さんが『できる女になる為の４５条（はぁと）』という本に読み耽ってしまって話し相手すら居ません。アリスはできる女になる気はないのでただただ草原を見渡していました。

そんな時。

「遅刻だー」

遅刻らしいのに全く焦燥感の感じられない声が聞こえました。何だあれ、マジ急いでるのかよ、と思ったアリスが声の方を見ると、そこには一匹の白兎が――

「という名の人間です」

――という名の人間が居ました。確かに真っ白い耳がついてますが、それは明らかにウサミミバンドでした。

それにしてもこの白兎、なんとふてぶてしいのでしょう。自ら遅刻と言っていたのに、ポケットから取り出した時計を見ると、

「やべ、汚れてる」

と口走って立ち止まり、洋服でそれを拭いています。

「……遅刻するんじゃないの？」

「それより時計が大事。公爵夫人程度で何で僕が急がなきゃいけない訳？　建前建前、とりあえず白兎だし」

アリスに対してもふてぶてしい。そんな白兎の名前はアサキと言うらしい。通りでこんなな訳だ、アリスは納得しました。

アリスはとりあえず暇なので、そんな白兎に歩み寄って、

「どこ行くの？」

と尋ねてみました。白兎は顎に手を当てて少し考えてからニヤリ、と悪く笑い、

「――内緒」

と言って走り出してしまいました。

「ちょ、ずるいぜ！」

好奇心が旺盛な――というかもう何かムカついたので、アリスはそんな白兎の後を追い掛けました。

さて、一体アリスはどうなるのでしょう――？

続く。↑

はい続きます。
というか話書いてる間に双子が帰っちゃったのでこれにて終わります、もうあの2人自由過ぎるんだけど、どうしようねェどうしよう。

ではー！

101＋オチ？　そんなものはないさ。

「暑い！」

「だね、暑い暑い」

「暑い暑い暑い暑い暑い！！」

「はいはい、暑いね」

「暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑――」

「――五月蝿ぇ！！　暑いのは分かったから黙りやがれ糞野郎！！！！」

アサキの方が五月蝿い――とは言えなかったねユキです。

今日は土曜日だけども授業参観にて学校なのさ。クーラーも無いというのにこんな暑い日に学校……まぁうちは親が来ないからいいのだけれどね！　カイリは相変わらずぐだぐだと机に平伏していて、アサキは相変わらずイライラしているみたいだ。頑張ろう二人共、次で終われるんだから。

数人の保護者方が教室に入ってくれれば、クラスの生徒はチラチラと後ろを向く訳で。やはり気になるのだね、己の親や友達の親、誰が来ているのかというのが。

――まぁ、かくゆう私も気になるがね。

「なぁ二人共、君達の親は来ないのかい？」

「んー？　俺親は来ないけど、下手したらねーちゃんが来る」

「来ない」

ふむ、親は来ないのか、少し残念。

「おかーさーん」

という時に近くからそんな声。見ればモモが手を振っていた。――要するに母親に向かって手を振っているのだろう、と分かった。ふむ、ほわほわとした母君だね。随分似ているよ。

「お、あれがモモのお母さんかー」

「似てるな」

「大分ね」

私の親はとりあえず暑い、が理由で来ないのさ。来て欲しいとは思っていなかったから構わないのだけどね。

「親が来るのって嬉しいんかな」

「何だカイト、ウミさんが来てくれるのは嬉しくないのか」

「微妙だなぁ……ねーちゃん騒ぐからなぁ……」

「は、まぁ確――――」

……うん？　あれ……？　アサキが固まった、どうかしたのかい……？

「さて、授業授業」

「どうかしたのかいアサキ？」

「アーサキー？」

「授業」

くるり、と机の方に向いてしまった。何か後ろにあったのかもしれない、と思い見るも……特に無いが……？

「あ」

が、カイリは違った様だ。

「おいアサキ、あれ――」

「見えん、僕には何も見えん」

「だってお前あれ――」

「見えないったら見えな――」

「あ、居た居た、アーサちゃーん！」

呼び声が聞こえた。確実に、一人を呼ぶ。ははっ、普通こういう場で叫ばれたら生徒側が辱めを受ける、というパターンが多いのだがね。

さて、辱めを受けるのは――

「来たのはいいが手を振るな母さん……」

という訳で、アサキの母君な様だね。

初めて見るが――扱く綺麗な方だと思う。世辞を抜いても若くて由々しい方だ。まあ当のアサキは頭を抱えている訳だが。

「アサキ、綺麗な母君だね」

「五月蠅い違うわ」

「あからさまな嘘だな」

授業が始まっても、アサキは一向に動かなかった。そりゃもう普段の授業と同じくらい爆睡さ。普通親が来たらしゃんとするものだと思うのだが……。

ふふっ、アサキも母君には弱いのかな。

「何で来た訳」

「無理矢理空けて来ちゃった☆」

「母さーん！　俺の勇姿見てたー！？」

「うん、見てたぞ～！　ユウ君格好良かったね！！」

授業後にそんな会話をするヒコク一家を発見。カイリ、アスカと共に暖かい目で見守っていたことは内緒さ。

１０２＋夏と言えばな話題と言えば。

ユウヤですよ。ええユウヤです。
自宅に帰還しました。何をしていたかですって？　夕飯の買い出しですよ。アサ君と一緒に行こうと思ったけど行きませんでした、理由は此れです。

「――……」

――寝ちゃってる。
ソファで気持ち良さそうに寝ちゃってます。だから仕方ないので帰って来たら起きてるだろうと思ったのだが――未だ起きてないみたいですね。
まぁご飯以外で無理矢理起こすと機嫌悪くなるのでこのまま起こさないように――

――Ｐｒｒｒ
――バタバタバタ

「はいもしもし！？」

と思った最中電話ってどうですか！？

『もしもしこちら〇〇保険の――』

「うちは間に合ってます！！」

ガチャン！！

ふう、よし。保険なんか知りません、うちにはうちのやり方がある。

ゆっくりとした歩調でリビングに戻るともしかしたら起きちゃったかなー、と思えば起きてませんでした。

「ほっ。……何故俺が気にしないといけないのかアレな気分だけどまぁいいか」

仕方ない仕方ない、もし起こして気まずくなるのは俺だからね！

なんか淋しい！！

「さって、夕飯作ろっかな」

折角買ってきた訳で。袋をゆっくり下ろせばキッチンにゆっくりと――

――Ｐｒｒｒ

――行かせて下さい。

また電話だよ、慌ててまた電話に出れば、キレ気味に「もしもし！？」と言う。勿論音量は小さく。

『あ、もしもし、カトウですけど』

「カトウさんですか、どこのカトウさんですか、知りませんよカトウさんなんて、カトウさんって世界に何人居ると思ってるんですか、そりゃ一番はサトウさんですけどカトウさんだって負けじ劣らず多いでしょう頑張れカトウさん」

『……カトウリョウコですけど何馬鹿言ってるのよヒコクユウヤ！！』

あ、リョウちゃんだった。

「ごめんよリョウちゃん、今アサ君は寝てるのさ」

『なっ、別にヒコクアサキに用があるなんて言ってないわよ！！』

「じゃあ誰に用があるのさ」

『……ヒコクアサキ』

あってんじゃん。

「起こすー？」

『い、いや良いわ！　寝かせてあげていいから！！　聞くのアンタでいいから！！』

「分かったよ、しかしアンタでいいって悲しいぜリョウちゃん」

『悪かったわね』

そうですよね、本当に恋する乙女は周りが見えなくなるんですよね、分かります。

『い、いやね！？　本当は私じゃなくてモモが言い出したことなのよ！？　けどモモがどうしてもって言うから電話してるの！！　分かったわね！？』

「分かったよ、前置きはいいから本題何さ、早くしないとアサ君起きちゃってご飯出来てないとキレられるんだけど」

『随分自己中な弟ね』

そんな弟を好きになったのは何処のどなたですか。――なんて言いませんけどね、俺優しいから。

「で？」

『え？　ああ、そうだったわね。あのね、テスト終わった後の話なんだけど、皆で――夏祭りに行かない？』

「夏祭り？」

テストって単語に大分テンションが下がった俺だけど、夏祭りという単語には反応。祭り――嗚呼、そういえば商店街にそんな貼紙があったっけ。

「ふーん、そういえばあったね、そんなの」

『な、何よその反応。興味ないなら無理にとは言わないわよ……！？　でもアンタ達こういうの好きかなって――』

「大好きですけど何か？」

『……』

嫌いな訳ないじゃん、祭りもお祭り騒ぎも大好きだよ！！

「うん、行く行く、アサキにも伝えておくよ」

『ええ、頼むわ。……ねぇ、正直言ってヒコクアサキは来てくれると思う？』

「俺が連れて行くから安心しなさーい！」

そりゃ連れて行きますとも。リョウちゃんが一番来て欲しい人が来てくれないだなんて可哀相過ぎるでしょ。

元気にそう言ってやればリョウちゃんはまた頼むわ、と言って電話を切った。

さて、とりあえず美味しいご飯でも作ってから話を切り出そうかな。

１０３＋さて、今は何の時間。

七月ってやっぱり暑いなぁ。ユウヤです。
外は晴れている、梅雨もそろそろおさらばかなぁとか思ったりしているけどニュースを見る限りでは来週も雨ばかりだそうで。そういえば、何で梅雨ってウメにアメって書くのかな？　“ばいうぜんせん”って梅雨前線って書くことを最近知った俺としては疑問だよ。んー、いいや、帰ったらアサ君にでも聞いてみよう。分からないことを何時まで考えていても分からないものは分からないもの。

あ、そういやお祭りの再来週なのにまだアサ君に言ってないや。どうしよ、任せなさーいって言っちゃったのに断られたらどうしようかな……、まぁさせないけどさ！　いやはや、やっぱりどんな時でもお祭りは楽しみだよなー。タコ焼き、お好み焼き、わたあめに大判焼き、あとはフランクフルトとポテトフライも食べたいなー……食べてばっかだなー……。絶対莫大な金がかかる、父さんとマヒル兄に貰わなきゃな……、うちってリッチで良かったよ全く。折角のお祭りで満足するまで食べられないんじゃ行く意味ないもんね！
あ、アスカも行くかな、去年は行けなかったから今年は行けたら嬉しいんだけど。此れ終わったら誘ってみるか。

だけどまぁアレだよね、祭りは楽しいけど祭りに行く為には――

――このテストで其れなりな点取らねばだよなぁ……。

そうそう、滅茶苦茶周りが静かだと思いません？　そうです、今テスト中です。悪いか、悪いのは俺なのか、テスト始まって十分でやることがなくなってしまった俺が悪いのか！！

数学なんて無理に決まってるじゃん！！　馬鹿みたいに数学出来るアサ君やリョウちゃんとは違うんだよーだ！！　あの人達はおかしいんだよ、もう一人入れちゃえばユキちゃんもおかしいけど。基本八十前後なアスカを見習えよ皆様！！

『まぁ、平均を取っておくのが一番目立たない方法なんですよ』

アスカこの前そんなこと言ってたんだからな！　確実に取ろうと思えばまだいけますが？　的ニュアンスが含まれていた気がするけど気の所為だい！！

――キーンコーンカーンコーン……。

あ、チャイム鳴っちった。

「ユウヤ、テストはどうでしたか？」

「んー勿論駄目だわ」

アサ君より俺が祭りに行けるんだか……。

１０４＋今世紀最大の賭け。

「は？　行かないに決まってるでしょ？」

ですよねー。はい、ユウヤです。思い切って切り出してみました祭りの話。ひと言で一刀両断されたけど。

「え～？　良いでしょ良いでしょー？　アサ君去年も適当な理由つけて行かなかったじゃん！！」

「何が適当だ、唐突にゲームがやりたくなったという正当な理由があるだろう」

「その前は」

「今外に出たら確実に死んでしまう病」

「アサ君ってそういうところ適当だよね」

俺も適当だけど、もう少し其れらしい理由ないのかな。

「とにかく、僕は行かない」

「駄目、行くの。リョウちゃんにはもう行くって行っちゃった」

「今から取り消して来い」

「いーや、取り消さない。今回は何としても連れてくんだからね」

絶対連れてったる。アサキが何と言おうが引きずってでも連れてってやるぞー。

「来てくれるんだったら何だってするからさ！」

「じゃあ天に召されてみてよ」

「そんな軽いノリで出来ることじゃねぇよ、取り返しがつかねぇよ」

アサキがボケに回るとボケが強烈過ぎて大変だよ。何時も思う。

「じゃあ――駄目だ、これも破壊力に欠ける」

何考えてるんだこいつ。お兄ちゃんに頼むことじゃないこと考えてるだろ絶対。

「あ、じゃあ」

「何だい？」

「――数学のテストでお前が五十点い――」

「パス」

「……」

次。五十点なんて取れる訳ないだろ……！！

「ユウヤさ、祭りなんか行ってないで勉強すれば……？」

「言わないで下さい、自分でも分かってますから！！　第一ね、先に言ってくれればやりようがあったってもんよ！　終わったことは悔やめません！！」

「じゃあ此れならどう？　――明日のテスト、どれでもいいから七十点以上」

――終わってないのに終わってる条件来た。つい硬直してしまっていると、アサキがひとつため息をついたのが聞こえた。

「無理だろ？　――僕はお前にとってそんだけ勉強しなきゃいけないくらい、祭りなんざに行きたくないんだよ」

「……」

「もう、祭りなんて二度と――」

先を行ってしまうアサ君にどうボディーブローを考えている俺。でも何か裏があるその言い方に無理矢理なことは出来なくて。

しかしまぁ――本当に性格ネジ曲がってるなぁ弟は。何かもう――一人で居るのが義務、みたいな感じだよね。

――だから。

「――分かった！！！！」

――そんな性格、お兄ちゃんが治してやろうじゃないか。

大声で叫べば驚いた様子で振り向くアサキを見て、アサキがよくやるニヤリ、と言った笑みを見せてやった。

「明日のテストで七十、だね」

「……出来ると思ってんの？　明日、英語と国語だよ？」

「アサ君がいっつも言ってんじゃん、中学のテストなんて、一夜で充分って」

「……」

俺はアサキのお兄ちゃんなんだもん、血の繋がり上、あの天才的頭が俺にだってあるはず。

「て訳で、今日のご飯は作れないからね！　そんじゃ！！」

脱兎の如く走り出せば、俺は歩いてきた方向に走り出した。きっとアサキは唖然としてるんだろうなぁ……。

前回のテストは国語と英語双方四十点代。アサキはどっちも八十点代だったかな？　だけどアサキ以外にだって英語八十点代取ってる奴くらい居る。恐らく徹夜で付き合ってくれる、英語だけなら頭良い奴が居るんだから！

今からなら大分時間がある、絶対取ってやる、七十点を指定したことを後悔させたるわぁ！！！！

１０５＋さーさーのー葉ーさーらさらー。

「よーし、ここでいいかー？」

「おっけーだよマヒル兄ー！！」

自分の部屋からリビングに降りて来たら、其処には何故かマヒルが居ました、アサキです。何で居るんだ馬鹿兄貴。しかも庭に繋がる窓全開にして外出てるし……何してんのこいつ等。

「ねぇ……何してるの？」

「おうアサキ、ただいま」

「お帰り。――はいいから。何外出てるのさ、……って其れ……」

兄貴は外で何かを持って突っ立ってる。……嗚呼、そういえばそうか。

「さぁアサ君分かるかなー？」

「笹」

「正解！」

そりゃ分かりますよ、短冊までぶら下げてくれちゃってりゃあな……。僕は兄貴につられて庭に出て、何処から持って来たのかはあえて聞かない方向な笹を見た。――今日は七夕だったらしい。

「短冊なんて子どもじみたことを……」

「俺達は未だ子どもでしょーよ！　ほらほらっ、アサ君も書いて書いて！」

そう言って短冊を渡して来ました我が兄貴。別にないよ、願いなんて。

「……というか、短冊多くない？」

「学校で皆に書いて貰ったの吊したー」

何やらしてんだ馬鹿野郎。テスト終わって気が抜けたから皆書いてくれたんだろうな……。……どれ、暇潰しがてら皆の短冊を見てみるか。

『今年の夏休みの宿題が少なくありますように』

切実だな。

というか七夕に対して何とピンポイントな願い。

「それはカイト君だねー、裏に名前あるから」

「あいつは所詮、ただの馬鹿だったという訳か……」

「アサ君酷ぇ」

すぐ隣の短冊を見ると、『夏休み宿題教えて下さい』と書いてあった。確実に僕宛てじゃねぇか。短冊にした意味を問いたい、つか短冊じゃねぇよ、吊すなよ。

もういい、次。

『一家安泰、健康一番』

「誰だ、このジジ臭いこと書いたの誰だ……！？」

急いで裏返してみたら、案の定というかとにかくユキでした。

「流石ユキちゃんだよねー」

「流石過ぎる」

考えることすら大人腐りやがって。

次。

『願いが叶いますように。』

「その願いを書けカトウ」

あいつは何時の間にかボケに回ったんだ。

「願い書くのが恥ずかしかったんだってー、だから遠回しな感じで」

「織姫か彦星にテレキネシスがなかったら終わりだな」

次。

『卒業出来ますようにー』

義務教育で何を言う。

「あ、それはモモちゃんだね！　テストやばかったんだって」

「とりあえず明日義務教育について話してみる」

次。

『一攫千金』

此れアスカ君以外誰が居る。

『――は八割冗談で、有意義な学校生活を』

という訳で、二割本気なアスカ君の短冊でした。

――まだ数枚あるみたいだけど、僕の主要範囲の人のは見たから自分のを書きますか。

「で、アサ君何書くの？」

「まぁ、無難に――世界征服」

「全然無難じゃねぇぞ」

マヒルに笑われつつそのまま書いて、最後に『それか世界滅亡』と書き足しておいた。
苦笑いで僕の短冊を吊したマヒルと、それを侘しげに見ていたユウヤが印象的です。

僕の願いはともかく、皆の願いくらい、叶えばいいと思うよ。
なんてね。

１０６＋有言実行、無実行？

「先生、やはり二十八℃設定を守るべきです」

「いやぁ、無理だろう、俺は十八℃を貫く」

夏休み前ということで、授業をやる気がないサクライ先生と授業中にクーラーの温度設定についての討論を繰り広げていたら。

「アサキ聞けやコノヤロウ！！！！」

と、我が兄が教室に侵入してきた。もう一度言おう、――授業中だ。

バターンッ！　と盛大に扉を開けてくれたものだから、クラス中がそちらを着目してしまった。ついでに言えば寝ていたカイトとユキまで起きてしまった。

「アサキー！！」

「分かった、そんなに望むなら苦しまずに殺ってやろう……」

「ごめんなさい！　別に騒ぎに来た訳じゃないんでゆらりと立ち上がらないで下さい！！」

この展開に慣れっこになってしまったのか、其方を見たクラスの連中は無反応である。畜生。

「おいユウヤ、テメェは俺の授業を妨害するのが趣味なのか……？」

「ふお！？　アサ君を回避したらば先生が敵に！！」

対して授業をしていなかった癖に――口が裂けても言えない。

「そうじゃなくって！　此れ此れ！　此れ見なさい！！」

慌てた様子、というか自慢気な様子で一枚の紙をたたき付けて来た。……何其れ、え？　……英語のテスト――はぁ？

僕はパシン、とそれを奪い取ってみる。

「どうだちきしょー！！　俺だってやれば――」

「お前、カンニングしただろ、そうでもしなきゃ――お前が七十四点なんて有り得ない」

そうだった。ユウヤが持って来たのは数日前の英語のテスト用紙、しかも今まで見たこともない――平均点十以上も上を行くテスト用紙、だった。

「か、カンニングだなんて進学な！！」

「心外な」

ありきたりなボケをかますな。……いや、ありきたりでもないだろ。

「ちゃんと実力だよ！　テスト始める前にあやちゃんに言ってカンニングじゃないことを証明してるんだから！！」

「だったら何で――」

「俺様のお蔭様だぜ！！」

背後を見れば、何様俺様カイト様が居た。己を親指で指差す姿は――何とも憎たらしい。

「此の俺様が、ユウヤの前日に英語を全部叩き込ませたんだよ」

何してくれてんだよ。

「俺の此の点見たらあーや先生びっくりして笑顔になってたよ～」

「あいつは何時でも笑顔だろ」

サクライ先生のツッコミも入ったところで、一旦冷静になろう。

え、ユウヤが高得点を取った？

「――先ず、母さんに報告だな」

「だね。――じゃなくて！　アサ君言ったよね！？　約束は守って貰うから！」

「お前さ、弟との賭けの為だけにそんな勉強出来るなら始めからやれよ」

「無理だよ、無理。何か……ほら、本気にならないと」

なれと言いたい。

「と・に・か・く！　この点数分かったね！！　よーし、お祭りやっほーい！！」

「ちょ、おい！！」

ユウヤは其れだけで教室を後にした。残るのは僕の掻き消えた制止と、クラスの話し声。

「今回は、アサキの負けなんじゃないかい？」

其れに続く、ユキの声。

ユキを見れば、思った通り笑っていた訳で。

「約束は約束さ。たまには、付き合ってあげることも大事なのではないかな？」

諭す言い方で僕にそう言うユキは、何処か大人っぽく見えた。……いや、大人らし過ぎるが。

分かってるけど、嫌なものは嫌なのさ。――だけど――まぁ、致し方ない、か。

「――分かってるよ、そんなこと」

本当にまぁ、仕方ないよ、そんなの。

っていうか、ユキに話したっけ、此の話。

１０７＋暑い日は本当に暑いこととしか認識出来ない。

「ご注文はお決まりですか？」

「俺ドリンクバーのみ」

「そう、じゃあ俺も」

「じゃあそれドリンクバー三つにチーズケーキでお願いします」

「かしこまりました」

笑顔の素敵な店員さんが去った後、適当な飲み物を持ち込んで落ち着いた俺達。ちわっす、マヒルだ。

「あー、ファミレスって涼しいよなぁ……」

「そうねぇ……もう外になんて出たくないわよねぇ」

何だよ此の二人は。

セツとウミは机に俯せるようにしてファミレスの涼しさを満喫している。そりゃあ確かに外は暑いけど、其処までならなくとも。

ただ今俺達はレポート提出の為、大学にやってきた。だがその帰り、暑さに色々やられたので昼飯と元気を取り戻す為に今に到る。

「夏休みももうちょっとねー」

「あーだなー。高校ん時はどうなるかと思ってたけど、大学もどう

にかなりそうで良かったよ俺……」

「もう二年なのに今更ねぇセツ？　第一貴方、マヒルが居なかったらレポートなんてまともに出来ないじゃないの」

「お前だって人のこと言えないだろうがよー」

ストローでコーラを啜っていれば、二人はのんびりとそんな話題を話していた。別に俺は手伝ってるだけで、あとは自分等で出来てると思うんだけどな。

「でもそっかー、もう一年も経つんだよなー」

「そうねぇ……始めの初々しかったアサキ君が懐かしいわ……」

「え、そっち？」

そういえばウミは、俺と初めて会う前からアサキを知っていたんだよな。逆に俺はウミに会う前からカイト君を知っていた訳だが。不思議な縁だよな。

「うふふっ。でも、マヒルに最初苗字を聞いた時、珍しくても絶対アサキ君のお兄ちゃんじゃないと思ってたわよ？」

「まぁな、俺とアサキは似てねぇから」

探せば兄弟だから結構似てるところもあるけれど、見た目とか性格とか、全然似てないもんな。其処にユウヤも入れたら余計って感じ。

「そうだなぁ、確かに俺も双子な弟見た時は似てねぇと思ったけど、今はそうでもねぇな」

「あら、例えば？」

「色々ズバ抜けてるところとか」

嗚呼、それは断トツでユウヤがずば抜けている。そりゃもう色々断トツに。

「んなこと言ったらウミもセツも兄弟似てねぇだろうが」

ウミの場合姉弟だが補足は要らないだろう。

「何よ！　カイちゃんと私は激似よ！　可愛いじゃないカイちゃん！　私に似て！！」

「待てウミ、お前自分が可愛いと思ってんのか……！？」

「あらぁセツ、私の何処がブスだっていうのか・し・ら？」

「いたたたた！！！！　ウミ此処公共の場だから！　痛いです！！　はい女王様！！　女王様は可愛いです！！！！」

公共の場で何やらかしてるんだこいつ等は。何をして、されているのかはあえて言わないでおくことにする。

「――って、セツ貴方兄弟居たの？」

「あれ、言ってないっけ」

「初耳よ。貴方みたいなタイプは大抵一人っ子なパターンが高いのに珍しいわ」

「上に一人居るんだよ。……ほら、お前の弟とマヒルの弟'sが通ってるところの二組の先生」

「……あら、そうなの？　私サクライ先生しか把握してないわよ」

ちなみに俺もでした。この前少しお会いして見たが、セツの比でなく優しい人だった。弟'sは此のことを知ってるのか？　……つかアサキとユウヤの略され方が新しい。

「まぁ兄貴の話はどうでも良いだろ？　今は涼むのだよ」

「それもそーね、あ、ケーキが来たわ」

其処で頼んだケーキが来て、話題はかなり戻って懐かしむ話題に。

「ていうか私達、何で知り合ったんだったかしら」

「俺が覚えてる訳がない」

「んー、確か食堂と駐車場、それだけは覚えてるわ」

――食堂で俺が一人のんびりと飯を食っていた時に、たまたま隣に座ってたセツが金欠で瀕死だったところを俺が助け、話している間に大学の食堂だというのにも関わらずウミが殴り飛ばした男子生徒が俺達の場所に飛んで来て――という物凄い鮮明に覚えている記憶は、彼等の為を思って黙っていることにしよう。この後が酷いか

ら。

「マヒル覚えてるー？」

「いや全く」

「あらそう……。……ってよく考えればマヒル、貴方って私達と居る時口数少なくないかしら」

「あ、それ俺も思った」

そんなことない、と言おうと思ったのだが、よく考えれば否定が出来ない。確かに内心で色々考えたりするものの、特に口に出すことは少ないかもしれないからだ。

「もしかしてマヒル、私達と居ても楽しくない……？」

「な、何だって！？　そんなことないよな！　な！？」

血迷った質問だなー。嫌いだったら一緒に居ないだろうが。

しかし其れだって言わない、笑顔で笑えば其れだけで。確かに俺は、口数少ない方だけど。自宅ではそんなつもりないけど、外だとあまり喋らない方だ。

「んー、マヒル、本当に一緒に居ることが負担だったりする？」

「……」

「返答がない、うわぁどうしよう俺に悪いところが……」

「そうよセツ、悪いところを直しなさい」

「俺だけかよ」

あたふた、とまではいかないが慌て出した二人。今までポーカーフェイスを気取っていたが、つい――本当につい、俺は吹き出した。

「ふっ、あははははっ！！　バッカじゃねぇのお前等」

「「……」」

「別に、嫌いとか負担とかねぇよ。ただ、お前達のやり取りを見てるのが面白いだけ」

其れが正直な気持ちだ。元々喋る方じゃねぇんだから、聞いてる方が面白いことだってある。

「本当？」

「本当」

「でもマヒル、あまり笑わないんですもの」

内心で笑うタイプなんだよ、気にすんな。

「話さないでいられる方が楽だしな、喋んなきゃいけない時はしっかり喋ってるだろ？　だから無い頭で深く考えんなよ」

「「はい」」

主に無い頭ら辺のことについて頷いた様に感じるが、まぁ良いか。

「そろそろ帰ろうぜ」

数分しても俺達のやり取りは同じだけど、それを言い出したのは勿論俺。こいつ等は止まったりしないから。

「じゃあ会計俺持ちー」

「あらセツ、珍しいわね？」

「今日は金があんだよ」

年中金欠――というか財布すら持ち歩いていない――なセツだもんな。笑顔でレシートを取る姿も珍しい。

「じゃ、またな」

「ばいばーい」

セツの家は近いから歩きで帰るらしく、ひらりと振られた手にウミが返事をした。

「マヒルー？」

「嗚呼、おう、じゃなー」

いちいち挨拶を求めんな怠ぃ。

でも、そんなことにいちいち面倒なダチも、悪くはないと思った。

っていうか俺達、昼飯食いに来たのに食ってないな。

１０８＋夏休みはクーラー命。

「うにゃーん」

「そんな可愛くもない擬声を上げるな」

だって暇なんだものユウヤだよ、夏休みに入ったけど其れは其れで暇だよう。うむむー、クーラー様のおかげで部屋は涼しいけど、アサ君はゲームに夢中で遊んでくれないし。

「ユウ君アサちゃーん」

おお？　珍しく自宅に居る母さんが下から呼んでいる。楽しいことでも持って来てくれたかい？　――まぁ下から声が掛かっただけで来る気配はないので、俺が行く羽目になるんですね分かります。アサ君は動かないから。

「何ー？」

あっつい階段を下って涼しいリビングにやって来ました。やべぇやっぱりクーラー涼しい。

「ラブレターだよん」

「ラブレター？」

可愛いらしい手紙を渡してきた母上。確かにシールはハートだけど、誰からですか。

「……あ、ユウリだ」

受け取ってみればあら不思議。遠い従姉の名前が其処にはありました。

「アサちゃんとユウ君宛てだから渡しておくわね」

「はーい」

俺は刹那に二階にバックするけど、アサ君は無反応でした。

「ユウリから手紙だって」

「ふーん」

興味ねぇなおい。

分かってたことだけどさ！　仕方ないので独りで読みます、くすん。

あ、やべ、破いた、……いっか。

『親愛なる　我が従兄弟殿達へ』

マヒル兄に渡してやろうかと思った始まりだった。

『やっほー、元気？　あたしはすっげー元気だぞ！　そっちは暑いだろー？　勿論こっちも暑いが、お前等はクーラーガンガンにしてるんだろうからいいよなぁ、あたしん家はリビングにしかないんだからな！　心して使いやがれよアサキ！！』

一枚目はアサ君一人にダイレクトアタック文で終わった。二枚目。

――行こうと思ったけど字が多いよう。

「アサ君」

「ん」

「パス」

「手紙くらい自分で読めよ阿呆」

だって字が多いんだもん。アサ君はうだうだ言いながらも読んでくれました。

「≪――いや、そんなことはさておき。用件に行くよ。八月の最初の日曜日から、弟と一緒にそっちに行こうと思うんだ。お前等ん家伯母さんと伯父さん滅多居ないだろ？　そんな中厚かましいだろうけど、夏休みの間泊まりに行ってもいいか？　実はお母さんとお父

さんがよく分からないけど旅行に行くらしいんだよな、あたし等置いて。だから腹いせにお前等に会いに行ってやろうかと思ってさ。手紙が届いたら電話でもくれよ、合否もそれで伝えて欲しいな。そういうことで宜しくー。》――という訳だそうで』

要するに、ユウリとオトワがこっちに夏休みの間に来るって訳らしいです。おお、そりゃ楽しみだ。

「とりあえず母さんに言っとけよ」

「言わなくても結果が分かり切ってるよ」

「一応だ」

アサ君はゲームに戻ってしまったので、再び下界へバック。母さんに言えば「是非……！！」とキラキラした目で言われてしまった。どっちが子供なんだよって感じだけどそれがうちのマミー。

「ユウリちゃんとオト君が来るのは初めてだから、駅まで迎えに行ってあげなさいね？」

「うん、分かってるよー」

母さんが今からうきうきする意味も分からないけど電話電話。ユウリ達の自宅に電話をする為に三度二階にバックすれば涼しいクーラーな自分達の部屋で電話する、手紙で注意されたけど知るものか！！

電話先の音は、ワンコールで一度途切れた。

『はい、クガですけどもっ！！』

「あ、ハザラさーん？　ユウヤだけどユウリ居るー？」

『わうわ！　わうわうユウヤくーん！！　お久しぶりだねっ！　ユウかい？　んー、今出てるんだよねぇ……オトなら居るよ！！』

「じゃあオトワに代わってー」

相変わらずなハイテンション、父さんの妹には思えないハザラさんだった。叔母さんって歳にも見えないから、ハザラさんって呼んでるけども。電話越しに『おっとー！　ユウヤ君から電話ー！！』と大きな声が聞こえた訳だしね！！

『――……』

――あれ、代わった……？

「……」

『……ユウヤお兄？』

あ、代わってた。

「オト気配が欲しい」

『無理難題』

おい小学生。

『で、何……？』

「あ、うん。ユウリから手紙届いたんだよ」

『……嗚呼。そっち、行ってもいい？』

「うん、かむおーん！」

『そこはカモンでいいじゃん』

……小学生に駄目だし喰らった。

「多分マヒル兄も帰って来るだろうから寝る部屋とかは俺達と同じになるかもだけど良いかな？」

『良いと思う。前日辺り、お姉にまた電話させるよ』

「うん分かった」

あのハザラさんから生まれた気配が毛ほどもないオトはそう言って電話を切った。すっげぇまともな小学生。

でも、ちょっと来週から楽しくなる予感。

「宿題」

「雰囲気ぶち壊しだー！！」

忘れてたのに！！　アサキの馬鹿！！

１０９＋様々な在り方。

こんばんは、モモです、再びなお久しぶりです。久しぶりな登場なモモちゃんは、お家でのんびりとテレビを見ています。

「うふふー」

このテレビ面白ーい。

「姉ちゃん、ホラー映画を笑って見るのやめようぜ」

弟に引かれてしまいました。
そんなこんなで私は今、愛しの弟と共にホラー映画を見ています。

「えー、だって面白いよー？　あ、ほら此処なんて、此の這いずり回ってるのが面白くなあい？」

「なあい？　じゃねーよ、全然だよ、這いずり回ってるの血塗れの女の人なの姉ちゃん分かってる？」

うちの弟はアサキ君並のキレのあるツッコミなんです、凄いでしょ。今度アサキ君達に会わせてみようかな。
――と、のうのうと会話をしている訳ですが。

「ねぇユズ君」

「あん？」

「お行儀悪い返事。……天気、悪いね～」

「だなぁ」

――外は嵐です。

こんばんはこんばんはりりりりリョウコです。めっずらしく七月中に宿題やる気になったのに外が豪雨なんですけど！　べ、別に慌ててはないけどさっ！　慌て過ぎて二回挨拶しちゃった訳じゃないんだから！！

「うー、雷鳴らないよねー……」

「鳴らないよ」

「何でアンタに分かるのよ」

「神だから」

ちなみに今の人類最強宣言をしたのはうちの妹です。　意味分からないわよもうーうちの妹よく分からないわよーモモの家のユズ君くらい良い子なら良かったのにー。

「無理、私はユズにはなれない。私は私、私なの」

「読心術を使わないでよ！　第一アンタはユズ君が好――」

「言ってはいけない、お姉ちゃん、人には言ってはいけないことがあるのよ」

何よこの不思議系妹ー。ユズ君が好きってのは知ってるのに何なのよ……。ていうか小学生がませ過ぎだわ！

「お姉ちゃん」

「何よ」

「遠い空から雷の音が聞こえる……」

「いやぁあああああ！！！！」

アスカです。ふふっ、空が鳴り響いているようですが、俺には特に関係ありませんね。

「所詮自然現象です」

しかしまぁ、一人っ子の俺は話す相手が居なくてつまりませんね。両親が仕事じゃあ致し方ないのですが。

こんな空じゃあアレですね、リョウコさんやアサキ君が自宅で大変そう……。――是非また見たいです。

こんばんは、かな。ユキだ。今私はアサキとユウヤの自宅にお邪魔しているのさ。カイリも共に居るのだが――帰れそうにない天気さ。

「ユキちゃんもカイト君も泊まっていきなよ～！」

「おや、いいのかい？」

「いんじゃね？　俺しょっちゅう泊まってるぜ」

カイリは節度がないのだろうな。

「夕飯も今日はマヒル兄が作るしね！　マヒル兄のご飯美味しいんだよー？」

「そうそう！　マヒルさんの飯はやばい美味いんだぜ～！」

ユウヤが食べたことがあるのはまぁいいとして、カイリはどれだけ此方にお邪魔しているのかが気になるところだ。マヒルさんは夏休みだからということで帰って来ているらしい、ふむ、少し夕食が楽しみだね。――というか、先程からアサキが見当たらないのだが……？

「ユウヤ、アサキはどうしたんだい？」

「アサ君？　アサ君が雷の日に素直に此処に居る訳ないじゃない」

「……」

「今頃マヒル兄とキッチンじゃないの？」

「……アサキ、お前」

「五月蝿い五月蝿い馬鹿兄貴五月蝿い」

「いや、未だ何も言ってな――」

「二階に居たら音が響くんだ畜生」

「（ある意味素直だなー……）」

雨だなぁ、とリビングでのんびりしていただけなのに。

「しーろー、ただいまー」

「え？　珍しいね、お帰りなさ――ちょ、セツ貴方びっしょりじゃないですか」

「だって徒歩ってる最中に雨が」

「マヒル君にでも送ってもらえば良かったのに……」

「だーかーらー！　途中で降ってきたんだよー！！」

「はいはい分かりましたから……とりあえずタオル持って来るね、風呂沸かす？」

「勿論」

雷雨の中自宅に帰って来る自殺未遂の弟が帰宅。そんな弟を持った気持ちが分かりますか。……まぁ、可愛くない訳じゃないんですけど。

「飯！」

「セツ、貴方他宅でお世話になってるときもそんなじゃないでしょうね」

「え？　そうだけど……」

「（今度、マヒル君に謝りに行こう）」

「よっしオトワ！　準備は出来たかー？」

「出来てるよ、持ってくもの特にないし」

「じゃあアレだな、お前が準備するのは健康な体だ！」

「……お姉には何時でも備わってるね」

「あたしが馬鹿だと言いたいのかお前は！！」

オトワです。……明後日のことなのに、お姉が五月蝿い。

「都会は楽しみだな～」

「別に、楽しいもんじゃないと思うけど……」

「まーまー♪　宿題も持ってってあっちでやるんだからな？　オトワのはちゃんとあたしが鞄に入れたし！」

何時入れたの。

「今日はもう寝るだけだな、よーっし、じゃあお休み！」

「……うん」

元気なお姉だ。俺には無いよそんなの……。だからお姉なんだけど。

色んな兄弟の在り方。

１１０＋きっと都会は魔物。

「ねーアサ君」

「何」

「来ないねー」

「ね」

アサキです、駅って微妙に暑苦しい。否、クソ暑い。

僕と、何時もは元気だけど今日は暑さにやられてるユウヤは家に一番近い駅前に立っています。何故立ってるかって？　いや、お迎えってやつです。

『わっるいアサキ！　今日寝過ごしたから明日行くわ！！』

『去ね』

昨日の昼、昨日来るはずだったユウリからそんな電話が掛かってきた。寝過ごしたらしい。とりあえず、オトワが何故起こさなかったのかが聞きたいが、とりあえず中学生なのに一人で起きれないユウリを一喝した。

指定席とかがある新幹線だったらどうするつもりだったんだ、公共の電車だからいいものを――。

と、昨日はさておき。
今日の正午に着くといった話を聞いて来たのだが、時刻は既に午後一時を過ぎていた。

「遅いねー、事故かなー？」

「ユウリめ、僕を溶かすのが目的だな？　僕という固有体を炎天下の元に置くことで脳天からじわじわと――」

「駄目だ此れ会話出来ないみたいだ」

くつくつと怪しい笑みを浮かべる僕（※後日ユウヤ談）がぶっ倒れそうな勢いの中、

「ユウヤー！　アサキー！」

――そいつ等はやっと現れた。そう、そいつ等とは――

「あ、ユウ――」

「――やったあああやっと会えたあああああ！！！！！　ＪＲ怖いよおおおお！！！！！　何で！？　何であんなに駅に人居るの！？　改札怖いし！　あたしん時だけ開かねぇんだぜ！？　マジ怖えええええ！！！！！」

――カルチャーショックに悩む田舎に住む人だった。

「改札が開かなかったのは、ユウリお姉が切符入れなかったからでしょ」

――それとオトワだった。

「ま、まぁユウリ落ち着きなよ」

「何をどう落ち着けって!?　何さあの山手線的なの!!」

山手線だよ。

「一日に何本電車が来るのさ!!　つーかぎゅーぎゅー詰めだっつーの!!　あたしは何か!?　何かの詰め放題に巻き込まれたのか!?」

巻き込まれてねぇよ。

でもまあ言ってみれば、人間掴み取りに巻き込まれたんじゃねぇの。

と、暫くして落ち着いたユウリとオトワを連れ、近くの駐車場で待機していたマヒルのところへ。

「お前等、兄ちゃんを置いて一時間何してたんだ」

寂しそうだったけど気にせずクーラーに当たる僕。僕だって暑いんだよ、マヒルだけじゃないんだぞ、色々不満なのは。

「マヒル兄、あたし都会が怖いよ」

「早ぇよ、夏休み中居るんじゃなかったのか？」

助手席に座ったユウリが珍しく弱気だ。オトワは普段通り表情が読めないが楽しそうだな。

「表情が読めないのに楽しそうなの分かるんだねアサ君」

僕に類似するものがあるからな。

「でもユウリー、こっち来たら沢山色んなとこ連れてけって言ってたけど……それはどうすんの？」

「一週間くらい自宅待機してからの話だ」

自宅じゃないだろ。まぁツッコむのも面倒だからとりあえず家に着いてからにしようと思う。

「じゃあユウリ、荷物少ない理由は？」

ユウヤは次から次へと質問を投げ掛けている。飽きないな。しかし基本そんなことは愚問、とでも言いたいのかくるりと振り返ったユウリは、

「アンタのがあるじゃん」

と笑顔で言っていた。

ユウヤもユウヤで「あーそっか」とか言ってたが、……良いのか其れは。僕は知らないぞ。ちなみに今日はユウヤの私服は普通です、普通なんだから！

「アサキ、兄ちゃんはツッコむべきなのか」

「いや、スルーで」

マヒルも同じ感じらしいがそう言ったら大きくため息をついて運転に戻った。……こいつ等相手は苦労しそうだ……。

今年はどんな夏休みになるんやら。

111＋快適な夏休みを過ごす為には。

「マヒルお兄、アサキお兄、ちょっと良い？」

「んぁ？」

「……」

アサキです。自宅です。クーラーって涼し過ぎです。従姉弟であるユウリとオトワがうちに来てから数日が経つけど、ユウリはユウヤと何処かに出掛けてます。正確にはユウリに振り回されて、ユウヤが連れ回されている状況だけども。

リビングでとにかく涼んでいる僕と兄貴の元に、オトワが参上した。何やら冊子を片手に。ちなみに柄の悪い返事をした方がマヒルです。

「宿題が分からないの」

「……偉いなぁ、もう宿題やってんのか？　姉ちゃん面目丸潰れだな」

まぁ姉ちゃんは遊び行っちゃってるからな。

「先にやって後でのんびりした方が楽しいって、お母さん言ってたから」

「お、ハザラさんって結構まともなことを言うんだな」

「兄貴、ハザラさんはアレでも父さんの妹だよ」

「ああ、そっか」

それで納得されるハザラさん。頭の中でもハザラさんは今も騒いでるけど、……まぁ掻き消そう。

「小学生の問題かー、俺十年近く前なんだけど分っかるかな」

「分からなかったら幻滅するよ……」

「酷いなおい」

マヒルは楽しそうにオトワの宿題らしきノートに向かっていった。僕はとりあえずそのままぐだぐだします。

「アサキー」

――はっ、寝てた。涼しいの眠くなる……！！

と、内心で騒いでみれば呼ばれていることを思い出して起き上がる。

「今寝てたか？」

「寝てないし、マジ寝てないし」

マヒルに苦笑された。ソファで寝転がってたら眠くなるだろうが。

「此れ、何だったっけか？」

どうやらまだオトワの宿題を見てやっているらしい。……うわぁ、懐かしいなこれ……未だ数学が算数と呼ばれている時代の話だし。

「こんな、だよ」

「……おお」

「さっすがアサキ」

何がさっすが、だ。小学生レベル解けないでどうすんだよ。つか僕は三年前までやってた勉強だっての。

「でも……マヒルお兄もアサキお兄も頭良いのに、何でユウヤお兄みたいなのが居るんだろう」

「「あれは神秘」」

僕だって知りたいよ、あの馬鹿野郎。

「突然変異か、若しくはなるようになった結果か」

「ん、そっか」

オトワは宿題が終わったらしく、ありがと、とひと言告げて部屋（※僕等の部屋だけども）に戻ってしまった。クーラー付いてない部屋に帰るだなんて勇者だなおい。

「今日夕飯何がいい？」

「冷麺」

「シンプルだな」

シンプルが良いよ、暑い日は。

「アサキ、お前の宿題は？」

「宿題？　終わってるけど」

「……」

早く終わらせてから遊ぶって訳さ。僕は言われなくたってやっちゃうんだよ、あの馬鹿共と違ってな。

112＋可愛子ちゃんと対面。

「あ！　ほらユウヤ！　あっち行くぞ！」

「え、うん、ってちょっと待ってよー！！」

こんにちはユウヤです。今日は、……いえ、今日も！　俺はユウリに振り回されています。昨日はショッピング、一昨日は無意味に俺達の学校、その前は何処に行ったっけなぁ……。

ちなみに今日はデパートに来てるんだよね、でもただただ振り回されてる感じだよ。此の俺が珍しい。

車で来た訳だからマヒル兄、其れにたまにはってアサ君とオトワも連れて来たんだけど、

「僕等、此処で待ってるから」

とか何とか言い腐ってからに居ません。あの薄情な弟ー、フードコーナーでたむろうって何歳だよ！！

――どうせ十四歳です、とか普通に言ってくるんだろうな……まぁ良いや。

「あら？　ヒコクユウヤじゃない」

――と、内心愚痴てれば聞こえてきたのは聞きなれた呼び方。振

り返えらなくても誰だか分かるねー。

「あ、リョウちゃんじゃん」

「私で悪かったわね」

うん、だと思った。リョウちゃんは何時もな態度でフイッ、とそっぽを向いてしまった。うん、アサ君連れてきちゃおうかな。

「ユーウーヤー！　――あり、何其の子？」

何処かに旅立っていたユウリも帰って来て、早速リョウちゃんに目を付けた。うわー、リョウちゃん超怪訝そう。

「何何ー？　この可愛い子ちゃんユウヤの知り合い？」

「か、か、可愛い子ちゃん！？」

ケロリ、と言うユウリ、真っ赤になるリョウちゃん。

ユウリは可愛い子大好きだからなー、モモちゃんとかに会わせたらどんな反応すんだろ。

「うん、学校の友達」

「へぇ、ユウヤ、アンタ彼女作るならこの子くらい可愛くないとあたし許さないからね」

お前に何の権限があるんだユウリ。

「わ、私可愛くなんてないわよ！」

「えー、超可愛いし！　アサキとユウヤの次くらいに可愛い！！」

「男に負けた！？」

「女の子に勝っちゃった！！」

流石の俺もちょっと複雑！

「まぁあたしの可愛子ちゃんランキングの一位はダントツでオトワなんだけどな！！」

「結局男じゃん」

ブラコンじゃん。

「……で、あなたは誰なのかしら……」

家族で出掛けている最中らしいリョウちゃんが落ち着いて、ユウリについて改めて質問してきた。遅いけど。

「あたし？　あたしはユウヤの彼女です」

「え！？」

「リョウちゃん、嘘だから」

「冗談です」

「紛らわしいわよ！！」

「本当はアサキの彼女でした」

「な、何ですって！？　本当なの！？」

「リョウちゃん、此れも嘘だから」

「事実です」

「紛らわし――え、やっぱり本当なの！？」

「冗談です」

うわー、完璧ユウリペースだ。でもアサ君の彼女って部分のリョウちゃんの反応が半端ねぇよ。

「うふふへへ可愛い子虐めるの楽しい」

従姉の妖しい癖を知った瞬間だった。

「じゃあオトワも虐めてるの？」

「え？　オトワ虐めたら泣いちゃうじゃん、……あ、泣いたオトワを慰めるのも良いなぁ……」

改めて変質者だこの人。

「てかアレなんだよ、オトワは泣かないよ、虐めても反応ねぇんだよ」

「ああ……何か分かる」

オトワだもんね……。寧ろ虐め返してきそうだよね。

「――で！！　本当のところ、あなたは何なの！？」

あ、リョウちゃん忘れてた。

このままじゃ話が進まないので、俺は簡潔に説明を入れた。

「――へぇ、従姉の子だったの」

「おう！　あたしクガユウリ！　夏休み中はユウヤん家居るから宜しくなー？」

「ええ、宜しくね。私はカトウリョウコ」

リョウちゃんは大人の対応みたく笑顔で言った。ユウリはにっこにこ、さっきまでのやりとりが嘘のように二人は笑っているよ。……微笑ましい限りだ。

「リョウコか！　じゃあー、リョウでいいな、あたしのこともユウリで構わないからな？」

「え、ええ、分かったわ」

そんな感じの会話の後、リョウちゃんは家族の元に戻っていったらしい。俺達も戻ろー。

「んー、リョウ、か……」

「リョウちゃんがどうかしたの？」

「――可愛い」

「もう何でも良いや。あ、今度お祭りあるんだけどリョウちゃん達も来るよ」

「行く！　あたしも行かせろ！」

「あーい」

ははっ、どうなんだろ。

113＋その隙間から覗くもの。

ちはっ、カイリッス！
夏休みが八月に入っちまったがまだまだ真っ盛り！　だけど暇過ぎて暇過ぎて死にそうだぜ！！
という訳でアサキの家に遊びに来ちゃいました☆

「ぴーんぽーん！」

勝手に入っても平気なんだろうが、とりあえずインターホンをプッシュ。ふっ、自分の声の方がでけぇ。
久しぶりだなー、実に二週間振りだろう、アサキの奴どうしてるっかなー、どうせ涼しいクーラーの部屋でゲームとかしてるんだろうなぁ。
夏休み終わる頃には宿題写させてもらわなくては！　――まぁ、写させてくれるよう頼むのも至難の技なんだけど。ユウヤも同じだろうから一緒に頼もう！　どうせ終わらせてるんだしな、アサキは。
それにしても、遅くないか？　俺はるんるん気分の頭でそう考えれば、塀越しに扉を覗き見た。

「……？」

「……」

――バタン。

――何か居た。
え？　閉められた？　つか、何かが隙間からこちらを……
キィ――
あ、開いた。
「あ、あのー……」
「……どなたですか」
こっちが聞きてぇ。
相変わらず隙間からこちらを見る陰険雰囲気抜群の何か、基誰か。
数歩バックして表札を見るが、間違ってはいない。……え、誰？
つか怖ッ！！
「えと、アサキ、居ます……？」
つい敬語な俺。だって怖いんだもん！！
「……アサキお兄の、お友達……？」
「あ、うん、そうそう！　アサキとユウヤのお友達！」
少しだけ広く扉が開いて、俺の恐怖の対象が何なのかが分かった。
何だ、小学生か。親戚か何かか？
「……今、出掛けてる」

「あ、そうなんだ」

「……」

「……」

「……」

「……」

なーんだ、小学生かー。小学生……小が――駄目だ間が続かねぇ！！

小学生相手に何たることを！　このカイリ様が小学生相手に屈するのか！？

「あの」

「はい」

屈します、怖い。

「中で、待ちますか……？」

「あ、はい」

リビングに通されること早十分。

「……」

「……」

「……」

「……」

――会話が。

最初にどうぞ、と麦茶を出されてからというもの、同室に居るのに会話がないぜ！　何だ此れ、何か雰囲気が最初の頃のアサキなんだけど此の子。どう接すればいいか分かんないぜ！

最初の頃のアサキかー、……じゃあ、何だかんだでもしかして会話続くかな……。

「ね、君君」

「……俺、ですか」

「おう、君だ」

「俺は君じゃなくて、オトワです」

「オトワ、か。俺カイリ、宜しくな！　お前って、アサキ達の親戚か何かか？」

「じゃなかったら此処に居ません。アサキお兄達はお母さんのお兄さんの息子にあたります」

母の兄の息子……？　うん？　どの位置にあたるんだ？　分かりにくいぞ？

「結局は従弟です」

ああ、何だ。

「四親等です」

何其れ。

「まぁ良いや、んで、アサキ何処行ったんだ？」

「“自分捜しという名の本屋とゲーム屋に旅立つ”とか言ってました。多分もう帰ってきます」

「あいつ最近頭大丈夫か？」

俺に言われたらおしまいな気がするぞおい。……自分で言うのも寂しい！

「頭は正常ですよ、ただ怠いだけかと」

「確かに。じゃあ他は？」

「ユウヤお兄はうちのお姉に連れ回されていて、マヒルお兄は買い物です」

マヒルさん家庭的ー。

「まぁいっか。とりあえず暇だな」

暫くしてもアサキが帰って来ない。何だかんだでオトワと会話をする俺だが、やはり暇は暇だ。

「じゃあゲームでもしましょう」

「え？　オトワってゲームとかやる派なのか？」

「失礼な。この家での娯楽なんてゲームと読書くらいですよ」

それは失礼であった方がいいくらいだ、と言いたかったが俺は黙っておいた。

「じゃあやるか、今は家主がオトワだからな！」

「十歳の家主だなんて稀少ですね」

結局のところ、此の年下の小学生は、俺の親友にすっかり似ている素直な子だ、ってことでまとまった。俺の中だけだけどな。

「……何してる訳？」

「あーアサキお帰り！　今良いとこだから話しかけんな！」

「お帰りなさいアサキお兄」

「うわぁ、それ僕がまだクリアしてないゲームだよ、なのにやってるよ殺していい？　ねぇ僕のデータに上書きしたら殺すからね？」

袋だらけで帰って来たアサキに色々言われたのはまた後の話。

114＋身近で気付かないこと。

ピンポーン。
インターフォンが鳴りましたユウヤです。朝早い時間に珍しいな、とか思って時計を見れば未だ九時だった。
未だ俺とマヒル兄以外起きてないんだけど。

「悪ィユウヤ、出ろ」

「そこ普通“出て”でしょ」

とりあえず玄関の扉を開けに行く。こんな時間にどちらさまー？

「おっはよーさん！」

「おはよーユウヤ君、朝早くにごめんなさいねぇ？」

見知った顔が二人程。金髪の人と茶髪の人、即ちせっちーとウミさんだった。え、説明が雑？　五月蝿いなぁ、眠いんだよ。

「マヒル兄に用事？」

「まぁ、そうだな、つか届け物」

「ふーん……あ、入ってどーぞ」

面倒なので中入れちゃおう。
リビングに舞い戻れば、先程から朝ご飯を作るマヒル兄に「誰だ

ったよ？」と聞かれたけど、俺が返事をする暇もなく「やっほーマヒルー！」とセツさんが五月蝿く喚いた。……今、朝なんだけど。

「……チェンジで」

「チェンジ！？　何チェンジすんの！？」

「五月蝿ぇよド阿呆。静かにしろ、未だ寝てんのが三人居んだよ」

マヒル兄の冷めた言葉はさておき、まぁアサキの睡眠の妨げになったら殺されるよ、せっちー。

「三人？　あら、お母様達帰って来ていらっしゃるの？」

「違う違う、親戚が来てんだ」

ウミさんは相変わらずマイペースに、あらまぁ、とだけ漏らした。……結局この人達何しに来たのかな？

マヒル兄も其れが気になったのか、キッチンから尋ねれば、せっちーが何かニヤニヤしていた。

「お前、昨日が何の日だか忘れたかー？」

「昨日？　……何かあったか？」

「あらやだマヒルったら、忘れてるの？　ユウヤ君なら分かるわよねー？」

「……」

――あれ、何の話？

「昨日……何日だったか……八日か」

「八月八日！　ほら、分かっただろ？」

相変わらず俺は分からなかったけど、マヒル兄は小さくあ、と言葉を漏らしたから気付いたみたいだ。

「――新巻発売日だ」

「「違うわ」」

違うことに気付いたみたいだ。

「あー！　もう！　何忘れてんだよこのおっちょこちょこちょこちょい！」

「ちょこ多い」

「日本語って読みにくいねー」

「おい黙れヒコク兄弟」

マヒル兄と「ねー」と言ってたらせっちーがドスの利いた声を出した。そんな声も出せるのね。

「分かった分かった、思い出してるよ」

ひとつため息をつけば、マヒル兄はそう言ってリビングにやって来る。あれだろ？　と前置きを置けば、カレンダーの八日を指差して、

「俺の誕生日、だろ」

と首を傾げた。

――え？

「「正解！！」」

「え、嘘、マヒル兄って誕生日昨日――うわ忘れていた！！！！」

実の弟が兄の誕生日を忘れるなんて！　何てこったい！！

「せっかく誕生日プレゼントを持って来てあげたのよ～？　なのに忘れてるってあなた……」

「悪い、無頓着だった」

マヒル兄の誕生日って夏休み中だから、つい忘れちゃうんだよ。きっとアサ君も忘れてるさ……！！

とか自己嫌悪に陥りつつ考えてたら、二階から階段を下る音がした。アサ君起きたかな？

「あ、おはよアサキ」

「……」

基本アサ君から朝の挨拶が返って来ることは無いけどね。

「ね、ね、アサ君、昨日が何の日だか知ってる？」

「……？」

アサ君は言葉は発しなかったものの、カレンダーを見遣ったので聞いてはくれてはいるようだ。ウミさんが「寝起きのアサキ君も可愛いわ～」とか言ってるけど気にしない。

暫く突っ立ってるからやっぱり分からないじゃーん、とうはうはしていたら、

「――誕生日？」

――と解答返って来ちゃいました！！

「あれ、アサキ覚えてたんだな」

マヒル兄も素っ頓狂に言う。そりゃあ一番無頓着そうなのが覚えてたもんねぇ。

「昨日から覚えてたよ、」

「じゃあ言ってよ！　忘れてたよ！！」

「忘れるなよ」

ご尤も。

その後、一時間くらい家に居座ったせっちーとウミさん。本当にプレゼント置いて帰っていった。

「何くれたのー？」

「どうせろくなもんじゃねぇから後で見るわ」

どうでも良さそうに言うマヒル兄だけど、微妙に表情が笑ってるから嬉しかったんだろうなぁ。朝飯出来たぞ、と思い出したように言ったマヒル兄がその証拠で、今日辺り何か買いに行こうとか思った俺でした。

115＋ばーさす夏祭り。

何か変じゃないわよね……。私は鏡を前にくるくると見なりを確認する、リョウコです。ほ、本当に変じゃないわよね……！？

「お姉ちゃん……」

「な、何よ！　ねぇコトナ、変じゃないわよね！？」

「安心して、変なのはお姉ちゃんの頭よ――」

「安心出来ないわよ！！」

相変わらずな妹ね……。し、仕方ないじゃない！　変じゃないかって不安なのよ！　そりゃあ鏡の前で浴衣着て二時間も居れば変かもしれないけどさ！！

「そろそろ時間なんじゃないのかしら、モモちゃんと待ち合わせているのでしょう？」

「そ、そうだけど……」

「大丈夫よお姉ちゃん、世界にはこういう言葉があるわ」

我が妹は私の肩に手を置いて、普段通り笑顔のない無表情でこう言った。

「“馬子にも衣装”――って」

「アンタ喧嘩売ってるのね！？　買ったわその喧嘩！！」

この馬鹿妹が！　時間があったら殴り飛ばしてやるところだったわ！！

「あとで覚えてらっしゃい！」

「お姉ちゃんは知らないのかしら、私の記憶力はお姉ちゃんの約五分の一……」

「黙らっしゃい！　勉強しろ！」

「いってらっしゃい、死体さん」

「死体！？　ちょ、待ちなさいよお姉ちゃんになんてことを――」

「あらお姉ちゃん、気付いてないのかしら――浴衣の着方、逆よ」

「……」

――先に言いなさいよ馬鹿ぁ！！！！

「リョウちゃん達遅いねー」

ユウヤです。皆の待ち合わせの場所にやってきて早十分。待ち合わせ時間は五分程過ぎてるんだけど、リョウちゃんとモモちゃんが未だ来ない。

「何だ何だユウヤ、リョウちゃんっていうのはリョウのことか？」

「うん、勿論」

今日は待ちに待った祭りの日。夜だからこそ楽しい祭りだからそれらしい時間に待ち合わせをしたのに、肝心の言い出しっぺがまだ来てないんだよなー。相変わらずユウリは五月蝿いし。

「なぁアサキ、あの子ってユウリちゃんなんだよな？」

「うん、何でよ」

「大分前会った時と、雰囲気違くない？」

「……嗚呼、あれとは別物と考えて、初めましてでやりとりしていいよ」

後ろで嫌々来させられたアサ君と、ユウリを見て首を傾げるカイト君の会話が聞こえてきた。……あの時のユウリは俺だからなー。適当にアサ君に任せよう。

その横にはオトワも居る、何だあれ、背後霊みたい、怖いなあれ。

「あ、来たじゃないか！　おーい、リョーウー！！」

お、来たみたいだね。見慣れた二人組がこちらに向かってくる。

「ご、ごめんなさい、準備に時間が……」

「ごめんね～」

申し訳なさそうなリョウちゃんにニコニコなモモちゃん。格好は二人共何時もと違っていて、――何だか可愛さ三割増しだね！

「うわぁ、浴衣着てきたんだね！」

「わ、悪い！？」

「リョウちゃん、誰もそんなこと言ってないよ……」

リョウちゃん真っ赤だー。きっとアサ君に見せたくて着てきたんだろうけど――

「アサキ、浴衣って着たことある？」

「無い、祭りにもあまり来ない」

見てないっていう。残酷だぜ、我が弟。

「きゃー！　可愛い！　何なのさリョウ！　それに此方の、ベリーキュートな子誰!?　あたしに紹介なさい!!」

そしてこっちのあまり見てなくていい奴が見てたりする。ユウリはマッハにテンションが上がってリョウちゃんとモモちゃんに食いついてるよ。

「え、あ、ユウリ」

「ようあたしだ！　というかリョウ！　お前可愛過ぎるぞ！　惚れるぞ!!」

「あ、ありがとうね……」

寂しそう!!!!　リョウちゃん超寂しそう!!!!

「リョウちゃん、此方の方は?」

きっとその寂しそうなリョウちゃんを悟ってるモモちゃんが、持ち前の笑顔で横入りしてくる。其処でユウリの標的が変わってキラキラキー、とモモちゃんを見た。

「あたしクガユウリ！　ユウヤとアサキの従姉なんだ！　あ、今アサキの横に居る背後霊みたいのがあたしの弟な?」

弟を背後霊呼ばわりしやがったよ姉ちゃん。というか、俺と同じこと考えてたのかよ。

「わぁ、ユウヤ君とアサキ君の?　私はランモモです、宜しくお願いしますね」

「おう！　うわー、マジ可愛い、何此の可愛いさ……君達二人高校行ったらモテモテじゃん……！」

モモちゃんの笑顔にやられたユウリがブツブツと呟いて戻って来たが気付かないことにする。とりあえず揃った訳だしね、計七人、多いかな。

「アサくーんカイトくーんオートワー！　行くよー？」

「おーう！」

三人に言っても帰って来た返事がひとつって寂しいよね。まぁ、慣れたからいいや。

此処からが本番なんだしね！

「リョウちゃん」

「何よ」

だからそう思って、笑顔でリョウちゃんに言っておいた。

「頑張ってね、本当頑張らないと――アサキは振り向いてくんないよ？」

本当、気難しい弟だもの。

そう言ったら、リョウちゃんは一瞬ポカンとして、――みるみる内に赤くなった。

「は、はぁああ！？」

「でしょ？」

「ば、馬鹿言ってんじゃないわよアンタ！！　い、行くわよモモ！！」

「え？　う、うん」

図星だったんだなー、と思う反応をして、リョウちゃんは行ってしまった。

――ははっ、楽しみ。

116＋これが本当の後の祭り。

「タコ焼きー！！」

「あ、ちょ、待てユウヤ！　先ずはフランクフルトと決まってるだろ！？」

「そんなの知らなーい！　ユウリ行くよー！！」

「おう！　――あ、リョウとモモは食うかい！？」

「え、ええ、お願いするわ、モモと二人で食べるから」

「うん、お願いしますユウリちゃん」

「もっちろん！　可愛い汝等の頼みなら、此のユウリちゃん答えちまうぜ！　おらどけどけぇ！！」

元気ハツラツ、オフコース。――て感じでタコ焼きの屋台に向かって走っていってしまった馬鹿三人衆。フランクフルトがどーの言ってた癖に、結局お前も其れなのかカイト。其れを呆然と見遣るのはこんばんは、アサキです。

「屋台は逃げないのに……」

「そうだよね～、何かオトワ君って冷静だよね、アサキ君みたい」

「上にちゃらんぽらんを持つと、下がこうなるんですよ」

やべぇ、説得力絶大。

まぁうちの場合はマヒルが居て上が真面目だったから、ユウヤがあんなになったんだろうな。そして元凶を挟むようにして僕が居る訳だ。

「アサくーん！　アサ君も食べるー？」

「要らん」

元凶五月蝿い。本当は来たくもなかったのに、何故楽しむ奴相手に付き合わなきゃならないんだ。だがユウヤは気にする様子なく「そっか」だなんて笑うものだから、こりゃ嫌味なんざ通じないか、と実感。

「ひっ、ヒコクアサキは何か食べないの？」

吃ったカトウがそう言うけど、君だって食べてないだろ。そう言ってやったら、

「そうね！　じゃあ私はかき氷でも食べながらヒコクユウヤ達を待とうかしら！」

「――……よく食うな、祭りだからってハメ外し過ぎたら――太るぞ」

ピシリ。――そんな音がした気が。

「アサキお兄、“デリカシー”って言葉知らないの……？」

「え？」

「ち、違うよアサキ君！　リョウちゃんは普段はそんなに食べないよ！？」

「は？」

「大食いだと思われた私もう駄目かもしれないもう足痛いから帰るって言って帰るべきなんだわきっとそうよそして夜な夜なジョギングしてダイエットに私のか――」

「――あの……」

さっきの音と共にオトワはそう言うしランは慌てるし、固まってたカトウはブツブツ言い出すし……何？

「アサキお兄、女の子に“太る”は禁句なんだってお姉が」

……嗚呼、そういうことか。なるほど。

そうなれば台詞を訂正して。

「そして私は体重を体重としないグラム級保持者となり世界各国から捕虜として追われるのよそうよリョウコあなたに平穏はないのようふふふふ――」

「えーと……別に、食いたいものは食えばいいんじゃないか、な…

…我慢とかはおかしいだろうし、――僕はダイエットとかそういうの、しない奴の方が良いし」

「ふ――え？」

笛、ではないんだろうな。気持ち悪いくらいのネガティブオーラが止んだ。

「い、今何て？」

「食いたいものは食えば？」

「違うわ！　その後！！」

「我慢とかはしない方が……みたいな」

「そ、その前！！」

ズイッ、と寄ってきた。血走らんばかりの目でこっちを見ながら。怖いよ、怖いよお前。

「……何言ったっけ」

「あんたがダイエットを好まないって言ったわよね！？」

「聞こえてんじゃん」

ハッとして、カトウが去っていった。いや、離れただけだが。

「……モモ」

「ん？」

「今日は食べまくるわよ！！」

「えぇ！？」

急な決定にランは慌てた様子だったが、そのまま引きずられるようにしてかき氷の屋台に行ってしまった。「ふわ～！」とかいう悲鳴と「私はダイエットなんかしないわ！！」とかいう決断の叫びとが相俟って何かもう面白い。

「お兄も罪だね」

「何だ急に」

何だよオトワ、その何もかもを悟ったような表情。お前まだ小五な癖して。

「――さて、お兄、俺大判焼き食べたい」

「あ、てめ僕にたかる気か」

「百五十円くらいいいじゃん、千五百円くらい」

待て、桁ズレたぞ。数字だと１５０と１５００の差だがズレたぞ。

「とにかく、買ってよー」

「仕方ないな……こういう時だけ小五め……」

仕方ないか、此れも四年早く生まれた性さ。仕方がないので僕等は大判焼きの屋台を探して歩き出した。

「あり、アサ君達が消えた」

「あらまぁ、何処行ったんだろ」

「さぁな？　――あ、神輿神輿！！」

「追い掛けようぜ！！」

「さって食べるわよー！」

「リョウちゃん、シロップかけすぎだよ……って、アサキ君とオトワ君は？」

「え？　あ、あれ？」

「ど、何処か行っちゃったかな！？　場所間違っちゃったかな！？」

「そんなはずは……まぁ、探してみましょ？」

大判焼きの屋台が思った程近くに無くて、元の場所に誰も居なくなってしまっていたことに僕が気付いたのは、オトワが大判焼きを頬張っていたその時だったんだけど。

117＋いつまでもこれは続くでしょう。

「恐らく、俺達の所為だよね」

「……」

引き続きアサキです。さっきの場所に戻って来たら、誰も居ない。
最後に此処に居たのは……嗚呼、僕等だ。

「はぐれちゃったね」

「だな」

元はと言えば、お前が奢れとか言うから――しかし年下の身内を責めている暇はないか、誰でも良いから見つけなくちゃ……。

「アサキお兄、携帯とか持ってないの？」

「んなの持ってねぇよ。持ってる二人が今日は居ない」

こんなことなら鍵っ子ユキとアスカ君を連れて来れば良かった。
……出掛けてるから仕方ないか。
少し待ってみたけど一向に誰も来る気配がない、時間は経つし、僕の金は減る――ひたすらオトワが食っている――から、こうなったら探しに行くか。

「オトワ、お前は此処で待ってろよ」

「うん、焼きそば食べて待ってる」

畜生、後で絶対ユウリに請求してやる。

モモですー。

「居ないわね……」

リョウちゃんと一緒に皆とはぐれてしまいましたー。歩いて皆を探してみるけどやっぱり居ない、しかもリョウちゃんはとにかく、

もぐもぐ。

――食べてます。

「んー、折角の浴衣も意味を成さないじゃない……」

要するにアサキ君とはぐれちゃ意味がないって意味だね。だからって食べ過ぎだと思うんだけど……んー、リョウちゃんが良いなら良いかな。恋は盲目、って、こういうことなんだろうなー。

もぐもぐ。

「リョウちゃん」

「んー？」

「頑張ってね」

「何がよ」

「神輿ー！！」

「て、ちょ、うおおわあああ！！」

あ、ユウヤとユウリが人波に呑まれた。ふははー、流石従姉だな、テンションがそっくりだな。とかのうのう見てる俺だけど、あれー、どんどん二人が遠ざかって行くぞー？

「おーい！」

「うわあああああ」

「ぎゃあああああ」

――え、あれ、マジで流されてっちまった。あっははあいつ等迷子になるぞ～。

――……ん、迷子は俺、か？

人が多い。見つからない。歩くの疲れた。

という諸々の理由で座り込んだ僕、もう皆居ないんじゃないかな、疲れたよ、帰っていい？

「はぁ……」

なんて、冗談を言ってる場合じゃないか。帰るにしたって、オトワを一人には出来ない。連れ帰らなきゃだ。つか、真面目に何で見つからないんだよ、しがない旧道でやってる小さな祭りなのに。

「やっぱり、来なきゃ良かった」

膝を抱えて落ち込む僕。何だ此れ、皆祭りではしゃいでるのに、脇道の隅でうなだれる僕って寂し過ぎやしないか。

元々来たかった訳じゃないんだ、仕方ないだろ。そう思ってみても、誰に言う相手も居ない。最悪だ。

畜生、何も買ってないのに金は消費するし、人混みで頭は痛いし、——意味が分からない。

「——……」

——まぁ、僕にはお似合いな雰囲気だろうが。

「そんな端っこで、何やってんのよ！」

モモと歩いて皆を探してたら、ふと暗い路地に目が行った。何でかしら、そう思ったのはよく分からなかったけど、理由はすぐに分かった。

真っ暗闇に同化するように、アイツがそこに居たから。

「……よう、カトウ」

「何よ、ようって。こんな路地に座っちゃって。ちゃんと待ってなさいよ、探してたんだからね！？」

こっちを見たのに何処見てるんだか分からない其の目。本当に何処見てるのよ。

モモには近くで待ってもらってる、特に聞かれなかったけど、きっとモモは分かってる。本当、あの子は凄いわよね。

「僕だって探してたよ」

「なら、何でこんなとこに居るのよ……？」

明らかに此処は祭りの外じゃない。

「疲れたからに決まってるじゃん」

嗚呼、そういえばアンタはヒコクアサキだったわね。自由の代名詞だったことを忘れていたわよ。

ひとつため息をついても、ヒコクアサキは何考えてるんだか分からない目で私を見て、

「君こそ、何でこんな路地に居るの」

とか聞いてきた。

――……愚問中の愚問よ！！

「アンタが居たからに決まってるでしょ！？」

「よくこんな路地に気付いたね」

「そっ、其れは――」

アンタだからよ！　――だなんて言えないわよ！！　というか寧ろ何で気付いたのかなんて自分でも分からないんだから！！

「まぁ、何でもいいや」

しかも切替早い！！

「何か、暗い方が落ち着く――ってない？」

「え？」

「僕には、ああいう明るいところに居ることが苦痛だから」

苦痛……？　明るいって……お祭りが？　でも、自分から来たんじゃないのかしら、――あ、無理矢理ヒコクユウヤが連れて来たんだったわね。

ということは。

「――ゴメンナサイ」

そういうこと。

お祭りに誘ったのは、私。一緒に行きたくて誘ったのは、私。

「私が誘ったからだよね！　私が電話でアンタ達誘っちゃったから、無理に来てくれちゃったのよね！　アハハ、私ってば酷いわねー、アンタの性格少しは知ったつもりだったのに」

そういえばそうよ、酷いことしたな……。

「あの」

凄い馬鹿かも、私って。やばいわ、凄い自己嫌悪よ。

「別に、そこまで嫌とは、言ってないんだけど」

好きな人のこと、全然分かってな――え？

「わ、ワンモア！」

「何で英語。だから、そこまで嫌々来た訳じゃないってば」

――そうなの？

「確かに祭りとかは好きじゃないけど、一緒に行こうって言ってくれた奴放っておかないって。ぶっちゃけ結構渋ったのは事実だけど」

「で、でも明るいの苦痛って」

「眩しいもん、休む時くらい此処が良い」

え、じゃあ勘違いだった、ってことでいいのよね？　――よし。

「ねぇ。また、こういうの、誘っても……良い？」

「まぁ……気が向いたら」

ふ、……ふふっ、やったわよリョウコ。また誘っても良いって言われたわよ。やったわよ！　リョウコにしては好成績だわ！！　浴衣についてね感想は全く貰えなかったけど、これから結果オーライ！

「ユウヤ達の付き添い程度なら」

――意味は伝わってないけど！！

118＋夏の終幕。

「アサキの馬鹿あああああ！！！！」

そう言ってアサ君に縋り付いているのは珍しく俺じゃなくてカイト君。こんばんはー、やっと皆で合流しましたユウヤです。

「一人寂し過ぎる！　皆がきゃーきゃー遊んでるのに何で一人で……馬鹿あああああ！！」

「いや、完璧自業自得じゃん……嗚呼もう、悪かったってば。悪かったって」

カイト君がうざ過ぎて軽くあしらっちゃってるよアサ君。

何があったか、ってより、皆でまたこうして会えたから良かったよね。皆何だか楽しそうだし！　勿論俺はすんごい楽しかった！

神輿を追い掛けるのがすっごい楽しかった！！

「お姉」

「うん、何だいオトワ！」

「アサキお兄に、相当奢って貰った」

「え？　そうなのか？　後で礼言わなきゃな……」

「多分、請求が来るよ」

「マジ？　まぁ、仕方ないっか。オトワどれくらい食った？　……ってオトワ？　何で視線を逸らすのさ……なぁオトワ？　オトワくーん？」

……まぁ、楽しかったから良いか！　別にスルーとかじゃないから！！

やっぱり夜に友達と集まって遊ぶってすっごい楽しかった！　時間的にもう帰らなきゃなのが寂しいけど……ま、楽しい時間は過ぎるのが早いから仕方ない仕方ない。

「それじゃ、私達そろそろ帰るわね」

俺が考えたのとほぼ同時だったと思う。そう言ったのはしっかり者に定評があるリョウちゃんだった。

「今日は楽しかったよ～、またね、皆」

それに連れ立って帰るは勿論モモちゃん。疲れすら感じさせない笑みで帰っていった。

「ばいばーい！　……はぁ、可愛い子等だ。こっちに居る間にもう一回くらい会えたら良いな……」

「お姉、変態」

「えぇ!?　お姉ちゃん只会いたいって言っただけだ――」

「変態」

あ、そっか、此の二人も夏休み終わったら帰っちゃうんだっけ……。夏が終わるのって、何だか寂しい。

「俺今日は帰らないからな！　お前ん家泊まるからな！！」

「勝手に決めるなよ……帰れよ……」

――そう思ってはみるものの、二人見たら寂しさ吹っ飛んだよ全く。俺は苦笑して、泣きじゃくるカイト君と、さっきから「助けてよ」的視線を送ってくるアサ君の元に歩み寄った。

「いーじゃんいーじゃん！　カイト君泊まりにきなよ！」

「ほらー！　ユウヤもそう言ってるじゃん！　俺絶対帰らないからな！！」

「もう勝手にしてよ……」

ため息を付くアサ君。こういう時に折れるのはアサ君だよねー、大変だな此のカイト君相手にするの。寂しいの駄目駄目なカイト君。……いや、俺も嫌だけどさ。

長い夏も長い楽しい時間も、あっという間に終わっちゃうからこそ、楽しいんだもんね。

「ユウヤ、最後にじゃがバタ買って」

「え、何其の最後の頼み」

「僕何も食べてないのに出費がかさんだから」

――其処も、夏の特徴だよね。

119＋これの食べ方。

「いっただっきまーす」

「はい、召し上がれー」

そう言って手を合わすのはユウヤで、笑って返事をするのは勿論マヒル。夕飯開始ですアサキです。

夏休み中居る兄貴のお蔭で普通に夕飯にありつけるってもので。

――だが。

「おい」

「アサキはいただますを言わないだけでなく兄ちゃんを“おい”呼ばわりか」

「いただます」

「よし――違う何かが足りない」

じゃなくて。

「今日のご飯は何だ」

「……見ての通り、スパゲッティだが」

「味はー？」

「勿論トマトとチーズだぜ」

「黙れ馬鹿共見て分かれ」

ユウヤが首突っ込んで来て話題が逸れた……！　だから、僕が言いたいのは――

「此れは何」

――其の横に付属されている食べ物について、だ。

「――納豆」

――ですよねー。って、だから。

「何でスパゲッティに納豆なの」

完璧なるミスマッチじゃないか。

僕の確実に的確なる指摘に、マヒルもユウヤもフォークを止めてその四角い箱に納まる某納豆を見る。――そして二人して一言。

「「駄目？」」

「いや、駄目じゃないけど」

不思議そうに首を傾げるな、僕が馬鹿みたいじゃないか。……あれ？　僕がおかしいのか……？

「いやぁな、賞味期限が多少過ぎちまってて」

「本音は其れか」

良かった、僕は正常だったようだ。マヒルが本音とばかりに其の納豆を指差す。だからって今出さなくても……。

「いーじゃないかアサ君！　納豆は体に良いんだぞー！！」

そしてその横のノリノリの方は、冷蔵庫から卵を取り出して来て僕に見せ付けてくる。……いや、別に羨ましくも何ともないんだけど。

そしてユウヤは話題の的、納豆と其れを混ぜて、残っていたらしい白米にかけてしまった。

「――スパゲッティあるのに白米食うのかユウヤ」

「兄貴、ツッコミ所が違う……！」

随分神妙にツッコむものだからびっくりしたよ僕は。確かにユウヤの食欲は問題だけど、其れ以上に――

「納豆に卵……？」

――という事実だ。

「え？　納豆には卵でしょ？」

「いや、納豆には醤油だろ」

「醤油もかけるけど、やっぱり卵だよ！」

「絶対無い」

「あるよ！　美味しいもん！！」

「ありえないね、第一、今の此の不況に卵がどれだけ高価な品かお前は分かってるか？　昔は安ければ百円で買えた卵が今じゃどうだ、なのに納豆を食べる毎回卵を使っていたらどれだけ金がかかると――」

そんな会話を続けていたら、何時の間にかエスカレートしてこんな話題に。いや、エスカレートした訳じゃないな、僕が勝手に話し出しただけか。其の証拠にマヒルもユウヤも唖然としている。

「ち、ちょいアサキ」

「――何？」

「中学生にしては話題が深い」

それはごめん。

「ユウヤがついていってないから」

よりごめん。

ユウヤは何やら停止して、愕然と此方を見ながら目を見開いている。……何にショックを受けているんだ貴様。

「兄貴……卵が家計の負担になっているって本当かい!?」

「アサキも其処まで言ってねぇよ」

今の話題で其処まで考えられるなんて凄いなおい。ある意味一種の才能だぞ。

結局ユウヤは美味しくそれを頂き、スパゲッティも美味しく頂いたらしいです。凄い。

「でもさ、アサ君って納豆どう食べる?」

食後の休暇中、ユウヤが再び納豆をネタを振ってきた。

「……僕は普通に醤油」

「納豆のたれとか、からしは?」

「たれは使うけど、それに醤油を足す。そしてからしは絶対に入れない」

それが僕のポリシーだ。……何だそのしょっぼいポリシー。

「マヒル兄はー？」

「俺？　んー……普通に中のぶち込んで、葱刻むだけだな」

「普通だね」

「悪いかこら」

悪くないとは思うけど。要するに、兄貴は無難な訳だな。

「母さんって確かたれだけ派だったよね」

「だなー。父さんは俺の葱抜きだったか」

「家族なのに皆食い方違うって面白い」

何故なんだろう。食生活の違い……？　確かにうちは皆違うけど、僕とユウヤがこうも違うのは凄いと思うな。永遠の謎だ。

さて、アナタはどう食べる――ってね。

119＋これの食べ方。（後書き）

休日に遊びに出掛けた時に出た話題。
友達はユウヤ派の食べ方らしく、素でびっくりした作者でした（↑不況についての話を説いたのもまさに作者、馬鹿か。

ちなみに自分はアサキの食べ方ですね。朝夜内の人達は色んな食べ方しますが一人っ子コンビは納豆が嫌いです（どうでもいい話）

１２０＊閑話＋アリスパロで続きます。（前書き）

１００の続きです。
暫くはこれで続きます。完結するのか全く分からない。そして原作知っていた方が良いかもしれない↑

アリスがやる気ないのはどうしよう（・∀・）

１２０＊閑話＋アリスパロで続きます。

アリスは白兎の後を追います。体力がない癖に足だけはやたら速い白兎は、どんどんどんどんアリスの前を行きます。

「ちくしょー、スカートじゃなければ追い付けたのに」

アリスのそんな呟きもありましたが、そう呟いたところでアリスの洋服が変わる訳でもありません。水色のエプロンドレスを翻し、しかし女の子とは思えないスピードで白兎を追いました。いや、ていうか寧ろもう女の子じゃないですから、嗚呼、そう、アリスはアリスなのです。

適当にまとめたところで、徐々に白兎との距離が縮まっていることに気付きました。

「流石は運動不足、体力無しだな！」

アリスはしてやったり顔で白兎に叫びます。しかし白兎はお構いなしに走り続けるのでした。おかしな奴、そりゃあ前からおかしいけどさ、そう割り切って距離を徐々に徐々に縮めていけば、――ふと、白兎の姿が消えてしまいました。

「……あっれー？」

しかし、速めた足は急には止まらないのが条理という訳で。アリスは己の足が赴くままに小走り気味にスピードを緩める――のですが、何か違和感が。

何だろう、アサキなら気付くのだろうか、完璧設定を忘れてくれたアリスはそう考えつつも、ひとつだけ、凄いことに気付きました。

「ああ！　――足場がないんだ！！」

もう少し早く気付くべきでした。手の平にポン、と手を置きつつ小走りを続けていたものだから、アリスは足場のないその位置にまで辿り着いてしまったのです。流石はアリス、アリスの癖にインドアなことがあまり好きじゃないからこうなるのです。アリスの頭には”慎重”という言葉がないのでした。

「――って、冷静なこと言ってる場合じゃなあああああああ！！！！」

落下。

足場がない、要するに、――地面に穴が空いているのです。落と

し穴なんて規模では済まされない程大きく、そして深い深い穴が。
己の叫び声と共にその穴に落ちたアリスは、とにかく深く深く、その穴の中へと吸い込まれていきます。すぐに着くだろう、アリスはそう高を括っていたのですが、下を見れば――闇。そうです、アリスはまだまだ落ち続けるのです。

「え、落ち過ぎじゃね？　落ち過ぎじゃね？　これブラジルまで行くんじゃね？」

決してここは日本ではないのに、アリスは何やらふざけたことを言っています。アリスったらお茶目さん☆

「あ、でも重力は下にだからー……あ、死ぬな！！」

再び冷静に考え直すものの、アリスは知的という言葉が世界で一番似合わない人間です。単細胞な意見を爽やかな笑顔で出せば、慌てることが面倒になったのか、そのままなるがままに身を任せました。

どれくらい落ちたのでしょうか、アリスはズドン、という効果音と共に動きを強制停止されました。

「い、痛、俺死んだよ絶対」

あれだけ落ちたのにアリスは死にませんでした。そりゃあお伽話の世界、死んでもらっては困ります。

アリスは複雑な態勢からあっさり立ち上がり、何もないそこを見渡しました。すると、遠くに見たことのある後ろ姿を見つけ、アリスは一言、

「見つけた白兎ィ！！！！！」

と、男らしく叫びました。いや、アリスはアリスです。

誰に言われるでもなくスタートダッシュの如く走り出したアリス。遠くの白兎はこちらに気付いていないようですが、もしこれに気付いたらかなり引く速さです。流石はアリス、エプロンドレスを着てその速さを保てるのはこのアリス、君だけでしょうね。

「待てゴラァ！　俺をこんなとこに落としやがって！！」

落ちたことの責任すら白兎に押し付けて、アリスは走ります。本当にこいつはアリスなのでしょうか。

暫く走ったことでしょう、いつの間にかアリスは、白兎の姿を見失ってしまいました。辺りを見回してもあるのは複数の扉のみ。まさか白兎は、この複数の扉のどれかに入ってしまったのでしょうか。

「捜せってか？　白兎大捜査線かこんちくしょー」

ぐちぐちと文句を漏らしながらも、アリスはひとつの扉に手をかけました。しかしその扉は開きません。鍵がかかっていたのです。アリスは次の扉に手をかけます。しかしそこも開きません。アリスはそれを数十回繰り返しましたが全然開かないので、怠くなって手をかけることすら止めました。

「何で閉まってんのさ、これじゃあ物語が進まないよ」

相変わらずの裏設定トークもさておき、アリスはその部屋にあったテーブルセットの椅子に座りました。どうやらアリスは疲れてしまったようです。そのままぐったりと机に伏して、

「疲れたー、俺帰りてー、うち帰って寝るー」

と完全なるホームシックになってしまいました。目をつむりそのまま動かないアリス、もしかして寝てしまったのでしょうか。起きてアリス、そして机の上の鍵とビンに気付いて、ついでに言えば近くにある小さな扉にも気付いて下さい。

しかしそうはいかない可愛いアリス、すーすーと寝息を立てて眠ってしまった。

――え、このままで大丈夫？

121＋素敵な言葉。

うふふふふこんばんはー！！　誰だか分かるかなー？　分かるかなー？

『分からねぇよ』

きっとアサちゃんならそう言うでしょうけど、正解はシユウママンです！　良い子の皆、久しぶり！！

私は夏休み中、ずーっと仕事場に泊まりっきりで働いてました。何故かと聞かれれば勿論、一週間お休みを貰う為に決まってるじゃない！　今から日曜日までの五日程度の短い休みだけど、息子達の最後の夏休みを一緒に過ごしたいじゃない？　ユウ君とアサちゃんの学校は何故かお休みが長いのよね、九月まで食い込むだなんてなんて素敵な夏休みなのかしら！！

という訳で我が家に到着！　皆何してるかしら～、久しぶりの我が子に会うのが楽しみ！！

「ただいまー！！」

人間元気に行かなきゃね、まだまだ若いわ！

そうやって玄関に入れば、当然の如くリビングから出て来てくれたのはマイスウィートサン、ユウ君！！

「わ、お帰り母さん！」

其の輝かんばかりの笑顔がお母さんは大好きです……！！　何て暖かいの！！　ユウ君が入ればママ太陽要らない！！！！

「ただいまユウくーん！　会いたかったわ～！！」

「うん、俺も会いたかった～！」

そのまま抱きしめても良かったんだけど、汗だくのお母さんなんて嫌よね。ユウ君と一緒にリビングに行くと、そのリビングには四つくらい人影があった。

「あ、シユウママお帰りなさい」

「……お帰りなさい」

二人は従姉弟のユウリちゃんとおー君。ユウリちゃんは笑顔で可愛いわ～、やっぱり女の子よね～、おー君は無表情だけど其処が良いのよ！　将来絶対良い男になるわよ！！

――其れは良いとして、他二人からお帰りすら言われないわね。しかも実の息子なはずなんだけど。愛する息子達にお帰りを言わたいが為にただいまを言うのに！！　ショック大！！

「あ、アサちゃーん？」

「――……」

試しにアサちゃんに声をかけてみた。――あ、寝てるわ此の子。未だ九時回ってないのにソファで寝ちゃってるのね。……可愛い。

まぁ、寝ちゃってるなら仕方ないわね！　もう一人の方行こう！　ええと、もう一人はキッチンに居るわね、流石家庭的大学生！　見た目はまんま不良なのにねっ！

「まーひーる君！」

「――……」

返事はない、只の皿洗いのようだ。

むきーっ！　此の至近距離でママを無視するのね！？　マヒルの癖に！！　位置的には背後に居るんだから気付いてよ！　もしもしわたしメリーさん今あなたの後ろに――

「母さん、マヒル兄今イヤホンで音楽聴いてるから聞こえないんじゃない？」

居る――って、あらまホント。紛らわしいことしないで頂戴マヒル！！

「――まー君！」

だから耳元で叫んでやった。

「！？　――え、あ、母さん？」

反応薄い！

「ちょっとマヒル！　もう少し良いリアクションしなさいよ！　つまらないじゃないのー！！」

「洗い物をする息子に面白さを追求すんなド阿呆」

「それは確かに！！」

手を使わず器用にイヤホンを外したマヒルは的確にツッコミを入れてきた。頭良いって此れだから嫌だわ！

「んで母さんや」

「何よう」

「お帰り」

「……よし、合格」

其れが聞ければいいのよ私は。

「んみー、自宅って良いわー」

少し落ち着いて。マヒルとアサキ（※戦闘不能）を抜いて二階に

消えた子供達。私はマヒルが作ったという夕食を食す。

「え、今のんみーって何、んみーって」

「其処はツッコむとこじゃないわ、流すとこよ！」

そうよ、スルーしなさい！

――しかし其れにしても、マヒルの料理美味しいわね。私より上手くなったんじゃないかしら……、あれ？　母親の面目はいずこ？

「そういえばマヒル、貴方大学は？」

「まだねぇよ、俺は中旬まで休みだし」

「あら、楽な大学ね」

アサちゃん達のとこといいユウリちゃんとこもまだみたいだし、ゆとり教育万歳ってことかしら。

「万歳！」

「何が」

「何でもないわ」

言ってみただけよ。

「ま、明日からは私が家事をやってあげるから、存分に寝坊しなさいね！」

そして此れが言いたかったのよ。何時も無理してくれてるんだから、私が居る時くらい代わってあげないと！

「へいへーい」

「返事適当！！」

相変わらずね此の子ったら！！

「――あ、母さん、後ろ」

うん？　急に後ろだなんて何？

言われて振り向いたら、さっきまで騒いでたのに全く起きなかった我が家の兵（つわもの）が起きたみたいでした。

「アサちゃん、おはよ！」

あ、こっち見た。

「――……」

え、……見えてる？

「うわあ」

うわあ？　人を幽霊か何かだと思ったのかな、お母さん泣くわよ。

「――お帰り」

「……うん、ただいま！」

違う意味で泣きそうになった。言われるだけで嬉しい言葉って、素敵よね！！

122＋最終日こそが本番です。

長かった夏休み、時間的感覚ではそうでもなかったけれど。とても楽しかった気もするし、全然楽しくなかった気もする。だが、だからこそ今ひとつ、立ち向かわねばならないことがある。

「アサキ」

「何」

「――宿題手伝って下さい」

――最終日なのに宿題全く終わってません、カイリッス。

「――夕方から人の家に来たと思ったら何様？」

「もちカイリ様だぜ☆」

「――……」

「ちょ！　無言でスルーはよくない、心臓にもよくない！！」

ただいまアサキの部屋です、そりゃあ最終日だもの、馬鹿正直にやるなんてしない、アサキのを写させてもらうに決まってるぜ！

しかしアサキはなかなか見せてくれないんだよなぁ、いいじゃねぇかよ、減るもんじゃねぇだろ？

「なぁアーサーキー」

「何でさ、最初にやらない訳？　こんな数時間あれば終わる宿題、直ぐ終わらせちゃえば良いじゃん」

「何を言うんだアサキ君、終わらせる気がないからに決まっていたたたたた蹴り入ってる右足向こう脛にトーキックがいだだだだ！！！！」

「少し黙ってくれるか虫酸が走る」

こ、こいつ相変わらず手強いな！　くそう、どうやって手伝ってもらう&写させてもらうか……超難関過ぎて俺の脳じゃなかな――

「アサくーん！　明日何か買ってあげるから宿題貸してー」

「漫画」

「ありがとー！」

――か？　……え？

「……な、アサキ」

「何？」

――お前物でつられ過ぎだろう。

狡いぜ！　バーンと勢い良く入って来たユウヤには宿題をあっさ

り渡しやがって！！　俺だって見たい！！

「……何すれば、手伝ってくれる……？」

「……明日の帰りにコンビニ」

「おし、交渉成立な」

どうやら金で動くらしい。流石過ぎる。真顔なアサキは凄いが、言ってることも理に敵わな過ぎて逆に凄い。

……まぁ、手伝ってくれんならいっか。

「終わらない」

「当たり前」

「頑張ってカイト君！」

約三時間経過。未だ終わらない俺の宿題。だ、だって少しもやってねぇもん！　今日で終わるだなんて思うなよ！！？

「終わんなきゃいけねぇだろうが」

さーせん。

黙々とペンを走らせるアサキと、何かを手伝ってくれているらしいが全く役に立っていないユウヤ。ごめん、色々と涙が出て来るわ。

「つかユウヤー、何でお前終わってるんだよー」

「だって夏休み中に少しやったもん！」

ユウヤの癖に偉いじゃねぇか。

「僕が言い続けたからだろう」

撤回。偉いのはアサキだった。

「んー、でも今年は宿題少ない方だよねー」

「だなぁ。去年は半端なかったもんな」

去年――サックラせんせーは物凄い宿題を出してくれたっけ、教科書の厚さと宿題の厚さがあまり変わらなかったのをよく覚えている。あれ、此処地獄？

「今年は数学半分以下まで減ったんだから、ちゃんとやれよ」

とか言って、人を地獄から引き戻してくれたアサキは、俺の目の前にダンッ、とノートをたたき付けた。俺の漢字の冊子だ。

「……え、まさか終わった……？」

「まさかも何も、終わらした」

お前は神か。

「アサキ、お前凄いを通り越してキモい」

「お褒めの言葉、感謝するよ」

だっておま、ええ？　この厚さ二センチ弱のこの冊子を？　――何なんだお前。

「流石はアサ君だね！　仕事が早い！」

「僕はやるときはやるのさ」

「逆に言えば、やるときしかやらないんだよね！」

「あれ？　お兄ちゃん喧嘩売ってる？」

お兄ちゃんと呼ばれてはしゃぎ出したユウヤはさておき。どうやら今年も宿題は助かりそうだ。良かった良かった、無事で何より。しかしこう考えると、来年からはどうなってしまうのやら。違う高校に行くことになったら、もしや俺は一人で宿題を……？　――いや、考えたくもない。

来年のことは来年に考えよ。それで良いや。

１２３＋新学期だって変わらない。

アサキです。

「……」

放課後です。怠いです。

「学校、無くなればいいのに……」

「おいこら、担任目の前に何言いやがるんだテメェ」

「嫌ですよ先生、本音です」

「タチ悪ィ……！」

会話の通り、放課後の教室にはサクライ先生も居る。何をしてるかって？　ちょっとした課題を。

「お前が授業中に課題を終わらせねぇから……」

先生がぶつぶつ言っているのを聞いてくれれば分かるように、何と此の僕が放課後に授業中の課題をやっている。珍しい。サクライ先生なのに――何故か英語の。

「仕方ないじゃないですか、寝てしまったんだから」

「寝る前にやれや、夜更かしせず早く寝ろ」

「十一時には寝てます」

「早ぇよ」

英語の課題というのは夏休みの日記。英語で日記を書けというのが無謀だが、アヤメ先生の――

『五分あれば終わるよね』

という笑顔にはクラス中が落ち込んだだろう。あんた、僕等中学生なんだけど、ボキャブラリが全く違うんだけど。

しかもサクライ先生が此処に居る理由もまた凄くて、今日厳守の課題らしく全員提出をさせたいが為にアヤメ先生がサクライ先生をパシッているという情報が入っている。

「アヤメの野郎は弟の為に早く帰らなきゃらしいからよ」

とサクライ先生は言うけど、アヤメ先生の弟ってそんなに幼い人なのか、と試行錯誤をする。まぁ、要するに僕が此れを早く終わらせれば良い訳だ。というかアヤメ先生の弟ってどんな人なんだろう。何か兄貴達との会話で色々聞いた気がするけど――あれ、思い出せない。

「先生」

「あ？」

「知っていますか、僕は夏休みの思い出が特にないんです」

「寂しい夏休みだなおい」

真顔で言ったら真顔で返された。なんとボケ殺しな……。よくユウヤが言うボケ殺しとはこういうことをいうのか。

「じゃあ何してたんだ？」

「……ゲーム？」

「……ゲームだけで夏休みが終わったのか……？」

「……まぁ」

「時は金なり――って言葉を知ってるか？」

「はい、知識はあります」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……書け」

「……はい」

ごめん、先生。

「アサキー、そろそろ終わったかい？」

数十分して。ガラッと扉の隙間からそう声を掛けてきたのは、笑顔が素面と噂高いユキだった。相変わらず笑顔だ、夏休みが明けてもお前は変わらないな……。

「もうちょっと」

「そうか。――それにしたって珍しいね？　アサキが放課後まで課題を残しておくなんて」

「寝てたんだよ。それに、英語の創作文はどうも苦手でな」

「おや？　完全無欠のアサキに三度弱点だね」

お前の中の僕は一体どうなってるんだか。

「というか、別に先帰れば良いじゃん」

「何と！　そんなに淋しいことは言わないでもらいたいね。好きで待っているんだ、心配しないでくれたまえ」

「……」

なら、いいんだけど。

それから更に数十分でそれを書き上げて、既に暗がりになりつつある下校になってしまった。あー、英語って何であるんだろう。ムカつくから明日カイトを殴ろうかな。

――は、良いとして。

「――……」

「……」

何でユキはこんなにニコニコしてるんだ……？

いや、何時もニコニコだけども。普段の三割増しでニコニコしてやがる。何なんだ、何か楽しいことでもあったのか？

「さぁアサキ！」

「はい？」

「私と共にカイリの家に向かおうではないか！！」

――は？

「今日はカイリの家でお泊り会なんだ、だから行こうじゃないか！」

「待て、何その聞き覚えない話」

「まぁ言ってないからな！」

「おいこら」

「ユウヤには了承を得ているからね！　さぁ行こうじゃないか」

「行こうじゃないかってあなた、ユウヤは僕の保護者じゃないから。――ってあれ、聞いてる？　ねぇサキネ君、ねぇってば」

「はっはっはっはっは！！」

畜生全く聞き耳を持ちやがらねぇ。何だよ今日に限って、何かあったっけか？

そのまま引きずられてカイトの家に行くことになってしまったのは、言うまでもなく。

――何なの？

１２４＋誰だって楽しいことが好きだから。

「へぇ、アサキは今日お泊り会か」

「うん、カイト君家でユキちゃんと三人でだって。ユキちゃんから電話で言われたー」

「――嗚呼、完璧にアサキの意志無視っぽいな」

ユウヤだよ、ユキちゃんから「はっはっは、今日はアサキを預かったよ！　何かあったらカイリの自宅に連絡をくれたまえ！」と電話があったんだけど――アサ君、大丈夫かな。

未だ夏休みな大学生、マヒル兄にそんな話をする俺。畜生、何時まで夏休みなんだよ、羨ましいなぁ。

「ユウヤ」

「何ー？」

「お前淋しくないのか？」

「え？　やだなぁマヒル兄、俺だってもう直ぐ高校生なんだよ？――淋しいに決まってるじゃん」

「……」

あー、アサ君達何してるのかなー。

「はい、上がりさ？」

「ぐはっ！　またユキが上がりかよ！！　何なんだよお前！！」

「あー負けたーじゃあもう寝ていいかなー」

畜生！　全く勝てない！！　どんなにいいカードが来ても、全く大富豪でユキに勝てないのは何故なんだ！！　あ、カイリッス。

約一名この上なくやる気がなく既に毛布に包まっているが気にしちゃいけない。いや、気にしなかったらマジで寝ちゃうんだけど、頗る自由だよなコイツ。てかお前、大富豪強くなかったか？

「ふふっ、未だ十時だというのにアサキはもうおねむかい？　今時小学生も寝ていないぞ？」

「どうせ僕は小学生以下さ、だから寝かせてくれ」

ユキはユキで真逆に、全く眠気を感じさせない清々しい笑顔を見せている。――まぁそうだよな、今日うちに泊まるのを楽しみにしてたのはユキなんだから。

『私は今一度、誰かの家にてお泊り会のようなことをしてみたいのさ！』

そんなことを言い出すもんだから、じゃあうちどーよ、と言ったら笑顔で来た。ついでにアサキも引っ張ってきた。というか学校帰りに来るくらい楽しみだったらしい。

少し前にアサキの家に泊まったのが凄ぇ楽しかったんだろうなー……ユキってそういうところが餓鬼っぽいと思う俺。普段はずば抜けて俺が餓鬼なのに――いや、それは認めねぇが――とか考えてる間に、本格的にアサキが寝ようとし始めました、おい。

「アーサーキー！　早ぇよ！」

「眠らないと人間機能しないって」

そりゃそうだけども。人の部屋で人の服で、しかも人のベッドで寝る気かお前！　引いてある布団はからっきし無視か！！

「まぁまぁ、良いじゃないかカイリ、私達もたまには早く寝るというのはどうだい？」

私達も、という台詞からお前が夜更かししまくりだということは分かったけど、まぁそれも良いか。俺は散らばっているカードを適当にまとめる。

ベッドはアサキに取られてしまったんで、仕方なくユキと並んで敷き布団に入る。普段と違う天井だな。

「カイリ」

カチッ、と音を立てて電気を消せば、反響するようにユキの声が聞こえた。

「今日はすまなかったね。私の我が儘で」

「いやいや、俺ん家いつでも大丈夫だからな、姉ちゃんしか居ねぇし」

「ははっ、それじゃあまた来るとしよう。アサキの気が向いてくれた時にね」

普通の一軒家で此処まで喜んでくれるなら、別に悪い気はしないな。アサキの気が向くのが何時なのかは分からないけど、結構楽しみだな、と思った訳で。

「休みの日」

あれ、アサキが未だ起きてたのか。

「せめて休みの日にしろ、あとユウヤも誘ってやれ、後が面倒臭ぇ」

「あー、それは確かに」

「ユウヤがグレそうだね。アサキを取ってしまったことに対して」

だな、今度はユウヤも誘おう。アスカも来れたら良いんだけど。うちは何人だってＯＫだもんな。

「じゃ、お休み」

「おー、お休み」

「お休み、また明日」

明日も学校で、全然疲れが取れてそうにないけど、それもまぁ良いか。

１２５＋楽しい一日。

こんばんは～、モモです。
特に話すこともないので、寝る前に今日の出来事をお話したいと思います。

今日朝起きたら目覚まし時計が止まっていました。朝からやる気が萎えました。
何時も親が仕事の為、弟と二人の朝ご飯なのに、弟を起こす係の私が寝坊したので弟も道連れでした。ごめんね、ユズ。

朝ご飯を食べてから学校に急いで行ったら朝のＳＨＲ中で、サクライ先生は私を見れば、

「おう、遅かったな、早く座れ」

と言って出席簿を手に取りました。うちのクラスは授業に食い込まなければ遅刻にならないので凄いです。普通のクラスだったら私は既に二桁は遅刻しています。
でも私よりももーっと凄いのはアサキ君とロクジョー君です。あの二人は大抵ＳＨＲ終了三十秒前くらいにやって来ます。私、絶対敵わないな～。あの二人の通常遅刻回数はきっと三桁なんだろうな～。

今日の授業は特に変哲のない授業、かと思いきや、三、四限目に

調理実習があってびっくりしました。エプロン持ってき忘れてしまったのでリョウちゃんに借りにいくことにして、授業はぐっすりお休み～。大丈夫大丈夫、テストはまだまだ先だもん！

リョウちゃんの可愛いらしいピンクのエプロンを借りてから調理室に行きました。何作るのかも忘れたけど、其処は同じ班のロクジョー君がどうにかしてくれるだろうし……知ってる？　私って結構アバウトなんだよ？

名前の順で良かった……ロクジョー君はお料理上手なんだよね……

……ちょっと意外とか思ってごめんなさい。

「ロクジョー君料理上手いんだね～」

「まぁな！」

笑顔が素敵なロクジョー君に全てを任せました。

どうやらハンバーグみたいです、私は味見係がいいなぁ……。手際が良いロクジョー君の正面で、つみれ汁の味付け：味見を１：９の割合でしていたら、

「あ、カイト避けろ」

「は？　――ふおぅあああ！！」

――隣の班から包丁が飛んで来ました。

「ち、ちょ、あ、あのさアサキ？」

「ごめん、玉葱切ってたらつい」

「ゴルァ！　ハルナ！！　アサキに包丁持たせんなっつってんだろうが！？　アサキ＋包丁＝自殺行為なんだか――うぎゃあ！！！！！」

「ごめん、今の発言聞いてたらつい」

「あ、アサキ！　アサキはつみれ汁やってくれないか！？」

何が「つい」なのかは分からないけど、アサキ君は的確にロクジョー君を狙ってました。ピーラーが飛んでくるとは思わなかったけどね～。ハルナ君も慌てて包丁を回収していたけど、多分其れはアサキ君の計算だと思――うん何でもない！！（※包丁は投げないでください）

ハンバーグはとても美味しかったです。

そんな話をしながらリョウちゃんと一緒に下校したら、リョウちゃんは大爆笑でした。

「ほ、包丁投げたら危な――あはははは！」

「リョウちゃん、何がそんなに楽しいの？」

リョウちゃんのツボがこの時ばかりは分からなかった。というかリョウちゃん、何か空笑い気味じゃない？　何かあったのかな……。

自宅には既に帰って来ていた弟が居ました。何かげっそりしてたけど。

「い、いやぁ、何でもないんだ、遅刻の罰として一日雑用係にされただけで――」

お姉ちゃん遅刻じゃなくてごめんなさい……！　小学生になんて酷なことをしちゃったのかしら……！！

ごめんね、せめて美味しい夕ご飯を作るから……！！

「――という感じで今に至るのでした～」

「……何が？」

今日も楽しかったな～、明日から休みなのがちょっと残念。

というか、今思い出したけど大変。昨日ってもしかして――

126＋秘密のお誕生日計画？／前

「はぁ……」

アサキですが、今のため息は僕じゃない。僕とカイト、ユキの他に一組に居る奴と言えば――ランしか居ないのだけど。

「んぁ？　どうしたよモモ」

ため息の主にカイトがそう言うと、普段の此方が幸せになるくらいニコニコな笑顔が曇っているランがカイトを見た。

「んーんー？　何でもないんだよ～？」

「嘘つけ、何かなきゃモモがため息なんかつかないだろ？」

「そうだね！　何時だってニコニコなモモが何も無しにため息をつくだなんて、世界が一日五回転したってありえない話さ！」

「ユキ君、私に恨みでもあるの……？」

ユキが話すとややこしくなるな。

「んで、何かあるんだろ？」

「んー……実はね――」

結局何かあったのか、僕等は全く気付かなかった。
だからランは少し溜めてから苦笑、といった笑顔で言う。

「――リョウちゃんの誕生日、忘れちゃってて」

……だから？

「アサキ君、今だから？　って顔したでしょ」

「何故バレた」

「知らないのかいアサキ！！」

何故バレたんだよ、教えてくれよ。僕ってそんなに分かりやすいのか。
とか考えてる内に阿呆が反応しやがった。座っていた椅子をガタンとぶっ倒し立ち上がりやがる。

「女の子にとって誕生日とは大切な行事なのだよ？　忘れてしまっていたのは仕方ないが、さして心配するはその後、いかにして相手を祝うか――ということさ！」

「わぁ、流石ユキ君だね！」

「ユキは野郎だけどな」

僕の周りはこんなのしか居ないのか。

「私の誕生日は、リョウちゃん大きな可愛い犬のぬいぐるみをくれたのー」

「モモって誕生日何時なんだ？」

「四月だよ？　ロクジョー君は？」

「あ、俺二月」

「ちなみに私も四月なのさ！！」

「わ～、ユキ君近いね～」

「お前等、話題逸れてるぞ」

僕の指摘でハッとする三人。こいつ等は絶対徐々に何話してたか分からなくなるタイプだ。

「でね、ＳＷ中ずーっと何が良いか考えてたんだけどまーったく浮かばなくて……」

「へぇ……」

「うわ、アサキ全く感情篭ってねぇ」

仕方ないだろ、やる気ないんだから。

「でもアレだね、女の子という種族は何故そんなにも誕生日を気に

するんだい？」

さっきまで力説してた野郎が何を。ユキは再び席に着いてランに尋ねた。

……それもそうだな、誕生日なんて結局只の生まれた日、僕にとっちゃゲームの発売日の方が気になって仕方がない。

「――特別、なんだよ？」

ランは普段と同じにっこにこの笑みでそう言った。

「女の子だけじゃなくて、大切な人が生まれた日は、ちゃんとお祝いしたい。だから私はリョウちゃんだけじゃなくて、こんな私と友達になってくれた三人の誕生日もお祝いしたいよ？」

「「……」」

凄く深い良い話だ―。

しかし三人の誕生日、といってもユキは既に去っているらしいし、カイトは確か――

「カイト」

「あん？」

「お前の誕生日、今回来るっけか」

「ああ、来ねぇな」

――閏年だったよな。

「いいんだよ～、そうしたら前日に祝うの～」

何でも良いのか。まぁ、カイトもそれで満足みたいだからいいか。

「で、カトウの話は何処行った」

「「あ」」

また逸れた訳だ。

「私に良い案があるよ！」

ガタン。ユキはどれだけ立ち上がるのが好きなのだろうか。いちいち立つな、煩わしい。

「話が盛り上がったのだから、豪勢にいこうじゃないか！」

ユキの笑顔が何かを含む笑みに変わった。くすり、と笑みで歪ませる感じに。

まあ要するに――僕が巻き込まれるのは、必須事項だとでも言うかの如く。

127＋秘密のお誕生日計画？／後

「という訳で、レッツだお買い物たーいむ！！！！」

周りがワイワイキャイキャイイェイイェイ騒ぐのは構わないが此処店の中だから、公共の場であまり騒がないでよ、アサキです。引き続いてます。

「一週間以上誕生日が過ぎ去ったリョウコはきっと『はぁ、モモったら、きっと私の誕生日なんか忘れちゃったのね……友達だと思ってたのに、ぐすん』となっているはずさ！」

うん、ユキ気持ち悪い。

「そんなリョウコに今から渡すプレゼントを皆で決めようじゃないか！！！！」

「「おー！！」」

「お～♪」

「……」

意気高らかなのはもう慣れたよ。

だけど気になることが約二つ。ひとつはカトウの誕生日が一週間以上過ぎているにも関わらず普通にプレゼントを渡すだけじゃ確実に忘れてたことを誤魔化せないこと。後ひとつは――

「ねね！　リョウちゃんってお人形とか好きかな！？」

「うん、リョウちゃんはお人形とか凄く大好きだよ～。可愛いものが好きなのー、可愛いでしょー」

――何故お前が居る、ユウヤ。

「おい」

「キラリン！　何だいアサ君！」

「今のキラリンなんだよ」

「効果音☆」

じゃなくて。

「何で居るのよ」

僕等は学校帰りに来たはずなんだけど。お前に声掛けた記憶はないんだけど。そんなことを思いながら言ったら、物凄く――は？みたく変な表情をされて、

「何言ってんのアサ君……俺が面白そうな企画壁越しに察知出来ないと思ってたの……？」

と言われた。

……ん？

「出来るのかよ……！！」

おま、双子の兄貴の知られざる裏技だよ此れ、気持ち悪ッ！！

更に笑顔なユウヤがムカついたので、僕等はちゃっちゃと買い物に移ることにした。というか僕は早く帰りたいんだ。選び方はこう、一人ひとりが良いと思ったものを持ってその中から選ぶ。無難だ。

だが、

「あ、アサキ君は後でやってもらうことがあるから、選ばなくても良いよ？」

と、ランが満面の笑みで言うものだから、僕は勿論お言葉に甘えて其処ら辺の室内ベンチに座った。

「俺が絶対良いの選ぶからね！！」

「はん！　この俺様に決まってんだろ！？」

「皆、頑張ってね～！」

「はっはっは、モモ、君は頑張る気ないのかい？」

そういや抱いていた最初の疑問を残したまま、そんな台詞を吐きつつ各々散らばっていったけど――あれ、後でって、僕何するのさ。

まずはラン。

「こんなのはどうかな？」

持って来たのは大きなテディベア。でかい、極限でかい。ランとテディベアどちらがでかいかと聞かれればテディベアでかい。

「モモちゃん！　何時からテディさんになったんだい！　こんな毛むくじゃらになっちゃって！！」

「テディーさーん！！」

ユウヤとカイトが五月蝿いから却下。というか持って帰るのが困難過ぎるから。人形抱えてる人だか人形に引っ付いてる人だか分からねぇよ。

次、ユウヤ。

「でーん」

洋服。

可愛いらしい洋服。純白でレースの透き通る、光に当てればキラキラとスパンコールが光りを放つ――

「此れ、何歳用だよ」

――シンデレラのドレス。

「おもちゃ売り場にあったのさ」

「リョウちゃん流石に着れないよ～」

まずおもちゃ扱いされている服を持ってくるな。

「しかし可愛いといえば可愛いね」

「ユキちゃん！　でしょ、でしょ！？」

「ユウヤ趣味良いな？」

「うん、ただ俺が昔だったら欲しかぐはぁ！！！！」

ユウヤが何か世間体でバレてはいけないことをバラしかけたので却下。

「ちょ、あ、アサキ死ぬ――！！」

聞こえない。足元から何も聞こえない。

「見事な飛び蹴りだったよ、アサキ」

「日頃からあれくらいアクティブならなぁ……」

他の野郎の言葉も聞こえねぇよ。

次、カイト。

「ほい」

「……」

「あー君、反応して」

「いや、反応しろと言われても……」

カイトが持ってるのは蛙の人形。

「……げこー」

蛙。

「蛙だね」

「蛙だねー」

「蛙だねぇ」

「何故に蛙」

「やっとツッコミやがった！！」

ツッコんで欲しかっただけかよ。

「いやさ、探し回ったんだが……――どれも破壊力に欠けるというか……」

「お前は誕生日に破壊力あるもんしかあげられないのか」

照れたように頭を掻いているが、誕生日に破壊力は要らんと教えた方が良いのだろうか。一般教養の中に無いのか、それ。

「リョウちゃん、蛙嫌いだよ～。この前『この軟体め！！』て怒ってたもん」

「マジ？　やりィ！」

「何がだ。というか怒り方に問題有な――」

「この蛙野郎！！」

「お前は黙ってろ」

蛙は軟体動物じゃないだろってことが言いたかっただけなんだけど。なんか落ち込んじゃった飽和馬鹿ことユウヤは放っておいて、破壊力抜群の蛙は却下だ。

最後がユキ――ろくな物持ってきそうにないが……。

「こういうのは可愛くないかい？」

ユキが持ってきたもの、其れは――簡易的でシンプルで、同系統な言葉を二度言ってしまう程質素な指輪だった。黒と白がクロス状で交わっている、僕が見るに綺麗な指輪。

其れを見て言った最初の一声は、

「「ユキにしては普通」」

というカイトと僕の言葉だった。

「おや？　君達は私をどんな人間だと思っていたんだい？」

「いや」

「まぁ」

「「変人」」

「あっはっは！　二人共、殴っていいかい？」

爽やかなユキを眺めてから、其の指輪をランに渡す。うわぁ、と

感嘆の声を聞く所、――気に入ったみたいだ。

「リョウちゃんにぴったりだね！　うん、ユキ君のにしようよ！」

「さんせー！！」

ランとユウヤが騒ぎ立てて、無事此れで決まった訳だ。やっと開放されるんだと思えば身体が軽くなるもので。

「じゃ、帰る」

スタスタと先走って帰ろう。そう歩き出した僕の腕を掴んだのは――常識を逸脱するくらい珍しく、ランモモ、といった普段は大人しい女の子であって。

「アサキ君、アサキ君の役目はこれからだよ！」

普段の柔らかな笑みというよりは、意思を持った元気な笑み。是が非でも離してくれなさそうな其の腕を見てから、僕は諦めてため息をついた。

何、何する訳？

１２８＋秘密のお誕生日計画！

リョウコです。１５歳です。
中学三年生です。誕生日が過ぎました。

誰にも祝ってもらってない私。

「――淋し過ぎるわっ！！！！」

何よ！　年頃の女の子が誕生日だってのに誰にも祝われないって！！　私淋し過ぎるじゃない！！

「お姉ちゃんのこと？　まぁ確かに――独りで騒ぐだなんてなんて淋しいのかしら――」

「アンタは黙ってなさい！！」

こんな妹はおろか、両親ですら誕生日忘れやがって……！　まさかと思って待ってみても、一週間以上経ったら流石の私も忘れたんだって気付くわよ！？

「仕方ないわね、何がなんだか分からないけど、邪魔な私は出掛けてくるわ」

「いってらっしゃい二度と帰らなくていいわよ」

「あら酷い、ちなみに行くのはユズのところだから……ふふっ」

「うわ！　今なんか凄く勝ち誇った表情したでしょ！？　ムカつくわね真面目にアンタって子はあああああ！！！！」

あの子が居なくなって。

自宅に一人ごろんごろん。周りの人形を触ってみるけど、何の変哲もない綿入りふわふわ人形だった。――ムカついたから投げた。跳ね返ってきて顔面に直撃した。……はぁ。

誕生日なんて、正直どうでも良いんだけど。でも。

「はぁ、モモったら、きっと私の誕生日なんか忘れちゃったのね……友達だと思ってたのに、ぐすん」

――モモに忘れられちゃったのかもしれないってことに、ちょっとだけ淋しい気分になる。

毎年ちゃんと祝ってくれてたのって、あの子だけだから。そう思うと、

「――私って、友達少なっ」

と思えて泣けてきた。

――ぴーんぽーん。

「……人が落ち込んでいる時に誰よ」

ネガティヴにネガティヴが重なるなんて嫌なんだからね。誰も居ないから仕方なく出るけど、これが宅配便のおじさんとかで、「お隣りの荷物預かってくださーい」とかだったら全力でやる気が萎えるわよ。せめて若いお兄さんであって欲しいわ！　――そういう問題じゃないわよ！！

「はーい」

私はやる気なく（※でも律儀に）返事をして、ドアノブを捻った。インターフォン？　そんなの後で誰だか分かるんだから良いじゃないの。

「お届けものです」

うわ、案の定。私ってもしかして超能力者？　かなり参っていたのかはよく分からないけど、よく分からなくなっている思考回路にため息をつきながら、私はまっすぐに向き直った。

――一瞬で、思考回路が吹っ飛んだ。

「どうも」

「――は……？　な、何で、なななななああああ！！！！」

「お届けものですって」

バタン。

――とりあえず閉めました。

ちょ、ちょっと待ちなさい。今、今のって配達員のお兄さん……？　にしては若くなかったかしら……？　あ、あの身長じゃどう見ても中学生よ。

「え、閉めないでよ」

しかも、帽子被ってて見えなかったけど、こ、此の声って……ま

さか……。

「ひっ、ヒコクアサキ!?」

ガチャン!!　ガツン。

我に帰って扉を勢い良く開けたら、何やら渇いた音がした。……あれ？　ヒコクアサキの声だったと思――

「い、いったぁ――」

きゃあああああ!!!!

「ごめんなさいっ！　頭ぶつけたの!?　ごめんなさいごめんなさいそんな近くに居るとは思わなくって!!」

慌て過ぎた！　滅茶苦茶痛がってしゃがみ込んでた!!　キャップの帽子め！　ちゃんと彼を守んなさいよ!!

「閉めた君の所為だ……」

「ほ、本当にごめんなさい……なんか、その、変な人かと……」

アナタだと思ったらテンション上がり過ぎて――とかは言えないわよ。

にしても、何よアンタその格好、キャップに作業着みたいな服着くさって。本当の宅配便にでもなるつもりなの？

「――というか、何か用……？」

家まで着、……着て、くれちゃって……。

「だから、“お届けもの”です」

「え……？」

「ランモモさんから、君へのお届けものですって。僕宅配便だから」

お届けものにしては無造作だったけど、放るようにして自称宅配便は私にお届けものとやらを渡した。

……モモからの、お届けもの……？

「ただいま戻った」

「ど、どうだった！？」

カトウの家から徒歩三十秒の位置、家の影で僕を待っていたのはランと、その他数名の野次馬。

「略すなよ」

「心読むなよ」

慌てたように僕に駆け寄ったのは、珍しくもランで。きっと、カトウが喜んでくれたかを心配してるんだろうけど――飛んだ無駄足だな。

「カトウからの伝言」

「？」

「“後で私の家に来なさい、以上”」

「ふぇ！？」

あ、ビクついた。怒られるとでも思ってるのだろうか。
そんな訳あるはずがないのにな、カトウのあの嬉しそうな表情を見る限り。

「リョウコ、気に入らなかったのかな？　やっぱ蛙の方が――」

「それはねぇよ」

カイトとユウヤの茶番劇は放っておいて、僕は未だ続くカトウの伝言を続ける。

「“五分で来なさい”」

「えぇ！？　早いよ！？」

そう騒ぎながらも、ランは慌ててカトウの家へと走って行った。
大丈夫、お前の足でも一分かかるまい。

「アサキ、リョウコは喜んでくれていたかい？」

ユキのニコニコ顔、久しぶりに見た気する。頭が未だ痛い所為だろうか。
でも後一つだけ言わせて、

「そうみたいだけど、ねぇ――僕が行く意味あった……？」

其れが一番気になるんだけど。其処に残る三人は皆苦笑いで頷いてたけど、さっぱり分からない僕の利点。
でもまぁ、呼び出されたランはきっと――カトウと二人で笑い合えてるんだろう。

其の片棒を担げた――良い意味でな――なら別に構わないかと、被り直した帽子を手に、僕は思った。

129＋未来のことは未来で考える。

「ユウヤ、知っていますか？」

俺にそう言ったのは、穏和な笑顔が印象的な学校帰りなアスカ其の人だった。ユウヤです。

「ん、何が？」

「もう、十月なんですよね」

いや、知ってるけど。

「受験まで、もう半年無いんですよね」

「……」

何やら深い話な予感。基、心臓に悪い話な予感。

「ユウヤはもう、受験勉強はしていますか？」

「え、あー、全然」

「ですよね」

ですよねって言われた。アスカだから許すけどさ！

「そろそろそういうの、考えなきゃですよねー、って話です」

という話らしいです。

――やべぇ、すっげぇ耳が痛くなる話だ……！！

しかしアスカだからちゃんと話聞こう。

「周りの方々は、よく塾に行っているって聞きますが――ユウヤは行ったりしてないですよね」

「遠回しに『其の頭で行かないで大丈夫かよ？』って聞こえるけど気の所為だよね？」

「あははっ！　俺がそんなこと言う訳無いじゃないですか。――思うことはあっても」

「そうだよね～、思っても口に出さないもんね～、アスカは」

酷い会話だ、戻そう。

「俺、塾には行かないんだよ。やる気がないのに只塾に行ったって、何の役にも立たないって言われてさ」

「へぇ……確かにその通りですよね。ですがユウヤ、本当に大丈夫なんですか……？」

アスカは首を傾げながら俺を覗き込む。どうやらマジに心配されているみたいだ。……まぁ、馬鹿だから仕方ないんだけどさ。だからといって全ッ然勉強したくないし。

「んー……分かんない」

「私立の学校であれば平気でしょうけど……」

「あ、俺私立は行かないよ、お金かかるもん」

余りお金はかけたくない。まぁぶっちゃけ、うちは金に困ることがないくらい余りに余ってるらしいけどさ、父さん医者だし。でも、――出来ることなら公立に行きたいと思ってるんだ。

「どうしてですか？」

アスカは再び首を傾げる。今度は不思議そうに。

俺はにへらっと笑ってみせるだけに留まったけど。

特に理由はないんだ。強いて言うなればただひとつ、

「だって、アサキは私立、行かないでしょ？」

其れだけ。

「――ふふっ」

あ、笑われた。

「ユウヤは本当に、アサキ君のことが大好きなんですね」

「――うん！　大好き！」

笑顔と笑顔がぶつかって。普通は照れたり否定する場面だけど、俺は心からそう思っちゃう訳で。

「一緒の場所に行けなくても良いからせめて、同じ時間くらいには帰りたいな、って。じゃなきゃアサ君が飢え死ぬし」

「それもそうですね」

あっさり首肯された……！　アサキ大丈夫なのか……！！

「あ、それじゃあユウヤ、また明日」

「うん！　また明日ー！！」

アスカの一方的な話で今日は終わっちゃったけど、俺は元気良く手を振ってアスカを見送った。

そういや俺、アスカが何処の高校行きたいのか聞いたことないな……。というかもう決めてるか……？

アスカはそこそこ頭が良いから、きっと俺なんかが届かないくらいの所に行っちゃうんだろうな。そう思えば少し淋しいけど、きっと俺達は大丈夫。ずっと友達で居れる。――根拠は特にないけど。

「さって、帰りますか！」

そうひと言呟いて、俺は自宅に向かって歩き出す。早く帰らないとアサ君に殺されるもん。奴は殺るっつったら殺る……殺られる！！　昔はこんな関係じゃなかった気がするのになぁ、全く。

ま、帰ってから考えよ！

130＋シーズンまっしぐら。

「考え中」

考え中です、普通考えるとき考え中って言わないよね、ユウヤです。

「何考えてるの」

珍しくアサ君が尋ねてくれたよ、お兄ちゃんびっくりだぜ！　しかし確かにアサ君に聞いた方が早そうな話題かもしれない。俺にはさっぱりだもんね！！

「んー、実はね」

「へー」

「……そうなんだよ！　何が分かったのか分からないけどそうなんだよ！」

ああんもう！　真面目な話なのにー！　漫画見んなよ！　漫画から目ぇ離してお兄ちゃんを見なさい！！

「で？」

「聞き返すなら言い返すなよ」

「じゃあ聞かない」

「まあ落ち着けよ、お互い冷静になろうぜ」

という訳で。

「あのねー、この前、アスカと高校についての話をしたんだー」

「へえ」

「俺さ、高校行けるかな？」

「行けるよ、私立なら」

そうじゃなくてですね。

「俺、公立に行きたいんだよ」

自分の中ではかなり真面目な表情で言ったつもりだったけど、アサキは滅多に見せない驚愕の表情を見せた。

え、そんなに無謀……？

「おま……その頭で、か……？」

「うん、行きたい」

「真面目に……？」

「うん、真面目に」

俺が真面目なのをやっとのことで悟ってくれたらしいアサキは、驚愕のあまり落としそうになっていた漫画を拾って――最早落ちてるね――横に置く。アサキと同じとこ行きたい、って騒いでたんだから、公立に行きたいって思ってるのを悟ってくれてると思ってたのに。

「理由は」

アサキはポツリと続ける。やっと真面目に聞いてくれるみたいだ。此処でふざけたら二度と話聞いて貰えなくなるので、ちゃんと答えます。

「俺、金かければ絶対行けるようなとこ行きたくないんだよね。百歩譲って、アサ君と一緒のとこじゃなくても良い、だから――」

「無理だな」

一刀両断とはなんという……！　未だ途中だし、俺結構真面目なんだけど！

「ユウヤ、今のお前の成績じゃ無理だ」

「そ、そんなの分かってるよ！！」

「分かってない」

アサ君はあたかも『何だ、そんな話か』とでも言いたげに漫画を

再び手に持った。また読むのか、話聞いてくれるんじゃなかったのか。

「お前の内申書じゃ前期は無理だ、絶対に」

――と思いきや、アサ君は再び語り出すのだった。

「お前の内申は３０プラマイ１、２といったところだったか。しかも内１８から２０は実技科目ときた。どんなに面接が上手だったからといって、お前が受かれるような学校は相当の低レベル、行ったって――いや、是が非でも行かせない。そして賭けるのは後期。――五科の内申１０前後のお前が、どうする気だ？」

「え、ど、どうするって……？」

「内申云々の問題じゃなくて。内申１０のお前が、賭ける為のテストで何点取れる？」

「……」

視線はこっちに全く向いていないのに、すんごい勢いで圧力をかけられている。テストで何点……？　――いや、上限が分からないだけじゃなくて、テストで良い点なんて、取れる訳ない。

「さあ、それでどうするよお兄ちゃん」

全棒読み。漫画から目は離さずに、アサキは俺に言ってのけた。

「……」

――やべぇ、なーんにも浮かばねぇ。付属、爽やかな笑み。

でも考えてみる。俺が公立高校に受かる為にどうすれば良いのか、試験である五科目を切り抜ける為には。嗚呼あっさりだ、そりゃひとつしかないでしょうに。

「――勉強？」

「まあ、そうだな」

アサ君からもそんな返事だし。やる気だそうぜ。

「只の勉強じゃ駄目だよ」

ま、やる気なさそうに見えて実は考えてくれているところが、アサキの良いところなんだけどさ。

「お前が本気で国公立に行きたいんなら、一から勉強し直すべきだよ。参考書でも買って、毎日全教科一頁で良い、そうするべきだ」

「勉強、か……」

「絶対、そうするべきだよ」

僕が言えるのはそれだけかな、アサキはそう言って全く喋らなくなった。ほんと、言いたいことだけ言うなぁ。

お前が本気で国公立に行きたいんなら――か。

「あ、もしもしマヒル兄？　俺、ユウヤだけどさ、今度の土日買い物付き合ってよ！　……え、服じゃなくて、ドリル的なの買いたいんだよ、金は母さんに頼……え？　べ、別に頭強く打ったりしてないから！　いや！　兄貴がそんなに驚かなくたって――」

そんな廊下での通話中、アサ君が遠くでくすり、と笑ったのを、俺は聞き逃さなかった訳で。

１３０＋シーズンまっしぐら。（後書き）

遅過ぎる受験シーズンです。

こいつ等が受験生なのを、作者はたまに忘れます（Σ

131＋情報収集。／前

こんにつは、別に間違えてないよこんにつは、引き続きユウヤです。

マヒル兄に凄く心配されながらも遅くながら受験に向けて頑張ろうと決めた俺。アサ君が一緒に頑張ってくれるはずもないんで、一緒に頑張ってくれる人、又は頑張っている人を見つけようと思います。

「おっはよ！」

とりあえず、まずは同じクラスから！

「「おはよー」」

「あ、何か久しぶりに見た」

「久しぶりとか言うなよ」

「毎日会ってるだろー」

俺の表情を見るや否やぐだーっと文句をつけてきた。ていうか真面目誰だっけ？

「セイカだ！！」

「ライテだよ！！」

「ああ、ダブル」

「「まとめんな！！」」

だって息ぴったりじゃないかよう。

「久しぶりに声かけてきたかと思いきやこの仕打ち何……？」

「はいはい、どうせ僕達はその程度の人間だよ……」

「ちょ、待って待って！　分かってるから！　いや、忘れてたのは事実だけど大丈夫だよ！？」

自分達の存在理由まで考えられても困るので、慌てて宥めて本題に入る。

「二人はさ、高校とかどうするつもりでいる？」

「「高校？」」

やっぱり息ぴったりじゃないか、というかもう君達が双子なんじゃないの？

「俺馬鹿だから私立行くぜー、楽だしな」
「僕は併願で公立に行きたいかな」
しかし、此処でダブルに違いが現れた。
「え、コウスケ楽狙いなの？」
「当たり前じゃねぇか！　勉強なんかしたくねぇもん。お前こそんな頭で大丈夫なのかよ」
「失敬な！　僕だってちゃんと勉強してんだからな！！」
二人がやんややんや騒ぎ出した。何時も一緒に居ても、お互いそういう話をしたことなかったんだろうなー。
「ふーん、じゃあ二人は違う学校ってことになるんだね」
「まあな」
「うん」
なんかあっさりと頷かれたけど、そういうのって、淋しかったりしないのかな？　だって俺、皆と別れるの嫌だもん。
「ま、ソウとは何時でも会えるしな」
「だよね、家近いし」
そんな俺の考えは何のその。はっはっは、と素敵に笑い飛ばして

くれましたよはっはー。

「一緒が良いなんて皆そうだろ、だけど別に皆と一緒じゃなくたって……なぁ？」

「ねー」

「……」

ダブルが実は大人なことを知った。

「「まとめんな！」」

「それでこそ君達☆」

二組は聞き終わったから一組に行こう！　ちなみにアスカは今日休みだ。流石アスカ、久しぶりに休みやがった。人が話したい時に居ないのがアスカクオリティ……！！

一組といえばカイト君、さってはて、カイト君はいずこー？

「嗚呼、カイリなら休みだよ？」

アノヤロウ。

そうニコニコと教えてくれたのはユキちゃんでした。どうやら新

型のインフルエンザにやられたらしいです。――本当に免疫力ねぇなカイト君。かかれる病気はとりあえずかかっとけみたいなことなのだろうか。

「じゃ、ユキちゃんに聞くー」

「おや？　私で良いのかい？」

ユキちゃんと俺とじゃ知能指数的な問題で聞いても分からなそうだから聞かなくて良いかな、と思ったんだけど。聞けるなら聞いとこう。

「ユキちゃんって高校とかどうするの？」

「え？　未だ決めてないが？」

あら。意外な答えだった。

「え、決めてないの……？」

「勿論だとも！　私は専ら興味無いね！」

この人実は駄目人間なのかもしれない。アサキと一緒じゃないか。

「けれど、何時どう転ぶかは人生分からないから、勉学は怠っていないよ」

「え？」

「日々精進さ。どれだけ蓄えても、困ることなど無いのだから」

「……」

「一日一時間、いや、三十分程度かな……？　私は時間を決めてやっているよ」

――真似出来ねぇ……！！

ふぅむ、決定する前にまず実力を付ける訳か……。決定も実力もアレな俺、どうするよ、俺……！

やはりユキちゃんと俺とじゃ頭の出来から違うみたいだから、もう少しレベル下げよう。下げようって言ってから話し掛けるのは失礼過ぎる気もするけど、とりあえず心の中だけで謝って次に行く。

「モーモちゃーん！」

「は～い」

ごめんなさい――よし謝った。

クラスの中でふにゃふにゃしていたモモちゃんを発見、ふにゃふにゃしたまま此方に来てくれた。

「ごめんね、お友達と話してた？」

「ううん、大丈夫だよー？　よく分からない話を上手く聞き流してただけだからー」

問題発言だよ、モモちゃん。

「それでユウヤ君、どうしたの？」

「あ、えっとねー――」

高校についての下りとか、勉強の下りとかをモモちゃんに言ったら、モモちゃんは何時もと変わらない笑顔で、

「全然考えてないよ～」

と言われた。

やっと見つけたよモモちゃん、俺は君を探していた……！

「まだ実感が沸かないっていうのもあるんだけど、やる気が起きないのが一番かな……」

「モモちゃん、ぐっじょぶ」

「学校から帰ったら、ご飯食べて本読んでたまに弟と遊んだりして寝るの。勉強する時間なんてないよー」

うんうん。俺だっておんなじだよ。

「――だけど、も少ししたら頑張ろっかなって」

「あ、俺と一緒」

「わ、ユウヤ君と一緒なの？　だよね」

ほやほやと駄目人間同盟が結成されそうになりながらも、俺な内心本当に安心していた。皆もう頑張ってるのかなー、って、追いてかれたのかなー、って。

「未だ未だ大丈夫だよ、今からだって遅くないよー」

「だよね！」

「だからユウヤ君、これから頑張れば問題なんてこれっぽっちもないよ！」

成績的にも身長的にも俺より低いモモちゃんからの助言――というか、モモちゃんは大丈夫なのか――なのに、凄く力強い言葉に聞こえる。弱々しいモモちゃんは何処へやら。

この後、何だか慌てて謝られたけど、モモちゃんって忙しいな。

「あれ、そういえばアサ君居ない」

「アサキ君なら帰ったよー？」

「ええ！？　聞いてないし！」

「さっき、『頭痛い腹痛い胃辺りが捩り曲がって取れる』――って棒読みで言いながら帰ったよ？」

野郎、仮病じゃねぇか。

「アサキなら恐らくカイリの家に寄るんじゃないか？」

横からにゅっ、と現れたユキちゃん、まあ、何だかんだカイト君休んだら毎回行ってるしね。

とりあえず、帰りに寄るかな。

132＋情報収集。／後

引き続くユウヤです、学校帰りです。あの後他に誰が居るかと考えて、独り三組なリョウちゃんのところに行きました。

『え、高校？　そんなことよりヒコクアサキは大丈夫なの？　早退したんでしょう？　――は！？　別に心配したっていいでしょ！？　友達の心配をしてるのよっ、悪い！？』

――けれど弟の仮病の所為で全く話が聞けなかった。畜生、リョウちゃんって仮病に気付けないんだろうな。あの棒読みにも引っ掛かるんだろうな。

という訳で、アスカもアサ君も居ないんで一人淋しく下校と洒落込んでいるのさ。お見舞いの為にカイト君の家に向かってるけど、アサ君まだカイトん家に居るかなー？

ぴーんぽーん。

インターフォンを長押しして早数秒。中からどたどたと音がする。ウミさんかなー。――それにしても俺の周りの人達って滅多なことじゃインターフォンを活用しないよね（※自分含む）。

ガチャ。

「はい」

……。

「「あ」」

正直吹き出しそうになったよ。

「――どう思うよ、双子の弟に違うお宅で出迎えられるこの様」

「僕だって同じ気持ちだよ」

まさかアサキが出て来るとは……！

数秒二人して固まって、直ぐに訳を話したアサ君。どうやらウミさんがお買い物に出ているらしい。

『あらアサキ君！　カイちゃんのお見舞いかしら？　確実に未だ学校の時間だけど、お姉ちゃんはカタいこと言わないわよん』

『それは助かります、でも別に見舞いじゃ――』

『しかもちょうど良かった！　今からお買い物に行こうと思ってたんだけど、アサキ君が居てくれるなら安心ね！』

『え、ちょ――』

『それじゃあカイちゃんのこと宜しくね！　多分寝ちゃってると思うけど』

『……はい』

「――という訳」

勝手にリビングに通されて、アサキの話を聞いた俺。どうやら話の通りカイト君は寝ているのか、リビングにはアサ君が相当頑張って暇を潰した跡が残っていた。

「ウミさん、いつ出掛けてったの？」

「午前中」

――もう放課後なんだけどどういう。

そりゃあ暇になるわなー、俺だったら寝るな、寝る。

何だかんだ任された仕事を放り出せないアサ君だもんね、カイト君を起こす訳でもなくげっそりしてる。ていうかウミさんどうしたよ。

「ねーちゃーん……？」

ふとリビングの扉が開いた。どうやらカイト君が起きたみたいだ。

アサキの話を聞く限り大分長時間安眠なさった様子だね。

「あり、何故にお前等が俺ん家に居るんだ」

「「お邪魔してます」」

普段とあまり変わらないけど、少しだけ顔の赤いカイト君に事情を話すと、その場でぐったりと倒れた。

「えー、ねーちゃん居ねぇの？　腹減ったから何か食いたかったのになー……ユウヤ何か作って」

「え？　うんいいよ？」

ソファでぐったりしながらジタバタするカイト君からそう要望されたので、俺はあっさりと立ち上がってキッチンに向かった。

「食欲あるなら平気じゃないの？」

「んー、俺様は元々大丈夫だー」

「黙れ病人」

「そんなこと言っちゃってー、俺が学校休むと毎回来――」

「別に見舞いとかじゃないから。貴様が熱に浮かされて弱っているところを嘲りに来てるだけだから」

「ちょ、酷、全力で酷ぇ」

リビングからのそんな微笑ましい――え、微笑ましいでしょ？――会話を聞きながら、俺は適当に見繕った材料で何を作ろうかと考

えていた。

何か平和だなぁ。こうやって平和が続いてると、何か高校のことなんてどうでもよくなってきちゃったぜ！

――でもそれはダメダメ。ユキちゃんを見習って、急がなくても良いから、勉強だけでもしなきゃ！

結局、そんな結論にたどり着いた一日だった。中途半端な結論だけど、其れが俺だからね。

「ユウヤ、知ってる？」

何やら長時間に渡って買い物に出掛けていたウミさんが帰って来てから、俺達は家に帰ることにした。カイト君、元気そうで良かったよ。

「え、何が？」

「受験とか考えるのは良いことだけどさ」

「うん」

「――来週、テストだよ」

――うわあああああああ！！！！

全力でテスト勉強をしよう、そう誓った瞬間だった。

平和なんて訪れねぇよ！！

133＋戦後の廃人を目覚めさせる為には。

アサキです。

「ただいまー」

だが今のは僕じゃない。テストが終わって目の前で本気の落ち込みを見せるユウヤはソファだし、他に帰って来るといえばまあ一人しか居ない訳で。

「お、二人共居るじゃん」

「お帰り」

「……」

珍しく僕が返事をして、ユウヤは全く反応しない。そんな様を不思議そうに声の――、マヒルが見ている。

「テストが悲惨だったんだよきっと」

そう言ったらやけに納得した表情をしたマヒル。其れで納得されるユウヤってどうよとか思ったけど、当の本人は体育座りで座っている。

「で、兄貴どしたの」

「ん、特に理由は無いんだが」

無いらしい。

「だけど今からセツとウミが来る、構わないだろ？」

あるじゃないか。

「まあ。でも其の前に」

「？」

「――此のネガティビアンを二階に運ぶべきだよ」

兄貴は此れにもあっさり納得してくれました。

「――という訳なのよっ！」

それから数十分後、何の話かはよく分からないけど何か白熱して

語るウミさんと、

「へー」

的確な位置で相槌を打って話を流しているセツさんがやってきた。
セツさん何やらレベルが上がった気もする。

「アサキおかわりー」

――プラスα。

「何でお前が居るの」

「え？　だって姉ちゃんがお前ん家行くっつーから」

「だからって付いて来るなよ」

飲み物のおかわりを要求するカイトが付いて来た。何だお前。イ
ンフルエンザ何処行った。まぁ、治ったのなら何よりだが。

「――だからセツも気を付けなさい、分かった!?」

「おう」

「――で、何しに来たんだったかお前等」

そしてウミさんの話が終わったのを見計らって的確に話題添加を加える兄貴、何事に対しても一番器用なのが此の人なんだろうな。

「あ、そうだったわね！　ねぇねぇマヒル――ハロウィンパーティーしない？　昨日セツと話してたのよー！」

「そうそう、パーティー良くね？」

「ソノハナシノタメダケニウチニキタノカオマエラ」

まさか兄貴が片言になるとは思わなかったけど、確かにそんな話なら他所でも出来るだろうに。さっきまでの白熱話は何処へやら、ｗｋｔｋ（ワクテカ）気分でマヒルを見るウミさん。

「だって最近寒いんだもん」

「寒いからと言って人自宅を使うのかお前は」

「でね！！」

マヒルの反論は見事にスルーされた。

「カイちゃんやアサキ君達も混ぜて、皆でパーティーしましょ！って話なのよ」

だからカイトを連れて来たのかもしれない、そんな思惑が――と思ったんだけど、ひたすらにコーラを飲み続けるカイトを見ていた

ら完璧に違うと分かった。

「アサキ達も？　つーと、アサキ達の友達も入る訳か？」

「ま、そういうことになるわな、どうだよアサキとカイリ君、君達友達で来そうな奴居るか？」

セツさんにそう声をかけられ、ふとカイトと目を合わせる。

「「――まあ、確実に」」

先ずユキとかな、あとアスカ君とかユキとかユキとかユキとかユキとか――（※エンドレス）。

「絶対ユキは来る」

「ユキ？　――嗚呼、あの可愛らしい子か」

マヒルが少し考えてから頷くが、其の解釈でちゃんと男だと分かっているのだろうか……？　気になる点だがまあ今は良いとしよう。

「大勢でわいわいだなんて楽しそうじゃない！　此処の家だったら沢山呼んでも大丈夫でしょ？」

未だｗｋｔｋ状態のウミさんはニコニコと僕等を見遣る。まあ、家でやるなら楽で良いけど、そういう騒がしいイベントは本来――

「その話、此の俺に声を掛けずに進めるだなんて許さない！！！！」

――このお祭り男爵の役目だと。……うわあ、部屋に押し込んで来たのに、復活しちゃったよこの野郎。

「あ、ユウヤ」

「皆呼ぶからね！　俺に任せてよ！！」

「うん分かったわ、流石ユウヤ君ね～！」

乾いた声でユウヤに気付いたマヒルの声は、ハイテンションな大声に掻き消されたのだが。

ハロウィンパーティーだというのに、日時は其の一週間後らしい。何やらウミさんが準備したいことがあるらしいから。

――ま、楽しみにしておいてあげるよ。とりあえずは。

１３４＋トリックオアトリート！

アサキですが。
土曜日だからとのんびり寝ていたら、片割れの
「あーくん！　おっきてー！！」
という久方ぶりの呼び名で起こされた。
だが。
――何故か彼は、金髪の魔女っ子だった。
「トリックオアトリート☆」
「しね」
――寝起きな件を差し引いても、滅茶苦茶イラッとくる発言だった。

「ぶー」

「うるせぇ、文句言うな」

「だってー」

「黙れ刺すよ」

「何で！？」

群青色の三角帽子に同じ色のローブみたいな服、そして金髪のウィッグから一転、普段着に戻った我が片割れと僕は徒歩で出掛けることになった。

『このカードを皆の家に届けるんだよ！』

片割れ――ユウヤが眠気眼な僕に見せ付けてきたのは手の平程度の黄色い紙。その紙には、多分ハロウィンと書きたかったんだろうけど、見事にスペルを間違えていることは言わないでおいた。

『何其れ』

『ハロウィンパーティーの招待状に決まってるでしょ！！　皆の家に届けて回るんだからね！！』

『は？　……そんなのアレだろ、学校で口で言えば――』

『楽しくないじゃん！』

楽しさを求めるな。

何やら僕まで道連れらしかったので、とりあえず普段着にさせたらふて腐れた。どんだけ気に入ってたんだお前。

そして今に至る。

「で、誰のとこ行くの」

というか午前中から回る気なのか？

「先ずカイト君家」

「は？　カイトは知ってるだろうが」

「いーの！　届けるの！」

只楽しみたいだけなんだろうな……。という訳で、届けるメンツの中では一番家の近いカイトの家に行くことになった。寒いから、出来れば早く終わりにしたいな……。

ピーンポーン

「カーイートー君、あっそびーましょ！」

お前やめろ恥ずかしい。小学生か。

ガチャ

「良いぜー！！」

訂正、お前等やめろ恥ずかしい。

インターホンを押して叫んで一秒もしていないのに何なんだお前は。待ち構えていたのか……？

「あ、カイト君カイト君」

「ん？」

「トリックオアトリート！！」

間。

お前まさかそれが目的じゃあないだろうな。カイトは数秒ポカンとしたから身を引いて、

「昼飯、食ってく？」

と家の中を親指で指差した。其れはお菓子じゃなくないか？　というツッコミもしたかったが、ブランチの時間に起きた僕としては腹が減っていたので。

「「食ってく」」

ユウヤと意見が被った。

「まーたー負けたァ！　二人共強いし！　マジふざけんなし！」

昼飯を食ってゲームやっておやつ食べてから本来の目的を思い出した僕とユウヤは、カイトをゲームでこてんぱんにのしてから家を後にした。

うん、有意義なゲーム大会だった。

しかし目的が。

次に近いのはユキの家だな。寒くなる前に行かなければ。

「ユキちゃん居るかなー？」

「大丈夫だ、こういう時にあいつは空気を外さない」

「やあ、アサキにユウヤではないかっ！」

外さない処か、自分から現れやがった。

「何という奇遇かな！　買い物に出た私が君達とこのように出会うだなんて！」

「たまたまだ」

「たまたまだよ」

ユキは買い物袋を片手にオーバーアクションしてくれるものだから、流石のユウヤもそんなテンションだった。

「――で、どうしたんだい？　私に用事があったのでは？」

――そして急に戻るものだから、こいつは扱いにくい。

首を傾げてこちらとユウヤを見比べて、ユキは僕等の返事を待った。

なのでユウヤが簡潔にパーティーについての説明と、カードの贈呈。

そしてユキの反応。

「是非とも！！」

だろうな。

「ハロウィンパーティーだって！？　そんな楽しげなイベントに私を誘ってくれるだなんて恐縮だね！　来週だね？　何か準備しなければならないことはあるのかい？　――そうか、了解さ！　楽しみ

にしているよ！！」

そう言ってユキは颯爽と帰って行った。爽やかな笑顔がより爽やかだったから、相当楽しみにしてるのだろう。

流石はユキだ、うん。

「あ、トリックオアトリートっていうの忘れた」

どうでもいい、次。

「あ、ユウヤにアサキ君。珍しいですね、どうしたんですか？」

次に近いアスカ君の家にやって来た。

「アスカ！」

「はい？」

「トリックオアト――」

「はい」

早っ。ユウヤの差し出した手の上に、アスカは何時もの笑顔でチョコレートを置いた。

「わぁい！！」

「アスカ君、何故」

「ふふっ、用意周到と言って下さいね？　はいアサキ君にも」

アスカ君はそう言って僕にもチョコレートをくれた。……うん、後で食べよう。

「それで、此れで用事は済みましたか？」

アスカ君は僕等の用事が此れだけかと思ってるんだろうけど、此方としては未だ未だある。

ユウヤが再びパーティーについての説明と、カードの贈呈。

「土曜――ですか、良いですね、是非参加させて頂きます」

体調が良ければ、と付け足すアスカ君を見たら、やっぱり仮病じゃない時の方が多いんだなー、と思った。

「チョコレート美味し」

だからどうでも良い、次。

「はーい、――って！？　な、な、何しに来たのよアンタ達！？」

「トリックオアトリート！！」

「無いわよそんなの！！」

カトウの家。直ぐにカトウが出たけど、一刀両断されてユウヤは淋しそうだった。ざまあみやがれ。

「で、何か用なの……？」

ユウヤと僕を8：2の割合で見比べるカトウ。凄く訝しげだ、何か謝りたくなるくらい訝しげだ。

そして三度ユウヤが説明と贈呈。

「ぱ、パーティー！？　な、何其れ、私行っても良いの……？　…良いの？　なら行くわよ……。い、いやとかじゃないわよ！　絶対、ぜーったい行くから！！　……おめかししなきゃ」

3人目だけど、そんなテンパってくれなくても。そして最後の言葉、要らん。

「ふははん、リョウちゃんったらおっとめー」

だからどうでも良いってば、というかどういうこと？　次、最後。

「わあ、アサキ君にユウヤ君、こんな時間にどうしたの？」

可愛いらしく首を傾げてくれたラン。夜分にゴメン、カイトの家で遊び過ぎた。

「モモちゃん！　トリックオアトリート！！」

何時までも言うんだなお前は。カトウのところで一喝されたのによくやるよ。

「あ、今丁度弟がパンプキンケーキ作ったんだけど食べてく？」

「え、良いの！？」

「うん、どうせ食べ切れないから～。配分考えないで作るのが悪い癖なんだよね……。ハロウィンだからって『パンプキン的ケーキを作れるスキルを身につけるぁあああ！！』って叫んで作り出したんだよ～」

ランの弟って一体……。

しかし食べていくには時間も時間だったので、包んで貰って夕飯の後に食べることにした。美味しそう。

そして、そのまま一回帰ろう引き替えしかけて、本件を伝え忘れたので更に引き替えした。ケーキでどれだけ満足なんだ僕等は。ユウヤが説明と贈呈をすれば、ランは何時ものニコニコ顔で、

「うん、行く～！！」

と、何とも簡潔な返事を頂けた。……まあ、良かった良かった。

後、帰り道。

「無事渡せて良かったな」

「うん！」

ユウヤは凄く満足気だった。

「ケーキ貰えたしね！」

そっちか。

135＋読み間違えにはご注意を。

夜です、アサキです。

「んー……」

ベッドでゲームと洒落込む僕の横で、机に向かうユウヤ。

僕が色々言ったことからか、最近本当に真面目に自主学習を始めたユウヤ。なんやかんや決意が固いんだろうとは思っているから、茶々を入れることはしない。――けれど。

「あ、あー……あむ？」

――こいつが一人で勉強がはかどるかと聞かれれば、否だ。

「いっと、いず、――うん？　いっつ？　はあ？」

恐らく、いや、多分英語をやってるんだろうけど、全て日本語にしか聞こえない僕。やっているゲームが頭に入ってこない。

「いっとにははぶ……はず？　もう良いや、はずでいこう！　んで……あ、りー……読めん」

全部平仮名にしか聞こえねぇ。

本当に分からないと思うところ以外自分で考えろ、とは言ってあるけど、本当に大丈夫だろうか。

と考えている内に、ぺらぺらと頁をめくる音が聞こえてくる。違う頁でもやるのか？

「――どんと、のー……ピッコロ？」

――ピッコロ？

「ピッコロ……どりゅー？」

ちょっと待て、ピッコロって何だピッコロって、やけに其処だけ上手いこと発音したみたいだがピッコロって何だ。あのフルートより高い音が出る笛か、それともまさかあの七つのボールを集めて願いを叶えてもらう方か？　どりゅー……描いた？　え、ピッコロが何を描いた？　ピッコロが描けるものなんざ指から出る光線の軌跡くらいだろうが。

「いんざすかい」

ｉｎ　ｔｈｅ　ｓｋｙ！？　やはり後者のピッコロなのか！？

「あ、いけね、次の問題だこれ」

「ユウヤ、ちょっと見せろ」

いい加減ゲームも頭に入ってこないので、電源を切って教えてやることにした。先ずは謎の宇宙人の解明から。

「ピッコロってなんだ」

「ピッコロ？　此処ー」

……何、――これピカソじゃねぇか。

「ピカソだ阿呆」

「ピカソ？　――あ、此れピカソって読むんだ」

読めるだろ。

ユウヤはヘラリと納得の笑みを見せたが、個人的には学力難が否めな過ぎる……！

「えーと、じゃあ次は……下線部の意味？　知るかよ」

「知れよ」

文章問題なんて未だ未だ早い気もするが、こいつにはなんせ時間がないしな。……こんなで今までよく中学生やってたな、寧ろ感心する。

「英語って難しいなぁ。流石アサ君の苦手科目なだけある」

「うるせ、苦手だって良いだろうが、海外旅行の予定は無いぞ」

確かに英語は僕の苦手科目ではあるけど、お前程ではないから安心しろ。少し気を抜けばカイトに抜かれそうな気もするが――やべ、抜かれたらどうしよ、滅るしかないんじゃないか。

「ま、俺は海外行くならフランス行きたいから英語関係ないけどなー」

「じゃあフランス語学べば？」

「難易度上げないで下さい」

英語出来ない奴がフランス語だなんておこがましい、世界共通なんだぞ英語は。

「フランス人に謝って来い」

「ぼんじゅーる」

「誰が挨拶しろっつった」

駄目だこいつ、誰か粗大ごみ。

「えくすきゅぜ、もあ！！」

――は？

「ちゃんと謝ったよ！」

「……嗚呼、謝ってたんだ」

というか言えたんだ、僕がフランス語分からないからよく分から

ないけど。

「アサ君」

「ん」

「あれ、ら!!」

今、何って言ったんだ?

ユウヤはただただ笑っただけだった。

１３５＋読み間違えにはご注意を。（後書き）

実際、ピカソをピッコロと読んだのは作者ですｏｒｚ

テストでそう読んで本気でパニクった経験がありますよ↑

皆さんも気をつけて下さいね（まず読まないよ

136＋ドキドキ☆ハロウィンパーティーナイト！！／前編

「見て見て見てー！　俺吸血鬼ー！！」

「ぎゃー！！　来んな！　十字架喰らわすぞ！！」

「へへん！　俺はにんにく好きだぞ！！」

「おーい、お前等騒ぎ過ぎんなよー。未だ寝てる奴居るんだから」

「「はーい」」

其の寝てる奴だったはずのアサキです。リビングのソファで昼寝をしてたら騒がし過ぎて起きてしまった。

此の声はユウヤとカイトか……通りで五月蝿い訳だ。マヒルの制す声も聞こえたけど、……何だって？　吸血鬼？　――ユウヤもとうとう脳からイカレたらしい。

「あ、起きたか」

「そりゃ起きるよ、騒がし過ぎ――」

正面に座っていたマヒルの苦笑を見てから、五月蝿い根源に目を遣った。其処に居たのは確かにユウヤとカイト――だと思われる人物達――だったけど、あれ……？

「何、其の格好」

目が悪くなった訳ではないはずだ。

「姉ちゃんが作ったんだ、凄ぇだろ！！」

「ねーねーアサ君！　どう？　お兄ちゃん格好良い？」

「嗚呼、ある意味な」

どちらの返答にも同じ台詞を吐いて、僕は唖然と二人を見遣る。

「――立派な仮装だと思うよ」

そうだった――今日は土曜日だ。

先週にそんなことを言い出して帰ったカイトの姉を思い出す。一週間延ばした理由――此れを作る為だったら本気で呆れるんだけど。

目の前の二人は、吸血鬼とミイラ男だった。

「アサ君の血を頂くぞー」

「うっせぇトマト食ってろ」

「アサキー、前見えねぇ」

「うっせぇ包帯外せ」

漆黒のマントだなんて洒落た格好ではあるが、愛すべき弟よりも何故ユウヤの方に金かけてんだウミさん。カイトなんて包帯オンリーじゃないか、適当に見繕ったぜ、ってな気がするぞ僕は。

「で。此れ等を作った当の本人は？」

「徹夜で疲れたから後から来るらしいぜー」

そしてまるっきりやる気がないマヒルはテレビをつけてバラエティ番組を見ている。時刻は六時半、其の、パーティーとやらを始めるらしい時間は確か七時だった気がするのにそうのんびりしていて良いのだろうか……？

「マヒル」

「あん？」

「何か準備とか要らないの？」

「あー、何かパーティー最初外でやるらしいぜ？」

――は？

「何つってたかな……――“ドキドキ☆ハロウィンパーティーナイト！！～季節外れの肝試し大会！？～”……？」

「其のネーミングセンスと其れをフルで覚えている兄貴に吐き気がする」

テレビのリモコンをカチカチと弄りながらそう言うマヒルを見つ

つ、内心のみで本気で嘔吐感に駆られた。何だ其の古臭いネーミングは。

というか今――肝試しって言った……？

「カイト君、前見えてるのー？」

「全然」

後ろで騒ぐ二人を見る。……確かあの二人、怖いもの駄目だった気がするんだけど。

「……ウミさん弟が怖いもの駄目なこと知らないのかな」

「知らないのかもな、ちなみに言えば、ウミも駄目だった気がすんだけどな」

駄目じゃないか。ウミさんは一体何がしたいんだ……？

「とにかく。もう少ししたら皆一旦家来るから、したら出発な」

「うん、分かった」

外に出る気なんてさらさら無かった僕としては落胆極まりないが、出ると分かったのだからマフラーとコートを用意しよう。ただそう思った。

「あ、誰か来た」

ユウヤがマントを翻し――則ち吸血鬼の姿のまま玄関へ向かう。
ちょっと待て、パーティー関連の訪問者じゃなかったらマジで引かれんぞ。
そんな僕の心配を他所に、やって来たのは普通に知り合いだった。

「こんばんは～」

「こっ、こんばんは！！」

聞き慣れた声だな、と寝転ぶ身を起こせば――何故か其処にはピンクと紫の魔女っ子が居た。

「あ、アサキ君は普通なんだね」

「何で普段着なのよ！　私絶対着なきゃかと思って着ちゃったじゃないのよ！！」

そう聞けば、彼女等がランとカトウなことが分かるけど。何故に魔女……？　――まさか。

「ロクジョー君の家寄ってからこっちに来いって、招待状に書いてあったからね」

あの招待状か。スペルが違っていたことについて誰かツッコんでくれただろうか。

というか要するに、ウミさんはあの衣装は皆に作った訳か……！？　まさか僕のも――いや、考えないことにしよう。

こんな寒い日にスカートはかされて仮装させられて、なんと災難な二人。カイトの家から此処までそんなに距離が無いとはいえ、其の格好で外を歩かされたのはさぞ大変だっただろうに。

「リョウちゃん、この服可愛いね～」

「か、可愛いかもしれないけどモモ……今日はただの休日よ！？は、恥ずかしかった……！！」

どうやらランにダメージが無い分、カトウに急所ダメージがいったらしい。

「ユウヤ君、此れ弟が作ったケーキだよ～」

「うわあ！　ホールで三つも！？　ありがとう！　帰って来たら皆で食べようね！！」

「きゃああ！　ミイラ！？」

「俺様だ、前は見えないけど」

この時点でびっくりストレンジショーなのに今から外に行くのか……。ていうかホール三つて、どう持って来たんだってツッコミは無しじゃなきゃ駄目？

「アサキ」

何時の間にか消えていたマヒルがリビングに現れる。手に持つ携帯を閉じるのを見れば、電話でもしていたのだと伺えた。

「ウミから連絡。他が来るの遅れてるらしくって、直接そっち行くってよ」

「そう……じゃ、行こ」

ソファに捨て置いていたコートを羽織って、

「ほら、行くぞ」

と他四人に声をかけた。

四人仮装に普通の二人、――どうすればこのシュールな絵を和らげられるだろうか。しかも此処に未だ増えるんだろ？　――危険過ぎる。

僕はそんなことを色々考えながら、マヒルを先導に夜道を歩いた。

137＋ドキドキ☆ハロウィンパーティーナイト！！／中編

「――という訳で！　“ドキドキ☆ハロウィンパーティーナイト！！～季節外れの肝試し大会！！？～”を始めます！！」

そんなウミの声に、約三人が騒ぐ。こんばんは、今日の保護者は俺一人だと思っているマヒルです。

騒いでいるのは勿論我が弟の吸血鬼と、前が見えないミイラ男とアレ、俺と同い年なはずの銀髪野郎だ。

「楽しみだな、マヒル！！」

「嗚呼そうだな」

お前怖いの駄目だろうが。

「では此の大会の優勝チームには、ハロウィンに因んでお菓子詰め合わせセットと、一日絶対悪戯券をプレゼントしまーっす！！」

悪戯券は此のメンバーにだけ効くらしい。別名・絶対服従券。

「……」

俺はアサキを盗み見たけど、全くの無反応。――お前にその券を持たせるのが一番危ないと兄ちゃんは思ってる……！！

「――何？」

「いや、何も」

言わないけどな。

「さってさて！　チーム分けをしたいと思います！　はいマヒル！」

「ん」

ノリノリのウミに渡されたのはちっさい箱。どうやらくじ引きの箱らしい。

「計八人分だから、二チームに別れるようになってるわよ？」

「八……？」

ちょっと待て、此処には人が十人じゃないのか？

「私とセツは今回脅かし側だからね☆」

嗚呼そうかい。

「通りで怖がりのお前等のテンションが高いわ――」

「怖がりはセツだけでしょ？　私は別に怖くないわよ」

「……」

この意地っ張りは何時になったら認めるんだろうな……。

十分後からスタートね☆　と残してウミとセツはうきうきと闇の中へ消えていった。――あいつ等大丈夫かな――驚かす側って、案外怖いらしいんだけどな。

役立たない年上が去ったので。

一度振り返ってみよう。

周りには俺よか小せぇ餓鬼共が七人。何故俺を脅かす側に回してくれなかったんだかな……。ちなみに居るのは――吸血鬼、ミイラ男、魔女っ子×2、雪女、雪男に一般人。逆に一般人が浮いてる気がするが……まあ、アサキだしな。

前半四人は誰だか話したが、途中の雪男女は――

「うわー、ユキちゃん似合い過ぎだろう」

「そうかい？　私は女の子じゃないんだがね……」

「アスカ君、暑くない？」

「暑いですね」

――という訳だ。ユキ君が雪女、真っ白い長髪に真っ白い着物という、マジに場違いな格好をしていた。アスカ君はただただ厚着。北極に居そうな――もふもふしたコートのフードも被って。……でもアスカ君そんなに身長が無いから、本当にただの厚着の人みたい

だな。成長途中だと普通じゃねぇか。ウミの野郎、会ったことない奴等の服なのによく作れたな。しかも一週間で。

「ねぇ兄貴」

「んぁ？」

「僕思ったんだけどさ」

そして一般人が俺の横で呟く。

「――肝試しに勝ち負けってどーよ」

――凄く最もな意見を。

「まあ、勝ち負けの基準は……ウミが決めんだろ？」

「……そっか」

という訳で、俺は冷静に安全対策を考える。其れから考えついた案を頭に、どうか俺とアサキを違う組にしてくれと神様に願ってから、俺は餓鬼共とくじ引きを進めた。

前半組。

「ユキ君、こういう場所ってお化け出るんですかね」

「さぁって、私にはよく分からないが……どうなんだろうね？」

「マヒルお兄さんは暗いのとか大丈夫なんですかー？」

「嗚呼、全然平気だわ」

ユキ君、アスカ君、モモちゃん、そして俺、って訳だ。
先陣を切るは雪女、さっきからただただ厚着なアスカ君と話しながら進んでいる。個人的にモモちゃんは怖がるのかな、と思っていたんだが――

「怖いっていったらごーすとしっぷですよねー」

――さっきから此の子ホラー映画の話しかしてないわ。

「マヒルお兄さんってホラー映画とか見ますー？」

「あー、個人的に好きなんだが、あまり見れないんだよな……バイトとかで見れなかったり……」

「そうなんですかー、今度ＤＶＤお貸ししますよー」

「マジ？　其れは嬉しいな」

やべぇ、此の子良い子だ。

「マヒルさん！！」

「ん？」

四人の中で唯一肝試しを楽しんでいると思われるユキ君が俺を呼ぶ。お、何か怖いモンあったのか？

「今顔に何かぬるっとしたものが当たったりましたよ！」

ははっ、そりゃ定番の蒟蒻か何かだろ。やっぱりユキ君はちゃんと楽しんでるみたいだな、進んでライトを持っただけあるな。

「其れがですね、蒟蒻だと思って捕らえてみたら、まさかの糸蒟蒻でしたよ！」

捕まえたのかよ。そして糸蒟蒻かよ。

「マヒルお兄さん、此れ、何でしょう？」

「多分マネキンの顔だろ」

「わー、凄いー、炎が浮いてるー」

「わお、本当だね！　どういうシステムになっているのか、是非とも聞きたいところさ！！」

「――うん？　今女の人の声しなかったか？　しかも近付いてきたかと思いきや消えた……」

「あ、すみません、俺が今足元にあったデッキ蹴って止めちゃったみたいです」

「あ、ユキ君！　今度は白滝だよ！！」

「白滝だって！？　冬には美味しいね！！」

前言撤回。此れ、肝試しじゃねぇわ。

最終目的地に着けば、セツとウミが待っていた。

「お前等少しは怖がれよ！！」

セツに怒られた。仕方ないだろ、怖くないものは。
ウミも多少落ち込んだのか、後半組を驚かす為にとぼとぼと戻っていった。……なんかスマン。

「後半組、大丈夫かなぁアサキ君」

そしてふと、モモちゃんが呟いた。……アサキは全然平気だろ？お化けなんざ怖がる奴じゃねぇし。

「ですねー、ユウヤもカイリ君も怖いもの駄目ですしね」

「うん、リョウちゃんもそうだからね～」

「ははっ！　素晴らしい組分けだね！！」

――嗚呼。
とりあえずアサキ、頑張れ。

138＋ドキドキ☆ハロウィンパーティーナイト！！／後編

アサキだけどそんなことはさておき。
前半組が居なくなってから、早数十分が過ぎたので森に入ることにした。

今回の肝試しのルートは、近くの森の奥にある神社に行くだなんて人を馬鹿にしている楽々ルートだ。木が多いから森だなんて呼んでいるけど、結局はただ木の多い一本道。ライトがあれば其れなりに困ることは無いし、少し肌寒いかな、くらいの話――なはずなんだが。

後半組。

「うわぁ暗ぇ」

「ユウヤったら大袈裟だなー！」

「そうよ！　暗いだけじゃない！！」

「ユウヤ、近い」

ユウヤ、カイト、カトウに僕。さっき気付いたんだけど、他三人怖いものが駄目だった気がするのは僕の気の所為だよね。僕に引っ付いているユウヤはともかく、カイトとカトウは笑ってるしな、ははっ。

べちゃ。

「ん？」

「うわぁあああああああ！！　顔に何かべちゃってしたぁあああああ！！！！　アサキ助けてよぉおおおお！！！！！」

「べちゃ！？　何なんだよ！！　べちゃ！！？　気持ち悪っ！！！！　溺死した幽霊か！？」

「きゃあああああああああ！！！！！」

うるせぇよ。

「ただの蒟蒻か何――」

「き、気持ち悪いよおおおおお！！！！！！」

「悪霊退散んんんんん！！！！！」

「十字よ！　十字を切って神様に祈るのよ！！」

「うるせぇよ」

つい口に出てしまった。人の腕を持ちながら騒ぐな、僕の腕を引きちぎる気か。

騒ぐユウヤの近くにぶら下がる、恐らく蒟蒻に手を伸ばす。

ぐにゃ。

ぐにゃ？　――嗚呼、何だ、無駄に糸蒟蒻な訳か。セツさんとウミさんも無駄に変なのぶら下げた――

「「ぐにゃあああああああああ！！！！」」

「きゃあああああああああ！！！！」

「だからうるせぇよ」

いちいち反応すんじゃねぇよ！！
未だ最初だっつーんに此の先どうなるんだか……。凄く不安に思いながら、僕は持っているライトを落とさないように強く握り締めた。

「あ、あ、アサ君く、首があるよぇおおおお！！」

「叫ぶ前によぇお、って何なのか教えろ」

「けっ警察に連絡を！！！！」

「駄目だ！　俺達が犯人にされちま――」

「おちつけ」

「あっアサ君火の玉っ！　の、呪われるよおおおおお！！！！」

「青い炎は魂の証拠なんだろ！？」

「根拠のない情報は止めなさい」

「そっそうなの！？　ご、ゴメンナサイ呪わないで下さい昨日ポケットのゴミをポイ捨てしちゃってすみませんでした！！！！　だから助けて下さ――」

「お・ち・つ・け」

「……え、今の、女の人の声……？」

「きゃあああああああああ！！！！」

「りょ、リョウコうるせぇぞ！　お、俺はそんなのこっ、怖くないんだからな！？」

「“ワタシノコト　オボエテイナイノ……？”って、言ってるけど」

「助けて怖ぇえええええええ！！！！」

きっと数十分が経ちましたが。マヒル達の前半組も、こんなに時間が経ったのだろうか。――絶対経ってない気がする。

普段ならば数分で通り抜けられる一本道なのに、此の三人が度々立ち止まるからなかなか進まない。ユウヤには色んな方向に引っ張られるし、怖がってなかなか動かないカイトとカトウを促すのも大変だし――誰か、僕を助けてくれ。

けど。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

マジ泣きで僕の腕を絞めるユウヤと、

「は、はははは、俺は別に怖くねぇぜ……？」

「わっ私だって怖くないわよ！？」

笑えていない笑顔で此方を見る二人を見ると、――自分より彼等を助けて欲しくなるな。今は落ち着いてるから、このまま神社に着ければいいな。さっきカイトが驚いていた看板――ただの看板に驚くくらい怖いんだな――を見るところもう少しだ。

しかし何がそんなに怖かったんだ……？　人口だって分かってるんだから、そんなに怖がることはないだろう――

べちゃ。

――に。……あ。

「「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！」」

「きゃあああああああああああ！！！！！！！！」

「落ち着け馬鹿野郎共！！！！　誰だ最後に白滝しかけた奴ァ！！！！　俺の前に出て来やがれってんだ糞野郎が！！！！！！！」

このままゴール出来ると思ってたから、ついマジギレした。

「お、お疲れ」

マヒルだ。色々凄い叫び声が聞こえたが、一番凄かったのは最後の怒号だった気がする。ハッキリと聞こえたが、アサキのリミッターが最後の最後で切れたらしいな。

全力で四人――主にアサキ――の心配をしていた俺等は、帰って来た四人を目の当たりにして――ただただ苦笑いをした。

「マヒル兄ィいいい

の可愛い弟だな、やべえ弟達可愛い。

「ねぇねぇ皆」

一瞬ドキリ、としてしまった。べ、別に悦ってたからじゃねぇぞ、畜生。

だってその声がすんごくいきなりで、――至極澄んで聞こえたから。

「このまま脅かされっぱなし、って、嫌じゃない？」

そう言ったのは怪談クイーンことモモちゃん其の人で。や、お前脅かされるも何も、怖がってねぇじゃん――そんな皆の疑問は代表して俺が心に留めておこう。

「ど、どういうことなの……？」

恐怖の名残から未だよく脳が回らないのか、俺は薄々気付いたことをリョウコちゃんが尋ねる。

「今度は私達で、――二人を脅かそ、って話だよ、リョウちゃん」

どんなに大人しい子でも、ひとつくらいリミッターが外れるものがあるというけれど、モモちゃんにとってはどうやらホラーがそうらしい。

二人を――て、セツとウミをか？　モモちゃんの被っている三角帽子が、良い感じに表情に影を作っていた。

「良いですね、俺は賛成です」

「僕の徒労を味合わせてやる」

即座に案に乗ったのは、キレたら絶対に恐怖以上の何かでさえ凌駕するような二人だった。アスカ君にアサキ、か、ほらアスカ君見てみろよ、あんな良い笑顔するアスカ君なんて滅多に見られねぇぜ？

――この調子だと結局、皆乗ることになるんだろうな。中坊の知恵がどう出るか――だなんてナメたことは考えない。

「何分だ？」

「二十分は欲しい」

先程までやる気の無かったアサキがそう即答するもんだから、つ

い吹き出してしまった。二十分、ねぇ？

引っ付くユウヤを引き剥がし、俺はやれやれと先程やってきた道へと戻っていく。そっちに行けば、確実に二人に会えるからなぁ。

時間稼ぎくらい、受け持ってやろうじゃねぇか。

本物のパーティーは未だやってねぇが、序章（プロローグ）からさあ、――アンコールといこうか。

138＋ドキドキ☆ハロウィンパーティーナイト！！／後編（後書き）

後編書いたのに、まだ続くハロウィン話。

１３９＋正直、ただのホラーです。（前書き）

※本気でただのホラーを目指してみた。だなんて言ってみるけど後半は普段と同じなので問題は無いです。
――…普段の朝夜にはない雰囲気をお楽しみ下さい。

ホラーが苦手な方は止した方がー……です、いやあ、そんな怖くないですよ※

139＋正直、ただのホラーです。

「――おーい」

遠くから、誰かの呼ぶ声が聞こえた。
勝手にお借りした神社を汚す訳には行かなくて、道中に仕掛けた肝試しセットをいそいそと外しに外していた時のことだった。

「あらマヒル、迎えに来てくれたの？」

「まぁな。お前達が遅いから、子供達を先に帰しちゃったぜ？」

暗がりでの作業に少しだけ目が慣れた私、隣で珍しく真面目に働くセツを横目で見遣りつつ、私は手伝ってくれるらしいマヒルに黙って感謝をした。
早く終わらせて、早く帰ろう――珍しくもマヒルは楽しそうだったから、少しだけ私も嬉しくなった。別に特別な感情は無いんだけど、友達が楽しそうなら、其れは其れで嬉しいじゃない？

「なぁマヒル、餓鬼共帰したって、どうやっ――」

「早くやれよ？」

だから気付かなかった、ただ無駄口を叩いているだけだと思った

セツの言葉に――違和感があったこと。

――――

それから数十分が経って。
至る所に仕掛けた道具をやっと全て外し終えた時、ふとマヒルが呟いた。

「――こんな話を、知ってるか？」

作業に疲れてへたれこむセツと、その道具を入れた箱の上に座る私。二人の丁度真ん中で、マヒルはひっそりと言葉を紡ぐ。

「――肝試しをしていると、時たまあることらしいんだけどな。――混ざり込むんだとよ」

「何がだ？」

つまらなそうに、膝で頬杖をつくセツが尋ねる。俯くように大地に向けていた視線を前方に持ち上げ、そしてゆっくりセツへと向かうマヒルの視線。何処か機械的な動きをする彼の姿に、今やっと小さな違和感を感じた。

「この地に眠る、幽霊が――さ」

「「……」」

凛と響くその声に、思わず悪寒が走る。セツが幽霊が嫌いなのは知っているし、隠してはいるものの私だって得意ではない。しかし周りには隠しきれていないそんな事実を、マヒルだって知っているのだから――きっと稀なる彼の意地悪なのでしょうね。

「い、嫌ぁねマヒル。そういう冗談はセツが怖がるでしょう？」

「別に怖くねぇよ！！」

私はそう思ったのだけど。

勢い良くマヒルが此方を向く。そのままその首が飛んでいってしまうのでは無いか、というその速さに――私は再び悪寒を巡らせる。

「冗談なら――良かったのにな？」

マヒルは笑顔だった。普段稀に見せる柔らかな笑顔ではなく、何故か私を慈しむような瞳に、緩む口許。髪型や衣服だって、夜だからとあまりキメていないからなのか――儚く、実体を感じさせない笑み。

悪寒？　そんな生易しいものではない。違った。

――此れは、恐怖だ。

――

「ごめん、境内に忘れ物した」

其の後も自分の体内を巡り続ける恐怖を、セツを罵倒することで何とか乗り越えていた私。セツもセツで、私に反抗することで何かに堪えているらしかった。

普段から無口なマヒルだけど、何時もの何倍も無口だったマヒル。早く帰ろうと促した私達にそう言ったのも、勿論マヒルだった。

「先帰っても良いぞ？」

だから其の発言に、何時もの優しいマヒルが居ることに安堵した。

何時だって他人を思いやるマヒル、私ったら何を考えていたのかしら。彼が怖い？　――其れ以上の戯言が、一体何処に存在するっていうの？

「何言ってんだよ、行くよ、な、ウミ？」

「ええ、勿論よ」

セツが馬鹿にして、そうやって私に振る。何時もと変わらないやり取り。そうか――そう言ってマヒルはまた笑った。ほうら、何時も通り。

――本当に……？

――

先程の肝試しでは、皆が転ばないようにと一定区間で微弱な明かりを設置していた。だから作業時間が喰ってしまったのだと自負しているけど、其れでも私は後悔していない。愛しいカイちゃんやアサキ君、それに他の皆が足を取られて転んでしまう方が私にとって大惨事だから。

「――……」

――でもやはり、一度芽生えた違和感は拭い去れなかった。

私やセツが怖がりなこと――セツなんかと比べられるのも嫌だけど――は、何時も一緒に居るマヒルが一番良く知っているはず。何時だったか三人で遊園地に行った時も、お化け屋敷に入った私達の先頭は、何時だってマヒルだった。

なのに。今彼は、私よりもセツよりも、――数歩離れた背後をひっそりと歩く。ひっそりと歩きながら、時折クスリ、と笑みを零して。

何故後ろに居るの？　何がおかしいの？　――自分が怖がりなのを知らしめたくなくて、私は其れが言えなかった。きっとセツも同じことを考えてる、けれど微弱な明かりすら外してしまった此の――こんなにも暗い――場所で、セツが普段の元気さを保てる訳も無かった。彼は本当に怖がりだから。下手をしたら私より先に逃げ出してしまうんじゃないかしら、そう思わせるくらい。

――やはり今のマヒルは変よ、やっとそう思えた。怖がりなセツを一人放置しているだなんて、絶対におかしい。

逃げていても仕方ないのだから、聞くしかない。

「マヒ――」

「ウミ」

意を決して名前を呼ぼうとしたら、彼ではないもう一人から声が掛かった。先程までならば再び罵倒を浴びせてしまったところだけど、既に精神の末期を漂わせているセツに、最後の一撃を喰らわせる訳にもいかなくて。

「何？」

「デッキ、二つ共、回収したんだよな」

何を馬鹿なことを言ってるのよ、其のデッキを持っているのは貴方じゃない。暗がりでよく見えないセツに向かって、私は忽然とそう思った。

「そうよ。それがどうかしたの？」

――聞かなきゃ良かった。本当に、切実に思った。

「――女の人の声が、聞こえ、る」

馬鹿にするべきだった。そんなもの聞こえる訳無いでしょ？　早

くマヒルの忘れ物取って帰るわよ――って。なのに出来なかった。

――だって、私にも聞こえちゃったんだもの。

しゃらん。

『――　ダ　れ　？』

「――……！？」

「あともう二つ、言わなきゃいけねぇことがあるんだけど」

誰何を尋ねる何かの方へ私が視線を走らせれば、其処は沢山の木が茂った緑の世界。横から感じる唯一の気配がまくし立てるようにして走り言えば、私は返事をせずに無言で彼を促した。

「子供達を帰した、ってマヒル言ってたけど、あの神社から帰る為には――此の一本道を通らなきゃ帰れないんじゃねぇのか？」

しゃらん、しゃらん。

『――ソ　コ　ニ　イ　ル　ノ　ハ　――　ダ　レ　？』

「其れが、どうしたのよ！」

正直苛立っていた。仕方ないじゃない、怖いんだもの。迷子なのだと思いたかった、けどこの声は普通の――“人間”の声なんかじゃない。言葉と言葉の間に断続的に響く鈴の音。何かを通している訳でもないのに、声音は電子音に似た反響を醸し出していて。

「俺達、ずっと道で作業してたんだぜ」

「だから何よ！！」

「だから――何で俺達は、アサキ達の姿を見てないんだよ」

セツにそう言われて、やっと私は気付いた。一本道で閉鎖された場所なのに、マヒルが先に帰したという皆の姿を――私とセツは見ていない。

「其れと最後にさ――」

とっとと言いなさいよ！！　半ば怒って言ってやろうと、私は此の時始めてセツを見た。

其処にはセツが居た。今にも泣きそうな顔で、セツは居た。でも、マヒルは居なかった。其処にマヒルは居なかった。

白い長髪、美しい装飾物で艶やかに頭部を飾る、其処から覗く漆黒の右眸。

――其の後ろに居る、あなたは誰？

しゃらん。

『わタシノネドこヲ――あラスのはあナタ？』

「俺の後ろに居るの、本当にマヒル？」

「き、きゃあああああああああああ！！！！！！」

其処で私の記憶は途絶えた。

――――

「講評」

「何ユウヤ」

「普通のホラーより怖ぇよ」

ユウヤです、とりあえずユウヤです、何だ今の怖い話。

此処だけ聞くと、ただのホラーだと思われるからちゃんと言うけど、今のはアサキとアスカが考えた完璧なる茶番です。

もう一度言おう、あの作品はフィクションです。

「ウミさん気絶させちゃったじゃないか……！！」

「平気じゃないですか？　起きたらきっと忘れてますよ」

「爽やかに言うなよ、確実なるトラウマだろうが」

今ばかりはアスカすらボケ倒すのか……！！　アスカとアサキはのんびりと神社の境内に座りながらイヤホン片耳で待機していた。そりゃシナリオ担当はやることないしね、ちなみに俺は自分が怖いから美術担当。そして座ってないけど其処に居るカイト君は、

「姉ちゃん大丈夫かなー……」

とぼやいている。ごめんカイト君、大丈夫じゃねぇや。

「アサキくーん、ニカイドーくーん」

「だ、大丈夫だった……？」

其処にやって来たのは配役：幽霊の声担当のモモちゃんとリョウちゃん。ウミさん達が使わなかったデッキとマイクを遠隔で繋いで、少しだけ入り込んだ場所に置いて使ったらしい。変声器をマイクに用いて電子音を響かせ、二人の声を混ぜることでより不可思議さを増させるこの方法。――気持ち悪いくらい完璧だった。

「途中笑いそうになって大変だったよ～」

最近モモちゃんのキャラが分からない。

「こ、怖かったー……」

リョウちゃんが普通のコメントを漏らしていれば、少しして残りの人達が戻って来た。ウミさんをおぶるマヒル兄、その横で死にそうなせっちー、そしてあとひとり――配役：幽霊の、ユキちゃんが。

先ずはせっちーがひと言。

「バカヤロウ！！！！」

怒られた。

「お前等な！　クオリティが高過ぎんだよ！！　俺を殺す気か！？　寿命何年縮んだと思ってんだ！？」

「一年や二年寿命が縮んだところで、人間そうは変わらないでしょう」

しかしアサ君は冷静だった。

「まあ落ち着けよセツ、俺も悪かったって」

「お前が一番馬鹿だ！　ばーか！　気持ち悪いくらい気持ち悪かったっつーの！」

意味分からない。

「い、何時もとマヒルが違うからっ！　マヒルどっか行っちゃったのかなとか！　へ、変になった、のかな、って、マジでどうにかなったんかと思っ、たんだからな……！？」

「悪かったーって、え、ちょ、な……泣くな泣くな！」

「え、泣くのせっちー」

「泣かねぇよ馬鹿！！」

きっと俺達が居なかったら泣いてたんだろうなー、てか涙目だよせっちー。と、さっきマジ泣きしてた俺が思うのも何だけど。

しかし確かにマヒル兄の演技は完璧だったと思う。アスカの携帯から簡潔に予定を伝えただけなのにあの対応――此方に音が届くように携帯を持ち替え、何があっても反応を見せずに異常を演じたマヒル兄。消える時だって音すらさせなかった。

確かにマヒル兄があんなだったら、俺泣く。

「あっはっは！　どうだったかな、私の役目は？」

そして白髪の貴公子がやってきた。

「僕等は見えなかったからよく分からなかったよ、セツさんどうだった？」

「気配が怖くて振り向けなかった」

「合格」

気配が怖かった、って、ユキちゃんは一体どんな気配を醸し出してたんだろう。ユキちゃんは着ている服、雪女の格好＋適当に置いてあった箱から見繕ったもので俺が作った装飾物を付けて楽しそうに森に入って行った。

言葉の途中で聞こえた鈴の音は、そんなユキちゃんの装飾物の一部。広い森では至極響いたことだろうに。ユキちゃんだって分かっていれば怖くないけど、暗闇でアレが真後ろに居たら――

「絶対マヒルじゃねぇッて気付いたけど振り向けなかったんだよっ！　結局ウミが叫ぶまで見れなかったし……！！」

「其れは嬉しいことだねセツさん、ははっ！」

幽霊ユキちゃんはとても楽しそうだった。

さて、今度こそ帰ろー。怖いのはもう沢山だ。家でちゃんとパーティーしよ――俺はそんなことを考えながら珍しくも道具持ちを手伝い、尚且つ先頭を歩くアサ君に再び引っ付きながら帰路を歩く。

そんな時、背後からこんな会話が聞こえて来た。

「じゃあ、あの笑い声もユキちゃんだったんだなー」

せっちーの声。

「笑い声？　失礼ながらセツさん、私はあの時――一度たりとも口を開いてないのだが」

そしてユキちゃんの声。

「え？」

「おいセツ、混乱させるようだが、俺は笑ってないぞ」

トドめの、マヒル兄の声。

――再び、場が凍り付いた気がした。

《――マタキテネ》

「え……？」

そうして振り向いたのは俺だけだったけど、皆の表情を見れば、それが空耳では無かったんだと分かった。

え、これで終わらせるの？

え、マジ？　だっ、だって、え！？　嘘でしょ！？

139＋正直、ただのホラーです。（後書き）

何やら余韻残しですが、真相は次の閑話で明らかにー。
凄くくだらないです。

１４０＊閑話＋グダグダ感を取り戻せ！

久しぶりです、閑話休題入ります。

「待て待て待て待てそんな簡単に入んじゃねぇよ馬鹿！！」

「何だよユウヤ、そんなに慌てて」

「い、いや！　前の話の話だよ！！　何で朝夜でホラーやってんのさ！！」

「さぁ、それはそこの浅井さんに聞いて下さい」

「くぉら作者！！　無駄に長いだけかと思ったらただのホラーじゃないかばーか！！」

作者を馬鹿にしないでよー。まあ馬鹿だけれども。アレ書いた後正直背後が恐過ぎたんだから。

「でっしょー！？　あの最後の余韻余計だってば！！」

「何、あんなものに怖がってた訳？」

「怖いんだよ！　悪いか！！」

「アレやったの僕だけど」

「だろー！？　――……って、え？」

はいアサキ君ワンモア。

「アレ、やったの僕だから」

「え、ちょ、だってアサ君俺の前に」

「正確には横、な。僕が道具持ってただろ」

「うん」

「神社にデッキ置いて来たんだよ、ちなみに笑い声っていうのは、マヒル兄が皆を脅かす為にわざと笑ってないって言っただけ、声は先と同じ方法」

「……」

「だから、幽霊なんて居ないから、分かった？」

「……」

「昨日からそればっかで五月蝿くて仕方なかったったらありゃしないんだから」

反応がない、ただの馬鹿のようだ。

「誰が馬鹿だい！！」

お前だ。

「そっ、そんなこと分かってたっつーの！！」

「まさかの見栄張る方かお前」

「皆気付いてないみたいだったけど！　俺は気付いてたもんなー！！！！！」

「まあ、マヒルは気付いたみたいだけどな。怖がって帰れないセツさんには送る時に話すっつってたし」

皆怖がりだなぁ。というかアレですね、まず朝夜でホラーじみたもん書くなって話だよね。

「分かってんなら書くな！！」

はい、二度と書きません。自分絶対にホラー小説の才能無いです。

「分かってんなら書くな」

同じ台詞2人で言わないで下さい！！！！！

――――

さて、軽いオチを用意しておかないとという感じで始まりました閑話休題。不思議の国のユウヤ君は次もお休みであります。

「どうでも良い報告ありがとう、下がれ」

はい。

「アサ君、レーラ君帰っちゃったよー、何か寂しそうだったけど」

「作者がでしゃばるのはいけないことだ。第一あのサバサバだけが取り柄な奴が帰って来ない訳が無いだろう」

「それもそうだね。じゃ、今回の反省かーい」

「とりあえず一つ、――長期休みに更新が途絶えるんだよ」

「ああ、それは確かに」

「ＳＷもそうだし、去年は冬休みも更新無かったな」

「というか、更新率が下がりすぎなんだよね☆」

「夏休みも少なかったしな――おい作者」

はい。

「戻ってくんの早！！」

何言ってんのユウヤ君、アサキに逆らったら消されるんだよ？

「ちょっと待てよ作者、お前どんだけ地位下がったのさ。２０話更新するだけで一体何が――」

「作者」

はい。

「更新ちゃんとしやがれ」

すみませんでした。

「以上、去れ」

はい。

「――……レーラ君、一体何を目指してるんだろう……」

「知らん、僕は知らん」

「さって、話題は終わったんで、違う話して終わりにしましょう」

「何さ」

「これから俺達、本格的に受験期って訳で、受験シーズンの小説を増やしていきたいなー、だそうです」

「希望じゃねぇか」

「まぁね」

「でも書けるのかよ、奴に受験シーズンが」

「何で？　だってレーラ君だって受験経験してるんだから書け――」

「奴は受験してないようなもんだろ、勉強もせずに受かったらしいから」

「うん？　それは殴り飛ばしていいのかな？」

こら！　人の話をネタにすんな！！

「レーラちゃーん、歯ァ食いしばってー？」

ちょ、怖いから！！　てかそろそろ僕の呼び方統一しろよお前等！！

「だってレーラ君でレーラちゃんは性別不詳なんだもん、仕方ないじゃん」

……もう何でも良いや。良いんだよ、たいてい性別間違えられるんだから。

「なら文句言うなよ」

はい。

「という訳で、そろそろお別れでーす」

「ばいばーい！！」

これから更新率が絶対下がりますが悪しからずー。読者の方々、そしてお気に入り登録して下さった方々に、心より感謝にこめて！

「じゃあ更新しろよ」

はい。

141＋使い過ぎは程々に。

「もうっ！　本ッ当ーにッ！！　怖かったんだからね！？」

「分かった分かった、悪かったって」

ファミレスからこんにちは、マヒルだ。聞いての通り今、俺は再びハロウィンの時のことでウミに怒られている。

「あ、あ、あんな怖いの初めてよ……今ならどんなお化け屋敷に行ったって怖くないわ……！！」

「なら行くか？」

「行かないわよ！！」

何だ此の理不尽は。でもウミがこんなに言うんだから相当怖かったんだろうなぁ。確かにセツは半泣きだったし、流石はませ餓鬼トリオといったところだな、侮れない。

ちなみに今の今まで、というか未だ一度も喋っていないのだが、この場にはちゃんとセツも居ます。一人でもぐもぐと租借してます。

ファミレスということで、今日は二人に昼飯を奢ることになったのだ。罪滅ぼし――とでもいうのだろうか、だから俺は主犯じゃねぇっつーの。ま、良いんだけどな。

「でも流石アサキ君ねぇ……即興であんなものが浮かぶだなんて凄過ぎるわよ、ねぇセツ？」

もぐもぐ。

「もし今度またやる時は、アサキ君やユキちゃんに演出を頼もうかしら？」

もぐもぐ。

「その時、セツは脅かされる方に回してあげるから安心してね？」

もぐもぐもぐもぐ。ごくん。

「それは嫌だ！」

「相変わらず喋んねぇな」

やっと喋らなきゃいけない事項になったからか、咀嚼のスピードを若干上げて飲み込み、セツはひと言叫んだ。そして俺が呟く前にまた食べた。……嗚呼、面倒な奴。

見た目は不良なこいつだが、何故かマナーだけはちゃんとしている。口に物を入れながら喋らない、何時でも挨拶は欠かさない、など。

よくセツは俺に向かって「お前不良な癖に不良らしくねぇ」だなんて言うが、俺からしてみればお前の方がらしくねぇだろうが、つーか、俺は不良じゃねぇっつーの。

「何よー、じゃあまた脅かしたいの？」

もぐもぐもぐもぐもぐ、ごっくん。

「つーか、やりたくねぇ！！」

もぐ。

食べる毎に喋らないなんて面倒だな、とは思うが、昔からのことらしいからとやかく言うつもりはない。第一、行儀が良いのは良いことだしな、つーか普通だし。ウミも俺ももう慣れた。

「だから飯食ってる時、ウミばっか喋ってんだな」

「あらマヒル、だったらあなたが喋れば良いじゃない？　そんなに飲み物ばかり摂取してないで」

「いや、其れは無理だ」

面倒というか、柄じゃねぇ。未だ隣でもぐもぐするセツを見遣り、何か面白さを感じた俺だった。

ま、たまには奢るのだって良いよな。

「あ、アサキか？　俺俺」

『俺俺詐欺……？』

「違うわ、兄ちゃんだ」

『知ってる、何』

「いやあ、母さんに伝言が。――今月、金足らないから頼んだ」

『……』

あの野郎共にファミレスとはいえど好き勝手に使われた結果、今月の生活費がやばいことになった。――何人分食ったんだあいつ等……！！！！

『兄貴』

「ん？」

『ごめん、ガンバレ』

……うん、兄ちゃん頑張る。

１４２＋限定の人数とその他多数。

「じゃーなー！！！！」

カイリだ！

学校が終わって帰宅だぜ！　え、部活？　なーに言ってんだよ、俺部活入ってねぇし？　というか俺達受験生だっつーの。

さて、今日は帰って何やるかねー。

「アサキー、帰ろうぜー！」

用事がある、とか言って二組に行ったアサキを追ってやって来た俺。其処には案の定アサキが居て、先に帰るらしいユウヤに軽く手を挙げて別れていた。

そして何時も通り急ぐことなくこっちにやって来る。

「うん。……あれ、ユキは？」

其れは俺も思ってたことだ。クラスに居なかったんだよな。左の方――要するに、一組の方――に視線を巡らせて、ユキが居ないことを確認。何だ、先帰ったんかな。

「――私なら此処さっ！」

「ぐふっ！！」

しかしあっかり見付かった。廊下に居た俺の真横に現れた。勿論左側から。しかも何故か俺に激突してきながら。

「ふっふっふっふっふっ、油断していたねカイリ、私が何時でも教室からやって来ると思っていてはいけないよ！」

「普通に教室から来いよ……つーかおま、滅多に激突とかしてこねぇだろーが痛い！！」

そういうキャラだったかお前は！！

最近ユキのキャラが分からなくなってきたのはともかく、脇腹が凄く痛い。ユキ痛い。

「サクライ先生に用事があってね、追いていかれないで良かったよ」

「そうなのか。ま、良いや、帰ろうぜー」

とっとと帰りたい俺又はアサキなので、俺達はそのまま帰ることにした。

けども。

「Ｌｅｔ'ｓ　ｍａｋｅ　ａ　ｖｅｎｔｕｒｅ!」

ユキが叫んだ。相変わらずヤケに発音が良かった。

校舎を出てまだ数分も経っていない、いや、寧ろ分単位経ったか？　くらいの位置の校庭でそうユキが叫んだのだ。

「……今、何て言ったの」

アサキが怪訝そうにユキを見た。完全無欠のアサキだが、どうやら英語は其れまで得意じゃないらしい。……畜生、それでも俺よか出来るってどうよ。

だけど今回は俺は分かったぜ！　ユキはこう言ったって訳だ。

「――探険すんのか？」

「その通りさ!!」

探険したいらしい。

アサキを見てみた。

「怠い」

却下された。

「良いではないか!!」

ユキは引き下がらなかった。

「怠い」

却下された。

「何だいアサキ！　アサキは私と遊ぶのと家でのんびりとするの、どっちが良いというんだい！？」

ユキは頑張った。

「家」

ユキは撃沈した。

「……」

「……分かったから、分かったから素で落ち込むのやめてよ」

すぐ帰るからね、とアサキはため息をついた。でもどうやら探険に付き合うらしい。……何だかんだで暇だもんな、お前。二人の会話を微笑ましく思っていれば、何故かアサキが俺を見た。

「で、何処行くの」

「何で俺に言うの」

普通其処はユキが決めるんだろ？　――と思いきや、ユキまで俺様を見てやんの。

「早く決めてよ」

「分かったから待てっつの、考えるから待て」

「後五秒、にーいーいーちー」

「カウントちゃんと五からしろよ！！」

「さあカイリ！　頑張って決めるのさ！！」

「だあーっ！　少しは時間を寄越せっつーのー！！！！」

俺の中学校生活にユキが加わって早一年が経とうとしてるけど、やっぱりアレだな、人数は多けりゃ多い程楽しいかもしれない。

――とか思うんだけど。

「じゃ、何か食べて帰ろうか？」

「うん、それで良いよ」

ユキが素を出せる人は少ないだろうし、アサキは元から大勢が嫌いみたいだし。

「三人って、妥当なのかもなー」

「「何」？」

無駄に笑顔だった俺を見て、アサキもユキも不思議そうに俺を見た。

「――何でも！！　よーし、帰ろうぜー！！」

皆でやいやいも勿論良いけど、こういうのはこういうので大事だな、って。そう思った俺だった。

平和って素晴らしいよな、結局探険じゃねぇってのは言わないでおく。

１４３＋似た者同士に気付いた時。

今日の夕飯何にしようかなー、なユウヤです。皆は俺をただの家庭的な人だと思ってるんだろうけど、結構多忙なんだからね！　家事やりながら学校って結構大変なんだから！！　――とは思うけど、まあ好きでやってんだから良いよね。

ガシャン！！

ただ今俺はカートを押しながら歩いています。要するにスーパーに居る訳ですね。うちの暴君は嫌いなもんがないから良いんだけど、逆に好きなもんもあんまないんだよ。作り甲斐がねぇぜ！　と騒ぐ方々もきっと居るんだろうけど、俺はそんなアサ君をぎゃふんと言わせる為に日々精進ってことで。

と考えていたのは良いけど、今どっかで音がしたような……？

「た、助け……」

「――わー！！！！」

スーパーの曲がり角の先に、男の子が何かに埋まっていた。どうしたんだ此れ！！　恐らく棚の上のものを無理して取ろうとして、バランスを崩しちゃったんだろうなぁ……――冷静に解説してる場合じゃねぇ！！　掘らなければ！！

数分後。

「あ、ありがとうございました……バランスを崩しちゃいまして……」

男の子はペコペコと俺に謝罪をした。今時の子供なのになんて礼儀正しいんだ……！　んー、小学三年生くらいかな？

「良いよ良いよ！　たまたま居合わせただけだし、棚から落ちたのは店員さんがやってくれたし！」

要するに俺、掘っただけだしねー。彼が埋もれていたのは何やら粉系のものだった、薄力粉やら強力粉、お母さんか何かのお買い物だったのだろうか？

「本当にありがとうございました、大きいサイズの薄力粉って、何であんな上にあるんだろ……」

「お母さんの買い出しか何か？　偉いねー」

「あ、違います。俺が自分で使うやつです」

え、自分で？

「俺、お菓子作るのとか好きなんですよ」

「へーえ！　今時珍しい小学生だね！　男の子なのに！」

お互い買物袋をぶら下げつつ、俺は笑顔で男の子の横を歩く。お

菓子作りが好き、か……本当に珍しいと思った、将来はパティシエかなぁ？

「ケーキとか作るの？」

「ケーキはよく作ります、今日も暇なんでタルトでも作ろっかなって」

「凄いね……！　でもお金とかかからない？」

「母さんが出してくれるんで」

非常に理解のあるお母さんなんだなぁ……うちの母さんもそうだけど、やっぱり子供の夢やらを支えるのって、親の役目なんだよね。最近よく思う。

「俺も夕飯の買い出しに来てたんだよねー、ご飯作りは俺担当なの」

「凄いですね！　俺料理とかめっきり出来ないからお母さん任せで……」

「両親の帰りが遅くってねー」

何やら初対面の小学生と世間話を繰り広げる俺、我ながら順応性高いなー。

そして話題は何故か兄弟の話。

「兄貴が別居しちゃってるから、弟と二人暮らしも同然なんだよねー」

「大変ですね……俺は夜には両親が帰って来るから……。弟さんが居るんですか？」

「うん、そうそう」

間違いではない、同い年だけどアサ君は弟だ。

「俺も姉ちゃんが居るけど、見てないとなんか危なかしっくて」

「あははっ！　可愛いらしいお姉さんじゃない！」

ため息を混ぜてそういうのを見て、随分と大人びてるなー、と思った俺。ため息かー、俺ため息なんて滅多につかないけどなぁ。

「俺の弟もそうだよ？　俺より頭良いし俺より冷静だけど、見てないと何もしなさそうで逆に怖いんだよねー」

「何も、しないんですか？」

「うん、食事すら摂らなそう」

「そ、そりゃ大変だ……」

男の子は苦笑した。実際見せてやりたいね、此の子くらい表情豊かであってくれれば、お兄ちゃん何も心配しないのに……。お姉さんのことを心配する男の子――アサ君も少しは心配してくれるかな？

「あ、其れじゃあ俺こっちなので、本当にありがとうございました」

「いいよいいよ！　またスーパーで会おうね！」

「はい！」

ひらひらと手を振れば、彼もひらひらと手を振った。うん、実に良い小学生だった。

「たっだいまー、――って姉ちゃん何してんだよ！！」

「ふぇ？　夕御飯の仕度だよー？」

「違う！　知ってっから！！　鍋の方だよ鍋！！」

「えー？　――わー、噴いてるー」

「動きが鈍い！」

「ユズが早いんだよー？」

今日会ったあの男の子のお姉ちゃんが、ランモモ其の人だったことに俺が気付くのはきっともっと先の話。

144＋ませた少年、馬鹿な青年。2

やあ皆、ユキだよ。寒い季節になったね、ふとコンビニエンスのおでんが食べたくなった私は、ただ今其の帰路の真っ最中さ！　早く帰って頂きたいね！　ちなみにおやつさ！！

と思ったのだが。

「――あれは……」

近くの公園に、見慣れた銀髪を見付けた。あれは――セツさんではないか。遠目に見てもあの銀髪はやはり目立つね、どうやら今回は不良に絡まれている――という訳ではないらしい。

――だって、一人でブランコに乗ってるんだもの。

……あれ、あの人幾つだったかな？　マヒルお兄さんと同い年だった気が……。

「あ、ユキちゃん？」

あ、気付かれた。結構距離があるはずなんだが、あまり特徴的でない私によく気付いたものだよ。

凄く笑顔で手を振られるものだから、行かざるを選ない私は其方へと向かう。まず聞くことはひとつだ。

「何、してるんですか？」

その歳で一人ブランコとは。

「あん？　暇潰しだぜ？」

ただの馬鹿なようだ。……いや、いけないいけない、しっかり話を聞かねばね。

「何故、公園？」

「いっやぁねー、連絡もせずにウミんとこに用事で来たんだけど居なくってよー」

「はあ……」

ほう、それはウミさんが悪いのではなく、確実にセツさんが悪い訳だね。……言わないけれど。

「チャリ壊れてるから歩いて来たんだけどさ、また歩くの怠ィし迎えに来てくれるはずのシロもちょい用事出来たらしくて未だ来れねぇらしいしー」

「だから、公園に？」

「おう！」

きーこーきーこー音を立てさせながら、セツさんは良い笑顔で言

った。……凄く良い笑顔だね！
何処かのゲームセンターで時間を潰すとかの選択肢が浮かばないセツさん、素晴らしいと思う。

「そういうユキちゃんは？」

「私は買い物の帰りです」

「そっかー、暗くならねぇ内に帰れよー？」

「……はい」

大人らしいことを言われたのだが、生憎ブランコの音が邪魔をするるね。
しかしどうしたものか……このまま帰っても良いのだが、セツさんをこのまま放置するのは気が引ける。……寂し過ぎるじゃないか、この人。

「あ！」

――と、今度は何なのだろうか？　ガシャン、と先程とは違う音を立ててブランコから降りたセツさん。どうしたのいうんだろう。
セツさんの視線の先、其れは公園の中で遊ぶ少年達に向いている。サッカーをしているようだね。

「俺サッカー部だったんだよな！　混ぜてもーらおっ！！」

じゃなー！　と元気良く手を振るセツさんは、少年達の方へと向

かっていった。少年達は暫くキョトンとセツさんを見ていたが、直ぐに慣れたのか一緒にサッカーを始めていた。なんという順応性…
…アサキなら絶対やらないね。
私は暫く其れ等を見遣り、何故か幸せな気分で自宅に帰ることにした。……ふふっ、セツさんはとても茶目っ気ある人なのだね。

Ｐｒｒｒ.

「もしもしーロクジョーですけど」

『あ、カイリ君ですか？　空乃中学校三年担当のアヤメですけど』

「うぇ、先生どったの、俺何やらかしたよ」

『今日はプライベートですよ、貴方の成績に問題はありません。――今日、弟が其方に行きませんでした？』

「……セツさん？　ちょい待って。――姉ちゃんに聞いたけど来てないって」

『……そう、ですか……。今日「ウミんとこ行くから帰り迎え来て」

って言った癖に携帯繋がらないもので』

「セツさん何してるの。って、もう八時じゃん。……え？　――あ、せんせ？　姉ちゃんがもしかしてマヒルさんとこじゃねぇかって」

『……マヒル君ですか。番号、教えてもらえるかな？』

ぴーんぽーん、ガチャ。

Ｐｒｒｒ．

「え、あ、ちょ、誰か来たそして電話――」

「うわあああああマヒルうううう！！！！」

「んだよセツかよ呼び鈴鳴らした意味を教えろよ。んでちょっと待て、電話だ。もしもし――」

「公園で遊んでたら携帯無くしたあああああ！！！！！　ウミん家ら辺から歩くの疲れたっつーんだよおおおおお！！！！！」

「うるせぇイイ歳して公園で遊ぶな！！　え、あ、はい、あ、今家来ました。携帯無くしたみたいです、はい。――お兄さんが迎えに来てくれるってよ」

「うわあああああ」

「五月蝿い、黙れ。……ほら、こたつ入って良いから落ち着け、何か飲むか？」

「わーい、飲む」

「……」

茶目っ気というか、ただの馬鹿だが。

１４５＋冬の寒さ、到来中。

「ときにあさくんや」

何故そんなにも呂律が回っていないのか分からないけどユウヤが恐らく僕を呼んだ。多分。アサキですが。

「あさくんはいまなにをしてるのかな」

「読書的な何か」

「てすといっしゅうかんきっててもかい」

分かりにくい。

てすといっしゅうかんきっててもかい？　……テスト１週間か。

じゃあ答えは簡単だ。

「未だ一週間なんだから良いだろ」

「馬鹿野郎ォ！！」

ガタンッ！　大袈裟に音を立てる椅子。けれどユウヤの方が五月蝿い。遅くなったけどアサキだよ。

「それは頭の良い人の摂理なんだよ！　俺みたいに日頃勉強してないーーさ、最近はしてるけどーーともかく！　そういうことなんだよ！！」

「問題、“摂理”の意味ってなーんだ」

「うぇ！？　え、えと」

「万物を治め支配している法則、でした。引用、国語辞典」

「分かんないってば！！」

「じゃあ使わないで下さい、引用、国語辞典」

「そんなことまで書いてあったっけ！？」

其の国語辞典の出展は恐らく僕だな。

「時にユウヤ」

「んー？」

ユウヤが大人しく机に向かい直して少し経ってから。

「頭が良い人ばかりが余り勉強しないっていうのは間違いだと思う」

話を少し振り返してみた。

「何で？」

「確かに僕は前日とかしか勉強しないけど、頭の悪い人の方が一夜漬けとかするパターンが多いはずだ」

「あっさり自分を頭良い部類に入れたことは悔しいけど認めざるを得ないよ」

「五月蝿い」

「でも確かに、カイト君とか完璧一夜漬けタイプだよね」

今頃休みにかまけてゲームしてるんだろうな。

「頭良いっていうと、ユキちゃんとリョウちゃんとか？」

「その二人はコツコツやるタイプじゃないのかな、根は真面目だし」

普段ボケてるユキも根は凄く真面目なタイプだと思うしね。真面目って思われたくない、みたいな。

「勉強の仕方って、点数に響くのかなぁ……」

「さぁ。でもユウヤ」

「んー？」

「そんなこと考える前に勉強した方が、少しは点数に響くと思う」

「だね」

ユウヤは苦笑いをしてから再び机に戻っていった。

さて、僕も読書が終わってしまった。まだ朝っぱらだというのにどうしようかな。……勉強？　何其れ美味しいの？
朝から勉強とか論外でしょ、というか中学のテスト如きで一週間も前から勉強すること事態が間違ってる。皆、ちゃんと外で遊びなさい。

そんなくだらないことを考えつつ、たまにはやる気になっているユウヤの邪魔にならないように部屋を後にした。

二学期も今年も、終盤って訳ですか。

１４６＋冬の寒空、悠然と続く。

「だぁー、疲れたー」

こんばんは、お久しぶりですね、アヤメ……といっても被るか、マシロです。

テスト前っていうのは生徒にとっても教師にとっても大変なんですよね、ホント嫌になりますよ。しかも生徒達はテストが終われば終わりなのに、教師はその後こそが大変なんです。

「お疲れ様です、イツキ先生」

「おー」

というか此の人にとっちゃどっちだって大変なんでしょうね。

「テスト問題くらい、先週中に終わらせれば良かったじゃないですか」

「仕方ねぇだろ、やる気起きなかったんだから」

やる気が起きなかったからといってやらないのは大人としてどうなんだろ――其処は大人な僕だから言わないであげますがね。前日に問題作る人なんて居ませんよ全く。

「ったく、教師っつー職業はどうしてこう、色々面倒臭ぇんだろうなぁ」

「そんな面倒臭い職業を選んだ貴方が悪いんじゃないですか」

「うるせぇ」

小学生なら誰しも回す回転椅子にもたれ掛かり、長い脚を机にがつん、と投げやった目の前の図体だけ一人前の先生。何なんですかね彼は、このまま置いて帰ってしまいましょうか。

「たまたま数学が得意だったからなっただけだっつーの」

「はいはい」

もはやため息をつきたくなります、ということでため息をつけば、「幸せ逃げんぞ～」と暢気な声が聞こえる。ナメてんですか此の人は本当に。

「さてイツキ先生、七面倒臭い残業なんて終わりにしてとっとと帰りませんか？」

「相っ変わらず口悪ィなお前……」

最高の笑顔で言ったのに呆れ口調でそう言われてしまった。いやですね、貴方より口悪くないですって。もう遅い時間ですしね、早く帰って夕飯にしたいんです。

「そういえばアレだな、今日はキクカワが居ねぇから静かなんだな」

「……確かに」

『イツキ君シロちゃん！　姐さんは今日一緒に残ってあげられないんだが淋しがるなよ！』

夕方名残惜しそうに言われた時は、晴れ晴れとした気持ちになりましたね。あの人好きで残る時の方が多いから……。

「一生アイツ居なきゃいいのに」

「ちょ、キクカワ先生全否定してどうするんですか」

真顔で呟くイツキ先生、冗談ですよね、此の人の冗談と本気は長い付き合いなのに未だよく分からない。

職員室を後にして、のこのことこの寒空の下にやってくる。昼も寒いんだから夜なんて尚更、だから冬の残業は嫌いです。

「あー、寒ィ」

「奇遇ですね、同じこと考えてました」

「馬鹿野郎、この寒空に暑ィって考える奴が居るなら連れて来やがれってんだ」

「それもそうですね」

絶対零度な環境で生きてる人とかなら暑いっていうんじゃないか

な、とか思ったけれど、其の前に言葉を発した彼が居るので僕は黙って口をつぐむことにしました。

「そろそろまた三者面談だなぁおい」

「あ、そうでした」

「うちのクラス、未だ進路決まってねぇ奴多いんだよな」

「僕のクラスもですよ。親御さんも子供に任せっきりって人が多い所為か、決定が遅れてるみたいで」

「親のエゴが無ぇのは良いことだが、出来れば早く決めてもらいたいもんだぜ」

はぁ、と深々とため息をつく僕達。

今の生徒達は初めての卒業生だから、不安だって多い。でも其れ以上に不安なのはきっと生徒である彼等だから、僕達は彼等に精一杯のアドバイスをしてあげなければならないんですよね。

「ホント、教師って大変ですよね」

「まあな。――けど、どうにかしてやんねぇとなんだから、面倒臭ぇとか言ってられねぇよな」

「ですね。……ふふっ」

つい笑ってしまった。

「何だ？　何笑ってんだ、アヤメの癖に」

随分酷い物言いですが、今回は大目にみます。だって――

「“イツキ君”、今、すっごい教師みたいでしたよ？」

珍しいじゃないですか、そんなの。

彼はそんな僕の物言いに、一度キョトンとしてからお得意の皮肉スマイルで僕を見た。

「“みたい”じゃねぇ。俺は教師なんだよ、アヤメ」

「おや、そうでしたね、“イツキ先生”」

こんな寒空だけど、こういう馬鹿話をしていると、何だか寒さを忘れられる気がしますね。

仕方がないから、今度はキクカワも混ぜてやるかー。イツキ先生は楽しそうに笑いながらそう言った。

１４７＋本人が一等驚いているであろう。

「ユウヤー、どうだっ――」

「う、うあああああ……！」

週初めですカイリだ。なのにテストだなんていうものだから昨日は寝れなかったぜー。珍しくもアサキまで寝不足らしくって理由聞いたら、

「ユウヤの勉強の所為で三時近くまで起きてた」

という訳らしい。

うあーユウヤやる気だなー、普段俺よか勉強しねぇから俺よか点数低いのに。しかもアサキまで引き連れて――まあだから朝から酷い目付きなのは怖いけど。

んで放課後。勿論俺のは聞いちゃいけねぇぜ！　前よか悲惨な予感、つーか数学って何？　サックラせんせーはなにしてくれちゃってんのかなあ？

二組のユウヤをアサキとユキと一緒に尋ねたら、――なんか叫ばれた。怖ぇよ。

「ユウヤ、どうしたんだい？」

ニコニコのユキが優しめに聞いている。此方としては急に叫ばれて、俺がうああ……！　だけども。

「何か、俺、自分が自分じゃない気がするんだ……」

急に電波だな。

死体を見たかのような驚いた表情をしながら、ユウヤは俺達を見る。

「何やら急な話だね？　何かあったのかい？」

しかし相変わらずユキはユキで。のんのんとユウヤに尋ねる。因みに、アサキも居るからな？　未だ目付き悪く突っ立ってるからな！　うわお言ったら怒られそうだぜ！！

「実は――」

意を決した様子の不安そうなユウヤ、其の手には一枚の紙が。紙――数字の羅列を見るところ、其れはこの俺様を苦しめた数学のテスト問題らしい。しかしその問題用紙には問題があった、あの冷酷鬼畜数学教師サクライイツキ、彼から連想するにはあまりにも綺麗過ぎる問題文とは別に――シャーペンで書き込まれ文字がびっしりと。

「俺――数学の問題が全部解けたんだ……！」

「「何だって……！？」」

ざわ――空気の流れが止まる。一瞬にして凪と化した二組の教室

内、其処に感じられるのは残り少ない生徒達の呼吸音だけだ――

「当たり前だろ」

――あれ？

「昨日、実質今日の三時まで此の僕が勉強教えてあげたんだ。数学の点数の五十や六十上がって貰わなきゃ困るんだよ」

どうやら凪と化した状況でも、弟の寝不足に対しての怒りは収まらなかったらしい。そしてユウヤの普段の点数が最低四十点以下なことが分かった。

「で、でもだよアサキ！　俺だよ！？　此の俺が、数学のテストを何の漏れもなく出来ちゃったんだよ！？」

「どうせミスしてる箇所があるんだから、先ずは書けてくれなきゃ。第一お前は毎回勉強ちゃんとしないから出来ないんじゃないか」

「でもー……」

「じゃあ、凄く納得出来ること言ってやろうか」

「え？」

「――……お前、誰の弟だと思ってんの？」

――某大学。

「ちきしょー！　レポート終わらねー！！　マヒル！　手伝って！！」

「……提出、期限昨日だったよな其れ」

「悪いか！　つーかアノヤロウが期限一週間とかふざけたこと言いやがるから――」

「俺、あの講義中に終わってたけどな」

「……」

「そっか、そうだよね、アレと同じ血が少しでも流れてるんだもんね」

あっさりと納得したユウヤは、一転してけろっとした表情をみせた。何なんだ其れ、お前達の中でマヒルさんって何なんだ？　確かに凄い人だとは思うけどー……今度姉ちゃんに聞いてみよ。

しかしさてはて。テスト返し、どうなるやら。

１４８＋彼を揺るがす為には金銭的取引を。

「るんるるる～……」

久しぶりにユウヤが上機嫌だ、いや、別に今まで不機嫌だった訳じゃないんだけれど。何やら机に向かって書き散らかしている、こんばんは、アサキです。

「年賀状なんか書いてどうするの」

「勿論出すんだよー」

そりゃ分かるけども。

「誰に出すの？」

「えとね、まずはアスカでしょ、カイト君でしょ、モモちゃんとリョウちゃんにー」

そんなに出すのかお前は。全然これっぽっちも出す気の無い僕は呆れた風にユウヤを見た。未だカウントは続いている。

「あとあーや先生にも出す！」

「そう、まあ頑張れ」

「そういえばアサ君、アサ君は出さないの？」

「面倒」

「でしょうね」

それで納得されちゃうのも納得いかないけど仕方ない、今僕に課せられているのは書くことではないのだから。僕が今しなければいけないこと、それはプレイすることだ！！（※ゲームです）

という訳で。テストも終わって残るは数日、クリスマス・イヴに二学期も終了する訳だが――やべぇ、真面目に早く終われ。え、テストの結果？　まあ大体返って来たけれど、数学だけは未だ返却されていない。――だってほら、あの担任が動かないから。

「早く返せよいっちー」

数日前に真顔でユウヤがそう言ってたけど、相当出来が良かったからなんだろうな。僕も楽しみにそれを待つことにしよう。

「ふーふふー」

しかし此の野郎、黙って年賀状書けないのか。

「ねぇアサ君」

「何」

「今年の冬休みは何しよっかー？」

「別に。何もする気ないけど」

「やっぱり！」

……やっぱり……？

「アスカと話してたんだけどさ、冬休み中に皆でスケートしようよ、って話してたんだよ」

「断る、寒い辛い痛い嫌い怠い」

「酷い断りようだな今」

いや、だってスケートなんて寒いだけだし、行きたくないし。僕にはプレイする義務が――

「ちなみに、もう皆に話通しちゃったから☆」

「お前いっぺんデスれ」

「酷い！！」

「酷いはこっちの台詞じゃ阿呆。何故何時も何時も僕は事後報告なんだ……！」

「だって先だと断るじゃん！！」

「断るわ！！　――とにかく、寒いのは嫌だ」

ユウヤがむくれるが気にしない、此処で優しくしてしまえばこいつは確実に隙を見る。其処を逃さない辺りが僕の兄貴といった所だ

ろうな。

「遊んでれば寒くないよ？」

「寒い、遊ばない」

「そんなこと言わずに！　きっと楽しいよ？」

「いーやーだ」

「――じゃあ、お年玉半分あげるって言ったら」

「――行きますけど何か？」

僕とユウヤの手が同時に止まった。え、そりゃ行くでしょ、人生金だろ。

ユウヤは何やら切羽詰まった表情をして僕を見た。

「駄目だアサキ此れ……！　何処の亡者さん！？」

「金の亡者さんだコラァ」

という訳で、条件はそれでスケート行きが決定しました。
異論？　認めないよ。

１４９＋キリストの誕生日に興味はないけど得するよね。

リョウコです、久しぶりな気がするのは気の所為ってことにしとくわ。

クリスマスか……私は自宅でわいわいやっただけだったけど、他の家はどんなことをしたのかしら？　皆に聞いてみようかな、だなんて今思っても、年明けちゃえば忘れてるのよね。――初詣とかに会えれば良いな。……誰にとか聞かないように！！

「……あれ？」

私は今、某電気屋さんに居ます。お父さんがクリスマスのプレゼントを買ってくれるっていうから色々見に来たんだけど――

「……」

見知った影がひとつ。っていうか一番会いたいような会いたくないような奴が一人。一心にゲームソフトを見ているとすれば、うん、間違いないわ。

「何してるのよ、ヒコクアサキ」

「ん」

しゃがみ込んで真剣にゲームなんか見てる同級生を発見した。ふふん、こうやって冷静に話しかけられるようになったんだからね！！

「ゲーム見てるだけ」

「あらそう」

……。

「……」

「……」

――相変わらず会話は続かないけどね！　うわあああ！！　私って少しくらい機転利かないのかしら！！　ばーかばーか！！！！　あ、あっちが話を弾ませるなんてことは一生掛かったってないんだから！　頑張れ私！　頑張れリョウコ！　ええと――

「ねぇカトウ」

「はい！？」

――人が頑張ろうとするとそうよねアンタは！

「……そんな驚かなくても」

「驚いてないわよ！！」

「……そう。それでさ、聞きたいことがあるんだけど」

「な、……何？」

聞きたいこと……？　私に？　何かしら？

「――今家に凄く落ち込んでて取り返しのつかない生物が居るんだけど、其れを元に戻すにはどうすれば良いと思う？」

「……はい？」

生物？　自宅に居るってことはヒコクユウヤのことかしら……いや、もしかしたらマヒルさんかも……でもマヒルさんが落ち込むとかあまり考えられないからヒコクユウヤね。

「ヒコクユウヤがどうかしたの？」

「昨日、クリスマスだったろ。母さんが早めに帰って来るって言ってたんだけど仕事で無理になって」

「へぇ……」

「マヒルも帰って来るって言ったのに私用で帰って来れなくなって」

「あら……」

「父さんは元々帰って来ない訳で」

「あなた達のお父さんって何なのよ」

家族が帰って来なくて落ち込むだなんて……女の子じゃないんだから。でもまあ確かに可哀相ではあるかも。折角皆で集まれるはず

だったのに……ってことよね。

「家で落ち込んでて鬱陶しい」

「仕方ないんじゃないの？　ヒコクアサキだけでも一緒に居てあげれば良いじゃない」

「だから昨日は家に居たよ朝から。朝方帰れないことが分かったから、日中うぜぇしあのクソ野郎。ずっとブルーオーラ出しやがってしねばいいんだあの変人」

酷い言い草だわ。

「でも其れでも一緒に居てあげたなんて、……やっ、優しいじゃない！！」

「優しくないし。というか叫ばなくても良いでしょ其れ」

ごめんなさいねっ！　一杯一杯なのよ！！！！

「本気で泣きそうな奴置いてけない、置いてったら余計鬱陶しい」

「……ふふっ」

凄く不服そうなヒコクアサキだけど、何だかんだ色々思っている彼が面白くて笑ってしまった。……余計不服そうな表情になったわ。

「良いじゃないの、あんたが居れば何時か元気になるんじゃない？」

「別に。今は家に一人だよあいつ。帰ったら元気になってることを祈るばかりだ」

「あははっ！　そりゃもう、頑張るしかないんじゃない？」

それを最後にヒコクアサキは帰って行った。買う為に来たんじゃないみたい。

「リョウコ、買うもの決まったかい？」

ジャストタイミングでお父さんがやって来る。さっきまでノートパソコン見てたみたいだけど、なんてタイミングなのかしら。

お父さんと別れてから喋ってただけだしな……。

「んー、……あ、じゃあコレ買う」

そう言って手に取ったのはひとつのゲームソフト。さっきヒコクアサキが見ていたゲーム、だと思う。

「ゲーム？　リョウコにしては珍しいね、ゲームなんてあまりやらないのに」

「いーの！　やってみたくなったのよ！」

たまには良いでしょ？　――好きな人の好きな物、知ってみたくなったって。

１５０＋平穏カムバック。

Ｐｒｒｒ・・・

「はいもしもし――あら、ユウ君かと思ったらー！！　珍しいじゃない、アサちゃんからお母さんにお電話だなんて！！」

『ちょっとね』

「あら～、お母さんが恋しくなっちゃったのかしら？」

『うん』

「……え？」

『だから早く帰って来てよ』

「え、ちょ、ちょっと待ってアサキ、お母さん果てしなくぱにーっく。え、アサちゃんがお母さん恋しくなる？　――ないないないない」

『何故に息子を否定が親』

「だってアサちゃん？　貴方はアサちゃんなのよ？　ユウ君なら話は別だけどさ？」

『たまには良いでしょ。母さんや父さんが帰って来てくれないと――僕の生命の危機だ』

「――はい？　ちょっ、いや沢山待ってアサキ、何があったの、真面目に――はいはいはーい！　今いーきーまーすー！！」

『色々あるんだよ、そして母さん、後でかけ直していいから仕事に戻れば？』

「五月蝿いわね！　今愛息子の危機なのよっ！！　仕事なんて後で片付ける！！！！」

（……聞いてねぇ）

「で、で！？　何があったのアサキ！？」

『そんなに慌てなくても。……ただ』

「ただ？」

『クリスマス以降、ユウヤがろくな飯を作ってくれない』

「……へ？」

『色々上の空なんだよ、今日の朝はマスタードが塗られたトーストだった』

「……」

『昨日の夕飯、ダシの入ってない味噌汁が出てきた』

「うっわあ……」

『昼は生の野菜入り焼きそば――』

「もういいわ、何か色々分かった」

『そして全て本人が気付いてない』

「――ごめんね、明日には帰るわ」

『うん、そうして欲しい、死ぬ』

「シンヤ君はどうせ何時でも帰れるんだろうから、私から連絡入れておくから」

『うん、お願い、死ぬから』

「それじゃね、アサ君。……生きててね？」

『努力します』

「……これくらい言っておけば帰って来てくれるだろうか」

「アサくーん、夕飯出来たよー」

「……何？」

「キムチ鍋ー」

（嫌な予感しかしねぇ）

淋しさ空回り、元気さは取り戻したが日常に反映するユウヤだったり。

１５１＋自宅に居ることの不自然さ。

「さあって！　おせちには何を入れたいかな、ユウ君！」

「伊達巻きー！」

そう言って買い物に出掛けた親と弟を見送った俺。こんにちは、昨日唐突に

『明日帰って来なかったらコ　ロ　ス』

という物騒なメールが自宅のパソコンから入っていましたマヒルです。俺、何かしたかな……。

恐らくアサキの仕業なのだろうが、未だ起きてねぇから真相は聞けず。朝一で帰って来たはずなのに其れより先に父さんと母さんがリビングに居たりして、其処に起きてきたユウヤが喜び勇んだのは言うまでもない。

「……はあ」

もう、一時なんだが。

「ため息をつくと、幸せが逃げるんだよ？」

「んな迷信知るか」

久しぶりに見た父さんは元気そうだった。ていうかアンタ確かそろそろ四十だよな？　テンションが若過ぎねぇかオイ。

「酷いなぁマヒルったら。奥さんやユウヤだったらすかさず、『じゃあ幸せを捕まえる！』くらいのことは言ってくれるのに」

「とりあえずそんな妻と息子なことに後悔しろ」

ボケ夫婦も良いところだよこん畜生。

――ていうかそうじゃなくて、だ。リビングでのうのう年末番組を見ている場合じゃねぇ。

「父さんよ」

「何だい？」

ソファから後ろに乗り出して、食卓机に座る父さんを見る。

「何故に今日、自宅に皆居るんだ？」

「分かりません」

わお。

「昨日夜に突然――」

『シンヤ君！　明日は絶対お家に帰ること！　良いわね！？』

「――って奥さんから電話が来て」

「アンタは何処の餓鬼だ」

「四十だよ？」

「知ってるわ」

母さんの差し金？　まあ、どうせ大晦日には帰ろうと思ってたから良いんだが。クリスマスは都合で帰れなかったし仕方あるまい。

「だけどやっぱり自宅は良いね、皆の温もりを感じるよ」

「父さんの言い回しって何で全て胡散臭いんだろう」

「きっとマヒルの中の僕がそういう人間としてインプットされてるからですよ」

「嗚呼、成る程」

「納得されると複雑だよ」

だって親に見えないんだから仕方ないじゃないか。どちらかと言えば友達感覚なんだよな、アンタは。

暫く何時までもほやほやな雰囲気な父さんに呆れていれば、二階から足音が。やっとうちの暴君のお目覚めらしい。

ちなみに午後二時だ。

がちゃ。

「よう、おはよ」

「おはようございます、アサキ」

「……気持ち悪い」

第一声目から其れかい。

「確かに、朝っぱらから野郎二人に迎えられるのはどうかと思いますけど」

「父さんそれ言っちゃう？　つーか親と兄貴なんだから良いだ――」

「そうじゃなくて」

「「……え？」」

つい声が合ってしまったが。

そういえば何だか、アサキの顔色が――

「僕の体調的な意味で、――凄く気分が悪い」

「大丈夫かっ！？」

「お、お医者さん行きます！？」

「や、アンタが医者だろ！！」

「そんな大袈裟にしなくても――」

「「しますっ！！」」

半苦笑気味のアサキを尻目に、しっかり意気の合う俺と父さん。
さっきまであんなに抑揚のないテンションだったのに双子絡むと父さんのキャラも変わるなー。……俺もだけど。

帰って来る二人も交えれば、余計騒がしくなるのはあと数分後ってとこかな。

１５１＋自宅に居ることの不自然さ。（後書き）

アサキはただの食あたりです、多分。食事に文句をつけることも時には大事かと。

152＋世界中の全ての幸せを願って。

はいユウヤですっ！　あと一時間近くで年越し！　あはは、楽しみだなぁ！！

「何でそんなに楽しそうなんです、ユウヤ？」

「だってだって、皆が家に居るのなんて久しぶりなんだもん！」

「うふふっ、ユウ君ったら。可愛いんだからもー！！」

食卓机に向かい合って座る父さん母さん、俺はマヒル兄とアサ君とテレビの前のソファの方に居るんだ！　皆に囲まれてる俺、うわー、なんか久しぶり！　うきうきし過ぎて今日は寝れそうにないや！

――なのに。

「……」

「……ふわぁ」

――もう寝そうな両隣。

欠伸をしたマヒル兄は未だしも、ちょっとアサ君、起きてる？

「アサくーん？」

「オキテマス」

片言なんだけど。

「マヒル兄も大丈夫？」

「おーよ、にーちゃんトリプルすらっしゃー的な見解を曝す予定」

意味分かんねぇ。何の見解それ。

「相変わらず夜更かしが苦手ですね、うちの息子達は」

「今日は特別、ユウ君だけ元気みたいだけどね」

どこぞのバカップルのような雰囲気を醸し出している二人の邪魔をする気にはなれないしー。むむむ、二人共起きてーっ、覚醒してー！

「アサ君マヒル兄！　もう少しで年越蕎麦だぞ！！」

「そうだなー、あれだよミルクティーに丸薬を入れてみようか」

「そんな毒薬かもしれないもん入れてどーすんのマヒル兄！！　ていうアサ君もおーきーてーー！！！！」

ゆさゆさ揺らしてみても、首の座っていない赤ちゃんみたくなるだけなアサキ。首取れそうで怖いからやめよ。

「あ〝ー、駄目だ俺、眠くて自分が何言ってっか分かんねぇ」

俺がアサ君を揺らしていれば、反対隣のマヒル兄がぐしゃぐしゃ

と頭を掻いてそう呟いた。折角のワックスが台なしだよ兄貴。
ていうか自分が変なこと言ってる自覚はあったんだね。

「そんなに無理して起きてなくても良いんだよ？」

マヒル兄に見兼ねた父さんがそう言う。

「や、蕎麦食いてぇ」

マヒル兄の目的は其れだった。……なんだか侘しい目的だね。

「時間になったら起こすわよー？」

そして母さんもそう言う。

「や、寝たら起きても要らないって言うから」

マヒル兄は手を左右に振って否定した。……此の人の起きてる理由って、蕎麦だけみたいだ。
苦笑する両親を余所に、マヒル兄は再び欠伸をして目をこするのだった。

「ご馳走様ーっ！」

「お粗末様です」

何故か母さんではなく父さんがそう言って、年越蕎麦完食な俺。

カウントダウン？　そう言えば食べてる内にテレビからハッピーニューイヤー！！　とか聞こえたけど、食べてたから興味無ぇや。

先に食べ終わった約二名は再びソファに座っているけど、マヒル兄が「ユウヤー」と俺を呼ぶ声がするところを見れば、恐らく片方が寝ちゃったんだなー、と俺苦笑。

「何ー？」

「アサキが俺を背もたれに寝てしまった」

蕎麦をキッカケに覚醒しきったマヒル兄は、何とも言えない表情で俺を見た。横には兄貴が言うようにアサキが一人――いや、二人居たら困るんだけど――。

相変わらず寝てる時だけは何か安らかだよねー、普段あんだけアレなのにー。マヒル兄もそう思ってるのか、何やら妖しい笑みを浮かべている。あれこそブラコンの笑みだ。……別に俺は浮かべてないもん！！

「蕎麦も食べたし、アサ君上運ぶか起こすかしよっか」

「だな」

という訳で、アサキを二階に運ぶことに決定して、そのまま俺とマヒル兄も寝ることにした。

「今日は楽しかったなぁ」

「お前の歳でそんなこと言うたァ、ホント変わってるよな」

「いーのっ！　俺は皆で居るのが好きなんだから！」

多分凄い笑顔で言ったら、兄貴はアサキを背負ったまま、俺の頭を小突いた。変わってるよ、そう言われたって、笑顔で言われたら説得力も何も無いのにね。

部屋で別れて、眠るアサキと二人になる。

「今日は楽しかったなぁ……」

今日は絶対に起きていないアサキだろうけど、俺はそうやって呟いた。あ、今日じゃないや、もう明日だった。あれ、よく分からない……あれ？

でも楽しかったからいっか！　これからまた一年が始まる訳だし、誰かが居たら絶対変に思われるくらい笑顔で俺は、二段ベッドの下に眠る弟を上から見遣った。

「今年も宜しくね、アサキ」

だからどうか、今日も明日も、善い夢を。

153＋このまま休みが続けばいいのに。

「――ま」

「……今、声しなかった？」

「え、マジ？　ちょっと見てくるー」

玄関を指差してアサ君が言った。こんばんはっ、ユウヤだよ！
新年だって気にしなーい！！　アサ君は指を差してはいるものの視線は完璧にテレビです、まあね、そうだよね、ゲーム中だもんね！
リビングを出れば直ぐの玄関、ひょっこり顔を出す俺。

「――うわあ」

――玄関に死体があった。……違う、アレはマヒル兄だ。

「マヒル兄、お帰りー」

「た、だ……いま」

何故切れ切れなんだろう。ぐったりと床に伏せる兄貴に歩み寄ってみたが、一向に動かない。

「……寝るな！　死ぬぞ！」

「死なぬ……此処……家……」

訳：死なねぇよ、此処家なんだから。雪山でもあるまいし。

俺は急いでリビングに戻る。

「アサ君大変だっ！！」

「何」

「マヒル兄のツッコミのキレが無い……！！」

「仕方ない、今はボケなんだ」

「そっか」

再び玄関に戻る。

「ねー、今はボケなのー？」

「……」

返事がない、ただのマヒル兄のようだ。

「ユウヤ」

「はい」

「とりあえず、俺を敬え」

「はーい」

という訳で、冗談はさておき。

「ぐぁー、疲れ、た……」

マヒル兄がご帰還です。冬休みはバイトしないつもりだったらしいけど、人が足りないって電話が来て午前中から出ていたマヒル兄。ソファを全て使ってぐったりであります。アサキが迷惑そうだ。

「疲れた……」

「お疲れ様ー」

ぐったりし過ぎなマヒル兄だけど、今日って何時間労働だったっけ？

「八時間半で休憩三十分て意味分かんねぇ」

「労働基準法無視？」

「労働基準法って何？」

アサ君がこっちを見て唖然としたのはさておき。うん、ほら、知

ーらない！

「お前達、宿題終わったのかよ？」

冷静さを取り戻したマヒル兄が、凄く聞いて欲しくなかったことを聞いてくる。超デリケートゾーンだ、あのままぐでってくれてれば良かったのに……！！

「おわた」

「そりゃお前はな」

「おわたよー、色んな意味で」

「おい」

ええ終わりましたけど？　もう何も考えたくないくらいに。漢字数学英語やーい！！

「宿題なんて終わらなくてなんぼだーい！」

「真面目になるんじゃなかったのか？」

「それとこれとは別っす」

マヒル兄までそんな目でこちらを見やがりなさって……！　仕方ないじゃん！　向かってったって出来ないんだからさ！！

「ま、ちゃんとやれよ？」

「はーい」

「大学が二月で終わる貴様に言われたくないがな！！」

「こういう時だけ声張るよなお前は」

画面に向かいながら叫ぶアサキ。マヒル兄も言ったけど、声張る場面が滅多にないのにそういうとこだけ本当……。

「そして兄ちゃんに貴様とか言わない」

「兄上、共にゲームなぞどうですか」

「やる」

「あ、俺もやりたいー」

貴様から兄上に呼び方が変わったから、という訳ではないけど、このままゲーム大会に発展。三人でゲームなんて久しぶりだなー。他二人が強過ぎて勝てない時多いけどさ。

楽しければ其れで良い、ってあるよねー。

１５４＋大切な何かを忘れてる。

こんばんは、カイリだぜ！
今週から学校が始まったとか、そんなの俺にはどうってことねぇぜ！　家に居ようが居まいが、やることはひとつ！！

「寝るだけだー」

「あははっ、実にカイリらしいね！」

机にぐったりとする俺に、相変わらずなユキの笑顔。新学期になったって変わらないなぁ……。勿論その隣のアサキも。

「――チッ、しにさらせ」

――中学校にゲームを持参する生徒なんざ、何時でもお前だけだわな。

「おや、負けてしまったのかい？」

「低レベルクリアが僕のモットーなんだ」

「ただレベル上げが怠ィだけだろそりゃ」

苦笑する俺に目も暮れず、アサキはかちかちと物凄い勢いでボタンを押している。

「――にしてもさーあ」

そうしてから俺は、ふとため息をついた。ユキが物珍しいものを見るように俺を見る。

「中学校生活も、あと一ヶ月弱なんだよなぁ……」

「まあ、三月中旬で終わりだからね、そういうことになるさ」

にっこり笑顔で言うユキ。

「なんだよー、ユキは寂しくないのかよー」

「何を言ってるんだいっ、寂しいに決まってるじゃないか!!」

再びのため息混じりでそう言ったら、凄く過剰反応された。隣のアサキが無反応なのはもはや気にしねぇ。

「私は二人よりも此の学校に居た時間は少ないが、こうやってぐだぐだとする時間が好きだったのだよ?」

「んー、確かに」

ユキは一年ん前に越してきたんだもんなー。

「でも、くよくよはしたくない。だからこそ、残りの日々を楽しもうじゃないか!」

「……そだなっ!」

もう残り少ない日々、来週には私立の入試だってあるけど、楽し

めるだけ楽しみたい。ユキとは学校違っちゃうし、俺が公立落ちたらアサキとだって別れちまう。

何もない、残りの平凡な日常を、楽しもうと思う。

それで最後は、笑顔でまたなって言えたらいいな！　会えなくなる訳じゃねぇんだし！！

「よーし、球技大会頑張るぞー！　勉強しつつ」

「ふふっ！　頑張ろうね、最後のイベントだよ」

二人で見合って笑顔な俺達。こういう時間が、楽しいと思う。

「ねぇ」

――と、急に声が。ゲームから目は離してないが、確実にアサキの声。

「お前等行かないの」

「何処に」

「京都」

「何故だい？」

「……」

あれ、黙られた。訝しげに視線を上げたアサキを見て、俺とユキは首を傾げる。

「三月の修学旅行、行かないの？」

「「……え？」」

――すっかり忘れてた、なんて口が裂けても言えない。

１５５＋もう今週にまで迫りました。

入試近過ぎる、ユウヤです。

「ユウヤ、此の漢字違いますよ」

「うぇ、マジ？　あ、此れ骨折じゃなくて骨接になってる、何すんだろ此れ」

自宅リビングでの上の空な勉強、アスカに指摘を入れて貰えば消しゴムでごしごしとノートを擦る俺。

「ユウヤ、フライ返しが無い」

「右下の棚ー」

其の後ろではキッチンをうろうろするアサ君。……キッチンにアサ君が居るだけで心配になるんだけど。何してるんだろ、今フライ返しって言ったけど何作るの……？

「ユウヤ、手がお留守ですよ」

「ふーい」

くすり、と笑うアスカだけど、俺は凄くキッチンが心配だったり。大丈夫かな……少し前まで其れなりに料理出来てたはず――クオリティはさておき――なのに、何時の間にかマイナスに拍車がかかったアサ君がキッチンに――いいや、ダメダメ、私立入試もう間近

なんだから勉強しなきゃ！！！

「アスカー、此れってさぁ、どうしてこー、ばっくとぅーざふゅーちゃーするの？」

「未来には帰ってませんが此れは――」

――ガシャン！　どだだだだ！！

「――……横の記号が――」

「続けるの！？　今の効果音で続けるの！？　前から薄々気付いてたけどアスカって色々勇者だよね！！！！」

キッチンからあからさまにすんごい音がした気が……！

「気にすんなよユウヤ」

「や、そんなこと言われてもねアサ君、アサ君の姿が大分前から見えなくなってたから心配してたんだよ、何したの」

「そうですよユウヤ、気にしちゃダメですよ、アサキ君なら大丈夫ですって」

「そうそう大丈夫、綺麗に整理された道具を根こそぎ崩したりして

ないから。適当に突っ込んでないから」

「ちょ、姿が見えないから何とも言えないが鍋か！？　コンロ下の鍋一式か！？　アサキ自分とは無縁のコーナーに嫌気でも差した――」

「刺すよ？」

「ごめんなさい」

んなことより勉強しろよ、と最後に言って、アサキはひょっこりキッチンから顔を出した。しゃがんで鍋整理でもしてたのかな――ま、アサ君がちゃんと整理出来てる保証は零だけど。あとで片付けるの俺なんだろうな……。

暫くして。

「英語むつかしいよう」

やる気失せた。

「頑張って下さいよユウヤ、あと少しでおやつですから」

其のおやつを出すのは俺だけどねアスカ。

「幾ら確約を貰っていても、酷い点数なんて取ったらパー、ですからね」

「パーかー……」

確約ねぇ？　ぶっちゃけそういうの全く知らなくて、たまたまマヒル兄と、

『ユウヤー、お前自分が行く私立校の説明会ちゃんと行ったよな？』

『……え？』

『……え？』

とか話したから（※話せてません）行った訳で。ちなみに公立の方には説明会すら行ってませんが何か？

「アスカはもう決まったようなもんなんだよね？」

「はい、俺は単願ですから」

「あーあー、でも此れで、アスカとは違う学校なんだよなぁ……」

「ふふっ、此の身体ですからね。出席日数が重要になりかねない国公立は無理ですから、私立校を選ぶ他無かったんです」

相変わらず苦笑なアスカを見て、若干しょんぼり。学力的に俺が受ける私立はカイト君と同じな訳で。アスカは俺よか少し上のところ。アスカの頭ならもっと上に行けたみたいだけど、体調のことに理解ある学校を選んだって言ってた。

ユキちゃんは確か、アスカよりも上の学校を単願。リョウちゃんとモモちゃんは公立狙いだけど私立は同じ学校受けるんだって。私

立なら同じだけど公立なら別々、……なんか寂しい二人だ。

「でもユウヤ、国公立は空高でしょう？　受かればアサキ君、それにカイリ君にリョウコさんとも同じでしょう？」

「んー、まあね」

アサキは一番近いから、カイト君は近いし学力的に、リョウちゃんは……まあ、うん。二択まで絞ってこっち選んだんだってねー、理由が分かり切ってらー。

「でも」

「？」

「受かれる自信が無さ過ぎる」

「の為に勉強してんだろうが阿呆」

ため息と同時に出た弱音に、キッチンより無事――あくまで本人は、だけど――帰還したアサキ。

其の手には何やら皿が、てか超ホットケーキ盛られてる。その皿をどかりと机に置けば、無駄に器用に加えたり脇に挟んだりしてたフォークやら何やらをばらばらと置く。

「うわぁ、美味しそうですね、おやつですか？」

「うん、そう」

「え、うぇ、アサキこんな上手く作れたっけ？」

超失礼発言だけど、最近のアサ君の歴史を遡ればそうでもない。……嗚呼、そういえば昔からホットケーキを上手く焼くことに関してだけは得意だったっけ。面倒な時は基本ホットケーキだったもんね。……後片付けは俺だけど。

「食ったら直ぐ勉強、以上」

「はーい」

「頑張りまーす」

踏ん反り返るアサキに、アスカと二人で返事をする。珍しいこともあるものだなぁ、とか思いながらも、何だかんだ応援してくれる同い年の弟に感謝。

はてさて！　ラストスパートだっ！

１５６＋本日は豪風注意につき。

ユウヤでっす！　入試が近過ぎるので皆で学校帰りに遊ぶことにしましたっ！　おかしいだろ、って思った皆～？　――これはヤケクソっていうんだ。

文字通り皆――七人という大人数でゲーセンに言ってみたりした訳です。中学生じゃないのか、っていう視線は全身全霊を以ってスルーさ！！　受験生じゃないのか、って視線には心を窓をシャットダウン！！！！

と、いう訳だけど流石に真面目リョウちゃんや隠れ真面目ユキちゃんも居る訳だし、そろそろ帰ろうか、と外に出たら。

ゴー――――――

――あれ、風強ぇ。
関東は本日の宵、豪風です。

「うわぁ、前見えねぇ」

「もうっ、誰よ！　入試前に一度羽伸ばそうとか馬鹿なこと言ったの！！」

「ユウヤ君だよ～」

「その話にノリノリだったのはリョウコさんですね」

「ううううるさいっニカイドーアスカ！！」

「あっはっは！　聞いてくれたまえアサキ！　身体が勝手に動くよ！」

「散れ、そのまま風と共に去れ」

誰を誰と言わなくても分かる個性ある俺他六人。風に拒まれ――一部誘われ――砂に見舞われ……うわ、口に入った。

そのままぎゃーぎゃー騒ぎながら歩くも、少しも風が止むこともなく。普段の何倍疲れるの此れ。

「アサ君、大丈夫？」

「進めない」

あ、怒ってる。なかなか前に進めなくて怒ってる。

うーん……此処はアレだね、何か楽しい話でもしよう！

「ねぇねぇアスカ！」

「何ですか？」

「俺、明後日誕生日！」

「知ってますよ、受験期丸被りなんですよね」

そうなんです！　俺は明後日が誕生日！　――というのを今月入って数十回とアスカに言い続けているんだけど。

「あー、そういや誕生日だっけ、プレゼントは破壊力のある――」

「ものは要らないから」

相変わらずのカイト君。リョウちゃんの時も同じこと言ってたっけな、破壊力が必要な誕生日って何なんだろ。

「ねぇリョウちゃん」

「何よっ、――ああもう！　風何時止むのよ！！」

「ごめんねリョウちゃん、でもひとつ言いたくてね」

「何？」

「ユウヤ君、誕生日だって」

「聞こえてるわよ」

「だから、――アサキ君も、誕生日だよ？」

「……受験どころじゃないわ！！！！」

――リョウちゃんが何か覚醒した。

気付いてなかったのかな、俺数日前から一組にも言い触らしてたはずなんだけど。風に舞うリョウちゃんのポニーテールがリョウちゃんの発狂すべく感情を表している気がする。……あれ、アサ君聞いてたかな今の。

「アッサく……て、ちょ、アサキー？」

超後方に居るし。まさかもうギブか弟。

皆に声を掛けて戻る俺。

「あの、アサキ？」

「疲れたもう」

ああやっぱりギブでした、兄ながら思う、風圧にやられる弟って……。滅茶苦茶不服そうに立ち止まっていたアサキの荷物を持ってあげれば、引っ張って皆に合流。

「ギブが早ぇよ」

「五月蝿い体力馬鹿しぬれ」

苦笑なカイト君に暴言を吐く元気は残っているようなので、そのままれっつらごー！

「そういやぁアサキ、お前私立受けないなんて強気だよなー」

「アサ君なら風で戦闘不能だよ」

俺が引っ張ってんだもん。

「モモ！　其処車道だから！！」

「モモちゃんとユキちゃんは風と戯れてるんだよ」

「それどういう意味ですか」

解説する俺を交えて正常な人は四人、と。後ろで風と戯れてる人達はスルーに近いね此れ。カイト君やリョウちゃんがタフなのは分かるけど、アスカって調子良い時は頗る元気なんだよね！　さっすがアスカ☆　――常時中途半端なアサキとは違うよ。

「誕生日か、誕生日……」

「何だよリョウコー、お前は良いなー、受験以外のこと考える余裕があってよー」

「悪かったわね。……でも、誕生日……」

さっきからリョウちゃんはぶつぶつと喋ってるけど、安心してリョウちゃん。――アサキには全く聞こえてないからさ。

という訳で、やっとこさ家近く。
皆各々ばいばーい、と別れて、――結局最後までユキちゃんは風と戯れていた。本当、何時からユキちゃんってボケてたっけってなるね！

「アサキー、家着くよー」

「んー」

引っ張られてただけなのに其れでも不服そうな弟。……うん、久しぶりにアサキが何か可愛――いいえ何でもございません何で分かったの睨まないでこあい！！

「じゃ、ユウヤ」

「ん？」

「帰ったら勉強な」

「……はい」

ちきしょう！　やっぱりスパルタだ！！

１５７＋仮、決戦！／前日

リョウコ、です……！！
別に初っ端こんななのは気にしないでよ！？　勉強中よっ、勉強中！！

「お姉ちゃん、私立のテストって、そんなに同じ単語が出るものかしら」

「え？　……あ！！」

明日が入試だからと机に向かっているはずなのに、ノートに書かれる文字はたったひとつ。

「“誕生日”――って？」

「うるさいうるさい！　い、いいからアンタはどっか遊びに行ってなさいよっ！」

「ふふっ、言われるまでもないわ。義務教育まっしぐらの私はすかさず古本屋にでも立ち読みに行くの。お姉ちゃんは滑り止めでしかないテストの為に今日一日苦しむと良いわ」

――其れは其れで凄くムカつく！！

だけども。あのコトナと書いて馬鹿が去ったから、此れで落ち着いて勉強が出来るわ。滑り止めだろうがなんだろうが入試は入試、落ちる訳には行かないわよね。

と、思うのだけど、どうしても落ち着かない私。誕生日、誕生日、今日はヒコクアサキとヒコクユウヤの誕生日。

入試……もう放っておいていいかしら？

い、いやいやいや！　入試の方が大事よっ！！　入試が一番！

ヒコクアサキだってきっとヒコクユウヤに勉強教えてたりするわ――

「アサくーん、何見てるのー？」

「花」

「まあ、花屋だからね」

「花屋の花を見てると、心が安らぐよね」

「確かにねー、でもアサ君、何時からそんなに清らかな心を持ってたの」

「殴るよ」

――よねっ！　きっとそうよ！　それじゃなくてもギリギリっぽ

いヒコクユウヤを勉強させないで、何処か遊びに行ったりしないはずよ！　今プレゼントなんて買ったって、――私が一人で渡しに行けるはずもないんだから――。

ｏｒｚ

……さあて、勉強しよう。

「アサ君ってばー」

「何」

アサキですが、休みなのに花屋に来てるんです。さっきからユウヤが五月蝿い。

「そろそろ帰ろうよー、買い物帰りなんだからさー」

「……」

昼の買い出しに出て、そのまま途中の花屋に入り込んだ僕等。だって入りたかったんだもん。

「俺が言うのは変かもしれないけど、勉強しなきゃだし」

「いや、本来お前が言う台詞だから其れ」

まあ……仕方ないか、其の台詞を聞けただけでも前進な気がする。

――此処には、後で来ることにしよう。

明日、勝負だ。

158＋仮、決戦！／当日

「それじゃ、いってきまーっす！」

「いってらっさい」

参考書片手に、意気揚々と自宅を出ていった我が兄が去って。…
…おはようございます、パジャマだけどアサキです。
気合いを入れる為なのか、普段より五割増しな朝飯を作って出ていったユウヤ。……まあ、確約とかいうの貰ってるんだし、心配することは何もないだろう。あんな格下な学……いや何でも。
休みだというのに起きてしまった――実際には起こされた――から、仕方なくそんな朝飯を食おう。

昨日から持ち物チェックを遠足時の如くしてたし、忘れ物もないよね。流石のあの馬鹿でも。

「イタダキマ……」

――あれ、珍しい。郵便物出してきたのか。
形式的に手を合わすと、机の端に新聞を発見。何時出してきたんだろ、たまにはちゃんとしてるじゃないか、とか思いつつ新聞を手にすれば、其の下から一枚のハガキを発見。此れ……って――え？

「あ、あんのクソ野郎……！」

――此れ、“受験票”じゃねぇか……！！

ユウヤですっ、駅ですっ、といっても二駅しか乗らないんだけどね☆

切符の買い方に試行錯誤するカイト君を横目に見遣りつつ、俺は最後の荷物チェックに入った。

「えーっと、筆箱でしょー、中身は鉛筆おっけー消しゴムおっけー定規も入ってるー！！」

「切符って買うの難っ」

滅多に買わないからそうなるんだよカイト君。

「あと財布にー、お守り×３（※家族から各々渡された物）にー、お菓子にー、参考書にー」

「待て、途中何か入ってなかったか？」

「え、あー、お菓子のこと？　勉強する前は甘い物が大事だーって、アサ君が」

「しかしその鞄には明らかな程甘くねぇ菓子が見えるんだが」

そんな些細なところをツッコまないで欲しいね！！

「そういうカイト君なんて手ぶらじゃないか！！」

俺は言い返さんとばかりに、ビシッとカイト君を指差す。待ち合わせ結構待ったから準備してたのかと思いきや、制服手ぶらで現れたカイト君。ポケットに鉛筆とか突っ込んだらしいけど、受験に手ぶらって此の人は……！

「いーんだよ、俺様ァ参考書なんざ不必要だ。テスト直前は参考書とか見ねぇ方が良いんだぜ？」

「むきーっ！！」

「後ろには財布、左には文房具、そして右に受験票だ！！」

「鉛筆折れたって知らないんだからね！　受験票だって落としても知らないよーだ！」

「誰が落とすかい。……そういやユウヤ、お前受験票は？」

改札前まで歩く俺達、そんなカイト君の台詞にふっ、と笑みを零せば再びカイト君を指差す。

「鞄に入れるといざという時に出しはぐねるからね、手で持って――……て？」

――持って来た、はずだったんだけども。

あ、あれ？　俺確かに持って来たよね！？　確かに鞄じゃ駄目だと思ったから肌身離さず右手に持って出たよね！？

「ユウヤ、まさか――」

「忘れてないよ！　絶対持って外出たもん！！　持って出て――」

全ポケットを漁る。ぱたぱたと騒ぐ俺、改札前で止まってごめんなさい！！　一旦端に寄って、鞄も探る。……無いよ、無い無い無い、うわあああああ！！！！

お、落ち着け、思い出せ、確かに持って出たはず。んで、たまたまポストに目がいって、たまには郵便物出してみよっかなっとか思いまして、新聞出して、机に置いて、再び外――へ。

……気付いた時には――既に受験票持ってねぇ。

「――たはずなのに所在が分からねぇえええうあああああ！！！！！！」

「ちょ、落ち着けよ」

ちょ、マジで、何処、何処なの受験票ー！！　持って出たけどまさか家！？　口には出せないけどカイト君の所為で取りに行く時間なんてないんだけど！？

「どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ――」

「ユウヤー、皆様が見てるぜー……」

「――ユウヤ！！」

やばいしくったやはり鞄に入れとくべきだった何で手に持ってたん……あれ？　今誰かに呼ばれた気が。

「――って、あれ、……もしかしなくてもアサ君！？」

「や、あ、と、……見つけた！」

息が切れ切れアサ君。

どんなに体力無くたって遠からず近からずな距離を走ってきただけで息が切れる訳も無いし、……どっから走ってきた……？

「馬鹿野郎！　大事な、時に、忘れ物すんじゃねぇよ！」

「……あ！　アサキ其れは……！！」

真っ赤な顔でぐわしと俺の顔面に拳を投げ付けた。や、痛いけど。

もう片方の手に持たれたハガキの方に集中力がいってるもんで、実際そんなに痛くなかった。

「届けてくれたんだね!?　ありがと！　真面目に！！」

「ほー、アサキ乙」

「僕の休日を、返せ」

俺涙目。元々涙目っぽかったのがより涙目でハガキ――受験票を受け取った。うわあああ良かったあああああ。

気付いて直ぐ来てくれたのかな、パジャマから普段着に着替えたり大変だっただろうに。今日帰りに何か買って来てあげよう。というかアサ君が俺の為に走って――うあああああああ！！（※感極まって）

そして呼吸の整ったアサキ、そして一言。

「お前等急げよ」

そうだった、ギリギリだったんだ☆

「「はい、言ってきます」」

そしてやっと、改札を潜った俺とカイト君。

「ユウヤ、カイト」

「あい？」

「何ー？」

「名前だけは書けよ」

改札越しに小学生っぽい注意を受けました。

「「おう！」」

でもアサキの注意は何時も役立つからね、俺もカイト君も素直に頷いて、やっと会場を向かうことになった。

よおっし、戦闘開始だい！！

159＋たまには忘れます。

「はぁ……」

「何だよまっひー、ため息なんざつきやがって」

「まっひー言うな」

マヒルだ。

大学の食堂で昼飯と決め込もうとしているセツの隣で、俺は盛大にため息をついた。

「いやぁな、そろそろ受験だろ？」

「マヒルが！？」

「俺じゃねぇよ、弟だよ」

大袈裟に睨みを効かせてセツを見た。面倒な冗談は一喝。

「知ってるよう、怒らないでよう」

「大の大人が猫撫で声出すな、うぜぇ」

銀髪不良が何たるだ、……まあ、セツなら別に違和感ないんだけどな。だってコイツガキだもん。

「アサキとユウヤ、そういや中学三年だったっけか」

「……急に真面目に……」

「いっやー、受験なんて懐かしい！　俺私立校行ったから楽だったけど」

セツは何故かにやにやしながらそう言った。

「マヒルって確か――」

「地元校。出来る限り早く家に帰れるようにな」

「うっわー、其の頭で地元選ぶとか教師泣かせー」

「うっせぇ阿呆」

実際そうだったんだけどな。

学校には色んな進学校を薦められたし、少しは興味あったけど――

「――俺にとっちゃ、あの二人のことの方が大事だったんだよ」

母さんも父さんも日中家に居ないのに、小学生のあいつ等を、二人だけにはしたくなかったから。

だって俺は生まれて此の方、二人を煩わしいと思ったことなんて無いんだぜ？

「――ブラコン？」

「……セツ、多分今良い話」

「畜生！　空気ミスった！！」

何の話だ。

恐らく笑っていただろう自分の表情を戻せば、俺は呆れてセツを見た。何時見ても感情豊かな奴だ。

「でも、確かにそうだろうな」

「……何が」

だから急に話を振られてもよく分からないんだが。

「兄貴が居ないのって、なんか嫌だって思うぜ、俺」

……弟の勘、なんだろうか。セツもお兄さんが居る訳だし。

「自分で言うのも何なんだけどさ、俺ん家って親があんま子供に感心無いんだよな」

「嗚呼、何か聞いたな其れ」

「超放任主義だから、俺は親よりシロの方が好きだったもん」

超放任主義の中で育ったらしいセツは、そんなのを思わせない笑顔で笑った。きっと其れは、兄であるマシロさんのお陰なんだろう

なと俺は思う。

「でも俺が中学ん時にシロが一人暮らし始めちゃったもんで」

「え、マシロさんって一人暮らしだったのか？」

「おう、俺が押しかけた」

何という横暴。

「だって自宅つまんねぇし」

良い迷惑だ。

「とにかく、そういう訳だ」

「……どういう？」

――全くどういう訳だったのか分からないが。

セツの中では何かがまとまったらしい。

「アサキもユウヤも、きっとマヒルが居て良かったって、思ってるんじゃねぇの？」

「――――……」

そういう、ことか。

相変わらずの楽しそうな満面の笑みで、セツは颯爽と食事を始め

た。喋って食事を出来ないからだろうが、いっただっきまーす、という掛け声と共にセツの喋る機能は停止した。

まあ、また二月になったら帰るし、其処に居れれば、俺はそれで良いんだけど。

「……ん、今一月……？　――嗚呼！　誕生日！！」

「？」

「やべぇ忘れてた……！！！！」

不思議そうなセツは放っておく。

うわあ、どうしよう。

１６０＊閑話＋更新の遅さに驚愕します。

「昨日大雨だった」

「いや、雨じゃなくて雪でしょ？」

「帰る頃は雨だったからいいんだよ、真面目に怠いわ」

……ちょ、自由に話し始めるのやめい。

という感じでこんにちは。久しぶりにやってまいりました閑話コーナー。無事２００和まで行けたなら、こんなコーナーなくしてやろうと思っています、作者です。

「続くのー？　すんごい更新速度落ちてるけど」

しゃらっぷ。

「スペルくらい書けよ」

最近一人歩きが甚だしい双子だよ……誰か彼等をとーめーてー！

「――という訳で、毎度お馴染み反省会の時間です」

止まった、しかも何か勝手にお馴染み反省会してやがる。

「はいはいっ！」

「はいユウヤ」

「浅井さんの更新速度が超落ちた！！」

さっき言ったよなそれ、どんだけ僕を貶めたいんだお前。

「せめて月１０回の更新は欲しいよー」

み、３日に一辺くらい更新してるよ今だって！！

「嘘つけ、僕等の誕生日ほぼスルー、そして冬休みにスケート行くっつったのに更新忘れてたの誰だ」

や、アレはアレだよ、受験の時は先延ばされるのが普通じゃん。スケートだってちゃんと書きますし、春休みに。

「絶対忘れてたじゃん☆」

――ごめんなさい。

「謝罪が頂けたので、この話題は浅井氏が２月からちゃんと月１０更新で行く、ということで解決――」

え、嘘、ちょ、マジ無理だってそれ。

「単純計算でアレだね、４月に１８０話が来る訳だね！」

「ＧＷとかに食い込んだら刺殺もんだな」

……もう嫌だ。……ｏｒｚ

という訳で、そろそろ中学卒業という訳なんですが。

「先生、俺まだ私立の結果が来ません」

「先生、僕まだ受験してません」

じゃかしいわ。誰が先生だ。

ユキやアスカとは違う学校になっちゃうことだしね。

「作者のばかあああああああ！！！！！！」

いきなりだなおい。

「我が兄上は、ニカイドー君の別れることが心底不満なようです」

「毎日アスカに会えないなんて！　絵のない美術館と一緒だあああああ！！！！」

前から会えてないでしょう、あの人来ても週４なんだから。

「あ、そっか☆」

「というかお前、絵に興味なんてあったの？」

「特に」

はい、じゃあ次行くよ。

「おい作者！　アサキとまで高校違くしたらマジグレるからな！！」

それは貴方の頑張り次第じゃないか？　次行きたいんだが。

「勉強しろや」

「はい」

て訳で、高校生活入りましたら、それなりに新しい環境に変わる訳ですよ。人から離れ、新たな仲間が増える。

ぶっちゃけ考え終わってる感ありますから、これからもよろしゅー、っつーことです。

ぱちぱちぱちぱち――（※ふたり分の拍手音）

でもその前に君達、修学旅行忘れないでね？

「2月だよね？　俺受験終わってないんだけど楽しんでいいんだよね？」

「僕は決まってからだから」

すんごい自信、落ちる気ねぇの？

「ねぇよ」

その頭寄越せよ。

「やらん、マヒルに言え」

という訳でそろそろお開きに致します。これからも朝夜グラフィティ。を宜しく！

「朝夜グラフィティ。って久しぶりに書いたとか思った作者だけど宜しく！！」

「以上」

161＋傘を忘れた理由。

「むー」

「何、どうした」

「聞いてくれやマッヒル兄！」

「だから何よ。とりあえずどいてくれるか？」

「私立受かったんだ！」

「おめでとう、どいてくれ」

「はい」

自宅からこんにちは、ユウヤでっす！　二月ということで大学が休みになったマヒル兄が帰って来た！！　しかしそんな兄は人の合格通知をおざなりにして、掃除機片手にどかされました。ごめんね、邪魔だったね。

「んなこと言っても次が本命だろ？　気ィ抜くなよ？」

ガー――、という掃除機の音でぶっちゃけ何言ってるのか聞こえなかったけど、多分何か重要なこと言ってるんだろうから頷いておいた。

二十歳の兄ちゃんが掃除機かけてんのって凄い面白い映像だよね、

とか思っていたら。

「ただいま」

アサ君帰還。

――しかもびしょ濡れで。

「え、――え？」

「どうしたアサキ、傘持ってかなかったのか……？」

そう、今日は気温も低ければ天気も最悪、という何ともバッドな日なんだけれど。……アサキ、傘持ってったよね？

「ワスレマシタ」

「あからさまに嘘つくの止そうか、バレバレだから」

今日は別々に帰って来たんだけれど、頭から足先までびしょ濡れなアサ君には一体何があったのだろうか。

「傘があったんだよ」

「そりゃあ、朝持ってったもんな」

「外は雨、到底傘だけでは補えない。だから僕は思ったんだ。――最初から負けるくらいなら、傘なんて差さなくていいんじゃないか、って」

「阿呆」
「風邪引くよアサキ！！」

凄く神妙に語ってくれたところ悪いけど、俺でも分かるくらい意味不明だよアサ君。マヒル兄は飽きれながらもお風呂を沸かしに行って、俺はタオルを取りに行った。

「って嗚呼もうアサ君、そのまま部屋入ったら濡れちゃうよう」
「知らん、家の事情なんざ知らん」
「ていうか制服大丈夫？　明日乾く？」
「知らん、服の事情なんざ知らん」

困るのは自分なのにお構いなしなアサ君は、今日も今日とて自由です。タオルを持ってっても頭に乗せてるだけだし……風邪引いちゃうよー。受験前なんだよー？
帰って来たマヒル兄は掃除を再開、相変わらずけたたましい音を発して埃を吸い取る掃除機。

「で？　本当の理由は？」

――そしてどうやら、本当の理由を聞き出したい様子。

「さあて、何でしょう」
「何で勿体振るのさー」

こてん、とソファに寝転がったアサキ。帰宅後は何時もバーサス睡魔な弟だけど、雨に降られて一段と勝負が難航してるみたい。

「アサキー、話は良いからよ、頼むから風呂入ってからにしろよ？」

「んー」

苦笑いのマヒル兄に対する返事も実に曖昧だね！　そして数分後に沸いた風呂に入った後も睡魔さんは止まないらしく――ソファについてものの数分で寝息が聞こえてきた。

「髪乾いて無ぇのに……」

マヒル兄は呆れた様子だったけど、直ぐさま毛布を持ってきてアサキにかけた訳で。流石、お掃除もバッチリ終わったみたいだしね！

「雨嫌いのアサ君が傘差さないなんて、どしたんだろねー」

「さあな、誰かに貸したんじゃねぇの？」

曖昧な予想も程々にして、マヒル兄と俺は夕ご飯にすることにした。

今日の夕飯は何かなー？　マヒル兄が居る時だけそう思えるから、結構楽しみだったりする俺だった。

１６２＋恐らく、数時間前の話。（前書き）

前話の数時間前の話。

１６２＋恐らく、数時間前の話。

アサキです。
買い物がしたくなった学校帰り、カイトともユキとも別れた後。
目的のものは買えたんだけど、ついでにスーパーに寄ったら雨に降られた。や、半端ない感じの雨に。
折りたたみ傘は持ってるんだが鞄の中、仕方なく取り出そうとしていたら。

「――あ」

「おや、アサキ君」

空を見上げて突っ立っていたアスカ君に出会った。

「どうしたの、空なんざ見上げて」

確か今日、アスカ君は学校休みだったはず。というか毎日が高確率で休みなんだけどさ此の人は。
私服と思われる白いパーカーを着たアスカ君が歩み寄ってくれば、相変わらずな笑顔を向けてきた――でも今日ばかりは苦笑だったけど――。

「どうやら、お天道様はご機嫌ナナメのようでして」

「ミタイデスネ、こんなことならまっすぐ帰りゃ良かった」

「ふふっ、残念でしたね」

本当に残念だ。

此れ以上酷くなる前に帰りたい、のだけれど。気になることが一つ。

「――アスカ君、傘は？」

ビニール袋片手に立つアスカ君の手には、傘なんてものが握られていない訳でして。

「忘れてきました、ですから濡れて帰ろうかと」

アスカ君は笑顔で一言、そう言った。どんな状況下であろうと彼は笑顔、だけども。

「今日、体調悪いんじゃなかったの？」

学校を休んだということは、そういうことなんだろうし。悪化したらどうするんだよっていう。

「ええ、まあ。ですがこうやって外に出て来てる訳ですし、平気ですよ」

「……本当に？」

「……ふふっ、はい。心配して頂いてありがとうございます」

笑ってるし、大丈夫かな、――なんて、言うとでも思ったのかな

彼は。

鞄の中からやっと取り出せた折りたたみ傘、カチン、と音を立てて開けば、その真っ青な傘の柄をアスカ君に向けた。

「使いなよ」

「え……？」

凄くキョトンとした表情ありがとうございます。

目を瞬かせたアスカ君は、驚いた表情で僕を見遣る。

「傘、使った方が良いよ」

「ですがアサキ君が――」

「僕はいい、どうとでもなる」

そう言って傘を差し出してるんだけど、なかなか受け取ってくれない。出来れば早く受け取って欲しいんだけど……手ぇ疲れる。

「俺は本当に大丈夫ですよ？　俺よりも、アサキ君は受験を控えている訳ですし……」

「あ、そういえば合格おめでとう」

「ありがとうございます、――じゃなくて」

アスカ君の華麗なるノリツッコミも出たところなので。僕は傘を其の場に置けば、本来の目的だった物も一緒に其処に置いた。

「此れ、ユウヤに渡すやつだから持っててくれない？」

「え、あ、はい、分かりました、ってアサキ君！？」

折角買ったのに濡らしたくないんだよ。僕は鞄とビニール袋（※スーパーにて購入）のみを持って、雨の中に突っ込んだ。……まあ突っ込んだとは名前だけで、冷静に歩き出しただけなんだけど。

「じゃ、気をつけて、ユウヤには言わないでよー」

雨の中でアスカ君に手を振れば、既にびしょ濡れになった靴――水溜まりに入ったんだよ……――を鳴らして帰路を歩いた。

ええと、言い訳どうしよう。

「おや、此れは……――」

アサキ君が折角貸してくれた傘を差して、アサキ君に渡された物を見る。

つい、笑みが零れるのが分かった。

「ふふっ、何時渡すんでしょうね、此れ」

ユウヤに渡すらしいですが、……いやはや。

けれど深入りは無用だと思うので俺はとりあえず、アサキ君が風邪を引かないことを願っておくことにしました。

ありがとうございました、アサキ君。

１６３＋ツッコミは基本鈍感らしい。

「ただいま～」

モモです、ただいまお家に帰ってきました。今日お家にはお母さんもお父さんも居ないけど、弟のユズ君だけは居るはずなんだよね。

「お帰り、――じゃなくて！　……こんな時間まで何処行ってたのさ」

「え？」

――ただいまの時刻、夜九時です。

「中学生がこんな時間まで出歩いててどーすんだよ、それじゃなくても姉ちゃんトロいんだから」

「あー、酷いなぁユズったら。お姉ちゃんだって何の考えなしにこんな時間になった訳じゃないんだよー？」

「じゃあ何さ、聞いてやんよ」

「――バレンタインのチョコを何作ろうか考えながら買い物してたら、こんな時間になりました～」

「受験を一ヶ月以内に控えた人の台詞じゃねぇな其れ、つーか、そんな優柔不断にリョウコちゃんを巻き込むなよ」

うぅ、何でリョウちゃんと一緒だったのバレたんだろ……。でもよく考えればそうだよね、毎年そうだったら気付くよね。さっすがユズくーん、あったまいー。

「……何かごめんなさい」

「何故謝った、つーか何に謝ったえぇ？」

何処ぞの不良みたいに脅してくるなんて、そんな風に育てた覚えはないよー？　――なんて言ってもどうせツッコまれちゃうし、何も言いません。

「じゃ、僕はもう寝たいんで寝ます」

「ふぇ？　まだ九時なのに？」

「小学生ナメんな、今時の小学生が皆夜更かし大好きだと思ったら大間違いだかんな」

「えぇ、待ってよう、ユズ君だってそろそろ中学生だよう。お姉ちゃん寂しくて死んじゃうよう」

「勝手にどーぞ、姉ちゃんはそろそろ高校生でしょ？　僕だってバレンタインケーキを作る予定を立てなきゃいけないんだから」

「ユズのばかぁ、家庭的ー」

「ダレが馬鹿だこら、そしてありがとうございます」

という私の説得もあって、パジャマなユズ君は未だ起きててくれるみたいです。料理下手なユズ君が死ぬ気作ってくれた夕ご飯を食べる私の前で、ユズ君はぐったりとしてテレビを見ています。

「ユズー、今年はどんなケーキ作るの？」

「んぁ？　今年はシンプルにベイクドで」

「そんな軽口で作れちゃうユズ君って怖いよね……」

「へ？」

本人は到って真面目に言ったみたいで、素っ頓狂な声を上げた。小学生がそんな簡単に『ベイクドチョコレートケーキ作りますっ』だなんて……我が弟ながらあっぱれだよ～。普段はすっかり真面目ちゃんなのに、何処か抜けてるのがユズ君だよね。

「誰かにあげるの」

「そりゃ勿論」

「え……？　ゆ、ユズキ君何時の間にやら春が来ちゃったの……？」

「別にそういう意味じゃねーよ」

少しくらい照れてくれたって良いのに……少しの照れもなく実のお姉ちゃんを馬鹿にした表情を見せてくる。

「毎年のことだし、クラスの友達に渡すんだよ」

「なあんだ、俗にいう友チョコだね～」

「其れ其れ」

そう言ってから、幾つ作るかを指折り数え始めたユズ君を優しい眼差しで見守る私。

そっか～、クラスメートにか～、未だ未だそんなだよね、小学生だし。

嗚呼、でも其れと――

「コトナちゃんにも？」

「おう、ちゃんと渡すよ」

――コトナちゃん、うちのユズキが、こんなでごめんね。

１６４＋騒ぐ最中の第三者。

「うふふ、うふふふふ、ほうらせっちゃんもーっと酒持ってきなさーい！」

「だあれがせっちゃんだばーか！　テメェは飲み過ぎなんだっつーの！」

「お前もだ阿呆、少しは加減ってもんをだなぁ……」

マシロです、……あ、今全く関係無い人だ、とか思ったでしょ？

本日はセツ、弟が友達を引き連れて自宅で酒盛りをしています。夜だからいいんですけどね、友達っていってもマヒル君にウミちゃんだしね。

「そーよお子ちゃま！　貴方は未だ未だお子ちゃまなんだからお酒なんて飲んでるんじゃないわよー！！」

「誕生日がまだ来てねぇだけで今年で二十歳なんだからいーんだよーだ！　第一酒なんざ元から飲めるっつーのー、あはははは！！」

「五月蝿いわよセツったら。お兄様にご迷惑よ！」

「あ、お気遣いなく」

机をバンバン叩く我が弟、ガシャンガシャンと食器類が騒ぎ立て

ていますが……割らないで欲しいところです。リビングの机を囲う三人を見ながら、ダイニングにて僕は思う。
真っ赤な顔して騒ぐセツとウミちゃん、と、全く異常の見当たらないマヒル君。

「シロのことなんざ気ーにすんなっ、どーせシロだ」

「土地権利はマシロさんにあんだぞ、大口叩いとらんで少し落ち着け」

ほぼ同じ量を摂取しているのに此の差。決してセツが酔いやすいだけでは無いのでしょうね、マヒル君がザルなんだ。

「つーかよぉ、お前等自宅空けて大丈夫なのかぁ？」

そういえばそうだ。
マヒル君もウミちゃんも、親が滅多に自宅に居ない生活だったのでは？（※セツからの伝聞）
マヒル君の方は何時もと聞きますが、ウミちゃんの方は大丈夫なのでしょうか……。

「カイちゃんならマヒルん家に居るから大丈夫よ～！」

「ブラコンなウミ姉ちゃんがカイト君を家に置き去る訳無ぇだろうが」

「そうよ！　あんな可愛いカイちゃんを家に寂しく独りぼっち？ああああああ考えただけで帰りたくなってきたわ……！！」

「帰ればいいんじゃない？」

「酷いわよマヒル！　此処で私が帰ったら、此の場に華が無く……ふっ、無くならないわよね、貴方達揃ってイケメンですもんねー！！」

「おーい、キャラの変わりようが甚だしいぞー」

「しかしそんな二人をたぶらかす私！　ふふふっ！　なんて素敵なパラダイスなの、ウミ！！」

「おーい」

大分騒がしくなってきましたね……。ウミちゃんの甲高い声が大分耳に来ますが、まあ、元気なのはいいことですからね。ちなみにセツ、そろそろお眠なようです。

「……」

「うふふっ、うふふふふ」

「怖い、怖いから、そして向かいの貴様、既に眠そうじゃねぇか、飲み始めてまだ三時間経ってねーぞー？」

や、二時間半飲めば充分でしょう。マヒル君の素晴らしきザルっぷりには流石に笑いが堪えられなかった僕。若干笑みを零していれば――声には出てないけれど――、其れに気付いた様子でマヒル君が此方を見た。なんと鋭いのかマヒル君、僕に背を向けてるはずなんだけど。

「何か、面白いことしました俺？」

「ううん、何でもないよ。随分と仲睦まじいなぁ、と思ってね」

あながち外れてもいない話で誤魔化せば、マヒル君は少しキョドってから苦笑した。悪戯に笑うマヒル君って、本当に様になってるよね。

「ったりめぇよう！　俺等ァ大学入って以来の仲なんだから！　なぁウミ！？」

「そーよ～？　もー二年にもなる付き合いよねぇ？」

――と思ってたら、後ろが騒ぎ出しました。二年って結構短い気もしますが、まあ、仲良くやっているのなら余計な口を出すのもアレですよね。

「二年って短ぇよ」

ツッコんじゃった、マヒル君ツッコんじゃった。自分が遠慮したの馬鹿みたいしゃないですか。

「いーんだよ！　時間じゃねぇのー！！！！！　――……」

「そうよそうよ！　ってセツ？　せーつー？」

つい面白くて笑っていたら、ついにセツの充電が切れたみたいで。コテン、と横にぶっ倒れたセツをウミちゃんが揺らしていた。

「んもうっ、相変わらず潰れるの早いんだからあん」

「ウミ、口調が気持ち悪い」

「五月蝿いわよ。――ふあぁ……なんか私も眠くなってきちゃったわぁ……」

欠伸が移るのと同じ原理なのかな……。数秒して、ウミちゃんは机に伏して寝てしまったようです。お開き、ってところだね。

「相変わらずはお前達だよ」

マヒル君は再び苦笑いで呟けば立ち上がり、開いた皿等などを回収し始める。……ええと、……あ、片付け始めたのか。

「マヒル君、良いよ良いよ、片付けはやりますから」

「いや、でも」

「マヒル君だって眠いでしょう？」

慌てて止めるも、マヒル君は止まらない。……なんて良い子なんでしょう此の子……！！

容姿なんてセツとおんなじようなものなのに、此の中身の違いは何なんでしょうか。他人の家で酒盛りの片付けなんて、――時たまうちに来るイツキ先生とキクカワ先生にも見せてやりたい――。

「いや、俺は大丈夫ッスから、慣れてんで」

「慣れてるって……もしかして、常に片付けはマヒル君なのかな……？」

「……まあ、基本何処でも」

「今日くらい休んで下さい、頼むから」

セツ、起きたら説教です、覚えておきなさい。

「……じゃあ、お願いします」

「はい、喜んで」

申し訳なさそうなマヒル君だけど、そういうのに慣れていないんだろうね。長男ってそういうものだよ、僕もそうですし。

でもこういう時くらい、甘えた方がいいんですよ、マヒル君。

散々な洗い物――量が半端なかったんですよ――を終え、キッチンから脱出した僕。嗚呼もう、此処が僕の家で此れだけ散らかすってことは、普段マヒル君の家でどれだけご迷惑をかけてるんだか――頭痛がする程謝りたい。説教で済むかな、此の気持ち。

疲れつつも扉を閉めておいたリビングを覗いてみようと、隙間程度に扉を開けた。其処には綺麗になった元通りのリビングと、寝ている二人――に、毛布を掛けるマヒル君。適当に引ったくってきたらしい毛布――多分僕の毛布です――を優しく掛ければ、すとん、と座り込んだ。

「マヒル君」

もう少しだけ扉を開ければ、びくりと身体を震わせてマヒル君が此方を見た。よく見れば顔が若干赤くなっている、後から酔いが回るタイプなんですかね。

「すみません、勝手に毛布パクりました」

「いいですよ、風邪引いちゃいますからね」

僕はセツの部屋ででも寝ればいいですし。

「この有様じゃあ、このまま此処で寝させるしかないですし。マヒル君はどうします？」

「俺も此処で寝ちゃおうかと」

「良き案だと思います」

お休み中の二人を起こさないように、小さく二人で笑った。

取り込み忘れていた洗濯物を取り込んで再びリビングを覗く頃には、マヒル君も寝息を立て始めていました。大の大人が一人はカーペット、一人は机に伏せて。だから邪魔にならぬよう気を遣ってか、ソファに上がりぐっすりと。

普段は見守る側のウミちゃんも、随分なお人よし加減を見せるマヒル君も、起きたら説教の嵐を見舞う予定の我が弟も。

「――善い夢を、見て下さいね」

幾ら大人になったって、子供なことには変わりないんですから。

微弱な月明かりの差し込む、――今だけは。

１６５＋何時も通りが必勝法。

「あのー、アサ君？」

「……ん」

「まだ起きないの……？」

「……何時」

「もう普段起きる時間なんだけど」

「……あと五分」

ちょ、何此の子、全くやる気ないんですけどユウヤです。何を隠そう今日は運命を分ける分岐点といっても過言ではない受験日ですよ、アサ君にとっちゃ。あ、俺は後期しか受けないから。

なのに緊張？　何で僕がそんなのしなきゃいけねぇの？　的なオーラ全開で、ギリギリまで寝ていらっしゃる此の暴君を起こそうと必死な俺。アサキやーい、そろそろ起きようよー。優雅な朝を迎えようよー。

「ユウヤ」

「なあに？」

「今日の飯何」

「早く起きないと朝から焼肉にするよ」

質問が全く優雅じゃねぇよ。

やっとのことで覚醒したアサ君。黄色のエプロン姿でリビングに居た兄貴――不似合いなはずなのに似合ってるし――が普段通りに朝ご飯をセットしていた。

「ちゃんと食えよー？」

「食うし」

「嗚呼もうアサキ零してる」

こういう日でも自宅に父さんと母さんの姿は無いけど、何か最近其れが普通になってきちゃってるんだよね。……本人達に言ったら全力で休み取ってきそうだけど。

何だかんだマヒル兄はよく居るし、なんか平和だなぁ。

「ユウヤ、早く食わねぇと遅れるぞ」

「え？　ぎゃああ、アサキ食うの早ッ！！」

一人のんのんとしてたら置いてかれてしまった。ちきしょ、学校休みだから遊びに行くんだぞー俺だって。

「スムーズに動くぜ」

「……ちょ、アサキ実は結構緊張してるんでしょ？　普段んなこと言わないよね？」

図星なんだろうけど此れ以上言ったらシャーペン飛んでくるどころじゃ済まないから引き下がる俺、健気なお兄ちゃんだよね！

「アサ君、忘れ物ない？」

「多分」

「筆箱持った？」

「うん」

「健康な身体持った？」

「日頃からね」

「未来に突き進む勇気も持ったか？」

「マヒル貴様は何が言いたい」

「あと糖分とか」

「……お前等は何なんだ」

「お「兄ちゃんですが何か」」

「……」

アサキが凄く呆れてるけど、頑張って欲しいんだもん。

「じゃ、行ってくる」

「おう、いってら」

「頑張ってねっ、アサ君！」

学校に行く時と変わりなく出ていったアサ君。相変わらずだね、とマヒル兄と笑いあったのは言うまでもなく。

「前期でほぼ取っちゃうんだし、アサキなら大丈夫だよね？」

「まあな、あの学校はアサキの偏差値よか十以上低ィしな」

「宝の持ち腐れだね」

「そしてユウヤの五程上」

「言わないで、前期で落ちたらショックでか過ぎてやばいと思ったから後期回ったんだから言わないで」

「ま、大丈夫だろ。俺の母校だ」

「……」

其れこそ宝の持ち腐れだけど、とりあえず言わないでおいた。

とにかく、頑張ってね、受験。

１６６＋頑張りました、リョウコちゃん。

ぴーんぽーん。

ヴー――――

ぴーんぽーん。

ヴー――――かち。

「ふぅ、掃除完了っと」

ぴーんぽーん。

「あン？」

マヒルだ。双子が揃って出掛けてるもんだから、思い切ってリビングを完璧に掃除してみた。……え、前にも掃除してなかったかって？　いや、あんな比じゃなくて、窓を新聞紙と空雑巾で交互に拭いたりとか、カーテンを元から模様替えしちまったりとか、もう根本的な意味で。……いや、掃除好きなんだよ、なんか。

掃除を終えて悦に浸っていたら、どなたかやってきたらしい。

「はいはーい」

おっといけねぇ。まさかこのまま出る訳にもいかねぇよな。三角巾とエプロンなんてしたまま表に出たら「何此の人」って顔されんのは目に見えてらぁ。（※経験済み）

それらを片手に玄関を開けた――が、誰も居なかった。……あれ？

「……あ」

掃除機の所為で遅くなってしまったのか、と思って少し表に出てみれば、

「おーい！　二人共ー！」

見たことのある、弟共の友達が居た。

「あ、マヒルお兄さんだ～」

「え？　あ、こ、こんにちはっ！」

「リョウコちゃんにモモちゃん、はいこんにちは」

という訳で、とりあえず自宅に招いてみた。双子が外出中だと伝えれば、また後で来る、といったものだから。いちいち帰すのも失礼だし、とりあえずリビングで待ってもらおうという訳だ。

「あー、なんかアセロラドリンクとかいう中途半端な飲み物しか無いんだけど」

「私は何でも大丈夫です！」

「私も～、わざわざごめんなさい」

「いやいや、構わねぇよ」

自宅に女の子だけが居る今の状況に多少違和感を覚えるものの、良い子達だから別にただただ和むだけの俺。恐らくアサキがノリに任せて買ってきたアセロラを二人に出せば、いただきます、と小さく会釈をしてモモちゃんは飲み出した。良い子だ。

「あいつ等何時に帰るかね……遅くならないっつってたのに……」

「いえ、何も言わずに出て来た私達が悪いんです、どうせ届け物ですし」

「まあ、好きにしててくれて構わないから、……ん？　届け物？」

俺が掃除機を片付けるのがそんなに面白いのか、モモちゃんはにこにこと目で俺を追って来る。けど俺はリョウコちゃんとの会話に首を傾げれば其方を見てみる、が――何故か視線を逸らされてしまった。

「届け物なら、置いてってくれてもいいけど？」

「え、あ、いえ、じっ、自分で渡したいんです！」

「……あらそう」

そんな真っ赤になって言われたら、流石に強制は出来ねぇわ。第一、一週間前が何の日か考えれば――完全に何を渡すのか予想出来るし。

「こ、今年こそ自分で……！」

「去年はアサキに渡さなかったのか？」

「去年は私が渡しました～」

「だから今年こそ――ってマヒルさん！？　何の話か分かってるんですか！？」

「え……うん、ごめん分かる」

え、気付いてなかったの？　誰しも分かる反応してくれてるけど、多分セツですら分かると思うんだが。

しかしリョウコちゃんは静かにワナワナと戦いてしまってるのか、俺を見て停止してしまっている。……何か悪いことをしてしまった気がする。

そして、リョウコちゃんの一言。

「ご、ご、ご、ごめんなさい！！！！」

「何故謝罪」

きゃー！！　と騒ぎ出してしまったリョウコちゃんの横で、未だアセロラを美味しそうに飲むモモちゃん。……慣れていらっしるわこの子。

「え、ちょ、まっ、どうするのリョウコ！　バレてるわ、お兄様にまでバレバレらしわあああああ！！！！」

「モモちゃん、どうすれば良いの、この子」
「このまま騒いでても害はないんです、リョウちゃんですから」
大人だ。
モモちゃんに言われた通り、俺は何も関与しないことにした。

「たーんだいまー」
ユウヤでっす。自宅に帰還なんだぜー！　という訳でどたどたと廊下を小走りする。だって寒いんだもん。……うん？　そういやなんか靴多かった気がするんだけど――
「マヒル兄ー？」
「おう、お帰り」
「ただいま――で、何この状況」
自宅なはずなのに、何故かテレビに向かうリョウちゃんとモモちゃんが居た。正確にはテレビじゃなくて、ゲームに向かう、だけど。
「アサキ待ちな感じ」
「なのに何でリョウちゃんゲームしてんの、そしてモモちゃん画面

釘付けだし」

「――嗚呼もう！　難しいわね此れ！」

「あ、リョウちゃん後ろに敵がー」

「嘘っ、ちょ、このやろっ」

しかもリョウちゃんちょっとプロいし。何時の間にゲーム上手くなったんだろ、恋は盲目ってやつかな？

「あ、ヒコクユウヤ」

「お帰りなさ～い」

「あははっ、今気付いたって顔してるけど遅くない？　ていうか酷くない？」

あくまでも笑顔で言ったけど、二人は気にしてないご様子だった。何なんだろう、最近寂しい。

「ユウヤ君、はい」

「え、わ、何此れ？」

モモちゃんがソファ越しながら可愛らしくラッピングされたピンクの袋をくれた。

「一週間遅いけど、バレンタインだよ～」

にこにこなモモちゃんにつられて、ついにこにこしたくなる俺。
いや、したくなるじゃなくてしちゃいます。

「うわあ、ありがとー！」

「一ヶ月近く遅れちゃったけど、誕生日も兼ねて、だから皆より特別なんだよ～？」

「え、マジ！？　わーい！」

「――という口実を元にリョウコちゃんはアサキに豪華な本命チョコを気付かれないように渡す訳か」

「だから何で分かるんですかマヒルさん！？」

マヒル兄のキッチンからの野次に、リョウちゃんはコントローラーを投げやりつつ叫ぶ。ゲーム機壊すと其の想い人に怒られるよ、リョウちゃん。

「何でって……誰の兄貴だと思ってんだ？」

「そうそう、でもマヒル兄もアサ君同様、自分のことには超疎いんだよね」

俺のそんな発言に不服そうなマヒル兄。でも本当にそうなんだもん。

とか言ってたら。

「ただいま」

簡潔な言葉と共に、弟が帰って来た。
同時に、リョウちゃんの動きが完全に止まった。

「――……」

リビングに参上した我等がアサ君。扉を開けて、一通り部屋を見回してから一言。

「じゃ」

「「何処に行く」」

扉を閉めようとしたアサキにマヒル兄と揃って一言。何故閉めるし！

「何で友達来てるのに閉めるの！　ほらっ、入って入って！」

「えー……僕は新巻を読まないと……」

友達より漫画を選ぶな。しかも真面目に嫌そうなのがタチ悪い。

「ほら、リョウちゃん！」

「え、ああと、わ、分かってるわよ！」

モモちゃんの催促。リョウちゃんはハッとして鞄を漁る。出て来たのはさっき俺が貰って机に置いたやつの青色ｖｅｒ．。
アサ君はアサ君でそれを不思議そうに見てるだけ。

「ヒコクアサキ！」

「はい」

まあ、結構素直なんだけどね、返事は。

「はい此れ！　ぱっ、バレンタインと誕生日一緒だけどプレゼント！　言っておくけどアレよ！？　バレンタインは皆に渡してるんであって、……そう、そうよ友チョコ！　友チョコなんだからね！？　別に入ってるやつも別に私からというかモモと一緒に選んだんだからね！？　良い！？」

「うん」

「それじゃあ帰ります！！！！」

そう言い切って、リョウちゃんは鞄ごと走り去ってしまった。玄関からお邪魔しましたーっ！　と聞こえてくる。

「えぇ！？　リョウちゃん待ってー！　お邪魔しました～！」

モモちゃんも慌てて出ていく。慌てながらもぺこり、とお辞儀をしていく辺り、凄く良い子なんだなぁと改めて思う。

「……凄く沢山言い訳してったな」

「何が？」

開いたソファの前にあるコップを回収しつつ、マヒル兄は呟いた。けど、アサ君は首を傾げるだけだった。

「どうよアサキ、女の子からチョコレートを貰った気分は」

「……」

アサキは考える。

そして再び一言。

「何でチョコレート？」

残念ながら、リョウちゃんの言葉にあった“バレンタイン”の部分は綺麗に脳から抜け落ちてしまったらしい。

無念リョウちゃん。

１６７＋順当な結果です。

ざわざわ――

ユウヤです。

只今の時刻は朝九時頃。普通に学校の時間だけれど、何故か俺が居る場所は――とある高校の門前だったり。

「……なんで俺、此処に居るんだっけ」

時間は一時間前に遡るんですけどね。

『アッサくーん！　ほらほらっ、合格発表見に行くんでしょ！　起きなさーい！』

『――……』

『アサキー？』

『……ユウヤ、見てきて』

――と、何とも端的な話だけれど、アサ君が駄々捏ねたからなんだよ。あれだけ自信満々だった癖に、自分で見るのは嫌なのかなぁと。ふふっ、アサ君ったらぁ。まあそれは良いんだけど、――俺が見に来るの、おかしくね？

普通親とかでしょ、だって俺ふつーに学校なんだけど。何此の複雑な感情、遅刻だよ、寧ろ遅刻を越えてサボりでしょ。

とかなんとか一人で唸っていたら、聞こえていた騒ぎ声が一層大きくなる。

「あ」

合格発表が張り出されたみたい。きゃー、やら、わー、やら、ちきしょー、やら。うんうん、数人は落ちちゃうのは仕方ないよね。……ええと、アサ君の番号はー。

「アンタ、何やってるのよ?」

「おう?」

あ、リョウちゃん。

「やほー」

「じゃないわよ。アンタは前期受けてないでしょ?」

「うん、アサ君の代理」

「……」

何か超複雑そうな表情された。俺だって複雑だい。

「あ、リョウちゃん受かってた?」

「え、えぇ、まあね」

「じゃあアサキは？」

「は？　み、見た訳ないでしょ！？　っていうか番号知ら――」

「嘘はいけないよリョウちゃん」

「――受かってたわよ」

やっぱり知ってた。

「五月蝿いわね！　たまたま知ってただけなんだからね！？　アンタなんかとっとと重要書類貰って来なさいよっ！！！！」

そう叫びながらリョウちゃんは走り去ってしまった。叫ぶ割に次やることを的確に教えてくれちゃうんだから良い人だよね。

『あ、もしもしアサ君？』

「うん、ちゃんと書類貰った？」

『……合格なのは確定なんだね』

ベッドの中からアサキです。今日はどうしても出たくなかったんだ、なんかもう、アレ、週末疲れとか。

何処ぞからのユウヤの電話に寝返りをうてば、ひとつ溜息をつい

てみる。

『俺今から学校行った方が良い？』

「当たり前じゃん」

『でも俺、名目上サボりじゃん』

「僕が体調崩したから代わりに書類取り行かせた――ってさっきアヤメ先生に電話した」

『……』

ちなみに先生は『そうですか、まあアサキ君なら絶対受かってるものね』と爽やかに仰って下さった訳で。

『まあ、うん、じゃ』

「じゃ」

何か呆れ気味だった気もするけど、其れは気にしない方向で。

「……合格、と」

正直言えば自信はあったけど、絶対な確証なんて何処にも無くて。体調、というかベッドを出たくない理由もきっと其処にあるからこそ、ユウヤに頼んだんだけどさ。

ともかく、無事終わって良かった。

さて、母さんに電話でもするか。

168＋コードネームG。

「……」

ユウヤです、今の沈黙は俺のじゃありません、アサキのです。

「……」

たった今まで明日からの修学旅行のおやつを買いに出ていたら（アサ君のも含）、何故か沈黙を決め込む弟が居た訳で、しかも立ちながら。……何してるんだろう……？

「アサく――」

「ストップ」

止められてしまった。

いや、アサキが無言だったとしても普段は気にしないんだけどさ。けどソファにも座らずゲームもせず、立ち尽くして床を見ながら立ち止まってたらこっちだって訳分からないよ。

「ユウヤ、とりあえず早急にリビングを後にして、二階で惰眠を貪るマヒルを起こしてくるんだ」

未だ寝てんのあの人、もう昼過ぎてんだけど。

「よく分かんないけどりょーか――」

「振り向かずに行け、良いから」

嫌に神妙な顔付きで言われたので、仕方なく言う通りにすることにした。

「で、どーしたアサキ」

起こされても不機嫌じゃないのは良いポテンシャルだと思う。まあもし不機嫌だったとしても正午何時間過ぎてると思ってんだよ、な話なんだけどさ。そんな眠気眼なマヒル兄を一階に召喚してみて、うん、今風男子も寝起きはただの目付き悪いにーやんだ。

「Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｉｎ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ的な」

「発音良いな」

「……あー、意味分かったわ」

え!?　今ので分かったの!?　起きて数分な癖に何で分かるんだよ!　絶対おかしい、この人絶対俺と血なんて繋がってない!!!!

リビングに戻って来て依然、アサ君の立ち位置は変わらなかった。

「という訳でユウヤ、先ずはお前、部屋に戻れ」

「ぅえ？　何でさ、超気になる」

「良いから。お前が此処に居たら――“奴”を逃がすことになる」

そして何故かマヒル兄まで神妙な顔付きになった。……何よ“奴”って。

うん？　――いや、まさか――

「ま、まさか、“奴”って……」

心当たりがひとつ。……俺が居たら逃がすことになるってことは、俺が騒ぐとか、そういった話だろう。ということは――

「そう、Ｇ（＝ゴキブリ）の襲来だ」

「ひあああああああ！！！！！！！」

ばたんっ。

アサキの一言で二階に逃げました。

む、虫は無理だ！　ていうか奴は虫！？　蝶々なら大丈夫だけど蛾は無理だもんねーだ！

「みっ、耳元で叫びやがったユウヤめ……！」

「どんまい兄貴」

「お前が言うからだろうが」

「どんまい兄貴」

１６８＋コードネームＧ。（後書き）

という訳で、修学旅行編スタート。

１６９＋遅ばれ進め、修学旅行。／いち

「俺様いっちばーん！　よっしゃあ、おるぁ！！　ぐふっ、ジョーカー！！！！！」

「無駄にやる気満々格好良いよ～ロクジョー君！」

「ふふっ、そして引いたモノを口にしてしまう辺りがカイリらしいね」

おはようございますアサキです眠いので寝ていいですか。

「ほらアサキ！　俺様のカードを引けっつーの！　其れかジョーカー引け！」

何故朝っぱらからこんなにも元気なのか、僕には分かり兼ねるが楽しみというのは睡魔を凌駕するように出来ているらしい。……かっこ僕は除く。

「……」

「ふはははははさあさあジョーカー引けー！！！！」

スイッ。

「畜生！！」

「そりゃ初っ端ジョーカー引く訳ないだろうが阿呆、あ、上がり」

「早っ！！」
「早くないかい！？」
「凄いね～」

ていうか顔に出てるんだけどさ。何故か最初から手札一枚だった僕は一発上がりをした所で。ポーカーフェイスとは程遠いカイトとにこやかな残り二人が接戦を繰り広げ始めた。

修学旅行ということで、関東人な僕等が向かうは関西地方。日本の都道府県の府、京都大阪という訳だ。

「はい、私も上がりだよ～、ごめんね、先上がっちゃって……」
「ふふっ、まあ勝負事に恨みっこはなしさ！　さあてカイリ、勝負だ！！」
「望むところだぜ！」
「お前等、音量下げろ、五月蝿い」

新幹線は静かでいいけど、だからって何時間もこいつ等と騒いでたんじゃ僕の身が保たない。
……凄く寝たい。

「だぁあーッ！　負けたーッ！」
「ふふふ、危うく最下位だったよ」

「もう一回！　勝つまでやっかんなー！」

「自分が勝てないことを知っているところは殊勝だな」

「しゅしょうってなぁに？」

「……何でもない」

――誰か助けて。

１７０＋遅ばれ進め、修学旅行。／に

引き続くアサキです。
あの後新幹線なのを良いことにユウヤまで乱入してきて大変だった。結局寝れないし、寝たかったのにあん畜生。

「おら、とっとと並ばねぇと次行けねぇぞー」

一組に向けてサクライ先生が叫ぶは駅内のとある一角。決められた班ごとに並べやこの野郎、と悪態をついている訳ですね分かりま――

「二班並べ――アサキ！　お前班長だろうが！」

「うわあ」

忘れてた事項を綺麗に思い出させてくれやがりましてあの先生。スキーの時は押し付けたのに今回は、

『待て参謀！　今回は正々堂々じゃんけんで――』

『黙れ腐れ外道』

と言った具合にミトウが――え、別にその後の罵倒でミトウが落ち込んだのが面倒臭かったとかじゃなくてだよ、うん。
まあ、じゃんけん負けたんだってば。

「なあなあユキ、京都って舞妓さん居ねぇのか？」

「舞妓さん？　居るだろうが駅には居ないんじゃないかい？　動きにくいと思われるし……」

「軍曹、酔った」

「俺に言われても……」

「軍曹、疲れた」

「だから俺に言われても！」

仕方なく先生の方に行き、後ろを振り向いたら嫌気が差した。スキーの時と班はほぼ変わらないし――つーかユキが入っただけだし――楽は楽なんだけど。――……テメェ等。仕方ない、声をかけてみよう。

「おい二班、並べって」

「タコ焼き食いてぇなー、本場って美味いんかな」

「そりゃもう美味しいだろうさ！」

「黙れー並べー」

「軍曹～！！」

「うわあ！　おいハルナ！　よっ掛かるなよ！」
「やれやれハジメー」
「――……俺が“並べ”っつってんのが聞こえねぇのか？」
「「「はい」」」
すちゃ。
速やかに返事をして並んだのは主に後半三人だったけど、辺りに夢中なカイトの首根っこを引っ捕らえて並んだユキに免じて許してやろう。
「二班並びましたけど」
「早かったな、お前が班員を脅した件に関しては目を瞑ろう」
「ちょ、さっ、サクライ先生！　今の迫力見なかったんですか！？」
「射抜かれるかと思ったんですけど！？」
「うるせぇ黙れ俺のクラスは俺がルールだ」

ミトウやらハルナやらの反論は通じない、改めてサクライ先生のクラスで良かったとか思った。
まあ今月でそんなクラスともおさらばなんだけど。

「それじゃあ一組、次バス行くぞー。……あっ、とその前に――未だ動くなカイリ、説明があった」

行動力抜群の班員を止め、サクライ先生は言う。

「明日の自由行動日の話だが。学校でも言った通り、三人以上八人以下のメンバーでならどのクラス同士で組んでも構わねぇって話だったな」

はあ、その説明か。
僕は何時もの七人だから特に気にしてなかったけど。

「今日中に班長と副班長か決めといてくれ、班長には俺やアヤメとかに繋がる携帯渡すから」

先生は珍しく先生らしくして、分かったな、とクラス全員に確認を取った。ていうか先生、今日ばかりは本当に先生らしい。まあ、いいんだけどさ。

「んじゃ質問とかあるかー、無かったらバス行くぞ」

「はいっ！　先生今日に限って超先生らしいけどどうしたんスか！」

「うるせぇ」

「はい」

カイトが質問したけど答えてねぇな其れ。

171＋遅ばれ進め、修学旅行。／さん

「じゃ今から自由時間だからねーっ！　皆っ、集合時間に遅れたら置いてっちゃうからな～？」

隣の三組から少々笑い声が聞こえた。そんな穏やかな雰囲気を見て、ちょっと羨ましくなったユウヤです。

「キクカワ先生はああ言ってますが、本当に遅れたら容赦しないですから」

二組は完全ブ　リ　ザ　ー　ド　☆

あーや先生の笑顔が怖いよ！　菩薩が如き爽やかな笑顔なのに、何で背後にブリザードが見えるの！？　でも何だかんだであーや先生は優しいことくらい知ってるんだからね！　多分！！　きっと探してくれるに違いないさ！　多分！！

「一組ー、キクカワもアヤメもああ言ってるが、俺は容赦しないっつーか何つーか、全力で置いてくからな特に二班」

第一、ああ言われてる一組を見れば少しならずとも気が楽になる訳だよね。

「あっれーおかしいな、サックラせんせと何故か目ぇ合ってる俺」というカイト君の声も聞こえたけど、直後解散になってクラス別行動になったことで色々掻き消された。

ちなみに今俺達が居るのは某寺院。鹿が沢山居るあの奈良の公園に居ます！

「ねぇねぇアスカっ、鹿煎餅買おうよ！」

「あはは、買うのは構いませんが、後で後悔しないで下さいね？」

何やら意味深な台詞だったけど、俺は全然気にせず購入。

――刹那、数匹の鹿に囲まれた。

「――貴様等、謀ったな！？」

「そりゃあ餌貰えますからねえ」

笑顔でこちらを見るアスカは、冷静に使い捨てカメラで写真を撮っていた。……撮ってないで助けて下さい！

「ぎゃー！　ちょ、怖っ、鹿近っ、うぎゃそれは煎餅違う俺のさーいーふー！」

数分後。

「ぜぇ……はぁ……助かった……！」

「お疲れ様です」

俺と同じく鹿煎餅を買ったらしいユキちゃんが、「さあ鹿畜生共よ、私に付いて来れたならば褒美をやろうではないかっ！　はっはっはっは――」と言って鹿共々何処かへ走り去って。

学年一速い足を何てものに活かしてるんだろうあの人は。

「ですから、後悔しないで下さいねって。此処の鹿達は空腹なんですから」

「だったら先にもうちょい具体的な情報が欲しかったかも！」

でもまあ、騒いでいても仕方ないし、時間も限られてるんだから次行こ、次。

「うわ～、リョウちゃん見て見て～」

「見てって言われなくても見てるわよっ」

モモです。自由時間となれば当たり前にリョウちゃんと一緒に居ます。大仏様って凄いなぁ……おっきいなぁ……。

「沢山居るねー、大仏様」

「そうね、こんなに沢山居るとは流石に思わなかったわ」

リョウちゃんは笑顔で辺りを見回してる。お寺とかってつまらないイメージあるけど、やっぱり大きさとかが出て来ると違うものだよね～。

「なんか修学旅行だってのに、もう、少しだけ満足感があるわ」

「リョウちゃん早いよ～、明日が本番みたいなものでしょ？」

「は、明日？」

「アサキ君達との自由班」

途端、笑顔だったリョウちゃんから余裕が消えた。

「ば、馬鹿ねモモったらっ！　べ、別に私はそそそそんなにたたたたのしみとかじゃ――」

凄く吃ってるのに冷静さを保ててると思ってるリョウちゃんって凄く可愛いなぁ……。遠目に含み笑いでこっち見てるユキ君とロクジョー君が見えるけど、其れはリョウちゃんの為に言わないでおこっと。

「ないんだからねっ！？　分かった！？」

「うん、そうだね」

まあ、楽しみなんだよね、リョウちゃん。

172＋遅ばれ進め、修学旅行。／よん

イツキだ、……今一瞬でも誰だよとか思った奴、居たらぶちのめすぞあぁ？

「それじゃあこの後、部屋に荷物運んで直ぐ各班の班長はもっかい此処集合だ」

某寺院を珍しくも時間以内に集合した一組――どうやら騒ぐカイリの目付役はユキが買って出ているらしい――は、泊まり先である此の旅館に着く前にとある京文化を体験した訳だが。

とある京文化、観阿弥やら世阿弥やら、名前くらいは一度は聞いたことがあるだろう――要するに能楽っつーのをだ。

だがまぁ――能なんざつまんねぇだけだよな。

『イツキ先生、今教師が思っちゃいけない一言考えたでしょ』

『いや、全然。さあて、楽しい能楽の時間だぜー』

『イツキ君棒読みだね～』

能見学中にすかさずそう言われたんだが、俺はそんなにもつまらなそうな顔をしてたんだろうか。

や、でも仕方ねぇだろう？　興味無ぇ訳だしよ。生徒共だってそりゃつまんなそうだったし。アサキやらユキやらは何だかんだで見てたみてぇだが、ユウヤはアスカにギリギリで起こされ、カイリに至っちゃ爆睡だったはずだ。

「せんせー」

「何だ」

「うちの班長が全く聞いてない場合はどうするんスか？」

そしてそんな過程を経ている結果、とことん全回復なカイリがんなことを漏らす。若干上がっていた視線を下げれば――体育座りで俯くアサキが目に入った。

「……おいアサキ」

「……」

「返事がないただの屍のよ――」

「あ？」

「先生に向かってあ？　はねぇだろあ？　は」

ゲームネタにつられたのか、顔を上げる実質大分真面目な優等生は超雑に返事をする。

「テメェのこれからの予定言ってみろ」

「寝る」

違う。

「班長会議だろうが、はーんーちょーうーかーいーぎー」

「眠い」

完全に諸事情じゃねぇか。

「ふふふっ、一日と保たないアサキの体力程愛おしいものはないねっ！　先生、役不足ながら私が代行しますよ」

此方も実は真面目なんだろうけどどう頑張ってもそうは見えないユキがアサキの後ろから突っ掛かる。……未だ六時なんだけどな。

「まあ、代わり居るならまあ良いか。――つー訳で、とりあえず解散！」

事が解決したのは良いが、一組他はとっくに解決してたらしくざわざわしてやがる。

さってと、今日はあと飯食って風呂入って寝るだけだし、やー疲れた疲れた。

「ふふふふふ、夜はまだまだ長いぞイツキ君！」

――疲れた、現在進行形で。

「何だよキクカワ」

「生徒達の見回りが終わったら、三人で飲み会に決まってるじゃーん☆」

「馬鹿野郎、校長のジジィに見つかったらどうすんだ」

「あ、ごめん四人だ」

「込み!?　校長込みかよ!!　あの校長真面目だったんじゃねぇのかよ!」

「あはははははイツキ先生、もう僕は諦めてますから」

既に目が死んでるアヤメを見て、俺もあえなく諦めた。

飲むのが嫌なんじゃねぇが、初日くらい休ませろや。

173＋遅ばれ進め、修学旅行。／ご

「ご馳走様でしたーっ！」

旅館の料理ってマジ美味しなんですけどっ！　なユウヤです。ちゃんと残さず食べました！　旅館の料理って炭水化物とか主菜とか被ってきたりして量多いんだけど、好き嫌いオール零の俺としては美味しな限りだよー！！　途中アスカが、

「無尽蔵ですね、もはやブラックホールです」

とか呟いたんだけど、アスカの其の笑顔の方がブラックだよとは言えなかった。……や、口に物が入ってたから、とかじゃなくてね？　俺は一人ご馳走様とか言ったけど、周りはまだ食べ終わってないんだよね。どうしよ、暇だ。

「ソウ、もう食わねぇの？」

「僕にはもう限度だよ、コウスケ食って良いよ」

「え、マジ？　ラッキー」

「……あ、ダブルだ」

「「今俺（僕）達の名前考えてただろ」」

「そっ、そんなことねぇし！」

つい呟いてしまった！　別に忘れてたとか無いぞ！　ただ出番無さ過ぎで瞬間的に記憶から抜けてただけなんだからね！？

「同じ班なのにな……」

「僕此れでも班長なんだけど……」

（俺の所為で）落ち込んでいるダブルはまあ置いといて。……なんか落ち込んでるのがデフォルトみたくなってきてるしね。

で、そんなことより。

「ねぇアスカ」

「はい？」

「――アサ君、居なくね？」

つい癖ではたと一組を見たら、アサ君が居なかった。席的に微妙な遠さで気付かなかったんだけど……夕飯終わるまでは席立てないはずなんだけどな……トイレ？

「はい、先程からずっと居ませんね」

「え？　先程って？」

「食事始まる以前からですよ」

……ぅえ？

暫く五月蝿い静寂で考えてみたけど、結論はひとつ。
――心配だ……！！！！！！

「何でも気持ち悪いやら何やら」

「え、ちょ、何でアスカ知ってんの！？　つーか気持ち悪いって何！？　アサキ大丈夫なの！？」

「ふふっ、俺には文明の利器が着いてますから――ってユウヤ、揺さないで下さい、首がー」

文明の利器――嗚呼ユキちゃんか。携帯って便利だよね。――じゃなくて！

「本人曰く、寝りゃ治るって言ってたそうですよ」

「……」

……うん？　そうなの？　要するに――

「なあんだ、寝不足か」

ってことだよね。……良かったー。

「でも、寝不足ってことは……アサキ君、柄にもなく修学旅行前日に夜更かしですか？」

アスカは口元に拳をやり、可笑しそうに笑う。様になるなーとは思うけど、ちょっと違うんだな此れが。

「アサキ九時に寝たけどね」

「え？」

「普段最近は夕方寝るしねー、一日歩き回って疲れたんだよ、多分」

アスカは首を傾げるけどぶっちゃけ、最近のアサキに一日をまともに過ごすだけの体力は無いんだよね。やばいよあの根暗……流石の俺でも思うもん。

「其れ、病気とかじゃないんですか？」

アスカも若干心配そうにするけど、これまたタチの悪いことに健康なんだよねー。

「まあ、そんじゃ其処らの根暗とは違うんだよアサキは」

「……嗚呼、其処らの根暗よりも根暗って訳ですね、なら良かったです」

何が良かったのかは分からないけど、とりあえず後で様子見に行こーっと。

１７４／遅ばれ進め、修学旅行。／ろく

おはようございますアサキです。
時間的にはおはようであってるはずなんだけど、生憎部屋が暗くて其れどころじゃない。起きてから修学旅行来てることを思い出して――夕方から記憶がないことを思い出す。

……修学旅行先で旅館着いた瞬間ノックダウンってどうよ自分。
疲労満帆過ぎて寧ろ気持ち悪くて死にそうだったところを、ユキとカイトに騒がれたのは覚えてるんだけど。

「まさか朝まで寝るとか……」

朝と言っても未だ目覚まし時計は六時半を差している。起床は七時じゃなかったっけか、三十分早ぇ。
夕飯食ってなけりゃ風呂も入ってない、……うわー、なんかテンション下がる。

「起きたのかい？」

――とか、起き上がって考えていたら。
右の方から声がした。薄暗い中見たら、布団の中から寝起きだというのに素晴らしく笑顔なユキが居た。なんというか――

「おはよう女子」

「君に言われたくないね」

って感じ。いいや、僕は普通だから、ただ男っぽくないだけだから。お前はもう女の子だから。

「……未だ七時じゃないけど」

「ふふっ、声がしたからね」

「眠り浅いんだね」

「少々敏感なのさ」

そう言えばユキも起き上がる。大きく伸びをしたと思えば直ぐさまくたり、となったり。どっちかにして欲しいものだ。

「よく寝たよく寝た、アサキ程ではないが」

「まぁね。自分でもよく起きなかったと思うよ」

「其れはそうだろう、私やカイリが最善の注意を払って行動したのだから」

や、そんな無理して頂かなくても。

「眠っているアサキを起こさぬ様、どんなに一日目の夜でテンションが高かろうが皆頑張って堪えていたよ」

だからそんな無理しなくても。未だ夢の中の面々に目をやれば、僕はひとつ溜息をつく。

「こいつ等を起こす側に回るのは初めてだ」

「ふふっ、昨年はアサキが起こされていたのだね」

「勿論」

「もう体調は大丈夫なのかい？」

「寝たら治る部類のものだからな」

「ユウヤは分かっている様子だったけど、心配していたよ。……あとサクライ先生は呆れていたよ」

先生は心配しろよ。

「でも呆れながら、『あんまし騒ぐなよ、此ればっかりは個人の責任とは言い難いんだから』とか何とか漏らしていたかな」

「……」

……体力がないのは個人の責任で構わないと思うんだけど、そう言ってくれたならそういうことにしよう。

「さて、そろそろ起こすかい？」

未だ七時には少し早い時間、ユキが笑いながら首を傾げる。

「そうだな、一回で起きるとは思えないし」

そうしてやっと、二日目が始まる。

１７５＋遅ばれ進め、修学旅行。／なな（前書き）

暫くは修学旅行編。

１７５＋遅ばれ進め、修学旅行。／なな

「俺映画村に行きたいっ！」

「えー？　どっちかっつったらアレ、天満宮行ってこなきゃ俺達やばくね？」

「えへへー、私もかなー」

「そうよアンタ達！　受験あるの忘れてるんじゃないわよっ！」

ユウヤでっす！　リョウちゃんにイタいところを突かれた俺達後期組。まあ仕方ないよね、後期ってほんと数人しか取らない訳だし。……そっ、其の為にもちゃんと行こうか、天満宮さん……！　道真公、俺達に祝福を！！

「じゃあ、ユウヤ達の班は七人だね」

「ほーい」

受付に居たあーや先生は相変わらずの笑顔だった。

そうです、修学旅行二日目にして今日は自由に京都見学！！　昨日は色々疲れて大変だったけど、今日はすっごく楽しみにしてただけあって朝から今までハイテンショーンっ！

「班長と副班長は誰かな？」

「……だっ、誰だろ」

「決めとけって確か僕、言ったよね」

「わああっ、先生の表情こええっ……！」

危険だ、いち早く適当でも良いから班長と副班長を決めねば。決めてないとか言ったらマジ殺されるのでアイコンタクトでアサ君を見れば、再びアイコンタクトで返された二人を見る。

「班長はカトウさんで副班長はユキ君です！」

「はいい！？」「おや？」

だってアサ君が（目で）言ってたんだもん。

「そう、それじゃあカトウさんにはこれ渡しておきますね。経費削減だから使いにくいかもしれないけど……。ユキ君にはカメラかな」

「は、はい……」

「ふふっ、ばんばん撮らせて貰おうかな！」

仕方なく受け取るリョウちゃんに、ノリノリなユキちゃん。背後に黒幕が満足そうに踏ん反り返ってるけど、どちらかと言えばその隣のアスカの方が黒く見えるなんて俺は言えなかっやば目ぇ合った怖い怖い！

「どの辺が経費削減なんですか？」

「ええとね、繋がる本部の連絡先がイツキ先生の個人番号だってところです」

「ようしアヤメまずは歯ァ食いしばれ」

――嗚呼、其処でも修羅場が。

実に爽やかな笑顔で火花散ってるけどやめようよ先生達、リョウちゃんが聞いちゃいけないことだったんだって全力で落ち込んでるからさ！？　あと背後の黒幕が何気に番号メモり出したから、はぐれた時用とか考えてるはずないし、確実に個人番号に惹かれてメモり出したからさ！

「アヤメテメェの番号だけ消しやがったな！？」

「ふふふっ、嫌ですねイツキ先生、プライバシーの侵害ですから当たり前ですよ」

「俺のプライバシー何処やったああ？」

「そろそろ行きましょうか」

仲の良い先生達を尻目に、背後の黒幕がメモった番号を自分の携帯に登録し終わって爽やかな笑みで俺に言った。修学旅行に来てからアスカの機嫌が三割増し良いんだけど何なんだどうしよう。

「そうだね、行こっか！！」

まあ、気にすることなんてしないけどさ☆
俺がただじゃ済まないもん。

176＋遅ばれ進め、修学旅行。／はち

リョウコです！　よく分からないけど、班長になりましたっ！

「うわ～、見て見リョウちゃん、タコ焼き美味しそうだよ～」

「モモ、単独行動は駄目だからね」

目を離すと此の上なく厄介だからね、此の子は。まあでも私の横を離れないみたいだから良いんだけれど。

「うおーっ！　京都ーっ！」

「舞妓さん見たいよ舞妓さん寧ろなりたいよ」

「ふふふっ、二人共テンション大丈夫かい？」

――問題はあの三人ね。ヒコクアサキとニカイドーアスカは何か老け込んで二人してとぼとぼしてるから問題ないし、やっぱりあの三人をどうにかしなければ平和は訪れない訳よ！

「あ、リョウちゃんリョウちゃん！」

「何よヒコクユウヤ！」

「あっちに甘味屋様があるよ！」

「何で甘味屋に様付けてんのよ！？」

うきうきモード全開で私にそんなこと言われても……。第一――
今から何処行くのよ、私達。

「其処の老夫婦、最初は何処に行くのかな？」

「其の場合、アサキ君と俺、どちらがお婆さんなのでしょうかね？」

「さあ」

「ツッコミ放棄しないっ！　“誰が老夫婦だ”の一言くらいないの！？」

サキネユキのボケくらいアンタ達で対処しなさいよね！？　――
ああもうっ、まだ全く周ってないのにもう疲れた。

「僕は希望ないけど、出来れば低燃費で済むコースが」

「同じくです」

もうやっぱり老夫婦で良いわアンタ達。何処の年寄りよ。

「ふふふっ、リョウコ班長お疲れですね！」

「分かってるならアンタも手伝いなさ――」

カシャッ！　ジー……

「写真撮るな！　ていうかポラロイド！？　何て古いカメラ渡され

てんのよ！！」

「何を言うんだいっ！　ポラロイドだって歴とした現代のカメラさっ、カラーだよ！」

「カラーなの！？　無駄にハイテクね！　――じゃなくて！」

――会話が進まないじゃないのよ！

「あの、リョウコさん」

「今度は何ニカイドーアスカ！？」

「あはは、凄い形相」

誰の所為よ。無駄に爽やかなニカイドーアスカは女の子に遠慮なく呟けば、今度は少し遠慮気味に、

「ユウヤ達、居ないんですけど」

さっき以上に聞きたくなかった一言を告げた。

――もう嫌ァ！！！！！！

177＋遅ばれ進め、修学旅行。／きゅう

旅館を出て早くも全力を出し切った感がありふれるカトウに代わってアサキです、が。

「……」

居るメンツ、僕を合わせて四人。居ないのはユウヤとカイトとラン、か。

「――……殺すか」

「ははっ！　考えが即決過ぎるよアサキ！」

「殺す前に見つけるのが先じゃないですかね」

生粋のツッコミが堕落しているから此れは此れで大変だ。え、僕？　七人中五人ボケなのにツッコむ気なんざ起きないよ。

「とりあえず探しに行こう、四人でぞろぞろ探していても埒が明かない。二手に分かれて探すよ」

「了解さ」

「ふふっ、なんとも班長らしいですね」

「班長はこっち。おらカトウ、戻って来い」

「ふふふふふ、どうせ私なんて数人すら捌き切れないツッコミですよ……」

落ち込み方からツッコミ目線だ、大丈夫なのかこいつ。

けど待っているのも時間が惜しいし、僕以外は携帯持ってるからどう分かれても問題無いし、じゃんけんでもして分かれよう。余りに加えりゃいいよね。

「はい、じゃーんけん――」

「うっはあ！　何て美味しいお団子なんざましょ！」

「おいユウヤ、とても気持ち悪い口調になってんぞ」

「ほんとだね～」

ユウヤでっす！　濃厚なみたらしの匂いにつられてついお団子を買ってしまった！　畜生！　此の商売上手め！

「つーか良いのかよー、俺達完璧逸れたぜ？」

カイト君が溜息混じりにそう漏らした。そうなんです、ふらふらしてたら迷いました。あれだけ迷わないでよ！　ってリョウちゃんに言われたのに迷いました。……俺達の阿呆。

「どうしようか、お団子も食べ終わっちゃったし」

「リョウちゃん達を探すって言っても、手段がないもんね～」

「携帯にかけるっつっても、流石に覚えてねぇぞ俺」

十一桁なんて誰も覚えてないよ！　俺が覚えてるのなんて母さんのくらいだって！　……そんなの完璧に覚えてるのはうちの兄貴くらいなもんさ。あの人の記憶力は寧ろキモい。

「けど……このまま離れ離れも駄目だよね？」

「だな。しっかしどうすっ――」

「あー！！！！！！」

割と真面目に考えていた俺だったけど、目の前に現れた物につい叫んだ。モモちゃんもカイト君もびくってしたけど仕方ないじゃないか。だ、だって――

「見てよ二人共っ、――路面電車っ！」

関東じゃ拝めない素敵乗り物が路面を進むんだから――！

「うおおっ！　すっげえ！　何アレ、どうやって走ってんだよ！？」

「うわあ……！」

ほら、二人だって凄いはしゃぎ様。

俺初めて見たかも！　路面電車ってすっげー！　電車なのに信号に引っ掛かるってことだよな！？　見ーてーみーたーいー！

「なあユウヤ、あそこがもしかして駅じゃねぇか！？　行ってみようぜ！　モモも俺様について来ーい☆」

「路面電車の駅だって……？　行くに決まってるじゃないか！」

「私も行く行く～！」

道端に駅があるなんて……関西とはこんなにも奇妙で素敵な所なんだね……！

よっし行くぜー！！　と張り切って、俺達はその駅に向かった。

……あれ？　何考えてたんだっけ？　まいっか。

「ふ、ふふふ、何なのかしらもう、京都来たっていうのにもう疲れた」

「おいカトウ」

リョウコです。何か全身から力が抜けてます。何なのかしら今のこの脱力感、テストで悪い点取った時のアレに似てるわ……。

「カートーウー、ってば」

「え？」

何よヒコクアサキ。私が地べたに座り込んでるから文句付けるのかしら？　目線合わせてしゃがんでくれてるみたいだから、普段なら絶対叫ぶ距離感覚だけれど今日は其れすらどうでも――あれ？

「早くユウヤ達探すよ」

「え、あ、それより、ニカイドーアスカとサキネユキは？」

「はあ？　さっきの僕の話聞いてなかったの？　二手に分かれるっつったじゃん」

「二手？」

ごめんなさいね、今の私は右から左へ受け流す状態なのよ。そう、二手に分かれたのね。ニカイドーアスカとサキネユキ、そしてヒコクアサキと私に――私と、ヒコクアサキ？

ということは……今、二人っきり？

「――――きゃあああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「うわびっくりした」

「探すわよヒコクアサキ！　アンタの馬鹿兄とその他諸々をぉおおおおお！！！！！！」

「うん。って、ちょ、走んの？　京都に来てまさかの全力疾走？……うん、まぁとりあえず一言言わせろ――待て！！！！！！！」

とっとと探すわよおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！

177＋遅ばれ進め、修学旅行。／きゅう（後書き）

リョウちゃん全快。

178＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅう

「という訳で捕獲です」

『ご苦労』

アスカです、路面電車の駅で騒ぐ班員をユキ君と共に捕まえました。

「なっ!?　ユキすっげぇだろ!?」

「確かにね！　私も路面電車は初めてみたよ」

本気なんだかよく分かりませんが、ユキ君もあちら側に行く傾向にありますので、俺はいち早くリョウコさんの電話に電話を入れました。出たのは案の定としか言えないアサキ君でしたけどね、返事が重役過ぎる。

『ユウヤ共は何処に居たんだ?』

「路面電車の駅ですよ、馬鹿みたいにはしゃぐ中坊が行きそうな所くらい予想出来ますからね」

『流石アスカ君、今のドス黒発言はツッコまないでやろう』

「ありがとうございます」

「アスカッアスカッ！　少し中見てみようよっ！　後払いでも良いみたいだから中を見るだけでも！」

「……はい、今行きますよ」

電話からではない楽しげな口調につい苦笑してしまった俺、此の二人ホントに血が繋がってるんでしょうかね。電話を繋いだまま車両に入ってみれば、はしゃぎっぱなしのユウヤ、モモさん、カイリ君が居ました。ユキ君ははしゃぎはしているらしいけれど、保護者的立ち位置で外に居ます。……何かムカつくけれど、まあいいでしょう。

『僕等も其処行くから、全力で動かないように言っておいて』

「はい、分かりまし――」

「ユッキー！　すっげぇよ、お前も体感してみろってー！」

カイリ君が外に出た。……あれ？　今カイリ君の大声に被って車掌さんが何か喋った様な……――ッ！

「ユウヤ！　早く出――」

シュー、ガタン

あ……しまった。否、分かりにくいからちゃんと言いましょう。――車両の扉が閉まった。

「「あ」」

モモさんとユウヤの声。再び音を立てて動き出した路面電車。――やっちまった。

「あ、アサキ君……？」

『ユウヤに代わって』

「え、いやあの今のは――」

『アスカ君は悪くないから良いんだよ、――代われ』

全部聞こえていて尚且つ、俺は悪くないとか言ってくれるのは嬉しいですが。……ごめんユウヤ、代わって。柄にも無く久方振りに恐怖を感じた俺は、携帯をユウヤに手渡した。

「えーっと、アサキ……？」

「あのさ、死ねよ」

『ごめんなさい』

経費削減の割にはハンズフリーモードまで付いた携帯に向かいつつ、ヒコクアサキは此の上なく冷めた口調で一言呟いた。横に居る私にはダイレクトに伝わるんだけど、怖いんだけど。

「何人様に迷惑かけてるの？　団体行動って知ってる？　探しに来てくれたアスカ君やユキに迷惑かけて、何其れ楽しい？」

『いえ、楽しくありません』

「楽しくないよね？　うん、俺も楽しくないよ。今もう十一時だよ？　確か旅館出たの九時だったよね、二時間も経ってるのに俺等がしたことって何だと思う？　お前等の捜索だよ」

『ほ、本当に申し訳ありません、でした』

「ちなみにラン、お前も聞いてる？」

『はっ、はい！』

「ユウヤ一人を責めてる訳じゃ――というか別にお前等を責めてる訳じゃないんだけど。ちゃんと理解して、今後こんなことがないように、其れくらい、君の無ぇ頭でも理解出来るよね？」

『はいぃ……』

『まあまあ、アサキ君そこまで言わなくても――って二人共？　マジ泣き五秒前みたいな表情ですよ！？』

あちらもハンズフリーなのか、三人の声がわらわらと聞こえてくる。ごめんねモモ、今回はアンタの味方してやれそうにないわ、――だって怖いんだもん。

「何事も泣いて済むなら警察は要らないって言うじゃない。俺だってマジ切れ二秒なんだから、少し考えて欲しいかな」

『『ごめんなさい』ぃ』

ぴくりとも動かない表情に怒られてない私も背筋凍ったわよ。

――どっ、どうしよう、電話切れた後、コイツとまともな話が出来る気しないわ……！

「謝れば済むと思ってるの？」

『え、うぇ』

『あううぅ……』

「ひっ、こくアサキ！？　そろそろ許してあげてもいいんじゃない！？」

流石にこのままじゃ色々アレだし、口を出してみたんだけど！

声裏返った！

「悪気は無かったんだから、ね！？」

「……」

目茶苦茶睨まれてる、本人に其の気はないんでしょうけど睨まれてる！　お、怒らせた、かな……？　いやしかし！

「これは班長命令！　許してあげて！」

めげちゃ駄目よリョウコ……！　目が座ってるからってめげちゃ駄目！！！！！！

「……ユウヤ」

『……何……？』

「仕方ないから二時まで別行動、此れ以上アスカ君に迷惑かけないこと。良いね？」

『ッ！　……うん！』

「それじゃ」

そして静寂が訪れた、と。

――訪れちゃ駄目よ！　街中の癖して静寂って何よ！？　この後どうすれば良い訳！？　強気に班長命令とか出しちゃったら何言って良いか分からないだけど！

「ユキに電話する」

「え！？　ええ！」

「電話してはみるけど、昼過ぎまで別行動にしたから、……もしかしたら二人で行動になるけど、そしたらごめん」

「え……ええ」

相変わらず表情は変わらずに、ヒコクアサキは電話に向かった。サキネユキ達に状況を伝えなきゃだもんね。

にしても……あれ、また二人とか聞こえたんだけれど。此れは夢なのかしら、私の都合の良い夢？

え、と……えええええええぇ！！！！！？

179＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅういち

「此処から合流するのも有だけど、カイリがね」

『安心してよ、俺も会いたくないから』

ユキだよ！　何となく不穏な空気を漂わす電話越しのアサキに、普段とは違う笑みが零れたのは言うまでもないのだけれど。

しかし通話する最中私の横に座り込むカイリのテンションは、とことん落ち込んでいた訳で。

「やっべぇよ……絶対怒らせた……しかも完ッ璧悪いのこっちだし……」

普段の理不尽なキレられ方ではなく、自分達が全面的に悪かったと分かっているからこそ、今直ぐアサキに会いたくないんだろうね。アサキはとことん正統派に怒るから。怒鳴るでもなくただただ冷静に、……確かに其れは怖いよ。

「まあまあ、折角の自由行動時間なのだし、私と共に楽しもうではないか！」

「……ああ」

「大丈夫、アサキだって観光を楽しんで少しくらい怒りを緩和するだろうさ？　いざとなれば――私も一緒に謝るから、ね？」

「……ユキー！！！！」

よし、カイリも大丈夫そうだ。アサキだって鬼ではないのだし、ちゃんと謝れば許してくれるだろう。だったら私達は私達で、今をしかと楽しもうではないか！

「よっし、んじゃあどっか行くかー！　二時に集合だもんな！」

何かを振り切るようにしてカイリは立ち上がる。ユウヤやモモも、落ち込んでいなければ良いのだけれど。しかし其れ以上にもう一人、大丈夫かな――リョウコ。

リョウコですよっ、はいっ、リョウコですっ！！

「いらっしゃいませー」

とりあえずお昼ご飯だよってことで、関西に来たんだからお好み焼きでも食べようかってことで適当なお店に入ってみました！

い、今このお店に居る人達って、私達のことを其の、こ……こ、恋人同士と勘違いしちゃったりしちゃったりしちゃうのかしら……！！！！　制服着てるしねっ、自由時間に一緒してる関東の子達かな？　みたいにね！？　ふ、……ふふふ……！！

「ご注文決まりましたらお声掛け下さいね」

「……」

「あ、はい」

――まあ、浮かれるだけ無駄だって分かってるけどね！　だって本人ゲームしてますから！

手ぶらな癖してゲームだけは手放さないんだから……ていうか何処から出したのよ……！

『カトウ悪い、言いにくいんだけど財布持ってない』

『え、えぇ！？』

『手荷物全部ユウヤに――あ、此れ以外は』

『……ゲームはあるのね』

数分前のそんな会話。一緒の行動だからって兄貴に荷物押し付けてたってアンタ……まあ、お土産買い過ぎて金欠になるだろうモモの為に多めに持って来てるから良いんだけど。後で返してくれるらしいし。

「ねぇヒコクアサキ、アンタ何食べたい？」

「何でも良い、文句は言わない」

「そういう発言はせめてゲームから目を離して言いなさいよ」

「戦闘中なのに……！？」

「そんなに驚くことなの！？」

さっきまでの怒髪天を衝いてたアンタは何処行ったのよ……！

「……これじゃあ恋人ってより、姉弟みたい」

「……何か言った？」

「いいいいいいいいいえ何も！！！！！！」

「あうぅ……」

「モモさん、落ち着いて下さい、そんなに怖がらなくても平気ですよ？」

ユウヤです、路面電車から降りて、何やら某映画村に着きました。

やー、俺が行きたかったところだ！

さっきのアサ君の電話で大分堪えたけど、最後に優しい声音があ

ったからもう大丈夫かな。俺もアスカも大丈夫！　要するに――モモちゃん以外は。

「アサキ君怒ってたよぅ……？」

「それは悪いことをしたからですよ、ですから会った時、ちゃんと謝ればアサキ君だって其処まで怒りませんって」

「そうそう！　アサキはああ見えて優しい奴だよ！」

ちょっと分かりにくい優しさだけど、最終的には世界で一番、アサキが優しいって思ってるから！

アスカの慰めもあってか、珍しく涙目のモモちゃんは落ち着いてきたらしく、えへへ、っと笑顔になってくれた。うん！　可愛い子は笑顔が一番だよね！

「では、丁度映画村に着いた訳ですし、行きますか」

「うん！　あのね、私お化け屋敷行きたーい」

「良いですね、行きましょうか」

――笑顔は一番だけどホラーの女王まで戻ってきやがった！

「ふ、二人で行ってくれれば……？」

「え……ユウヤ君、行かないの……？」

はぅ……！　そんないたいけな瞳で俺を見ないでくれ……！

「一緒ですから大丈夫ですよ、行きましょう……？」

こっちは絶対確信犯だけどやっぱり俺を見ーるーなー！！！！

「「……」」

「――分かった！　一緒に入るよ！」

畜生、俺ってば良い人！！

俺は此の後訪れる恐怖に身構えながら、此れだったらアサキに怒られてた方がマシなんじゃないかって、真剣に考えた。

１８０＊閑話＋珍しくもマッハ更新でお送りしています。

「このタイミングで閑話！？」

「話的に仕方ないだろ」

「いやいやいやだって、修学旅行の話が長過ぎて俺等の後期入試どころか卒業式すら書けねぇとかなんとか――」

言うな、入試は書かないが卒業式は書くから、これ終わったら。

「終わるんですか？」

聞かないでクダサイ。三月中には書きたいなぁと。多少時間ズレるけど、なんかもうそこら辺は許してクダサイってカンジー？

「ああもう、作者キャラ壊れるし」

という訳で修学旅行話の合間にやっほう、なかなか終わらなくて真面目にやばいんです。とうとう朝夜グラフィティ。の主人公ｰ Ｓも高校へ！　という訳で四月は忙しくなるぞ～！

「作者は受験生になるぞー」

言わんといて！

「新キャラも続々なんだって。楽しみだねっ」

「五月蝿い奴は好かないけど」

はいはいはい。高校行くから先生達も一掃だし、生徒の方も代わっ――

「馬鹿それ禁句」

「アスカァあああああ！！！！！！！！！！！！！！」

うるせぇえええええええ！！！！！！！！！

仕方ないじゃん！　アスカはアレ、元々欠席多いんだから私立じゃないとキツいだろ？

「そんなの適当にしとけや！」

なあにこのアスカへの執着心、我ながら怠い。ねぇアサキ、君はユキに執着ある？

「いや全く」

だよね。

「ユキは僕が何もしなくたって来る気がするから」

確かに。

高校編にあたって考えているキャラは既に四、五人程考えてるんだけれど。こんなキャラを出して欲しい！　ってのがあればぜひお申込クダサイ。

「何申し込むんよ」

間違えた申し付けクダサイ。どんなキャラが良いー、とか、こんなキャラ居たら笑えるー、とか。

「あんたの感性はなんて歪んでいるんだ」

あとは名前とか！　考えるの怠いからなんかあったらお願いします！　気に入ったら即採用、……まあ気に入らなかったら使わないがな。

「スルーされた上に何言ってんだこいつ」

「あ、あともうひとつ言うことあったでしょ？」

嗚呼、アレでしょ、八万Ｈｉｔ。

「やる気の差！！！！」

「――て訳で、皆様のお陰様で」

変じゃね？

「口挟むな阿呆。――で、朝夜グラフィティ。は八万Ｈｉｔを迎えました、と。八万って微妙じゃね？　とか思うのは最もだが、普段は気付かないからな」

「ありがとーございまーす」

はい以上。

「「簡潔」」

じゃ、短く終わろう。双子は何か知らないけど作者置いて帰ったんで一人寂しくさーせん。時間軸のズレが目立つ最近ですが、暖かな眼差しを送って頂ければ幸いです。

以上！　童話パロは暫くお預けかと！

181＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅうに

アサキです、もう家帰りたい疲れた。

「集合は此処で良いの？」

「うん、早く着き過ぎたけど」

カトウと飯食って色々うろうろして、――時折カトウが一人騒いでいたけどまあ気にしない――時間より早く二班集合場所に到着した。

最初から最後まで騒ぎ倒すのかと思いきや、カトウは常識人で良かった。寺とか回ってる時は比較的真面目だったし。今居ない奴等に是非とも見習って欲しいものだ。

「あ、ねえねえヒコクアサキ、さっき引いた――」

「気になってたんだけど、何でフルネームなの呼び方」

何やら楽しそうに言って来たところ悪いけど、今がチャンスと尋ねてみる。唯一ランのことは名前なのに、何故男子陣はフルネームなんだろう。

「……癖かしら」

なんつー癖だ。

「でも、中学入ってからよ！？　小さい時からこんなじゃないから

ね！？」

「分かってるよ、慌て過ぎでしょ」

第一、別に小さい時からそうだろうが僕には関係無いだろっていう。まぁ何故か慌ててるカトウは放っておこう。

「……で、さっき何か言いかけたよね」

「え！？　あ、嗚呼アレね、さっきおみくじ引いたじゃない、どうだったのか――」

「凶だけど」

「あら、見たの？　直ぐさまポケットに捩込んでたみたいだからてっきり……」

「見なくても分かる、僕は生まれてこの方凶から上を引いたことがないからな」

「……」

……うわあ、ひっどく哀れみの視線を送られた。別に悔しくなんか無いし。

カトウが言う通り捩込まれた哀れなおみくじを取り出してみた。凶より上が出たことないって言っても、過去おみくじを引いたのなんて二桁未満だし、たまたまってことも――

「……」

大凶だった。……ふむ、――おみくじなんて二度と引かねぇ。

集合時間。

「やあアサキ！　リョウコと二人っきりはどうだったんだい！？」

騒がしいのが来た。時間ジャストとは……流石過ぎる。

「ばっ、馬鹿言ってんじゃないわよサキネユキ！！　二人っきりって言っても不可抗力でしょ！？」

「Ｎｏｎ，ｎｏｎ，ｎｏｎ――不可抗力と言っても二人きりになれたのだよ？　何か無かったのかい？」

「え……な、無かったわよ。強いて言えばヒコクアサキにはもんじゃ焼きとはいえ料理をさせちゃいけないってことくらい……」

「おい其処、僕がひっくり返すの下手な話しない」

小声でひそひそと何を暴露しているのやら。もんじゃ焼きが最初からぐしゃぐしゃになった話なんてしなくて良いから。僕の醜態を曝すな、あんなに爆笑しやがって……！！！！　お好み焼きが上手く出来ただろうが！！！！

「アサキー」

「……カイト、何其のお土産オンパレード」

「気に入った物は手当たり次第いった」

ユキが居るということは勿論此方も居るということで。振り向いてみたら両手が塞がって大変なカイトが居た。ビニル袋多。

「姉ちゃんの土産だぜ。セツさんの分もあんだぜ」

「あの人に買ったの？　アヤメ先生が買うだろう」

「いーの！　ちなみにマヒルさんにもあんぜ！」

「兄貴にもかよ」

僕買う必要無くなったんだけど。……まぁ、食事代から拝観料まで全部カトウに任せっきりだったから買った訳もないんだけど。早くユウヤ帰って来ないかな……早めに返さないと。

「アサキ君、遅れてすみません」

た、けど。……あれ？　何か一人異様にテンション低くない？

僕等側は皆そう思ったのか、青白い顔で斜め下を見遣るユウヤを見た。

「……ユウヤ？」

声を掛けたら近付いてきた。怖い。

「ごめんねアサキ、アサキは怖くなんか無いよ、当然のことを怒ったまでだもん」

「ちょ、どうした」

「アサキが怖いとか言ってたらもう何もやってけないよ何で怖いなんて思ったんだろごめんねアサキ」

怖ぇよ、お経みたいじゃねぇかよ。何、何があったの。

「ユウヤ君、お化け屋敷入ってからずっとこんななんだよ～」

「そんなに怖かったでしょうか……？」

「――……アスカ君とラン、人の兄貴に何て恐怖を与えてくれたんだ」

にこにこと顔を見合わせて首を傾げているホラーの帝王と女王。

……嗚呼、なんかもう泣きそうじゃないかユウヤ。

「ぐすっ……」

「良い歳して泣くな、……あーもー泣くなー」

「だって怖かったんだもん……」

お化け屋敷とか明らかにお前お参りとか行ってねぇじゃん、とか。

色々言ってやりたいことはあったんだけど今言っても聞いてるはずも無いから仕方なく慰めることにした。

「ほらっユウヤ！　これやるから泣くな！」

「ありがとカイトく――ひゃあああああ！！！！！！！！！」

「あ、バカイト！　今ユウヤにグロテスクな人形を渡すな！　ユウヤも抱き着くな！　つーか何買ってんだよ阿呆！」

「ヒコクアサキ、やっぱり彼はツッコミね」

「そうだねっ！　アサキはボケにはなりきれないよ！」

ホントにそうだよ、冷静に解説してねぇで手伝えや。

「二班帰りました」

「おっかえりぃ！　ええと、一組だよねー、班長と副班長は携帯とカメラ置いてってねー。……その引っ付いてるのにはツッコんだ方

が良いのか先生困っちゃう」

「キニシナイデクダサイ」

旅館についてもそのままだった。早く引きはがしたい畜生。

１８２＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅうさん

時刻は飛んでもユウヤです、へへん。

「他所見すんな」

「ふぁい」

ただいまの時刻は二時だけど、決して明るい時間じゃなくて、ＡＭで二時なんでした。

「な、ん、で、こんな時間まで起こされてっか分かってんのか？」

「自由行動で一人先走ったからです」

嫌に笑顔ないっちー先生。しかし此れは確実にキレてる顔であることくらい俺にだって分かるやい！　俺の反省文が終わるまで起きてなきゃいけない訳だからね！

「その通りだ。同じ時間に呼び出したカイリとモモは終わって部屋に戻ったのに？　なーんでお前だけ終わってないんだ？」

「へへん、馬鹿だなぁ先生！　俺に作文能力が無いからに決まってんじゃん☆」

「……」

「ごめんなさい謝るからせめてツッコミを入れて下さい寂しくて死んじゃう！」

滅茶苦茶冷めた目で見んといて、俺こあくて死んじゃう。

「テメェはアヤメのクラスだっつのに、何で此の俺が面倒見なきゃいけねぇんだよ……つーか寝んなよアヤメの野郎」

まさかのマンツーマン体制で監視されている俺は、目の前でため息をつくいっちー先生を見る。ペンが進んでないのは言うまでもない。

俺が居るのはいっちー先生の部屋、何か知らないけど横ではあーや先生が惰眠を貪っている。何でも、

『僕の部屋、酒盛りして惰眠する方々で一杯なんです』

だそうで。携帯の話もそうだけど、新人なの逆手に取ってやりたい放題だな此の人達。……あれ？　方々ってことは酒盛ってたのは二人じゃないから、キクカワせんせと……校長とか？　……考えんのやめよっ！　学校の将来が不安になるから！！

「おらユウヤ、とっとと書かねぇと怖い話すんぞ」

「いやあっ！」

今二行進んだ。丑三つ時に怖い話なんて馬鹿なこと考えちゃいけませんよ先生！

「まあしないけどな、俺そういうの好きじゃねぇし」

「……え、先生怖いもの苦手？」

「はあ？　此の俺がか？　苦手なんじゃねぇよ、嫌いなんだよ」

……うん？　どういう意味？　苦手じゃなくて嫌い……あ、苦手の上か？

「何か意外、いっちー先生はなんか普通に怖いのとか行けそうな気ィしてたー」

「馬ッ鹿お前、言っとくけどな、俺は誰に何言われようとお化け屋敷には入らない性質（たち）だぜ」

「……強がりもしないんだ」

「強がって怖くなくなんのか？　残業は一人じゃぜってーしねぇ」

こう自信満々に言われると、逆に清々しいよこれ。ちょっと憧れるってば。……うん、確かに強がる意味なんてないもんねー、カイト君とリョウちゃんは超強がってるけど、そんなの意味ないよね！

「つー訳だユウヤ、俺は丑三つ時とかこういう時間はめっぽう嫌いだ、早く終わらせてくれ」

「あいあいさ！」

少しだけ先生に親近感沸いた二日目だった。明日は修学旅行最終日！　旅行来ると絶対に反省文書かされてる気がする俺、……はあ。

１８３＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅうよん

「アスカ、体調の方は大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

三日目、最終日となって旅館を後にしてから。
最後となった見学場所、清水寺まで坂を登る俺達空乃中学の面々。
アヤメ先生に心配して頂きながらも連なって寺を目指しますアスカです。

「疲れたらちゃんと言うんだよ、俺がおぶうー」

「ありがとうございますユウヤ、ですが平気ですよ」

隣を歩くユウヤもそう言ってくれるけど、本当に大丈夫な俺。俺の身体は平気な時はとことん平気なんですよね、駄目な時が駄目なだけで。そして駄目な時が多いだけで。
第一、結局朝方に帰って来たユウヤにおぶわせるだなんて出来ません。寝不足甚だしいですって、さっきから眠そうじゃないですか？

「清水め、待ってろよ！」

「ふふっ、清水寺は何処へも行きませんよ」

眠くても、ユウヤはユウヤみたいです。

「清水の舞台から飛び降りる！」

清水寺に着いてのユウヤの第一声はそれだった。多分意味は分かってないんでしょうね。

「あ、ねえねえ、アレ何かな？」

「嗚呼、あれは確か――」

恋愛成就のおみくじ、でしたっけ？　成就というか、まぁ恋に関するおみくじが引けるって聞いたことがあります。ですからあんなに女の子が集まっているんですよね――一通り説明してあげたら、何故か興味を失ったユウヤ。

「恋愛事を神様に頼るなんて間違ってる」

「……あれ？　ユウヤそんなキャラでしたっけ？」

飛び付いていくかと思ったんですが。……まあ、確かに俺もそう思いますしね。一種の願掛け程度だと思って、結局は頑張るのは自分なんですから。

「面白そうだとは思うけどねー。今は眠過ぎてどうでも良いや」

本音は其れだったか。なんか良い事考えた自分が馬鹿みたいじゃないですか。

「ねぇアスカ」

「何ですか？」

「下行ってお土産買って、バスで寝ても良い？」

「……」

苦笑いをしてそんなことを言うユウヤ。ふふっ、バスは駐車場に留めてありますもんね、未だ未だ時間はあるのですが――

「そうですね、俺も寝たいです」

ユウヤがそう言うなら、たまにはそうしましょうか。

「音羽の滝？」

カイリだ。なんか階段があったから下ってみたら、そんなちっさい滝についた。隣のアサキが、

「オトワ……従弟の名前だ」

とか呟いたけど恐らく意味ないんだろうから無視した。オトワ…鳴呼、あの餓鬼か。

ちなみにユキは其の下り階段を上ったり下ったりしている。何がしたいのかは聞いちゃいけない、何故ならあいつに理由なんざ存在しねぇからな。

「三つある中で一つだけ叶うらしいぜ、アサキはどれにす――」

「金運」

「悪ィ聞いた俺が悪かった」

無駄にキリッとした表情で答えられた。そうだよな、恋愛健康なんてお前にとっちゃアウトオブ眼中だよな。ちなみに俺は健康だ、免疫力欲しい。

其の滝を後にして、ユキを拾ってお土産売り場に来た俺達。

「わらび餅が買いたいね」

と実に婆臭ぇ一言を吐いたのは勿論ユキであって。キョロキョロと探し回るユキとは裏腹に、俺とアサキは其処ら辺のお土産を適当

に見ていた。ちなみに俺様は買わない、だって昨日買ったし。

「なぁ、赤の他人」

「うわあ超懐かしい呼び方、何？」

「兄貴達に、こういうの似合うと思う？」

「どれどれ」

アサキが指差したのは携帯置動物仕様。チョイスが可愛過ぎるのは良いとして、別にあの三人なら何でも良いと思う。特に姉ちゃんなんてアサキからだっつえば宝物にすると思うぞ。

「いんじゃね？　買ってくんか？」

「うん、セツさん誕生日だったはずだし」

「え、マジで？」

三月だったのかあの人。修学旅行中に過ぎちまったらしいが、なら俺もお土産とは別に何か買おうかな。――の前に一言。

「お前、結構律儀だな」

「うっせ」

１８４＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅうご

「おるぁ！！！！　っきしょまたジョーカー！！！！！！」

「ロクジョー君はジョーカーと仲が良いんだね～」

「そうとも！　カイリとジョーカーは切っても切れない関係さ☆」

「そんなの嫌だあああああああっ！！！！　アサキ！　早く引け！　今回は一発じゃ上がらせねぇんだかんな！！！！」

すいっ、と。

「上ーがり」

「「だから早いよ」」

「っきしょおおおおおおおお！！！！！！！！」

帰りの新幹線内、結局行きでは一度も勝てなかったカイトが普段の三割増しで騒いでいる。五月蠅いんだけど。

～♪

失礼、とワンテンポ置いてから。ユキが携帯を取り出した、普段は電子音なのに今日のは普通の音楽だった。設定変えたのか。

「はい、あ、少々お待ち下さいね。――カイリ、お姉さんからだよ」

何故だ。何故お前の携帯にウミさんから連絡が来る。
しかしそう思ったのは僕だけだったらしく、カードに逆ギレしてるカイトは普通に携帯を受け取った。

「もっしー？　姉ちゃんどし――え？　別に怪我とかしてねぇよ、」

電話越しでも伝わる会話内容、相変わらずだなぁ、ウミさん。

「え？　嗚呼そーなん、りょっかい、じゃーな」

しかししかと用件を伝えたら電話はあっさり終わり、其の携帯はユキへと返された。何だったんだろう。

「駅まで迎えに来れなくなったんだと」

「おや、大丈夫なのかい？」

「嗚呼、マヒルさんに頼んだと」

「何故そうなる」

予想はしてたけどな。あの不良兄貴が頼まれて断ることなんてありえない、あいつの返事はＹｅｓかＯＫしか無い。

「何かどうしても抜けられないバイトが入っちゃったらしいぜ、凄く謝られた」

「ウミさんだからな、ちなみにマヒルは今日バイトを休んだそうだ」

「マヒルお兄さん凄い自由なんだね～」

はい自由です、ある選択肢を選ぶ為ならもう一方は完全に切り落とす訳だ。まぁあの兄貴なら両方成し得ることも可能だろうがな。

「そうか、皆は兄弟が居るのだね、少し羨ましい限りだよ」

此の中で唯一の一人っ子の意見はそうだけど、兄弟が多いのも考えもんだけどな。

「弟とかは居ない方が良いよ～、厭味なくらいお菓子作ってくるから」

「それはランの家だけじゃないか？」

「姉貴は……生活に困らなくて良いぜ」

「それもカイトん家だけだろ」

皆特殊な姉弟を持ってるんだな、確かカトウは妹が居たんだったか。バラバラだなおい。

「アサキの家はどうなんだい？　ユウヤを含めれば、お兄さんが二人だよね」

「……」

兄貴、ね。うちも特殊なんだろうけど、僕が思うはただひとつ。

「五月蝿いし邪魔な時もあるけど、便利は便利だよ」

「「酷」」

うん言うと思った。

けど今回の旅行でも散々迷惑かけられたしさ、あの馬鹿には。本当にアレはどうにかした方が良い。

でも、

「でもまぁ、居ない方が良かったとは、思わないけど」

――ん？　何だよ此の空気、今三人して唖然としただろ。そして何その笑顔は、ムカつくからやめれ。

「な、アサキ。今のユウヤとマヒルさんに言ったことあるか？」

「無いよ、何でわざわざ言わないといけないのさ」

「言った方が良いと思うぜ？　絶対喜ばれるって」

喜ばれる、だと？　何を言ってるんだかこいつは。そんなこと言ったところで当たり前過ぎんだろうが。

呆れた風に溜息を付けば、何故かユキに苦笑された。何だよ、文句あんのかよ。

でもまぁ、何時かなら言ってやっても良いかもしれない。そうだな、成人式の後とかなら。

「たっだいまマヒル兄！」

「お帰り、楽しかったか？」

「うん！　やばかったよっ、路面電車が特に！」

「そっか」

駅で待ってたマヒルを見つけるや否や、鞄を置き去りにしてユウヤはマヒルに突っ込んだ。それを何の躊躇いもなく止められるマヒルもマヒルだがな。

仕方なくユウヤの荷物を――引きずって――持っていけば、普段通りの不良がヒラリと手を振って笑った。

「お帰り、アサキ」

「……ただいま」

……やっぱり、出掛けるよりは家族の元でだらだらしてる方が好きだな、なんて思った。

１８４＋遅ばれ進め、修学旅行。／じゅうご（後書き）

やっと終わった（又は終わらせた）修学旅行……！

頑張った、超リョウちゃん贔屓で頑張った。（（

なんか飛び飛びですみませんでしたよ、はい。凄く急いだけれど、

こんな長くなるとは思いもしなかったです。

急いで適当な話書いて、卒業式書かなければ。

１８５＋一方その頃。（前書き）

修学旅行中の自宅にて。

１８５＋一方その頃。

「マヒルー未だー？」

「もうちょい待て、つーか人ん家にいきなり来といてそりゃ無ぇだろ」

呼ばれた通りマヒルだ。ただ今キッチンにて昼飯作りに勤しんでいる。アサキもユウヤも居ねぇから楽で良かったはずなんだが、何か知らねぇがリビングのソファにはセツが居る。お兄さんが暫く居なかった所為か、ろくな飯を食っていないらしい。

「ちっくしょー……こんな時に財布パクられるとは……」

しかもそういうことで、弁当を買う金も無かったらしい。最近は不良に絡まれる回数も減ってたはずなんだけどな？　つくづく運の無ぇ奴だ。

んで、うちにやって来たらしい。

「もう食えるもんなら何でも良いから食わしてー」

「飢え過ぎだ、あと少し待てよ」

急過ぎて焼きそばしかなかったけど、カップ麺食うよかマシだろうが。ジュー、と野菜が焼ける音を聞きながら、リビングでぐったりするセツに少しだけ焦って俺は作り進めた。

「馳走になったー」

「お粗末さん」

時折焼きそばに入っていたピーマンに喧嘩を売りつつも、セツは綺麗に焼きそばを食べ終えた。相変わらず会話は零だったが、その間洗濯物取り込めたし良いか。

「――にしてもアレ、今此処ん家マヒル一人暮らし同然なんだろ？　ひっろいなー」

「まぁな。けど夜は母さん帰って来るし、弟共も直ぐ帰って来るよ」

「そういやぱぱんは？　医者だったっけ？」

「ぱぱん言うな気色悪ィ。ああと、あれは滅多に帰って来ねぇんだよ、一年に何度会えるかどう――」

「ただいまー」

「……か？」

……は？　今の時間にただいま？　一体誰が帰って来たっつーん

だよ。今の声は母さんじゃねぇし……まさか、噂をすればって？

「ただいまー、って……あれ？」

「え、と、マヒル、この人誰？」

「……嘘、マジに父さんだと？」

まさかだった。漆黒の鞄に色素の抜けた髪、背の高さも其の顔立ちも我が父に他ならなかった。

「嗚呼、マヒルはそっちに居たんだ、てっきり銀髪にでもしたのかと」

「見間違えんなばあか、友達だよ、又はユウヤの担任の弟。名前はセツ」

「は、初めまして」

「はい初めまして、セツ君ですか、宜しくお願いしますね」

「はい！」

「――で、マヒル、お腹空いたんだけれど」

自由過ぎんだけど！　此の父親も自由過ぎんだけど！　今作ったのに此の時間差は無いわ！　自分で作れし！

「朝から何も食べてないんだよね、昨日の」

「――昨日のかよ！　……そのまま飢え死んどけ」

「酷いですねマヒルは、お父さんに向かってそんな」

「んで？　今回帰宅の理由は？」

此の人と話してても埒が明かねぇ、「息子が冷たい」とか呟いてるのは放っておいて、洗濯の為に居た庭から中に戻ればキッチンに戻る。戻りっぱなしじゃねぇかよ。

「セツ君はマヒルと同じ大学なんです？」

「あ、はい、同じ学科なんス」

「そっかー」

「聞けよクソ野郎」

「ほら、卒業式とか近いでしょう？　だから早めに休み取って来ました」

人の友達と会話初めてんじゃねぇっつーの、つかそれであっさり戻って来んな。

父さんはソファに鞄を置けば堅苦しい灰のスーツを脱ぎつつ、そう言った。

「あー、卒業式か。何だ、出るんだ」

「えぇ。奥さんもちゃんと休んで来るって言ってましたよ」

「そ。――俺ん時は来なかったのにな」

「……」

……やべ、何か言っちゃいけねぇこと言ったかも。別に俺は責めた訳じゃないんだけど、ええと……。

「マヒル！　き、きっとお父様にも事情が――！」

「良いんですよ、マヒルにとって私は、最低な父親なんですからね」

セツを止めて苦笑しつつそう言う父親。あの、とりあえずおま、ちょ、ちょっと待て！

「最低とか言ってんじゃねぇよ、仕事で仕方無かったんだからあんましそういうこと言うなって」

「だけどそうじゃないですか、私も奥さんも、貴方の行事ごとに何一つ参加した覚えがありませんけど？」

「保育園の時は来たんじゃねぇの？　とにかく、いっつも言ってるが俺のことは放っておいてくれて良かったんだっつーの」

本当に此の親は。責任でも感じてんのか？　よく分からんが俺は別に冗談のつもりだったんだからよ！

「でもー」

「未だ言うかこんの馬鹿親、飯作んねぇぞゴルァ」

少しキレて言ったらやっと黙った。

「昔から、嫌われてるんだと思ってたんですよね」

「マヒルが誰かを嫌うなんて有り得ませんよっ！」

「そうですかね、昔から他人の手なんて一切必要無いくらい良い子だったのは分かるんですが」

そして何やら初対面同士の相談室が開かれてるが、俺は一切気にしねぇ。気にしねぇったら気にしねぇ。

さって、父さんも焼きそばで良いかな。

――……父さんを嫌い、ねぇ。

そんなこと、無かったはずだけど。

186＋普段通りが必勝法！

「いってらっしゃい、僕はどちらのパターンにも対処出来る様にパーティー開いておきます」

あの父親は……。

修学旅行から帰って来れば久しぶりに居やがった父親にそんなことを言われて見送られた僕等、否、正確にはユウヤなんだけど。つか発表でもないのにもうパーティーな訳？

暇だから着いていってるアサキです。実は本日後期入試当日。修学旅行終わって即だよ、此の日程はハードだわ。

「……」

当の本人こと隣のユウヤは珍しく、凄く緊張した面持ちで黙っていた。何だこいつ面倒臭い。

「アッサキー！　ユッウヤー！　おっはよう☆」

「……ユウヤ、あれくらいやる気出せよ」

「ええぇ、無理だよ今はー……」

そんな中、背後から物凄く爽やかに走って来たカイトを発見。そういやあいつもだったか、というかあいつ、緊張っていうものを何処に落としてきたんだ。

「今日が終わったら休み同然！　とっとと終わらせて遊ぼうぜ！」

何此のお気楽。誰か彼に自重という言葉の概念を教えてあげて下さい。

「遊ぶ？　も、もう卒業なんだよ！？　皆と会えなくなっちゃうのに遊んでなんかあああああああ！！！！！！」

「っるせぇよ、今は集中しろって」

このままカイトのペースに呑まれそうだな。そんなユウヤに溜息ひとつに一言言えば、直ぐさまシャキッと戻った。

「カイトもだよ、枠少ないんだろ？」

「ふっふっふ、それはそうですけども、此処で慌てちゃあやってらんないんだぜ！　この俺様ならば楽・勝☆」

キラッ、と決めポーズまで決めてくるカイトだが、このたっかいテンションはもしかして――こいつも緊張してるのか……？

そんなこんなでぎゃあぎゃあやっていれば、何時の間にやら受験校に辿り着いた。其の頃にはカイトのテンションもガタ下がりで、ユウヤの表情も曇っていた訳だ。校舎を見上げつつかっちかちな二人。こんなんでどうすんだか……僕は再びひとつ溜息をついて、効果音にするなればあわわわわ、な二人に向き直った。

「やるべきことはやったんだろ、だったらとっとと行って終わらして来い」

「お、おう、分かってるぜ……！」

「いえっさ！」

そして二人はテンパったまま受験会場に向けて歩き始めた。

……ああもう。

「お前等！」

冷静に挑んだって馬鹿なのに、そんなんでどうするんだよ。ええと、こういう時何言えば良いんだったか、不思議そうに僕を見遣る二人を見返して考えるけど、何一つ掛ける言葉が浮かばない。

「何アサキ」

「どしたのアサ君？」

キョトンとしてる二人。やっべぇ、やはり慣れないことをするもんじゃない。でも普段は何時だって支えてもらってる側としては――こういう時に何も言えない自分が歯痒い。

だから少し俯き加減になっていた表情を少しだけ二人に戻し、腕を組んでただひとつ。

「ガンバレ」

そう言っておいた。

二人はキョトンとした表情をよりキョトンとさせたけど、顔を見合わせれば笑って、

「「勿論！」」

そう一言残して走り去ってった。

……大丈夫、だな。カイトは確かに馬鹿だけど、英語っていう強味があるし。ユウヤは、……うん、だってほら、誰の兄貴だと思ってんの？

僕は一人満足そうに、自宅に向かって歩き出した。

此の僕が此処まで着いて来てあげたんだから、受からない訳、無いでしょう？

１８７＋卒業式前日だろうが、何時も通りに行こうよ。

「号令」

「きりーつ！」

アサキです。何時になく真面目な服装でやって来たサクライ先生。それもそのはず、実質今日が最後の授業だ。何てったって明日は卒業式、……ユウヤが面倒臭いんだろうな。

「着席！」

「――はいじゃあやること無ぇから外でサッカー」

「「最後なのに」！？」

僕とカイトの声が綺麗にハモった。他のクラスメイトはポカンとしてしまっている、約二名は「サッカーだって～」「楽しみだねはっはっは！」とか言ってるが気にしたら負けだと思ってるよ僕は。

「ばっかお前等、最後だから思い出作りだろ」

「だ、だって先生スーツじゃん！」

「はあ？　大人っつーのはスーツのひとつやふたつ汚したって困らねぇんだよ」

「貴方だけですねソレ」

立ち上がり先生を指差すカイト、今回ばかりはお前の方が絶対的に正しい。

「まあ、ぶっちゃけりゃ――最後の授業とか何したら良いか、分かんねぇんだよ」

「――……」

そんな先生の一言で、教室は刹那静まった。立ち上がっていたカイトも大人しく座り、何だか一気に卒業の空気。

……何だよ此れ。卒業の話は明日で良いじゃん、嫌だとしても明日には絶対卒業するんだからさ。だったら今日は普通に、何時も通り、楽しく授業をした方が百倍良い。

「ねぇ先生」

皆が卒業モードなのは勝手だけど、僕まで巻き込まないで欲しい。別にこんな中学に未練なんて無いし、悲しくもないんだから。――だから。

「何時もみたいで良いじゃん。サッカー、やろうよ」

ね、サクライ先生？

一瞬僕が何を言っているのか分からなかったみたいだったけど、先生は直ぐに何時もの憎ったらしい笑みを浮かべた。最初は憎たら

しくてニヒルだけだった笑顔も、三年も経てば此れ程心強い笑みはない。

「――ほう、運動嫌いのアサキからそんな台詞が出るとはな？」

「辛気臭いのは嫌いなんだ」

途端、静かな教室にダンッ！　と打撃音が響く。勿論それはサクライ先生が教卓を叩いた音、何もかもが何時も通り――これが僕等のクラスだ。

「よっしお前等、――今日は制服のままで良い！　女子はスカート嫌な奴だけ着替えて校庭に集合しろ！　どうせ使わなくなる制服だ、明日に支障が出ねぇ程度に騒ぎ倒すぜ！」

『はい！』

クールかと思えばかなりの傍若無人でクラスを翻弄してくれたサクライ先生。そんな先生に翻弄されながらも一緒に騒いだクラスメイト。どうでも良い奴等だったけど、――明日で別れる訳、だよね。

「ほらっ、アサキ行くぜ！」

「最後なのだから楽しもうじゃないかっ！」

「――うん」

寂しくは無い。
でも、少しだけ虚無感がある、かもしれない。

188＋その花の名は。

『卒業証書、授与』

ガタン、と音を立てて、一斉に前列の生徒達が立ち上がった。流石恐怖政治の一組、揃い方が半端ねぇ。

列になって卒業証書を受け取り出す一組を黙ったまま見遣る俺。

今日は静かにしてるつもり、ユウヤです。

今日で学校は終わりなんだよね、高校生ってちょっと楽しみだけど、仲良かった皆と別れるのはやっぱり辛いかな。合格発表未だな俺としては、下手したら皆と別れちゃうっていう事実に凄く落胆している。受かってればアサ君とかと一緒だけど、アスカとは別れちゃうし……嗚呼無情。

あ、なんか俺泣きそう。

『二組、起立』

あーや先生の声で二組が立ち上がる。先生の声聞くのも最後になるのかな、あの爽やかさの中に般若を隠し持った笑顔を見るのも、今日が最後になるのかな。卒業式なんて泣けるかよ、って弟がぼやいていた気もするけど、駄目だこれ、俺はアサ君みたくクールにゃ生きれないよ。

卒業証書を色々我慢しながら受け取って、パイプ椅子に座る先生方に一礼。顔を上げた時見えた俺達三年の担当教師様方、我がクラ

スメイトの名前を点呼するあーや先生と目が合って――嗚呼、もう無理だよこれ、泣く。

俺はもう一度、深く深く一礼して、自分の席に戻った。優しげに微笑んでたあーや先生も、こんな時だってニヒルな笑みを崩さないいっちー先生も、皆々大好きだ。もう会えない訳じゃないってのに、何でこんなにも悲しいんだろう――？

席に着く前に見たけど、結構な数の――主に女子――生徒の目が潤んでいて、もらい泣きと言いますか何というか。まあもらい泣きも何も俺は既にボロ泣きに近いんだけどさ。今日は卒業式、だから男が泣いていようが違和感は無いんだけど、俺、今一番泣いてる自信ある。

「ユウヤ」

寂しくて寂しくて、別れってこんなに寂しくて悲しいことなんて知らなかった。ふと前からひそやかにした声に俯きかけていた顔を上げれば、式の最中だというのに此方に振り返るアサ君と目が合った。

「泣き過ぎ、阿呆」

学ランの袖なんてろくに涙を拭き取ってくれないけど、流れる涙は止められなくて。アサ君に差し出されたハンカチを受け取れば、此の状況を予想してたんだろうなぁ、と少しだけ笑えた。

卒業証書授与も終わって、長々しい来賓の挨拶やら電報やらも聞き流して――自分達の卒業式だと、時間の過ぎる速度って早い――、俺はちょっと落ち着いた状態で卒業式を終えた。色々と自分で考え

てしまった所為で目が真っ赤な訳だけど、学年の半数以上が涙目なんだもん、別に構わないよね。
退場の時、視界の片隅に優しげに微笑む父さんと母さんが居たのを見て、少しだけ元気になった。

「マジで卒業すんだなァ」

アサキです。学年の半数以上が泣いてるってのに、僕の周りで泣いてる奴は誰一人居ない。――まあ誰一人と言っても、此の場には僕とカイトとユキしか居ないんだけど。
一組の教室。既にサクライ先生の最後のＳＨＲは終わっている。

『お前等、俺様のクラスだったことを誇りやがれ』

先生は本当に最後まで先生らしくて、昨日あれだけはっちゃけた所為か何かが吹っ切れていた。ひっくり返って何時も通り、うん、楽しい三年間だったな、って、今思える。

「ふふっ、私にとっては勿論、短い中学校生活だったんじゃないかい？」

中学入る前に色々遇って、人生の意味すら分からなくなってて。
でも今こうやって僕は生きてて、隣じゃあ気の合う奴等が笑ってる。

「確かーに。此れで終わりとは思えねぇよ」

「終わりではないさ、きっと始まりなのだよ」

良いことじゃないか、他には何も必要ない。

「まあぶっちゃけ何時でも会えるし？　毎日会わなくなっても、何時の間にか顔合わせてるって」

「ははっ！　其のような腐れ縁、大歓迎だよ！」

二人が愉快に会話をする中、僕は黙って外の風景を見遣る。空は快晴、実に良い卒業日和だ。

「――やっぱり此方に居ましたか」

「お、ようアスカ」

僕が見ていた方向とは真逆からの声。くすり、と微笑を携えた声音に誰何を尋ねなくたって良かったけど、カイトの声が正解を言ってくれていた結果、やはり間違えてはいなかった。

「アサキ君、とりあえずユウヤどうにかして下さい」

「第一声目が其れですか」

思わず苦笑したけど、まあ仕方ないかと妥協する。あんの様子じゃ今頃また泣いてるんじゃないか、とか現在進行形で思ってたしね。

「今生の別れではないというのに、先程からユウヤが喚いてまして」

「ははっ、アスカも非常に良い性格をしていると思うよ！」

「ふふ、光栄です」

はぁ、とひとつ溜息を着いた僕。仕方ない、帰ろ、ユウヤを連れて帰る算段を脳裏に描き鞄を手に取れば、先に帰ることを告げて僕は教室を後にしようとする。

「はい」

が、アスカ君に何か渡された。……何此れ。

「少し前、アサキ君から預かってた物ですよ」

「……あ」

忘れてた、すっかり忘れてた。数秒フリーズして考えれば、とある雨の日のことを思い出す。

「ちゃんと渡してあげないと」

「そうだった」

「え、何何？　誰かに何か渡すん？」

「ちょっとユウヤに、それじゃ」

カイト達の野次が入り切る前に離脱、今日で終わりだというのに我ながらあっさりしてるな、とは思ったけど。

これでとりあえず、この学び舎とはおさらばですか。……うん、全く未練がない。

「ユウヤ、そろそろ泣き止んでくれ」

「あうぅ……」

昇降口付近に居たユウヤを引っ張って帰路を歩くも、相変わらずぼろっぼろ泣き倒すユウヤ。一回泣き止んでたじゃん、ねえ、泣き止んでたじゃん、つか其のハンカチびしょ濡れじゃね？　大丈夫？

しかし何を言っても無駄だし、僕はさっきアスカ君から受け取っ

た物をビニル袋のままユウヤに差し出した。

「う？」

「あげる」

中身は自分で確かめなさい。たまたま見つけたから買っただけだし。一度立ち止まったユウヤにはお構いなく、僕はのこのこと歩き続けた。

「……おー」

感嘆の声。否、何の声だ今、感嘆で良いのか？

「此れ、何時買ったの？」

「一ヶ月は経ってない」

「へぇ、……綺麗な花だね」

「……あ、咲いてんの？」

僕が渡したのは小さな鉢植え。とある花の鉢植えなんだけど、其処は自分等で想像して欲しい。

けど僕が買った時は咲いてなかった。……まさかの開花時期がジャストミートしたか。

「うん、可愛い花だよ」

「なら良かった。本当はもっと前に渡す予定だったんだけど」

色々重なって遅れたんだ――まさか忘れてたとは言えまい。

「……どんな意味合いで？　受験頑張れ的な……？」

「さあ、ただ売ってたから買った」

「ノリかよ」

ユウヤは笑ってそう言って、笑って鉢植えを眺めていた。やっと泣き止みやがった、面倒臭い。

「うん、ありがとー。花弁で本の栞作ろーっと」

「少女趣味やめ」

「え、いいじゃんか！」

ぎゃあぎゃあと喚き出したし、もう大丈夫そうだ。別に慰める義理もないけど、隣でめそめそされんのも好きじゃない。出来れば何時も通りでお願いしたいから、とりあえず今日は暴言吐くのは止しておこう。けちょんけちょんな心にどかんと穴空けるのも気が引けるし。

僕に取っては泣けもしない三年間だったけど、つまらなかったと言えば嘘になる。だから今ばかりは思い出に浸っておこう。

「アサキにも作ったげるから！」

「はいはい」

うん、それが良い。

188＋その花の名は。（後書き）

スノーフレーク
別名：鈴蘭水仙

189＋なんてことないただの平凡な日。

ユウヤです！　卒業しちゃったけどユウヤです！　やっぱり未だ寂しいけど、数日経った今じゃあどちらかと言えば高校に向けてうきうきしてます！

「――だって受かったんだもん！」

周りから見れば何の脈絡もなく叫んでしまった。けど今は自宅だしね、だあれも反応しないよ、何だよ此の拭い去れない寂しさ。

「そういえば兄貴」

「あん？」

そしてそんな俺を差し置いて会話が始まった、ちきしょー。

「兄貴って大学（いっ）何時から？」

「あー……お前達よか数日早ぇはず。何でだ？」

「車出して」

くううっ、そして平凡な会話が成り立ってやがる。

「どっか行くんか」

「うん、なんかスケート行くんだって」

「はーん、皆でってか？」

「その通り、電車とか怠いから車出して。どうせ暇なんだから一緒にスケートしときなよ」

「兄ちゃんの予定を完全無視した自由なお願いだな、まぁ構わねぇけど。だけど珍しいな、お前がスケート行くなんて」

「其処の馬鹿が勝手に決めたんだよ、巻き添えだよ」

「はは、どんとまいんど。ってユウヤ、聞いてるかお前」

「ふ？」

そんな会話の中でも平然としてる父さんの元にダイビングしてやろうか、とか考えていた矢先、マヒル兄から声が掛かった。何、何の話してたの？　いじけてたから知らないよう。

「スケート、行くんだろ？」

「え、あ、うん行くよ。冬休み行こうと思ったんだけどアスカの関係で行けなくて」

予定日付近でアスカが熱にぶっ倒れたんだよね確か。たまには病人らしさが滲み出るアスカ、今回は大丈夫かな？

「車出すのは良いんだけど、何時もの七人……そんな乗れねぇぞ」

「ご安心を、カイトに言っといた」

「嗚呼、ウミか。……つーとセツ呼ばねぇといじけんなー……」

せっちーは相変わらず子供らしい。や、俺が言えた義理じゃないんだけど。っていうか車出してくれるんだね、やったーい！

「ふふっ、うちの兄弟は相変わらず仲良しさんなんだね」

「とーさんだ」

「父さんだ」

「父さんだっけ？」

「何でマヒルは何時もお父さんをそうやって……」

別にさっきから其処に居たんだけど、そうやって呼んでみたらアサ君とマヒル兄が続いた。マヒル兄の父さんに対しての扱いも相変わらずだよね。

「あれ、父さん暫くうちに居るんでしょ？　一人で大丈夫？」

「大丈夫だよ、アサキじゃないんだからご飯くらい自分で出来ますよ」

「ちょ、それは暗に僕が料理出来ないこと言ってるでしょ、ねぇ父さんってば」

父さんは明るい笑顔でアサ君を無視した。

「其れに、其れって四月の話でしょう？　四月になったら奥さんも春休み期間くらいは帰って来るらしいので、二人で楽しみますよ」

「あーはいはいバカップルバカップル」

「マヒル、バカップルじゃなくて馬鹿な夫婦だ」

「アサキそれ直訳しただけだよね、しかも何かより酷い表現だよね」

普通の家族とか知人なら「仲の良い夫婦だね」くらいで済むのになぁ。うちじゃ無理だ、兄貴もアサ君も未だ仲良しな両親を毛嫌い、又は面倒臭がってるから。俺は良いと思うんだけどな……？

「ま、とりあえず其の日は空けとくから安心しろよ」

マヒル兄はひらりと適当に手を振って座っていたソファから立ち上がった。

「んじゃ出掛けてくらァ」

「「いってら」っしゃい」

「気をつけてね」

そしてそのまま何処かに出掛けてしまった。父さんはにこにこで見送ったけど、場所を聞かなかったなー、……まあもう大学生だしいっか。

「ユウヤ」

「なーに？」

「飯」

「はいはい」

そういや昼飯まだだった。マヒル兄も居なくなったし、久しぶりに作るか。

１９０＋無駄遣いは我が身を滅ぼすのでやめましょう。

「アサキ、カイリ君から電話だよ」

「五分待たせて」

アサキだよ、あの野郎なんて時に電話してきやがる、捕獲中だぞ（※ゲームの話）。

「こらこら、お友達を待たせちゃ駄目だよ？」

「トモダチじゃないです、赤の他人です」

ユウヤならあっさり「あ、カイト君？　大分待ってー」となるのだが、今日は父さんだ。仕方なく受話器を受け取れば肩で持ってゲームを続ける。

「何、用無いなら切る」

『未だ何も言葉発してねぇだろうが！』

まぁ最もだが僕は忙しいんだよ。

『ふっふっふ、アサキよ』

「何」

『俺は今携帯から電話してる訳だぜ！』

「あぁそう、で？」

『……』

「じゃ」

『まままま待ったっ！！！！』

何なんだよ、僕はどうすりゃ良かったんだよ、教えろよ。

「アサキ、父さん買い物行って来ます」

「おーう」

『ええと、ほら、携帯だぜ？』

「は？」

『だーかーらー！　俺携帯買ったんだって！！』

「……其れが？」

高校に上がるからだろうか、確かに高校上がると同時に買う人って多いよな。だが其れでカイトが僕に電話をしてきた理由が良く分からない。

『……まあ、ぶっちゃけ試しに電話してみただ――』

ブツッ、ツーツーツー……

やっぱりどうでも良い用事だったじゃねぇか……！
僕は雑に逆手で通話を切れば子機をそのままソファに投げ付けた。
さて忙しい、今から僕は――ゲームの――自宅に帰らなければいけな……はあ。

Ｐｒｒｒ・・・

「チッ……――ただいま留守にしております御用のある方はピーッという音の後に御名前と御用件を御話下さいファクシミリの方はそのまま転送――」

『そういえば貸してた漫画の最新巻を買った』

「貸してください」

ついつられた。

『今切ったろ！？　此の俺様の電話を切りやがって！　携帯の電話料金馬鹿になんねぇんだからな！？』

「るせぇよ、じゃあ何でかけ直して来たんだよ」

『お前が切るからだろうが！』

嗚呼面倒臭い。仕方なくゲームをやめればソファに上がり、ただ今誰も居ない家でのびのびする。

『初めての電話なんだから少しくらい話させろよー』

「ユキ君とやって下さい」

『なろっ』

カイトは文句たらたらだけど、僕は特にありません。このまま寝たっていいんだもん、暇って素晴らしい。

『な、アサキは携帯買わねぇのかよ？』

「はぁ？　あの人間を時間や他人と言うしがらみに縛り付けると有名な携帯を……？」

『解釈の差だろ其れは』

まぁ確かに。でも僕買ったって使わないと思うよ。

『何だよ買わねぇのかよー、つまんねー』

でもまあ――

「――買わないだなんて誰が言ったよ」

「たっだいまー！」

噂をすればなんとやら。相変わらずの元気な声でリビングにユウヤとマヒルが現れた。

「じゃーん！　俺赤にしたんだーっ！　まあ赤って言ってもワイン

レッドっぽいけどね」

「んでお前のがこっち、本人来ねぇとか前代未聞なんだけど」

人が電話してることに気付いてるのか否か、ユウヤはそんなテンションのまま僕にワインレッドの新しい携帯を見せてくる。普通箱とかに入ってるんだけど……嗚呼、車ん中でもう出したの、荷物はマヒルが持ってるの、嗚呼そうなの。

マヒルは僕の横に紙袋ごと持っていた物を置いて、つっかれたー、と愚痴を漏らしている。

『もっしもーし』

「はいはい」

『今買い行ってたんだな』

「そういうこと」

『何故自分も行かない、普通携帯とかは自分で決めないか?』

「怠かったからユウヤと一緒で良いって言った」

『……そ』

携帯を掲げてうろうろするユウヤを見遣りつつ、そのままカイトと数分電話した。僕の携帯の色はネイビーブルーとか書いてあるから青だな。

……ま、今度設定しよ、怠いし。寧ろ其れも任せるか、ユウヤに。

191＋ある意味驚異的な人物。

「姉ちゃん起きるべし！」

「――にゃ！」

あふぁ……何？　今何が起こったの……？

「はーやーく起きてっ！　起きて起きて起きて起きて起きて起きろごら！！！！！！」

「はううぅ、起きてるよぅ、起きてるから～……」

未だ朝なはずなのに、ユズが起こしてくるなんて珍しいなぁ……あ、モモですよ？

人の部屋にやって来たと思いきや、気付けば私の上に乗っかってますユズ君。あう、バタバタしないのー。軽いからって乗られたらお姉ちゃん潰れるよ～。今年から中学生でしょ？　……まあ私から見てもユズはちっちゃいけどね、私より身長無いし。

「早く起きろって！　姉ちゃん置いてっちまうぞっ！」

「なあに？　……何処か出掛けるの？」

きらきらとした視線を起き上がった私に向け、ユズ君は相変わらずいそいそとしている。うーん……一体何に置いてかれるんだろう私。

「コトナとリョウコちゃんが一緒にケーキバイキング行こうぜって誘ってくれたんだよ！　行くぞ！」

「バイキング？」

寝起きのお姉ちゃんにそんな胃がもたれる話はしないで欲しいかも……。私が着替え始めても人のベッドでばたばたし続ける弟を見ながらそう思った。……ていうかお姉ちゃんが着替え始めたんだから「ばっ、ちょ、俺が出てってからにしろよ！」とか無いのかな？

そういう弟が男になる瞬間とか――

「ケーキー！！！！！」

――うんないみたい。

所詮ユズは未だ小学生だった。

「リョウちゃんコトちゃんおはよ～」

「おはよモモ、既に十二時なことには目をつぶってあげるわ」

「おはようモモちゃん」

ユズ君に物凄くせかされて外に出たら、リョウちゃんとコトちゃ

んが居た。待たせちゃったかな、ごめんなさい。

「でも急にケーキバイキングだなんてどうしたの？」

「コトナが商店街のくじ引きで当ててきたのよ、四枚ね」

「ふふふっ、お姉ちゃんには出来ない芸当ね」

「はいはい」

コトちゃんは相変わらずだけど、私とユズ君を誘ってくれたのは嬉しいな。

「そうなんだ～、ありがとーコトちゃん！」

「良いのよ、モモちゃんやユズが喜んでくれるなら本望だわ」

「アンタは私より二人の方が大好きだもんね」

呆れるリョウちゃんの横でコトちゃんはこくん、と頷いてくれた。はぅ、こんな可愛い妹が私にも居たらなぁ……！　ちなみにうちの弟は脳内ケーキの世界にトリップしてます、要するに心此処にあらず。作るのも好きなら食べるのも好きなんだよね……今時有名な草食系男子ってやつかな？　ああなったら暫く帰って来ないからいっかな。

「何を言ってるのよお姉ちゃん、お姉ちゃんのことだって好きよ、昨日の夕御飯が何だったかしら、っていう思考の重要さくらいには」

「全然じゃないのよっ、思い出す必要性が感じられないわよっ！」

不吉な笑みを浮かべるコトちゃんと、懲りずにツッコむリョウちゃん。えへへ、やっぱり仲良いよね二人って。姉妹ってそんなものなのかな？　ユズと仲悪い訳ではないと思うけど、ん～、いいなあ～……。

「ね、ユズ君」

「あん？」

あ、戻ってきてた。

「ユズ君は私と仲良いのかな？」

「あー……知らん。でも多分良いと思うよ、俺の友達とか、こうやって姉ちゃんと出掛けたりしねぇって聞くし」

「そっか、何か嬉しいな～」

「そんなことよかケーキケーキ！　姉ちゃんトロいんだから走るぞ！」

「ふえー！」

そう言ってユズは拳を頭上に掲げて、空いている手で私の手を掴んで走り出した。うああ、待ってよ～、リョウちゃん達未だ来てないよ～！？　そう思いながらもこけないように走り付き合う私、此処で止めてあげちゃうのも可哀相だからね。

うんうん、私お姉ちゃんだなぁ。

「ホワイトデーのお返しのつもりだったんだけど、喜んでくれてるみたいで良かったわ」

「え、アンタが？　バレンタインあげてなかった？」

「あげたわよ、けどユズはバレンタインもホワイトデーもくれたわ」

「……確かに、私も貰ったわ」

「一言だけ言わせて貰えば――複雑だわ」

「ドンマイコトナ」

ランユズキ、大分難しい人物だという。

１９２＋態度と感情は反比例。

マヒルだよ、っと。

「マヒル兄ー！」

「おー、手ぇ振ってねぇで前見ろ前、こけんぞ」

何時ぞやか連れてけと言われたスケート場にやってきた。弟の友達達とセツとウミ、十人の大所帯だが車が二台ありゃどうってこともない。

すいすいと滑りながらこちらに手を振るユウヤを見て、俺は手を振り返しつつもそう指摘した。つーか手ぇ振んなよ、もう高校生になるんだろうが。

ちなみに俺は滑っていない、さっきまで滑ってたんだが此処に居た方が良いだろうと思ったからだ。理由？　そりゃあ――

「――たぁ……」

「……何でお前がコケるかな」

中学生共より先に、脳天から見事にズッコけたセツが居るからだよ。

「五月蝿ぇ、久しぶり過ぎて感覚が掴めなかったんだ！」

「嗚呼そーかそーか」

「凡人ナメんじゃねぇ！　人類全てがお前みてぇに何でも出来る訳じゃねぇんだよばーか！　マヒルの神！」

ばーかと言われたのに全くけなされた気がしねぇよ。最後の神って何だ神って。

セツは打ったであろう後頭部付近を押さえながらぶつぶつと呟く。

中学生共プラスウミはそりゃもう自由に滑ってるの――いや、嘘、一部端っこに居た。

「うう、待ってよリョウちゃーん……」

「大丈夫よモモ！　こういうのは慣れが大事なのよ！」

「……ひあぁ！」

「わ！　ちょ、引っ張らな――きゃあ！！」

「うふふっ、頑張ってね二人共」

すってーん、とね。

滑れないモモちゃんに足を引っ張られているらしいリョウコちゃん。見てるこっちは面白いから良いんだけど、本人達はそうでもないんだろうな……。ウミは横で応援してるだけみたいだし。其の横を何食わぬ顔して滑ってるアサキとアスカ君も見えたが其処は気にしない、本当、氷の上を滑ってるというより氷があったから滑ってるって感じだあいつ等は。

「ふふふふっ、私に着いて来れるかなっ！」

「はん！　俺様がユキに劣る訳もねぇ！」

「あははっ、俺も俺もー！！」

――そして残り三人は無駄な運動神経を発揮している。のんびりアサキの横の空気を切り裂くように滑る阿呆共。あの元気を他に活かせないもんかねユウヤとカイリ君は。そして横をあのスピードで滑ってったのに微動だにしねぇアサキには驚くっていうステイタスが備わっているのかが不安だ。

「ユキちゃん女の子なのに早ぇ」

なんかセツも勘違いしてるし。……訂正はしないけれど。

数分してセツは再びリンクに戻ったが、俺は何か一回やめたらやる気が起きなくてそのままそこに残った。こういう所は父さん似だなー、あの人は面倒臭いから家に帰って来ない訳だし。世間のお父様方を見習えってんだ。

しかしそれから数分すれば、そんな俺より父さん似な我が弟が期待を裏切らずこちらにやって来て、

「疲れた」

と一言言うが早いか座り込んでスケート靴を脱ぎ出した。え、もう滑んねぇの？　一回疲れたら終了なのかお前は。しかしそんなことを言ったって無反応なのは分かり切っているから俺は何も言わなかった。

「でもあれだな、お前達ももう高校生か」

「ジジ臭いからそういうこと言うな」

「はいはいどうせ兄ちゃんはもう二十ですよ」

しみじみ呟いたら即座に返された。俺は可愛いげのない弟――否、俺からしてみりゃ充分に可愛い弟だが――の発言に溜息をつくも、そういえば聞いておきたかったことがあったのだと思い出す。

「なぁアサキ」

「何」

「俺ってさ――父さんのこと嫌いだったと思うか？」

「……」

“はあ？　何それ知るかよ”と目が語っていたが、其れを口に出される前に対処することにする。

「この前父さんが言ってたんだよ。なんか、昔っから俺に嫌われてるとか言い腐りやがってよ」

「へえ、何、兄貴父さん嫌いなの」

「嫌いじゃねぇよ、今は多少面倒臭ぇとは思うけど……」

其れ嫌いと違うんだ、とアサキの尤もな指摘も聞こえたが俺は気

にしない。

「父さんに素っ気なかったからじゃないの、昔から」

「素っ気なかったかァ俺？」

「素っ気なかったよ。今思い出したけど、兄貴が小学生の時に父さんが『何か欲しいものとかないんですか？』って聞いたの覚えてる？　兄貴が何て答えたかも」

何だそりゃ。つか待てよ、お前其れ何年前の話だよ、小学生って最低でも八年前の話じゃねぇか。流石の俺も忘れるし、お前も良く覚えてんな。

「『別に何も要らない、父さんは仕事だけしてれば良いんだよ』って言ったんだよ兄貴」

「昔の俺大丈夫か」

小学生の俺、何親に仕事強制させてんだ。

「其の時の父さん、少し寂しそうだった気もする」

すまん父さん、其れは流石に謝る。未だ十歳其処らの息子に「仕事しろよ」とか言われたら嫌だよな、マジ其れは帰ったら謝る。

「後は中学時代に母さんと父さんにマジ説教とか」

「……」

「後――」

「もう良い、そんな耳覚えのない武勇伝なんざ要らない」

中学って……何に対してそんな説教を……。

「でも説教した時は何か父さん達嬉しそうだったけど」

「Mかよ」

「何か、『マヒルが初めて自分の意志を見せてくれた』って」

「……」

何だよそれ。……あれ？　待てよ？　何か俺それ覚えるかもしんねぇ。あー、……うん、覚えてる。

「なっつかしいな其れ」

「そりゃあね、僕だってうろ覚えだよ」

「俺が小学生だった頃の話覚えてる癖にそりゃねぇだろ」

俺は笑ってそう言うけど、アサキは此れっぽっちも笑わずに素っ気なくリンクを眺めていた。……嗚呼、確かに素っ気ないと寂しい。

でもまあ、中学入ってからだったな、親が俺に対して遠慮無くなった、っていうか、俺が遠慮無くしたっていうか。別に遠慮してた訳じゃねぇんだが、自然とそう見えちまうことってあるよな。両親は双子が生まれてから其れを実感したみたいで、二人には結構な愛情――度が過ぎてるとは思うが――を注いでるみたいだし。……あ

れ、これじゃあ俺が愛情注がれてねぇみたいな言い草。そうでも無かった、とは思うんだが。

「マヒルー！」

アサキと家族会話を嗜んでいたら、遠くから俺を呼ぶセツの声がした。良い歳した奴が叫ぶなっつーの。

「ユウヤがこけたー！　泣いたー！」

「「……」」

――今度はお前か。

アサキと顔を見合わせたが、何だかんだで同じことを考えているらしい。

「行くか」

「また靴履き直すのか……」

アサキは怠そうながらちゃんとスケート靴を履き直していた。お前も何だかんだで兄貴に弱いな。

素っ気ないって言われたって、ただ顔に出ないってだけなんだよな。俺は元々履いていたスケート靴で立ち上がり、アサキが後から来るのを待ちながらも、どうしようもねぇもう一人の弟を遠めに見遣った。

……弟共に付き合うと、本当に飽きないな。

193＋騒がしい日々のその後には。

「ようアヤメ」

「何でこんな所で会うんですかねイツキ先生」

マシロですよ、随分と賑やかだった初めての生徒達が去ってから数日。特に変わりない日々の中で、そして此れからも続く日々の中で、あの子達の存在はこれからもずっとずっと、忘れることの出来ない存在として心に残り続けるのでしょう。

――とかなんとか言ってみるのも束の間。

相変わらず変わらない同期生基職場仲間と――何故デパートで出会わなきゃならないんですかね。

フードコートで目が合ってしまったイツキ先生。そりゃ住んでいる場所だってそう遠くないし、会ったって仕方ないとは思うんですけどね。

「こんな所で会うなんて奇遇ですね、一人で何してるんですか」

「そりゃ俺の台詞だ」

「僕は弟と一緒ですよ、今迷子になってますが」

――本当、慣れたデパートで迷子ってどういうことなんでしょうねあの子は。

「セツか……幾つだよ」

「三月で二十歳になりましたよ」

「ドンマイ」

励まされてしまいましたよ。最近うちに遊びに来たイツキ先生は奇遇にもセツと――そりゃ住んでるんだから――会って、一緒に遊んでましたよね。

「にしてもアレ、セツと会ったことなかったんですよね」

「んあ？　……嗚呼、高校ん時の話か其れ」

「勿論。……そうか、セツは僕が大学の時に実家から出て来たんだった」

相変わらずだるっだるなイツキ先生は放っておいて、僕は思い出したように拳をぽん、と手の平につく。そっかそっか、すっかりもっと前から居たのかと思った。……あ、今の話はあれです、僕が未だ、イツキ先生のことをイツキ君と呼んでいた時の話です。……分かりますかね？

「中学で親離れかよ、凄いねぇ？」

「あっはっは違いますよ、うちの親が特殊で、子供達に興味関心が薄かっただけです」

食事は与えて貰ってたし、小遣いだって普通に貰ってたし。けれ

ど、連絡無しに夜中まで帰らなくても怒らないし、テストで悪い点を取っても怒らなかった。うちの両親は確実に他の家とは違ったんですよね、でも何が違うのかと言われれば答えられはしない。甘い訳でもなく、育児放棄という訳でもなく、何と無く他人行儀な家庭、という感じで――何処か違和感のある家族でした。言ってしまえば――歳の離れたルームシェアって感じで。

家族の中で本当に身内だと思えたのは何時だってセツだけだったし、恐らくセツも僕だけだったと思います。本当、よく分からない家族でした、僕達は。

「高校の時聞いた話じゃあるが、お前ん家ってマジよく分かんねーよな」

「まあ、そういうのも有りなんじゃないですか？」

高校の時、というのも変な感じだけど、僕と此の人は高校が一緒だった。大学で違えてまたこの歳で再会するとは思いませんでしたが。

ま、腐れ縁ってやつですか。

「あ、シロめーっけ！」

「ッ――セツ、何処行ってたの？」

何か予想以上に感慨に耽っていたら、後ろからどつかれた。痛いよ、加減が出来てませんよ其れ。

「あり、いっきーも居らァ、やっほう」

「おう、久方」

「セツ、話を聞いて下さい」

「ん、エスカレーター逆走してた」

大迷惑じゃないですか。

「――じゃ、俺は帰るわ」

セツが「折角いっきー居る訳だし、一緒に何か食うか」とか言い出して数十分、そう言ってイツキ先生は席を立った。

「用事ですか？　……というかイツキ先生、何で貴方此処に一人で――」

「待ち合わせ、だよ。早く来過ぎてたんだがお前等のお陰で暇潰せたわ、じゃーな」

セツはひとりもぐもぐと咀嚼をしながらもイツキ先生に手を振っていた。去り方までキザな感じですよあの人、相変わらず過ぎる。

「そうだねセツ、セツが食べ終わったら僕達も帰ろうか」

一度頷くセツ。……自分で言っておいてアレですが、別に喋っても怒らないんだけどな、もう二十歳な訳だし。でもまあ、本人が守りたいならいいんですけどね。

たまにはこういう、平凡な日も大事、だよね。

１９４＋天の神より身近な神。

「めぎゃっぷ！」

「いや、何よそれ」

カイリだ、アサキん家に宿題しに来たのは良いんだけど、当のアサキは毎年のことながら春に当てられているみてぇだし。ろくに話なんざ聞いちゃいねぇんだよなー……ホント、今年も話しちゃくれないんだろーどーせ。ま、気にしねぇけど！

という訳で代わりと言っちゃ何だがマヒルさんにヘルプを頼んだ訳だ、大学は始まったらしいが家戻るのは土日明けとか何とか。俺はそれであってくれて助かってんだけど。

最初に聞こえたのはキッチンに居るユウヤの声。めぎゃっぷ……悲鳴なんだろうな、俺は其処ら辺のことは深く考えないで首を傾げた。

「ユウヤどしたー？」

「何でもないと言えば何でもないんだけど！　何かあったと言えば波瀾万丈！」

遭ったんじゃねぇか。

机を挟んで俺の正面に向かうマヒルさんは立ち上がってキッチンに向かった。――が、その直後。

――バチンッ！

キッチンから凄い音がした。

「え？」

「！？」

「……」

唖然とする俺と慌てるマヒルさん、そして毎度お馴染み無反応なアサキ。とりあえず俺も立ち上がってキッチンの方に来てみたら、三角巾にエプロンと、何処の調理実習生だよとツッコミたくなる格好でユウヤがキッチンにダイブしていた。何してんだ。

「あ、頭を低く」

「地震じゃねぇんだから」

キッチンで頭低くしても逆に危なくないか、降ってくんぞ。

「俺は悪くないもんね！　オーブンレンジのオーブンあったためようとして間違えてレンジ回してただけだし！　なのに何で火花！？」

マヒルさんはそんな体勢のまま慌てるユウヤから目を離し、問題のレンジを見ている。――中からアルミホイルに乗った冷凍のポテトが出て来た。……アルミホイル？　そうか、これがさっきの音の原因か。

「誰だっ、俺が午後からクッキー作りに勤しむと知っておきながら温め忘れた冷凍食品なんぞをオーブンレンジに置き去りにしたのは……！」

午後からクッキー作りに勤しむと知っていたかどうかは定かじゃねぇけど、俺的には現在進行形でリビングに居座るあ奴が怪しいと思う。

当の本人も動かないながらこっちを見ていて、俺と目が合えば呆れた様子で溜息をついた。

「僕じゃないぞ」

「うっそだあ、お前以外誰が居んだよ、つーか何で火花散るんだよ」

「残念ながら。電子レンジは電波を使う、電波も電気、アルミホイルは電気を通す訳だから――」

「もう良い、何言ってっか分からなくなってきた」

とっとと元の体勢に戻りつつ説明されたけど分からないからいいや。

「因みにその電波――マイクロ波はその食品内部の水分子にエネルギーを与えて加熱す――」

「兄貴！　詳しく補足説明すんな！　頭痛くなるから！！」

畜生、頭良いなこの兄弟――かっこ叫んでるユウヤは除く――。

「悪ィ、アレ俺だわ」

苦笑しながらそう言ったのはマヒルさん、昨日の夜に温めようとして忘れたらしい。ほー、神様にも間違いはあるってホントだな！

「カイトくん今何考えた？」

「いんや何にも」

やっぱり神は凄ぇ。

宿題も全部終わったし、人生やっぱり神頼みってやつだなー。

195＋明日からの再出発に向けて。

「あ、す、かー！」

「はい？」

呼ばれた通りアスカです。本日はお日柄も良く――嘘ですけどね、今日は雨ですから。春休みも最終日、という訳で久しぶりにユウヤの家に来てみたのですが――もしユウヤが居なくても、アサキ君は絶対居ますからね――、買い物に行くというので着いて来ました。

「カートでどーん！」

「はいはい」

良い歳して買い物カートで遊ばないで欲しいですね、俺は微笑ましいと思いつつも知り合いと思われたくなかったで返事をしつつあらぬ方向を見ました。

――どん、がしゃん！

――見ておけば良かった。

「ユウヤ！」

「缶詰の波に呑まれるぜ！」

「その波を作ったのは何処のどいつですか」

ユウヤを乗せたカートが過ぎ去った方向を見れば、缶詰タワーをぶち壊したユウヤが何故か堂々としていました。まあ、怪我は無かったようなので何よりです。

店員さんにペコペコと頭を下げてタワーを直してからのユウヤは、普通にカートを押してましたが。

「でもアスカ、何で着いて来たの？　俺が買い物行くって言うと何時も家で待ってるのに」

「たまには良いじゃないですか。……それともユウヤ、俺と居るのは嫌……？」

「んなことないけど！　寧ろウェルダン！」

其処はウェルカムの間違いですね、何でそんなにこんがり焼かれなくちゃいけないんですか。

まあぶっちゃけてしまいますと、アサキ君とマヒルお兄さんが一緒んなってあれだけゲームに集中していたら居にくいじゃないですか。何なんですアレ、恐過ぎますよ、無言のコントローラータイプ音程怖いもんはありませんよ。しかも異様に早いっていう、画面上では凄い迫力でキャラが動いてるのにアサキ君とマヒルお兄さんぴくりとも手以外の他が動かないんですから。そしてより怖いのが二人共パジャマだったってことなんですよ、どれだけ集中し切って――というか一日中やってる気満々じゃないですか。

「アスカー」

「何ですか？」

「んーん、今日夕飯食べてかない？」

「はい、是非とも頂きますよ」

「やた！」

あの環境で笑顔で居られるユウヤに、少しだけ尊敬の念を抱きました。

「明日から学校かー、楽しみなような嫌なような」

ビニル袋をぶら下げてユウヤが呟く。確かにそうだ、明日から学校、ユウヤ達は自転車通学でしょうが、俺は明日から電車通学です。体調管理を怠らないように気をつけなきゃいけませんね……。

「ね、アスカ」

「はい」

「学校違っても、一杯遊ぼうね」

「ええ」

「何時でも夕飯食べに来て良いし、俺すっげぇメールしちゃうから！」

「ありがとうございます」

メールは程々に、と言いたかったけれど、何とも憎めないユウヤの笑顔に、つい言いそびれてしまいました。

きっと心配なんでしょうねユウヤは、毎日俺や友達と会えなくなるのが。明日から再出発といった感じですし。……でも心配してくれなくたって、俺はユウヤと離れるつもりなんてさらさらないんですからね？

ま、口には出さないでおきます、何時かまでお預け、ってことで。

196＋桜散るらむ入学式。

「もうお母さん、何時死んでも悔いは無いわ……！」

「ま、未だ未だだよ母さん！　こんなとこで倒れないでね！？」

恍惚とした表情を浮かべる母さん、生きて……まだ死んじゃ駄目だよ！　ユウヤです！　今日は待ちに待った入学式！　晴天に見舞われた今日！　そんなに緊張してないし、父さんも母さんも来るから嬉しいんだよね！　――アサキ起こし忘れて一時はどうなるかと思ったんだけど。

午後からの入学式だからって高を括って起きないアサキを叩き起こして――文字通りマヒル兄が叩き起こしてた――入学式会場なる体育館にやって来た俺、基俺達。ていうかアサキも緊張感無さ過ぎなんだよーっ！

俺は一年二組だって、ざっと見たらカイト君とリョウちゃんも同じクラスだった。アサ君は一組で、中学同じなの一人も居なかったみたいだけど……大丈夫かな……？

「ユウ君とアサちゃんの晴れ姿も見れたもの……！」

「未だだよ未だ！　まだまだ晴れ姿あるから！」

アサキよりこっちが大丈夫かなっ！？

アサキだ。

「アサキ、物凄く目付き悪いよ」

「うるせぇ、寝起き三十分じゃこんなもんだ」

隣に座る父さんに苦笑されたけど、それは仕方ないと思う。眠過ぎる、入学式なんてどうでも良いんだけども、僕やユウヤより張り切る両親も面倒だし。

説明会の時もそうだったけど、入学式まで親を隣に座らせるか。ユウヤには母さんで僕には父さん、横にこんなん居ちゃ寝れもしない。

『続いて生徒会長の言葉――』

進行の声まで眠気に誘われるんだが。畜生、こんなことなら早めに起きておくんだった。

何だか真面目そうな生徒会長の話が終わって、クラスの担任紹介とか何とか言ってるんだけどやっぱり眠い。嗚呼、あああああ！！！！！（※眠気が末期）

『一年一組担任、ハヤサカ――』

……担任くらいは聞いてやっても良いか。

『――は諸事情につき本日は欠席です』

「初日欠席かよ」

「あはは」

マイクの音量で掻き消された僕のツッコミ、父さんにしか聞こえなかったみたいだけど、全生徒が思ったであろうツッコミだったと思う。

眠過ぎてもう進行の声が聞こえなくなってきたけど、ユウヤのクラスの担任は女の人だって言うのは分かった。優しそうな人だ――

――其処で意識がシャットアウトした覚えがある。

「入学式で寝るなよ、」

「眠かった」

戻ってユウヤです。自宅に帰って来たと思ったら、アサキがマヒル兄にそれだけ言われてばたんきゅーしました。……え、死語？

「アサキは人一倍春の現に乗せられやすいからな……」

苦笑してそう言うマヒル兄は、制服姿ながら寝てしまったアサキに何時もながら毛布を掛けてやった。相変わらずあまあまだなぁ、マヒル兄。人のこと言えないけどさ！

「楽しく行けそうか、学校」

「うん！　カイト君同じクラスだし！　……アサキはどうか、分からないけど」

寝てるアサキを見遣りながらくすり、と微笑めば、マヒル兄は何処か自信満々に笑っている。ニヒルな笑み、――珍しい笑顔かも。

「アサキなら大丈夫だろ、きっと」

何を根拠に？　其れは聞けなかったけど。マヒル兄がそう言うなら、そうなんだろうね。

兄貴なんだからちゃんと見守ってやれ、最後にマヒル兄はそう俺に言った。

うん、頑張るよ、お兄ちゃんは！

１９７＋奇怪、奇天烈！　突飛な彼。

高校生になって二日目、ざわつくクラスに苛立ちを感じながらまさかの教卓ど真ん前の席に着くアサキですが。まさか過ぎるよ初っ端から、何此処、嫌がらせ？

昨日は随分と寝たから気分が良い、ユウヤとかカイトとかに、

『初日から根暗ってたら駄目だ！』

とか言われた気もするけど気にするかよ。僕の自由にして何が悪い――という訳で、のうのうとゲームに向かっている訳だけど。

「――皆さん、席に着いて下さい」

何時の間にか現れた担任だと思われる其の人。歳は大分若いし、一見大学生に見えなくもない。……特徴は眼鏡だな。

ぞろぞろと席に着く生徒達を見ながら、其の人は黙って前だけを見据えていた。何処か機械的な先生だな。

「では改めまして。昨日は母方の祖父の従兄の葬式で休みましたから、初めましてになりますね」

遠い血縁だ。

「六親等なんて所詮他人ですが、……まあ僕の話は良いですね」

ほとんどの人が首を傾げる中、意味を理解した僕は小さく溜息をついた。確かに他人だな、祖父の兄弟だって遠いのに従兄って。

担任は眼鏡を中指で押し上げて、再び仕切り直して顔を上げる。

確か昨日名前言ってたよな、ええと、何だったか、眠気眼で聞いてたから全く出て来ない。

「一年一組担任となりました、ハヤサカです。新任ではありますが、宜しくお願いします」

――真面目な先生のようだ。サクライ先生に是非見習って欲しい。真面目なのは良いんだけど、担任が真面目って少し困るかもしれない。中学の時ゆるゆるだったんだもん、仕方ないじゃないか。少し心配にな――

「――それと、一つ言っておきますが、僕は子供が大嫌いなので悪しからず」

――は？

「別に貴方達が悪い訳ではないのですが、個人的見解で子供と部類される人種を得意としません。ですので不本意ながら、少々貴方達にキツく当たる場合もありますがそれは一個人である僕の責任ですので」

『……』

一組一同はそりゃもう、ぽかーん、と唖然。一番前の僕には見えないが気配で分かる、そりゃもう凄く唖然とした気配だ。

「成績などには勿論影響させません、ただ一言――余り僕に関わらないように、以上」

以下自習にします、そう言って担任、基ハヤサカ先生は教卓の上にプリントを残して消えてしまった。これはあからさまに勝手に取ってけ、の意思表示であろうことは間違いない。

「何だ、あの教師」

「普通言うか、子供嫌いって教師が」

クラスの一部から漏れる声。一同同意だろうが、生憎未だ相槌をうつだけの知り合いにはなっていない。

最後までＮｏｔ　笑顔だったハヤサカ先生。……我ながら、癖有る先生率たっかい。

198＋親友の決断。

「どう？　モモ、新しい学校は」

「うん、女の子しか居ないけど、お友達も出来たよ～」

モモです、何だか久しぶり～。

高校生になった訳だけど、なんだか実感ってものが未だありません。だって仕方ないでしょー、未だ二日しか行ってないんだもん。うちにやって来たリョウちゃんにそんなことを言って、私は何時もながらのんびりとソファに座った。

「なら良かったわね、少し心配だったし」

「心配ありがと～。そう言うリョウちゃんは？　誰か同じクラスになった？」

「まあ、それなりに、って感じかな。ヒコクユウヤとロクジョーカイリが一緒だし」

アサキ君とは一緒じゃなかったんだね、とは言わない。優しさって大事だよね。

「あの二人初日っから凄いのよ、二人共明るいからいきなり馬鹿騒ぎしてクラスメイトに声掛けられててさ」

『全身全霊を込めて新たなクラスに馴染むことを誓うよカイト君！』

『安心しろユウヤ！　――中学ん時から馴染めてねぇから』

『え、あ、そっか、なあんだ心配して損し――って待って、馴染めてなかったの俺、え、ちょ、おい！　アサキよか馴染んでたはずだよ！？』

リョウちゃんが話してくれたそんなこと、未だはっきり思い出せるよ～。というか何時までも忘れそうにないよね、あの二人のことは。

「クラスで馬鹿やれるのがアイツ等の専売特許よね、見てて飽きないのは良いけど、会話にちょくちょくヒコクアサキの名前が出て来るから皆誰なのか不思議がってるわよ」

「アサキ君、知らぬ間に有名になってる訳だね」

本人全く興味なさそうだけど。というか知ってても無視しそうだよね～。

リョウちゃんは溜息混じりにそう言ったけど、実際は結構楽しそうだった。良かった、リョウちゃんも困り事とかないみたいで。

「リョウちゃん、何かあったら何時でも相談してね、……私じゃ力になれないだろうけど……」

「そんなこと無いわ、頼りにしてる」

はう、頼りにしてるって……リョウちゃん以外の人から完全に言われたことない台詞だよー！　リョウちゃんの期待に答えられるよう頑張らなきゃ！　……具体的に何頑張るかは決めてないけど。

「よーっし、私頑張ってリョウちゃんの背中押すね！」

「……はい？」

格好良いけど可愛いリョウちゃんは、イマイチ押しが足りないんだもん、だから私、頑張って背中を押すことに決めました！

勿論、恋のキューピッド目指して！

199＋何だか騒がしいクラスの一角。

「――へぇ、お前地元なんだー、じもてぃーだな！」

「じもてぃーってふっる！　其れ死語だろ！」

――という感じでクラス中が目指せ友達百万人☆　計画中の中、相変わらず席を動かない根暗です、間違えたアサキです。誰が根暗だゴルァ。

百万人は言い過ぎたが皆の勢いはそんな感じ、ちなみに僕の勢いは其れの零剰といったところか、要するに一、――今零剰を零だと思ったやつが居たら出てこい、笑ってやる――。所謂可もなく不可もなく、ぶっちゃけどうでもいいんだよ。

「す、すみません、通りますー……っと、危ない危な――うぎゃ！」

とか何とか考え耽ってると大抵色んなことが起こるんだ大丈夫僕学習してる。

教卓に屯（たむろ）する生徒の間をすり抜けようとした推定身長百五十センチ代の男子生徒は一度躓きそうになり、体勢持ち直し――たと思ったらまた躓いて本格的にズッコケた。油断大敵を身を持って教えてくれた感じだ。

其の男子生徒は教卓でこけた、のだから当然こけ倒れてるのは教卓真ん前の席――僕の真横。放っておくべきだと僕の中の何かが言っているが其処まで人で無しになった覚えも謂れもなく。

「……大丈夫？」

「――……」

返事はない、ただの男子生徒の骸なようだ。

「はう！」

あ、動いた。久しぶりに使ったな、屍ネタ。

「頭打ったっす……痛い……」

起き上がった彼はそう言って脳天を押さえている、馬鹿みたい。

……つい本音が。此処はひとつ、気分を紛らわす為に。

「見事な二度返しズッコケだった」

紛れてねぇよ僕。

「ありがとうございますヒコク君！　超痛いけど！」

だが凄く嬉しそうだから放っておくことにしよう。僕の苗字知ってるってことは、どうやら彼はうちのクラスらしい、ぱっと見印象が薄いから僕は知らなかった――というか担任くらいしか印象ない――けど、誰だろうこいつ。名前の順遠いんだろうな、知らないから。

「席に戻ろうとしただけなんすけどね！」

がたん。
――どうやら僕の真後ろの方のようだ、先の話は聞かなかったことにして欲しい。
「ええと、ヒコク君でいいんすよね？」
「うん、まあ」
「変わった苗字っすよねっ！　あ、ボクも言えた義理はないんすけど」
「へぇ」
「……ヒコク君、ボクの名前知ってます？」
「残念ながら知らない」
「あははっ、そうっすよねー！」
元気な奴だなこいつは、名前何ていうんだろうか。苗字すらも知らないとなると此れはやばい。でもまあ此れなら聞いちゃっても構わ――
「――所詮ボクの名前なんて誰も覚えてないっすよねー……あはは」
――なくないようだ。なんだこいつ、急に雰囲気がネガティヴになったよおい。流石の僕もびっくりだ。

「実はボク、クラスに友達誰も居なくて、ホント友達作りとか苦手で苦手で昨日なんて通常日課始まるってんで不安過ぎてほぼ完徹っすよーあははははっ」

顔が笑ってないんだけど。

「今こーやってヒコク君と話せたのはすんごく嬉しいんすけどね？　偶然の産物っていうか怪我の功名っていうか？　えへへ、でもきっとヒコク君はボクみたいなのと友達にはなりたくないだろうなーとか考えちゃうお年頃なボクはですねー――」

落ち着け僕、高校入って最初に会話した奴がこんなキャラ濃いと思わなかったが落ち着け。翻弄されるなんて向いてないぜ、という訳で――

「黙れフドウ」

まずは黙らせましょうか。

「――はい！」

実に素直な良い返事、根は良い子みたいだ。

「て、ていうかヒコク君、ボクのこと知ってたんすね」

「まぁな」

横に掛かってた鞄の名前見たとか口が裂けても言わないが。

「すみませんっす！　一度入るとどーしてもマイナス思考抜けなくて……」

「別にどうでも良いけど、興味無いし」

鞄によれば彼の名前はフドウ　シギ――確かに変わった名前だ。
慌てた様子のフドウ、どうやら嫌われたとでも思ったみたいだが……まぁ良い、僕の嫌いな人種ではない。

「フドウ」

「はいヒコク君！」

「一年宜しく」

「は――は、はい！」

視線は前に戻してしまったけど、声音的にフドウは、満面の笑みを浮かべている様子だった。

「まあ、一年だけだろうけどな」

「そんなぁ……！！　末永くが良いっすー！！！！」

からかい甲斐もあるみたいだ。

２００＊閑話＋対して変わらない日常です。

はあいにひゃくかい突入ー！！！！！！！

「おめでとう作者ー！」

「一話の長さがまちまち過ぎるし誤字脱字処理未だ終わってないのにおめでたいねおめでとう」

――……ｏｒｚ

いきなりの大ダメージだったが頑張ろう浅井、負けるな浅井……！
折角２００回なんだぜ、なんか少しくらい頑張ろうぜ浅井！！

「浅井さんが自分に語りかけ始めたからこっちは勝手に始めようかアサ君」

「うい」

「ええと、――という訳で祝☆２００回！　毎回の如く特にこれといってやることないから何時も通りにぐだるけど」

「そろそろこの閑話消しゃいいのに」

それはならない、こうやってぐだぐだする回が無いと続かないんだから。

「あ、高校編に入って新キャラ増えて楽しくなったからって更新率高くなってる浅井さんだ」

「新キャラ多いけどどうやって出すか悩みに悩んでる浅井さんだ」

相変わらず五月蝿いんだけど君達、マジ帰らねぇかな、土に還らねぇかな。

「でも本当のことじゃーん」

まあな！　考えに考えたは良いが十人近く増やしたから困ってるよバーロー！

「まさかのコ○ンだよ全く」

「真実はいつもひとつ！」

「黙ってろ」

「じっちゃんの名にかけて！」

「探偵違いだ黙れ雑魚」

「へい」

本当やること変わらないわー、つーか反省会だったよねこれの趣旨。反省しようよ。

「じゃあ誤字脱字訂正急げば？」

へい。

今のところ出て来た方々は、アサキの担任さんとフドウシギくんですね。

「担任……嗚呼、堂々と子供嫌い宣言してたあの眼鏡」

「なあにその先生」

ハヤサカ先生だよ、あの人はちょっと好きな漫画のキャラに似てるんだよ。名前は不詳。

「考えてないだけとか言わないよね？」

言いません、ちゃんと考えとりますえ。

「大丈夫作者」

平気だしー、授業中だけど平気だしー。

「作者あああああああ！！！！！！！！！」

でもアレだよ、マジにまだまだ沢山居るんだよ、直ぐ出すべきなのがざっと四人。

「張り切ったね」

ぶっちゃけ一瞬出て来たのが一人にあと二人出すのさ。

「多い」

だから更新急がなきゃなんだよーい、無理してんだよ、少しは応援してよ！

「「ガンバレ」」

感情ごと寄越せや。

しっかしまあ、本当に一話の長さまちまちなのは勘弁ですね。長くなった時はただただ収集つかなくなっただけなんで。

本来朝夜は難しく考えなくてもあっさり読めるギャグを目指してた訳で、シリアスとかもう――全部アサキの所為なんだ。

「僕かよびっくりしたよ」

お前がシリアスルートの要なんだよちっきしょー。裏有り過ぎっていうか！

「あんたの責任でしょうが」

確かに！　浅井が他に此処で書いてる話は読み切りばかりなはずだったんだけど、連載ももうひとつあるんだよ。寧ろ全部連載に変えるつもりだし――そしてそれは全てリンクしてるんだ。

「「え」」

まだしてないんだけど、ねー、それはお楽しみって訳さ。だから全部読むと良いさ、はい宣伝しゅーりょー！

授業も終わるから――ごほん、今回もこんな感じで終わりでっせ！

それじゃあサラバッ！

「２００回だってのに本当変わらねぇな」

「そだね」

……うるさい！

201＋さっそく過ぎるサボり癖。

『――ノートは取らなくて構わないので、話だけ聞いてて下さい』

ユウヤでっす☆
ただ今一組の廊下前であります。え、授業？　今は其れどころじゃないんだよ！

昨日の夕飯時、アサ君が

『うちの担任お前にとっちゃキツいかもな』

とか何とか抜かしましたから気になって授業に集中出来ないんだよ！　まぁ何時だって集中出来てないけど、今は其れ以上に出来てないんだよ。うちも担任の授業なんだけど抜け出してんのバレてないみたい、……そういう先生なんだ。
ふむふむ、声を聞く限り真面目な先生だ。覗いたりしてバレたら嫌だから見ないけどカッカッカ、とチョークを走らせる音がした。

『――ということになりますね。はい今書いたことテストに出しますがもう消します』

『『えぇ！？』』

『教師が取らなくていいと言った板書を書かないのを当たり前だと

思わないように。自分の勉強は自分で見出だしていくものですよ、第一今の話くらい、一度聞いたら覚えてくれませんか？』

ざわつく教室、消される板書。

――な、なんて鬼畜なんだハヤサカ先生って……！　書かなくて良いって言われたら普通書かないでしょ！　今回のテストやばいんじゃないかな一組……！！

『し、死ぬっす……！　それじゃなくても数学苦手なのに……！！！』

『写さないのが悪い』

『けどヒコク君！　先生写さなくて良いって――あ、あれ？　もしかしてヒコク君写してたっすか……？』

『構わないと言っただけであって写しちゃ駄目とは言っていない。僕はこのテの捻くれ者には耐性がある』

聞き慣れた声がなんか凄いんだか切ないんだか分からない話してる。捻くれ者って確実に自分じゃんねぇ？

――ていうかアサ君、オトモダチ出来たのかな！？

「ヒコク君」

「？　――……あふぁ、先生！」

ぎゃあ、やっとバレたみたいだ……！

「ヒコク君ったら、何時教室を抜け出したのかしら？　八度も呼んだのに返事がないと思ったら居ないんだもの」

八回も呼んだの先生、二回くらいで気付きなよ。

そうして教室に強制送還された訳だけど、アサ君の新しいオトモダチか～……よし、後でカイト君と乗り込んでくるか！

202＋始めてのお使い。

「じゃあ号令お願いねー」

「きりーつ！」

一週間が終わったー！　高校って中学とそんな変わらないんだなぁと理解しつつ、俺は教科書何も入ってない鞄を持って立ち上がった。明日は休みだユウヤです！

「ユウヤー、一組行こうぜー」

「うーん！」

カイト君と同じクラスは始めてなんだけど、何だか違和感ってものが無い。ナチュラルだよね、何でだろ。

今日はアサ君のオトモダチを見に行くっていう使命があるんだ、家で聞いても何か教えてくれないし――まぁ恥ずかしいとかいう概念ではなくて面倒臭いということで――、だったらこっちから行ってや――

「ゆ、ユウヤさんというのは貴方様でしょうか……？」

「ふぁい！？　……はい？」

正直びっくりしたけど！　今声何処からしたの！？

とかなんとか考えてみたけど、どうやら背後らしい、怖ぇよ。振

り返ってみたら誰も居ないとかやめてよね、……そっ、そんな訳ないか！　――って居ねえええええ！！！！！

「あのっ、こっちっす」

「あ、居た」

これまたびっくりしたんだけど！　なんか扉に隠れてた！　話し掛けたなら出て来て欲しいかも！

「うん？　君は？」

「あ、ええと、一組のフドウっす。ヒコク君からで、伝言を預かった者でして」

「……パシリ？」

「……まぁ」

初っ端なあにやらかしてんのかしら弟。

「――ごめんね！　うちの子がいきなり！！」

「え！？　だ、大丈夫っすよ！？　ヒコク君には『フドウ、二組のユウヤんとこ行って来い』って言われただけっすから！」

恐らくこの子がアサキのオトモダチだと思うんだけど何よ此の純粋な子！　凄く良い笑顔で言い切られたらこっちが寂しくなるし！

アサ君何で此の子とオトモダチになれたの！？

「ええと、……あれ？　……何伝えるんだったっけ……ちょっと聞き直してくるっす」

「駄目だ戻るな！　其れで戻ったら理不尽に怒られんぞ……！」

フドウ君は困ったことに肝心の伝言を忘れてしまったらしい。其処をカイト君が全力で制止した、流石は三年の付き合いになるカイト君だ、よく分かってるね！

「え？　でも――」

「良いから！　一緒に行くんだ！　君を傷付けるのは未だ早い！」

「だ、大丈夫っすよ。此の数日で――結構言われてきたっすから」

「「……」」

――何を？

聞けませんでした、だっ、だってさっきまで満面の笑みを浮かべてたフドウ君が急に陰の差した表情したんだもん！　何かを悟った表情してんだもん！　どうしたのフドウ君！？

「ふ、ふふふ……」

「フドウ君……？」

「フドウー、大丈夫かー？」

「大丈夫っすよー、ボクは元気だけが取り柄っすからー」

何故か俺達がおろおろさせられたけど、相変わらずアサ君のオトモダチって面白いよなー、と思った俺だった。

「遅ぇな……『職員室に用事あるから教室で待ってろ』って伝えるだけのはずなんだが」

結局用事が済んでから二組に出向いたアサキだった。怒ったのは言うまでもなく。

２０３＋俊足の貴公子？

リョウコです、リョウコですったらリョウコです。いきなりごめんなさい混乱してます。

ガヤガヤ

高校に入って、私にも友達が出来ました。

ガヤガヤ

地方に住んでる子なんだけど、部活が忙しくてよくバスを逃すらしいのよね。そんなちょっと抜けてる子。

「キャー！　エノミヤセンパーイ！」

「お疲れ様ですエノミヤセンパイ！」

「あ、来た」

けれど優しい子で気の効く子――そして。

「すまないリョウコ、待たせたか？」

「ううん、今来たわ」

――よくタオルま塗れになっている子です。

――って違う！　なんか私のテンションじゃないわよこんなの！

やっぱ直すわ！

真っ白いタオルを幾つも投げ付けられた様子の彼女、名前はエノミヤ　ミノルって大層男前なんだけど、性格も男前なんだから仕方ない。

中学の頃から同性にモテてたらしくって、放課後の部活終わりにはこんな感じで後輩の中学生がミノルを見にわざわざ学校までやって来るみたい。タオル渡すってったってほぼ投げ付けてんじゃない……当番制にしなさいよね、というか断らないミノルも悪いんだけど！

「リョウコ、リョウコ、見てくれ、今日は十二枚だ」

「何数えてんのよ」

「新記録かもしれないな、受け取れた枚数」

「まず避けなさい」

厚意を無駄に出来ないっていうのは分かるけど、流石にタオルそんなに沢山要らないでしょ……。

高校に入って髪を下ろした私、でもミノルは元から結んでなかったのか凄く綺麗な黒髪をひとつ縛りにしている。何であんなに綺麗なんだろう……ホント羨ましいわ。

「ではリョウコ、帰ろうか」

「そうね、またバス逃すものね」

一緒に帰らない時はほぼバスを逃してるらしいミノル、どんだけ部活命なのよ。確か陸上部の期待のルーキー、とか言われてるの聞いたけど凄いわよねー、競技は短距離って言ってたかしら……？

「涼しい時期は良いけど、これから熱くなると大変助かる」

「何が？」

「此のタオルだ」

たまに主語ないのよね此の子。

「でもさ、タオルどうしてるの？」

「洗って帰すに決まっているだろう？　彼女達に」

『お疲れ様でしたー！！』

未だ居たのミノル親衛隊（命名）。ってよく見たらタオルに各々名前書いてあんじゃないの、返して貰う気満々なのが何か嫌ね！

「……昔からああなの？」

「気付いたらああなっていた、困ることは無いからいいんじゃないかと思ってる」

「さ、騒がしくない？」

「部活中は静かなんだ、ちゃんと配慮のなっている子達で助かっている」

……まあ、ミノルがそう言うならいいんだけど。ああいう子達って普通ミノルと仲良い人を怪訝にするのかとビクビクしてたんだけど、さっき満面の笑みで、

『あ、ミノルセンパイ！　カトウ様がお見えになられました！』

って連絡してくれたしなぁ……。悪い子じゃないなら、とりあえずいっか。

今はまず、鞄にタオルを詰めてるミノルの手伝いをしてあげることにしようかしらね。

２０４＋何てったってハイテンション。

「――って訳で平凡な高校生活を送っています」

「ははっ！　其れなら良かったよ、私も楽しい日々を送っているからね」

アサキです、学校帰りに自宅近くのファーストフード店にやって来ましたけど。カイトと、久しぶりにユキも一緒に。

「ユキんとこっておっ堅いカッタカタの学校っしょ？　んなとこにユキ馴染めるかぁ？」

「何を言うんだいカイリ、私は順応性抜群なんだよ？　第一頭が良い学校だからと言って、皆が皆お堅い訳じゃないんだよ」

「ふーん、まぁ其れなら良いんだけどなー」

カイトは強炭酸な飲み物を物ともせず吸い上げている、ある意味凄い。喉どうなってんだか。

「カイリはユウヤと同じクラスか、何だか騒がしいクラスになりそうだね？」

「そうかぁ？　俺達全然静かだぜ？」

「嘘つけ、この前うちの担任の授業で騒いでたろ」

「あれはハヤサカが名前教えてくんねぇからだ！　ハヤサカの野郎……！」

良いじゃん名前くらい、つーか何でそんなに名前知りたいかな。話が分からないはずのユキは楽しそうににこにこしながら、肘を立てて手を組んでいる。

「またも癖のある先生なのかい？　アサキは本当に引きが強いね」

「悪いの間違いじゃないかそれ」

自分でも何時も思うよそんなの、普通の先生とか居ないのか、まぁ寧ろ三年間あの人な自信あるけど何か？

「ふふっ、とにかく二人が元気そうで何よりさ。会える機会も減った訳だし、こうやって会える日を大切にしたいね」

「だなぁ。俺ぁアサキと毎日会ってっけど、……やっぱユキも同じ学校が良かったなぁ」

「私もだよカイリ、けれど離れたって、私は何時でも君達のことを想っているよ！」

「俺もだぜユキ！」

「お前等の想い重い」

特にユキ、今の想いってのは絶対重過ぎだから。しかし元気そうなのは何よりだ、元気の無いユキなんて全く想像出来ないから、ある意味見てみたいとは思うけど。

学校変わってもやっぱり馬が合うらしいこの面倒臭ぇ二人をどう止めてくれようかと悩む僕。此処公共の場なんだけど、学校なら未だしもやめろし。

「中学で転校してきた身ではこんなことを言うのもおこがましいのだが、こんな楽しい関係を持てた相手は君達しか居なかったんだよ」

「あれ、何々、ユキってこっち来る前友達とかは？」

「居たけれど、日本には居ないんだよ」

「「……は？」」

「あれ、言ってなかったかな？　私此処来るまで外国だよ？」

「「キイテマセンガ？」」

ユキって帰国子女だったのかよ、全く知らなかったんだが。

「え、じゃあ、ユキって英語とかペラペラなんです？」

「そうでもないよ、日本人ばかりの学校だったから」

新事実過ぎて全く反応出来なかった、聞かなかったから知らなかったんだけどやっぱり驚くものは驚くよね。

「でもやはりその経験が少しは役立ってくれているかな、英語は得意な方だから」

「俺も英語は好きだ、なぁアサキ？」

「うっせぇ嫌いだようっせぇ」

僕に振んな、英語と実技なんざ嫌いだ。死ぬれば良い、寧ろ勉強なくなれ。

それから少し話して別れた訳だけど。

……うん、やっぱり久しぶりに会っても楽なもんは楽だ。慣れた相手っていうのは。

２０５＋高校ライフのお供は一体？／前

「ヒコク君、昼休み少々時間良いですか、職員室に来て下さい」

「え？　……あ、はい」

自分の周りの大人ってろくな人が居ないから、こういう真面目な呼び出しに慣れていないアサキです。つーかヒコク君とか呼ばれんの久し過ぎる。

「ひひひひヒコク君！　ハヤサカ先生何の呼び出しなんすかね……！？」

前言撤回最近こいつに呼ばれてたわ。ユウヤに会ったのに未だ苗字呼びかフドウ、ユウヤのこと何て呼ぶ気だ。

「何でお前が焦んの」

「え！？　……それもそうっすね」

という訳で昼休みに職員室にやって来ました昼休み。初めて入ったがあったけぇじゃないか、今日寒いってのに。

「先生、来ましたけど」

「嗚呼、早かったですね。では本題行きます、君部活に入ってないでしょう」

「……え？」

ハヤサカ――先生を付ける気にはならない――は椅子に座りながら簡潔に述べた。部活……いや、入る気無いし。

「君が学校早退した日、部活見学があったんですけどね――」

「知ってますよ、だから帰ったんで」

「――馬鹿かおま……ごほんっ、いえ何でも」

「今馬鹿って言っただろおい」

ハヤサカ今絶対馬鹿つったよねえ、馬鹿ってねえ。

「とにかく、一年時は皆に入って貰う予定なので四月中には決めておくように」

「はあ、……え、一年って皆入ってんですか？」

「予定では。他クラスは未だ入ってない生徒が多いらしいけれど、うちのクラスは君だけですよ」

初耳過ぎる。……ちょ、真面目にかよ、部活って何だし。

用は済んだしとっとと帰れオーラ全開だったハヤサカの元から去れば、僕はそのまま二組に向かった。……居るとは思えないがとりあえず寄る。

「……居ない、な」

「ようアサキ」

後ろから声がして不覚にも驚いた、何なんだよ全く。声からしてカイトだがムカつくから踵蹴りした、がつんと向こう脛にヒット。

「あぐっ！　ぐぐ、ぅ……馬鹿野郎こっちは汁物持ってんだよ……！」

「汁物言うな、ただの飲み物だろ」

うずくまってやがる、ざまあみろ。

しかしよく考えたら用があるのこいつだった、真後ろに現れたことには目を瞑って話をしてやろう。

「でさ、カイト」

「この状況で会話をしやがるのかお前はあああ」

「部活どうしたよ」

「部活？　未だ入ってねぇよ」

文句言う割に答えるカイト。野郎の涙目程惹かれないものはないがそれで立ち上がったカイトは、あっさりとそう答えて持っていたペットボトルに口をつけた。

「怠くねぇ部活に入りてぇんだよなー、なんかどっか無い？」

「僕が聞きたいね」

「どうせお前も未だ入って無いんしょ？　どっか良いとこあったら宜しくな」

「何故僕が入ってないって――」

「部活見学の時一緒に帰らされたの誰だよ」

「カイトでしたねそうでした」

部活見学あるから途中で帰ろうと思ってたのに、カイトのチャリに乗って来ちゃったんだった。でも声掛けただけで一緒に帰っちゃうお前もどうかと思うが。

にしても、部活か。……どうしよう。

続いてアサキです、放課後です。
部活、ねえ、入る気が無かった所為で結構難航している部活選びだが、此処は妥協出来ないからな。

「ヒコク君っ、部活決まったっすか！？」

「いや全然」

「なら良かったっす！」

「は？」

「ごめんなさいいやそういう意味じゃなくてあの」

フドウは相変わらず僕に耐性がないらしくわたわたしている、は？　って言っただけでこれじゃあな、返事してるだけなんだが。

「えっと、ボクの友達っつか幼馴染っつーんすか？　それがヒコク君をぜひ部活に誘いたいって言ってるんす」

「……お前友達居たんだ」

「酷い！　居るっすよ！」

「で？」

「あ、ええと、ヒコク君授業中とかずっとゲームやってるから、そ

れ話したらぜひ！　って」

「とりあえずプライバシーを他人に漏らしていたことを謝れ」

ゲームやってるから、って何だその部活。ゲーム同好会とかそんなところか？　そういう楽な部活なら入ってもいいかもしれないな……幽霊部員大歓迎なところが良いかも。

「それで、放課後一組来るって言って――」

「シギー！」

「あ、ゼン君こっちっすよー」

噂をすればなんとやら、廊下をトップスピードで走る音がしたかと思えば現れたのは茶色の何かだった。否、茶髪の誰かだった。……茶髪というか、最早金髪だなあれは。

「いんやあ悪いね、化学室掃除とか厄介なものをしていたもんで遅れちまったよ、俺としたことが何たる」

ひとつ分かったことは、また面倒臭いのが増えたということだけだった。フドウより遥か高い身長はきっとマヒルよか高そうだ、なのにフドウに肩を回すほぼ金の茶髪、潰れんぞ。

「ゼン君が掃除とか似合わないっすね！」

「ホントホント、この華麗なるゼン君にお掃除なんて似合わなーい」

うわあうぜえ帰って良いかしら。

「――で、君がヒコク君？」

あ、帰れない。

「まあ」

「ふっ、君が彼の有名なヒコクか、噂は兼々聞いてんよ」

「え、ヒコク君って噂の人なんすか！？」

「二組では大分な」

つい頭を抱えた、二組って……要因が軽く二つは浮かぶんだけど、何なのあいつ等死ぬの？

「んでそのヒコクがゲーマーだなんて噂を聞きゃあ飛んで来るっきゃねーでしょ此れ！！」

「よっ、よく分からないけど流石っす！」

「――で？」

「「……」」

僕はひとつ溜息をついて、目の前で広げられる元気な会話に区切りを打つ。

「用件は簡潔に、面倒臭ぇことは却下、はいどうぞ」

「ちょ、ちょいシギ、こいつホントヒコク君？　うちのクラスのヒコク君と大分キャラ違うんだけど」

「ヒコク君はヒコク君っすよ？　え、何でです――」

「――早く」

「「はい」」

フドウまで返事しなくても良いんだが。茶髪はフドウから離れひとつ咳ばらいをすると、ウインクひとつに僕を指差した。

「我がゲームクリエイト部に入部しないか痛たたたッ指はそっちに曲がらね――」

「うざいキザい似合ってはいるがうざい黙れ」

「ヒコク君!?　ゼン君はこういう人なんすっ、許してあげて!!!」

つい手が出てしまったが本題に移ろう。

「いやあね？　うちの部活って――」

「ゲーム同好会？」

「ゲームクリエイト部！　――は部員が俺入れても四人しか居ない

のよ、二年が三人に一年は俺だけ。三年は居なくて昨年で規定の五人切っちゃったからもう二人入らないと廃部なんだよなー。つー訳でヒコク君とやら、ゲームラブだとシギに聞いたし、ぜひうちに来ないかい？」

「具体的にどういう部活内容か二十文字以内に」

「皆で楽しく様々なゲームをします」

「きっかり二十文字っす……！」

「ぜひ入部します」

「しかも入るんすか！？」

ゲームするだけなら入るに決まってんじゃん。他に好きなこととかないし。

「ちなみにもう少し説明すると、うちの部活入ると自動的に生徒会の仕事付き合わされます、先輩が生徒会員なんで」

「それは手伝いたくないのでもう二人其の二組の奴等部活に道連れ連れてきて良いですか」

「え、マジ？　ヒコク兄とロクジョー？　ゲーム好きな方なら大歓迎だって部長も言ってたし、連れてきてくれるなら俺も楽になって嬉しいからいいよ」

仕事とかしたくないからカイトとユウヤに任すか。つか……ええと、ゲームクリエイト部？　作ってないのにクリエイトとか言って

いいのかな、つかそんな部活に生徒会メンツ居ていいのかな。

「じゃあ先輩に言っとくな。明日の放課後迎えに来っから！　……あ、俺ワタヌキゼン、ゼン君って呼んでくれて構わないぜ☆　で、お前はヒコク……」

「アサキ。ユウヤと被るようなら名前で構わない」

「そっ、んじゃあアサキだな、宜しくしてこうぜ？」

「はいはい宜しくゼン君」

金茶髪（※命名）ことゼン君――僕は呼べと言われた名前で呼ぶからな――はそんなことを言って僕の肩に触れた。フドウにだけかと思ったが、随分馴れ馴れしい輩だな。

「ゼン君、ちょっとアレだけど良い人なんすよ」

「悪い奴には見えないから安心しろ」

ゼン君が去ってからフドウはそう呟いた、アレが悪なら世界は大半悪だろ。

ゲームクリエイト部とやら、明日吟味しようじゃないか。

207＋高校ライフのお供は一体？／後

アサキのままですが。
という訳で次の日、ゼン君に連れられ付属二人と共に部活見学に行くことになった。

「はいっ、此処が部室だよー」

ぶっちゃけ何も話していないカイトと、少し話したけどクリエイトの意味すら理解出来ていないユウヤはまあ放っておくことにしてまずはひとつ質問しようか。

「ゼン君」

「はーい何だいあっ君？」

「あのプレート読んでみようか」

呼ぶなり僕の肩に腕を回してくるゼン君――相変わらず馴れ馴れしい――は、僕が指差した部屋のプレートを見ては不思議そうに首を傾げた。

「何、――生徒会室が珍しい？」

「いや、別に」

珍しくはないけど、おかしくない？

「「アサキ！」」

僕と同じ感情を抱いたらしい背後二人が同時に叫んだ。両方に同時に引っ張られたものだから倒れるかと思ったんだけど、ゼン君も気を利かせていきなり離さないで下さい。

「おいアサキ！　何で生徒会室に連れて来られんだ!?　つーか部活じゃねぇのかよ！」

「そうだよアサ君！　ワタヌキ君とグルで何かしてんの!?　っていうかいつの間にうちのクラスに友達出来てんのさ！」

双方違う疑問なような気もするけど、カイトの疑問には僕だって知りたいんだから答えようがない。知っているのはゼン君だろうから、彼に聞くのが手っ取り早――

「サチー、連れて来たよー」

ちょ、もう入っちゃってるし。

中から声が聞こえた気もするけど、小さくて聞き取れずじまいだったので仕方なくゼン君に続いて入ってみた。

「――……何これ」

そこにあった光景は、普通なようで充分に異様だった。

長机を挟んでソファが二つ、一番奥には立派な机と椅子がセットで置かれている――のに、それを使用している人は誰ひとり居なか

った。
　生徒会室なだけあってその更に奥には給湯室まであるみたいだし、やはり此処は生徒会室……だよな？　うん、やっぱりそうだよ、なのに――その端っこであからさまにテレビゲームやってる方が二人程見受けられるんだが。

「よぉゼン、遅かったな――だッ！　フウカ待ちやがれ！」

「車は急に止まれない」

　やっているゲームはまさかのマリ○カート。何だこれ。

「サチ、フウカ先輩も、折角入部希望者連れて来たんだから今くらいゲームやめなよ」

「バカヤロウ、うちの部活がゲームやらないで何が残んだ」

「ゲームは急に止まれない」

「あっ君達ごめん、これ終わるまでそこ座ってて、この人達動かないから」

　気持ちは分からなくないが、学校内でゲームをやっているこの実態に驚きを越えて寧ろ冷静。使われないソファに座る僕等はその男女の先輩――だよね？――がやっているマ○カーをずっと見ていた。
上手いなー。

「――畜生負けた……格ゲーならぜってぇ負けねぇのに……」

「サチト、負けを引きずってないで早く説明してくれない？　折角この俺が連れてきた有能なる方々がお待ちかねだから」

女の先輩の勝ちで終わったゲームはさておき、正面に座った彼等とそのソファの後ろに立つゼン君を僕は見る。

「そうだったな。えっと、入部希望者だったっけ？　この部活に目を付けるなんて君達流石だぜ、我がゲームクリエイト部は伝統ある部活なのに最近はこう衰退して――」

「ゲームをクリエイトしているのはハヤ一人だけれど」

「フウカはそういうことを言わないように」

「だって本当のこ――」

「はいはいはい！　この話は終わり！」

……何だろうこの人達。

「見てもらった通り、ぶっちゃけゲームやるだけの部活なんだけど、俺達二年は生徒会役員だからそっち手伝ってもらいたいというかぶっちゃけ手伝ってくれないと生徒会長が倒れるっていうか」

「現生徒会長はサチトと違って責任感の塊だから、ゲーム好きで尚

且つ生徒会役員になってくれる人を迎え入れたいと思っている。ちなみに生徒会役員はこれだけしか居ない」

「何か大変そうな部活じゃない？」

「大変と楽は紙一重ってか」

ユウヤとカイトが何か言ってるけど気にしないで話を聞こうか。

「んで、俺が部長のキスギサチトだ、こっちが副部長の――」

「ヤコウインフウカ」

「もう一人居んだけど……嗚呼、さっきから言ってるハヤって奴な。今は生徒会の方の仕事出てるみたいでよ」

「……此処が生徒会室じゃないんですか……？」

「よくぞ聞いてくれた少年！　……ええと」

「ヒコクです」

「ヒコク君！」

いちいちテンションのたっけぇ人だな、まあそれも置いといて。

此処は生徒会室は生徒会室でも旧生徒会室らしく、今はこのゲームクリエイト部の部室になっているらしい。といっても現生徒会室は専ら使われずに、此処で仕事することが多いらしいけど。

「ってことは、キスギ先輩とヤコウイン先輩とその、ハヤ先輩？の誰かが生徒会長ってことですか？」

「その通り！　ハヤが生徒会長で俺が会計、フウカが――」

「書記」

「――って訳だ、……ええと」

「ヒコクですよ、双子です」

「ヒコク君！　え、双子？　マジ？」

キスギ先輩はなんかよく分からないところに喰いついているが僕は気にしない、今は先輩二人の間に顔を出すゼン君の笑顔がうざいってことくらいしか気にしてない。

「……あり、副会長居なくないッスか？」

「よくぞ気付い――」

「ロクジョーッス」

「ロクジョー君！！　人数足りなさ過ぎて一年間副会長無しだったんだ！　だから入部したらぜひ立候補して欲しいんだよ俺達的に」

「うちの学校はうちの部活以外で役員が出ることは決してない、ちなみに私達はじゃんけんで決めた」

「適当かい」

ついツッコんでしまったけど、誰も気にしていないようなので良かった。

「じゃんけんで俺とフウカが会計と書記選んだら、生徒会長が居ないのはキツいってんで嫌々生徒会長やってるハヤは今日は来なさそうだな」

ハヤ先輩か、入学式の時挨拶してたあの人だよな？　遠目に見たけど、真面目そうだなと思ったあの人か。あの容姿を見て、ゲームクリエイト部とかいう冗談みたいな部活所属だなんて誰が気付くだろう。

今日は来ないのか、というのはまあ置いておいて、……この部室来てから色々置いてるな僕。

「キスギ先輩」

「サチトで良いのに」

「サチト先輩」

「わお切替早い、ん？」

「この部活の活動は週何ですか」

「週五です、休日は主に無し。でも参加は自由です」

「生徒会の仕事は」

「主にハヤが仕切るから特に。量が多い時とあからさまにハヤが疲労してる時に俺が収集します」

「……うん、悪い条件じゃない」

「え？　でもよアサキ、副会長とかやる羽目になるかもなんだぜ？」

「そんなんゼン君に任しとけばいい」

「あっ君、ゼン君聞こえちゃってるんだけど」

とにかく、他の部活より楽そうなことには変わりない。良いんじゃない？

「入ります、ゲームやってるだけで良いならこれ程楽な部活はない」

「マジマジ！？　よっしゃあ部員ゲット！　そちらさん二人はどうしますよ」

「入りますけど」

「アサキに着いてきたんだし、アサキ入るんなら俺もー」

「部員三人ゲット、今日は良き日。ハヤにメールする」

という訳で、何とも不思議な部活、ゲームクリエイト部に所属が決定しました。クリエイトなんて絶対しないけど……まあ、楽しそうだしいいよね。

２０８＋場所が変わっても少女の想いは変わりません。

「げ、ゲームクリエイト部？」

昼休み、リョウちゃんに部活のことを聞かれたから答えたら、すんごい驚かれましたユウヤです。

「何よその部活、明らかに変なオーラ漂ってんじゃない」

「んなことねぇぞリョウコー、生徒会長所属の部活だ」

「生徒会長は忙しいからそういうあまり行かなくていい部活に入るんじゃなくて？　――ってロクジョーカイリアンタは何時まで昼ご飯食べてんのよ！」

隣の席のカイト君が口を挟めば、リョウちゃんががなる。俺と同時に食べ始めたはずなんだけどね、食べる量がぱないんだよカイト君は。

「まあまあリョウちゃん、そういうリョウちゃんは？」

「何がよ」

「部活だよ、何入ったの？」

「……」

「未だ入ってねぇとみた」

「五月蝿いわねっ、吟味してんのよっ吟味！」

中学時代は確かバドミントン部だったはずのリョウちゃんだけど、もうバドミントンはやらないのかな？　結んでた長い黒髪も今じゃあ綺麗に背に流しちゃってるし、……さっすが女の子って感じだよね。

「リョウコはバドミントン部じゃねぇの？」

「私は続けるつもりないの、だからどうしようかなって」

「だったらリョウちゃんもゲーム部来ればいいのに、リョウちゃんゲーム出来るよね？」

「で、出来なくはないけど……」

「それいーじゃんいーじゃん、女子ヤコウイン先輩しか居ないんだし、ゲームクリエイト部の皆も賛成してくれんぜ？」

「はいはいはーい、今俺の話してたっしょお三人方？」

「ひゃあ……！！！！」

「あ、ゼン君」

噂をすれば何とやら、リョウちゃんの背後に現れたのは某噂の部活のゼン君だった。真後ろだからリョウちゃんは驚いてるけど、俺達は見えてたからぜーんぜん。

「なななななな、何アンタ誰！？」

「同じクラスのワタヌキですケド。一年同じクラスなんだからヨロシクカトウちゃん」

恐れ戦くあまり座るカイト君の後ろに回り込んだリョウちゃん、俺の方来た方が早かったのに心外な。

「そんなに怖がらなくても、女の子にはヤサシーのよ？　貴女の為のゼンです」

「何処のホストよアンタは！　無駄な決め顔やめなさい！！」

リョウちゃんは初対面から飛ばしてます、ゼン君も初対面からボケ倒してます。……うん、仲良く出来そうだね！

「んでカトウちゃん、何々、うち来んの？　カトウちゃんみたいなカワイー子なら大歓迎」

「かっ、かわいっ！？」

「あー駄目駄目、リョウコには先客居るから」

「先客？　それは惜しいね、カトウちゃん超カワイーのに。一体何処の馬の骨だ」

「一組の馬の骨だよつーかテメェ人の弟馬の骨つったかあぁ？」

「ユウヤ落ち着けお前も馬の骨って言ったっしょ今」

いけないいけない、つい眼飛ばしちゃったよ。ゼン君も若干ビビってるし気をつけなきゃ。

「何だ、カトウちゃんあっ君のことが好きなの？」

「ばっ、だっ、だあああああ！！！！！」

「ごめんカトウちゃん聞かないから正気に戻って」

リョウちゃんは高校に上がって、よりアサ君の話題に弱くなりました――話題に触れなければアサ君とだって話してられるのにね。本人の前だとそうでもなくなってきたのにどうしてだろう？　人間の神秘だよね。

「でっもまあ、カトウちゃんの恋なら俺は応援するよ、ゼン君ヤサシー」

自分で言うかなこの優男は。茶髪で優男っていえばアスカもそんなだけど、全然人種が違う気がする。多分此の話をアスカにしたら『似ても似つかな過ぎて虫酸が走りますね（笑）』くらい言ってくれちゃいそうだもん……うわあ容易に想像出来て怖い。

「え、えと、ありが、とう」

「どいたま。……で、部活の話も丁度良いじゃん、あっ君も居るし、サチとかフウカ先輩も女子部員大歓迎だと思うし」

にっこりと笑みを浮かべた後には人差し指を天に向け、此の見た

目は不良に近い長身はそう言った。

「ゲーム出来る女の子って貴重だし、是非是非だね」

「ほんと？　じゃ、じゃあ、入部……しよっかな」

照れた様子を見せながら、リョウちゃんは小さく首を傾げそう言った。やった！　これでまた部員も増えた訳だ！

「よっしゃ！　そんじゃ改めましてヨロシクカトウちゃん、俺サチに報告してくらあ！」

「え、ちょ、もう授業始まるわよ！？」

「サボるー！」

「ゼーン、次ハヤサカの授業だぞー？」

「――五分で戻る！！！！」

シュタッと格好良く出てった割になんと潔くないんだゼン君。一階下の二年の教室にひとっ走りしに行ったゼン君を三人で見遣り、元気な不良だなあと思ったのは絶対俺だけじゃないと信じたい。

「迷惑じゃ、ないかしら」

「は？　今大歓迎って――」

「そうじゃないわよロクジョーカイリ！」

「アサ君なら多分迷惑だなんて言わないよ」

「……そうかな？」

「うん！」

だってアサ君、基本他人気にしないもん。――流石に口にはしなかったけど。ゼン君じゃないけど、俺ってばヤサシー！

209＋理解されない暇人。

マヒルだ。
GWってんで自宅に帰って来たんだが、誰も居やがらねぇ。何だよ、去年は嫌って程顔付き合わせてた癖して両親帰って来てねぇのか？
居やがらねぇ、っていうのは文字通りそういうこと。鍵掛かってっからインターホン押したのに双子すら出て来ないってどういう。

――Ｐｒｒｒ．．．

……あれ、電話鳴ってね？
俺は慌てて自前の鍵を使えば自宅に入り、靴を脱ぎ捨てて受話器を取った。

「もしもし？」

『ロクジョーですけど、……ってあらやだマヒル？　何であなたが自宅に居るのよ』

「居ちゃ悪ィのかよおい、自宅なんだから良いじゃねぇかよ」

ウミだった、慌てて損した。

『マヒル？』

「で、何用、あいつ等に用事なら携帯に掛けりゃ良いだろ」

何かを悟られた気がしたが気にせずいこうか。

『嗚呼そうそう、二人の携帯にかけても繋がらなくてね？　前にカイちゃんが二人は携帯を携帯してないから、って聞いたから家に掛けてみたんだけど』

「生憎居やしねぇよ、ちなみに携帯はリビングに放置されていますが」

廊下で話すのも疲れるからとリビングに移動した俺は、机上にばらばらと置かれている赤と青の携帯を見てそう言った。二人して置いて行くなし、何なんだあいつ等。

『……携帯を携帯しないで何が携帯なの？』

「言っとく」

『でも、携帯置いて行ってるってことは直ぐ帰って来るわよね～、とりあえずマヒル、用件だけ聞いておきなさい？』

「へいへい」

『今度大学のことで一週間くらい家に帰れないから、出来ればその間カイちゃんをお世話して欲しいのよ』

「カイト君を？　珍しいな、お前が一週間も家空けるなんて」

ウミはそう言うと少しの間を空けて、何やら考えてから口を開く。

『仕方ないじゃない、レポート破滅的だったんだから』

理由が寂しいなお前。要するに特別授業といった所か、カイト君を一人にするくらいなら死ぬと言い兼ねないウミだが、流石に其ればかりは逆らえない。頭は其処まで悪くないはずだが、集中力と素行がなぁ……。

「でもよ、カイト君ももう高校生なんだし、一人にしても大丈夫なんじゃねえの？　過保護も程々にしないと嫌われるぜー」

『あらマヒルったら、その言葉、そっくりそのままお返しするわよ？』

畜生、反論出来ねぇかもしれん。

『でもね、私も一人にして大丈夫かなとは思ったのよ。アサキ君と違ってカイちゃんご飯自分で出来なくもないし』

「あれ、反論出来ないぞ？」

『けど一週間はキツいかな～、って。というか私が何も言わなくてもカイちゃん遊びに行っちゃいそうだから先に一言言っておきたかったの』

「……カイト君なら確かにそうしそうだよな」

五分弱で此処まで来れる訳だし、ユウヤ俺に似て主夫状態だからな、喜んで世話するだろうさ。うちの男性陣はアサキを抜いて皆料理出来る訳だが……こう思うとアサキってどうしたんだろうか。

『という訳で用件はそれだけ、――と思ったけどついでにあなたに話があったんだったわ』

「え、良いけど」

『未だ言ってないんだけれど』

「どうせレポート関連の話だろ？　今から行こうか？」

『……はあ。ねぇマヒル、あなたはどうしてマヒルなの？　暇なの？』

「え？」

何処のロミオの話だかは知らないけど、何なんだろう、今のは褒められたのか？　よく分からないけど、しゃあないからウミの家にでも行こうか。

ちなみに、暇か暇じゃないかと聞かれれば、――相当暇だから此処に居るんだけど。

「ただいまー……ってあり、マヒル兄の靴」

「お帰り、つーかただいま。俺今から出掛けっから、それとお前等ちゃんと携帯持ち歩けよー、行ってきー」

「行ってらー。……マヒル兄は忙しいねえ」

「マヒルだから」

理解はされない暇人。

２１０＋時を駆ける関係。

ぷるるるるー。

ごめんなさいユウヤです電話が来ました。キッチンに居たからか、一瞬何の音なのか分からなかったけれど。

ただいま夕食作成係中、マヒル兄はせっちーの家に消えました。

「アサキー！　電話とってー！」

「仕方ない」

リビングでゲームをやってるだけなんだから渋る理由もないだろうに、仕方ないとか言うのねあー君。

「――もしもし、……あ、……そう、どうしたの」

リビングの子機をとったアサ君は、誰かと会話をしている。知り合いだったのかな、父さんとか母さんら辺？

「違うよ、其れは未来の話だよ」

――何の話？

「……え？　確か、……過去に戻って阻止したんじゃなかったっけ、……うん、……うん」

凄く気になる会話なんだけど、え、過去に戻ってって……一体何の会話してんのさ、ねえ。

「それで野球を――」

「何で野球の話になるの！？」

ついツッコミを入れてしまった……！　アサ君は会話を止めて怪訝そうな表情をしたけど、直ぐ「それじゃ」といって電話を切った。

「どしたのユウヤ」

「え、いや、未来とか過去の話から何で野球の話になったのかな、と」

「だってアニメの話だもん」

「……嗚呼」

どうやら電話の相手は何処かのヲタクだったらしい。……家電に掛けてくんなよっ！

「ちなみにミトウだったけど」

「ミトウ……セイタ君！？　びっくりした！　今ちょっと懐かしいとか思った！！！！」

「まだ一ヶ月ちょいだろ」

ていうか、俺からしてみれば中学の友達とアサ君が未だ関係があったことに驚きだよ。ぷっつんなるかと思ってたから――

「お兄ちゃん嬉しいっ！」

「黙りなさいお兄ちゃん？」

「はい」

相変わらず笑顔が素敵だよマイブラザー！　威圧感だけで人殺められるんじゃないかな！！

「あは、でも中学の友達から電話来るなんてアサ君良かったね」

「一方通行だけどね」

「其れは酷いね」

少し喜んだ俺が馬鹿だった、なんて相変わらずなんだろう。

でも、結局何のアニメの話だったんだろうなあ……？

211＋料理と数学は所詮同じ。

「あーあーちゃん！」

「ッ……やめてくれます母さん」

部屋でパソコンにかじりついていたら、背後から抱き着いて来た母親に気付けなかったアサキですが。

「いや！　ママに敬語は厳禁よアサちゃん！」

「だったら高校生の息子の背後から抱き着かないでよ、そしてああちゃんって何、あーちゃんの伸ばしパターン？」

「あらやだアサちゃん、あなたもマヒルみたいなこと言うの？　マヒルだって昔はまー君って呼ばせてくれたのに……」

何時振りに見たであろう母さんは頬に手をあて、はあ、とひとつ溜息をついた。……話があらぬ方向に行ったな、戻そう。

「で、何か用？」

「そうそう。――はい問題ですっ、今日は何の日でしょうか！」

此の人本当にユウヤの母親だな……とかなんとか考えてしまう程のハイテンションに嫌気すら差す訳だが、まぁ聞かれたなら答えてやろうじゃないか。

「五月の第二日曜日だけど」

「そうなのよっ、母の日なの！」

「言ってないけど？」

勝手に話が進むところ悪いけれど、少しも口にしてないから。

「折角の母の日だしね？　アサちゃんと一緒に何かしたいなぁ、なんて」

「ユウヤかマヒルに頼めばいいじゃん」

二人ならリビングに滞在中でしょ、わざわざ僕に何を言う。

「二人は何時でもやってくれるから良いのよ、アサちゃん普段何もしてくれないしー？」

「息子なんてそんなモンだ、ユウヤは例外、マヒルは嫌々」

「んもうっ、良いじゃない良いじゃない！　ママの日なんだから少しくらい構ってー！！」

――本音漏れてますが。

母さんは二段ベッドの下、即ち僕のベッドでばたばたと駄々をこねだした。何なんだ此の人は本当にもうどうにかして、何歳？　もういい歳だったよね？　齢幾つ？

「あーさーちゃーんー！」

「……」

「ママを構いなさーい！」

「……分かった、分かったから。人の布団を其れ以上ぐっしゃぐしゃにしないで」

「ほんと！？　じゃあママの一緒に――」

「切替早ぇよ」

ガバッと勢い良く起き上がりやがって。良い笑顔で此方を見れば人差し指を立てて、

「――お料理しましょ？」

そう言った。

「断る！」

だから直ぐさま断った。

「何でよ！！　たまには良いじゃない！！」

「たまにだから駄目なんだよ、僕の料理スキルががったがたなの知ってんでしょ」

「知ってるからに決まってるじゃない。ユウ君やマヒルとお料理したって教えること皆無よ？　寧ろ……私より……料理上手いんだか

ら……」

迂闊ながら落ち込ませてしまった、どうしよう。ベッドからやっと出て来たっていうのにうなだれてしまった母さんを見て、僕は何を言おうか迷ってたんだけど、次の瞬間には輝かんばかりの笑顔で僕を見て、

「――という訳で、Ｌｅｔ' ｓ　ｃｏｏｋｉｎｇ！」

と告げた訳だ。何がという訳なんだよ本当に、去年の父の日も料理させられた気がするけど何なの此の人達馬鹿なの？

此処はひとつ、言っておかねばいけないな。

「母さん」

「ん？」

「知ってる？　数学に限らず算数においても、正数にマイナスをかけてしまえば零以下なんだぜ？」

「……それで？」

「料理においても同じく、僕はマイナスでしかないのさ」

「アサちゃんそんなに落ち込まないで！？　ほ、ほらっ、中学の時に朝ご飯作ってくれたりしたじゃない！　美味しかったわよ！？」

「あの時までさ、二度と包丁なんて持ちたくない。調理実習ですらカイトが包丁持たせてくれなかったっけ……」

「アサちゃんかむばっく！」

ふふふ、――おっといけない過去の悲しかった出来事にトリップしていたようだ。慌てた母さんの声で我に返った僕は、何か言おうとする母さんを見てひとつ溜息をついた。

「じゃ、下行こ」

「ふぇい？」

「夕飯作るんじゃなかったの」

「え、え、だってアサちゃん今――」

「まずくなったって知らないよ、ほら早く」

「……はううう！！　ママはアサちゃんのこと愛してるわー！！！！！」

「気持ち悪いわ馬鹿親」

やりたくないけどこのままじゃベッド大惨事だし。

仕方ない、たまには良いかな、――だって、母の日なんでしょ？

212＋謎に包まれる生徒会長。

「んでは諸君、本日の部活動を開始する！」

旧生徒会室に集まった俺達にそう言ったのは部長ことキスギ先輩で。ソファに座ってそれを見ているは俺含む一年生だ、カイリですけど。

「其の前に一言。ごほん、――今年の一年生入部数は五人、何とも嬉しきことかな！　ぶっちゃけゼン以外望み無ぇかと思ってたから嬉しいったらありゃしない！　こんだけ居るならもうゼン要らないかなみたいな」

「さっちん、愛しのゼン君も泣いちゃうわよ」

ゼンが冗談を言うのはさておき。

「今日は不在だがまさか女子部員が入るとも思わなんだしな、見て分かる通り副部長も喜んでおられるぜ！」

キスギ先輩はんなことを言って、お茶汲みに徹底しているヤコウイン先輩に視線を向ける、――相変わらず表情が読めない先輩だ。

「嬉しい」

わざわざ口で言ってくれちゃったよ、ちなみにリョウコは用事で居ないっつー訳。

「そしてもう一人、我がゲームクリエイト部の会計兼我が校生徒会長ハヤからも一言授かっている！」

「生徒会長さんって苗字何だったっけ？」

「僕が知るか、入学式寝てたよ」

双子がそんなことを言ったのはスルーされ、キスギ先輩はただ一言、俺達を指差しながら言った。

「“キスギとヤコウインを宜しく”――だ、そうだ！」

「「――任されてる！！！！」」

つい叫んじまったけど、ユウヤも同じだったらしく立ち上がってた。ゼンはけらけらと楽しそうに笑ってるけど、生徒会長さんって一体……。

「うちの会計は忙しいからなー、あいつが居なかったらうちの生徒会は回らないし」

「ハヤはうちの生徒会の書類仕事を、全て一人で回している」

「え、ちょ、大丈夫なんスかそれ、先輩達何の為の生徒会役員……？」

「私は力仕事専門、ハヤが動くの苦手だから」

「俺は飽きるから」

なんつー生徒会なんだよ……書記と会計のやる気の無さが――ってキスギ先輩今飽きるって、此の人生徒会の何担当してんだよ。

「生徒会長、動くの苦手って……」

俺が心中でツッコミを入れいる隙にアサキが呟いた。確かに動くの苦手とか馬鹿みてぇなことだとは思うが、動くの嫌いなお前にゃ生徒会長さんも言われたかねぇと思うけどな。

「嗚呼、そりゃあだって――」

バタンッ！

「キスギッ！！」

と、アサキの呟きに口を開いたキスギ先輩を遮ったのは、部室の扉が勢い良く開く音、そして見知らぬ先輩がキスギ先輩の名を呼ぶ声だった。

「あん？　今は神聖なる部活動中だぞ？」

「いや、だって――クロガネが」

不満そうなキスギ先輩、けど相手の先輩がそうやってとある名前を口にした途端、キスギ先輩は開け放たれた扉へと向かって行った。

「ったくあんの馬鹿は……フウカ、ちょい行ってくらぁ」

「いってらっしゃい」

そしてその先輩共々、何処かに行ってしまった訳だが。クロガネ、とか言ってたよな確か。

「あ」

「ん、どしたアサキ」

「思い出した」

ぽん、と手を叩くかのようにアサキが呟く、今日はテンションが低いようで――何時も低いけどよ――声がちっさいけど、そんなテンションのままで続ける。

「クロガネハヤ、生徒会長の名前だ」

「其の通り」

そういうことかー……、キスギ先輩は、ハヤ先輩ことクロガネ生徒会長関連で出てったんだな。ヤコウイン先輩もこくこく頷いてるし。

「サチトの役目はハヤのお守り」

「お守り？」

「ハヤは多分――貧血でくたばってる」

……はい？

「人一倍真面目だけど、ハヤは重度の貧血持ち。よくぶっ倒れる」

「よく、って？」

「無理をしなければ問題無い――ことも無いけど、無理をするから直ぐにばたんきゅー」

可愛くばたんきゅー、とか言ってくれちゃうヤコウイン先輩だけど、……其れって問題じゃね？　っていうか何か小声で聞こえた、聞こえたけどスルーだ。

「だから、ハヤのお守りがサチトの役目」

「嗚呼……そうなんスか」

入学式でしか見たことない生徒会長さんの印象が、此の人達の手によって変わってきてしまっている。

ホント、早く部活来ないかな、生徒会長。

213＋何処も彼処も経緯は同じ。

用事で教室を離れていたら、僕の席に誰かが居た、アサキです。

「おっかえりぃあっ君」

「お帰りっす！」

ゼン君だった。どうやら後ろのフドウと話していたようで、ひらひらと僕に向かって手を振っている。ていうか其処退け。

「はいはいそんな睨まなくとも退きますよー、ゼン君ヤサシー」

「元から僕の席だ」

取り返した席に着けば、丁度ハヤサカ先生が教室に入ってきた。あの人がチャイム前に入ってくんのも珍しいけど。

「あ、ハヤサカ」

ゼン君は先生にも態度が変わらないらしく、やっほう、とひとつ声を掛ける。が、当然無視なハヤサカ先生、無視というか返事しないだけかな、視線はこっち来てるし。

「相変わらず愛想無いな、ハヤサカって。あ、其れとも何？　此の俺の若さなる美しさに見惚れた？　まぁ同性も見惚れる美しさって――」

「ヒコク君、この歩く猥褻物を除去して下さい」

「へーい」

「ぐふっ！　ちょいあっ君っ！！　顔面マジ殴りはなくない！？」

別にマジ殴りじゃないけど、個人的に腕の威力はそんな無いし。マジなら蹴るし。

「大丈夫っすかゼン君！」

「シギー、此の人野蛮ー、顔殴ったぜ？　男の命なのに……しかも裏拳」

僕からすればうざったい限りだけど流石は幼馴染、心配した様子でゼン君に抱き着かれているフドウ。フドウが座っている所為もあってか潰れそうだ。

「自己矜持（きょうじ）は程々に、ワタヌキ君」

「矜持なんかしてねぇしー？　事実ですし？」

「――ヒコク君、矜持って何すか……？」

「馬鹿は黙ってろ」

ハヤサカ先生は其れはもう寒々しく呟いた。此の人の餓鬼嫌いも筋金入りだな、ちなみに矜持の意味はお父さんかお母さんに聞いてみましょう、分からないようなら馬鹿にしましょう。

「でもハヤサカ先生」

「何ですか、フドウ君」

「ハヤサカ先生は子供が嫌いなのになんで教師になったんすか？」

――シン……。

教室が一瞬にして静まった。皆が此方を見ているとなれば……うん、馬鹿な質問だなフドウ。

「……え、え、何か変なこと聞いたっすか？」

「シーギ、カッコイー幼なじみからの親切な一言、――こんのＫＹ！！」

そしてフドウはそのままずるずるとゼン君に引き摺られて教室を後にした。

確かに今のはＫＹだった、皆が居る中でそんなこと聞いて、ハヤサカ先生特有の冷徹ブリザードに睨まれたら――って待て、あれ、今の此の状況、その視線の矛先が――

「――……ヒコク君」

はい此方ですね分かります。

「何ですか」

「今何故教室が静かになったんでしょうね」

「さぁ、はっはっは」

僕は何も知りません、ワタシニホンゴワカリマセーン。

一人教卓前の自席に取り残された僕の空笑いが聞こえたのか、クラスメイトは再び談笑を開始する。そうだ、話しておけ、何事も無かったかの如くな……！

「――別にありませんけどね」

後でフドウを如何にしてやろうか、とか机に向かい悶々と考えていたら、溜息混じりにハヤサカ先生の声がして、つい顔を上げた。

「……僕に言ってます？」

「貴方以外居ないじゃないですか、独り言だったらイタいでしょう」

あ、笑った。

「私が子供嫌いな理由なんて、ただ餓鬼が餓鬼だからってだけですよ。自分一人じゃ何も出来ない癖に意気がって、一人だけで生きているみたいな顔しやがる癖に勉強なんて少しもしやがらない、だから嫌いなんです」

苦笑ながら笑った――ように見えたんだが、即座に戻った。鬼畜

教師め……！　そしてなんか耳が痛い気もする。

「教師になった理由なんて、たまたま数学が得意だっただけですから」

持参してきたプリントの束を整えながら、ハヤサカ先生は「フドウ君何処行ったんだか」と扉に目を向けた。たまたま得意だったから……昔に聞いた覚えがあるな、嗚呼、サクライ先生が言ってたんだっけ。数学教師は皆そんななのか？

「先生って」

「はい」

「子供というより、生意気な人間が嫌いなんですね。初日であんなこと言っちゃうし」

「まぁ、そうとも言います。でも初日でああ言ったのは単純に――」

授業開始のチャイムが鳴った。

「――教師が敵で居れば、生徒は負けじ真面目になるでしょう？」

チャイムに被って聞こえた台詞が何とも意外な一言で、若干目を見開いた僕。此の人、実は豪(えら)い策士なんじゃ――。

「はい、授業始めますよ。週番は休み時間中に黒板消しなさいと毎回言ってるでしょう」

……でもまあ、今は黙ってようか。僕だけが知っている内は、クソ真面目な先生を貫き通せば良いよ。

でもまぁ――ユウヤ達に知られたら、絶対その上っ面もぶち壊れるんだろうから。

２１４＋人が変わる為に必要なのは努力。

「√2がひとよひとよにひとみごろ、だから1．――」

「ユウヤ？」

「の、お帰りマヒル兄、休みの度帰って来てるなんて暇だよね」

ユウヤです！　高校生になって初めてのテストが間近ってことで勉強してるんだぜ☆　――なのに。

ばさっ。

「――ど、どどどうしたユウヤ……！？　勉強なんかして、……風邪！？」

どつきたくなったのは俺だけではないはずだよ、うん。部屋に入って来るなり荷物落しやがって、俺を何だと思ってるんだか！

「風邪じゃないやい！　俺は高校入って変わるんだっ！　アサキにだって負けないんだーい！」

「あ、いや、悪かった、確かに不謹慎な発言だったな」

マヒル兄は苦笑して俺の方にやってくれば、物珍しそうに俺の机の上を眺める。なっつかしいなー、なんて言ってるマヒル兄だけど、やらせりゃ全部出来ちゃうんだろうなー、と。……畜生ずるいぜ。

「んで？　アサキは？」

「クソ真面目な顔して朝っぱらからカイト君家向かったけど」

「あー、ゲームしに行ったのね」

『俺が悪の手から世界を救う』とか言ってたけど、たまに本当に思うよ、あいつ電波なんじゃないか、って。

「でもさーアサ君絶対ずるいよ、何でそんななのにテスト出来んだか」

「授業中にやってるとかじゃねぇの？」

「寝てましたがあの人」

「そうか、お前が授業をよくサボっていることはよく分かった」

やべ、口が滑った。つーか兄貴怖いよ笑顔が。

「授業をサボってるっつー話は後にして――アサキは記憶力が良いんじゃねぇか？」

「瞬間記憶能力！？」

「アニメ又はドラマの見過ぎだよお前は」

「はい」

仕方ない、とりあえず話を聞くことにしよう。

「瞬間記憶能力ってアレだろ、一瞬で覚えるってやつ。そういうんじゃなくて、一度入ったモンが抜けにくい……って感じなんじゃねぇかな、アサキは」

「ふーん――俺は先ず入らないからよく分からないけどね」

「重症過ぎるぞお前」

ちなみに俺は其のタイプだ、と付け足すところを見れば、アサ君もそうなんだろうな、と一度頷いた。マヒル兄とアサ君のタイプは何だかんだ似てるからね、天才型……畜生血の繋がりが俺にも欲しい！！（※血の繋がりはありません）

「へーんだっ、俺にはそんなミラクルな技無いから地道に勉強するもん！」

「ははっ、頑張れユウヤ、其の意気だ」

「――という訳で分かりません教えてマヒル兄！！」

「はいはい」

苦笑しつつも手伝ってくれる兄貴が大好きだ……！！

頭良い人が側に居ないと何にも進まないんだってば！　其ればっかりは中学の時から何も変わらない俺だった。

215＋経過的廃人。

お久しぶり、というのでしょうか、いえ、俺からしてみれば何のことだよって感じなんですけどね、アスカです。

「……」

「……」

高校生になってから毎日、又は二日に一度はメールが来るようになったユウヤと久しぶりに会ったのは良いんですが――さっきからユウヤが机にぐでって動きません。ただの屍のようですね。

「ユウヤ、どうしたんです？」

「うぇー……」

さっきから此の調子なんです、何かあったのは一目瞭然なんですけど。……疲れてるんでしょうか？

「ユウヤ？」

「うー……」

「――疲れてるなら帰っても良いんだよ？　俺は別に、寂しくなんて、ないから――」

「寂しい思いさせてごめんねアスカっ！？　俺は何時でも元気だよ！！」

相変わらずのちょろさについ苦笑が漏れました。

「ふふっ、大丈夫ですよ」

「そうだよねそうだよねアスカに久しぶりに会えたのに高校のテストの難易度の高さに打ち沈んでる暇は無いよねっ！　テストなんてどうでも！」

「其処は少し考えてて欲しかったかもしれませんがね」

満面の笑みで言われるものだから強くは言えませんでしたが、高校からテストは急に難しくなりますからね。それじゃなくても中学の時アレだったユウヤとしては、大変なんでしょう……。

「アスカはもうテストやったの？」

「いえ、俺は来週からです。ユウヤは終わったんですか？」

「ううん、明後日までだよ？」

何でテスト期間中に会いに来ちゃったんですかね此の人は。嫌という訳ではありませんが何だか複雑ですよ。でもまぁ、ユウヤらしいとは思いますけれどね。

「でも、本当高校生って大変だよー。アスカんとこはもっと大変なんだろうけど」

「そうでもありませんよ。私立なだけあって皆さん頭が良いですけど――所詮は頭だけの人間ばかりですから」

「うわあ流石はアスカだね！　笑顔が眩しいよっ！」

「ふふっ、ありがとうございます」

ユウヤ以外の人の台詞なら確実に褒められてませんけど、ユウヤなら絶対に褒めてますからね、純粋さって重要です。

「とまあ冗談は此のくらいにするとしましても、身体を壊さない程度に勉強、頑張って下さいね」

「おう！　中学みたいにだらだらやってたらヤバいからねー、留年なんてことにならないよう頑張るつもり」

「アサキ君にも迷惑かけないように頑張ってね」

「きょ、極力頑張るよ……！」

何時までもアサキ君に頼りっぱなしじゃいけませんしね、俺が助けてあげられる機会も少ないし……本当に頑張って欲しいものです。

「――やべ、もうこんな時間だ、アサ君に殺される」

その後少し話していれば、ユウヤが何とも物騒な一言を呟いた。

冗談に聞こえないところがアサキ君クオリティですけれど。

「飢えたアサキ程怖いものはないよ」

「怖いんですか？」

「色んな意味でね。ゲームとかしてるとそのまま飢え過ぎて寝てる感じ」

「あははっ、相変わらず過ぎますよ」

アサキ君、本当に変わりませんね。何よりですけれど。

そんなアサキ君に電話をすると言ったユウヤを見つつ、俺はとりあえず帰る準備をしようと携帯を手に取っては、既に遅い時間なんだなぁ、なんて考えてみたり。友達と居ると、時間の長れなんて忘れてしまいますよね。

「あ、ねえアスカ、久しぶりにうち来なよっ！」

「……どうしたんです、急に」

「不機嫌アサ君がご飯を求めながら、別れが惜しいならアスカ君連れて来ーい、って」

既に不機嫌なんですねアサキ君。

「――じゃあ、お邪魔しますね」

でも、まぁ、久しぶりに行きたいなっていうのも事実なので。
何時までこうやって遊んでられるかも分からないですから、行ける時に行こう、そう思いました。

216＋謎が深まる招待状。

こんばんは！　ユウヤですよ！
テストが終わって色々吹っ切れたユウヤですよっ！　高校生になったんだし少しは頑張ったつもりなんだけどもうどうなったって知るかーい！！　本当に中学から何も変わってないよね、俺。

「ゆっ君ゆっ君」

「ん、何だいゼン君？」

呼び方はアサ君に合わせて“ゆっ君”になったらしいゼン君がひょこひょこと現れて、へらへらと笑いながらこちらにやって来た。

「テスト終わったらサチに皆に知らせろって言われてたんだよねぇ。こんのゼン君を体よく使うなんて幼馴染の特権よ」

最近知ったことだけど、ゼン君と部長は幼馴染らしいんだよねー、ってことはシギ君と部長も知り合いなのかな？　今度聞いてみよーっと。

「ふぇー、で？」

「……最初は似てねぇとか思ったけどそのあっさりした物言いあっ君そっくりだわ」

「で？」

「嗚呼、ええと、月末に部活の新入生歓迎会やるってよ」

ふ？　そんなことやるの、あの部活。そんなに活発に行動する部活だったんだ、俺びっくり。

「ふうん、歓迎会……って何やるの？」

「サチ曰く、部内対抗ゲームバトルするって」

「それって普段と如何違うの？」

「それは聞かないお約束☆」

きらっ、と効果音でも付くかの如くゼン君が爽やかに言えば、要するに普段と何も変わりないことはよく分かった。ゲームやるだけならアサ君も行くかなーなんて思いながらも、何処でやるのか考えていたら。

「ほい」

にゅ、と。ゼン君が何かを差し出して来た。

「何コレ」

「歓迎会への招待状」

受け取ったら二枚あった。アサ君のと俺のみたいだけど――何だろうコレ、やけに本格的なカードな気が……。

「場所はフウカ先輩の家で、一泊二日だから宜しくー」

「え、ちょ、泊まり、なの？　何か色々分からないんだけど！」

詳しくは後でサチトに聞いてくれー、なんて漏らしてゼン君は行ってしまったんだけれど。俺は改めて其の招待状を凝視すれば、ま、いっかと色々割り切っておく。

テストがあんなだったのに考えたって無理だよね、さってとりあえず一組行って、とっととお家に帰りましょー！

217＋寂しい子は何時だってめげない。

「ひ、ひこっ、ヒコク君！」

「あ？」

「え、あ、何でもないっす……」

自分から呼んでおいてそれはないんじゃないかフドウ、何か意気込んだ様子だったのに何なんだか。アサキです。何落ち込んでんの此の馬鹿。

「何でもないなら最初から呼ぶなよ」

「え、いや、何もないっていうか何もない訳じゃないんスけどヒコク君機嫌悪そうですし今は時期じゃないというか……」

「高校生に時期なんざ考える頭ねぇだろうが、特にお前には」

「そうっすよね！　あははっ！　……はあ」

相変わらずこいつは面倒臭いけど、見てて飽きないから良しとしよう。

今は放課後帰宅中、部活が無い&カイトが諸事情により休み――要するにお得意の風邪で――なのでこいつと帰ることになったのはいいんだけど、相変わらず面倒臭い。

「で、用件は」

「嗚呼、ええとっすね……言って怒らないっすか？」

「言ってみないと分からないけど、僕の沸点はそんなに低くはない」

ゲームか金に関わらなければそんなに怒ることはないんだけど。

後最低限のプライバシー。

フドウは更に意気込んだ様子を見せれば僕を見て、

「じゃあ言うっす！　えと、あのですね、あー、そのー」

とか何とか吃り続けていたのがうざかったので一発蹴り飛ばしました。

「あうっ！ちょ、今いった！！」

「早く言わないともう一発蹴るけど？」

「言うっす！　言うから蹴るのは止すべきっす！！」

ふん、初めからそうすれば良いものを。

「だから、あの、――此の後……暇、っすか？」

「は？」

何時もと変わらぬおどおどとした態度で何とも普通なことを言うものだから、つい呆れてしまったのだが。暇か暇じゃないかと問われれば……

「家でファミリーコンピューターが俺を待っている」

「い、一段と古いゲームっすね」

今は其れにはまってるんだから仕方ない。でもまあそれは後にしてやっても良いが、暇だと如何なるんだ？

「あの、実は……こ、此の後寄りたい所がありまして」

「ふうん、寄れば？」

「だからあのっ！　ヒコク君も一緒にどうかと……！」

「何処」

「本屋……」

「良いよ」

「本当っすか！？」

「え、どっちでも良いけど。行くの、行かないの？」

「行くっす！！」

フドウは意気揚々と手を上げて、輝かんばかりの笑みをみせた。

そんな大袈裟な。

「ボク、あんまり友達とかと出掛けることがなかったので、ちょっと嬉しいんですよね」

「嗚呼そう。……ゼン君は？」

「ゼン君は基本あっちから誘ってくれますもん」

唯一居た友達がゼン君だった、と解釈すべきか否か。……寂しい、寂し過ぎんぜ此のちっさいの。

「それじゃあ行きましょうヒコク君！」

照れたようにして己の過去を暴露した訳だが、今はもうどうでも良いのか笑顔で天に拳を掲げていた。

「だが断る」

うざかったのでそう言っておいた。

「ええ！？」

「冗談、行くよ」

「え、冗談？　……行くっす！」

まあこいつを弄ぶのはまた今度にして、僕は先を歩いていたフドウを追い抜くようにした歩き出した。

さーて、今日の夕飯何だろう。

218＋初めまして会長さん。

「こんにちはー！」

「ちわーっす」

ユウヤです！　最近放課後が楽しみなんだよね！　皆でわいわいやってるのが好きだから、部活って名目で皆でゲーム出来るのはすっごい嬉しい！

って訳で今日も今日とてカイト君と一緒に旧生徒会室にやって来た――のは良いんだけど。

「静かに」

中に居たのはフウカ先輩だけで、他は誰も居なかった。……いや、違う、もう一人居る。生徒会長が座る様な机――まあ元生徒会室だしね――にて、誰かがうつ伏せていた。……誰？

「ハヤが寝ている、びーくわいえっと」

「何で英語で言ったんすか先輩」

口元に人差し指を突き立ててそう呟いた先輩に、カイト君がそうやって言ったけど、びーくわいえっとってなんて意味だろう。……聞いたら馬鹿にされそうだから帰ってからアサ君に聞こう、アサ君にはもう馬鹿にされ慣れたからいいんだ。

って、驚き忘れたけど生徒会長さん？　部活来るの初めてじゃない？　俺はそろーっと其方に行って顔を覗こうとしてみたけど、上

手い具合に腕で見えないやー。

「ユウヤ君、ハヤを起こさないように」

「ふーい」

そっか、生徒会のお仕事で疲れてるんだもんね、俺は近くのソファに座って、

「起こさないようにしたいなら、フウカ先輩もゲームの音量下げればー？」

それだけ言っておいた。

結構大きいよ、うん。

「おーっし、俺の優勝だな！」

「キスギ先輩強ええ！」

「俺は格ゲー最強だぜ☆」

生徒会長が起きないまま、珍しく全員が集まった。計八人って訳か、こう見ると結構多いね。

サチ先輩とフウカ先輩、それにカイト君がテレビ使って格ゲーしてて、ゼン君とリョウちゃんは俺とソファ一杯使って寝転がってるアサ君がやってるゲームを覗いてる。ゼン君はこっちの覗いてるんだけど、リョウちゃんってばあんな近くでアサ君の見てるのに案外普通だよねぇ。

「うっわ、今アンタすっごくえげつない手使わなかった？」

「勝てば良いのさ、勝利こそジャスティス」

本人無自覚なんだと思うんだけど。……言ったら面白い程反応しそうだけど黙っておこう。

「よっし、またもサチト様のかっちぃ！」

「サチトめ、無駄に腕を上げおって」

フウカ先輩は負け過ぎてどっかの玄人みたいな口調になってるし。カイト君はそうでもないけど「アサキー、パス」とか言ってコントローラーを更なる玄人に受け渡している。

「ふっふっふ、次はアサキが相手かな？　俺に勝てるとでも？」

「勝てるとでも、でなく、勝つんですけど」

ゲームのことになるとなんて頼もしいんでしょうか此の弟は。不適な笑みを浮かべるサチ先輩と無表情と見せかけてニヒルに笑うアサ君は、火花を散らすでもなく二人で格ゲーに向かってしまった。やってるのゲームなのに何で格好良く見えるんだろう。

「俺もやろう」

『え？』

「あ、」

何人の声が被ったかは分からないけれど、皆の背後からした声にフウカ先輩がコントローラーを渡したのが分かった。

「げ、ハヤやるんかい、まだ寝てりゃいーんに」

入学式の日に聞いた声と同じく響いた聞き覚えのある声、だけど凄く久し振りに聞いた声が俺達の横にやって来た。

「お前が下級生相手に大人気ないらしいからな？　少しは身の程を弁えさせてやろう」

「ふっ、ぜってー負けねぇ」

「第一な、お前達俺を寝かせる気があるならもう少し声を抑えろ阿呆」

おお、どうやら生徒会長さまも参加決定みたいだ……！　溜息混じりの其の声が何だか様になっていて随分心配だけど、生徒会長さまの実力もちょっと楽しみだ。先輩は画面を見る前に俺達の方を見て、

「挨拶が遅れた、サチト達から聞いているだろうが、二年のクロガネハヤだ。今後世話になる、宜しくな」

と、簡潔な自己紹介をニッと何ともイケメンな笑顔でして寄越した。……ストイックなイケメンだ……！（※死語）

皆もそれぞれ好印象を得たらしく、彼を見てほわー、っと唖然としている。反応していないのは既に画面にしか興味がないアサ君と、何やら面白くないらしいサチ先輩くらいかな。

何だか素敵な先輩さまだ、ふふふへへ。

ちなみに格ゲーの結果はサチ先輩が最下位だった。天狗っ鼻折られたり。

２１９＋予定は所詮予定。

「あれ？　なんかお前等今日居ないとか言ってなかったか？」

自宅のリビングにてユウヤと珍しくもテレビを見ていたら、突然現れたマヒルがそんなことを漏らしたアサキです。

「え？　嗚呼、アレはちょっと延期」

ユウヤから聞いた部活の歓迎会の話、実は今日だったらしい。でもなんか先輩方の方に不都合が出来たらしくって、なんか少し延期になったらしい。……まぁ僕は知らされてなかったんだけど。

「何か不都合？」

「いや、全然不都合は無ぇんだけど。居ないと思ったから飲みにウミ誘っちまった」

「え、それ何処で？　うち？」

「ああ、うち」

「別に構わなくない？」

「そうじゃなくて。ほら、カイト君」

「カイト君もう高校生なんだけど」

僕は一切会話に参加せず、ずっとテレビのクイズに釘付けだった。
此の問題分からないな。

「ウミがそんなこと気にする訳ないっしょ」

「悪い意味で気にしないもんねウミさん！　アサ君も何か言ってよ！」

「アスタリスク！」

「クイズの答えじゃなくて！」

え、違うの？　ていうか何の話？

「――という訳で俺もやって参りました」

何がどういう訳なのかは途中まで気付かなかったけど、ウミさんとセツさんがうちに来たのでなんとなく分かった。

「俺家でネトサしてただけだから残ってても良かったんだけどな……」

「何言ってるのカイちゃん！」

「へいへい分かってますよ」

面倒臭いのか最近カイトはウミさんの扱いが適当になってきている気がする。……まぁ喧嘩とかは無さそうだけど。

「マヒル酒買ってきたー」

「はいどーも」

「アサキ達も飲む？」

「飲みません飲ませません飲ませたらお前を殺しますＤｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？」

「冗談ごめんマヒル無駄に良い発音で俺を責めんな……！」

今日も二人は仲が良いようだ。でもセツさんを見たのは実に久し振りな気もする、此の人基本神出鬼没だから。

「ふふっ、セーツ、私の大切なカイちゃんにお酒なんて飲ませたら――ふふふふふ？」

「お前等マジで怖い！　飲ませないって！　なんでお前等弟絡むとそんなに目が据わるんだよ！！」

寧ろ僕の後ろに隠れちゃったセツさんは、「お前等の兄ちゃん姉ちゃん超こあい」とか呟いていた。僕は悪くないはずだけど……な

んかごめんなさい。

「何だよー酒くらいでそんなに騒ぐなよー……」

「駄目よー、身体に悪いんだから大人になるまでは！」

「そうだぞセツ。……お前は、酒入った時の二人の扱いの難しさを知ってるだろうに……」

――僕だって知らないけどね。確かに飲んだ時は頭痛くなったりしたけど、記憶は特にないんだもの。……分からなくても、マヒルの神妙な態度を見れば何か分かるからいいんだが。

「とりあえずごめん、さ、大人だけの世界に行こうか」

「はーあい」

にっこにこのウミさんを見てから、僕等は部屋に移動することにした。

大人だけの世界、ねえ。僕は興味ないけど。

２２０＊閑話＋この企画の必要性について。（前書き）

「「絶対要らないよね」！」

前書きで言わないで欲しいんだけど。

２２０＊閑話＋この企画の必要性について。

前書きから双子に打ちのめされた浅井です、なんかもう本当にこの子達は……。

「もう少し必要性のあるコーナー作りなよ」

「そうすれば僕等のやる気も少しは上がる」

「アサ君のやる気が上がるの？」

「少なからずユウヤは上がる」

結局他人任せな奴だなあおい！

此処のコーナーは何時までもこんなぐだぐだでいる訳にもいかないので、今回から少しずつ、登場人物紹介コーナーみたくしていこうかな、なんて。

「はいアサ君感想」

「今更過ぎる」

うるせえ。

「っていうかだってアンタ童話パロとかは――」

あーあー聞こえない。アレは暫く凍結です聞こえなーい。

「しっかり言ってるじゃないの」

――という訳で！　という訳で今回が登場人物紹介第一回！

「無理矢理ね本当にこの作者ってば！」

「気にすんな、もう気にしたら負けだ」

今回は我等が主人公ヒコク兄弟で行きましょうかい！

「「駄洒落？」」

他意はない！

ヒコクユウヤ、ヒコクアサキ。

表記は皆統一して片仮名ですが、本名は緋刻悠夜と緋刻朝杞ですね。

漢字にすると読めなさ過ぎて大変だから片仮名にすることにしました。

「浅井さんの考える名前は難し過ぎるんだよ」

「僕の名前なんてＰＣで出すの一苦労なんだからな」

歳は初期段階で十四、だったかな？　中二の十二月からだから……、あ、違え十三だ。

「おい設定」

今は二人共十五歳だよね、ちなみに身長は二人共百六十前後と平均下である。

「嫌がらせだよね分かってるよ！」

初期設定が百五十九だからそんな伸びてないんだよ、二人共。

「自分の身長に合わせた嫌がらせってやつだな」

うるせえっつーの。

正確にはアサキが百六十でユウヤが百六十……二？（※三でした）

「何で俺曖昧なのさ！」

最近になるまで設定決めてなかったからに決まってるじゃないか！

ノートにも書き留めたのも最近だしね。

「え、じゃあ今までどうしてたの……？」

えー？　――脳裏にインプット？

「駄目だこいつ」

「直ぐ忘れる癖して」

あーほんとうるせえこいつ等。とりあえずユウヤの身長はまたの機会にってことで。

双子な癖して性格が違うのは皆さん周知でしょうが、こうみえて結構似てるところも多いんです。

アサキに隠れてるけどユウヤも結構飽きっぽいし、同調すると本当に面倒臭い双子です。

「見た目は良く似てるって言われるよね」

「僕はそうも思わないけどね」

髪の色から若干違うからねえ。アサキは真っ黒、ほんと漆黒ってカンジのショートだけど、ユウヤは若干茶色っぽいという。お父さん似かお母さん似か、の差でしょうね。あとアサキの方は基本目付き最悪。

「最悪とか言うな、ツリ目くらいにしろ」

「でも確かにアサ君の目付きの悪さは折り紙付だよ」

視力の差もあるんだろうね、アサキは目が悪いから、若干。

「え、そうなの？」

「バレたか」

とりあえず作者だからね。

まあゲームのやり過ぎだから仕方ない、授業だけ眼鏡派ですねアサ

キは。

「なんと、アサ君眼鏡っ子デビュー」

「知るか」

まあこれも若干の遺伝だね、父上も母上もコンタクトだから。

「そっかー、じゃあ俺も目が悪くなるのかな？」

多分ならない、君はマヒルタイプだ。

「嗚呼、そうなの」

趣味は二人してゲームだったりネトサだったり、アサキは読書とかも好きだったね、ユウヤは女ｓ……まだこの設定続くのかな……。

「まだ洋服持ってるよ！　ていうか着るよ！」

「着るな！」

まあ裏設定と化しているから触れないでおこう。とにかくユウヤの特技は家事です。

「得意料理はスパゲッティです！」

アサキに特技はないけど。

「うるせえ」

でも記憶力が人より幾分良いっていう設定がある、だから勉強量に似合わず頭が良い訳か。僕にもくれよ。

「知らねえよ作者」

そして苦手なものは兄幽霊に弟料理と雷、っと。

「別に雷苦手じゃないし、ちょっと五月蠅いだけだし」

「俺も苦手じゃないもん！　ちょっとアサ君とかマヒル兄とかから離れられなくなるだけだもん！」

充分だろ。

――このくらいかな？　嗚呼、あと誕生日は一月の二十三日、……とりあえず長くなったからそんなもんで以上。

「適当に始めただけあって適当に終わったね」

「それこそが浅井クオリティ」

て訳で今回は以上！　次回もこんなノリで行こうか！

「もう面倒になったんだねこの人」

「しっ！　言っちゃ駄目だよアサ君！」

そんな優しさ要らねえよ。ではそういうことで、――あ、ひとつ言いたいことがあったんだった。
ええと、此処まで読んで頂いてありがとうございました！　以上！

まとめ。（後付）

名前／／緋刻　朝杞
性別／／男
趣味／／ゲーム、読書
身長／／１５９ｃｍ（※初期）、１６０ｃｍ
容姿／／髪色漆黒のストレートのショート、切る？　面倒じゃね？　なので前髪とか長い、より根暗。かなりのツリ目
血液型／／Ａ型
誕生日／／一月二十三日

備考／／左利き。性格に難有、しかし中学あがる前までは結構笑うただの大人しい子だった、春が嫌い、とかなんとかに共通する裏設定があって作者が大変。記憶力が良い、天才型。雷が嫌い。本人は苦手だと言い張る。昔はそうでも無かったはずなのに、最近料理スキルの無さを絶望的。体力の無さは小説内においてトップクラス、というか寧ろトップ。自他共に認められる根暗。

名前／／緋刻　悠夜

性別／／男
趣味／／ネトサ、じょそｕ（（癖は最近無くなったみたいだ／がやる時はやる
身長／／１５９ｃｍ（※初期）、１６３ｃｍ
容姿／／髪色若干茶色、癖が少しあるストレート、アサキと違うのは基本目付き、ぱっちりした目ですが何か。基本女の子っぽいけど、たまに目付きが弟状態になる。
血液型／／Ｂ型
誕生日／／一月二十三日

備考／／右利き。弟とは違う方向に性格難有。双子なはずだけど大分似ていない、でも似てるところはとことん似てる。頭の度合いで言えば相当の馬鹿、集中力というものがないので全然進歩しないそうな。それさえどうにかなればどうにかなる、が至難の業。そして体力馬鹿、無限大なカンジ、何かとアクティヴなのはきっとその所為。家事が完璧なのは最早デフォ。弱点多し、特にオカルト系が駄目。

221＋GC部歓迎会！／前

「こ、此処であってんだよな？」

「そうなんじゃないの？　だって表札にヤコウインって書いてあるし」

一時は延期になった部活の歓迎会が休日に行われることになって、――ちなみに決まったのは昨日なんだけど――とあるお宅の前にアサ君とカイト君とやってきましたユウヤでっす。

場所はフウカ先輩の家、名前からしてどっかのお嬢様なのかなーなんて思ってた俺としては驚きも少なかったんだけど、……んー、おっきい。お宅というよりは豪邸だよね。背より遥かに高くて大きい門の前でぼうっとしてしまっている俺達三人、カイト君に至ってはさっきから痛い程に門の上の方を見上げている。

「なあ、コレってどーやって入れば良いんだ？」

「俺も分からないんだけど、アサ君分かる？」

「……」

アサ君はきょろきょろと辺りを見回して、ふるふると首を横に振った。そりゃ分からないよね、ていうかちょっとした長旅でもう疲れちゃってるよね、――とか思ってた矢先。

「あ」

アサ君は声を漏らした。

「え、ど、どうしたの？」

「あれ」

そういってアサ君が指差したのは――

「あ、先輩達」

「ん？　おう、お前等早かったな」

此方にやって来ながらひらり、と俺達に手を振ったサチ先輩と、――何が遭ったのか知らないけど既に疲労満杯っぽいハヤ先輩だった。メッチャ壁伝い、どうしたの先輩何か青いよ。

「どうだすっげぇだろフウカん家、俺いっつも遊びに来るんだぜ」

「それは迷惑なんじゃ――の前に、サチ先輩！　ハヤ先輩どうしたんですか！？」

フウカ先輩の家自慢する前にそっちのへばってる人の説明を下さい……！

「ハヤ？　嗚呼、気にすんな、何時もこんなだ。こいついっつもヘナッヘナだから」

「人を変な擬態語で表すな」

ツッコミを入れながらもハヤ先輩の目は既に死んでいた。なんだ

ろう、アサ君の比じゃない、アサ君がすっごく元気に見えるもん。

「そういや前言ってたよな、重度の貧血持ちだって、ほぼ病気の域だとか」

門からやっと興味がなくなったらしいカイト君がそう言えば、サチ先輩は「そういうことだ」と満足げに頷いた。本人は全く理解していないみたいだけど。

「別に病気じゃないだろうが、」

「病気みてぇなもんだろうがお前のは、学校で何で倒れてんだよ」

「貧血だ」

「知ってんなら体調考えて行動シテクダサイ」

其の言い合いすら億劫そうだね先輩。でもなんか、ちゃんと労ろうと思った、きっとアサ君ですらそう思ったはず。

「いらっしゃい、歓迎する」

フウカ先輩は自宅なのに何故か制服だった。まともな服が無い、

とか何とか、きっと普通な服が無いってだけなんだろうな。豪華なの着ればいいのに。

「とりあえず、ハヤは一旦寝れば良いと思う」

「そうする」

「未だ来て間もないのにねえ、ハヤせんぱーい？」

先に来ていたらしいゼン君がにやにや顔で冷やかした、でも反応が無いハヤ先輩はそのまま何処かの部屋に消えていきました。……本当に大丈夫なのかなうちの生徒会長。

「ハヤがああなのは何時ものこと、あまり気にしないで」

「あいつにとっちゃ此処まで電車乗りつぐだけで体力精一杯だからな」

本当に大丈夫なの、ねえ。根暗のアサ君だってまだ（どうにか）元気なのに。

「――よっし、まあハヤの復活はその内に、って訳で、歓迎会始めんぞー！」

「おー」

一年よりも二年生の二人の方が元気だ、ってのはもういっそのことさておくことにする。

俺達が通されたのは何とも広いリビング（多分）だった。其処には先に通されたらしいリョウちゃんがソファ――其れもまた豪華なんだけど――かっちんかっちんに緊張したまま居て、「ひ、一人にしないでよ！」と滅多に見れないデレを発揮していた。まあ本来其のデレを見せるべき相手は普段よりは楽しそうにリビングを見回してるんだけど。

「ふっふっふ、すげぇだろ、フウカん家は！」

「今我が家は私達しか居ない、パラダイス」

「何でサチが自慢すんのよ、ていうかだーれも聞いてないけどね、皆ぼーっとしてるし」

なんていうか、部屋全体がきらきらしてるんだよね、ぴっかぴか、俺なんて居るのがおこがましいくらい。……こんなところでゲームクリエイト部の歓迎会？

「――片腹痛いわ」

「ん？　アサキ何か言ったか？」

「イエナニモ」

流石双子といったところ、俺が言おうと思ってたことをアサ君が呟いて、サチ先輩は首を傾げた。幾らゲーム命のアサ君でもそう思うんだから此れは相当だよ。しかも此処に泊まり？　ちょ、何か壊したりしたらどうしよう、うち父さんが医者だけど払えるかな……！！

俺もそうだけどきっと他の人達も諸々色んな思考を回している―
―サチ先輩を除けばゼン君だけがにこにこしてる――中、フウカ先輩が「お泊りする部屋に案内しようじゃないか」と何故かそんな口調で俺達を促した。

「ちなみにリョウコは私の部屋」

「え、あ、はい、分かりました」

「……嬉しい」

「え？」

女の子入って良かったね、先輩。

222+GC部歓迎会！／中

引き続いてユウヤです。

「第一回、GC部部内対抗ゲーム大会ー！！！！」

GCって某ゲーム機と同じ略し方だ、とアサ君が言ったのは数秒前、ややこしくなるのでツッコまないでおいた。

この大会のルールは非常に簡潔的で、人数が八人居る、ということで二人一組で色んなゲームをする――ってだけなんだけど。

『ハヤ戻るまで誰か一人だけどな』

何時戻ってくるんだかあの会長。

ちなみに俺はゼン君とになった、くじ引きなんだけどフウカ先輩はリョウちゃんとで嬉しそう。良かったね先輩。

「まずはアナログにトランプといこうか！　よし、先ずは――ババ抜き大会！」

「「ちょっと待った！」」

「あん？」

ノリノリな所申し訳ありませんが、俺達――俺とカイト君――はほぼ同時に立ち上がった。

「ババ抜きは駄目！」

「つーか寧ろトランプはやめた方が！」

「何だよ何だよ、お前等トランプ苦手なのかよ、我が部の部員あるまじきだ」

サチ先輩は駄目だな、みたいな爽やかな表情をしているけども。先輩もやれば分かるのに……――トランプ、最強なのが居るんだよ……？

もふもふとしたソファにぼうっと座る我が弟を見て、俺とカイト君はひとつ溜息をついた。

「上がり」

「ヒコクアサキ君、君はイカサマの達人デスカ？」

数々のトランプゲームを熟していく内に先輩も気付いたらしく、すんごく良い笑顔でバンバン勝ちやがるアサキを見た。

「イカサマなんて面倒なことはしませんけど」

「ほわーい」

「あっ君強いねー、ゼン君びっくり」

トランプの類は苦手とかなんとか、俺に任せっきりなゼン君は楽

しそうにケラケラと笑っている。畜生、全く勝てない。
大富豪で一度サチ先輩が勝ったと思えばアサ君次で下剋上起こすし。絶対狙ったんだよコレ、どういう頭してんの此の子。

「アサキ君、トランプの貴公子だったのね」

「ちょ、フウカ先輩！　なんかダサいです！」

トランプを持ちながら怪しげにふふふふ、と笑みを零すフウカ先輩、リョウちゃんの直球ツッコミにも気付いていないようだ。

「アサ君は昔からトランプゲームは神的な運を発揮してたよねー、ポーカーとかお手のものでしょ」

「まあ……調子悪くてもフラッシュ」

「はい終了！　トランプ終わり！　皆で昼飯にしよう！　トランプなんざハヤが居たって勝てやしねえ！！」

手持ちのトランプ――ちなみにジジ抜きやってました――をばらばらっ、と宙に舞わせてサチ先輩が立ち上がった。負け過ぎて疲れたんだね分かります。ハヤ先輩も強いんだろうけど、――ハヤ先輩、アサ君と同じチームだしね。
俺達は散らばったトランプを集めてから先輩の意見に賛成することにした。確かに腹減ったもーん。

223＋GC部歓迎会！／後

時間は飛んでもユウヤでっす！　豪華過ぎるフウカ先輩ん家に泊まることなんて若干忘れてた感があったけど、やっぱりお泊り会って楽しいよねっ！　……あれ、歓迎会だっけ？

もう夜だけどちょっと今日のことを振り返ってみようかな。

あの後復帰したハヤ先輩も交えてお馴染みテレビゲーム大会が繰り広げられたんだけど、――もうね、強いの何のって。

アサ君がゲーマーなのは周知のことながら、ハヤ先輩も相当なモンっぽかった、くそ強え。

『先輩、ウチの生徒会一人で回してるってのにゲームなんかする時間あるんスか？』

ゼン君が苦笑でそう問えば、

『当たり前だ、好きなことをする時間くらい、自分で確保するさ』

と、相変わらずなストイックさで答えていた。手の動き半端ないのに其の真面目な表情何処から出てくるんだか。でもそうだよね、好きなことの為なら頑張れるって言うし！　直後『それで徹夜して学校で倒れてりゃ世話ねぇなぁ』というサチ先輩の皮肉が聞こえたけれど、どうやら都合の悪いことはハヤ先輩には聞こえないらしい、流石は生徒会長。

――という訳で、流石はゲームクリエイト部、やってることはゲームばかりだったので他に言うことは何にもありませんが何か？
だってゲームやってただけなんだもん☆

「――っはあ、良い風呂だったー」

「ほかほか」

「ちょ、あっ君！　あっ君の髪がびしょびしょ！　ちょいとゆっ君その子を止めて！」

とか何とか言っていれば、自宅に大浴場があるという何とも素敵システムを聞いて俺を置いて行ってった一年男子三人が帰って来た。ゼン君がオカン仕様なのがちょっと気になるところだけど、俺も同感だから服着てるのに髪びしょびしょアサ君をとっ捕まえた。

「ちょっとアサ君、何でいっつも髪拭かないかな、服濡れるんだよ？」

「何てったって面倒臭い」

何でだよ。

「ふーきーなーさーいー」

「……」

自宅だといっつも拭かないで其処ら辺で寝ちゃってるんだよなあ……大人になってもアレだったらどうしよう、お兄ちゃんちょっと

困るんだけど。心配しちゃいます。――って訳でアサ君にタオル投げて塗れにしてみるんだけどね、少しは水分を吸収してくれるでしょう。

「ユウヤも入ってくればー？　すっげえよマジで」

「大浴場の話を聞いて一目散に駆け出した君がよく言うねカイト君」

俺のことも一目散に置いてってくれた癖にね！

「サチんとこ寄って来たら、明日は昼に解散だっつってたよ」

歓迎会なのに未だゲームやる気配だよ、まあ良いんだけど、休みなんてどうせ暇なだけだしねー。

にしても、こんなにゲームやったのなんて久しぶりだなー、――まあ、俺にしてみればって話であって他の皆がどうかは知らないけど――此の部活に入ってれば必然的にそうなるだろうけどさ、よっし、今日はよく眠れそ――

「さって！　ゲーム大会延長戦ｆｅａｔ．一年男子でやりますか！」

「おっ、いいねえカイ君、ゼン君さーんせ」

「え、ちょ、寝ないの！？」

「寝る訳ねーでしょゆっ君！　さあさ、やりましょうよあっ君！」

「……やる」

やるんかい。アサ君だけは寝ると思ったのに……！

――でもま、いっか、俺もまんざらじゃあないからねっ！

223＋GC部歓迎会！／後（後書き）

２２４＋今週の出来事。

ユウヤですよ！

「はあい、皆さーん、帰りのＨＲ（ホームルーム）を始めるから席についてねー」

今日も放課後になった！　相変わらずほやほやとした声音を発するは担任のほのちゃん先生、え、別に俺が付けたあだ名じゃないんだよ。自分で、

『ウタカタホノカって言います、出来れば“ほのちゃん”って呼んで欲しいかな？』

って言ったんだから！　ていうか可愛過ぎる先生なんだよ！

「今日も苦労様でした」

とっても笑顔が似合う優しい社会科の先生なんです。

でもちょっと、いや、かなり抜けている先生なんだ。言うなればモモちゃんの比じゃないってとこかな。今までも結構色々あった、……遭った。

「ああそれと――今週末は確か体育祭があったよね、皆、忘れないように」

『!?』

「?」

――そして今も。え、体育祭？　何それ初耳なんだけど。

「ほ、ほのちゃん！　其の話したことない！」

慌てたように食い気味のカイト君が叫んだ。クラス一同が頷いている中、俺はとりあえずアサ君に電話をしておいた。

まさかのコール零コンマ五秒。

「今週体育祭ってマジっすか」

『マジですけど何か』

「ありがとう」

あっちもＨＲ中なはず――しかもアサ君ハヤサカ先生の真ん前――なのに出ちゃう辺りが流石我が弟だと思う。

「あら、そうだったかしら、通りで何も決めた覚えないのねー、……どうしましょ」

軽いなー。

「でもまあどうにかなるよね、大丈夫大丈――」

「夫、じゃありませんよ貴女は」

アサ君に電話をした＝ハヤサカ先生に用件が伝わる、とは思ってたのは事実だけど。

ほのちゃん先生が可愛らしく適当な発言をしようとしたその時、後ろの扉から見たことのある眼鏡がそんなことを言った。び、びっくりした……！

「あら、な――」

「名前で呼ばない」

「……ええと、じゃあ、ハヤサカ君」

本意ではないだろうけどうちのクラスを驚かしたハヤサカ先生は其の場で盛大に溜息をついた。ん、電話だ。

「アサ君？」

『先生行っちゃった』

「うん居るよ」

『“あの人は本当に……僕の先輩教師でしょうが”って言って行っちゃった』

「先輩の尻拭いだね」

「ヒコク君同士で電話やめなさい。あと一組解散して良いって伝えて下さい」

やめろと言う割にちゃっかり使っちゃうのね先生。ちゃんと伝えて電話を切りました。

という感じで此方の話に戻る。

「ウタカタ先生が言ったんじゃなかったですか？　二週間程前に“体育祭の件、宜しくね”――って」

「……うん、忘れちゃってた☆」

「本当此の人ってば！！」

「それがほのちゃんだし仕方ないよハヤサカ先生」

「そうだよ仕方ねぇよハヤサカ先生」

何だか呆れているハヤサカ先生に、俺とカイト君は言っておいた。

ハヤサカ先生って最初は厳しい先生だなー、とか思ったけど、なんか……ただの苦労人な気がしてきた。

「とにかく！　早く決めること決めてとっとと生徒を帰して下さい、部活ある生徒だって居るんですから」

「まあハヤサカ君、生徒想いなのね」

「先生優しー！」

「まあ素敵！」

「惚れ惚れしちゃうわ！」

「黙りなさい三馬鹿」

俺カイト君プラスゼン君だね分かります。さっきまで寝てたっぽいゼン君が仲間に加わったんだから仕方ない。

ハヤサカ先生は「誰が餓鬼なんざ好きですか……！」と戦いている、相変わらずだなあ。

「でも……ひとつ問題があるの、ハヤサカ君」

「え、……な、何ですか急に」

おや、ほのちゃん先生が何やら不安そうな表情をしている。どうしたのかな……さっきまで笑顔だったものだから、ハヤサカ先生もクラスの皆も心配そう。俺も心配だけど、何があったのかな……？

「――私、何決めるのかさっぱり分からないの」

「一ペン土か職員室にカエレ」

凄い真顔で気の抜けることを言ったほのちゃん先生に、つい敬語が外れてツッコんだハヤサカ先生だった。

「リョウコ、おやつは何円までだ？」

「え、……好きでいいんじゃない？　っていうか体育祭におやつっている？」

ミノルちゃんがすっごい真顔で質問しているのと、リョウちゃんが困っているのを目撃したのは此の後直ぐだった。

225＋こんなことなんてザラにある。

リョウコですっ、何か久しぶりかも。
今日は先生の所為で微妙に危ぶまれた体育祭――のはずだったんですけど、大雨の為に中止でした。

「うちの学校は梅雨に体育祭があるから、当日に出来るのは珍しいことらしい」

「そうなんですか」

ズラせばいいのに……フウカ先輩の話を聞きながら私はそう思ったんだけど、流石に皆が思ってることだろうから言わないでおくわ。
――という訳で、部活です。

「はーい、一年共よーく聞けー。今日はハヤからの言伝を預かってきた」

ぱんぱん、と手を叩いたサチト先輩は私達一年を見ながらそう言った。ちなみに当人のハヤ先輩は午前でぶっ倒れて帰ったそうです。

「――お前等テスト勉強しろ！」

『何其れ』

被った声は何種類かしら、ちなみに私は言ったわよ。

「まあ確かにそうだな、我が部活が幾ら自由とはいえ、“赤点”なんてことがあった日には――」

其の瞬間ビクリと反応した奴が約二名。

「リョウコは大丈夫なの？」

「はい、私は一週間前になったらちゃんとやりますから！」

ちいさく首を傾げるフウカ先輩にそう言えば、何故か良い子良い子された。

「――俺は全力で歓迎するけどな！！」

「サチトは赤点常習犯だから」

何なのよサチト先輩。

「サチトの中間考査の成績は二十点未満」

「うっせぇなフウカ！　れ、歴史は苦手なんだよ！！」

二十点って……楽々赤点じゃないのよ。

「おいこらリョウコ！　先輩をそんな目で見んな！　歴史だけなん

だからな！　他は良いんだからな！！」

「……そうなんですか？」

フウカ先輩に聞いたら、ひとつ頷かれた。ちょっと意外。

「俺のことよりも、だ！　はい今現在進行形で目を逸らしている馬鹿っぽい二人！」

「見た目で判断反対！」

「反対！」

びしっと指差されて反応する馬鹿ふた――違う、ヒコクユウヤとロクジョーカイリ。ぎゃーぎゃー言ってはいるみたいだけど、ぶっちゃけあの二人は少しでも成績向上したのかしら……？

「じゃあ此の前の考査の結果をサチおにーさんに見してみんしゃい！　はい！」

「ユウヤゲームやろーぜー！」

「いーよー！」

「逃げんな！」

全然向上してないみたいね此の反応。

「はあ、……ヒコクアサキとワタヌキゼンは、高校のテストは大丈夫そうなの？」

本当にゲームに向かってった馬鹿――馬鹿はもう訂正しないわ――は放っておいて、私はそういえば居た二人に声を掛けてみた。ヒコクアサキはともかく、ワタヌキゼンも結構喋らないのね。

「僕に不可能はない」

何処から来るのよ其の自信。

「俺は大丈夫だよ、リョウコっちゃん。こーみえてもゼン君、頭は良いのよ？」

「そうなの？」

「そうそっ、なんなら勝負、してみる？」

「いいえ、遠慮しておくわ」

にっこりと笑うワタヌキゼン、……何だか負ける気がしてきたわ。

「――って訳で！　其処の馬鹿共はちゃんと勉強しておくこと！期末で赤点なんか取ったら夏休み補習確定なんだからな！？」

「「何ですって！？」」

あ、此処には反応するのね、流石。

「でも良いじゃない、アンタ達中間は赤点無かったんでしょ？」

「今回もそうである保証はねえんだぜリョウコ！」

「あ、アサ君、勉強教えて下さい……」

「あ、俺も！」

「気が向いたら良いけど。とりあえずカイト、英語のノート貸せ」

なんかもう、高校入っても本当に変わらないな、と思ったけれど、だからこそ良いんだろうな、とも思った。

「サチト、私考えたの、部活内で赤点取ったのってサチトだけなんじゃ――」

「フウカ！　ゲームやんぞ！」

うちの部長、大丈夫かしら。

226＋電話します。

こんにちは、ふふっ、久しいね、ユキだよ！
折角の休みだというのに私は凄く暇なのだよっ！　という訳でとりあえず皆に電話してみようと思うのだが……そうだね、携帯に掛けるのは初めてだな……ふふっ、そうだ、暇潰しに非通知設定で掛けてみようじゃないか！

『――はあい？　どちらさーん？』

最初にカイリに掛けてみた。ふむ、なんとも慣れた取り方だね。

「ふふっ、私だよ」

『あん？　ユキか？』

「流石はカイリだね！　声だけで私を判断してくれるだなんて！　しかし関心しないのは、もし此の電話が私に似せた誰かがカイリに電話していたパターンだった場合、どうするつもりだったんだい！？　ということさっ！」

『……何言ってんだよ、どんだけ似てようが俺がユキの声間違える訳ねぇじゃん』

「……」

ふむ、不覚にも少々ドキッとしたね。

『……もしもし？』

何やら面白そうな反応をしそうなリョウコに掛けてみた。なんと言う警戒心、三度目のコールでやっと出てくれたよ。

「……ふふふっ」

とりあえず笑ってみた。

『え、えと、どなたなんですか？』

「ふふっ、ふふふふっ」

『ちょ、ちょっと、あの』

「うふふふふふふっ！」

『こ、怖っ！』

あ、切れたね。

……後で謝罪のメールをしようと思うよ。

『はい、ランですけど～どなたですか？』

自宅の電話如く出てくれたね、モモ。

「久しぶりだね、モモ」

『あ、もしかしてユキ君？　お久しぶりー！』

うむ、彼女の声を聞くとやはり和むね！

「少々暇を持て余していたのでね」

『私も暇だったよ～？　んとね、弟の作ったお菓子食べてたの』

なんとも有意義な時間だね全く、羨ましい限りだ！

『美味しいお菓子食べてるとね、嫌なことも忘れられるんだよ～』

「そうなのかい？　それはよか――」

『明日の小テストも忘れちゃうな～』

「それは駄目なんじゃないかな」

モモを相手にすると、誰しもツッコミに回らざるを得ないね。

『……』

まさかも無言とはね！　相手は勿論アサキなんだけれど。

「……」

『……』

「……」

『……』

「……君は本当に喋らないね」

『何だ、ユキか』

アサキが喋り出すまで黙っていようと思ったが、流石に此れはない、もう一分経ってしまった。

『何処から電話してんの？』

「うん？　携帯だが？」

『何でいちいち非通知なんだよ』

「暇だからさ☆」

『……』

ふっ、このスルーされ具合、流石はアサキといったところだね！
あ、そうそう、そういえば聞きたいことがあったのだった。

「ねえアサキ、ユウヤは今何をしているんだい？」

『ユウヤ？　……アスカ君と電話してるみたい』

「やはりそうか」

先程二人にも掛けたのだが、繋がらない理由がようやく分かったよ。

『……用事ないなら切るけど』

「ふっふっふ、相変わらずだね君は！　そんなところが良いのだけれど！」

『お前も変わらないな』

褒め言葉として受け取っていいのだよね？　うん、そういうことにしておこうじゃないか！

「でもまあ、本当に用事も無いのでね、忙しいようであれば切ってくれて構わないよ？」

『……』

「……うん？　アサキ？」

『何』

「切らないのかい？」

『うん』

「うん？」

『――だって、忙しくないもん』

……うんうん、やはりアサキも変わらないね、何と優しい御仁でありましょうか！

227＋梅雨の合間に体育祭。／前

こんにちはっ！　っていうかおっはよー！　なユウヤです！
今日朝から我が弟が「梅雨なら土砂降れよ」とか悪態をついていたけれど、残念なことに中途半端な曇り空、要するに体育祭決行な訳ですね。

「ゆっ君おっはよ、はちまき超似合ってんね」

「ヒコク君のお兄さんおはようございます！」

曇り空の元グラウンドに立ってたら、何処からか幼馴染コンビがやって来た。――あれ、整列中だぞ？

「えへへっ、ありがとゼン君！　ゼン君も似合ってるよ！」

「まあねー、ゼン君って基本何でも似合っちゃうから仕方ない、この輝かんばかりの黄色いはちまきだって――」

「お兄さん、一組って何処並ぶんスかね？」

流石は幼馴染だけあって、シギ君非常に彼の扱いに慣れているようだ、俺ちょっと感心。でもシギ君、一組は隣だよ、俺達が二組なんだからさ？

『――これで体育委員長からの挨拶は終わりになります、続いて生徒会長からの話――』

二人が戻ればそんな司会の放送が入って、ハヤ先輩だな、なんて思っていたんだけど。

『――は生徒会長の体調不良につき会長代理の話、二年一組のキスギ　サチト君お願いします』

ハヤ先輩体調悪くなるの早いよ……。

何処かから「俺!?　待てよ俺何も聞いて――ってフウカお前だろ!!!!」なんて聞き慣れた声がしたんだけど俺は気にしなかった。そしてその後、「駄々捏ねてねぇでとっととやれよ馬鹿サチト」とかいう罵声が俺の列の後ろの方からしたんだけど、それも気にしないことにした。

「あっさくーん――ってアレ、アサキは?」

開会式的な何かも終わって、俺はさっそくテンションガタ下がりであろうアサキの元に向かった。高校の体育祭ってそこまで出る競技多くないから自由なんだよね、その代わり競技が楽しみだったりするんだけど。

「ヒコク君なら此処に居ますよ!」

見当たらなくてシギ君に声を掛けたら、なんか横にあったヤケにスペース取ってる荷物みたいのがアサ君だったらしい、クラスのシ

ート使いたい放題だなこの子。

「なんかごめんね」

「いえいえ、ヒコク君はクラスでもこんななんで大丈夫ッスよ！」

それはそれで心配なんだけれど。でも確かに紫のはちまきした一組の人が“何だよあの荷物……嗚呼、何だヒコクか、なら仕方ないな”みたいな優しい眼差しが見受けられる。一組でこの子、ちゃんとやってけてるみたいで何よりだ！（※お兄ちゃんは盲目）

「アーサ君」

「ん」

「アサ君って何出るの？」

「しらね、フドウに任せた」

嗚呼もう予想通り過ぎるよこの子。

「ヒコク君は何も出たくないみたいだったんスけど、何かしら出ないといけないというのでクラス対抗リレーだけッス」

「ふうん、アンカー？」

「はいっ、勿論ッス！」

「待てそれは聞き捨てならない」

あ、アサキが起きた。

「え？　うちのクラスって確か陸上部が多いとか……え？」

「はい、でも体力テストの結果はアサキ君が一番速かった、って……」

「うちの弟に負ける陸上部って何なんだろうね」

ともかく、アサキがアンカーなことが分かったし、これで俺も本気出していけるなー、なんて。

へへっ、中学の時もそうだったけど、俺もアンカーなんだよね。

今度こそ負けないよ、アサ君？

228＋梅雨の合間に体育祭。／中

「アンタ足速いわねー、さっすがは陸上部」

「ふふっ、そう褒めるな、照れるよ」

体育祭中はずっとユウヤです！

百メートル走が終わって、リョウちゃんとミノルちゃんが参加してたみたいで若干暑そうに会話していた。

「ホントにミノルちゃん速かったね！　でもリョウちゃんもすっごく速かったじゃん！　二位でしょ？」

「二位は二位でも、ミノルに比べれば凄く遅いわよ」

リョウちゃんはそう言いながらもちょっと照れ気味だった。素直な子って良いよね！

『次の競技に参加する生徒は、入場門に集まって下さい』

「ヒコク君のお兄さんっ！　借り物競争出るんでしたよね！」

「あ、もう？　シギ君も出るんだよね？　よ～っし、負けないよッ！」

「ぼ、ボクなんかが張り合える訳もないッスよ……」

嗚呼落ち込ませちゃった、……とりあえず、行こうか。

借り物競争のルールは簡単、コースの三箇所に設置されている三つの箱、そしてその先々にある三つのゾーンで箱から取り出した紙を開いて、それを其処まで持って来て次の箱に行く――っていう単純ルールらしいんだけど。中にはハズレもあるらしいから、そしたらまた箱まで戻ってもう一回紙を引くんだって、持って来れないものも然り。

「よーい、――」

パァン！！！

一レーンってこう響くから嫌だ！
でも怯んでる訳には行かないぞ！　狙うはトップだし！
最初の箱は直ぐだった、ようし、良いの引くぞー！

ええと――胡瓜。

「ねえよ！」

「な、茄子……？」

隣のシギ君もそんなことを呟いていた、最初の箱のお題は夏野菜って訳か！

え、えと、キュウリ？　何でキュウリ？　ええと、お弁当には胡瓜の漬物入れたけど教室だしさっ、……――よし、戻ろう。

という訳で戻りました。

他の人がおろおろしてるけど俺は戻る！　もう一回引いてやる！

懸命だよね！

ようし今度こそ……――みかん。

「冬じゃねえか！」

一つ目はもうどうにかクリアして二つ目の箱！

結構皆時間掛かってたしね！　俺は飴でクリアしたよ、ポケット入ってて良かった！！

「次ー！」

引く！　走る！　見る！

――跳び箱。

「運べるかい！！！！」

戻るよ！　そりゃ戻るっつーの！　馬鹿じゃないのコレ考えた人……！！！！！

次次！

ええと、――長机……？

「ヒコク君のお兄さん」

「うん？」

「校長室のブロンズ像、……どう持って来ればいいんスかね……？」

「……引き直せばいいと思う」

ハズレばっかじゃないかコレホントにもう！

や、やっと最後の箱……！　たった三つなのに疲れるんだけど！

ちなみに俺、長机運んだからな、もう会議室から運んでやったからな！！

周りに驚かれたよ！　何か文句言うなら体育祭の関係者にどーぞ！

「……ん？」

俺より前に結構人がいるんだけど、皆凄く難しい顔してる。
何が書いてあったんだろ……俺も見てみよう。

――汚いことなんて何も知らなかった、未来は明るいと信じていたあのときの彼……。

「ばーか！」

つい紙を投げ捨ててしまった、何なんだよホントにもうっ！　序々に胸糞悪くなってきたんだけど！
って畜生！　裏にピンクで“ハズレ”って書いてやがる……！！！！

「はいっ、次！」

さあ来いやあ！
――あ。

「あれヒコク君のお兄さん、コレならいけるんじゃないッスか？
ボクなんか知らないけど下僕って出ましたよ、引き直して来るッス」

「俺も引き直す」

「え？」

いーの、コレは無理。

確かに居るけれど、――“親友”っての、今居ない奴に使いたいの！

結局もう一回引いて。

「あ、アサ君！　コレ見て！」

「……？」

読めたけど意味分からなかったから近くに居たフウカ先輩に意味を聞いてみた。したら「アサキ君のところに行くといい」って言われたから急いで聞きに行った。え、敵チーム？　アサキがそんなこと気にする訳ないじゃん。

「……あー……」

あ、何か面倒臭そうな顔した。

ついでに溜息もつかれた何もしてない我が弟だけれど、次には立ち上がっていて、

「行くよ」

って。……うん？

「どういうこと？」

「ソレ、僕のこと」

「え？」

そなの？　……全然分かんねえ。

「“二親等”――兄弟のことだよ、……面倒、マヒルが居りゃ良かったのに……」

アサ君はぶつぶつ呟きながら一人で向かっていってしまった。

……ふむ、兄弟ってことはこれもある意味ハズレ札の一種だったんだろうな、同じ学校に兄弟居る人って珍しいし。

「待ってよアサくーん！」

最後の箱は人関係らしく、皆試行錯誤してるみたいだし？

これで一位は頂きだねっ！！

229＋梅雨の合間に体育祭。／後，1

「……はあ」

「まーまー、お前は頑張ったよシギ」

借り物競走の結果に落胆しているシギ君を慰めるゼン君、最後の箱で手間取ったらしくて最下位になっちゃったらしいんだよね。

「最後に出たの、“身長二メートル以上の人”だったんだろ？　滅多に居ねえよそんなの」

「そうッスよね……よ、よしっ、気持ちを切り替えるッス！」

二メートルって何なんだろな、居るかよ。

とは思ったものの、シギ君は直ぐに切り替えが済んだらしくて、今競技中のクラス対抗リレーに向いたみたい。もう直ぐ順番来るしね！　敵だけど頑張れシギ君！　そしてゼン君も頑張れ！

「……ユウヤ、あれ見て」

「んー？」

俺も切り替え！　とか思ってみたら隣に居たアサ君が珍しく（ここ重要）声を掛けて来た。

「先生も走るみたい」

「え、あ、ホントだ！　ほのちゃん走ってる！」

生徒に混じって参加してるらしい教師チーム。おお、ほのちゃん速い！

「――ってーと、俺達と走るのって誰？」

「僕ですよ」

「やや、ハヤサカせんせ」

きょろきょろと周りを見渡せば、相変わらずの生真面目が其処に居た。本日は眼鏡レスでありますハヤサカ先生。眼鏡が無くともクールだね！

「……」

「何ですヒコク君、何か言いたそうな顔ですね？」

「……先生って、どう見てもインドアだから」

「そっくりそのままお返ししましょうか？　――教師の中で僕が一番若いですしね、こう見えても足には自信があります」

確かにそうだよね、先生まだ新任って言ってたし。

「ゆっ君、そいじゃアンカー頑張ってねん☆」

「あ、うん！　頑張ってねゼン君！」

もう結構進んでたらしくて、ゼン君は相変わらずのキザさで俺にそんなことを言った。……周りの女の子がちょっとどよめいたのは聞かなかったことにする、うん。

「あ」

「え？」

アサ君の声。

どうかした？　と声を掛けようと思ったけど、その前に原因が分かった。

「あらー……」

今走ってたのシギ君だよね？　――バトンミス、かな。

「一組は大幅に遅れましたね」

「あいつはテンパると終わりだからな」

担任と友達が冷静にそんなこと言ってるけど、当の本人は確かにテンパっているみたいで今やっとバトン拾って走り出した。あはは、……シギ君軽く泣きそう。

さって、俺達まではもう少し。

どうなるんだろうね。

230＋梅雨の合間に体育祭。／後，2

「……」

無言のシギ君の周りには何とも陰険な空気が。

「シギ、人は失敗をして大きくなってくんだぜ？」

幼馴染のそんな言葉も耳に入らないくらい落ち込んでいるらしい、でも確かにそうだよね、クラスの順位が掛かってるって言っても過言でないもんね。

「ヒコク君……本当にごめんッス」

「いや、別に僕気にしてないんだけど」

確かにお前は順位とか気にしないもんね。

「妙ですね」

落ち込むシギ君が回復に向かう最中、ハヤサカ先生が呟いた。っていうか一人トラック一周半って長いよ、未だ来ないよ。

「さっきから、バトンを落とす人が多過ぎる」

「え？」

先生は眼鏡を掛けてない癖にそんなことを呟いた。
でも確かにそうだ、さっきからバトンミスがとっても多い、幾ら練習不足って言ったって、俺達は数ヶ月前まで中学生で、バリバリ運動してた訳でそんなに下手な訳がない。

「でも、偶然ってことは――」

「ないね」

「……え、何で分かるの？」

「今、お前のクラスのカトウの友達……エノミヤって言ったっけ？そいつとカイトが――バトンパスミスった」

――確かに。
アサ君がミノルちゃんを認識してたのは驚きだけれど、でも。陸上部のミノルちゃんとあのカイト君がそんなミスする訳が無い。

「せ、先生！」

「今更止める訳には行かないでしょうけれど……理由は明白ですよ、はい此処で問題ですヒコク君達」

ハヤサカ先生は鋭い眼光を此方に向けて、何時もの無愛想な調子は崩さずにこう問うた。

「たった今、此処で起こっているのは何でしょうか――？」

馬鹿な俺でもよく分かる、たった今俺達の前にまで走ってきて、ちょっとキレ気味なカイト君を見なくたって、バトンミスが起こる場所が決まって一箇所――先生が誰も居ない其処――なこととか、後は口にするのは難しいことばかりなんだけど。きっとアサキやハヤサカ先生はもっと分かってる、

答えは簡単、不正行為――だ。

231＋梅雨の合間に体育祭。／後，3

『とりあえず、競技を全うしてしまうのが先です。恐らく不正――というか、本人達はそんな悪気ないんだろうですが――其れを行っているのはごく少数、クラス全体が、という訳ではないでしょうから、終わってから僕が其処の担任に声を掛けておきましょう』

何とも教師らしくそう言った先生に『先生かっこいー☆』と言って叩かれてから早数分、俺はアサ君と共にスタート位置に立っていた。

「五組、……だよね？」

「一位のクラスに決まってるだろ、とりあえずは抜かすが優先」

どうやら不正行為にやる気が沸いてきたらしい我が弟は、ピンクのはちまきをする某クラスを凝視していた。一組はそんなにバトンミスが無いらしく、ピンクの後ろを走る紫が見受けられる。

「ふふっ、悪は許せませんかアサ君や」

「悪を許せない訳じゃない、下らない行事に下らないことをする馬鹿が許せないんだ」

要するに許せない、って訳か。

ハヤサカ先生は体調不良だの何だの理由をつけて欠場するみたい

だったけど、恐らくもう五組の担任に声を掛けに行ってるんだろうな。あの人は仕事だけはちゃんとしてるってアサ君行ってたし。

ピンクのアンカーが出て直ぐ、アサキも出た。アサキの走力に勝てる人なんて生まれてこの方同年じゃあユキちゃんしか知らないから大丈夫だとは思うんだけどさ。

「ごめんっ、とちったわ！」

そう言って俺にバトンを持ってきたのはリョウちゃんで、勿論、というのはおかしいけど、リョウちゃんもバトンを落としていた。あんだけバトンを落としてても、俺達のクラスは三番、此の分は追いつけるかちょっと曖昧なところだったけれどアサ君が居るしねー、俺も不正は許せないんだよ！　――なんて言っていたから。

「――ヒコク君！！！！」

「あっ君！！」

そうやってさっきまで居た場所からした声に、ちょっとだけ驚いた。

でも、もっと驚いたのは――

「え、……アサ君！？」

俺のちょっと前を走ってたアサキが、俺が走るカーブの先、直線トラックに潰れていたこと。

こけた……？　いや、でもこけるなんて、確かにアサキは運動不

足だとは思うけど、走ることに関してはアサキは神掛かってるし。
つい近くの人混みに目が行ってしまう。……やっぱり、此処は先生が居ないし、人混みだからバレる心配はまず無い。人にどうやってバトンミスさせてるのかとか考えてたけど――こんな簡単な手だったんだね。
近くに落ちている輪ゴムを見ながら、俺は思った。
本当は駆け寄りたかったんだけど、そんなことをしたら絶対にアサ君に怒られるから俺は走り続けるんだけど。立ち上がったアサ君を抜いてでも――

「――え？」

抜いた――はずだったんだけど。
俺がアサキを抜いた瞬間に、アサキは初速度から最高潮に俺を抜いてった。今までの走力は何だったんだっていう比で飛ばすアサ君、立ち上がったのが早かっただけあって、これなら抜けるんじゃないかな……？
でも、

『アイツコロス』

すれ違い様に呟かれたその台詞には、本当に殺意が篭っていて、一瞬俺の背筋が凍った。

我が弟ながら、なんという殺意。
殺意を動力に変えるとは、どういったシステムなんだろう？

232＋梅雨の合間に体育祭。／後，4

結果から先に言います、ユウヤです。

黄色いはちまきこと俺達二組が優勝でした。

リレーは二位だったんだけどね、五組が失格――不正云々の前に、どうやらアンカーがフツーにアサキに足を引っ掛けたらしくってね――だから。ちなみにアサ君は案の定一位を勝ち取りました、あいつぱねぇよホント、身体の仕組みを見てみたい。

「五組の担任には僕から話をつけました、まあ本人達はおふざけのつもりと勝ちたい一心でのことだったらしいので今回のところは許して下さいませんか、とのことです」

「先生、其れに何て言ったの？」

「ふざけろうちのクラスの生徒怪我させといて何言ってんだ、と少々口が荒れてしまいました、いやお恥ずかしい」

流石はハヤサカ先生。

俺は一組の教室でそんな話をハヤサカ先生としていた。席にはくたばっているアサ君と、その横にいるシギ君が。結構豪快にこけたらしくってアサ君至る箇所血まみれなんだけど、本人は保健室にも行きゃしない。そのまま血まみれで居られてもクラスの人が引くってことでさっき俺が面倒見ておいといたんだけど、一向に動かないアサ君。もうとっくに放課後なんだけど。

「まあ、うちのクラスは健闘した方でしょう、最後の彼の走りは見

事だったと思いますしね」

「ほうほう、先生も生徒褒めることはあるんですね」

「当たり前でしょう、僕はああいうふざけた餓鬼が嫌いなんですから」

無事眼鏡の戻ったハヤサカ先生は照れることもなく眼鏡を押し上げてそう言った。

「ボクは楽しかったから其れでいいッス！」

「フドウ君は体育祭なるふざけた行事が好きなんですね」

「はい！　……あれ、なんか嬉しくない聞き方」

ハヤサカ先生は其れだけ言うと教室を出て行った。元々放課後になったらさっさと消えちゃう先生らしいしね、不思議は何処にもない。……そう考えると、少しは生徒との距離が縮んだのかな？

でも、今日はとっても疲れたな～！　部活もないし、早く帰りたいよー！

「ね、アサ君！　家でゆっくりしたいね！」

「……うん」

「……どうかした？」

「……」

此処でやっと気付いたけど、――アサキの顔色が芳しくない。

「アサ君、もしかして――」

「何でもない」

「何でもなくない顔色だけど」

「……」

「ほら、誤魔化しきれないときは早く言うべきだよっ！」

「……――い」

「何て？」

「――足痛い」

一度顔を上げたのに、直ぐにまた机に伏したと思ったら、アサキの一言。

え？　足って……。

「アサ君、触るよ」

「……痛ッ！　バカヤロウいきなり掴むな」

「うっわアサ君足捻ったんじゃない？　超腫れてるよ？」

我慢には至極定評のあるアサ君が痛いなんて言うものだからどうなのかと思ったけど、これ超腫れてるし！　痛がるアサ君に我慢して貰って靴下脱がしたら、足首が真っ赤に腫れ上がっていた。

「ひゃ、ヒコク君大丈夫なんスか！？」

「返事がないただの屍のようだ」

自分で其処まで言うくらい痛いならもっと早く言いなよ！　さっきならハヤサカ先生居たのに！

「え？　コレさっきこけた時にやったの？」

「……多分、その時は痛くなかった、途中で異変が」

「気付けよ」

ついツッコミを入れてしまったけれど、アサキから返事はなかった。

さてはて、コレは一体どうすればいいんだろうか。

「アサキー、そろそろ帰ろ――あん？　どーかしたんか？」

「あ、カイト君」

実にナイスタイミングだ。

カイト君を筆頭にゼン君とリョウちゃん、其れにミノルちゃんもやってきた。皆帰る準備万端なのに何かごめんなんだけど。

「ってうおっ、アサキ大丈夫かよ足」

「うるせえええええええ！！！！！！！！！」

痛みでキャラ崩壊のお知らせだよ。

「ふむ、大分酷いらしいな」

「そうみたいだねえミノルちゃん、じゃあ俺はあっ君をこんなにしておきながら謝罪のひとつもない五組の野郎を打ち殺しに――」

「だ、駄目ッスよゼン君！　ゼン君加減を知らないんスから！！」

アサキとはあまり面識がないミノルちゃんと、何やら物騒なことを言って幼馴染にぶら下がれているゼン君。ゼン君を止める為には文字通り全身を使わなくちゃいけないシギ君もわらわらとしている、皆体育祭後なのに元気だなー。

「だ、大丈夫ヒコクアサキ、冷やすものくらい貰ってくる？」

そんな中でリョウちゃんは至って普通に心配してアサ君を労わっている。……流石リョウちゃん！

「いい、帰る」

そしてそんな普通なリョウちゃんにはちゃんと返事をするアサ君、うん、普通の人には基本普通に返すんだね。

「帰るってどう帰るのさ、カイト君のチャリの後ろ乗って帰るった

って此処四階だよ？　俺おぶろっか？」

「ゆっ君じゃ危ないんじゃない？　あっ君より背の高い人の方がいいんじゃ？」

「――私か！？」

「何でミノルなのよっ！　……確かにアンタの方が身長あるけど！」

素で驚くミノルちゃん、なんて可愛いんだ。

「いやあ、ミノルちゃんでも良いけど、此処にはオトコノコが居る訳だし？」

「……そうだな、しかし私だって不可能ではないぞ、頼ってくれ」

「何て男前なんだよミノル」

此の中で一番の男前ミノルちゃんにカイト君が大爆笑な中、俺も少し笑いながらアサ君を見た。もう事切れてるんじゃないかと思うくらい動かなかった。

「……もう何でも良いから……病院……」

普段怪我しないだけあってこういうときは弱いな我が弟よ。

結局無難にゼン君におんぶしてもらったんだけどね、一番身長高いし。

とりあえず、帰ったら直ぐに病院に連れてってあげようと思った俺だった。

２３３＋思った以上に深刻でした。

『ね、捻挫ァ！？』

我が兄共が叫んだ、久しい、アサキです。

「はい、打撲ではないですね、靭帯ちょっと傷つけたみたいだから、長引くかなー」

マヒルとユウヤに連れられて病院に来たら、内科医のはずの父さんにそんなことを言われた。

僕よりも驚いている馬鹿兄二人だけど、正直僕はどうでもいい。

「どれくらい？」

「一ヶ月はかからないと思うよ、アサキは言わずもがな安静にすると思いますし」

バレた……！

「とーさん！　アサ君は大丈夫なの！？　学校行けるの！？　それじゃなくても授業態度最悪なのに出席日数にまで響いたら……！」

「喧嘩売ってるの、ねえ」

確かにそうだけどさ。ユウヤに要らん心配をされている、僕は大丈夫だってのに、寧ろこのまま歩いてやろうか。

「大丈夫だよ、腫れが引くまではアイシングして、それから暫くはギプスで固定しながら学校行けば、ね？」

「アサ君が松葉杖なんて面倒なものを使うとは思えないんだけど！」

「お前は僕が痛みよりも面倒さを取ると思ってるの？」

確かに面倒だけど、流石の僕だって痛みには勝てないけど？　至って真面目でツッコめなかったので、僕は黙って父さんの話を聞くことにした。

現在居るのは病院なんだけど、ぶっちゃけ早く帰りたい、病院嫌い。

「でもアレ……大変じゃねえか？　アサキチャリ通だろ」

最初に驚いてから暫く閉口していたマヒルが後ろで腕を組んで一言。

「チャリはチャリだけど、僕自分のチャリじゃないし」

「は？」

「アサ君カイト君の自転車に乗ってっちゃうからね」

……何だよ悪いか、チャリ怠いんだよ。

僕のそんな視線に気付いたらしいマヒルは何とも言えない表情で「お前……」と呟いたけど気にしないことにする、ほら、僕怪我人だし。

「まあ、とりあえず暫くは安静に、ということです、……心配なの

で僕も家に帰りますかね」

「え、父さん帰って来るの!?　わーい!」

「これでも父親ですので、幾ら帰るの面倒でもたまには帰りますよ」

家に帰るのが面倒だから帰って来ない父さんと僕は一体どちらがより面倒臭がり屋なのか考えてみたいところだけど、今はいち早く自宅に帰りたいので僕はひたすら黙ることにする。

「ふっふっふ、お父さんが付きっ切りで看病してあげますよ、アサキ」

「捻挫如き付きっ切りになられてたまるか」

「捻挫馬鹿にしちゃいけないんだよアサ君!　痛いんだからな!」

「お前捻挫なんてしたことないだろ」

という訳でこの僕が捻挫してしまった訳だが――体育出ないで済むのは嬉しいな、ざ、ポジティヴ。

２３４＋久しい新参者。

アサキですが。

「……」

何か前にもこんなことがあった気がする、僕が珍しくちょっと教室を後にすると、誰かが僕の席に座ってフドウ話してるんだよね。大抵はゼン君なんだけれど、今日は違った、……っていうか誰アレ。

「あ、ヒコク君」

「え？　あー君帰って来たの？　はいはあい退くからあー君は座って座って」

「駄目じゃないッスかヒコク君！　そのまま歩くって何でッスか！？　杖さんを持って下さい！！」

「は？　別にいいじゃん、トイレ行っただけだし……っていうか……誰？」

何故だか当然のように立ち上がって、当然のように僕の背中を押して席に着かせたこの人。フドウにもあわあわ心配されるし……あ、そっか、僕足負傷中だったんだっけ。

学校でも日常生活でもギプスとか怠過ぎて、全力で否定して固定しなかった僕。だって絶対松葉杖無くちゃ歩けないような日常僕には無理だもん。無理ったら無理。

足元を見れば右足だけスリッパで、ほう、捻挫だったか、と僕自信が思い出す、あんまり歩かないから痛くも痒くもない。ただ階段の上り下りが少し辛いくらいだ。

『辛かったら俺がおぶってあげるからねっ！』

『うるせえカス』

家じゃあユウヤがそううるせえけど、学校だともっと大勢が五月蠅い。さっきも廊下でカトウに会って、

『あ、アンタ何普通に歩いてんのよ！？　ていうかフドウシギ横に付けときなさいって！　こけたりしたらどうするのよっ！　これ以上何かあったら……し、心配じゃない！』

とか真っ赤になって言われたし。そしてフドウがあいつの中で付属品化していたことに僕は驚いたんだけど。

それは良いとして。

「もう、しぎしぎも駄目じゃーん、あー君一人で歩かせたら危ないよお？」

「ボクが気付いた時には居なかったんス」

「ちょっと待てお前等、僕の話を聞け」

本当にこの人誰なの、フドウが普通に話してるところを見ると知り合いなんだろうけど……いやマジで誰。

本気で首を傾げていたら、目の前のその人――いい忘れたけど女子だよ――は、何故か頬を膨らませた。

「んもうっ、あー君ったら酷い！　テナのこと知らないのお！？」

「は？　何だって？」

「テ・ナ！　ドウモトテナ！　あー君と同じクラスだよ！」

「ちなみにボクの後ろの席ッスよ、ヒコク君」

鳴呼、そうなの。……え、ていうか――

「同じクラス……？」

「――……」

「嗚呼！　テナさん落ち込んじゃったッス！　ヒコク君アレッスよ！　テナさんは見掛けによらず繊細なんスから！！」

悪いのは僕なのか……？　いや、僕なんだろうな、でも本当に知らないんだから仕方ないじゃないか、一組で覚えてるのなんてフドウくらいなんだから。

みるみる表情が曇っていったその人基ドウモトは「いいもん……どうせテナなんてそんな具合だもん……」としゃがみ込んでしまった。……ええと、目の前で落ち込むなって。どちらかといえばギャル風な女子生徒を落ち込ますなんてシュール過ぎる、出来れば早めに立ち直ってくれ。

「テナは頼まれたんだもん、あー君のお世話」

「は？」

何やらぶつぶつと言っているので何事かと思えば。

「誰にッスか？」

「みのちゃん」

「「みのちゃん？」」

誰だよ。

「あれ？　あー君もしぎしぎも、みのちゃんのお友達でしょ？」

「フドウ、誰だ」

「あ、えと、あの、誰ッスかね」

「あっれー？　でもみのちゃん言ってたよお？　『お前のクラスの怪我人は私の友達だから、危なくないように見ていてくれ』って」

と言われたものの、僕にはさっぱりなんだけれど。けれど次の瞬間フドウがあ、と声を漏らしたものだから、何か思いついたのかもしれない。

「うーん……あ、『私のクラスの者共が心配性過ぎて仕方ないんだ』とも言ってたよ？」

「……嗚呼、分かったかも」

「ヒコク君、エノミヤさんって、確かミノルって名前だったッスよね？」

ドウモトの一言で漸く分かった、クラスの者共っていう口調もそうだけれど、心配性過ぎるクラスメートっていうのもそうだし、そんなクラスメートが居るのは二組しか居ないし、二組の知り合いだって少ない訳で――まあ、エノミヤしか居ないわな。

「そうそう！　みのちゃんだよお、何でもみのちゃんのお友達達、すっごくあー君のこと騒いでて大変なんだってえ。今さっき見たメールでも、とあるお友達は五組に殴り込みに行きかけてるらしくって」

「ゼン君！？」

「フドウ、止めて来い」

「はいッス！！！！」

ゼン君の奴まだそんなこと言ってたのかよ危ないな……いや知らないけどさ、ゼン君の力量とか知らないけど絶対ただじゃ置かれないでしょあいつだと。

そしてそんなに面識のないエノミヤにも気を遣われているという事実に少々びっくりだ、今度感謝しにいこうか。そしてそんなエノミヤとこのドウモトが友達っていうのが更にびっくり、系統違くないか。

「という訳で、テナとしぎしぎがお世話してあげるから、あー君はちゃんと怪我を治してねえ？」

「……」

何なんだこいつ、……まあいいか。

235＋そして忘れてた時期。

「っていうかさあ、雨、降りそうじゃね？」

そう言ったのは空を仰いで呆れるカイト君でしたユウヤです！

アサ君が図書室行きたいとか言い出したのがキッカケで皆して図書室に来てるんだよね。

「そうだねぇ、そろそろ帰宅したい時間なのに。ゼン君濡れて帰んの嫌ぁよ？」

「梅雨はもう終わったと思っていたんだけれどね、しかし私は雨も嫌いではないよ」

「そうなの？　でもミノルちゃん家遠いのに濡れちゃわない？」

「ふっ、私はバスなのでね、どちらかと言えばテナが雨嫌いなのが気に掛かる」

俺の横に座るゼン君と、その向かいに座るミノルちゃんがそう言う。

嗚呼そうそう、今アサ君とシギ君と一緒になってひとつの本を読んでいるっぽい女の子ことテナちゃん、ミノルちゃんのお友達なんだっていうから驚いたよ。どちらかと言えば今風の女の子だしねー、でもミノルちゃんは「テナは俗にいう高校デビューだ」とか聞いちゃいけないこと言ってたから俺は優しさを以って聞かなかったことにした。悪い子じゃないみたいだしね、此の前急にやって来たと思えば「あのねえ、あー君全然松葉杖使わないんだよ？　足怪我して

たんじゃないの？」と報告をくれたし。――そして本当にあいつは捻挫しているのだろうか。

「ねえねえあー君！　テナまだ読み終えてないよ！」

「ボクもッスよ！　ヒコク君頁捲るの早いっす！」

「うるせ、第一お前等が僕が読んでるの読むのが悪い、他読め」

「いーじゃーん！　あー君のけーち！」

「けーち！」

「ドウモトはいい、だがお前は許さん」

「何でっすか！？」

「……何か、お兄ちゃん泣けてきた」

「何で」

空を仰いでいたカイト君にそうやってツッコまれるけど、だってあの根暗の弟がお友達と仲良くやっているのを見るとついうるっと……！

楽しくやっているところ悪いんだけど、そろそろ帰るべきだと思うのは俺だけなのかな。

「アサ君、そろそろ帰らない？」

「途中で降られたら嫌だよ僕」

「まあ、俺は未だいいんだけどさー、今日――雷雨になりそうなんだもん」

「「帰る」」

即答だなおい。ちなみにアサ君と声が被ったのは、今の今まで一人恋愛小説にのめり込んでいたリョウちゃんです、どんな娯楽も嫌いなものには叶わないんだね！

「え、何々、あっ君とリョウコちゃんって雷嫌い？」

「うっさい違う」

「違うわよっ！　た、ただ帰りたくなっただけよ！」

リョウちゃん言い訳苦しい！

「大丈夫だぞリョウコ、私がついている」

「だから違うってば！　――ああもう無駄にキリッとしないのミノル！」

「みのちゃんは何時だってキリッってしてるよお？」

女の子が増えたことでリョウちゃんの疲労も増えたっぽい、ドン

マイリョウちゃん。

「雨降ってもアサ君はカイト君の後ろ乗ってるだけだし多分大丈夫だよ」

「その件に関しては俺が全然無事じゃ済まなさそうなんだが？」

「大丈夫だよ、カイト君風邪引いても一日あれば治るでしょ？」

「俺休んだらアサキ学校歩きだぞ」

「それは大変だ」

「ちっきしょう俺の心配はナシか」

うん？　何か落胆の声がしたけど気の所為だよね？

でもまあ、今は降ってないし急いで帰れば大丈夫だよね、明日は休みだしゆっくりしたい、出来れば今日中に洗濯物を干しちゃいたいなー。

「まあ、俺とユウヤは今日しかゆっくり出来なさそうだよな」

とか思ってた矢先、カイト君が何やら意味深な一言を呟いた。一体どういう――？

「ゆっ君、休み明けからテストだよん」

「うぇ」

忘れてたし、うおお……！

236＋全力疾走！

アサキです。

「ヒコクくんっ、テストどうだったっすか？」

「フツー」

「ボクはヤバかったっす！」

高校入ってからテストが三日間くらいに分けてになったから、勉強まとめてやらなくていいから楽になった。そしてフドウったらなんていい笑顔。もう諦めている奴の笑顔だな。

「あー、しぎしぎお揃い！　テナもズタったんだよお？」

嗚呼、もう一人いい笑顔。

「テナねえ、昨日は徹夜で勉強しようと思ったんだけど眠くて寝ちゃったの」

「寝るなよ」

「寝ないとお肌にも悪いもーん」

あれ、二秒前くらいに徹夜しようとしたとか言わなかった？

何故か不貞腐れてしまったドウモトはふいっと視線を何処かに向けてしまった、何これ、悪いの僕な訳？

「で、でもアレっすよ！　明日もテストっすから頑張りましょう！」

「そうだね」

「テナ今日こそちゃんとお勉強しようっと！」

「アサキー、帰んぞー」

二人がやっと張り切り始めたところで、――遅いけどね？――二組からカイトがやってきた。

「あん？　何張り切ってんだこっちの二人」

「明日から頑張るんだとよ、テスト」

「遅くね？」

「ほらお前等、カイトにそう言われちゃおしまいだぞ」

「ゴルァテメェチャリ乗せねぇぞ」

だってそうでしょう、カイトに勉強のこと言われるようじゃ終わったも同然。

「俺だってな、最近ちゃんと勉強してんだっつーの、今回見てろよ、お前抜くからな、……英語だけ」

「お前そうやって僕の苦手科目を責める訳か」

その笑顔がムカつくんですけれど。こいつが英語得意で僕が英語苦手、……ヤバイな、下手したらマジで抜かれる。

「何々？　カイちゃんはあ、あー君より頭良いの？」

「か、カイちゃん？　姉ちゃんと同じ呼び方だな……。あ、ええと、違ぇよ、俺馬鹿だもん」

「そうっすよね！　ロクジョー君が頭良かったらボクちょっとショックっす！」

「あれ？　コレ喧嘩売られたんじゃね？」

今度はカイトの笑顔が素晴らしい、まあ殴って良い？　と尋ねてくる間があるなら大丈夫だろう、……多分。

「つーかホラ、早よ帰らんと。お前今日病院行くんじゃなかったのか？」

「……あ、そうだった」

「何でお前の事情俺の方が知ってんだよ」

足が未だ治ってないんだった。何時も忘れるんだけれど、本当に怪我してるんだったよね、そうそう、うん。……痛くないから分からない、もう治ってるんじゃないのだろうか。

固めてないから家に居る父さんに連れられ病院に行っているのはいいんだけれど、毎回忘れていたらカイトに連絡が行くようになったようだ、面倒な保護者が増えたもんだ。

「何時治るんすか？」

「夏休み入るくらいじゃないか、って」

フドウがきらきらした目で尋ねてきた。隣のドウモトもふーん、と興味あるような無いような声を漏らしている。

「よし、じゃあ帰るか」

「うん」

「あ、はいっ、あー君」

「ん」

カイトが僕の荷物を掻っ攫ってくれたおかげでドウモトが渡してくれた松葉杖が使えるのだが、相変わらず使う必要がないんだけれど。

使う時なんてあるんだろうか……いやねえな。

「ひ、ヒコク君！　普通に歩いたら駄目っすよ！」

「いいんだよ、いいからお前はとっととゼン君に勉強教えて貰え阿呆」

「あう」

さあって、とっとと帰ってゲームの続きでもしようかな。

237＋何時だって無限大。

お久しぶりです～、……え？　もう誰だか分かるよね？　……そうだよね、もう忘れちゃったよね、モモですなんかごめんなさい。

「――で、どうなのよ」

はう。

一瞬何の話だったか分からなかったけど、そういえば今、リョウちゃんと一緒に喫茶店に来てるんでした。やっぱり夏は喫茶店で涼むのが一番だよね。

え、ええと、ええと……何の話だっけ？

「ちょっとモモ、久しぶりに会った訳でもないのに何寝ぼけてるのよ？」

「ご、ごめんね、ぼうっとしてたの」

学校が違ってもちょくちょく会ってるからそんなお久し、な気分は無いんだよ～。

……で、何の話？

「だから、今年はお祭り、行くの？」

「――うん！　勿論行くよ！」

そうだった、夏だからそんな話してたんだよね！　毎年一緒に――去年は皆で――行ってるんだけど、今年はちょっと問題があって。

「本当に大丈夫？　――アンタテスト期間でしょ？」

そうなんでした、私の学校、がっつりテスト期間なんです。リョウちゃんは今だからいいみたいだけど、私はちょうど一週間後、あははどーしよ。

「大丈夫大丈夫、所詮は一年生の期末試験だし、ね？」

「ね？　じゃないわよ！　それじゃなくてもアンタ中間ヤバいんじゃなかったの！？」

「大丈夫大丈夫！　……あ、でもいいよ？　リョウちゃん他に行きたい人居るなら一緒に行っても……」

「アンタまたそういうこと言う！　い、居る訳ないでしょ！？」

そうだよね、もし居ても優しいリョウちゃんが言う訳ないよね。

……顔は真っ赤だけど。

自分でも分かってるらしくって、さっき頼んだオレンジジュースを一口飲んだ。……よーし。

「ねえリョウちゃん」

「ん？」

「今年はアサキ君誘わな――」

「帰る！」

「わー！　ごめんねリョウちゃん帰らないでー！」

ちょっとからかってみちゃおうとか思った私がいけなかったな！
ごめんねリョウちゃんがそんなかわし方したことないから本当私なんかがごめんね！

「で、でもほらリョウちゃん！　去年は誘えたんだよ？」

「い、いい！　今年はいい！　だ、第一ほら、アイツ今足怪我してるし！」

「え、そうなの？」

「……アレ？　言ってなかったかしら？」

「言ってないよ？」

「アレ？」

「……あれ？」

――という訳でちょっと説明を受けました。

「アサキ君が怪我なんて珍しいね～」

「まあね、全然運動とかしない人だし、あ、でもだからなんじゃないかしら」

運動不足でってことかな、私は全然怪我とかしないけど。

「ま、本人は全然気にしてないみたいだから……心配してないけどねっ！！！！」

……此れは初めての反応かもしれない、此の溜め方は初めて聞いたよ！　でも凄く心配なのは良く分かったんだよ！

「それにさ、アイツお祭り嫌いとか言ってたじゃない？　だから、また誘うのはアレかなあ、って」

再びオレンジジュースを飲んで、ひとつ溜息をついたリョウちゃん。……――何時の間にそんな可愛くなっちゃったの？　何この恋する乙女リョウちゃんたら！　悩める乙女が目の前に居るよ！？　あわわわわ（※暫くお待ち下さい）

「だからいいの！　とりあえず一緒に行くなら、ちゃんと勉強しなさいよね？」

「うん、分かったよ～」

乙女リョウちゃんはそうやって私に厳しい一言を添えて、にっこりと微笑んだ。

勉強かぁ……リョウちゃん、私が勉強頑張ったら、リョウちゃんも恋愛を頑張ってくれるかな？

238＋前を振り返ってみて。

「ふっかーつ！」

はいはいあいあいこんにちは！　完全復活ユウヤです☆

え、まず何から復活したのか知らないって？　もっちろん――テスト勉強……？

結果なんてどうだっていい！　今はテストが終わったことに関しての喜びを思いっきり叫ぼう！

「おわたー！！！！！」

「うるせえよ」

うんもうよそう、一回が限度だよね。

と、言う訳で後は夏休みになるのを待つだけなんだけれど、とりあえずアサ君のクラスに来てみた俺――と他数名、要するに皆居るんだよね！　ホント暇人ばっかり！

「――うん？　アサ君メール？」

声に出したら怒られそうなことを考えていたら、珍しくも我が弟が携帯を弄っていた。あまりにも使われなくて可哀相なブルーの携帯、……まあ、俺も余り使わないんだけどさ。

「うん」

「誰？」

「ミトウ」

「……ミトウ？」

誰？　と聞こうかと思ったけれど、よく考えたら思い出せた。セイタ君ねセイタ君、何だか凄く懐かしい名前だよ。

「ミトウ？　お前ミトウとそんなに仲良かったか？」

「普通」

そんな懐かしの彼を覚えていたらしいカイト君――残念ながらリョウちゃんは知らないようだ――は、何とも怪訝そうな表情でアサ君を見た。

「どっちかってっとハルナとかの方が仲良かったイメージが……」

「そうでもない」

「去年クラスで一番仲良かったのセイタ君なの？」

「多分」

へえ、俺もちょっと意外。名前の順とかの関係もあったしどっちかって言ったら――あ、今俺の口が滑いけないこと言ったっぽい、いち早く気付いた俺はアサ君に耳打ちしておいた。

「（アサ君、カイト君が目に見えて落ち込んでる）」

一番仲良かったの部分に引っ掛かったんだろうね、セイタ君が一番仲良かったとか話したからか目が一瞬で死んだ。
けれどアサ君はやはりアサ君で、全く気にしていない、というか面倒臭い、といった呆れた表情をしてカイト君を一瞥した。

「（此処は言い直した方が――）」

「何でよ」

「え、だって」

「アレだよ、カイトはとりあえず別扱い」

こっちが気を遣ってるのが馬鹿馬鹿しいくらい同テンションで話すものだから、此方の声のトーンも元に戻ってしまった。……別扱い？　……あ、そっか、アサ君にとってカイト君は仲良いのが当たり前なんだもんね。
カイト君もおんなじような解釈をしたのか、ちょっと嬉しそうな顔をしていた。隠そうとしてるのかな、隠せてないよ全く。

「中学の友達かー、俺ぁ最近メールもしてないねぇ」

少々落ち着いた頃、今まで会話に入って来なかった――別名入って来れなかった――別中学のゼン君がそう呟いた。

「私もね、会ってるのなんて近所の友達くらいよ」

恐らくモモちゃんの話をしながらはあ、と溜息をついたリョウち

ゃん。
　まあ、中学の時は同じクラスになったことなかったから、リョウちゃんの友達関係とか特に知らないんだけどさ。
「フドウ」
「はい？」
「お前友達居たの？」
「はい！？」
　――って、放っておいたらアサ君なんて話題振ってるの。シギ君がマジびっくりしてるんだけれど。
「い、いいいい居たっすよ！　何言うんすか！」
「いや、だってなんか……居なさそう」
「そんなことないっす！　ええと、ゼン君でしょ、さっちゃんでしょ……」
「ちなみにさっちゃんてのはサチトんことだからー」
　ゼン君の補足の後、暫しの沈黙が走った。
「――やめてあげてっ！　しぎしぎをこれ以上苛めちゃ駄目だよっ！！」

ついに絶えられなくなったテナちゃんがシギ君を抱えた、まあ、気持ちは分かるよ。

「別に苛めてる訳ではなんだが、今回は僕が謝ろう、ごめん」

「ヒコク君謝らないで下さいよ！　なんか僕が本当に友達居なかったみた――ちょっとひこっ、その憐れみの目止して下さいっす！」

「大丈夫だよしぎしぎ、テナとあー君が守ってあげるからね？」

「だあああああ！　違うっすよおおおおお！」

まあ、何か騒いでるけどそういうことで良いと思うんだ、うん。

でもそっか、中学の友達……アスカしか覚えてないな、確かクラスにもう二人くらい仲良かった人居たんだけど……名前何だったかな？

まあいいや、テスト終わったことだし、今度メールしてみよっと！

239＋真夏の休日。

「あっちぃ……なぁマヒル、超暑ィ」

「嗚呼、そうだな」

マヒルだ。何だか久しぶりな気もする。

一人暮らしの人の家に上がり込んでおいてその言い草はねぇと思うんだが、髪色だけは涼しげな此の阿呆セツはフローリングにひっくり返りつつそう言った。仕方ねえだろうが、一人暮らしにはエアコンなんざ存在しねえんだよ。

「あっちぃ」

「あっちぃって言うなら来なきゃ良かったろうが」

「そうはいかねーだろ」

溜息交じりに俺が言えば、セツは勢い良く起き上がった。まあそうだろうがよ、目的があるのにひっくり返ったままじゃいられねえだろうし。

「就活の時期だぜ！」

「遅くないかおい」

「――は、置いといて」

しかも置いとくのかよ、確かに就活の時期だけどもな俺達。
ぶっちゃけ俺は何故セツが此処に来たのか知らないんだけど、何か用事があることだけは知っているんだが。肝心なことが分かっていない、だってコイツ此処来て直ぐひっくり返ったんだもんよ。

「んで、何で来た訳よお前、早く話してくれねえと俺今日バイトなんだけど」

「え？　嗚呼そうなんか、悪ィ悪ィ、まあ用事ってもウミからの伝言なんだけどな？」

パシリかよ――セツの名誉の為に口には出さないでおいた。
大学の授業で被ったかなんかで伝言を預かったらしい、メールで伝えりゃいいのになあいつも。セツを伝書鳩か何かと勘違いしてんじゃねえかな。

「“海行きたい”――って」

「……は？」

其れ、伝言というか要望じゃねえか。

「折角の夏なのに海行って水着にもならないで何が楽しいんだ！とか何とか」

「え……別にいいだろ、海とか行くの面倒じゃね？　今時海とか行きたい人なんて――」

「……」

「――ごめん行きたいんだな、分かったからそんな目で俺を見るな」

言った傍から目の前に居たよ、今時海なんて行って喜ぶのは餓鬼くらいだと思ってたけど、結構居るもんだな、……超身近に。

「だって海良いじゃねえか！　日帰りでも良いから行こうぜ！？コレで行かない感じになったら俺とウミの講義中の盛り上がりが無意味になっちまう！」

「分かった分かった、同時に講義中に騒いでいたことも分かった」

お前達本当卒業する気あんのか、そろそろ単位足りりゃいいって訳じゃないんだぜ……？

俺のそんな内心は気付かないセツは餓鬼の如く表情を明るめて喜んでいる、テンションはもう夏休みってか。

「うし！　それじゃあ俺はこれで！　今からマッヒーん家（本家）に行ってくるわ！」

「おう、……って、は？　何で俺ん家？」

「涼しいじゃねえか、俺今日家帰れないし？　そんじゃ！」

「ちょ！　おい！　っていうかお前まさかまた金取られ――」

最後まで聞かずにセツは正に星を飛ばして出て行った。明らかにまたカツアゲ、そして更正したが金取り返し忘れる行為に遭ったな

あいつ。

まあ、もう慣れたし、とりあえずバイト行く前に双子に連絡いれておくか。

２４０＊閑話＋今一度このコーナーの存在意義を考察。

ちゃーっす、俺浅井！
最近すっげえ眠ぃなあ、とか思った訳だけど、よく考えたら昔っからそんなだったなあ、なんて思い返したんだよなっ！
皆も寝不足には気をつけろよ！　夜更かしはいけないぜ！？

「「で？」」

え、言いたいことは以上だが。

「何そのいらないやつ」

「ほんと要らないよ其れ！　え、作者どうしちゃった訳！？」

――そんなこんなでちゃーっす、です。最近夜になる前から眠くて小説書いてる時間が無くなってきてるんだい浅井です、眠いと頭ん中まとまらないしＰＣ開いてもそのままシーン、だし。浅井は部活とかをやってる訳ではなく、浅井の体力が矮小なのは周知のことなんですが此処まで来ると病気だよホントに。

「きっとアサ君の体力の無さとかは全てアサ君に継がれたんだね」

ええ、そうですが。

「貴様の所為かおんどりゃあ」

結構自分にこういうところあるなあ、って思ったところをキャラに加えたりしてますよ、ええ。ちなみにアサキのゲーム好きとカイリのＰＣ依存症一歩手前は僕からですね。

「あれ、カイト君てＰＣ依存症なの？」

「うん、あいつ家じゃゲームか其れしかしないよ」

うーん、此れ裏設定なのかーしら。

という訳で前回に続いてキャラの登場人物紹介第二回であります！

今回は我等が双子の弟の親友、ロクジョーカイリ君のご紹介です！

「親友？　何それ」

「はいはい」

相変わらず素直じゃねえな。

名前は六丞　海吏、歳は双子に同様、身長はー、ええと、ちょっと待って、ノート探す。

「用意しとけよ」

はいはいあったった、初期身長百六十五、今はそう変わらないだろうがぐんぐん成長中であります。

「身長くれよ！　中学ん時の俺達よりあるじゃん！」

「諦めろよ、どうせカイトだ」

まあ、多分今は百七十くらいあるでしょうね。

「コロスぞ」

お、怒んないでって！　しゃーないやんけ！　……ちなみに百七十二センチが設定上の身長です。

はい！　次々！

カイリ君は基本ただの馬鹿なんで其れで納得してくれれば――あ、雑？　はいはい。

あの子は本当もう駄目な子なんだよ、駄目な癖して直さないからそのまま駄目になって、ね……。

「ねえアサキ、親友が凄く馬鹿にされているよ？」

「親友じゃないから何とも思わないよ、第一本当のことだし」

ぶっちゃけアサキの友達が欲しいな、って思ってノリのまま作った

キャラだったんですって。だから暗い主人公に対して明るい友達がいいな、って、ただそれだけの為に作られたキャラなのでとことん元気キャラに――と、思ったんだけれど、結構誤算が生まれた。

「そうなの？」

そうなんです。

頭は悪いはずなんですけれど、何時の間にやら英語だけはヤケに出来る子になりまして。しかもただの馬鹿の割に時折一番大人的立ち位置になることがあるっていう、本当に誤算。

「ていうか僕等ん中にまともなのが一人も居ないのがいけないんだ」

「おや、アサ君其れは自分もまともでないってことになるけどいいのかな？」

そうそう、中学の時っていきなり最上級学年だったもんで先輩とか作れなくてね、同級生も何かおかしいのばっかんなっちゃってね、ははっ。ぶっちゃけるとユキは転校生は転校生でもそういた立ち位置に居て欲しかった。

「ユキちゃんに！？　無理無理無理無理」

最初は大人しめな子だったっしょ！　でもキャラが一人歩きしてんだよ！　つーか朝夜のキャラは一人歩きし過ぎなんだよ！　どんだけ自由がモットーなんだし！

「だって作者がアンタだし」

あ、そっか☆

……流石に落ち込むぞオラァ。

ええと、続き続き。

容姿は簡単に言って黒のツンツン、勿論短髪ですね、……黒っていうか焦げ茶かな。基本人見知りとかをさせない性格で、真面目な表情とか滅多にしないです。真面目なこと考えないからですね分かります。

「阿呆丸出しだな」

最初アサキに名前間違えられた時ですら深く考えなかったでしょうね、『アレ？　間違えられてね？　まあいっかー』……的な。

「流石に俺ですら馬鹿って言いたくなる」

趣味はゲームとネトサ、超重度のネット住民で、巷で有名なボーカ○イドとか知ってるでしょう、寧ろ大好きじゃあないかと。

「うわあ浅井さんがマニアックなこと言った」

嫌いなものはオカルト系、強がっているけど全然これっぽっちも駄目なんです。一人でホラーなんて見たものならその日寝ません。ちなみに料理の腕はそこそこ、並という言葉がお似合いだね。

「うん？　何故僕を見ているのかな？」

「それは言わずもがな――」

「黙れ」

体力馬鹿なんでユウヤとはそれなりに運動面で良きライバルになりますね、――勿論、勉強面でも。

「英語が出来る分思いっきりカイトが有利だけどな」

「あーあーキコエナイ！」

そんで誕生日は閏年です、四年に一度しか来ないっていうのが何かカイリっぽくてそうしたんだが、今考えると意味分からないかな。って具合に以上！　ヤケに長かったなコレ……紹介だから仕方ない、か？

ていうか双子の時も長かったが今回はカイリ一人でこの長さ……毎回こんなになるのかよ……頭痛い時は書かないようにしよう。はい、以上、まとめ書いて終わります！

「疲れたんだね」

「ですね」

うっせぇ！

まとめ。

名前／／六丞　海吏
性別／／男
趣味／／ゲーム、ネトサ
身長／／１６５ｃｍ（※初期）、１７２ｃｍ
容姿／／焦げ茶のツンツンの短髪、人懐こい笑みが印象的。真面目な顔？　そんなの出来ませんが。
血液型／／Ｏ型
誕生日／／二月二十九日

備考／／英語が取り得のバカヤロウ。普段は熱血野郎な雰囲気だけど、急に冷めたりすることもある。テンションが良く上下する。自宅以外だと結構一人嫌いだったりする淋しがりや。特にオカルト系に滅法弱い為、そういう時は誰かの所に行く傾向がある。リア充よりネト充っぽい、でも基本ネットは趣味内の領域。身体が弱い訳ではないけど基本は月二で風邪で休む、免疫力低。

２４１＋夏休みまでの秒読み。

「シュート！！！！」

ポーン、と。

綺麗な弧を描いて僕の横を飛んでいったサッカーボール、其れを蹴ったのは我が兄であって。ノーコンとはこのことを言う、アサキです。

「ちょっとゆっ君！　さっきから何回飛ばすかな！！」

「ちっくしょう！」

ギャーギャーと騒いでボールを取りに行くゼン君、もう何回もこの光景を見ている訳だが、ユウヤは一向に自分で取りに行くことはしないらしい、悔しがって地団駄を踏んでいる。

という訳で、僕等は絶賛サッカー中、アサキですが。

夏休みも近いっていうのに――否、近いからこその球技大会といったところだろう。成績を付ける間生徒達を何処かに縛り付けておきたい、そんな教師達の見解ではないだろうか。

ゼン君がボールを取りに行っている中、そろそろと僕の横にやって来たのはさっきまで馬鹿みたいに走り回っていたフドウ、何だか不安そうだ。

「あの、ヒコク君」

「何」

「足、本当に大丈夫なんすか？」

また其れか。本日何度目の質問なんだ、と問えば当に十は超えているがこの阿呆は未だ懲りないようだ。

「大丈夫も何も治ったし、元々そんなに悪くないし」

まあ、其れは先日まで僕が怪我をしていたのが原因だから何とも言えないけれど、此処まで来ると流石にうぜぇな。まあ、捻挫だったしね、でももう一ヶ月くらい経つし、治ったってことで今球技大会に参加しているんだから良いだろうが。

しかし、そう思ってない奴がやはり数人居る。

「そんじゃあっ君はい、ゴールキック」

「あ、うん」

「ちょ、ストップ！　アサキストップ！」

ゴールキックだからとボールを受け取ったら――僕キーパーなんです――止められた、相手チームなはずのカイトに。

「何です敵チーム」

「お前怪我してんだから思っきし蹴んなよ！」

治ったっつの。言っても信じてくれないというか、治ってても未だ心配されているというか。滅多に怪我とかしないからこその仕打ち、本当に面倒臭い。

しかしそう言われたなら仕方ない、少しは譲歩して――

「――死に曝せえ！」

「は――――えふっ！！」

――ユウヤに向けて全力トーキックしてみた、ジャストミート。

今まで地団駄踏んでいただけあって反応が遅れたのか、良い具合に浮いたサッカーボールがユウヤの胸の高さに飛んでいって、ぶち当たって、そのまま後ろに倒れた。

そして沈黙。

「――ユウヤー！！！！」

カイトが叫んだ、だが反応がない、ただの屍のようだ。

「ちょ、ヒコク君！　お兄さんにぶち当たったっすよ！？」

「え、うん、狙った」

「狙ってぶち当たっちゃうんじゃあっ君相当サッカー上手いんだね」

雨でぬかるんでる地面に倒れるとは、ユウヤも洗濯大変そうだな。

慌てるフドウと苦笑のゼン君、僕は全く気にしていないんだけれど。

審判を任されているであろう二年の先輩は少々おろおろしてユウヤの元に向かう、そんなこと無用だとは気付かずに。

がばっ！

ほら、起きた。

「アサキゴルァ！！！！」

あ、怒った。

「――足怪我してたんだからいきなり思いっきり蹴っちゃ駄目でしょ！！！！」

そこかよ。

自分のことじゃない辺りが本当にユウヤらしい。

ずかずかと此方にやってくるなり――泥だらけで――ムスッとして、

「怪我人は安静に！」

と、僕を叱った。

ホントにもうコイツ等は……つい溜息が出た。

「だからさぁ、もう治ったって言ってんだろドカスヤロウ」

「はいごめんなさい」

これで分かってもらえただろうか。心配してくれるのは良いんだが、過保護過ぎるのは考えものだな、と思った。

早く来ないかな、夏休み。

２４２＋何時だってレイニーデイ。

「あー、まあた雨降ってらあ」

最近の夕方の空模様は、二日に一辺涙空。……何つって、カイリだぜ。

馬鹿な俺には詩人染みた話は出来ないんだが、自分が目で見たことくらいは口に出せるんだぜ！　――という訳で、放課後ながら……違ぇな、放課後だから土砂降ってる訳だ。

「今日は夕方雨って言ってたもんねー、見事に降ってるし」

「本当にな、どうせ止まないんだし早く帰ろうよ」

「そだね」

俺の隣と後ろからそんな暢気な双子の声がする、でも確かにそうだな、雨なのにこんなとこ――要するに下駄箱――に何時までも居たってしょーもねえし、さっさと帰――ん？

「あり、なあアサキ、ユウヤ」

「何ー？」

帰って来たひとつだったけど、後ろからはちゃんと視線を感じるのでそのまま俺は気付いたモン――人を指差した。

「あれって……」

「あ、ハヤ先輩だ」

どうやら間違いじゃあなかったみたいだ、俺達同様鬱陶しそうに空を見上げる姿は同姓の俺ですら様になってんなあ、なんて思う訳だが、そんな我等が生徒会長様が珍しくも其処に突っ立っていた訳で。ユウヤの声で俺達に気付いた先輩は「やぁ」という声と口元に笑みを携えて此方を見た。

「三人仲良く帰宅か？　カイリはともかく、ヒコク達は双子なのに本当に仲が良いな」

「はい！」

「何処が？」

全くかみ合ってないけど俺もハヤ先輩も気にしねぇぜ。

「先輩はどうしたんですか？」

「俺か？　……まあ、雨止まないか、と空を仰いでたんだ」

小さな苦笑と共にそう言えば、再び空を見上げたハヤ先輩。傘でも忘れたんだろうか。

「今日は止まないって言ってた」

「嗚呼、俺もそう聞いた。でも此の雨じゃあ帰れんな……」

「傘忘れたなら俺の貸しますよっ！？」

「え？　……嗚呼、でもそうしたらお前が濡れてしまうだろう？」

やっぱり傘忘れたんだな、でも其処は先輩、後輩から二本ある訳でもねえ傘を借りるのは気が引けんだろうな。

「大丈夫ですよ！　俺天合羽あるし！　第一先輩、雨に降られて体力削られたら倒れちゃうんじゃないですか……？」

「……」

ハヤ先輩は何とも言えない表情で空を見上げている、どうやら図星のようだ。

「今日サチト先輩どうしたんすか？」

「ゲームの発売日だから先帰ったぞ」

「職務放棄だ」

「アサ君なんか違うと思う」

でも確かに其れが正しい、あの人は此の人のお守りをせねばならないだろうに。俺は若干苦笑しつつアサキの発言を聞いて――というかアサキはとっとと帰りたいみたいだ、顔が言ってる――、つられて空を見上げた。

「ま、そーゆーことで、ユウヤの傘使った方が良いっすよ、俺達も帰るんで」

「はい先輩っ！　さようなら！」

「……悪いな、明日ちゃんと返す、アサキも引き止めさせて悪かった」

「……」

アサキの無言の催促にも気付いていたらしく、傘を受け取って先輩は言った。

「うーん」

「どしたユウヤ」

チャリに乗ってからユウヤが唸る。

「ハヤ先輩ってさあ、」

「おう」

「フツーに格好良過ぎだよね」

何だその結論。

全く興味ないらしいそいつの弟を乗せつつ、土砂降りの中を帰った俺達だった。

２４３＋梅雨明け後の真夏日。

ユウヤでっす！　滅茶苦茶暑いぜこん畜生！　さっきテレビで梅雨明けしたって聞いたけど、だからっていきなりこんだけ暑いのはいけない！　蕩ける！

「ねっ、アサ君！？」

「……何が？」

嗚呼、口に出していなかった。
朝から微妙に暑くても結構我慢してた俺だけど、アサ君は起きたら即クーラー付けやがったからにとっても涼しいリビングです。
え？　何で暑いかって？　――まあ、簡単に言えばクーラーで補えない暑さの中に居るんだよね。

「暑さだよ、あーつーさー！」

「嗚呼、そうだね」

クーラーの中に居るからって軽い返事だなおい！
こっちはクーラーで補えない暑さ――キッチンで料理中だってのに！

「其処そんなに暑いなら、手間の掛からないモン作れば良かったじゃん」

「ええ！？　リゾット食べたいって言ったの誰！？」

ゲームやりながらそう言った癖に！

「言ったは言ったけど、其処まで手間掛かるならそんなに……」

「や、リゾットはそうでもないんだけど、暇だからミートソース作ってるんだよ」

「……完全にお前の所為じゃねえの其れ」

そうだった。

「ただいま帰りました」

そうしてそのまま数分鍋と格闘していたら、誰かが帰って来た。あれー、こんな午前中に帰って来る人なんて我が家に居たっけ？とちょっと考えてみた。マヒル兄？

「はあー、涼しいですね」

「父さんどうしたの」

「うえ、父さん！？」

まさか！　一番確立の低い人だよ其れ！

アサ君の一件で暫くは自宅帰還していた父さんだけど、直ぐに何時も通り帰って来なくなった。流石はアサ君の父親だよ、毎回思うけど面倒だから帰らないって何なの。

なのにどうした父よ、ひと月にそう何度も帰って来られるとこっ

ちが怖いよ！　天変地異でも起きるんじゃないの！？

「うん、父さんですよ、……何か不都合でもありましたか？」

「いいいいいえ！　全然！　寧ろうえるかも！」

「かもって何だよ」

何やらきょとりとしている父さんは、一人テレビを占領するアサ君を一瞥してからダイニングテーブルに座った。

「うちの暴君は元気だね」

「クーラーがあれば何時でもこんなだよ。……で、父さん、今回の帰還理由は？」

何が楽しいのかにっこにこな父さんにそう聞けば、え？　理由？と前置いてからより笑顔を濃くして呟いた。

「だって夏休みだよ？」

「……え？」

夏休み、だと？

「ねえ父さん」

「何ですか？」

「父さん、社会人だよね？」

何がっつり夏休もうとしてるんだろうかこの人は。本来のツッコミがゲームに夢中なので俺が心の中のみでツッコんでおく。父さんの笑顔って本当に屈託なくてツッコミづらいんだよなあ、ユキちゃんとは何か違う、そしてアスカはもっと違う。

「社会人にも夏休みは必要なんですよ？　ほら、また里帰りもしたいし」

「それはそうだけど、何時まで休むのさ」

「勿論八月一杯だけれど」

おおう、やっぱり悪気とかそういうものが見当たらない……、仕事先の人達、困ってないのかな……。

――とかなんとか考えて俺は溜息をついたんだけど、このまま考えてたって父さんが仕事に行く訳でもないからもう考えるのは止そうと思い直した。ていうか俺的には父さんが家に居た方が嬉しいし！

「アサ君出来たよー、あ、父さん昼ご飯食べる？」

「はい、頂きますね」

さあて、ご飯ご飯！

２４４＋今年の祝日。

「今日は海の日ですね」

何時だってクーラーガンガンなリビングで熱いお茶を啜りつつ、父さんがぽつりと呟いた。ユウヤでっす。

「うん、だから俺達休みなんだもん、ねえアサ君？」

「うん」

休みの日のアサキって大抵テレビの前陣取ってるんだけれど、今日も例外は無かった。最早デジャヴだよ本当に、誰かこの弟に意外性って言葉を教えてあげて欲しいんだけど！

「ユウヤ、海の日はどんな日か知っているかい？」

「え？　ええと、海の日？　海の日はー……海の日だよ」

「……」

嗚呼！　微妙な顔された！

「アサキは分かるかな？」

「知らん。海に感謝するとかじゃないの」

「うん、大方正解」

え、そんなので良かったんだ。

「海の恩恵に感謝する日、ってところかな、他にもあるんですけれど」

「ふえー」

特に捻りがある訳じゃ無いんだね、テレビ画面から全く目を離さないアサ君に当てられちゃうくらしだし。

「でも父さん、海の日って二十日じゃなかったっけ？」

「おや、ユウヤでも其れは知ってたんだね」

へっへー、――父さん、褒めてないね其れ。

「二十日だったんだけれど、……ええと、……何とかマンデー制度とかで……何だったかな？」

「何とか？」

「無理矢理連休にしよう、みたいな制度でね、だから今日になってるんだ、け、ど……スペシャル……じゃないな……」

「スーパー？」

「ハッピーだド阿呆」

「何だよ、アサ君知ってるなら早く教えてよ」

「はん、この僕が祝日関連の話で知らないことなんてある訳ないだろう」

うわあ凄く自慢げ。でもアサ君、何かが違うよ其れは。

「そうそう、ハッピーマンデー制度。其のお陰で三連休が増えるんじゃないですかね？」

「そうなんだ！　……でも俺的には水曜とかに休みがあってくれた方が良いなー」

「どうしてです？」

「週の途中に休みの方が俺は嬉しい！　アサ君は？」

確かに連休は嬉しいけど、ど真ん中に休みとかあったら二日区切りとかで楽じゃない？

俺はそんな自分の考えを口にしてから、話をアサキに回してみたんだけど。

「――毎日が休みならいいのに」

なんか回さなきゃ良かったかな。

「其れは僕も思うよー」

「ああもうっ！　此の駄目な親子何なんだよー！」

父さんはにこにこしながら普通に同意したし！　確かに休みなら嬉しいけど！　少しは頑張ろうよ！　今週から夏休みだよ！！

「約四十日連休って良いねー、僕も学生時代に戻りたいよ」

「夏休み休む気満々な父さんが何を」

確かにアサ君のツッコミが最も過ぎる。

「昨年でしたっけ？　ＧＷに続きＳＷがあったのは」

そして話はまた連休の話に。

「そうじゃなかったっけ？　九月？」

アサ君が頷いたので間違いは無さそうだ。

「アレは本当に偶然な連休らしいので、今年は来ないんですよね」

「えー、来ないのー！？」

「ええ、再来年も来ないんじゃなかったかな？」

じゃあ何時来るんだよ！　ＳＷカムバック！

そして何か思いついた俺はアサ君を見てみた。自分が休めることに関しては神的感性を誇るアサ君なら何時来るか分かるんじゃないかなー……なんて。

「五年後」

「やっぱ知ってるんかい！」

しかも五年後って、オリンピックより遠いな！　ていうか閏年よりも待ち遠しいって何それ！！

「ちなみに五年周期って訳でも無いよ、閏年の関係で一年ズレる時あるから」

「ヤケに詳しいね……、携帯で調べたの？」

「調べたというか、ただただ気になった」

祝日にどれだけ命掛けてるんだよアサ君。

父さんは楽しそうに笑っているだけで、一向にツッコもうとしないし、こういう時本当にマヒル兄が恋しくなるよね！　ツッコミカムバック！

「まあＳＷでなくとも本家のＧＷがあるんだから良しとしようよ」

「うーん、まあ、そうだねー」

とりあえず直ぐ間近に夏休みがある訳だし、今日のところは良しとしよっか！　うん！

２４５＋マジで蕩ける二秒前。

ぴーんぽーん。

「あら、お客さん？」

「あ、俺俺、今日アサキとユウヤ来んだよ」

カイリだ。

大学生はまだ休みじゃねえっつーのに家でうろうろしてる姉ちゃんは一人であらあら言いながら何やら準備し始めた。あいつ等来るだけでどんだけ慌てるんだよあんたは。

「はーいはーいはいは――」

「お邪魔しまーす！」

「未だ出てねえよ俺」

玄関の戸を開ける前にユウヤが乗り込んできた。早えって。

「だって外に居たら死んじゃうって！　外どんだけ暑いと思ってんのさ君は！！」

「凄く」

「お、おおう、その通りだ。……アサ君みたいな切り返しやめて下

さい！」

「ははっ、悪ィ悪ィ」

ついしたくなる何でもない切り返し、たまにはいいだろう？

――で、だ。ユウヤが来たっつーことはアサキも居るはずなんだが姿が見当たらない、何処行ったあいつ。

「なあ、アサキは？」

「え、アサ君？　……あれ？　俺の後ろに居た――あ、居た」

ユウヤはちょっと慌てた様子で外を見て、門から乗り出して道路を見れば姿を確認したらしい。俺は出てないから未だ分からねえんだけど……あ、来た。

「ようアサキ」

「あっつい」

「返事おかしくね？」

「日本語訳、とっととクーラーの部屋出せ、だと思うよ」

なんていう横暴な挨拶なんだこいつは……。

でも慣れている所為か、溜息は出るものの呆れるとまでは行かなかった。ていうかアサキに呆れられることはあっても俺が呆れることなんて稀だぜ？

首を傾げて弟の翻訳機と化すユウヤも、その既に死にそうな本体のアサキも、そう遠くない俺ん家まで来るだけなのに汗だくじゃね

えか。

……玄関だってのに俺も暑いし、とっととリビングに戻ることにしよう。

「ねえねえカイちゃんにアサキ君にユウヤ君！　ケーキ食べる？」

「え、ケーキ！？　食べる食べる！」

「姉ちゃん何時買ったよ其れ。……まあ良いや、アサキ食う？」

「うん」

そして省エネに貢献するが為に二階に行かず一階で姉ちゃん監視――という名の邪魔しているだけ――の元、宿題に取り組んでいる訳だ。

この俺様が七月、しかも夏休み入って二日で宿題なんて……！！

去年までならまだ宿題の量すら把握してねえっつーのに……。高校って宿題の量がぱねえんだって！　頭おかしいんだぜ！？　何な

んだよこの分厚い冊子！　俺に死ねってか！？

でも、理由はそうじゃなくて、歴としたのがひとつある。

「あー、宿題終わらねえ……」

「ファイトだよカイト君！　あと……ええと……十二頁！」

頑張る気力が吹っ飛んでくんだけど其の頁数。

いやあね、俺も何時も通り、最終日にアサキんとこに行こうと思ってたんだぜ？　だけど――

「ちゃんと終わらしちゃわないと、カイト自力でやることになるけど」

「やります」

頼みの綱が、最終日に県外に居るんだよ。

何時だったか此方にやって来た二人の従姉弟――ユウリとオトワっつったっけ？――のところに里帰りするらしくって、其れがなんとお盆過ぎから最終日まで行ってるらしいんだコレが。お盆だけ行けよって話なんだがマヒルさんがお盆も休みじゃないらしくって、医者先生――二人の父さんのことだけど、その人がそんなぶっ飛んだことを言ったんだと。

要するに、お盆までに終わらせないと、俺の二学期の成績が没落する。

「だあああああ数学なんざ死んじまえええええええええ！！！！！！！

！」

「数学が一番楽だと思うんだけど」

「そんなのお前だけだばーか！　ゼンだって数学は苦手って言ってたし！」

「カトウとハヤ先輩は得意だって言ってた」

「お、おおう畜生敵う気がしねえメンツ出してくんなよ……」

「大丈夫だよカイト君！　俺が居る！」

だよなユウヤ！　全くいい方向には頼れないが俺にはお前が居るよな！

ケーキを運んできた姉ちゃんが何とも言えない表情で俺とユウヤを一瞥したけれど、其処は笑顔で一蹴することにしたらしい。……理解ある姉ちゃんで良かった。

２４６＋腹黒貴公子の嫌いな物。

「アースーカー！！！！！！」

「お久しぶりですユウ――痛い、痛いですユウヤ、何か絞まってはいけない器官が絞まって――」

こんにちは、本当にお久しぶりですね、アスカです。

高校に入ってからユウヤやアサキ君と接点が薄れて来ていて――まあ、ユウヤからは毎日のようにメールを貰ってますが――寂しいこの頃ではありますが、其の分こうやって会えた時の喜びは何ものにも勝るものだと感じます。……ですがユウヤ、抱き付くのは良いんですが首、首絞まってます、死にますって。

「嗚呼！　ごめんよアスカ！　久しぶりにアスカのその一物含んでそうな笑顔を見たらつい！」

此れは喧嘩を売られてるんでしょうか、まあユウヤだから素なんでしょうが。

私立の高校というのは夏休みが結構短かったりするんですけれど、俺の学校もそうで今日から夏休みなんです。終わりも八月中ですし、何てハードなんだか……少しくらい休ませてくれたって良いじゃないですか。――ま、俺は既に二週間分くらい休んでますけどね。

そんなこんなで夏休み、近場の公園でユウヤと会うことになりました。学校終わりで体調優れなかったら嫌だな、とか思ったんですけど流石は俺の身体、大分空気が読めますね。

「本当にもうアスカ久しぶりだね！　――ていうか背ぇ伸びた？」

「はい、成長期みたいです」

笑顔で答えてみたものの、ユウヤは若干驚愕していました。

「やべえ、アスカでかくなりそうじゃん、俺ほぼ伸びないってのに……！」

「ふふっ、ユウヤはそのサイズくらいが丁度良いんじゃないですか？」

ユウヤの言う通り、高校に入りまして背が伸びました俺。此の分だと百七十も夢じゃないと思います。別に目指してないですけど。

「ちっくしょー、俺も身長欲しい！」

「他の皆さんも伸びてたりするんですか？」

「カイト君はフツーに伸びてるよ、後リョウちゃんとかグングンと」

リョウコさん、何か不憫です。

「アサ君はあのまんまだね、ちょっとくらい伸びたのかな？」

「まあ、ユウヤが伸びてないのでアサキ君も伸びてないのは容易に想像出来ます」

第一、アサキ君の身長が高い図なんて絶対想像出来ませんよ、…

…だからこそリョウコさんがちょっと不憫です。

其の後身長の話は逸れに逸れ、ユウヤの高校の話なんぞを聞きました。ふふっ、新しい友達も出来たみたいですね、ユウヤは元々社交性がある方ですから心配とかは無かったですけどね。俺の方もそこそこ適当に高校ライフを送っているので特に問題はありません、ユウヤにそう言えば、何だか嬉しそうに笑っていました。

「何かアレだねー、久しぶりに会うのにさ、こうやって馬鹿みたいに会話が尽きないの」

「ですね。と言いましても、俺はユウヤの話を聞くのが主なんですけれど」

「あははっ！　でもやっぱりアスカと話してるのは楽しいや！」

何だかほのぼのとしてきます。

と、のんびり会話をしていれば、何時の間にやら公園には何処から沸いたのか小学生低学年くらいのボール遊び集団が現れていました。元気ですね、全く。

「アスカってさ、小さい時ああやって遊んだりしたの？」

「え？」

「いやだってさ、昔はもっと身体弱かったって言ってたから」

嗚呼、ユウヤにはそんな話をしたんでしたっけ。ユウヤと、……うん、確かアサキ君にもそんな話をした覚えがあります。ユウヤの言う通り昔からひ弱だったので勿論、

「はい、余りやったことはありませんね」

という訳です。

「そっか、でもアスカって元々アウトドアなこととかしないもんね」

「そうですね、元々好きじゃないですから結構助かってます」

やらなくていいことには物凄く助かってますよ。

けれどひとつだけ、其の所為で困ったことが一つ。

「ですが俺、自分が昔外に出れなかったからなのか知らないんですけど」

「うん？」

「外で遊んでいる子供を見るだけで――虫唾が走ります」

「……」

嗚呼、ぽかんとされました。

「……え？」

「ですから、俺は子供嫌いなんですよ、物凄く」

「そ、そうなの！？　俺全然知らなかったんだけど！」

「ふふっ、言ってませんでしたものね。蕁麻疹出るんじゃないってくらい嫌いなんですよ？　最早こどもアレルギーですか」

「え、こどもチャレンジ？」

「ナメてますか？」

「ごめん黙るから笑顔こあい」

一生勉学に励んでいれば良いですよ、というかこういう時、ツッコミ――主にアサキ君――が居ないのが凄く残念です。

でもまあ、今日は機嫌が良いので許してあげます、ね、俺って優しいでしょう？

２４７＋夕立の季節。（前書き）

247＋夕立の季節。

「ユウヤー」

「んん……何ー……？」

早くも夏休みの暇加減に逆に疲れが出てきたユウヤです、クーラーのお陰でこう涼しいものだから、アサキじゃないけどつい寝てしまった。アサ君に起こされるなんて一年で二桁も無いのに。

「外」

「う？　――おお、見事に真っ暗」

時計を見れば未だ夕方だってのに、空模様は目に見えてひっどい、暗いよ、緑っぽいよ、おまけに酷い雨、これじゃあ雷雨になるかもねー。だからアサ君俺を起こしたのかな、此の子雷嫌いだし。

「雨降ってるよ」

「見りゃ分かるけど」

「……洗濯物、良い訳？」

「……うぎゃあ！！！！」

「起こしてくれてありがとうアサ君、でももうちょっと危機感ある声が欲しいってお兄ちゃん思うな」

ぎりぎりアウトな洗濯物と共にびしょ濡れになってそう言うも、そんなこと聞いてるはずのない弟はのんびりと其のびしょ濡れた洗濯物を洗濯機に突っ込んでいった。畜生、慌て過ぎて物干し竿倒した、洗い直しだ。……コレ俺のも洗わないと駄目だ。

「折角洗ったのに……また洗い直しって……何で夕立なんて来るかなっ！」

「此の前気になってマヒルに電話して訊いたけどちゃんと聞いてなくて忘れた」

「電話してまで自分から聞いたのに興味無かったんだね」

というか弟に其れ質問されて空で答えられるマヒル兄もどうかと思う。

「……ていうかびしょびしょなんだから早く着替えれば？」

「え？　嗚呼、うん、ごめんアサ君、俺の服取ってきてくれない？　ていうか風呂入っちゃうわ」

「うん」

……おお、言ってみるものだな、アサ君のことだから「怠い」の一言で両断されるかと思った。ふっ、アサキも大人になったってことだな。

そんな弟の後ろ姿を見送って、俺は一人含み笑いをしておいた。

「……ん？　アサ君其処に居るー？」

「……」

「何してんの？」

「……何もしてない」

久しぶりに湯船に浸かってみたら、脱衣所にアサ君の気配発見。

何もしてないらしいけど、一瞬で理由を理解した。

――外、雷鳴り出したね。

２４８＋優柔不断ガールズ。

「ねえミノちゃん、テナはこっちが良いと思うんだけど……」

「やはりそうか？　私も其方が良いと思った。……のだが」

「やっぱり！？　ミノちゃんも此処気になったよね！？　そうするとこっちだと思うの！　いや、総計するとこっちなんだよ！？　でも――」

「ねぇ、未だ……？」

「「もうちょっと」」

何時まで選んでるのよ此の二人は……！

リョウコです、家が近いって訳じゃないから毎日って訳にはいかないけど、最近はミノルとテナとよくこうやって近くのショッピングモールをうろつくことが多いです、だって涼しいし。

「あー、やっぱりテナはこっちにする！　総計的に見た此のビジュアルにテナは魅入られたーッ！」

「ふむ、では私は此方にしよう、ひとつ気に食わないと何もかもアレなのでな」

「――アイス選びのひとつやふたつで三十分悩むんじゃないわよ！　すっかり食べ終わったわよ私！」

ビジュアルだか何だか知らないけど、アイスは味勝負なんだから！

「すみませーん！　この宇治抹茶アイスのコーンで！」

「小豆スペシャルひとつ」

――しかも悩んでいたアイスのチョイスが二人して渋い！　ミノルは何か分かるけどテナまでそんな味覚してるのね！　ちょっとびっくりしたわよ！

「テナはあ、アイスっていうとそういうのしか食べれないの」

「え、そうなの？　甘いの無理、とか？」

「ううーん、だあいすきだけど、アイスは好きじゃなくてねえ？」

「ちなみに私は甘いものなら何でも大好物だが？」

「アンタには聞いてなかったけど分かったわよ」

何だかよく分からない味覚してるわね、トマトは大丈夫でミニトマトは駄目っていうのと同じようなもんよね。店員さんからアイスを受け取って、嬉しそうにきゃらきゃらと笑うテナを見ながら私は思った。

場所は移って休憩スペース。
こうやってのんびりするのも嫌いじゃない、中学の時は部活やってたから、そんなに友達と遊んでなかったってのが理由だと思うけれど。

「クーラー涼しいねえ……」

「そうだな、このまま溶けられそうだ」

溶けてしまえ――つい口にしそうになったじゃない。流石に女友達に酷いことは言えないわ、あんの馬鹿共（※部活の方々）の影響だわ……！

「あ、そういえばテナ、アンタって部活何処入ってるの？」

「ふ？　テナは美術部だよお？」

「美術部！？　何て意外なとこ入ってんのよ……」

「そう？　テナは中学から美術部だよお？」

「そうなの、ミノルは？　やっぱ中学から陸上？」

「そうだな、私はそうだ。しかし他部活と兼部していたよ」

「何と？」

「薙刀部」

「にゃんだって？」

つい噛んだ。

何よ、その格好良い部活。うちの学校には絶対に無かったわよ。

「ミノちゃんの薙刀持った姿はすっごく格好良かったんだよ！　テナいっつも見てたも～ん！」

「照れるな」

相変わらずきゃらきゃらと楽しそうなテナの物言いに、寸分も表情を動かさずにミノルは照れた――らしい。分かりにくいわよ本当に此の子。

「リョウコは？」

「リョウコは中学の時、何部だったんだ？」

「嗚呼、私はバド部」

「バドミントン！？　リョウコ格好良い～！」

テナは基本何でも格好良いみたいね。目が凄くキラッキラだもの。

「続けなかったんだな」

「ええ、其処まで真剣じゃなかったしね」

嫌いだった訳では無いけど、友達に勧められて入っただけだった

し。何だかんだで今の部活も気に入ってる訳だから、――完全に染まってるわね、私。

「でもあれだねえ、バド部からＧＣ部って、かなり飛んだね」

「まあね」

「ヒコク弟の影響なんだろう？」

「……はい？」

……え、ちょ、待って待って、ミノルには未だ話してないはずなんですけど。

「あ、そっかあ、リョウコはあー君にぞっこんらしいもんねえ？」

ぞっこんって古ッ！！　とか言ってる暇はないわリョウコ！！

今テナが言ったじゃない、“らしい”？　誰かに言われたのね！？

だってそうでもなきゃ自分に関してのヒコクアサキ並に鈍感なミノルや知り合ってそう経たないテナにまで知れ渡るはずがないわ。

そうと決まればどっちよ、漏らしたのは確実にあの二人しか居ない、私は一体どっちを明日にでも殴り飛ばさなければならないのかしら！？

「――って、カイちゃんが言ってたよお？」

「私はヒコク兄に聞いた」

どっちもかあのダブル馬鹿！！！！

ていうかロクジョーカイリ、ぞっこんって古過ぎるっつーの！！

「あ、あのね、其の件については――」

「大丈夫だよリョウコ！」

先ずは口止めしなければ、そう思って口を開いた私の言葉を遮ったテナは、ひとつウインク――コレがまたすっごく似合うのよ――をして、

「テナ、シギシギにしか口滑らしてないから！」

なんとまあ手遅れだったらしい一言を言ってくれた。

「テナ、アンタこっち来なさい」

「え？　なあに？」

「――アンタって子はぁあああああああああ！！！！」

「え？　えぇ！？　リョウコ！？　目が怖いよぉおおおおおおおお！？」

「ふっ、元気だな」

まあ、この後テナをどうしたかは――想像に任せるわ、ふふふっ。

２４９＋或る晴れた日のこと。

アサキです。
全力で外に出たくなかったんだけれど、先月発売の漫画やらゲームやらを買いに行かない訳にはいかないので久しぶりに外に出た。
滅茶苦茶暑い。
さっさと帰ってクーラーの部屋に篭りたい、嗚呼もう溶ける。

「ただいま」

一分一秒を争う炎天下の中に何時間も居たら昼を過ぎてしまった。
午前中に帰って来る予定だったんだけど。

「おっかえりーあーくーん、遅かったねー」

「うん。……何で廊下に居るのお前」

何故かユウヤがクソ暑い廊下に居た。……リビングに居るものだと。何かしてる訳でも無さそうだけどこんなところで何してんの。

「今電話してたんだよ」

携帯でしろよ。其れかリビングの子機でしろよ。

「誰と？」

「ユウリ」

「うっわ懐かし」

「其れ言ったら怒られるよ？」

苦笑しつつそう言われたけど、もう一年近く会ってないんだから仕方ないと思う。一年もあったらそりゃ忘れるって。

「帰郷の話？」

「そうそっ、――延々に楽しみだっていう話をされた」

ホント女版ユウヤって感じだよ、ユウリって。

とか何とか話しながらリビングに入って、物凄く素敵な温度差に悦る。嗚呼、極楽極楽。

「そういえば父さんは？　居ないことに違和感感じ忘れてたんだけど」

一年の内で半年も家に居ないもんだから忘れてたんだけど、あの人確か帰って来てたよね……？　何処？

「父さんなら部屋に篭ってるよー」

何でだよ。

「久しぶりに本読み出したら止まらなくなったっぽい」

ホント何なんだあの人。

話は戻って。

「何かね、皆でキャンプする予定なんだって」

「其れは全く聞き覚えのない予定だな」

もう山とかは絶対行かないからな、山ん中彷徨うとか懲り懲りだからな。

「大丈夫だよアサ君、川だから」

「まあどうでも良いけどね、僕興味無いし」

「其れでユウリが、『キャンプと言えば、やっぱ肝試しだよね！』とか言ってたからちょっとだけ殺意が沸いた」

「落ち着け、電話越しの人間は殺められないから」

お前に殺意を抱かせるなんて、ホラー系ってある意味凄いな。

「まあでも、オトワが怖いのとか苦手らしいからやらないとは思うけどね」

「嗚呼、そういえばあいつ苦手なんだっけ。毎回思うけど意外過ぎる」

幽霊役とか凄く得意そうなのにな。

話を聞くところ、後はただの世間話だったらしい、良かった、僕が其の電話出なくて。

「でもそっかー、あと二週間後くらいには行くんだよね、あっちは結構涼しいから楽しみだなー」

「まあね、……でもユウヤ」

「ん？」

「――お前はとっとと宿題やれ」

「はい」

先終わらせないと、後が辛いぞお前の場合。

250＋真夏の夜。

「あーつーいー」

「暑いって言うから暑いんだよ」

「言わなくたって暑いじゃんよ」

「うるせぇ黙れ」

「……アサ君の方が絶対暑さにやられてるじゃん」

こんばんは、ユウヤです。……なのはいいんだけど。

今の時刻は多分十二時過ぎ、暗いから時計が見えないし、携帯の画面を見るのも面倒臭い。

「うっせぇ黙れとにかく黙れ」

「だってさあ！」

普段なら俺やアサ君はとっくに寝てる時間なんだけど、ちょっと事件があって寝れてない。其の事件っていうのは言わずもがな――エアコンが壊れたってやつ。

「騒ぐなよ、夜だよ」

「だって暑いったら暑いんだってば！　あーもう無理寝れないよ、俺リビングで寝ようかなー！」

「勝手に寝れば？」

「やだー！！」

「どっちよ」

暑いって凄いよね、何時もなら死んだように眠りにつけるのにさ。
今はもうこうやって寝転がってることすらやってらんない、暑い、
何でエアコン壊れたし、何で修理明日だし……！
二段ベッドでごろごろごろごろ転がりながら騒ぐ俺、嗚呼もうとりあえず降りよ。

「よっこらしょ」

「……何で降りて来たの」

「ベッド転がってたって寝れないのに侘しいじゃん！」

「それもそうか」

納得したらしいアサ君も、体勢を変えてベッドに座った。
もうこのまま寝ないで良いかしら、なんて思い始めてる俺だけど、
流石に寝ないとやってけないよねー。俺はともかく普段からとにかくおねむなアサ君としては寝たいはずだし。

「どうする？　ホントにリビングにでも行く？」

「其れでも良いけどね、下手するとそのまま寝ない可能性も出てくる」

「俺も何だって良いけどねー、一日寝なくてもどーせ休みだし」

夏休みだし関係無いってことで。

にしても最近熱帯夜ばっかで死ぬんだけど、猛暑？　え？　夏って其れがデフォじゃなかったっけ？　みたいなノリですよねはい。

「あっちー」

「だから言うなって」

「でも暑いもんは暑いよー」

そりゃ寒いって言って寒くなるなら何十回だって言うよ？　でもならないんだから己の心境くらい漏らしたって良いじゃない。

「もう此処は寝れないってことで徹夜ルートで考えておけ？」

「おーけー、流石の僕も此の中じゃあ寝れん」

おお、アサ君の目が若干据わっている。寝たいけどもう寝るのも面倒になっている時の目だね！

「そんじゃあどうする？　何かする？」

「もうこうなったらゲームしようぜ、もう対戦で盛り上がってより暑くなってやろうぜ」

何て無駄な抵抗なのアサキ。

「暑さなんざにやられてたまるがこん畜生」

「ま、まあ、アサ君が其れで良いなら」

という訳で、何でか夜な夜なゲーム大会に発展したのでした、まる。

「アサキ、ユウヤ、起きてま――って、何してるんです朝から」

「ぎゃあ！　ちょ、瞬殺される！　アサ君ヒール！！」

「待てよおい！　未だゲージが足りてねぇし――！」

「……二人共？」

パジャマ姿で仲良く（？）ゲームに励む二人の姿は、実に面白かったという。

251＋久しぶりだよ。

「アッサくーん！」

僕を呼ぶその声で起きた。いや、未だ全然昼間なんだけど、とんでもない暇さとクーラーの涼しさに負けた。アサキです。

「……何」

寝ている僕を起こすなんてこと、滅多にしないユウヤだからこそ起こされると何があるのか考えさせられる。……あれ、何処に居るのあいつ。

「ごめんアサ君！　お客さんなんだけど出てくれる！？」

「……」

外に居た。どうやら洗濯物と格闘しているらしい、……仕方ない、出てやろう。

黙ったまま立ち上ってそのまま玄関へ、と思ったけど、インターフォンがあるんだから使ってみようかと思った。……普通は皆使うらしいんだけどね。

「はい」

『あ、えーっと、ワタヌキです』

「……どなたですか」

『え？　ええと、ユウヤ君とアサキ君の友達でーす』

……うん？

『あっれー、なぁシギ、此処で良いんだよな？』

『へっ！？　あってるはずっすよ！？』

……あ、此の声って。

「……ゼン君と、フドウ？」

『お、もしかして其方はあっ君？　そうそうっ、ゼン君だよ～』

『お久しぶりっす！』

何で玄関先に此の二人が居るんだよ、え、家教えたことあったか？　……嗚呼、フドウには教えたか。

「で、何か用？」

『ふっつーに遊び来ただけよーん、さっきゆっ君に電話したはずなんだけど』

当の本人せっせと洗濯物干してるけどな。どうやら僕が寝ている間に進んだ話のようだ。

とりあえず面倒なので中に通せば、久しぶりに見る茶髪と……あれ？

「フドウ、何でお前金髪になってんの」

「聞かないで欲しいっす」

何か深い理由があるらしい、久しぶりに見るネガティヴモードの表情だ。

一ヶ月前までただの黒だったはずの髪がすっかり金髪になっている、僕の周りというのはどうしてこう髪の色がころころ変わる人多いんだか。

「あ、二人共いらっしゃーい！　ちょっと待ってて！　此れ終わったら飲み物出すから！！」

此れ、というのは勿論洗濯物なんだけれど。せっせと忙しなく動くユウヤを目で追ってから二人は、ソファに座る僕を見た。

「良い嫁さんになりそうだな」

「誰のだよ」

誰でも構わないけど、あんな夫絶対嫌だと思うんだけど。

しかしユウヤがああ動いているのにこのまま座っているのも気が引ける――普段なら全く感じないけど――。という訳で仕方ないから飲み物を出してやることにした、ありがたく思いやがれ。

「いやー、すんずしー、本当に外あっつくてさあ」

「暑かったっすねー」

「じゃあ来なきゃ良かったじゃん」

「暇だったんだから良いじゃーん、第一ゆっ君が言ったんだぜ？うち来れば？　って」

知るか、僕は寝てたんだっつの。

「ヒコク君は外出たくないだろうからってお兄さんが仰っていましたし！」

「……まあ確かに」

此の糞暑い中、僕が目的も無く外に出る訳が無い。ゼン君もフドウも汗びっしょりじゃないか、余計出たくないね。というか前から言いたかったんだけどフドウ、お前何でユウヤに対して敬語なんだよ。

「お待たせー！　ってわぁ！　アサ君お茶出してくれたんだー！！」

「うん」

「珍しいね！　滅多に動かないのに！　ありがとっ！！」

ある意味当然なことな気もするんだけれど、まあ確かに滅多に無いことなので黙っておくこととする。

「ゆっ君偉いねぇ、家事なんて俺一切しないけど」

「あははっ、俺達ん家は親が日中居ないからね」

「今は居るけどな」

集中し出したら止まらない父親がな。今は本を読み出して止まらない様子だけど。

「でも、俺が好きでやってるんだから良いんだよー」

「そして僕は嫌いだからやらない」

「正論だねあっ君」

苦笑されましたが何か。家事なんて出来る訳無いじゃん、やって面倒を増やすなら僕はやらないよ。言われたことに対してひとつ溜息を付けば、ゼン君に苦笑されたんだけれど。

「――というこーとーでー、四人で何かして遊びましょー？」

「やっほい賛成！　といってもうちゲームくらいしか無いけどね！」

充分に涼んだところでゼン君が何故が立ち上がりつつ言った。ユウヤもノリノリなところ悪いんだが先に言っとく、僕は寝起きだ。

「げ、ゲームっすか……ボク、そんなに得意じゃないけど大丈夫っすか？」

「大丈夫じゃね、どうせゲームだし」

よく考えるとフドウ抜けば皆ＧＣ部だな、そういやあの先輩共元気だろうか。

「よーし！　そんじゃあ勝負勝負ー！！」

「おー！」

はあ、もっかいだけ言わせて、僕、寝起きだってば。

252＋GC部の上級生達の日常。

「ちょっ、うおおおっ！」

「ふふっ、この勝負、私の勝ちね」

「相変わらずだなサチト、落ちゲーの弱さ」

ちっくしょおおおおおおっ！　俺だってなあああああああっ！　という訳で俺だ、サチトだ、仕方ねぇじゃん！　決して俺が弱い訳じゃねぇ！　フウカの落ちゲーのプロさがぱねぇんだ！！！！

とか何とか。

只今俺達はハヤの家でゲーム大会――という訳ではない。へん、俺達だってたまには違うことすんだよ！　お盆に入る前に宿題潰しちまおうっていう話をしていたんだが、俺とフウカが早速飽きて休憩にしている。目の前にゲームがあるのに宿題なんざやっていれるかーい！！

「お前達……何の為に俺の家に来たか、覚えてるよな？」

「覚えてるけどさぁ」

「疲れたんだもん」

「……はあ」

掛けていた眼鏡を外して、ひとり机に向かっていたハヤは深く深

く溜息をついた。……ていうか、お前こそ休めよ、家ン中で倒れるとかやめろよ？

「ハヤはもう宿題終わったの？」

「え、嗚呼、俺は後人権作文だけだが」

「早ッ！！　何其の脅威のスピード！！　キモッ！！」

「人を気持ち悪がってる暇があるならお前はとっとと続きをやれ」

一番続いてないだろうが、と再び溜息をつく生徒会長さまのお姿は実に様になっていました。

畜生、俺だってな、俺だってやる気にさえなれば宿題のひとつやふたつやみっつ（※以下略）

一時間後。

「ハヤ、このゲームやっても良い？」

「嗚呼、データ容量がひとつ余ってただろ、其れ使って構わないぞ」

ちっきしょおおおおおおお！！！！　何なんだよ此の二人！！

俺だけ取り残して宿題全部終わらせやがった！！！！！

フウカに至っては一緒にゲームやってた癖にスピードぱねぇじゃねぇかよオイ！　此れが差か！？　秀才と凡人の差なのか！？

「……」

「サチト、手が止まってるぞ」

「うるせぇ！　お前は何時までもパソコンに向かってないで少し休みやがれってんだ！　身体に障んぞ！！」

「……心配掛けてすまない」

愚痴を言うつもりが何時もの癖で呼び掛けに終わってしまった、俺の馬鹿！

GC部――言われなくともゲームクリエイト部はゲームをクリエイトしてこそGC部なんだが、やってんのは本当にハヤだけであって、他は基本ゲームをやっているだけである。部長の俺でこそ何も出来ないからな！　情報の授業なんざ苦手分野だぜ！

ハヤはきっと今も何か作っているんだろうけど、完成するまで見せてくれないし、其れまでは何時も放っておく。案外安易なゲーム作るんだけど、其れが面白いんだよな全く。

「サチ、サチト」

「ん、何だよフウカ」

「此のコマンドやって」

「……ははん、此の天下のサチト様に頼るとはお前もなかなか――」

「面倒臭い」

「ゴルァ！！」

「ほらサチト、早くやってやれ、そしてお前は宿題に戻れ」

「ったく――って、ハヤ、お前何立ってんだ？」

「嗚呼、休憩にしようと思って飲み物を取りに行こうと思ったんだが、――立ち眩みで目の前が真っ暗だ」

「だあああああッ！！！！！　お前って奴はあああああッ！！！！　良いからっ、俺が持ってきてやっから座ってなさい！！」

「いや、しかし」

「良いから！！」

ホント、手の掛かる奴等だよ！！

でもこんな日常だから、楽しいのかもしれない。

253＋燦燦と輝く太陽こそ、今は本当に忌々しい。

「あー、懐かしいな此の感じ」

良い意味にも悪い意味にも聞こえるそんな言葉を呟いたマヒルは、どうやら今回の場合後者だったそんなテンションで脱力した笑みを見せた。

「ホント、何度来てもなーんにもないよね」

「んふふっ、其れが良いんじゃなーい」

しかしユウヤは楽しそうだし、久しぶりに会った母さんはもっと楽しそうだった。父さんは言わずもがな実家だしな、楽しいだろうよ。

アサキですが。

大分前から言っていたように、父さんの実家にいざやってきました、本当に何も無ぇったらありゃしない。先ずツッコミたいのは何故に車で実家に直接行けないのかってことだ、どんだけ田舎だバカヤロウ。

荷卸を――主にマヒルが――していれば、急にユウヤがきょろきょろと辺りを見回し始めた。そんなに見なくてもどうせ何も無いだろうが。

「どうしたのユウ君？」

「いや、何時もならそろそろユウリがそこら辺からやって来て俺に

飛び蹴りを喰らわせる頃かと」

鳴呼、そういやそうか、前は後ろからやって来たよなあの人。…
…でもあの時は確か僕等が無視したからじゃなかったっけ。
僕もつられて見回してみたけれど、どうもあれが居る気配が無い。
ていうかユウリが居るなら探す前に見つかるっての。――あれ？
何だ此の既視感、何でしょう此れ。

――トスッ。

「……え？」

「……どーん」

背後からの衝撃。
――不覚、背後を取られた……！　って冗談はさておき。

「……何してんの、オトワ」

「やべっ、バレた」

声出しただろうが。
後ろを見ることなく当ててやればそいつ――オトワはあっさりと
僕から離れた。そうか既視感はアレだ、こいつの気配の無さだ。

「あっれー？　今回はおー君がお出迎えなのねぇ」

母さんも今気付いたらしくちょっと驚いた風だったけど、直ぐさ

ま何時ものへにょんへにょんな笑みを浮かべた。しかし当のお出迎え役であろうオトワは――……何故だろう、物凄く不機嫌気味だ。

「……」

「オトワ？」

「おう、オトワ、お前が来たんか」

「おっとー！！」

「……」

マヒルとユウヤが声を掛けても反応が無い、何が不満だったのか分からないぞおい。

「おー君、どーしたの？」

僕同様不思議に思ったんだろうな、母さんがオトワの身長に合わせてしゃがめば、小さく首を傾げた。此の人は本当、何処まで若いんだろうか。

「……お姉が酷いんだよ」

「え、ユウリが原因？　どうしたの、ユウリが原因でオトワが不機嫌になる理由なんてあるの？」

ユウヤの意見に同意見ですが。

「お姉、皆が来るって言って」

「うん」

「――浮かれ過ぎてダウンした」

「「「馬鹿じゃねぇの」」」

つい口に出してしまった、兄貴達も同様に。母さんにはこら、と一言言われたが僕等は何も悪いことは言ってない。

「今日皆で一緒に遊び行くって言ってたのに」

どうやら此の小学六年生、表情に似合わず皆で遊ぶのを楽しみにしていたらしい。……でもまあ、ダウンした姉ちゃんの方はもっと落ち込んでるんだろうな、遊べないプラス最愛の弟悲しませる、だから。

「あらあら、残念ねー。でもおー君大丈夫よっ！　今回は長めに居るんだもん！　今日が駄目でも沢山遊べるから、ね？」

「……うん」

若干納得して無い風だったけども、オトワは小さく頷いた。

……さて、とっとと実家、行きますか。

「うわあああああああああああああああああっ！！！！！！！！！」

「ユウリ、落ち着きなよ……」

実家には案の定、弟に嫌われたと思い込んでいる馬鹿が居ました、
本当に嫌われる前にとっとと寝ろよ。

２５４＋暑い日に食べたいもの。

「よおおっし！　明日は遊ぶぞおおおおっ！！」

数日で夏風邪から復活した馬鹿が何か言ってる、アサキです。
どう考えてもそこまで騒ぐ内容じゃないと思うんだけれど、もうツッコむのが面倒だから僕――基僕とマヒルとオトワはそんなユウリをスルーしておいた。ちなみにユウヤはハザラさんと母さんと買い物に行った。

「キャンプ行くからなキャンプ！　近くの河原でバーベキューすんぜ！」

「頑張れユウリ」

「頑張れ」

「え、ちょ、アサキもマヒル兄も手伝ってくれないのかよ!!　男手って大事だろうが！」

「じゃあ、俺が手伝おうか？」

「さっすがはオト～！」

「いや、オトワがやんなら俺やるよ」

正直アウトドア行事とか無理なんですけど、でもオトワがやるっ

てのにやらないのはどうかと思う。マヒルもそう思ってたらしく即答で意見を切り替えたけどええ、僕はやりませんけど？

「……疲れた」

「本当、何も無いのって疲れるよな」

「騒がしいよりはマシだよ」

「おやオトワ、何故お姉ちゃんを見てそんなことを言うのかな？」

それじゃなくても騒がしいのが多いんだから、どうせならユウリも着いて行けば静かで良かったのに。

「でもあれだよな、オトワ」

「ん、何、アサキお兄」

「僕等が居ない時、ユウリとハザラさんのテンションを一人で総受けって怠くないの」

「ちょ、アサキ何聞いてんだよ」

「怠いよ」

怠いんだやっぱり。

ユウリは何だって！？　とでも言いたげな表情――ていうか今知ったのかよ――をして「おおおおおとくん！？」と凄く吃って五月蝿かった、マヒルは陽気に笑ってるだけだし。

「でも、見てる分には面白いから良いと思う」

寛大な心だ、僕だったら蹴り飛ばしている、うちは普段一人で良かった。

「お茶しばきながらとかが一番良いと思う」

「茶ァしばきながら母親と姉ちゃん見てんのかお前は」

暢気というか、マイペースというか。

騒ぐ二人を見つつ茶をしばくオトワ――何故だろう、とても容易に想像出来るんだけど。かくいう僕も基本そんなな自覚があるけれど、小学生の頃からそんなスキルがあったかと言われれば否だ。

「楽しいよ、お姉もお母さんも実に五月蠅くて」

「褒められてるのか……？　これは褒められてるのかあたし……？」

「そういうことにしとけば？」

そうしないと五月蠅いからね。

「たっだいまー！」

「おっかえりー！　ママ達！　……ん、ユウヤ、何持ってんだお前」

「え、此れ？　ホットプレートだけど」

「今日のお昼はこれでお好み焼きよ～！！」

「「暑ィよド阿呆」」

空気読め。

255＋サバイバル的なこの状況。

「うおおおおっ！　肉っ！」

「肉ばっかり食べてないでちゃんと野菜食えよユウヤ！！」

「そういうお姉もね」

こんにちは、今日も暑いなー、マヒルだ。
前日にユウリが言ってたように、今日は真昼間の此の糞暑い時間にバーベキューをしている。さっきまで近くの河原でバトルロワイヤルしてたはずの二人は未だ元気で流石に兄ちゃんびっくりだぜ。
鉄板の前で再びバトロワを繰り広げている二人、……そんなに急がなくたって減らんぞ。

「アサキお兄食べないの？」

「暑いから要らない」

暑いからこそ食うんだろ？　とは思うものの、ユウヤ達が騒いでいた間も延々と休憩していたはずなのに、一番疲れている弟には何も言えなかったんだが。確かに暑いよな、避暑に来てるようなモンなはずなのに無意味ってどうよ、今年の夏は意味が分からねぇ。

「アサ君食べなきゃぶっ倒れるよ！！」

「そうだぞアサキ！　肉を食え肉を！！」

「だからお姉は野菜を食べなよ。……ねえアサキお兄、せめて野菜とかだけでも食べられない？　本当に倒れちゃうよ？　俺取ろうか？」

「……」

……うん、オトワ様様だな。普段は絶対に頑なに拒否るであろうが、健気な従弟の言葉を無碍には出来ないようだ。オトワは気持ち楽しそうにいそいそと野菜を集め出して小皿に盛り、ついでにユウリの皿にもピーマンを乗っけていた、……出来た弟だ。

ちなみに俺はもう食った、水上戦バトロワがなかなか終わらないものだから先食った、だって俺が全部やってたのにあいつ等来ねぇんだもんバカヤロウ。

「ぎゃ、ピーマンが！」

「食べなよ、高校生でしょ？」

「其れと此れとは別なんだよオト……！」

どっちが年上なんだか。

暫くもくもくと租借に励んでいた餓鬼共だが。

「――あり、そういやママ達は？」

俺にしてみれば今更過ぎる一言を吐きやがった。

「そういや居ないね、何処行ったんだろ？　アサ君知ってる？」

「マヒルが知ってる」

其れを知ってんならお前も知ってんだろうが。相変わらず野菜をもぐもぐと食ってるアサキを一瞥してから、俺は頭を掻きながら大分前に親共が去っていった方向に目をやった。

「何でも買っておくものがあるんだとよ、飯は食ったから買い物して直で家帰るとよ」

「「ふーん」」

先程まで死闘を繰り広げていた二人の気の無い相槌を見てから、俺はひとつ溜息をついた。

「よーっし！　腹ごしらえも済んだし、再び河原へごう！！」

「よっしゃあ！　オトも行くか？」

「……行く、アサキお兄も行こう？」

「え、でも、片付けあるよ」

「俺がやっとくから、たまには行って来い」

寧ろアサキの口から片付けって言葉が出て来たことに俺は驚いたが、此処は素直に遊びに行かせよう。だって普段行かねぇもん、こういう時に少しは動かさないと……！

川に落ちるなよー、なんて。

あって無いような注意をして、俺は餓鬼共の様子を伺いながら機材の片付けに取り組んだ。

256＋夜の余暇。

引き続いて俺だ、……嗚呼、マヒルな。

「ふっふっふっふっふ――」

夕飯を終えて、何だか遅く帰って来た親三人衆共々飯を終えてから。何故かハザラさんが不気味に笑みを浮かべ出した。

「頭痛いし寒い」

「え、大丈夫アサ君、クーラーダイレクトに浴びてるからじゃない？」

「大丈夫かよ其れ。オトワ、毛布持って来てやんな、……あ、姉ちゃんが持って来よっか？」

「ううん、俺が持って来る」

「あー、今日は動いたから疲れたわー、もう眠いー」

「お疲れだね奥さん、先に寝る？」

――まぁ、俺にしか聞こえてないみたいだったけど。

本人も寂しかったんだろう、気付いてる俺ですら気づいてない態度だったものだから、がたん、と座っている椅子を元気良く鳴らして思い切り立ち上がった。体調不良を訴えて寝転がるアサキとそん

なアサキに毛布を掛けるオトワ以外は、そんなハザラさんを訝しげに見た。

「皆っ！　夜は未だ未だ始まったばかりなんだよ！？　ほらほら義姉ちゃんも！　もうお眠だなんてイイ歳してねーるーなー！！」

「寝てな――いひゃい、ほっへひっはんはいでー」

「こらこらハザラ、レディが何してるんですか」

我が家の母上の頬を軽く――だが発音出来ないくらいには強く引っ張って、ハザラさんは再び叫んだ。

「ほらほらっ義姉ちゃん兄ちゃん！　折角買って来たんだから！」

「……嗚呼！」

あ、母さんが動いた。

ハザラさんと同じく思い切り立ち上がり、ぱたぱたと小走りすれば寝転がるアサキを飛び超えて――いこうとしたらしいが愛息子を飛び越えることに抵抗があるらしく小さく迂回し――面倒臭ぇな――玄関へ向かった。そして其処に置いておいたのであろう袋を持って来れば、唖然とする俺達に向かって母さんは、意気揚々とこう一言叫んだ。

「皆っ！　――今から花火やんよっ！」

「わー、綺麗だね！」

「いやっほう！！」

騒がしいなおい、でも気持ちは分かる、手持ちの花火であろうと花火はテンションが上がるものだ。

昼よりは少しだけ涼しくなった、といっても未だ気温は三十度を裕に振り切ってるんだけど。田舎ならではの縁側のある中庭で、俺達は母さん達がたらふく買って来た手持ちの花火をやっている。ま、俺あ見てるだけなんだが。

「あ、火ィ消えちゃった」

「俺が付けてやんよ！」

アサキの呟きにユウヤが意気揚々に名乗り出たが、案の定チャッカマンでないただの煙草などに使うライターはなかなか付かない。意気揚々としてたのは最初だけじゃねぇか、途中でやる気失って「父さん、パス」って諦め早ぇよ。

「どりゃあああああ！！」

「お姉、花火で其の掛け声は無い」

此方の姉弟も楽しいそうで何よりだ、親共はそんな楽しそうな子供達を見ているだけで充分らしく、俺の横――要するに縁側に座っている。……かっこ、ハザラさん抜く。

「わあ！　三色花火って楽しいね！　ほら見て見て、ピンクから緑になったよー！」

「……あの人、確か三十後半だったよな……？」

「良いんじゃないですか？　ハザラは昔から元気だけが取り得だったから」

まぁ、兄貴がそういうなら良いんだけどよ。

「はーちゃんのこと言う暇あったらあんたもやりなさいよ、あんた未だ二十……一？　だった、わよね？」

「息子の歳を忘れるなーい」

まぁ、あってるけども。

「そうよ、二十一なんて未だ未だ子供でしょう？　だったら一緒に花火とかでわいわい楽しみなさいよ！」

「はぁ、嫌だよ面倒臭い、母さんがやれば？」

「むきーっ！」

何だよ、何で怒る（？）んだよ。

困惑しながら隣の父さんを見れば、ふふっ、と何時も通りの含み笑いを浮かべた父さんが「マヒルにも楽しんで欲しいんですよ、奥さんは」と要約してくれた。毎度のことだが凄ぇな父さん、何で分かるんだ。

「毎回言っているでしょう？　奥さんも僕も、マヒルには迷惑掛けっぱなしだからって」

「じゃあ俺も言ってねぇか？」

笑顔には笑顔で。父さんと俺とじゃ笑顔の種類が大分違うだろうけど俺は言う、もう恒例となった、一言を。

「父さんと母さんは、仕事のことだけ心配してりゃ良いんだよ。強いて心配するなら双子だけで良い、何かあっても、俺がどうにかするから」

片膝をついてそう言えば、父さんも母さんも顔を見合わせる。其れから俺を見て、母さんはひとつ溜息を、父さんは小さく苦笑した。

「分かってるわよ、もう」

「ありがとうございます」

と、つられて俺が笑えるような一言を吐いた。

「でも」

「……？」

「今くらいは行って来なさい」

「……はい？」

え、え、何其れ、どういう――

「ぎゃー！！」

何というジャストタイミング、明らかに弟の声が聞こえた。

仕方がないので見てみれば。

「た、ちょ、うあああああっ！　来んなしコノヤロウ！！」

何故かねずみ花火に追いかけられているユウヤを見つけた。

「まるで僕の生き写しみたいだ、ミステリー」

しかもやったのお前かアサキ。

「ほらマヒル！　助けてあげないとっ！！」

「双子のことは、マヒルがどうにかしてくれるんだよね？」

そして両親はそう言って、俺が溜息をついたのなんて知らない振りをする。

「――わーったよ、仕方ねぇな」

俺が靴を履いて縁側から降りれば、何とも満足そうに微笑んだ二人。

――ま、此れも親孝行の一環になるんなら。

「ぎゃあああああ！！！！」

「よし、次」

「アサキ、ナイス鬼畜だな！」

「容赦無いよね、ていうかお兄がやるねずみ花火なんで縦にユウヤお兄に向かうの、ある意味凄いよ」

「アサキ、そろそろ許してやれ、な？」

たまにはこういうのも、良いんかもしれねぇな。

257＋馬鹿と馬鹿との思い付き。

アサキですが。
気付けば夏休みが終わりそう、ぶっちゃけユキとかアスカ君とかの私立組は既に学校始まってるらしいんだけど。ちなみに私立組って言っても僕の知り合いじゃあ後ミトウくらいだがな。

「うあー、一生夏休みなら良いのになー」

「其れはあたしも思うよー」

さっきから引っ切り無しにユキから来るメールを捌いていれば、目の前ではユウヤとユウリがぐでっていた。何なのお前等何時もの元気は何処。

「夏休み終わったら三人共帰っちゃうしさーあ？　学校暑いしやってらんねーよー！！！！」

「だーよーねー」

二人して畳に寝転がっているもんだから邪魔で仕方ねぇよ。
完全にスルーしつつカチカチと携帯を鳴らしている僕、しかしどんなにだれていたってこいつ等の元気は何時だって唐突にやって来ることを知っている為気が抜けな――

「そうだっ！　ねね、最終日に皆でサプライズパーティーしようぜ！」

そらみろ。
いきなり起き上がったユウリが馬鹿みたいに思い付きの発想を繰り広げてやがる、サプライズパーティー？　一体何のだよ。

「良いね、やろう」

「何でだよ」

其処で何故同意出来るんだお前は。我が兄ながら本当楽しそうなことには何だって飛び付きやがる馬鹿だ、くるりと仰向けから上半身だけ起き上がらせて、無駄にきりっとしたキメ顔でユウヤは言った。

「さっすがユウヤ！　あたしの従弟なだけある！！」

「ふっ、まぁ、俺だからな」

「おーい、此処にもお前の従弟が居んぞ、ふざけろテメェ等」

とりあえず話をさせろ、そして話を聞け。ユキには悪いが一旦携帯から手を離して二人を一瞥する。

「何でパーティーすんのか分かってんのユウヤ」

「……楽しいから？」

「黙れ」

「だ、だってアサ君が聞いたんじゃない……！」

「そういうことは聞いてねぇんだよド阿呆」

「まぁ、パーティーをする理由はユウヤので二割は当たりだよ」

じゃあ過半数を占める方の理由教えろユウリ。

「八月の最後、――ママの誕生日なんよ」

「「……」」

ハザラさんの？　確かに何処からどう見ても夏生まれっぽいから驚きはしないけれど。

「ユウヤやアサキ、マヒル兄にシユウ伯母様やシンヤ伯父様、皆が居るなんて滅多に無いことじゃん！　だから、ママはきっと喜ぶと思うんだ」

「二割は楽しいからなのにか」

「其処は言っちゃ駄目だよアサ君」

だって言ってたじゃないか。

とまあ人の傷口抉るのは後にして。途中からユウリの目が本気になってきたのには気付いたし、此処はユウヤにアイコンタクトで尋ねてみた。

「やろうっ！」

聞くまでもなかった。

「よーし！　夏休みの最後の思い出作りも兼ねて、皆でハザラさんの誕生日会をやろう！！」

「ユウヤ……うん、ありがとな！」

やれやれ、此の後先を顧みない馬鹿共め。お前等だけで何が出来るというのだろうか、僕が加わったところでマイナス要素にしかならないのは自分が良く知っている。だからたった今玄関からした、「ただいまー」という声の主こと我が家の長兄にでもとっとと話をしてみよう、だなんて思った。

358＋最終日に向けて。

「へぇ……ハザラさんに誕生日あったんだな」

そりゃあるだろうよマイブラザー、そんなツッコミが入るべき一言を呟いたのは紛れも無い我が長兄なんだけども、アサキです。

「ハザラさんて、何か其処ら辺から生えててもおかしくないイメージが……」

我が兄ながら珍しく馬鹿みたいな発言をしている、どうしたんだよマヒル。しかも真顔だからツッコむにツッコめないよ。

ハザラさんが畑――まあ少し大きな家庭菜園程度だが――にうちの両親を連れ出してしまっている所為で、食事買出し係と化しているマヒルが帰って来て、先程した話を打ち明けた途端こうだ、お前も所詮はユウヤの兄貴という訳だよ。

「まぁ、サプライズパーティーは悪くねぇと思うけど？」

「だよねマヒル兄！　さっすがは我等が司令塔！！」

「何時から俺が司令塔なんだよ、つーか今話聞いただろうが」

ユウリに集られて苦笑しながらそう言うけど、其処まで嫌という訳ではないみたいだ。

「まぁパーティーってくらいだからケーキとか買って来て、其れで

充分だと思うぜ俺」

「そーは行かないんだよマヒルお兄」

うん、背後から声した、うん、背後で何やってるのかなオトワ。

マヒルの買出しに付き合っていたオトワが、何故だか僕の背後からそう言った。何お前、僕を驚かすのが趣味なのかよ。一切顔には出さなかったけど、オトワに前に来るように言ってから僕は思った。

「？　どういうことだ？」

「うちの近くに、ケーキ屋さんが無い」

「さっすが田舎！」

何がそんなに楽しいんだユウヤ。

「じゃあ作ればいいだろ、ユウヤが」

「嗚呼そうだよ、ユウヤが作れば良いよ」

「そうだね！　俺が作れば――てちょい待てリトルブラザーアンド……」

「ｏｌｄｅｒ　か　ｅｌｄｅｒ　か　ｂｉｇ　な、まあ兄弟を表す単語は別にそうつけなくても――」

「はいはい分かりましたオールダーブラザー！！　今は勉強はいいです！！　畜生発音良いなっ！！！！」

ユウヤがキレた、無駄に英語使おうとするからだマヒルにツッコまれるんだよ。

「で、俺ケーキとか作ったことないよ？　大丈夫かな？」

「お前なら出来る」

「え、根拠無くね？」

「ママはユウヤが作ったケーキならまずくても食うから安心しろ」

「出来なくない！？　ねぇ、出来なくない！？」

無駄に自信満々なユウリの顔にも、ユウヤはそうやって取り乱していた。確かにユウヤがケーキ作るのなんて見たこと無いな、あるとしたらランの弟がお菓子作り大好きってことくらいじゃないか、あれ此れ他人。

「まぁとにかく、やるっきゃないからやるんだユウヤ、ユウリも手伝ってやれよ？」

「勿の論！　あたしに任せればもう何も心配は要らないね！！」

「俺は母さん達の様子見てくるわ」

「じゃあ俺は足りないもの買ってくる、アサキお兄も一緒に行ってくれる……？」

「……良いけど」

オトワの頼みだけは断れないんだよな、僕。
という訳で各々分かれて明後日の為に急遽準備することになった訳だけど。

……大丈夫かな、此れ。

259＋さいしゅーび！

こーんばーんは、シユウママよん。

「はー、疲れたねー義姉ちゃんっ！」

あははっ、そーねーはーちゃん、なんて言ってみるけど、ぶっちゃけはーちゃんの非でなくすっごく疲れたわよ私、もう十一時よ。何でそんなに元気な笑顔で居られるのかな、あれだけハードな畑仕事してるのに。お義姉ちゃん都会っ子って訳じゃあないけどやばいわコレ、明日から仕事あるんだけどまともに動けるかしら？　そんな心配をしつつもはーちゃんと一緒にお家に帰る。

それで――んっふっふ、そうよシユウ、今日は帰ってからが勝負なんじゃないの、うふふふふ。昨日の内に聞いてるんだからね？　はーちゃんのお誕生日会について！

「んー？　義姉ちゃん何笑ってんの？」

「ふい！？　い、いーえ！？　全然笑ってませんケド！？」

「そう？　なんか変な表情してたよ？」

「だ、大丈夫大丈夫！　なーんでも無いわよっ！？」

ふう、流石ははーちゃん、シンヤ君の妹なだけあって肝心なところが鋭いわ……！　っというか私が隠し事とか苦手なんだけどね、うん。

昨日ユウ君に『ハザラさんには内緒だよっ！！』って可愛く言わ

れちゃってるもんだから隠し通さねばいけないのよ！　だからお家に着くまでは何としてでも秘密を死守するんだから！　ちなみに昼間の内にバレなかった理由は、秘密とか考える暇が無いくらい死にそうだったからなんだけどね――。

「たんだいまーっ！！！！　――あり、ねぇ、義姉ちゃーん」

「ん？」

先に玄関に入っていったはーちゃんが、後から辿り着いた私を呼んだ。どうしたのかしら。

「うちが暗いんよ、どーしたのかな」

「え？　んー、さぁ……」

ふっふっふ、最初は暗くして、後からクラッカーか何かでパーンって魂胆ねっ！！　私には何の情報も入ってないんだけど、其れくらいは理解出来るんだからねーだっ！！

「皆ー、どーこーだい？」

「シンヤくーん？」

五分後。

あれ、居ない、誰も居ない。

……あれ？

「ぬぬ、何処に行ったのかなぁ」

「さぁ……」

ちょっと、予想大外れよ私、何処探しても皆居ないんだけど？

え、本当に何処（いずこ）よ、私とはーちゃんを置いて、どっか行っちゃったってことは無いだろうし。だ、だってユウ君がサプライズパーティーだって言ってたもの！　私はユウ君を信じるわよ！？

「……」

「……はーちゃん？」

とか何とか内心で格闘していたら、はーちゃんが俯き加減に何かを考えている風だった。どうしたのかしら……？

「義姉ちゃん」

「な、何？」

「――神隠しだよっ！！」

「――はい？」

ごめんシンヤ君、はーちゃんが壊れた。

「此れだけ探しても居ないってことはっ、だよ！　きっと家に居る皆、神様に隠されちゃったんだよ！！」

「……そ、そうかしら」

「ぜーったいそう！　むむむ、神様め、私の家族を返せー！！」

中庭に出てきてた私達、そんな状態ではーちゃんは、空に向かって大声で叫んだ。田舎って良いわねー。

「――そんな訳無いでしょう？　昔から変わりませんね、貴女は」

――今のは私の声じゃない。っていうか、聞き間違えるはずないんだけどね、私もはーちゃんも。だって、私からしてみれば愛しの旦那くんだし、はーちゃんからすれば、――大好きなお兄ちゃんの声なんだから。

「え、兄ちゃ――うひゃ！！」

「わっ！！！！」

何処からの声だろうと辺りを見回した私とはーちゃんだったけど、次の瞬間に目の前を遮ったのは、真っ黒の影。ちょ、ちょっと私もびっくりしたかな。

はーちゃんと私はちょっと――いや大分――驚きながらも、其の影を視線で追いかけて――

「どうも、二人共」

「兄ちゃん!?」「シンヤ君!」

其れが其の人だったことに驚く。かっこはーちゃんだけ、私は…

…うん、シンヤ君なら何だって良いや。

「ママー!」

「お母さん、何て阿呆みたいな顔してんの」

「ちょ!　ユウにオト!?　何で皆して屋根の上に居るの!?」

続けて掛けられる声にはーちゃんは驚愕だけど、此れには流石の私も驚愕ね。どうしたの皆して。

「よっと!!　ほら、オトも降りてきて!」

「分かってる、お姉がアクティヴ過ぎるんだよ」

誰の手も借りずに降りてきたユウリちゃんに、シンヤ君の手を借りて降りたおー君。もう何が何だか分かってないはーちゃんは、キョドるとかもうそういう問題でなく頭上にクエスチョンマークを浮

かべまくっている。屋根って凄いわね、平屋だから出来る芸当だと思うわ。

「ね、ねぇねぇ、何してんの？　え、……？」

「ふっふっふ、ママ！　此れを見るがいい！！」

混乱中のはーちゃんに対し、少し大袈裟にユウリちゃんは大きく手を広げる。差すはリビング、おー君が明かりを付ければ、其処に広がるのは――。

「「お母さんっ！　お誕生日、おめでとー」！！」

「……わあ」

普段の貧相な机の上に並べられる沢山の料理に、手作り感溢れる大きなケーキ。其れはそう、誰かを祝う為だけに用意されたもの、此の場合は勿論――此の、唖然と明かりの中を見る、はーちゃんを。

此れと言って特別なことなんて無いんだけど、其れはそう、たった二人の子供から祝われるっていう、最高のスパイスがあるでしょう？

「此れ、ユウとオトが用意したの……！？」

「ううん、全然」

「用意はほぼ、うちの息子達ですよ、ハザラ」

「……あり？」

屋根から飛び降りてきたら上機嫌――って訳じゃないだろうけど、普段より三割増くらい笑顔なシンヤ君の説明によれば。

『うむ、ケーキのスポンジの出来、なかなかであるな！』

『うおおっ、ユウヤすっげぇ！！』

『……マヒルお兄とアサキお兄、何してんの？』

『え？　掃除』

『を、手伝わさせられているアンド、家の電気が一時的につかないようにブレーカー弄ってる』

という訳で、二人はほぼ驚いてたりしてただけみたい☆

でもまあ、子供達っていうのは其処に居るだけで良いってもんだからね！　私は其れで良いと思うの。

「あ、ありがとう皆あああああ！　あたしはてっきり神隠しにでも遭ったのかと……」

「ふふ、何を言ってるんだいハザラ？　もし子供達が神隠しになんて遭ってたら僕が神様をぶち殺してるよ？」

うわあシンヤ君素敵。

「あははっ！　其れもそーだよねっ！　兄ちゃんも昔から変わらな

いなぁ！！」

昔からそんなだったのシンヤ君、ちょっと初耳よ其れ。怖いわよ、流石に私もびっくりよ。ってか今日だけでどれだけびっくりすれば良いのかしら！！

「ささっ、ママ、早く中入って入って！」

「う、うん！　ってかユウリ、三人は？」

「あー、良いの良いの、三人は放っておいて」

「でもー」

「良いから、ね、お母さん」

「……うん、分かったよー」

少しの間きょろきょろとうちの息子達を探していたはーちゃんだったけど、おー君の言葉で諦めたみたい。ふふっ、良いんじゃないかしら、家族水入らずっていうのも！　企画だけはうちの息子達ってだけだしねん。

でも。

「ねぇねぇシンヤ君」

「はい？」

「うちの息子君たちは？」

「嗚呼、――上、ですよ」

……上？

「あら」

「よう、お帰り」

シンヤ君に梯子を出して貰って屋根の上を見れば、其処にはマヒルと――寝転がってる双子が居た。というか――

「其方は、寝ちゃってるのかしら？」

「ああ、寝てるよ、危ねぇから見てんだ」

うん、そうよね。もう十一時ですもんね。其の子達が起きてるなんてのは珍しいものね。

マヒルは片膝を立てて後ろ手を屋根について、……ただのそんな姿なのに、何で此の子はこんなにも様になるのかしら。自分が生んだのにどうとも思えないわ、何故かしら？

「どうするの？　下ろす？」

「いや、父さん曰く、寒くは無いから此処で寝てても問題無ぇそうだ」

「そ、流石は実家ね！」

ふふっ、可愛い寝顔ねぇ、二人の寝顔を見て、私は一生親馬鹿でいいや、なんて思った訳で。

マヒルが持ってきたのかは知らないけど、薄いタオルケットを掛けてるし、大丈夫よね？　雨も降らないし。

「俺も此処で寝るから、母さん達は心配せんで良いぜ？」

「ふふっ、元から其のつもりよん」

そう言えばマヒルは、一瞬キョトンとしてから笑った。……ちっくしょう、格好良いぞこいつ。

「それじゃね、お休み」

「嗚呼、下宜しく」

夏休みがすっごく楽しくて、明日から仕事なんてすっごく嫌だけど、今日の思い出を胸に、明日からも頑張ろうと思います！　はーちゃんの嬉しそうな顔とか、シンヤ君の大胆な発言も久しぶりに聞いた訳だしね！

よし、下のパーティーに加わってこようかなっ！　いっくぞー！！

２６０＊閑話＋主人公達より作者が誰よりだれてる。

はいはいはーい！　夏休みが終わったよー！

「そうですね、ていうかどうしたの作者そのハイテンション」

「ユウヤ、聞いたらいけないんだよ。『お、たまたまだけど九月丁度で閑話じゃん、初日に更新しよーっと！』とか思ってたのに半日の学校にバテて昨日更新出来なかったから空元気なんだよアザイさん」

そこ裏情報を漏らすなし、人の空元気無駄にしないでくれますか！！！

って訳でちゃーっす、第何回かは既に忘れてますがぐだぐだ閑話がはーじまーるよー☆

「……大丈夫なのかな、作者」

「安心しろ、勿論駄目だ」

今回は、キャラクター紹介ではなくてちょっとした作者の最近をお話しようかと。

「本当自由になったなこのコーナー」

「ていうか童話シリーズも止まってんのにそんなに止めてて大丈夫なの？」

次回から戻るから安心してよ！　ちなみに童話シリーズは凍結だって言ってんじゃん疲れた！

「本音駄々漏れなんだけど」

――って訳で五月蝿い双子は置いといて。
最近のアザイ事情。
その一、体力が無い
その二、受験生らしい

以上。

「「何なのその事情」！？」

言っておくが他人事じゃ無いんだかんなお前等！　結構更新に関わんだよ！！

「二は分かるけどさ、一は無いよ」

アサキに言われると凹むよ？　ねぇそうだよって同意してくれたって良かったじゃん。

「いや、アサ君がそんななのは作者次第じゃん」

あらそうでした。

という訳で詳しい事情を言いますと、暫くクーラーの部屋でゲームやったりＰＣ弄ったり某動画サイトに居座ってドラマ見たりアニメ見たりな見事な根暗っぷりを発揮していましたからでしょう、半日でダウンした。

「大丈夫なのアザイさん！」

大丈夫だったけど、流石に小説書くテンションにはなれなかったよねー。ぶっちゃけ最近頭ん中はネタだらけで書きたいっちゃあ書きたいんだけど、伴わない体力がありまして――。

「あ、アサ君！　アザイさんが遠い目をしてよからぬ方角を見据えているよ！！」

「あれは馬鹿だ、放っておけ」

つーか反則だって、こんな糞暑い陽気続いてんのに学校とかありえない、夏休み伸ばせよ亜熱帯なんだろ暑いぞ日本！

「外国じゃあ家だって発火するらしいし、平和な方だと思うけど」

「燃えんの！？　うわ、嫌だなそれ！！」

まぁそれもそうか、しかし暑いぞ今年、どうした日本。

とまぁその話だけがしたかった。最近伴っていないのは、やる気で

無く体力だと……！

「……本気で大丈夫なのかこの人」

あ、ちなみにその二の方は更新には特に支障ないと思います、ええ。

「嗚呼駄目だこの人」

「って訳での短めな閑話でしたと」

「夏休み更新してた分、そろそろ周期的に減る頃だよね」

そうならないよう頑張ります！　以上！

261＋衝撃の事実。

「――では、本日の授業は終わります、号令」

――はっ！　授業終わってやがる……！　何ということだ、よりにもよって数学の授業で寝ちまってたぜ……！　なユウヤです。ハヤサカ先生の授業で初っ端寝るとか、俺良く怒られなかったなぁ。

「ユウヤ、お前やるな」

「え？」

此方も久しぶりなカイト君、のんびりとした口調ながら何とも楽しそうに俺に言った。

「ハヤサカの授業で寝るとか奇跡に近いだろ」

「そんなこと無いよ！　アサ君だって寝てるし！」

「其処はとっくにダークホースだからツッコまんぞ俺」

そうなのか、うちの弟何なんだ。先生はすんごい無表情で俺を見遣って『兄弟揃って寝てくれまして』とか言ってたらしいんだけどまぁ其の話はさておき。

「んでさ、さっきハヤサカがポロッと漏らしてたんだが」

「ん？　俺的にはハヤサカ先生呼び捨ててるカイト君の方が勇者な気ィするけどどうしたの？」

「いや、うちの学校の文化祭、来週らしいんだが――」

え、そうなの？　うわぁ楽しみだなぁ！

「――ほのちゃん、そんな話してたっけか？」

「……あれ？」

ええと、……一週間だよね、あと一週間後までにうちのクラスも準備するんだよね？　……そういうのって、普通は夏休み中とかにやるんじゃ……ないの？

「俺、さっきアサキとシギに聞いて来たんだけどよ、一組はテナの奴が実行委員だってんで張り切って進めてるらしいぜ？」

「ふぇー、カイト君は相変わらず直ぐに誰でも呼び捨てだよね」

まぁ良いとして。

隣のクラスはそうやって進めてるのに、俺達のクラスはさっき文化祭のことを知った――となると、考えられるのはひとつ。

「カイト君」

「あん？」

「――職員室、行こうか」

「奇遇だな、俺も同じことを考えていた」

「「ほのちゃん（先生）！！」」

「――ウタカタ先生なら資料整理に出てますが？」

絶対あの人が忘れてるんだよ絶対！！　ということで昼休みとなった今――結局昼食食ってから来ました――、カイト君と二人で職員室に乗り込みに来た。其れじゃなくても時間無いっぽいしね！　膳は急げ、だよ！　しかし其処にほのちゃんは居なくて、代わりに居たハヤサカ先生がそう教えてくれた。

「ヒコク君、先はよく眠っていたようですが？」

「うああっ！　ごめんなさい今後気をつけます！」

「ユウヤ、今はそうじゃなくて！！」

そうだった、話を戻そう。

「ほのちゃん何処ですか！？」

「資料整理って言ってましたから、普通に資料室じゃないですか？」

「そ、其れって何処……？」

うわあ視線で呆れられたごめんなさい。ハヤサカ先生はひとつ溜息をついてから、掛けている眼鏡を気取ることなく中指で押し上げて――気取らないやり方って難しいね――から首を傾げる。勿論訝しげに。

「そう急がずとも良いんじゃないんですか？　もう授業も始まりますよ」

「そうは言ってらんないよっ、先生！　うちのクラス文化祭の出し物決まってないんだから！」

「未だ決めてないんですか？　実行委員は何をもたもたして――」

「「話されてないんだよ！　ほのちゃん（先生）から！！！！」」

「――はい？」

此処でやっと、ハヤサカ先生の視線が真面目になった。何時も他人に関わりたがらないような目をしてるけど、こういう時は一番頼りになる気もする。幾ら子供嫌いでも、流石は先生って感じ。

「え、あの、……夏休み前に、話されませんでした……？」

「全然されて無いよ！　寧ろさっき知ったんだから！！」

「企画書提出は今日までですが」

「何だって!?　何も決めてねぇのにかよ!!」

「……貴女って人は!!!!」

ハヤサカ先生はとりあえず叫んでいた、ギリギリ敬語だけど。…ハヤサカ先生の中にほのちゃんに対する尊敬はどれくらい残っているのかちょっと興味あるな。

「先生、どうしよう」

「僕は貴方方の担任じゃあ無いというのに何故こんなにも頭を悩まされなきゃいけないんですか嗚呼そうだウタカタさんの所為だ」

先生は一人でぶつぶつ言っていたけど、生憎俺には聞き取れなかった。

「――分かりました、僕に任せろ、なんて驕りはしませんが、尽力しましょう」

暫くすれば先生はそう言って立ち上がった。毎度のことながら、こういう時のハヤサカ先生マジぱないくらいイケメンだよね。

現段階では何の解決もしてないんだけど、何だか俺的には解決した心境だったので、そのまま職員室を後にしましたとさ。

「――はーい皆～、授業始めるよ～」

「……あり、今日はほのちゃん授業無いよ？」

「ふふっ、そうなんだけどね？　文化祭の予定全く決めてなかったことがハヤサカ君にバレちゃって、午後の授業ぶち抜かれちゃった。ていうか私が忘れてたんだけど、怒られちゃった」

ゼン君の物言いにほのちゃんはそう言う。どうやらハヤサカ先生、午後の授業全部ほのちゃんの授業にしてくれたらしい。そんなことしたら色々と授業にズレが生じてち大変だろうに――まぁ、あの先生に限って其れは無いか、流石だよ、ハヤサカ先生。

「ってことで現国と英語は振替ね、今日は文化祭のこと今から決めるよ～？」

「先生、文化祭って何時なんです？」

「ん？　来週だよ」

『来週！？』

此処で始めて、クラスに事情が伝わったのであった。ありがとう、ハヤサカ先生。

262＋てんてこまいで、てんてこまい。

ががやが

周りががやがやしていますアサキですが。文化祭が今週末にあるということで全クラスが大忙しなようだ。

「フウカ違う！　そっちじゃなくてこっち！！」

「こっち？　……あ、こっちか」

ガツンッ

「だーッ！！　ぶつかってんじゃねぇかよ！！」

「今のはサチトが悪い、一回戻る」

「お前等、備品を壊すなよ」

――なのに僕は至って忙しくない、何故ならうちのクラスの出し物に、準備なんて必要無いからだ。というか――寧ろ教室にすら居ないんだけど。

部活の先輩、基うちの学校たった三人しか居ない生徒会の会長さんがクラスにやって来まして、

『アサキ、暇ならこっち手伝ってもらえるか？』

だなんて言ってきたものだからびっくりだ。ていうか僕はそうでも無かったけど、クラスメイトがびっくりしていた。『え、あ、生徒会長だ』『本当だ、今日は元気なんだ』『ていうかヒコクって生徒会所属してたんだ』など。ちなみに最後の、僕は生徒会なんかに入っちゃいません！

何でも、生徒会の仕事が多過ぎて回っていないとか何とか。確かにそうだな、文化祭ともなればそれなりに頼られる立場だし。他一年四人は二組だしね――ウタカタ先生の所為らしいが、二組は最早危機的状況に陥っているらしい――、少しくらいは手伝ってやろうか、と重い腰を上げた訳だ、致し方なく。

「悪いな、こんなことを手伝わせて」

「え、嗚呼、別に」

「そうだぜハヤ！　アサキは最早生徒会の一員だろ！？」

「其の通り」

何て勝手な人達なんだろう、しかしハヤ先輩みたいなまとも（※此れ重要）な人が身近に居なかった所為か、謝られると逆にこっちが構えてしまう。慣れって恐ろしいな。

旧生徒会室、では無く普通の生徒会室――即ち普段ハヤ先輩が一人で仕事をこなしている部屋に居る。引っ切り無しにやって来る様々なクラスの代表達の質問には奇跡的判断力でハヤ先輩が片付け、道具の貸し出しは他二人が騒ぎながらもやっている。一人と二人でぎりぎり回ってるのか此の生徒会は……いや、其れで回っているのが奇跡という訳だ。

「アサキ君」

「……はい？」

「出来れば此れをどかして欲しい」

「嗚呼、はいはい」

先程何処ぞのクラスから頼まれた暗幕をたらふく抱えたフウカ先輩は僕にそう言って、僕は仕方なく壁に立て掛けてあったベニヤ板複数枚をどかす、うわあ畜生重い。

「どうもありがとう」

「どう致しまして」

「ちょっ、うおおっ！　あっ、アサキッ！　アサキくーん！　俺の方も手伝ってクダサイ！！」

連れて来られたものの結局未だ何もしていない僕だったが、少し前から人の波が絶え間なく続いている。三人しか居ないって知ってるはずなんだから少しは気を遣えと言いたい——当たり前だけど僕はノーカウントで——。

重い荷物も一人ひとりでやらなきゃいけなくなるくらい、生徒会室の入り口はわんさか人が沸いている、此れを見ると余計生徒会なんて入りたくないな。そんなことを思いながらも、重い縦看板に押し潰されかけていたサチト先輩と適当に助け、僕は椅子に座りながらそんな様子を見遣っていた。

「サチト、今俺が外しても大丈夫か？」

「はあ！？　何馬鹿なこと言ってんのハヤ無理だろ此れ見たら分かるだろ！！」

「いや、しかし体育館の時間割に手違いがあったらしくてな、今から行ってしまおうかと――」

「ばーか！　お前馬鹿じゃねぇのハヤ！！　其れじゃなくても此のハードスケジュール体育館なんかにお前が行ったら倒れるだろーがよ！！　夏の体育館の蒸し風呂状態ナメんな！　今お前居なくなったら確実に俺とフウカも死ぬからな！　自分を大切にしなさい！！」

相変わらずサチト先輩は、力仕事をしながらもハヤ先輩のお守役の方は完璧だった。……僕でもそう思うけどな、雨で戦闘不能になるくらい病弱なハヤ先輩が今動いてるのだって不思議なのに、他で何かきたしたら終わりだろ此れ。

「だがしかし行かない訳にはいかないぞ、サチトお前が行くか？」

「其れこそ無理！　俺そういうの苦手！！」

「ちなみに私も苦手」

「ほれ見ろ」

本当此の生徒会、ハヤ先輩が居ないと頭脳何も働かないな。とか呆れ顔で思っていたら、クーラーの部屋なのに汗だくなサチト先輩と目が合った。長年の直感が言ってる、――もう駄目だ此れ、厄介ごとに巻き込まれた。

「ハヤ、アサキに任しとけ」

「ほらね」

つい口に出たがそうだと思ったさ、僕って凄ぇ。

「……いや、しかしアサキは正規の役員じゃあ無いぞ？　未だ」

今未だって言ったな生徒会長。入れる気は満々なんだな。

「だーいじょうぶだろ！　ええと、ほれ其処に生徒会のワッペンあるし」

「うん、大丈夫、アサキ君なら」

理屈じゃねぇよあんた等。

最早会話に入るのすら怠くなってきた僕はひとつ溜息をついた訳だが、一番の常識人とも言えるハヤ先輩は、未だ悩んだように難しい顔をしていた。

「――……」

「……はぁ」

もう限界だ、仕方ない。

「はい」

「ん？」

「其の書類を貸して下さい、行って来ますから」

「……良いのか？」

「このまま悩んでたら其れこそ人で埋まりますよ此処、少なからずそっちの馬鹿よか良い仕事して来まおっと口が滑った」

「アーサキ君、ほぼ聞こえてしまったぞーい」

お人好しは放っておけない性格なんだ、面倒だが僕しか居ないなら仕方ない。先輩にはあまり使わないでおこうと思っていた暴言が少し顔を覗かせたけど、聞かれていたみたいだから急いで体育館に向かおう。

そういう僕も、大分お人好しなのかもしれないが。

263＋てんてこまいに、てんてこまい。

「ねぇ！　買出し組何時帰って来るの！？」

「知らねぇよ！！　もう少しで帰って来んじゃねぇか！？」

ユウヤでっす！　クラスメイトが喧嘩する勢いに言い合ってます！　えへへっ、文化祭の準備期間ってこう皆に熱が篭ってて良いなぁ、――ま、そんなこと考えてる時間なんて全く無いんだけどね☆

「ヒコクユウヤ！　アンタ暇なら生徒会行ってカーテン貰って来なさいっ！！　三つよ！！」

「うええ！？　俺！？　っていうか俺暇じゃないよリョウちゃん！！　ほらっ、こうやって制服を作って――」

「アンタ男の癖して器用ね！　キリが良い時にお願いね！」

元が真面目なだけあって、リョウちゃんは他の人より幾分せかせかと動いている。其の横のミノルちゃんは其れとは逆にのんびりしている――ように見えても多分急いでいるんだろうなぁ――から面白いコンビだよ、ちなみに二人はポスター作りをしているらしい。

「――皆！　はいはい帰って参りました！」

「おっそくなってゴメンねー」

「あ、お帰り、カイト君にゼン君！」

俺も早く終わらせちゃわないとなー、と思っていれば、色々買出しに出ていた買出し班（※班員二人）が帰って来た。

「ガムテープ！」

「はいよ」

「ビニルテープ！！」

「はい此れね」

「ビニル紐！！」

「投げるぞー」

「カッターくれー！　はさみも！！」

「投げるぞー」

「其れは投げるなよ！？」

二人は要求されていたものを手際良く皆に配分していた、でも流石に刃物投げちゃいけないよゼン君。

「よっすゆっ君、進んでる？」

「うん！　ほら見て見て！」

俺は自分が縫っていたものを広げ、今さっきまでチャリを漕いでいた癖に汗ひとつかいていないゼン君に其れを見せ付ける。

「おぉ、凄いねゆっ君、流石は専業主夫！」

「えっへへ！　ありがとっ！　多分其れ褒めていないけど！！」

何時から専業主夫だよ俺！　専業主夫はマヒル兄だよ！！

そうそう、言ってなかったけど、俺のクラスの出し物は無難どころ突いて喫茶店になりました！　あれだけ時間無かった癖に――今現在も存分に足りてないぞ！――そんな食べ物出す店なんて、って思うけど、此の案はほぼ俺が出したものだし仕方ない。皆も忙しいけど反対は無かったし――何より出し物を慎重に考えてる時間なんて、此れっぽっちも無かった訳だから……。

「あ！　ゼン君！　今暇！？」

「ん？　うん、今から生徒会の方手伝いに行かなきゃなー、くらいしか考えてなかったからね」

「ぅえ、何故に生徒か――嗚呼、そういえば三人しか居ないんだっけ」

さっきリョウちゃんから頼まれたものを頼もうとしたんだけど、よく考えれば先輩達も大丈夫かな、三人で回ってるのだろうか？

「そーいうこと、まぁでもあっ君が手伝いに行ってるみたいだよ？」

「え、嘘、アサ君？」

「そそっ、さっき会ったのよ。都合付いたらこっち手伝え――って言われちゃったし、ハヤ先輩がくたばる前に行ってあげないと可哀相でしょ？」

アサ君のクラスは教室準備の要らない出し物らしいから暇だったんだろうな、生徒会なんて所属した記憶無いんだけど、俺達はさっそくそういう扱いな訳だね分かります。ゼン君は「ゼン君ってばヤサシー」とか言ってたみたいだけど、俺には聞こえなかった。アサ君も引き摺られてったんだろうなぁ、ご愁傷様。

「という訳で、俺今から行っちゃうけど平気？」

「え？　あ、うん、大丈夫！　どうせならカイト君も持ってっちゃって良いよ！　皆に宜しく！」

「了解。おーいカイ君、生徒会室行くよー」

やることが無いでいたカイト君を連れて、ゼン君は教室を後にした。買出しはもう無いだろうしね、あっちもどうにかしないと下手したらアサ君まで戦闘不能になっちゃうよ、あの子も体力無いんだから！！

「よーっし！　俺も頑張るぞー！！」

「ヒコクユウヤ、カーテン忘れないでね？」

おっと、もう忘れてた。

２６４＋前夜にて知った話。

マヒルだ、文化祭がどーの、ってことでユウヤの帰りが遅いんで、今日の夕飯は俺が作ることになってんだ。ま、俺が居る時は基本俺が作ってるし、元からっちゃあ元からなんだが。

「アサキ、お前のクラスは残らなくても間に合ったんだな」

「うん、だって校内スタンプラリーだし」

教室使わないんだな。校内の何処か――または誰かが持っているスタンプを押すっていう簡単なゲームらしく、全部集めれば他クラスで使える半額券プレゼント！　的企画らしい。ふむ――金を掛けずに上手く考えたもんだ。出費は全て他クラスに回るしな。

「ってことは、の割に遅かったってことか」

「まぁね」

俺の作った鱈のムニエルに対し箸を突き立てつつ、アサキは無表情に呟く。

「生徒会手伝ってた」

「うおっ、らしく無ぇことやってんな」

「部活の先輩だから」

「嗚呼、そういやお前達ＧＣ部か」

「うん」

少し前に聞いた話ではあるが、実際問題全く驚きはしなかったな。ゲーム好きａｎｄとっとと帰りたがるであろうアサキにあの部活はピッタリだし、あ、ちなみに俺が詳しい理由はただただ母校だから――って訳では無い。そういやアサキに言ったことはあっただろうか。

「あの部活がまだあったってことには少し驚くが、相変わらずで何よりだよ」

「だらだらだよ、本当自由だよ」

「そりゃそういう部活として――俺等が立てたんだもん」

あ、止まった、やっぱり言ってなかったか。

「……あの部活、兄貴の代で作ったの……？」

「ああ、部活強制なのがキツくて、俺ともうひとりで集めたんだぜ？　凄ぇだろ」

「……」

アサキが近年稀に見る唖然顔を曝している、写メりたいが此処は黙って再起すんのを待とうと思った俺は優しい兄ちゃんだと思った。

「――其の頃から、メンツは生徒会ばっかだった訳？」

――再起して第一声がやけに真面目でびっくりした。

「え？　あー、そうだな、そのもうひとりが生徒会長やってて、そんで他を巻き込んだ形だから……そうなるな」

「初代から面倒臭ぇことしてくれやがって……！」

鳴呼怒るとこは其処なんだな、面倒事大嫌いな弟は、そんな怒りとは裏腹にゆっくりと食事を進めていた。ちなみに俺は先に食い終わっている。

「俺も会計やらされてたけど、元より俺が早く帰りたいからって駄々捏ねて作ったようなもんだからな。部活にゃほぼ出てねぇし、生徒会の仕事も極々少量で、放課後には食い込まないようにしてくれたもんよ」

「マヒルは其の頃から僕とユウヤに気ィ遣い過ぎだけどな、高校生なんだから弟等の為に早く帰って来んなよ」

仕方ないだろ、其れが性格だ。

「ていうかそのもうひとりの人も良くやってくれたよね」

「まぁ、俺が半無理矢理に――って、お前会ったことあんだろ、もうひとりってトウマのことだよ」

「トウマ……？」

もうひとり――確かあの頃一番付き合い良かった奴だったし、よくうちにも遊びに来て、アサキやユウヤと遊んでたはずなんだが。
――どうやらアサキの頭からは抹消されているらしい、首を傾げる所か何処か訝しげじゃねぇか。

「お前、少なからず二年以上の付き合いだったはずなんだが」

「知らんもんは知らん、顔を見れば思い出すかも」

「嗚呼そう」

悪い奴じゃ無かったはずなんだが。大学入って此処三年会って無い、何時の間にやら携帯も繋がらなくなってしまった奴だが、今はどうしているんだかな。

「ま、何時か見た時思い出せば良いんじゃねぇか？」

「そうだね、ごちそうさま」

「へいへい」

「疲れたー！　たらいまーっ！」

アサキの食事が終わったと同時に帰宅、順番が逆だろ、と思わずツッコミたくなる言葉を玄関から吐いているのが聞こえる。
そうか、休みは休みでも、明日は母校の文化祭か。どうせ暇だし、あの二人でも誘って行くのも良いかもしれないな。
俺はそんなことを考えて、ユウヤの飯でも用意してやろうと席を立った。

265＋自由な文化祭について。／前

「いらっしゃいませー！」

「二年五組でやきそばやってまーっす！」

「お化け屋敷来て下さいねー！！」

高校で始めての文化祭だ、アサキですが。ひっきり無しに飛ぶクラスの宣伝が五月蝿過ぎてそろそろキレる頃だが、まぁ此ればかりは仕方ない、文化祭だし許してやろう。

「あー君はあ、店番の時間も無いし、クラス回ってくればあ？」

「うん、その内行く」

涼しいクラスでのんびりしていたら、ドウモトはきゃらきゃらと楽しそうに笑ってそんなこと言った。店番が無い＝やること一切無い訳だから良いんだけど如何（いかん）せん行きたいところも無い。さっきまで居たフドウが、

『気が向いたらで良いので、ボクの部活の方にも来てくれたら嬉しいっす！』

なんて行ってたが、一体何部と言っていたか。つーかあいつ何部だ、僕知らんぞ。しかし此の目の前のドウモトが「しぎしぎのとこには後であー君一緒に行こっ！　約束だからね！」とか言ってたんだが……まぁ良いか、考えるのは其の時で。

さて。知り合い陣は皆午前中に店番になってしまっているもんで、僕一人なんだが。別に寂しいという訳では全く以って無いが、一人で歩くのなんて周りから変な目で見られるだろうが。だから出歩いてないんだ、ていうか暑いし五月蝿いしやる気出ないし。

「いらっしゃいませー！　他のクラスの出し物の前にどうですかあー？」

「宣伝行って来まーす！！」

うちのクラスの奴等……なんて元気なんだか。何かを売るって訳でも無いのにな、僕なら死んでもやらん。

なんて考えていること数分。

『あ、此処ですね』

『その様だね』

どっかで聞いたことのある声が、五月蝿い喧騒に紛れて聞こえた。ええと、多分知ってる声。

「スランプラリーですってね、やってみますか？」

「ふむ、其れも良いかもしれないが、先ずは体たらくで恐らく此処に居るであろう暴君王子を探すとしようでは無いかっ！！」

「其れもそうですね」

「其れは僕のことか貴様等」

「あ、良かった、直ぐ会えましたね」

「ははっ！　やぁアサキ！　元気にしていたかい？」

案の定だった、うちの学校とは違う制服を纏ったアスカ君とユキが何とも爽やかな笑みを浮かべてひょっこり顔を出す、誰が暴君王子だ。

「遊びに来ました、賑やかですね」

「本当やめて欲しいよね」

「ははっ！　実にアサキらしいね！」

何がそんなに楽しいんだか、二人は相変わらずの笑みを浮かべて此方にやって来る。まぁ、過疎ってる訳だし文句はあるまい。

「二人で来たんだ」

「ええ、ユキ君なら暇だろうと思いまして俺が誘いました」

「私もそう思っていたものだから誘ってもらえて良かったよ！　私立校ともなると地元の友達が少なくてね」

苦笑を交える珍しい組み合わせに少々ほう、と感嘆の声をあげて。穏やかに会話を交わす会話を耳にしながら気付いたこと、別に遠慮するような関係でも無いので、さらりと言ってみる。

「ねぇ、二人共学校は？」

二人の学校、土曜日半日あったよね？

「「――……」」

うわ、二人して視線逸らしやがった。何なんだよお前等僕間違えてないだろ。

「……まぁ、細かいことは気にしないでいきましょう、アサキ君」

「そうだよアサキ！　こう見えて私は、学校を休んだのは今日が始めてさ！」

「うわっ、サボってきやがったこいつ等。僕が言うのも何な気がするがサボりやが――」

「さあさっ、アサキ！　暇そうなのだし、私達と共に何処かへ行こうじゃないか！！」

「そうですよアサキ君、案内して下さいな」

そうやって自分達のことは流すつもりだなお前等、とかなんとか思いながらも二人に流されて、僕はやっとのことで教室を後にしたのだった、畜生。

「いらっしゃいませー☆　はいっ、三名様ですねっ！」

……。

「アサキ、気持ちは分からなくも無いが、外から見ているだけでは何も伝わらないよ？」

「うん、そうだね、うん、伝わらないから少しだけ伝えてくるね」

教室を出て数秒、隣のユウヤ達のクラスを覗いてみたらとりあえず――虫唾が走った。

なのでユキのアドバイスを借りて、何かを考えることはせず、

「あ、いらっしゃ痛った！！　くおおっ――む、向こう脛蹴り飛ばすのは酷いんでないかなアサキ！！」

「うるせぇお前なんて格好してんだ殺されてぇのかああ？」

とりあえず――何故ユウヤがメイド姿なのかは聞かないから、抹殺することに決定した。

だって兄貴がメイド服だったんだもん、そりゃ蹴るでしょ、いや、勢い的にはもう飛び蹴りで良かったんだが此処は公共の場所だしうわあ僕って空気読めるわー。

「い、いや、ね？　此れは俺が着たくて着た訳じゃなくて、クラスの女の子が俺だったら似合うよ！　って言ってくれたからであって

！」

「うるせぇ黙れカス死ね朽ちれ滅されろ消えろ二度と同じ空気を吸うな」

「嗚呼もうなんかごめん怖いよアサ君お兄ちゃんを見捨てないで！」

見捨てないで欲しいなら其の藍色のメイド服を脱ぎやがれ、ていうかお前のクラス喫茶店って言ってなかったか？　後ろからやって来た二人はカチューシャ付ユウヤを見れば冷静に、「似合ってますよ」「流石はユウヤだね！」なんて戯言を吐いていた、お前等もまとめて滅すぞゴルァ。

「んまぁ俺調理室側担当だから脱ぐつもりだったんだけどね、はーあ」

「とりあえず死ねって」

「まーまー、あっ君もそうピリピリしないで、お茶でもしていきなよ」

お友達も一緒なんでしょ？　なんて付け加えて声を掛けてきたのはゼン君で、其の姿は執事でした。嗚呼そうなの、お前等のクラス執事メイド喫茶って訳か、もう何も言わんよ僕は。

「ふむ、外が暑かったことだし、お茶にしたいところだね！」

「俺も賛成です」

「って訳でそうしていくよ、ゼン君」

「そ？　よーし、じゃあ――いらっしゃいませお坊ちゃま方、席にご案内致します」

ゼン君は白々しい芝居と共に僕等を席に連れて行ってくれた、嗚呼、こうやって女の子の視線を集めている訳だ、此の金髪似非執事。

「はぁ、ゼン君って本当何でも似合っちゃうよね、もう駄目、全人類に謝るべき此れ？」

「全人類じゃなくて全生物の間違いだと思うけどね」

まぁゼン君には此れがあるから無理だがな、此のナルシストどうにかすればどうにかなる……はず。

「アサキ君、彼とはお友達なんですか？」

「え？　何言ってんのアスカ君、そんな訳無いじゃん、こんなナルシスト、気持ち悪い」

「ちょーいあっ君、ゼン君にぜーんぶ筒抜けなんだけど？　ゼン君だって傷付くのよ？」

「ははっ！　アサキは相変わらずなようで何よりさっ！」

此れは褒められたのかどうか危ういところではあるけど、此処が涼しいから許すことにする。ユウヤも調理室に消えて、カイトやゼン君もどうせ午後まで動けないんだし、暫く休んだら此の二人と一緒に午後までぶらぶらするとしようか。

出来れば、あまり体力を使わないところに行きたいな。

266＋自由な文化祭について。／中

引き続きアサキです。
午前中は結局動くのが面倒で、動いては二組、動いては二組、と二組に居座った訳だが。

「それでは帰りますね、お化け屋敷、楽しかったです」

「まぁアスカ君だもんね」

「ふっふっふ、今度は私の学校の文化祭にも来てくれたまえ！」

「嫌だよ遠い」

午後になって直ぐ、他校コンビが帰っていった。まぁ午後からは他の奴等も居るし良いんだけど、アスカ君は主にお化け屋敷のことと廊下でぶつかってきた餓鬼を遠まわしに殺めたい的なこと述べてたし、ユキは普通に騒がしかったし――うん、お前等何なんだよ。でも何かこうやってちゃんと話すのは久しぶりだったし、　良かったとは思うよ、うん。
あとはそうか、ドウモトも引き連れて――別名、引き連れられて――茶道部に行ってきた。茶道部――要するに、フドウの部活に。どうやらあいつは茶道部だったらしい、クソ真面目な顔してお茶立ててるのを見て来たが……なんて似合わないんだ、つーかあいつちっさ過ぎて着物ぶかぶかだったし。真正面から座った時つい爆笑しかけたけど空気を読んで耐えた僕を誰か褒めてクダサイ。

「ってことで、僕は今再び徘徊している訳ですが」

「え？　どうしたんすかヒコク君」

部活も終わって僕の隣に居るフドウ、二組集団（主に馬鹿三人）もさっきまで居たんだが、何か面白いものでも見つけたのか走って何処かの教室に行ってしまった。何処行った、とっとと回収しないと騒がしくなりそうだけど。――って、何で僕がそんな心配しなきゃならないんだ。

「何でも無い、つーかお前もあの馬鹿共探せ」

「ゼン君達っすか？　ええと、あっちの方に行った――あ、居た！」

とあるクラスに差し掛かった時、見慣れた金髪が見えたらしく其れを指差してフドウが叫んだ。何だ、案外あっさり見つかったな、ええと、出し物は――クイズ？

「あ！　アサくーん！」

「アサキ！　酷いんだぜ聞いてくれよ！！」

僕等が其の教室に入ると、ユウヤとカイトに集（たか）られる、一体どうした。ゼン君は何とも言えない何時もの余裕たっぷりの笑みを浮かべているが、此の際気にするまい。

「何、どうしたの」

「先ずは何も言わずあれを見ろ！！」

カイトに指差され僕とフドウは其方を見遣る。其処にあったのは額で言うなれば万単位ともなる某音楽再生機器とでも言おうか――要するに、ウォークマンみたいなものかな。

「此処でやってるクイズに正解するとあれが貰えるっていうんだぜ!?」

「へー、だから?」

「一回ワンコインだっつーからやったらクソ難しい問題ばっかでよ! 俺達じゃなくても一般人にゃ絶対無理な問題ばっかで金巻き上げてんだぜ!?」

「ふーん」

「あっ君、少しは真面目に聞いたげて」

ちっ、仕方がない、ぶっちゃけ少しも興味無いが聞いてやろう。どちらかと言えば罵倒の比率が高かったので要約すると、どうやら二年が企画した此のクイズ企画、問題の難易度は神レベルらしく、頭の良いゼン君ですら分かって二問程度だったらしい。――二問程度ってことはお前等どんだけ巻き上げられてんだか、一回でやめれよ。

何処か自慢げに笑う企画クラス側の二年男子、此れがハヤ先輩達とタメだと思うだけで虫酸が走るね。良いカモを前にしてただでさえムカつく表情が八割増しでムカつく感じ、顔面蹴って良いかな。

「だからアサキ! お前も加われ!」

「はぁ？　嫌に決まってんじゃん、金巻き上げられるだけでしょ？」

「アサ君ならイケるよ！　なんかそんな気がする！！」

「そんな訳無いでしょうが、お前等はあちら側に煽られ過ぎ――」

「まぁ、君達みたいなのが寄って集ってくれるのは此方としては万々歳なんだけど、答えられる訳無いんだけどねぇ？　――低脳なる後輩くん達？」

「――一回だけやってやろう」

「ヒコク君完全に煽られてるっす！！！！」

や、分かってるけどさ、其処まで自信持てる問題って何があるのか聞きたいじゃん。ワンコインって五百円でしょ？　仕方ないから其れ位出してやっても良い。

ムカつく先輩――後で絶対殴る――では無い女の先輩から出題されるらしい問題は全部で三問。そりゃ三問で万相当のもの貰えるかも、なら誰かしら一回はやるわな、此の阿呆共とかは特に。

「では問題です！」

ばばん！　と何処かから響く効果音は無視して、僕とその他は問題を聴き入る。

「とあるおばあちゃまが言いました、『私は今年で成人になります』

と。さて、此のおばあちゃまは何歳でしょう！？」

「え、二十歳じゃないんすか？」

「んな簡単な問題は出ねぇのよシギ」

馬鹿正直な答えを呟くフドウの声が聞こえたが、僕は気にしない。

今年で成人のおばあさん、ねぇ……ええと。

「――八十歳」

「「は？」」

「正解です！！」

てってれーん！　と流れる音楽はやはりさておき。

「ちょ、アサキなんで分かったの！？　っていうかおばあちゃんなのに二十歳で八十歳で……えぇ！？」

「ユウヤもフドウも馬鹿正直過ぎんだよ、要はこういうことだよ、――カイトと誕生日が一緒だったってだけ」

「へ？」

急に出された名前に素っ頓狂な声を上げるも、少し考えて理解すればあー、と声を上げたカイト。

「――閏年か、四年に一度の」

そういうこと、おばあさんは事実を述べてただけなんだ、誕生日が二十回しか来てないって。

「す、――少しは出来る奴が来ているようだな」

今吃ったのは聞かなかったことしておいてやる優しい僕は、ムカつく先輩を無視して次の問題を聞く。

「第二問！」

ばばん！　――もう其の音よくないか。

「江戸幕府を開いたのは“徳川家康”、その幕府最初の征夷大将軍家康公の幼名と言えば“竹千代”――此れは有名ですね」

此の時点で最早五人中二、三人ドロップアウトしているであろう歴史の問題。カイト辺りはゲームで分かってるかもだがユウヤとフドウは既にキョトン顔だ。

「其処で問題！　幕府最初の征夷大将軍は家康公、では幕府最後の将軍慶喜公の幼名は！？」

「「――知るか！！！！」」

珍しくもエセ敬語の抜けたフドウと、普通にキレたユウヤがハモる。徳川さん家の慶喜さんですらお前等には危ういもんな、何代将軍様か知ってるかお前等。

「んで、あっ君分かる？」

「さぁ、徳川将軍なら十五代完璧に言えるんだけど」

だよねー、なんて言って楽しそうに笑うゼン君。横のカイトがぼーっとしてるのはさておき――ふむ確かに難しい問題だ、あの先輩の鼻を明かしてやりたいのは山々だが、今此れを答えられても、次でもっと難題出してくるだろうしどうしたものか。

「ふっふっふ、我がクラスの出し物に勝ちたいのなら、神様でも連れて来たらどうだ！！！！」

自信を取り戻したムカつく先輩はさっき吃ったのを忘れたように高笑いした、本当何時殴ろうかな。

「――ん？」

僕な思案なんてさておき、ユウヤが不思議そうに首を傾げた。

「ユウヤ、どうしたん？」

「いや、神様呼んで来いって言うからさ」

ユウヤの一言、いや、お前の発言に皆キョトンだけど――僕以外は。

あー、そうか、神様は呼べないけど、知識の幅が神的領域なら良いんだよな。そうかそうか。僕は表情を変えず一人頷いて携帯を取り出し、恐らく暇で来ているであろう我等が兄貴――

「――あ、マヒル、とりあえず二年三組に来い」

最終兵器マヒルを呼ぶことにした。

さぁて、第二ラウンドといこうか、僕が殴るまで終わらせんぞ。

267＋自由な文化祭について。／後

「きゃあ、二年三組の教室って懐かしいわ～、友達が居たからよく遊びに来てたのよ～！」

「はぁ？　ウミお前に友達なんて居たのか？」

「んもぅ！　セツったら～……――後で覚えていらっしゃい？」

なんて会話を繰り広げていたマヒル他約二名、公共の場だからだろうか、ウミさんの後でが恐ろしい予感がする、相変わらずアサキです。

「マヒル兄！　それにせっちーとウミさん！」

「うわぁ、姉ちゃん……」

「あらユウヤ君にカイちゃんにアサキ君も！　うふふっ、こんなところで会えるなんて奇遇よねぇ」

弟の負向きな感情をさらりとスルーしたウミさんは、楽しそうに笑いながら此方に手を振りながら歩み寄って来た。

「其れで、――皆を苦しめている下衆以下のクズは何処に居るのかしら？」

うわあ、ウミさん目が笑ってねぇ。マヒルがどんな説明をしたんだかは知らないが、片手をぱきり、と鳴らしたウミさんは既に戦闘モードだ。ちょ、マヒルマジで何てったんだ。ムカつく先輩が唖然としてしまっているぞ。

「ね、姉ちゃん喧嘩は駄目だろ！　学校だぜ！？」

「ふふっ、大丈夫よカイちゃん、一方的な殴り込みを喧嘩とは呼ばないのよ？」

「其れただの虐めじゃねぇか」

此ればかりはセツさんが正しい。

「おらウミ、今日は殺りに来たんじゃねぇんだから大人しくしろって」

「あらマヒル、冗談よ？」

そして今まで黙っていた本来僕が呼びたかったうちの兄貴が喋り出して、ウミさんの雰囲気も戻って行く。

「で、アサキ、何で呼んだんだ？」

「此のクラスの出し物をクリアしてもらう為」

午後から来ると言っていたから呼んだ訳だが、こうも早く来るとは思ってなかった。来ても暇してただけだったんだろう、――手にタピオカジュース持ってるセツさんを除いて。

「え、何々クイズ？　いーじゃんマヒル、やろうぜ！」

「セツなんかじゃ戦力にならないじゃない？　私もやるわよ～」

「お前等がそう言うなら良いけどよ」

という訳で、再び始まりますクイズ大会。先程言った通り第二ラウンド、ユウヤとフドウはとことん戦力にならない、と分かったものの、『何人でかかってきても構いませんけど？』な態度を揺るがせないあれ（※とうとうあれ呼ばわりになりました）がやっぱりムカつくから僕の独断と偏見により全員に金を払わせた。

「――という訳で、問題ですっ！」

ばばん！　――此の効果音は未だ健在なようだ。

とかなんとか考えていたら、最初に出された問題はなんと、さっきと同じ問題だった。勿論答えられた最初の問題では無く、フドウとユウヤが叫んだ、例の歴史問題。

「また其の問題かよ！　分からないって言ったのに！！」

「助っ人の方々が来たんですから、そりゃあ当然でしょう？」

「うわあもう無理殴っていいかなもう殴っていいよね」

「アサキ落ち着け！」

「――七郎麻呂」

ぽつり、と。まくし立てて喋っていたのをカイトに静止されている中ぽつり、と。

「せ、正解、です」

其の答えを呟いたのは、なんとマヒルじゃなくて、銀色に隠れた瞳を真剣一色に染め上げていたセツさんだった。

「な、せっちー何で！？」

「あ？　お前、ゲームとかやってりゃ自然と知れんだろ？」

驚くユウヤに同意しつつも、セツさんの一言には同意出来なかった僕。いや、ゲーム其こまで深くないと思う。

「元々歴史は得意なんだよ、俺」

答える時だけだったけど、たった一瞬だけでもあれだけ真剣なセツさんを見るのは始めてだったかもしれない。小声でマヒルが教えてくれたが、「セツは社会科だったら歴史地理政経倫理何でも出来んぞ、俺よりな」なんて言っていた。マヒルより出来るってことは相当だが、――少しだけセツさんを尊敬した瞬間だった。

――でもまぁ次の瞬間にはウミさんに背中叩かれて倒れてたから、もう何処か行ったけどね。

「ま、ままま、未だ一問、だからな！！」

難易度が先程より高いと認識しているからだろう、吃り方が尋常じゃないよあれ。

「第二問！　では此方をお聞き下さい！！」

という訳で二問目。何時の間にやら用意されていた音楽プレイヤーの再生ボタンをかちり、とプッシュした。

～この～木何の木気になる木～♪（※）

「「見たこともーない木ですからー」」

歌うなよ、重要な問題なんだから歌うなよ。

かちりと停止ボタンが押されれば、相変わらずのにこにこ顔で出題者の女子生徒は続けた。

「――此の歌で歌われた木は何の木でしょう？」

「「……」」

嗚呼、知らな過ぎてとうとうユウヤとフドウが黙った。

「あ、あの歌にそんな具体的な木があったのか！？」

「正確にはあれですね、映像として使われた此方の木です」

セツさんの言葉に大半が同意する中で、まさかの写真テロップが出て来た。うわあ、確かに見たことはある木だ。――っていうか。

「ねぇマヒル」

「言いたいことは分かった」

ですよね、目を合わすことなくマヒルにそう言えば、どちらが合わせた訳でもなく、僕等は呟く。

「「モンキーポッド」」

「正解です！！！！」

『えええええええっ！？』

誰が叫んだかは分からなかったけど、確かに叫んでたよ、大多数。

「ちょ、アサ君まで分かったの！？　何で！？」

「今年の高校生ク○ズでやってた」

兄貴と見てたんだよね、二人で『へー』って言った覚えがある。あの高校生○イズって馬鹿みたいに難しいけどマヒルはちょいちょい答えてて、こいつ一ペンどうにかなればいいのに、とか思ってた、少しは其の知識をくれ。

という感じで、何故かあっさり最後の問題。ムカつくあれはやっとのことで真剣に焦り出したらしく今までふんぞり返っていた椅子から立ち上がり、僕等をびしっ、と指差した。

「最後の問題は解答者を一人に絞ってもらう！」

それからそんなことを口走ってくれたもんだから、

「今付け足したルールなんて私がぶち壊してやろうかしら――？」

ってな感じでウミさんの怒りに触れてしまった。――しかし其処はカイトに任せるとして。

「さて、解答者は誰にするかな――？」

『マヒル（さん）』

格好付けて貰ったところ悪いですが、最初から一択なんで。

本人は俺かよ、みたいな顔をしているがお前以外誰が居んだよって話だ。兄貴を知らないゼン君やフドウはきょとーん、としているが、何も言わないなら任せてもらおう。

「では、最後の問題は此の俺から出題しよう」

「お手柔らかにどうぞ」

嫌な笑顔と兄貴の苦笑が見合っている。　此の時点でもう余裕に差があり過ぎる――マヒルは無意識――訳だが。そして出された問題は――

「問題！　――此の世で一番難しい問題とは何か！？」

――だった。

……うん？　マヒルが止まってる、分からない……のかな。――いや、僕は分からないんだけど。

「あーらら、お兄さんどうすんのかね」

「ん、どういうこと」

「？」

あっはっは、と楽しそうに笑うは頭の後ろで手を組むゼン君。他の皆様もキョトンとマヒルを見ているから、其の声を聞いたのは僕と真横に居たフドウだけみたいだったけど。

「あっ君さ、矛盾の話知ってる？」

「矛盾？　あの、何でも絶対に貫く矛と、絶対に貫けない盾の話？」

「そ、……シギは知らないみたいだから、黙って聞いてな、後で説明してやっから」

「はいっす！」

素直だなお前。

「絶対と絶対じゃあどうなるんだ？　っていうことから矛盾って言葉が出来たってんでしょ？」

「――そっか、だから答えられないんだ」

そういうこと、と、ゼン君はにっこり微笑みながら呟いた。

――答えが分かっていても、其れを答えてしまうと其れが世界一難しい問題では無くなってしまう。そんな簡単な問題が、世界一な訳が無いのだから。

「さぁって、頭の頗る宜しいらしいあっ君とゆっ君のお兄さんは、どう出るんでしょうか？」

「……」

其れはまぁ――見てからのお楽しみじゃあ無いかな。

「――答えは、“世界一難しい問題は何か？”という問題」

普段と一切変わらぬ口調で、マヒルが呟いたのと同時に、例のムカつく先輩が口元に笑みを携えたのが分かった。

「――だが、」

けど、其処で終わるマヒルなら、僕が此処に呼んだ意味が無くなるじゃないか。

何時もと何ら変わらぬ不良ルックで、腕を組みつつマヒルは続けた。

「――其の答えを今俺が答えてしまうことで此の答えが正しいとは言えなくなる。何故ならば世界一難しい問題であるはずの問題をこうもあっさり答えられるだなんて其れこそ世界一難しいという定義を冒涜している甚だしいからだ、しかしだからと言って其れ以上に正しいと言える答えがあるはずもない、よって生じるパラドックスをどう説明するというのか――なんてことを今貴方が言おうとしたならば、俺にも言い分があるぞ」

もう飛ばしてしまって構わなくないか（※スルー許可）。

「世界中に存在するパラドックスをどう説明するかなんてファミレスで半ライス大盛りで持って来いってくらい不可思議なことであって、もしも説き明かせるのであれば先ず“パラドックス”だなんて言葉が存在するはずが無ぇんだ、しかし其れが今此処にこうやって存在していて、尚且つ解明されていないとするなれば問題にすること事態が間違えている、否――景品を賭けてまで出している問題にするのなんて、おこがまし過ぎる」

『……』

此の場全員の黙視、というか、マヒル一人が黙らせた感丸出しだけど。

「――と、言う訳で」

静寂を破ったのはマヒルでは無く、つかつかと前に出て来ては何故か余裕たっぷりな笑みを浮かべたウミさんだった。

「正しい答え、教えて頂いても宜しいかしら――？」

嗚呼、流石の僕でも、あのムカつく先輩に同情するよ、全く。

267＋自由な文化祭について。／後（後書き）

※引用　『日立の樹』

２６８＋自由過ぎる文化祭終了。

「あははっ、楽しかったねー！　俺結構持ってかれたけど」

ユウヤは楽しそうに言い、僕からすれば洒落にならない金銭の話をしている、相変わらずアサキですが。

「其れにしても、相変わらず凄かったなぁ、マヒルさん」

「確かに凄かったっす！　ボクは何喋ってるか全く理解出来なかったっすけど！」

カイトもそんな感嘆の声を上げているが、フドウは一切理解が行き届いていないらしく何かもう案の定過ぎんだよ。

結局、あの例のムカつく先輩はあること無いことウミさんに責めに責められ、最終的には『もう、持ってて下さいまし』だなんて畏まっていた。説明もまともに頭に入らなかっただろうにウミさんの笑顔拷問なんて最悪だよ、だからせめてもの慈悲を授けて僕は殴らないでおいた、やっさしー。

兄貴等は文化祭終了時間まで自分等の母校を巡るとか何とかで離脱、ちなみに豪華な景品は消去法でセツさんのものになりました。皆他のを持ってたり、使わなかったりするんだよね。

部活の片付けがあるとか何とかでフドウが離脱してから。

「はってさて、そういえば運良くも揃ってんねぇ」

もう数時間もすれば終わりという文化祭――僕等どんだけクイズしてたんだか――の中、後頭部にて手を組むゼン君がそう呟いた。

「え、何が？」

「部活の一年男子ってとこ？」

別名カトウを抜いた一年四人、少ないって神秘だ。

「いやぁさ、今年はサチト達が頗る忙しかったから何にも出来なかったけど、来年くらいで何かしたいなぁってね？」

「GC部で何するの」

「生徒会としてで良いじゃん、大規模に出来るよ」

嫌だよ目立つのとか、つーか生徒会入るなんて未だ言ってないし。

「今あっ君が考えたこと当ててあげよっか」

「やめて下さいエスパーでもないのに」

にっこにこの笑顔なゼン君は「いーじゃんいーじゃん、暫くはハヤ先輩とかサチトがやってくれんだから」なんて気楽そうなことを言ってくれる。確かに部活決めた時から覚悟は決めてたけども、本当にやるのはやはり怠いってものだ、今回手伝ってみて思ったし。

「ま、俺はどっちでも良いけどなー」

「え、じゃあカイト君が副会長やれば？」

「だが断る」

どっちだお前。

「まぁ其処ら辺は面倒だし、ゼンに任しときゃ良いんじゃね？」

「「賛成」」

「嗚呼もうご本人に駄々漏れで話す癖やめない？　ゼン君びっくりしちゃうからさ」

面倒事は嫌いだけど、こうやって馬鹿やるのは嫌いじゃないから、やめるつもりは毛頭無い。他はもっと怠そうだし、何より本当の他人なんかと今更、仲良しこよししたいと思う訳が無い訳だから。

前を歩く二組の三馬鹿を見遣りつつ、己の感受性が幾分豊かになってきていることに呆れる――といっても、未だ顔には出ないけど――。

けどまぁ、其れも良いか、なんて思えるようになったのは、きっと――。

269＋〇〇な秋！

「ねぇねぇアサ君」

「何」

「昨日ってさぁ、なんかあった？」

久しぶりの部活、珍しく居るハヤ先輩は既に生徒会長の机に臥して寝てしまっているけど、あとの皆は居るみたい。っていうか本当はハヤ先輩が暫くくたばってて出来なかった文化祭の片付けにやって来ただけなんだけど、ユウヤです！

がっつり視線がゲームに行ってるアサ君に俺がそんな質問をすれば、

「ゲームの発売日だったくらいだけど」

なんてどうでも良い話が帰って来た、そうだね、今やってるもんね！

「そうじゃなくてさ、なんか昨日花火鳴ってなかった？」

「朝のことなんて知らん」

「そうだよね朝っぱらからゲーム買いに行っちゃったもんね」

そういう時しか早起きしないんだから此の子は！！

聞いた俺が間違いだった、なんて溜息までもついていじけかけて

いたら、其れに気付いたカイト君が読んでた漫画から視線をこっちに向けてくれて。

「あー、アレじゃね？　小学校の運動会」

「運動会？」

……そうか、そんな時期だったか。中学から体育祭になって夏休み前にやっちゃうもんだから忘れてたよ。

そっか、最近になってやっと涼しくなってきたもんだから、秋が来てたのを忘れてたよ。秋、秋、……秋か……。

「よし、今日は栗ご飯にしよう」

「おい主夫」

良いじゃんか、食欲の秋なんだから栗ご飯食べたいよ。カイト君が苦笑するけど、俺の決心は揺らがないんだからねっ！

「食欲の秋だもんねぇ」

「そうそう！　さっすがゼン君分かってるー！」

「そう考えるとゼン君は文化の秋かな、本ばっか読んでるし」

漫画だけどね。

「カイト君は？」

「俺も文化だろ、毎日ネットに飛んで文章ばっか読んでるわ」

うん、それは2●ゃんとかだよね、文化とか言ってるけど。

秋、といえば、文化の秋と食欲の秋と……あり、他に何かあったかな？　まぁあったとしても俺達には関係無いよね、あははっ！

「食欲の秋……大敵ね……」

「確かに。乙女の敵よ」

「え、リョウちゃんとフウカ先輩って乙女座？」

「そういう意味じゃないわよ馬鹿！　……乙女座だけど！！」

どっちなのリョウちゃん。

「美味しいものが多い時期は太りやすいわ、ってこと、ユウヤ君」

「あー、そういう」

男でも気にする人は居るらしいけど、生憎俺の周りは馬鹿食いするか太りたくないとか知らないけど全然食わないかの二択だしな、ダイエット？　何其れ美味しい？

「でも、美味いもんは美味い時に食いたいだけ食うもんじゃねぇの？」

「食べたいけど太るのなんて絶対嫌よ、今運動なんてまともにしてないのに……」

「リョウコは痩せてんじゃん」

「なっ――脱いだら凄いんだからね！？」

リョウちゃんカイト君相手に何口走っちゃってんの、台詞が際どいよ。

「大丈夫、リョウコはそのままで充分可愛い」

「うう……でも痩せたい……」

ダイエットって、女の子の永遠の悩みなんだなぁ、と理解した俺だった。好きな人が居るとかそういうの関係無いらしいけど、……うーん、ダイエットなんて必要には見えないけどなぁ。

「ハヤー、起きれー」

「……変な起こし方をするな」

「起きろー」

「はいはい」

「あ、ハヤ先輩は芸術の秋か」

「はい？」

さっきはあんなこと考えたけど、ハヤ先輩はゲームをちゃんと（

※重要）クリエイトしてる訳だからね。うんうん、――俺はそんな調子で頷いたけど、寝起きのハヤ先輩は一体何のこっちゃ分からないとでも言わんばかりにキョトンとしていた。

「ま、うちじゃあハヤだけだわな」

「うんうん」

「いや、だから何の話だ……？」

「サチトも食欲だよなぁ、うちの部活ってもう何なんだ」

「あっはっは、其れを言ったらおしまいだぜ、ワタヌキ君」

「……？」

まぁ、楽しければ俺は其れでいーや！　ちなみに此の後ハヤ先輩にはちゃんと話の流れをお伝えしました、以上。

270＋何のオチも無い雨降りの日。

ユウヤでっす！　昨日までの暑さが嘘みたいに超涼しい！　やっとのことで夏も終わったかなぁ……とか思ってると明日辺りからまた暑くなったりするんだよね、ははっ。

とまぁそんなことはさておき。今日の夕飯は何にしようかなぁ、と食卓机に座って思考している訳ですが。まぁ最早日常の一ページだけど。ついでに言えばソファは我が弟に占領されています、まぁ此れも毎回のことかな！　何時起きるかは分からないけど、夕ご飯時には起きるだろうし今は寝かしておく訳だよ。

「ぬー……」

昨日は何にしたっけ、ええと、カレーか。んで一昨日が？　……肉炒めか。其の前が確か麻婆豆腐でアサ君に『辛ぇよ死ね』って言われて、少し前にはロールキャベツ作って満足げにされたっけ。そんであとはカレーとシチューが並んでうあってなったんだけど文句言われなくて、其れで調子こいてまたカレーにしたのにやっぱりツッコまれなくて暫く毎日カレーにしたのに何も言われずとうとう俺が飽きて――こう考えるとうちってカレー率高いな、……いや、アサキが文句言わないから良いんだ、二人って一回じゃ使い終わらないんだもん。それに俺が気付かないんだよ並んでるのとか、毎日のローテーションとか直ぐ忘れるから。

そう考えるとうちの弟は作る側からすればある意味楽だよね、文句言わないんだもの。でも逆に言えば『何食べたい？』『何でも良い』の会話率八十パーセントだから……まぁ何とも言えないよね。

ジリリリリ・・・

「何で黒電話？」

其の音で携帯が鳴ってるのは分かったんだけど何で黒電話なの、――って俺の携帯だし！　俺の携帯ちゃんと着うたにしてたはずなんだけ――あーら俺の携帯アサ君の目の前にあるお前か。

アサ君がそんな茶目っ気を出してるのは微笑ましいので良いとして、しかし目の前にある携帯＝起こしてしまう＝理不尽だけど怒られるの方程式を成り立たせない為にも早う出ることにする。……前もこんなこと無かったっけ？

おや、相手は愛しのアスカでは無いか、此れはワンコールで出るしかねぇぜ！

「もっしもーし！」

「五月蠅い」

やべぇ結局起こした。

けれど今は気にしないで、と。電話口から聞こえた苦笑に耳を傾けた。

『ふふっ、今日も元気ですね』

「勿の論でごぜーますよアスカ、俺が元気じゃない時なんてアスカとモモちゃんにお化け屋敷に連れ込まれた時くらいだし！！」

『未だ根に持ってるんですか其れ、ていうかユウヤが自分で入ってくれたんですよ？』

「いや、アレは絶対に無言の圧力があったよ二人して」

とか初っ端から話題が逸れたので修正修正。

「んで、どうしたの？」

『ええ、あ、今大丈夫ですか？　そう長い話では無いんですが』

「大丈夫か駄目かと聞かれたら大丈夫じゃないと答えるけどもアスカなら大丈夫だよ」

何故ならアサ君のさじ加減だからさ☆　――ほーれアスカだって口にしたら何だよじゃあ許す、みたいな態度で一回起き上がったのにまた寝ちゃったよ、何此のアスカだけのＶＩＰ対応、少し分けて下さい……！

『ふふっ、なら大丈夫ですね』

「大丈夫だよー、ちっくしょう君達何で仲良いのかなねぇ」

『ええと、手短に言いますね。――迎えに来て貰えません？』

「――ふぁい？」

一体何のことやら。面倒だから今日はシチューにしようとキッチンに向かいながら、俺はつい情けない声を上げてしまった。

『いや、外雨降ってるじゃないですか』

「うん、そうだね、お陰で家の中に干した洗濯物が乾かないし部屋ん中ムシムシするし――ってうちの話は良いね、其れでどうして？」

『実は――』

アスカの話によると、明日学校で休みたくない授業みたいのがあるらしくって、今出掛けた先に居るんだけど家にも誰も居ないし雨降ってるし傘持ってないしそのまま帰ったら確実に死ぬとかなんとか――其の授業とやらの話の時点で理解が追いつかなくなった俺は携帯をアサ君に渡して説明してもらって其れを理解した。え、変な横文字とか漢字の羅列とかがアスカの口から発せられたんだけど何其れ美味しいの、つーか私立の学校って何そんな難しそうな授業あるの俺死ぬんだけど。（※偏見です）

『手数掛かること頼んでるのは分かってるんですが、頼れるのがユウヤしか居なくて……』

「まっかせてよ！　迎え行く行く！　場所教えて？」

だって折角頼ってくれたんだし、俺みたいな馬鹿が休むなら未だしも出席日数だけでやばいアスカが休むのは別格だよ！　ご飯遅くなることについては……うん、大丈夫だよね、うん。

「――りょーかい、それじゃ行くね！」

そんな遠くない場所だし、直ぐ帰って来れるけれども。とりあえず起きたてのアサ君に一言言っておこう。

「って訳で、アスカに傘届けてきたいんだけど」

「らっしゃい」

いっては何処に行ったんだ。

「ご飯遅くなるけど良いかな？」

「早よ行けド阿呆」

そして理不尽に怒られたよどうしようか、普通寝起きの子って可愛かったりするんだけど何故かうちの暴君滅茶苦茶小憎たらしい…！　まぁ何時ものことだけどね。

まぁアサキがそういうなら、と俺はちょいと着替えて雨降りの中へと向かって行った。

うーん、酷い雨だ、雷が鳴らない内に帰ってこーよおっと。

271＋目撃！　何の現場？／前

『あ、アサキ！？　おんもしれーモン見つけたから今から来いよ！』

数分前にけたたましく掛かってきた電話はカイトからのもので、其れと場所だけを言えば通話が切断された。……え、此れ行かなきゃ駄目な訳？　アサキです。

「んー？　アサ君出掛けるの？」

「うん、なんか面倒だけど面白いことがあるらしいから」

通販番組を見ながらいてらしゃーいと言ったユウヤが心配な僕はとりあえず今は其のことにツッコミは入れず、とりあえず仕方ないので面倒過ぎるけれどカイトに言われた場所へと向かうことにした。

そして其処に辿り着いて。

「居ねぇし」

近くだから来てやったものの、其処を見回してもカイトの姿が見当たらなかった。何なんだあいつ、自分から呼んでおいて何処行きやがった。面白いものって何なんだよ、今更かもしれないけどちょっと気になってきたじゃねぇかよ、そう思った僕は何としても見つけてやろうと目を皿にして此の場隅々まで探してやろうと、呼ばれた商店街の一角で一人辺りを睨み続けた。

「――あ」

「……あら」

とか何とか、カイトを探していたはずなのに見つかったのは違う人で。すっかり涼しくなった気候に合わせ秋服となった目の前の彼女――カトウと目が合う。

「何してるのよヒコクアサキ、ちなみに私は頼まれた買い物の途中よ」

「先手を打ったな貴様」

付き合いが一年以上にもなると人は慣れるらしい、『君こそ何やってんの』と聞き返そうとしていた僕の言葉の前に、カトウはがさりと右手のビニル袋を見せ付けてきた。少し前までは何時だって慌しい感じだったのに、高校生になってなんだか落ち着いたものだ、何故だろう。（※其れこそ慣れてきたからです）

「此処ら辺でカイト見なかった？」

「ロクジョーカイリ？　いいえ、見てな――いわ、って言おうと思ったんだけどたった今見つけたわよ」

数回横に首を振ったカトウだったが、一瞬だけ止まった視線と共に其方を指差す。……嗚呼、本当だ、花壇の影に隠れるようにしているカイトがいらっしゃる、僕探すの下手だな。此の後特に用事も無いらしいカトウが後ろに着いて来ているのを気にせずに其方に行けば、未だ僕に気付いていないカイトを真後ろから蹴り飛ばした。

「おいこら」

「うおおっ！！　え、アサキ！？」

「人様電話で呼び出しておいて隠れてるたぁいい度胸だな死ね」

「ちょ、まっ！　未だ蹴られた背中が痛――うぎゃあ！！」

閑話休題、一旦置いて。

「悪かったって。来ると思わなくてよ」

「お前が断る前に切ったんだろうがばーかあーほ死ね」

「最終的には死ねなのねアナタは」

最近優しめになってたのに、なんて寝言をぶつくさ呟くカイトはさておき。

何故カトウが居るのか、なんて疑問は特に無いらしいカイトは僕等にも隠れるように言ってからとある場所を指差した。

「……あの店がどうした」

「いーから待てって！　さっきゼンが入ってったんだよ！」

「ワタヌキゼン？　其れがどうかしたの？」

話の道筋が理解出来ていないカトウ――というか僕も出来てない――は訝しげに思いながらもカイトにつられ隠れるけれど、ゼン君

が居たところで何になるっていうんだ。

「つーかアサキ、ユウヤ連れて来なかったのか？」

面白いことって言えば着いて来ると思ってた、なんて言うカイト。

「通販番組に夢中だった」

そう言ったら何とも言えない表情をしていた、其の表情、僕には良く分かるけどさ。

「将来が心配ね」

「うわあ言うなよリョウコ俺もアサキも言わないでおいたことなんだから」

本当だよ。メモ片手にテレビに食らいつくユウヤが本当に心配だよ、此の僕が心配してるんだからよっぽどだよ。

とか何とかぶつくさ言っていれば。

カイトの言う通り、某店から出てきたのはゼン君其の人で。未だ此方には――ていうか此の遠さじゃ気付けないよ、って距離離れているので気付いていない。僕が気付いたのだってゼン君が金髪だからだし。

「ほれっ！　ゼンだろ！？」

「うん、そうだね」

「ええ、そうね」

「お前等俺の話に興味無ぇな？」

正直に言えば無いんだけど、カイトがジト目で見てくるものだから其処は黙殺することとする。

「お前等ちゃんと見ろって！！　あ、ほら、ほらほら！！」

幾分大声になってカイトが再び指を差す。だから何だっていうんだ、と、相変わらず興味無く其方を見れば、

「……うん？　あれ、誰かしら」

「さぁ」

ゼン君の後から出てきた（恐らく）女の人、其の人の手からゼン君が受け取ったのは――うん？　赤子？

「もしかして……不倫！？」

「え、そういう見解に至ったっちゃうんだ」

「だろ！？　リョウコもそう思うよな！？」

「お前もかい、っていうかアレは赤子ってことで合ってる？」

「お前目ぇ悪いなら眼鏡買えよ」

最近落ちたんだよなぁ視力、――じゃなくて。

お前が言う面白いことってまさか此のことか？　ゼン君が女の人――しかも亜麻色の髪の――から子供を受け取っただけで不倫ってお前等の頭どうなってんだ。同じクラスだとそういう見解に至ってしまうのか？　歳にして未だ二歳くらいかと思われる子供を十五歳の高校生が抱えてるからって不倫って……でも、まぁ、……兄妹には見えないしな……。

馬鹿なカイトはともかく至って真面目なカトウが真剣な顔してる訳だが、此れはどういう反応をするのが正しいのだろうか。

「あ、女の人どっか行っちゃったわ！」

「お、おお、ゼンが子供を連れて行ってしまう……！」

「行くわよ！！」

「え？」

「もっちろん！！」

「え？　ちょ、何処に」

「「真相はいかに（よ）」」！！！！」

ええー……。何だか止められる雰囲気じゃなかったので、僕は黙って着いて行くことにした。

……はあ、ユウヤ連れて来なくて良かった。

272＋目撃！　何の現場？／後

引き続きアサキです。
前回の流れから察して頂ければ分かる通り、僕等は今小さな女の子と歩くゼン君を追跡しています。

「あれは絶対に不倫相手か何かの子供だな……」

「そうね……其れか未亡人に手を出したのかも……！」

「かなり薄いとは思うけど妹とかの線は無いの？」

「ゼン少し前に下に可愛い妹が欲しいって言ってたから居ねぇはずなんだよ」

二人して真剣な面持ちなものだからツッコめないでいる僕。いっそ声を掛けてしまえばいいのにとか思ってるんだけどどうやら未だ未だ此のゼン君追跡隊は続くらしい。

「お、店入ってったぞ！？」

「子供を連れて洋服屋さんだなんて……先ずは子供の機嫌を取るってことね！？」

「お前等はゼン君を何だと思ってるんだ」

二人の中で此の状況がどういうことになっているのか分からないけれどもう僕は諦めて着いて行こうと思う。二人にしたら何やらかすか分からないから勝手には帰れないし、――金髪と幼女が歩く絵

図もシュールだというのもまた事実。
洋服屋さんに入ったということで気付かれないように僕等も侵入。目の前の二人はやけにこそこそしてるけど店員さんに怪しまれるからやめて欲しい、いやほんとやめてくれないかな僕にまで被害が来るから。
店員さんの気配に最善の注意を払う僕とは裏腹に、洋服の隙間からゼン君を見遣るカイト。高校生が何してんだ。そして結構な近さに居るからだろうか、二人はどうか知らないが、ゼン君の声が聞こえた。

「うん、とってもカワイーと思うよ？」

「ほんとー？　これにするー」

普通に買い物エンジョイしてるみたいだ。

「「子供まで誑(たぶら)かして！！」」

僕からすればお前等の思考回路の方がどうかと思うが。
推定年齢二歳――言葉の発音は未だ未発達らしい――の赤子、は言い過ぎたか、幼女はにこにこと楽しそうな表情でゼン君を見上げている。さっきは遠くて良く見えなかったけど、其の女の子は……ゼン君に似てなくも無い気が……？

「あんな可愛らしい女の子をゼンめ……！」

「犯罪よっ！　今直ぐ通報だわ！！」

「……」

本人達は至って楽しそうだし良いと思う、っていうかこいつ等のことがそろそろ面倒になってきた僕。……うん、そうだ、面倒だ、僕はリアルな身内以外に振り回される気は無い訳だし。最近甘やかし過ぎたのかもしれないなぁ、――此の馬鹿をあははは。

「カイト」

「何だよ！　今忙し――」

「くたばれ」

「え？　うぉ――」

ガツン。

――ガシャアアン！！！！

カイトを背中から蹴った――優しくだがな――ものだから、洋服の間から覗いていたカイトはそのまま前のめりに倒れ、――そのまま商品巻き込んで倒れましたとさ。人から見れば物凄く良い笑顔だったと思う僕ですが先に言おう、後悔はしていない。物凄い音が反響して頭が沸騰していたカトウもぽかんとしていて、僕は充分に満足である。

「お、お客様！？　大丈夫ですか！？」

――店員さんが寄って来ちゃったことには何だか申し訳無いけれど。

「――という訳でこんにちはゼン君」

「え、あ、うん、ちわーっすあっ君達」

店員さんも大騒ぎした騒動（※騒動起こした張本人）にゼン君が気付かない訳も無く、ちょっと大きな音がしてびっくりしてしまったらしい女の子を抱えて彼は「三人でなあにしてんの」と呆れ顔で僕等の元にやって来た。

今のはお店の中では迷惑なので外に出てきての第一声だった。ゼン君は例の女の子を下ろしたけど、其の子はゼン君の後ろに隠れてしまっている。

「で？　あっ君達は何してたの？」

「ゼン君の尾行」

「ちょ、アサキ其れ言って――」

「うるせぇ黙れ滅ぼすぞ」

一番は黙殺が良いんだけど、今日ばかりはもう面倒だからお前には喋らさんぞ。

「え？　ゼン君の後着いて来てたの！？　……うわあ、やっべぇの見られた」

……あれ、ゼン君が此れまでに無いような嫌そうな顔をしている。やっぱり何か裏があるのだろうか、此処に来てちょっと僕が心配になってきた。

「うわー、友達にだけは見られたくなかったんだけど」

「「……」」

「だ、大丈夫だぜゼン！　何があろうが俺達は友達だからよ！！」

カイトは既に何かを知った風にそう言った。いや、不倫とか決まった訳じゃないんだけど、カトウもカトウで「やっぱり未亡人に手を出したのね……！」なんて呟いてるけどお前等の中でゼン君はどんだけのプレイボーイになってるんだいやマジで。

「そう？　カイ君はヤサシーわ。あんなもん見てそんなこと言ってくれるなんて」

「あったり前だろ！　お前が居なくなったらテスト前のノート提出誰に見せてもらえば良いのか！」

其処かい。

「で、ワタヌキゼン。――其の子は？」

少しボケに走ったが、カトウはとうとう真相に迫るべくゼン君の後ろに隠れる幼女を視線で差す。

ゼン君は少し其の子を見た後、にっこりと普段通りに笑って女の子を抱えれば、僕等を見てこう言った。

「此の子はみーちゃん、――俺の子供だよ☆」

「「えええええええええええええ！！！！！？」」

「なあんて冗だ――」

「そう来たか！　まさか十五歳で子供！？　そういうことか！　通りでちょっと似てる訳だな！！」

「未亡人とかじゃなくて普通にお付き合いして出来たのね！　私ったら酷い勘違いをごめんなさい！」

「え、いや、だから冗談だっ――」

「「うあああああっ！！！！！」」

「……あっ君、助けて」

「黙れテメェ等」

流石のゼン君も泣きそうだったので僕はそう一喝してカイトの方だけは蹴り飛ばした。カトウは流石に蹴れまい。

ゼン君に抱えられた女の子も大声を出す二人が怖くなったのか、此方に向けていた顔を逸らしゼン君の首に抱きついてしまった、嗚呼ゼン君苦しそう。

「じょ、冗談かよ！」

「ったり前でしょ、ゼン君君達と同い年なのよ？　ゼン君が幾らフェミニストでも子供は作りませんて」

其れは良いとしても今の冗談を信じられたことの方がゼン君ショック、と本気でショックを受けてるゼン君はさておき、脅かすんじゃねぇよ！　とかそうよね、あははっ！　とか何とか言ってる二人は重症なんだろうなぁ、と。

「此のパターン、信じてくれてたのはあっ君だけっぽいね、リョウコちゃんもそっち側なのね、ははっ」

「僕は信じてたんじゃなくて、そんなことはありえないって思ってただけなんだけどね」

「其れでもじゅーぶんよ俺」

他二人がこうだとな。僕は二人に代わって「で、本当は？」と此方を見ない小さな彼女を見つつ問う。

「んー、尾行してたっていうから全部見てたんだと思ったんだけど、俺がもう一人と歩いてるの見た？」

「うん、亜麻色っぽい髪した女の人でしょ」

「……はぁ、やっぱ見てたか」

ゼン君が溜息とは珍しい、どうやら友達に見られたくなかったものというのは其の人に関係ありそうだ。

「此の子、あの人の子供」

「や、やはり不倫関係か！？」

「未亡人の線は未だあるのね……！」

「カイ君はともかくリョウコちゃんが女性関係関わると此処まで駄目になるとは思わなかったよ」

僕もだよ、とは流石に言わないでおいた。

「あーもう面倒臭ぇ――ミヤ！　はいゼン君のお友達に自己紹介して！」

半地が出掛けたゼン君は抱えている女の子の背中をぽんぽんと叩き、其の子を自らと僕達の間に下ろした。ミヤと呼ばれた幼女は最初こそ戸惑っていたものの直ぐに僕等を見上げて、小さい癖してしっかりと、小さくぺこりとお辞儀をした。

「わ、ワタヌキ　ミヤコです」

「苗字一緒」

「ミヤは俺の姉貴の娘だよ、――要するに俺の姪っ子！　そんで苗

字がワタヌキなのは夫さんが死んだとかそういう訳じゃなくて婚姻しても苗字はまんまにしたから！　決して未亡人とかじゃないから其処んとこ宜しく！！」

もう良いデスカ！　と叫んだゼン君は再び幼女を抱え直す、嗚呼、此の叔父さんべったべたなんだな此の子に。

「「……」」

「カイ君もリョウコちゃんも思考回路追いついてる？」

「お、おっけ！」

「勿論よ！」

駄目だ此れ。

「それで、ゼン君が見せたくなかったものってのは、もしかしてお姉さん？」

「そ。フェミニストなゼン君が世界で唯一好きになれない姉貴だよ、あんな馬鹿みてぇな髪色しやがって弟の俺の身にもなって欲しいねあの露出狂！！」

お姉さんが露出狂なのかどうかは置いておくことにして、とにかく此れが全て解決したと思うんだけどどうだろう。

「おにーちゃんのおともだちなのぉ？」

「そーよ、でもミヤはこっちのお兄ちゃんだけ覚えればいいからね

ー、他二人は酷いんだよー、こっちのお兄ちゃんはクラスも違うのに信じてくれたのにさー、こっちの二人はにーちゃんのこと信じてくれないの」

「わかったー、こっちのおにーちゃんおぼえるー」

「え、ちょ！　ごめんって！　本当にごめんって！！　俺のことも覚えて下さい！！」

「ごめんなさい！！　私も小さい子と話したいです！！」

すっかりグレたなゼン君、新たな問題発生じゃねぇか。

「だってー、ゼン君だって傷つくしー？　あ、みーちゃん、こっちのお兄ちゃんはあっ君だよー」

「あっくん！」

「あ、呼びましたかミヤコさん」

「あっ君二歳児にさん付けは必要無いと思う、せめてみーさんかな」

「じゃあみーさん」

「ちょっと！　俺も混ぜて下さい！！」

「嗚呼、私ったら取り返しのつかないことしたのかしら……」

「姉貴の代わりに可愛い姪の相手をするヤサシーお兄ちゃんのことを節操無しみたいに言いやがって！　……でも仕方ないからミヤに

紹介してあげる、みーちゃん、こっちが一号でこっちが二号ね」

「いちごーとにごー？」

「いやいやいや何処の捨て駒だよ俺達」

「何だか寂しくなってきたわ……！」

でもま、こう見えてもゼン君は優しい人だから大丈夫だとは思う。カイトやカトウだって其処までゼン君を酷く思ってるとは思えないしね。

「リョウコちゃんは盲目だったってことで許すとして、まぁ許して欲しかったら今度飯奢ってよ一号」

「誰が一号だい！！」

……多分。

273＋雨天平凡平穏日和。

頭上から降り続く雨粒を部室の窓から見ています、あ、何だか久しぶり、リョウコです。

「雨、止まないねー」

「だなー」

何時でも暢気な二人組こと馬鹿二人――嗚呼、此れじゃあ紹介になってないわね、ヒコクユウヤとロクジョーカイリは部室のソファを一人一つずつ使って寝転がりながら呟いた。何時もなら此の馬鹿二人にもう一人加わっても良いんだけれど、今日は珍しくも其のもう一人が大人しく何やら真っ白な書類に立ち向かっているものだから此れまた気持ち悪いのよね、だから雨が止まないんじゃないかしら。

「……」

「ワタヌキゼン、何してるの？」

「んー？　今はサチトから頼まれた部活動別年間会計書類やってるー」

間延びしている声とは裏腹に生徒会長が座るような机に向かいながらワタヌキゼンはそれなりに真面目な表情でかりかりとボールペンを走らせている。口元に手をやり立て肘をついているワタヌキゼ

ン、……なりが良いから様になるのは良いんだけれど、此れを口にしたら一瞬にして今の表情が消えそうなので言わないでおくわ。馬鹿が三人になったら救われないものね。

ちなみに先輩達は三人共生徒会室の方に居るらしくて。何でも時期が時期だけに忙しいらしいのよ、色々。

『生徒会選挙やるったってどーせ立候補者居ねぇんだぜ！？　うちの学校どんだけアレなんだよ！！』

とさっき其れを伝えに来たサチト先輩が言っていたんだけど、アレって何なのかしらアレって。

其の後にさも当たり前というべく『嗚呼、お前等適当に余ってる役職埋めてくれよな』とか言ってたんだけれど……やっぱり私達もやらないといけない、のよね？　――まぁこの有様を見ればワタヌキゼンが余ってる役職の中で重要な副生徒会長をやるのは目に見えて歴然、って感じだけどね。

「……ってあり、そういえばアサ君は？」

「え、さっきまでゲームしてなかったか？　……あ、居ねぇ、リョウコー、アサキは？」

「そっちに居るわよ」

馬鹿二人がとことん怠そうに起き上がってそう言った。私がそう言って指差したのは給湯室、何か飲みたくなったらしくてさっきテレビ前陣取ってた体制から動き出してた――はずなんだけど……そういえば出てこないわねなかなか。

「アサキー、生きてんのかー？」

――返事が無い。何してんのかしらね？
私同様に気になったらしいヒコクユウヤが立ち上がってそっちを覗きに行く。

「アサキー？　あっくー……ん？　寝てる？」

……給湯室で寝てるの？

「あ、さ、くん？」

「……ん」

「こんなところで寝ちゃ駄目だよ」

見えないところでのそんな会話につい笑ってしまったけれど。給湯室ってそんなに広くなかったわよね？　そんなところでどう寝てたんだかちょっと気になるわよ。
ポットでお湯を沸かしていたらしいヒコクアサキはそのまま座り込んで眠っていたらしい、そんな短時間が待てないくらい眠かったのなら素直に寝てしまえば良かったのに、と思う私。ヒコクユウヤの後から目を擦りながら出てきたヒコクアサキは「寝てない」とか言っていたけど確実に寝てたわよね其の表情。

「お茶飲みたかったの？」

「コーヒーが飲みたかった」

「じゃあ俺が淹れてあげるからさ、あ、皆も飲む？」

「そんなに多くお湯沸かしてないよ」

「直ぐ沸くやつだから大丈夫だよ！」

五人分くらい余裕だよ！　と続けていうヒコクユウヤは確実に淹れ慣れているんだろうなぁ、と思ったのは私だけでは無くて少なからずロクジョーカイリもきっと同じことを考えていたに違いないわ。

「俺紅茶が良い」

「あ、私も」

「ええと、――レモンとミルクがあるけどー？」

「ミルク！」「レモンで」

「……リョウコめ、レモンティーだなんて大人振りやがって！　俺が餓鬼みてぇじゃんかよ！！」

「な、――別にそういう訳じゃないわよ！　ただミルクティーよりも今はレモンティーな気分だっただけよ！」

「あははっ、まぁまぁ二人共」

ヒコクユウヤに宥められてしまうだなんて――と思わない訳でも無いけれど、今は何よりあっちのロクジョーカイリね！　良いじゃないレモンティー！　大人振るんだったらロイヤルミルクティーにしたわよ！！　……あ、ツッコミどころが違うかしら？

「ゼン君はー？」

「あっ君と同じ、ブラックで」

「……ロクジョーカイリ、大人振りたいならアレくらいやってみなさ「無理」否定早いわよ」

相変わらず普段の冗談のひとつも漏らさないワタヌキゼン、ブラック、って大人過ぎないかしら、私絶対飲めない。そんな私達のやり取りに此処に来て初めて笑みを零したワタヌキゼンは「ゼン君甘いの不得意なのよ」と言った。だからってブラック……舌壊すわよ。

「さあって書類おーわりっと、此れあっちに届けてくんね」

「いてらしゃーい」

なりはあんななのに本当にやる時はやるのよねアイツ、実は根っからの真面目君なのかも。へらへらしてる馬鹿共――特にロクジョーカイリ――も見習うべきよ！　ま、たった今お茶を入れてもらっている私が言うことでも無いんだけど。高校入って私もだれたなぁ……。

「――あ、」

「ん？　どうかした？」

「毛布って何処置いたっけか」

「毛布？　あっちの机に積んであるわよ」

「マジだ」

急に声を上げるものだから一体何かと思えば。確かに少し肌寒いけど毛布なんて必要なのかしらね、馬鹿みたいに何時でもハイテンションになれるロクジョーカイリに。そんな考えを見越してか、ロクジョーカイリは不満そうな表情で「横見てみ」と私の右を促した。

「……あら」

「ほれ、必要だろうが」

さっきまで二人がうだうだしていたソファの片方で、さっきまで眠っていたらしいヒコクアサキが再びほぼ寝かけていた。うつらうつらと、寝る五秒前くらいかしらね。

本当に何でもある部室内の毛布を抱えロクジョーカイリはソファにまで運んで、

「寝ると寒いだろうし此れ掛けろよ？」

だなんてお母さんをやっていた。幾ら眠そうな時だって罵倒を忘れないヒコクアサキだけど今日ばかりは本当に眠いのだろう、一度ロクジョーカイリを見たと思えば自分の横に障害物が無いことを確認して、そのまま横になった。どれだけ眠かったのかしら此の子、……す、凄く可愛いとは思う、けど、口にはしないわよ私。自分より可愛い男子って何なのよ、私認めないわ、好きな人の方が可愛いとか認めないんだから……！

「ドンマイ」

「え、口に出てた……？」

「いや、俗に言えば顔に書いてあった」

このやろう！！

ヒコクアサキに毛布を被せながらお母さんことロクジョーカイリがそんなことを言うものだから殴りたくなったわ！

――でもまぁ、其の後やって来たレモンティーが異様に美味しかったから許すことにするわ。

外の雨は未だ止みそうにないけど、こういうのんびりした時間も、私は嫌いじゃなかったりする。

274＋生徒会のお仕事。

「あー！　あーくーん！」

アサキです、何か色々あって久しぶりに一人で帰ろうとしていた放課後。此方に手を振りながら満面の笑みを浮かべてやって来たのはドウモトでした、部活中なのか片手には筆、ちょ、其れ何か水分含んでないですかね、来ないで、制服汚れるから来るな。

「ちょっと部室に来て欲しいのっ！　ね、どうせあっ君暇でしょお？」

「どうせって言うのが気になるところなんだけど、用件だけは聞いてやろう」

「いーからいーから来て来て！」

「え、ちょ、うわあ腕掴むな汚れる」

「そ、其れはテナが汚いってことなのかな！？　ご、ごめん、テナって汚いんだねえ……」

「あれ、何か違う、ちょっと違う」

……嗚呼もう何でもいいや、行ってやろうじゃねぇか。落ち込まれるとどうにも出来ない僕は一人溜息をつき、どうやら来てくれるんだ、と悟ったらしいうきうき顔のドウモトに引き摺られ何処かへ連れてかれることになった。

「で、何だ此れは」

「可愛いでしょお？」

「……言い直そうか、――何故動物が居る？」

連れて行かれたのは予想通りというか何と言うか美術室。美術室なんて美術選択してないから始めてだけれど、ほぼ女子生徒で埋め尽くされていた。

「ええ？　……さあ」

さあなのかよ。

「分からないからあー君を呼んだんだよお？　あー君て生徒会の人なんでしょ？」

断じて違うんだけど！　とも言えず、このままだったら確実にそうなるので反論は出来なかった。ドウモトは他美術部員にちやほやされている動物こと犬――種類は何だろうな、僕が知るか――に一瞥をくれてから、「確かに可愛いけど、テナ達困ってるのお」なんて言ってくれたもんだから僕の方が困った。ええと、どうしろっての、今日多分先輩達も帰ってるし、ユウヤ達だって居ないんですけ

ど。

「そうか、こういうのって生徒会の管轄なのか」

「うん、だから顧問の先生に頼んで欲しいなあって部長さんが」

――顧問？　其の一言について考えてみる。顧問、顧問――そうか、生徒会にだってＧＣ部にだって顧問が居るはずだ、だが……うん、正直に言おう。

「生徒会顧問って誰よ」

僕知らねぇわ。

「……犬、ですか」

「はい」

考えていても仕方ないので、美術室にて一旦其の動物を預かって頂いて職員室にやって来た僕。畜生生徒会代理みたいなもんだから逃げる訳にもいかないし畜生。生徒会の顧問の先生、なんて尋ねてみたら、出てきたのはなんとハヤサカ先生でした、新任の癖して凄ぇな此の人――というか職員室にハヤサカ先生しか居なかったんだ

けど――。

「今日クロガネ君達は？」

「サチ――キスギ先輩によれば会長は早退で、他二人はゲームが家に届くとかどうとかで帰りました」

「後ろの二人捻り潰してやりなさい」

「先生って時々思い切った発言をしますよね？」

先生は一度咳払いをして再開。

「しかしまぁ無視出来ない事態ですから一緒に向かいます、ご苦労様ですねヒコク君」

「たまたま図書室で長居したら此れですよ、帰ってりゃ良かった」

もう少しだから読んでしまおうとしただけなのに何だってんだ、帰りたいよ犬公の野郎。

「ゲーム部なんてふざけた部活に生徒会を任せていることも大問題だというのに変な問題を持ち込んでくれまして」

「わーい先生、僕もそのふざけた部活の部員なんだよなー」

「あ、え、そうなんですか？　というか私はあの部活の顧問ですが」

「えええええ新事実が多過ぎて要領オーバーなんだけど」

先生は新任で生徒会を任された出来る教師というより、余ってたところ押し付けられた憐れな教師だということが分かった瞬間だった、何かお疲れ様なんだけど。

「でも先生見たことありませんけど」

「生徒会室には稀に行っていますよ、生徒会室には」

暗にＧＣ部放置だと言いたいんですね分かります。

「何もやること無い部活ですから名前だけ貸してるんですよ、だから面倒は起こさないで下さいね、とキスギ君に伝えて下さい」

「分かりました」

「あと三馬鹿にも」

「其れは重々に」

僕等は――ほぼ無表情に淡々と――そんな会話をしながら、美術室に移動したのだった。

ちなみに犬は近所から迷い込んできたらしい、まぁ僕には関係無い話だが。

275＋秋の甘味処。

「最近雨多いわね」

「そうね、最近お姉ちゃんの心が雨降りにならない分空に回ったのかしら」

「何ですって？」

「まぁまぁコトちゃんもリョウちゃんも！　今日は喧嘩は無しだよ～！」

モモです！　お外は物凄く雨が降ってて大変だけど、私達はとっても元気です！

其れというもの理由があって、久しぶりにリョウちゃんとコトちゃん、それにうちの弟君も一緒にうちに集まっておやつにしようとしてるからです。昔はよく一緒に食べたけどね、ご近所なのに皆忙しくって……。

「モモちゃんがそういうなら」

「本ッ当にアンタって子は私以外の人にはデレデレなんだから！」

「そんなこと無いわよ、私はお姉ちゃんにもデレデレよ。其れを言うならお姉ちゃんはツンツンし過ぎよ、もう少しデレ要素が無いと大好きなあの人には振り向いて貰えないわよ」

「誰だツンツンよ誰が！　っていうかアンタ其のあの人っていうの誰から聞いたの!?」

「此処はひとつ私とお姉ちゃんを足して二で割ってみたらどうかしら。完璧なツンデレの出来上がりー」

「聞いてないし！　其の話私興味無いからね!?　そうじゃなくてアンタ私の好きな人を何処でーー」

「でっきたお待たせー!!」

リョウちゃんとコトちゃんって本当に仲睦まじいなぁ、なんて思っていた私と二人の所にやって来たのは、居るはずなのに此処には居なくて、実はキッチンでケーキを生成していたユズだった。本日もまた気合の入ったケーキなことで……。

「うわ、ユズ君此れグレードアップし過ぎじゃない?」

「ふっふっふ分かるかいリョウコちゃん、今日の此のモンブランの生地は昨日ペースト状にする上でよりまろやかさを追求し寝かせる時間を絶妙にーー」

「あれ、私生地のまろやかさのこととか言ったんじゃなくて見た目の……まぁいいか」

うん、放っといていいよリョウちゃん。

秋の味覚をお裾分け、と親戚が送ってきてくれたのは沢山の栗で、其れを見た瞬間にユズは「モンブランの秋!」と叫んだ訳です。モ

ンブランの季節って何なんだろうね本当、お姉ちゃんよく分からないけど多分食欲の秋の話をしようとしたんだと思うんだ～……自信は無いけど。

量も多いし二人にもお裾分けしたいって言い出した中学一年生のうち専属パティシエが居たものだからこうなったんだけど、本当、何でも美味しそうに作るよねぇユズって、私絶対太る。

「――という歳月を重ね今此の特性モンブランが出来上がった訳さ！　って聞いてないね、うん」

「私は聞いていたわ、素敵ね、食べても良い？」

「流石はコトナ！　大好きだ！　うん、食べろ食べろ！！」

未だ語ってたんだ……！　私もリョウちゃんも完全にアウトさせてたよ……！！

大好きだ、なんて言われて若干赤くなりつつ――と言ってもコトちゃんだから分かりにくいんだけど――もコトちゃんはユズキ特製モンブランを食べた。私も食べようっと。――ごめんね、天然たらしで。

「うん、美味しいわ」

「良かった！　そう言って貰えて」

「ユズの作ったものなら何だって美味しいわ、毎日食べたいもの」

「好評で何よりだよ！　食べたくなったら何時でも言ってくれれば作るぜ！」

「本当美味しいわよね、ユズ君の作るお菓子って」

「そうだね～」

下手すれば週の半分は何か作ってる弟ですから。最早呆れた様子のリョウちゃんでした、コトちゃんは黙々と美味しそうに食べ進めている。

「あれ、ユズは食べないの？」

「俺は後でいーの、皆が喜んでくれてるの見てる方が好き！」

――こういう恥ずかしい発言をにっこりと笑顔でしてしまう此の子って一体何なんだろうってたまに思いますお姉ちゃん。リョウちゃんやコトちゃんもそう思ったみたいで、ちょっとの間きょとんとしてました、うん、良い子は良い子なんです。

「えっと、ご馳走様、ユズ君」

「ご馳走様、次を楽しみにしてるわ」

「お粗末様っしたー！　ちなみに次はハロウィンかな」

近いよユズ君。

でも結構、楽しみにしてる私が居るんだけどね、えへへ。

276＋三つの持ち物。

「無人島で一週間暮らすことになり三つだけ持っていけるとしたら、貴方達は何を持っていきますか？」

部活だというのにまったりとしていた俺達に畏まった口調でそんなことを言ったのは、やることが無くて至極暇を持て余していたと思われるゼン君でしたユウヤでっす！

「あ？　どしたゼン、頭狂ったか？」

「ちょ、カイ君酷いよとりあえずコンピュータから目を此方に向けて欲しいなぁ？」

一回で良いんだけど、なんてゼン君の希望は部室のＰＣに夢中なカイト君には聞き入れられませんでした、カイト君ってＰＣ弄ってる時何か無駄に真面目だよね。

「そんで？　いきなり何でそんなこと聞いたんだよ？」

其処に興味を持ったのはゼン君同様暇だったらしいサチ先輩だった、っていうか暇なら帰ればいいのに――っていうのは無しなのがＧＣ部といったところでしょうね！

「んー、此れ今日シギに聞かれた質問なのよね～。皆なら何て答えるかなぁって」

「シギ？　あいつもなあに質問してんだか……。ちなみにゼンは何

て答えたんよ」

ソファの上でうだうだしながら聞くサチ先輩、そういや先輩、シギ君とも幼馴染だったらしいじゃないか。そんな質問にゼン君がにっこりと笑みを浮かべれば、「俺は図鑑とライターと寝袋って言ったよ」と自回答を告げた……のは良いけど何て現実味のある回答なんだゼン君、面白み無さ過ぎてサチ先輩飽きちゃってるよ――まぁ普通は普通の回答で充分なんだろうけど。

「じゃあサチ先輩はどうなんですか？」

という訳で、質問してみた俺。

「え？　あ、えーと、急に言われると思い付かない」

「……確かに」

「ほーら！　咄嗟でも思い付いたゼン君って凄いのよ！」

「だからってそんな平凡な答えゼン君らしくないって俺は思う！！」

「あれ？　ゆっ君其れってどういう意味？」

俺はそう力説すれば他の部員にも聞いてみようとくるりと回転する、勿論ゼン君はスルーだぞ☆

「ねぇねぇリョウちゃんは？」

「へ？　私？　んーと――」

自分に振られるなんて思いもしなかったんだろうなぁ、さっきフウカ先輩がまとめて全員に淹れた紅茶片手にリョウちゃんは素っ頓狂な声を上げてから真面目腐って考え出した。リョウちゃんは真面目だからなぁ、何言うかな？

「火は木があれば起こせるっていうし、だったらライターは要らないわよね？　それじゃあやっぱり寝袋？　ううん、夏なら問題無いわよ、未だそんなに寒くないし……え、え、ちょっと待って今考えるから！」

「リョウちゃん、直感で良いんだよ」

真面目過ぎて駄目だね此れは、何かごめん。俺にスルーされてもめげないゼン君はちらりと未だＰＣに噛り付くカイト君を見て「カイ君はー？」と聞いてるか危ういこの人にも尋ねてみる。

「――ノパソと自家発電機と屋根」

案外あっさり帰って来た答えに一瞬唖然としたけど――何だか生きることに無頓着だねカイト君！

「一週間くらいなら飲まず食わずでいけんじゃね？　だったら時間潰す為の道具が欲しい」

「いけないよ！？　一週間飲まず食わずって結構キツいよ！？　ねぇリョウちゃん！？」

「え？　一週間……ダイエットには良いかも」

「リョウちゃん！？」

割と真面目な顔なんだけどねぇリョウちゃん其れ本気？　あれ、目まで本気だぞ？　ゼン君は相変わらずけらけらと楽しそうだけど出来ればツッコミに参加して欲しいかな！！

「んー、やっぱり思い付かねぇな……フウカー、お前なら何持ってくー？」

唸るようにして悩むサチ先輩は未だ考えているらしく、今の今までゲームに打ち込んでいたフウカ先輩――ちなみに今まで言っても未だやってます――にそう尋ねる、一ミリも動かなかった気がするけどカイト君同様聞いていたらしいフウカ先輩はただ一言ポツリと、聞き逃してしまうくらいポツリと呟いた。

「――セスナ？」

「「無人島なのに？」」

飛んでっちゃうんだね、お金持ちってやっぱり考えることが違うや。

三つだぞ？　と俺やゼン君とは違った指摘を入れたサチ先輩に対して、フウカ先輩は「じゃあセスナの燃料と操縦士」と付け足した。駄目だもう無人島に居る気が無いよ先輩。

「何の話……？」

「あ、おはよーあっ君」

ほぼ呆れ返っていた俺達の間に響いた声はアサ君の声、実は居たんだけどずっと寝てたんだよ、五月蠅くて起こしちゃったかな？

其れにしても何で部活に来るんだろ、眠るだけなのに此の子。

挨拶をしたゼン君が先の質問を寝起きのアサ君にすれば、アサ君は再び閉じようとする瞼をこすりながら考えているようで。ああもうこういうところは可愛いんだけどなぁ、――まぁ恐ろしくて言えないけど。恐らく同じことを考えているのはリョウちゃんくらいなものだろうな、うん。

「で、あっ君は？」

「……――う」

「ん？」

「一週間分の食料」

嗚呼、何てアサ君らしい現実的な物だ。

「後は？」

「……船と――兄貴？」

うわあ此の子も帰る気だよ、そして最後の何て言った？

「兄貴って……マヒル兄？」

「あれが居れば大抵のことには困らない」

何故だろう、否定が出来ない。

マヒル兄を知ってるカイト君とリョウちゃんは何だか苦笑していて、文化祭の時に会ってるゼン君も「あの人すげかったもんねー」なんて呟いている。先輩達は勿論クエスチョンマークだけど其処はまぁご愛嬌。

「マヒルさんなら何だかんだで無人島でも快適に暮らせそうよね」

「確かになー、マヒルさんならあ、こんなの取れちゃった、とか言って大量に食料確保しそう」

「二人のお兄さん、って一体……」

「一度お会いしたいわ」

そう期待しない方が良いですよ、とも言えなかった俺でした。あれ、俺だったら何持ってくかな？

277＋会話だけでお送り致します。

「あの、ゼン君、聞いても良いっすか？」

「んー？　別に全然良いけど？」

「うちの学校の生徒会って、ゼン君達の部活の人がやるんすよね？」

「そーゆーことになってるみたいよねぇ、幾ら楽な部活とはいえ面倒だわ。……ま、百も承知で入ったんだけど」

「ってことはアレじゃないすか！　ゼン君とかヒコク君とかが生徒会長とかやるってことっすよね！？」

「……まぁ、そうだけど、何でお前がテンション上がってるのよ」

「だって格好良いじゃないすか！」

「お前って見た目差し引いても素敵に子供だよね、ゼン君感服」

「え、え、どういう意味っすか」

「お前は子供だってことさ、髪色が金髪になったことは気になるけど、ゼン君とお揃よ」

「此れは仕方ないんすよ！　お母さんが無理矢理……！！」

「はいはい分かってる分かってる、お前のお母さんが美容師なのも、お母さんの髪色がころころ変わるのも分かってる」

「なら良いで――ってあれ？　其れじゃあボクの髪が金になった理由とかは全然ってことっすよね？」

「まぁ、今年はまたハヤ先輩が会長やってくれんじゃないかなぁ」

「あれ話が戻った」

「でも副会長はサチもフウカ先輩もやらないんだろうから、一年の誰かがやんなきゃって感じ？」

「へぇ、誰がやるんすか？」

「さぁ？　でもあっ君がよく『面倒事はゼンに任せとけ』とか言ってるからなー」

「ちょ、ヒコク君らし過ぎて何も言えない。でもゼン君なら大丈夫っすよね！　頭良いし要領も良いし！」

「はっはっは、――まぁね」

「相変わらず自信満々っすけどボク何もツッコまないすよ」

「シギも相変わらずシギだよねー」

「えへへ」

「褒めてないぞ」

「え？」

「え？」

「あ、ゼン君ゼン君」

「んー？」

「此の前ヒコク君がゲーム買ったって言ってました」

「何の？」

「何だったっけ、珍しく長ーく話してたんすけど……飛んだっす、ええと、……あ、何か、リメイクだとかうんたらかんたら。ゼン君と話したって言ってましたよ？」

「……うん？　ああっ！　もしかしてアレか！？　ファミ〇ン世代

が移植を夢見ていた例の！！」

「ゼン君は多分フ〇ミコン世代じゃあ無いと思いますがまぁそんなこと言ってた気が――」

「やべぇ俺今からあっ君の家行きたい見たい触りたいうわあああ！！」

「ゼン君！　近年稀に見るテンションの上がり方してるっす！　ちょっと落ち着いて下さいっす！！」

「おっとそうだった、落ち着け俺、今度行こう、それで充分だよきっと、あっ君なら即座にクリアするだろうし借りようそうしよう」

「何だか自己解決したみたいなんで良いっすけど」

「ふふふふふ、やべぇ楽しみになってきちゃったよ俺」

「あれ、そういえばゼン君、今日ミヤコちゃんは？」

「んー？　おうちに居るけど？　姉貴と」

「え、カスガさん今日居るんすか？」

「みたい、昨日の夜明日は休みーって騒いでたからねぇ、うぜぇったらありゃしねぇ」

「あははっ、でも良かったじゃないすか、ミヤコちゃん嬉しいんじゃないすか？」

「まぁミヤはお母さん子だからね、残念ながら。あーあ、ミヤが姉貴なんかに似たらどうしよう……」

「大丈夫じゃないっすかね、その為にゼン君が居るんすから」

「だよね、ですよね、俺絶対ミヤを姉貴似になんてさせねぇぞあんの露出狂！！」

「はは、ゼン君も大変ですね……」

「義兄さんさえ、義兄さんさえ海外から帰って来れば……！」

「ゼン君って義兄さんのこと随分慕っていますよね、ボクは会った

ことないすけど良い人なんすか？」

「良い人も何も素敵な人だよ、何故姉貴なんかと結婚したのか分からないくらい」

「うわあお姉さんに対して凄い言い草」

「俺はミヤを絶対に義兄さん似にしてみせる、可愛いミヤのままでいさせてみせる」

「そして何時になく真面目な表情っすね」

「ところでシギ」

「はい？」

「――そろそろ真面目に勉強しねぇか？」

「はい」

幼馴染のテスト勉強風景。

278＋人によってはハッピー週間。

はろう！　ユウヤです！　空元気です！

「せんせー、ユウヤが蕩けてます」

「あらあら、ユウヤ君ったら」

元気な挨拶とは裏腹に机に突っ伏す俺、其の状態にカイト君が冗談を漏らせば、ほのちゃんは何だか暖かい眼差しを送って教室を後にしました。

「其の様子だと大変だったみてぇだな」

「聞かんといてカイト君、何か俺しょっくでまじでとろけそう」

そんなにかよ、と苦笑するカイト君。あれ、カイト君はそうでも無かったの？　え？

そうそう、ただいま何の話をしているのかと言えば――考査のお話です。

「か、カイト君、まさかテスト上々だったなんて言わないよね……！？」

「あっはっは何言ってんだよ、俺様勿論素敵な結果が返って来ること間違い無し☆」（※色んな意味で）

其の爽やかな笑みで自信満々なことを言う――まぁ全然自信持てるもんじゃないんだけど――カイト君を見て、とりあえずほっとした俺。なあんだやっぱりそうだよねっ！　えへへっ、良かった！

「二学期入って範囲広くなったよなー、つーか俺の許容範囲を遥かに凌駕してんぜ」

「俺は凌駕っていうか少しも入ってないよ」

「……いや、其れは入れろ」

高校入る時はあんなに勉強したのに、やっぱり無理です俺に勉強とか無理。あーあ、学校とか滅びるべきだよ！

「他の皆はどうだったんだろね？」

「さぁ？　リョウコとかゼンとかに聞いたら聞くだけダメージ受けんの俺達だかんなぁ」

確かにね！

「――何の話をしているんだ？」

と、最早やけくそなトークになりかけていた俺達の所にミノルちゃんが現れた。あー、ミノルちゃんも勉強出来るんだよなぁ。

「今日のテストの出来の話だよー」

「ミノルは聞くまでも無くだろうな」

「ふむ、私も今回は其処まで出来たとは思わないが」

ミノルちゃんの其処までと俺の其処までの違いって一体何十点あるのだろうか。

「第一、テストというのは結果より経過、どれだけ本人が努力をしたかということが大事なんだろう？」

「「……」」

「確かに結果も大事だが、今の段階ならば経過を――って、おいお前達、何故私から目を逸らす……？」

「何も聞こえない！！」

「何かごめんなさい！！」

け、経過？　――分にも満たないやあははは！！！！

「まぁ、何はさておき、明日も未だあるのだから今日からでも頑張れば良いんじゃないか？」

「頑張れるかなぁ……」

「あ、明日英語だから頑張れる」

「カイト君の裏切り者っ！」

ちっくしょう何気付いてんだばかやろう！　英語なんて日本語もままならない俺に出来るかってんだーい！

「はっはっは、英語だけはやんぞ、何時かアサキを越えてやる……！」

素敵な野望だけど、うちの弟の英語に対してのやる気の無さは尋常じゃないんだよね、なんて可哀相な無駄な覇気。……まぁ現段階だと其れでもアサ君の方が断然上らしいけど。

「目標は高く、だな、良い心掛けだ」

「ふははっ！　そうと決まれば帰宅すんぞ！」

「ふーい」

俺には全くやる気ないけど、とっとと帰ってご飯食べたいのも事実なので、俺達は一組に向かいましたとさ。

嗚呼、半日なのに何だろう此の怠さ。

279＋やる気元気、根気良く。

二学期中間考査二日目ですが見事に沈没しました俺です、ユウヤです。

とりあえず一言言わせて下さい――知らねぇよ英語とか！！！！カイト君なんであんなの得意なのかなっ！　本当何言ってんのかさっぱりだよ！　俺絶対英語検定とか取らない、外国なんて英語圏になんか行ってやらないんだからー！！

とまぁとある一教科がズタボロだったんだけどだからってめげないよ俺、最終日がある、少しくらい頑張るよう。ミノルちゃんだって“経過が大事”って言ってたもん！　結果がどうであろうが経過だよ皆っ！　数学は苦手教科の中で一番得意――下の上くらいかな――だからどうか平均点十点下くらいでお願いします。――目標が低いとか思った奴俺の前に出ろ。

「――と、思ったものの」

夕食を終えたリビングにて。

アサキは上でゲームやって――勉強？　絶対無い――んだか知らないけど一人ですが、一人＝一切合切理解が出来ないよ！

ううん、ええと、ＡとＢとに一緒なのが？　和集合？　え、此れが、……え？

比較的簡単な場所ですね、なんてハヤサカ先生が言ってた気もするけど、ごめん先生、ある意味期待を裏切らなくて。

「うん、聞いた方が早い」

一時間くらい前に気付いてたんだけどどうもやる気が起きなかった俺は机上に散らばった教科書類を放置して、ノートとシャーペン片手に二階へ向かうことにした。アサ君求め三千里ー――とか言ってたら部屋の前、まぁ階段上るだけだしね。

「あ、さ、くーん、勉強おっしえてー！」

そんな意気揚々――別名空回りなテンションでばたーん、と部屋に入る俺。――そして其処でしでかしたことに気付く訳だ。

「――……ん」

「あ」

アサ君、寝てた。そして起こした。

「……」

「ご、ごめんアサキ寝てた!?　まだ九時回ってないけど寝てたよね……!?」

がっつり毛布被ってるのと長い沈黙で一目瞭然だ……！　やべぇよ怒られるよ……！　俺はとりあえず下手に出る準備を二秒で整える、やべぇ慣れてる。

けれど普段なら、

『うぜぇんだよ消えろカス』

最低でも此れくらい飛んで来ても良いはずなのになかなか言葉が飛んで来ない。起き上がってるから二度寝は無いだろうし……ん？

「ん」

「……ん？」

何だ其の手は、アサ君が手を差し出してきているんだが。

「……あれ？　勉強教えろって言ってなかった……？」

「え、言ったよ？」

「じゃあ早く貸せよ」

「ほわい。――えぇ！　教えてくれるの！？」

「……え、教えて貰えると思った確率そんな低い訳？」

だって寝起きでしょ！？　――寝起きのアサキがそんなに優しい訳無い！

「あ、あの、マジに教えてくれる？」

「いいなら寝ますけど」

「ありがとうございまーす！」

結局アサ君の機嫌が下降することは無く、無事分からない箇所数十を教えて貰えた訳だけど。

「あんがとーねアサ君」

「相変わらず馬鹿だな」

「うん、やっぱり酷いね」

自分から勉強する気のある奴には優しいよ僕、と無表情で言った弟に矛盾を感じながらも、頭が良い弟って良いなぁと思ったのは此れで何度目だろうか、なんて考えた。上も下も頭良いのに俺って一体何なんだ。

まぁでも、適度に頑張りましょうか、えいえいおー。

２８０＊閑話＋誰かオラに元気とネタを分けてくれ。

はあい皆様二ヶ月振り、浅井ですよっと。
最近更新が滞り気味でしたが――悪かったとは思っていない！！

「や、思えよ」

冗談です、しっかり思っていますってば。まぁ色々あったんですよ、人間ですから。

って訳で気付けば２８０話、このコーナーの必要性が一切無いことは作者が一番知ってますけど、何だか楽しいって言ってくれる人もちらほらと、って訳で調子乗ってこのまま続けてこうと思ってますよ、えへ☆

「というかなんかテンション高いね作者」

「テスト終わったんだと、出来はお前以下っぽいけどな」

うるせぇ！
でもまぁテストだったのは本当ですが。小説内との時間枠は浅井と似てたり似てなかったりするんでね、嗚呼もう結果要らない。
――という個人の事情はさておき！
前々回から始まったキャラ紹介第三弾！　毎回名前が変わってる気

もするけど気にしなーい！　今回も前回同様体調は優れてるかと聞かれれば否過ぎるけどサボってたら終わりゃしねぇ。

「まぁまぁ、で、今回は？」

前回はカイリ氏だったので、その対のような立ち位置に居るニカイドー氏を。

「アスカー！！！！」

案の定うるせぇな。

ええと、アスカ君は高校編入ってから出番がめっきり減りましたが――っていうか中学の時からあまり出てなかったんだけど。身体が弱い訳でして。

「元気かなぁアスカ」

「一ヶ月に一回は必ず会ってるんだから分かるだろうが」

朝夜。のキャラは基本的最初と変わるっていうのが特徴的なんで、アスカ君も多分最初は腹黒くなかったんじゃないかと思っている浅井。でもまぁ定着しましたよね腹黒キャラ、そこからの嫌いなものは子供っていうもうなんか駄目な感じの人。

「アスカは駄目なんかじゃないやい！　ただちょっと発言にやんわりとしたトゲがあるだけで！！」

充分だろ。

んで、アスカ君こと二階堂飛鳥君。ぶっちゃけそこまで詳しい設定

は無い訳で、ただあるとすれば風貌は優男風って感じかな。高校入ってから背がぐんぐん伸びてます。基本的双子以外は結構背が伸びるんですね中学組はかっこわらい。

「あんたの所為だろうが」

「異議有！」

認めん！！

「えぇ！？」

ええと、実際今手元に詳しいデータが無いので言えることと言えばそんなところではないだろうか、ノートある部屋行くの面倒臭ぇ。

「駄目だ作者本当駄目人間だ作者」

「アサ君に言われるようじゃ本当駄目だね浅井さん」

うん、其処は認めようちっくしょー！

数値で言うなら身長は百七十前後だったかな、やべぇ無責任なこと言えないけど違ったらどうしよう。

「いんじゃない？　後でアスカ君に怒られてきなよ」

ちょ、洒落にならんこと言うな！　怖い！！

「ねぇねぇ浅井さん、作者なんだから勿論決めた誕生日とか覚えてるよね？」

うわあ珍しくユウヤ君が黒い。

「覚えてるよね？」

勿論だとも！　――六月。

「来たよアバウト」

あ、駄目だ本当出てこない、二桁だったのは覚えてるんだけど。

「絞れたの三分の二！？」

これも後日にまとめるよ！　もう今日は疲れたからまとめも正確なこともごーじーつー！！

「こいつカイトのもまともにまとめ終わってねぇのに何言ってんのかな」

カ、イト君のは……――忘れてたんだよ悪ィかああん？

「とうとう素が出てるよ浅井さん！」

いいじゃんどうせ俺得企画みてぇなもんなんだから許せよいいじゃん！！　確かに最近なんか色々感想とか貰ってえへへってなってたけどね！？　ネタとかも浮かばずに書けなかったりすんだよ！　更新率が下がってんのもきっと其れ！　上げたかったら誰でも良いからネタよ　こ　せ　。

「――って訳で誰かネタ下さい、だそうです」

「もうだれたな、浅井」

うふふっ、最近出てないキャラとかも出すべきかしら、もう感想とかくれる人でなんかネタ下さい。良い感想も嬉しいけどネタくれたらもっと喜ぶから……！！　此のキャラ見たいです（は　あ　と）とかでも全然良いんで……！

「……よっぽど無いんだなぁ……」

「じゃあアスカ出して下さい！！」

よっしゃあ次アスカ君行くか！

「え！？　マジで！？」

自分で書いていて何だがアスカ出す予定なんて少しも無かったけどね！　つーか予定？　何其れ美味しいの？　今なら言われたもん即決で書いてやるっつーの！　あはははは！！！！

「作者が壊れた、どうやら既に手遅れのようだ」

「あの人ＲＰＧだったら確実に魔道師だよね」

「しかも黒だな」

双子が何から言ってますが此の際気にしないで行こう！　それでは

今回は此の辺で！
プロフィールのまとめは何時かちゃんと書いておきますのでー、ではではっ！！

まーとーめ。

名前／／二階堂　飛鳥
性別／／男
趣味／／読書、ＰＣ
身長／／１５９ｃｍ（初期）、１７０ｃｍ
容姿／／見た目が一見優男風。ふわふわの猫毛の茶髪が男にしては長いセミロングくらい、何やかんやで目付きは優しげ、男らしいというよりは中性的な雰囲気が強い。
血液型／／ＡＢ
誕生日／／六月二十六日
備考／／残念な腹黒。性格が残念というか好感が持てない人などに対してが酷い。子供時代にあまり良い思い出が無いからか大の子供嫌い、こう見えて友達は大事です。ホラーの帝王様。あとは読む本のチョイスが結構微妙。

281＋七転八起以前の話。

こんにちは、と言いますか、お久しぶりです、が正しいでしょうか？　アスカです。

「――……」

今日は別にユウヤと約束をしている、という訳では無いんですけど、たまには黙って家に遊びに行ってみようだなんて思ってやって来てみました。ふふっ、きっと驚くんだろうなぁ。――なんて暢気な俺の考えは五分後に吹っ飛ぶ訳ですが。

「アスカあああああああ！！！！！！！！！！」

久しぶりないきなりの勢いに少し驚いたもののまぁ三年間で慣れてますから其処は――嗚呼嘘ですマジでびっくりしました。

「ど、どうしたんですかユウヤ……？」

「やべぇんだよマジで俺死ぬしかない否死ぬるよ自害もんだって！」

「は、はぁ」

ええと、此れは話になりませんからアサキ君に尋ねましょうか。客人をリビングにすら入れず廊下で喚き散らすユウヤを適度に宥め、勝手ながらリビングに入りました、無論俺が先に入ったのは言うまでもありませんけど。

「こんにちは、アサキ君」

「……ん」

――ゲームに熱中してました、此れは聞けませんね。

「あれ、アスカ君？」

どうすればいいんだろう、と何時の間にやらソファの引っ付き虫になっていたユウヤを見つつ思っていれば。

「あ、マヒルさん」

マヒルさんと書いて救世主（メシア）登場です、キッチンから。――お手軽な救世主が居たものですね、おっと口が滑った。

「久しぶりー、学校帰り？」

「ええ。マヒルさんは帰っていらしてたんですね」

制服のまま来た俺――ブレザーって怠いです――にそう言ったマ

ヒルさんはひとつ頷いて、いらっしゃーい、何か飲む？　なんて続けてくれた。何時来ても此の家は明るいですよね。

「ほれユウヤ、ソファ占領してたらアスカ君が座れねぇぞ」

「お構いなく、平気ですよ」

三人は掛けられる白いソファを一人で陣取る引っ付き虫は未だ人に戻らなそうなので放っておきましょう。其れにしてもアサキ君我関せずだなぁ。

ダイニングテーブルの方で紅茶を頂きつつアレ（ユウヤ）の原因を尋ねれば、

「何か、思った以上にテストの結果が芳しくなかったみてぇよ？」

マヒルさんは苦笑して教えてくれました。芳しくなかった――

「――ユウヤ、普段からアレだったのに今回どれだけ酷かったんですか？」

「アスカ君、たまに本当天然で毒吐くよね」

あれ？　今は其のつもり無かったんですけど。

マヒルさんも詳しくは知らないようで、「アサキー、お前知ってる？」と尋ねてみたようですが、案の定答えが返って来ない訳でして。

「二人共喋らないなんて酷いな」

「あははっ、二人らしいじゃないですか」

流石双子です。

「――僕今んとこ最低がユウヤの最高より高い」

とか何とか思っていれば、恐らく発言出来る間が短かったんでしょう、早口でアサキ君がそんなことを言った――やってるの音ゲーですもんね――。

ええと、此の場合アサキ君が凄いのかユウヤが悲惨なのかどっちなんでしょう、俺の勘では完璧に後者ですが。

「んなに落ち込まなくても未だ他のテストもあるだろ？　良くは無いけどそんな落ち込まなくたっていいんじゃないか？」

「……赤点でも？」

「期末頑張れ」

マヒルさんの声にやっと反応を見せたユウヤがちらりとこっちを見ている。

「――三つ赤点でも？」

「はぁ？」

「お前死ねば？」

しかし兄弟の心無い一言で素早くソファに撃沈した。自業自得ですけど見ている分には非常に面白いですね。

「おま、テストで赤点って俺採ったこと無ぇぞ？」

「其れはマヒルさんだからですよ」

「アサキだって無ぇだろ」

「中学に赤点は無かった」

確かに。でもアサキ君なら赤点なんて無いと思うんですがね。本当、ＤＮＡがユウヤだけ改造されたんですか此の兄弟は。

「――まぁユウヤ、そんなに落ち込まないで下さい」

でもそろそろ可哀相ですし、ちゃんと言ってあげないといけませんね。

「テストなんかで人の価値は測れません、大事なのは過程なんです、ちゃんと落ち込めたなら次頑張れますよ」

「アスカ……」

「ほらほら、何時までも落ち込んでたら俺が暇なんだから何時もみたく馬鹿みたいに騒いで下さいよ。其れがユウヤでしょう？」

再びのそのそと起動したユウヤは何かを考えて、其れから元気良

くひとつ頷いた。

「俺、次絶対頑張るよ！　七転び八起きの精神で！」

「えぇ、頑張って下さいね」

――明るい君じゃないと、何も始まりませんから。

「――テスト如きでそんなに転ばれちゃあこっちも溜まったもんじゃないんだが」

「言うなアサキ」

確かに今は言わないで下さい、また落ち込まれると面倒ですから。

282＋早過ぎる冬、からの台風。

「さっみー！！！！！」

ユウヤです！　全てのものを吹っ切って――テストの結果とかテストの結果とかテストの結果とか――やっと立ち直ったのに何ですか此の寒さ。自転車での帰り道、初冬の寒さって言ってたのに防寒対策ゼロのカイト君が叫んだ。

「僕はそうでも無いけどね」

其の後ろに座ってるだけのアサ君を見習うべきだよ、コートに手袋にマフラーだよ、――早ぇよ。

俺ですらマフラーはしてるのに此のカイト君ったら、絶対明日休むよね此の人。

「畜生さみぃ！！　早く帰らねぇと凍る！！！！」

「お前が凍っても僕は一向に構わないけどな！」

「嗚呼そうだろうな！　何か重ぇと思ったらお前自分だけ傘差しやがって！！」

「まぁアサ君だもんね」

合羽はおろか傘すら忘れたカイト君、って君朝どうやって来たの？　なんて質問がカイト君に通じる訳も無く、勿の論で滑走してきたんですよね分かります。

「だって差さないと濡れるじゃん」

わぁご尤も。

とか何とか喋っていましたら途中まさかの土砂降りになり、傘の意味が無くなるなんてアクシデントに見舞われたので、

「カイト、コンビニ寄れ」

というアサ君の実質『もう無理だろばかやろう』なんてえまーじぇんしーこーるが響いたので、俺達は近くにあったコンビニに寄ることにした。

「うわあびっしょびしょ」

「このまま帰ったら絶対姉ちゃんにどやされる……！」

「傘すら持ち合わせていなかったお前が悪いに一票」

さらりとそんなことを言って、一人お先にコンビニへと入っていった我が弟。あの子も充分濡れてるんだけどちょっとねぇ拭こうよ。

「あー、コンビニの中の方が暖かいってどういう」

「其れだけ寒いってことだよねー」

未だ暦の上じゃあ秋だっていうのにさ！　どんだけ引っ込み思案なの秋！　マジ寒いんですが！！　手が寒々しいよー、アサ君程までとはいかなくても、手袋くらいしてくれれば良かったかな？

でもまぁ俺よりも寒いであろうカイト君が居るんだし、此処はマフラーがあるだけ良しとしよう。でも濡れるとマフラーって寒いよね？　あれ俺だけ？

「折角寄ったんだし何か買うかな」

「あ、俺も思った」

というかアサキもそう思ってるみたいで、とっくに買い物籠を掴んでいた。コンビニでどんだけ買う気なのあの子。

「んー、何食べようかなぁ」

「俺アイス買おうかな」

「カイトお前馬鹿なの」

でも其の気持ち分かるかも、寒い時にあったかいところで食べるアイスって絶品だよね！　炬燵で食べるアイスって何で美味しいんでしょうか……でも今は外よりあったかいだけであって其処まであったかくないはずだけど。

「カイト君、寒くないの？」

「超寒ぃ」

「で、何買うの？」

「アイス！」

「お前一ペン凍え死ね」

「いいじゃねぇかよ！　俺が食いてぇんだから！」

確かにそうだけどさ？　其れでも見てるこっちが寒くなったりするし、何より其れじゃなくても冷えてる身体に追い討ちをかけなくたって良いだろうに……。

「まぁ良いけど、僕は今無償にココアが飲みたい」

「あ、俺も飲みたい。……あれ、アサ君ココア飲めたっけ？」

「嫌いじゃないけど余したら飲んで」

「はいはい」

そんなに多く飲めないってアレだろうか、俺にはそういうの無いから分からないけどアスカも前に『おしるこって美味しいですが一杯も要りませんよね』なんて言ってたっけ。ううむ、人間の真理だ。

（※ただの好き嫌いです）

って、本当にカイト君アイス買ってるし、店員さんも苦笑してるよ。

「ユウヤ、早く買うよ」

「あ、んー」

そうだった。
籠を持った割に結局買うもの少なかったアサ君の代わりという訳では無いけど、俺は沢山食い物――お菓子類を買い込みましたとさ。めでたしめでたし。

――あ、マヒル兄帰って来てるんだった、買い過ぎて怒られそう……！

「忘れてたの？」

「おま、謀ったな……！！」

283＋一日遅れでこんにちは。

アサキです。
秋――季節の変わり目だからか、体調不良の人が多くてクラスはマスクだらけ。僕は風邪なんて滅多に引かないし、周りの人もそんなマスクなんてする人居ないから良いんだけど。

「今日こそ絶対にあっ君に勝つ、っていうか此の前言ったの持ってきてくれた？」

「ん」

体調絶好調過ぎる人とか、

「ゼン君何時になったらアサ君に勝てるんだろうね、カイト君とどっこいどっこいだから難しいだろうけど」

「いーや、カイ君よりは絶対ゼン君の方が強い！　――って言ってもカイ君休みだから張り合い無いんだけど」

全力投球で絶不調な人――カイト先月四回休んだ――とかなら居るんだが。

三人で部活に向かいつつそんな平凡な会話をしていれば、「アサキ！」と後ろから僕を呼ぶ声がした。一体誰だろう、何を考えるでも無く振り返れば、其処は廊下奥、手を上げて小走りしてくるハヤ先輩が居た。

「あれ、ハヤ先輩――」

「「走らないで下さい！！」」

まさかのハモり、と言いたいところだが僕も同じことを言おうとしていた。言われた本人は急ブレーキをして苦笑していたけれど。

「お前達は俺を何だと思っているんだ？」

「病人」

「体調不良がデフォ」

「容赦無いなお前達」

ユウヤとゼン君は真顔でそんなことを言っている、ハヤ先輩が寛大な人で良かったな。……僕も同じことを考えていたとはやはり言えまい。

「今日は大丈夫だよ、絶好調だから」

「ハヤ先輩の絶好調ってどれくらい何ですか？」

「五十メートル走を走り切れるくらいだ」

可愛い絶好調だなおい。

サチト先輩が横に居ないことがこんなに不安――主に周りが――になるとは思っていないであろう此のストイックな生徒会長は腕組みをして、しかも真顔でそう言えば思い出したように僕等を見た。

「リョウコを見なかったか？」

其れが了見な様子の先輩、貴方がカトウを探しているなんて珍しい。

「リョウちゃんなら委員会ですよ」

同クラスのユウヤがそう言えば、ハヤ先輩は少し考えるようにして自分の背後、僕等が向かおうとしていた部室の方向を親指で差す。

「お客さんが来てるんだが……お前達も知り合いか？」

「あ、二人共こんにちは～」

「モモちゃん!?」「……ラン?」

部室に言ったら意外な人物に出会った。うちの制服では無いブレザーに身を包んだにこにこ笑顔ことランだった。

「ど、どうしたのモモちゃん！　学校帰りだよね!?」

「うん、そうだよ～。あのね、ハロウィンだからだよ」

……理由になってない。

「皆にお菓子のお届けにきました」

ということでもう一度理由を聞いたらそういうことらしかった。

「ハロウィンだからってうちの弟が張り切り過ぎちゃって。だから皆にあげようと思ってリョウちゃんに昨日お話したんだけど、驚かそうと思って出待ちしてみたの」

「出待ちって言ってもリョウちゃん未だ委員会だよ?」

「うん、うろうろしてたら会長さんが助けてくれたの～」

其れは不審だったから話し掛けられただけでは。そんな意味を込めてハヤ先輩を見たら苦笑された、案の定だな。

「声を掛けたらリョウコの知り合いだというから連れて来た、ちゃ

んと来賓扱いにしてあるから居ても問題は無いぞ」

流石は会長だ、抜け目が無い。

「此処で待っていれば来るだろう、ゆっくりしていってくれ」

「はい、ありがとうございます」

「さて、俺はお茶でも出すか」

「え！？　先輩がやるなら俺がやりますって！」

「何だゼン、俺のは飲めないとでも言うのか？」

「いや違いますって、身体に聞いて下さいって」

結局、今日は頗る調子が良いらしいハヤ先輩が給湯室へと去っていった。あの人からは本当に目が離せないＧＣ部一行、サチト先輩何処行ったし。

「はいユウヤ君」

「わ、ありがとー！」

とか思っているのは僕だけなのだろうか、少なからずゼン君は同感なのだろうが目の前の身内が黙らないんだけど。

「はいアサキ君も～」

「ん」

可愛らしくラッピングされた袋をくれたラン、まぁ貰えるものは貰うけども。

するとランは隣に立つゼン君を見て、「沢山あるからアサキ君のお友達さんも貰ってくれますか？」なんて言って首を傾げた。

「え？　俺？」

「はい、弟が作ったものなんだけど……」

「是非！　ゼン君可愛い女の子がくれるものなら大歓迎だよ！」

酷い身長差の中笑顔で会話を交わせばランは「可愛くなんてないですよ～、あ、私ランモモって言います」と今更に自己紹介をしてぺこりと頭を下げた。

「俺はゼン、ワタヌキゼン、ゼン君って呼んでね」

「分かりました～、はい、此れどうぞ」

自己紹介を済ませたところでやっと目的の品を渡したランは、ユウヤに勧められてソファに落ち着いた。

給湯室からハヤ先輩が戻って来て。

「どうぞ」

「ありがとうございます～、あ、会長さんも貰ってくれますか？」

「勿論、喜んで」

口元に笑みを携え、ハヤ先輩は其れを受け取った。ハヤ先輩は相変わらずイケてるメンズだ、なんて思った僕は古いだろうか。

「あれ？　そういえばアサキ君、ロクジョー君は？」

「休み」

そっか～、と続けたランは別に他意が無かったらしく、ハヤ先輩が煎れた煎茶を飲んだ。美味しいと一言漏らしていたがそりゃ美味しいだろう、だってフウカ先輩が自宅から持ってきたんだから。

「リョウちゃん、未だ来ないのかな？」

「さっきメールしたんなら、ランが此処に居ること知ってんでしょ？」

「うん、どうしたのかなぁ……」

「あ、ごめゼン君、ミスった」

「ちょ、ゆっ君此処でミスは無い、死ぬ、俺死ぬぎゃああ！！！！」

暫くしたら二人が飽きた。先輩はＰＣ弄ってるからまぁ言いとして、お前等ゲーム熱中し過ぎだろ。

「楽しそうな部活だね～」

「まぁ、他よりは」

「リョウちゃんも毎日楽しいって言ってたよ、良かったなぁ」

お前等、本当仲良いな、とは思う。お互いがお互いを思っているというか、唯一無二の親友というか。ほやほや顔で笑うランとカトウは別に昔から仲が良い訳じゃなかったと聞いたことあるし、まぁ、大切なのは過ごした時間の量じゃないということか。

「ねぇアサキ君」

とかなんとか茶をしばきながら考えていれば、不意に名前を呼ばれて一瞥する。

「――リョウちゃんのこと、お願いだよ？」

「……？」

「――ごめんモモ！　遅れたわ！！！！」

どういう意味？　そう聞き返す時間無く、慌てた様子でカトウが部室に入って来た。慈しむような笑みを向けて来ていたランはすっかり何時ものにこにこ顔に戻っていて、僕の疑問は募るばかりなのだけれど。

「あっ君！！！！　助けて！！！！」

「死ぬー、アサ君パス」

とりあえず今はそっちが五月蠅いので、そっちを先に片付けようと思った。

――お願い、か。何だったんだか。

284＋祝日の物思い。

「うあー、外超暗ぇ……」

「ていうか寒い」

「姉ちゃんに絶対怒られる……、メール入れとこ」

「というか寒い」

「お前寒いしか言ってねぇけど？」

「五月蝿い寒い」

「分かった、お前が寒いことは存分に分かったからとりあえず一旦チャリから降りろ、発進出来ねぇよ」

我が儘な奴だな、アサキですが。

休日。十一月の祝日こと文化の日、自由と平和を愛して文化をすすめるなんて理由で作られた日だそうだがぶっちゃけ言ってる意味はよく分からないよね。国民の祝日の大半は天皇の誕生日だと言うけど今日も確かそうだった気が。関係無いらしいけど。

自由も平和も愛しに愛しまくっている僕はカイトに引き連れられて一日ぶらぶらしていた。暇だった――そして本が買いたかった――から良いものの普段じゃ絶対にしないことだ、家ん中以外遊びたくないよ僕。

何時も通り自転車の荷台に乗る僕にそんなことを言ったカイト、

寒いのにあまり動かさないで欲しい。

「あー、帰るのって何でこう怠いんだろうなー」

「寒いからじゃない」

「あれ、なんかお前と会話が成立しなくなってんだけど」

病み上がりな癖して遥かに薄着のカイトはまさかの防寒具無しだ、お前半袖にパーカーって死ぬのか、お前は女子か、冬にスカート履く女子か。あれ寒くないのねぇ。

カイトと違い防寒ばっちりな僕は発進し出した荷台に乗り何も考えずにカイトを背もたれにぼうっとする。畜生此れでも寒い、だと……？

ちなみに此の乗り方はあからさまに危ないらしいので、良い子の皆は真似しないでね、かっこはあと。

「ゲーセンにあんだけ居座ったのも久しぶりだよなー」

車通りの少ない道で、反響するカイトの声。

「誰がさんがＵＦＯキャッチャーに熱中してたからね」

「お前だってそうだろうが！」

「僕はそうでも無いし」

「嘘つけ！　あんだけキレかけててどの口が――」

「首に手刀入れんぞ」

「怖ぇよだが其の体制でどうやるのかが気になる……！」

喋っていた方が暖かいということもあるけれど、個人的に喋ってないと大分やばいです。（※睡魔的な意味で）

「――もう冬だよな」

物思いげ、とまでは言わないけれど、カイトがそう呟いたのを聞いてだったら其の薄着は何だ、とツッコまなかった僕を誰か褒めろ。

「あーあ、また一年終わるよ」

「そりゃ月日は誰にでも平等だしね」

「平等？　そうか？」

ん？　そうでしょ？　とは返さなかったけど、とりあえず沈黙で応えてみる。

「いや、深い意味は無ぇけど。……人生の時間が本当に平等だったら、不公平とかってなくなんのかな、って」

――そういえばそうだ、僕はあっさりと口を滑らしていたらしい。

「不公平、ね」

「悪が生き延びて善が死ぬ、みたいなゲームじゃ絶対に無いことが現実にゃあるっつー……あー、俺上手く説明出来ねぇから察してくれ」

「うん、分かった」

そんなの分かってるって、お前が馬鹿なことくらい。其れと、お前の言ってることだって。

「カイト」

「あ？」

「相対性理論ってさ、」

「ちょ、難しい話パス」

「難しくないから聞け馬鹿野郎」

僕がお前如きに難しい話する訳ないだろ。

「――楽しい時の時間は短くて、辛い時の時間が長い、ってことらしいんだよ、感覚的な問題で。……ちゃんとした意味は僕も知らないんだけど」

「あ、確かにそういうのある」

発信源はマヒルだから僕もちゃんとは知らないけど。

「感覚でそう感じても、経ってる時間はやっぱり同じで、」

だから人の時間は一緒で。でも、

「楽しいことが沢山あったから、時間が過ぎるのが凄く早く感じて、」

感覚的にはきっと沢山の楽しいがあったから。

「――早くに亡くなった人はきっと、本当の時間じゃ計れない程の沢山の幸せがあったから」

なんじゃないかな、なんて。

カイトが考えてることなんて直ぐに分かった、――亡くなってる母親のことだろうから。

「ふーん、……何か俺よく分かんねぇ、難しい」

「此れが難しいなら一生分からないな、お前には」

「――まぁ、お前が俺を案じてくれてんのは分かった」

「……」

其処は分かるのか、質の悪い。

といっても、今の話はそれこそカイトにする為に見繕った話だから、僕はそうは思ってないけれど。

どちらかと言えば人が死ぬ理由こそが不条理な訳だし、幸せ過ぎて死ぬくらいなら不幸な方が良いと思う人も中には居るだろうから。

そして何よりカイトが言った言葉。

『悪が生き延びて善が死ぬ』

――其の言葉の方に、僕は真理を感じたから。

「人生、ゲームのようには行かないよ」

「だろうなー、悪が絶対勇者にやられてたら、どんだけ世界は平和なんだか」

其の通りだよ、本当に。
でも、世の中そうは絶対に行かないんだ。心からそう思うよ、僕は。

「――何より、此の僕が生きてる」

「……あ？　何か言ったか？」

家に近付くにつれて車通りも増えてきた。丁度聞こえなかったらしい言葉にそう興味がある訳でも無いらしいカイトは、そのまま自転車を走らせる。

何時か教えてやるから、今は黙って走ってろ。

――本当、其れが真理だから。

２８５＋一部が沈黙で居続ける話。

ユウヤでっす、何時も通り部室でうだうだしていまっす！　最近では珍しく、八人全員が揃っているっていう。……ってあれ？　先輩達揃ってて良いんだっけ？

「サチ先輩サチ先輩」

「あー？　――どぅあっ！！」

――格ゲー中に話掛けてごめんなさい。

ええと、気を取り直して。

「先輩達、……明日から修学旅行じゃなかったですか？」

「嗚呼、そーだけど？」

そう、二年生は明日から来週まで修学旅行に行くらしいです。ちくしょー羨ましい。

俺だったら確実に浮かれに浮かれて準備したものを入れたり出したりしてるであろう――そしてなかなか準備始めないアサ君を駆り立てるのに必死になっているであろう――ことだろうに、此の先輩方三人は何だか余裕綽綽（しゃくしゃく）というか、うん、そうだ、浮かれ感が無い。

「楽しみで浮かれたりしないんですか……！？」

「そんなに浮かれるものか？」

「浮かれるでしょ！？」

つい立ち上がってしまった、いや、だって修学旅行だよ修学旅行！！　俺が三学期のスキー研修をどれだけ楽しみにしていることか……！！

テレビの格ゲーの片手間に俺と会話していた先輩はキョロリと辺りを見回し、

「アレだって修学旅行行くんだぜ？」

と言って、最早見慣れた光景となっている机で寝ているハヤ先輩を視線で差した。……浮かれて、ないな、っていうか意識が無いな、寒そうだから毛布掛けようっと。

「じゃあフウカ先輩は！？」

「？」

「修学旅行！　楽しみですよね！？」

「楽しみ」

良かった！　真っ当な神経してる人居た！！

「――皆で夜な夜なゲーム大会」

「楽しみ方が違うよ先輩！！」

真顔で何そんなこと言ってるんですか！　あれ？　修学旅行って、……あれ？

一年の中で俺一人が喋るっていう珍しい光景を繰り広げて何だか修学旅行の醍醐味が分からなくなってきた中――他の皆は其れこそゲームに熱中しているぞ☆　其れはもう怖い勢いで――、とりあえず俺は眠るハヤ先輩に毛布を掛けることにした。

一人頭を悩ませつつ毛布を先輩に掛けたは良いけど、先輩の手元をよく見たら何等かの書類が置かれていた。伏して寝ているからよくは見えないけど、明らかに生徒会の書類だってことは俺にも分かるってものだ。

「修学旅行前だっていうのに大変だなぁ……」

「……あ、言い忘れるとこだった」

生徒会長って大変、というかうちの生徒会はハヤ先輩以外動かないから大変だっただけか。

そしてそんな俺の呟きに反応したサチ先輩は、ゲームを中断してソファとコンピュータを陣取る一年集団に声を掛け、とてつもなく良い笑顔を作った。

「俺達が居ない間、ハヤサカが生徒会にやって欲しいことあるって言ってたから頼んだ」

『……』

※此の沈黙はスルーの沈黙ではなく、『ええー』の沈黙です。

「まぁそんな面倒なことじゃねぇからさ、ほら、体育館の倉庫整理」

「超面倒じゃねぇかよ馬鹿サチト」

星が飛びそうな程の笑顔に透かさずツッコミを入れたのは勿論幼馴染でした。

「お前が修学旅行で楽しんでる時に仕事ってだっるー、ゼン君全力でやる気起きひんわー」

「何で大阪弁なんだよお前」

ソファに凭れ全身で怠さを表現するゼン君、隣のアサ君を見れば身動きは無いもののもう完全蚊帳の外ぶってるよあの子。

「第一俺達未だ生徒会所属って訳じゃねぇでしょ？　なのになあんでやんなきゃなんないの、ゼン君だって忙しいんだけど」

「未だったってもう一週間もすれば決まるだろうが、其れくらいのロスタイム良いだろ？」

「黙れ碌に仕事もしていない屑野郎」

「あれ？　俺今さらりと爽やかに罵倒された？」

確かに満面の笑みだったはずなんだけどなゼン君。元々酷い性格

をしてる訳じゃないけど幼馴染は別なのか結構辛辣な言葉を吐くんだよね、シギ君には全然だけど。

そうそう、生徒会の方も結局俺達全員所属することになったそうで。空いてる副会長は勿論ゼン君が、もうひとつある庶務の役職はアサ君が（先輩達が勝手に決めて）やることになった、……まぁ妥当かなとは思うけど、結局は皆でやらされるんだよね。サチ先輩が言う通り正式に名前が連ねられるのはもう少し先らしいんだけども、先輩達にはそんなことどうでも良いらしい。

「ちゃんとお土産買って来てやるからさー頼むってー」

「まともなの買って来いよな」

買って来なくてもやらなくちゃいけないんだろうけどね。

「私も皆に買って来る、楽しみにしてて」

「え、良いんですか？」

フウカ先輩はこくこくと頷いている、……良い先輩だ。

「ハヤも買うつもりでいるとは思うけど、直ぐには手元に来ないと思っていた方が良いわ」

「あははっ！　そりゃ言えてんな！」

楽しそうなサチ先輩の声に少し頭を悩ませる俺、え、どういう意味？

「――修学旅行明けのハヤが、まともに学校にやってくる訳が無い」

『……』

※此の沈黙は憐れみの沈黙です。

「……先輩……修学旅行楽しめるのかな……」

中学の時のアサ君は一日目で死んでたんじゃなかったっけ……え、其れ以上？　大丈夫なの？

「ちゃんと俺が無理させねぇから大丈夫だよ」

「サチ、お守り役が板についてんな！」

「あっはっはそうだろそうだろ、やっべ褒められてねぇ！」

其処まで話して再びハヤ先輩に視線を向けてみたけど、話し声に起きる気配は一切無かった、フウカ先輩曰く「体力温存中」らしいです。

「って訳で、俺達居ない間は任せたからな」

「はいはーい、此のゼン君にまっかせなさーい」

部活に来ていたとはいえやっぱり早めに帰るらしいサチ先輩が、ハヤ先輩を起こしてからゼン君にそう言って軽くハイタッチのようなものを交わしていた。

ううむ、何だかんだ言ったけど、やっぱりお土産が楽しみだなぁ。

286＋眩しいくらいの日差し下で。

マヒルだ、自宅だ、……あ、一人暮らしの方じゃなく双子が居る方だが。

「――よし」

「お疲れマヒル兄」

洗濯物を干し終えて俺は一人満足げにそう呟いた訳だが、どうやら聞かれていたらしい。何処かに出掛けていたユウヤが其処には居て、此方にやっほーと手を振っている。ちなみにアサキはと言えば其の足元ら辺で寝こけている、否、意識はあるが寝転がっている、……日向ぼっこって気持ちいいよな。

「嗚呼ユウヤ、帰って来てたのか？」

「うん、本屋行ってきただけだからね」

学校が無い訳でもないが何となく家に居る俺、理由は特に無いが強いて言うなら一人つまらないんだもん。

「はいアサ君、頼まれてたの」

「ん」

寝転がったまま本を受け取って――どうやら小説なようだ――其の体勢のままぱらぱらと頁をめくれば読み始めた。流石は本の虫、……違うな、インドアというべきか。

「あーあ、マヒル兄が居ると俺やること無くて良いんだけど、普段が普段だからやること無くなるよー」

「其れは謝るべきなのか？」

アサキの横をすり抜けて室内に入れば、食卓机に座ってぐでるユウヤを発見する。いや、普通の高校生なんて皆そうだろ、お前其処の日向見てみろよ。

「だってさー、朝起きてさー、ご飯作ってさー、洗濯物干してさー、アサ君起きてなかったら起こしてさー、新聞取ってさー」

本当に高校男児かお前は。

「なのに今はマヒル兄居るからのんびりしちゃってさー、宿題忘れてさー」

「「其れはお前の責任だ」」

宿題忘れってお前、暇が多いなら逆にやる時間も増えるってことじゃないのか？　まぁそんな常識がユウヤに通じるとは思っていないから発言は割愛させてもらおう。

「お前なぁ、高校からは留年だってあるんだから気をつけろよ？」

「さ、流石に其処までにはならないよっ！！　……多分」

「可能性あるのか!?」

「無い無い！　無いよ!!」

「前回のユウヤ君のテストは～、全てクラス平均下でした～」

「ちょ、アサキ！　余計なこと言わない!!　っていうか其のテンション眠いんだろうから寝なよっ!!」

「お前……赤点三つに全部平均下って……」

「ご、ごめんなさい、ってマヒル兄？　そんなに落ち込まないでよ、……ごめんなさい!!」

不甲斐ねぇよ、何か俺不甲斐ねぇよ……！
いや成績が全てじゃないとは思ってるけどな？　でももう少しどうにか……。

「数学だけは結構出来たんだよっ！　へ、平均まで後五点!!」

「……惜しかったな」

「やめてマヒル兄！　其の憐れんだ感じの惜しかったなやめて!!
そんな目で俺を見ないで!!」

でもまぁ、未だ一年だしな。此れからどうにでもなる……よな？
一人発狂の最中俺は何か飲もうとキッチンに行く訳だが、其れにしてもあの五月蠅い中で漫画でも無い文字の羅列を読んでられるア

サキの集中力って結構なものだよなぁ、なんて。あの集中力が少しでもユウヤにあれば――いや、無い訳ではないはずなんだ、絶対。ユウヤにだって真剣な時くらいある――はずだ――し、ううむ、ユウヤの今後は一体どうなるのだろうか。アサキもアサキで勉強は出来るが好奇心とかそういった“らしい”感情を何処かに落としてきてしまったっぽいし……何なんだ此の双子等。

「……やっぱりお前等、一回足して二で割った方が良いんじゃないか？」

「「はい？」」

うん、まぁ良いか、此れが二人だ。

287＋記憶は無くなるものではなくて、思い出せなくなるだけだとか。

アサキですが。
クラスに帰ったら僕の席に誰かが座ってた、……此の展開最早三回目なんだけど。

「あ、ヒコク君！」

「お、あっ君来た来た」

ゼン君だった、またお前か。
ゼン君は席から退けば僕に席を譲って立ち上がり、フドウの机に両手を置いて待ってたんだよー、なんて呟いた。

「どうかしたの」

「どうかしなかったら此のゼン君が一組にわざわざ来る訳ないっしょ？」

「ゲーム関連の時は直ぐ来るのにね」

「だってゲームだもん」

ゼン君の中でゲーム関連の話って何位くらいに位置付けされているのだろうか、ちょっと気になるけど口には出さないでおいた。
無駄にきりっとした表情を見せたゼン君をスルーした僕とフドウ――ゼン君に対してのフドウのスルースキルは半端ない――を放って、ゼン君はポケットから携帯を取り出した。

「ええっと、ほれ、此れ見て」

「ん」

黒の携帯をかちかちと操作してから其れが僕に渡される、……メール？

「サチトからのメール」

「先輩？　あの人今日は……」

「修学旅行の振り替え休日」

確かそうだったはずだ、そしてそんな先輩からのメールが何だっていうのだろうか。

Ｄａｔｅ：１１／１０　１２：００
Ｆｒｏｍ：さっちゃん先輩（笑）
Ｓａｂ：さぁ！
――――――――――――――――
買い過ぎた、選べ／（＾０＾）／

そんな文面と共に、自宅であろう広げられたお土産の山の写真が

添付されていた。

「――随分とユニークな文面だね」

「あんだけノリ悪かったのに完全にエンジョイしたんだろうな此れ」

「あははっ、さっちゃんすから！」

明らかに後輩へのお土産の量じゃあない、山だ、とにかく山だ。
でも其れ以上にゼン君がサチト先輩の登録名に『（笑）』を付けていることの方が面白い。

「え、一人一個？　ってメール返したら其れで良いっぽかった」

「……あの人、どんだけ金持ってってたんだ……？」

「サチトで此れってことはフウカ先輩はもっと恐ろしいんだろうな」

金持ちの金銭感覚なんて考えるだけで恐ろしいけど、庶民だって此れなんだからあの人は恐らく……うわあ考えるの止そう。

「で？　あっ君どうする？」

「二組の奴等は？」

「ゆっ君とカトウちゃんは何でも良いって。カイ君は何かこっちにある此の人形が良いって言ってたね」

人形――何此の人形、緑色のタコだ。いかにも変なもの好きのカイトの気を引くような一品に全僕が呆れた、え、此れを修学旅行のお土産で良いのかカイト。

「ゼン君とフドウは？」

「俺とシギは帰りにサチの家寄るからそん時に」

ふむ、そうか、幼馴染の特権という訳か。

「僕も何でも良い、――っていうのは困るだろうから適当に此れで」

「ん、了解」

ちなみに僕が言ったのは無難にチョコレートでした、チョコレートってコーヒーと一緒に頂くと美味いよね。

ゼン君に携帯を返しつつそういえば今日は一回も見ていなかった、と自分の携帯を鞄から取り出した。

「あっ君って携帯を携帯しないタイプの人間なのね」

「だって怠い」

使って無さ過ぎて綺麗な携帯を開けば新着メールが一通届いていた、おや誰だろう。基本的携帯を通話メール以外で活用しないからメルマガとかは来ないんだが。

「……あ、ユキだ」

何てことだ、今一瞬懐かしいとか思った、とりあえず其れ言ったら怒られそうだから謝っておこう、さーせんユキ。

「ユキ？　あっ君が呼び捨てるなんて珍しい、女の子？」

「女の子だったら何だってんだばかやろう」

「え……だってゼン君、フェミニスト……だよ？」

「何でそんなにわなわなしてるの、え、僕が間違ってる？」

「気にしたら負けっすよヒコク君」

ゼン君に関しての事柄は基本フドウが一番だろうな、余裕で笑みを零している。

「で、女の子なの？」

「女の子のようなもの」

「……はい？」

「女の子みたいだけど実は男の子ですがー、みたいな」

確か写真が……嗚呼、あったあった。

使いはしないけど一通りの機能は熟知済みである、確か前にクラスで撮らされた写真を誰かしらが送って来たんだった。……誰だったっけ？

「ほれ」

携帯を覗き込むゼン君とついでにフドウ。
数秒停止してからゼン君が起動した。

「詐欺だよね」

「はい？」

「――可愛い子が男って詐欺だよ絶対！！」

いや何の。

「あっ君の友達って皆格好良かったり可愛かったりするけどさ！
男で可愛いってどうなのよ！　あ、いや、あっ君も可愛いよ？」

「殴るよ？」

「ごめんいやマジで」

テンポの上がったゼン君が気付かぬ内に変なことを漏らしたので、
座った形での本気で蹴りを入れておいた。

「でも此のユキさん？　凄くハツラツな感じっすよね！」

「っていうか此の子、文化祭来てたよね！？　嗚呼！　居たよ此の
子！　あれ！？　可愛い子は基本的覚えてるのに何故……！？」

「制服だったからじゃないの」

「嗚呼、野郎の制服なら気付かないな」

ゼン君は僕の隣の無人席に座って頬杖をつきながら舌打ちをした、……本当、此れと金髪さえ無ければまともな人なんだけどなゼン君て。

「あーあ、リョウコちゃんも結構イケてる部類だけど好きな人が居る訳でしょ？　あーあ本当女の子って――」

「ちょ……ゼン君！！」

「え？」

「へぇ、カトウって好きな人居たんだ」

フドウが慌てた様子でゼン君に叫ぶと、一瞬呆気に取られてたゼン君は何かに気付いた様子で僕を見た。

「あ、いや、別に好きな人が居るってだけだからね！　此の学校に居るとか全然全然！！」

「？」

「そうっすよヒコク君！　か、カトウさんってどんな人が好きなんでしょうね～、あははっ！！」

二人は白々しい笑みを見せたけど、僕には何ひとつ理解することは出来なかったのだけれど。何を慌てたんだろう此の人達。

恐らくひとつの表情変化も見せなかった僕を見て二人ははぁっと息を整えてた、けれど何故だろう、何か可哀相なものを見る目で何処かを見ているゼン君が目の前に居る。

「……カトウちゃん、苦労すんね」

「……多分」

「え、何の話？　ん？」

結局二人は教えてくれなかったけれど、僕に関連する話なんてしたっけか、あれ？

幸薄い表情の二人を見つつ、少しだけ考えた僕だった。

288＋GC部の部活内容、秋。

「シギシギファイトっ！　テナがついてるぞー！」

「あ、あはは……」

カイリだ、目の前を走る金髪が座り込んだジャージ姿に声援されているという光景に、自らも走りながら出会う訳だ。

「はい、俺終了っと」

「わー！　カイちゃんおっつー♪」

「おうっ！　さんきゅー」

そして走り終えた俺に其のジャージ姿ことテナが、どっから出したんだか分からないタオルをくれた、汗かいてるし助かるぜ。

今日は休日、だけど珍しく部活やるとか何とかで学校に駆り出された俺達GC部一年は何でか知んねぇけど校庭を走っている。――理由？　一言で言やぁ――

『秋にやるべきは運動だろ！　皆！　今日はマラソンなっ！！』

――なんて言って某双子の弟に半本気で読んでた本投げられて流血した部長の所為なんだが。部長はただ今保健室です。

「ふぅ、此れは良い汗をかくな」

「え、ちょいハヤ先輩？　走って大丈夫なんすか？」

「一周くらいならな」

なら良いんだけど、サチ先輩居ないんすからね。ちなみに何故シギとテナが居て、シギに至っては走ってるのかというのは面白そうだからあっちからやって来たら巻き込まれた、が正しい理由だ。

「お、ゼンもシギも終わったっぽいな」

「……あれ？　なんでボク走ってるんすか……？」

「……え？　今更そういう？」

「シギシギもゼン君もお疲れ様あ！　はいっ、タオルだよお？」

「ありがとうテナっちゃん、ゼン君嬉しくて死ねる」

何かの間違いに気付いたシギはさておき、テナは完全にタオル渡す係に徹底してるよな。お前は部活良いのか、いやシギもだけど。

「――やぁ諸君！　良い汗をかいているかな！？」

未だ解釈に忙しいシギが居る中、保健室に寄っていた部長が清々

しい笑顔で舞い戻って来た。――右こめかみにガーゼ付きで。

「うんうん、今日はリョウコとフウカの二人が欠席だから、女の子が居ると華があって良いなっ」

「は、華……テナが、華……」

「真に受けない方が良いよテナちゃん、所詮サチトだから」

走り終わったばかりなのにゼンの笑みが爽やか過ぎる件について。しかし何を思ったのかサチト先輩はキョロキョロと辺りを見回し、相変わらずの笑顔で俺を見た。

「――で？　ヒコク兄弟何処行った？　特に弟の方」

――嗚呼、恨み言ですか部長。

まぁ他意が無かったとはいえアサキの半本気で本ぶち当てられてる訳だし、そりゃ少し位怒るだろうなー。

だけども。

「二人ならそっちっすよ、グランド」

俺は二人の居る方を指差す。

「あん？　未だ走ってんのか？」

「いや――野球部に交じって野球やってますが」

「ばーっちこーい」

「誰が撃たせるかあああああ！！！！！！」

カキーン

「うおおおっ！　行けー！　走れ弟ー！！！！！」

「センターファースト！」

「違う！　アサキの足じゃ刺せない！！　バックホーム！！」

「――タノシソウデスネ」

「アサキは野球好きっすからねぇ」

ユウヤは良いとしても、アサキのあの低テンション面白いよな。
中学ん時授業でやったのは冬だったからちゃんとやってなかったっけか、此の時期だからこそアサキが起動する訳だな、うんうん。

「……」

俺が納得している内に部長の表情が幸薄くなっていた、えっと、どうすりゃ良いんだろう。

「まぁ、あいつ等もちゃんと運動しているんだし、良いんじゃないか？」

「……まぁ、そういうことにしておくか」

そんなサチト先輩を諭した――またの名を諭せた――のは勿論ハヤ先輩であって、仕方なしという風に納得した様子だった。良かった良かった。

「――よしっ、其れじゃあシギ、お前も交ざって来い」

「そうっすね、……ってええっ!?　何でっすかさっちゃん!?　第一ボク未だ部活が――」

「じゃあゼン君が行こうかなー」

「じゃ、俺も行くか」

「テナも行く行く！　皆さんを労るよお！」

「よーし、じゃあシギ以外皆で行くかー、野球部に宣戦布告!!!!」

「ふむ、其れは良いな」

「え……え？　じゃ、じゃあボクも行くっすよう、仲間外れは寂しい……」

もう何の部活か分かったもんじゃねぇけど、此れは此れで楽しいと俺は思った。

289＋里親探して三千里。

ユウヤですよ、夕食の買出しの帰りですよ。
ふふっ、今日は特売だったから美味しいお肉を大量ゲーッツだぜ。
まぁそうは言ってもうちは二人だから結局買い溜めになるんだけどね、弟そんなに食わないんだわ此れが。食える癖に食わないって感じなのか、そんなに大食いじゃないのかは分からないけど。食おうと思えば多分俺よか食えんじゃないのかなぁ、……嗚呼、俺が勢いつけて食い過ぎなのか納得。

「ユウヤく～ん」

「ん？」

そんなどうでも良いことを納得していれば、何処からか俺を呼ぶ声が聞こえた。うん？　一体何処から？

「あ、モモちゃん！」

「こんばんは～」

未だこんにちはだけどモモちゃんだから良いよね！　なんて甘い考えはさておき。とことこ、と此方に歩み寄ってくるモモちゃんは何時も通りへにゃんとした笑みを浮かべていた。そして何かを手に抱えている、……うん、アレは何だ？　近付いていけば分かったけれど、其れはダンボール、そして其の中には――

「見て見て～、可愛いでしょ？」

「うん、可愛い猫たちだね！　でもダンボールに入れて抱えることは無いと思うよ」

「だよね～」

数匹の、正確には三匹の子猫が居た。畜生可愛いじゃねぇか。

「親戚の猫ちゃんが子供を生んだっていうからね、貰ってきたの～。実はもう二匹居て、でも五匹も貰えると思ってなくてびっくりしてね」

「へぇ！」

「というか多分、うちじゃあそんなに飼えないんだよね～」

「え？」

少し困り気味なモモちゃんはダンボールの中の猫を見てから俺を見る。

「だから今友達の家回ってて、一匹はうちに、あと一匹は貰ってもらえたんだけど……」

実際の猫ちゃん五匹も居たのか。

うーん、猫は確かに可愛いけど、……あのアサキが小動物を飼わせてくれる気がしないしなぁ……。

「うちは駄目だと思うしねぇ」

「だよね～、アサキ君だもんね～……何かごめんね」

アサキ、納得されちゃってるよ。

でもまぁだからと言って此処で見捨てる訳にもいかないよね、友達が困ってるのを放っておく訳にはいかない！　って訳で、

「俺も一緒に回ってあげるよ！　きっと見つかるから！」

夕飯の買出し帰りなことを既に忘れた俺は、モモちゃんと一緒に里親探しの旅に出ることにした。

女の子のお友達は一通り回ったということで困り果てていたらしいモモちゃん、ちなみにリョウちゃんの家は妹ちゃんが猫アレルギーだそうで無理なんだって。本人は至極惜しい顔をしてたらしいけど。

「カイト君とかは？」

「ロクジョー君？　猫とか大丈夫かなぁ？」

何となく猫とか好きそう、どうだろうか。という訳で連絡を取ってみよう。やっぱこういうのは先に電話で連絡した方が良いよね？

『猫？　ああ、良いぜ』

軽っ。

『あーでも姉ちゃんに聞いてみるわ、今家に居ねぇから、保留にしといてもおけ？』

「うん、全然大丈夫だよ！」

という訳で里親一人目決定（仮）。案外居るものだなぁ、こういう軽い人。モモちゃんは「流石はロクジョー君だね～」なんて言ってたけど、……まぁ、ウミさんなら何だかんだで大丈夫って言ってくれそうだよね！

探すより電話で聞いた方が早いことがたった今此処で発覚した俺達は、其処から一番近かった公園で知り合いに片っ端から電話することにした。アスカとユキちゃんは中学の時に動物飼えないって言ってたし、――アスカは体調の問題で、ユキちゃんはリョウちゃん同様動物アレルギーのお母さんが居るとか――後は誰に掛けようか？

「モモちゃんは知り合い全部回ったんだよね？」

「うん、元々友達とかも少ないし」

おっと墓穴を掘った、モモちゃんが寂しそうだ！　ええと、ええと、あ、そうだ。

「じゃあモモちゃん、俺の高校の友達に聞いてみるのはどう？」

「ユウヤ君のお友達？　私は猫ちゃん達が幸せになれるなら誰でも良いんだよ～」

よし、それなら選択肢も増えるよ！　小動物好きな人とか……あ、ミノルちゃんとかどうかな？

『猫？　すまない、うちは犬を飼っていて喰われるから無理だな』

猫を喰う犬って怖いよミノルちゃん。

「ま、まぁいいんだけど、其の犬が凄く気になるよ俺は、今度見に行ってもいいかしら」

『全然構わないが喰われないように気をつけてくれ』

え、俺も喰われるの？　え、どれだけ危ないわんちゃん飼ってるミノルちゃん！　ミノルちゃーん！！

とうとう其の犬の詳細は教えてもらえなかったけど、今は其の事は置いといて――いや、本当は気になって仕方ないんだけどね！？――里親探しを急ごう。

『猫？　何故に猫？』

シギ君の携帯に掛けたはずなのに何故かゼン君が出た。あれ……

間違ってないよね……。

事情を説明していると途中から『え、ちょ、ゼン君何でボクの携帯出て……ちょ、ゼン君返してー！！』なんて声が聞こえてきたんだけど良いのかな説明続けて。

『ふむふむ、要するに例のモモちゃんが困ってるという訳だね』

あれ、此の人には其れしか伝わらなかったのか。

『でもなぁ、シギ、お前ん家ハムスターとか犬とか居たろ』

遠くから『居るっすー』と緩い声が聞こえた。

『俺ん家もなー』

そしてさらに遠くから『ミヤちゃんにゃんこ欲しー！』なんて声がした、誰だろ、っていうかゼン君何処に居るんだ君。

『え、ミヤにゃんこ好きなの？　俺としては女の子のピンチは俺のピンチでもあるし貰ってあげたいのは山々だけど、んー……ゆっ君、ちょっと待ってて』

「ん？　どうするの？」

『同居人に電話する』

そう言えばゼン君は俺との通話を繋いだまま、自分の携帯か何かで連絡を取っているらしく暫し沈黙が走った。

『あ、姉貴？　うちってさぁ、動物飼うの有？　……嗚呼、事情は

さておき猫、……うるせぇクソ野郎俺はイエスかノーかだけ聞いてんだよ』

ゼン君、フェミニストなのに本当お姉さんだけは嫌いなんだね。

……いや、逆にゼン君に嫌われるお姉さんが凄いのか？

「ユウヤ君、ゼン君どうだった？」

「未だ分からないけど……」

『イエスなのね、良いのね？　……はぁ？　ミヤだってにゃんこ欲しいって言ってんだよばあかあとはお前次第だし俺的にはお前の意見なんざどーでも良いの、分かる？　……あー、はいはいはいワカリマシタお姉サマじゃーな！　働き過ぎて朽ちればいいのに』

――凄い会話だなぁ、面白いくらいに。

『あ、ゆっ君？　良いってよ、優しいお姉サマが』

「そ、そう？　よか、良かった、よ？」

優しいお姉さまなんて絶対思ってないよ此の人、さっきまで電話越しでも分かる超アレな空気出てたのにあっさり戻るゼン君恐ろしい。そして其の空気に触れながら『ミヤコちゃん、オレンジジュース飲んでも良いんすかね？』『飲むー！』なんて会話が後ろで成立していることがもっと恐ろしい、慣れてる、シギ君も其のミヤちゃんって子も慣れてる……！！

「で、どうしよっか」

「あと一匹だよね～」

それから色んな人に連絡入れること三十分、俺の方のストックも切れた。結構身近な人が貰ってくれることに感謝だけど、やっぱりそう簡単に見つからないんだなー。

モモちゃんが持つダンボール箱の中には子猫が三匹、一体どうするもう一匹、余るのは誰だにゃんこ達よ。――なんて考えていたら、手に持っていた携帯が震えた。おお、バイヴ設定だったんだっけ、……ってアサ君？

其処で俺は、自分が夕食の買出し途中だったことを思い出す。

「あああああああ！！！！　アサ君ごめんなさい許して！！！！！」

『……第一声目から何よお前』

光の速さで通話ボタンを押せば先手必勝謝ってみたけれど、どうやら見当違いだったらしい。不思議そうなアサ君の声に俺の方がキョトンとする。お、夕食の催促でなかった一体……？

『お前今日スープ作るとか言ってなかった？』

「え、言った」

『コンソメスープとか言った？』

「言った、まぁコンソメスープって言いましても固形のコンソメを使いまして其れにお肉や野菜を入れるという邪道メニューですが」

『コンソメっていっつも、ええと、此の、何とも言えないゾーンに置いてある赤いやつに入ってるよね？』

「何其の何とも言えないゾーンって、普通に調味料置いてあるところとか言ってくれればいいじゃん」

アサ君には何とも言えないゾーンに見えたのかもしれないけどさ。

『中身、空っぽだよ』

「え？　コンソメ？」

『うん』

「嘘、マジ？　此の前未だあった気が――」

『何処かの誰かがコンソメ刻むの手伝わされて弾け飛んだじゃん』

「ごめん、何か自虐ネタ言わせてごめん」

たまにあるやる気ある周期の時手伝ってもらったら見事に三角コーナーにシュートしたんだっけあははっ！　……少しでも生活能力を付けさせなきゃなんて兄心出さなきゃ良かった。

でもまぁわざわざ報告してくれたんだから買って帰らなきゃだよ

ねっ、スーパーの袋持ってスーパー行くのも何だけど此処はまぁ行くしかない、ぐっじょぶ俺！

『あとさ』

しかし本題があった。

『――今家にカイト来てんだけどさ、猫如きの里親探しで僕の夕飯が遅くなってるって本当？』

嗚呼もうカイト君の馬鹿あああああ！！！！

「え、本当！？」

『居ないんじゃ仕方ないでしょ、とりあえず見つかるまでうちに置いとけば？　其れより飯』

そう思ったもののアサ君は其処まで怒っていなかった、っていうか何か優しかった――ただお腹が減っていたからなのかもしれないけど――。

里親さんが見つかるまでうちに猫を置いておいて良いだなんて…！　天変地異か何かが起きるんじゃないの、ねぇ！！

『とっとと帰って来い、其れかくたばれ』

「ふぁい」

天変地異無いね、うん。

290＋トランプの強いマーク。

「――って訳で、誰か人員を貸して欲しいとのことです」

其の言葉に某ゲームでエキサイティングしていた部活が急停止した、アサキですが。

ちなみに僕とハヤ先輩は二人でトランプしてたけど。

「……何してるんですか？　立ったままゲーム？」

「あれ、ハヤサカ知らねぇの？」

「知ってますよ、馬鹿にしないでくれます？」

久しぶりに旧生徒会室にやって来たハヤサカ先生は両手にヌンチャク型のコントローラーを持って固まるゼン君にそう言われ、其の隣のカイト、そして座りつつ同様のものを手にするフウカ先輩とカトウを見つつむっとした表情を見せた。何か何時の間にか表情豊かになってないか此の人、猫被りが肌蹴たか。

「あれ、任〇堂が発売したハードのことでしょう？」

「正確には任天〇の第五世代目の家庭用据え置き型ゲーム機です」

「アサキ、細かいぞ」

Ｂｙ，ｗｉｋｉ先生、僕が何時もお世話になっている場所だ。

まぁゲームの話は良いとして。

「で、ハヤサカー、ごめん話聞いてなかったからもう一回」

奥からひょっこり顔を出したのは我等が部長殿だけれど、何て自由、今の短文を聞き取れなかったとは。何処から出したのかコーラ片手に爆笑寸前でサチト先輩はハヤサカ先生に聞き返した。

「……生徒会だからって何故此処まで優遇されてるんでしょうね此の部活」

「先代が頑張ったからじゃないっすか？」

「じゃあその先代や初代ゲームクリエイト部の部員達に恥じないような行いをして下さい」

「えー、そんなにかよー、どうせ会う機会なんて無ぇっつーのに……」

ごめん先輩、うちに居る。

「もう一度だけ言います。某先生からの依頼で、垂れ幕を作って其れを屋上から掛ける作業というものを手伝って欲しいから人員を貸してくれとのことです」

「その某先生って誰ですか？」

ユウヤが相変わらず動きだけフリーズさせて尋ねる。ハヤサカ先生は一瞬面倒臭そうな表情をしてから元の無表情に戻り、眼鏡を指

で押し上げてから、「君の担任ですよ、ヒコクユウヤ君」と言いつつ溜息をついた。

「折角人がとっとと帰ろうとしていたら泣きつかれました」

『は、ハヤサカくーん、助けてー』

嗚呼、容易に想像出来る。あの緊張感のない感じで泣きつく感じ。

「本当毎回毎回先輩面する割に用意がなってないというかもう大きいだけの子供というか正直貴方達より面倒掛かるというか」

「先生、愚痴になってるよ」

「でも先生も女の人に頼まれちゃあねぇ、さっすが男の中の男！」

「ワタヌキ君、貴方はそんなに自習課題が欲しいと？」

「え、褒めたのに……！」

君の中で褒めてもね、ハヤ先輩もそう思ったらしく、僕と目が合った先輩はやれやれ、と言った風に苦笑していた。……うん、相変わらず此の先輩ぱねぇ。

ハヤサカ先生曰く、

「四人程で結構です」

ということだそうで、いそいそと職員室に帰って行ってしまった。

「もっとゆっくりしてけばいいのにねー」

「無理言うなって、ハヤサカ先生もほのちゃんの所為で忙しいんだろうから」

本当、どっちが先輩か分かったもんじゃないけど。

「――っていう訳で！　突発企画！　トランプで四人決めるぜっ！　はい集合！」

「集合って皆此処に居るけど」

「はいフウカ五月蠅い！！」

絶対フウカ先輩が正しい。

企画はこうだ、トランプをばらばらに机に広げ、其の内弱いカードを引いた四人がウタカタ先生の元へレッツゴー――なんてシンプルな企画なのに何故僕とハヤ先輩以外張り切ってるのねぇ。

「ちなみにアサキは最後だからな！」

「え、何故に」

『お前の引きが強過ぎるからだ』

「え、今何人同時に言った？」

快挙だよね、今の人数。ええと、六人？

という訳で僕は問答無用で最後らしい。……おみくじとかは絶対凶以下なのに何故トランプだけはこうなのか、ディーラーにでもなれってか。

「はい最初！　リョウコ！！」

「え、え、私ですか！？」

「名前の順だからな」

うちの部活ヤケにか行多い、……まぁそんなくだらないことはさておき。

「じゃ、じゃあいきます……！」

カトウは真剣な表情で机の上のトランプを眺める。手をかざすようにして次から次にカードに手を置き、

「――此れにします！！」

――引いたカードはダイヤの９でした。

「「普通だ」」

「ヒコクアサキとロクジョーカイリね！？　絶対貴方達よね今の！！」

だって……思った通りだったものでつい。

次はキスギ先輩。

「俺此れ」

早っ、パシッと端のカードを、そしてクローバーの９だった。

「え、何此れ、９しか出ない仕組み？」

「無いから安心しろ、次は俺が引くぞ」

カトウのも合わせて二枚の9、其れを見比べている不思議そうなサチト先輩。苦笑する次のハヤ先輩は軽くカードを見渡して、すいっと奥のカードを引いて「ほら、スペードのキングだ」と見せてくれた。

「じゃあ次俺だねっ！　よーし、良いカード引くぞー！！」

か行から飛んでは行、ユウヤが腕まくりまでして張り切ってカードに手を置く。

「……いや、此れじゃないな！　――こっちだ！！」

――クローバーの2。（※最弱）

ユウヤは落ち込んで部室の端の方でうずくまった。

「あいつ引き弱いなー……」

「た、たまたまだろ？　な？」

「何だよ2って……何2って……」

偶然だろうけど残念だったなユウヤ、ちなみに僕はユウヤの帰りが遅れようと一向に構わない、だって夕飯はマヒルが居るから。

「じゃ、気を取り直して次は――」

「もう引いた」

「お前は何時引いたんだフウカ？」

僕も気付かなかったけれども。

サチト先輩のヒクついた笑みなんて初めて見るかもしれない、っていうかフウカ先輩は幾つだったんだ？

「ダイヤのクイーン」

何だかんだで高いし。

「ダイヤのクイーン、……何だか先輩って感じですね」

「嬉しい」

カトウが本当に褒めたんだかの真意はさておき、次行こう次、ウタカタ先生が待ってるだろうし。

「よーっし！　此の俺様が良いの引いてやんぜ！」

「カイト、やめとけ、其のノリで行ったユウヤがアレだ」

「そうだった、普通に引こう」

カイトには最近学習能力というものが付いた気がする僕。

「……」

「ん？　何だったんだカイリ？」

カイトが好きそうなど真ん中をあっさり予想通りに引けば、何故か真剣な表情で其のカードを見る。何だったんだろ、早く見せろ。

「……スペードの、９」

……。

「り、リーチ」

「何のだよ」

まぁどうでも良いけれど。

「場の空気的にゼン君ハートの9引かなきゃなんだろうけど俺透視能力とか無いしなー」

いや、君もそんな気を遣わなくていいと思うけど。

何処となく真剣に、でも適度に気を抜いてカードを選ぶゼン君。

「じゃ、ゼン君こーれ」

「お、ゼンどうだよ、此処でハートの9、とか言ったら爆笑もんだけどー―」

「ハートの9だけど」

……。

『え？』

何此れ仕込み？

サチト先輩は慌ててゼン君のカードを覗き込み、爆笑とか言っていた割に驚き過ぎて開いた口が塞がらない状態になっている。

「何此れ運命？」

「うわあゼンとの運命なんざごめん蒙る」

「んだとコラ、あ、リョウコちゃんとカイ君なら全然オッケーだよゼン君」

「ある意味凄いよね、確かに」

被った四人がざわざわと騒いでいたので、僕は其の隙に引いてしまおうと机に視線を向ける。

皆ああいうけど僕だってただの人間な訳だ、毎回毎回トランプだからって強いという訳では――

ぺらり

「……」

「ん、アサキ、どうだっ――……お前って奴は本当に期待を裏切らないな」

「何かすみません」

ハヤ先輩に苦笑されたけど、期待を裏切ってないなら其れも良いだろう。

――ジョーカーなんて、そうそう引けるもんでも無いし。

ちなみにウタカタ先生の手伝いにはユウヤと、９の中でも一番強いスペードを引いたカイトを抜いた三人が行くことになった。ちなみに一番弱いのはクローバーだとか。

「ふっ、流石俺様！」

「ぎりぎりだったけどな」

291＋利口な小動物。

ただいまー、っと！　ユウヤですよっ！

「お帰り、悪いな、買い物頼んで」

「ぜーんぜん！　いっつもやってるから大丈夫だし！」

相変わらず自宅に居座っているマヒル兄のエプロン姿に出迎えられた俺、夕飯に必要だった人参を買いに走ってきました、ふう、走るって良いぜ！

リビングに入ればマヒル兄はキッチンに戻り、俺がランニングに行く基買い走りに行く前から其処に居た二人組は未だ其処を陣取って動かないでいた。

「……未だやってるの？」

「終わるまで終わらん」

「以下同文」

遊びに――此の調子だと恐らく泊まりに――来ているカイト君とアサ君、二人はカーペットに居座って巨大な枠に向かっている。

巨大な枠――ジグソーパズルに向かって。

「カイト、其れ」

「あ、マジだ、ほい」

「……」

「……」

「……」

「……あっちの取れるか？」

「ん」

――地味な図だ！！！！

マヒル兄が昼に買い物行った時、何処かのくじ引きで当てたとか何とか。暇だからってアサ君がやり出して、カイト君が来て一旦止めたと思いきや二人でやり出して――早一時間。

……俺ああいうの苦手だからな、とりあえず暇だからにゃんことでも遊ぼうか。

ジグソーパズルに夢中な二人の奥、テレビ横に備え付けられた（仮）猫ハウスに歩み寄れば姿勢を低くしておっとなしく座るにゃんこを見る。

うちに来て数日、猫にしては非常に大人しい此の猫は部屋をうろつくことはあっても悪戯はしないし、壁に傷も付けないし、もう何か滅茶苦茶良い子なんです。凄い良い子なんだし、良い飼い主さんが見つかれば良いけど。

「……」

「……」

円らな瞳と目が合った。

「――畜生可愛い！」

「お前メロメロだな」

抱き着こうとしたらすり抜けられた、しかもカイト君に笑われた、ちきしょー。にゃんこ――名前？　そういえば決めた方が良いかな――はとことことキッチンに向かう、「うおっ、にゃん公居たのか」なんて声が聞こえるしあの猫マヒル兄には懐いてるんだよなー。やはりえさか、昼間のえさ当番だからか……？

「はう、猫かわゆい」

「ユウヤが面倒臭い」

「俺ん家も姉ちゃんがこんなだけどな」

かわゆいよ三毛猫かわゆいよ何なのかわゆ過ぎる……！

「もうお前ん家で本格的に飼っちゃえば？」

「飼うつもりは無いんだけど、其れはユウヤが決め――」

「マヒル兄！　やっぱり此の子飼おうっ！！！！」

俺の荒ぶるハートは止められやしなかった。にゃんこ可愛過ぎる！　こんな可愛いなんて思ってもみなかったし！！！！

マヒル兄の足元をうろつく猫を抱え上げ、ねだるような言い方でマヒル兄に言う俺。

「もう飼ってんじゃねぇの？　後今飯作ってるから猫リビングに持って帰れ」

「へい大将！」

「誰が大将だ」

言われた通りリビングに戻る、ふむ、マヒル兄はもう飼ってると思ってたのか、知らなかった。ってことはやはり――アサ君が良いって言えば飼って良いってことだ。

くるり、と。猫を抱えたままアサ君を見る。最早関心はジグソーピースにしか向いてなかったけれど、此処はちゃんと頼めば――

「にゃう」

「あ」

唸り声を上げつつ思考していたら、猫が再びすり抜けていってしまった。ちょ、ちょっと駄目だよにゃんこ！　今アサ君の邪魔したら絶対駄目だって！！

そんな俺の思いなど知らない名も無き猫はアサ君とカイト君の間、要するにジグソーのピースが散らばる枠のど真ん中に座り込んだ。

「「……」」

「にゃう」

猫は満足そうに鳴く。

「退け、エテ公」

無表情のアサ君に辛辣な言葉を投げ掛けられて此方に戻って来た。

「うわあにゃんこにエテ公てあなた」

「だって邪魔、だから小動物は面倒」

……うん、頼むのはまた今度にしよう、かな？

気持ち落ち込んだにゃんこ可愛いとか思いつつも今は間が悪そうなのでやめておいた、空気読むのは得意だぜ！　かっこアサキ関連のみ！

ご飯も出来たみたいだし、と理由を付け加え、俺は再戦を誓った。

292＋晴れても何でも憂鬱一色。

こんにちはアサキですけれど。
ええと、死にたいです。

「――ちょっとアサ君、全力でやる気なさ過ぎてある意味怖いんだけど？」

「やる気あり過ぎるお前の方が怖いよ僕からすれば」

半袖半ズボンの体育着ってお前何なの、どんだけやる気なの。

本日は晴天也、其れは一向に構わないんだが何でか知らないけど持久走大会らしいです。朝っぱらから校庭に駆り出され諸注意だの何だの怠過ぎる、準備運動？　知るかそんなの誰がやるか。

「アサ君！　ほらほらもう走るんだからジャージ脱いで！」

「分かってますけどうざいんでとっとと前行ってもらえます？　カイトも前の方連れてってもらえます？　近くに居るだけで暑苦しい」

「うわあ今日一段と機嫌悪いねアサキ」

普通の人だったら怒りそうなもんだけどユウヤは苦笑しただけで、
「身体のこと考えながら少しは走りなよ！」と言い残して走って行った。今から走ってどうすんだ。
もう少しで始まる誰も嬉しくない持久走大会――体力馬鹿二人く

らいしか喜ばねぇよ――、とことん歩くつもりで最後尾辺りに一人陣取っていれば不意に肩を叩かれた。

「――先輩？」

「よ」

其処にはにこりと微笑むハヤ先輩が居て、一瞬思考が停止した…

…ええと。

「今僕が言おうと思ったこと分かります？」

「“先輩持久走なんて走って大丈夫なんですか？”」

「うわすっげ一文字一句間違いなく正解」

「お前等も大概だな、俺だって走れない訳じゃないんだぞ？」

くすくすと楽しそうに笑うハヤ先輩を見れば確かに調子良さそうだけど。つい辺りを見て誰も居ないなんてことを知り、より心配になる、否、僕が心配するなんて結構なお門違いなんだけれど。

「ほとんど歩くしな、問題は無い」

「……あ、そっか」

「ん？」

「先輩一人だと危ないですもんね、僕、先輩について走りますよ！」

「……う、うん、ありが、とう？　うん？　此れは俺に気を遣ってくれた……うん？　そう、だよな？」

「勿論！　大丈夫ですよ先輩！　僕がついてます！」

「其の一度と見たことない清清しい笑みに俺は恐怖さえ感じているんだが」

良いカモを見つけた――なんて、僕は一切思っていないですからね、先輩。

数分後、数キロ地点。

「だらだら歩いてる奴等はともかく、大分人数が減ってきたな」

「そーですね」

調子が良いからと少し小走りする先輩につき横を行く僕、何やかんやで皆走ってるんだなぁ、と若干感心した。早い女子には抜かれてしまっている僕等だけど、生徒会長殿が横に居るお蔭で先生方からは其処まで色々言われたりしていない。

そんなことを考えていたら前方にハヤサカ先生を発見した。

「クロガネ君、あまり無理をしないように、と担任の先生から言付かってます」

「はは、無理はしませんよ、彼もついてくれていますから」

「偉いだろ」

「君は走りたくないだけでしょうに」

いけね、バレた。

「でも先生、俺は走ってもちゃんと付いて来てくれますよ」

「……まぁ、良いですけれどね、体育の担当からも君の体力の無さを伺っていますから、無理せず頑張って下さい」

畜生何担任にチクってんだよ体育教師。

ハヤサカ先生と別れ――というか歩いていたから会話出来ていただけであって――少しして、嘘のような本当の話、先頭集団に遭遇した。

「あ、あっさくーん！」

「嘘アサキ！？　お前おっせ！！」

――集団というか、約二名。

滅多に見られないあの二人が息を切らせている様子を見受けるも其れでも元気な馬鹿共、何こいつ等、こんだけ走ってもそんだけ元気なの？　っていうか未だ僕半分も行ってないってば。

「一年であれだけ走れれば、来年には新記録狙えるかもしれないな」

いや、そういう問題なんですか先輩。

更に数分、折り返し手前。

大分歩いているというかハヤ先輩が若干ふらふらしているというか、個人的に此れが大丈夫なのか判断しかねるので出来ればサチト先輩とすれ違わないかななんて考えつつ。

「あっくーん」

「あ、ゼン君、とフドウ」

「ひ、ヒコク君大丈夫っすか？　会長さんも！」

「僕は未だ大丈夫」

「俺も平気だが？」

何処がどう平気なのか悩むんですけど、結構お疲れですよね先輩、いや僕も足がそろそろ終わりそうだけど。

ゼン君もそう思ったのか苦笑して、「後ろからサチ来るし、がなられないように気をつけて下さいねー」なんて漏らした。あ、サチト先輩来るんだ、何か少し安心した。

「よーしシギ、こっからペース上げんぞ」

「はいっす！　未だ大丈夫っぽい！」

「……何か爽やかな二人だな」

「確かに」

そして其の少し後、本当にサチト先輩が走って来た。

「ハヤ！　無理してねぇだろうな！？」

本当に怒られてる、面白い。

立ち止まってハヤ先輩にそう言えば「急がず自分のペースで！アサキに迷惑掛けるなよ！」と言えば直ぐに走り出した。ゼン君と

いいサチト先輩といい、何なのおかん体質なの本当。

「大変ですね、ハヤ先輩も」

「まぁな、だが心配してくれている以上無理も出来んさ。疲れも末期に近いし、車で送られるのも良いかもな」

少しくらい限界まで走ってみたいものだが、なんて漏らす先輩は本当に寂しそうだったけど、僕は何となく其れを聞かなかったことにした。自分から辛い思いなんて僕は絶対したくないけど、出来ない人には其れがとても魅力的なことなのかな、なんて。僕にもう少し体力ってものがあれば考えたのかもしれないけど、生憎僕には先輩が倒れたとしても支えるだけの身体は持ち合わせていないからとりあえず。

「給水」

「ん？」

「ちゃんと給水して休んで、身体が未だ大丈夫そうだったら、最後までちゃんと歩きましょう。僕を差し置いて車で送られるなんてずるいです」

「……そうだな」

たまに走って後は歩いてるだけなのに痛くなる頭も足も、運動不足というか自身の基礎体力不足としか言い様の無いものだけれど、歩くくらいなら問題は無いと思われる、否、そういうことにしてお

く。
何故だか嬉しそうに微笑んだハヤ先輩のことというか自分から言い出したことだし、最後までちゃんと横について歩かしてもらいますよ、生徒会長殿。

ちなみに。
今年の一位は案の定ユウヤだったらしく――カイトは道中何かあいつの好きそうな変なもんを見つけてストップしたらしい、其れでも二位だけど――、文化部は文化部でもＧＣ部なんて部活動の生徒が一位取っちゃったもんだから運動部が大騒ぎしているらしい。ワンツーフィニッシュされちゃってるしね。
来年は打倒ＧＣ部！　とか何とか帰りに騒いでいるのを聞いたけど、逆に最下位も其の前もＧＣ部なんだけど知ってるのかな、なんて。

293＋名前の由来を考えて。

こんばんは～！　たまには明るくモモです～！

「ねぇねぇ、ユズ君、お姉ちゃんの話聞いてる？」

「あん？　聞いてるけど？」

相変わらずお行儀の悪い返事をするユズを前にしながら、今私は真剣な話をしています、其れはもうとても真剣な！

「こういうことはちゃんとしなきゃいけないってお姉ちゃん思うの！」

「あー、はいはい、そうだね、凄く大事だね。其れは俺だって思ってる、けどさ？」

私はカーペットで正座、ユズは食卓机で足をブラブラ。

にっこりと笑っているユズの顔は姉の私が言うのも何だけど男らしくないからお母さん似、というかお父さんの要素無いなー可愛い系だよなー、なのに言葉荒れてるからアサキ君みたい、とか本人に聞かれたらやんわり怒られそうなことを考えて――ユズが額に怒りマークを浮かべていることに気付いた。

「俺の描いたケーキの想定図の上に乗っかっとる此の猫をただちにどかさないと、今から姉ちゃんが真剣に決めようとしてる此の猫の名前、勝手にジョン万次郎とかにすんぞ？」

「うわあ！　にゃんこちゃん！！」

私の角度から見えなかった……！　だからユズキ怒ってたんだね……！

落ち着いてから、ジョン万次郎って誰？　ってユズに聞いたら驚愕されたので後でちゃんと調べようと思ったんだけど……皆は知ってる？

「――で、猫の名前だっけ？」

「うん、此の子オスなんだって～、どんな名前が良い？」

猫を引き取る時私以上に喰い付いたユズキは決して猫が嫌いな訳じゃなくて、ただ趣味のことになるとそっちが勝るっていうか……だから今は其のケーキ図をしまったユズもカーペットに座って一緒に考え出してくれた。

「其れこそジョンで良くない？」

「可愛くないよ」

「え、オスに可愛さ必要？」

私的には可愛いのが良い、と言えばユズは唸り声を上げながらも考えてくれる。ん～、何が良いかなぁ。――っていうか皆のお家に行った猫ちゃん達の名前も気になる、聞いてみようかな？
其れを参考にするのも良いかもしれないって思ったら何だか気が逸って携帯を手に持っていた。ええと、先ずはロクジョー君かな。

『姉ちゃんが付けたけど、“ここあ”だと』

「ここあちゃん？　可愛い名前だね～」

『色が茶色だからとか何とか、俺は名前とかどうでも良い派だから姉ちゃんがそう呼んでるから其れなんじゃね？』

「――ってことです」

「色ね、でもうちのも茶色っぽいよ姉ちゃん」

「そうだね～」

色が被ってたらそうなっちゃうよね、ええと、確か三毛猫ちゃんはアサキ君達のお家と後ゼン君のお家だったよね？　……アサキ君達のお家は飼ってる訳じゃないからって名前付けてなさそうだなぁ、っていうか飼ってないのに預かるって言ってくれたアサキ君ってやっぱり優しいよね、言ったらやんわり怒られそうだから言わないけど。

「ん～……あんまり話したことないゼン君に電話したら迷惑だよね

……？」

「あ？　知らない人に猫あげたの？」

「ううん、リョウちゃんと同じ学校の人で、最近お友達になった人～。とっても格好良い人だよ？」

「格好良い人なら電話しとけば、将来に繋がる」

弟が大人なんですけどどうすれば良いですか？

『はい、こちらワタヌキです』

「あ、ええと、ランと言います、ゼン君はご在宅でしょうか？」

少し前に学校にお邪魔した時に赤外線で交換した連絡先、携帯に掛けても繋がらなかったからお家の方に掛けさせて貰ったんだけど……ん？　妹さんかな？

『うちのゼンはただいまとりこみ中ですので、おりかえしおでんわさせていただきます』

すっごく下っ足らずなのにすっごくちゃんとしてる何此れ凄い……！

私が暫し感心していたら直後あ、という乾いた一言が聞こえて、

『でんわだよ、おにーちゃん！』と今度こそらしい声が聞こえてきた。ゼン君取り込み中じゃなかったのかな……？

『はいはいお電話代わりましたあなたのゼンですけどもー？　只今ゲームに大苦戦していて要件は手短にお願いしたいものです』

凄い文句だねゼン君。

「えと、ランですけど……分かりますか……？」

『ラン？　……あー！！！！　モモちゃん！？　カトウちゃんのお友達の！』

あ、伝わって良かった～、第一関門が其処だったもので緊張しちゃった。

『ごっめんごめん！　あれ？　もしかして携帯に掛けてくれちゃった？　ゲームしてると気付かないんだよね』

「此方こそいきなりごめんなさい、ええと、手短に話すからね？」

『其れは忘れて！　モモちゃんの話なら俺何時間だってオーケーだから！！　女の子の話は世界のどんな声より勝るもんだよ？』

「ふふっ、ありがと～」

ゼン君って良い人だなぁ……。（※天然には色々通じない）

――ということで要件を告げれば、ゼン君はちょっと待ってと一言言って『みー！』と何か鳴き声みたいのを発していた。

『猫の名前って何だっけ？』

『のんちゃん！』

鳴いたんじゃなくて呼んだみたい、言わなくて良かった。

『理由は？』

――相手の声が聞こえない。

そのままもしもし？　とゼン君の声が聞こえて、私が返事をすれば、

『“のん”って名前みたいだけど、理由は無いみたい』

なんて、小さい子の直感が由来だと通訳してくれた。……其れも有だよね。

「で？」

電話が終わるまで大人しく猫ちゃんと遊んでいたユズは私に其の一語で尋ねる。

「……私が思ったこと、素直に言っても良い？」

「うん」

「――名前、ジョンにしよっか」

「……そうだね」

直感、というか、正直良く分からなくなってきたから其れで良いよね。

294＋暇でもやることなきゃつまらない。

はっろー、皆のゼン君だよ！

……嘘だよ怒らないでよ全国の少女達！！　――いや、今のは違った、今のじゃただのロリコン趣味を暴露してるみたいになってしまってる。ゼン君ロリコンとかじゃないから、ゼン君女の子なら誰でも大丈夫だから……！！

一人寂しく心の中で騒いでるけどただ今此れでも授業中なんだよねぇ。何の授業かって訊かれたら選択芸術の授業なんだけど。芸術ってくらいだから書道とか美術とかを好きに選択する訳よ、ちなみにゼン君は書道、だって格好良いでしょ？

今日先生居ないんだかで皆結構わいわいやってるんだけど、俺の友達無駄に真剣にやってて嫌んなっちゃう。隣のミノルちゃんとか、ちょっと離れてるところじゃあっ君とか。嗚呼、一組と合同なんだよね。

「ゼン、此れ凄くね？」

「んー？」

そしてひとつ前のカイ君、此の人全然書道に見えないけど其れは失礼だから言わな――

「半紙全部硯（すずり）に浸けてみました」

撤回、何で此処に居んの君。

無駄にキラキラした目を此方に向けてくるカイ君に俺は曖昧に「そーだね、真っ黒だね」と言っておいたけど何か其れで満足みたい。隣のミノルちゃんにも声を掛けて見せているけどミノルちゃん今真剣なんだからいちいち見せなくても良くない？　と思ったのは俺だけでは無い気がする。

「格好良いな」

「だろー？」

え、何が？

ミノルちゃんは真顔ながら其れに何か格好良さを見出したらしい、え、と、おかしいのは俺なのかな？

っていうか先ず校則違反に金髪でいかにも日本の芸術って感じの書道受けてるってのも変だよね、自分でもそう思うけど仕方なくない、俺元の髪の色嫌いだし。あんのクソ姉と同じ髪色とか考えただけで死ねる、だったら先生陣に毎回呆れられた方がマシ。……何やかんやで緩いから、注意しかして来ないしねー。あのシギが金で居れるんだもん、緩くて良かったうちの高校。

「此れアサキにも見せてこようかなっ！」

「やめときなカイ君、怒られるよ？」

「其れでも俺は修羅の道を行く」

「修羅だって分かってて行くところがカイ君らし過ぎて最早俺感服する」

そしてカイ君は硯を持ってあっ君のところに殴られに向かいましたとさ。

其の様子をミノルちゃんまでが筆を止めて見ていみる――あ、蹴られた。しかも弁慶の泣き所。

「――お帰り」

「畜生あの野郎……！」

「……す、硯を落とさなかったところに私はお前の男を見た」

「ミノルちゃんフォローになってない」

「！？」

そんな驚くこと言ってないのにミノルちゃんにびっくりされたし、まぁ驚いた顔も実に素敵だよミノルちゃん。

「他の授業ってちゃんと授業やってんだよなー」

「その様だな」

時間が少し過ぎて。
ミノルちゃんも書き終わり、あっ君も終わったのか此方にやって来て何事も無かったようにカイ君の隣に座ってからの話。

「他っていうと美術と音楽？　俺どっちも得意じゃねぇなー、確かアサキも嫌いだったろ」

「うん、寧ろ書道も微妙」

「私は特別嫌いとか苦手という訳では無いが、書道が一番性に合っていたからな、ゼンはどうなんだ？」

「俺？　歌うの怠いし絵も怠いしとにかく面倒だからー」

「書道も書くぜ？」

「文字ならどうにか」

っていうか別に何でも良かったんだよね、此れと言ってやりたいもん無かったから適当に選んだ。

「でもアサキ確か絵上手かったよな？」

「上手くない」

「ふっ、そう謙遜するな」

「ミノルは見たこと無ぇじゃんか」

「確かにそうだ」

最近ミノルちゃんのキャラが掴めない俺、でもあっ君の絵が上手い話には興味あるな。

「ゆっ君って確か美術だったよね？　あっ君が上手いてことはゆっ君も上手かったり？」

「……あいつのは世界観が独特」

「……うん？　其れってどっち？」

あっ君がそっぽ向きながらそんなこと言うもんだから気になってきちゃったじゃないか……！

「良く言えば個性的で前衛的、悪く言えば……ユニーク過ぎて何が何なんだか……」

「ま、常人には分からないってことだな」

俺も見せてもらったことあるけど凄かった、なんてカイ君。

「確かテナもリョウコも美術だったから感想聞いてみよう」

「聞いたら教えて、ゼン君超気になってる」

ミノルちゃんに了承を得たけど、出来れば早めに聞きたいところだよ、気になって眠れなかったらどうしよう。

「……あれ？」

其処でふと、カイ君が頭上にクエスチョンマークを乱舞させた。
どうしたのかな急に。

「此処が四人で美術が三人、……シギ、音楽一人？」

「そうだよ、僕等三人共違う選択だから」

――あっ君があっさり頷いた其の事項は、俺が今此の上なく心配していることだった。
人見知りというか人と関わるのが苦手というか何かあれば結構な具合でネガティヴになるあの子が一人で寂しがっていないかがゼン君凄く心配です。

「ねぇあっ君、シギ大丈夫そう？」

「何が」

「勿論音楽の授業」

「教室帰ると若干嬉しそうだけど」

「嗚呼駄目だ其れ」

ま、未だ友達出来てないのかな……！　何故俺が冷や汗掻かなきゃいけないのかは微妙なところだけど、少しわなわなしつつ聞いても無駄なことを聞いてみる。

「ひ、一人ぼっちとかじゃないよね、大丈夫だよねあの子！」

「ははっ、ゼンってお兄さんだなー」

「良き兄貴だな」

「本当本当、うちの兄貴にも見せてやりたい」

「ちょっと皆！　ゼン君の話聞いて下さい！！」

何かほやほやしてないで少しは大丈夫だよ、とか一言でも良いから掛けてくれればいいのに！　其れで少しは安心するのに！！

「でもまぁシギだって俺達と同学年だし、どうにかやってんだろ」

「そうだな、彼も男だ、どんな修羅の道でも素手で乗り越えていくことだろう……」

「エノミヤの方が男前だと僕は思うけども」

「照れるな」

「……照れるところなの？」

「？」

――でもそうだよね、シギだって男の子なんだし、きっと頑張ってるよなー。小学校ん時とかとは違うんだし、なんて思い直せば、丁度授業終了のチャイムが鳴る。

「よーし次体育だぜうっひょおい！！」

「うん？　其のテンションは僕に喧嘩を売ってるのかな？　うん？」

シギもこんだけタフになってくれりゃどうにかなるだろうけど。

――でもやっぱりちょっと心配なので一組寄ってみようと思った

俺は、確かにあいつの兄貴分なのかもしれないと思った。

295＋十二月といえば。

「走れ橇（そり）よー風のようにー雪の中をー」

兄の気が早い、アサキですが。

あれよあれよと年の終わり月となってしまった、やりたかったこととか別に思い浮かばないけれど早いなぁ、とは思う訳で。

師走というのは年末になると坊さんが経を上げる為に『師馳す』ことから来てるのはＷｉｋｉ先生に頼らずとも皆知っていることだっていうのは――いや、他にも由来はあるらしいけど――……うん、ハードル上げるのはやめよう、目の前で此れみよがしにクリスマスツリー飾り付けてるこいつが知っているとは思えない。

学校から帰宅して直ぐ、食卓机にてぼうっと頬杖を着く僕はそんなことを考えながらユウヤを見る、お前何歳だっけ。

「こらアサキ！　暇なら此れ手伝ってよ！！」

「嫌だよ面倒臭ぇ、そういうのはマヒルに頼めよ」

「居たらとっくに頼んでマス！！」

ぎゃーぎゃー騒ぐユウヤの言う通り、先月まで馬鹿みたいにひょっこり帰省していた――近いけども――マヒルは再びひょっこり帰って行った。『テスト近いんだよな』とか漏らしていたけど本当にただただ暇だっただけなのか兄貴よ、どんだけ自由なキャンパスライフだよお前。

「折角のクリスマスなんだから楽しもうよ！　ほら、皆でパーティーしようパーティー！！」

「どうせただのイエスの誕生日だからな？」

「そういう冷めたこと言わないの！」

チッ、うぜぇ。

騒ぐなら一人で騒いでくんねぇかな畜生、口に出したらマッハで落ち込みそうな言葉が脳内につらつら浮かぶけれどまぁ良いでしょう、此処は大人しくゲームしましょう。

「よし、出来た！」

「あ、てめ、いきなり叫ぶなクソ野郎」

つい驚いてムービースキップしてしまったじゃないかどうしてくれる。あーあー分かんない、何でこうなったのか分かんない。後で見直すっきゃねぇな此れは。

先までユウヤが居た方向を見れば姿は無く、何処に消えたかと背後を見ればキッチンに居た。

「……何が出来たの」

「勿論美味しい夕ご飯ですけれど」

「ちょっと待て、未だ五時だ」

夕飯早ぇよ、何で先走ったよ。

「何、急にどうしたの」

「今日のメニューは鳥手羽のから揚げです」

「あれ日本語通じねぇ」

無駄なキメ顔で何言ってんのこいつ、否、何が言いたいの。

「一人でクリスマス気分してたらテンションの下げ方が分からなくなったもんで」

「……其れを料理にぶつけたってか」

「オールライト！！」

「英語の日本語的発音うぜぇ」

あ、落ち込んだ。

「こ、此れでも最近英語頑張ってんだからね！？」

「遅い、三年前からどうにかしろ」

あ、更に落ち込んだ。

……ん、此処は励ましておいた方が勉強意欲向上したのか？　し

まった間違えた。

「ふっ、どうせ俺は実技以外オール2だよ……」

「え、待て其れ初耳」

「どうせそうだもん！　俺得意科目なんて無いし無理無理無理！！」

うわあ滅茶苦茶自暴自棄、面倒だけれど放っておくと暫くシケてより面倒なんだっていうことを僕はよく学んでいる。

だから何か言葉を、ええと、

「べ、勉強だけが人生じゃないよ」

「じゃあ何か俺を褒めて！」

「……」

――しまった思い浮かばない。

「……」

駄目だマジ泣き五秒前の表情だやばい面倒になる急がなければ……！　待て待て待てさっきまで元気だったろ此れだから喜怒哀楽に忠実な奴は困る！！

「良いもん俺の利点なんか家事くらいしか――」

「お、お前が居ないと僕が生きていけないだろ」

――我ながら際どい台詞吐いた。
……慌ててると人間たまにやらかすよね。此れ場面が場面で相手が違ったら大変だった、っていうか僕そんなキャラだったか。……久しぶりにテンパり過ぎた。
とりあえず表情には出ていないだろうから一度咳ばらいをして落ち着こう、ユウヤがポカンとしてる。

「家事だって立派な利点だろ」

「……まぁ、アサ君からすれば――コントローラー振りかぶらない怖い！」

悪かったな此の野郎、どうせ生活能力は向上しねぇよ。

「まぁとにかく、人には向き不向きがあるんだから仕方ないよ」

「アサ君が運動嫌いなように？」

「……もう其れで良いよもう怒んないよ」

僕を怒らせたいんだろうかこいつは。
けれどマジ泣きしてシケるのは回避出来たようでそうかそうか、と数回頷いている。

「うん、よし、頑張ろう」

「何を」

「苦手なこと！　――そうすればアサキの生活能力も上がる気がげふっ！」

「死にさらせ」

「事実じゃん！　っておま、やめんしゃい其れ花瓶花瓶花瓶！！！！」

とりあえず、今日も平和だなぁと思いました。……え、違う？　何が？

296＋人口的だが暖かい。

「アサキー、居るかー？」

授業眠ィ、ストーブの威力ぱねぇ。

え、嗚呼、アサキですよ、十二月に入ってストーブ導入されてしまったことで僕の授業中睡眠率が五十％から八十％に上昇しやがった、何だってんだコノヤロウもっとやれ。

とか愚痴（？）を言っていても仕方が無いので伏せていた顔を上げる、其処に居たのはカイトだった、しかも一人。何だ此の珍しい現象。

「うわ、一組あったけぇなおい」

「温暖化に喧嘩売ってます」

「もう少し温和に喧嘩売れよ」

其れはもっと室内設定を上げろってことか、お前良いこと言うな。と色んな意味で違うことを考える。駄目だストーブで頭イカれてる。其れと何が珍しいのかと言うと最近カイトもユウヤも滅多に一人で此方のクラスにはやって来ないってことだ、まぁ二人とかゼン君入れて三人とかでなら来るんだけど、一人ってことは其れなりの用事があるってことか。

「で？」

「嗚呼、此処見ろ」

「……英語の時だけは強気だよなお前」

「ははん、英語“だけ”はな！」

其れを認めてしまっていることが先ず駄目なんだろうけれど。

ということでカイトは英語の教科書片手に教室に乗り込んできたらしい、まぁ未だ僕の方が出来るしな、……いや、このまま負ける訳にはいかないけども。

隣のクラスに出掛けてるフドウの席につけば「最近英語ですら難しくなってきやがる」とか言い腐ってくれるもんだから殴りたくなった。僕から言わせれば英語が一番難しいっつーの。

「っていうかカイト、分かんないことあっても最近はゼン君に聞いてなかった？」

「あー駄目駄目、あいつ一週間はろくに相手してくんねぇ」

「は？」

「学校でもずっとゲームしてる」

「……嗚呼、ゼン君買ったんだ」

モン○ンですね分かります。

ああいうゲームってやり出すと止まらないよなー、まぁ僕はああいうのよりＲＰＧ系の方が好きだから買わなかった、何時か借りてやれれば其れで良いかと思ってたから丁度いいな。……にしてもゼン君テスト前なんだけど大丈夫なのかな。

「って訳で久し振りに英語教えてけれー」

「まぁ良いけど、他の教科大丈夫な訳？」

「勿論駄目だぜ！」

「死ねばいいのに」

「い、家行くから教えてクダサイ！！」

最近はゼン君が部活中とかに相手くれてたからなぁ……ゼン君何やかんやで面倒見良いから本当に助かる、お陰で心置きなく寝れるし。……まぁ、教えるくらいやる気と僕の方のやる気がある時なら一向に構わないんだけども。

にしても今クソ眠い、部活の時じゃ駄目かなとか思ったけど放課後じゃもっと眠いから無理だと判断、我ながら小学生並だとか思う。……今時小学生でもそんな寝ねぇか。

「あーあ、中学の時は此処まで難しくなかったのになー」

「そりゃそうでしょ」

「俺数学大嫌い」

「皆そうだって言うけどね、僕は一番マシだけど。……中学の時サクライ先生が言ってたけど、算数好きだった小学生が中学に上がっても数学を好きでいられるのは半分以下なんだとか、で、高校はその半分以下」

「じゃあ最初から数学苦手だった奴が更に苦手になる確立は半分以

上だな」

「違いねぇな」

はっはっは、と渇いた笑みを漏らしてから、カイトは深く深く溜息をついた、何とも言えないがどんとまいんど。

「嗚呼、二年になったらもっと教科増えんだろうな、マジ無理、死ぬ」

「そんなこと言ったって仕方ないだろ、ユキとかアスカ君とかはもっと難しいことやってんだから其れ位我慢しろって」

「あの二人は出来が違うだろ出来が。ついでに言えばお前も大分出来が宜しいじゃねぇか！！」

「頭の良さは高校で決まる訳じゃないよ、良い例出してやろうか」

「あ？」

「うちの兄貴」

「うおおやべぇ超説得力ある」

ウミさんも此処が母校だし、マヒルと同高校だったことくらいカイトも知っているはず。とりあえず僕の知り合いの中で――僕込みで――マヒルが驚異的なことは周知なことだから、何やかんやで説得力が破壊的にあるっていう。

喋りながらでないと寝てしまいそうな中、曖昧な教え方だがとりあえずカイトが英語を理解したので良かったけれども。

「何つーか、」

「何」

「ゼンに教えてもらうんでも全然良いけど、やっぱ慣れてるからかお前から教わった方が気持ち分かりやすいわ」

何だ其れ、僕はそう言って失笑したけれども。

とりあえず口にはしないけど言っておこうか、――誰が教えてやってると思ってんだバカヤロウ。

297＋テスト前って結構テンパる。

ユウヤでっす！　放課後でっす！　学校って授業中は長く感じるのに終わると直ぐ日が暮れちゃって。何でだろうね、って昔アサキとマヒル兄に言ったら其れこそクソ長い説明をされたのを覚えている……。ええと、平たく言えば相対性理論っていうやつで――ああもう其処から平たくない！　っていうか今の俺にそんなこと考えてる時間無いんだってー！！

「――だから、何度同じ説明させれば分かるのよっ！」

「何回でも！　せめてもう五回は教えて欲しいかなっ！」

学校帰りの道ですら時間が惜しい！　テストがこんなに迫ってたなんて俺思っても見なかったもんで……！！

部活も無いしゲームに夢中なゼン君が勉強教えてくれないしアサ君平日だと帰ったらほぼ百パーセント寝ちゃうし！　ってことで学校帰りの道を歩きながら教えてもらっています。本日の先生はリョウちゃんです。数学とか化学とかそういう理数系は得意だっていうから教えてもらってるだけど、普段教えてくれてる人は俺がどれだけ馬鹿か分かってて教えてくれてるからすんごい初歩から教えてくれるんだよね。けどリョウちゃんは「こんなに出来ないのによく学校通ってるわねアンタ……！！」とか完全な真顔で言ってくれちゃうもんで苦戦しています。

ちなみに俺は自転車通学だけど歩いてるよ、リョウちゃん歩きだし！　俺の自転車は後ろでだれてるアサ君が持ってくれてるよ！

だれてるなら教えてくれれば良いのに！

「まず、何を出すかは分かってるのよね？」

「其処まで馬鹿にされちゃあ困るぜ姐さん！　こう見えてざっと見るからに――」

「見えてと見るからにじゃ被ってんぞ」

「……エックスですね分かります」

「良かった、分かって」

そ、其れくらい分かってたもん！！　だたちょっと日本語ミスったのをアサキが何か言うから吃っちゃっただけだし！！

家路まで歩いてみると案外遠いもんだなぁ、なんて思ってる時間なんて無いんだけどそう思ってしまった俺は、はたと正面から歩いてくる人影に気が向いてつい笑顔になった。

「あ、せっちー！！」

「せっちー？」

リョウちゃんは不思議そうに首を傾げたけど、あの銀髪は間違いない。俺の方を見たからぶんぶん手を振ったら「おお、ユウヤ？」なんて呟いて人影ことせっちーがこっちにやって来た。っていうかせっちー、会うの文化祭振りじゃない？

「久し振りー！」

「おう、ユウヤもアサキも久し振り。えっと、リョウコちゃんでおけ？」

「あ、はい、お久し振りです、セツさん」

そうか、せっちーとリョウちゃんなんてもっと久し振りなんだ。二人共覚えてたようで何よりだよ！　――ってアサ君、少しくらい反応返そうよ、自転車のベルで遊ばなくていいから。

「今学校帰り？　怠ぃなー」

俺は今日休みだしー？　とかなんとか嫌味な一言を付け足してせっちーは何時も通りへらへらしていた。こっちはテストで切羽詰ってるって言うのに！！

俺やリョウちゃんがノートやら何やらを持っていることで其れに気付いたらしいせっちーは、若干うわあ、的表情をしてから俺のノートを覗く。

「嘘、テスト？　無いわー」

「無いわーって言ってもやらねばならぬのだよせっちー」

「あっはっはそりゃそうだよな、俺も高校ん時死んだ覚えあるわ」

「せっちーだもんね！」

「ははっ！　――とっても複雑な心境だ、俺」

幸薄い表情を見せたせっちーのことはまぁ気にしないけども。

「ていうかセツさん、こんなところで何してんの」

そろそろ帰って勉強しなきゃな、とか思っていたらやっとのことで弟が喋り出した。まぁ俺も気になってたんだけどさ、だってせっちーの家こっちじゃないじゃない。

聞かれたことにキョトンとしたせっちーは後頭部で手を組みながら少し考えている様子を見せて、「俺はー……特に何ってことはしてないけどな……」とか呟き出した。え、何も無いの？

「大学休みで暇だったから本屋行ったりゲーセン行ったり公園行ったりしてただけだぜ？」

「い、良い大学生が何故公園……！」

「リョウちゃん、せっちーにツッコミを入れたら負けだよ」

自由奔放だしね、此の人俺が言うのも何なくらい自由だから。わなわなしてるリョウちゃんをそう宥めてみるけど、せっちーは結局笑い飛ばすだけだった。

「んまぁテスト頑張れよー、俺でも赤点がギリ回避してたんだからな！」

「うえぇっ、せっちーの裏切り者ぉ！！」

「え、な、何かごめん」

弱いなおい。

本当に何の用事も持ち合わさずに出歩いていたらしいせっちーはじゃーなー、とのんびりした調子で再び何処かに消えていった。

「相変わらず愉快な人だなぁ」

「お前に言われたらおしまいだな」

「其れもそうね」

せっちーじゃないけど複雑な心境だよ畜生。

っていうかそんなことしてる場合じゃない……！　べ、勉強しなきゃあああああ！！！！

298＋テスト勉強を効率良く進めるには。

アサキです。

「――そうして私は彼を見ていることしか出来なかった。なぜなら――」

嗚呼、喋ってるのは僕じゃないです。

今までこんなこと無かったのにユウヤが気持ち悪い、テスト期間だからってこんなに真面目に数時間も勉強なんて……。

って訳で、リビングでゲームをする僕と現国の教科書を音読するユウヤ、何でも口に出さないと読めない漢字をスルーしてしまうとか何とか。僕なら先ず現国の勉強なんてしないけどな……、だって国語って文章に答え載ってるんでしょ？　其れだけで八割採れる採れる。――言ったらカイトに叩かれた、あいつにツッコまれるなんて何てことだ。

「あ、ねぇねぇアサくーん」

「ん」

「読めない読めない、教えて」

教えて欲しいなら横でやって欲しい。けれど勉強している人には基本的優しい僕はゲームをポーズ画面にしてそっちまで行ってやる、真面目にやってる人は嫌いじゃない。

――にしても、普段から勉強しろよとか言ってる僕が言うのも何なんだけど、ユウヤは一体どんな風の吹き回しなんだろうか。いや、

テスト勉強をしない訳では無いけど、此処まで真面目に長時間やってるのなんて最早気持ち悪い。え、どうしたの、本当どうしたの。

「アサキって頭の中に電子辞書とか入ってるんでしょ」

「入ってねぇよ、僕だって辞書使うよ」

「でも俺の倍は情報入ってるんだもーん」

「お前が僕の半分なだけなんじゃないの？」

あ、落ち込んだ、僕の口に自重という言葉は存在しないのだろうか。

とか考えていたのは束の間、何時の間にかユウヤは勉強を止めていた。

「アサ君テレビ見たい」

「え、あれ、勉強は」

新聞片手に横に立つな、オッサンかお前は。スポーツ欄を見るな。

「終わったー」

「……そう、……何でさっき勉強してたの」

まじまじとスポーツ欄を見ながらソファに座ったユウヤを見ながらやはり気になったので――別に普段のユウヤならそんな真面目に勉強するはずがないなんて失礼なこと思ってはいない――訊いてみる、――何故か驚愕されたけど。

「……え？」

「……いや、だってお前そんなクソ真面目に勉強なんてしなかったじゃん、現国如きで」

「んまぁ、うん、でもアサキと比べたら誰でも勉強やってることになると思うよ」

やってないからな。

「まぁ理由は無いんだけど、ゼン君がさ、『英語得意な人は国語も得意って聞くけどね』とか言ってて、」

其れはよく聞くな、ちなみ僕はどっちも嫌いだが。（※彼に好きな教科などありません）

「そしたらカイト君が『絶対嘘だそんなの！』って叫んで、」

あいつは本当に英語しか出来ないからな。

「『そんなの絶対イコールじゃねぇ！　人間は物に釣られた方が勉強出来るようになる！』って言うものだから」

「まぁ其れは確かに言えてるかも」

「其れを試す為に今、とあることを実施中～――って訳」

新聞を横に置いてユウヤはテレビのリモコンを片手に僕にそう言った。

実施中？　そりゃ一体何なんだか。

「まぁ単純に、現国の点数一番良かった人で五百円分賭けてるだけだよ！」

「……嗚呼そう」

そんなことで勉強するのかお前は、通りで現国しかやってない訳だ。

「でも其れ、ゼン君がぶっちぎりなんじゃないの？」

「ゼン君最近全力でモン○ンに愛を注いでたからノートもプリントもはたまた知識もすっからかんだもん、チャンスは今しか無い」

「……」

ゲームは盲目だなおい。どんだけやってたんだ、どんだけモンスター狩ってたんだ。

「……まぁ、頑張れ」

「もっちろん！　俺だってやれば出来るってところを見せてやるぜ！！」

「僕はゼン君が一番だと思うけどね」

「……そっ、其処はお兄ちゃんを応援してくれても良いんじゃないかな！　っていうか応援してくれたよね！？」

其れと此れとは別問題だろ、全力で。

299＋一人と一匹での過ごし方。

やっほー！　ユウヤだよっ！
何か全力で開放された気分☆　テストが終わったからかな、勉強しなくて良いからかな……！　もう暫く勉強は良いよ……俺の頭がぱーんってなるよ……たった一教科みっちりやっただけなのに頭ぱーんってなる。皆何で勉強なんて出来るのかな？　まぁでもそんなのもう気にしない！　とりあえず後は冬休みまで学校なんて知らん！！　俺は休みをエンジョイするんだーい！！
――って訳で朝です、どういう訳とかは聞かない約束です。

「さあって、何をしようかな！」

ちなみに今日はアサ君居ません、久し振りにユキ君ん家に出掛けるんだとか何とか。――にしたって朝の九時から出掛けるのは早くないか、何時だって体たらくな癖して出掛ける時はアクティヴなんだからもう。
俺一人というか寂しいというか――いや、別に寂しくはないけど――何せやる事は無い。だって一人だしなぁ、ゲームしたっていうんだけど今やりたいゲーム無いしなぁ。……読書とか？　無理、漫画しか読めない、父さんとかアサ君みたくあーんな字の小さな字の羅列読み漁るなんて無理、特に父さんとかあれは無理だって、知ってる？　父さんの部屋って文学もんばっかなんだよ？　アサ君みたくライトノベルとか挟んでくれるなら未だ良いけど――いや、俺は無理だけどね？
コンピュータで遊んでも良いけど流石に飽きた、昨日勉強しなく

て良い嬉しさにかまけて遊び過ぎてやることねぇよ。

朝ご飯終わって洗濯して、だ。掃除したって良いけど未だ部屋汚れてないし、テレビでも見ようかなぁ……。

何かもう趣味っていう趣味が無い自分に溜息をつきながらテレビリモコンを片手にソファに向かえば、其の白いソファの真ん中に何やら模様付きの何かを発見した。……嗚呼、そういえば俺一人じゃないんだっけ。

「ソファを一人占めとは良い度胸じゃないか」

名も無きにゃんこ、ええと、我輩は猫である、名前は未だ無いってか。

そんなことはどうだって良い、俺は座ろうとしていた場所ににゃんこが座っているではないか、君の家はテレビの横だろうに。リモコンで猫をつっついてみる、畜生反応しやがらねぇ。此処は横にどかすか……何故ど真ん中に座るんだ名も無き猫よ。

丁度人が座れないよう計算して座ってるんだかは知らないけれど、本当何でど真ん中だよ、今の家主は俺なんだぞー！　マヒル兄には凄い懐いてた癖に！　マヒル兄が座ってると率先して膝に飛び乗った癖に！！　――俺の膝にも乗っかってくれないかな！　……あれ違う？

「おいにゃんこ」

「にゃう」

「畜生俺の負けだよ！！！！」

可愛いなお前！！　がつんと言ってやろうと思ったけど可愛い過

ぎて何も言えねぇよ！！　自分のうなじでも強調させてんのか此の野郎、振り向き方がドツボじゃねぇか。此のにゃんこが女の子なら俺はもうメロメロだね！　……あれ？　そういえば此のにゃんこってメスなのかな……？　モモちゃんに聞き忘れた。

しかし誰も居ないからって何時までもソファの裏手に立って馬鹿やってるのも性に合わない、ツッコミも居ないし本当の馬鹿みたいじゃん！！　……どうせ馬鹿だろって思った奴俺の前に出て来い。

俺はとりあえず其処を退いて貰う為の作戦を立てることにした。

ええと、やっぱ所詮はにゃんこな訳だから――

「にゃんこ！　おやつの時間だぞ！」

作戦一、食べ盛りの子猫なんだからえさで釣ればこんなもの――

「なう」

猫は俺はいちいちキッチンから運んで来た食い物を一瞥するなり何事も無かったかように一声鳴いた。其れはもう見下すように。

「……」

「……」

さ、作戦其の二！　そうだね！　朝ご飯食べたばっかりだから要らないんだよね！　猫なので猫じゃらしでじゃらしてみる！！

……お、此れは効果的か？　其の名の通り猫パンチでじゃれているではありませんか！　お、お、良い感じ良い感――飽きたし此の

野郎、見事に飽きたし一切触れて来なくなったし。……一人で楽しんでた俺って一体。

え、ええと、此処まで来たら最終作戦！

「猫さま、少々横に寄って頂けませんか」

――とりあえず頼んでみる。

――猫は何か言いたげな顔をしながら少々横に逸れた。……通じるもんだなぁ、……冗談だったのにって言ったら怒られるだろうか。

にゃんこの気が変わらない内に座ることにしよう、回り込んでソファに座ってからまた猫を見たら、何とも愛らしい（※元々）表情をしたにゃんこと目が合った。

「……可愛過ぎるぞお前め！！！！」

さっきまで自分が超気を遣っていたのを忘れて、俺は結局にゃんこを抱き上げましたとさ。

やっぱり飼おうよ此の子！　だってこんなに可愛いんだもん！！

３００＊閑話＋寒過ぎる、暖冬って誰が言った。

はろうはろう皆々様、お久しうございます閑話のお時間にございます。
毎回の如く突発的に登場人物紹介はお休みってことでひとつ宜しくお願いします、何てったって作者の書く気がこれっぽっちも存在しない。
いやあ、作者も学生なもので考査とか考査とか考査とか考（以外略）で体力持っていかれまして、更新を滞らせてしまったことに対しては申し訳無く思っております、はい。

――っていうか何時まで黙ってんのそこの双子。

「え？」

「……」

まぁ良いよね炬燵（こたつ）って、炬燵に入ってテレビとか最強的に素敵環境だよね、まぁ良いよ、僕もそういうの大好き。だからって『え？』じゃないよ『え？』じゃユウヤ、閑話始まってんだよアサキに至っては喋れ ば か や ろ う 。

「だって寒いよー、こんな寒々した日は炬燵入ってないと何も考えられないよー」

良いよ炬燵入ってて、テレビを消せよ……！

「駄目だよ！　今俺の好きな歌手さんが歌ってるもん！！！！」

テレビもへったくれも無ぇよもう！　前も何か飯食ってたりしたよね二人して！！　閑話ナメんな！　ネタ無くて適当に書いた閑話ナメんな！　――僕も炬燵に入れて！！

「本音が最後にだだ漏れだよアザイさん」

「入れば良いのに」

はい、入ります。……えへへ。

はいはいぐだぐだと話してても構いませんが行くよー。

「何処に」

うるせぇ聞くな。

ええと、先ずは一言――記念！　朝夜グラフィティ。二年目突入！！　拍手！

「「……」」

しろよ。

「だって実感が」

「無いもんねぇ、俺達には」

……それもそうか。

アサキ達が中二から始まったからね、気付けば君等も高校一年！

進んだねー、っていうかユウヤが高校受かったならもう誰でも受かりそうだし。

「うわあんっ！　アサ君とは違った意味で作者が虐める！！」

「え、僕別に虐めたことは……」

新キャラも増えてわいわいなってきましたよ、この前の更新が滞った原因こと魔のテスト週間に今まで出てきたキャラ数えたら……四十近く……居ました……。

「多っ」

「確かに」

テスト中なのに笑ってしまったよ、はは。……四十は多い、反省し

た。なのに未だ予定あるよ新キャラ。

「先生ー、全然反省の色が伺えませーん」

反省なんて形だけさ。

っていう訳で多分読者様は知らないだろうから一言、某作者のサイトで朝夜。での好きなキャラアンケート取ってます。発表とか特に無いですが興味というか関心というかがある人は作者ページから飛べるんで是非一言お答え下さると助かります！　まぁ感想ででも構わないけれども。

「人気投票って……何か聞く限り本格的だね」

「いや、多分貧相なんだろうな」

そこのアサキ、大正解。って訳で大したお話では無いのでこの話は以上！

ともかく皆様のお陰で二年間やってこれました、そしてこれからも続く（※予定）んで宜しくお願いしまーっす。（※投票会場は既に廃止しております！　ただ今は更新報告や呟きを綴るツイッターを設けました。）

……さて。

「どうした作者」

別に？　言いたいことが終わっちゃっただけだけれども？

「あらら、俺が言うのも何だけど全く以って計画性無いね」

まぁ、それがアザイクオリティ？

「僕等に聞くな」

それもそうか。

……嗚呼ひとつ思い出した。正月、一昨年同様更新が一時止まるかもしれないことをお知らせしておきます。っていうかお知らせしたいこととか閑話にならないとお知らせ出来ないのってやっぱりアレだよね。

「良いじゃん別に」

「大丈夫だよアザイさん、読んでる人なんて早々居ないよ」

ユウヤって閑話になると辛辣だよね殴ろうか。……第一そんなこと自分が良く知ってる……！

ツイッターとかでお知らせするのが良いかなぁとか思ったが確実に日常がさらけ出されるから止めておこう、僕の日常を赤裸々に語るだけのツイッターだもんね……。

「僕は何だって良いけど」

「あ、アサ君ケーキ食おうぜ今日買って来た」

「食う」

……双子の気が徐々に遠退いて行く、……嗚呼、最初からか。
てな訳で今回はこの辺でおさらばしようと思いまっす、また次の閑話にてお会いしましょー。

「アザイさんも食べるー？」

ミルクレープなら頂きます。ではではっ！

３０１＋やっぱり誘うは此方から。

こんばんは、嘘ですおはようございます、朝です。アサキです。……朝挨拶するとややこしいから嫌なんだよな。

テストが終わってもう後は寝るしか脳の無い学校も休みであるが、本日は休日、英語で言えばホリデイ、僕が最も好きな日ではないか。普段は学校にギリギリ間に合う時間にユウヤに起こされる訳だがそんな煩わしい兄も今日は居ない、確か昨日の内からレッドラインに踏み入れた可能性があり過ぎてぼうっとしていられないとか何とか学校に行くとか言っていた。数学だったか、ハヤサカ先生に結果を聞きに行った……何で数学が出来ないのかな、僕一番楽だと思うのに。此の気持ちを分かってくれるのはきっと友達中ではカトウとかゼン君くらいなんだろう。

――なんてことはどうでも良い、終わったことなんて僕には関係ない。

今僕が考えなければいけないことは、何故其の素敵ホリデイに電話音で起こされなきゃいけないんだということだ。

ベッドの上で起きてしまったことに後悔しながらも、頭上の子機が呼び鈴を忙しなく鳴らしているのを聞きながら時間を見れば、未だ針達は第二象限を綺麗に現しているではないか。ちなみに第二象限は数学の用語なので苦手で何時か分からない人は手近の数学出来る人に聞こう。

「……誰だよ」

ちなみに此の子機、鳴り出して二回目だ。

何だよどんだけ鳴るんだよ貴様、何時もならこっちが鳴り出す前に下の親機をユウヤが恐るべき速さで――僕が起きないように――取るから眠りを妨げられることも無いのに……嗚呼畜生何で居ないからしねばいいのに。

しかし愚痴っていてもまた三回目が鳴り出さないでも無い気がするので取ることにする、うわあ外気寒い。

「もしもし」

『――あ』

返事が無い、ただの屍のようだってか。あっ、て何だあっ、て。

返答が無いようなら此のまま切ってやろうかなんて思っていたのだけれど、刹那受話器越しから『も、もしもし！』と声がして渋々切らないことにする。

『ヒコクアサキ？』

「そうですけれど」

『え、え、何で！？　ヒコクユウヤかマヒルさんじゃないの珍しくないかしら……！』

「君の発言大分失礼ですけれどカトウさん」

此の慌てっぷりで誰だか分かったけど、何其の認識、僕だって此の家住んでるんだけれど？　っていうか居る確立は一番高いんですけれど？？

知り合いだったので仕方なく起き上がればいきなり外気に触れ過ぎて凍死するかと思った、枕元の携帯を見れば不在着信があったから、カトウが用あるのは僕なのだと聞く前に発覚する。そして僕に用事があるなら何故そんなに驚いた、最初に出たなら普通喜ぶところだろうが。

「で、僕に何か用ですか、其れと今度からは時計の短針が三角形のｓｉｎ１２０。斜辺部に来てから電話下さい」

『……ちょっと待って』

待つこと十秒程。

『了解したわ、十一時ね』

やっぱり此の人数学出来るんだな。

其処から暫くテストの話になってしまったんだがよく考えればこんなのが用件な訳が無いだろう、と思い直した僕。

「まぁ此の話は部活の時にでもするとして、結局用件は？」

『……あ、忘れてた』

おい。

『あのね、……ええと、ええっと、其のー』

急にどうした、さっきまで『ワタヌキゼンはあれだけゲームに専念していたのに私より数学良かった』だの『ヒコクユウヤとロクジョーカイリは終わりね』だの文句というか愚痴というか世間話をつらつら述べてた癖にどうした。

「おーい」

『あ、あのね！』

「うん」

『夏祭りの時言ったわよね！』

「主語を下さい」

『誘ってくれたのを無碍にはしないって！』

「うわ懐かし其の台詞、よく覚えてるね」

『だから誘うけど、嫌なら断ってね！　良いわね！』

何で此の人誘う前から断れって言ってんだよ、先ず用件くれよ。

「――初詣、皆で行かない！？」

「お姉ちゃん、声大きいわ」

五月蠅いわね！　怒鳴んないと誘うことなんて出来ないのよ！！
おはようございますリョウコです！　朝っぱらから先走って電話してヒコクユウヤにでも連絡しようと思ったらなんか本人出ました！　久し振りにテンパりかけたわ……！！
電話が繋がってるから横でクリスマス仕様のファッション誌をぺらぺらと捲る愚妹（ぐまい）にツッコめなかったんだけれど視線だけで制し、とりあえず少し考えている風な電話先の沈黙を待った。け、結構頑張ったわよ今回は！！

『……其れって夜？』

「え、ええ、そうよ、ロクジョーカイリとかサキネユキとかにも声掛けるつもりなんだけど」

『あの二人は二つ返事で付いて来ると思うけどね、其れがあの馬鹿共クオリティ』

「あははっ！　確かに！」

嗚呼、こうやって電話越しに楽しく話せるのって良いわね――じゃなくて。私はアンタの返答が気になるんだけれど。

「……で、どうかしら……？」

『……寒い』

――言うと思ったわ！　其れはもう心底！！
そうよね、一組見る度机でくたばってるような人間が夜中に外なんて――あ、そ、そんなに頻繁に覗いてるとかそういうんじゃない

から!!　――嫌よね。

「……じゃあ、」

『何、ユウヤには僕から言っておけば良いの？』

「……何が？」

『え、初詣、今年は親居ないからマヒルも来ると思うけど。……そうなるとウミさんも来そうだな……』

「……来てくれるの？」

『……え？　そういう話じゃないの？』

「だって寒いって」

『寒いって言ったら行っちゃ駄目？』

「……」

『……』

「え？」

『ん？』

「それじゃあね！」

ガチャン、と大きな音を立てて受話器を叩き置けばまた愚妹が「お姉ちゃん、五月蠅いわよ」とか言われた。五月蠅いわね！　テンションを受話器に当てて落ち着いてるのよ！！（※物に当たらないで下さい）

「……初詣、か」

「何お姉ちゃん、今年は愛しの彼と一緒に行けることになったのかしら」

「馬鹿！　愛しの彼って何なのよ！！　だからアンタ其の情報誰から聞いたの！？」

「ちなみに私は例年の如くユズと行くわ」

「自慢するな其の笑顔ムカつくわね！！！！」

他人から見れば一寸も動いていないように見えるコトナの笑みに苛立ちながらも私は初詣にどんな服を着ようか悩んでいた、っていうかアンタ本当誰から聞いたのよ其の情報教えなさいよ！！

「まぁでもお姉ちゃん」

「……何よ」

けれど直ぐに真剣な表情になったコトナにびっくりしつつ、私は妹が見ているファッション誌にちょっとつられて視線を落としていた。……ちらっとだけど。

「先ずは私の補習に付き合いなさい、クリスマスどころでは無いわ。中学のテストをナメてた」

「一言だけ言わせてね、――馬鹿愚妹！！！！！」

本当に此の子ったら！！！！！！！

302＋クリスマスのご予定以前の諸事情。

ユウヤでっす、よくよく考えたらもう既に今学期も後数日！　中間考査へマって危うく赤点補習に駆り出されかけたけど其れこそギリギリセーフだった！　良かった！　冬休みまで勉強だったら俺くたばる……！！　本当に良かったなぁ、なんて思いながら久方振りになる部活にカイト君とゼン君と向かえば――ちなみにテストの賭けの結果はアサ君の考え通り案の定ゼン君圧勝だったっていう――、部室には俺達より先にふたつの人影がありました。

「あ、ハヤ先輩にフウカ先輩！　こんにちはー！」

「嗚呼」

「こんにちは、ユウヤ君」

先輩達は会長机ら辺に屯(たむろ)して何かを話していたらしい、何話してたんだろう？

ゼン君とカイト君はそんなこと気にならないらしく、ゼン君は鞄を下ろすや否やガチな勢いで鞄の中から携帯式ゲームを取り出して座り込み、カイト君は「喉乾いたー」と給湯室に向った。俺はとりあえずゼン君に倣って鞄だけ下ろして先輩達の方に歩み寄ってみる、……うん？　フウカ先輩何か持ってる。

「何話してたんですか？」

「此れ」

何時も通りの無感情な感じに何処かうきうき感を漂わせながらフウカ先輩は俺に其れを見せてくれる。パンフレットです？　あ、美味しいそうなケーキがたらふくですこと。

「クリスマスケーキ、皆で食べたいってハヤにお願いしてた」

「え！？　良いじゃないですか！　ケーキケーキ！　俺賛成！！」

「しかしケーキ、買うんだろ？」

「私が買ってくるもの、お家バイトで」

「お前の其れをバイトと呼んでいいのか？」

「ちゃんとお手伝いしてる」

ハヤ先輩は彼が座るとヤケに様になる会長机にて頬杖を付きつつ、怪訝そうな表情をしてみせる。其れから苦笑をして「まぁ、お前が良いなら良いんだが」とか続けたけどフウカ先輩のお家バイトって何なんだろう、ちょっと気になる。

ハヤ先輩がちらりと俺を見る。

「ユウヤ、お前達の中で赤点なんて貰ってきた奴居ないだろうな？」

――俺に言われた言葉だったのに、給湯室からがしゃん、と物音が飛んできた。

あれ……カイト君、赤点あるの？

「か、カイト君？」

「無い！　無い無い！　ぎっりぎり無い！！」

ティーカップ片手にずざざっと地を滑って給湯室から顔を出したカイト君。滅茶苦茶焦り顔だけど本当に無い、んだよね？　……何だ、俺と一緒じゃないか。

「ゼン、お前は」

「俺が赤点なんて有り得なーい」

片手をひらひらと舞わせ其れだけ言えば視線もくれずゼン君はゲームに向う。あれだけテスト前ゲームに夢中だった癖にどうしてあんなにテスト良いんだか此の人、絶対天才型だよ、アサキもだけど！　其れを聞いた結果ハヤ先輩は満足そうに笑い、

「まぁ、赤点があったらクリスマスどころじゃないと思ってな。ケーキくらいなら良いんじゃないか？　俺に聞くまでも無い」

と、承諾してくれました、と。やったい！　クリスマスケーキ！！

「やったー！　ケーキ食べたい！！」

「食べましょう、好きなケーキを選んでね、私買ってくる」

「はーい！　あ、でも本当にお金とか大丈夫なんですか？」

「全然大丈夫、私は皆でケーキが食べたいだけ」

其処から身を翻してゼン君の座るソファら辺にまで戻った俺とフウカ先輩は一緒になってケーキを選ぶことにした。お金よりも予約の時間の方が切羽詰っているらしく、今日決めて帰りに予約してきたいらしい。

「何でもっと早く言わなかったんですか？」

「今日思いついた」

嗚呼……そうですか。

「って訳で、アサ君どれが良い？」

『何だって良いわボケ』

本日一組にて単位が中途半端過ぎる約二名に勉強を教えるだとかで部活に来ないアサ君に電話をしたら怒られた。

「えー、だってケーキだよ？　一年だけでワンホール選んで良いってフウカ先輩言ってるんだよ？」

『別にケーキに好き嫌いとか無いし。皆でワンホールなら先ず好き嫌いあるか聞きなよ』

「おう、其れもそうだぜ」

『え、ケーキのお話い？　テナねえ、ケーキなら抹茶ケーキが好きだなあ、和っぽいのじゃないのとあんまり食べれないのお』

『抹茶っすか！？　ボクはやっぱりシンプルなショートケーキが好きっす！』

『お前等は勉強する気があるのか……？　僕帰るぞバカヤロウ』

『『ごめんなさい！！』』

どうやら弟も苦労しているらしい、そっとしておこう。

電話を切れば直ぐ部室にやって来たリョウちゃんに苦手があるかどうか聞いたところ、

「女の子が甘いものに好き嫌いなんて無いわよ」

と常識だろうばりに切り替えされた。さっきテナちゃんが電話で和しか食べれないとか言ってたんだけど……まぁ良いか。

「カイト君は好き嫌「無ぇ」嗚呼そう」

でしょうね、大分食い気味だ。

カイト君に好き嫌いとか考えられないしなぁ、ゼン君も同様にあまりあるように感じないんだけどとりあえず聞いてみよう。っていうかゲームに熱中してるからか此の上なくぐでってるんだけど聞いてくれるかな？

「ゼンくーん？」

「……」

ちくしょうとどいてない。

ゲームに熱中すると本当声届かないんだよなゲーマーの人って、何其のゲーマーの性、アサ君もだし、下手すればマヒル兄もたまに入るんだよなぁ。

と、言う訳で一度届かなかったくらいでめげる俺では無い、もう一度トライ！

「ゼン君！」

「……」

「ええと、――アサ君が昨日やってたゲームをクリアしたらしく、其れをゼン君に貸すべきかどうかで十分くらい悩んでました」

「――是非貸して下さいとお伝え下さい」

何でゲーム系の話なら届くのかな！！　いや、分かってやったんだけど！！

……無駄なキメ顔なゼン君がやっと覚醒したので、話を聞いて貰うことにする。

「其れで、ゼン君ってケーキで食べれないのとかある？」

「――……」

あり？　あからさまに視線を逸らされたような。そうは思ったけれど次に目が合った時には何時もの笑顔で、「特に無いよ」と言うものだから其れは其れで納得してしまった。

「ふーん、誰も好き嫌い無いならやっぱり好きなの選んで良いね。何が良い？」

「何でもー」

「私も特に無いわ」

何だ此の欲の無い集団、今はゲームに夢中ってか。来たばかりのリョウちゃんまでが空いてるテレビで普通にゲームを始めようとしている、……リョウちゃんも染まったなぁ、うちの部に。

「じゃあ俺が決めちゃおうか――って電話だ」

部活中は五月蠅くて聞こえないからマナーを解いている携帯、そんな携帯からめっずらしい着信音がした。っていうかアサ君だよ、アサ君とアスカ、部活メンバーと家族（※アサキ抜）だけは別の着信にしてるんだけど、……めっずらしい、俺の携帯からショパン鳴ってらー。

「はいはい」

『ベイクドチョコチーズケーキ』

「……はい？」

何其の面倒臭い品名。

『其れある？』

「ええと、待って、……ベイクドはチーズしか無いよ？」

『其れで良い、其れにしろ』

「え、命令系ですか？」

『おう』

何なんだい急に、さっきは何でも良いとか言ったのに。まぁ皆何でも良いとか言ったから決めてくれた方が俺は助かるんだけど。しかし急にどうしたんだか、とりあえず皆に聞いてみることにする。

「ねーねー、ベイクドチーズケーキで良い？」

俺の声にいいわよー、とかいいぜー、とか適当な返事を返してくる二人。――とは違った反応を見せたのはゼン君、一瞬硬直して俺を見れば、「今、何て？」と呟き聞き返してきた。

「え？　ベイクドチーズケーキで良い？　って。アサ君其れが良いんだって」

「……ゆっ君ちょい電話貸して」

「うぇ？　ほい」

どうかしたのかな？　俺は素直にゼン君に電話を譲って首を傾げる。

「あ、もしもしあっ君、何か気ィ遣わせてごめんね？　とりあえず良いからシギに代わって？」

そして滅茶苦茶良い笑顔でアサキにそんなことを言えば立ち上がって、給湯室の方へ捌けて行った。給湯室のスライド式の扉まで閉めて一体何の話だろう？　最後に「シギの馬鹿！　言わなくてもいーのっ！」とか聞こえたんだけど……まぁ良いや、帰ったらアサキに聞こう。

「……そういえば、サチト先輩が居ない」

「嗚呼、サチトなら補習受けてるぞ」

「うちの部活唯一の赤点保持者」

「……」

……部長だけが保持者なんだ。……クリスマス、大丈夫なのかな？

303＋休みの日の学校。

「リョ、ウ、コー！！」

「ひゃ！」

ちょっとした用事で休みだってのに学校にやって来たのだけれど、教室にて私を呼ぶ声に振り向けば、タックル宛らに誰かが抱きついてきた。リョウコです……びっくりした！！

「ちょ、何！？　いきなり飛び付かないでよっ！！」

「えへへっ、びっくりしたあ？　ごめんなさーい」

にこにこと何がそんなに満足なのか可愛らしい笑顔を向けて来る訳だけれど、嗚呼、やっぱりアンタなのねテナ、其の笑顔に此の子は化粧とかしなくても可愛いんじゃないかしら？　なんて思うんだけれど……いや、此れは女の私から見ての見解だから何とも言えないけれど。

という訳で美術部の部活動で学校に来ていたテナだった。

「休みにリョウコに会えると思ってなかったよお！」

「まぁね、ちょっと委員会の仕事間に合わなくて」

「あ、ねえねえ、ミノちゃん見たあ？」

ミノルを探しているのかしら？　首を傾げて尋ねてくるものだか

らつい辺りを見回してみるけれど、陸上部のあの子を教室である此処で認めることは出来ない、よく考えれば当たり前なんだけど。っていうかテナも何で教室来たのよ、偶然探し回ってて教室ってアンタはミノルを何だと思ってるの。

「ミノちゃん、今日は午前中で部活終わりだって言うから教室で待ち合わせてるんだよお」

嗚呼、そういうこと、何かごめんなさいね馬鹿とか思って……！私が見ていないと告げればテナは「じゃあもうちょっと待ってよっと」と私の席に座り込む、まぁ私もついでに寄っただけだし少しくらい話し相手になってあげても良いかしらね。

その隣に座って休みの部活なんて懐かしいなぁ、なんて思っていれば、急にテナがぱんっと一度手を叩いて、満面の笑みで私を見上げた。

「ねぇリョウコ！　此れから暇あ？」

「……はい？」

まぁ、部活も無い――あって無いようなものだけど――し、暇と言えば暇だけど。元々暇だから委員会なんてものの為に学校に来た訳だしね。

「此れからミノちゃんと一緒にい、ケーキバイキングに行くのお！リョウコも一緒に行こっ！」

「は？　バイキング？　でも私今日お金あまり持って来て――」

「券があるのお！　一枚で三名様までだからあ、リョウコも一緒に！！」

先ず昼ご飯どうすんのよ、午前よ、ってツッコミは多分通じないんでしょうね。

ヤケにキラキラした視線を送ってくるものだから有無を言えなくて。……別に良いんだけどね、ケーキ好きだし、券あるなら安いってことだし。

「でも、ミノルに言わなくていいの？　アンタが無断で誘って」

「ミノちゃんはリョウコのこと大好きだからきっと喜ぶと思うよおテナ」

嗚呼そう、……普通此処は照れるところなのかもしれないけど何かアンタに言われると別にどうでも良くなるわ。

えーっと、で、バイキングだったわね。うん、此の後本当に予定が無いかどうか考えてみるけれど、此れといって何かがある訳でも無かった。二人とは最近遊んでなかったし、食べがてら話すのも良いかも。

「ええ、別に良いわよ」

「やったあ！　久し振りにリョウコとミノちゃんと遊べる！」

「あれ、何アンタ、ミノルとも遊んでなかったの？」

「うん、最近のミノちゃんは部活で忙しかったからねえ」

腕を組んでうんうん、と頷くテナ、同じ部活動なのに私と偉い違

いだなぁ、なんて思いながら未だ姿を見せないミノルに感銘を受けた。陸上部って大変そうだものね……、今更運動部とか絶対に無理だわ。昔は馬鹿みたいに放課後も休みも部活部活だったのよね、何で保ったのかしら私？

「ふうん……やっぱり、運動部って大変よね、私の中学の時バド部だったから分かるけど」

「そうだねえ、テナも昔は運動部だったしねえ」

「え、そうなの？」

うん、と自身満々に頷いたテナ。何だ、テナってこう見えて――ごめん、ちょっと失礼だけど――すっごく絵が上手だから昔からずっと美術部なんだと思ってたわ。

「テナ、薙刀部だったのお」

「な、薙刀……？」

「ちなみにミノちゃんもだよお？　陸上部と掛け持ちだったから、今よりハードだったんじゃないかなあ？」

ちょ、意外な部活来たわ此れ。薙刀部？　珍しい部活もあったものね……。

しかもミノルは掛け持ち？　陸上部って其れじゃなくても大変そうなのに、そんな大変そうな部活を掛け持つなんて……あの子の凄さを改めて知った気がしたわ。あの子……滅茶苦茶体力あるのね……そういえば持久走も結構上位に居たし、当然と言えば当然かしら。……あれ？　短距離走の選手よね？　そんなに体力って必要？　…

…まぁ良いか。其れ以上に此れでテナの運動神経がヤケに良い理由が分かった、美術部なのに走るの得意って凄いと思った。

「まぁ、高校では案の定無かった部活だからあ、ミノちゃんも私も今の部活なんだけどねえ」

「そっか、まぁ良いと思うけどね、自分に合う部活なんてやってみなきゃ分からない訳だし」

「そうだよねえ、テナ、絵ぇ描くのは昔から好きだったけどお、今みたいにちゃんとやるのは初めてだしねえ。でもすっごく楽しいからあ、入って良かったなあって思う！」

よく考えれば私もそうだ、ゲームとかやって何が楽しいのかとか思ってたもの。けど誘われるまま入って、結構楽しんじゃってるんだから人間どう転ぶかは分からないわ。

「テナは絵、上手いしね」

「そんなこと無いよお！　テナなんて全然！　先輩とか超上手いんだからっ！」

美術部の人の絵とか全然知らないけど、テナがノートとかに描く落描きは充分上手いと思う。教科書とか貸すとびっくりするくらい絵が増えてるし、落描きしないと生きていけないんだと豪語していたのを覚えてる私はどうすれば良いのかしら。あれで上手くないとか謙遜でしかないわ、私の画力の無さ見せてやろうかしら！！

「私から見ればアンタも充分上手いわよ、自信持ちなさいって」

「……ほんとお？　じゃあ、何時か見に来てねえ？　絶対だよおリョウコ！」

「はいはい、分かったわよ」

ずいっと前のめりになって言うテナが何処か必死で可愛らしくってつい笑ってしまったけれど、テナもつられるようにして笑ってくれたからまぁ良いかな、なんて思った。

「――テナ、遅くなっ……リョウコと話していたのか」

「あ、ミノちゃん！　よしリョウコ、急いで行くよお！」

「あーはいはい。さ、ミノル、行くわよ」

「……？　……ふっ、嗚呼、行こうか」

少ししてやって来たミノルが素っ頓狂な顔をしたのを見て、私とテナは顔を合わせて笑った。アンタが遅くなったのがいけないんだから、さっさと行くわよ！

３０４＋年明けの秒読み。

こんにちは！　ユウヤでっす！　冬休みきゃっほい、な俺が参りました。宿題とか？　え？　宿題？　え？　ちょっと其処ら辺の話は聞かなかったことにします。

昨日はクリスマスだったんだよね、毎年ながら母さん達は居なかったし、二人で地味にお祝いしたんだー！　だってうちの弟『キリストの誕生日祝ってどないすんねん』とか若干の関西弁でツッコむくらい興味無いみたいだからさ、カイト君とかが来てればもう少し盛り上がっただろうけどあの人風邪引いてダウンしてたし。ちなみに今月入って三度目のダウンですね、毎回ながら大丈夫か、下手したら俺達よか父さんに会ってるよね！

さて、クリスマスも終わったということで、年末年始の準備に取り掛からなきゃ！

大掃除もそうだけど、其の前に年賀状か。毎年クリスマスまでに出せ的はＣＭを見るんだけど……出せないんだよなぁ。今年は印刷でおっけーかなー、――とか思ってたのにまさかのＰＣ不調ってなあに其れ。

「アサ君、ＰＣが気まぐれ起こしたんだけど」

「ドンマイ。……え、使えないの？」

「そうなんだよ、もー、アサ君みたいで嫌になっちゃ――」

「しね」

問答無用にしねは酷くない？

ゲーム中――最近そんな姿しか見てないな――のアサ君はそう一言で割り切ろうとしたっぽいけど、珍しくも興味を示して此方にやって来た。

「ディスクを読み込んでくれないぞ☆」

「ディスクが嫌われてんのかお前が嫌われてんのか分からないな」

「俺が嫌われてんの……？」

一階のデスクトップは主に俺しか使ってないのに……嫌われてたらショック大きいわー。――ってそんなのどうでも良いんだよ、何より今は年賀状を早く作成したいのにソフトが取り込めなかったら終わりじゃん！

「どうしよう」

「上の使えば？」

「マヒル兄居ないと接続が危ういぜ」

うちの万能兄さんが居ない時に滅多なことは出来ないよ、変に馬鹿やってＰＣごと駄目にしたら終わる。其れこそ今から手書きって大分骨折れませんか、ねぇ。

仕方ないからＰＣの機嫌が直るのを待つ、ということで暫く放置することにして。アサ君はゲームに、俺は食卓机に着いてお節料理の具材を何時買うか検討すべくちらしを見始めた。やっぱ買う時誰

かに付き合って貰わなきゃなぁ……。

「そういえば、」

「ん？」

アサ君がひとつ呟く、視線を少しもくれないのは何時ものことだけれど、一体どうしたい。

「カトウから電話あって、皆で初詣行こうって」

「リョウちゃんが？　行く行く！　夜！？　夜だよね！？」

「何でいきなり其のテンション」

良いじゃん皆で初詣！　超楽しみなんだけど！！　いや、俺は何でも楽しみなんだけど。

「初詣なんて初めてじゃない？　夜は眠いからって行かなかったし、朝は毎年マヒル兄もアサ君も起きないし」

「そりゃ起きないでしょう、しかしマヒルと僕を一緒にすんな」

其れはごめん、確かに昼過ぎに起きてくるアレとは一緒にされたくないよね。どんだけ寝れるんだ。

にしてもリョウちゃん、自らアサ君を初詣に誘うなんてやるではないか、何やかんやで断らないアサ君もアサ君だが。去年に比べると随分話すようになったんじゃない、此の二人？　少しくらい何か気付いたりは――

「皆ってことはカイトとかユキには言った方が良いんだよね」

――無いみたいですね、はい。

「大晦日……ハンバーグ食いたい」

「ちょ、大晦日関係無いよね其れ」

大晦日の概念を覆すよ其の発言は。

休みになって何処かマイペースさに拍車が掛かっている我が弟でした、暫くは此の調子だろうなぁ、大丈夫かツッコミ。

３０５＋不本意ながら捕獲しました。／前

「もー、いーくつでーるーと！」

「出るな、寝ろ」

ユウヤの場合何処かに出ると正月が来るらしいが何処に出るんだろうか、アサキですが。っていうか外で歌うなよ、家とか学校でならともかく――学校でも出来れば黙ってて欲しいけども――。

お節の買出しに行くぞー、とか何とかで朝早く起こされたんだがどうしても動く気になれず、結局家を出たのは昼近く。別に急ぐ訳でも無いとか言ってたがだったら明日だって良いじゃないか、という僕の文句は聞き入れられなかった。こんの主夫め……！

久し振りに外に出てみてもやはり滅茶苦茶寒く、マフラーもコートも身に付けたのにやはり寒い。横の馬鹿はマフラーだけで満足そうに笑っていやがって何がそんなに満足なのか尋ねてやりたいものだ、そのマフラー吹き飛ばすぞ。

「此れで大晦日はゆっくり出来るよー！　皆で初詣だって出来るしね！」

「別に買い物関係ないだろ」

「関係あるよ！　明日お節作っちゃえば明後日ゆっくり出来るでしょ？」

「どっちにしろ僕は暇だけど」

「まぁアサ君はそうでしょうね」

はん、悪いか。

外に出るのすら億劫な僕が買い物に付き合ってやっただけで褒めるべきだ。

と、沢山の食材の詰まった真っ赤なエコバック――最近買ったらしくヤケに推してきた――を引っ提げるユウヤと僕（僕のエコバックは緑だけど）は昼下がりの癖して寒々しい家路を歩いていた。

「……あ、」

「……ん」

とっとと帰って炬燵で寝てしまおうと思っている僕は気持ち歩みが速まっていたみたいだが、其れは何故か立ち止まったユウヤとの距離が大分空いたことで気付かされた。え、何、どうかしたの。

「ねぇねぇアサ君、あれって迷子だと思う？」

「……は？」

「うん何かごめん面倒なもの見つけてんじゃねぇよって言いたいんだよね」

僕から見えない曲がり角先を指差すユウヤについ溜息をつくけど、

本当に迷子なら置き去る訳にもいかないだろう――僕は一向に構わないけどユウヤが絶対動かない――。少し戻ってちらりとそっちを見てみれば、人影が二つ、だが二つは二つでも幼い影が二つ並んでいた。

「遊んでる、だけかな？」

「公園も何もない此の街中でかばかやろう、声掛けんならとっとと行って来い」

「え、アサ君も一緒に行こうよ」

「何故だ」

僕と違って子供好きだからああいうのも苦じゃねぇんだろうな、僕だったら絶対嫌々になるだろう。

結局引き摺られるように、渋々、仕方なく――色々と嫌々なのを告げる為に並べてみた――着いて行くけれど、何かもう子供を見たくも無かったので明後日の方角を見遣っていた。

なのに、「あー！！」とか、何故そんな叫び声を上げたのか分からなかったけれど、いや、多分僕等が近付いたからなんだろうけど、だからってあー、とか叫ばれたら流石に見ない訳にはいかないだろう。再び渋々其方を見れば、其の叫び声の主であろう子供が僕を指差して硬直していた。何だよ、指差すなよ――

って、……あ。

「あっくんだー！」

「あ、……みーさん」

何てことだ、リアルに知り合いだった。正確には、知り合いの姪っ子。

真っ黒い円ら此の上無い瞳を僕に向けてきてきる此の子、ゼン君の姪っ子こと……ええと、ミヤコちゃん、だったっけ。が僕を指差して先程から停止なさっている。

「え！？　アサ君小さい子に知り合いとか居たの！？　何で！？　最早羨ましい！！」

「そういう問題かよお前は」

かっとなって言うから何かと思えば羨ましがるな、こちとら不本意だ。しかし子供にそんなことを言う訳にもいかず、とりあえず「人に指を差しちゃ駄目ってゼン君かお母さんに習わなかった？」と尋ねたけど、みーさんは首を傾げるだけだった。ええい、此れだから子供は。

しかし指差すのはやめたみーさん、隣に立っていた彼女より少し年上の女の子の後ろに隠れれば、じっとユウヤの方を見ている。

「アサ君、此のあからさまな拒絶は何かな」

「人見知りだってゼン君が言ってたけど」

「っていうか誰？　ゼン君の妹さん？」

「姪っ子」

「可愛いからどっちでも良いけどね！！」

お前何なんだよ。

「みーちゃん？　どうしたの？」

「しらないひとぉー」

「大丈夫だよー、ソオが守ってあげるからねー」

で、だ。

別にみーさんが此処に居ようが隣の此の子が誰とか全然気にしないんだけども、だ。

「何、君達二人なの」

ゼン君の家から此処って結構距離あるんだけど、見積もって平均小学一年生の子等が二人で何してるんだ。

「そーちゃんとねー、あそんでるー」

「嗚呼そう」

「あ、さ君、そんな言い方じゃあいけませんよ！」

ちょっと前から発狂寸前状態になっていたユウヤが覚醒して、僕にそんなことを言ってくる。じゃあお前が話せっつーの。

そんな気持ちが伝わったのかよいしょ、と荷物を持ったまましゃがんだユウヤはにっこりと笑みを浮かべ、幼い彼女等と話す体制に入る。

「二人で遊んでたのかな？」

「そーです」

「じゃあ、お名前は？」

「そーです」

「……え？」

「ちょっと間違えました、ソオです」

「あ、ソオちゃんなのね、……お家の人は？」

「お家でお仕事してるから、今日はソオがお姉ちゃんでみーちゃんと遊んでたんだよ」

「そっか～、偉いんだね～！」

「デレッデレしてねぇで本題に入れクソヤロウ」

やり取り見ててちょっと苛々してきやがった、違った意味で僕が発狂しない内にとっとと話を聞け阿呆。

苛々を抑えることなくユウヤに伝えれば仕方なし、と笑みを濃くして喋る彼女に尋ねる。

「ええと、みーちゃん、て言ったかな？　みーちゃんのお家の人は？」

「……おかあさんはいないけど、おにーちゃんはおうちだよ」

「……二人は、このままお家に二人だけでちゃんと戻れるのかな？」

二人は顔を合わせる、合わせる、けど、――二人してクエスチョンマークじゃねぇか此の野郎。

「ソオ達ね、靴さん飛ばしながら此処まで来たの」

「靴？」

「うん。靴さんが立ったらこっちに行ってね、ひっくり返ったらこっち行くの」

少女が言うに最初のこっちが右で、後のこっちが左らしい。――要するに、適当に進んできた訳か、ええ？

……要するに、ユウヤが最初言ったので間違いじゃあ無かったんだな。

「……はぁ」

「アサ君、此れ見よがしに溜息付かない」

だって吐きたくもなるだろ、何つー面倒臭さだよ……此れ。

３０６＋不本意ながら捕獲しました。／後

ってことで、久し振りに引き続いてアサキです。
前回のおさらい的に言えば迷子の餓鬼を捕獲してしまって堕落しています、以上。

「ソオちゃんとみーちゃんは何が食べたいかなー？」

「ソオはね、チョコが良いなぁ！」

「ちーず！」

「良いよ～！　お兄ちゃんが持ってきてあげる！」

――しかも横のクソ兄貴は餓鬼にデレッデレだしよ……。
こいつ将来絶対碌な父親になれねぇだろうな、奥さんの尻に轢かれてしねばいいのに。

このまま家に帰ってうだうだ計画はユウヤが「こんなところに居るのも何だし、とりあえず公園にでも行こうか！　あ、其れともうち来る？」とか言い出した時点で無くなったのは僕知ってる。だって今家に居るのに全くのんびり出来ない、だって五月蠅い。
僕がみーさんの知り合いだったことでもう一人の方の警戒は無かったし、ユウヤが此れだからみーさんも直ぐ打ち解けたし。
何より――

『お掛けになった電話番号は現在――』

頼みの綱のゼン君が、さっきから一切電話に出てくれません。
え？　家に居るんだよね？　居るのに何で出ないのかな？　しぬのかな？　あはははは。

「あっくん！」

「あ？　何すか？」

「アサ君態度激悪だよ」

「うるせぇカス」

「子供を前にしてより態度悪くなってる……！！」

「おにーちゃんでないよぉ、ゼンくんねー、いまいそがしいらしいからー」

「忙しい？　家に居るのに？」

「うん」

ユウヤがアイスを出すとか何とか――冬なのにアイスを食おうとしている此の集団と常備されている我が家がおかしい――言ってる

隙にソファから降りたみーさんは食卓机に付く僕の足元に来て、相変わらず邪気とかそういうのが全く込められていない双眸を僕に見せてきてから、こう言った。

「ゼンくん、ちきゅうをまもるのにいそがしい、って」

「あのクソ野郎ゲームやってて餓鬼から目を離したのか」

駄目な人間を見事に体現した感じだな、あの金髪。っていうかあいつ金髪と茶髪の中間くらいで表現しにくいんだよ、どっちかにしろよばーか！！（※荒れてます）

「駄目だ、ゼン君には暫く通じる気がしない……」

「アサ君の場合、明日は我が身だもんね」

「……」

「え、怒った？　ごめんって」

「いや、ユウヤが難しいこと言ったから頭打ったのかと」

「今のごめん返せ」

なんて話していても解決しない、ゼン君に二度とゲーム貸してやんね。と決意を固めたのはまぁ良いとして、たった今ユウヤが運んできたアイスを食べ出した二人を見つつ、僕は改めてちゃんと溜息をついた。行儀が良いことだけが救いだよ本当に。

「どうする？　このまま送ってく？」

「何で僕がそんな面倒なことしなきゃいけないんだ」

「いや、俺が行くし」

「お前ゼン君家知らねぇだろばーか」

「あ」

僕がゼン君の家知ってるのだってフドウの家に寄った時聞いただけだし――まぁお隣さんだし――、あいつん家って美容院で少し唖然としたけど、其の所為で髪の毛金になったって言ったフドウの表情がネガティヴ入りかけだったから触れないでおいた。

……ん、家が美容院？

「えと、そっちの子、」

「どうしたのアサ君、うなだれた机からこれ見よがしに起き上がって」

「的確な形容をありがとう、――じゃなくて。そっちの……ソオ、

ちゃん？」

「アサ君がちゃん付けすると面白いね」

「じゃあソオさんって呼んでやろうか？」

「ソオはソオって呼んで欲しいの」

「ああ面倒臭ぇな、じゃあソオ！」

呼び捨てたら満足そうだった、何なんだ此の餓鬼。

「君の家、もしかして美容院？」

「……何で知ってるの？　髪切るところだよ」

「ざっくばらんな形容だこと！！　合ってんじゃねぇか！！」

「え、どうしたのアサ君、何か変にハイだよ！？」

「うっせぇ黙れ！　もう全員黙れ！！」

面倒臭さが末期なのとソオの身元が分かって其の面倒さから解放されるかと思ったらハイになったんだよ！！

という訳でテンションは少し戻し、僕は先程閉じた携帯を再び片手で開いて直ぐコール出来るように登録出来る携帯の便利機能に親やユウヤを差し置いて最初に登録してある番号にコールすることにした。

同じクラスだからか、ダントツで電話してるしされてる気がする、あいつには。

『え？　……えぇ！？　な、何でソオとミヤコちゃんがヒコク君のお家に居るんすか羨ましい！！』

「何で羨ましがったんだお前帰れ」

『や、今家なんすけど……』

という訳で、ソオの兄だと思われる人物――フドウに問い詰めたところ、案の定であった。

『今から迎えに行くっす！　……あ、ゼン君も連れて行った方が良いんすよね？』

「良く分かってんじゃねぇか、俺は今あいつを殴りたくて仕方ねぇんだ」

「アサ君、子供達の前で血の惨劇だけはやめてね」

お隣さんならゼン君を連れて来ることは可能だろう、僕は通話を切って――勿論ユウヤのツッコミはスルーで――再びソファの方を見れば、餓鬼共の視線を集めていることに気付いた。何だよ、見るなよ。

「お兄ちゃん、怒ってた……？」

嗚呼、其れを気にしてたのか。――って、あのフドウが怒るとか僕には全然想像が……。

「きっと怒ってないから大丈夫だよ！」

僕が自分でした奇妙な怒るフドウの想像に苦笑しかけた時、ユウヤが満面の笑みを浮かべて二人の前にしゃがみ込んだ。

「怒ってたとしても、其れはソオちゃんとみーちゃんを心配してたからだから、ちゃあんとごめんなさいすれば許してくれるよー！」

だから、とユウヤは前置きをして、より一層、笑みを色を濃くした。

「お兄ちゃん達に――ちゃーんとごめんなさい、って言おうね！」

……嗚呼、こいつは本当に。

餓鬼の扱い方が上手いというか何というか。

――兄とは口では言うけれど、久し振りに感覚的に、こいつは兄貴なんだな、と思った僕。

「其れで許してくれたら、皆で遊ぼうか！」

「「遊ぶー！！」」

……前言撤回っておうけいですか、やっぱりユウヤはユウヤだばーか。

307＋初、初詣。

「マーヒールー兄！　準備未だー！？」

「ちょっと待て！　さっきまで洗い物をしていた兄ちゃんに対して其れは無いだろ！！」

ユウヤです！　年明けますよあと少しで！！

今年は――ん？　来年？　此の場合どっち？　……まぁ良いや未だ今年だし。

皆で初詣に行こうってことで家の近くの神社に集まることになりました！　へへっ、こういうのすっごく好きだから今から頬が緩む。何をする訳でも無いのにこうやって集まるっていうのが楽しいんだよね！　そういうお年頃！！

年越しそばももう食べたし、後は神社に行くだけ！　――なのに。

「ねぇ、アサくーん？」

「マフラー消えた」

「マフラーくらい無くたって良いじゃん！　っていうか昨日洗濯してタンスに閉まったけど！？」

「マフラーをタンスに仕舞うな」

「アサ君がソファに出しっぱにするからでしょ！！」

「あれ、アサキ未だなの？」

「あ、マヒル兄。マヒル兄からも言って下さい、一人だけ動きのろのろなんだよあいつ」

了承した本人が一番やる気無いってどういうことなのさ、両親も居ないからマヒル兄も来るって言ったけどそれなりにちゃんと早めに準備始めたよ！？

玄関で靴まで履いて喚く俺とは大違いなアサ君は本当にのんびりと支度をしていました。

ああもう、一人で浮かれてるみたいで馬鹿みたい！！！！

「やぁアサキにユウヤ！　そしてマヒルさんもＨａｐｐｙ　ｎｅｗｙｅａｒだよ！」

「ユキ、未だ大晦日だ」

嗚呼、俺より浮かれてる人見つけた。いや、良い意味でだけど。
神社に来たら其れこそ女の子にしか見えないユキちゃんが一人鳥居近くに座り込んでいた。俺達を見つけた瞬間ぱあっとこれ見よがしに表情を明るめ、滅茶苦茶良い発音でそんなことを口走った。

「ははっ！　其れもそうだね！　流石はアサキだよっ、格好はだるまさんみたいだがツッコミは冴えているね！」

「誰がだるまだ、お前だってそれなりに着込んでるだろ」

真っ白いダッフルコートなんて実にユキちゃんらしいと思う、手袋なんてのもちゃんとしてるし、やっぱり夜中は冷えるしね。……まぁ、俺はアサ君よりちゃんと防寒してる人未だ見たことないけど。コート手袋マフラー耳あて、そして確か懐炉とか持ってたよね？どんだけ寒いのよ。

「ふふっ、そりゃあ寒いのだから仕方ないよ、其れに――」

「おーい、アサキにユキー」

「――アレは見ているだけで寒いからね」

「……まぁ」

アサ君とユキちゃんを呼ぶ声がして俺共々其方を見れば、相変わらずの格好のカイト君を発見した。
ええと、パーカーを防寒具に入れるなら、其れだけだね。

「よう、ユウヤにマヒルさんも。……ええと、あけおめ？」

「しねよお前」

「言わずもがな死にそうだね」

「よくウミが何も言わなかったな……寒くないのか？」

「え？　え？　あんまし寒くないっスよ？」

心配しているのは恐らくマヒル兄くらいのものだろう、俺は何かもう見慣れたから其れで良いかなぁ、ということで笑顔で受け流すことにした。

「姉ちゃんは明日の向けて美味しいお節を作るんだー、って朝からはりきり過ぎてもう寝た」

どんなお節なんだろう……ちょっと気になる。俺も負けないものを作ったつもりだけどうちの人間無感動な人多いからなー、カイト君とかに食べる前に見てもらおうかな。

「ウミさんも来れば良かったのにねー」

「流石のウミもバッテリー切れたんだろ」

マヒル兄は何処か楽しそうに苦笑した、ウミさんに聞かれていたら確実にどうにかなっただろうに。

未だ年は越していないというのに神社には多くの人が集まっていた。未だ来てないのはアスカとリョウちゃんとモモちゃんかな、アスカは体調に寄っては来れないって言ってたけど……大丈夫かな？

「あ？　ユウヤ何きょろきょろしてんだよ」

「え？　あ、アスカ来れたかなーって、どっかで人の波にもみくちゃにされてないか心配で」

「アスカはお前が心配する程やわじゃねぇと思うぜ？　……色んな意味で」

「其れはどういう意味ですか、ロクジョー君？」

俺が此れだけ探しても見つからなかったのに、あっさりとカイト君の背後にてアスカを発見、とりあえず鳥居の背後にどう回ったのか聞きたいけど気配が素敵だから俺は何も言わないでおく。

「うわっ、お前何時の間に……！？」

「何時の間になんて心外な、俺はずっと此処に居ましたよ？」

「嘘だっ！　絶ッ対嘘だ……！！」

「アスカー！！！！」

「あはは、こんばんは、ユウヤ」

どう現れようとアスカはアスカだもんねっ！　それなりに体調の宜しそうなアスカに飛び付けばやんわりと其れに応えてくれたアスカ、うわあい何か久し振りだなぁ！

「何だよ、身体平気だったんだな？」

「ええ、俺も高校生ですしね。両親も保護者の方にご迷惑を掛けないように、と言ってくれました」

にっこりとカイト君に笑みを向けつつそう言うアスカ。……保護者？　保護者って誰？

今の段階で保護者に値するのはマヒル兄だけど、アスカにはマヒル兄来るとかは話してなかった気がするんだけど。

「嗚呼、勿論保護者なんてガセネタですけどね」

「「……」」

此の子、親御さん騙してきたんかい。

「ちょ、おま、良いのか其れ」

流石のカイト君もそう言ったけど、当人はものっそい笑顔でした。

「まぁまぁ良いじゃないですか、マヒルさんも来てるなら結果オーライですよ」

アサ君とユキちゃんと共に少し離れたベンチに座り込むマヒル兄を見て清々しい笑みを浮かべたアスカ、……。

「ま、アスカだし良いよねっ！」

「……良いのか？」

珍しくカイト君が真面目に悩んでいた。

「わぁ、皆もう集まってたんだね～」

「早いわよっ！　あ、マヒルさんこんにち――違う、こんばんはっ！」

其れから少しして。

実は規定時間の前に来ていた俺達のところにやって来たのはリョウちゃんとモモちゃんだった、えへ、先走って早めに来たんだよ。

それにしてもリョウちゃんてマヒル兄とか年上の人にはちゃんと礼儀正しいんだなぁ、と。いや、元々礼儀正しいんだけど、俺達の中

で四番目に常識ある気がする。ちなみに一、二、三番はアサ君とアスカとユキちゃんなんだけどあの三人は常識を知ってる癖に役立てないから意味が無い、やっぱりリョウちゃんが一番だ。
　マヒル兄がのんびりと挨拶を返せば――ちなみに此の人既に眠いんだと思う――やっと皆揃った訳で、そういや年明けって何時？なんて携帯を見てみる。

「……あ」

「……ん」

「年、今明けたけど」

「……嗚呼そう」

――何て無感動！！　アサ君無感動過ぎるよ！？

「あれ、もう年明けたんですか？　じゃああけましておめでとうございます」

「嗚呼、おめでとう」

「ふふっ、此のやる気の無い感じが素敵だね！」

ぺこりと頭を下げたアスカに適当な返事を返すカイト君、ユキち

ゃんは恐らくツッコミなんだろうけどそんなんで本当に良いのかな!?

「私とリョウちゃん、外出てくるのちょっと遅かったもんね～」

「まぁね……でもまぁ神社に着いて良かったわ。道端で年越しとか、そんな虚しいの絶対嫌」

嗚呼、そうなの女の子組。……あれ？　気にしてるの俺だけ？

「ね、ねぇマヒル兄、良いのかな、年明けこんなもので」

「嗚呼、いんじゃね？　十人十色、人にはそれぞれの年明けってもんがあるんだぜ……？」

駄目だマヒル兄眠くてまともな思考が回ってない。なのにごめんね連れ出して……！！

「年明けたならもう帰りたい」

「アサキん中じゃあ初詣って年明けたら終わりなのか？　今からじゃね？」

「眠い」

「……おーい、立って寝るなよー」

っていうかうちの兄弟眠いのに弱くないか、……あれ？　此の場合おかしいのは俺？

「もーえろよもえろーよー、ほのおよもーえーろー」

神社の中心で行われている焚き火を見て、カイト君が棒読みで歌い出してから。

「焚き火あったかい……手がジンジンするよ～」

「モモ、手袋して来なかったからよ！　……私もだけど」

「手袋して来ないからじゃね？」

「さっき私が先に言ったわよ、っていうかパーカー一枚のアンタに言われたくないわよ！」

「あ、僕の手袋使う？」

「……え？」

「いや、暑くて脱いだから」

「……え？」

「……要らないならいいけ――」

「――リョウちゃん借りなよ！　手袋だよっ！」

「ほらアサキ貸してやれ！　お前そんだけ着てんだから！！」

「いや、だから今貸そうかって……おい、奪うなカイト」

「ほらリョウコ！」

「あ、あ、ありが、とう」

「別に良いけど」

「はう、リョウちゃん可愛い……」

「何か見てるだけで面白いな」

「マヒル兄、珍しく不謹慎な発言だよ」

「あ、ごめん」

少し離れたところで行われている四人の会話を見れば、眠い時だととことん人間らしさを飛び越え何かアレになることに定評あるマヒル兄がそう呟いた。

それでもさっきよりは幾分覚醒したマヒル兄は少し辺りを見回してから、

「そういやユキ君とアスカ君は？」

とリアルに保護者らしいことを聞いてきた。

「二人なら境内に甘酒貰い行ったよ」

「とことんだなあの二人」

大人っぽいを通り越してジジ臭いとでも言いたいのかなマヒル兄、別に甘酒は全国共通若い人だって好きだよ！！　まぁ俺はあんまし好きじゃないけどさ。

其れから少ししてマヒル兄と近くのベンチに座れば、色んな人達が神社に訪れるのが見れて、普段は凄く閑散としている場所なのに凄いなぁ、なんて在り来たりな感想が浮かんで来た。マヒル兄も何か考えているのか、視線は何処か明後日の方向を見ていて。

「マヒル兄ー、そのまま寝ないでねー？」

「だーいじょうぶ、色々考える内は寝ねぇ」

手をひらひらと舞わすのを見れば本当に寝る様子は無いけど、一

体何を考えているんだか。

「今年は良い年になれば良いな」

「そーだねー、でも俺的には今年も充分良い年だったよ！」

「――そうか」

俺の言葉に少しキョトンとしたマヒル兄は、けど直ぐににっこりと笑みを浮かべた。……我が兄ながら此のイケメン、彼女とか作ればいいのに。

でもまぁマヒル兄は――俺もだけど！――暫くそういう色恋沙汰とは無縁なんだろうなぁ、とか、年の初めに何思わすんだか！　アサ君ははたから見れば（周りの必死な応戦もあって）充分ラブコメしてるんだけど本人が無意識過ぎる、リョウちゃん本当ごめん。

「――よっし、マヒル兄、俺達もあっち行こっか！」

「はあ？　未だ遊び足りねぇのかよ……」

遊び足りないって何さ！　別に良いじゃん行こうよ！　そんな感じで駄々をこねていたら苦笑しながらもマヒル兄は立ち上がってくれた。ユキちゃんやアスカも戻って来て焚き火周辺に屯う皆のところ行った方が絶対楽しいからさ！　多分本当はもう眠いであろう兄を引っ張って、俺も其処に混ざることにした。

本当は良い年でなくたって良い、神様なんてのが本当に居るのなら、――どうか俺を取巻く人達とこれからもずっと一緒に居させて下さい。ずっとなんて無いこと知ってるけど、俺が神様を信じている内くらいはお願いします。

其れで、欲を言って良いなら、周りの皆が、俺の家族が、――俺の片割れが、――此れからどんなことがあってもずっと、ずっとずっと笑っていられますように。

って。

俺はずっとお願いし続けるよ、皆が幸せでいてくれないと、俺だって幸せになれないからさっ！

「マヒル兄！」

「ん？」

「はっぴーにゅーいやー！　今年も宜しくねっ！」

「……おう、此方こそ」

何時もなら英語の発音がどうとか言うマヒル兄も、今日ばかりは
何も言わずに笑ってくれた。

308＋誰か代わって下さい。

おはようございまーっす！　ユウヤだよー！　朝から馬鹿にハイテンションだなお前とかは言わないお約束！

「はいはいはい！　朝だからってだらだらしない！　パジャマ洗うから早く脱いでー！！」

「んー……」

「っていうかマヒル兄は？」

「……未だ寝てる……」

何でだよ。っていうかもうお昼になるんだけど！

マヒル兄が帰って来てる時は大抵マヒル兄がご飯作ってくれるんだけどな、――夜は。朝と昼？　用事が無い限り絶対に起きないねあの人、もうマヒル兄は何が駄目って眠い時が駄目だからうちの長男は困るわ！！

アサ君は昼回らないものの起きてくる割にぼうっとしてるからね、何故起きてきた……そして炬燵にもぐったら火傷するよ！　気をつけて！！

「もう、未だ未だお正月気分なんだから……」

「僕もマヒルも正月じゃなくても多分眠いよ」

「そうでしょうね、って炬燵で遮られてよく聞こえないんだけどアサくーん」

炬燵で丸くなってると猫みたいだよ、……あ、そういえば本物のにゃんこも居るんだっけ、にゃんこエリアに居ないけど何処行ったんだろう？

「にゃう」

居た、炬燵の中だった。

結局暑くなって出てきたアサ君の横からにゅっと顔を出したにゃんこ、良いなぁ、俺も炬燵の中で何もしないでいたい。

「未だ居たの、此れ」

「そりゃ居るよ、可愛いんだもん」

「理屈通ってねぇ」

理屈じゃないもん、感じるままだもん！　と俺は叫んだけども、アサ君もにゃんこも取り合ってはくれませんでした、……きっと朝だからだと俺は信じてる……！！

「だって可愛いじゃん！　こんなに可愛いにゃんこが居るなればそりゃあ飼うっきゃないと思うんだ！！」

「へぇ」

「……へ、へぇ、ってあなた、何か反論は？」

「……反論って、何反論すりゃ良いの」

「だからほら、猫飼うの反対！　みたいな」

「……」

あれ無言。

……え！？　反論しないの！？　だったらマジで飼っても良いか

――

「おっはよ～」

な、って聞こうとしたら寝起きに付き無駄に気持ち悪いテンションのマヒル兄がご起床なさった、空気読もうよお兄さん。

「おはよ」

「うぃ。……寒ィから俺も炬燵に入らしてー」

しかしまぁ――普段よりは！――早めに起きてきたことだし許しましょう。っていうか何を許すのかも分からないけど、ともかくパジャマのまま炬燵に入り込んでる此の兄弟どうにかしてよ誰か、洗濯も進みゃしないよ。

「もう新学期だって始まるんだからさっ！　しゃきっとしようよ！

！」

「「しゃき」」

「全然しゃきっとしてないし其の発音じゃ魚の鮭みたく聞こえるよ」

「にゃ！」

「魚に猫が反応した……！」

炬燵でぐだぐだする二人と一匹が何時行動に移るかは分からないけど、疲れるから早めにツッコミ復活してくんねぇかなとか思う俺だった。

……ツッコミって疲れる……！

309＋暖房は程々に。

うぃーっす、カイリだぜ、誰かさん達のお陰で未だクラスメイトが名前を間違えて覚えてるが俺様は偉いから気にしたりしねぇんだぜ。

「はいはい皆注目！」

久方振りの皆が揃った部活――基、皆揃ってて皆が話を聞ける状態だってのが久し振りだっていう――、急にサチト先輩が二度手を叩きつつ仁王立ちした。

「なあにさっちゃん、将来サルの人形にでもなるの？」

「誰がサルの人形だ、手ぇパンパン叩いただけでサルの人形目指してんならサルの人形への就職率くそ高ぇだろうがばーか！」

「どうしたサチト、今日は一段とツッコミ肌だな」

ゼンの冗談にリョウコバリのハイテンションでツッコむサチト先輩を見つつそう呟いたのは生徒会長ハヤ先輩だった。

「えー、ごほんっ、皆の衆、今から俺が話すことを予想出来る奴挙手」

何やらにんまり顔でそうひとつ咳ばらいをする部長殿。え、何、

俺達に予知能力があるか試してんのかね？　俺は隣のユウヤと目ぇ合わしてみるけどユウヤも分かんねぇらしく、キョトン顔を見てからもう一度視線をサチト先輩に向けた。
　手が一向に挙がらないのを良いことにサチト先輩はふっふっふっふ、とか気色悪い笑みを浮かべてみせている。何なんだよ此の部長。

「まぁ分からないよな。……実は、春や――」

「春休み生徒会で体育館倉庫の備品移動やるってハヤサカ先生が言ってた」

　と、先輩の言葉を遮ったのは無論アサキ、一人でソファに野垂れ死んでいようが言うことは言うんだな。つーかお前が片側のソファ全部使ってるからゼンが座れてねぇけど。

「……さっ、先言うなし！　つーか知ってたなら手を挙げろし！」

「挙げるの面倒臭い……でも先輩が我が物顔でいるのも面倒臭い……」

「良く言ったあっ君☆」

「流石よアサキ君」

「畜生アサキにナメられてるのはまぁ良いとしてゼンとフウカがムカつく！！！！」

「アサキにナメられてるのは良いんだな」

冬休み課題の山だったらしいサチト先輩はなんかもう吹っ切れたんだなぁ、と俺は一人幸薄い視線を送っておいた。

「あっ君には商品として此の暖かい毛布を掛けてしんぜよう」

「……わーい……」

「ゼン君駄目だよ其れ掛けたら完全に寝るようちの子」

「元々今も半眠状態なんだから変わんねぇだろ」

「……其れもそだね」

俺の指摘に何かを諦めたユウヤ、部活中ゲームをしても見てもいないアサキが起きてることなんて稀中の稀だしな。何時か冬眠するんじゃねぇかとか俺は思ってる。

「ちょい待ち！　話はこっからよ！！　備品移動なんざこちとら何十回とやらされてんだから構わねぇのさ！！」

其れもどうかと、どんだけこき使われてんだ生徒会。

「其の日は部活動も何も無いから備品移動の報酬として、一日体育館使用の権利を頂いたのだ！！！！」

「は？」

「どういうこと？」

二年陣がぽかんとしているけど、サチト先輩はお構いなしに続ける。

「つー訳で春休みのＧＣ部は其の日に限り運動すんぞ！　皆でドッジやろうぜドッジ！！」

「うわあ、良いですね！」

「俺も運動好きだから良いッスけどね」

体育館使いたい放題か、其れは実に魅力的だ。……しかしうちの部は運動好きと嫌いがスッパリ分かれるんじゃなかっただろうか、いや違う、――長時間運動出来る人間と、そうでない人間だ。

「ハヤ、大丈夫？」

「嗚呼、俺は大丈夫だ、過度の運動でなければな」

「……アサキ君は？」

「……」

「……あっ君？」

「……」

駄目だもう寝てらぁ、どんだけ寝付くの早ぇのこいつ。

「……まぁ、アサキには黙っておこう、何やかんやで来るだろうしな」

「其の時にがっつりゲームにハマってない限りは来るんじゃないかと」

其れはゼンとか二年陣にも言えることだと思うのは決して俺だけじゃあないはずだ。

「普段使えない体育館だからなっ、皆、其の日はジャージで集合だぞ！」

『はーい』

……ま、俺的には楽しみだから、其れで良いんだけど。

「そういやリョウコ、お前何してんだ？」

「え？　ワタヌキゼンのゲーム、今狩りに出てたからセーブ出来なくて……。……話はちゃんと聞いてたんだからね！？」

……染まったな、お前。

310＋雪の悪夢は忘れない。

ユウヤでっす！　三学期入ってもやっぱり怠い授業中でっす！
……だけど今はホノちゃんの授業だから、あんまり面倒じゃないんだよなぁ此れが！

「――ってなってねぇ、先生びっくりしちゃったの」

――何てったって地理の授業から話が逸れて早十五分、未だ未だ日本の山脈の話に戻ることは無いようだ。さっすがホノちゃんだぜ！
カイト君は窓際席で爆睡、ゼン君も同文、リョウちゃんとミノルちゃんは何やかんやで聞いてるけど……俺もそろそろ夢の彼方に旅立とうかと検討中。

「――嗚呼そうそう、来週にスキー研修があるじゃない？　先生スキーってやったことないから楽しみなのよねぇ」

おっと此処に来てまた話が変わった、もう少し起きてよう。
――そうそう、俺達一年は来週からスキー研修なんだよね。高校入って未だ一年経ってない訳で不慣れな俺達一年二組は、大抵ホノちゃんの忘却癖の所為で色々大変な目に遭い掛けてる――体育祭とか、ね……――けど、今回は大丈夫！　……え？　別にホノちゃんの忘却癖が治った訳じゃないよ？　ホノちゃんの忘却癖に慣れたハヤサカ先生が二学期の内から二組に乱入してきただけだよ？

皆が未だ浮かれ出す前に先手を打つなんて流石はハヤサカ先生だよねっ！　十一月じゃ流石の俺も浮かれないよ。

「皆はスキーとか、……嗚呼、中学でやった人が多いかしら。……もし先生が遭難したら助けてね？　なんてねっ」

――先生、洒落にならねぇ。

「スキー楽しみっす！」

「ははっ、シギは家族とかでよくスキー行くもんなー」

場所は変わらず時は変わって昼休み、昼ご飯を終えた一組の三人が珍しく二組に進出して来た。何よりアサ君が動いたことがミステリー……！！　まぁ用件は特に無いらしいんだけどね、たまには良

いんじゃね？　ということらしい。
シギ君の見事なはしゃぎっぷりを見て皆が和んだ（※約一名例外）ところでゼン君とアサ君は二人で小型ゲーム器に夢中になってしまいましたとさ。

「ウタカタ先生の授業でも言っていたな、スキー、……か」

「ふ？　ミノルちゃんはスキー嫌いなの？」

「いや、嫌いでは無いがあまり得意で無いのは確かだ」

スキーだもんね、あれってどちらかと言えば経験なんでしょ？
俺は割と滑れた方だったけど――

「だーいじょうぶ大丈夫、アサキ中学ん時盛大にコケてたんだぜ」

――だしね。運動神経云々じゃないと思うよ、俺。
カイト君の適当な言い草にも目敏く反応したアサ君は座っていた席の人の筆箱を冷静に投げ付けていた。ちょ、其処誰の席よ、俺知らないからね……！
でもミノルちゃんはミノルちゃんで其れに少し安心したみたい、
「アサキがそうなら安心だな」とか微笑みながら呟いてるけど一体何が安心なんだか、アサ君もリョウちゃんも困惑気味である。

「あ、ねぇねぇゼン君！　其の猫さん何なのお？　凄く可愛い！　桜色お！」

「可愛いよねー、一緒に戦ってくれるんだよー、ほら、オレンジ色も」

「うわあ！　橙にゃんにゃん！」

スキーの話に入って来ないなぁと思っていればテナちゃんはゲームの方の猫に夢中な様子。うわあ、普段俺がゲーム中話し掛けても下手すりゃ無反応なのにテナちゃんだとアレだよ、ゼン君ったら差別酷い。……確か此れ前言ったら「差別じゃなくて区別だよ」って真顔で言われたっけ――いっそ清々しかった。

ま、何はともかく来週だよね、俺的には凄く楽しみだなぁ！

「スキーか……、……ねぇ、ヒコクユウヤ」

「うぃ？」

「其れとロクジョーカイリ」

「あいよ？」

「――アンタ達、今回は反省文なんて書かされないように気をつけなさいよ？　多分担当、ハヤサカ先生でしょうから」

「「……」」

そんな真顔のリョウちゃんの言葉に、悪夢再来だけは避けようと思った俺、とカイト君だった。

311＋寒過ぎる日常の中で。

「さぁさぁアサキ！　元気出したまえ！」

「元から元気だが何か」

アサキです、数ヶ月振りに会ったユキが冬なのにテンション高い。

……ん？　冬だから高いのか？

学校帰りに会うのは良いんだがこう毎日寒いとやる気もテンションも普通だろう。コンビニ行こうぜ！　とか言い出した超ノリノリのカイトを誰か刺し殺してくれ寒過ぎるめっちゃ寒い。

「そうかい？　何だか顔色が悪いようにも見えるよ？」

「寒いからそう見えんだよ、つーか何でコンビニ前で屯わなきゃいけないのさ寒い帰りたい」

「まぁまぁアサキ。コンビニ前で屯うなんて青春じゃあないか、たまにはこういうのも必要不可欠だね！」

何処が、夏にやれ夏に。

そう言ったら言ったで何か言うだろうから黙っとくけど、……つーか言い出した張本人がなかなかコンビニから出て来ないんだが何してんだ、ユキも僕もガムとか飲み物とか買っただけで終わってんのにあいつどんだけ時間喰うんだよくたばれ。

あ、出て来た。

「うぃー、お待たせー」

「しね！」

「うわっ……何だよアサキ、寒過ぎて頭狂ったのか？　大声出すなんて珍しい」

「うるせぇ寒ぃんだよ馬鹿くたばれカス」

「アサキ！　そんなに寒いなら私が暖めてあげようじゃないか！！」

「そんだけ着てんのに何で寒ィんだよお前、ある意味危ねぇだろ」

ばっ、と手を広げるユキは全スルーで震える。だから防寒具マフラーオンリーのお前にだけは言われたくない、成長してもマフラーだけか、お前の身体どうなってんだよ。

「寒いんだから仕方ない、用事終わったならさっさと帰る」

「まぁ待てって、お前は俺がチャリを漕がないと帰れねぇんだから」

「別にチャリパクれば帰れるじゃん」

「アサキ、其れは犯罪だぞ☆」

「生憎鍵が掛かってるんです～、残念でした～」

「確か暗証番号は＊＊＊＊（※プライバシー暴露）」

「すまん俺が悪かったそして何時覚えたんだお前……！！」

分かれば良いんだ、さっさと帰ろうよ。

あんな会話をしながらも、電車通いのユキに合わせて歩く僕等、面倒だから荷物は全てカイト持ちである。

「にしても本当寒ィな……」

「此れでも暖かい方なのだよ？　関東はね」

「他は雪だので忙しいらしいし」

こんなに寒いなら何時降ったって良い気もするが、まぁ降らないことに越したことはない。あんな真っ白くて寒いだけのもん何が楽しいんだか分からん、路面滑って頭打ってからじゃ遅いんだぞ。

「俺寒いの嫌いだし、とっとと春来――いや、何でもねぇ」

どの口が寒いの嫌いだって？　とツッコミを入れる前にカイトが発言を中途半端に留めたものだから気になって其方を見遣る。別に此れといった表情変化は無かったけれど、先の続きを話す気も無いらしい。一体どうした。

「私は寒くても構わないから冬で良いけれどね、アサキの元気が無いなら、私は早く夏になって欲しいかな」

「……？」

夏か、確かにクーラー下の僕は元気だが。けど、

「何で春駄目なの」

四季折々だろうが、春も呼んでやれよ。

けれど何故だろう、ユキには困った顔をされた。カイトは見ずとも分かるが前は見ろ、転ぶと僕の鞄が濡れる。

「まぁ、春は、ね」

「あったかいじゃん」

「微妙に暑いだろ、アサキが現に浮されてっと勉強も捗んねぇんだよ」

面倒になったカイトがそう言う、……嗚呼、成る程。

要するにお前等は、僕が春嫌いなの知ってて言ってる訳か、納得。

「……うん、じゃあ夏が良い」

「だろ？」「でしょう？」

「早よ来い、夏」

特に反応も見せず小さくながら頷けば、二人は多少得意げに笑った。

嫌いな訳では無いけどね、ただ、――イロイロ考えさせられるだけで。

312＋風邪が大流行中。

「――あっくーん！」

廊下から誰かが人の名前を叫んでいる気がする、っていうか確実に特定の一人に呼ばれてるんだけど生憎姿が見えないからスルーしてみていますアサキです。

「ヒコク君、明らかにゼン君が呼んでるっすよ」

「ゼン君、あー君に何の用なんだろうねえ？」

他二人もそう言いつつスルーだから良い性格してるよ、特にフドウ、お前はあれと幼馴染じゃあ無かったか。

昼食後の昼休み、何時もの如くのんびりと憩いに徹していれば廊下からゼン君が呼んでるっぽかった。何時もだったら平気で突っ込んでくるのに一体どうしたってんだ迷惑だからとっとと入って来いよ、其れとも何か企んでんの？

「フドウ、面倒だからお前行け」

「えー、呼ばれてるのヒコク君っすよー？　ゼン君もきっとヒコク君に来て欲しいから――」

「良いから行け其れかしねよ」

「毎回思うっすけど清々しい程選択肢が少ない！」

騒ぎながらも結局席を立ったちっさい金髪――こいつ何時になったら髪色直すんだか――はすたたたっと素早く廊下へと消えていった。

「あっくんって本当に期待を裏切らないよね」

「一体何だってんだ」

五分か其処等かしてから、フドウとゼン君が一緒になって戻って来た、否、ゼン君の場合はやって来ただが。何故か苦笑気味なのがちょっと気になる。

「いや、ゆっ君がね、中途半端に何か企んでそうなことするとあっ君は警戒するって言うからやってみた」

「何て無駄なことを……」

「ゼン君はそんな無駄なことに全身全霊を掛けられる人なんすよヒコク君！」

「ちょーいシギ、本人の前でそういうこと言わないの」

ガッツポーズを決めつつ言うものだから僕は若干納得した。まぁゼン君だしね、学校のテストよりゲーム優先しちゃうゼン君だもんね。……まぁ僕も人のこと言える立場じゃないんだが。

「で、何か用事あったんじゃないの」

「嗚呼、うん、俺は特に用事無いよ」

「は？」

「うんごめんあっ君睨まないですんません」

そんなに謝らなくても良いんだけど、え、そんな強く睨んだ？
ゼン君の訳分かんねぇ言い草に苛立ったのは確かだが出来ればとっとと用件を言って欲しい。何も無いのに呼んだんなら改めて蹴り飛ばすから其れは其れで。

「まぁ、別に本人に言われた訳じゃないんだけど、今さっきゆっ君とカイ君が用事あって体育着で外出てったんだよね」

「何しに行ったのお？」

「多分生徒会の仕事じゃない？　ハヤ先輩に前頼まれたんだと思うよ。まぁ其れは良いんだけどさ、」

ゼン君は窓の外を見る、僕等の席は窓際じゃないから勿論校庭すら見えやしないんだけど、ゼン君の視線は何処か吹っ切れた笑みだった。

「カイ君、ジャージ忘れたって半袖で出てったんだよ」

「は？」

吹っ切れた笑みの理由が一瞬で分かった、――あいつ馬鹿なんじゃねぇの？

「いや、俺も今日ジャージ忘れたから貸せなかったしね、だから――ってあれ、あっくーん？」

免疫力なんて微塵も持ち合わせてない癖に何してんのあの馬鹿、スキー研修も近いのに其れで風邪引いたらどうする気なの、別に僕は一向に構わないんだが行けなかったら行けなかったで絶対落ち込むし其れが一番うぜぇんだよなあいつ。スキーだけならともかく歩きで学校行くの怠いし。総計するととにかく――風邪引かれたら面倒なのは絶対僕であるということだ。

ゼン君の声も聞かず自分のロッカーへと向かえば中に入れておいた自分のジャージを持ち出して、そのままゼン君に投げ付けた。我ながら言おう、よく届いたな。

「持ってけ泥棒！」

「あっ君テンションぶっ壊れてるけど大丈夫かしら」

うるせぇテンション壊れ気味なのは自分がよく知ってらぁ。

再び苦笑したゼン君はじゃ、届けとくね、と言って教室を後にした。

「ゼン君やっさしいねえ、テナ感心しちゃったあ。下手したら惚れちゃいそうだよお？」

「ゼン君にっすか……？　……ゼン君、確かに格好良いすけど……」

「ナルシストなのと女好き無くせば良い物件だろうけどな、あと弱ロリコン」

「弱ロリコン！？　其れミヤコちゃんだけにっすよ！？」

「ミヤコちゃんってだあれえ？　あ、でも安心してえ、テナはシギシギのこともあー君のことも大好きだからあ」

フドウもドウモトも何か言ってるけど、僕は一人全国何処を探しても完璧な人って居ないものだよな、とつくづく思った。まぁあのマヒルにすら苦手なもんがあるんだから仕方ないか。

313＋暖かな昼下がりにて。

「一ヶ月振りくらいの雨だったんだってよー」

「あらまぁ、通りで最近洗濯物に困らなかった訳ね」

マヒルだ、何か久しい。

先の会話は無論セツとウミのもので、大学の外ベンチに通路を挟む形で座っている。何故か三人共違うベンチなんだが理由は特に無いんだろうな。

「……ウミに洗濯物ってなんか似合わねぇな」

「あら、失礼なこと言うのねセツったら。こう見えても毎日炊事洗濯してるんだからね？」

「まぁ弟と二人暮らしだったらそうなるか、俺はシロ任せだからお前等が凄ぇと思う」

凄ぇ、というのは家事の一切を担っているということに関してだろうか、個人的に余り苦じゃないから分からないけど、とりあえず俺は何時も通りに苦笑しておいた。

「カイちゃんに不便はさせないわよ、両親が居なくたって私がカイちゃんを立派に育ててみせるわ！」

「お前……弟が彼女連れてきたらどうすんの」

「――考えないようにしてるわ」

「「おい」」

カイト君だってもう高校生だろうが、そんなきりっとした目付きで何を言うんだ。――とか思うものの俺達誰も付き合ったりしてないんだけどな。あれ、此れってどうなんだ？

「だってだってカイちゃんの彼女でしょ！？　そりゃカイちゃんが選んだ人なら私も好きになるよう努力するけど、でも全然相容れない人だったら多分手が出ちゃうなぁ……あ、でもこう、しおらしい感じで『お、お姉さん』とか……あ、此れ良いわね」

「ウミ！　戻って来い！　一人で何処の妄想ワールドに旅立ってんだ！！」

「妄想ワールドとは失礼ね、妄想ワールドは妄想ワールドでも中身はカイちゃん一色よ！！！！」

「どうでも良いよばーか！」

ベンチのお陰で距離がある、よってセツの派手なツッコミも冴える訳だ。普段はツッコんでる最中にウミの手が出るからな……にしてもあのブラコンどうにかならんのか、俺も其の嫌いがあるのは気付いてるがあの類とは違うと思う。

二人のやり取りに相変わらず苦笑をするけど、「だったら、」と少し口を挟んでみた。

「ウミが先に彼氏作れば？」

「私が？」

「お前が恋人と仲良くしてたら、カイト君も『嗚呼、恋愛って良いな』って思うかもしんないし」

親を見て育てば其の自我は直ぐに目覚めるだろうけど――うちの両親とかうちの両親とかうちの両親とか――、ウミん家は……まぁ、二人暮らしだしな。

俺の言葉に黙り込んだウミ、俺やセツの視線をものともせずキョロキョロと辺りを見渡せば、元の位置で首だけの運動を止めて深く深く溜息を付いた。

「――相手が居ないもの、無理」

判断早いな。

「お前、此処大学だぜ？　男なんて大量に居んだろ」

「そういうことじゃないわよお馬鹿、此れだからセツはセツなのよ」

「どういう意味だゴルァ」

セツの物言いもそうだが、何も言わず不思議そうに見遣る俺にも気付いたウミは、もう一度だけ溜息を付いてから言った。

「毎日のようにあなた達と一緒に居て、目も心も肥えちゃってるのよ私は」

「……肥える？」

「そうよ。――何処を取っても完璧なマヒルと、ちょっと馬鹿だけど外見は上の上のセツより素敵な御仁が居れば話は別だけれど？」

「「……」」

やれやれ、といった態度で首を振ったウミから外せば、見事にセツとかち合った俺の視線。どんな反応をするのかと苦笑混じりに見ていれば、何やらくそ真面目な顔をして「俺より上……紫とか……！？」とか呟きやがった。……多分髪の色のこと言ってるなセツ、嗚呼そうだあいつ馬鹿だった。

「という訳で、私の未来の旦那様探しは当分先になると思うわ。就職したら上司でもたぶらかすから大丈夫よ」

にっこりと笑みを浮かべたウミが全然大丈夫じゃない台詞をあっさり吐き出す。上司をたぶらかすのかよ、お前のたぶらかすは怖くて聞けないが。

「ま、今年はとにかく卒業出来るかが心配だ俺」

「未だ一年あるじゃない」

「うあー、頑張れ俺ー」

気付けば俺達も大学四年になるのか、単位に苦労はしてないから大丈夫だとは思うけどこいつ等は大丈夫なのだろうか。少し心配だから今度聞いてみよう。

けどまぁ、今は良いだろう。

広々とした芝生の見える此の場所で、そんな野暮な話しても意味が無いから、今はただのんびりと、二人の話に耳を傾けるだけで良いかと思う俺だった。

３１４＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ行きのバス内（前書き）

スキー研修編。

３１４＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ行きのバス内

暑いアサキです、いや、一言で言っただけだけども。
折角の月末ａｎｄ週末だというのに休めずに居る僕――否、僕等はただ今バス移動を行っています。
何せ――スキー研修らしいんで。

「――しぎしぎい、あれ何かなあ？」

「え、……ゆ、雪じゃないっすかね……？」

「そっかあ」

お前等何普通のこと言ってんだよそりゃ雪だよ。
登る山道の風景を見つつ、何やら馬鹿らしく普通の話をしている二人を見ることなく思った。寒い山道だからって暖房が効き過ぎるバス内は死ぬ程暑いけど、外に出たらリアルに凍死すると思われる。
前半のテンションでバス酔いした憐れなクラスメイトを一瞥――山道前に色んなもん食い過ぎなんだ――して、僕は黙々とゲームに勤しんだ。

「皆さん、そろそろ山荘の方に着きますので準備して下さい」

其れから間もなくして。

僕等の前の席のハヤサカ先生が立ち上がりそう言った、何時間乗っていたのかは知らないが飽きてきた頃だから丁度良い。ゲームの電源を落として外を見れば、フドウの言う通り外はすっかり雪景色となっていた。

「……寒そうだな」

「そりゃあ雪っすからねぇ、ボクすっごく楽しみっす！」

「何が？」

「え……す、スキー以外何かあるんすか……？」

「テナも楽しみだなあ、こう見えてスキー得意なんだよお。テナのカッコイイ姿ちゃんと見ててねえ？」

ドウモトに笑顔でそう言われ、フドウは元気良く了解をした。……正直スキーウェア着た人を見分けるのって難しいと思うんだが大丈夫なのかお前、僕は無責任なことは言えないので何も言わないでおく。

「でもなあ、修学旅行中ってあっ君やしぎしぎにあんまり会えないよねえ、お部屋に遊びに行っちゃいけないんでしょお？」

すっかり外にしか目が行かなくなった僕は、音だけでドウモトが背凭れに背を預けたのが分かった。

「そんなのつまんないよお、内緒で行ったりしちゃいけないのかなあ？」

「内緒も何もお前はとりあえず前の席が担任なことを察しろ」

ドウモトの場合正しくは斜め前だが。

「あ、いけない。先生聞いてましたあ？」

「ええ、しかと聞きましたが？」

自分の荷物を上から降ろしつつハヤサカ先生が首を捻る。聞いたから何だ的視線ありがとう先生。

「行くなとは言っておきますが、別に見つからなければ無いのと同じなのでは？　面倒なのでウタカタ先生以外には見つからないで下さい面倒なので」

「はあい先生、大好きい！」

「はいはい」

二回面倒って言った、そしてウタカタ先生には見つかって良いんだな、っていう正当なツッコミはしちゃいけないのか、多分駄目なんだろうが。子供嫌いとか豪語するだけあってあしらい方が適当過ぎる。けど担任になった四月当初より大分印象は変わったかもしれない、もっと真面目だと思ってた。

「じゃあ二人のお部屋に遊びに行こうっと！　ミノちゃんとかリョウコも誘おうかなあ？」

「……あ、でもボク達の部屋って――」

「知ってる知ってるう、はっ君も一緒だよねえ」

フドウがちらりと後ろを見る、――はっ君、というのは三人部屋の僕等のもう一人の奴で、今僕とフドウの後ろでがっつり寝てる奴のことを言う。僕はそんなに話したことない奴だが選択科目音楽のフドウと隣だったとか何とか、フドウとそれなりに仲が良かったから引き入れた。面倒に五月蠅い奴よりは適当かと思って。本名は……忘れたな。

「はっ君ならきっと大丈夫だよお、だってはっ君だもん！」

「そう……っすよね！　コガネイ君っすもんね！」

――そうだコガネイだ、はっ君の原形は忘れたが苗字分かれば其れで困んねぇからいいや。

コガネイだったら何なんだよって思う人も多いかと思うが、丁度バスが止まったことだし放っとくとしよう。

「はい、降りますよ皆さん。寝てる輩が居ましたらとっとと叩き起こすか、放っておいてそのまま送り返すのも可です」

「可なんだ其れ、じゃあコガネイ置いてくか」

「ええ！？　起こしてあげましょうよ！！　コガネイ君起きて下さいヒコク君に見捨てられますよ！！」

フドウが慌てて起こしているが僕は何も気にしない、のんびりと勝手に降りてったら「あなたは本当に良い性格をしていますね」ってハヤサカ先生に褒められました。……え？　褒められてないの？

シラナカッタナー。

とりあえず、とっとと部屋に行きたいなぁと思った僕だった。誰だ薄情とか言った奴。

315＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ白銀の世界

引き続いてアサキですが。
宿泊先に着いて直ぐにスキーって何なのしぬの？　ずっとバス移動で直接此処だからまぁ良いけれど、初日はゆっくりさせて下さい。っていう意見は通りませんね知ってます。
中学の時は何処かの馬鹿達の所為でスキーもろくに出来なかったっけ、まぁ一日目くらいは楽しんでやっても良いだろう。馬鹿共とは違うコースを選択した僕としては、生憎奴等と同コース同班になったフドウにエールを送っておいた。

「頑張れ」
「え、何がっすか？」

伝わらなかったけど、後々分かることだろうと僕は遠くを見ておいた。

「あっくーん！　もしかして六班？　わーい一緒一緒」
「ゼン君……もう少し上のコースに居るもんだと思ってた」

スキーウェアに身を包んだゼン君は見事僕を他と見分け駆け寄って来た――よく走れたな――。身形は（※強調）良いからスキーウェアも似合うゼン君に比べ、最早ゴーグルが邪魔な僕はどうしたらいいんだ。

ゼン君はそんな格好でもふっ、と格好付け――本人に他意は無い――、「ま、ゼン君スキーとか超得意だけどね」なんて言い腐る、畜生他意は無いとかフォロー入れなきゃ良かった滅茶苦茶になってこけろ貴様。

「得意なら上級行けば良いのに、フドウもその他馬鹿も上級コース行ったよ」

「うん、知ってるよ、でもだからこそ中級が良いんだよね」

僕の普通の指摘に苦笑をするゼン君だが、視線は何処か居心地悪そうに泳いでいた。うん？　一体どうしたというんだ、ゼン君時たまこんな目の泳ぎ方するけど解明したことないんだよな……。今回くらい解明してみようか、と若干ながら意気込んだ僕は重いスキー板を抱えながらのすのすとリフトへと向かった、スキー靴重いしぬ。

「あっ君、先にスキー板はめちゃいなよ、あっちまで行っちゃうと邪魔じゃない？」

「ん、もう少し歩いてから」

確かに人が多くなるとやりにくいけどだからって此処からだと進めない、僕のスキーの苦手さナメんなよ、斜面で曲がれないからな。

そんな僕の思いを他所にゼン君は一人すいーっと平面を滑っている、畜生マジで得意なんじゃねぇかこいつ何なん。

「ゼン君先行けば？　今リフト空いてるけ――」

「だが断る」

早い、食い気味だ。

「此の俺があっ君を置いて先に行ける訳無いでしょ！」

「いや、置いてって下さい、全然良いんで置いてって下さい」

上手い人の横とか居辛いんで置いてってくれて構わないんだけど、ゼン君は梃子でも動かない――いや、すいすい滑ってんだけどね――みたいなので仕方なく一緒に行くことにした。

「――で、ゼン君、何で上級行かないの」

「え？」

リフトに乗っている間は暇なので、そんな話をしてみることにする、早めに謎を解明したい年頃である。

ゼン君は一瞬キョトンとして、でも言うべきか否かを迷っているような表情をしてから「ええとね、」ともう一度苦笑する。

「――上級ってさ、このリフトよりもっとたっかいとこ行くと思わない？」

「……まぁ、思うけど」

僕等が乗ってるリフトとは別に、奥にもうひとつあるリフトは最早先が見えないくらいの高さまで登っていくようであった。あんな高いところ行ったら寒そうだから行きたくないけど、……何だゼン君、寒がりか？

とか何とか考えてたら、下を滑る我が校のスキーウェアの中に見知った影を発見――見知った、と言っても最早ゼッケン番号で判断しているんだけれど――。

「あいつ等もう滑ってら、」

「あいつ等？　シギ達？」

「うん、其処」

「ごめん見えない」

「……？　其処だけ――……ゼン君？」

スキーのストックでそっちを差すけど見えないって言われた、別に見えない距離ではないと思うんだけど。っていうか軽く視力0.5は切ってるであろう僕で見えるんだから『ゼン君両目2．0～』って自慢してた君なら見えるのでは、そう思ってゼン君を見たら、――見えない所か先ず、下を見てなかった。

「うん、えっと、……分かった？」

「……分かった、よく分かった。此のリフトの高さで駄目な人が、上級になんて行ける訳も無いよね」

何だよゼン君、――高い所、駄目だったのね。

「ヒャッホおおおおおウ！！」

「うわわわわわ止まれないやあははははは」

「ちょ、ちょっとロクジョー君にヒコク君のお兄さん！？　何処行くんすか二人共ー！！！！！」

リフレイン気味に響く其の声等々が、リフトに乗ってる僕等に届いてなかったことに後で安堵するんだけれど其れはまぁ所詮は後の話だから僕は気にしない。

316＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ各々の部屋内

とことんアサキです。

「ようフドウ、どうだったよ」

「こ、こんなに疲れたスキーは生まれて初めてっす……」

高所恐怖症を隣に抱えていたけれど其れは流石にゼン君、全然大変じゃあ無かった。確かに隣で『リフトたっかい、死ぬ、俺死ぬ』とか言ってたけど言ってただけだし、ゼン君の場合余裕無い方がまともだから其れは其れで良いと思う。

やっとのことで一日目の研修が終わり自室に戻る途中、くったくた気味のフドウに会って声を掛けたら、思った以上の反応に内心のみで苦笑した。

「小さい時からずっと来てるっすけど、あんなにハードなスキーヤーを初めて見たっす」

「……主にどのような？」

「――凄い速度で直滑降、そしてそのままこけて跳ねてました」

跳ねてたのか、……要するに身体を地面に打ち付けたりしてたんだろう、あいつ等怪我とかしてないのか。……してないんだろうな。

「後二日間、頑張れよ」

「ふぁいっす」

全然頑張れそうにねぇなこいつ。

「――あ、シギ、ヒコク、お帰りー」

と、部屋の前にスキー靴等々置いてたら、部屋からひょっこり顔を出したのは例のコガネイだった。例の、は大袈裟かもしれないけどあまり関わりない奴だったから仕方ないことだと思う。

「あ、もう帰ってたんすねコガネイ君、ただいまっす！」

「俺は早めに戻ってきてたよー、何せ眠くってさー」

「お前朝も寝てなかったか……？」

「いやんヒコクくーん、そんなこと言わないでー」

コガネイ……ええと、相変わらず名前は出てこないんだけど、最近見た限りじゃあ何か……脱力系？　ボケかましてんのに笑顔が絶えないっていうアスカ君とかユキとは何か違う笑顔キャラな気が――嗚呼、キャラとか言っちゃ駄目？

廊下でぐだぐだ喋ってるのもアレだし部屋に入ることにした、結構広い部屋なんだけれど人数の関係でまさかの三人部屋、どんだけ贅沢なんだよ。

「やっぱりボク達の部屋って広いっすよね……」

「まぁ隣の部屋は七人で同じ部屋の大きさらしいしねー、俺達ラッキーだったんじゃない？」

「集団で泊まるとか無い馬鹿なんじゃないの……出来るだけ人数が少ない方が良いに決まってる……」

「「……」」

僕の発言に二人が黙った、良いじゃない、少人数の方が良いじゃない。

「とっ、とりあえずそろそろご飯っすよね！　今まで皆で集まって食べたりしてたから、ご飯が部屋まで運ばれてくるなんて夢みたいじゃないすか？」

仕切り直しとでも言うようにそう言い出したのはフドウ、きらきらした視線を僕とコガネイに交互に向けている。しかしスキーで疲れた僕としてはもう疲れて何もしたくないので一人でテレビでも見ようと思った。

「そうだよねー、皆で集まるのって正直面倒臭いから、部屋に飯が来るって凄いよねー」

「というか夕ご飯何っすかね？」

「美味しいものなら何だって良いやー」

「あははっ！　コガネイ君らしいっすね！」

僕がテレビを見始めたのも気にせずフドウとコガネイが話し出した。元々コガネイはクラスでも目立つってタイプじゃない――僕も人のこと言えた立場では無いと思ってるけど――、でも目立たないって訳でも無くてこう……クラスでも色んな人と話してて集団に固執してない感じの……あれなんだよ。もう説明面倒だけどとにかく、飄々とふらっふらしてるから今此処に居る訳だが、フドウとは何か波長が合うらしい。

「ねぇねぇヒコクヒコクー、ヒコクって好き嫌いとかあるのー？」

っていうかこいつは、ただただ人懐っこい人間なんだろうな、此の僕にも遠慮が無い。背を向けてテレビに向かい始めた僕の顔を見るべくなのか、ごろんとひっくり返って僕を下から覗き込んできやがった。

「……何の？」

「勿論食べ物のだよー」

「……食えないもんは無いけど、自ら食いたいと思わないものはある」

「あ、そういうタイプかー。シギは魚が嫌いなんだってー、餓鬼だよねー」

「え、ちょっ、良いじゃないすか！　嫌いって言っても食べれない

訳じゃないんすから！！　――確かに食べれないものはあるすけど。……ってそういうコガネイ君は何か無いんすか！？」

「えっへへー、俺実は結構好き嫌いあるんだよねー。だからもし嫌いなのあったら二人にあげるー」

其れはあげるでは無く押し付けるの間違いでは無いだろうか、まぁ面倒だから言わないけど。家の食事とか全部ユウヤに任せっきりだし、僕は文句言える立場じゃないから――っていうか何か言うのも面倒だから何でも食うけども、人間だから苦手だってあるのは確かだ。食べてやらんこともないけどあまり食える方じゃない、ので……フドウに押し付けようそうしよう。

やほーいユウヤだよっ！　修学旅行テンション上がり過ぎたうはーい！

「部屋に戻っても此のハイテンションが抑えきれないどうしよう！！！！」

「抑える必要なんて無いんじゃね？　何せ此の俺様の実にハイテンションだ！！」

「はは、二人共元気ー」

だよね！　抑える必要なんて無いよね！

俺と同テンションのカイト君を見遣りつつ、テレビに目を向けるゼン君のテンションの低さに苦笑した。どんだけだいゼン君、スキーで何かあったのかな？

ちなみに同室の方がもう二人くらい居るけど今は外出中です、そろそろご飯なのに何だってんだい！　皆もテンションが最高潮だからかしら。

「おいおいおいどうしたいゼン！　テレビでアニメなんか見始めてんじゃねぇよ！　今はスキー研修中だぜ！」

「スキーだからってのもあるよねぇ、今までの日課のリズムが壊れるのはこういう研修の所為だとゼン君は思うんだ」

「何か一人超冷静なんですけど！」

「カイ君とゆっ君が元気過ぎんでね？　明日も其の調子なんならシギが疲労満杯っぽくなりそうだよね」

上級行かなくて良かったなぁ、としみじみ漏らすゼン君は良いけど、確かにシギ君、俺達のハイペースに着いて来れてなかったよなー。後二日大丈夫かい、……まぁきっと大丈夫だよね☆（※プラス思考）

「まぁ明日にもシギなら慣れんだろ？　さぁさぁ飯飯！」

手を叩いてカイト君が言う、おっ、ご飯来たー。
さーて、明日もあるし美味しいご飯食べて寝よーっと！

317＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ女子会

――リョウコ、です。

「一」

「……に」

「さあん！」

「四」

「……ご」

「「ダウト（お）」」

「え、ちょ、何でバレるの！？」

夕飯も食べたしお風呂も入って後やることと言えば寝るだけなんだけど、未だ消灯まで時間あるし――って訳なのかテナが遊びに来たわ。トランプやってるのは良いけどなかなか勝てない……！

「リョウコは分かりやすい」

「そうそう、リョウコってば嘘付けない体質だよねえ？」

うっ、た、確かにそうかもしれないけど……ミノルはポーカーフェイス過ぎるし、テナはずっと楽しそうだし分からないのよ！　ず

るくないかしら此れ！
私は溜まったトランプをがさがさと手元に寄せて、一人溜息を付いた。

「あーもうやめやめ、私の負けが目に見えてるのにやる意味が分からないわ」

「ええ、テナはすっごく楽しいけどお」

「私もだ、友達と遅くまでトランプ……凄く身に沁みる……」

「アンタ達……」

勝つ人は楽しいでしょうよ、えぇ。キョトン顔の二人からトランプを奪い取って、まとめてから床に置く。……こういう時間って何をすればいいのか分からないのよね……。別に友達と一緒に居る訳だから楽しくない訳じゃないんだけど、だらだらと話すのは何時だって出来るんだから今出来ることをしたいじゃない？　折角の友達との泊まりなんだしさ。

「ああ、そーうだっ！　ねえねえリョウコっ、ミノちゃんっ、テナからの提あーん！」

「？」

「ん、何？」

普段は化粧ばっちりのテナはお風呂上がりということですっぴん

だけど、あまり何時もと変わらないって言ったら怒るかしら。充分に可愛いテナがばっと立ち上がって普段通りきゃらきゃらと笑った。

「三人でえ、下の階に遊びに行こうよお！」

――はい？

……いけないいけない、私ったら数秒間何処かに飛んで行ってしまった。ええと、……下の階？

下の階――男子の宿泊階……？

「うむ、其れは楽しそうだな」

「でしょお？　朝のバスで遊びに行くよお、ってテナあー君としぎしぎに言って来たのお」

「おいこらテナ！！　な、な、何言ってんの！？　よ、良い歳の男女がこんな時間に会うだなんて……！」

「リョウコ、リョウコ、歳が何十歳も老けて見えるぞ」

「ば、馬鹿言うんじゃないわよ！　私はぴちぴちの十六歳なんだから！！」

「リョウコ、表現も古い」

何とでも言いなさいよ！　でも下の階だなんてそんな……は、破廉恥な！！（※一時的に古めかしい言語でお送りしています）

「絶対駄目よ！　そんな、ば、バレたりしたら一晩中ロビーで正座よ！？」

「ハヤサカ先生があ、そういうのは先生達にバレないようにやれえって」

ちょっ、ハヤサカ先生何言っちゃってるのよ！！！！

「だから消灯後にれっつらごう☆　みたいなあ？」

「おお、消灯後とは実にスリリングだ、一度やってみたかった」

「やらなくていいのよミノル！！　珍しく目がキラッキラじゃない！？」

嗚呼もう駄目、此の子の目は既に真新しい経験に向いてるわ……。確かに消灯後ならバレないかもしれないけど……またひとつ問題があるのを私知ってるんだけど。

「ねぇ、テナ」

「なあにい？」

「消灯後に、男子達が起きてるのかしら？」

「だって友達とお泊りだよお、普通起きて――」

「十一時」

「……ふえ？」

「ヒコクアサキとヒコクユウヤの通常睡眠時刻」

「ええ！？　今時小学生だってもっと起きてるよお！！」

あの双子が普通な訳無いじゃない、兄なら未だしも弟なんて部活の時間から寝てるわよ。

自分で言っておいて何だけれど、世知辛い世の摂理に私は黄昏れておいた。

「そんなのおかしいよお！　お泊りだよ！？　あー君だけなら未だしもゆー君も寝ちゃうのお！？　ねえミノちゃんっ、おかしいよねえ！？」

「健康的だな」

「ミノちゃあん！！！！」

ミノルに聞いただけ無駄だったわね。

「まぁとにかく、行くにしてももうちょっと早い時間にした方が良いんじゃない？　夕飯終わりとかね」

「はあい、じゃあ明日行くう」

少し落ち込みながらも素直なテナにほっと落ち着く私、……でも思ってみればアレよね、ただ友達のところに行くだけなんだからこんな意固地にならなくても良かったのよね。……はあ、私って実際

くそ真面目ってやつだものね……。

「って訳でテナ、明日もあるんだから今日は大人しく寝なさいね」

「はあいっ、じゃあ部屋に戻るねえ。お休み！　リョウコ、ミノちゃん！」

「嗚呼、お休み」

「お休みなさい」

テナって本物良い子よねぇ……、何処かのおばさん臭くそう呟いたら、ミノルが苦笑気味に近所のおばさんみたいだな、なんて言った。

悪かったわね、おばさんで。

318＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ兄の部屋

おはようございます、ユウヤです。
今の時間は朝の五時、起床時間まで未だざっと一時間弱あるってところかな？

「……」

「……」

「……？」

たった今起きた俺はぼうっとしたまま両隣の二人を見る、ええと、正確なことを言うと二人が何かしてる物音で起きたんだけど……え？

「……ね、二人共？」

「あり、おはよゆっ君、未だ寝る時間あるわよ」

「うん、それはそうなんだけど、そのー、――二人がかちかちかち五月蠅い感じでして」

金髪とは呼んでるけど其処まできんきらではないゼン君の髪が風呂上がりにはずっとぺたーってしてて面白かったんだけど、今はなんか何時も通り未満ではあるけど相変わらず元気である。そんなゼン君が笑顔を向けてくれるんだけど、其の、カイト君と二人でゲー

ムをやってるんだか何なんだか知らないけど――凄いコマンド入力音がするゲームを早朝からやらないで下さいますか？

「何だよユウヤ、お前そんな繊細な神経の持ち主だったんかよ。アサキを見習え、誰が何をしてても自分に関係無い時は延々と惰眠を貪る――」

ふっ、と幸薄い笑みを浮かべたカイト君、っていうかあれは最早取得スキルなんだから別！　アサ君は呼べば起きるけど其れ以外は五月蝿くても寝てられるってスキル所持してんだから。

「というかお二人さん、……何時からゲームしてんの……？」

「「二時」」

「寝ろし」

っていうか二時って俺が寝た時間じゃん！　何二人共、一睡もしてないの！？　ついツッコミを入れたけど二人は気にすることなくゲームを続けていた、……畜生目が覚めちまった。

ちなみに同室のクラスメイトは隣の洋室で寝ているぞ☆　俺達は俗に言う川の字、まぁ横二人布団の上で座り込んでますがね。布団も寝る目的で使われないなんてなんと憐れ。

――こん、

「ん、」

目が覚めたし仕方ないから俺もゲームしようかな、とか考えてたら、何処かから控えめな物音がした。ええと？　ああんもうかちかち五月蝿くて何処からだったか分からなかった。

「どうかしたか？」

視線はくれないけどキョロキョロする俺にそう言うカイト君。何か聞こえなかった？　そう聞いても案の定其の微かな音は俺にしか聞こえていなかった様子。

「……んー」

「ゆっ君、多分今のノック音」

まさかポルターガイストか！？　と考えたと同時にゼン君が襖の先を親指で指差した、危ねぇ自分で言っておいて怖い思いするところだった……！

其れはまぁ良いとして。此の時間にノック音？　一体誰だろうか、先生の確率がかなり高いとは思うんだけど、もしや早朝の巡回……？　のそのそと布団から這い出て仕方なしに扉に向かう、……ああもう、靴邪魔だなぁ。

ガチャ

「遅ぇ」

「え？　何故？」

つい一声目でそんなことを言ってしまった、いやだって――

「どしたのアサ君」

――朝方にアサ君が起きてることが稀過ぎて。

「え、あっ君？」

「は？　アサキ？」

襖開けっぱだった為に聞こえた俺の声を辿り二人も言う、さっきまでゲーム画面に釘付けだった視線だって上がって来ちゃったよ。

「……入る」

「あ、うん、入りな入りな、ていうかジャージ一枚で出て来たら風邪引いちゃうでしょうが」

此の時間に起きてると言えど目が完全に死んでるところを見れば、寝たいのに寝ていないのは百も承知。しかも何処から見ても苛々してる訳で、あまり刺激しないように声を掛けようとしたら何か刺激してしまった。でも最早そんなのどうでも良いのか弟は、俺が音をさせず扉を閉めている内に俺自身の布団の上でくたばってしまった。

「おーい、アサキー」

「もうあの二人、どうにかしてくれ」

「あの二人って……シギとはっ君？」

ゼン君の問いに無言の肯定を見せるアサ君、……何だあの二人、眠りに貪欲なアサ君を寝かせないなんて何したんだおい。

「え、じゃあアサ君、もしかして寝てないの……？」

「寝、……た、累計一時間くらい」

累計ってなんだ、小刻みにってことか。

「無理、このままあの部屋居たらフドウを言葉だけで戦闘不能に出来る自信が……」

「やめたげて、あの子繊細だから暫く立ち直れないやめたげて」

しかし自分が戦闘不能気味だよアサキ。

というか真面目にどうしたんだろう、ハク君は良いとしてもシギ君がアサ君の機嫌を損ねるようなことをするとは思えないんだけど。

「アサキ大丈夫？　明日――実質今日スキーやるんだけ――」

「無理」

「ちょっ、あっ君居ないと俺無理よ」

「何でゼンが無理なんだ？」

「リフトが普通に怖い高所恐怖症ナメんなよ」

「ま、ゼンが無理とかはどうでも良いが、アサキ、お前こっちで寝てろい」

ゼン君が無駄にキメ顔で弱点を言ってるのはスルー気味に、カイト君は立ち上がってアサ君にそう言う。――動く気配が見当たらなかったので仕方なく転がしたけど別に良いよね。

「はい、あったくしてー、風邪引いちゃうよー」

「おい其処のおかん、アサキ埋まっとる」

埋まるくらいが丁度良いんだい、どうせ使わない掛け布団をアサ君に掛け。

ナチュラルにゲームに戻った二人も居ることだし、俺もやっぱりゲームでもしようか、と思った。アサ君はどうせもう寝てるし、某国民的アニメのあやとりが得意な人と比べてもきっと勝てるよ。

だけどやっぱり気になる、一体何があったんだよ、アサキの部屋。

319＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ白銀の世界2

おっはよん、ゼン君だよ。
スキー研修二日目って午前も午後もスキーするんだけどさ、俺からしてみればもう地獄の何物でも無い訳よ。いや、別にスキーが嫌いだって言ってる訳じゃないんだよ？　運動好きだしね。でもスキーする為には標高高いところ行かなきゃで、今こうやって下から眺めてるだけで高いのもろ分かりの場所までリフトで上がるんでしょう？
うっわあ何其れゼン君に死ねって言うのね、昨日頑張ったんだから一日くらい時間空けてくれたって良いと思わない？　――とか、言ったって誰も聞いてくれないから言わないんだけど。

「で、あっ君」

「ん」

「……起きてる？」

「ん」

さっきから一言どころか一文字の返事しか返ってこないんだよなぁ、未だ滑ってもないのにゴーグルしてるあっ君もしかして寝てるんじゃないかな。
俺が苦笑宛らにあっ君を見てたら、意外にも「ちょっと寝たから大丈夫、つかフドウを締め上げたい」と普通の返事……普通？　普通……うん、普通の返事が返って来た、シギ悪い。

「スキーなんてやって何が楽しいんだろ、つーかスキーを研修して将来何に役立てろってんだ皆が皆スキーのインストラクターにでもなれってか」

眠いあっ君は意外と饒舌である。

「一年に一回行けば良い方、というか僕なんか学校行事でしかスキーしないし、毎年毎年スキーなんか行き腐る奴の気が知れない」

ごめんあっ君、横に居る。シギん家の家族とよく一緒にスキー来るんだけど今は言わないでおこうと思った。

其の後もつらつらとあっ君は色々なことにツッコミを入れ続けた、もう眠過ぎて頭ん中逆に悠長にフル回転してんだろうなぁ、後半来るともうスキー関係ない話になってたけどゼン君的に面白いから良いかなと思った。

「英語で遊んでられるのは本当小学生までだよね、中学になったら遊んでたら欠点喰らって死亡――」

『六班ー、此方に集まって下さーい』

あっ君の話が某教育英語テレビの話になってから直ぐ、俺達の班に声が掛かった。ぶっちゃけ拡声器なんか使わなくても聞こえる気がしたけど、インストラクターの人とかってよくああいうの使ってるよねっていう。横のあっ君だって「アレ五月蝿ぇから壊れねぇかな」とか言ってるもの、俺だけがそう思ってる訳じゃないんだよ。

カイリだ、今から凄い唐突なことを言うと、ユウヤが居なくなったんだがどういう。

「シギー、お前ユウヤ何処行ったか知ってるか？」

「ふぇ？　お兄さん？　ロクジョー君とリフト乗ったじゃないすか」

いや、俺もそうは思ったんだが。

上級クラスだからって結構飛ばし気味に滑りまくってたら他の奴等の体力が保たなくて、今ちょっとだけ休憩中ってとこ。リフトで登って来た此処で休憩してんだが、俺がスキー板外しーの板が滑ってったの慌てて捕まえに行きーの――してたらユウヤが消えた。

「……ま、ユウヤだから大丈夫だろ」

「……其れって大丈夫なんすか？」

「おま、……ユウヤがどうにかなる訳が無ぇだろ……！？」

「そんな常識無いみたいな目で見ないで下さい！　え、其れ常識なんすか！？」

ほぼ常識だろうが、シギったら駄目だなー。

――と、そうそう、俺もそうだがシギも全く疲れてないようだから暇だし朝のことについて聞いてみよう。

「んで、お前部屋で何やらかしたんだ？」

「はい？」

何故其処でキョトンとした。少しも耳覚え無ぇのか。

「朝方にキレ気味のヒコクアサキ君がうちの部屋に流れてきたんですが？」

「……嗚呼！」

今気付いたと言わんばかりに目が輝いたシギ、……本当怒られても知らねぇぞ俺様。

しかし気付いたとなれば流石はシギ、おろおろとわたわたとばたばたと――ばたばたと？　あ、こけた。

「うわっぷ、雪が口に入ったっす！　うああ服にも入った冷たっ！！」

「見事な慌てっぷり過ぎて全俺が吹いた」

「真顔じゃないっすか！」

頭から思いっきり雪に突っ込みやがった、ははっ、ざまあ。

「で？　何仕出かしたんだよ、ほれ」

「え、あ、ありがとうございます。ええと、別に何かをしたって訳じゃないんすけど……」

差し出した俺の手を借りて立ち上がったシギが若干目を泳がしながら雪を軽く掃う。ええと、だのあのー、だの数回吃ってから苦笑したシギは、「すっごいくだらないんすけど……」なんて前置きをして頬を掻いた。

「――電気なんすよ」

「……は？」

「電気って？」

「えっとねー、俺って夜真っ暗じゃないと寝れない派でさー」

ユウヤでっす、皆が休憩だっていうから俺も休憩しようとしたんだけど、――そのまま坂から落下しました、皆何処。辺りが吹雪いてきてて最早何も見えないし、仕方ないからたまたま会ったハク君に明け方の話を聞いてみた。

「そんで、シギは逆に暗いと寝れないらしくってー、じゃあどうしようかって話してたんだけど話してる内に話題がズレちゃってさー、結局二時くらいまで違う話してたんだけど其処ら辺で俺とシギが取っ組み合い始めてヒコク起こしちゃってー」

何故人の弟が寝てる横で取っ組み合いを始めたんだろうか、「あ、別に喧嘩じゃないよ？　ちなみに話し合いを始めたのも一時くらいからだしね、」って続けられたけど喧嘩じゃなくとも何故取っ組み合ったんだい。

「シギが瞬時に土下座したらヒコクも怒らなかったんだけどー、」

瞬時に土下座ってシギ君……。

「ヒコクが寝たのって俺達が話し合い始めてからだったから事情知ってたし、どっちでも良いから早く寝ろって言ってまた寝たんだけどねー」

「……え、じゃあ何でアサ君キレ気味にこっちの部屋来たのよ」

また寝たんなら良いじゃない、相当な五月蠅さでなければ其の後話してようがしまいがアサ君なら寝れるはずなんだけど……？　不思議そうな俺の顔とは対称的にハク君はへろんと特徴あるのほほん顔で首を傾げ、ただ一言、俺を納得させる一言を呟いた。

「ヒコクが部屋を出るまで其れが十五分毎くらいでエンドレスだっ

たんだー」

――嗚呼、そりゃ参るって。

319＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ白銀の世界2（後書き）

計十回以上叩き起こし騒ぎ続けた二人にガチ切れしなかったアサキの凄さ。

320＊閑話＋そして入る中途半端なこれ。

「だからさ、話数とか計算して途中で入らないようにすれば？」

「イベント前に閑話終わらせるとかさぁ」

そんな計算が出来てたら誰も苦労しねぇよばーか！！

――という訳でスキーの途中にお久し振りですアザイですかっこ良い笑顔。ぶっちゃけ自分が受験終わって家庭研修期間入っちゃってスキーの話書きそびれるところだったってのは此処だけの秘密です。

「アサ君家庭研修って？」

「ニートだニート」

おう其処、喧嘩なら買うぞ。誰がニートだ、こうやって定期更新で小説書いてるんだから良いじゃない！　……た、確かに毎日エンジョイしてバイトとかしてませんけども……！！　僕はそんな自分のことを学生ニートと呼んでいます。鳴呼、でも別にニートって訳じゃないですけどね、ＮＥＥＴは「Ｎｏｔ　ｉｎ　Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ，　Ｅｍｐｌｏｙｍｅｎｔ　ｏｒ　Ｔｒａｉｎｉｎｇ」の略ですし、自分ちゃんと勉強してますし！

「あーあー英語聞こえない」

「アサ君どんだけ苦手なの。人のこと全ッ然言えないけどね」

ちなみに自分も英語はどうも苦手です、学校の勉強数学だけだったら良いのにね！

「カイトに其れ言ったら死にそうだな」

「カイト君数学破滅的だもんねー、まぁこれも人のこと言えないけどね」

はいはい、そんな無駄話はさておき。
今回も登場人物紹介はお休みです、理由は作者が怠いから、何て自由なんでしょう。

「お前が言うな」

何時になったらユキのターン来るんだか自分でも分からないけどべっつに良いーじゃーん！

そしてそんなことはさておき、前回の閑話でお伝えしたキャラの人気調査について少しだけ報告させて頂きます。
数人の方にご協力頂いて分かったことが一つ――何か、綺麗に人気キャラってバラけてた。

「「は？」」

いやぁね、コメント残してくれた人のを見ると皆様が皆様あいつが良いこいつが良いと言って下さったけど、アサキ除いたら綺麗にバッラバラで。

「僕？」

うん、選択だけしてくれた人もほぼアサキだったしね、良かったな主人公。

「俺は？」

ドンマイ。

「え、これはいじけろと……？」

まぁ、作者がアサキ書きやすいから贔屓してるのもあるんだけどさー。

でもちゃんとユウヤが好きだよーって言ってくれた人も居るんだから、その人の為に元気に生きろ、元気な君に票をくれた訳だし。

「ふぁーい」

あとは何か、最近出てこないユキとかアスカとかが好きだって言ってくれる人が多くてどうにかして出そうかな、と思ったり。そしてびっくりしたことに伏兵がユズ君。

「ユズ君？」

「モモちゃんの弟君だっけ？」

……嗚呼、お前等接点無いのか、名前しか知らない感じでしょう。

本当はユウヤは会ってるんだけど。

「ええ！？　ちょっ、ええ！？」

でもこれは裏話なので本編で何時か会って下さい、その内会わすか

ら。そして今思い出したけど今日バレンタインだったしユズ君出すチャンスだったよなぁ……、と今更後悔。まぁスキーで暫く時間潰します、冬休みまで引っ張ってやる。

「やることないからっていうのはまた秘密な訳ですね！」

ええ、その通りですユウヤ君。

さて、今回の閑話もこの辺で失礼、今回双子がサボり過ぎましたね。嗚呼、これはどうでも良いお話なのですがアザイの名前変えました、アザイは浅井ですが、礼螺から哉、サイと名乗りますので呼び名の参考までに一言場をお借りして。

「別にサボってない」

「そうだそうだ！」

はいはい黙ろうかお前等。
そんでは今度こそこの辺で！　また二十話後にお会いしましょう！

「ばーいばーい！　……アザイさん」

自分じゃなくて皆さんに言いなさい。以上。

1987

321＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ昼休憩

ユウヤでっす！　結局あの後班の皆と合流出来たのは昼ご飯ギリギリでした！　一人孤独にフリー滑走、……ふっ、――結構楽しかった。

「――という訳で、今後ははぐれたりしないようにして下さいね」

「はーい、すみませんでしたー」

視界が良好じゃなかった所為もあったから仕方無いが、と前置きを入れながらもそれなりにハヤサカ先生から注意を受けた。こう先生から説教されてると中学を思い出すなぁ、あの時はカイト君も一緒だったけど。先生達元気かなぁ？　何か久し振りに会いたくなってきた、今度会いに行こうかな。

「全然すみません感が漂って来ないので昼食抜きにしてやっても良いんですけど」

「すみませんでした！！！！　もう二度とはぐれたりしません！！！！」

とか他のこと考えていたのがバレたっぽい、先生が通常テンションでそう言うから全力で謝った。

「ようユウヤ、お疲れ」

「お疲れ様です！　あ、カレー持って来ておきました」

「うん！　ありがとーシギ君！」

スキーウェアのまま皆で集まって班ごとに昼食のカレーを食べている、其の自分の班のところに来れば既に一皿食べ終えておかわりしに行こうとしてたカイト君と其れを見て苦笑するシギ君が居た。俺のも運んでくれてたのか、ありがたや。

「ハヤサカ先生の説教はどうでしたか？」

「まぁ、実に義務的な説教だったよ」

実に教師らしいというか、表情は全く怒ってなかったから多分説教というよりただの諸注意って感じかな？　シギ君はそんな俺の言い草に苦笑したけど、俺からしたら説教なんて受け慣れ過ぎてどうとも……。

「ユウヤは説教慣れしてるもんな」

そしてそんな俺の心境を最も良く知っているであろうカイト君が山盛りカレーと共に席に戻ってきた。相変わらず食うなぁと思うけど俺も食いたいから早く食おう。

「そういうカイト君だって慣れてるでしょうが」

「はっはっは、俺様最強説」

「そういう方面で最強なのはどうなんでしょう……」

シギ君の正論は綺麗に流す俺達。

「中学ん時雪合戦本気になり過ぎてアサキに怒られたよな」

「あー、あったあった、俺次の日風邪引いた」

「俺も風邪引いた」

「何で怒られる程本気でやってるんすか……！」

「あとはそうだな、テストの点が低過ぎて怒られた……此れもアサキに」

「教えたのに出来ないってどゆこと？　って良い笑顔で言われたっけ……」

「お二人共！　ヒコク君を怒らせ過ぎっすよ！！」

「他にも何度もあるよなぁ、俺なんて中学からの付き合いだけど数え切れねぇくらいあるぜ！」

「全然自慢にならないですって！！」

よく考えると確かに俺達アサ君を怒らせることばっかりしてる気

がする。シギ君が健気にツッコミを入れるけれど、カイト君はどうしたって笑い飛ばすだけだった。アサキの友達だって言って仲良くなったけどそうだよね、俺達色々やらかしてきたけど、やらかす度懲りずにアサ君怒ってくれたっけ――ほぼ呆れてたけど――。そして俺達も懲りずに何かをやらかす、と。

　怒ってくれる人が居る内が花とか言うけど、怒ってくれるのが弟っていうのもアレだよね、っていうか弟怒らす兄ってどうよ。

「怒らすと言えば思い出すのはサックラせんせーだよな」

「嗚呼、サクライ先生ね」

　俺なんて担任でもないのにメッチャ怒られたっけ、いや、あの人の場合怒るっていうかそれこそ説教っていうか。でもあの人先生らしくなさ過ぎるのがいけないんだよ、どんだけフランクだったんだよ。……でも、新任っていうのもあったんだろうけど、サクライ先生にはあのままで居て欲しいな、アヤメ先生もだけど、あの二人は先生らしくない先生の典型だったし。単純にあのまま、生徒想い、というか何と言うか、ともかく……あのままで。

　っていうかそう思うと、ハヤサカ先生も新任なんだよね？　何かしっかりしてる真面目な先生な所為かよく忘れるけど、先生にもそのままで居て欲しいかなぁ、勿論ホノちゃんにも何時までもほのぼのしてて欲しいけどね！

「――たまには会いに行ってやるか、中学」

「だねっ！」

カイト君がスプーンを加えたままそう言ったから、俺は元気良く頷いておいた。

研修終わったら早速行ってやろう、アサ君もきっと着いて来てくれるだろうから、アスカとかユキちゃんにも声掛けてみようって、何だか楽しくなった。

322＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ弟の部屋

「あー、疲れたっす！」

「の割に元気だよなお前」

引き続いてユウヤです！　研修を終えてのんびり皆でフリー滑走！　俺の場合午前中もほぼフリーだったから全体的にフリーな一日だった。楽しかったなー！！

にこにこと楽しそうに笑みを零しながら疲れたなんて言うシギ君に苦笑するカイト君の横を歩く俺、ただ今の俺達は部屋に戻る最中で、ついでに言えばこのままシギ君の部屋に飯まで雪崩れ込む気でいる、アサ君の様子も気になるし。スキーウェア着たままってどうなのよ、とは思うけどどうせ一時間もしない内に飯だし、そのまま行って戻ってから着替えたって別に大丈夫だよねー。

「あ、シギお帰りー、そして皆さんもどーぞどーぞ」

「ただいまっす！」

「おっじゃまっしまーっす」

「おっじゃまー」

笑顔で迎えてくれたハク君に遠慮なく部屋に入り込めば、其処に見知った金髪が此方も笑顔でやっほー、なんて言った。

「あり、ゼンもこっち来てたん？」

「うん、だってフリーやらないで帰って来たって誰も居ないで暇じゃん」

其れは確かに。俺達の部屋の人って皆わいわいがやがや滑ってる人等ばかりだろうし、折角のスキー研修に部屋一人程侘しいものは無いよ。

「だからはっ君と話してたんだよ」

「俺も丁度暇だったからさー、ワタヌキの話って聞いてるだけで面白いなー」

「あっはっは其れは良かった」

ゼン君がはっ君相手にどんな話をしたのかはとても気になるところではあるけれど今はとりあえず良いや、――何よりもっと気になるものが真横にあるもので。

「ねぇゼン君にはっ君、――うちの弟何時から寝てるの……？」

朝に畳むはずの布団の中でふっつーに寝てる弟がさっきから目に入って離せないんだが……？

二人は別に疑問に思うでもなくふとアサ君に視線を置いて、二人で目を合わせてから、

「最初から、だよな？」

「うん、そだねー」

と、答えた。

……此の子にとって、スキーって本当意味を成さないんだなぁ、と、お兄ちゃんは思いましたよ、ええ。

「ところでさー、」

俺やシギ君が部屋に落ち着いて、カイト君が一人テレビに夢中になった頃。

「シギって何でヒコクとか俺とか、皆のこと苗字呼びなんだー？」

はっ君がそんな些細な疑問をぶつけた。

「……ボクっすか？」

当の本人はスキーウェアを着替え終わり、此処に来るまでに買ったアイスに夢中だった所為からキョトン顔だが。

「シギって仲良い人でも苗字呼びだよなーってさっき思ってさー」

「え、ま、まぁ、そうっすけど」

「ていうかシギの場合仲良い人でも敬語染みてるからな」

俺にもこんななんだから仕方なくない？　と幼馴染ゼン君が言えばはっ君は若干納得したように頷いた。

「俺のことだって適当に呼んじゃって良いのにーって言ったんだけどさー」

「て、適当って言いますと？」

「ほら、此の人達そんな話した覚えないのに勝手にはっ君とか其れこそハク君とかハクとか勝手に呼んでるじゃん」

此の人達――ゼン君と俺とカイト君のことを差してそう言えば、「ヒコクだって俺のこと呼び捨てるじゃん？　一番話してたシギが一番遠いって面白いなーって思ったんだよー」と其処まで言って何故か楽しそうに笑った。

「でもそうだよね、シギに一番近い俺ですら『ゼン君』だしねぇ」

「俺なんて『ヒコク君のお兄さん』だよ、遠いよ。……あれ？　そうなるとはっ君て俺のこと何て呼んでる？」

「んー、呼んでないんじゃないかなー？」

――今地味に傷付いた。

「冗談冗談、俺は普通に同じく『ヒコク』って呼ぶよー。そんなに悲しい顔しないでー」

「べ、別に悲しくなんてないんだからねっ！」

「ツンデレサービス万歳」

「カイ君そういうところは目敏く反応するよね……ゼン君びっくり」

カイト君が如何にそういう方面に沈んでいるのかが分かったところでシギ君を見れば、俺達の話に着いて来れてないのかあう、だのえと、だの声を漏らしていた。良く見れば何か泣きそうで最早可哀相でもあるが。

「ほーら、シギ、言いたいことはちゃんと言わないと伝わんないんだよー？」

でもそんな気配をいち早く察知していたのは流石は幼馴染、苦笑してシギ君に向け首を傾げれば「わ、分かってるっす」と小さく返事が返って来ていた。其れから数度口を開こうか開きまいかでしどろもどろしていたけれど、皆で辛抱強く――約一名は寝てて、約一名はテレビに夢中だけど――待ってみたら、やっと口を開いてくれた。

「ぼ、ボク、……昔からあんまり友達とか居なくて……ずっとゼン君と一緒だったからどうして良いか分からなくて……ええと、みょっ、あ、違っ、……いきなり名前で呼んだりしたら、失礼かなっ、

て、思いまし――」

「全然失礼じゃないよ！」

最早マジで泣く二秒前のシギ君に感動して口を挟んだ俺、此の子……なんて純粋な子なんだろう……！

「全ッ然大丈夫だよ！　俺のこととは全然ユウヤで良いんだからさっ！　友達のこと名前で呼ぶのが失礼なんて全然無いって！　ねっ、カイト君！？」

「え、何が？」

「聞いてろし！」

畜生話振る相手間違えた！！

「そうだよシギー」

「こ、コガネイ君……」

「何も言われなくたって、自分がそう呼びたいんだったら呼んで良いんだよー？　名前で呼びたいって思ったら、そう呼びたいって言っても良いし、そう呼んじゃったって良いんだよー」

のんのんとした笑みを浮かべながらはっ君がそう言えば、シギ君は顔を真っ赤にしながら「ありがとう、ございます、えへへっ」なんて笑った。うんうん、友情って良いねぇ全く。

――なんて話をしてるのに全く反応を見せない約二名に憤りすら感じるけどね！　アサ君は仕方ないんだろうけど其れでもやっぱりさ！　ね！

「で、結局どうするん？」

――憤りとか難しい言葉考えてたらカイト君がこっち向いた。

「シギ、呼び方変えんの？　つーか変わるの？」

記憶の断片を辿って会話に入ってきたカイト君はそう言うなり寝てるアサ君を見て、「アサキのこと名前で呼ぶとかさ？」なんて言ってみている。シギ君が神妙な表情になってしまったのは言うまでもない。

「お、怒られないっすかね……？」

「アサキは基本的苗字呼びの方が怒んぞ」

「……えぇ！？」

「ユウヤと被って分かりにくいとか何とか、シギは差ぁ付けてっから何も言わなかったんだろうけど」

「其の結果俺がシギ君と遠くなりました！！」

「え、……と、じゃあ、あの、な、名前で、呼び、ます」

「本当に！？　よっしゃあ名前呼び確保！！」

「ゆっ君テンションカオスだよ」

「じゃあ俺もヒコクのことは名前で呼ぼー、兄の方はヒコクのままで良いかなー？」

「いいいやいやいやいや！　俺のこともユウヤかっこはあとって呼んで」

「いや普通に気持ち悪いからな」

　此の後もやいのやいの色々言って、結局二人共名前で呼んでくれることになったみたいだけど、俺達が居なくなってから起きるアサ君はいきなりそんなことになっててどんな反応をするのか楽しみかもしれない。でもまぁアサ君のことだからナチュラルスルーかもな、うん、多分そうだ。

「っていうかシギ、お前俺の名前呼び捨てたって良いんだけど？」

「ぅええ！？　そっ、其れは無理っすよ！！　ゼン君無理っすよ！！」

「え、無理なの？　ゼン君が無理なの？」

　そして部屋に戻る直前、呼び捨ては未だ無理だということが発覚した、ゼン君でも無理なのか、前途多難シギ君呼び捨て計画（※誰

もやっていません）。

323＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ弟の部屋2

起きたら飯が来ていた、アサキです。
ひとつひとつの部屋に食事を置きに来ている従業員の人に爆睡してるのを見られたって訳だ、もう少し早く起こせよ、と思わない訳でも無いが結局は寝ていた自分が悪いんだから何とも言えない。何よりユウヤとかカイトだと起こされないの選択肢があるから起こされただけ良かったんじゃないだろうか。

『だってアサ君起こすと怒るんだもん！』

とか前にユウヤが言ってたが、こういう場合は逆に起こさなかったらコロスぞ。

「――っていう訳で三人ですき焼きでーす」

とは言ったものの起こされたばかりの僕のテンションが低いのもまた事実、コガネイさえ居なかったら起きたりしなかっただろうが……ほら、あの、世間体とかあるんで。
起き上がった僕に向けて土鍋と其の材料たちをぱんぱかぱーん、という効果音と共に差して見せたのは此の僕を無遠慮に起こしたコガネイ。「アサキ起きてー、ご飯だよー」なんて今まで誰かに起こされた中でも最も普通に起こされてある意味びっくりしたのだが、何故か僕以上に二人がキョトン顔だったのは何故だろうか。

「ほらほらー、早く食べようよー、皆ですき焼きいえーい」

「……」

「……ひ、あ、えと……アサキ、君？」

「……ん」

無駄なテンションがウザいがまぁ良い、とっとと食ってしまおう。僕の顔色を伺うフドウがおどおどしてるし、……ってあれ、今呼び方変わってたな、そういやコガネイも……まぁ良いや興味無ぇ、今頭回らんし良い。

布団を適当に――そりゃもうぐしゃぐしゃに――畳んで端に寄せれば、二人も机を囲うように座った。

「すっきやっきすっきやっきー、俺肉好きー」

「駄目っすよコガネイ君、野菜も食べないと」

「何処のおかんだよお前……」

皿に盛られた食材と菜箸を持ってコガネイが騒ぐ、そういえばああいう鍋物ってどうやって作るものなのだろうか。鍋物の時なんて鍋ひっくり返したら危ないって理由でキッチンにすら入れてもらえないからよく分からない、昔は僕だって飯作ってたはずなんだけど。まぁどう作るも何も食材突っ込めば其れで終わりなんだろうけど

「ほらほら、アサキも手伝ってー」

「……え？」

「え？　……って？」

「あ、……いや、何でも無いない」

コガネイの言葉に一瞬フリーズしてしまったが其れはそうだよね、こういう場合は手伝うのが普通だ。……うん、普通だ。例え普段キッチンに入れて貰えなかろうが中学の時のスキーでもカイトやユキが全部やってしまっただろうが関係無い。

「よし、手伝おう」

「うん、じゃあアサキはそっちの皿のやってねー。シギはこっち回って来て前転してねー」

「……其れと夕ご飯、関係あるんすか？」

「うん、勿論無いよ」

「で、しぎしぎはあ？」

リョウコです、ええと、ただ今ヒコクアサキ達の部屋に引き摺られるようにしてやってきました。べ、別に私が来たかった訳では無

くて、此の二人が行こうって聞かないから――駄目だ、何を言っても言い訳にしか聞こえない。

夕食を終えて数秒後ぐらいに「下の階にれっつごう☆」と部屋に飛び込んで来たテナと普通にご飯を食べ終えたミノルと共に彼等の部屋にやって来たら、何故か未だ食事中だった、しかもフドウシギ抜きで二人で。一旦帰ろうかとも思ったけどテナがもう入り込んじゃったし仕方ないわよね、と自分に言い聞かせて私とミノルも部屋にお邪魔する。

「保健室行ったよー」

「え？　しぎしぎ何処か怪我したのお？」

「大丈夫なのか……？」

「……」

一人黙りこくって食事を続けるヒコクアサキが気になるところだけど、……というかええと、コガネイ……で良いのよね、私とミノルあまり彼と面識無いんだけど普通に会話に入ってるってどういうことなのミノル、私を置いて行かないで欲しいわ。

「大丈夫だよー、軽い火傷っぽいからねー」

「火傷お！？　はー君しぎしぎに何したのよお！！」

「え、俺じゃないよドウモトさーん」

何処か気の抜ける表情でそういうコガネイ君――別に誰も彼も呼び捨てる訳じゃないんだからね――。そして其のコガネイが「ね

ーアサキー」と言っているのを見れば原因は彼なんでしょうけど、……嗚呼、綺麗にガン無視。

「三人ですき焼きやってたんだけどー、シギが其処で前転してて――」

「ストップ、其処で何故フドウシギが前転してるのよ」

しまった止めてしまった。

「んもうリョウコ！　今はそんなこと良いじゃん！　さぁさっ、続きははー君！」

「そうだぞリョウコ、今はシギが火傷を負った理由だ」

「え、ええ、そうね……」

私が間違ってるのかしら……何だか釈然としないけどまぁいいわ、続きを聞きましょう。

「で、俺が其れ見て大爆笑して、鍋に食材突っ込むのを停止させてシギと取っ組み合い始めたらヒコク、じゃないやアサキがそんな俺達に『お前等とっととやれよ』って言って来たんだけど暫く遊んでてー」

「ヒコクアサキの前でそんだけやってて怒られなかっただけ良かったと思いなさいアンタ」

しまった、また口を挟んでしまった。こんなくだらないこと言っ

たらまた何か言われ――

「そうだよおはー君、其処で殴られたり蹴られなかったのははー君とあー君の間に未だ深い友情が無いからだよお？」

「ふむ、手が出ないのは未だ素を出せていない証拠、だな」

「あー、シギだけだったら凄いことになってそうだよねー、何時もクラスで見てるかわ分かるけどー」

あれ……何で此れには同意なのよ。っていうかヒコクアサキアンタの話してるんだから興味持ちなさいよ、テレビアニメを見るな……！！

「――で、俺とシギが目ぇ離したらヒコクが皿を食材ごと鍋の中に落下させてシギがあっついの被りましたー」

最後の一言だけで充分だった気もするけど、まぁ良いか、何かツッコむだけ無駄な気がしてきたわ……。もう口に出さないように気をつけることにするわ。

私がおかしな決意を固めていればテナが「あー君は怪我無かったのー？」なんて尋ねたけど。当の本人は一度頷いただけだった。……まぁ、料理面に於いての彼のスキルが低いことは知ってるけど普通皿落とすかしら……もし何かの機会があったとしたら、私は絶対目を離すまいと誓った。まぁ、機会があればの話だけれど。

「俺も全然の無傷なんだけどねー、シギは腕に服の上から結構掛かったから一人で悶えてたよー、面白かったー」

「悶え!?　面白かったってアンタ人が火傷してるのに――」

「ごちそうさま」

「面白がって……」

うああ何なのヒコクアサキ超マイペースなんだけど!!!!
人の怪我を面白かったとか言うものだから、幾らあまり面識無い人だろうと怒鳴ってしまいそうになった。そんなところで空気読まず食べ終えてるんじゃないわよアンタ!!　つい尻すぼみになって言う気削がれたじゃない!!
けど此のツッコミはあまりにも理不尽なので言わないでおいたけれど、食事終了の挨拶を終えたばかりだと言うのに彼は立ち上がって、「出てくる」と一言何処かへ行くみたいだった。

「うん、いってらっしゃーい、」

「折角テナ達来てるんだから早く戻って来てよお?」

コガネイ君とテナの声に薄く反応を残し、ヒコクアサキは出て行った。……ええと、どちらへ……?

「カトウさん」

きっと呆然としていた私に声を掛けたのは勿論コガネイ君、へにゃっとした気の抜ける笑みのまま「ごめんねー」と一言、ヒコクアサキが机上に残していった食器を纏めながら続けた。

「面白かった、って言ったの怒ろうとしたんでしょ？」

「え、ええ……そうだけど」

「勘違いさせたねー、俺が面白いって言ったのはシギにじゃなくてヒコクになんだー。……あれ、折角名前で呼ぼうって決めたのになかなか抜けないもんだなー」

ヒコクアサキに？　一体何がどういう了見なのか分からなくなってきた。

私のそんな表情にもにっこり笑って彼は、――当然のように続けた。

「普段があんななのに、アサキがあまりにも俊敏に動いて、」

『――あ、』

『――ッ！？　ぅ熱ッ』

『てちょっ、シギ大丈ッ、今思いっきり――』

『うっ、服に染みて、』

『とっとと服脱げ』

『……え、っていうかヒコク君、手――』

『良いから早くしろバカヤロウ』

「――自分のことより他人気遣ってるのが面白くってさ」

本当はアサキも手、火傷したっぽいんだよねー、そう言ったコガネイ君の言葉を聞きながら、私は彼が出て行った扉を数秒間凝視した。

「アサキの反射ってどうなってんのかなー？　充分熱いものが染み込んだシギの服の袖持ってたんだけどー」

「あー君の手はきっと太陽の手なんだよお！！」

「……何だ其れは」

確か保健室は此処の二つ隣だった気がする、彼が向かったのはきっと其処なんじゃないか、と勝手想像して、

「――あれ？　テナさん達、来てたんすか！？」

「あ、しぎしぎお帰りい！　腕大丈夫なのお？」

「はいっす！　軽症っす！」

「お前が難しい言葉使うと気持ち悪いな」

「え？　……じゃあ、軽い火傷」

「火傷とか言うなムカつくから」

「え！？　火傷も駄目っすか！？」

――数分後に戻って来た彼が、フドウシギと一緒だったのを見たらつい笑ってしまった。

「しぎしぎ、あの後ちゃんとご飯食べれたかなあ？」

「問題無いだろう、担任があのハヤサカ教諭なんだから」

時間が時間だったからあまり長いこと居れなかったんだけど、やっぱり皆元気そうだった。

部屋に戻る最中喋る二人の声を聞きながら、私は一人何を考えるでもなく廊下の赤いカーペットに視線を落とす。

「じゃあな、テナ、また明日」

「うん！　それじゃあお休みねえ、二人共！」

「あ、うん、それじゃ」

気付けば其処はテナの部屋で、私は若干慌てながら挨拶をする。

「ねえリョウコ」

そうすれば部屋の扉に手を掛けたテナが何処かにんまり顔で、何故そんな顔をするのか私には分からなくて、素直に何？　と尋ね返した。

「アレだねリョウコ、此れはアレだよお」

「はい？　だから何よ……？」

「――“惚れ直した”ってやつだよねえ？」

2012

「――テナアンタコラァー！！！！」

「きゃははっ！　じゃあお休みなさあい！」

ぱたん、と彼女の笑い声に掻き消される形で扉が閉まった。

あ、あの子何言ってくるんだかふざけんじゃないわよただの失敗談なのに何がそんな――

「リョウコ」

「何よ！！」

恥ずかしくてつい怒鳴ったけど、隣に居たミノルは微笑を浮かべてくれて、少しだけ落ち着いたから口を噤んだ。

「ふふっ、リョウコは本当女の子らしい反応を見せるな、新鮮だ」

「わ、悪かったわね……」

別に悪いなど思っていないよ、ミノルが珍しく、楽しそうに声を上げて笑うものだから何故か余計恥ずかしくなった。ああもう、きっと今真っ赤よ私。

「でも、事実だろう？」

「……何がよ」

「さっきのテナが言った」

「……」

そんな表情で言わないで欲しい、何処かの誰か――主にあのネット野郎（※カイリのことです）――みたいににやにや卑しい顔とかしててくれれば殴れるものの、そんな慈しむような表情をされたら、何も出来ないじゃない。

「――そんなの、聞かなくたって分かってんでしょアンタ等」

「ふふっ、……リョウコは本当に好きなんだな」

五月蠅い五月蠅い喋るなミノル……！　何よアンタ達気付いてたんじゃない、ヒコクアサキがフドウシギの様子を見に行ってたこと！　其処でヒコクアサキを冷やかせば良いでしょ優しいなぁとか！　まぁ言ったら暫く口利いてくれなさそうだけどさ！！

……本当、あの場にロクジョーカイリが居なかったことだけが救いな気がする、あんなのアイツが見てたら本当に色々言われる、言われ過ぎてアレぼこぼこにしちゃう。

「と、とっとと部屋戻るわよ！」

「嗚呼、分かっている」

其れ以降ミノルが話題に触れてこないから良かった――若干笑ってるはいるけど――、彼女のそんな大人な一面に感謝しながら、私は自室へと小走りで向かった。

絶対言わない、此れだけは絶対に言わない！
別にあんなトラブル事が無くたって、――ほんの少しの些細なことで毎回惚れ直してる、なんて……絶対言わないんだから。

３２４＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ白銀の世界３

はろう、ゼン君だよ。
日は変わって三日目、要するに最終日ってやつになった。午前のギリギリまでスキーして帰る、正直もう帰っても良いんじゃないかなって思わない訳でも無いけど俺の同室の約二名は二日前から変わらぬテンションで滑りに出て行ったから凄いと思う。ちなみにカイ君に至っては――俺もだけどね――二日間ほぼ完徹だってのに元気だよねー、恐らくバスの中爆睡だけど良いっすかね。

「ワタヌキ君、其処で何をしてるんですか？」
「ん？　あ、ハヤサカじゃーん」
「人をナチュラルに呼び捨てないで下さい」

自由滑走だ、ってことであっ君は勿論俺もほぼ滑らず下でぼうっとしてる訳だけど、そしたらハヤサカに声掛けられた。スキーウェアを着ては居るけど眼鏡掛けっぱだし此の人滑る気さらさら無いね。どうでも良い情報だけどハヤサカって遠視らしいよ、だから運動の時は眼鏡外してる訳だね。

「ワタヌキ君みたいなタイプはスキーとか好きそうなのに滑らないんですね」
「何其れ、スキーにタイプってあるの？」

2016

「馬鹿みたいなクソ餓鬼タイプは幾度こけても楽しそうに滑るじゃないですか」

最近前より口調に乱れが現れてるんだけどハヤサカ気付いてんのかな。

恐らく気付いていないハヤサカは俺から視線を外して端の方で座り込むあっ君を見た、言わずもがな完全にやる気を失っていて座り込んでるあっ君を。

「……」

「潔いやる気の無さですね」

「ある意味凄いよね」

まぁあれには理由があるらしいんだけどね。

一日目の夜全然寝れなかったっていうのもあるんだろうけど、朝のあっ君の機嫌がフルスロットルで悪かったらしい。俺は知らなかったんだけどあっ君て朝ガチで機嫌悪いんだって？　コガネイが居たからどうにかなってた機嫌抑制スイッチが二日目にして壊れただとかゆっ君が言ってたけど――

『あ、アサキ君、そろそろ起きないと遅れちゃいますよ……？』

『……』

『アサキ、君？　起きてます？』

『起きてるんじゃない？　目が開いてるし。アサキー、起きて――』

『――るせぇんだよ』

『――る……？』

『起きてんだから起こしてんじゃねぇよ何度も近くでガタガタ抜かしやがって……二度と喋り掛けんなよカスが』

『『……すみません』』

――どんなだったんだろうなぁ？（※彼は其の惨状を知りません）

「まぁ今は自由の時間なので何をしていても構わないですけどね」

幾ら自由だからってスキーしなくても良いんだなぁ、という俺の考えは良いとして。「ハヤサカ先生！」なんて誰かがハヤサカのことを呼ぶ声がしたものだからハヤサカ共々其方を見れば、見たことのある生徒――二組の生徒なんだろうな――が慌てた様子で此方に滑ってきていた。

「……どうかしたんですか？」

「う、ウタカタ先生がこけて起き上がらないんですけどどうしたら

良いですか！？」

「そのまま野垂れさせときなさい」

「え！？」

「冗談です」

冗談言うなら其の止してよハヤサカ。

はぁ、と深々溜息をつけば仕方が無いと言った具合に歩き出し、

「何処に居るんですかあの人は、……全く世話の掛かる」なんて漏らしながらも助けに行ってあげる感じだった。流石はハヤサカ、見た目は鬼畜、頭脳は天才、中身も鬼畜、でも優しさだって持ってます☆　が売りの教師だよ。（※売ってません）

「いってらっしゃーい」

にっこりと、我ながら嫌味たらしい笑みをハヤサカに送って俺はひらひらと手を振った。ふ、あの人絶対鬼にはなれないタイプだな。

スキーももう終わりなのに何時も通りだなぁホノちゃん、なんて思いながら、俺は端っこで寂しんぼやってるあっ君の横にでも座っていようと其方に向かった。

運動は嫌いじゃないけどスキーだから言わせて貰おう、嗚呼、やっと帰れる。

325＋いざ、白銀の世界へ。／ｉｎ帰りのバス内

機嫌が悪くてもアサキはアサキだ。帰りのバスの中、やっと帰れるんだからゆっくりさせろと思わない訳では無い、というか普通疲れて寝るだろ、と思っていた僕の考えを覆してくれました我等が一組。

『ええっとお、では次行きまあす！　えっとお、――びいのさあん！』

『いえええい！！　あったあああああ！！！！！』

『ちくしょおおおお！！！！　四ならあったのによおおおお！！！！！』

『リィいいいいチ！！！！！』

『ちょっ、おまっ、未だ二つ目だろうが！』

――何でクラス全体でビンゴ大会してんだよ……ハイテンション過ぎんだろ……。

「あー、俺もあったー」

「ええっ！？　ボクひとつも開いてないすけど！！　どうしよう！！」

2020

「シギー、未だ二つ目なんだからさー」

そしてそんなクラスメイトに漏れることなく横と後ろの馬鹿も超ハイテンションで参加している、ビンゴ大会とかふざけんじゃねぇよマジで、眠いんだから寝かせろ死ぬ。

『はあい次い！　――おうのななじゅうよおん！』

『うおおおおお！！！！！　来ねえええええええ！！！！！』

『ビンゴの三歩手前えええええええ！！！！！』

『何だよ其れリーチでも無ぇよ』

マイクで番号を読むのはドウモトで、至るところでマイク片手に騒ぐクラスメイトが目立つ。畜生、早くパーキング着けば良いのに、此のテンション着いて行けねぇ、誰か助けて。というかハヤサカ先生も絶対こういうの嫌いだろうに何故しれっとしていらっしゃる、嗚呼アレか、我関せずってやつかコノヤロウ後ろは勝手に騒いでろってか。

『次い！　――あいのきゅうだよお！！』

『うあああああああ！！！！！』

もう良い……！

『はあい！　ビンゴになった人はちゃんとテナに言ってねえ？　お菓子セットが数人分ありまあす！』

誰がそんなもん欲しがるんだよ、とつい呟いてしまったが、フドウは後ろから凄く嬉々とした声達が響いてきたの聞いて苦笑していた。お前等充分スキー楽しんだから菓子とか要らんだろう……！

そろそろ僕の苛々も最高潮に昇った頃――といってもビンゴ大会は始まって間もないのだが――、ふとハヤサカ先生が立ち上がってドウモトからマイクを借りていた。

『皆さん、下らない余興に浸っているのは良いですが、』

おい。

『――そろそろ最後のパーキングに着きますので一旦中断して下さい、此処から一時間以上バスに乗ることになりますので、お手洗いを済ましておくことをお薦めします』

『『えええええええ』』

『別に結構ですよ、急に尿意を催して学校まで死ぬ気で耐えることになったとしても僕は一向に構いません、年頃の生徒達が学校で死に物狂いに手洗いに並ぶ絵面なんて実に滑稽だと思いませんか？』

『『……』』

嗚呼、皆準備し始めた。真顔だからこその威力だと思う。

「アサキも出るのー？」

僕の願いが通じて良かった、と荷物の準備をしていたらコガネイ

にそう聞かれ、勿論出るだろうとひとつ頷いた。

「当たり前だろ、寧ろ此のバスを出てやる」

「え、歩いて帰るんすか？」

「お前斬るよ」

「何で！？」

こっから一時間以上バスだっつってんだろ、其れじゃなくても苛々してんだからしねコノヤロウ。

「二組のバス侵入する」

「そうなんだ～」

「え、良いんすか其れ」

「と、いうことですのでハヤサカ先生」

「ご迷惑を掛けないようにして下さいね」

「え、止めないんすか先生……！」

ハヤサカ先生って案外緩いから良い。

「嗚呼、其れとドウモト」

「ん？　なあにあー君？」

2023

出る前に渡しておくものがあったんだった。

「此れ」

「……おお、あー君すっごおい！　ビンゴしてるう！！」

ビンゴカード、……こういう引き運だけはあるらしい。

って訳でユウヤでっす！　どういう訳かは聞いちゃいけない！

『はーい皆、此処から……ええと、どれくらいだったかしら？　……まぁ、とにかく結構長めに乗ってるからねぇ』

出来れば目安くらい知りたかったけどホノちゃんが覚えてる訳も無く。一番後ろの五人座りの内右の三つはさっきやってきたアサ君に取られちゃったから俺はひとつ前の助手席に座ってるんだけども。

「二組……静かで良い……」

2024

「あっ君一組で何があったんだろうね」

「さぁな、でも寝たいなら其れでいんじゃね？」

何故かお菓子を抱えてやって来たアサ君、そのお菓子は勿論カイト君が食べてるんだけど――勿論ってのもおかしい話だ――もう寝ちゃったし、真意は分からないなぁ。

一組が騒がしかったから来たんだろうけど、其処までして寝たかったのだろうか。ホノちゃんは『あらあら』って微笑んでただけだから良いけど、……本当に疲れてたんだろうなぁ。

にしてもそうか、スキー研修もう終わりか。

「帰ったら先ず、サチ達にお土産渡し行かなきゃ」

「あ、サチ先輩に宜しくね、ゼン君」

「おう」

サチ先輩の家はゼン君の家の裏、だったっけ？　らしいから先に渡してもらうことにしたけど、あとの二人のは学校で渡すことになるかな。とりあえず振り替えで休みだから明々後日とかになるけど。

スキーは楽しかった、でも。

「……ふふっ」

すう、と安らかな寝息を立てる弟がちょっと可哀相だから、やっ

ぱり普通の日常の方が良いかな、と思った。
嗚呼、俺ってやっぱりブラコンなんだろうな……悔いは無いけど！

326＋結局どうなる彼女の名前。

ユウヤでっす！　でっす！　……言いたいだけです。
何だか随分長いことスキー行ってた気がするんだけど其れは気の所為なんだよねー、あははっ。スキーで浮かれ過ぎたかなぁ……と食卓机で一人茶ァしばきながら考えています、――いや、俺は歴とした十六歳だけども。

「ふ、此の一杯の為に生きてるぜ、俺」

「何処のおっさんだ弟よ」

あ、マヒル兄居たんだ。そういえば此の人もう冬休みなんだっけ？　ずるいよなぁ大学生、来年から就活だからそうも言ってられないらしいけど。昼過ぎまでパジャマ姿な兄に言われたくはないとか思いながらも珍しく良い寝起きのマヒル兄の邪魔をするのは悪いので、俺は結局お茶を飲んでいることにした。

「にゃう」

「んぁ？　お前未だ居たのか」

お、猫も起床だ。そんなことを言ってにゃんこを抱き上げるマヒル兄だけど未だって、其の子多分このままうちに居続けると思うけど？　だって探してないじゃん、其の子飼ってくれる人とか。

「――まぁ探させないけどな！　何せこんなに可愛い！！」

「え、何？　ユウヤどした？」

おっと口に出た。つい勢いで立ち上がってしまったのでマヒル兄がびっくりしてしまった、すません。

「やっぱりにゃんこ飼おうよ」

「え、嗚呼、俺は良いけど、動物好きだし」

という訳で本格的に相談してみることにし――ちょっ、早い、承諾早い。

え、今更？　みたいな視線を感じながらも兄の承諾を得たので飼おう、アサ君は何か前に反論は無いみたいなこと言ってたからもう勝手にしよう、飼おう、何てったってこんなに可愛い。

「だったらやることはひとつさマヒル兄！！　にゃんこに名前付けなきゃ！！」

一度立ち上がっちゃったし座るのもアレだ、そのままマヒル兄とにゃんこの方に行けばそう宣言する。マヒル兄は良い寝起きではあるものの寝起きには変わりないのでワンテンポ遅れて「へぇ、そう」と返事をすればにゃんこを机の上に置いた。ええと、先ずは此の子の性別だ、男の子かな？　女の子かな？

「ねぇマヒル兄、おっすめっすどっちかにゃー」

「お前が言っても気持ち悪くないのってある意味凄いよな」

「ふぇ？」

いや、何でも無い、と首を振ったマヒル兄が何を言いたかったのかは分からなかったけど、とりあえず性別の確認だぞう。

「つーか、どうせメスだろ？」

「え、何で、マヒル兄猫の性別の特定出来るのかい」

「三毛猫ってメスばっかなんだよ、知らなかったか？」

そりゃ知る訳が無い。

「――三毛猫のオスが生まれるのは染色体異常とか染色体自体がモザイクだった場合とかで、クラインフェルター症候群と呼ばれる染色体異常でオスの三毛猫が生まれる確立は約三万分の一だとか」

「……」

「バイ、某ネットフリー百科事典」

其処はちゃんとｗｉｋｉｐｅｄｉａって言えばいいのに……！

目の前のにゃんこと戯れながら説明されたけど、今の文章俺の中には全然入らなかったけどね。ていうか何でそんなことまで知ってんのよ、定期的にｗｉｋｉ通ってんの？　アサ君も良く見てるけど何が楽しいのっていうか見たことを其処まで的確に説明出来るくらい覚えてるって何其れいじめ？　記憶力が良い人ならではのいじめ？

――と、ぐれても仕方ない。今の説明はへぇ、で流しておく。と

もかく其の子はメスなんだね、其れが分かればもう良かったんだけど。

「三毛にゃんこの名前かー、マヒル兄何が良いと思うー？」

「知らん、俺はネーセン無ぇからやめとけ」

無いの？　ネームセンスなんて無くて元々な気もするんだけど。

「俺だって無いと思うけどなぁ、三毛猫に平気で“ミケ”って名付けるタイプの人間だと思う」

「三毛猫を飼って其の猫に“ミケ”と名付けた全国の飼い主さんに謝れ」

だってダイレクト過ぎない？　三毛猫に“ミケ”とか、黒猫に“クロ”とか。あ、でもカイト君家のにゃんこ名前ここあちゃんだっけ、茶色いから。なんかごめんウミさん。

「……」

「……」

「……何も浮かばない」

「……同じく」

「……」

「……」

此の後も暫く、沈黙が続いた。

「ただいま」

「お帰りアサ君！　今ぱっと思い浮かんだ言葉言って！」

「……は？」

「理解はしなくて良い、とにかく言え」

「兄貴まで一緒んなって何なの」

「「良いから！！」」

「――上野国碓氷郡里見郷（こうずけのくにうすいぐんさとみのさと）」

「「……は？」」

３２６＋結局どうなる彼女の名前。（後書き）

ユキと共にカイリの家で歴ゲーに励んできた弟の一言。

327＋ヒコクさん家のどうでもいい話。

「――もういやだ」

なんてことを呟いたのは珍しくアサキだったのだが、マヒルだ。たまたまバイトから帰ってきたところで第一声目が其れって……いやどうしたよ。

ソファに座るでも床に座るでもなく、――床に寝そべるようにしているけれど上半身はソファを二人分程度占めるようにしてぐでる弟、よく滑り落ちないな……。

「……ユウヤは？」

「……ランの家、猫飼うことを報告に。んなのメールでしろよ……」

大分ぐだぐだだなお前、機嫌が悪いというかネガティヴというか。こんなアサキは珍しい、いや実に面白――つい口が滑った。

「――で、どうかしたのか？」

ソファの空いているスペースに荷物を降ろし、いざ夕飯を作らんとキッチンから声を掛ける。……ぶっちゃけ、理由は薄々気付いたんだが。

何せ――

「――ゲームのデータ飛んだ」

――机上に広がるハードが其の惨状を物語っている。しかしアサキにしては珍しいミスだ、こいつがゲームに関してミスするなんて。つい苦笑すれば、急に顔を上げたアサキが俺を指差して「お前の所為だばかやろう」とか言ってきやがった。……あれ？　俺？　自分を指差せば違う違うと首を振られ、下だと差す指に促された。

――嗚呼、お前って“チカ”のことか。

うちで飼うことになった猫の名前は、イロイロあって“チカ”になった。本人――猫だが――も気に入ったのか、名前を呼べば足元までやってくる利口な其の猫がたった今、呼んでもいないのに俺の足元で座っている。

「そいつがシステムデータセーブし切る前に僕の方に来て其れがうあああああっ！！！！！」

「落ち着けアサキ、お茶でも飲むか？」

「サイダー飲む」

落ち着くの早ぇな、しかも茶じゃねぇよ其れ。

とは思うものの、傷心（そりゃ理由はくだらないが）のアサキに何か言うのも何だと、俺は黙って冷蔵庫の中身を漁った。足元の猫がついて来る足音が聞こえるが、此の利口な猫がリビングに行かない理由など一瞬で思い付く。

「リビングに居たって、取って食われやしねぇぞ……？」

円らな視線を向けてくるチカを見て言ってやれば、踵を返してリビングに戻っていった。……いやはや、本当に食われるとでも思ってたのかあの猫。

「誰が取って食うって？」

そして一つ思い出した弊害は、うちのキッチンはリビングから普通に見えるところにあると言うことだ。ダイニングとリビングが一繋がりだから。

「いや、チカが其方に行かないもんで」

「幾らゲームの記録を消されたからって、猫を食ったりせんぞ」

「其れを理解したらしいぞ、そっち行った」

「……何時の間に」

俺の位置からじゃあソファでアサキの姿も猫の姿も見えないが、どうやら近くに発見出来た様子。ご所望のサイダーと共に戻ってくれば、じたばたする猫を両手で捕らえたままソファに伏せっているアサキが居た。

「これ、ペットを虐めるでない」

「虐めちゃいやせんぜ旦那、此れは歴としたお仕置きでさ」

「して、何の仕置きぞ」

「――人の頭の上に乗ってきやがってこのおおおお！！！！！」

「落ち着け、絞め殺すぞ」

結局落胆が取れていなかったアサキはじたばたする猫を更にじたばたさせてから解放した、ううん、懐かれてるは懐かれてるんだろうな。

「良いじゃねぇか、ゲームはまたやり直しゃ」

「分かってるさ、分かっちゃいるが一度やったところを時も浅いのにやり直すなんて行為が僕には此の上ない苦痛……！」

「頑張れ」

ゲームになると人格変わる勢いで声を張る弟、今回も其の例外に漏れることなく騒いでいる。

――が、二分もせず疲労が全身に周ったらしく、そのままソファによじ登ってくたり、と寝転んだ。

「寝る」

「はいはい、……飯は？」

「食う」

「はいはい」

――そして其処からまた二分後、本当に寝息が聞こえてきたから流石だと思った。

「たっだいまーっ、ってあり、何故寝ておる」

「お帰り、恐らくふて寝だ」

「未だ六時も回ってないってのに、――風邪引いちゃうでしょ！」

帰って来たユウヤはそう言って、父さんの部屋辺りから毛布を取り出してきていた。……此れがこいつ等の日常なんだろうな、と思うとユウヤが主夫になる理由も分かる気がした。

「今日のご飯何ー？」

「グラタン」

「また面倒なもん作るのね貴方……！」

否、人のこと言えないんだが。

328＋ワタヌキさん家の波乱多き日常。

「あーあーあー！　早く春休み来ないかなー！」

「急にどうしたんすかゼン君……」

ゼン君だよ！　学年末テストなんて頭の隅にも入ってなかったもんで今回ズタボロな予感するんですけど！！！！

少しあったかくなったかと思ったらまた冬に戻るし、こんなん体調壊せ！　って言ってるようなもんだよね、とか朝思ったら本当にカイ君が学校休みでびっくりした。だからあっ君が遅刻してきたんだけど、あっ君てカイ君休む時歩きで来る癖に、家出る時間変えないーーってそりゃ遅刻するっしょ。……ツッコんだら負けって俺知ってる。

んで今はそんな学校の帰り、テスト期間だから部活も無いし、シギと帰路を共にしてるって訳だね。

「だってもう疲れない？　毎日家でゲームしていたい衝動に駆られる」

「あははっ、……でもゼン君、そんなこと言いながらも何やかんやで学校サボらないっすよね？」

「そりゃそうでしょ、俺はそんなくだんない理由で学校サボる野郎共とは違うっての。遅刻とかも以ての外だよね、基礎がなってる人間だから流石ゼン君」

「……アサキ君はめっちゃ遅刻してくるっすけどね」

「……まぁ、カイ君もダントツで遅刻率トップだけどね」

そうだった、よく考えたらカイ君が休みだろうが休みじゃなかろうが二人の遅刻は日常茶飯事だった。……ははっ、なんかごめん。

「――おにーちゃん、おかえりなさぁい」

家の近くに辿り着く、そしたら何故かミヤが居た。……アレ？俺確かに今日送ってったよね、保育園に。未だ未だ小さい其の身体を精一杯広げて、此方に手を振っている。普段なら直ぐにでもそっちに行って笑顔で迎えられるんだけど、……うん？

「あれ？　ゼン君、ミヤコちゃん何で居るんすか？」

「ゼン君が知ると思ーう？」

朝一緒に来たシギが不可思議そうに首を傾げる、其れはもう俺が聞きたいことを。……まぁ、可能性は一つだけ考えられるんだが、其れはもう滅多に無い。でもミヤは此処に居る訳で、……信じたくないけど、なぁ。

「……ミヤ？」

「？」

ミヤが無邪気に首を傾げる。

「――お母さん、うちに居るの？」

「うん！」

嗚呼、家に帰る気が失せた。

「あらん、お帰りマイリトルブラザー、お昼に帰るとか聞いてないわよ」

「其れはこっちのセリフだクソ女（アマ）、帰る時は朝言えっつってんだろ」

こんな真昼間から大嫌いな姉の姿を見る羽目になるとは……！

ウェーブの掛かった亜麻色――若干紫強し――の長髪を背に流した認めたくは無いけど我が姉貴がキッチンから満面の笑みを浮かべて登場した。俺の口調が非酷いのは最早日常なので気にしてはいけない、此れが日常である。

「急遽よきゅうきょ！　アタシだって最初から分かってたらちゃあんとゼンに言ったわ。だからちゃんとミヤちゃんもお迎えに行った

じゃない、ねえミヤコー？」

「うん！」

「そういうことを言ってるんじゃなくてさ、」

笑い合っている微笑ましい親子（※見た目）を尻目に、俺は机の上にがさりと、シギと一緒に寄ったスーパーで買い込んだビニル袋を置いた。

「――うちで食うならちゃんと言わねぇと飯無ぇぞっつってんの！！　お前今日帰らないっつったろ！　お前の分何も買って無いんですけど！！」

「あらん？」

ナンデスカ其のあっけらかんな感じ！　ゼン君間違ったこと言ってませんけど！　遅くなるからご飯勝手にしろとか言ってただろうが！！

「大丈夫よん、ゼンがアタシの為に念の為とかしてくれる子じゃないことは知ってるからー？　ちゃんと自分で買ってあるわよ？？」

――カチン。

「嗚呼そうですかい、だったら良いんですけどね。あんたが居ても居なくても俺の人生に於いて何の支障も無いデスカラ？」

「あらん？　何言ってくれちゃってるのかしらん、お姉さんが居なかったらあなた其の歳まで立派に成長出来なかったんじゃなくて？」

「ええ、ええ、其の通りでございますよ姉君。お陰であなたの弟は世界中の女の子が放っておかないくらいカッコイー御仁になりましたから、クソ女姉様には構ってられませんでごめんなさいねー？」

「おーっほっほっほ全然困らないわよー、面倒みてあげた借りはちゃんと返してもらえるのかしら？」

「勿論ですよクソお姉様、お姉様がよっぼよぼのババァになったらクソ不味い飯を毎日たらふく作って差し上げるからご安心して下さいねあっはっは！」

「――おかあさんとおにーちゃん、けんかしてるの……？」

「違うわよ、ミヤ」

「此れはコミュニケーションだよ、ミヤ。仲良しだからお話してるんだ」

「……そっか！」

……はぁ、疲れたからもう良いや。飯食ってとっととゲームしよ。今日バイトもあるし早く始めないと。

「おい姉貴、昼飯」

「アタシ達今食べ終わったんだけ――」

「バイト帰りにケーキ買ってこようかな～」

「仕方ないわねぇ、お姉さん優しいから今から作っちゃう」

「……けっ」

328＋ワタヌキさん家の波乱多き日常。（後書き）

※ワタヌキさん家ではこれが日常です※

329＋皆色々考えてる。

「俺様ストレート！」

「うわー、ツーペアだし」

「ストレートフラッシュ」

「「何でだよ」」

ユウヤでっす、やっぱりトランプやめようよ、さっきからアサ君ボロ勝ちだよ。……ボロ勝ちって何つー単語だよ。

関東東北……ええと、東北地方……あれ？　何だっけ、ともかく大地震の影響で計画停電とやらが始まりました。関東に居る俺達が出来ることなんて募金とか献血とか節電くらいだし、遊びに来たカイト君混ぜてこうやってポーカーやってるんだけどさ。

「通算全敗って……此れ何が楽しいん？」

「まぁまぁカイト君」

うちの地域も被害が無かったと言えば嘘になるけど、今やもう不便はほぼ無いし。俺としては暫く不安で仕方なかった――というか今もちょっと不安だけど――けど、

『――気分が沈んじまうのは仕方ないことかもしれねぇけど、楽しむことに罪悪感を感じるな。お前もアサキも俺も、出来ることは高が知れてんだ、だったら何時も通り馬鹿やって、“何時も通り”を頑張れば良い』

早朝からバイトに出掛けてるマヒル兄がそう言ってたから、頑張ることにした。そろそろ帰って来る頃かなぁ。

何時も通りを頑張る、って、すっごく大事なんだって。だから頑張るよ俺、何時も通り！

「ゲームすっか」

「そうする」

一人意味の無い笑顔を浮かべていたけど其れは二人に全スルーされた、畜生。とうとうトランプに飽きた二人ががちゃがちゃとハードをセットし始めたけど結局こうなるのね、カイト君遊びに来ると基本的ゲームしかしないから知ってたけど。

幾ら節電って言ってもアサ君達にとってゲームが趣味だから咎めるつもりは無い――趣味を奪われるのは辛いしね――。

でもひとつだけ、驚くことあれだけ毎日欠かさず数時間以上ゲームしてたアサキが『今日は節電』とか言ってやんない日作り出した、――俺的最早驚愕。

「そういや知ってる？」

「何をー？」

「知らん」

「未だ言ってねぇよ」

アサ君の早めの否定に律儀にツッコミを入れてからカイト君が続けた。

「秋葉でガイガー・カウンター売り切れたんだと」

……何其れ。

我ながらキョトン顔を披露した俺はついアサ君の方を見た。アサ君は俺以上に怪訝そうな表情をしていた。いや、俺は怪訝そうにはしてなかったと思うけど。

カイト君はカイト君で何知らないのお前等ニュース見ねぇの？みたいな顔されたけどそんなニュース見てないしやってたなら教えて欲しいです。

「ただいまー」

「あ、マヒル兄」

「マヒルに聞けば分かるかな」

「マヒルさんに聞かずとも俺様に聞けば良いだ――」

「お前に聞くの何となくムカつくんだよ」

「……」

俺は別にムカついたりしないけど、アサ君が嫌みたいだから良いか。

リビングにやって来たマヒル兄にさっそく例の……ガイ……ガ、……ともかく其れについて聞いてみた、もう忘れたわ……！！

「ガイガー・カウンター？　放射線の量計るやつだろ？」

にしても本当何でも知ってるんだね此の人。

「放射線量計測器っつったか、ヤ○ーのニュースで言ってたな」

「よく見てるねそんなの」

「テレビはあんま見てねぇからな、携帯で見てんだよ」

「俺は2○hで」

「帰れ」

ニュースですら無かったよ、流石半ネト充。そう言ったら俺様はＲＯＭ専だ！　と豪語された、ＲＯＭ専の意味は近くのネトサ好きのお友達に聞いてねー！

「そんだけ皆不安ってことだろ？　被曝したらどうしようー、って」

「俺だって不安だよ！！　大丈夫なのかな！？」

「大丈夫も何も危険じゃねぇって言ってんだろ専門家の人等が。…
…俺は少し騒ぎ過ぎだと思うけどな、国民が」

少しでも自分で理解出来れば良かったんだけど、其処からマヒル兄の話難しくなって一寸も理解出来なかった。すまんアサ君、後で要約して。

「――ま、何はともあれ、うちは買い溜めとかしねぇからな、俺等が買い溜める意味なんて此れっぽっちも無ぇんだ。……寧ろ、供給を減らしてでも被災地に送るべきだっつーのに」

最後にそう言ったマヒル兄はちょっと怒ってる風だった、何か珍しい、バイトで何かあったのかな？

此処までずっと立ち話だったマヒル兄はやっと鞄を下ろし、「さーて、俺昼飯食うわ」とキッチンに向かった。もう昼過ぎだもんね、お疲れマヒル兄。

「俺さ、」

俺とマヒル兄の声しかしなくなったのは二人がゲームを始めたからなんだけど、画面に視線を送りながら、カイト君は呟いた。

「テレビとかで言ってること全然理解出来てねぇし、頭も良くねぇから言われたこと全部信じちまうし不安にもなるけど、――頑張って欲しいな、って思うよ。被害に遭った人も、被災地で救助活動してる人にも」

「……そだね」

カイト君の表情は一切変わらなかったけど、カイト君なりに色々考えてるんだなぁ、と思った俺だった。

さてと、二人がエキサイト始めたところで、マヒル兄の手伝いしてきましょうかね！

329＋皆色々考えてる。（後書き）

出来るだけ言葉を慎んでの更新が続くと、アサキが温厚になりそうで怖いです（暴言がなくなる的な意味で）
でもきっとなくなりません、なくしません、だってそんなのアサキじゃない（笑）

３３０＋憂う出来た人。／前

「で、おまいさんは何に不機嫌だったんだい」

「……は？」

マヒルだ、買い物出てみたら試食コーナーに子ども諸共戯れるセツを発見した。流石にスルーしようと思ったんだが目敏く見つかって、おまけに着いてきやがった、……荷物持ちに良いから米買って帰ろう。

そんなこんなで主婦層厚いスーパーから徒歩帰りする最中、セツがキョトン顔で尋ねてきたからつい睨んでしまった。両親共あんななのに何処からの血なのか、睨みを利かせると迫力あることに定評があるらしい――そんな定評欲しくはないが――俺にセツの方が畏縮してしまいそうだから、直ぐ様「何の話？」と話題模索に取り掛かった。

「いやあ、バイト先で何かあったんだろ？」

「え……、お前其れ何処情報？」

「俺情報。バイト先冷やかしに行こうとしたけど、マヒルがドスの利いたオーラ纏ってたから止めた、こあい」

「良い成人がこあいとか言うなよ」

お前は俺のストーカーか何かか。年がら年中暇人だから仕方ない

だろうが此の銀髪、生憎付き合いはそれなりだから見れば俺の機嫌くらい分かってしまうらしい。……そんなに分かりやすい性格してたっけな、俺。

まぁしかし、バイト先で若干キレ掛かったのもまた事実。俺はひとつ溜息を吐いて、重いであろう荷物を持つセツを横目に見た。

「別に大したことじゃねぇよ、……ただ、」

「ただ、……？」

「人って本当、自分主義な生き物なんだよなぁ、……って、思って」

――沢山の日用品や食物を買い込む人が沢山居た。沢山の物を買い込む為には急がないといけなくて、急ぐ其の足で手押すカートに小さな子供がぶつかりそうになっていた。

「不安なのは仕方ないけどさ。……生きることに必死になり過ぎた人間は、他人を思いやれなくなっちまうのかな……って」

「んー……、どうなんだろうな……」

「俺達なんてこんなに元気なんだぜ？　だけど何でか被災地の人達の方が全然――“生きてる気がする”んだよ」

下手をすれば大怪我だったのに、結局其の一連の出来事に気付いたのは俺だけで、他の人等は悠々自適に買い物に勤しんでいた。

別に何てことない、ただ子どもが転んだだけなんだから。――そう、言われた気がした。

「ま、確かにそんなこと今じゃなくたってあると思うけどさ。……二人に何時も通りにしてろっつった癖して、もしかしたら俺が一番落ち着いてねぇのかも」

締まらない兄貴だよ全く、そう言って笑えばセツが一度荷物を抱え直した音がした。何の気もなく其方を見たら、セツは何故か我が物顔で俺を見ていて、

「今日、双子は？」

何故か二人の所在を尋ねられた。

何時もならセツが言いたい大抵のことは分かるのだが、今回ばかりは、否、其の表情だけは何故だろう――一切合切理解出来なかった。

３３１＋憂う出来た人。／後（前書き）

※　とても、長いです↑　※

３３１＋憂う出来た人。／後

『二人なら今日卒業式だけど、興味無ぇからって自宅待機してる』

『おいマヒルお兄さん、其れで良いのかあの二人』

三年生と関わり無いらしいし良いんじゃねぇの？　とフランクな態度で返してしまった俺だが、今思えば確かに良いのか今更の疑問視。続くマヒルだ。

ただいま、と帰宅の挨拶をすれば奥からお帰り！　と元気な声が聞こえてきた。

「おっ邪魔ー」

「あり？　せっちー？」

「え、暇人……？」

「おいこらアサキ、誰が暇人だ誰が」

お前だよ。

リビングに入るや否や相変わらずの双子が居た、食卓机で雑誌（※本タイトル：今日の献立！１１０選！）見てるユウヤに、ソファに沈むアサキ。セツの声に一度だけ顔を上げたアサキは直ぐにまた沈む、何してんのお前。

「あ、せっちー何か飲む？　今ならなんと、五つの中から選べちゃいます！」

「何其の今なら五つフレーバーついて来るみたいなシステム」

「オレンジジュースとー、紅茶とー、珈琲とサイダーと水ね！」

其の選択肢に水を入れるな我が弟。

「じゃあサイダー」

「僕珈琲が良い」

「俺紅茶」

「あれ？　此れお客様限定サービスとかじゃない普通？」

そう言いながらもユウヤはいそいそと、実質四択だった飲み物を準備し始めた、出来た主夫だと兄ちゃん感心。

「……で、ユウヤはあんだけ働いてんのにアサキ君は何でろんとしとんの」

「機能節電中」

「おいマヒル、お前の弟何時から充電式になった」

「耳覚えに無いな」

アサキが充電式になったとしてもあんまり充電必要無いんだろうな、とかくだらないことを考えていたらキッチンから飲みも――違うユウヤが出てきて、「ほらアサ君！　何時までもでろでろしてないで座んなさいな！　マヒル兄達座れないでしょ！」とお盆を机に置きながら注意した。

「――……」

ばたんっ！！

「「……」」

あ、アサキが落ちた。

「あ、せっちー、空いたから座って」

「え、今の良いの？　転がって落ちたけど？　机とソファの間に落ちたのに？」

此れが日常なのが凄いところだ。

アサキは暫くして起き上がると近くのクッションに丸まっていたチカのところに行って、ちょっかいを出し始めたから何処も痛くは無いんだろう。結構痛い音したはずなんだけどな。

「にしてもせっちーも本当に暇だよね、今日は何してんの？」

「え、今日は未だ始まったばかりなはずなんだけど」

容赦ないユウヤの言葉にセツは一度コップを取り倦ねていた。

「つーか俺よりお前達だろ？　卒業式サボるってお前、俺よかやりたい放題じゃねぇか」

「いーのっ！　……部活にも三年生居ないし、行ったら生徒会の仕事やんなきゃだし面倒だもん」

「おい最後本音」

まぁ確かに仕方ないだろう、お世話にもなってない先輩の卒業なんて悲しくも何とも無いだろうし。ユウヤがこうなんだからアサキなんて――嗚呼、チカと日向ぼっこ始めちまった、もう聞いてねぇなアレ。

「で、結局何かあるの？」

「特にありません、暇人ですが何か」

でしょうね、……スーパーの試食コーナーに屯ってたのに何かあったなら、俺は逆にお前を崇高なものとして崇めるだろうね。

「にしても卒業式、ちょいと時期が遅くねぇ？」

二度目はちゃんと掴めたコップを傾け炭酸を煽るセツはそう言って首を傾げる、言われたユウヤは苦笑して、何の気も無いのだろうが視線はアサキに向いていた。

「本当は一週間前だったんだけどね、」

「……嗚呼、延期してたのか」

「うん、予定変わって嫌んなっちゃうよね！」

学校はもう終わってしまったというのに、とでも言うように小さく溜息を吐いたユウヤは自分用に持って来たオレンジジュースに手を掛けた。

「でもまぁ今回ばかりは仕方ないだろ、事が事だし。俺達んとこの大学も大変なんだっていうしな？」

「そうらしいな」

卒業を控えていた人等は勿論、進級云々で忙しい人だって居たはずだ。卒業式中止になったし、入学式も危ういって聞いたな。来月にはどうにかなって欲しいものだが……どうなんだか。

「だから、予定変更程度でめげてたらやってけねぇぜ？」

「むん、分かってる分かってる。俺達よか大変な人はごまんと居るんだもんねッ！」

冗談がましいセツの言い草にそう返すユウヤの表情は、何処かやる気に満ち溢れていて。このテの話題を出すと直ぐに不安がった数日前までのユウヤは一体何処に言ったのか、兄ちゃんちょっとびっくり。

「何だよユウヤ、お前のことだからもっとビビッてっかと思ったん

に」

そしてセツと考えてること被った。別にそうする必要は無かったのだが、俺ははは、と誤魔化す様な笑みを浮かべてしまう。本当に意味などこれっぽっちも無いんだが。

ユウヤは当たり前だよっ、とひとつ前置きを入れればにこりと微笑んで、

「――だって何時も通りにしてろ、って、マヒル兄が言ったし！……まぁ、不安が零かと言われたら嘘かもしれないけど」

なんて、満足そうに、言った。

俺が言った、――か。

頼りにされてる、というか、まぁ頼られてはいるんだろうけど。俺の周りの人間は何処か俺のことを神聖化している節があるからな……最早諦めちゃいるんだが。

けど今回ばかりは、何となく溜息を吐きたくなった。別に、俺が言ったからって其れが正しいとは限らないのに。

「おうアサキ、お前はどーよ」

「何が」

「だから、今の状況、不安とか無ぇの？」

「無いよ」

日向ぼっこに耽るアサキは、少しも視線を此方に向けず、淡々と応え続ける。

「不安がってたって始まんない、不安を煽って生きてちゃ身が保たない。よってユウヤは愚かである」

「……ちょっ、どさくさに紛れてお兄ちゃん愚か扱いしたでしょ、聞き逃さないよ……！」

「……ちっ」

「嗚呼！　舌打ち厳禁！！」

「ユウヤ、猫あっち」

「え？　……うぇ！　チカちゃん何してんの！！！！」

何時の間にか双子で言い争いになっていたが俺は気にせず、苦笑しながら二人が中庭に消えるのを見ていた。チカめ、何をしでかしたんだ。

「だってよ、マヒル」

「ん」

急に閑散とした部屋で二人、セツが視線を投げてきた。

「双子にゃちゃんと、お前の言いたいこと伝わってんじゃん」

「……まぁな。でも、鵜呑みにするだけじゃ人間――」

「なら良いんじゃねぇの？」

人の言葉を遮って、セツは馬鹿みたいに――要するに何時もみたいに――ではなくて、何処か諭すような、普段では絶対にしない、というか出来ないだろう笑みで俺を見る。

「――お前が言うように、人はどうしよもなく自分主義だろうし？人が居なきゃ自然は豊かになるって、たまたま出てた授業で世間話で聞いたし」

たまたまじゃなくて普段からちゃんと出ろよ。

「其れでも俺達、生きちゃってるじゃん」

「……」

其処でセツは片手で弄んでいた炭酸を一気に飲み干して、かたん、と無遠慮にコップを叩き置いた。割れなかったから良いが、危ないから後で注意しよう。

「自分主義だろうが何だろうが、他人を思いやれなくなったとしても俺達は生きてる。だから、――正すことって、出来んじゃん？」

「――……正す、」

「そ、正す。間違ったことしてる人が居たら、お前が正しゃ良いんじゃねぇの？　間違ったら終わりとか、そうなっちまったら戻れないなんてこと無いんだろ？」

正す――誤りや不適切なところを直すこと。

「第一、大多数が間違ってたとしてもさぁ、俺はお前が間違ったことするとは思わねぇから。一対十だったとしても百だったとしても、俺はお前が正しいと思う。――だから、難しいこと考えるこたぁ無ぇと思うぜ」

「……？」

「考え過ぎなんだよお前。少しは俺みたく気ィ緩く持てって」

……お前は緩過ぎるんだよ。

そうは言わなかったけど、……そうか、俺は考え過ぎてたのか。

無意識に考え過ぎて、泥沼にはまっていた――そういうことか。

「でも、俺だって間違えんぞ」

「例えば？」

「――オーブンレンジってオーブンが焼くのかレンジが温めるのか時たま分からなくなる」

「……」

「……悪い、続けてくれ」

しかし実際ある話なんだ、五分は考える。

「……そりゃあお前は頭良いし格好良いし真面目非の打ち所が無いっつーかお前何なんだよって位アレだけど、」

途中適当だぞ。

「だからこそ、お前に異変があったら直ぐ分かんだよ」

セツは続ける。

「直ぐ分かるから、言いたいことはちゃんと言えよ。だーい丈夫だって、色々考え過ぎた、お前の不機嫌を煽った理由は其れだろ？」

「……」

俺は無言の肯定を示した。

「どうせなら自分のこと考えてキレろよな！　自分等のことよか他人のことその他云々考えてそうなるなんざお前、人が好いにも程があんだろ、」

其れは責める為の言葉では無くて、からからと楽しそうな声音で発せられて。

そして最後の言葉を、セツは俺を指差しこう言った。

「――なぁマヒル、俺達はただの人間なんだぜ？」

「マヒル兄！　チカちゃんが――ってあり、せっちーは？」

「帰った、臨時でバイトだと。で、チカがどうした？」

言いたいことだけ言えば携帯を握り締めて帰って行ったセツ。暫く中庭に居た二人が戻って来る頃には既に綺麗さっぱり消えていまして。

そっか、と言葉を返してからユウヤは、思い出したように隣のアサキを呼んで、――そして俺を唖然とさせた。

「チカちゃんが泥塗れになりました」

泥塗れの猫と、何故かびしょ濡れなアサキ。……え？　何があったの其れ？

「最初チカちゃんが泥で遊んでたから、水で洗ってあげようとして、」

「慌ててホースに手ぇ掛けて、外れたホースの襲撃に遭った僕。ユウヤお前帰れ」

「ごめんって！！　ていうかうち此処なんですけどただいま！！！」

人が思考の泥沼にはまってる最中に本物の泥沼にはまる飼い猫。

――誰が上手いこと言えと。

「お前等なぁ……」

ぎゃあぎゃあ――片方はロウテンションだが――言い合ってる中、俺は思わず溜息を吐いた。

でも此れは、さっき吐きたくなったものとは確実に違うもの。

「うちに帰ってくんな、月に帰れ」

「俺月生まれじゃないよ！　かぐや姫とか違うよ！？　――あ、でも着物とか着てみた――」

「ファック！！」

「ぐふっ！！　ちょっ、チカちゃん投げんといて！！！！」

「――どうでも良いからお前等、」

どんなことがあろうが何時も通りな二人を見たら、何かもう何もかもが大丈夫な気ィしてきた。

『大丈夫』――セツが言いたかったのはきっと、此の気持ちのことだろうから。

「早く風呂場に行け馬鹿共、プラス猫」

「はーい」

「うん」

だからもう、――『大丈夫』。

俺は二人の後ろ姿を見遣りつつ、一人無意識に笑みを零した。昨日から感じてたあの苛立ちはもう、――何処にも無いと、自覚して。

332＋誰でも一度はやらかす事情。

ファミレスです、……いや、俺はゼンだけど。

「何食べよっかなー！　あ、此のデザート美味しそー！」

「……」

「ゆっ君は先ず主食を決めようね、そしてあっ君はドリンクバーを一心に見つめるのやめようね。いや頼んで良いけど」

「俺は肉を食う」

「潔い決めっぷりっすねカイリ君……。ええと、僕は……ええと」

「時間掛けても良ーんだよシギ、カイ君は頭がアレなだけだから」

何だとてめぇ、たっけぇの頼んでやっからな！　なんて言ってメニューにかじり付いたカイ君を見て、つい苦笑した俺。そんな皆の様子を観察するのも飽きたし、俺も頼むの決めよかな、と隣のシギが見るメニューを覗き込んだ。

察しの通りただいま俺達はファミレスでしかも、俺の奢りで昼飯と洒落込んでる。何故俺の奢りなのかと言えば、……まぁ単純にバイト代が普段より多く入ってるというか、まぁ今月分の月給バイトは未だ入ってないんだけど、臨時でダチから連れ出された日給バイトのバイト代が入ったからって感じ。無論何時ものバイトの方もかなり入らされたのもまた事実、電車の運行状況の所為で人が来れな

くて、地元の俺がバンバン入れられたって訳。
だからたまには飯でも――って思ったのは良いけど、

「友達にご飯奢ってあげるなんてゼン君なんて良い人なんだろう」

「ゼン君、口から本音が出てるっすよ」

いけね。
本当ははっ君も誘ったんだけど用事があるってさ、『誘ってくれてありがとねー、また誘ってくれたら嬉しいなー（笑）』ってメール来たけど最後の（笑）超気になる。

「――ていうか、皆何でバイトしないで生きてけんのよ」

一年付き合って今更だけど、此のメンバーでバイトしてんの俺だけなんだよね。まぁ両親居ないってのが響いてんだろうけど――うちの両親は片田舎でのんびりしてるだろうよ――さ。

「「――親が」」

「嗚呼、二人ん家は良いよ、医者とか反則だから」

しかも太っ腹ってマジ羨ましいんですけど。キョトン顔の双子兄とメニューから顔すら上げない双子弟を見つつ俺は溜息を吐く。

「俺は別に。欲しいもんは姉ちゃんが買ってくれるしある程度は制限してるし。まぁ姉ちゃんっていうか金自体は父さんだけど」

「……優しいお姉さんだね……」

「……え？　ゼンどうした？　何かすっごく世知辛い表情してね？」

うちのクソ姉貴に見習わせたいんだが。カイ君ん家はうちとは逆で親御様が働きに出てる感じなのよね、あーあ本当うちの両親何してんだか。――ちなみにうちのクソ姉貴を嫁に貰うなんて稀有な神経を持つ我が義兄さんは海外単身赴任中で、滅多に会うことは出来ないけど非常に素敵な男性なんだよ。

「……俺は義兄さんの為にあのクソ姉貴と一緒に住んでるんだ……あの露出狂……ミヤは俺が守る……！」

「……ちょっとゼン君どしたの？　どっかトリップしちゃってない？」

「気にしなくて大丈夫っすよ、ゼン君はたまにこうなるけど直ぐ戻って来ますから！」

「幼馴染の余裕だな」

ゆっ君の声で我に返ったけど、何言ってたんだろうか。其処にあったのは清々しい程に輝くシギの笑顔だけだった。

人の金だと思って容赦なく頼みやがった食事が次々に消費されていく光景は実に滑稽だった、ははっ、笑えねぇ。

「ゼン君、本当に大丈夫なの？」

「え、何が？」

「いや、五人分って結構多額じゃ――」

嗚呼、流石はあっ君、相変わらず君しか常識無いからある意味素敵。他の三人はファミレスといえば恒例のドリンクバーの飲み物混ぜて楽しんでるからね、アレ誰が飲むんだろ。

「大丈夫大丈夫、ゼン君にまっかしなさーい？　年中バイトしてるから大丈夫なのよ」

「そう、なら良いんだけど」

そう言えば一寸も動かなかった表情のままあっ君は、カイ君のセットメニューで付いて来たスープに自分用なのかと思っていた珈琲用のスティック砂糖を数本ぶち込んでいた。……あれ？　早くも前言撤回しなきゃになったぞ？

「……実にナチュラルな動作なところ悪いけど何してんの？」

「ファミレス恒例の嫌がらせ」

「どんな恒例だよ其れ」

「大丈夫、カイトは甘党」

「いやいやいや甘党とかの問題じゃない色になってるけどね！」

さっきまでコンソメだったのに今何よ此れ、何と称せば良いの此れ。色どころか塊だからね砂糖、ざらざらのバレバレだから。

俺のツッコミを気にすることなく入れ尽くせば三人が戻って来て、――此方も此方でドス黒い飲み物を持って戻って来た。泡立ってんのが余計に不気味だ。

「さぁゼン！　飲め！」

「わぁいそして其れゼン君が飲むんだぁ」

カイ君が意気揚々といった風に俺の目の前に其の危ない液体（仮）を置いた。何か俺悪いことしただろうか、と考えてみたものの其の隣のゆっ君はあっ君に「アサ君此れどうよっ、滅茶苦茶美味しいんだよ！」と言って此れまた微妙な色した飲み物を渡していた。何故赤なんだ其の飲み物、何入れたら赤くなるの？

「――……うわまず」

そして其れを躊躇い無く飲むあっ君凄ぇんだけど、超慣れてんじゃん、つーか此の三人何時も此の調子なのかしら？

「えぇ！？　まずくないよう！！　ねっ、シギ君！」

「はい、さっき飲んだら美味しかったっす！」

「二人して舌馬鹿かお前等」

俺もそう思う、誰がどう見ても其の赤い液体が美味しいもんだとは思えない。

ひとつ溜息を吐いて再びカイ君に視線を戻したら、普通に食事に戻っていた。そして先のスープの存在に気付けば一に凝視、二にあっ君凝視、三四に停止で――五で飲みやがった。

「――甘い」

「反応其れだけ!?」

「え？　何が？」

何が？　じゃないよカイ君あの粗目（ざらめ）スープ飲んで『甘い』で済ます君の舌どうなってんの！　流石にびっくりした！　ゼン君超びっくりした!!

「カイト君甘党だもんねー、……うんやっぱり美味い」

「幾ら甘党でもスティック砂糖六本入れたコンソメスープ絶対美味しくないよ、絶対。てっきりあっ君が珈琲に入れると――」

「六本も砂糖入れたら珈琲まずくなるだろ！」

「ごめんって!!　――あれ？　何でゼン君が謝ってんの？」

意味が分からなくなってきたからか、とりあえず俺は目の前に置

かれた危ない液体（仮）を一口だけ飲んでみることにした。いや、此処乗らないとゼン君の名が廃るじゃん？　いや何のとか言わない。

「ゼン、どうだ美味いか」

「――……うん、とりあえずカイ君、メロンソーダ持って来て」

普通に言うね、――クソ不味い！！！！

あの後皆で飲んでみたけど、非常に強烈な後味を残してくれた危ない液体（仮）は晴れて――晴れなくて良かったけど――危ない液体（確定）に昇格した。あの液体の調合の仕方はカイ君しか知らないらしいけど、俺は全然知りたくないと思った。

「あー、食った食った！　よーし！　今からゼン家行ってゲーム大会と行こうか！」

「良いね、賛成」

「俺も行くー！」

「ぜ、ゼン君、勝手に決まってるっすけど……」

「ん、六時くらいまでなら全然大丈夫だよ。其れまで一人だし」

「其れまで？　――そうかゼンは姉ちゃんとミヤコちゃんと三人暮らしか」

「俺ミヤコちゃんに会いたい！　そしてお姉様を見たい！」

「前者は何時でも！　後者は死んでも会わせん！！！！」

「えーっ！！　ゼン君のけち！！」

何と言われようが其れだけは阻止せねば……！　あの馬鹿姉に会わせるなんて恥ずかし過ぎて死ねる……！！

「アレは完璧なゼン君にとって人生最大の汚点だ……」

「さりげなく自分完璧だけどね」

気にしないのよあっ君たら。

という訳で午後はうちでゲーム大会――って何時も通りじゃんね。いそいそとチャリ置場に急く皆の後ろに付きながら苦笑した俺だった。

っていうか、――何此れ楽しい。

333＋GC部の部活内容、春。

「うおるァ！！！！」

「――ひゃ！　ちょっ、ちょっと危なっ！！　アンタなんて球投げんのよ！？」

「ふっ、俺様の辞書に“男女差別”の文字は無ぇ」

カイトが何か言ってる、アサキです。

「そうさカイリ！　我が部は誰に於いても“男女平等”！　よってドッジボールであろうが本気――だァ！！」

「普段皆からろくな扱いを受けていないからつい忘れがちだけれど一定の教科以外は別に出来ない訳じゃないから頭はさほど悪くないサチト先輩最低」

「――長い！　アサ君無駄に長い！」

外野から其れ程抑えていない威力で投げられたボールが、僕の横に居るカトウの肩に当たった。相手側のユウヤに盛大なツッコミを受けたが、……まぁ其れは其れだ。

という訳で僕等はドッジボール中、学校の体育館で着たくもないジャージ姿晒してボールを投げ合っている。……実にくだらない。

ええと、大分前頼まれていた備品移動をやらされ、ついでに天災によりぐっしゃぐしゃになった各部屋の整理も手伝わされ――正確にはハヤ先輩が二つ返事で了承してしまった為――、大分疲労感が溜まった其の日の午後二時どき。本当は未だ全部終わった訳じゃあ無いけれど、今日のところは疲れたからと明日に持ち越されることになった。

――疲れたから明日に持ち越したのに、何故僕等は体育館でドッジボールやってんだろうか。

「勝負に最低も何も無ぇ！　やーいやーい！」

「くぅ、先輩だけど何かムカつく……！」

「良いんじゃない、アレ先輩じゃなくて愚劣者だから」

「部長！　サチト先輩部長だからねアサキ君！！」

「え？　今何か言いました？」

「……もう良いもん」

外野で落ち込むサチト先輩の肩にポン、と手を置いたフウカ先輩の表情は、何処か憐れみの其れに似ていた。というか味方側外野のゼン君は笑い過ぎね、あとハヤ先輩は笑いを微妙に噛み殺せてない。

「ははははっ！　サチって何処行っても本当弄られキャラというか憐れみキャラだよね！　ざまあみろ！！」

「こらゼン。幼馴染とはいえ仮にも上級生なんだ、指を差すんじゃ

ないぞ」

仮じゃなくても上級生なんだけどね。悪気は恐らく無いハヤ先輩の言葉に、遠くのサチト先輩が更に落ち込んだのが見えた気がした。

体力馬鹿共――僕とハヤ先輩を除いたらほぼ全員――が力尽きたのは其れから一時間程して。体育の時間でも無いのにフルスロットルではしゃぎ過ぎなのがいけない。普段は二つある内僕が占領する機会が多い片側のソファも使用して、正にぐったりと屍が数人、――死屍類々とは此のことを言うんだな。

という訳で委員会も部活もほぼ兼用の旧生徒会室に戻って来た。

「やっべぇ疲れた……つか此の部屋暑くね？」

「暑ィ」

主にはしゃぎ過ぎたカイトとサチト先輩――プラスユウヤはくたばり過ぎて声も出せない様子――は、ソファに座りながらそう呟く。今日の気候はそう春日和という訳でも無かったし、別に僕は暑くないのだが。

「冷たい飲み物でも出すか？」

其処でそう言うは我等が生徒会長。自分の体調を管理することに

関しては一級品――しかし此れが仕事になると機能が停止する――、ハヤ先輩が苦笑しながらそう言えば、数名が無言の肯定を促した。

「……皆して疲れ過ぎでしょう」

「確かにはしゃぎ過ぎたわ……。でもアンタだって其れなりに動いてなかった？」

「僕は適度にしか動いてない」

ドッジボールの後にバドミントンなんてやり出したもんだから、カトウまで同類と化していた。中学バドミントン部だった血が騒いだのか髪を括り上げて全力投球気味で、ユウヤがボロ負けだったのは実に滑稽だった。

「リョウコはバドミントン部だったの？」

「あ、はい、とりあえずは」

「続ければ良かったのに」

「いや、別に上手い訳じゃなかったですし……」

「アレで上手くないんだ」

フウカ先輩の問い、というか軽口にも謙遜するように答えたカトウだけど、……アレで上手くなかったら上手い人ってどんだけ上手いんだろうか。

「う、上手くないわよ。っていうかバドミントンやったことない癖

に私と同じくらい出来る皆がおかしいのっ、特にアンタ」

僕ですか。っていうか君が一番上手かったですが。

「アサ君微妙な空振り多かったけどね」

「五月蝿ぇ、横に振るもんにしか慣れてないんだよ」

「野球ですね分かります」

茶々を入れる体力は残っているらしいユウヤ、無駄な体力だけ残すな。

とかなんとか談笑していれば其れなりに喋れるようにまでなった面々、ハヤ先輩が飲み物を持って戻って来る頃には皆元気を取り戻していた。回復力抜群かお前等。

こんこん、

「はい、」

其処に響いたノック音。反射的なのか素早くハヤ先輩が反応して扉が開けば、最早見慣れた顧問ことハヤサカ先生がいらっしゃった。

「未だ居たんですか皆さん」

「――ハヤサカテメェ！　俺達に備品移動任して先帰りやがったな

！？」

呆れた、という風な表情を作り溜息を吐いたハヤサカ先生。其れに噛み付くは部長殿。しかしハヤサカ先生は一寸も変わらぬ表情で「帰ってたら此処に居ないでしょう」、と再び溜息を吐いて扉を閉めた。ちなみにサチト先輩が此の言葉の後を紡ぐことは出来なくて、何せ頭良くても馬鹿なんです此の人。

しかし確かに此の教師、僕等が体育館倉庫の備品移動に取り掛かって三十分もしない内に消えたんじゃなかっただろうか。カイトやユウヤ、其れにカトウ達もキョトン顔で先生を見ていれば、机の上にことん、と。何やら長方形の白い箱を置いた。

何処かで見たことある……何の箱だったか。

「――じゃあ、僕はこれで」

其れだけが用事だったとでも言わんばかりに身を翻せば、ハヤサカ先生は無駄の無い動きで部屋を後にしようとする。

「な、何だ？　此れ激物？」

「えぇ！？　爆発すんのサチ先輩！？」

「え、サチト先輩が爆発すんの？」

「箱無視だな最早」

「……あなた達程買い甲斐の無い生徒会は無いでしょうね」

サチト先輩ユウヤ、其れに僕やハヤ先輩のやりとりに呆れた先生

は三度に溜息を吐いて立ち止まった。
激物なんて訳が無い、と常識的考えを持って箱に手を掛けたのはカトウ。上開きの箱を開ければ一度キョトンとして、「あ、」なんて声を上げてから並び立つ僕とフウカ先輩の方を見た。

「ケーキ」

「……ケーキ？」

「えぇ、ケーキが沢山入ってるわ」

其の声に先まで訝しんでいたサチト先輩が箱を覗き込み、つられユウヤとカイト、其れにゼン君もひょっこり覗いて、皆して先生を見る。中身を確認しはしなかったハヤ先輩も、何処か楽しげに先生を見ている。

「――皆で食べて下さい、今日はお疲れ様でした」

「は、ハヤサカ……お前……」

わなわなと震えるサチト先輩、「お前が買って来たのか……？」と尋ねれば、ハヤサカ先生は口角を上げるように珍しくも笑って、ひとつ頷いた。

「――部費で」

『おい！！！！』

感動が半減以下に下がったのは言うまでも無い。

「まぁとにかく、明日も宜しくお願いしますね。とっとと食べて早く帰って下さい」

「少しでもお前に感動した俺が憎い！　へいへいとっとと食って帰りますよ！！」

ハヤサカ教諭は一年経ってもハヤサカ教諭だということが分かり、逆に安心した僕だった。

「じゃ！　解散！　俺鍵返してくっから昇降口で待ってろよハヤ！！」

人数分より多かったケーキに「ハヤサカは数学教師なのに数も数えられなかったのか」なんて呟いたサチト先輩の頭がどうなのか気になった中、何故か人数分の倍近くあったケーキに疑問を抱きながら昇降口にいるハヤ先輩と共に僕とゼン君は、カイト等が自転車を出してくるのを待った。

「ねぇ先輩、あのケーキってさ、」

「嗚呼、ゼンは気付いたか」

くすり、と笑みを零す二人に僕は首を傾げた。

「そりゃ分かりますって、ねぇあっ君？」

何がだ。

「あのケーキの量、――あれ、俺の所為だと思うから」

そう言って笑ったゼン君を見れば、ふと思い出した事実を持ち出して、嗚呼、とひとつ頷いた。

「ゼン君、――甘いもの食えなかったもんね」

「正確には、一部以外食えないってだけなんだけど」

あんまし友達には言わないようにしてんだけど、と付け加えたゼン君を見つつ、ハヤ先輩が笑う。

「ハヤサカ教諭も不器用な方だよ、素直に自分の厚意で買ってきたと言えば良いのに」

「ははっ！　言えてる！　というかアレあの人の自費だよね？」

「勿論。うちの部活の部費なんて残っちゃいない、委員会なら未だしも、あんなに高そうなケーキを山程買える程残してはいないよ」

『皆は甘いもの、食べれるでしょうか』って尋ねられたから、ゼンのことを言っておいたんだ。ハヤ先輩はそう言って、左腕の時計を見遣ってから空を仰いだ。

変わっていないように見えて変わってる、か。否、見えていなかったものが見えてきただけなのか。

どちらにせよ、良い方向に変わることを悪いなど思う訳が無く、僕は先輩につられ今にも泣き出しそうな空を仰ぎ、どうか泣かないでくれと希いながら呆れたように笑った。

３３４＋学校へ行こう！／前

「うっわー、久しぶりに来たな此れ」

「ははっ！　たった一年だというのに実に懐かしいねっ！」

ユウヤでっす！　明日から学校が始まるんだけれどやっぱり面倒だよなぁ、なんて思いながらも、新学期ってちょっとだけ楽しみだったりもするんだよね！

春休み最終日、俺、カイト君、それにユキちゃんの三人は今、懐かしの出身中学の校門前に居ます。休み中に来よう来ようと思ってたのに、皆の予定がなかなか合わなくてこんな遅くなっちゃった。ちなみに勿論アサ君とアスカも誘ってるよ！　……未だ来てないけどね。アスカはもう学校が始まってるらしくって、此処で待ち合わせしてるんだけど――

「よっし、ユキ！　突入だ！」

「おうともさっ！　我等は来賓として中学校に侵・入☆」

「え？　ちょっ、未だ二人来てないよ！？　ちょっとー！！！！」

二人が先走って行っちゃった。……何時の間にか家から消えてた――本屋に行く時だけは驚異的な動きを見せるんだよあいつ――アサ君とも此処待ち合わせなんだけど。

……まぁ、いっか。

俺が二人の後を追い掛けた時には二人はもう来賓入口である二階入口付近に居た、行動力半端無ぇ。

「来賓の時は名前を書くのだよユウヤ」

「言われなくても分かってるよ？」

「ユウヤはそそっかしそうだからね、そう言いたくなるのだよ」

俺そんなにそそっかしいかな……。久し振りに会うユキちゃんは相変わらずな極上スマイルを俺に向けてくれた、嗚呼、これぞユキちゃんだよね。

「――おんやぁ？　其処に居るのは？」

カイト君が来賓名簿に名前を書き、今何時だよと呟いた直後、懐かしい其の声に俺やユキちゃん、其れに名簿に視線を置いていたカイト君も顔を上げた。

「あ！　キクカワ先生！」

「やっぱり君達かっ！　懐かしき教え子達！！」

久し振りに見た女性教師、キクカワ先生が俺達の方に笑顔を振り

撒きながらやって来た。先生は物珍しそうな表情で俺達三人を見遣れば「なっつかしいねぇ……」としみじみ呟いた。

「ご無沙汰しています、キクカワ先生」

「うんうん、其の何とも言えないカッタい感じ、正しくサキネだねぇ」

「良かったなユキ、褒められてんぞ」

「ははっ！　光栄だね！」

ツッコミが居ない現状が蔓延しているけど久し振りなんだから良いんじゃないかな。

キクカワ先生は一年前に担任していた――と言っても実質キクカワ先生が担任した人誰も居ないけど――俺達のことをちゃんと覚えてくれていた、笑顔で会議室行こう会議室、と急かす先生の姿を見ていたら、一番先生が楽しんでるんじゃないかと思えて笑えた。

「もっと早く会いに行てくれたら良いのにー。君達の代って結構白状で、会いに行てくれた子居なかったんだからね！」

「え、そうなんですか？」

何処かふて腐れたように先生は言う。

「いや、中学なんてそんなもんよ？　最初の内は制服姿見せに来てくれる子とか居るもんだけど、どんどん居なくなっていく」

でも、――先生は続ける。

「――一人も来ないってどうよ？」

薄情、ですね。

カイト君は憐れみ、ユキちゃんは爆笑寸前だった。

335＋学校へ行こう！／中

「――にしてもおっそいなぁ、シロちゃんにイツキ君」

続いてユウヤです。

一度此処を出て行ったキクカワ先生は飲み物やらお菓子やら一体何処から持って来たんですか？　な量を会議室に運んで来て、俺達以上にがっつりエンジョイしていた。俺達が来たのが相当嬉しかったんだろうなぁ、こっちまで嬉しくなってきた。

「お二方は忙しいのでしょう、無理にお呼び立てなどしては悪いのでは……？」

「あの二人が忙しい……特にサックラ先生に限って忙しいとかあんのか？」

「イツキ君、早く来ないとかつての教え子達に対しての威厳を失うぞう」

元々あまり威厳とかある先生じゃなかったけどなぁ。……でもそっか、明日から学校が始まるっていうんだからそりゃ教師も忙しいよね、そんな時期に来ちゃって迷惑だったかも。

さっき先生が携帯弄ってたから其れで呼び出したんだろうけど、普通仕事中に携帯見たりするかな……。というかあーや先生なんて携帯持ってるかどうかも危うかったし、見たこと無かったもんで。

「んー、確かに忙しいとは思うけどちゃんと来ると思うよっ！　だって二人にとっての初めての教え子が遊びに来てくれたのに、嬉しくない訳無いからねぇ」

キクカワ先生はそう言って、「私はどんな子でも嬉しいのさ」としみじみ続けた。

――時だった。

バタンッ！！！！！！

凄い音を立てて開いた会議室の扉。防音なんて一切出来ていない此の部屋で、足音なんて全く聞こえなかったのに扉が開いた。……え？　何其れ怖い。

「――よォ、お前達」

でもそんな心霊現象が手近で起こったら俺死んじゃうから！　――そんな気持ちを悟ってくれたのかどうなのか、聞き覚えしかない其の声に俺達は振り向いて、

――そして此の一年で俺が持つ此の人に関する観察眼が鈍っていなければ、此の人――いっちー先生は今笑顔だけれど、完ッ全に、キレてる気がした。

「お！　やぁやぁイツキ君！　おっそかったんじゃあないかい？」

そして其の観察眼は俺だけにと決まっている訳では無く、教え子は教え子でも元・担任教師――カイト君なんて三年間だし――となれば其方の二人の方がより詳しく分析出来るのだろう、カイト君とユキちゃんも一言も言葉を発さず先生を見ていた。そりゃもう我関せず具合抜群に。

だって、いっちー先生の視線――完璧キクカワ先生に向いてるからさ☆

「嗚呼、悪かった」

「本当だぞっ、……ん？　イツキ君って、そう易々自分の非を認めるっけ？」

「キクカワ、ひとつイイ事教えてやるよ。――今日、式準備の担当になってんのは誰と誰だ？」

「……あ」

「――正解俺とお前だろうがクッソ野郎。忘れ物取り行くっつった癖に何餓鬼共と茶ァシバいてんだええキクカワセンセイ？」

「ご、ごめんよイツキ君！　職員室に行く途中皆に遭遇したもんだからつい！！！！」

「“つい”で全て許されたら俺ァキレてねぇんだよ、教え子でも無

ぇ餓鬼の相手を俺一人にさして楽しいか、楽しいのかお前」

「だからごめんってー！！！！」

「なんか……すっげぇ和む光景」

「おやカイリ、奇遇だね。私も同じことを考えていたよ」

「平和だよね」

キクカワ先生には悪いけど、俺達の記憶に残るままの二人の先生にちょっと安心した。

「アスカ君」

「あ、久方振りです、アサキ君」

アサキだけど。

校門前集合って言ってた気がしたんだけど誰も居なくて、聞き間違えたかな、と考え出した頃にアスカ君が制服姿で現れた。もう学校始まってるだなんてお疲れ様。

「……ユウヤ達は？」

「来てない――か、もうあっちか」

首を傾げるアスカ君に視線だけで校内を差し、僕はひとつ溜息を吐いた。確かに僕だって少し遅れて――本屋に行って直ぐ帰って来いってのが無理な話だ――きたけど、たった五分くらい待ってる甲斐性があったっていいんじゃないだろうか。

アスカ君は後者の意見を呑んだらしく、「じゃ、行きましょうか」なんて爽やかな笑みを浮かべた。

皆さん元気ですか？　ええ、馬鹿みたいに元気ですが何か。そうですか、馬鹿なら大丈夫ですね。なんて微笑ましい（？）会話を繰り広げながら僕とアスカ君は久方振りに見た学校内へと歩みを進めた。

こんなに続く気は無かったらしいけど、続く。……何の話？

336＋学校へ行こう！／後

「――誰かと思えば、」

ユウヤ達が先に行ったことに確信すら持っていた僕とアスカ君は、久方振りだし少しくらいぶらつこう、なんてどちらが進言したか覚えていない適当な会話の中で出て来た案を採用し校庭にやって来ていた。アサキだけど。

校庭に現れた不審な二人組、なんてことで教員が出て来たらどうしようか。否、ユウヤは気付いていたか知らないが、此の忙しい時期に手の空いている教員など居る訳が無い。そんな忙しさを逆手に取った僕等は行きたい放題校内をうろつき――素晴らしい、本当に誰にも会わなかった――、屋上から垂れ幕を垂らしている＝もしかして屋上行けんじゃね？　の考えの元屋上に向かってみたら案の定行けたので行って。

「――アヤメ先生じゃないですか」

「嘘、マジ？」

「此の至近距離で疑わないで欲しいですねアサキ君」

校庭に来てみて初めて気付いたことだが、僕とアスカ君は此れでもかと言うくらい校庭に思い入れが無かったので早々に近くの花壇に座った。

ええと……何しに来たんだったっけ？　そう思い口にしようとし

た刹那、優しげな声音を掛けられ、今に至る。
アヤメ先生は両の手に大きなビニル袋、というか赤文字で大々的に“燃える”って手書きしてあるから恐らく燃えるゴミの袋を引っ提げていた。今から焼却炉にでも向かうのだろうか（ちなみに此れは後から聞くことになる話だが、同刻、サクライ先生がキレてたらしい）。

「二人で顔を見せに来てくれたのかな？」

久方振りに見るアヤメ先生の微笑は正に完璧だった、先生こんなに優しそうだったんだっけ。

「二人じゃありませんよ、勿論ユウヤも。其れにカイリ君やユキ君も一緒です」

「嗚呼、皆さんで来てくれたんだね」

先生は心底嬉しそうな表情で、アスカ君に「高校のブレザーですか、其れにしてもアスカは背が伸びたね」なんて遠縁のおっさんのようにちやほやしていた。中学時代はもっとはっちゃけていた気がするアヤメ先生だが、やはり教え子というだけでこうなるものなのだろうか。……嗚呼違ぇ、サクライ先生が居ないから普通なんだ。
そんなことをしみじみ考えている間にアスカ君は三人が先に来ているかもしれない事情を先生に話したようで、

「――嗚呼、だからコクシ先生遅かったのか」

と一人勝手に理解していた。え、何、どうした。

「もしかしたらだけど、キクカワ先生と遭遇してるんじゃないかな

？　後、イツキ先生にも」

「そうなんですか？　だったら話が早いです」

「ふふっ、でも多分、――未だ行かない方が良いんじゃないかなー」

「……？」

アヤメ先生の視線延長線上には校舎があり、僕の記憶が正しければ其処は職員棟じゃあるまいか。僕が後に聞くことを此の時長年の直感ひとつで感じ取ったアヤメ先生は「僕、今からごみ捨てに行ってくるので此処で待ってて欲しいな、久しぶりに少し話も聞きたいし」なんて笑顔を残し去って行き、残された僕とアスカ君に残ったのは無論、

「何があるんでしょうね」

「さぁ」

インタロゲーションマーク――疑問符だけだった。

「あ、アサ君アスカ遅かったね！！」

「おう二人共」

アヤメ先生と職員室の奥の小さな一室でのんびりと談笑――主に僕を抜いた二人が――を繰り広げてから約三十分。アヤメ先生曰く“今は不穏な空気が流れてるから後で行こうか”なんぞと三十分前に言ってのけた会議室にやってくれれば、僕とアスカ君を置き去った三名にプラス、紅茶を飲む其の姿だけなら様になってんじゃねぇの？　と言ってやっても構わない感じの、懐かしくもサクライ先生がいらっしゃった。

「お久し振りです、サクライ先生」

「ども」

「お前等も変わんねぇな」

元教え子に対する第一声が其れってどうなの。

けらけら楽しそうに笑う先生、嗚呼、折角の紅茶効果が台なしである。

「アヤメ、お前もやること終わったのか？」

「其れはこっちの台詞だよイツキ先生、貴方担当じゃありませんでした？」

「キクカワが途中サボりやがったもんでな、罰として後の仕事は任せた」

相変わらずの先輩を敬わない態度に最早感動さえ覚えるよ。
ユウヤに詳細を尋ねたら「キクカワ先生『イツキ君の鬼っ！』って言ってたけど、いっちー先生は鬼より酷いよね」なんて漏らしてすかさず叩かれていた。阿呆なのかな。

「――にしてもお前等、何今更、しかも此のくそ忙しい時にやって来たんだよ」

『ユウヤの気まぐれ』

「ですね」

「えぇ！？　俺オンリー！？」

アスカ君の爽やかな笑み、其処からのユウヤの叫びが木霊しそうなくらい響いた。
サクライ先生はサクライ先生で予期でもしていたのか苦笑しただけで、恐らくキクカワ先生をパシって持って来させたのだろうティーセットを何の気無さそうに見つめていた。

「気まぐれでも遊びに来てくれるのは嬉しいことだよ。ね、イツキ先生？」

「まぁ、俺等が別に飛ばされる前で良かったなぁ？」

「またそうやって……、貴方は素直に喜べないんですかね」

「別に嬉しくも無いだろ、こちとら忙しいんだっつーの」

イロイロ正反対なこと言ってる先生達だけど、面白いから放っとこ。

けれどサクライ先生の言う“くそ忙しい時期”というのもまた事実らしく、二人は其れから一時間もしない内に何処かへ向かうらしかった。

「また何時でも来てね。もし学校飛ばされても自宅は変わらないし、僕の家ならイツキ先生も良く居座りにくるから遊びに来てくれて良いよ」

にっこにこの表情のアヤメ先生にそう言われたのに対し、サクライ先生にはたった一言、「じゃあな、餓鬼共」の言葉だけだった。まぁ、先生らしいというか。

「先生達変わってなかったねー」

校門を出て直ぐ。

ユウヤが楽しそうにそう言い、其れに反応したのはユキで。

「世界には変わってしまうものが幾つもある、何時の間にか変わらないものの方が少なくなってしまっているのもまた事実さ」

「そう聞くと、先生達には今も昔も、あのままで居て貰いたいものですね」

ユキの言葉を拾い上げたアスカ君がそう言って、カイトが何故か

吹き出した。

「あの人達があのままだと、ちょい大変な気もすっけどな」

特にサクライ先生ですね分かります。

まぁでも、

「良いんじゃないの、このままで」

時代も季節も移り変わりゆく世の中だけど、あの人達にはそんなモノに翻弄されて変わってなど欲しくないし。

僕の意味深な一言に各々若干の反応を見せながら、僕等はまた新たな道へと歩き出す訳でした。

嗚呼、新学期面倒臭い。

337＋相も変わらず新学期スタート。

リョウコです、完全に久し振りっていう感覚になってます。……其れが何のことなのかは知らないけれどね！

「リョ、ウ、コーお！　おっはよーお！」

「ひゃあ！！　……て、テナ！！　だから後ろから急に抱き着くんじゃないっての！」

「えへへ、ごめんなさあい」

パッと離れたテナは其処はかとなく楽しそうで、一体何が彼女を笑顔にしているのか分からない程元気だった。

「良いでしょお？　此れはテナ流の挨拶なんだからあ」

「……はいはい」

人差し指を突き立て自慢げに語るテナ、……もう何とでも言ってくれれば良いわ。

朝からこんなテンションのテナにぶち当たらないといけないのは大変だとは思うけど、やっぱり友達だから嫌じゃないのよね。新学期入ってクラス替えがあったけど、私はこうやってテナと同じクラスになることが出来たからちょっと安心。ミノルとは離れちゃったけどね。

そして後のメンツはといえば、

「あ、カイちゃんおはよお！　ゆー君はあ？」

「おう、はよー。あいつなら部室寄るとよ」

コイツとかソイツとかだったりするのよ。

「ようリョウコ、はよ」

「ええ、おはよ」

ロクジョーカイリとヒコクユウヤ、二人とは二年連続になったわ――よりにもよって五月蝿い二人よ――。

クラス替えの発表掲示を見た時はヒコクユウヤに『リョウちゃん俺と同じクラスな限りアサキと同じクラスになれないよね』と憐れんだ視線を送られ、ロクジョーカイリには『五年目にして一度も同じクラスにならないリョウコ』とからかわれ、ミノルには『代えるべきだな、此れはリョウコを一組にすべき』と本気トーンで言われた。――三人して其れしか言うこと無いのかしら……！

ちなみに。

私のクラスは二年三組。ヒコクアサキは一組で、ミノルとワタヌキゼンが同じクラスだったみたい。

で。

「……どうかしたのヒコクアサキ」

「考え事」

「……そう」

普段なら一目散にクラスに行く彼、今年も一組――確か中学もずっと一組よね――だったヒコクアサキがロクジョーカイリの横に棒立ちしている。何考えてるのかしらね。

「やっぱさぁ、――俺様的にはこうもクラスが被らねぇお前凄ぇと思うんだよな」

「――はい！？」

急に何言い出すのよ！　というか本人目の前なんだけど！？

「だって五年だろ？　五年間クラス一緒にならない確率って何パーくらいなん？」

「私が知る訳無いでしょ！？」

「何が？」

「何でも無いわよ！！　アンタはそのまま考え事してなさい！！」

ヒコクアサキは素直にも再びぼうっとし始めた。少しは興味持っても良いじゃない――其れはちょっと理不尽かしら――。

「ええっとー、三組中一緒になる確率は1／3だろー？　じゃあならない確率は――駄目だ俺には無理だ」

諦め早いわねアンタ。

「テナも数学は苦手だからあ、やっぱりあー君が計算すべきだよお」

「え、何が？」

「何でもない！！」

ヒコクアサキにばかり話を振るな馬鹿！

律儀にも私の言葉にそう、と興味を失わせる彼はとても器用で、

「あ」とひと音奏でれば考え事が終わったのか、のんびりした感じで無言のままクラスを後にした。……嗚呼、そういえばもう春だったわ、今年も彼はやはり彼なのね、毎年何に耽ってるのかしら。ちょっと気になる。

「というかロクジョーカイリ！　アンタ何本人の前でそんな話始めたのよ……！！」

けれど考えたって分からないのは分かってる、だったら今は目の前のややこしい生き物の真意を探るのが先だわ……！

ロクジョーカイリは何時の間にやら携帯を取り出していて、返って来た返事といえば「何が？」だった。……いや、何が、って、……私が聞きたいのよ！！！！

「だから！　ヒコクアサキの目の前で何馬鹿な話――」

「だーいじょうぶだって、あいつのお前と自分に関する鈍感さは世界一だから」

其れは悲しい程に理解してるわよ。

「其れにな、――今のあいつじゃ普段気付くもんにも気付かねぇよ」

ぱたん、と携帯を閉じてポケットに捩込もうとしながらロクジョーカイリは言って、小さくながら一度溜息を吐いた。

「毎年よくもまぁ現に浮されたもんだ、此の時期だけだぜ？　アサキが遅刻しねぇの」

「確かにねえ、最近のあー君何かほやほやしてるよねえ」

「だっろー？　ま、放っときゃ治るから良いんだけどなー」

数年前じゃあ考えられない緩い考えをロクジョーカイリが吐く、慣れって凄いわね、かくいう私も若干慣れちゃったんだけど。

「とりあえずアサキのことはゼンが見ててくれるだろうから問題無ぇよ、其れよかもっと大事な問題がある」

自分の意見で納得したように数回頷いた後、ロクジョーカイリは無駄に真剣な顔で私とテナを見た。

「――今年度、勉強教えてくれる奴がクラスに居ない……！！！」

――嗚呼そう。

「大問題だよおカイちゃん……！！」

「え？」

「だろ！？　アサキもゼンもミノルも居ないって此れアレか！？
新手のイジメか！？　リョウコは教えちゃくれるが教え方雑だしよー！！」

「なっ、ちょっ、誰が雑ですって！？」

此れでも教師目指してるんですけど！！
其れは恥ずかしくて言えないけど、確かに今年の一組、頭良いの揃ったわね。

「あー、部活中に聞くっきゃ無ぇな……」

「テナはリョウコに聞くからねえ？」

「……えぇ、分かったわ」

ちょっと羨ましいというかなんというか、頭が良い人って大変なのね……とちょっとだけ思った私だった。

「で、さっき誰かにメールでもしたの？」

「んぁ？　嗚呼、ユキに確率計算しといてって頼んだ」

進学校の頭脳に何させてんのよアンタ。

338＋稀有な人。

新学期になっても素敵にカッコイイゼン君だよ、最近誰も反応してくれなくなったけどゼン君はめげない。

さて、二年になりまして一組に配属された訳よ。あっ君と同じクラスって何だか楽しそうだけど、他とは皆別れちゃったなー。あ、ミノルちゃんは一緒か、ゼン君女の子と一緒とかマジ大歓迎なんだけど。

担任がハヤサカなのも何だか楽しそうだし結論的にはなかなか良いクラス変えになったんじゃないかなー、なんて思っています席はクラスの一番端っこ。毎回のことだけどやはり此の席楽だよな。

「ゼン君」

「ん？」

何処の可愛い子が話し掛けて来てくれたのかと思いきや、其処に居たのは珍しくもあっ君だった。……此の人が自ら俺の席まで来るなんて稀よ、稀――まぁ席はひとつ挟んで隣なんだけど――。

「どったのあっ君」

「話」

がたん、と無遠慮に俺の前席の椅子を引けば座り、そうやって簡潔にものを述べた。

「うちの部活に入れたい奴が居るんだと」

「え？　何其れ何其れ」

入れたい奴って誰だろ、此の時期だから後輩かな？　っていうか“入れたい奴が居る”――って、誰かが誰かを入れたいって？

「正確には生徒会の方かな。何かそんなこと言われた気がする」

何で肝心なとこ曖昧なのよ君。っていうか、

「生徒会に入りたいなんて人間が此の学校に居ただなんて、其れだけで充分奇跡的だよ」

っていうね。

「自主性を重んじる学校の癖に自主性が無い人ばっかりだから俺達みたいのが生徒会やらされてんだよ？　本当其処だけはＧＣ部創立代方に文句言いたいよ」

「言っとく」

「え？」

「でさ、」

「あ、うん、何？」

言っとくって誰に言っとく気なんだろう、と若干気になったけど、とりあえず話が続くみたいだからそっちを聞くことにする。

「別に自分から入りたい訳じゃないと思うよ、そいつ」

「あ、そなの？　つーか此処まで来たら聞くけど其れって誰？」

そろそろ次の授業も始まるし、其れだけでも聞いておきたいじゃない。

「ん、ムラサメの弟さん」

「……ムラサメ？」

……此れはもう一回聞いた方が良いかな。

「あっ君。――ムラサメ……って誰？」

全力で聞き覚えが無かった。

ええと、ムラサメ、ムラサメ……あ、もしかして違うクラス？

元一組とかの。

「――わたし」

「！？」
「ムラサメ」

そして其の問いに答えてくれたのはあっ君と、とある声――主に俺の右肩付近からから――の二人（？）だった。正面のあっ君はそりゃびっくりしないだろうけどゼン君的には心拍数運動後くらいには上がった気がしたよ。

振り向けば其処に女の子がひとり、制服姿だし足もあるからただの女子高生みたいだよ、マジで良かった。

「え、えーっと、……ムラサメサン？」

「そう、ちなみにあなたの横の席に居るつもり」

「そして僕とも隣の席」

「マジかよ」

此処か、此の席か。俺は隣の席を凝視して精一杯笑顔を保った。俺としたことがまさかの同じクラスの女の子を覚えてなかったようだ、不覚、不覚中の不覚。しかも隣て。

「……ごめんね！　ムラサメちゃんのこと視界からアウトしてたっていうかゼン君の視界は常人以外と言いますか！！」

「構わない。しかし其れを利用させて貰えるならば代わりにわたしのお願いを聞いて欲しい、生徒会副会長のあなたに」

許す意味を込めてか非常に似合うボブカットを揺らすように何度か頷き彼女はそう言った。出来れば肩口から前に回って欲しいんだけどな、ゼン君の身体捻れる。

声にはしっかり抑揚がついてるから平坦って訳ではないけど、何かフウカ先輩みたいな子だなー。……フウカ先輩よか気難しそうだけどね。

しかしお願い、というのはさっきあっ君が言ってた弟君とやらのことか――っていうかそういや俺生徒会副会長なんだっけ――？うちの学校の場合生徒会に立候補する奴なんざ絶対居ないから、うちの部活入れば今年度ほぼ確定的に委員会なんて入れるだろうけど。

「んーと？　弟君を生徒会に入れたいの？」

「そう、わたしの弟を是非あなた達の所属する部活、尚且つ生徒会へ所属させてあげて欲しい」

「そりゃ別に構わないけど、……そんなの姉ちゃんに頼まなくったって自分で来ればいいのに」

あっ君に視線をやりながら「ねぇ？」と同意を求めて見れば、あっ君はひとつ溜息を吐いて視線をムラサメに送った。

「そうもいかない――んだっけ？」

ムラサメはひとつ頷く。

「あなた達の所属するものに所属させたいのはわたしの意志であり、弟の意志では無い。弟は恐らく、如何（いか）にすれば部活動の幽霊部員に

なれるのかを試行錯誤しているはず」

「……は？」

「自宅で」

……ちょっと待て。じゃあ何か？　ムラサメちゃんの弟君は別にうちに入りたい訳じゃなくて、……え？

「何で？」

「其れは何に対しての問い？」

「嗚呼ごめん、えっとさ、――ムラサメちゃんは、何で弟君をうちに入れたいの？」

ムラサメちゃんは意味を理解して再び口を開く。

「理由は話せば長くなる。わたしの弟は小中と学校に行っていなかった、所謂引き篭り」

そしてすんごい爆発真顔で投下してきたよ此の子。

「其れ、原因は？」

「イジメなどがあった訳では無く、弟は重度の恥ずかしがり屋」

あっ君も此処いらの話は聞いてなかったみたいで口を挟んで来るけど、……え、恥ずかしがり屋さん？

「重度の恥ずかしがり屋でかなりの人見知り、無理をすれば真っ赤になって倒れる程」

そりゃ凄ぇ。

「だからずっと母やわたしにくっついていた、でも高校に行かせるかどうかで悩んだ両親に弟が『頑張ってみたい』と言った。わたしはそんな弟に協力してあげたい」

格好良いじゃん弟君。でもさっき幽霊部員になるとか……あれ？

「部活動もそうだけれど、クラスで友達だって作れるかどうかも不安。だからせめて、他人側が弟に声を掛けてくれられるようにしたい」

「で、考えて出た結果が生徒会、って訳ね」

ムラサメちゃんが頷いて、荒療治、と一言。

確かにかなりの荒療治とも取れる。何せ生徒会なんて、書類とかの他は生徒や教師と話してなんぼだし。

「……どう？」

ムラサメちゃんは不安そうに首を傾げ、俺とあっ君は視線を交わす。一年の付き合いではあるけれどまぁまぁ深い付き合いであるからして、あっ君の視線の意味は“いーんじゃねぇの？”が正解で間違い無いと思われる。

そして俺が其の返事をムラサメちゃんに返そうとした時、丁度授業開始のチャイムが鳴り響いた。いかん、次移動だった。

「とりあえず、此の話は後程」

ムラサメちゃんもあっ君も、テキパキとした動きで移動し始めていた。どうでもいいとこ真面目なあっ君もそうだけど、ムラサメちゃんもなかなかの真面目っ子そう、うちのクラス真面目ばっかかい。

っていうか、うちの部活に後輩……？

――うん、面白そうじゃんね？

339＋少年よ、大志を抱け？

「へぇ、其れは凄いじゃないか」

ただ今現・生徒会室では無い方、と回りくどい言い方をしてみるゼン君だよ。此の前の話を前例稀に見る元気さが伺えるハヤ先輩にしてみたら、相変わらずの笑みでそう一言返って来た。

「新入部員は一人でも居た方が良い」

「まぁ、そうなんですけど」

常に部員ギリギリというか、先輩達の代で一時三人になったっていうのに此の人は、今年も勧誘らしい勧誘を一切行っていないという素晴らしさ。なるようになれば良い精神で本当、良く此処まで部（又は生徒会）が成り立ってたもんだよ。

「其の話、サチトとフウカには？」

「いんや未だ」

「部長はサチトだし、ちゃんと話しておいてくれよ？　――にしても、」

首を横に振る俺を苦笑して見れば、先輩は机上に置いていた眼鏡を掛けて現・生徒会室でない――部室を見回す。

「――此の状況じゃあ其の一年生も、至極入り辛かろうな」

しみじみと、そう呟いた。

入口から見て右ソファ、其処を洩れなく陣取って寝てるあっ君に、俺達から二歩程度の位置にある備え付けのデスクトップＰＣに無言でかじり付くカイ君、そして左ソファではかちかちという効果音を奏でつつも、ヘッドフォン装着済で黙々と携帯ゲームに勤しむゆっ君が居て。

――今の彼等に俺達の話が通じている可能性は限りなく零、要するに。

「来たことに気付いて貰えなかったりしそうっすよね」

「充分に有り得るだろう」

というかね、其れは三人にだけ言えた訳じゃなくて――寧ろ此の場合あっ君は例外で――、俺やサチ、フウカ先輩でも有り得ることで。

――大音量でゲームしてて、来客に気付かないなんてことが有り得る部活だっていう。

「お前の話じゃ、其のムラサメさんの弟君はとても慎ましやかな子なんだろう？」

「ん、そうみたいです」

「もし今此の場に俺とゼンが居なかったとして……ゲーム的難易度に置き換えてしまえば、ランクSS（ダブルエス）はくだらないな」

「冒険者どころか間違いなく村人Aなんだけどなぁプレイヤー」

本当、もう少しフレンドリィな環境が作れないものかね此の部活も。少しでも勧誘チックなことをしてれば、其れは其れで入り易い気もするんだが。

「迎えに出向いてやれば良いんじゃないか？」

「あー、なる」

確かに其れもそうだ、しかしムラサメちゃん曰く『弟の性格をどうにかする為』の処置なんだし、最初の一歩は本人に頑張ってもらった方が良いと思うんだよな俺。

そんな心情を吐露すればハヤ先輩は頷いてくれて、何かの力が働かない限り開かない扉に視線をやれば、「気長に待つとするか」と、そう言って背凭れに身を預けた。

何事も最初が肝心って言うじゃないか。最初を頑張ったら、後はゆっ君みたいな世話好きがどうにでもしてくれるだろう？

だから頑張れムラサメ弟。――姿も知らぬ少年にエールを送り、俺は唯一空いているソファへと腰を下ろした。

３４０＊閑話＋大分久方なコーナーです。

忘れた頃にやってくる閑話コーナーですやっぱりこのコーナー絶対要らない気がしますアザイです。

「同意」

「え！？　良いじゃんこのだらっだらコーナー！！　――凄く楽じゃない？」

楽って言っちゃったけどねこの人。

はい、という訳で３００……何話です、何時も更新する時見てるはずなんだがな、忘れたったら忘れたわ。

「３４０話でしょ？」

何故知ってる。

「カンニング」

でしょうねアサキ君。

ええと、細かいことはもう何だっていいんだよ、とりあえず――今回何する？

「え、キャラ紹介は……？」

え？　あれそろそろ飽きない？

「飽きるなら最初からやんなよ……」

ていうか、結構前から思ってたんだよねー。キャラ紹介は――まとめて何処かに収納した方が楽なんじゃないか……って……。

「……」

「……うん、――じゃあ何でやった……？」

……勢いで……やること無くて……。

「……」

「……うん、そっか……」

……うん。

はい！　仕切り直して！！

作者ぶっちゃけますが、朝夜はもう二年くらいは続きます。作者に計音が無い限りは恐らく。……でもまぁ、逆に言えば二年で終わる訳ですがね。

「要するに高校卒業で終わりってこと？」

そういうことー。

「やっと終わんのかよ」

こ……の主人公……！

「怒っちゃ駄目よアザイさん、アサ君の性格の2／3はアザイさんなんだから」

……。

まぁともかく、もう二年の歳月です。もう二年だけ数少ない読者さまにはお付き合い頂ければなぁ、と思います。――そしてそこからやらかすつもりです。

「「何を」！？」

そこくらい内緒にしようよー、そうしないとつまらないでしょー。

「ま、まぁそうだけど」

「僕興味無いから帰って良い？」

「え、何処に帰るの？」

もう帰しとけ、土とかそこら辺に。

「でさ、今回は何する？　閑話始まって以来最大のぐだぐだ加減だけど」

そうだね、ユウヤが仕切り出したくらいだもんね。

「間違えた、閑話始まって以来最大に作者がやる気無いんだ」

疲れちゃったんだもん、このままユウヤがやれば？　何時もやりたい放題騒いでんだからたまには仕切り役とか良くない？

「いんじゃね？」

「あーもう！！　そこの二人組ましたら面倒じゃん！！　良いよ！俺が頑張るから！！」

パチパチパチパチパチパチ（※拍手）

「……」

「アサ君に至っては無言だからねっ！　ちっくしょー！　カイト君何でアサ君と友達やれてんのかな！」

「だから別に友達じゃなくて赤の他人」

「それ馬鹿に懐かしいよ……！」

確かに懐かしいな、僕も忘れていたフレーズだよ。うんうん。

「アサ君本当、なんやかんやでアサ君と一番長い付き合いなのカイト君なんだから大事に――て違ーう！　今そういう話じゃなくて！　今後の閑話のありきな話――」

だから思ったのよね、“アリスパロ凍結解除”で良くね？　って。

「……嗚呼、そう？　……書けるの？」

……多分。

「――じゃあ良いじゃん！　だったらもう話し合わなくたって全然オッケーじゃん！　ていうか俺がツッコミって超おかしくない！？　前々と閑話見直してみたけど作者途中からボケ過ぎだから！！！！」

べっつに良いじゃないっすか～、作者だってボケたいっすよ～。

「最早キャラを見失ってるんですけど！？」

「まぁまぁ」

「アサキもせめてこっち見て言おうか！　視線が完全にテレビだぞう！！」

さて、という訳で次回の閑話は不思議の国で居眠りしているユウヤ君をそろそろ起こそうと思います。ずっと寝てるからね。これ何時以来なんだか。

「１２０話」

だから何で知ってんの。

「カンニング」

ですよねー、――あれこれデジャヴ？
キャラ紹介の方はこれからまた暇があったりした時、おまけとして載せてければ良いかなーと思います。あっはっは、別に知りたがる物好きも居ないでしょうし、ロウペースで良いですよね。

「怠くなったんでしょ、作者だし」

「アザイさんだもんね」

そうそうあっはっは――畜生言い返せねぇ。

という感じで今回はお開きにします、それではまた次の閑話にて！

「え？　次からパロディならアザイさん居なくない？」

あ。

３４１＋平日の出来事。／前

「そういえば二人って、ＧＷ出掛けるの？」

「ＧＷ？　んな飛び飛び連休で何処出掛けろってんだよ」

「連休って言っても三日でしょ？　妹なんて土曜日も学校行ったみたいだし、うちは何処も行かないかしらね」

ユウヤでっす、カイト君とリョウちゃんの話を聞いてみれば、何処の家も俺とあまり変わらないんだなぁ、と思った。いや、うちの場合皆居ないから出掛けるも何も無いんだけどさ。

今日は連休の間の平日だから、なんだかカイト君はだれてるし、リョウちゃんもちょっとお疲れ気味。だったらこうやって部活に来ないで帰って寝れば良いと思うのは俺だけなのだろうか。

「ユウヤー、そっちなんかあるー？」

只今俺は一人給湯室に居る。

さっきカイト君にそう声を掛けられ、紅茶くらいならあることを言えばそれで良いらしく、俺は黙々と三人分の紅茶を淹れていた。

ううむ、今日は暑いからホットよりアイスだろうか、冷凍庫に氷があるかどうか確認してから淹れれば良かったなんて考えていれば、リョウちゃんには「アンタ高校で何してるのよ」と普通にツッコまれる始末。……確かにねっ！

「ユウヤー」

「あー、はいはい、もうちょっと待ってカイト君。もう少しでこの固まってしまった氷を砕く――」

「まぁ別に砕いてからでも良いんだけど、お前の携帯から聞いたことあるクラシック鳴ってんだけど」

「……え？」

――何で俺の携帯からクラシック？

リョウちゃんが代わってくれたので戻ってみれば、確かに俺の携帯から聞いたことあるくっらーいクラシックが流れていた。ええと、前は黒電話になってたんだよなぁ……一体誰が何時変えるというんだい？　なんてこと考えなくても犯人は分かってるし、別に俺も怒るつもりはさらさら無いから気にしない。

躊躇うことなく其の犯人からの電話――何やら怪しい言い回し――に出る。

「もっしもーし、ていうか此の音楽何？」

『ピアノ・ソナタ第１４番、嬰ハ短ちょ――』

「良い、聞いた俺が馬鹿だった」

電話越しのアサ君は別にクラシックに詳しい訳じゃなかったはずだから、恐らくまたｗｉｋｉ先生にでも頼ったんだろうな。っていうかもう何でも良い。

「其れで、どうかしたの？　そういえば授業終わってからもう暫く経つのにゼン君もアサ君も来な――」

『部室の前にさ、誰かが立ってんだよ』

……ナヌ？

立ちっぱで会話を始めた俺を訝しんだカイト君が会話を聞こうと立ち上がり、無事冷たい紅茶を淹れてきたリョウちゃんも不思議そうに俺達を見ていた。

「……誰か、って？」

少々遠い位置から、『多分ムラサメちゃんの弟君だと思うんだけどさー』なんて暢気な声が聞こえてきた。何だ、ゼン君も一緒か。

「え？　何の話？　……あ、前言ってた人？」

休みの間にアサ君から聞いた話を思い出す。一組の子の弟がうちの部活にうんたらかんたら（※略）。

無言の肯定を受けてからカイト君に視線を送れば、カイト君は不思議そうに入口の扉を見た、……其処に居るのかな？

「で？　其の子招いちゃった方が良いの？　っていうか何、それと二人がなかなか来ないことに何か関係あるの？　『入部希望の人ですかー？』とか言って中連れてきちゃえば良いのに」

『其れが出来てりゃ僕とゼン君が此処で三十分も張り込んじゃいねぇんだよカス』

「三十分？　――三十分！？」

「はぁ？　何んだよ其れ、三十分も燻ってんのかよ新入生」

カイト君は呆れて物も言えないと言った風に溜息を吐いた、リョウちゃんは苦笑しただけだったけど。

『ムラサメが言うにはその、“弟の性格を荒療治で治したい”ってことが目的な訳』

遠くから『性格というか最早性質だよね』なんて台詞も聞こえた。

『だから此処は僕等が声を掛けるより、自分で一歩を踏ませた方が良いんじゃないか――って、ゼン君と僕が話したのが、……三十分前』

どうやら其の弟君は、未だ其の始めの一歩が踏み出せない模様。

『其れに僕とかゼン君が声掛けたら逃げちゃいそうで、特にゼン君なんてただの不良じゃん』

『其れをいうならあっ君だってただのねく――』

……ゼン君の声が途中で途絶えたのと鈍い音が響いたのは偶然じゃないはずだけど、俺は気にしないことにした。

「それで？　どうするのさ、このままじゃアサ君達今日一日ずっと其処だよ？　っていうか此の会話其の子に聞かれてたりしないの？」

『其れは大丈夫なんじゃないかな。僕は若干目悪くて見えないけど、延々とあたふたしてる雰囲気だけは悟れる』

三十分懲りずにあたふたしてるのっていうのも凄いと思うよ俺。

「そんなに時間食ってるなら、そろそろ声掛けて上げても良いんじゃない……？　話を聞いた限りじゃそれだけでもとっても頑張ったみたいだし、招き入れる時くらい優しく声を掛けてあげても……」

紅茶を片手に首を傾げるリョウちゃんの提案は、きっと皆にとって魅力的なんだろう。俺もそう思うんだけど……。

恐らく電話越しにも届いたであろう其の提案に対しての返答を聞こうと待ってみると、『……』と、声はしないけど何となく、言い淀んでいるアサ君の気配があった。

「……アサ君？」

『さっき言った通り、容姿の問題でゼン君は使えない』

「うん、驚かしたら逃げちゃうからってことだよね」

『……』

「？」

『……どういった風に？』

「ふ？」

『――彼にどういった風に声を掛けるのが最適、というか、』

アサキはひとつ言葉を於いてから、アサキを知っている人なら誰しもがそうとしか答えられないような問いを、俺にぶつけた。

『彼に声を掛けるのは一向に構わないんだけど、表面上のみにしたって、優しさの篭った言葉を吐くこと――僕に出来ると思う？』

「……」

「無理だな、」

あくまでも“表面上”という言葉の意味のみで、カイト君は即答した。

３４２＋平日の出来事。／後

という訳で現・生徒会室にやってきましたアサキです。何がどう伴ってこうなってしまったかは分からないが、何時までも廊下で立ち尽くすのも疲れたし、だったらこっちに来てみようと言い出したのは脇腹を押さえているゼン君で。どうしたんだろうか、……嗚呼、僕が肘入れたんだっけ。

「え？　つーことは其の下級生放置してきたのかよ！？」

「そうだよ悪いかサチトの癖に」

珍しくも此方に居たサチト先輩とフウカ先輩――ハヤ先輩が居ないのが――に先の出来事を話せば、驚いた表情でサチト先輩が立ち上がった。

「おま、とっとと声掛けてやれって！　何で冷静にこっち来た！？」

「何か声掛け辛くないですか」

「いや、そうかもしれないけど其処は上級生のお前達が頑張って――」

「うるせぇ黙れ」

「知ったような口を」

「……あれ？　俺って部長でこいつ等よか上級生だよな？」

泣きそうなサチト先輩をフウカ先輩が真顔で慰めているが、僕等は一向に気にしなかった。

「中のユウヤ君達に、声を掛けてもらうのはどう？」

「……無理だと思います」

「あの三人じゃアドリブ効かないっていうか」

絶対に白々しくなる。

特にユウヤなんかに今更招けなんて言ったら、

『あ、あーっ！　今気付いたけど君もしかして入部希望の子かなー!?　今気付いたけど!!』

とかなること間違い無しだ。そして自慢じゃないが此の僕もそういうのは得意でない、どうだ参ったか。

「じゃあ俺が声掛けるか」

「えー、さっちゃん頭悪そうだから駄目だよ」

「んだとゴルァ!!」

「確かに」

「私もそう思う」

「じゃあフウカッ！　お前が行って来いよ！！」

「私は三次元の人間に好意的な感情を向けるスキルを持ち合わせていないから無理」

「……え？　何て？」

いや、本当もうどうすんだよ。

「ていうか、未だ居るんかね」

「どうなのかしら？　元々扉の前、っていうより近くをうろうろしてる感じなんじゃない？」

戻ってユウヤですが。電話が切れる直前、

『お前等はともかく何もすんな』

と言われたので一向に何もせず、俺達はのんびりぐだぐだ日頃通りの部活に勤しんでいます。寧ろこんなんが部活として成り立ってるって本当凄いよね、ＧＣ部作った人尊敬するよ。（※マヒル兄です）

「でも良く考えたら、俺達も帰れないよな」

あ、確かに。此れで外出てばったりとかになったら大変気まずいっすもんね。……あれ？　じゃあ此れ袋の鼠的な？

「んー、まぁでも流石に部活終わる時間になったら弟君も帰るんじゃ……？」

「え、帰っちゃって良いの？　其れじゃあ折角勇気出して此処まで来た彼が可哀相じゃない」

「いやでもさぁ」

「ちょい待ち」

唸るように今後のことを考えていれば、俺とリョウちゃんの会話に人差し指を口元に携えたカイト君が割って入る。静かに……って、ん？

「どうかしたの？」

「多分――話し声？」

俺とリョウちゃんは視線を一度合わせてから、とうに扉を凝視するカイト君を見て、つられ扉へと視線を持って行く。話し声……だと？

『――……』

『――』

確かに聞こえる――気もする、うん。此の、何て言うのかな。見てはないんだけどテレビ付いてるのは分かるみたいな、そんな感じ。会話内容は分からないけど、喋っている事実だけが確認出来た。……直ぐに止んだけどさ。

ガチャ、

「それじゃ、また休み明けにな」

『……ハヤ先輩？』

突然開いた扉から入ってきたのは、我等が生徒会長ハヤ先輩だった。間まで完璧に三人でハモってしまった。

「……何だお前達、居たのか？」

「はい、ずっと居ました。――ところで先輩！　今喋ってたのって……」

キョトン、と表情を無にしてから苦笑を見せた先輩は、机に荷物を下ろすなり「嗚呼、ムラサメ君、だろう？」と小さく首を傾げた。

「ハヤサカ教諭に呼ばれてたもので、今日の（生徒会の）仕事は二人に任せていてな。時間もそう無いがこっちに――」

「――そっ、そうじゃなくって！！　ムラサメ君？　に何て言ったんですか！？」

ハヤ先輩は再びキョトンとして、俺達の視線に気付けばふっ、とひとつ、柔らかい笑みを零した。あ、今の表情超イケメン。

「此処から少し離れた場所に突っ立ってたもんだから、声を掛けただけだ。其れだけなのに逃げようとするものだから、もしやと思ってな」

嗚呼、ハヤ先輩でも逃げられかけたんじゃ無理だわ。

「後は、『折角来てくれたのに皆気が利かないな』てのと、『こんな部活じゃ戸を叩くのも一苦労だろう』てのを話して、」

まぁどちらも凄い勢いで首を横に振られたが、はは、と乾いた笑みを浮かべハヤ先輩は言った。……どうやらムラサメ君は大分謙虚な模様。そりゃ聞いてはいたけどさ。

「で、今日は遅いから、また休み明けに来てはどうか？　と俺が提案した。折角来たのにゲームひとつ出来やしない時間だし、皆でやれば直ぐに打ち解けられるだろうしな」

実にホッとしたであろうムラサメ君の表情が思い浮かべられる。まぁ俺、ムラサメ君知らないんだけど。

「――という感じか？　最後は若干ながら微笑んでくれたな」

「はい、充分です」
「流石っす先輩」
「一生着いて行きます私」

「……？」

ド緊張してる少年を、ナチュラルに救ったんだよ先輩……流石だよ先輩……！

そして此の話は直ぐさまアサキやゼン君に知られ、先輩の知らぬ場所で先輩の株が急上昇していくのであった。

「そうそう、休み明けの部活は入口の扉開けておけよ。ノックするのは勇気がいるみたいだからな」

「了解しました！」

流石っす先輩……！！

３４３＋議題：今年のＧＷはどうしますか？（前書き）

会話だけでお送りします。

３４３＋議題：今年のＧＷはどうしますか？

ワタヌキ宅。

「はぁ？　今何て？」

「だぁかぁらぁ、海外にいらっしゃるアタシのダァリンからメールがあってね？　『ＧＷは帰れないけど、夏休みに帰れたら帰るね』――って愛のメッセージが届いたのよ」

「嗚呼そう、義兄さんが帰って来るのは大いに喜ばしいことだ。……で？　の次何つった？」

「あなたどうせ暇なんだから、ミヤを何処かに連れてってあげてくれない？」

「……は？」

「いやぁ、アタシだって出来れば自分が何処かに連れてってあげたいのよ？　でもウチ、ＧＷだってのにろくすっぽ休みくれないし、今日だって一日家ん中掃除して終わっちゃったし？　其の点マイリトルブラザー、あなた暇でしょう？」

「何言ってんの？　馬鹿なの？　しぬの？」

「ミヤはアタシに似て可愛くて良い子だから――」

「違うからね、あんたじゃなくて義兄さんに似たんだからね、あんたには可愛い要素も良い子要素も無ぇから」

「――文句ひとつ言わないけど、きっと何処かに出掛けたいと思うのよ。だってGWなのよ？　ミヤは未だ保育園児、小さいのよ、遊びたい盛りなのよ、分かるでしょ？」

「そーですね」

「けどママであるアタシは遊びに連れてってあげられない。本当に苦しい」

「そーですね」

「だからアタシは恥を忍んで頼んでるのよ、昔は可愛かったのに今や全ッ然可愛くなくなった弟に――」

「あ、今のダジャレ？　ゼンだけに」

「……あなた本当にアタシの話だけはちゃんと聞かないわよねぇ」

「だって価値が無いじゃん。世界中に居る女の子達を一としたら、姉貴なんて最早地球上に存在してないから」

「あなたねぇっ！！」

「わーってるっつーの」

「何が！？」

「ミヤはちゃんと遊び連れてく、何の為に俺が居ると思ってんの？」

「……ゼン……」

「俺はミヤのことを義兄さんに頼まれてるから此処に居るだけ、じゃなかったらとっくに一人暮らししてるし」

「――あなたが居るのは、お姉ちゃんが大好きだからでしょう？」

「……お前の頭蓋カチ割ってやろうか」

フドウ宅。

「お兄ちゃん、お電話光ってたー」

「え？　あ、携帯すか。ありがと、ソオ、……あ、ゼン君」

「ゼン君から？」

「うん、そうみたい。ええっと、……あ、ソオ、ユリは？」

「お姉ちゃんはさっきお部屋にいたよ」

「今ゼン君からメールで、皆で遊び行かないかって」

「行く！　ソオ行きたいです！」

「ふふっ、なら良かった。じゃあユリにも聞いて――」

「行くに決まってんじゃん馬鹿なのお兄ちゃん」

「ふぉお！！　何時から背後に居たんすか！？」

「今だよ。GWっつったってどうせうち出掛けたりしないんだから、だったらゼン君にたかって美味しいモン食った方が良い」

「ゼン君にたかるんすか！？　其処はちゃんとお母さんからお金貰っていきましょうよ！！」

「大丈夫、ゼン君お兄ちゃんと違って金持ってる」

「もってる！」

「ソオも何言ってんの！？」

「だったらお兄ちゃんもバイトして金出せや」

「ぐ、」

「まぁお兄ちゃん、ゼン君と違って馬鹿だからバイトなんてお母さんが許さないけど。てか人見知り激しいお兄ちゃんじゃバイトとか無理じゃね？」

「ぐぐ、な、何も言えない……」

「ソオ、後一年だけ待ってな。お姉ちゃんが高校生になったら沢山バイトして、美味しいもの沢山食べさせてあげるから」

「はーあい！」

「良いなぁ、あたしゼン君の妹になりたかった。あんな優しくて格好良くて頭良いお兄ちゃん……文句無いね」

「……」

「あ、でも前ソオとミヤちゃんが言ってたお兄ちゃん達の友達ん家も良いかな。優しくしてくれたって言ってたし」

「……アサキ君ん家っすか？」

「あさき君とゆうや君！　アイス美味しかったよー！　ゆうや君は優しかったし、あさき君はソオって呼んでくれたー」

「……え、ちょっと待ってソオ。アサキ君に名前で呼ばれたんすか？」

「うん」

「（僕は苗字で呼ばれてるのに……）」

「どんまいお兄ちゃん」

「な、何も言ってないじゃないすか」

「お兄ちゃんは何でもかんでも顔に書いてあるからね」

「……」

「……ま、でも仕方ないからあたしはお兄ちゃんで良いや」

「え、」

「ソオはお兄ちゃんがお兄ちゃんが良い！」

「びっくりするくらい何言ってるか分からないね其れ。……お兄ちゃんも、こんな可愛い妹が二人も居ることに感謝しなさいよね」

「ユリ……ソオ……」

「――まぁでも一回其の友達ん家は遊びに行ってみたいなぁ、アイスあたしも食べたい」

「ソオも行きたーい」

「……今後、聞いてみるよ、うん」

カトウ宅。

「――GWということで、美味しいケーキの配達だよ」

「……ユズ、何時もありがとうね。さぁ入って」

「招くの!?　其の前にツッコまないのアンタ!」

「何をツッコむというのお姉ちゃん、ユズがケーキを持って私の家に来てくれた。……ただ其れだけのことじゃない」

「其処!　ケーキ持ってきたくだりのところ!」

「?」

「もう中学二年なんだからおかしさに気付きなさいコトナ!!」

「どうしたんだいリョウコちゃん、怒るってことは糖分が足りねぇんじゃないのかな~?」

「違うわよ?　違うからね?　というか私は怒ってるんじゃなくて訝しんでるだけで」

「お姉ちゃんが言いたいのは、モモちゃんが居ない理由が知りたい

ってこと」

「嗚呼、其れは気になる――でも違うから、別にモモが居ようと居まいとまずは普通言うんだからね。ケーキ持って隣ん家遊びに来る中学男児――」

「ごめんねリョウちゃん遊びに来て……」

「――って居た！　モモ居た！　そして落ち込んでる！！」

「美味しい紅茶貰ったからリョウちゃん達に持ってこうと思って、手間取ってたら遅れちゃった。でもリョウちゃんが迷惑なら帰ろっかな……」

「ちょっ、モモ違うから！！」

「はっはっはなあに言ってんだよ姉ちゃん、知らねぇの？　リョウコちゃんは今流行りのツンデレなんだぜ？」

「――はい！？」

「本当は嬉しいんだから、さっさと皆でケーキ食って遊ぼうぜー！」

「ちょっとユズ君！？　い、今何て？」

「え？　ツンデレ？」

「何言ってんのよアンタは！！！！」

「――ってコトナが言ってた」

「ナニイッテンノヨアンタハ」

「私の発言に、嘘偽りなんて無いわ」

「キメ顔で言うな！」

「まぁまぁリョウちゃん、冗談は此の辺までにして」

「……そうね。（私は冗談のつもり無かったんだけど……）」

「さって、レッツおやつターイム☆」

「おー」

「あ、なぁコトナ。GW中にバイキング行こ、無論ケーキの」

「えぇ、是非」

「……で、ユズ君って中学生になっても変わらないの？」

「うん全然。寧ろクオリティが上がったよ～」

「姉ちゃん達も行くだろー？」

「うん、行く行く～」
「……はぁ」

エノミヤ宅。

「ミノル、……ミノル、何処に居る」
「――兄さん？　私なら此方だが」
「……また薙刀を振り回していたのか？」
「振り回していた訳では無い、……で、どうかしたのか？」
「みーのーちゃーあん！」
「お客だ」
「兄さんの言葉より先に気付いてしまった」
「はろうミノちゃん！　テナが遊びに来たよお☆」
「みたいだな、歓迎する」

「何だかお久し振りにミノちゃん家入ったなあ、変わってないけどねえ」

「そう簡単に変わるものではないだろう？」

「ま、そおだよねえ」

「今お茶を持ってくる。テナは相変わらずの抹茶で良いか？」

「勿論だよお！　たあくんのお茶美味しいもん！　テナ大好きい！」

「ふふっ、ならば良かった。暫し待っていろ」

「……大学二年生捕まえて“たあくん”は無いと思うのは私だけなのだろうか」

「ええ？　だってたあくんはたあくん以外の何者でも無いでしょお？」

「……まぁ、昔からの付き合いだから仕方ないか」

「待たせた」

「兄さん早い」

「たあくんマッハだったねえ」

「今茶室が使用中だった、ついでに使わせて貰った」

「ありがとうねえたあくん。……あ、たあくんも一緒にどーお？」

「……？　ミノル、一体何の話をしていたんだ？」

「すまない兄さん、何の話もしていないから私にも分からない」

「ええっとお、――じゃあん！」

「「何だ其れは」」

「わお、見事なハモりい」

「兄妹だからな」

「あまり関係無いような……」

「此れねえ、其処のスーパーでやってた福引きで当たったのお。大したものじゃないんだけどねえ？　何だかただで入園出来るらしいから行ってみようかなぁって」

「入園？」

「あ、植物園ねえ？」

「嗚呼、近場に出来たアレか」

「ふむ、其れに私達を誘ってくれている訳だな？」

「ぴんぽんぴんぽーん！　テナ植物園嫌いじゃないけど、一人で行

くのも寂しいからあ。直ぐに飽きちゃうかもしれないけど今から行かなあい？」

「今からか？」

「うん、植物園なんて二時間もあれば充分だと思うんだよねえ？」

「私は構わない、兄さんはどうする？」

「……」

「……兄さん？」

「たあくーん？」

「今凄いことを思い出したんだ、聞いてくれ」

「どうしたんだ、そんな神妙な表情で」

「たあくんは何時も真面目っぽいけどねえ」

「こう見えて中身は完全だるっだるなことをテナもよく知っているだろう」

「――自然生態に関するレポートの期限が明日だ」

「……大学？」

「嗚呼、無理を言って休日に伸ばして貰った。土曜の講義なんだが

俺は土曜日という日を休み認識している為、既に危ないくらい講義に出忘れている」

「たあくん……」

「よって完全にやばい……！　無理言って伸ばして貰ったのにもう忘れていた……！」

「兄さん……午前中のことを午後忘れないでくれ……」

「何を書けば良いのか少しも浮かんでこないんだが此れはどうするべきだろうか？」

「学校の友人風に言うなれば『今直ぐやるかしねばいいんじゃないかな』」

「あ、其れあー君でしょお」

「正解だ」

「待てミノル、お前達の友人清々しいくらい極端だな」

「彼はそういう人間だ」

「じゃあもうひとり違う友達風に言うねえ？　ええっとお、――『俺の手に掛かればレポートなんて痛くも痒くも無いね、だってゼン君賢いし？』」

「……ッ似てる」

「ミノちゃんが笑ったあ！」

「ちょっと待て、お前達の友人関係に文句などをつけるつもりは無いが、癖が強い人ばかりでないか？」

「まぁ、多少は」

「でも皆良い子ばっかだもーん」

「……ま、良い友人に恵まれているのならば何も言うまい」

「兄さん……」

「――という訳で、そうだ植物園に行こう」

「え？　たあくんレポートはあ？」

「今無理にやり出したとしてもどうにもならん、少し自然と触れ合えば良い文章が浮かぶかもしれないだろう？」

「ふむ、一理あるな」

「だからミノル――明日の朝は、お前に任せた」

「目覚まし掛けろ、兄さん」

ロクジョー宅。

「カイちゃんカイちゃんカイっちゃーん！」

「あ、お帰り姉ちゃん」

「あ、うん、ただいま。――じゃなくって！」

「んー、どうかしたん」

「そうよカイちゃん！　お姉ちゃん明日学校お休みなの！」

「でしょうね、GWだし」

「だから、お買い物にでも一緒に行かない？」

「別に良いけど？」

「いやんカイちゃんったら！　そんなすんなりとお姉ちゃんを受け入れてくれるなんて嬉しいわ～」

「もし俺に反抗期があったなら一体姉ちゃんはどうなっていたのだろうか」

「栄養失調で悶えてたわ」

「何悶えよ」

「カイちゃんが足りない悶えよ！！」

「聞いたこと無ぇ」

「私も始めて言ったもの」

「で？　買い物て何処行くん」

「んーと、あ、カイちゃん何か欲しいものとか無い？　買い行きましょうよ～」

「欲しいもん……今は特に無ぇな」

「あらそう？　別に遠慮なんてしなくて良いのよ？　お姉ちゃんカイちゃんの為に一杯バイトしてるんだからね！」

「あー……俺が勉強しなくてもぎりぎり低空飛行出来る頭あればな」

「高望みはしないのね、というか低過ぎる希望じゃない其れ？」

「テスト前とかは勉強しねぇとほんっとやべぇし、バイトとかしてらんねぇもんな……つーかバイトしたらテスト前でもバイト入っちゃいそうで出来ないんだよな、俺自己規制とか出来ねぇだろうから」

「ふふっ、カイちゃんはバイトなんてしなくて良いのよ」

「でもバイトとかしてれば、少しは姉ちゃんも楽出来るだろうし」

「……お姉ちゃんカイちゃんの其の優しさだけでもう八年はバイトやっていけるわ……」

「其れまで就職しないんすか姉ちゃん」

「します、でもカイちゃんとずっと居られる仕事探します」

「……頑張れ」

「うん♪　お姉ちゃん頑張る！」

「マヒルさんとかユウヤとか完全にブラコンだよなぁとか思ってたけど、姉ちゃんも大概だよな」

「私はブラコンじゃないわよ、カイちゃん限定なんだからね～」

「其れを俗にブラコンと言うのでは……」

「私はカイちゃんが居れば其れで良いのよ、他に何も要らないんだから！！」

「……姉ちゃんさ」

「ん？」

「俺んこと気にしてくれんのは嬉しいし、姉ちゃんが居ないと生きていけない（※生活出来ない的な意味で）ってのもあるけど、」

「お姉ちゃん悶え死に三秒前」

「頼むあと数分だけ生きてくれ……！」

「ん？」

「自分のこともちゃんと気に掛けてくれよな　他人のことだけじゃなくて」

「カイちゃん……」

「もう大学生も終わりなんだし、俺だって高校生だし、多少のことは自分で何とか出来んぜ？」

「……うん、そうね、カイちゃんはちっちゃい子じゃないんだものね」

「そーいうこと」

「分かった、お姉ちゃんカイちゃんの為に、――影からカイちゃんを見守るわ」

「姉ちゃん、其れは怖い」

「ところでカイちゃん、一目もお姉ちゃんにくれないけどずっとパソコンに向かって何してるの？」

「ずっとゲームしてるけど」

「カイちゃん……」

アヤメ宅。

ぴんぽーん。

「……ちょっとセツ、インターフォン」

「んぁ？　出ろってか、俺に出ろってか」

「良いじゃない其れくらい」

「しゃあねぇなぁ、はーい」

「はぁ……何処のどいつでしょう」

「俺だよ」

「貴方ですかイツキ先生」

「今振ったろ、完全にネタ振ったろ」

「いやですね、僕がそんなことするはずないじゃないですか」

「っていうか其れに乗っちゃったいっきーの負けじゃね？」

「うっせぇ」

「で、どうなさったんです？」

「ほらよ」

「あ、其れ僕の」

「てんめぇ嫌がらせのように人の机に忘れ物しやがって」

「其れをわざわざ？　イツキ先生やっさしー」

「いっきーヤッサシー」

「ふざけんなクソ兄弟、……キクカワが届けろっつーから」

「まぁ通り道みたいなものだものね、とりあえずありがとうイツキ先生。お礼に飲み物くらい出すけれど」

「嗚呼、悪ィな」

「五回目のティーバック紅茶と百パーセントレモンジュースどっちが良い？」

「帰る」

「冗談冗談、此れはセツが飲むよ」

「え、俺が飲むの？」

「珈琲で良い？」

「嗚呼」

「ちょっとシロ？　俺そんなん飲まねぇかんな？　百パーセントレモンジュースてただのレモン水じゃん」

「じゃあ、セツも珈琲飲む？」

「やだ、苦手の嫌い」

「お子様だな、セツよ」

「どうせお子様だい」

「はいどうぞ、インスタントだけど」

「飲めりゃ文句は無ぇ」

「うげ、其れブラックじゃん、そんなん飲むのかよいっきー」

「男は黙ってブラックだろ」

「そんなこと言って……昔は飲めなかったじゃないイツキ先生」

「昔？　高校ん時ってこと？」

「そうそう、イツキ先生によく自販機にパシられてねぇ」

「一度として俺が頼んだものを買ってきたこと無かったけどなお前」

「其の中でも一番嫌いそうなのがブラック珈琲だったから良く買って行ったんだよね」

「嫌がらせ受け過ぎて好きになったがな」

「ちゃんとしたもん買って来てくんないって分かってんのにシロをパシり続けるいっきーもいっきーだと思う俺」

「ロシアン自販機、だね」

「そんな自販機嫌だよ俺！　ていうか別にロシアンじゃなくてシロの気分じゃん其れ！」

「後はそうだね、僕がイツキ君にパシられたといえば――夜だね」

「嗚呼、あれな」

「あれ？」

「イツキ君生徒会入ってたから、放課後の見回りとかしてたんだけど」

「へぇ、いっきー生徒会やってたんだ」

「夏の時期のとある日、夜に急に呼び出されて教室まで付き合え、

って」

「……何故？」

「だって暗ぇじゃん」

「……は？」

「見回りの時に鍵を閉め忘れた部屋があるっていうことに気付いたんだっていって、一緒に来いって呼び出されたんだよ」

「……え、と、何で？」

「セツ、お前夏の夜の学校だぞ？」

「うん、そうだけど」

「イツキ君、こう見えてビビりだからね」

「――え！？」

「バッカ、ビビりじゃねぇよ、完全に怖がりなんだよ」

「其れ堂々と言えることじゃないよイツキ君」

「嘘、いっきー怖がりなの！？　意外！！」

「ったり前だ、俺の前で怖い話とかしてみろ。――血祭りだ」

「そっちの方が怖ぇ……！！」

「ま、イツキ君の武勇伝は未だ未だあるんだけどね」

「はン、俺限定にすんじゃねぇよ」

「わー、超気になる其れ」

「気が向いたら話してあげるよ、とりあえずセツ、そろそろ時間」

「あ、マジだ、ちょっと準備してくる」

「出掛けんのか？　じゃあ俺は帰――」

「イツキ君車でしょ？　ついでに乗せていってくれません？」

「は？」

「近場だし構わないよね、うん、構わない構わない」

「ちょい、お前自分の車あんだろうが」

「いやですねイツキ君、僕がペーパーなの知ってるでしょう？」

「準備終わったぜー」

「はい、よし、じゃあ行きましょうイツキ君」
「パシるってか、昔の仕返しってかコノヤロウ」
「さ、行きましょうか」
「おーう」
「てめぇ等覚えとけよ……」

ヒコク宅。

「たんだいまーっ！」
「お帰――え!?　母さん!?」
「そうよんユウ君！　お久し振りのママよーん！」
「お帰りー！！　ていうか久し振りだね帰って来るの！」
「上司がママのこと離してくれなかったのよん、やっとお休み取れたから帰って来ました☆　あーんユウくーん！」
「母さーん！！」

「進行の邪魔」

「あら、アサちゃんおはよう」

「あ？」

「相変わらずの寝起きの悪さでママ安心したわ、ただいまっ」

「そ」

「……」

「アサ君ご飯は？」

「食べる」

「ママも食べたいなー」

「はいはい」

「ふー、久し振りにゆっくり出来るなー。……あ、最近マヒルとシンヤ君は？」

「たまに帰って来る。父さんは何時も通り。言えば夕方くらいに帰って来る」

「うん、流石シンヤ君。マヒルは大学の方どうなのかしらねん、そろそろ卒業だった気がしたんだけど」

「聞いてない」

「まぁ、あの子なら大丈夫だって知ってるんだけど」

「おっまたせー！　はいっどーぞっ」

「ありがとーユウ君っ」

「ん」

「そうそう、二人共ＧＷだけど何処か行った？」

「え？　んーん、全然、何よりアサ君のやる気が無い」

「ん」

「そっかー、折角のお休みだから出掛けようかなーとか思ってたんだけどなー」

「何処に？」

「無難にお買い物とかかな？　ちょっと遠出して大きなショッピングモールに行くなんてどう？」

「アサ君が行くなら」

「怠い」

「バッサリねアサちゃん」

「眠い」

「寝起きだからね」

「二人で行ってくれれば？」

「嫌ぁよ、アサちゃんひとり置いてくなんてこと出来ないわぁ」

「同じーく！」

「良いじゃん、つか折角の休みなんだから休めば良いのに」

「折角の休みだから子供達と遊びたいのよ」

「お母さん何歳？」

「覚えてないし覚えていたくないわ」

「たーくさんお買い物しましょうよっ！　何の為にシンヤ君がお医者さんしてると思ってるの！？」

「少なからず母さん達の無駄遣いの為では無い筈」

「父さんもきっと皆に楽しんで欲しいと思ってるって！！」

「あの優笑顔の裏にある怠惰感プラスアクティブ男の気持ちがお前に分かるはずがない、っていうかＧＷくらい帰って来ればいいのに。其れとお前と母さんの買い物に付き合うと荷物が――」

「ただいまー」

「「荷物持ち」」

「ええい此のタイミングで帰って来るとはクソ兄貴……！」

「もう心配事は無いでしょ？　さっ、早く着替えて行こうよ！」

「もう良いよ分かったよ諦めりゃ良いんだろあーあーあー」

「ただい……あん？　母さん？」

「お帰り荷物持ち！　さぁデパートに行くわよん☆」

「誰が荷物持ちだ。……え？」

結論：何処の家のＧＷも、対した遠出はしないのであった。

３４４＋現を抜かす、暇はない。

はろはろう！　ユウヤでっす！
ＧＷなるものが終わりまして平日、クラスの皆も他の皆もみーんな至極だらけてました。俺もだけどさ！

「へいへいカイト君、俗に言う五月病かい！」

「なんつーテンションの高さだよお前……」

カイト君ですらこんな感じ。あれ？　俺おかしい？

「良いじゃん良いじゃんテンション高いくらい！　休みだって直ぐ夏休みが来るよーっ！」

「へぇ、お前にとって二ヶ月弱って直ぐなんだな、アサキ呼んできてやろうか」

「やめて完全に怒られる」

休みに掛ける想いが重過ぎんのよあの子、二ヶ月以上先のことでもキレられること山の如しだよいやマジで。

「――ていうかあ、テナ的には二人共余裕そうで羨ましいけどねえ」

と、席でだべってたらテナちゃんが沸いて来た。勿論本当に沸いた訳じゃないし言っちゃえば元々横に居たんだけども。

「は？　何が？」

「ええ？　カイちゃんってば冗談が好きなんだからあ」

カイト君の本音トーンの疑問符に、テナちゃんはきゃらきゃらと楽しそうに笑う。俺もよく分からないんだけど、ええと、え？　ん？　何か？

「もう二週間無いのに二人してお茶目さんなんだからあ、テナは騙されないんだからねーだ！」

「「……」」

一年次違うクラスだったからなのかテナちゃんは分かっていない、――俺とカイト君に一週間以上先の話をしたところで伝わる訳が無いのに……！

「相変わらずね、アンタ達……」

そしてそんな俺達と三年くらいの付き合いになるリョウちゃん――実は最初からずっと居たんだけど――はリョウちゃんで、ひとつ苦労人ぽく溜息を吐き、

「中間考査、って言えば分かる？」

なんて人を馬鹿にした言い方をしてきた。何と失礼な、いくら馬

鹿だからってそれくらい分かるに決まってるじゃないか！　中間考査っていえばカタカナでテスト！　俺やカイト君が最も嫌う――

「うぇえええ!?　マジっすかカトウ先生!?」

「大マジだし誰が先生よ」

「リョウコお、カイちゃんショック大き過ぎて機能停止しちゃったよお？」

「放っときなさい」

なんということだ……！　すっかり忘れてた……!!　だってそんな……だって……えぇ？

「ぐふっ、駄目だ今回はマジで無理だ終わった」

「未だ何もやってないじゃあん、頑張ろうよおゆー君」

「ふっ、テナちゃん。男には諦めなければ前に進めないってこともあるんだぜ……？」

「そうなのお？」

「嘘に決まってんでしょ、まぁせいぜい勉強することね」

「リョウコの鬼！　悪魔！　お前は普段通りやってふっつーの点数と数学と化学だけちょっと良い点採って『やっぱり理系だなぁ私……』って認識してろやバカヤロー!!」

「ちょっ、……何でそんな事細かに事後の設定アンタに決められなきゃいけないのよ！？　っていうかヤケにリアル！！」

復活したカイト君の叫びは確かにヤケにリアルでした、以上。

嗚呼、本当真面目に――勉強しなきゃ。

345＋テストとは何ぞや。

ユウヤでっす！　テスト前でも絶賛部活中でっす！　何せろくなことしてない。
来てない人のが多いけど、来てる人でも真面目な人は真面目だから――主にリョウちゃんとかリョウちゃんとかリョウちゃんとか――テスト勉強してる人も居るっていう。
そんな中、

こんこん、

「ユウヤ、誰か来た」

俺の勘違いかと思ったくらい控えめな、とても小さなノック音がした。アサ君に聞こえたんなら勘違いじゃないみたいだね。――ていうか扉、開いてるんだけどさ。
そっちを見ても人影は無いし、……ええと？

「ゆ、幽霊の類の方ですか……？」

「とっとと出ろ阿呆」

ですよねー。
溜息交じりの弟に急かされ扉にまで向かってみれば、微かに人の気配がした。……あ、もしかして。

「――こっちか！！」

「ッ！？」

外開きの扉とは反対側を素早く見てみたら案の定、かどうかは未だ定かではないけれど、其処に居たのは一人の男子生徒君。上履きの色で一年生と判断出来るし――そして何より此の判断、驚愕を通り越して泣かれそうな勢い――、もしかしなくとも彼は。

「君っ！　ムラサメ君だよねっ？」

意識したつもりは無い笑顔でそう尋ねれば、彼は少々俯きながら一度だけ頷いた。

「えっとー？　ムラサメ君ねー」

そういえば部長のサチ先輩と、さっきまでリョウちゃんと俺に国語の文章読解を教えてくれていたハヤ先輩が一年ボーイムラサメ君と相対して座る。

「何だかイメージよりも背が高いわね、ああいうのを男前って言うのかしら……」

「背は高くとも態度は想像通りだけどな」

「確かにねー、ていうかアサ君は見たことあるんでしょ？　そしてリョウちゃん背ぇ高いイコール男前って背ぇそんなに高くない俺達に喧嘩売ってる？」

「あ、そういう？」

「ちっ、がうわよ！！　別にアンタ等にそういう――」

「お前等、お茶を出すんじゃなかったのか？」

ムラサメ君にお茶を出す為に給湯室に来た俺、より前に珈琲を飲みに来ていたアサ君、そして手伝いに来てくれていたリョウちゃんの三人で騒いでいたらハヤ先輩に苦笑された。まぁ確かに今此の状況見たら後輩吟味してる先輩みたいな図だしなぁ……あながち外れてないけど。

好みも分からないし此処は緑茶で良いかと三人分出したら、ムラサメ君は小さく会釈をしてくれた。……うん、悪い子違うなら其れで充分よ俺。

「休み明けって言ったものの、よく考えたらテスト期間前だったよな。来辛かっただろう？　悪かったよ」

ハヤ先輩……本当気遣いの塊っす……！　ムラサメ君もそう思ったのか目一杯首を横に振っている、俯き加減なのは最早癖なのだろう。

「おっとなしい奴」

アサ君が吹っ切れて堂々とそう言う、ちなみに部室備え付けＰＣの椅子に座りつつ。

「まぁ、うちは誰でもゲームとかそういう系好きな奴なら大歓迎だから構わねぇけども。……アレだ、生徒会とかも大丈夫か？」

サチト先輩は何処かバツの悪そうな表情をしている、どうやら大人しめの子が苦手みたい。

ムラサメ君はムラサメ君で遠慮がちに頷いて、ゆっくりとサチト先輩とハヤ先輩を見遣った。

「――大丈夫、です」

「喋った」

おいこらアサ君皆思ってんだから言うな。

「――の為に、来たようなものだから――です」

「そうか、期待しているよ」

俺はちょっと離れたところで聞いてたから聞こえなかったけど、まぁハヤ先輩が聞こえたなら其れで良いよね。

「さて、折角来てくれたのに入部届だけ出すなんてのはつまらないな」

「お、じゃあゲーム大会と行きますか！　丁度偶数だしチーム戦といこうぜ！」

「……え！？　ちょっと先輩！　テスト近いんですよ！？」

「何を言ってるんだリョウコ、テストを定期的に行うのは日頃の行いを見る為なんだぞ？　テスト勉強なんてものは見直し程度が普通だ」

「そーそー」

「サチトの場合は社会落とさないのに一夜漬けだろう？」

「うっせ！！」

急な騒ぎっぷりに一人取り残されているムラサメ君、俺はそんな彼の横に座って、「騒がしい部室だけど、好きな時に来てね！」と笑って言ってみた。どう反応するか迷っていた風のムラサメ君は、少しの間視線を泳がせてから、小さくだけどにっこりと微笑んでくれたから。

うん、此れから仲良くなれたら良いなぁ。

３４６＋二度めましてのはずなんです。

「ええっ！？　ムラサメ君部活来たの！？」

アサキです自宅です。

「あーあーあー会い損ねた、ファーストコンタクトし損ねたよゼン君」

「別に良いじゃん、次会えば」

なのに何故かゼン君と、

「そうっすよ、其の彼が部活に入ったなら直ぐ会えるじゃないっすか」

「ねぇねぇシギくん、ぶかつってなーに？」

フドウとそしてみーさんまでがいらっしゃる。

「え、ぶ、部活？　……えと、皆でこう、頑張って運動したり……遊んだり――」

「好きなことを皆でたーくさんやるものだよ」

お前は部活の意味を多少なりとも過程出来ないまま茶道部してたのか。ゼン君のアシストにほっとしているような表情を見せたフド

ウは、机上に置いてあるオレンジジュース――無論出したのは今買い物に出掛けているユウヤだ――に手を掛けた。
……で。
「何しに来たのお前等」
さっきからずっと僕は一人楽しくゲームに勤しんでたはずなんだけどなぁ、と考えてた訳だけど、一体全体何がどうなってこうなった。
「え？　普通に遊びに来ただけだけど」
「突然すみません……」
キョトン顔のゼン君とか申し訳無さげなフドウとかもう見飽きた、お前等何なん何でそんな自由なんそしてみーさんきらきらした眼でこっち見ないで下さい。
「前もそうだけど、ゆっ君にちゃんと連絡したよ？」
「そりゃ分かってるけど何でユウヤに連絡入ってんのの対応が僕な訳？　そして何故姪まで連れて来た？」
「今日日曜なのにクソ姉貴が仕事行っちゃってんのよ、ミヤ一人になんて出来ないじゃん？」
「……しずかにしてるよ？」
いやそりゃ良い子なのは嬉しいんだが。

「其れとフドウ」

「はい？」

「――テストを前にしたお前に遊んでいる時間なぞ無いはずだが……？」

「や、嫌だなぁアサキ君、何のことを言ってるんす――すみませんすみません帰ったら直ぐやりますいやほんとすみませんでした」

「あっ君勉強のことになると厳しいよね」

好きで厳しくしてんじゃねぇんだよバカヤロウ、テストの点此れ以上低空飛行されたら堪ったもんじゃない、泣き付かれんのは僕なんだぞ。（※該当者多数）

「本当はテストなんざ前日やりゃどうにかなるんだけどな」

「其れはヒコク君とゼン君だけに通じるものなんですっ！！　常識じゃないっすからね！？」

「失敬な、ゼン君は授業だってちゃんと受けてるもん」

「え？　ほぼ寝て……え……？」

「ゼンくんねてるのー？」

「寝てないよー？　ゼン君真面目だもーん。――あっ君其処は花を

持たせて欲しいな」

「ごめん、つい本音が」

「もういいよ……」

そうやって何をするでもなくやる気なく他愛ない世間話――別名僕のやる気がとことん無い――をしていれば。

ガチャン！　バタンッ！！

玄関の戸が開いた音がした。しかも、物凄く勢い良く。

「……ゆっ君帰って来たのかな？」

「いや、違う、……多分――」

ユウヤだったら普通にリビングに入って来るだろう、なのに戸を開け放った主はリビングではなく一目散に二階に向かっていった。階段を駆け上がる音が聞こえたし、ってことはだ。

「……マヒル？」

「えっ、もしかして例のあのお兄さん？」

例のって何だよ。ゼン君の発言にそんなことを思いつつも、もしマヒルだったとしても何をそんなに急いでいるのか疑問だったし、まぁ単純に気になったから立ち上がって、廊下へ繋がる扉から階段側を覗き見た。

そして丁度、先とは違う緩やかな足取りで階段を下って来た予想通りの姿に視線をやる。

「何してんの」

「おうアサキ、友達来てんだろ？」

質問してるのは此方なのだがまぁ良い、靴で分かったんだろうが其処を見る余裕があるなら階段を駆ける必要はあったのだろうか。

友達が居ようが居まいが気にしないマヒルは、当然の如く僕が引っ込むと同時にリビングに侵入。こんにちはー、と緩い挨拶だが恐らく誰ひとりとして見ていないであろう感じでキッチンへ向かった。

「あ、こんにちはー、お邪魔してます」

「「……」」

……嗚呼、そういや初対面の兄貴は万人うけしないんだった。忘れてた――フドウと最早ビビり気味なみーさんの様子を見て思ったけど、ゼン君はそうでもなく至って普通にへらりと笑っている。一回文化祭で会ったとはいえあれは見たってだけでろくに会話してなかったっけか。……というかどれだけ急いで来たの此の兄貴、とりあえず何時も通り目付きは悪い。

マヒルがキッチンの死角に入って直ぐみーさんはゼン君の引っ付き虫と化し、フドウはおっかねぇよおい、とでも訳せば良いのか僕

をちらりと一瞥した。

「前も思ったけどあっ君達のお兄さん、カッコイイけどおっかなそうな外見だね」

「ぜぜぜ、ぜ、ゼン君!?」

そしてただひとり笑顔なゼン君は、みーさんの頭を撫でつつそんな本音を漏らしていた。っていうか僕だけじゃなくて完全に聞こえてますけどね、ええ。

そして其の声に無論反応したマヒルは、冷蔵庫から出したのだろう清涼飲料水をコップに注ぎながら数回瞬きして、

「……あれ？　俺会ったことないメンツ？」

とあっけらかんと言ってのけた。ちなみにおっかなそうと言われたことに対しては何のツッコミも入れない、何せ本人も僕等も聞き慣れているから。

しかし何が悪いって何時もタイミングが悪い、僕等が家に人呼んで初めてマヒルに会う時、大抵マヒルは寝起きか今みたいにガチなやる気ダウンテンションというか――言うなればマイナス気ばかりだという。何でも良いが服装どうにかしろ、お前のファッション似合い過ぎて怖いらしいぞ。

「あ、高校の。お前の友達金髪とか居んのな、って思った感想」

「俺は金ってよか茶混じりなんですけどねー、こっちが生粋の金髪って感じ？」

「えぇ！？　ちょっ、振らないで下さいよ！！！！」

そしてビビられて気にしないのがマヒルクオリティ、外見からでなく性格から入れば完璧なのに。そしてフドウ、あん時お前格好良かったとか言ってたよな？

「――と、そうだ時間無ぇんだった。忘れもん取り来ただけだから」

「あ、そうなの？」

「おう、……そういやユウヤは？」

「買い物」

「そか、じゃあ俺行くわ」

「……さようなら……」

「兄ちゃんに向かって今生の別れみたく言うのやめない？」

苦笑しつつそう言えば、忘れものを取り来ただけらしいマヒルは右手に持っていたファイルを少しだけ振り上げて、皮肉なく笑った。

「それじゃあごゆっくり、――ゼン君にシギ君、其れにミヤちゃん？」

ぱたん。

忙しい兄貴だな、なんて思いつつ溜息を吐けば。

「……あれ？　何でお兄さん俺達の名前知ってんの？」

ゼン君が少しキョトンとして首を傾げた。

「ユウヤが友達の話するからだろ」

「あ、そういうことっすか。ミヤちゃんのことまで知ってたからびっくりしました」

フドウは何処かどころか安心し切った様子で、深々と溜息を吐く。

うん、じゃあ言わないでおこう。話はしたけど――僕もユウヤもお前等の容姿の話まで交えて話しちゃいない、って話は。

本当、何で分かったんだろうか。

３４６＋二度めましてのはずなんです。（後書き）

（断片的に与えられた情報を継ぎ接ぎして導き出しただけなんだがなぁ……）

とか、マヒルはきっとそんな感じ。

347＋テスト期間の暇潰し。

どういう訳かアサキです、テスト期間です半日に涙が出るくらい感激しています。いや出ないけど。

「――で、何でお前等はテスト期間中に部室に来たんだ？」

――という訳で旧生徒会室に居ます。

そう問い掛けたのはサチト先輩であるが、ならば何故貴方も居るんだよって話だよ。

「え？　だって帰ってもゲームやるだけだし、保育園迎えに行くのもちょい早いし」

「保育園の迎えに早いとか無ぇだろ」

「保育園児だって沢山お友達と遊びたいのよ馬鹿ねぇさっちゃん」

ゼン君はそういう理由らしく、

「私は其の、苦手な国語、教えてもらいに……」

「誰に？」

「そりゃあ……ハヤ先輩とかサチト先輩とか、皆私より頭良いから誰かに……」

カトウはそういう理由らしく――国語ってどう教えるんだろうか――、

「カイトが呼び出しくらってて帰れないから」

「お前はそろそろ自前のチャリ使え」

かくいう僕もそういった用件である。三人にツッコミを入れたのは無論サチト先輩、ちなみにハヤ先輩と……ムラサメ君――で良いのかな――まで居るけど、皆相当暇なんだな。ユウヤは先帰ったし、フウカ先輩はゲームがどうのとかで帰ったそうな。よく考えるとあの人が一番ゲーマーな気がしてきた僕だった。

「そういうサチとハヤ先輩はなーんで居るの？」

ちなみにムラサメ君を連れて来たのは、今問うているゼン君だ。居たから連れて来たんだと。何故連れられて来たのか分からないだろう彼は、先程から恐れ戦いている気がする。……ゼン君の行動に意味なんて無いんだが。

「俺等？」

「週明けが歴史のテストだからな」

「嗚呼、さっちゃんが欠点採らないようにってことね」

「馬鹿で悪かったな！」

ハヤ先輩の苦笑に、ゼン君の嘲笑、そしてサチト先輩の憤慨。……見慣れた光景だな。

「サチトは社会系だけ出来ないだけだからな。其れさえ抜けば、良い大学も夢じゃないさ」

「まぁ社会なんて出来なくてもね、サチだし」

「でも珍しいですよね、男の人で社会嫌いな人って」

カトウが数回の瞬きと共にそんなことを述べる。

「女の子は結構、苦手な子が多かったりしますから」

「へぇ……」

ゼン君の苦手は数学かなー、と、感嘆の後、ゼン君は言った。……まぁ、結局苦手科目なんて男女じゃ決まらないからな。

「リョウコは何が好きなんだ？」

途切れた会話にハヤ先輩がそうアシスト。直ぐに口を開こうとしたカトウだったが、「ちょい待ち！」と急に立ち上がったサチト先輩の勢いに負けて、声までは出なかった。

「好きな教科当ててやんよ！　ええと――」

「国語は嫌いって言ってたから、やっぱ数学？」

「ゼンテメェ先言うなし！」

割り込み早。

しかし、カトウは小さく首を振って否定する。どうやら一番では無かったらしい。

「英語とかか？」

「違います」

「じゃあ社会！！！！」

「違いまーす」

三年生二人は見事に外し、カトウは何処かにんまり顔。……あれ？　此れって勝負？

ハヤ先輩が視線をムラサメ君に持っていく。何だと思う？　と興味を示す視線を送ると、彼は気付いて相変わらず、「……俺、もですか……？」とほぼ囁くボリュームで言った。まぁ、問答無用だが。

ムラサメ君は少し考えると、先のカトウの比でない瞬きを高速ですれば、

「理、科、……ですか？」

と恐る恐る呟いた。ボリュームちょい上がった感じ。

「正解！」

「当てやがった……！」

「すみま、せん……」

「え、いや、怒っちゃいねぇよ？」

「サチト、下級生を虐めるなよ？」

「うっわ、サチサイテー」

「え？　俺が悪いの？　あれ？」

此の三人でミニコント出来そうだ。

とか何とか考えてからカトウを見る、そういや彼女は先生になるのが夢だったんだったか。教科のことを言ってたかどうかは忘れたが、まぁ理系なことに間違いは無いんだろうな。

「……どうかした？」

「いや、何でも」

一瞬合った視線を一度外し、もう一度此方を向けて首を傾げるカトウ。俗に言う二度見。特に理由は無かったので正直に言えば、少し不思議そうに視線を皆に戻した。

「でも理科、というとリョウコは数学も得意だったし、完全に理系だな」

ハヤ先輩は僕と同じことを考えていたらしい、笑みを浮かべながらそう言ってカトウを見る。

「女子で理系か……あまり居ないかもしれないが、頑張れよ」

「あ、……はい！」

そしてお得意の――かどうかは知らない――イケメンスマイル（※勝手な命名）を浮かべ、カトウに小さなエールを送った。……ふむ、先輩絶対人気あるんだろうな、今更だけど。

「そういえばムラサメ、君はテストの出来とかどうなんだ？」

と、そんなハヤ先輩は今一度しっかりとムラサメ君に話題を振った。――無論本人キョドったが。

「そんなに慌てる話題か？」

「サチと違って繊細なんだよ」

「んだと？」

ゼン君が連れて来たんだから少しはフォローしてやれば良いのに、とか思わない訳でもないがムラサメ君も何か考えているみたいだしまぁ良いや。

しかし、だ。ＧＣ部は謎に勉強出来る人と出来ない人ほぼ真っ二

つだからな。間が居ない、普通と言われてるカトウだって普通に勉強出来るし。そしてもうひとつ言えば、実は運動出来る人ばっかだという。ああ見えてハヤ先輩は運動出来ない訳ではなく、運動出来うる時間が少ないだけであって動けない訳ではないらしい。ちなみに僕然り。

「――分かり、ません。……高校のテスト、始めてなので……」

「まぁ其れもそうだな」

相変わらずの囁き調を軽く拾い上げ苦笑するハヤ先輩。返ってくるのが楽しみだな、なんて言っているけどぶっちゃけ未だテスト期間だけど如何様か。

「――さて、そろそろ勉強しようか」

話題が終わったからか、ハヤ先輩がそう区切ると皆一様に動き始めた。元の理由がそうだったんだから、今更といっても良いだろう。

「じゃあゼン君はゲームでもしよかな、あっ君やるー？」

「やる」

勉強なんて誰がするか、カイト来たら直ぐ帰ってやる。

準備を始めるゼン君を見遣る視界の隅、ムラサメ君がどうするのか見ていたけど何もする気配がない――連れられてきただけだもんな――。

「……ムラサメ、くん、も、やる？」

「……！」

つい片言になった。

無論声を掛けるのとか初めてだったもので、彼は至極驚いていた。

けど、先のようにキョドるでなく、驚いた後直ぐに「……はい！」

と彼にしては大きな声で返事をした。彼にしてはだけど。

……ふむ、思ったより面倒な奴じゃあない、っぽい。

３４８＋疲れてくたばり死屍累々。

「つっかれた……」

ゼン君だよ、テスト最終日だったんだよね此れが。いやぁ疲れた、何が疲れたって疲れた。半日は嬉しいけど、あっ君みたく全面的に『テストは半日だから大好きだけど何か？』精神には成り切れない、何なのあっ君あれでテスト完璧とか何なの。

「お疲れのようだな」

「あ、ミノルっちゃん。どうかゼン君を労って下さい」

「……ど、どのようにだ？」

真顔だ、流石はミノルちゃんだ。

「ううん、もう何か労れてるよ」

「……そうなのか？」

此の何とも言えない天然記念物級のキャラがゼン君の癒しになってるんだよミノルちゃん。

先程最後の考査が終わって、昼ながら終業時間となった。俺みたいに机でくたばっている人も数名――あっ君込み――見当たるけど、他はやっぱ皆さん部活に行くみたいね。

「ミノルちゃん、部活は？」

「今日は無い」
「そうなんだ」
「――だからわたしと寄り道をする予定」
「!?」
心拍数上昇。――って、また君ですかムラサメちゃん!!　お願いだから斜め後ろに立たないでくれるかな!?
「や、やぁムラサメちゃん」
「こんにちは、ワタヌキ君」
シュールな絵面だよ此れ。
「ゼン君のことはゼン君で良いんだけどなー?」
「そう。分かった、今度からそう呼ばせてもらう」
あと出来れば立ち位置百八十度以外から声掛けるの止め――言えなかったけどね。
ムラサメちゃんはすすすっ、とミノルちゃんの横にまで移動して、そういえば、と首を傾げた。
「ナツメ、どう?」

「ナツメ？」

ナツメ……って？

「ムラサメ君の名前じゃねぇの？」

二つ隣からのあっ君の声、寝起きっぽいのかヤケに言い方男前ーい。

っていうか新事実、ムラサメ弟ってナツメって名前だったのね、いやはや聞いたこと無かった。

「……あの子未だ名乗れてないとは……」

「い、いやっ！　ゼン君が居なかっただけじゃないかな！？　ほーらあっ君は知ってた訳だし、ねっ、あっ君！？」

「知らん」

此処は気ィ利かしてくれよあっ君。

再びあっ君が机にダウンしたので落ち込み気味なムラサメちゃんと其れを労るミノルちゃんへと向き直る。

「弟君、そんなにアレなのか……？」

「アレというものがどのように表現されるのかは気になるけれど、恐らくアレに値する」

「でも、結構頻繁に部活来てるし、何だかんだでまともな子じゃない？」

ムラサメちゃんから聞いてた話よか随分と積極的じゃない、一度スイッチ入ると大丈夫なタイプなのかな。時折キョドってるけどぶっ倒れたりは……してないよなぁ。

「……そう思う？」

「うん、俺的にはね」

「……其れは良かった」

あ、今の表情良い。

ムラサメちゃんは控えめに、けれどふんわりと微笑んでセミロングの髪を揺らす。よく見ればムラサメ弟そっくりよね、……嗚呼、逆か。

「此れからも宜しく、副会長さん」

「まっかせなさーい！　ゼン君女の子の頼み事断ったりしないんだから！」

「……プレイボーイ？」

「何か嫌だ其の表現」

女の子二人にクスクス笑われる野郎と成り果てた俺、……まぁ、悪い気はしないけどね、ゼン君格好良いし。（※関係ありません）

「っていうか、ひとつ聞きたいことあったんだけど」

「何？」

個人的自己解析を言えばゼン君、クラスの女の子の名前なんて一日あれば漢字まであれよあれよあっ君辺りに示唆出来たはずなんだけど、

「ムラサメちゃん、名前何てーの？」

――隣のはずの貴女の名前を、ゼン君未だに知りませんでした。

気配消す達人なんですね分かりません……！

３４９＋二年メール会議。

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３０
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：二年生で会議しまーす（＾ｏ＾）

て訳でメールで話し合いたいこと
あるんだけどおｋ？

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３０
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

おｋ

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３２
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

返事早ｗｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３３

ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
大丈夫だけど、何を？

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３５
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
来月の体育祭のことと、もうひとつハヤ先輩から頼まれたことよりョウコちゃん

ていうか双子から応答無いんだけど生きてるかな…

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３６
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
アーサキー、ユーウヤー？

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：３６
ｔｏ：ヒコク　ユウヤ

Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

ふざけんじゃねぇしね

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４１

ｆｒｏｍ：カイト君

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

アｗｗｗサｗｗｗキｗｗｗおまｗ

ｗｗｗｗｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４２

ｆｒｏｍ：リョウちゃん

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

見てたのね……

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４３

ｆｒｏｍ：アサ君

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

なんなんそれふざけてんのなんで

でなきゃなの還ればいいのに

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４５
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

あんなのが土に還っても環境に悪いわよあっ君

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４７
ｔｏ：ヒコク　ユウヤ
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

えーいいじゃんいいじゃん面白そうじゃん！
出ようよそれ！

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４８
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

体力馬鹿は黙ってろ馬鹿

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：４９

ｔｏ：ヒコク　ユウヤ
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

（・ω・、）しゅん
あ、アサ君ちょっと帰るの遅くなるねー

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：５０
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

私は別に出ても良いんだけど…、忙しくない？　大丈夫かしら？
委員会の仕事の方とか

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：５３
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

リョウコちゃんたらまっじめーｗ
ゼン君的にはそっちの仕事はサチに任せばイイと思うよ

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：５４
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

了解

で、真面目に何で出なきゃいけないの

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：５５
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

俺も気にはなる

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：５７
ｔｏ：ヒコク　ユウヤ
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

出る分にはいっこうに構わないんだけど俺もききたい。

Ｄａｔｅ：５／２７　１６：５８
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

部活対抗系は自由参加で、文化部の参加率が芳しくないんですってよ
だから、うちもとりま文化部だし出ることになったってこと

……あとはそうだな、部費アップとか何とか言っちゃたら結構食い付いちゃってね。企画的に後に引けないっぽいよ

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：０１
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

部費アップって誰が言ったの！？
もしかして実行委員が！？

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：０３
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

そゆことねー
俺たち全然カンケーない（はあと）

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：０４
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

＼　ふざけんなし　／
＼（＾ｑ＾）／

つーか完全後のが理由だろｗｗ
他の文化部に俺たちが勝ったら部
費上げなくて済むしな

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：０５
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

ま、一種の盛り上げ係みたいなもんね。あのハヤ先輩がっつり疲れてた

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：０６
ｆｒｏｍ：アサ君

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

ゆるすまじ実行委員

カイトにしては鋭い意見

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：０９
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

つーことッスわ

確かに、カイ君じゃないみたい

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：１０
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

こっそり同意

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：１３
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

バーローお前ら俺だって言うときゃ言うんだよ
つーかリョウコ、てめぇこっそりってｗｗｗｗｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：１６
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

で、ハヤ先輩からなんだけど
今度教育実習生入る時に一緒に来る人が部活のＯＢなんだってさ

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：２０
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

一緒に来る人……ってどういうこと？

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：２１
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

お前ら俺を無視かああそうか

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：２３
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

先輩達が一年の時に教育実習来た人なんだってさ。で、四年で自主的にボランティアみたく来るらしいよ

担当教科数学だから俺のクラスに来るかも

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：２３
ｔｏ：ヒコク　ユウヤ
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

カイト君どんまい（・ω・、）

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：２４
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

ユウヤだけだよまじで

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：２６
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
数学はハヤサカ先生だものね…。
それで？

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：３０
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
歓迎会って程じゃないけど、皆でぱーっとゲーム大会と洒落込むから休まないように、だってさ

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：３２
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
何時もと変わらねぇじゃん

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：３５
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

それ言ったらおしまいよ……

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：４０
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

何日って言ってたかはど忘れしちゃったからまた週明け学校でノ
でもＯＢって楽しみじゃない？　どんな人かなー？

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：４３
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

あれだよな、部活作った人等だよな

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：４５
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

よく覚えてたねカイ君、

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：４６
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

その記憶力が勉強に活かせればアンタ私より頭良いのにね

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：４８
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

え、何？　今日リョウコ機嫌悪い？　何か凄く酷いこと言われてる気が

Ｄａｔｅ：５／２７　１７：５１

to：ヒコク　ユウヤ
Sub：Re：

何かあったっけリョウちゃん

Date：5／27　17：54
from：リョウちゃん
Sub：Re：

特に何も無いんだけどね、……何でかしら？

Date：5／27　17：57
from：カイト君
Sub：Re：

自分で問うんかーい／（＾o＾）／

Date：5／27　18：03
from：ゼン君
Sub：Re：

というかさっきから気になってたんだけどあっ君いずこ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：０５
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

どうせ寝てんだろ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：１１
ｔｏ：ヒコク　ユウヤ
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

今帰宅！

アサ君寝てた、にゃんこと一緒に

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：１３
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

通りで一時間前からピタリと止んだのねｗｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：１５
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
リョウコ、写メでも送ってもらえば？

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：１６
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
は！？

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：１８
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
べっ、別にヒコクアサキの寝顔なんて見たくないんだからｒ（ｒｙ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：１９
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－

ちょっ！
アンタ何してんのよ馬鹿！！
ヒコクアサキにそんなの見られたらどうしてくれんのよ！！！！！

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：２２
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
ゆっ君あっ君のだけ消しといてー
消しちゃえば問題なっしんぐ☆

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：２４
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
本当に！？
ていうかお願いよ！？

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：２７
ｔｏ：ヒコク　ユウヤ
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

消したから大丈夫よリョウちゃん
（＾＾；

ゼン君ったら、あんまりリョウちゃんいじめちゃ駄目だよ！

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：３１
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

虐めるなんて心外な……！

ゼン君は世界中の女の子の味方なんだから虐めたりしないよ！！

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：３２
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

いつまでもそんなリョウコに問題あるだろ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：３５
ｆｒｏｍ：リョウちゃん

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

あ、仕返しされてる私

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：３６
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

ざまあ（＾Д＾）ｍ９

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：３８
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

´・ω・`

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：４０
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

どしたのあっ君ｗｗｗｗｗｗｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：４１
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
ｗｗｗどうしたｗｗｗｗｗｗｗ
ｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：４２
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
可愛い顔文字……

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：４５
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
ねてた

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：４７
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：
－－－－－－－－－－－－－－－－
まぁ聞いたから知ってたけどｗｗ

なんかあっ君が顔文字使うと可愛くて仕方ないのゼン君だけなのかなｗｗｗｗｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：４９
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

既に同意してんだろ
↓リョウコ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：５０
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

顔文字が可愛いって言っただけ！

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：５３
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

ゆうやいまゆうはんつくってる

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：５６
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

あ、もうそんな時間か
何だか長い時間話してたしそろそろお開きにしよっか

あっ君は眠いもんねｗ

Ｄａｔｅ：５／２７　１８：５８
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

結局話し合いっつーか報告だけでだべってただけだよな俺達

Ｄａｔｅ：５／２７　１９：００
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

ま、良いじゃんそういうのも！

体育祭とかゲーム大会とか、した

いこと何かあったら随時俺に言ってねー？

Ｄａｔｅ：５／２７　１９：０３
ｆｒｏｍ：カイト君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

はいよ

Ｄａｔｅ：５／２７　１９：０４
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

わかった
たぶんないけど

Ｄａｔｅ：５／２７　１９：０４
ｆｒｏｍ：リョウちゃん
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

了解したわ

Ｄａｔｅ：５／２７　１９：０７
ｆｒｏｍ：ゼン君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

あっ君寝起きだと変換すらしないのね…

ま、ということで終わりにしますか、そんじゃねー、ゆっ君に宜しく！

Ｄａｔｅ：５／２７　１９：０９
ｆｒｏｍ：アサ君
Ｓｕｂ：Ｒｅ：

了解

全メール数：８０
全メール時間：２ｈ３９ｍ

350＋台風二号とか今年来るの早くない？

「――あっくーん……？」

「アサキ君起きないんすか？」

「……」

「あ、起きた？　起きたよね？　目ぇ合ってるよね？」

「おはようございますアサキ君！」

確かにアサキだがお前等寝起きに五月蝿いんだが。

「いやんそんなに睨まないでよ、お昼だから起こしてあげたのよゼン君達」

お昼……嗚呼、もうそんな時か――え？

驚いて、思わず勢い良く立ち上がった。ええと、学校、昼、……

あれ？

「もう昼……？」

「あっ君二限からずっと寝てたよね、一回も目ぇ覚めなかったの？」

「全っ然」

ゼン君に苦笑されながらも、とりあえず今の状況を把握すること

にした僕だった。
今日の朝、完全に雨に降られた。台風の野郎が逸れやがったのは良いが、逸れたなら逸れたでとっとと温帯低気圧にならねぇからいけ好かない。荷台に乗りつつ傘を差してはいたが其の意味は最早無く、勝手にキレた僕は傘を畳んで合羽のカイトに慌てられたのだった。
学校に着いた時はそれなりにびしょ濡れ、クラスでも群を抜いてびしょ濡れ、此の時点で既に非常に眠かったのに一限体育ってどういう。荷物は無事だったからジャージに着替え、授業後もそのままで次の授業を受けた——ら寝た、と。
したら三時間程目が覚めませんでした。今此処。

状況確認が終わり席に着いた僕の正面にはゼン君、左右には他クラスだけどこうやってたまにやって来るフドウとコガネイが居た。コガネイに至っては食い終わってるし、昼飯。

「やっほーアサキ、お目覚めかーい？」

「何とか」

相変わらず呑気だ。
其れに打って変わり、真反対フドウは全然進んでいなかった。本人曰くサラダってなかなかフォークに刺さらないとか何とか。……昼にサラダてお前女子か。
ゼン君は普段買い弁で大抵はパンを食べてるんだけど、

「……弁当？」

「……」

だった。何其の嫌そうな間と表情。

「自分で作った……んじゃあ無いよね」

「勿論。ゼン君何でも出来ちゃうタイプの人間だから料理出来ないことは無――うんごめんちゃんと話すから何事も無かったよう弁当取り出すのやめてお願い」

「で？」

「まぁ本当、弁当くらい作れないことは無いけど、朝そんな時間無いよ俺」

へらりと笑いながら箸の先を踊らせてゼン君は言う、じゃあ其の弁当は一体。

「――姉貴が作ったらしい」

嗚呼、だから嫌なのか。

「絶対何か企んでんだよあのクソ女、昨日の夜あれだけ言い合ったのに今日になって弁当置いとくとか絶対おかしい。食い物のどれかに何かトラップが――」

「あるの？」

「――其れが無いんだよ、たまに喧嘩よろしくした後日に弁当作りやがるんだけど毎回普通の弁当なんだよ、しかも俺が好きなのばっ

か。此れどういうことだと思う？」

ゼン君は摩訶不思議な現象とでも言う様に眉間に皺を寄せて首を傾げた。ゼン君本当お姉さん嫌いなんだな……いや、嫌いだろうが家族だからとある範疇の嫌いだろうけど。

「さぁ」

「だよねー、本当もう何考えてんだか」

まぁ食費浮くからイイけど、と続けてからゼン君は笑顔に戻り、

「飲み物買ってくるね」と言って席を立った。

ゼン君の姿が消えてひとつ考える、……さっきはああ言ったけれど。

「フドウ」

「はい」

「ゼン君のお姉さんが弁当を作る理由だけどさ、お前分かる？」

「……はい、何となく」

ほら、フドウですら分かることだ。苦笑というか苦笑いというかぎこちないというか、な笑みを浮かべながらフドウは言い、「俺でも分かるけどなー」なんてコガネイの声すらもがそう言っていた。

「何で気付かないんだろうねー」

「――“謝罪”の気持ちくらい口に出せば良いのに」

「昔からそうなんすよ、ゼン君とカスガさんは」

幼馴染のそんな見解に呆れつつ、僕もさっさと昼食を済ます為に鞄を漁るのだった。

うちは喧嘩しないから分からないが、普通兄弟ってそんなもんなんかね。

３５０＋台風二号とか今年来るの早くない？（後書き）

ヒコク家で喧嘩が起こらない理由。

↓喧嘩する気力ある奴が居ない。（真理）

351＋ほんのすこしの遥かな昔。

――昔々あるところに、とてもとても孤独な男の子が居ました。

幼い頃から両親はお仕事でお家には居らず、朝も夜もたったひとりで食事をし、朝も夜もひとりで過ごすのです。

けれど男の子は両親に愛されていない訳ではありませんでした、たまにある両親の休みは何時だって一緒に居ましたし、男の子も両親のことが嫌いな訳ではありませんでした。

けれど。

ある日の夜中、男の子が何かに誘われるようにふと目を覚ますと、一階から人の声がしました。両親が話をしているのだろう、何となくながらそう思い音も立てず階段を下れば、予想通りに両親が、隙間分だけ開くドアの向こうで話をしていました。

――心配なんだよね。

実年齢よりずっとずっと若く、息子の自分が思うにしても見た目は大分幼き母が続ける。

――お腹の子供達があの子のように、笑わない子になってしまったらって。

……あの子？

一体誰のことを言っているのだろうか？　男の子は数度瞬きをしながらも、聞き耳を立て続けた。

――私がもっとちゃんとしたら、あの子は笑ってくれるのかしら。

だから、あの子とは誰なんだ。

男の子の頭には其の問いだけが縦横無尽に飛び交っていた、あの子とは一体誰なんだ、大好きな母を悲しませているあの子とは一体誰なんだ。

結局答が分からぬまま、男の子は再び部屋へと戻ってきた。あの場で聞き出せば良かったのかもしれないけれど、何となくそうは出来ませんでした。

もしかしたら、気付いていたのかもしれません。

あの子は男の子。

ひとりきりの生活の中、彼自身が気付かぬままに。

喜怒哀楽という感情表情が、何処かへ消えてしまったのだと。

「――とっとと起きんかい！」

なかなか目を覚まさない父親につい叫んだ俺、読書に耽ると本当に此の人は動かないから困る。たまの休みくらい休めよ本当に。で、寝るのは良いが書斎で寝るなよベッドで寝ろ。

「……おやマヒル、お帰りなさい」

「ただいま、――じゃねぇよ、」

やっと起きた父さんは、普段通り暢気だった。

「折角帰って来た珍しい日曜を読書で終わらして尚且つ飯朝から食ってないってどういう？」

「……あー、……もう六時？」

本当に此の人は……！

俺は怒るを通り越して呆れながら、恐らく百面相する俺を見て楽しんでいる父さんに向かいひとつ溜息を吐いた。暢気だよ此の人、いやマジで。

其れを証拠に父さんは、くすくすと様になる苦笑を零している。バイト帰りで自宅帰還した疲労困憊の息子など、……どうでも良いんだろうな……うん。

「――マヒルがこんな子で、本当に良かったな」

父さんは急にそんなことを呟いた。一体どうした、頭でも打ったか。

「そんな訝しげに父親を見ないで下さいよ」

「いやぁもう発言が危ういんでつい」

「そんなつい嬉しくないです」

其れでもやはり楽しげに。父さんは笑う。

「良い子じゃなくたって良いから、どうか笑顔を忘れた子だけにはならないで欲しい、って、奥さんと話したものだよ」

「……」

何となく、断片的に思い出せる昔の自分を思い描き、俺はやはり何となく、ふっと気の抜けた笑みを零す。

「――ばっかじゃねぇの」

笑うことは確かに少なかった、だってひとりなのに笑ってたら気色悪いだろ。

「んなこと頼まれなくたってな、」

だから笑顔を忘れてただけ、あの頃はきっと、笑顔を忘れていたことにすら気付かなかった。

でも今は違うだろ、俺の周りにゃ沢山の人が居るんだから。

「俺は何時でも笑ってるっつーの」

そうやって、弟達が言うにニヒルな笑みを浮かべれば。父さんは俺よか遥か綺麗に、微笑みを浮かべたのだった。

うん、そりゃ未だ無理だ。

３５１＋ほんのすこしの遥かな昔。（後書き）

最近のマヒルがシリアスターンな件。
大丈夫、次にギャグターンが来る。↑

352＋暑いけど梅雨です。

ユウヤでっす！　梅雨だよ！！

「たんだいまーっ！」

まぁ、雨が降ろうと買い物に行かなくちゃいけないから基本俺には関係無いんだけど、

「ただいまー……アサ君？」

――うちの弟と飼い猫は大ダメージ気味の様子です。

リビングに来てみれば、制服のまま野垂れ死ぬアサキと、の上に子にゃんこが乗っかっててうっはあ可愛い。

「帰ってきたなら着替えなよー、っていうか今日クラスで話し合いとか言ってなかった？」

「知らん」

くぐもった声からそう返事を聞いてから、アサ君の背中に居るチカちゃんを床に下ろしておいた。猫が背中乗っかってんのに無関心貫ける弟凄くないか、俺絶対無理可愛過ぎるって。――俺には決して乗ってくんないけどね！　畜生！

ちなみに今週末は体育祭、一組は熱の入りが遅かった割に熱いとかで放課後皆で話し合いをするとか何とかで今日は遅くなる――はずだったよね、あれ？

「ゼン君とエノミヤに任せた」

「おま」

チカちゃんが退いたことで動けるようになったアサキは、一旦起き上がって目付き悪く俺を見る。ていうか一致団結して頑張ろう！な行事サボんなし！　俺ならノリノリよ！！

「だって怠い」

「其れで何競技も出ることになったりしてたらどうするの？」

「ゼン君を殴る」

「嗚呼……」

ごめんゼン君、其の時が来ないことを祈っておく、頑張れ。

「アサキ何出るの？」

「出たくない」

「何出るの？」

「無視かお前そうか無視か。……なるべく気楽そうなの選んで、ってゼン君には言ってある」

体育祭なんて全部気楽じゃない？　だって楽しいじゃん体育祭、俺は動くの好きだからかなぁ。

出来ることなら何にも出たくないだろう――さっき明言してたし

ね――アサキは無表情にそう言って、其の連絡が後で来るのだろう携帯を凝視した。

「沢山出た方が絶対楽しいのに……」

「其れじゃなくても部活動対抗とか出るんでしょ、嫌だよ」

「クラス外項目でギブアップ！？」

そういや最近全く運動してるイメージ無いけど大丈夫だっけ此の子……！　また怪我とかしないよね！？　いやさせられたりしないよね！？　また五組がうんたらかんたらとか嫌よ俺！！　其れに――

「――流石の俺も、二度目は許さないよ……？」

次アサキに怪我なんてさせたら、ゼン君の勢いのまま殴り込みに掛かっちゃうかも☆　えへへっ☆

「……何か言った？」

「ううんっ、何でも！」

訝しげなアサ君に視線で追われながらも、俺はそそくさと夕飯の準備に取り掛かった。

……ところで。

「ねぇアサ君」

「ん」

「クラス対抗リレー、勿論アンカーやるよね？」

そろそろお兄ちゃん勝ちたいんだけど、勝ち逃げとかしないでよね？

353＋絶好日和？　体育祭！／開会式前

朝方に若干雨が降ってたけど、今は止んでますユウヤです！　小雨決行体育さーい！！　と自分の得意分野に発狂しています、校庭のど真ん中で愛を叫びたい気分だ……！！

と、いう訳で今日は休みだけど体育祭！　夏の電力不足うんたらかんたら（※知識不足）で何でかたまに土曜日課になる最近だけど、今日はまた別で体育祭！　週一しか休み無いとうちの弟が果てしなく弱るんだけどこういうのは振替休日になるから良いよね、ね、良いよね、姿見えないけど生きてるかなあの子。

「雲行き悪ィな、また雨降んじゃねぇの？」

「まぁ、降ったら降ったじゃない？」

うちの学校の体育祭実行委員会がろくでなしなもので、準備最中から生徒会が駆り出されていた今日の今より一時間以上前。其の頃は未だ小雨が降ってたんだけど……大丈夫よね？

頭上を見遣りながらカイト君はそう言って、俺は苦笑いで返事をした。

「帰りてぇ……」

「ちょっ、あっ君、大丈夫？」

「ヒコク……じゃなかった、アサキ君どうしたんすか？」

アサキだよ悪ィか。

急遽呼び出されて朝から働くとかふざけてんじゃねぇのマジで、と悪態をつきたいのは山々なんだが、昇降口付近で座り込む僕の目の前でおろおろしてる二人にそんなことをするのも悪い気がする。何せ二人は僕より動いた、ゼン君は良いがフドウに至っては其処ら辺に居たから僕がついでに連れて来ただけだ。

「これからが本番だよあっ君、ほらほら頑張って！」

本当嵐来ればいいのに。

何処から来ている元気なんだ此の野郎（ゼン）は。何か残りの元気持って行かれてる気がして、ひとつ深く溜息を吐いた。

「アサキ君疲れたっすか？　だったら休んでから行きましょう」

「でもシギ、開会式もう始まるんだけど」

「え、そうなんすか？」

「……嗚呼、開会式の時間すらヘマってたんだったかあのヘッポコ実行委員」

悪意の無い人には基本穏和なゼン君がキレそうになるくらい駄目過ぎた実行委員は、何を隠そう本当に役立たずだった。ていうか出来ないなら先に言えよ、むりくり丸め込む前にさっさと生徒会に言えよ、其れかしねよ。

額に手をやって落ち込むゼン君は呆れて物も言えない、と言った風にしてから顔を上げ、「皆もどうにかなったんかねー」と苦笑を浮かべながら呟いた。

「朝からくったくたとか、流石のゼン君も有り得ないし。此れ終わったら皆で打ち上げしない？　二年メンツ皆で。したら少しはやる気出るかも」

「打ち上げ？」

「夕飯食うとかそんなん」

「……」

フドウの目がキラッキラしてる、そういうのに憧れる年頃なのかお前は。

「あっ君はど？　疲れて其れ所じゃないかな？」

「……別に」

「え？」

此れがゼン君の厄介なところだよ、ユウヤとかカイトは何処かに

行くことを行く前提で話すから（バッサリと）断れるけど、彼は行かない前提で来てくれたら嬉しいなって話すから断り辛い。しかもちゃんと僕の性格を分かってての言い草だ、――此れでナルシシズム無かったら本当完璧だと思うんだけど……。

「其ん時気が向いたら、行ってやらないことも無い」

「うん、じゃ、また後で聞こうかな」

普段と変わらぬ笑みを浮かべたゼン君はけれど、非常に満足げだった。

……とりあえず、校庭行くか。

３５４＋絶好日和？　体育祭！／午前１

次いでアサキです。
朝は曇っていたから全然暑くなかったけれど、開会式の時間ともなれば若干蒸し暑くなってきていた。……まぁ日が出ていなかったからこそ、生徒会長の言葉が三年振りにまともに行われたらしいんだが。ハヤ先輩、去年だけならぬ一昨年も朝から撃沈してたのか。
――藍色はちまきにジャージ姿のハヤ先輩を拝めるのは非常に珍しいこと、って訳か。

相変わらずの完璧な挨拶に全生徒が感動を覚えながら終わった開会式、直ぐさま競技が始まる中、僕はゼン君と共にクラスの指定場所に戻ってきていた。

「一年と三年絡みばっかで、午前中俺もあっ君もやること無いんだよねー」

とのこと。
ゼン君とエノミヤに任せた僕の出場競技はクラス対抗リレー、以上。――二人に其れを聞いた時即座に飲み物を奢りに出たのは言うまでも無い。
部活対抗の方も午後だし、後の全員参加の競技も午後、――要するに、今此処に居なければならない理由が見当たらない訳だ。

「僕は木陰で休んで来る」

「え、始まって間もないのに早くもダウン？」

「若干ながら日光も出てきたし、そろそろ暑くなるだろうから其の前に休んでおきたいんだよ」

苦笑いのゼン君にそう言えば、僕は一人で木陰に――とか思ってたんだけど、気付いたら横にフドウとコガネイが居た。

「俺達も暫く暇だからーアサキと一緒に休んでようと思ってー」

「あり、シギとハクって何か出るんじゃ？」

「長縄っす！　其れまで暇っすから」

長縄は午前の後半だったからな。

まぁ、誰が着いて来ようがどうだって良いが。一人先陣切って歩き出せば、背後から着いて来る気配がした。

「生徒会の方で何かあったら電話するから、携帯だけは持っててねあっ君」

「あいよ」

ゼン君は最後に「俺はクソ実行委員見張っとくわ、」と、聞く人が聞けば嫌味にしか聞こえない一言を残した。

「去年に比べると、見に来てる人が多い気ーするよねー」

木陰に移動後、コガネイがへらりと笑いながらそう言った。確かにそんな気もするが、恐らく去年は競技に出場してたから気付かなかっただけなんだろうな。

「沢山の人が見に来てるんすねー」

「みたいだな。来賓とか、親御さんとか、……他学校の学生とか」

来賓と親御さんはまぁ良いが、文化祭でも無いのに学生が見に来て何が楽しいんだか。……まぁ一年生だったら、三ヶ月前までクラスメイトだったとかあるんだろうけど。

「俺地元若干遠いからなー、友達とか絶対来ないと思う」

「ボクは……友達……」

「淋しいこと言ってんじゃねぇよお前」

一瞬で表情に影差したぞお前、最早特技だろ其れ。

コガネイはからからと楽しそうに笑みを零しながら、フドウに友達沢山出来たろー高校でーなんて軽く慰めの言葉を入れていた。

――中学の友人、か。……まさかな。何処となく嫌な予感がして辺りを見回してみる、……まぁそんなことは無いだろう、わざとらしく大袈裟に、そう考えることにしておいた、

んだけどもね。

「ちょっと出張ってくる」

「え？　何処行くんすか？」

「暇だし俺達も行くよー？　ねぇシギ？」

三人して座り込んでいた訳だが、どちらかと言われたらお前等には其処に居て欲しいんだがな。三人で動いたら着いて来られるし、多分。

完璧な暇人約二名には其処に居て貰うことにして、僕は目的の方向とは逆方向へと歩みを進めた。嗚呼、途中でユウヤを拾っていこう、其の方がきっと良い。

はぁ、体育祭なのに何で面倒事増えんの。

355＋絶好日和？　体育祭！／午前2

ユウヤでっす！
カイト君やクラスメイトと地味に走り回ってたら急に現れたアサ君にラリアット喰らったぞ☆　いや、俺が後ろ向いて走ってたからなんだけど、自分の所為で美味いこと首が絞まった。アサ君、普通に声掛けてくれても良くない……？

「ついでだ、カイトも来い、お前等にとっちゃ面白いもん見してやる」

アサキ自身は面白くも何ともない顔してるけど、――其処に着いたら意味が分かった。
とある二人の人影は外部からお越しの方々に交ざって校庭を眺めていた。ちなみに俺達は其の背後方面に隠れている、だってバレたらつまらないじゃん！

「ねぇねぇねぇ！　会いに行かないの！？」

「あいつ等マジ暇だな」

「何時ものことだろ」

「ねぇってば！！」

完無視しないで……！
其の直後アサキから「突っ込んで来い」と御達示が下ったので、俺は初速度宜しく気付かれないように――リアルに片方に突っ込んだ。

「どーん！」

カイトだ、ガチで突っ込んだから倒れちまってるじゃねぇかよ、――ユキが。

はたから見れば滑稽過ぎる状況に爆笑を堪えながら、俺とアサキも其処に行った。

「ちょっ、ユウヤ大丈夫……？」

珍しく心配そうに声を潜めたのは勿論、ユキとは別のもう一人、アスカだった。

「だ、大丈夫じゃない……何か頭打った」

アスファルトにな。

「ちょっとアスカ！　酷くないかい！　私の心配もしてくれたまえ！！」

「すみません、ユキ君も大丈夫ですか？」

「ノープロブレムさ！！」

「問題無ぇならいちいち尋ねさせんなよ」

がばりと起き上がってハツラツに言うユキにアサキが溜息をひとつ、ユウヤは額を押さえて半涙目だけど……まぁ大丈夫だろ、ユウヤだし。

で、だ。

「――何でお前達が此処に居んだよ」

つい呆れた感じに、俺は言う。

二人は相変わらずの笑顔、で何より――じゃなくて、で自信満々に「そりゃ見に来たのさ！」「暇だったので」とか言っているけど。

――俺は騙されんぞ、何を隠そうアサキから聞いている。

「……学校は？」

「「……」」

お前達んとこ、土曜も授業あんだろ？

「サボったろ、お前等またサボったろ」

「いやですねアサキ君、友達を疑うなんて」

「そうさアサキ！　第一ほらっ、見たまえ！　今日は私服だよ？学校をサボるならば制服で来るだろう？」

確かに、と言った風に二人に一瞥ずつくれるアサキ。何故か其の発言で勝ち組になった二人は、一度お互いに顔を見合わせてから――

「「今日は休（みました／んだのだよ）」」

――聞き捨てならねぇ台詞を一言吐いた。

皆の勇姿を此の両眼に焼き付ける為に来たのさ！　けどアサキは既にはちまきが首元に巻かれてしまっているね？　では頑張ってくれたまえ！！　――と、実にユキらしく騒いで、昼休憩に入る俺達を見送ったユキ。ちなみにアスカは終始笑顔で、寧ろユウヤに大丈夫？　今日雨降るかもしれないからね？　ちゃんと屋根あるところ

に居なきゃ駄目だよ？　と何処ぞのおかんばりに心配されていた。

「あ、お帰りなさいアサキく……あれ？　お兄さんとロクジョー君も」

「シギ君、俺の呼び方やっぱり遠くない？」

「ふぇ？」

「あれー、アサキ何か疲れてるー？」

「るせぇ、構うな」

「ハクに当たるなハクに」

「へっへー、良いんじゃなーい？　仲良くなった証拠ってやつー」

暢気なやっちゃ。

とりあえず昼は教室戻って良い訳だし、アサキも少しは元気になんだろ。つーか午後が本番だから此処で疲れてちゃ世話無ぇんだが。

ま、アサキにゃ関係無ぇか。

356＋絶好日和？　体育祭！／昼休憩

「え、あの二人来てたの？」

リョウちゃんがめっちゃ訝しげにそう言った、ユウヤだよ！

「高校行ってからあの二人がハツラツ過ぎて俺爆笑」

「アイツ等……まぁ、二人共頭は良いから大丈夫でしょうけど」

カイト君の真顔の爆笑も気になるけどリョウちゃんの頭は、の下りも充分気になった。確かに頭良いし、でも性格だって良いもん！

特にアスカ！！！！（※色んな意味で）

ただ今俺達は旧生徒会室。昼飯食うだけなんだけど、教室がどうも暑くてこっちに移動した。ちなみに部活メンバーだけじゃなくてミノルちゃんとかシギ君とか皆居ます、……ちゃんとハヤ先輩には了解取ったもんね！　先輩達やムラサメ君は多分教室使うみたいだから、今は俺達の城みたいなもの、計九人！　九人入っても悠々自適ってやっぱり凄――――

バァン！！！！

『……』

と、俺が浮かれていたからアサキ辺りに叩かれたのかと思ったけれど、生憎身体の何処にも痛みは無い。

今の音はそう、部室の扉が蹴り開けられた音。――そりゃ皆黙るだろ。

「嗚呼、皆居たの」

「……ゼン君？」

其れをやったのはゼン君だった。九人――実は其の中にゼン君はおらず、アサ君曰く実行委員の見張りに向かったまま戻ってきてなかったんだよ。そんなゼン君が片脇にファイルを挟んで部室にやって来た、さっきシギ君に此処に居るってメールして貰ったし、其れで来たのかな――とは思ったんだけれども。

「ゼン！　扉足蹴にして開けんなよ！！　心臓飛ぶかと思ったろ……！！！！」

扉を背に向けて床でウミさん特製弁当を食べていたカイト君はいち早く我に返り、ゼン君に文句を言う。

「うんごめん。でも此の扉外開きだし、足で外にやってもカイ君には当たらなかったでしょ」

「そりゃそうだけ――」

「だったら良くない、物理的に心臓が飛び出した訳じゃないんだし」

そしてゼン君はそのまま、奥の生徒会長席の上に其のファイルを――ほぼ叩き付けた。

『……』

カイト君も黙って、皆黙った。

……ええと、ひょっとしなくても、キレてますよね、ゼン君。

ゼン君が其のファイルの中身に集中し出したのを見れば、皆がアイコンタクトで原因を探り出した。

先ずは幼馴染、――俄然首を横に振る。まぁ午前ほぼ俺達と居たものね。其の後其の隣の我が弟に視線がスライドされたけど、――何こいつ普通に弁当食ってる。

ってことは知らないんだろうな、……じゃあ。カイト君が机にあった消しゴムをアサキに投げる、基本的投げられたものは取る習性があるアサキは其れに気付いて顔を上げキャッチするけど。

（聞けや）

（は？）

小声ではなく、視線と動作の会話を二人が交わせば、他の皆の視線もしっかりアサ君に向いていた。

普段あれだけ騒がしい――人のこと言えないけど――ゼン君が人一倍キレやすい性格なのは周知のことだけど、だからってこうやって他人にも影響出るようにキレてるのを初めて見た。そしてこんなに近付き難いとも初めて知った。

「……ゼン君」

「なーにあっ君」

意を決――した気配は毛程も感じられなかったが――してアサキが声を掛けると、ゼン君は何時もの口調で何時もと違うトーンの返事をした。最早棒読みである。

と、声を掛けたもののアサ君は一瞬言い淀んだ。え、どうしたの？　って思ったのは多分俺だけじゃないけど、直ぐにまた口を開いて――こう言った。

「また実行委員、やらかした？」

――ゼン君の動きが止まった。大正解らしい。

此の後どんな反応に出るのかと最早皆びくびくしてる――ちなみに俺が見た限りシギ君が一番びくびくしてる――訳だけど、ゼン君は視線をファイルからアサ君に向けると、

「――そうなんだよ！　本ッ当聞いてよあっ君！！！！」

なんかころっと戻った。……あれ？

がたん、と立ち上がり透かさずアサ君の方に行けば、何故か其の隣のシギ君に引っ付く。

「あいつ等マジでカスなんだよ！　今度何したと思う！？　何もしないんだよ！！　ある意味ふざけとしか考えらんねぇのよ！！」

「へぇ」

「実は当日の今日実行委員長休みらしくてさ！　元々カスなのにもっと運営回ってねぇで午前の得点表もろくすっぽ集計し終わってないんだよ！　やれよ！　馬鹿かよ！　お前等の腕で午後も合わせて終わんのかよ！！」

「ふぅん」

其の後もつらつらとゼン君の愚痴が続き、アサキの適当な――そりゃあもう適当な――相槌が入る。シギ君はゼン君に捕らえられてるから身動き取れてないけど、慣れてるのか離されるのを黙って待っている様子だった。

「――で、その仕事をゼン君掻っ攫ってきた訳？」

「そういうこと。このままだと終わらないし、俺がやんないとどーせハヤ先輩が手伝っちゃうし」

「其れは駄目だ」

「でしょ？　ただでさえ奇跡的に動いてるハヤ先輩に無理させたくないし、っていうかあの三年マジでハヤ先輩と同い年なの？　全ッ然思えない、使えるだけサチの方がマシ」

ははっと楽しそうな様子のゼン君、いつの間にやら完全に元通りのゼン君に戻っていた。皆も其の気配を悟ってか若干ホッとしているけど、俺はマジでキレたゼン君なんて二度と見たくないと思った。

……いや其れこそマジで。

「ねぇ、ワタヌキゼン」

「ん、なーにカトウちゃん」

という訳で。落ち着いたゼン君にリョウちゃんが声を掛ければ、ゼン君は何時も通りににっこりと微笑みながら応対した。

「アナタ、昼ご飯は？」

「あ、やっべ忘れてた、今日学食のつもりだったのに。もう無ぇだろうな……」

「ゼン君！　ボクが行った時に買っといたっす！　チョイスはアサキ君ですけど」

「え、マジで？　サンキュー二人共、二人には礼としてゼン君の愛をあげます」

「要らん」

「俺も一緒に買いに行ったんだけどなー」

「プラスハクにも」

「はいはあい！　テナもゼン君の愛が欲しいよお！」

「じゃあついでに私も」

「わたしも」

「ついでに貰うものじゃないわよミノルにシキ！？」

「何言ってんの、ゼン君女の子には既に全員愛を注いでるのよ」

「リョウコは要らねぇだろ、他から欲し――今箸投げたろ！！！！」

「五月蝿いわよ馬鹿！！！！」

一気に騒がしくなったなぁ、普段の部室とは違った盛り上がりを見せる今に俺はつい笑みを零した。やっぱり、学校はこうでなくちゃね！

皆でこうやって集まれるから行事って嫌いじゃない、っていうか馬鹿騒ぎは大好きだから行事は元々大好きだけど。テンションがマックス級に高い中、俺は自分の弁当を食べ切ってから其れに応戦することにした。

っていうかよく考えたら、此処からが本番だよね？

357＋絶好日和？　体育祭！／午後1

午後の部始まったけどユウヤのまんまだよ！

『ぅおりゃあああああ！！！！！』

『ぅおらあああああああ！！！！！』

等。勇ましい掛け声が響いています午後初っ端の競技は二年全体玉入れです。テンションがマジ過ぎる、数秒前まで『玉入れなんて餓鬼っぽい』とか文句聞こえてたんだけど？

まぁ俺もマジで玉投げまくってんだけどね、……入んないけど！！　隣ら辺で投げあかしてるカイト君も全然入ってない、手数は多いんだけどなぁ。寧ろ投げた玉が正面の人に当たってる、痛いよねごめん。

「ったく、此れだからこういう競技は好きじゃねぇんだよ……」

「そなの？」

「力任せにやれねぇのなんて、俺には向いて――ない！」

そして投げた玉は再び籠を掠めて地面に落ちた。

玉を投げながら横目に、他のクラスの様子を盗み見――たら一組メッチャ入っててびっくりした、え、何其れ既に定員オーバー？

「アサキこういうの得意なのな」

俺の唖然に気付いたカイト君が身体をずらして其方を見れば、けっ、とつまらなそうに声を上げてもうひとつ玉を投げた。
黄色いはちまき集団のほぼど真ん中、籠の真下で多くの玉を抱えて黙々と玉を入れ続けているアサ君を発見。地面から拾ってる様子は無い、……どうやらムラサメちゃんが運んでるのをアサ君が投げてるだけらしい。真下から下手投げで上げられる玉は、かなりの高確率で籠に納まっていた。……そうか、真下なら玉と玉がぶつかって邪魔し合うとかが無いんだ！

「アサキの奴考えたな……！」

「違うな、アレはただ単純に玉入れんのが楽しくなってる顔だ、其れ以外他意は無ぇ」

確かに。うちの弟がクラス貢献とかするはずがない、ただ投げてみた玉が入ったのが楽しかったんだ絶対。カイト君は呆れ顔でそう言ったけど、流石だなぁ、アサキの解説させたら右に出るのはマヒル兄くらいだろう。
ゼン君やミノルちゃん、二人は其れなりに背も高いし、運動神経も良い。……一組って実はすっげぇ強いんじゃないの？
正反対の三組を見てみた、青いはちまきの中からはっ君は直ぐ見つかったけど、シギ君何処？　小さくて見えな――居た、金髪だから分かった。まぁ其れなりっぽい、何か二人共のんびりしてるけど楽しそうだし。

「楽しければ何事もおっけいだよ――ね！」

「そういうこっ――た！　っしゃあ入った！！」

俺達も其れなりに楽しんでるんだし、今はまぁいっか。

「二番だったねえ、二組なだけに」

「そうね、一組が一番だったわね、一組なだけに」

リョウちゃんとテナちゃんが何か言ってる。競技後に戻って来たシートに座りながら、二人はそんなことを呟いた。

「リョウちゃん……暑いの？」

「別に逆上せたりしてないからね？　たまには乗ってみただけよ？」

何だ、良かった。

「次まで結構時間あるし、飲み物でも買って来ようかしら」

「あ、テナも行く行く！」

リョウちゃんはひとつ伸びをしてそう言った、テナちゃんはテナちゃんで其の言葉にいち早く賛同しぴょんっと立ち上がる。

俺も買ってこようかな、なんて考えて此処からは見えない自販機の方を見遣れば、見知った影がキョロキョロと辺りを見回していた。ん、どうかしたのかな、挙動不審？　……何時もか。

「ムラサメくーん！」

――声掛けただけでびくってされた、先輩ショックでかいわ。

けれどムラサメ君は数回瞬きをしてから俺達の方へ来てくれた、わはっ、良かった、嫌われてはなくて。

「何してんの？　探しもの？」

「……あ、の」

「うん、」

「……」

「リョウコお、リョウコ達んとこの後輩クン？」

「えぇ」

「超イケメンクンって感じい！　いいなぁ、うちの部活男子居ないからさあ」

テナちゃんの所為でムラサメ君が赤くなって黙ってしまった、テナちゃんが悪い訳ではないだろうけどどうしてくれる。

「……ッ」

「ムラサメ君！　テナちゃんのことは気にしないでね！」

「……テナ……？」

「え、テナちゃん、がどうかした？」

赤くなったのから一転、テナちゃんの名前を聞くなりムラサメ君は小さく、其れはもう小さく首を傾げた。

「……ワタヌキ、先輩が」

「ゼン君が？」

「ヒコク先輩……あ、アサキ先輩と、……其の、テナ……先輩を、呼んで来て欲しい、って」

なになにー？　と自分の名前に反応したテナちゃんと、だから……アサキ先輩、探してて……と俯きがちに言うムラサメ君。どうやらゼン君のお使いだった様子、頑張ったね……！！

「アサ君ならあっちの日陰でシギ君とキャッチボールしてたと思う、俺が呼んできてあげるから、ムラサメ君はテナちゃんと一緒に行ってよ。場所は？」

「……実行委員、テント、です」

嗚呼、またかい。三度ですか、本番。

テナちゃんを呼んだってことは美術部関連で何かあったのかな、ま、行ってみれば分かるか。

「じゃあテナはあ、此のイケメンクンと行けば良いのねえ？」

「うん、そゆこと」

「……」

大丈夫かな、ムラサメ君。

「じゃあリョウコ、ちょっと行ってくるねぇ」

「いってらっしゃい、飲み物何か適当に買っとくわよ」

「ありがとお！」

行こうねえっイケメンクン！　と、テナちゃんは意気揚々と行ってしまった。

……至極心配だけどとりあえず、今は早く野球部じゃない野球少年を呼びに行かねば！

358＋絶好日和？　体育祭！／午後2

「アッサくーん！」

「あ？」

相変わらず続くよ、ユウヤだよ！

普段は直ぐ其処ら辺で寝転がっちゃう弟が、木陰でシギ君とはっ君と三人で落ちてたテニスボール使って野球してました。バットは落ちてたポールらしい、これで三人とも文化部だから笑っちゃうよね！　人のこと言えないとか言わない！！

現在バッターのアサ君はポールを肩にしょい上げてこっちに来てくれた、珍しく元気だし機嫌が良くてお兄ちゃんびっくり。

「ゼン君が呼んでたってさー」

「ゼン君？　また何かやらかされたんか」

「そーみたい」

滅多に無いご機嫌モードのアサ君の機嫌を損ねるか否か不安だったけど案外平気だった。くるりと振り返って「フドウ、ちょっと出てくるから此れ」とポールをシギ君に投げたけど、棒なので軌道が逸れてかなり飛んでった。

「いー！　あー！　とっ！　いってらっしゃいっす！！」

「さっすがシギー。はい、いってらっしゃいアサキー」

ナイスキャッチなシギ君だった。

アサキだが。

ユウヤはクラス競技に出るからと、場所だけ聞いて来てみた――は良いが。

「あ、あー君来たあ！」

うん？　何でお前居んのドウモト。と、よく見れば其の億に見慣れた金髪が居て、其の隣にはまさかのハヤサカ先生が居た。

「アサキ、こっちこっち」

「うん、どうした」

実行委員が座るべきテント内に、何故か座っているゼン君が、今は――此処重要――笑顔で僕に手を振った。

「ハヤサカ先生まで来てどうかしたんですか」

「ヒコク君、尋ね方が違いますよ」

「――ハヤサカ先生まで来なければいけないどんな事態になってるんですか」

「宜しい」

どんな言い直させ方だよおい。というかドウモトが居るのは一体何故だ。

バインダーに挟んだ書類と昨年同様眼鏡レスのジャージ姿で対面するハヤサカ先生、確か重度の遠視とか言ってたっけか、かなり遠ざけて見ている。

「生徒会が振り回されているのには気付いていたんですが、ワタヌキ君が対処してくれていたので遠方で見守っていたんですよ」

「出来れば早めに手伝って欲しかったなゼン君」

完無視で先生は続ける。

「――昇降口の看板、あれが倒れましてね」

此処からは、何時もの先生のトーンだった。

「来賓の方々に被害は及びませんでしたが、うちの生徒が二名程怪我をしまして」

「……あの看板って確か、」

「ええ、例年万が一にも倒れ誰かが下敷きにならないよう、しかと門横に縛り付けておくことになっています」

そう、確か去年は生徒会でやっていた。僕等は未だ未所属だったけど、先輩達が見回った際にそんな話をしていたはずだ。

「あの看板は今年から変わりましてね、貴方方も見たでしょう」

「はい」

「おーよ、勿論見た」

去年見た看板は何とも堅ッ苦しい文字で堅ッ苦しく体育祭と書かれていた気がするのに対し、今年のは……何というのか、……奇抜だった。

「あれは今年実行委員が美術部に頼んで作って貰ったものなんですよ」

「……嗚呼、だから」

赤青緑、黄紫と何十色で彩られた看板を作ったのは、ドウモトが所属する美術部だったらしい。美術部に話を聞きたくて、ドウモトを呼んだって訳か。

「ねえあー君！　テナ看板取り付ける時見てたけど、確かに実行委員の人、ちゃんとロープ取りに行ったんだよ！」

話の区切りを悟ったドウモトがそう言って、僕の腕を抱き込んだ。

「でもその後、多分返って来なかった！　忘れて他のお仕事始めちゃったんだよきっと！！」

折角頑張って作った看板だったのに、と、普段明るいドウモトが、

若干しょげてみせた。……看板が倒れたということは、看板自体も無事では済んでないってことか。

「で、僕に何をしろと、巡回？」

「察しが良くて助かる」

其れしか無いだろう、此れ以上失敗されても困る。元を正せば馬鹿ばっかりな実行委員が悪い癖になんだってんだ。こういう仕事を普段からハヤ先輩達は、文句も言わずやっていたなんて思うと――

「……ん……？」

ちょっと待て。

そんなお人好しな先輩達が何で今居ないんだ……？

――まさか。

「ゼン君、さっき言ってた怪我人って――」

「一人は足に擦り傷だから、別に対した怪我じゃなくもう動けるはずだよ。もう一人はそっちを庇ってちょい頭打ったみたい、軽い脳震盪ってところかな」

ゼン君は、あくまで笑顔だった。

「一人はフウカ先輩、もう一人はサチトだ」

「失礼します」

「――あら、アサキ君」

保健室にやってくれば、ベッドの横に座ったフウカ先輩が僕に気付いた。此処には別に頼まれて来た訳では無い、頼まれた巡回の途中で立ち寄っただけだ。

「……大丈夫ですか」

「私は平気よ、サチトもさっき目を覚ましたけど、眠いってまた寝ちゃった」

若干だけ口角を上げて、フウカ先輩は言った。サチト先輩が何と

も自由である、心配して損した――とか別に差ほど心配してなかったけど思ってみる。

「――どちらかと言えば、ハヤが心配」

「……？」

フウカ先輩は馬鹿面で寝入るサチト先輩――まぁ、元が良いからそうでも無いが――を凝視しつつ呟いた。

「三人で、散歩がてら巡回していたの。其の時に看板の脅威に遭って、ハヤ、多分一気に心労が募った」

「……」

今は此処に居ない先輩の後ろ姿を思い浮かべながら、フウカ先輩の話を聞いた。

「人一倍責任感が強いから、私達のことも自分の所為だって考えてる」

「え、……でも、あれは今年から――」

「実行委員の係。でも、生徒会長はハヤ」

まぁ、分かる気もする。其れを止められる人はよりにもよって今寝てるし、……というかハヤ先輩何処行った。

「ハヤは今多分だけど、旧生徒会室。さっきゼン君から実行委員の

書類掻っ攫ってるのを、此処から見たから」

「仕事してるんですか」

「多分」

そんなもん、ゼン君に任せときゃ良いのに。ゼン君だってアレだろうけど、ハヤ先輩の為なら恐らくやるし。とか考えてたら、フウカ先輩が此方を見ているのに気付く。

「こう見えても、」

「はい」

「二人の心配をしています」

「はあ」

きりっとした顔で言われた、何て答えたらいいのか誰か教えてくれ。

「だから、」

何が言いたいんだろうか、そんなことも考えてみたけど、其れは考える必要は無かったらしく。

「サチトが起きたら、ハヤのところに行く。其れまでお仕事、任せて良い？」

小さい傾げられた表情に、僕は一言、

「――愚問です」

そう返した。

359＋絶好日和？　体育祭！／午後3

「垂れ幕がマジで落ちる二秒前だったのとあれだけ言ったのに看板のロープの巻き方甘過ぎだったのと午後分の得点計算が果てしなく狂ってたのを除けば何も無かった」

うんありがとう、ある意味充分だよね。ゼン君だよ。

色々わたわたしていたからか、時刻は何時の間にか二時を回っていた。あれ、俺なんか体育祭らしいことしたっけ、あれ？

巡回の結果を口答プラス真顔で発表してくれたあっ君のお蔭か、今のところあれ以来目立った失敗は起こっていないけれど。

「あと、先輩達は大丈夫だった」

「嗚呼、見に行ってくれたんだ」

「通り掛かったから」

――此れ以上何か起きるようなら、今度こそブチ切れちゃうかもなんだけどな？

そんなことを考えつつも、とりあえず出場競技をサボる訳には行かないから、其処をハヤサカに任せて俺達は校庭に出てった。

「ゼン！　アサキ！」

「やっほうミノルちゃん、そんなに急いでどうしたの？」

校庭の一組の荷物置場に戻る最中、ミノルちゃんが慌てて此方にやってきた。一体全体どーしたんだい、余談だけどミノルちゃんのポニーテール超似合い過ぎてて感動した。

「戻って来てくれて助かった、短距離の男子生徒が前競技で怪我して走れなくなったんだ。どちらか出てくれないか？　とクラス一同が」

私はお前達を呼びに走らされる使いっぱしりという訳だ、ミノルちゃんが真顔でそういうから何も言わなかったけど、其のミノルちゃんを使いっぱしりに出したのが野郎だったらタダじゃおかねぇ。

まぁでも、頼られてるんだから期待には応えたいよね。あっ君はこういうのどうせ出ないし、だったらゼン君が――

「行く」

「え？」

――凄い現象を前に驚愕でどうにかなるかと思った。

めっっっずらしいというか何と言うか、え？

「あ、あっ君出てくれるの？　あっ君？」

「良いのかアサキ、走るんだぞ？」

「何でどちらかって選択肢出したエノミヤまでキョドってんの？」

そりゃそうだろ、幾ら去年クラス違うからって数ヶ月間であっ君の行動なんざ熟知済みだよ俺もミノルちゃんも。

「クラス対抗しか出ないし、今なら疲れてないしゼン君大変だし。――出る」

使わな過ぎて既に堅結びになってしまっているはちまきを解こうと試みながらあっ君は言って、若干労られていることに気付いた俺。ミノルちゃんはそんなあっ君の態度にふっ、と笑みを漏らし、「じゃあ、頼んだぞ、アサキ」と一言沿えるのだった。

「確か短距離って、カイ君とシギが出るんだったよ」

「勝ってくる」

「さっすがあっ君！　カッコイイね！」

「カッコイイぞ、アサキ」

「……エノミヤはゼン君の言葉を鵜呑みにして繰り返すの止すべきだと思う」

「あ～、あっ君照れて――パス！！　ノールックからの左ローはいけない！！！！」

あっ君をからかうのが命懸けというのはゆっ君達見てれば分かることなんだが、実際やってみると本当駄目だ、今脅威のスピードで

俺の膝持ってかれるところだった……！！　輪切り寸前だったよ俺の脚！！！！

やっとのことで解けたはちまきを手に、――俺にローキックを入れたことなど忘れたかのように――あっ君は競技へと向かっていった。

「頑張ってねー、あっ君！」

「おう」

低いテンションを引き摺ってはいるけど、アレで機嫌が良いんだから普段が凄いよなぁ。

「え！？　アサ君何で短距離出てんの！？」

「……え！？」

俺の出る競技が終わって直ぐにそんな現実を見て、今までで割と上位に入る程驚いたユウヤです。え？　あ？　何で？

一緒に居たリョウちゃんも時間差で驚いている、ですよねー。

「うちのクラスの出場者が怪我をした」

そんな俺達の驚愕に答えをくれたのは、これまた一緒に居たシキちゃんだった。

「代わりを足の速いヒコク君に頼もうか、とクラスの人が言っていたけれど、去年からのクラスメイトが其れは無理だと言って、」

嗚呼、誰だか知らないが良く分かってらっしゃる。

「だったらゼン君に、とまた誰かが言ったけれど良く考えたら二人共見当たらず、」

実行委員共の所為でね。

「ミノルちゃんに探して貰いに行った結果が、此れ」

――という訳らしい。

アサ君が自ら出るなんて言い出す訳が無いし（※偏見）、ゼン君が忙しかったのかなぁ？　不思議ではあるけどとりあえず思うのは、完全に一位は持ってかれたなっていうことのみ。

三人で話していればあっさりと走者が走り出して、

「――ほれ見ろ、アサ君がユキちゃん以外に負ける訳が無い」

ってなる訳で。

「「……」」

リョウちゃんにシキちゃん、何故か双方だんまりだったけど。

「……ヒコク、……ユウヤ君」

「何でフルネーム？」

「アサキ君って普段、何だかこう……のんびりしてるというか……」

「良いよ其処は怠がり屋とか言ってくれて」

「……なのに、足があんなにも速いことに、わたしはとても驚いた」

ですよねー！

あの子人生の半分以上を本気で生きてないからこそ、本気出すと速いんだろうね！　とか最近考えてるよ！！　カイト君はどっちかと言えば長距離派だし、シギ君なんて完全そっちだしね。二人共――っていうかカイト君――走り終わってからアサ君にちょっかい出しに掛かっている。

「リョウコちゃんも、其れに驚いているの？」

「――え！？　あ、嗚呼、私？」

そして其の横で黙り込んでいたリョウちゃんにシキちゃんは声を掛けて、首を傾げながらリョウちゃんの表情を伺った。まぁ、リョウちゃんは元々知ってるしね、違うことだとは思うんだけど。

「いや、何でも無いのよ？　ヒコクアサキ速かったわねー、ってのは別に知ってたから」

「っていうかリョウちゃん、其の後上見てなかった？」

何となく見過ごしていなかった俺。ギクッ、と肩を揺らしたリョウちゃんは恨めしそうに俺を見て、――諦めたように溜息を吐いた。

……何かごめん。

「――雲行きが、さ」

「「……」」

シキちゃんが上を見て、俺もつられて上を見る。リョウちゃんが言う様に雲行きは朝から更に悪くなっていて、このままだと雨が降るのも時間の問題なんじゃないか、って感じになっていた。

「雨を危惧していたのね」

「違うよシキちゃん、リョウちゃんは雷が――」

「違うわよ馬鹿っ！」

食い気味に否定された、此れは図星だね。

種目も後少しだし、頑張ってくれないかなぁ、なんて俺は思うんだけど。

「雨が降ったら、――涼しくなりそう」

シキちゃんは非常にマイペースに、そんなことを呟くだけだった。

残りは部活対抗とクラス対抗リレーだ、よーっし、頑張るぞー！

３６０＊閑話＋このタイミングでパロ再開！

はうあーい！　これまた無計画が生んだ中途半端な位置で閑話に入ったよんアザイです！

「アザイさんのハイテンションが俺ですらうざく感じてるけどそれは言わないでおくユウヤでっす」

「どっちもどっちだろ馬鹿野郎、自己紹介が今更過ぎんだよ」

アサキ君の溜息から始まりました閑話コーナー、何だかお早い登場なのは思った以上に体育祭の話が長引いているからだよ。

「うわー」

六月中に新しいキャラもう二人追加しなきゃだったのに終わりそう、この予告意味がなくなりそう。

「このペースだと、せいぜい一人は来月送りだな」

「島送りみたいだね！」

ユウヤ、意味分かって言ってる？
まぁ恐らく一人は島送り（※採用）になりますね、一人は死んでも直ぐ出すんだから……！　っていうか出すって言っちゃってるし！

「え？」

「何処？」

詳しくはメール会議話で。

「「あー」」

さて、此処まで騒いでおいて何なんですが、――アリスパロ戻ります。

「唐突だね！」

その笑顔たまんねぇな。

いやぁね、今回何やるんだったかなぁとか考えてたら前回アリスパロ戻るとか自分でくっちゃべってさぁ。

「Ｔｈｅ・計画性の無さ」

あっはっはすんません。

何時もならじゃあやっぱり次回からで、とか言うんですが、ま！

書きましょかね！　みたいな！　要するにノリ、みたーいな？

「……」

「……うん」

――うん、双子が乗り気じゃないってのもあるんでさっさと始めましょう。

ではでは、つづーき！　そして自分等はこれで下がりますのでそれではー！

――

「――……ううん、……ん？」

すやすやと安らかに――それはもう安らかに眠っていたアリスはやっとのことで目を覚ました。眼を擦り、きょろりと周りを見回すアリス、気付けば此処は、自分の部屋ではありませんでした。

「嗚呼、そっか……なんか、……扉が……」

そうですアリス、たーくさんの扉に囲まれているんです、今。しかもそれが全部開かないんです、でもあなたは未だ小さい扉に気付

いてなければ、机上のものにも気付いてないんです。とっとと気付いて下さい。

「何だか怒られてる気がする……」

怒られ慣れているアリスはそんな気がしたのですが結局良く分からなかったので、とりあえず動き出すことにしました。

扉は開かない、じゃあどうしようか。やっとのことで問題に立ち向かったアリスは考えます。あの白兎を見つける為には、とっととこの部屋を出なければなりません。

「――……ん？　なにこれ」

暫くすると、アリスは机の上に何かがあることに（やっと）気付きました。それは、小さなびんに小さな鍵、小さなびんには何か文字が書いてあるようです。アリスはじーっと双方を見遣ります。

「……」

アリスはまだまだじーっと見ています。

「――ちっさ！」

――それからアリスは、今更なツッコミを入れました。

「でも、鍵があるってことはこれどっか開くってことじゃんね！よっし、開けてやる！」

一気にやる気を出したアリスはその鍵をふんだくって、部屋中の扉の鍵穴に鍵を差し込んでは捻る作業を繰り返しました。

しかしアリスはまだ気付いていないのです、その小さな鍵で開く扉は、自分より遥かに小さい小さい扉であることに。

暫く捻り続けていましたが、なかなか開かない扉に疲れてきたアリス。再び椅子に座れば、そういえばと鍵と一緒に置いてあった小さなびんを手に取りました。

「――ぷれあすどりんくみー？」

そしてアリスはその小さなびんに書いてあった文字を――見事に読み間違えました。正しくは、“Ｐｌｅａｓｅ　ｄｒｉｎｋ　ｍｅ.”なんですがね。

「……ま、いっか」

アリスは深く考えずにびんを取り、中に入っていた液体を口に含みました。アリスは鍵を捻り過ぎて、疲れていたんでしょうね。読めはしませんでしたが、まんまとその通りにしてしまいました。

するとどうでしょう、アリスはまだ気付いていませんが、アリスの身体はみるみると縮んでいるではありませんか。

「何か微妙な味、何混ぜたら出来るのかな？」

アリス、びんを眺めながらそんなこと呟いてる暇はありませんよ。アリスが気付かないまま、身体が縮むのは止みました。びんを眺めていたアリスもやっとのことでその様子に気付き、その身体に驚き――

「あの扉と鍵の装飾多分一緒だ！」

ませんでしたね、小さい扉には気付きましたが。
アリスは急いで鍵を探します、持っていたびんは床に置きました。けれども鍵は見つからない、一体どこに置いたのでしょう。
そう、アリスは机に鍵を置いたのです。身体が縮んで今は遠くなってしまった、高い高い机の上に。流石のアリスもそれは覚えていたので、備え付けられた椅子を登り棒として登ろうとしましたが――身体が縮んだことに気付いていないのにそうしようと思えたのがアリスらしいですね――、椅子は滑ってなかなか登れません。アリスは諦めて――

びりっ

「――……おし」

……え？

「俺に出来ないスポーツは無い！」

……あれ？
アリスはエプロンドレスの裾を豪快に破り捨てました、そして丈を短くすれば確かに動きやすそうで……え？
先よりも大分男前な顔付きで助走をつけ、アリスはまんまと机の上に到達しました。……アリスなのに何なんだ、その運動神経は。
なかなかの高さがある机から椅子、椅子から床へ華麗に飛び降りればアリスは何があった顔もせず扉へと向かいました。

「この服可愛かったんだけどなー、仕方ないから後で繕うかー」

そんなことを呟いた、見た目は麗しいのに何とも逞しいアリスは、合致した鍵穴で鍵を捻りました。

さて、彼女（？）を次に待ち構えているものは一体何なのか。

続く。

361＋絶好日和？　体育祭！／午後4

「ったく……出るなら言えよお前、しかも同じとかマジふざけ」

「アサキ君はやっぱり速いっす！」

「楽勝」

三人がそんな話をしながら戻って来た、ユウヤでっす。

「お疲れ様」

シキちゃんの労いの言葉に「おうっ」と元気良く笑ったカイト君と、「三番でした……」と落ち込むシギ君。……まぁアサ君は何時も通りだから気にしない、――というか気にしたら負け感あるよね。

シキちゃんはシギ君の頭に手を置いて、俗に言ういい子いい子をしている。気持ちシキちゃんが嬉しそうなのは恐らく、実の弟には出来ないからなんだろうな、身長的に。

「和む」

ほら。

「わたしとフドウ君、実は同じ部活だった」

「へー、茶道部？」

頷くシキちゃん。そして、

「――ずっと気付かなかった」

シギ君は大分大きめなダイレクトアタックを喰らうのだった。

「名前が似てる人が居るなぁ」

「……」

「あなただとは思わなかった」

そして更に追加攻撃をしたシキちゃんだった。

「っていうか、今って何組が勝ってるとかあるの？」

雲行きが怪しい中開始されるは部活対抗リレー、部活対抗って軽く言うけど此れには生徒会的に非常に苦しい事情が絡んでいるので無下には出来ないとのこと。部費アップって凄いのね、俺達の部活全然興味無いのに。

「得点板見ても無駄だよ、計算狂ってる」

「あ、そなの？」

トラック半周ごとに借り物競争をしてリレーするっていう俺ですら一回で理解出来た単純明快な競技が一番厄介とか……。

キョロキョロしてたら俺よか後に走るアサ君がそう指摘してくれた。見ても無駄とかどんだけ。

「……っていうかさ、」

「ん」

「――アサキと味方でこういう競技出るの始めてじゃない？」

「……まぁ」

小学校も中学校も勿論違うクラスだし、部活も入ってなかったから当然といえば当然なんだけど。

アサ君も返事から聞くにどうでも良いんだろうけど、何だかちょっと嬉しかった俺だった。

「あ、始まった」

適当にだべってたらパァンっていう乾いた音が校庭に響いて軽くビビッた。スタートの合図だったみたい。

――実は競技に入る前。

一チーム六人で行われる競技だからって二年全員と後サチト先輩が出るはずだったんだけど。

『俺出れなくなったからムラサメ頼んだ』

そんなメールがムラサメ君の携帯に来たらしく、今にも泣き出しそうなムラサメ君が俺達に其の画面を見せ付けて来た。代わりに出るのそんなに怖いか……！

サチト先輩絶妙なことにアンカーだったんだけど、何か無理だと悟った俺達は急遽順番を変更。最早誰が何番かとか知らない。まぁ俺の後ろにアサ君が居るからアサ君は四番手なんだろうけど、俺二番だし。

「あ、投げ捨てた」

「え、何が？」

「カイト」

一番手はカイト君だったらしい、借り物ポイントで拾い上げたと思われる紙を振り上げて叩き落とした。去年は普通の借り物出たけど、……また無茶な注目なんかね。

「面倒なのとか出たら怠いな」

「俺去年会議室の机運んだ」

「……」

一度指定位置まで戻ったカイト君は次の紙を拾い上げた、――あ、今度は走ってった、何か叫びながら。

「ほのちゃん何処だよ！！！！」

嗚呼、ほのちゃんか。

「っていうかさ、ゼン君は？」

カイト君が次の俺に回せそうなのを見てから気付いたこと、確かアンカーはゼン君に仕立て上げごほんっ――になったはずなんだけど。アサ君の後ろに居なきゃおかしいよね？

「ハヤ先輩達んとこ戻ってからまだ戻って来てない」

「え！？　競技始まってんのに！？」

「ゼン君は多忙なんだよ」

心底怠そうにアサ君は溜息を吐いた。っていうか来るよ、と続き言われ見てみると、たすきと共にカイト君が此方にやってくる最中だった。

「じゃ、行ってくる！」

「トチるな、以上」

「おけ！」

他の部活も借り物の内容に苦しんでいるのか、先行してる人達もそんな前に居る訳じゃあない。

よーし、いっちょ頑張りますか！

「紙なんて書いてあったの」

「最初が此れ、次がこっち」

全力疾走してきた多少息は切れてるものの、言葉には不自由なくカイトは僕に紙を渡した。というかお前叩き付けたの拾ったのか。

――“あなたの好きな教科の教科書（※五科に限る）”と、“担任の先生”ね。

「俺最近英語の教科書持って来てねぇし学校に」

其れは持って来いよ。

次を走り出したユウヤは、丁度紙を拾い上げているところだった。
躊躇いなく走り出したのは――校舎？

「何だったんだろうな」

「さぁ」

去年恐らくダミーで入れたんだろう会議室の机運んでしまう奴だからな、実行委員どんまい。

「此れは……何か、余裕で勝てそうじゃねぇ？」

カイトが僕の横に座り込んだのを目で追った後、視線を一走目に持っていく。未だ燻ってる部活もある、……というか。

「こ、こんな失礼なの出来ねぇよ！」

「……“河童”って居るの？」

「“此の世以外の生き物”と“河童”の違い！！」

「“一番嫌いな先生”……！？」

――此のリレー、完走出来る訳？

362＋絶好日和？　体育祭！／午後5

ユウヤだよ！　借り物リレー中なんだけど探してる人が居ない！

「おう、ユウヤ頑張ってんな！」

「――えぇ！？　先輩達！？」

もう帰っちゃったのかな、なんて思い始めた頃、校庭の端っこに先輩達を見つけた。手を上げて笑顔で座りながら俺を見るサチト先輩と、フウカ先輩ハヤ先輩、……あれ？　ハヤ先輩はともかく他のお二人さんは怪我が何とかかんとか――

「頑張って一位取ってくれよ、生徒会の為に」

「頑張ってね」

……まぁ、良いや。とりあえず頑張ろ。

って、今頑張る為に人を探してるんだってば！

「先輩！　此処ら辺で俺達くらいの私服二人組見ませんでした！？」

「……私服の高校生ってことか？」

「はい！　野郎二人ぐ……片方女の子でも可！」

「どういうことだ其れ」

ユキちゃんすまん！！！！　でもそう言った方が良いと思って！！！！

三人は視線を合わせ首を傾げたけど、少し考えてから何かを思い出したようにハヤ先輩は首を傾げた。

「もしかしたらなんだが、」

「見たんですか！？」

『――ＤＮＡはデオキシリボ核酸の略称だというのは知っているのだが、何故ＤＮＡなのだろうね？』

『何でしたっけ、英語にすると確かＤｅｏｘｙｒｉｂｏなんたらなんですよね』

『嗚呼、此処まで出てるのに思い出せないとは！　なんとももやもやするね！！』

『ふふ、帰りにアサキ君に尋ねてみましょうか』

『其れまで此のもやもやと戦わないといけないのかい！？』

「――ってな会話をしていた奴等のことなんじゃ――」

「間違いありません」

何の話してんだよ二人共……！　第一デオ……なんだよ其れ！！

「今時の若者にしては話題が化学臭かったからつい聴き入ってしまって」

「おいハヤ、お前俺達とタメだよな？」

何故だかオッサン臭いハヤ先輩をサチト先輩の心配をしているのは良いとして。

体育祭後にアサ君に尋ねるってことは未だ居るってことだ！　とっとと見つけて次の……誰だか分からないけどたすき渡さなきゃ！！　此れこそ外部を巻き込んでの競技ってやつだよね！！

「じゃあ俺、そいつ探しに行ってきます！」

「嗚呼、頑張れ。……それと、」

「はい！」

「――いや、良い。ゼンはもう列に戻っただろうから、急げよ」

「分かりました！」

よーし、早く見つけなくては！！！！

「なぁ、ハヤ？」

「……何だ？」

「お前、何言おうとしたんだ？」

「……ＤＮＡのＮＡは“ｎｕｃｌｅｉｃ　ａｃｉｄ”だって言おうと思ったんだが……」

「ユウヤ君では覚えられないってことね」

「……何だか、信じてやれなかったんだ」

「お前は正しいぞ、ハヤ」

「ええ、ユウヤ君だって分かってくれると思う」

俺が居なくなってからそんな会話が成されていた、――というかハヤ先輩が落ち込んでいたとか、アスカ達を探すのに夢中な俺が知る由もなかったんだが。

「――おったあああああ！！！！！！！！！」

ユキだよ！　５００ｍｌの缶ジュースが百円で売られている自動販売機に感動していたら、何だか修羅が如き形相で此方に走って来るユウヤっぽい何かに遭遇したのだが、此れは逃げて良いのかな？

「おや、ユウヤ。どうかしたんですか？」

まぁアスカが慣れてるから逃げないで良しとしようか！

「あ、あ、あす、あすかぁ！！！！」

「はい、何でしょう？　あ、飲みます？　俺炭酸とか初めて買ったんですが美味しいですね」

「あ、うん、――じゃなくて！」

「缶のコーラ受け取ってからのノリツッコミとは流石はユウヤ！しかし本人はアレだね、至って冷静じゃないようだからちゃんと話を聞いてあげることにしようじゃないかアスカ」

「はい、そうしましょう」

ユウヤは荒れた息を整え、今は借り物リレー中だと言うことを私達に伝えた。そして、

「今、俺はアスカを連れてかなきゃいけないんだよ！」

「……嗚呼、そういうことですか」

アスカは数度瞬きをしてから微笑み、「走れはしませんが、行きましょうか」と、あっさりユウヤの来た方へと歩みを進めた。

「え、ちょっ、あ、ユキちゃん！　此れ！！」

「任せたまえ！　アスカ、私は先の木陰に居るよ！」

「分かりました」

缶コーラを持たされたままだったユウヤは慌てて其れを私に手渡し、アスカの後を追ったのだった。

「――……ふふっ」

ユウヤが持っていた紙片の文字、私にはしかと見えてしまったよ。

高校生も離れ、会う機会も減っても。

「変わらない友情とは、良いものだね」

――“親友”であることに変わりは無い、二人を羨ましく思うよ。

なんてね。

「お、ユウヤ戻って来た」

アサキだけど。

ユウヤが何処から見つけて来たのかアスカ君を連れて戻って来た。

「あの格好良い人何、知り合い？」

先程急いで戻って来たゼン君も最初は息を切らしていたが、既に通常呼吸に戻っている。実にかったるそうだ。

「ありゃ俺達の元中のダチだ」

「……あ、文化祭来てた」

「其れ其れ」

ぽん、と手の平を打ち合点がいったと笑えば、「あれはモテるタイプの優男だね」と真顔でそう指摘した。

「「……」」

で、カイトと目が合った。

「「……無いな」」

「え？」

やはり考えていることは一緒だった。

「何、あの人モテないって？　背は高いし雰囲気が儚げで優し――」

「其処な、間違ってんのは其処」

「え、何処？」

「アスカ君は確かに優しいけど、」

「「全ッ然優しく（ない／ねぇ）よ」」

「はい此れです！」

「はい、“親友”ですね？　其れでは連れて来られた“親友”さん！　何か“親友”としてアピールをお願いします！」

「アピール、ですか？　……特に思い浮かばないので、彼が中学生活で得た――補習授業の回数で良いですかね？」

「アスカー！！！！！！」

「……“親友”合格です」

そんな会話が聞こえてきている訳では無いが、アスカ君が普通で終わらせないことなど容易に理解出来た。何せ何時ものこと。

「優しくて優しくないって、何だか分かりにくいね」

「アスカはそういう奴なんだ――ほれなんかこっち見てる、何か悟ってこっち見てる！　アサキどうにかしろ！！」

「僕目ェ悪イカラ何モ見エナイ」

「こういう時ばっかだなお前の視力！！！！」

此の遠さじゃ普通は見えないでしょ、お前が目ぇ良過ぎなんだよ。ゼン君はそんな僕達を終始楽しそうにしていたけど、ふと違う方を見てから真顔に戻り、若干目を細めた。

「ちょいあっ君」

「何？」

視線も変えず声を掛けられ、気になって其方を見た。

三走者目、――ムラサメ君、か。

何だかおろおろしていた、何を引いたのかは分からないが、相変わらず何時か泣き出すんじゃないかとひやひやする――主に僕の周

辺が――。

「あん？　……大丈夫なのかよあいつ」

「んー、俺達何やかんやで独走してるからねー、目立っちゃって可哀相かなー」

カイトもユウヤも結構時間を掛けたが、他の部は更に時間が掛かっていて未だ二走者目にしか届いていない。当たりを引きやすいというのかあの馬鹿どー――

「要はくじ引きだよ、カイ君達はくじ運が良かったってことだよね」

「まぁ、俺は元々くじ運良いぜ、初詣とかの」

「ゼン君も良い方かなぁ。……ね、ゆっ君もくじ運良かったりす……あっ君？」

くじ引き？　くじ？

「くじ引きなの？」

「それが……どうかした？」

しまった。やばいぞ此れ、果てしなくやばい。

「……あ」

そしてカイトも其れに気付いた様子。僕を見て瞬きをすれば、「だっ、大丈夫だろ！」と、空元気にばしん、と僕の背を叩いた。

「痛い」

「大丈夫大丈夫！　お前なら大丈夫だろ！！　なっ！！！！」

「目が必死過ぎるよカイ君、一体どういうこと？」

「……」

まぁ、ええと。言ってしまえば、

「僕さ――凶と大凶しか引いたこと無いんだけど大丈夫だよね」

「……え」

ゼン君は、黙って苦笑いを浮かべただけだった。

「時間喰いましたごめんなさいすみません自害した方が良いですか？」

「ムラサメ言ってることが怖い」

ムラサメ君は不安の境地に陥ると物騒なことを呟き出すらしい、たすきくれれば其れで良いから。

――其の後、何とかトップでゴールは出来たんだけれど、僕が計六回俗に言うハズレを引いたのは言うまでも無い。一度抜かれはしたけど、最後のゼン君の引きの強さには感謝するっきゃないな。

「あっ君、具体的にどんなくじ引いたの？」

「“イリオモテヤマネコ”とか、“あの日の自分”とか」

「具体的に無理なものから物理的に無理なものまで様々だね」

「そういえばあ、リョウコも一回トチッてたよねえ？　何だったのお？」

「は！？　な、何でもないわよ！？　くっだらなかったから！！！」

「……ふうん？」

さて、……次々、次最後だから次行こう！

363＋絶好日和？　体育祭！／午後6（後書き）

リョウちゃんが一発目引いた紙＝“恋い慕う人”
――勿論破り捨てました（発狂的な意味で）

３６４＋絶好日和？　体育祭！／午後７

ユウヤでっす！　待ちに待ったぜ此の時を！！

「ふっふっふっふっふっ」

「不気味なんですけど」

其れは仕方ないってもんさ！　今年こそ、今年こそはと思って俺は生きてきたんだから！　大袈裟だけども！！

最後尾に並んでいる俺の横で、アサ君はかったるそうに俺を見た。此れが王者の余裕ってやつかい。

体育祭もクライマックス、此のクラス対抗リレーを〆として今年も体育祭が終わる。去年は馬鹿な奴等に邪魔されてちゃんと勝負出来なかったけど――捻挫した足で走られて負けたとかもう何か無い――、今年こそはアサキに勝ってやるんだ……！　――と、意気込んでる訳です、俺一人で。

「絶対勝つ！」

「勝手にすれば、やれるもんなら」

興味無い癖に自信満々なんだからこいつ！　其のニヒル過ぎる笑みが憎たらしいけど、俺は怒らない。何せ今年は勝てる算段ってものがあるからさ！　何と、アンカーだけトラック一周！　ちなみに他の人は半周なんだぞ☆

「アサキが体力一周保つはず無いんだから……！」

本人の目の前でそんなことを呟いたけど、其の本人は至って冷静に俺を見ただけだった。

パァン！

「新しいの赤だっていうんだけど、やっぱり青のが良いかな」

「ゼン君は赤が良いな」

「そうなの？　僕は青で良いかな、カイ君買うのかしら」

「今のところ興味無いみたいよ、何かめぼしいソフト出たら買うっぽいこと言ってた気が」

――競技が始まったのに、一組の二人の話は専ら某ゲーム器の話だった。

アサ君の前に座るゼン君はどうやらアンカーふたつ前に配置されているらしく、競技開始の音に見向きもせず空を見上げながら会話

していた。――やる気無いなお前達！！

「もうっ、やる気とか無いの！？　俺こんなに張り切ってんのに！！」

「無ぇよ」

「ゼン君走り回り過ぎて疲れたー」

嗚呼、ゼン君はお疲れ、っていうかアサ君もだよね、お疲れ！

「ゆっ君も赤良いと思わない？」

「うん、俺も買うなら赤。でも俺そんなにゲームしないし、アサ君の借りれば良いかな――って、だから違くて！」

俺がツッコミって駄目だよ此の事態！！　いや最近結構多いけど！！！！！

そうやって俺が一人でヒートアップしているのに見兼ねた訳ではないだろうけど、ふと、――頬にぽたりと雫が落ちてきた。といっても、俺が其れを雫だと認識したのは頬に触れてからなんだけど。

「……雨？」

延々と曇り空だった白が、とうとう泣き出してしまった、とでも言おうか。俺ってば詩人。

俺の一言で空を見上げた二人、片方は実に嫌そうに、片方は元から悟っていたかのように微笑んで。

「もう少し保って欲しかったんだけどねー」

「天候に文句言っても仕方ない」

「ですよね」

ゼン君は溜息ひとつで立ち上がり、気付けばもう回って来てるし、とトラックに向かった。

「あっ君、ファイツだよ」

「何故に複数形」

一度降り出した雨は箍(たが)が外れたように徐々に本降りになっていく。アスカは大丈夫かな、なんて暢気なことを考えつつ俺は、絶対勝ってやる、とか、馬鹿みたいに同じことばかり考えていた。

――まぁでも、うちのクラス得点的に既にボロ負けなんだけどね！

『火事場の馬鹿力というのは本来人間が規制している力も火事場のような危機的状況に陥った時規制が解け発揮出来るという意味なん

だ！』

『へぇ！　で、今は其の時なの！？』

『無論！！　貴様になんざ一生抜かれるかよ！！！！』

『テンメェ普段其の力何処に隠してんだよ……！』

『知るかばーか一生負け犬やってろ！！！！』

って怒鳴りながら走ったのは何時以来だろうか。結果は無論――悔しいけど――アサキに軍配は上がった。珍しくバトンも同時に回ってきて、此れは勝てるんじゃないかなんて夢見たものだが其処はアサキ、気持ち悪いくらい気持ち悪かった。

「アサキ君凄かったっすね！」

「お前のずっこけ具合も凄かったけどな」

「み、見てたんすか！？」

「まぁ、うん」

三組のシギ君も出てはいたけど、バトン受け渡し直後に盛大にずっこけて今回のユーモア賞にノミネートされていた（※アサキの）。

「一度減速してから一気に行ったからな……、アサキ、お前は陸上部に入るべきだ」

ミノルちゃんが本気の目でアサキを勧誘している、残念だけど此の子運動部には靡かないよ。
ミノルちゃんの言う通り、俺は途中まで本気で此れはキタと思っていた。何せ半周した位置でアサキは一度減速して、俺が普通に抜いたから。なのに我が弟は其処から息を吹き返し、あろうことか再び俺と並走して戯言を交わしてから抜いていきやがった。本当、そんな体力何処にあったの……！

「お疲れ様でーす、皆さーん」

俺はムカムカしていたはずなんだけど、少し離れたところに居るアスカとユキちゃん見たらどうでも良くなった。

「アスカー！！！！」

「……知り合いか？」

「中学の時のね。遊びに来てたみたい」

「きゃは☆　超格好良い！　ああいうタイプもテナ嫌いじゃないよお？　……あっちの人もオトコノコだよ、……ね？」

「あっはっは聞こえているよ少女！」

ユキちゃんを指差すテナちゃんにも、ユキちゃんは楽しそうであ

る。慣れっこって凄い。初対面の人達も居るけどまぁ、あまり深く気にしちゃいないみたいだから良かった、究極のサボり魔だからなぁ二人共。

「結局、最後まで居たんだね」

「帰っても暇なだけですから」

若干びしょ濡れ――変な表現だけど――なアサ君に傘を差すシギ君はアスカと会話するアサキをキョトン顔で見遣っていた。良く分からないけど珍しいのかな。……何が？

「ですが、そろそろお暇しようと思いますので声を掛けた次第です」

「そっか」

そうか、帰っちゃうのか。折角久し振りに会えたのにあまり話せなかったなぁとちょっと残念。

「また今度皆で遊ぼうね！　ねっ、リョウちゃん！」

「え？　私？」

「そうだよっ、最近俺モモちゃんに会ってないし！」

「……ラン、学校行けてんの……？」

「失礼なこと言ったでしょヒコクアサキ！！　幾らあの子が馬鹿でも進級くらいは……」

「リョウコ、間が怖いのだが」

「モモさん、大丈夫なんですか……？」

「だ、だいっ、大丈ッ夫……だと……」

次の休み会いに行くわ……！　リョウちゃんはわなわなと戦いた様子でそう決意したらしい。モモちゃん……大丈夫、大丈夫だよね！　俺が進級出来てんだからさ！　あ、あははは……！！

カイリ君に宜しくお伝え下さい、それじゃあね！　――ゼン君と共に実行委員の方へ出掛けたカイト君にそう残して二人は帰って行った。

「……此の後、」

後はショートだけだなぁ、なんて考えて校舎に向かっていれば。アサキが皆の方なんて見ずに呟いた。

「朝、ゼン君が皆で打ち上げしようって言ってた」

ふと思い出したように呟かれた其れに、何人かと顔を見合わす俺。っていうか、

「え……、万が一にもアサキ行くの？」

そういうイベント後のお疲れ様会みたいの、中学の時から嫌いじゃなかったっけ？　けれどアサキは小さくながら頷いて、俺及び元中のリョウちゃんをも驚かせた。

「だ、だって雨だよ！？」

「たまには良い」

「アンタさっきの全力ダッシュで足ガックガクだったじゃない！」

「もう治った」

高校メンツはそんな俺達の様子に苦笑していたけど、俺達からすれば当たり前の驚愕である。

散々言い募ってみてから少し落ち着くと、アサ君が若干不機嫌なことに気付く。むってしてる、可愛――何でもない。でも多分リョウちゃんはそう思ってるんでしょうね、――顔がそう言ってる。

「二人共、僕が居るのそんなに不満？」

「――そんなことない！」

「――そんなことある訳ないでしょ！？」

俺は別に良いけど、リョウちゃんはある意味口走ってる気がする。テナちゃんにニヤニヤされとる。

「不満なんて多分誰も無いっすよ、皆アサキ君のことが大好きなんすから」

そして極めつけにシギ君の此の一言。リョウちゃんが顔を赤くするには充分だった。

「なっ、何馬鹿なこと言ってんのアンタ！　馬鹿じゃないの！？」

「二回馬鹿って言われたっす……！」

「まぁまぁリョウコお、テナもあっ君大好きだよお？　勉強教えてくれるしい」

「其処なんだ」

此処に居ないゼン君やカイト君が居たら、悪乗りしてアサ君にぶちのめされること山の如しだろうなぁ。

クラスに戻ってきたカイト君に打ち上げ行こう！　って言ったら恐らく即オッケーだろうから。打ち上げなんて珍しいこと出来るのはアサキの機嫌が良いのが主な要因だろうから、目一杯楽しもうと心に決めた俺だった。

ちなみに優勝は四組だった、全然関係無ぇ。

365＋既視感の正しい意味って。

「完全に遅刻だよ此れ」

「だからわーるかったっつってんだろ？　体育祭終わりに学校あんのがいけねぇんだって！」

アサキです、学校です。

毎日の要領で今日も今日とて自宅の前でカイトを待っていたのだが、此の野郎体育祭後の今日学校あるのすっかり忘れてやがって寝てやがった。珍しく此の僕が遅刻しなかったってのに。普通に遅刻じゃねぇか――いや普段から遅刻してんだが――。

「お前のクラスはウタカタ先生だから良いけどな、うちのクラスハヤサカ先生だぞ」

「いーじゃねぇかよ別に」

「朝の遅刻くらいなら案外許してくれちゃったりするから良いけど、もうがっつり一限始まってんだけど」

「だからいーじゃねぇかよ別に」

「――一限はお前のクラス数学だろ」

「……あ」

一瞬動きが止まったカイト、ざまあみやがれ。精々あの絶対零度の視線に睨まれやがれってんだ。僕だって体育祭後で怠いんだよ。

「カイト君の表情引き攣り具合素敵だったけどね」

「あっ君は堂々と入って来過ぎて先生がびっくりしてたよ」

部活にて。

体育祭後ということで午前で終わった特別授業が終わり、皆して懲りず部室にやって来た。

「っるせぇな、ハヤサカが怖ぇのがいけねぇんだよ」

「ハヤサカ先生って怖いかしら？　真面目でしっかりした先生だから、私割と好きかな」

「けっ！　此れだから女子は！！」

「なっ、何よアンタ！　別に私はそういうのじゃなくて――」

体育祭もだが、其の後の打ち上げまで騒ぎ倒した癖に何故皆こう

も元気なのか。僕は朝起きるの必死だったっつーの、――ユウヤにほぼ叩き起こされた――。カイトとカトウがぎゃあぎゃあ言い合いを始めて、其れを楽しそうに見遣る上級者二人――サチト先輩は休みだそうで――。……あれ、今日ハヤ先輩こっちに居る。

「先輩、今日仕事大丈夫なんですか」

「え？　嗚呼、今日は特に無いからな。というか此方に用事があるんだ……が、ってアサキ、お前は分かるだろう？」

……はあ。ええと、……えと？

余程該当する事項がない顔を晒していたんだろう、ハヤ先輩までがあれ？　と首を傾げた。

「……今日からだったよな？　教育実習生が来るの」

「体育祭終わってから来るんですね」

「まぁな、……来なかったか？」

「……？」

記憶に無いな。

二人で首を傾げていれば、ちょうど部室にゼン君とムラサメ君が入ってきた。ゼン君は同じクラスだし何か知っていれば良いんだけど。

入って来て早々で悪いが、ささっと事情を説明すれば――ゼン君に失笑された。

「来てたよ？」

「え、……マジ？」

「大マジだよあっ君。あっ君朝のショートも帰りのショートも居なかったじゃない」

「何してるんだアサキ」

「遅刻と爆睡ですが何か」

朝はカイトの所為だが、帰りは図書室行ったら寝ちゃったんだった。

今日俺達のクラス数学も無かったしね、とゼン君が言うのを聞いて、要は一組で僕だけが会っていないんだと言うことが分かった。

「仮にも生徒会庶務なんだから、遅刻も程々にな」

「だってよカイト」

「お前だろアサキ」

「アンタ達二人共よ」

遅刻なんてしてなんぼじゃないか、とは思うものの、ハヤサカ先生が朝のショート中に教室に入れば遅刻にしないでくれるからこそこんなのんびりやってられるんだなぁ、とふと考えた。カイトの方もまた然りだろう。

「で、だ。アサキのお蔭で話題は逸れたが、」

所為って言ってくれて構わないんだけど。

「前ゼンに伝えて貰った通り、今日は前に教育実習生として来てくれたＧＣ部のＯＢが来るんだ」

「あ、其れね。休むなって言われたけど、部長のサチが休みじゃんね」

「仕方ないわ、昨日倒れた人間を、無理に連れて来るのは良くない」

そういえばそうだった、脳震盪とか起こしたんだったあの人、通りで居ない訳。っていうか改めて思うけど、今日だったんだ。

メールの時に言ってたやつってことは、マヒルの同級生が来るってことだ。ＧＣ部を創ったのがマヒル達だって話はユウヤにもしてないが――隠してる訳ではない、今思い出したんだ――、一体どんな人が来るんだろう。

「ハヤ先輩、何て名前の人っすか？」

「名前……いかん、ど忘れした。教育実習生として来た時は苗字で呼んでたからな」

苗字はアマギリ、だったと思う。ハヤ先輩がフウカ先輩に同意を求めようとしてか視線を遣れば、先輩はこくこくて頷いて肯定した。

アマギリ、どんな字ィ書くんだか。小難しい苗字に呆れていれば、其れこそちょうど、部室の扉が開いた。

「――皆さん、揃ってますか」

開いたと同時に放たれた声に視線が集まる、ハヤサカ先生が何時も通りの表情で部室を見回せば、僕を見て「今日学校来てたんですか」なんて失礼なことを言った。

「朝と帰りに居なかっただけです」

「僕には充分なセットだと思いますが」

今は良いでしょう、そう仕切り直して一歩横にズレれば、ちらりと視線を扉へ向ける。無言の促しにこつん、と誰かの足音が反応し、其の誰かが部室へと入って来た。

「もう知ってることと思いますが――」

ハヤサカ先生が事務的に彼――部活のＯＢとやらの紹介をしている。興味がゼロな訳では無いはずなのだが、何故だか其の声は僕の耳に入ってくることは無かった。――何だろう、此の人……何処かで？

「――三年の二人はもう知ってると思いますが、新しく入った部員も居ますので一言挨拶でもしておきましょうか」

「はい。――初めまして、ＧＣ部の皆さん、私は――」

既視感。デジャヴなんかじゃない、此の人、何処かで――

「――アマギリトウマ、と言います」

「……あ！」

アマギリトウマ、トウマ、……トウマ？　って、まさか。

最初の一言で注目が集まってしまったことなど気にせず、僕は座っていたソファから立ち上がった。

「どうしたんですか、ヒコク君」

「お前、トウマか……！」

「……ヒコク？」

それなりの長身、どちらかと言えば中性的な其の表情が一瞬訝しげに歪められてから直ぐ、――目を見開いた。

「も、もしかして、アサキ？」

「ユウヤ！！！！」

「ふぁい？」

指まで差され正解される、僕は次いでさっきからずっとＰＣにかじり付いていたユウヤを一喝し、位置的に僕の真後ろに居るアマギリ――トウマで良いや、を指差した。

「此れトウマだとよ」

「トウマ？　……トウマ――トウマ！？　トウマって……アマギリ君！？」

「あ、ユウヤも居るー！　何此れすっごい、二人共高校生？　そっか、僕達と五歳違うんだもんね。おっきくなっちゃってもー！！」

「――アマギリ先生」

僕以外にも知った顔を見つけたトウマは先まで見繕っていた表情を完全にはぎ捨ててはしゃいだ、が。ぎくり、と。とある声で――笑顔を浮かべていたトウマがハヤサカ先生の絶対零度で固まった。

「……はい？」

「うちの生徒に面識が？」

「あ、えと、高校の時の友人の弟、でして」

「そうですか」

歳の差で言えば多分数歳だと思うんだが此の二人、大学生と社会人の違いってやつですか。ハヤサカ先生の此の余裕が堪らなく怖い。

「え、ってことはマヒルさんの友達ってことか？」

カイトが瞬き数回がてらに僕を見た。

「うん、トウマはマヒルが高校の時の友達……だった」

「過去形！？　ちょっとアサキ！　僕は今でもマヒルと友達だよ！」

「そうなの？」

「そうだよ！　ただ――高校卒業して直ぐ、携帯壊しちゃって……」

「あははっ、アマギリ君って最高峰のドジっ子だったもんねー」

「誰がドジっ子！？　今年で二十二だから！」

「――で、話進めて良いですか？　つーか帰って良いですか？」

其れじゃなくても子供嫌いなハヤサカ先生にトウマは大分キツいんじゃないだろうか。僕の記憶が正しければ、“手間を掛ける”と書いて“トウマ”と読んでも差し支えなかった気がする。ハヤサカ先生の口から『つーか』なんて接続詞初めて聞いたし……！

何処か空気になっていたハヤ先輩が先生を労るように苦笑して促し、話が再開される。

「彼――アマギリ先生は名目上は教育実習生ということになりますが、実質は既に其の過程を終えている、言わばボランティアのようなものです」

「ボランティア先生っすか」

「そうです、貴方のような知識が芳しくない生徒が、テスト前にちゃんと勉強出来るようにですね」

相変わらずハヤサカ先生口先達者過ぎる。

「其の間此方に出向くこともあると思いますので、彼が居る間の部活の一切は彼に色々頼んで下さいね」

「先生、体よくサボってるようにしか聞こえません」

「聞こえないんじゃなくて、そう言ってるんですが」

ユウヤの挙手にも丁寧にそう答え、ハヤサカ先生は「では」、と部室を後にした。

っていうかあの人最近凄いな、イロイロと。ある意味神懸かってきたと感じているのは、恐らく僕だけではないはず。

で、続く、と。

366＋デジャヴュってどう発音するんですか。

「――あ、もしもしマヒル？　僕僕！　……え？　詐欺じゃないよ！！　だったらせめて俺って言うし！　トウマだよ、覚えてるー？」

ユウヤだよ、其の後直ぐ感極まったアマギリ君はマヒル兄の携帯番号をアサ君に聞いて掛け出したよ。詐欺とか言われてるけど。

「久し振りー！　もう何年振り？　……そっかぁ三年は経ったんだ、四年目にして再か……ごめん！　そうだよ！　僕が悪いんだよ！別にマヒルのこと嫌いになったとかそんなんじゃなくて――」

「で、思い出話に浸っているアマギリ先生は置いておくとして」

小さく手を叩いたハヤ先輩に意識を向けると、少々小声で続きが話された。

「テストが近いのはお前達分かってるだろうな」

「「……」」

「約二名忘れていた様だが来週だぞ」

俺とカイト君ですねわかります。

「で、だ。名目上生徒会として、レッドラインギリギリでも良いからそれなりの点数を採って欲しい、というのが俺の要望だ」

「そ、れなりって何点くらいを言います？」

「……せめて半分――待てユウヤ、半分で何でそんなに泣きそうな顔したんだ」

あ、顔に出てました？　っていうか俺に半分なんて無理だよ……！　一教科に絞ってとかならどうにかなるけどそんな鬼畜なの聞いたことない！　半分!?　どうやって採るの!?　様子を伺うべくちらりとカイト君を見たら、滅多に見られない無感情なカイト君を発見した。無だ、無になってる、もう何も考えられなくなってる。良かった、カイト君は何時になっても俺の味方な様だ。

「……話を進めるが、一学期の間アマギリ教諭は此の学校に居るらしいから、来ている間にテスト勉強を手伝って貰え」

現役の先生より使えるかもしれないぞ、と丁度電話を切ったところだったアマギリ君を一瞥しながらハヤ先輩は言う。

「ハッキリ言って二年からは、勉強が果てしなく難しくなってるだろう？　中間の結果がどうだったのかは聞かないが」

あ、こっち見てる。

「――だから今度から、死ぬ気で勉強しろ」

何時もストイックなハヤ先輩が更に其の厳粛さを以って、俺達にそう告げたのだった。何時もはサチト先輩が「お前らちゃんとやれ

よ！」くらいにしか言わないからアレだったけど、今回はやばい、何か射抜かれそう。
　此れマジで赤点とか採ったらどうなるんだろ、……うん、駄目、考えないことにした。

「俺からは以上だ、アマギリ先生」

「はい？」

「久し振りの部室でしょうし、そろそろお座りになって下さい」

　立ったままでは疲れるでしょう、と、今までずっと真顔だったハヤ先輩が苦笑した。やべぇ、今どっと汗が出た、此れを緊張と呼ばずして何と呼ぶ……！

　ハヤ先輩に言われ笑いながら空いているソファへと座ったアマギリ君、其れを見て正直全然変わってないと思った。
　アマギリ君はマヒル兄の高校時代の友達で、よくうちに遊びに来ていた元気なお兄さんだったんだよね。俺達が未だ小学生？　だった時くらいだからかなり前なはずだけど、此の何処か抜けてそうな表情は正しくアマギリ君である。

「マヒル兄、アマギリ君のこと覚えてた？」

「『知らん、誰だお前、何処の元生徒会長だ』だってさ、完全に覚えてくれてた」

「え、アマギリ先生て生徒会長だったんですか？」

「そだよ、僕元生徒会長」

今まで聞き手に徹底していたゼン君がそう言う、そんな意外そうな顔してるところ悪いけど、俺から言わせたらあなたが副会長なのも充分驚きだからね？

「いやー、二年前は変わらないなぁと思ったけど、――今年は変わったなぁ」

しみじみと呟くアマギリ君。

「こんなソファ無かったし、こんなにゲーム器無かったし」

部費も沢山貰えるようになったのか、と頷きながら感銘を受けている。――が、視界中に居るアサ君があからさまに其れは無い、と表情を歪めたのを俺は見逃さなかった。庶務は会計もかじっているからかな。というか其れ以前にあからさまに視線を逸らした上級生が二人程……？

「フウカ先輩？」

「……」

先輩は首を横に振る、何も言うなってやつですか。――ってことは要するにあなたの家から盛大に持って来ちゃいましたってことで良いんですよね？　……アマギリ君の感動を邪魔しちゃいけないだろうから言わないでおくけど。

「ま、でも本当に、此れだけ沢山の後輩が出来ると思わなかったか

ら嬉しいよ！　テスト勉強なんて喜んで付き合うから！」

「アマギリ先生、頭良いんすか？」

見た目は確かに馬鹿っぽい、カイト君の疑問は俺も思ったものだった。小学生の時は頭良いとか悪いとか気にしたこと無いからなぁ。アマギリ君はにっこりと笑みを浮かべてカイト君を見て、

「僕、先生だからね」

なんて自慢げに言った。全然説得力無い。

正確には未だ先生じゃないけど、と言い直したアマギリ君が何処かムードメーカー紛いに騒ぎ出した中、アサ君と、其の両隣に座っていたムラサメ君とリョウちゃんの会話が俺の耳に届いた。

「元気な先生ね」

「トウマだから」

「……ヒコク、先輩」

「ん」

「アマギリ、トウマ、先生ですよね。……フルネーム」

「うん」

「……」

「どうかしたの？　ムラサメ君」

「トウマのこと知ってんの？」

「……聞いたことある、名前だったので」

「そうなの？」

「昔……全国、模試の、――トップだった、人」

「……はい！？」

「んぁ、どうかしたのかリョウコ」

アマギリ君の方に群がっていたカイト君に声を掛けられ咄嗟に「何でも無いわよ！？」と上擦った声で否定したリョウちゃん。特に深く気にした訳では無かったようでカイト君もすぐに引き下がったけど――ええと、ムラサメ君今何て？

「其れ本当なの……！？」

「かっ、過去の結果に確か、そう書いてあった……です……」

「カトウ、ムラサメ泣かすな」

「ごめんなさい怒ってないから泣かないで！！」

ずい、と先輩に詰め寄られ半泣きのムラサメ君だが。其れが本当だったらアマギリ君って超頭良いってことだよね……？　驚いていないということは知っていたのだろうアサキを、俺は遠目に凝視した。

「トウマは頭良かったと思うよ」

「本当に！？　マヒルさんよりも！？」

「あの馬鹿が模試なんて受ける訳がないから基準は分からないけど、」

勉強面に於いたら、マヒル同等、か上を行く秀才かと。アサ君の呟きにムラサメ君はマヒル兄を知らないはずだけど、其れでもアマギリ君の頭の良さを証明したのは自分だからと納得したみたいだった。

「……凄いの来たわね」

落ち着いたリョウちゃんの放った一言、其の視線――勿論アサ君とムラサメ君の視線も――はゼン君に背が微妙に負けていることに落ち込んでいるアマギリ君に向いていた。

会話には全然加わっちゃいない俺だったけど、本当、……アマギリ君って、凄い、……のか……？

「さて、それじゃあゲームでも始めますか！」

何かのキリが良かったのか、人の気を知らないアマギリ君が満面の笑みでそう声を挙げた。

……ま、考えたって馬鹿な俺が分かる訳もないからいっか。どうせ勉強教わるんだし、そん時にでも色々聞いてみよーっと！

今はゲーム！　其れでオッケーでしょ！

367＋笑顔の夕方。

リョウコです！　久し振りにモモの家に遊びに来たんだけど、学校帰りにアポ無しで来たからユズ君しか居なかったわ。

「リョウコちゃん、そういやコトナは？」

「コトナ？　あの子ならテストが近いとか言って机にかじりついてたわよ、何時からなの？」

麦茶を運んできてくれたユズ君にそう尋ねたら、「明日」と簡潔に答えを返されあの子しねばいいのにと心の中だけで唱えた。どいつもこいつも馬鹿のやることは本当変わらないのね！　一夜漬け以外の道が馬鹿には無いのかしら！！

中学二年のユズ君とコトナはなんやかんやで一年からずっと同じクラスらしく、調子乗ってたから今日は置いてきた。大抵は一緒に来るんだけどね。

「ユズ君は勉強とか、苦労してないの？」

「まぁ、苦労って程では無いかな。八割程度って感じ？」

モモが来るまで相手をしてくれるらしいユズ君は、自分の分の麦茶を一気飲みしてそう笑った。笑顔はお姉ちゃんそっくりなのに頭の良さは雲泥の差みたい、……口には出せないけど。

「分からないところは姉ちゃんに聞いたりすっから、……勿論ろくな答は返って来ねぇけど」

……ごめんモモフォロー出来ない！！

「と言っても、今まで解決出来ないくらい難しい問いに立ち向かったことなんて無いからなぁ。だからそん時はリョウコちゃんに聞きに行くよ」

「……私もそんなに頭良い訳じゃないのよ？」

「いやぁ、姉ちゃんと比べると」

「……」

「――リョウちゃんごめんねなんか際どい問いに直面させて」

「きゃあ！！！！」

どう答えることがモモの姉としての威厳を保つことに繋がるか考えていれば、いつの間にか張本人が真後ろに立っていた。心臓に悪いというかどう回ったのよ！！

「ちょっ、と、モモ！？」

「こんにちはリョウちゃん、……あ、もうこんばんはかな～」

「そうね、こんばんは、――じゃなくて！！」

「姉ちゃん、今日母さん遅くなるってよ」

「あ、そうなんだ～」

此ののほほん姉弟どうしてくれよう。

「其れにしてもリョウちゃん、ちょっと振り～」

「えぇ、少し振り」

俺は此れから城に引っ込むぜ！　と言って――キッチンにね――ユズ君が引っ込んで。ほんの少し会わなかっただけなのにちょっとだけ懐かしいモモの笑顔に和んだ。　……うん、……忙しいという訳では無いけれど、此れから先自然とこうやって会わなくなっていっちゃうんじゃないかって急に不安になった。

「何かご用事だったの？」

「ううん、たまには会いに行こうかと思っただけよ」

「そっか～」

にこにこと微笑むモモにつられて笑う。高校に遊びに来た二人を見て会いたくなったっていうのもあるんだけど、……何となく、やっぱり良いな、って思う。

「ねぇモモ」

「ん？　なあにリョウちゃん」

「夏休み、久し振りに二人でどっか遊びに行こっか」

「そうだね～、最近二人で出掛けてなかったもんね～」

皆で出掛けたりすることは多かったけど、中学の時は学校帰りに二人で出掛けたりしてたのよね。

「楽しみだな～」

夏休みが楽しみだよ～、と、笑うモモ。滅多に思うことは無いけれど、――やっぱり、会えないのって寂しいことなのよね。

本当に用事無く来たのに、ちょっとナイーブになっちゃった。……嫌ね私ったら、此れから会えなくなる訳でも無いのに。

「私、やっぱりモモと同じ学校行きたかったかも」

「えへへっ、私もだよ。……学校で何かあったの？」

「あ、ううん！　違うわよ？　心配掛けてごめんね」

「ううん、私こそ勘違いしてごめんね」

あー、……和む。

ナイーブな気持ちが飛んでいく、やっぱり私、モモと居るのは凄く落ち着くみたい。テスト前だからかしら？

ほんの少しほのぼのした、夕暮れ時だった。

３６８＋テスト前夜にしたいこと。

「た、だい、ま……」

ユウヤですよ、ええ。近年稀に見るテンションの低さをお披露目していますよ、もう無理だって色々と……！

ただいま既に夜の八時、今の今まで俺が何をしていたかと言うと――勉強していました。

……いや、無論あれだよ？　自主的とかじゃないよ？　当たり前でしょ？　勉強を教えてもらうという名義で放課後、カイト君と二人でアマギリ君のところに行ったら……そりゃあもう、大変なことになりまして……。

『え、あ、そっかー、明日テストかー。……いいよっ！　今から明日の三教科、徹底的にやろうじゃん？』

『いや、アマギリく……先生は数学の先生なんだから数学だけで――』

『大丈夫大丈夫！　僕高校の勉強くらいならテキスト無しで教えられるよ！　――全教科』

『全教科ァ！？』

『ようし、Ｌｅｔ'ｓ　ｇｏ　ｙｏｕｒ　ｃｌａｓｓｒｏｏｍ！！』

勉強はやっぱり教室が一番だよね☆　と――はた迷惑な――ハイテンションで此の時間までみっちり詰め込まれた訳です、はい。おかげで頭ん中数式と古典の文法だけだよ！　いとあはれなり何とやら！！

「そりゃ分かりやすかったし少しは頭に入ったけどだからってこんな長い時か……ん？」

ぶつぶつと文句を言いながらリビングに向かっていると、ふと違和感に気付く。……何故にリビング真っ暗？

外の電気を付けてくれていたということは、アサ君が帰って来ていない訳ではないということ。なのにリビングは真っ暗……って、え？　まさかアサキ上で勉強とかしちゃってる訳？　此の時間まで？　――いやいやいや其れは無いだろあのアサキだよ？　テスト勉強よりゲームやってる時間のが長い我が弟ですよ？

頭の中で色々考えながらリビングに入れば、見た通り其処には誰も居なかった。

「にゃう」

「うわびっくりした」

と思ったけど違った、チカちゃんがいらっしゃった。俺に自分から近付いてくるなんて滅多に無いのに、ふと足元に現れたチカちゃん。壁の電気スイッチを付けてから抱き上げて、「アサ君は何処行ったい」と駄目元で尋ねてみるも、チカちゃんは可愛い声でまたひとつ鳴き声を挙げるだけだった。畜生可愛い。

「ってことはやっぱ上か……？」

可能性を考えてみる。いち、俺の帰りが遅くて夕飯が遅くなるからとゲームをしている。に、途中まで同文からのたまには勉強するか。さん、同文からのふて寝。恐らくどれかだ。

チカちゃんと荷物を下ろして二階へ向かう俺、寝ていたとしたら起こしちゃ悪いからゆっくりと階段を上がって部屋の前までやってくる。個人的には三番が正解だと思う、なんて思いながら部屋のノブを捻れば、

「……半分正解」

――アサキは机に伏して眠っていた。

正解は二番と三番の半々で、勉強してみたが途中で寝た、でした。正解者から抽選で三名様に――何も無いけどね、疲れてると悪ノリも面倒になってきた。

近くに言っても起きる気配の無いアサ君の机を覗き見れば、俺が教室やらされた数学の数式がつらつらと書き連ねられていた。お前が此れ以上頭良くなってどうすんだ。暇だったから数学でもやってるか、とか思ったのかな。眠かったなら普通に寝れば良かったのに。

とりあえず思ったのは、このまま寝てたら首とか痛くなるだろうということ。とんとん、と肩を叩けばアサキはあっさりと目を覚まして、目付き悪く俺を見れば「……お――り」と。多分お帰りって言ってくれようとしたんだろうけど、寝起きで声が出切らずにそう聞こえた。

「うん、ただいま、遅くなってごめんね」

俺が笑顔でそう言えば、アサ君は特に返事もせず立ち上がって――ベッドに倒れた。

「も、……寝る」

「ご飯は？」

「明日の朝でいい……今日は要らん」

テスト前夜だと言うのに何たる。まぁ、俺も疲れ切ってたしまぁ良いか、何だか疲れ過ぎてお腹も空きゃしない。

はいはいお休み、と短く返して、俺もとっとと寝てしまおうと考えた。もういい、行動するのは明日の朝でもういいや。今はとにかく、そう、

――寝かして下さい。

ただ切実に、そう思った。

369＋自力本願だけは無理。

カイリだ、たまに自分の名前忘れそうになんだがそりゃ完全にあいつらがカイトって呼ぶからだ。

「――……テスト爆発しろ」

テンションのまま机に突っ伏してそう呟く俺、今日はテスト一日目、昨日アマギリの奴にこてんぱんにやられた（※ある意味悪い意味で）からなかなか出来た気もしなくもない、が。

「ちょっとアンタ、何ぶっそうなこと呟いてるのよ」

「テストなんか無くなりゃ良いんだ！」

俺の切なる呟きに目敏く反応したリョウコが呆れ気味に呟くのが聞こえる、丁度通り掛かったんだろう。くぐもって聞こえたであろう叫びにも溜息を吐くのが聞こえた、何だよ仕方ねぇだろ馬鹿なんだから。そして其の横からはそんな声とは真反対のテンションの声が聞こえるんで、恐らくテナが居るんだろうと考えた――考えただけだけどな！――。

「頭がそこそこ良い奴に此の気持ちは分からんのさ、嗚呼分からんのさ」

「私だってテストはあまり好きじゃないわよ」

「ほら“あまり”つった！　本当の馬鹿はあまりなんて言わねぇんだからな！！　だからお前は一組の頭脳明晰集団から外れんだよ！！」

「何其の集団！？」

一組の三人――シキも入れちまえば四人だな――って馬鹿みたいに頭良いんだよいやマジで。アサキは言わずもがな「半日だから好き」だし、ゼンは「授業無いのなんて最高じゃない」だし、ミノルは「通常授業よりは好きだな」だし！　何なんあいつら！　ガチで爆発しろ！！！！

「ちなみにシキは『運動やるくらいなら勉強する』って言ってたわよ」

「四天王の完成だな！！」

「何処のポケ○ンよ、何地方よ」

顔を上げて叫べばやはり隣にはテナが居て、きゃらきゃらと楽しそうに笑っていた。お前もあんましテスト良くなかったよな、何故に笑ってられんだ。というかリョウコのツッコミが奥深くなってんだが此れは何故だ。

「あんだけ勉強したっつーのに古典の出来中途半端だったしよ……数学って何？」

「あれ、もうひとつは？」

「カイちゃん化学はあ？」

「は？　あんなん捨て教科だろ」

現在の単元が暗記のもんなんざ俺にどうにかなると思うな。理科系教科ならお任せしろい、なリョウコはマジかよ、的に表情に驚愕を晒していたが俺は知らん。

「昨日アマギリに勉強教えて貰ったのは良いんだけど、前半ふたつで手一杯だったっつの」

「あら、じゃあ数学と古典は高得点狙えるのかしら？」

「……」

「ロクジョーカイリ、目が合わないんだけれど？」

「さあって、帰って英語の勉強を――」

「アンタ英語私より出来るんだから他やんなさいよ！！」

やったってどうにもならないことだってあるんだっつーの！　そそくさと教室を出て隣のクラスに向かうことにする、とっととアサキ連れて帰るぜー。

「アマギリくー――先生！」

ユウヤだよ！　昨日早く寝たらメッチャ元気になった！　睡眠って偉大だね！！

今日の報告をすべく職員室に向かえば、開口一番にアマギリ君を呼んだ。毎回癖でアマギリ君って言いそうになるけど、仮にも先生なんだよね、職員室くらいそう呼ばなきゃ。

「ん、あ、はいはい居ますよー！」

姿が見えないから居ないのかと思ったけど、奥の……ええと、印刷室？　からアマギリ君は顔を出した。テスト期間は職員室に入っちゃいけないらしいから――もし俺が事前にテスト問題見てもどうにもならないと思うけどね！――其処で待つこととする。

書類に埋もれそしてずっこけ、書類を職員室に撒き散らしてから俺の所にやって来てくれたアマギリ君。後ろでハヤサカ先生が書類拾い集めてるのは見なかったことにしてあげるね！

「どしたの？」

「あのね、俺今日のテスト何時もより出来たと思う！」

「ホントに？　其れは良かったじゃない！」

「其れも此れも先生のお蔭！　ありがとうございました！」

「や、やだなユウヤ、改まって言われると僕何か恥ずかしいっていうか」

アマギリ君は後ろ髪に手を置いて、照れたように微笑みを浮かべた。っていうか実質照れてますな。

「でも、今週中はテストでしょ？」

「うん、でも、毎回アマギリ君に教えてもらう訳には行かないから、今日からは一人で頑張ってみるね！」

「うんうん、良い向上意欲さね。僕、応援してるよ」

本当はあんなに長いこと続く勉強を後数日続けなきゃなのはしんどいからなんだけどね、許せアマギリ君。

後ろのハヤサカ先生の視線が痛くなってきた頃、職員室を後にする。

しかし、だ。一人で、と言ったものの英語なんてほぼアイアムジャパン（※訳：私は日本です）くらいしか分からないのに無理に決まってる。

「……帰ろ」

ってことはやっぱり家だな、家だったらアサキと――多分来るだろう――カイト君が居るし、英語の勉強も捗るに違いない。他の教科は半諦めモードではあるけれど、少しくらい触れなきゃだなぁ、

なんて思いながら、俺は荷物を取りに教室へと戻るのだった。

あと三日、頑張るぞーう。

３７０＋今年の夏の予定。

～♪

赤い携帯から着信音が流れている、アサキです。ちなみに赤い携帯というのは別に恐怖の類ではなく、ただただ僕の目の前にあるユウヤの携帯が鳴っているということだ。

「ユウヤ、携帯鳴ってる」

「えー、誰ー？」

天気が良いからと張り切って洗濯に励むユウヤにそう言われ、仕方なく読んでいた本を横に置いて携帯を覗き込む。……先輩？　……あ、サチト先輩か。

「ユウヤ、サチト先輩」

「先輩？　――うわったった！！！！」

「……」

ユウヤが消えた、大量の洗濯物を持っていたのだ仇になってバランスを崩したようだ。……仕方ない。

かち。

「――ただいま留守にしています、ピーッという音の後――」

『アサキだろ、お前アサキだろ』

「……ユウヤが手ぇ離せないんで」

あわよくば切ってもらいたかったが仕方ない、用件くらい聞いてやろう。

『先輩からの電話を良い度胸だな』

「先輩身体大丈夫なんですか？」

『は？　何が？』

「いや、体育祭の時の話ですが」

『……嗚呼、全然おけ』

「そうですか」

『悪いな……じゃなくて』

此の人馬鹿だなー（※失礼）。

『別に急ぎじゃねぇんだけどさ、お前等夏休みって何処なら暇？』

「……夏休み？」

『おう』

何だ、部活の話か。期末も終わって半日になるし。……夏休みに部活やる意味あるのか、とか思わない訳では無いがまぁ良い。

「未だ分からないですけど、今のところ何処でも空いてるかと」

『ユウヤもか？』

「――ユウヤ、お前夏休み用事「なーい！」……そうで」

『……暇だなお前達』

夏休みの予定なんざ未だ決まらないでしょう誰も。

『じゃあ支障無ぇな』

「何がですか」

『――合宿』

「……は？」

ぶら下げるように携帯を持っていた手をちゃんと握り直す。ええと、――え？

「合宿、……って、聞こえたんですけど」

『おう、そう言った』

「……は？」

『お前改めて言うなよ』

合宿って、え、一体何の？

「先輩、合宿って――練習とか研修などの目的で多くの人が一定期間同じ宿舎に泊まりこんで生活することを言うんですよ？」

『分かってんよ』

「――うちの部活で一体何の練習するんすか」

何だってんだ、合宿とか何だってんだ。

サチト先輩は電話越しにて笑い、確かになー、なんて呑気に呟いた。

『まぁ、部活はおまけだよ』

「……そうなんですか」

『目的は勉強、提案者はハヤな』

「――勉強……だと……？」

サチト先輩は続ける。

『おう、俺達今年受験らしいし、勉強合宿なんてどうかってよ。つ

いでにお前の兄貴とかお前のダチとかが来年恐ろしいことにならねぇように、お前等もまとめてどうか、ってこった』

「……」

『あ、金銭面は気にすんなよ。フウカん家の別荘だし、移動も（ハヤが死ぬから）車出すってよ』

「べっそ……！？」

……そういやフウカ先輩はお嬢様なんだったか、ゲーム思想過ぎて忘れてた。

『ゼンとカイリにゃもう連絡取れて行くっつってる。……問題はお前とナツメだったもんで、ナツメはハヤに任して、俺はユウヤに電話を――』

「行きます」

『……はぇ？』

聞こえなかったか。

「――行くに決まってんじゃないですか」

『……マジかよ』

「先輩が僕をどのような人間と受け止めているのかはどうでも良いですが、僕はユウヤやカイトに勉強をさせる為なら何処にでも行きますが」

あの馬鹿共全ッ然勉強やんねぇんだよ、部活という名目であいつ等缶詰に出来んなら、

「――喜んで行きます」

『……なら良かったが』

喜んでる感が一切伺えない声音で返せは、サチト先輩はじゃあまた後日な、と言って電話を切った。

「サチト先輩、何か用事だった？」

「うん、お前夏休み覚えてろよ」

「……え？」

内容は後で聞け、――駄々こねても連れてくがな。

371＋とりあえずしっちゃかめっちゃか。

ユウヤっだよ！

半日おういえっ！　なハイテンションの中、怒涛の勢いでテストが返ってきた！　燃えちゃえば良いのに……！

独力でやった教科のズタボロ具合は良いとして、アマギリ君に教わった教科が近年稀に見る高得点でつい二度見してしまった。しかもアレだよ、数学と古典の先生――無論ひとりはハヤサカ先生なんだけど――に凄く喜ばれたよ！　『ついにやる気になってくれたか』って！！　――元々結構やる気はあったんだけどな……。

「ふうん、二人共やりゃ出来んなら普段からやりゃ良いじゃない」

久し振りの部活にて。良い笑顔のゼン君にそう言われ、俺とカイト君はそそくさとゲームに向かっていった。

「あ、こらゼン君無視しない、というかゼン君無視なんて無理だから、無視しようとしてもオーラで割り込むから」

「何のオーラだよ」

「勿論ゼン君特有のイケメンオーラだよ」

「お前真顔で言うなよ……！」

「えー？　だってゼン君こんなにカッコイイのに」

「だーっ！！　カッコイイのは分かったからゼンもゲームやんぞ！！！！」

うん、ゼン君は何時も通りだね。（※此れが慣れってやつです）

先輩達は皆用事があるとかで今日は誰も来ていない、リョウちゃんとアサ君はテナちゃんとシギ君の補習の手伝い――二人共半強制だけど――に出てるし、三人しか居ないってのも珍しいよねぇ。

「……あり、そういやムラサメ君は？」

「さぁ？」

「別に、しょっちゅう来なきゃいけない部活でも無いし良いんじゃない？」

「其れもそだね」

ゲームに取り掛かりながら言う二人に同意をする俺、そうは言ったもののそういえば、と浮かんだ疑問に首を傾げた。

「ムラサメ君って、勉強出来るのかな？」

自分のことを棚に上げてることなんて知ってるやい。ゼン君が動きを止めてみせるけれど、そういった話題に触れたことは無いのかさぁ？　と首を傾げた。

「ゆっ君の中での勉強が出来る、は一体どれくらいのことを言うの？」

「リョウちゃんくらいから出来るになります」

「嗚呼、基準其処」

「――そういや、ゼンとアサキはどっちのが頭良いんだ？」

そして、浮上した新たな疑問を問うたのはカイト君。当事者が片方居る中でカイト君は首を傾げ、どうなんだと言わんばかりにゼン君を凝視した。

「ん、俺とあっ君？」

「おう」

「さぁねぇ、俺もあっ君もテストはどっこいどっこいだし。嗚呼、でも――頭良いのはあっ君じゃない？」

「あ？」

すみませんゼン君、馬鹿にも分かる発言でお願いします。

キョトン顔の俺達に気付いたゼン君は苦笑して――何も言わなきゃ本当にイケメンなんだけどね――、人差し指を天井に向けつつ小さく首を傾げた。

「あっ君も俺も勉強は出来る。でも、俺はあっ君程頭良かないのよ」

「「……は？」」

「ちなみにうちの部活で頭良いのはあっ君とハヤ先輩ね」

「「……」」

「……ごめん、難しい？」

「うん」「おう」

馬鹿ナメんなよ、馬鹿には全然通じねぇんだからな……！　ゼン君は、苦笑の色を濃くして手をひらりと舞わせた。

「理解しなくても良いよ、二人は感覚で分かってるみたいだからね」

さてゲームゲーム、と忙しそうにしてしまった賢い金髪をカイト君と凝視してから、俺達も加わるべく用意を手伝い出したのだった。

「頭が良い……です、か？」

其れから数時間後、ゼン君がバイトだから、と抜けたと同時にムラサメ君がやって来た。なのでゼン君の代役に突っ込みそのままゲームを続行しつつ、ムラサメ君にはさっき話した話をしてみた。

「そうそう、ゼンの野郎が言いやがってよ」

「……ワタヌキ先輩、とアサキ先輩は……頭良いです、よね」

「……ん？　其れって、ゼン君が言う意味での頭良い？」

無言ながら、控えめに頷くムラサメ君。

「俺も良く、分からない……ですけど」

「嗚呼、良い良い分かんなくて、此れ以上頭良いとかいうのが増えられても困るからよ」

今にも泣きそうな――最近気付いたけど、ムラサメ君の其の表情は泣きそうなんじゃなくて、申し訳ない表情だったらしい――ムラサメ君に髪をがしがしと掻いてカイト君は言った。言い振りからしてカイト君、無意識ながら誰が頭が良くて誰が違うのか分かってる風だ。

「あ、そうそう。頭良い云々じゃなく、お前学校の成績はどうよ」

「……えっ……」

今日は話題がころころ変わる日なようで。さっき俺が出した話題へ、今度はカイト君が持って行った。ムラサメ君今えっ、って言ったけどどうした、えっ？

「……良……くは、……無いんじゃ……」

「じゃあ、今回のテストの最低点！」

急におどおど――あ、何時もか。とし始めたムラサメ君に俺はそう言ってみる。……あれ？　更にキョドり出したぞ……！？

「さ、最低点、って、あの、最低……え？」

「落ち着けムラサメ、良いから落ち着いとけ。ムラサメーナツメー！」

「はいっ！」

良い返事である。というか何だろう今の点呼、今日ツッコミ居ないんだから不可解な行動ダメなんだからね……！

「――……です」

「「……」」

決死の覚悟を決めたかのようにムラサメ君は呟いた、の、だが、生憎俺の耳、そしてカイト君の耳にも届いていなかった。

「すまん、ムラサメ、ワンモア」

「……また言うん、ですか……？」

――今度は本当に泣きそうだったムラサメ君。そっ、そんなに低かったの！？　言いたくなかったら別にカミングアウトしなくたって良いんだけどな……！

「よし、ユウヤ。だったらこうしよう！」

未だ癖の強い後輩におどおどし始めたのは俺達の方で。カイト君は慌てて俺を見て、格別良い顔で、

「ユウヤの最低先に言え」

――とか抜かしやがった。

「え？　早々に先輩の威厳を失えって？」

「安心しろ、お前が馬鹿なことは部内全員が周知なことだ」

「同レベルのカイト君に言われたかないわい！！！！」

確かに総合点を見ればカイト君のが五十は上だけど！　英語で差ァ開かれてるだけだから！　他大体一緒だから！！

「さぁ、可愛い後輩の為に！」

「じゃあカイト君が言えば良いじゃん」

「おま、おっそろしいこと言うなよ。此処でカミングアウトしたのが万が一外に出回ったら姉ちゃんに泣かれる」

怒られないなら良いじゃん……！

「あ、の、」

と、二人で言い合っててんてこ舞いしていたら。再び控えめに、ムラサメ君が声を掛けて来た。

「人、って、勉強だけじゃ、ないですから、そんなに、……威厳とか無くなったり……しない、です」

寧ろ、こうやって先輩達と話しているのが楽しいから此処に来ている訳で、――と、言いたいのだと思われる発言を途切れ途切れに、しかもかっなり遠回しに言われ、――俺達は其の意味を理解する為に脳を使い過ぎて疲れたという。

「……疲れたな」

「……そうだね」

「……つ、続き、やりましょう、……か？」

賛成。

そうして俺達は再び、ゲームを再開しましたとさ。

３７１＋とりあえずしっちゃかめっちゃか。（後書き）

ナツメ氏は科目により点数の高低差が六十点あるタイプです、得意科目は社会。

372＋友人と友人と。

ぴんぽーん。

インターフォンが鳴った、アサキです。良く鳴るインターフォンだ、とかどうでも良いこと考えてみるけれど、そういや今僕しかいなかったんだ。しかし怠い、出たくない、出たくないったら出たくない。

「――……チカ、行ってこい」

こんな真昼間に来る人なんざどうせ知り合いだ、猫が出たって構わないだろう。にゃう、とひと鳴きしたチカはててってっと本当に玄関に向かっていって、やはりあいつ賢いなぁと僕を感心させた。

「――って、猫が出てったら駄目だろう」

がばり。

節電貢献中につき限界までクーラー使用を抑えていた所為か、頭がふやけてるぞ僕いやマジで。慌てて――も速度は変わりませんが――玄関に向かう、が、しかし。

僕はチカと自分の思考能力を甘く見ていたらしい。

「アサキ、お前大丈夫か？」

「あぇ？」

玄関に着く前に声を掛けられた。ええと、……嗚呼そうか、うちに来る客に家主に遠慮するなんざ崇高な思考を持ち合わせた方いらっしゃらないもんね、自分で言ってんじゃん僕、はっはっは。

――と、いう訳で、チカを抱えた見慣れた銀髪こと、セツさんがいらっしゃっていた。

「何がっすか？　つーかセツさん猫に迎えられてよく入りましたね」

「新手の嫌がらせだと踏んだんだよ、けど違ったみてぇだな」

セツさんは苦笑しながら、チカをリビングで下ろしてやる。其れから僕を見て一言、

「――真っ直ぐ歩けねぇくらい暑ィなら、クーラー入れろお前」

そう一言告げたのだった。……え？　歩けてない？

「飲み物勝手に取って下さい」

「ちょい家主、やる気無さ過ぎねぇ？」

あー、涼しい。涼しくなった部屋で存分に涼む僕、逆に動きたくなくなった。

文句を言いながらも数分前まで外に居たセツさんは暑いらしく、渋々と自分でキッチンの冷蔵庫を漁っていた。

「ついでに僕のも」

「へいへい、使えるもんは誰でもってか」

「良いじゃないですかー、暇な人使ったってー」

「……」

――本当に暇人だったのか。

冷たい飲み物が出て来てから、何か用事があってきたのだろうとセツさんに尋ねてみたら。

「ん？　いや、今日辺りマヒルが自宅帰るつってたからよ」

「は、そうなんですか」

弟の知らない事実をあっさり述べたセツさんは、チカにちょっかいを出して遊んでいる。ん、兄貴が帰るのか、しかし未だ帰って来ていないということはこのままセツさんはうちに居座るのか？　…

…まぁ、やること無いし良いんだが。

「――こんにちはー！」

ゲームでもするか、と立ち上がろうとした最中。セツさんだってとりあえずインターフォンは押したぞ、なのに今度はいきなり玄関から声が飛んできて僕とセツさんは視線を合わせた。

「お前等ん家って完璧なセルフなん？」

「違いますって、ちゃんと迎えますって」

けれど、出迎える前に廊下にまでやって来る足音が聞こえた。トタタッと小走りなのは良いんだが、――今ズッコケた音したんだけど廊下に何か物置いたっけか。

「お邪魔しまー……お、居るじゃんアサキ！」

「……誰かと思えばトウマかよ」

「ちょっ、言い草ひっど！　そして先に言おうごめん廊下の掃除機ぶっ倒した」

端に寄せておいた掃除機に引っ掛かんな……！

「アサキ、誰？」

「トウマ、兄貴の高校の時の友人兼、うちの学校の教育実習生」

「あ、挨拶遅れましてすみません。私アマギリトウマと申します」

「はっ、あ、いや、何故そんな深々とお辞儀を……！」

兄貴とセツさんは大学からの付き合いだからトウマを知らないんだった、キョトン顔で僕に尋ねるから簡単に説明したら、トウマは何処の上司にするんだかなお辞儀をセツさんに繰り出し、セツさんをしどろもどろにさせた。セツさんを半ツッコミにさせるとは恐るべきトウマクオリティ。

「貴殿のお名前を頂戴しても？」

「何処の時代だよ……あーっと、アヤメセツ、マヒルの同期なら俺もタメな」

「あ、や、め……貴殿ってもしかして、サッカー部じゃないですか？」

「え？」

立ち尽くしたまま思考を展開し出したトウマは、セツさんの名前を聞くなり首を傾げる。

「おう、サッカー部だった……ぜ？」

「――やっぱり！　名雪（なゆき）高校のアヤメ君だね！？」

「は！？　な、何で高校名！？」

こいつ怖っ……！　と身を少し引いたセツさん。僕はすっかり蚊帳の外なので、そのまま見物させて貰うことにする。

「だってスポーツ校として有名じゃないですか！　サッカー部のエースだったアヤメ君！」

「ま、待て、もうひとつ聞きたい。名雪なんてこっから何時間も掛かる場所だぞ？　そんな情報がどっから仕入んだよ」

「仕入れるとかじゃないですよー！　やだなぁアヤメ君ったらー」

そっかー、マヒル凄いお友達出来たんだなぁ！　と、ひとりぶつぶつ言い出したトウマ。だが、セツさんが元サッカー部で、それなりに凄い選手だったことは今分かった話なんだけども。

「遠方の情報だって――一度耳にしたら忘れないでしょう？」

頭脳明晰アマギリトウマに味方しない情報は無い、と、……そういうことで良い？

「ただいーー」

「やっぱあの人が徳川じゃ一番良いと思うんだけどなぁ」

「暴れん坊が暴れ過ぎたんだよ！」

「そうそう！　家宣は優しい人だったと思うぜ俺！」

「あの人には長生きして欲しかったよね！」

「――アサキ、今の状況を十文字で」

「……波長が類似してる模様」

兄貴が帰って来たのは其れから二時間後、僕がひとりゲームを始めてから、何だか二人で盛り上がり始めましたとさ。

「だからって……徳川の話題で盛り上がるなよ……」

「嗚呼、ツッコむところ其処なんだ」

372＋友人と友人と。（後書き）

基本的この小説に出てくる地名学校名は架空のものです（知ってます）

373＋妖しい独断論議。

「溶ける」

弟が溶けるらしい、ユウヤでっす。

「アサキ君大丈夫っすか？」

「こう暑いと溶けたくもなるよなー」

昼に歩きで帰るのは自殺行為だ、とかなんとか諸々の事情で部室のクーラーで涼んでいる放課後。勿論設定は二十八度だよ！

俺は別に帰ったっていいんだけど、歩き組はそうも行かないらしい。駅までで汗だくだもんねぇ――ちなみに歩き組にアサキが居る理由は、言わずもがなカイト君が休んだからなんだけどね。夏風邪ってやつか。

「こんな暑い中歩きで帰ったゼンって一体何なのさー」

外に居た所為でなかなか引かない汗、はたはたとワイシャツをはためかせながらハク君は笑う。ちなみにシギ君も居るけど部活も無いんだし、うちの部室に居ることについては触れちゃいけないよ！

バイトがあるからと爽やかな笑顔で先に帰宅と決め込んだゼン君。夏は稼ぎ時だから、と最近直ぐに放課後消えるみたいだけど、そういえば何のバイトしてるのかな？　今度聞いてみようかなー。

「ゼン君は身体丈夫っすからね、暑さも其処其処へっちゃらみたい」

「でも、そういう人に限って日射病とか熱射病になるんじゃないの？　大丈夫かなぁ……」

「ゼンなら大丈夫じゃないかなー。……でも心配だから、アサキ今度クラスででも言っておいてよー」

「……」

ハク君の気遣いに、我が弟は手を挙げるのみで返答した。俺的には一番心配だよお前が。

暫く経っても部室には誰もいらっしゃらない様子で、今日は俺達以外誰も来ないみたいだ。珍しいなぁと思いつつも、俺や他三人は何をするでもなく――正確には暑くて何のやる気も起こらず――だらっとソファに凭れていた。

「すーずーしーくーなーってーきーたー」

「授業中も若干暑いんすよねぇ、ボク達のクラス」

「え、そうなの？」

「効き悪いんだよねー、三組皆死んでるよ」

「お二人のクラスは休み時間とか涼しいっすよね」

「うん！　二組涼しい！」

「じゃなきゃ来てねぇ」

暑いと来ないのか。……アサ君、三組じゃなくて良かったね。

「まぁでも、夏休み中に業者の人呼んでくれるってハヤサカ先生言ってたしー、休み明けには涼しいんじゃないかなー」

「ハヤサカ先生？　担任は？」

「担任寒がりだからあんましクーラー付けたがらないんだよー」

「其の点ハヤサカ先生は来たら即付けますからねっ！　『節電は出来る範囲でやるものであり、度の過ぎた節電に有り難みなど無いんです』って仰ってました！」

自分が暑いからだろうなぁ……。

「……あ、ていうかさ、俺ずーっと気になってたことがあるんだけど」

「？」

「――ハヤサカ先生って、名前何？」

かれこれ一年経ったけど、俺未だにハヤサカ先生の名前知らないんだよね。

浮かんだ疑問を視線の先の三人にぶつければ、皆それぞれに知らない、という反応をした。

「アサキ君なんて担任二年目でしょ？　名前名乗ったりは――」

「うるせぇカス」

「してないんだね分かった」

シギ君とハク君の苦笑を耳にしつつ、俺は黙って考える。ううむ、漢字一文字だった気がするんだけどなぁ、何処で見たんだっけ？……あ、ほのちゃんに聞けば――駄目だな、ほのちゃん多分口止めされてる。

「――……よし」

「？　どうしたー？」

「んーん！　何でも無いよ！」

一回ハヤサカ先生ほのちゃんが呼ぼうとしたの止めたことあったし、きっと隠したい名前なんだろうな。しかァし！　そんな面白そうなネタを発見してしまったからには！　――俺達が食いつかないはずが無い！！！！

ハク君の疑問にやんわり笑顔で答え、やはり職員室に忍び込むしかないな、と考えた俺。ふっふっふ、決行は勿論、カイト君が戻ってきてからだな。

自他共に認められるだろう妖しい笑みを浮かべていたから気付かなかったけど、此の時俺の様子を見ていたアサキは、盛大に溜息を吐いたのだという。

374＋マシンガン充填中。／前

休みなのに学校とか無い本当馬鹿じゃないアサキだけど。
明日で一学期終わりだっていうのにどうして祝日に学校に居るのか、無論生徒会の仕事で来させられたんだが、二年で呼ばれたの僕とゼン君だけって何なんだイジメか――ただ役員ってだけなんだが――。

「庶務なんてなくなれ……」

「副会長はなくなっちゃ駄目だろうなー」

「あ、お……疲れ、様です」

用事は終わり、帰宅するは昼過ぎ。学期中に終わらせなければならない仕事の為にやむなく掛けられた収集だったらしく、流石の先輩達も皆死に掛けていた。特にハヤ先輩は動かせない、と外に出る用事は専らサチト先輩が動いていて、ゼン君なんて「サチ其の内溶ける気がする」と真顔で呟いていた。
そそくさと帰宅した三年達の後、何処かに寄るかとっとと帰るか、ゼン君と談義した結果暑過ぎて死ぬからと図書室に寄ることにした僕等。夏休み前の休みで誰も居ないかと思ったが、何故か其処にはムラサメが居て。夏休み前に宿題をやってしまおうとしたらしく、何処かの兄貴に見習わせたいと思った。

そして、今が其の帰り。

「休憩した意味あったのかしらね」

「其れを言うな、暑い」

「まぁいーんだけどねぇ、ナツメ君の宿題も手伝ってあげられたし」

「其れもそうだ」

「……ありがとうございます……」

馬鹿という訳ではないが、教科によって浮き沈みがあるムラサメの宿題に茶々を入れていたら時間が経った訳だ。ある意味暇潰しになったんじゃないかな。

控えめな礼にゼン君と顔を見合わせて思わず失笑、何だか平和だ。

「あー、平和だねぇ」

「本当に、馬鹿が居ないとこんなにも平和か」

「ねー。……こういう日は、何も起きないでのんびりさせて欲しー―」

ガシャアン！！！！

『――ッたァ……！』

「――いねぇ……？」

そんなこと言ったから、なのかは定かでないが、今すんごい音が何処かからした。ゼン君の言葉を遮る形で響いた衝撃音、ええと――明らかに、進行方向からですね。

校門の方から、そして僕等は其方に向かっている。一体何の音だったのか、と、歩調を緩めることなく近くまで辿り着けば、

「――はぁ……」

ゼン君が至極大仰に溜息を吐いた。

「さて問題、喧嘩、イジメ、リンチ、どれだと思うー？」

うちの高校の生徒が、何だか揉めている様子。にしてもゼン君、其の質問もそうだが清々し過ぎるよ笑顔が。

「リンチ」

「リンチ、……って何ですか……？」

「私的制裁ってやつ」

純粋なムラサメにそんなこと教えるのも悪いが、聞かれたので即答したら戦かれた。

さっきの衝撃音は二人対一人の生徒の内、一人の方が門に叩き付けられた音だったらしい。

「っていうかあっ君見てよあれ」

「……あ」

二人組から僕等は見えていないらしく、棒立ちしながら遠めに観戦と洒落込んでいれば。ゼン君が其れを指差し僕を見るから、指されたものを見てやる。

其れ――というか人は、何時ぞやの文化祭で僕が殴りたくて仕方なかった先輩方だった。覚えてない方はそのまま忘れていてくれた方が良いです。

「……知り合い、で――」

「「いや全然」」

「すっ、すみません……」

怒った訳じゃあないんだが、アレ等と知り合いなんて滅相もない。僕等に失礼だ。

と、そんな冷静に解析してる場合ではなくて、其の人論外の輩達に突き飛ばされ誰かが門に叩き付けられたという事実（※本当は推測）があるんだった。元々アレ等の方々を好かない僕としては今から飛び蹴りかましたって良い訳だと思ったんだけど、――僕より遥かに喧嘩っ早いのが横に居たのを思い出した時には、既にゼン君は鞄をムラサメに預けて数メートル前に歩みを進めていた訳でした。

『はろうはろうこんにちはお久し振りです先輩達、日中から宜しく後輩虐めと洒落込んでいらっしゃるところごめん遊ばせ？』

『な、お前あの時の……！』

『あら、覚えてて下さったみたいで嬉しいなぁ、カワイイ女の子ならもっと良かったんですけどね』

「ムラサメ、下がろう」

「え、……良いんです、か……？」

良いも何もお前にはあのイキイキとしたゼン君の笑顔が見えんのか、本業だろ完全に。というかさっきの清々しい笑顔は何処行った。全くの死角で僕等からは被害者側の――だと思われる――生徒は見えないままだったけれど、きっとゼン君ならひとりでどうにか出来るだろう、と割り切り、日なたは暑いから近くの日陰で事が終わるのを待つことにした。

悪いことしてる訳では無いし、止める必要は……無いよな。

375＋マシンガン充填中。／後

『別に虐めてた訳じゃないぞ！？　第一こいつが俺達に――』

『俺達に？　何か暴力的なことをしたんでしょうか？　あらぁ不思議、今時の若者は口に対して暴力で訴えるんですねー』

『ちょっ、とりあえず話を聞けよ！！』

『すんみませーん、俺此のクソ暑ィ炎天下で先輩達と話してたらガチでキレるんで無理ですわ』

『テメェ……！』

『おおっと、ひとつ言い忘れてましたけど、俺、こう見えて――生徒会副会長なんで、発言は慎んだ方が良いと思いますよ』

――――と、理不尽×無限大な会話が終わった様ですアサキです。ゼン君容赦無ぇというか、

「――あれ、悪役どっちだっけ」

「ワタヌキ先輩……多分」

となってます、……あれ？
割と大きなトーンで会話が成されていたから聞き取れた僕等だったが、其の会話が終わってからもどうやら何か話が続いている様子。少し離れた木陰で涼んでいた僕とムラサメは、仕方なく門へ向かうことにした。

「ゼン君、終わっ――」

「――ってことで何で突き飛ばされたのか良く分からないんすよね、コレってオレが悪いんすかねえあっれれっのれー」

「……」

ひょっこり其方を覗き込めば、其処には棒立ちのゼン君と……何やらもう一人、うちの生徒が居た。

「でもコレってアレっすよねえ先パイはオレのコト助けてくれたってコトだしマジ感謝！」

「あっ君、カムオン」

「……」

礼を言われてるということは、要するに野郎共に突き飛ばされた生徒……なんだろうけど。ええっと、――此の短時間でゼン君が此

処まで疲労したのは何故だ。疲れた目、というより最早縋る目なんだけど本当、どうしたのゼン君暑さにやられたの。

仕方ないので歩み寄れば、其れに気付いた生徒は僕に対しても――要するに今までもずっと――極上の笑みを浮かべ、ぱっと手を挙げた。

「こんにちは先パイサン！　休みに学校お疲れサマです！」

「え？　嗚呼、どうも」

「あ！　さっき先パイも言ってましたけど生徒会の人達じゃないっすか！　いんやあオレってば運が良いなあ名も知らぬ上級生に喧嘩売られたのに名は知らないけど生徒会の上級生に助けてもらっちゃうなんて人生の不運と幸運同時に使い果たしちゃったかも！」

「――ずっと此の調子な訳？」

「うん、ずっと此の調子」

一人演説に入った生徒はそのままに、僕はゼン君を見て問う。ゼン君がどっと疲れた理由が若干分かった気がした。

「喧嘩の理由聞こうと思ったのに話進まないし、喧嘩なのかも分からないし」

「そっからかい」

話せど話せど話題がズレそうな奴だもんな、こいつ。

見た目で言えば喧嘩とかしそうなんだが、なんて偏見で物を言っ

てみる。目の前の生徒、身長は僕よりは高いけどそんなに高くない、人懐こそうな笑みを浮かべちゃいるが、何が問題って――髪が黒に紫メッシュ。

「うちの学校、何処まで緩いんだ」

「あら、今更言っちゃう？　横のゼン君見てみ？」

まぁ、確かに今更か。

「――おや？」

と、男子生徒の演説が急に止まった。彼を見てみれば、視線があらぬ方に向いていて。つられるように其方を見れば、其処には若干門に隠れて僕等を見ていたムラサメが居た。

「其処に居るのはもしや我が友ムラサメナツメじゃあないでして！」

バッと両手を広げた彼、視線の先のムラサメは、至極驚いたようにびくついた。

「そんなところに隠れてるなんて水臭いなあ、居るならばこっちに来てくれれば良いのに」

「ムラサメ、お前の友達？」

毎秒三回の瞬きと共にムラサメは首を傾げた。

「ちょっとちょっと、一ヶ月席隣だった仲じゃない？」

「し、シノノメ君、五月ずっと居なかったから、……実質三日くらいしか、隣居なかった、よね……？」

「あ、はっはっは！　其れもそーだ！　我が友ながらあっぱれな切り替えし！　しかしオレの名をしかと受け止めていたということはやはりコレはもう友達というコトでして！」

其れが本当に友達なのかどうかは本人達に任せるとして、どうやらムラサメのクラスメイトということだけは分かった。

一度切れた話のタイミングを目敏く見切ったゼン君は、「今日は疲れただろうからまた今度話聞かして」と彼――シノノメ君、と言ったか――に言ったのだった。

「暑いのに何なのあの子、ある意味凄い」

「シノノメ君……悪い人じゃ、ない、……です」

「安心しろ、ゼン君達だって見りゃ分かる」

此れは予感だが、――近々絶対また会うなあいつ。

376＋夏休み初のお出かけは。

「あっさくーん、おーきーてー」

「……」

弟が起きない、ユウヤでっす！

晴れて夏休みとなりました！　ひゃほーい！　だっていうのに――というかだからこそ――弟が朝に起きない。時計の長針が二桁入らないと起きないって、もう完全に夏休みモードだよね早ぁ。

別に寝かせておいたって一向に構わないんだけど、折角涼しい気候なんだから起きれば良いのに。っていうのは建前で、台風でまともに洗濯とお布団干し出来なかったから洗濯とお布団干しがしたい、させてくれアサキ……！

「……今、何時」

「もう正午になるよ」

「……」

正午がきっかけなのかは定かじゃないけど、何か起き上がってくれたから良しとしよう。

何を喋るでもなく寝る時は此処に置く、と定位置になっている机の上の携帯を取ったアサ君は、恐らくぼうっとしてるであろう頭で首を傾げていた。其の隙にさっさと布団を剥ぐ俺のことはどうか放っておいて下さい。

「どうかしたのー？」

「……電話来てた」

「電話？」

其れは珍しい、アサキに電話したってずっとサイレントだからほぼ気付かないってのに。

「誰から？」

「……コガネイ？」

何でお前が疑問形なのかは気にしないとして、はっ君からの電話だなんて其れこそ珍しいなぁと俺も首を傾げた。っていうかアサ君はっ君にアドレス教えてたんだ……いやそりゃ同じクラスだったんだし教えてておかしなことは無いんだけど、……イメージ的にね！！

アサキは間髪入れず履歴から発信したのであろう、眠そうなまま電話を掛けつつ、そのまま着替えを開始した。

さて、今の内に布団干して、服も洗濯するぞー！

「行くよ」

「え、何処に？」

アサ君にとってのブランチ――最早ただの昼ご飯なんだけどね――を食べてから数十分後。部屋に戻ったと思えば鞄引っ提げて出掛ける準備万端なアサキにそう言われ、昼ドラ見る気満々でテレビ前陣取ってた俺は数回瞬きをした。

「コガネイの家」

「え、……あ、さっきの電話？」

頷くアサ君。

「来いっていうから行く」

「そうなんだ、……で、俺も行って良いの？」

「寧ろ来いって」

ふむ、はっ君の家か、ちょっと興味ある。けどはっ君の家って確か何駅か跨ぐよね？　アサ君が行く気になるなんてめんずらすぃー。

「家に新しいオーブンが来たんだって」

「そうなの？　良いなぁオーブン」

「母親嬉しくなってイロイロ作ったって」

「作りたくもなるよ！　新しいオーブンだもん！」

「――ケーキ数ホール程余ったって」

「わぁ、其れは美味しそう」

「『他にも沢山作り過ぎちゃった☆』――って帰ってきて早々言われちゃったら怒りたくとも怒れんとのこと」

「分かる分かる」

だがしかし数ホールって。其のお母様の“他にも”が超気になるよね、ケーキと“他にも”は一体どちらのが多いのだろうか。

「って訳で行く、タダ食い」

「アサ君、最後の余計よ」

困ってる友達を放っておけないんだなぁ、なんてほんわかした俺の気持ちを是非返して下さい。

「フドウも誘ったとか」

「シギ君？　……皆に声掛けなきゃいけないくらいなんだね……」

「カイトは急に寒くなったから風邪で死んでたと」

相変わらずだカイト君。

「で、其のフドウが駅で迷ったのか家に来ないから拾ってきて欲しいと」

「え、迷ってんのシギ君」

再び頷くアサ君。何だよアサ君、やっぱり優しいなぁ――とか友達が迷って半泣き（※予測）してんのに呑気に飯食ってたのを忘れて思った俺。

「じゃあ、……行きますか」

「うん」

昼ドラは捨て難いが――主婦じゃなくたって見たいもんは見たい――、はっ君ん家に向いた興味の方がでかいからそっちに行くことにした俺、または俺達でした。

377＋重なる影と久しい笑顔。

「カイちゃ～ん！」

カイリだ、寝起きだ。

正確には姉ちゃんに呼ばれた気がして目ぇ覚めたばっかなんだが、其れは夢の中の話か？　何か無い限り何時まで寝てても起こされねぇからな、夏休み万歳。

「カーイーちゃ～ん」

あ、夢じゃなかった。

「お友達が来てるわよ～！」

一階からのそんな声に仕方なく起き上がる。友達？　アサキとかユキなら姉ちゃん名前で言うし、一体誰が来たってんだ。割れながら覚束ねぇ足取りで階段下れば、姉ちゃんは何時も通り笑顔で、「礼儀正しい女の子だったわよ～」なんて情報をくれた。……は？　誰？

「へいへいどなた」

「私だ」

「……お前かいミノル」

玄関の戸開けたら直ぐ返事が帰って来た、何時も以上に増してキリッとしてるがどうしたよおい、そしてもうひとつ。

「お前何で俺ん家知ってんだ？」

教えてねぇよな、以前にお前ん家かなり遠いんじゃなかったか？ミノルは寝起きの俺に起こしてすまなかった、とひとつ謝罪を入れてから、取り出した携帯電話を手に一言、

「ＧＰＳ万歳」

とだけ呟いた。……嗚呼、登録されてた住所おって来たのな、文明の利器流石。

「すまない、案内してもらって」

「べっつに気にすんな、リョウコん家なんざ十分もありゃ着くぜ」

着替えを済ました俺は今、ミノルに道案内をしている。どうやらリョウコん家に行きたかったらしいんだが、土地勘無ぇらしく迷ったんだと。車で近くまで送ってもらったらしいのに何故其処から俺ん家の近くまで来ちまったのかは謎だが、まぁ予定も無ぇし連れてってやるのも良いだろう。

「此処いらにゃ来たこと無ぇん？」

「嗚呼、全く」

ふるふると振られる首。

ま、ただの住宅だし来る必要も無ぇか。

「アサキ達ん家も此処らだぜ」

「そうなのか？　ご近所さんなんだな」

「中学一緒だからな」

「私もテナとはご近所だ、近くに友人宅があるのは良いものだと感じているよ」

「俺も俺も、特に切羽詰まり過ぎた夏休み最終日とか」

「……宿題か」

「はっは当たりィ！」

近所にあれば直ぐに助けを求めに走れるからな！　ミノルは何とも言えない表情をしたが、俺は何も見ていない。

「つーか、何でリョウコに連絡しなかったんだ？」

「嗚呼、其れは単純にリョウコが約束の刻ぎりぎりまで出掛けていると言っていてな。……本当はカイリ、お前が寝ていたら仕方ないがリョウコに連絡をと思っていたんだ……まぁ、結果起こしてしまったがな」

お前の姉君はせっかちさんなのだな、とミノルは溜息を吐いた。寝ているなら良い、と断る前に俺を起こし出してしまったんだろう。姉ちゃんは確かに早い、何が早いって切替が一番早い。喜怒哀楽の切替が特に早い。

「姉ちゃんは俺と違って優秀だからなぁ、弟のダチ待たしちゃいけねぇと思ったんだろ。――頭はどっこいどっこいっぽいけど」

「……ははっ、似た者姉弟、という訳だな」

ミノルは朗らかに笑みを浮かべる、……そういう笑顔はユキに似て爽やかなのなお前。

「――今こうやって、困った友人の道案内をしてくれる心優しき御仁にそっくりだ」

「……へいへい」

そんな煽てたって、何も出ねぇんだけどな。

ミノルを無事送り届けて、家に帰れば。

「カイちゃん、携帯光ってたわよ？」

「へい？」

持って行き忘れた携帯のことを言われ、数回瞬きしてから其れを開く。

「……ははっ」

来ていたメールはユキからだった。

何てことない文面を読んで、何となく笑えた俺。別に何か言いたい訳じゃあ無ぇけれど、久しく見てねぇユキの顔でも見に行くか、と思った。

勿論、アサキも誘ってな。

378＋乙女は走る、何処だって。

リョウコです、母親に頼まれて愚妹と買い物に来てます。久し振りだわ、二人だけで買い物とか。っていうか髪型とか服装とか適当だけど、別に構いやしないわよね。

「お姉ちゃん、私に甘いものを恵めば宿題が捗るわ」

「はいはい、素直に買いたいって言いなさいよ」

本当に宿題が捗るのかどうかは定かじゃないんだけど、言えば大抵は買ってあげるわよ。うちのお母さんの甘さナメちゃいけないんだからね、頼まれたものより余分に渡されたお金の方が多いってどれだけなのよ。

「何買いたいの？」

「此処から此処まで大人買いするというのが夢ね」

「今アンタの夢聞いてないわよ」

「夢を育てるのも姉の役目だと思わない？」

「もう二年くらいしたら考えてあげても良いわ」

「ちゃんと高校に行けってことね、お姉ちゃん酷く鬼畜」

何とでも言いなさい、アンタはどうせ宿題に飽きて着いて来ただ

けなんだから。
　選ばせてたら長いので――私もなんだけどね――、一人先に頼まれたものを買いに行くことにした。どうせ直ぐには決まらないんだから大丈夫でしょ、そういうところ、私にそっくりなんだから私が一番良く分かる。

「――ええと、野菜野菜……」

「あ、リョウちゃん」

「え？」

　買い物リストに目を通して、カートの向きを変えたのとほぼ同時。誰かに呼ばれて動きを止めれば、其処には案の定ヒコクユウヤが居た。

「ちょっ、アンタ何で居るのよ……！　知り合いに会わないと思って適当な格好してきちゃったのに……！！」

「え、大丈夫だよ、リョウちゃんはそのままで充分だよ」

　礼を言うべきなのか分からないわよ其のフォロー……！

「でも、まぁ、……奇遇ね」

「だね、リョウちゃんが買い物なんてめっずらしー」

「べ、別に珍しくなんて無いわよ？　何時も母さんの手伝いで買い

物に――」

「野菜はあっちだよ、リョウちゃん」

独り言聞かれてた……！　っていうか行こうとしてたのと真逆方向指差されたんですけど！　あ、あれ？　此のお店配置変わった……？

「さ、先に違うものを買いに行こうとしただけだから……！」

「あ、そなの？」

何だごめん、と笑うヒコクユウヤ、見るからに買い物慣れしてるわ。

「リョウちゃんは夕飯の買い出しか何か？」

「ん、そんなところよ。アナタは？」

「俺もだよ。まぁ、何にしようかは未だ決めてないんだけどね」

未だ空に近いカゴを引っ提げて彼は言う。……今更だけど、同学年の男子なのにコイツ毎日の様にご飯作ったり洗濯したり、って家事熟してんのよね……頭の良し悪しはともかく、そういうところは尊敬するわ。しかも其れ、一人分じゃなくて二人分でしょう？　お父様もお母様も滅多に家に居ないらしいし、……んー、やっぱり凄い、私には此の歳から毎日家事なんて考えられないわよ。

「毎日大変ね」

「そう？　楽しいけどね？　……え、何が？」

理解してないのに楽しいのね。

「買い物とかよ。家事とかも毎日、アンタがやってるんでしょう？」

「あ、そういう。まぁ、俺が好きでやってるから苦じゃないけどねー、やっぱり楽しいよっ！」

ヒコクユウヤは言葉通り、とても楽しそうに笑った。……私には真似出来ないわ。

「家族が喜んでくれるし、世話するのとかも好きだから、俺！」

「世話するのは主に一人でしょ……」

「まぁそうなんですが」

世話し甲斐のありそうな彼の弟を思い浮かべ、私も世話し甲斐のある妹なら世話してやりたくなるのかしら、と考える。思考二秒でやめた、あの子は今でも充分世話し甲斐あり過ぎだわ。

「でも、最近はちゃんと手伝ってくれたりするんだよ？」

「……彼が？」

「うん、勿論」

満足そうに頷く目の前の彼には悪いけれど、あまり想像は出来な

い。

「ああ見えて優しいんだよ」

「……」

「……あ、ごめんリョウちゃんは知ってたよ――」

「五月蝿いわねアンタ！！！！」

お店で何てこと言うのよ！！　っていうか叫ばせないでよご迷惑じゃないすみませんでした！！！！

「――って訳で、」

私が息と調子を整えている間、ヒコクユウヤはもう一度、私を見て楽しそうに笑った。

「――あれ、カトウだ」

「え？」

他方からまた呼ばれた、自然と首を其方に向ければ、其処には。

「――今日はアサ君にも、買い物付き合って貰ってるんだよね」

無論、ヒコクアサキが居た訳で。手には頼まれたんだか分からないけど、数種類の食材の束。
其れをバサッ、とヒコクユウヤの持つカゴに入れる彼。

「……あ、」

「……あ？」

夏休み入って未だ少ししか経ってないのに見るの久し振りだなぁ、とか、今日も暑かったのに買い物付き合うなんてやっぱり優しいなぁ、とか、色々考えたんだけどね？　そんなことより最初に浮かんだものがあった。――やばい、私今すっごい適当な格好してるんだった。

「あはははは！　久し振りねぇヒコクアサキも！」

「うん、数日振り」

「それじゃあ私は買い物の続きがあるから、じゃあね！！！！」

「じゃ」

「あ、リョウちゃん！」

呼ばれたけど気にしない、私は超特急でカートをかっ飛ばした。
あああああ早く帰ろうもう一度ばったり会う前に帰るったら帰る！！！！

「コトナ！　早く選びなさい！」

「あらお姉ちゃん、今日はせっかちね」

「良いから！」

「分かったわ、此れにする」

「じゃあ行くわよ！！」

「お姉ちゃん、何かお野菜頼まれてなかったかしら？」

「――忘れてた……！」

　買い物リストを買い揃えてからコトナの元へ向かい、直ぐさまそんな会話をしたんだけれど。――実は此の会話が隣の列で飲み物を選んでいた、ヒコクアサキに聞かれていたなんてこと私は未だ――というか一生――知らない。

379＋ほんの少しの違った日常。

「おにーちゃーん」

「んー？」

リビングで買いたてほやほやのゲームをしていたら、ミヤがとてとてっとやって来た、ゼン君だよ。本当はバイト代も出たし新しいハードが買いたかったんだけど、もう少しすれば安くなるらしいんで保留にした。よくやった任●堂、代わりに一代前で今遊んでやってるよ。

「あのねぇ、お母さんとおやくそくしたの」

「約束？　クソあ……お母さんと？」

ゲームに集中し過ぎてつい口が滑りかけた。

「うん、かわいいおくつかうやくそく」

「そっかー、靴かー、良かったなー」

「……あのね」

何時も通り――ゲーム中はこんなもんよ――に反応をした俺だったけど、ミヤは何時も通りに嬉しそうには微笑まなかった。何か嬉しいことがあると言いに来るのは何時ものことなのに、普段は無い

言葉の続きがあるらしく、俺は画面から目を放した。

「どした？」

「……そのおやくそく、今日なの」

「今日？」

ミヤは小さく頷いて、しょんぼりとしてみせた。

「――お母さん、わすれちゃったかな？」

……ははん、そういうことか。

姉貴は何時も、ミヤとした約束がある時は遅くても午後三時には帰ってくる。そして今は其の三時を三十分過ぎた時刻、……未だ読み書きも少ししか出来ないミヤだけど、大好きなお母さんが帰って来る時計の形くらい覚えてるよね。

「ゼン君が電話してみようか」

「……おしごと、たいへんじゃないかなぁ？」

「いいのいいの、あの人が仕事する必要なんざ無ぇんだから」

机上に置いておいた携帯と手持ちのゲームを持ち替えて、幼い娘との約束を忘れてるであろう母親に電話を掛ける。ちなみに仕事しなくて良いっていうのは義兄さんが充分に稼いでるから大丈夫ってことね、あの馬鹿は好きで働いてんだ。

『お掛けになった電話は現在使われていないか、電波の届かな――』

「チッ、あの女仕事中だからって電源落としてやがる」

「お母さん、いない？」

「んーん、心配しないで大丈夫よ。あ、ミヤ、ゼン君飲み物が飲みたいなー」

ミヤの居る前で大仰な言い合いは控えたいので、ミヤにはキッチンに居てもらうことにする。最近お礼を言われることが嬉しいのか、何かすることを求めてくるミヤにそう言えば、案の定喜んでキッチンに掛け込んでいった。

掛ける先を二タッチで変えて、俺は一旦リビングを後にする。

「――あ、もしもし、ワタヌキカスガをお願いしたいんですが、」

精一杯の作った声で、電話したのは姉貴の仕事先。実は結構な回数しているもんで相手方は慣れてくれちゃってるからか、あっさり繋いでくれるようだった。やっぱり忘れてやがったクソ姉貴の奴、俺の時は良いけどよ、ミヤ泣かしたらタダじゃおかねぇって毎回言ってんの、そろそろ覚えてくんねぇかな。

――其れから二時間程後。

「行ってきまあす！」

「いってらっしゃい、可愛い靴買って貰いなねー、そして高い靴なら尚良し」

「うん！」

「……あんた、アタシがミヤコとの約束忘れてたの未だ怒ってるでしょ」

「はぁ？　べっつにぃ？」

「悪かったって言ってるじゃないのよん、ミヤは許してくれたのに、根に持つお兄ちゃんで嫌ねぇ」

「――根になんざ持ってねぇけど、次やったら義兄さんにチクる」

「――絶対忘れるものですか」

根に持ってないっていうのは嘘だけど、……今ミヤが笑ってるなら、其れで良いや。

３８０＊閑話＋二日間夕飯抜きでも人はめげないで生きていける。（前書き）

※作者の話です、気にしないで下さい※

３８０＊閑話＋二日間夕飯抜きでも人はめげないで生きていける。

ちゃーっす、今回は早いご登場アザイだよ。今回はパロディじゃないよ、普通にトークで行くよ。

「何で？」

え、別に理由は……。

「面倒なんでしょ、続き読み直してないから」

えへっ、ばれた？
だって面倒なんだもん、ってことで基本的俺得小説ということで、今回はこんな感じで進めるよー！

「はい！」

はい、いちいち行間取ってから挙手したユウヤ君。

「はい、いちいち行間取ってから挙手したユウヤです」

「繰り返す必要あるのか」

「行間を取った割に今回話すこと何も無いんですけどどうするんですか！」

はい、――どうしようか。

「考えとけよ」

いや本当何も考えないで書き始めるもんでね？　本当何もやること無ぇのよ。裏話とかもう無い――っていうか語ったことあったっけ？

「さぁ？」

んー、何にしよっかな。別パロとかやっても良いんだけど、如何せん深刻な作者のやる気不足。

「作者次第っていうのが流石だよね！」

「夏休みだからだらけてんだよ」

嗚呼、多分それよね。

あー、もう。何か無い？　聞きたいこととか何か無い？

「それ俺達に聞かれても……」

よく考えたら話すこと無いからアリスパロ戻したのにさ～、話すことなんて無くな～い？

「作者壊れんな」

「帰って来てアザイさん！！」

――って訳で、ちょっとしたどうでもいい裏設定を暴露ってこうってことで。

「「え？　どういう訳？」」

どうでもいい裏設定その？、各家庭の裏設定。
ヒコクさん家の“緋刻”という苗字、実は母方の苗字なんです。

「聞いたことある」

「無ぇよ！　初めて知ったし！　え、じゃあ父さんって」

元はクガさんね、クガシンヤさん。要するに、ユウリ達も母方の苗字ってことになるよ、ちなみにユウリ達の父親は未登場なんじゃなくて、――完全に忘れていただけです。

「おい」

結構色んな家の両親考えてあるんだけどね！　それは機会があれば出したいな、特に一番不憫なリョウちゃん家のお父さん。

「何が、何が不憫なのかすんごい気になる……！」

「確かに気になる」

まぁ、機会があれば。

ヒコクさん家はシユウままんが一人っ子だったのと、シンヤぱぱんが実に家督とかに興味が無かったのでそうなったという。――両親の馴れ初めとかも考えたんだぜ、俺。

「アザイさん、キャラが行方不明」

探してきてくれマジで。

ええと、後はそうだな。ロクジョー家のお父さんの単身赴任先は関西だよとか。そしてロクジョー家にお父さん帰って来るとツッコミはカイリだという。

「ミラクルハイテンションなんだってカイトに聞いたことある」

「何てお父さん……！　うちの父さん帰って来たら大抵部屋篭るのに……！　――ちなみに俺カイト君のお母さんの事情知らないはずなんだけど此処ではおうけい？」

おうけい、本編とは一切関係ありませんってテロップ流しとくから。

※現在の話は本編と何ら関係ありません※

「こんなで良いのか朝夜グラフィティ。」

だって僕がルールだもん☆

「還れ」

土にってか？

後はそうさなぁ……嗚呼、多分興味はガチ薄な感じだと思いますが、

「え、何々」

セツさんは言う程馬鹿じゃない。以上。

「何それ」

いやぁ、彼のイメージって基本的馬鹿なんですが、

「だって馬鹿じゃん」

「馬鹿っぽい」

うん、僕もそうだと思う。

でも、よく考えてみて欲しいのは、――マヒルと同じ大学の同じ学科なんだよ？　っていう。あ、ちなみにウミは別の学科です。

「それもそうか……！」

まぁ、入学方法が違ったとしても、同じ学科な以上そこまで差異は無いはず。……まぁ、マヒル氏がどんな大学を選んだかによるけど

ね。

「そこは作者なんだから教えろよ」

「そうだそうだ！」

まぁ、アレです、基準は――雰囲気が良さそうだったから、です。
学力じゃ選んでないのでしたー。

「……あれ？　じゃあセツさんが馬鹿かどうかって分からないんじゃ……」

ま、マヒルが何処を選ぼうが、目も当てられない程低いところなんて行こうとしてたら止められますからね、高校の教員方に。そうされなかったんだから妥当校だったんでしょうね。

「後半適当！」

うっさい黙れ。マヒル兄貴の話してたら大分延びたな。

「セツさんの話じゃなかったっけ……」

あれ？

あとそうそう、家庭の話じゃないけど、サクライ先生とアヤメ先生の話。あの二人は高校来の友人というのは話したかと。

「うん、多分俺達は知らない」

「知らん」

まぁ気にせずに。

あの二人は高校で知り合い、大学別で、職場でバッタリしたって感じです。高校時代は友人（？）な関係だったっていうね。

「え、そうなの」

「パシリの関係かと」

三年間クラスが一緒の、クラス委員と風紀委員。

「……どっちがどっち!?」

「どっちでもしっくり来ないが」

サクライ先生が風紀委員だよ。

「もっとしっくり来ない……！」

まぁ、委員会のこともあって腐れ縁的に三年間共にしたので、大学入ってからも連絡を……なんてことが無かった訳さ。

「ふうん」

「へぇ」

この話も何時か出したいんだけどなぁ、過去話シリーズ。――無論お前等の過去話もな。

「何時かやれば」

「何時かね」

やる気無ぇなお前等。

って訳で、今回はこんなもんでお開きにしようと思いますがどうでしょう。右腕も痛いし。

「腱鞘炎？」

「ユウヤお前……難しい言葉を……」

「え、腱鞘炎で驚かれるの俺」

ではでは以上、また二十話後。――は、多分パロやるから居ないな、ははっ。

381＋姉として。

「コトナー！　コットナー！！　居るかー？」

リョウコです。自宅なはずなんだけれど、何故かしら、ユズ君の声がする。妹を探しているみたいだけれど、コトナならほんの少し前何か買いに行くって出てったばかりなのよね。

「ユズ君？」

「あ、リョウコちゃんおっじゃまー。コトナは？」

昼間は両親居ないから、私かコトナしか居ない。ユズ君も其れ知ってるから入って来たのかしら。

もう中学二年生だというのに幼馴染の女の子ん家に普通に入って来ちゃうユズ君は、リビングの私を見つけるなり首を傾げてそう尋ねた。私とモモは中学からの仲なのに、此の二人って保育園からだからより仲が良いのよね、……まぁ、脈はあるんだか無いんだか分からないけれど。

「コトナならちょっと前に出掛けたわよ？」

「あ、そなん？　何処？」

「多分雑貨屋かしら」

「はぁ！？　何で俺に声掛けねぇんだよ！！　超行きたかった！かも！」

普通雑貨屋行くのに同学年の男子は誘わないんじゃないかしら。

「直ぐ帰って来ると思うけど」

「むー、うーい、んじゃ待ってる。今日一緒に遊ぶ約束だし」

「……羨ましいじゃない」

「何か言った？」

「いえ、今飲み物出すわね」

つい口が滑った……！

でも本当に羨ましいわよ、何よコトナの奴、意中の人と遊ぶ約束って何よ其れ。幼馴染効果？　幼馴染だから成し得られるの！？

「二人で何処か行くの？」

「んー、決めてないから多分家で人生ゲームする」

「二人で人生ゲームって何が楽しいのよ其れ……！」

つい注いでいる飲み物零しそうになったわ。二人で人生ゲームってある意味素敵過ぎるわよ。

「あ、夜になったらリョウコちゃんもうち来てな」

「ん？　また何か作ったの？」

「おう！　今回は冷たいものブームに乗っかりましてひえひえの――」

うん、此処から聞かなくて良いわ、長いから。（※此れが慣れです）

「でもさ、正直なところ、」

「ん？」

直ぐ帰ってくると思っていたコトナはなかなか帰って来ず、ユズ君が自宅宛らにテレビを見始めてから。

「中学生にもなって女の子と遊ぶって、ユズ君友達に何か言われたりしないの？」

二人がずっと仲良し――まぁコトナはちょっと違うんだけど――なのは姉である私が良く知ってることなんだけど、年頃の子って結構そういうの気にするじゃない？　コトナはまぁ良いとしても、ユズ君はどう思ってるのかしら。

「言われるぜー」

ユズ君テレビに夢中で興味なさそうだわ。

「でもー、ずっと仲良かったコトナと遊んでるのとやかく言われるのもなー」

けれど夢中なら夢中なりに、ちゃんと答えてくれているようだった。

「俺は気にしないかなー」

「……そう、」

其れは良かったかな。別に、あの愚妹を応援とかそういうんじゃないけれど、

(好きになった人は、間違ってないってことかな)

姉として、改めて安心したかも。

「まぁ、コトナが迷惑だったらアレだが」

「其れは無いわね」

「……え?」

「……ははっ！」

他人を気遣う台詞に間髪入れず否定すれば、ユズ君は素っ頓狂な声を上げて首を傾げた。つい笑ってしまったけれど、家の戸が開く音がしたから聞かれなくて済んだ。丁度コトナが帰って来たみたい。

「ただいー―」

「コトナー！　遅ぇ！」

開口一番に怒られてる我が愚妹。

「ごめんなさいユズ、途中で自転車のチェーンが外れてしまって」

「俺との約束忘れたんかと思――」

「其れだけは無いから安心して」

表情変化はやはり無いのだけれど、私から見れば何時も以上に鋭く訂正を入れた。他のどんなことを忘れても、ユズ君との約束だけは忘れないわよね、アンタ。

「……マジ？」

「マジ」

「なら良いや、チャリ大丈夫なん？　俺直そか」

「お願いしても良いかしら」

「任しとけ！」

訝しげにコトナを見たユズ君、返事を聞けばぱっと笑みを浮かべ、元気良く外に向かっていった。勿論、コトナも一緒に。

ユズ君ってモモに似て、お世辞にも格好良いじゃなく可愛いだけど。背は最近伸びてるみたい、でもコトナより大きくはならないんじゃないかな、なんて。

――でも、コトナはユズ君が良いみたいだし。

見守りましょうか、姉として。

382＋ツッコミ担当は年功序列。（前書き）

会話のみでお送りします。

382＋ツッコミ担当は年功序列。

スパーン！！！！　バタッガタタタッ！！！！

「ねぇシギ兄、暇だから何か遊べ」

「――ストォォップ！　今何で平然と会話が進んだんすか！？」

「え？」

「襖！　倒れて！　ボクの本棚が滅茶苦茶！　――ハイ正解は？」

「あら大変」

「……」

「良いじゃん馬鹿兄、可愛い妹が暇だから一緒に遊ぼって言ってるんだから。ねぇソオ？」

「ふぇ？」

「ソオも居たんすか……！」

「当たり前でしょ、あたしが一人でお兄ちゃんと遊ぶと思う？　っていうかお兄ちゃんの部屋の襖建て付け悪くない？　直したら？」

「其の建て付けの悪い襖を今さっき吹っ飛ばしたのは誰っすか……？」

「お兄ちゃんの部屋、ご本が沢山だねぇ」

「そうだねソオ、本が沢山散らかってるね」

「お前が本棚ぶっ倒したからだからね？　――嗚呼聞いてないっすね、人の部屋で寛ぐ気満々っすね」

「……だめ？」

「いや、全然構わないよ、ソオ」

「末っ子に激甘な兄の図」

「お兄ちゃんから始まるー夏の風物詩ー」

「はい？　ええと、――宿題」

「ストップ、いきなり暗い」

「し、仕方ないじゃないっすか！　っていうか人が飲み物運んで来て直ぐ山手線ゲーム始めるって何!?」

「あら凄い、よく分かったね山手線ゲーム」

「馬鹿にしてますよね？」

「ソンナコトナイヨ」

「棒読み！」

「お兄ちゃんすごい！」

「ありがとう、ソオだけがボクの味方です……」

「はい、続きね。ソオの番」

「ソオもやるの？」

「勿論。山手線ゲーム、夏って言葉に思い浮かぶものをひとつ言うんだよ」

「んー、んーと……」

「簡単ので良いんすよ？　暑いとかそんなのでも」

「流石に暑いは雑過ぎでしょ」

「まぁ、そうっすけど」

「――蜩（ひぐらし）」

「小学生のキャパ侮れねぇなおい」

「ボクじゃ一生浮かばなそう……」

「兄よ、其れで良いのか」

「っていうかさ、お兄ちゃんは夏休み友達と遊んだりしないの？」

「え？」

「あ、勿論ゼン君とサチト君抜きね」

「……え？」

「まぁゼン君はバイトだし、サチト君は受験生だからお兄ちゃんなんざに構ってる時間は無いだろうけど」

「……えと、」

「……お兄ちゃん、友達居ないの？」

「そっ、そんなことは無いっすよ！？」

「……」

「ソオ！　悲しそうな目でボクを見ないで！！」

「本当かなぁ？」

「……居ます、居ますからね！　ほらっ、アサキ君とか！」

「……嗚呼、ソオとミヤちゃんがお世話になった」

「あさきくーん！」

「ねぇソオ、其の、アサキ君はお兄ちゃんのこと何か言ってた？」

「？」

「っていうか、お兄ちゃんの友達っぽかった？　お兄ちゃんと友達やってくれそうな人というか」

「うわあ、ボクの地位の低さに涙が出るっす」

「えと、お兄ちゃんのことをどうとかは言ってなかったです」

「嗚呼やっぱり」

「やっぱり！？」

「でも、二人共とーっても優しかったよ！」

「ふぅん、……優しいからシギ兄と付き合ってくれてるのか……」

「ちょっと其処、変な囁きやめるっす」

「ゆうやくんは、また遊びに来てねーって。あさきくんは、二度と来るなって言ってた！」

「――ちょっと待ってソオ、お姉ちゃん今びっくりした」

「ふぇ？」

「お兄ちゃんの友達、片方全ッ然優しくないこと言ってるじゃん」

「あはは、アサキ君らしい……」

「らしいの？　そんな友達で良いの？」

「あさきくん、優しいよ？」

「……そうなの？」

「うん！　……ちょっとだけ、お姉ちゃんに似てるの」

「あたし？」

「お姉ちゃんは、お兄ちゃんとかお父さんとかお母さんとかに意地悪なこと沢山言うけど、ソオには意地悪しないの」

「まぁ、ソオは妹だしね」

「其の待遇が羨ましいです」

「あさきくんもね、意地悪なこと沢山言うの。でも、本当にそう思ってないの、ソオ分かったの」

「ふぅん……」

「……ん？　其の説で行くとユリの意地悪も本当じゃないってこ――」

「当たり前じゃん、あたしは本当に嫌いな人には声すら掛けないって。かっこお兄ちゃん除く」

「今一瞬だけ感動し掛けたっす！　返して感動！」

「お兄ちゃんだけ特別だぞ☆」

「全然嬉しくない……！」

「って訳であたしはそろそろ勉強しますわ」

「え？」

「此れでも受験生だからねぇ。来年、お兄ちゃんと同じとこ入る予定なんだから、少しはまともな生徒やっててよね、そうすればあたしの株も上がる」

「思考回路が真っ暗っすよねお前は」

「ばいばーい、ソオの相手宜しく」

「……結局襖、直さなかったっす」

「頑張って下さい、お兄ちゃん！」

383＋騒がしさをもう一度。

アサキです。昨日急にサチト先輩から、『明日部活な』と凄いシンプルなメールが届いた。こんなくそ暑い時に部活ってふざけてんじゃねぇかとか思わない訳でもないが、どうせやることも無いし部室は涼しいから来てやることにした。

「……あれ」

「あ……、ヒコク先輩……」

「こんにちはー！」

午前中から暑過ぎる、時間より早く部室に着いたら、其れより先にムラサメと、

「お邪魔しちゃったりしちゃったりしてましてー！！」

見たことある人――基聞いたことあるテンションの方が、ムラサメの横にご在宅なさっていた。

「……」

「そーんな怪訝そうな目でオレを見ないで欲しいですようさっき其処で我が友ナツメっちに会ったから暑いしついて来ただけなんですからーん」

「す、すみません……暑そう、だったから…」

いやんナツメっち優しい！　とか何とか、此のくそ暑い――嗚呼お前等はもう涼しいのか――のに一方的にじゃれ合う二人を見て、まぁ良いけどな、なんて考えてから無言で給湯室に向かった。喉渇いて死ぬ。

「あり、無反応？　無反応ってことは此れオレ此処に居てもおけってことかなナツメっち」

「……多分……？」

「ちょっとちょっとナツメっち！　ナツメっちの部活の先パイでしょうがそういう細かいところ熟知しておかないと先パイとの友好な関係は作っていけないんだぜ？」

「そう、なの……？」

「そうに決まってるジャン！　って言ってもオレ何も部活入ってないから知らないんだけどねー！！！！」

「お前等、何か飲むの」

「え、え、まさかオレ達の為に何か飲み物を淹れてくれるって感じですか！？　オレは何でも良いでっす！　ほらほらナツメっちは！？」

「あ、お、俺も……」

前会った時ムラサメは友達なのか疑問そうだったが、こう聞くとこいつ等、本当に仲良かった様だ。

「やっりぃオレってば最強！」

「だーッ！　お前強ッ！　此の俺が負けただと……！？」

「あっれれっのれー？　さっちゃん先パイ部長サンて言ってませんでした？　なのにトーシローのオレに負けちゃうなんて形無しですねえ」

「てめぇえええ！！！！」

「きゃー！　誰かたーすーけーてー！！」

「こらこらサチト、後輩の髪をぐしゃぐしゃにするんじゃない」

「さっちゃんが弱ぇのがいけない」

「――こうなったら格ゲーだ！　おいシノノメ！　格ゲーで勝負だ！」

「喜んでー！」

あれから数十分、僕とムラサメがシノノメ君の話を延々と聞くなんて状況が出来上がってたんだが。ハヤ先輩とサチト先輩、其れにゼン君が来て今此の状況が出来上がってる。ちなみにどんな状況かと言えばサチト先輩がシノノメ君とゲームで勝負して負けてる状況だ。サチト先輩初対面なのに何なんだ此のフレンドリー感。

「随分と強いんだな」

「えっへへんオレってば家に居ることが多いから、自然とゲームばっかりやっちゃうんですよねえ」

サチト先輩お得意の格ゲーも得意らしく、余裕綽々にハヤ先輩と会話をしながらコントローラを操作するシノノメ君。けれどサチト先輩とて長年ゲームやって来た訳で、途中からはシノノメ君も本気だったが。

「あ、そういえばあっ君」

「ん」

「此の前シノノメが絡まれてたの、やっぱり悪いのあっち方だったみたい」

「そうなの……？」

うん、と返事をして話してくれたゼン君の話を一言でまとめれば、上級生の彼等が高齢者のおばあさんを転ばせたのに何もしなかったのをシノノメが見掛けた、ってことらしい。

「あの人達酷ぇんすようだって自分等の狭ぇ肩幅で歩いておば様の

肩にぶつかったのに手も貸さないで去ろうとするなんておかしいと思いません？　まぁうちの学校の前だし先パイだし何も言わないで去ろうかなぁなんて思っちゃったりしちゃったりしたんだけど其れでも一言言わなきゃ気が済まなくってー」

要するに、シノメ君の一言が長過ぎたってことだな。

「やっぱり悪いことしたら謝らなきゃっすよねえ。そして見過ごすのはいけないっすよねえ。正しいことをする人にはちゃんと神サマが付いてるって言うし、現にオレはゼン君先パイやあっ君先パイに助けてもらえた訳だーし！」

「ゼンの場合はただただ暑さにキレてただけだろ」

「あらあバレちゃったぁ？」

暑さでキレる五秒前だったゼン君の前にあんなの現れたら、……そりゃあ……うん。

「――あ、負けた」

「っしゃあ俺の勝ちィ！！！！」

そんな話をしていれば、大人気ない雄叫びが部室に響いた。

「ふっふっふっふっふ、俺の勝ち！！！！」

「さっすがは部長サンすねえ俺ってばちょっとソンケー」

「そうだろうそうだろう、もっと俺を褒め称えよ！」

「……駄目な部長だな」

「あ、ハヤ先輩が其れ言っちゃうんだ」

駄目なのは前から知っていたので、僕は特に何も言わないでおくことにした。

「そう言えばシノノメ」

「はい、はいはーい何でしょうか生徒会長サマ」

「お前、もう夏休みなのに部活入ってないって……何でなんだ？」

相当暇らしいシノノメは、帰る気配もなくムラサメの横を陣取って皆と話をしていたのだが。

そんな質問をハヤ先輩に投げ掛けられ、――一瞬だけ動きが止まった。

「……えっと、」

「……すまん、都合悪いこと聞いたか？」

「い、いえいえいえいえ！　そういう訳じゃあ無いんですけれども

！」

ついでにお得意のマシンガントークも止まった。若干慌てたハヤ先輩と、其れを体現したかのように見事な慌てっぷりを見せたシノメ。

次を話す為か苦笑いをかまし、「ナツメっちは知ってると思うんですけどね？」とムラサメを一瞥してから言葉を続けた。

「オレ別に転校してきたって訳でも無いんだけど学校来始めたの六月からなもんで、部活とか何となく入り損ねたっていうか」

「六月？　二ヶ月休んでたのか？」

「正確には五月からなんすけども確か三日とか四日しか来てなかったよなあナツメっち？」

隣のムラサメがこくこくと頷く。

「まぁオレ自身の事情で来てなかったもんだから文句は言えないし、其の事情でずっと行かなきゃいけない運動部は勿論途中で抜けらんない催しある文化部だって無理だから結局帰宅部万歳って感じなんだけどー」

だから今日何だか楽しかったなあなんつって！　――其の事情とやらを聞く気は無いが、最後はそうやって楽しそうに笑った。紫メッシュだろうが人は人、人には色々あるものだし、其れを僕からすれば二度目ましてで聞くなんてことしたりはしない。無論、他の皆だってそうだろうから黙って聞いていたんだけど、

「じゃ、お前うち来い」

――と、そう言ったのは。

「え？」

「部活入ってねぇの色々言われたろ、だからうち入っとけば？」

我等がＧＣ部の部長、キスギサチトだった。

「なぁ、ハヤ？」

「そうだな、俺達は大歓迎だが？」

「……え、……え、でも、オレってばホントー……に、来れないことあるんですよ？」

どんどん進んでいく話にぽかんとしていたシノノメ、けれど恐ろしい速さで瞬きを繰り返してからそう問い、先輩二人を交互に見た。

「来れないって、どんくらい？」

「えーと、暫くは多分大丈夫ですけど、急にまた、二ヶ月くらい急に休んだりすることもー……」

「別に構わないんじゃないか？　学校さえ無事進級出来るなら」

「あ、後此処って生徒会と兼用とかじゃなかったです？　此れはナツメっちに聞いたんすけども」

案外詳しいなお前。

「其れも大丈夫さ」

「少なからずハヤが居る内は大丈夫だぜ？」

「お前も手伝ってくれても構わないんだがな」

「俺に手伝わしたら二度手間だっつったの誰だよ」

「……俺だろうな」

ぎゃあぎゃあと此方の都合で話し始めてしまった二人に置いていかれ、シノノメ君は唖然とした様子で僕を見た。

「何だかユニークな先パイ達でしてなあ、あのタチ悪ィ人達と同い年とは思えないすわ」

「まぁ……良い人達だと思わなくは無い」

「……んー、どうなんだろ」

どうやらシノノメ君は悩んでいるようだった。歓迎するとは言われても、迷惑を掛けるのは分かりきっているとでも言うように。楽しかったのなら入ればいいのに、と、他人事に考える僕が何も言わないでいれば、ソファの後ろまで歩いてきたゼン君が小さく首を傾げた。

「良いんじゃない？」

「……んー」

「お前が入れば、ムラサメも多分嬉しいんじゃないかな？　一年はムラサメ一人だったし」

ちらっとムラサメを見れば、怯えているような、だけどそわそわと、嬉しいんだろう態度でシノノメ君を見ていた。

「そっかー、ナツメっち嬉しいかー、たまにしか来れなくてもー？」

「……う、ん」

「そっかー、――じゃ、たまにお邪魔するってことで良いならオレ入っちゃおうかな！」

黙考の果て、照れたように微笑んで、シノノメ君はやっとそう決めたらしい。

「そうすればナツメっちとも沢山会えるもんねー！」

「わ、……え……」

そして一度そうと決めたらもう吹っ切れた様子で、元気良くムラサメに抱き着いていた。嗚呼、マウントポジションってやつか。

「――って訳でシノノメツヅネ！　此処入部しちゃおうと思うんですが本当あんまし来れないんでよろしくお願いしまっす！　クラスの奴等からはシノって呼ばれてたりしますんでどーぞお好きにお呼び下さいな！」

暫くじゃれてから勢い良く立ち上がったシノノメ君は、一息でそう言ってのけたとさ。騒がしいのがまた一人増えた……でもまぁ、ムラサメは心底嬉しそうだし、良しとしてやろうか。

384＋疲れようとも突っ込め！

「――ふざけないでくれるかしら？」

マヒルだ。夏休みは夏休みだが、何やかんやで大学に通う日々が続いている。まぁ、そう長い時間居る訳でもなく、午前中に用事が終わったりすることが多いんだが。

今日も例に洩れず午前中に為すべきことを終え、たにも関わらずセツが学食で飯を食っていきたいと言うから其れに付き合うことにして、だ。

「悪いのはあなたでしょう？　なのにひとつの謝罪も無いなんておかしくなあい？」

――心底帰っておけば良かったと、思ったのは恐らくセツも同じだろうな。

此処から離れた所で、聞き慣れたウミの声がした。人込みだらけで場所までは未だ判明出来ていないが、……嫌な予感がする。

「なぁ、セツ」

「……ん」

食べていたカレーのスプーンを置いたセツが、首と視線で其方を

差す。どうやら先に場所を見つけたらしい。

「また何かやらかしてんのかね」

「其の前に退散してぇ……」

目は悪くない方だが、遠くてあまりよく見えない。ちらほらと歩く学生の狭間から見えたのは、やはりウミの爽やかな笑みを浮かべる姿で。

今度は何やってんだよ……と、セツ共々溜息を吐いた。というのも、ウミが学食で騒ぎを起こすなんていうのは今に始まった訳じゃなかったりする。寧ろ俺達の初対面はウミが学食で暴行を働いていたことで起こり得たもんで――無論、正義の鉄槌的意味で――、其れ以来ウミがたまに起こす問題は、大抵此処学食で起こることが多い。

そして今回もきっとそう。ほら、晴れた視界にはウミと、恐らく友人の女子学生、其れに、見知らぬ男子学生が――――ん？

「ちょっ、ちょいセツ！　あれはやばくないか……？」

「は？　……は！？」

何時もはそう、見知らぬ男子学生――とは言え俺は大抵見たことのある学生だが――に喧嘩を吹っ掛けているんだが。今日ウミが喧嘩を吹っ掛けてんのは――

「どうしてああなった……！」

「何でうちの学部長！？」

ということで、大学の教員にだった。セツにすら呆れられる事態とかウミ、お前も大分問題児になってきたぜ……！？

「おいマヒル、巻き込まれる前に出ようぜ」

「良いけど、お前飯は」

「飯よかアレに巻き込まれる方がよっぽどだろ！」

がやがやとした喧騒に紛れウミの声は聞こえなくなってしまった為、彼等がどんな会話をしているかは分からない。けれど一瞥だけ、ウミがちらりと此方を見た気がして――俺とセツは機敏な動きで姿勢を低くした。

「何でバレた！？」

「お前が逃げようとしたからじゃね？」

「お前も賛同したじゃねーか……！」

周りは騒がしくそうする必要は無いけれど、何故かワントーン声音を落としひそひそと声を潜める俺達。ウミ元凶の問題に巻き込まれたことなんて腐る程あるが、今回は出来ることなら見なかったことにしたい。学生なら未だしも、うちの学部の長だぞ、下手なことになったらどうしてくれるってんだ。

――けど。

「さぁセツ、二者択一の時間だ」

怪訝そうな顔でウミが居る方向をリアルな低姿勢で見遣るセツに――まぁ俺もだが――、俺は苦笑しながら言った。

「んもうっ、何であんなくそオヤジに私が頭下げなきゃいけないのよ！　というかあなた達も！　何もしてないんだから頭なんて下げないでくれる！？」

「喧嘩売る相手！！」

「……悪いのは私達じゃないのよ。ねぇマヒル、其れは分かってくれるわよね？」

「嗚呼、分かってるよ」

『今行ってあいつと一緒に平謝りして愚痴聞くのと、後で（※理不尽に）怒られるの、どっちが良いよ』

『俺は嫌なことは先にやっちまいたい性質だ』

そう言ってから立ち上がり、言葉通りの後ウミを回収した俺達。
必死な表情で俺を見るからそう言ってやれば、「なら、もう良いわ」なんて言って微笑んだ。もっと愚痴られるかと思ったんだが。

けれど此れ以上何か言ったらまた振り返すだけだろうし、満足そうに歩くウミと、疲れたように溜息を漏らすセツの後ろを歩く俺だった。

「結局、何があったんだ？」

「授業、もっとまともにやんなさいっていってやっただけよ。……女の子ばっかに視線流してないでね」

――確かに、ウミの勝ちだなこりゃ。

385＋追ってみることにした。／前

「何処に居るのだろうね？」

「さぁなぁ」

ユキだよ！　夏休みとは実に有意義な時間だね！　宿題なんてものは七月中に終わらせてしまったし、今日は何をしようかと思っていたら、なんとカイリから遊びにお誘いが入ったのだよ！　なんとグッドタイミングなんだいカイリ！　君は私をよく理解しているのだね！！

――という、何時ものテンションは良いとして。私を誘うということは、無論アサキにも声を掛けた訳なのだが。

「ユウヤが言うには近場をうろうろしてるとか何とか、」

「珍しきアサキの行動力、必見だね」

朝からどっか行っちゃってるんだよねー、近場徘徊してると思う。と、ユウヤに言われた。電話に出ず、ゲームでもやっているのだろうと自宅へ赴いてみれば、なんとそういうことらしい。

「外出んの面倒臭ぇって言ってる癖して、こういう時は行動力抜群なのな」

「一度吹っ切れたら長いのだよ、ああいうタイプは」

用事は一度で片付けたい、というより、外に出てみたらやりたい

ことあったんだった、かな？
そしてたった今、私達は地元をうろうろとしている訳なのだよ。
所謂アサキ捜索隊だね！

「用事だけだったらもう終わってんだろうに」

「ふふっ、其れを探すのが楽しいんじゃないか！　Ｈｅｒｅ　ｗｅｇｏ！　だよカイリ！」

近場にしか居ないと分かっていても、見つかるかどうかなんて分かりはしない。でもだからこそ探し甲斐があるってものさ！

「……ユキって相変わらず、良く分かんねぇところで盛り上がるよな」

「何だい？」

「いや、何でも」

最初に行ったのは、近場の本屋さん。

「あっさり見つかるもんだよな……」

「アサキって実は単純な生き物なのかもしれないね」

雑誌コーナーにて立ち読みをするアサキを発見、探索時間は数十分だよ流石の私もびっくりさ。

そのまま声を掛ければ良いのだけれど、何となく遠くからバレないように様子を伺う私達。

「……何故隠れたのだろうね」

「何となくだな」

君も大概気まぐれだね。

アサキの最初の目的は本を買うことだと聞いていたので来てみれば、だ。自宅を出てからそれなりに時間は経っているだろうに未だ彼、アサキは本屋に居たという。……うん？　本屋で延々と立ち読み？　――お店に迷惑だね！

きっとそんなこと露ほどにも気にしていないだろうアサキが手に持つ雑誌は、カイリ曰くライトノベルの雑誌らしく――視力良過ぎるよ君――、もしかせずとも其の雑誌の小説を全部読んでいる……ということなのだろう。……本当に迷惑だね。

そんな私の心情に気付いた訳ではあるまいけれど、視線の先の彼は雑誌を閉じ、元あった場所に戻して移動を始めた。やや、どうやら店を出るようだ。

「このまま隠れて、アサキがどんな店に寄るか偵察すっか」

このまま帰るとは言い難いだろうアサキの後ろ姿、ついにはそん

なことを言い出したカイリに私は苦笑する。……ふむ、まぁカイリを大概だなんて言う割に、

「うむ、其れは良い考えだ」

――乗ってしまう私も私なんだが。

386＋追ってみることにした。／後

「……」

「……」

「……ユキ、何分経ったん」

「ざっと五十分だね」

あの後直ぐに本屋を出たアサキの後を追えば、彼にすれば当然だと言わんばかりにゲームショップに入っていった。ゲームセンターではなくてゲームショップ、テレビゲームでも買いに来たのだろうか？

最初はそう思いアサキがゲームを買う風景を遠めに拝んで――正確には選んでいる風景をだが――いたのだが、もう少しで一時間が経つというのにアサキは一向に何かを買う気配が無い。

「うろつきに来ただけなのだろうか……って、カイリ？」

息を吐いてから、てっきり私の背後に居るものと思っていたカイリに声を掛けた、のだが。

「やべぇ、コレ超懐かしい……！　うっわー、え、マジで完璧なフォルム！　超欲しい……！」

――直ぐ近くのおもちゃ売場で、特撮ヒーローのフィギュアに釘付けだった。子供に交ざって何やってるんだい君は。

そしてそんな空気を的確に読み取ったかのように、ゲーム売場に居たアサキが動き出した。

「カイリ！　アサキが行ってしまうよ！」

「え？」

「……本来の目的を忘却するスピードが半端無いね君は」

惚けている訳では無さそうなカイリから特撮ヒーローを引き剥がし――終始名残惜しそうだったことは割愛しておこう――、私達は再びアサキを後を追った。

「……スーパーだね」

「スーパーだな」

運良くも此処まで気付かれていないのか、はたまた全スルーされているのかは分からないが、アサキがやって来たのは彼の家に近いスーパーだった。

「何でスーパーなんだろうね？」

「考えるよか行動だーい」

慎重さのカケラも無いカイリが一緒で気付かれていない線は大分薄いのだが、何も言って来ないということは気付かれていないのだろう。このまま追跡を続けることとする私達。

ズカズカとスーパーに侵入するカイリの後に続き中に入れば、私はあまり来ない為に内装が全然分からなかった。カイリなら家も近いし分かるのでは？　と、若干頼りないガイドに勝手に着いて行けば案の定、遠く離れた何処かの売場にアサキを発見出来た。うむ、頼りないなどと考えた私を許してくれたまえ。

「アサキが行くところなんざ菓子売場か飲み物売場くれェだろ」

「流石はカイリだね！」

「俺様がそうだからな」

自分の思考で歩いていただけなのかい君は。

私の感心を返して欲しいところだが、とりあえず今はアサキの様子を伺おう。ええと、スナック菓子でも買うのだろうか。――って、動き出した。……おや、此方に？

「ユキ！　離脱だ！」

「え、あ、バレたのかい？」

「違う！　飲み物売場がこっちにあんだよ！！」

店内を熟知し切っているカイリにそう言われ、あわあわと本売場の裏に隠れる私達。今のは流石にバレたのでは無いかなんて思ったが、やはりアサキは気付いていないようだ。

「ふむ、アサキも案外鈍感なのだね」

「周りに興味無ぇだけじゃね？」

そうとも言うね。

飲み物だけを購入したアサキは、そろそろ帰宅をするのか自宅方面の信号待ちをしていた。

しかしその折にぽたり、と頭上から雫が滴り落ちて来て。

「やばっ、雨か？」

「そのようだね」

信号が変わる頃、ほんの数秒の間に、気付けば大きな雨粒が何重にも重なる音となってアスファルトを叩いていた。

「ちょ、俺傘無ぇんだけど！」

「あ、私傘と合羽があるから傘を使うと良いよ」

我ながら準備は良いのさ、最近雨が頻繁だったからね。

慌てて雨具を出す私達とは裏腹に、信号が変わってしまったのと同時に、アサキは何の変わりもなくたらったらと自転車を進めていた。此処からは細い路地に入る為、見失ったらもうアサキが家に帰ったと信じて向かってみるしか無い、のだが。

「あれ？　ユキちゃん、カイト君！」

――本当に見失った。

雨は強いまま、門前には何故かユウヤが立っていて、私達を見るなり大丈夫？　と駆け寄ってきた。まぁ、適度にずぶ濡れだからね。

合羽を着るのに手間取っていれば、本当に見失ってしまったのでヒコク宅にやって来た私達。本当に半日程何をしていたのだろうと思わない訳でも無いが、今はとりあえず、

「アサキは帰って来たかい？」

其の確認だけ先にさせてもらうことにしよう。

「え？　ううん、アサ君未だだよ？」

未だだった、何と言うことだ。

「アサ君が未だなのは未だ良いんだけど、チカちゃんが未だなんだよね」

傘を差しながら、ユウヤが心配そうに表情を歪める。チカちゃん、というのは確か、ユウヤ達が飼っている猫殿のことだっただろうか。

「にゃん公が？」

「うん、遊びに出掛けたみたいなんだけど、雨で野垂れてないか心配で……」

未だ子猫だし、と言いながら、ユウヤはキョロキョロと辺りを見回した。

「雨宿りでもしてんじゃねぇの？」

「猫って雨宿りするの？」

「すんのか？」

「えっ、私に振るのかい其れ」

猫は雨宿りをするのか真剣に三人で講義をし始めよう――本来雨下でやるものでは無い――とした其の時。
私達の背後からキキッ！　と、何かが擦れる音がした。

「何してんの」

其れともうひとつ、今日初めて聞くことになった彼の声が、同時に響く。

「アサキ？」

「ちょっ、アサ君ずぶ濡れって！」

其方を見る私達、其処には勿論アサキが居て、綺麗に、清々しい程にずぶ濡れだった。結構強い雨が降っているのだから当たり前なのだが。
ユウヤが慌てて動き、自らの傘にアサキを入れる。

「風邪引いちゃうよ！？」

「だったらお前は何故外に。後お前等も」

やはり気付いていなかったのだねアサキ。君の後に付いていたが見失ったので此処に来た、とは言えず、私は苦笑い、カイリはすっとぼけておいた。

「だって、チカちゃんが帰って来ないんだもん」

「チカ？」

「そうだよ！　今頃雨に打たれてないか心配で心配で」

「ユウヤ、籠の持ってけ」

「え、俺の話無視で荷物持ちですか……？」

話を聞いてくれないアサキにうなだれながらも、ユウヤは渋々とタオルの掛かった籠の荷物を持ってあげることにしたらしい。……はて、今日付き纏ったアサキは何か買い物をしていただろうか？飲み物は買っていたが確か鞄に入れていたし――細かいところ見過ぎだとかいうツッコミは無しだよ――鞄は自ら肩から掛けているし――

「あぇ？」

「にゃあ」

ユウヤの間の抜けた声に思考を止めれば、ユウヤの伸ばした手の先、要するにアサキの自転車の籠の中にはなんと、一匹の猫が居た。タオルからもぞりと身じろぎをして顔を出したのだろう猫殿、もしか彼の猫殿がヒコク宅で飼われているチカ殿かい？

「チカちゃん！」

「居たから持ってきた」

「チカちゃーん！」

「嗚呼、聞いてないの」

濡れ猫殿を抱き締めたユウヤにもう言葉は通じないらしく、アサキはそそくさと自転車を自宅に入れ始めた。

「にゃん公探してたのか？」

「ううん、たまたま見つけただけ。家寄ってくならチャリ入れれば」

猫殿との接触があったから遅くなった訳か、納得さ。にしてもアサキ、飼い猫をしかと助けるなんて流石だね！　たまたまであってもやはり其れでこそアサキさ！

私達は自転車をヒコク宅の屋根下に置かせてもらい、そのまま自宅にもお邪魔することにした。

特に何をした訳でもないが、何となく楽しい追跡ごっこだと思えば良いかな！　ははっ！

――漠然とし過ぎだとか言ったら、世の中負けなのだよ。

387＋口ではどうにもなりません。

「アサ君、準備！」

「良いよ明日で」

「前日にして足りないものあったらどうするの！」

「フウカ先輩に頼む」

「お、おお……反論が出来ない……」

ユウヤでっす！　明後日から部内合宿だっていうのに弟が準備しません！

「第一、部活の合宿っつったって、宿題とゲームあれば其れで大丈夫じゃん」

「お前の衣食住はゲームで完成するの？」

恐ろしいこと此の上ない思考回路なんだけど……！

現時点でがっつりゲームしかしてないアサ君、土日前にうきうきと準備した兄の弟とは思えないね！！　――俺のことだけど！

「勉強合宿だっていうから宿題やらないでおいたんだから、何もやらなくて良い分ゲームするだろ普通」

「いやそうだけどね？　でも出掛ける前の準備ってやっぱり大事じゃないかな？」

「え？」

「後俺も明後日の為に宿題やらなかったんだって言ったら怒りますか」

「――あ？」

「声のトーンが違うよ怖いよ！」

俺が夏休みの宿題を此の時期までやらないのは何時ものことですね分かります！　だってやろうやろうと思っててもすーぐ飽きちゃうんだもん！　続いて漢字二問かな！

「終わらせろよ、」

「わ、分かってるよ……？」

「言ったな？　遊び倒したら残りの休み無いと思えよ？」

「……」

「目ぇ合わせろやコラ」

画面ばかりを見ていたアサキが俺を睨んで来るものだから、つい左斜め上に視線を逸らした。ほ、保証は出来ないから返事は出来ないなぁあははは。

何時まで経っても視線を合わせない俺に、アサ君は溜息を吐いてゲームに戻っていった。

……あれ？　俺がアサ君に準備しろって言ってたんだよね？

「アサキ、で、準備は？」

「だから明日――」

「ループ！　話がループ！　其れかデジャヴ！！」

最初から何も進んでないよ話！　びっくりしたっていうかびっくりした！

「デジャヴなんて言葉知ってたんだ」

「其れくらい知ってるよ！！　馬鹿にしな……馬鹿だから仕方ないか」

「切替早ぇよ」

我ながら学力の無さ云々は良く分かってるし、馬鹿にすんな！なんて言える訳が無い。テスト順位だけでも弟と何位差あると思ってんだ……！

けど、今はそんなことじゃなくて、だ。面倒臭がりというよりは本当明日やるっつってんだろ、なアサキに何を言えば今から準備を始めてくれるだろうか。もし何かあったとして、困るのはアサキだから気にしなきゃ良いって言う人も居るだろうけど、――俺が心配性なんだから仕方ない。

お忘れな方もいらっしゃるかしら、俺の優先順位のトップは基本アサキだよ悪いか。

「明日困っちゃうよー良いのー」

「良いって、困ったらそん時」

「いきあたりばったりやめようか」

「僕を信じろ」

「こういう時にそういう格好良い台詞出してきちゃ駄目だからね？」

其の気にならないと適当なこと言うんだから此の子ったら！

此の後俺が何を言っても動かなかったので、仕方ないから俺が鞄引っ張り出してきて勝手に無いものが無いかチェックしておいた。

「本当世話の掛かる子なんだから！」

「お前が勝手に世話してるだけじゃね」

……否定は出来ない。

３８８＋夏の合宿編。／一日目

「夏……だな、」

「夏……だね」

ユウヤです、目の前が海です、やべぇテンションが上がる！

「おら、カイリユウヤ！　遊びに来ただけって訳じゃ無ぇんだからとっとと荷物運べ！！」

カイト君と二人で真剣に海を眺めていたのに先輩ってば何を言うんだか、海に来たんだから先に遊ぼうよ！

と、いうことで。俺達ＧＣ部の面々は部内合宿という名のタダの遊び合宿にやってきました。先輩達曰く勉強合宿の一環で、ってことらしいけど、

「海に来たのに勉強なんて、俺様達がする訳無いのにな！」

「だよねー！」

俺達がそんなことを自主的に行う訳が無いのでありまして！！！！

「――もう一回言ってみ……？」

「だから、海で遊びたいから勉強は――げ、」

「あ、アサ君」

「良いから二人共、遠慮せずさっきと同じこと言ってみろよ」

「――べ、勉強が先だよなっユウヤ！」

「だよねっカイト君！」

――という話は、急に背後に現れた弟の笑顔によって早々に前言撤回された。

遠くから後輩二人の「弟なのにあっ君先パイのが強いんだなあナツメっち」「……前から、だと、思う」なんて会話が聞こえたけど、お兄ちゃんはめげないんだから……！！

合宿は全部で五日間。五日間の内で三年の先輩達はアマギリ君に勉強を教わるらしく、俺達二年は――とんでもない量の――宿題とその他苦手教科の補講をさせるとか何とか。一年二人は多分宿題でくたばるだろうからと特別何も無いけど、やる気があるなら何かしら教えるよっ！　とアマギリ君は張り切ってた。学校側任意の合宿って訳じゃあ無いからアマギリ君は来なくても良かったんだけど、先輩達が頼んだら喜んでついて来たみたい、其処は流石アマギリ君。

ちなみに確認で言っておくけれど、宿泊先はフウカ先輩の別荘です。あまり派手でないところを選んだらしいけど、海の見える家ってだけで相当だよね？　そして俺的には別荘の派手さよりも、迎えの車が高級車だったことに気を遣って欲しかったかな。一般住宅に

高級車って超怖かった。

「――さて、」

各々荷物を室内に運び終わってから、皆が揃ったリビングルームでハヤ先輩が普段通りに声を発する。

「先に言ってある通り、今回の目的はあくまでも勉強だ。フウカからはそれぞれ好きなように施設を使って良いと聞いている、皆、海に面した部屋ばかりだ、好きに勉学に励むように」

第一声其れですか、ストイックにも程があるよう。

「――だが、目的は目的でしかない」

けれど、我等が生徒会長はやはり違っていた。

「俺達は人間であり、煩悩の数は知れたものではない。限度をもって飽きた時は好きなように過ごせ、何せ俺達はＧＣ部だからな」

「流石先輩！」

「生徒会長！」

「部長の面目無ぇな」

「確かにオレも思いますわさっちゃん先パイどんまーい」

「ちょっと其処！　人の悪口になってんだろ！？」

皆色々言ってるけど、うん、何だか楽しみだなぁ！

389＋夏の合宿編。／一日目2

「先パイ先パイ先パーイ誰でも良いから英語得意な先パーイ」

「カイ君呼ばれてるよ」

「カイト君頑張って」

「アンタ英語しか出来ないんだから行って来なさいよ」

「はぁ？　お前、一年の英語くらいならお前等だって出来んだろうがよ……」

引き続きユウヤだよっ！　という訳で早速宿題会と洒落込んでるよっ！

三年の先輩達は別の部屋で半授業体制で課題やっているらしいけど、俺達は宿題やるだけだから皆で集まってやってます。十分に一回の割合で少し離れた所の一年ズが騒ぎ出す――無論騒ぐのシノ君だ――けど、だったらもう少し近くでやれば良いのにね？

「カイト君」

「あん？」

「ちなみに俺は一年のでも分からないよ」

「まぁ、お前に期待はしてねぇ」

ですよねー！！！！　――別に寂しくなんてないやい。
仕方なく立ち上がって、二人に勉強を教えに行ったカイト君。宿題俺とタイで全然進んでないんだろうに、ゼン君とかリョウちゃんが教えに行ってあげればいいのにとか思わない訳では無いけど、カイト君が良いならまぁ良いや。

「ていうか、五日あったってさぁ、宿題なんて二日あれば終わるよね」

「えっ」

「そうね。時間あるんだし、ゆっくりやれば良いんじゃない？」

「そーね」

「二日……えっ」

二日で此の宿題全部……えっ、無理。

「二人共、超人過ぎない……？」

「あははっ、ゆっ君の場合は一日あれば終わるんじゃない？」

「……一日？」

「そ。――夏休み最終日なら」

「確かに！」

ちなみに其の場合は終わるんじゃなくて終わらさせられるんだけどね、アサ君かマヒル兄に。そして俺が焦り過ぎて泣き付いて手伝って貰うっていう。

「宿題なんて早めに終わらしちゃいなさいよ……」

「リョウちゃんってば馬鹿だなぁ、其れが出来たら俺じゃないって」

「アンタ生物二度と教えないからね」

「すんみませんでしたー！！！！」

生物だけは堪忍して下さい！！　アサ君もゼン君も取ってないんだから頼れるのリョウちゃんしか居ないんだから！！！！

「リョウちゃん俺を殺す気だね！？」

「お、大袈裟過ぎるわよ！！」

「――つーか、勉強飽きた」

カラン、と。

勉強に入る前にフウカ先輩が皆分持ってきてくれた、麦茶の氷が

揺れ動いたのとほぼ同時にゼン君が呟いて机に項垂れた。普通の人なら今ので気付いたと思うけど、勉強始めたの氷が溶けてないくらいだから数十分前なんだけどね。

「……ちょっとアンタ、未だほとんど進んでないでしょ！？」

「んなこと言ったって飽きたもんは飽ーきたもん、ゼン君早々に離脱するー」

「ええっ、ゼン君良いなぁ！　俺も離脱したい！」

「俺だってしてぇ」

「さっき二日で終わるって言ってたの誰よ……」

一年ズの元から帰ってきた――というか近いから会話は聞こえてるんだけど――カイト君と文句を言うものの、今俺達がやめることは恐らく、いや、絶対許されない。何で許されないかって聞くだけならタダだけど、『今やめる＝遊ぶ＝遊び癖がつく＝暫く手をつけない＝五日じゃ終わらない』という方程式が成り立つことを俺やカイト君以外で知っている人が監視しているからです。……うん引っ張る必要無かったね、アサキです。

「ゼン君はナツメ君達の相手でもしてるよん、二人は頑張って」

ゼン君はひらりと手を舞わせてノートもそのまま二人の方に行った。

「二人して英語苦手なんでしょ？　暇だしゼン君が付きっ切りで教

えてあげよか」

「え……先輩、は宿題――」

「我等がヒーローゼン先パイ！　是非教えて下さいナツメっちとオレじゃあ全然英語進まないやんなっちゃう！！！！」

……うん、泣き付かれてるしまぁ、其れは其れで大変、か。

そして少しは触れたけど、此処まで本格的にずーっと触れて来なかった監視官の話だけど。

「……」

「……アサくーん」

「……」

「……おーい」

「――……呼んだ？」

ずっと居たよ？　俺の斜め前に。――ヘッドフォン着用して。大分大音量ながら俺に気付いたアサ君は、片耳だけヘッドフォンをずらして俺を見た。

「うん、何でも無いんだけど呼んだ」

「何でも無ぇのに呼ぶなよ」

凄く面倒臭そうな顔されたけどね！

「だって、やっぱ皆でやるのってさ！　こう、わいわい教え合いながらやるから進むってのが勉強合宿の醍醐味じゃない！？」

「其れがどうした」

「あれ！？　伝わらない！？」

キョトン顔すな！！

「一人ヘッドフォン着用して黙々と進めるのは違くないかい、ってお兄ちゃんは言ってる！」

「音楽聞いてた方が数学進むもんで」

「ってあら良く見たらあなた何頁目！？」

好きな教科からやりたいのは成績は違えど同じだから、俺も数学からやってるってのに此のスピードの差！

「数学終わったら外す、以上」

「あ、はい」

其れだけ言って、再びプリントと言う名の恐るべき束にアサキは戻っていった。其の集中力ちょっとくらい俺に分けて欲しい。っていうかお前もう終わるよね、ちっくしょうこの頭脳の差が恨めしい。

「ほら、アンタ等も早くやんなさいよ」

「ふぁい」

「口五月蝿いババァになりそうだよな、リョウコって」

「何ですって!?」

「あんまし五月蝿ぇとアサキに嫌われんぞー、五月蝿ぇの嫌いだからなぁ？」

「――――……！！」

リョウちゃんに効果抜群である。

仕方ない、そんなことなど露知らないアサキを見習って、俺ももう少し頑張るとしましょう。

嗚呼、勉強嫌い……。

390＋夏の合宿編。／一日目3

アサキです、疲れた。
何に疲れたのかと聞かれると、無論宿題なんだが。海行きてぇだの遊びてぇだの騒ぐ馬鹿は全力で無視して――音楽聴いてたって普通に聞こえるっつーの――黙々と進めていたら、僕の半分以下も進んでいないであろう宿題の一部を終わらせた奴等はとうとう飽きて、

「アサ君、休憩所望！」

「外行こうぜ外！！」

とか叫び出したから仕方なく許可した。三時間――保った方だろこいつ等にしちゃあ。

「先パイ先パイあっ君先パイオレらも休憩したいですよ！　なぁナツメっち！」

「え……俺は別、に――」

「はい休憩！　外行って遊ばないとねナツメっちー！！」

そして先輩がそんなだから後輩も折れた。そして尋ねたなら少しは聞いてやれよシノノメ、其れと僕に許可を取る必要は無いはずなんだが。
まぁ、僕も多少疲れたし休むことにする。ゼン君は何時の間にか其処ら辺で寝転がってたし、カイトも英語は進んだみたいだし――要はうちの身内だけろくに進んでないってことなんだが本人は気に

してないんだろうな。

「やっぱり涼しい環境って宿題も進むものよね」

「リョウちゃんの家クーラーは？」

「昼以外はあんまり付けないようにしてるのよ、アンタ達は？」

「少し目を離すとにゃんこが干乾びそうで怖いから、リビングだけ付けるようにしてるかな」

猫って干乾びたっけ。

そんな僕の疑問は余所に、休憩だからと此方にやって来たムラサメとシノノメ。寝転がってんのかと思いきや本当に寝てたらしいゼン君を覗き込んで何やら楽しそう（楽しそうなのはシノノメだけだが）だけど、外に行くなら起こしてあげた方が良いんじゃないのかな。

「海があるなら海に行くべし！」

「おういえすっ！　行こうぜカイト君！！」

「ちょっ、アンタ達休憩とか行ってもう絶対やる気無いでしょ！？」

「ほーれリョウコも行くぞ、今回の為に水着買ったんだろ？」

「は！？　な、な、何で知ってんのよアンタ！！！！」

「お前の行動くらい馬鹿でも読めんだよざまぁ」

「凄いなカイト」

「何せこういう時じゃないと女として見て貰えないからな」

「……誰に？」

「バッ……ロクジョーカイリィいいいいい！！！！！！！！」

「おっと口が滑った、――ってリョウコ怖ッ！　お前何振り上げてんだよぎゃあああああ！！！！！」

「えぇ！？　俺まで被害受けてるんですけど！？　ちょっ、うわあああああ！！！！！」

「カトウまであんなに張り切って、そんなに海が楽しみだったのかな……」

「……あっ君、其処まで来ると最早罪だよ」

あれ、ゼン君が起きた。

カトウが教科書文房具その他諸々を振り被って投げ、其の被害に遭うユウヤとカイト。三人は一足先に部屋を後にしてしまった。

「おはようゼン君」

「ん、おっはよん。で？　もう遊びに行くの？」

ちらりと時計を見てそう言ったゼン君。「まぁ、頃合だよね」なんて苦笑も足されたけど、あの二人にしてみれば上出来な勉強時間

だから僕は良いと思ってる。

「折角近くに海があるなら少しくらい泳いだって文句無いと思うっすオレ！」

「まぁね。でも、ゼン君ぶっちゃけると其処まで泳ぎ得意でない」

「ゼン君って結構使えないね」

「あっ君、もう少しオブラートに包もうか」

高いところ駄目だったり泳げなかったり――本人曰くカナヅチな訳では無い――、中身がへっぽこってどういう。

「ね、ね、先パイ達も行きましょうよう！　折角なんだから泳げなくったって行った方が絶対お得だって！　なぁナツメっち？」

「え、……うん」

「ほうらっ！　ナツメっちもこう言っていることだしこうなったら行くっきゃない！　行くっきゃないってそりゃそうさー！！」

「え、あ、シノノメく……え？」

そうしてノリに負けて意見を変えざるを得なくなったムラサメは、何時でもハイなテンションで我が道を行くシノノメに連れ去られていった。

「元気だねぇ……」

「たったひとつ下なだけだよゼン君」

寝起きは関係ないだろうが年老いたようなことを言ったゼン君は窓の外を見る、つられて僕も見たけど、未だ誰かの人影がある訳では無い。其の内きっと、馬鹿みたいに盛り上がった馬鹿が現れるんだろう。同じことを思ったのだろうゼン君は、「行くだけ行きますか」と、呆れるように言って笑った。

先輩達も終わったかな、声を掛けてから行こうか、とだけ、僕は思った。

391＋夏の合宿編。／一日目4

夕飯だよユウヤでっす！

「お前達、結局あれから戻って来なかったろ」

苦笑するハヤ先輩にそう言われ、俺とカイト君は自信満々に頷いた。リョウちゃんなんかは罪悪感なんだか分からないけど落ち込んでる、良いじゃん一日目からそんな頑張らなくたって！

「明日から頑張りまーす」

「俺もー」

「分かってるよ、終わらなかったら酷いぞ？」

何が酷いんだろうハヤ先輩ったら！　そんな甘いマスクで言われたって怖くないんだから――

「――アサキが」

「「頑張ります」」

怖い、多分怖い。今までの経験的に反射で返事をした俺とカイト君だった。

「先パイ達はずーっと勉強してたんで？」

話の的であるアサキは夕飯運びを手伝っている為――こういう時だけ気遣い出来過ぎてお兄ちゃん泣きそう――聞いていなかったらしい。俺達と同じく席待ち組のシノ君は隣のフウカ先輩にそう尋ね、フウカ先輩はこくこくと数回頷く。

「教え方が上手だから、長くは感じなかった」

視線の先にはアマギリ君、流石頭良いだけあるよ。

「ん？　そんなことないよっ！　皆が頭良いからスラスラ進められるだけ！　僕なんて要らなかったんじゃない？」

「そんなこと無いですよ、とても助かっています。大学四年の夏休みなんて貴重なお時間を費やして頂いてるんですし、彼等と遊びに出掛けたりして下さいね」

「ありがとさーん、でも大丈夫だよ？　もし遊ぶなら三人も一緒のが良いし。皆でねっ！」

アマギリ君は極上の笑顔を浮かべてそう言った、やっぱり全然変わってないなぁ。俺の記憶の中に居たアマギリ君は高校生で、マヒル兄の変わった友達としか思ってなかったんだけど。

「はいはーい、話は此の辺にして夕飯としましょ」

そして、そんな話していれば。ウェイターさんみたいに皿を運んできたゼン君にそう言われ、一瞬皆が唖然とする。

「うわぁ、ゼン凄ぇ」

「相変わらずだな……お前」

合宿とは言うけれど、炊事洗濯は基本俺達が自分でやらなきゃいけない。ローテーションで二人ずつっていうことで、初日はゼン君とリョウちゃんが担当だった――のは、良いんだけど。

「ユウヤ並」

「下手すりゃユウヤ以上だな」

「私やること全然無かった……」

運ばれてきた料理は、何と言うか――イタリアン？　風？　一緒に戻ってきたリョウちゃんの口ぶりからすると、ほぼゼン君がやりましたってことだよね。

昔馴染であるサチト先輩もそう言っているから元から得意だったんだろうね、今更ながら料理得意だったんだなぁ、と俺びっくり。

「俺ってば何でも出来ちゃうもんだからねぇ、さっすがゼン君☆」

「流石っすゼン先パイ……！」

ゼン君信者と書いてシノ君も騒いでる――嗚呼、其れは何時ものことだった。皆慣れてるから、大抵のことならゼン君をスルーするんだけど、今回ばかりはサチト先輩以外本当に驚いたっぽくて口々にゼン君を褒め称えていた。

「超美味そうじゃねぇかよゼンコルァ！！」

「合宿って感じはしないな、サチトは知ってたのか？」

「まーな」

「ま、冗談は良いとして、俺が出来るのは料理だけよ。洗濯とかは怠くてやってらんねぇっての。――まぁゼン君器用だから何だって出来ちゃうオールマイティっていうか？」

『いっただっきまーす』

「嗚呼、其れは聞いてないのね」

冗談は良いとしても自慢入っちゃうところがゼン君と書いてナルシストらしいよね！

「凄いなぁ、俺あんまりイタリアンとか作れないからなぁ」

「そうなの？　ゆっ君なら何でも作れるイメージあったよゼン君」

「マヒル兄ならね」

「あー、高校の時に色々作って貰った覚えある。マヒルって高校からああだったけど、今会ったら料理スキルとかもっと上がってたりして」

くすくすと楽しそうなゼン君にそう言われ苦笑で返す俺、アマギリ君は思いに耽り出したけど、……んー、マヒル兄の場合上がったのは料理スキルではなくて家事スキルかと。

「――というかさ、俺今思ったんだけど、アマギリ君とかアサキも食事当番入ってるんだよね？」

少し違うことを考えていた結果、ふとそんな悍ましい事実に気付いた。

「？　そりゃあね、僕だけ作らないなんてそんなことは――」

「いやっ！　だってアマギリ君に作らしたらキッチンとんでもないことに……！」

「大丈夫だよユウヤ！　僕だって昔の僕じゃあ無いよっ！」

そんなにキラキラとしたオーラ纏われても既に様々なドジっ子ぶり目の当たりにしてるからね！？

「――包丁だけは、落とさないようにする」

「アサキお前、其のレベルからなのか……！？　……ちょっと待て俺お前と明日食事当番だぜ！？」

一足先に夕飯食べ始めたアサキは、フォークを指先で持ちながら呟いた。戦いたのはサチト先輩、本当にドンマイとしか言えないよ俺。いざとなったら俺が応援に行くっきゃないだろうけど、宿題やれって追い返されそう。

明日から本当どうなるのかな、そう思わない訳ではない。でも今はとりあえず、冷めない内に美味しそうなご飯を食べよう――其れ

だけを思った。

俺ってば懸命！

392＋夏の合宿編。／二日目

「――って訳、分かった？」

「……うん？」

「え？」

「ユウヤ、どれくらい進んだん？」

「えーと、一頁と二問」

二時間掛かったけどね、ユウヤだよ！

数学も終わってないまま、絶対終わらない生物の宿題を先に始めました。リョウちゃんに手伝って貰ってるんだけどね！　なのに全然進まないってどういう。

「遅ぇな」

「カイト君だってそんなに進んでない癖に！」

「あっははは」

一日しか経ってないのに断トツで進んでないのが俺達である。ゼン君なんて昨日、あんだけサボってた癖に此の二時間で普通に抜いてったからね！

ちらりと隣を見れば、頬杖突きながらさらさらと宿題のプリントを解くゼン君が居て。黙り込んでやると早く解けるっていうけど本

当に早いらしい、……あれ、ゼン君もしかして其れもう終わるよね？　ちょっ、俺どんだけ置いてかれんの！

……っていうか、やっぱりゼン君は黙ってれば格好良いんだから黙ってればいい――

「ゆっ君」

「すみませんでした」

「え？」

こっち見ないで呼ばれたから心読まれたのかと。キョトン顔で瞬きされたから「何でも無いよ！」と返して、気になったことを聞くことにした。

「ゼン君、宿題何処まで進んだ？」

「んー？　あとー……漢字、……だけかな」

「「オンリー！？」」

カイト君とハモった。

「え！？　二時間で何をそんなに！？」

「だから言ったじゃない、ゼン君やる気出せば二日だって」

漢字は疲れたから明日にするわ、なんて言って、ゼン君は昨日よろしく横になっちゃった。くうう、俺だってだらだらしたいっていうか遊びたいのにいい。

「リョウコ、お前どんくらい終わってんだ？」

「ヒコクユウヤに生物教えてたから生物しか終わってないわよ」

「シノー、ナツメー、お前等はー」

「カイ君先パイとゼン君先パイのお陰で英語は終わって今もうちょいで謎い漢字練習みたいのが終わりまっす」

「俺は、数学が、未だ」

やべぇやっぱり俺断トツだ……！

「俺とユウヤ、マジ進んでねぇなぁ」

あ、俺達だった。

「やっぱり俺にはカイト君だけが味方だ！」

「はっはは！　違ぇねぇ！」

「やる気出ないんだから仕方ないじゃんかね！」

「そうそう、涼しい環境と美味い飲み物、おまけに遊ぶもんがあるのに勉強って、だあれがやるってんだよ」

「皆やってるんだけどねぇ」

「コイツ等には通じないのよ」

「俺もう遊びたい！　皆して宿題なんてやってないで遊べば良いんだよ！」

「そうそう、飯当番でアサキが居ない訳だしよ、サボってたってバレやしねぇっつーの」

「「……あ」」

「ん？　どうしたんだよ二人と……」

リョウちゃんにゼン君、入口の方を見て言葉を止めた二人を見て、カイト君も其方を見る。そしてカイト君まで止まったものだから、仕方なしに俺も見てみれば、

――真っ赤な刃先の包丁片手に、無表情に俺達を見ているアサキがいらっしゃった。

「あ、アサキ」

「やれよ？」

俺達の様子を見に来ただけなのか、はたまた昼飯作りで何らかの不祥事が起こったのかは分からないけれど。

「……え、ええとー、アサキ君？　何で包丁――」

「返事」

「「はい」」

アサキは其れだけ言って戻って行った、多分キッチンに。

「……やろう」

「……うん」

一気にテンションが下がった、そして身の毛が弥立った――そりゃ下がるでしょ……！――ので、満場一致（※二人）の意見を元に宿題を再開した。

「俺、あっ君の方見てくる」

「ええ、分かったわ」

あの包丁にはビビった、のと同時に何かあったのも分かったけれど、其れはゼン君に任せることにしよう。じゃないと本当に、あの

包丁の餌食になりそうなんだもん。

アサ君に包丁――洒落にならない恐ろしさだ。

392＋夏の合宿編。／二日目（後書き）

※恐らく適当に魚を捌いたからああなった。

393＋夏の合宿編。／二日目2

「――というのが、天下分け目と言われた此の大合戦だよ、分かったかな？」

ハヤです、……です？　畏まり過ぎた気がしなくもないが、普段の調子でやらせて貰おう。

現在の時刻は昼の三時、先刻フウカが持ってきてくれたフルーツジュースを目前に、俺達は勉強の合間の休息中。ちょくちょく入る休みは直ぐに飽きるサチトと、俺が倒れない為の配慮だというのはフウカの時折見せる生真面目さが物語っている。本当にすまないとは思うが、此処は黙って受け取るのが正しい判断であってるよな？

「……えっと？」

「……おかしいな……戦国時代って、歴史嫌いの子でも一番食いつくところなんだけど」

休息中――とは言ったけれど、他の教科は人並み以上に出来る癖に、歴史は滅法苦手なサチトは休息中にもアマギリ教諭の講義を受けているんだがな。関ヶ原の戦いなんて概要だけなら俺だって空でも言えるぞ、アマギリ教諭は事細かに説明し過ぎだとは思うが――小早川秀秋の裏切りの話をそんな細密に話してもテストには出ないと思う――、物語風に語ることでサチトの興味を引く作戦なのだろう、と俺は思う。――まぁ、其れがサチトに通じていれば、こいつは疾うにテストの成績一桁入りしているはず。

「サチト君って、小説とか読まないタイプ？」

「……目次で飽きるタイプ」

「げ、現国はなんで得意なのカナ？」

「問題文先に読んでから答えを本文から探すんで読んでません」

「駄目だなお前」

「本当に駄目」

「うるせぇなお前らはよおおおおお！！！！」

ばったーん、と机を盛大に叩いて狂乱するサチト、此れに慣れっこな俺達っておかしいのか疑問だが、此れといった反応はせずに若干揺れ動いたガラスコップを手に取って飲み物を頂いた。

「サチトの弱点、長文が読めない」

「じゃあ何で英語は出来るの……？」

「英語も問題から読むし！」

「長文が読めないというか、物語を頭の中に展開出来ないんだろう」

「だからサチトはＲＰＧが苦手」

「確かに、いっつも次行く場所分からなくなってるしな」

「お前ら俺を虐めて楽しいか……！」

一番不可思議そうに考えているだろうアマギリ教諭にまぁまぁと往なされ、サチトは渋々と俺同様に飲み物をかっくらっていた――俺はそんな荒々しい飲み方は断じてしていない――。

「苦手は誰にでもあるものだよっ、元気出して！」

「えー、じゃあアマギリさんにも苦手あったんすか」

「そりゃああっ……たよ！」

不可解な間だな。

「じゃあ何だったんですか？」

「……実技科目」

先程まで満面の笑みだった表情を若干曇らせ、アマギリ教諭は頬を掻いた。勉強を見てもらった限り苦手など無い風だったが――時折イロイロやらかしていたが――、そうか、実技が苦手だったのか。……俺も其処まで得意では無いけどな。

「家庭科とか体育とか、もう何させても大変だよ僕は」

「何かどっかの誰かと被るな」

「サチト、何故俺を見ている？」

「……」

「今お前も見てたなフウカ」

見てはいなかったが視線の逸らし方があからさま過ぎて気付いた、お前達俺を何だと思っている。

「料理するだけで体調崩す奴見て何が悪い」

言い返せなかった。

「頭良い人って皆そうなんすか？」

「えっ、皆……じゃ、無いなぁ。マヒルなんて超完璧だったし」

ほんの数秒考えてからそう言って笑ったアマギリ教諭。マヒル……というのは確かユウヤとアサキの兄君だったか？

「頭脳明晰容姿端麗、正に才色兼備だったね。才色兼備って普通は女性に使うけどまぁ細かいことはいっか！　ともかく、完全無欠のパーフェクト人間って感じだったよあのＧＣ部のＯＢは！」

「へぇー……――えええええええ！？」

「えっ……？」

ただただ感嘆したサチトが絶叫、実は俺も驚いたが声は出なかったな。

アマギリ教諭は何やらキョトン顔、一体何に驚いているんだと言っている風だ。

「双子の兄貴もこっ、此処だったのかよ！」

「知らなかった」

「知らなかったの？」

「知りませんでした」

ユウヤもアサキもそんなこと一言も……。

「元は僕とマヒルが二人で作ろうと決めた部活だからね」

「そうだったんですか、」

「凄い」

「凄ぇ」

二人の一言――又は二文字――感想にアマギリ教諭は照れたように笑った。

そしてそれからちらりと壁時計を見遣り、丁度良い時間だったの

か手をひとつパンッと叩いた。

「さて！　そろそろ続きと行きましょうか！」

此れが終わったら今日は終わり、頑張って！　――と。明るい笑顔でそう言われ、俺達は各々ひとつ、頷いた。

さて、もうひと頑張りといこうか。

３９４＋夏の合宿編。／二日目３

リョウコです、もう夜なんだけれど何となく寝れなくて。夜風にでも当たろうか、なんて洒落たこと考えて勉強で疲れているだろうフウカ先輩を起こさないように部屋を出た。――のは良かったんだけど。

「……部屋、何処だったかしら」

洋館チックな廊下を歩いてみたけれど、完全に部屋を忘れてしまったわ。生憎携帯は部屋だし、扉大きいし暗いし怖いしどうすれば良いのよ本当！

――かたん。

「！？」

つい身体が跳ねたわ……！

な、何！？　何の音！？　べ、別に怖くなんて無いんだ……けど、――何の音なのよ！！

『　――よ、うん――　』

怖くない怖くない怖くない怖くない怖くな（※エンドレス）
声がしたなんてこと無いわよね！？　そんな訳無いじゃないこんな夜中に！！！！　ええそうよっ、私の気の所為！　気の所為なんだからねリョウコ！！！！

――ガチャ。

「申し訳ありませんでしたあああああ！！！！」

「リョウコか？」

扉が開いたことで、色々限界点を越えてしまった私は叫んだ、ええ、叫びましたとも！　このまま泣くかと思ったわよ、聞いたことのある此の声が聞こえていなかったら泣いてたわよ！！

「え、……ハヤ先輩？」

「嗚呼、俺だよ」

な、な、何だ、本当に良かった……！
扉から顔を出したのは、普段掛けている眼鏡を外したままのハヤ先輩だった。私の様子に気付いた先輩はくすくすと笑い、「驚いたか？」なんて意地悪く尋ねてきた。

「先輩！　驚かせないで下さい！」

「そんなつもりは無かったんだ、足音が聞こえたから様子を見に来ただけで」

そりゃあ分かってるですけど、ハヤ先輩がそんなことするはずは無いし、分かってはいるけど一度言っておかないと落ち着かなくて。

「で、何してるんだお前」

「え、あ、其の……」

迷いました。率直に言ったら、一瞬キョトン顔になったハヤ先輩が後にははっ、と笑みを零した。

「親に電話してたんだ、部屋で掛けるとサチトを起こすから」

身体のこともあって心配性なのだと、ハヤ先輩は溜息交じりに呟いた。

「サチト先輩なら、一度寝たら起きなさそうですけどね」

「ああ見えて眠りは浅いみたいだ、入れば深いとか、どれだけナイーブなんだあいつは」

部屋まで送ってくれるというハヤ先輩に次いで歩きながら、たわいない話をする。こうやって一対一で話す機会はあまり無いけれど、ハヤ先輩なだけあって凄く話しやすかった。

「ほら、此処だ」

「本ッ当すみませんでした……！」

「良いさ、此処は確かに分かりにくい造りになっているしな」

そんな分かりにくい造りの中、眼鏡すら無しで他の人の部屋すら把握しているアナタが凄過ぎます。

「宿題は終わりそうか？」

「あ、はい！　馬鹿二人を除けば、明日には！」

「馬鹿二人で通じてしまうのが恐ろしいところだな」

元気良く言った私に、ふっ、と笑ったハヤ先輩。其れだけを聞けば長居するでもなく、「じゃあな、早く寝ろよ」と私に手を上げた。

「あ、はい。お休みなさい」

「嗚呼、お休み」

ハヤ先輩の後ろ姿、其れだけなのになんとなく、……格好良かった。あのヒコクアサキですらがストイックで格好良いと言うくらいだものね、当たり前か。

別に何がどう変わった訳では無いけれど、私はああいうタイプの人を格好良いと思う。

……なのに何で、アイツなのかしら。

なんて。

疑問には思うけれど、――別に後悔とかはしてないわよ？　……なんてね！

３９５＋夏の合宿編。／三日目

夏の海辺からこんにちは、アサキです。
三日目の昼過ぎ、一足先に宿題全部終わらせた僕は午前はずっと寝ていたんだけど、海行くからと言って起こされた。ユウヤやらカイトやらが起こしに来るなら誰が行くかの一点張りで凌げる（※確立は２０％）のにあの野郎共知恵を付けやがったのか、起こしに来たのはムラサメとシノノメだった。

『あっ君先パイあっさでっすよー！　起きて起きて起ーきてー！　皆で海に行っきまっしょーう！』

『……もう朝じゃ、無いですけど』

後輩寄越すなんてあいつ等も知恵が付いたものだ、とか寝起きの僕は思った訳だが、今思えばあいつ等宿題が終わってないから自分で海行きたいとか言えなかったんだろうな。まぁ来なくて正解だったが。

「へいユウヤ！」

「おうらいカイト君！　とりゃあ！！」

――バシンッ！

「ひゃあ！！」

「っと！　……うっわ外した」

「へーい俺達の勝ちー！」

「ッたり前の結果だけどな！　俺様が居て勝てない訳は無ぇ！」

「アンタ達本気過ぎんのよ！！　私が居るの考慮してくれてる！？」

「勝負に考慮なんて言葉必要無いね」

「二人共考慮って字書けるの？」

「「……」」

遠めに見える僕を抜いた二年四人は、海に入らず其処でビーチバレーをしている。水着姿四人中約二名が本気らしく勝負の勝ち負けは決まりきっているが、頭の具合は完全に負けてるな、と。っていうか砂浜で遊ぶのに水着になるのか、ゼン君なんてパーカー着てるし普段着で良かったんじゃないの、此の後泳ぐってことかな。

「るんるんるー、んーるるんるーん、る！」

「し、シノノメ君……何作ってる、の？」

「コロッセウム！」

「コロッセ……？　え？」

そしてもう二人、一年の二人は僕のまん前で砂浜遊びをしている。シノノメが何処かの円形闘技場を作ろうとしてるらしく、ムラサメはマックスキョトン顔だった。ちなみに敢えて言わないが無理だと思うんだけど……まぁ、作るというのだから夢を壊さないでおこう。

――バヒュン！

「ぐふっ！！」

「うおおおっ！？　ユウヤ大丈夫か！？」

ただの城になりつつある某円形闘技場から目を離し、声の方に視線をやる。何時の間にかうちの兄がぶっ倒れていた。

……見るに、ゼン君の殺人アタックが炸裂して砂浜に脳天からダイブした模様。ビーチボールなのに大袈裟な。……ん？　其れともゼン君の方の威力がおかしかったのか？

ばたばたと歩み寄る面々――無論僕は傍観だけど――が集まる前にむくりと起き上がったユウヤだったが、「ふぁあ」と不可解な一言を残して再び背後のノックアウトした。砂浜なんだから頭打っても大丈夫だよね、何してんのあいつ。

「だ、大丈夫大丈夫！　立ち眩んだだけ！！」

「ごっめんゆっ君、顔面は無いよね」

「狙ってやったんじゃないんだから良いよ！　俺丈夫だし！」

「――……」

「……おーいゼン、視線が飛んでってんぞ」

「わざと!?　アンタえげつないわね!!」

凄いコントロールだなぁ、ゼン君。（※暢気）

「おーい！」

其れから数時間、途中から皆して建造物を砂で建築し始めた頃。合宿所の方から三年三人と、トウマがのこのこと歩いてきた。此方に手を振っているのはサチト先輩、其の手には大きな西瓜がぶら提げられていた。

「あ、サチ」

「西瓜持ってきたぞー、割ったりはしないが皆で食おうぜ！　――って、待てお前等此れ何？」

いち早く気付いたサチト先輩が苦笑を浮かべてそう言う、此れ何、と聞かれても建造物としか良い様が無い。僕は作……造ってないけ

れど。

「上手」

「フウカ先パイ本当ですかやったねオレが最初に作り出したんだもんねやっほーい！」

「良かったね、シノノメ、君」

しゃがみ込んだフウカ先輩がそうやって褒めるから、シノノメが万歳して喜んでいる。ムラサメが保護者になってる気がするのも気にしたらいけないんだろうな。

「よっし、じゃあ西瓜切るねー」

「ほらお前達、アマギリ先生が切って下さってる間に手、洗って来い」

『はーい！』

お前は大丈夫そうだな、と笑うハヤ先輩にひとつ頷き、僕はどたばたと手を洗いに走る後ろ姿を見送った。

「終わったら宿題の続きだかんな」

皆が行ってしまってからくくっ、と笑みを零したサチト先輩。時間的にはそういうことになりそうだな、とは思ったけれど、まぁひとつだけ言わせてくれ。

水着まで着てんのに――海入んねぇの、お前等？

３９５＋夏の合宿編。／三日目（後書き）

アサキさんだけ普段着＋パラソルの下だと思っていただければ良い（何が）

396＋夏の合宿編。／三日目2

「良い？　だからこっちが繋がったらコレがこっちに――」

「ふぇ？　おぇ？　あぅ？」

「アンタの理解力の低さに改めてびっくりよ私！！」

「あ、ナツメっち其処！」

「え……？」

「そっちだよ、あ、此処此処」

「今ゼン君が立ってるところ」

「あ……此処、ですか？」

「そうそう！　さっすがナツメっち！」

カイリだ。

さっきまで海で遊んでたけど再び勉強のターンが来てしまった。

って言っても勉強なんてしてるの俺とユウヤくらいなんだけどな。

他はみぃんな宿題終わったっぽくて、リョウコは未だ終わってねぇみたいなんだがユウヤに生物教えるのに忙しいみたいだ。生物に限ってはアサキもゼンもやってねぇから、リョウコだけが頼りって感

じ。ちなみに俺は物理だからもう嫌って程頭良い二人にみっちり教えてもらったから終わった、頭が痛過ぎる。

「わ、」

「お、出てきたねぇ大物！　狩りに行こうぜ！」

「もう狩りに来てる」

「あっ君クールにツッコミを入れるんじゃありません俺が可哀相でしょう」

「あっはっは！　あ、あっ君先パイそっちに行ったっぽいというか……えええええあっ君先パイ此の状況で採掘とか流石過ぎる！」

宿題終えた組は皆して携帯ゲーム機で遊んでるしよ……此れはあれだろ、新手のぼっちプレイだろコラ。そりゃ俺だってあと漢字だけだからユウヤよかは進んでるけど、こういう地味な作業ってのが俺は一番嫌いなんだっつーのー！！　しかも目の前の奴等はゲームだぜ！？　何此のお預け！　ふざけろばかやろ！！！！

「カイト、手」

「すんません」

やりますよ、やれば良いんだろ！！

「お、おおお、終わった……！」

――おおう寝てた。

時計を見る限り、寝ていたのはほんの一時間弱だったということは分かった。漢字書くだけなんて飽きることさせられたらそりゃ寝ちまっても仕方ないだろ、寧ろよく起こされなかったな俺。

「んぁ、ユウヤ終わったん？」

「生物はね！」

「……お前未だ残ってんのか……？」

「えっ、駄目！？　っていうかカイト君おはよっ！」

俺ですらあと此の漢字だけ……ってあれ、冊子が消えてる、何処に行った。辺りを見回してみれば其れは床に置かれていて、前のめって寝ていた俺が寝やすいようにどかしてくれていた様だった。

「ムサラメ君とシノ君が寝やすいようにってやってたみたいだけど」

「後輩の鑑よね、二人って」

唯一部屋に残っていたユウヤとリョウコにそう言われ、思わず後輩共を撫で繰り回したくなった。畜生俺はお前達が大好きだ！！

「……で、あの四人は？」

「「テレビゲームしたくなったからって部屋戻った（わ）よ」」

「……」

宿題終わった方々は余裕なこって！！

果てしなく参加したい俺だが今少し寝てしまったこともあって頁は進んじゃいない訳だ。今遊んでも良いけどそれじゃあまた明日やんなきゃだし、だったら今必死こいてあと二日遊んだ方が絶対良い。おしそうしよう、そうするのがベストだ！

「っし、俺は終わらしちまうからな！」

「えぇ！？　置いてかないでよ俺も頑張る……！」

「あはは、頑張んなさいよー」

夕方も近いし、飯までには終わんだろ！　余裕綽々なリョウコを恨めしく思いながらも、そう力んで漢字に取り組んだ俺だった。……俺達だった。

397＋夏の合宿編。／三日目3

「でもよ、シノはよく来れたよな」

ゼン君だよ、三日目の夜ともなると宿題なんて終わっちゃってる――一部は除くけどね――訳で皆でこんな時間（深夜二時）までゲームしてたんだけど。そろそろ寝るかぁ、と言ってお喋りに入ってからそう呟いたのはカイ君で、当のシノはキョトン顔で応えただけだった。

「いや、だってお前ほぼ飛び入りだったろ？」

「あーあーあーそういうことですかカイ君先パイ」

ぽん、とわざとらしく手に手を置いて、ゲームを片付けながらシノは笑う。

「お前、忙しいからとか何とか言ってたのに夏休みは本当暇なんだな？」

「別にオレが忙しい訳じゃないし夏休みは暇だし宿題は最終日にやる予定だったしタダだし蹴る理由が無かっただけっすよー！」

「……嗚呼、そう」

シノがうちに入ったのは夏休み中だし、確かにこの合宿は急っちゃあ急だったしな。とりあえず声だけ掛けてみてくれってナツメに

言ったら案の定『し、シノメ君来れるそうです……』なんてメールが返って来た訳で。……俺シノとメールしたこと未だ無いけど、どうせメールもテンションたっかいんだろうなぁ……ナツメとシノのメールなんて絶対温度差あるだろうよ、テンション均衡しろ、お前達。

「こーやって皆でゲーム出来るのも楽しいし！　ま、皆って言ってもあっ君先パイは寝ちゃってますけどねー！」

けらけらと楽しそうなシノの言う通り、あっ君は当にご就寝済。昨日までは何やかんやで起きてたんだけど今日はもうくたばった、寧ろ結構早めにくたばった。朝もギリギリまで寝てたのに寝れるって深夜でもゲームするオレにしては凄いと思うんだよね。

「うちの弟が夜寝てるのはもう何時ものことだよ」

「案外ユウヤも直ぐ寝んじゃねぇかよ」

「まぁねー」

そう言いながら欠伸をするゆっ君を見つつ、俺は苦笑しておいた。先輩達は――特にハヤ先輩なんかは夜は寝ないとだから勿論居ないし、サチがハヤ先輩を一人にする訳が無いし、で居ない。一、二年の野郎だけでゲーム大会ってか、あーあ寂しいこって。なんてね。

「あ、高校入ってから何も無かったから嬉しかったっすよ！　合宿！」

「そう、なら良かった――未だ終わってないんだけどね」

ついそんなことを言ったけど其れは事実で、宿題終わってもあと二日あるっていうこの合宿。三年組がどんな進みなのかは一切知らないんだけど、結構詰め込んでるみたいだから最終日くらいは休むつもりなんじゃねぇのかな、なんて考えてる俺。

「明日から存分に遊べると思うとうははははは」

「カイ君達、今日頑張ったもんね」

俺達がゲームしてる間も頑張って勉強してたってリョウコちゃんに聞いたし、明日明後日は皆で遊べるね。やっぱり皆で遊んだ方が楽しいし、今日頑張った二人もきっとそうやって思ってるから頑張ったんだろうな。約一名一人でも楽しそうなの居るけど、……まぁ、ゲームする時くらいは付き合ってくれるよね。

「皆で海行って皆で花火して皆で肝試しとかイイと思うなぁオレ！」

「あははっ、シノ君夏の風物詩全部潰すつも……え？　最後なんて？」

「え？」

先輩風吹かせて風物詩なんて言ったゆっ君の言葉と笑顔が一瞬で止んだところを見ると、ゆっ君は恐らく怖がりなんだろう。

「肝試しって夏ならではって感じですよね先パーイ？」

「そうだけどね……？　で、でもほら……ね、カイト君？」

「俺に振るなよ！！！！」

あ、此れカイ君も駄目だな。嘘吐けないなぁ、二人って。

「夏だからな！　何があるかどうかは分からないけどほら！　皆に聞いて、な！」

「そ、そうだよね！　うん！」

「ナツメ、お前怖いのは？」

「……？」

このままだと本当にやりかねないからちょっと確認の為に隣でのんびりしていた後輩に聞いてみたが、何故かキョトン顔された。逆に此の子は平気なのね、世界って難しい。ちなみにゼン君は全然オッケーだよ？　――人が何でもかんでも駄目だと思ったら大間違いなんだからね。

此れは皆に要相談、かな。楽しそうなことなら、俺は喜んでやるんだけどねぇ？

398＋夏の合宿編。／四日目

「って訳でアサキが鬼な」

「待て、全く話が読めない」

アサキだけど何鬼って。

最近人が昼まで寝てると容赦なく午後から遊びに参加させられるんだが此れは何故だ、っていうかえええと、何が何でこうなった。

「はぁ？　だってお前じゃんけん負けたじゃねぇかよ」

「じゃんけんは負けたけども」

「アサ君反射的に出しただけだよね絶対」

よく分かっている兄のことは放っておいて、だ。いきなり起こされ外に出されじゃんけん始まったら――そりゃ出すだろう、チョキとか。その所為で一発負けしたんだがな。

「皆暇だから外で遊ぼうってなってアサ君先パイも起こそうってなってかくれんぼしようってなった次第でして！」

「うんシノノメ、全く意味分からない」

意気揚々に答えてくれたのは嬉しいんだけど、何で高校生七人集まってかくれんぼしなきゃいけないの。

「面倒なことを……」

「おんやぁ？　アサキ君そーんなこと言って本当は鬼やりたくないんじゃないのかなー？」

「冗談なら許す、本気で言ってたら脳天飛ばすぞ」

「どうやってだよ！？」

「如何なる手段を使ってもだよ」

宿題が終わったカイトのテンションが普段の八割増くらいでうぜぇ、でも何か皆やる気みたいだし――そして何気にカイトの一言カチンときた――やってやろうじゃねぇか。

「数えるよ」

「おっ、やる気んなったかアサキ！」

「お前見つけたら叩き潰す」

「あれ？　此れって何時からリアル鬼ごっこ？」

「は？　かくれんぼじゃないの？」

「何でも無ぇよばっきゃろー！！！！」

「……それじゃあ隠れよっか」

ゼン君の一言で皆が散った気配がしたので、僕は其の場で海の方を身ながら数え始めた。

ふむ、かくれんぼか……言っておくが、――僕は本気だ。

「みっけ」

「ひゃあ！！」

カトウを発見した。場所は少し下がった岩陰。

上から覗いたからか、滅茶苦茶驚かれて若干バランス崩してたけど。

「ま、まさか私最初？」

「うん」

ちょっとしょぼくれたカトウ、だって単純な場所から探してるんだもん。

「あの馬鹿共がろくでも無い場所に隠れたのは既に知ってるから後回しにしてる」

「そうなの？　……っていうかアナタ達、中学の時もかくれんぼとかしてたの？」

「馬鹿はそういう遊びが好きなんだよ」

「……」

何度も何度も付き合わされたから覚えてる、何が面倒ってあいつ等こういう時だけじゃんけんやけに強いっていうことであり（っていうか僕が気を抜いてる時にじゃんけんを仕掛けてくるっていう）最初の鬼は何時も僕だってこと。――そして今更なんだけどかくれんぼの場合鬼って呼ぶの何か違和感あるよね。

「じゃ、他探してくる」

「ええ、いってらっしゃい、私は最初の場所に居るわね」

そう言って岩陰を覗き込むのをやめた僕。

さて、次次。

「どおおおおん！！！！」

「わ、……凄い、ね、シノノメ君」

「だろっだろっ？　っていうかナツメっちってばオレのことはシノで良いって言うのに何時までもフルのままなのね此の心の距離がオレは寂しいっていうかやろおおおお！！！！」

「え……あ、……気を付ける」

「うんうんナツメっちは其の謙虚さが売りっていうね！　オレそういうの嫌いじゃないから全然おっけいおっけい！　頑張れナツメっち！」

「うん……凄い、飛ばすね……」

「オレ此れすっごい得意なんだよねー！　夢は目指せ十切り！　――っておお、アサ君先パイ！　先パイ此れ何回出来ます！？」

「……お前等、遊びに参加してるっていう自覚ってものあるか」

「「……あ」」

違う水辺で水切りして遊んでる後輩二人をあっさり見つけた。自由だな、お前等。

「よう兄弟」

「えっ、アサ――ぐぁ！＄％＜べ＆ａｍｐ；」

「お、……」

警戒しているだろう方とは逆の方向から声を掛けてやったらユウヤが落ちた、――木から。

「――ってぇ！！」

「何してんの、馬鹿な癖に」

「びっくりしたの！　背後から声掛けてきたの君だからね！？」

最近視力低下に拍車は掛かったけれど、生い茂った木の上にユウヤが居ることくらい一瞬で見抜けた。けれどあいつは僕の視力が（ゲームのし過ぎとか其処らで）落ちてることを知ってるだろうし、高を括ったんだろう。ふははざまあみやがれ、屋根に登って後ろから声を掛けてやったわ。……どうやら僕もそれなりに楽しんでいるようだ。

落ちたユウヤを屋根の上から文字通り見下しつつ、腕を組んだまま辺りを見回す。

「あと二人、か……此の僕にかかれば不可能は無い」

「うわぁ……アサ君がやる気なんだけど……」

僕を見上げるユウヤの表情幸薄かったけど、僕は気にしないことにした。

「こんなところに隠れるなよ……」

「お、ハローあっ君、見つかっちゃった？」

其れから少し時間が掛かったが、ゼン君を発見した。場所はそうだな、……ほぼ岩壁おと言おうか。

「此れ絶対見つからないと思ったんだけど」

「ゼン君のことだから自分の苦手なところに隠れるかと思って探してた」

「いやんあっ君ってば俺のこと分かってるう」

ゼン君は猪突猛進に見えて結構頭を使うから（頭に血が行き過ぎてる場合は別）、こっちも滅茶苦茶考えてみたんだけど。

絶対に見つからない場所＝自分が隠れなさそうな場所＝自分の苦手な場所。ってな具合に辿って行ったら此処に着いた。最初は高いところかと思って高台にも行ったんだけど、其処には居なかったから凄い海沿いを探してみたんだ、案の定で助かった。

一歩踏み外したら海に落下してしまうような岩壁、しかしそんなところに座っているゼン君。結構度胸あるじゃないか。高所恐怖症で泳げないってもう本当駄目だと思ってたから。

「あっ君」

「いやごめん、何も考えてない」

「いや、何考えてても良いんだけどさ」

あくまでも笑顔で僕を見るゼン君。

「――座ったは良いけど立てない訳よ、どうすればいい？」

「――一回落ちれば良いんじゃない？」

さっきの撤回していいかな。

「本当に怖かったデス」

「だったらあんなところに隠れないで下さい」

ゼン君を救出してから拠点に戻る。砂浜で遊ぶ皆――未だ飽きないのかお前等――は此方を見て、中でもシノノメは「おーつかーれさーまでーす！」なんて手をぶんぶん振っている。

「あとは……ロクジョーカイリだけ？」

「カイ君先パイは手強いんだなぁうおおオレってばソンケー」

「カイ君って見るからにこういうことに全力を発揮しそうだもんね」

「そんなことは無い」

カイトが手強い？　何馬鹿ことを言ってるんだ皆して。
僕の言っている意味はユウヤが一番分かっているらしく、此方を見て楽しそうに笑っている。

「カイト君はねー」

「え、何々、カイ君がどうかしたの？」

「五分以内に見つけられるから、黙って見てれば」

僕は其の場にあった砂浜の石――誰かが持ってきたんだろうな――を拾って、手の中で弄ぶ。
皆は分かっていない風な顔でキョトンとしてたけど、……其れもそうか、僕が一切動こうとしないんだから。けど此れで良いんだ、ゲームが始まってもう三十分か――丁度良い時間だよ。

「――其処ッだ！」

「うおぅ！？」

カーンッ！

「しまった、外した」

数秒後、僕は持っていた石を投げた。無論、カイトが隠れていた、岩陰に向かって。

「コントロール落ちたな……ショックだ」

「どんまいアサ君！　距離あったから仕方ないよ！」

「ちょ――っと待て待て待てえええええええ！！！！！」

ユウヤのエールに納得してみたら、岩陰からカイトが出て来た。

……いや違うな。

「いわかげ　から　かいと　が　とびだした　！！」

「たたかう」

「戦わねぇよ！？　つーかアサキお前実は眠いんじゃねぇの！？　何かキャラ違くね！？　そしてゼンお前は乗っかんな！！！！」

「かいとくん　の　ほえる　の　こうげき」

「ユウヤお前もか！！！！」

はっはっはっは面白ぇ。

という訳で最後の一人、カイトも発見である。カイトはかくれんぼをやるといっつも移動する癖がある、一箇所に留まらないで、鬼や子の動きを見ながら移動するから見つけ難い――のは一般の人の意見で、僕からすればこいつ程軽い奴は居ない。本人気付いてないみたいだけど、今何人見つかってるのか絶対に見に来るんだよ。

だから其処に留まって、目を凝らしていた方が早いって訳。馬鹿は所詮馬鹿だからな、人がどちらを見てる振りをしているのかに気付かないんだ。

「っていうかさ！　いやガチで！　今石投げたろお前！！」

「えー、ナンノコトー」

「シラ切れると思ってんのかテメェ……！」

「まぁまぁ、当たらなかったんだから良いじゃない？」

「そうだそうだ」

「ようゼン、そっちの後ろで真顔で賛同してる奴が元凶なんだが」

ゼン君のフォローも入って、カイトがやっと黙ったところで。

「で、もう一回やんの？」

「お、アサ君何か今日やる気じゃない」

「誰がやる気無ぇっつったよ、僕にも隠れさせろや」

「よーっし！　それじゃあ二回戦行ってみよー！！　はい、リョウコっちゃんが鬼ねん」

「はいは……うわ、何か嫌ね、アンタ等全員見つけられるかしら……」

「次は絶対見つからねぇかんなー！！」

元々見つけるより隠れる方が好きなんだよ、鬼やったんだから隠れさせろ。

「じゃあ数えるわよー」

「よっしゃあ皆散れ！」

「いーち、にーい――」

子供の遊びだって馬鹿にする人も居るかもしれない、っていうか、僕も多分其方側だけど、――楽しけりゃ、其れ良いよね、そんなの。

３９９＋夏の合宿編。／四日目２

「で、其の後はどうなったんだ？」

「それが聞いて下さいよ本当……！」

ユウヤでっす！

夜になりまして夕飯だよ！　今日は俺とカイト君で作ったんだけど、普通に揚げ物にした。チキン南蛮。

アサ君に即効で『普通じゃねぇよ』ってツッコまれたけど気にしないよ！！

「コイツ等全員本気出してきて、何処に隠れてたと思います！？」

「さぁ……何処に隠れてたんだ？」

かくれんぼ、一回目が終わった時点で実は夕方だったもので、結局二回戦で終わったんだよね。だから今、鬼だったリョウちゃんがこんなに怒ってるというか何と言うか。

「高台からロープ下ろしたところです！　ちょっとしたスペースがあったとかいって、馬鹿共皆して其処に居たんですよ！？　信じられます！？」

二年四人して其処に居てみた、えへへっ☆

「おうおうリョウコ、さっきも言ったが発案者はアサキなんだぜ？馬鹿ってこたァ無ぇだろ」

「馬鹿は馬鹿よ！　私がそんなところ探せるとでも！？」

「俺なら行けるぜ？」

「アンタと私を一緒に扱えるとでも？」

愚痴られているハヤ先輩はまぁまぁ、と苦笑してカイト君とリョウちゃんの言い合いを制止している。他の喋ってない人は食べるのに忙しいのかな、其れか面倒だからスルーしてるのかないや何でも無い。

「もう、アンタ達とかくれんぼなんて二度とやらないわよ……！」

「ほっほー、だってよアサキ。リョウコは俺達と二度と遊ばねぇって！」

「え、そうなの？」

「ばっ……遊ばないとは言ってないわよ馬鹿！！！！」

カイト君、リョウちゃんの扱い上手くなり過ぎてる気がするよ、俺。

「ご馳走さまー！」

「お粗末さまー！」

一番最後のアマギリ君が食べ終わって。後から来たから食べ終わるのが最後でも仕方ないんだけど、――そんなアマギリ君を気にせず他の皆が直ぐ隣でゲーム大会してるのがすっごく気になるよ。

「いやーっふぉおおおお！！！！！！」

「サチト、テンションが気持ち悪い」

「うるせぇうるせぇ！　一日中慣れねぇ勉強してたんだから今日くらい許せっつーの！」

フウカ先輩の冷めた視線――嗚呼、何時も冷め気味だっけ☆――も気にせず、コントローラ持って奇声上げてるサチト先輩。今日まで本当勉強詰めだったらしいから叫びたくなるのも無理は無いかな、俺達よりハードだったんだもんね。

「サチト先輩、少しは歴史頭入ったんですか」

「……室町時代の将軍の将軍は……源？」

「足利ですけどね駄目だこいつ」

アサ君はっきり言い過ぎだぞ☆

「まぁ、苦手なものを克服するより、得意を伸ばした方が良いからねっ！」

すかさず入ったアマギリ君のフォローだったけど、既にサチト先輩の威厳はマイナスだと思う。

「歴史なんて知るか、俺は今を生きる」

「せめて、人並みレベルにはなって欲しいけれどな」

「……」

視線は画面に向いているけど、そんなハヤ先輩の苦笑は耳に届いたみたいでバツの悪そうな表情をしていた。

俺も人のこと言えた柄じゃないけど、友達の気遣いは無下に出来ないものね！

さて、明日が最終日か。宿題も終わったし、目一杯遊ぶぞー！

４００＊閑話＋ユーモアってなんだっけ。

はあい！　２０話振り！　楽しくもない閑話が今日も今日とて始まるよー！

今回もパロディはお休み、理由は……まぁ……もう、謝罪しなきゃいけんことがだな。

「ん、どうしたのアザイさん」

……お前たちの夏休み期間が長過ぎるんだよ……！

「え？」

世間ではもう一ヶ月も前に夏休み終わってんのよ！　分かるかこの理由！

「――思いの外合宿の話が長引いて、一ヶ月以上使っても終わってないからだろ」

はいそこ正解。

そうなんですよちゃんと八月までに終わらそうと思っていた夏休み合宿が作者の都合とかやる気とかの所為で未だ終わってなくてまるで大学生の如く休んでることになってる方々が出来上がってしまったのさ……！

「一息だねアザイさん」

「一息だな作者」

本当はタダの高校生だからね！　高校生だから！　十月から新学期始めますけどふっつーに九月テンションで文化祭始めますんで！

「必死だな」

「必死だね」

ほんっと申し訳ありませんっした！　体育会系で謝るから許してくださーい！

「作者全然運動してないのにな」

「だねー」

お前等も謝れよ！　作者の失態は君達もだね「うるせぇ」「頑張ってー」嗚呼もうこの子たち何なの。誰かどうにかして。

……で、正直言うことも無いのでもう終わりにして良いか。

「え、流石に早くない？」

「良いじゃん、たまにはこういう話があっても」

そう？　じゃあもう終わりにしよう、たまにはそんなのあってもね、うん。

時間と労力が足りてないんで目茶苦茶短いですが終わりまーす、次の閑話で頑張ればいいや。

「雑だよアザイさん……！」

良いの良いの、はいはい、ではではアデュー。

「待って待って！　あのさ！　今回何話目だか覚えてる！？」

は？　本当はガチでこれだけで済ませようと思ってたところになんですあなた。

「４００話！！！！　キリ良い４００話なんだよ！？」

そんなの知るかい、というか本当やる気無い周期にそんなん来たらスルーするわよ。

「えええええええ」

「４００話……よく続いてるよ、作者がこれで」

ちなみに今見たら２５万打ってた。

「軽い！！！！　初めて見る数字なのに軽い！！！！！」

まぁユニークは5万行くか行かないかだからね、皆！　暇潰し活用してくれてさんきゅ！　オラすっごく嬉しいぞ！

「天下一武道会でやられて来いよ」

「アサ君も酷いよ！？　っていうか閑話ってたまに俺をツッコミにする癖あるよね！」

冗談はさておき、皆さんありがとうございますね。飽き性怠がりやる気ゼロ、の三拍子のわたくしがこんだけ続けられてるなんて奇跡ですが、そんな中でお付き合い下さり誠に感謝。

「作者が戻った……良かった……」

今後一年とちょっとは続くだろう朝夜グラフィティ。ですが、もう少しだけお付き合い下さいなー。……本編終わったら幾らでもリクエストとか答えるよ。

「今ボソッと何か言った……！」

ユウヤうるせ。

さてさてー！　って訳でちょーっと延びたし本当にこの辺で失礼しますわ！　以上、また次の閑話でー！

「パロディ再開しろよ」

お、おう。

４０１＋夏の合宿編。／五日目

アサキですけど。やっと最終日。とっとと家に帰りたい僕としては嬉しい限りだけど、学校始まるとなると怠さ百二十％ではある。明日の朝一で帰るから、今日は皆で遊ぼうぜ！　的なことをサチト先輩が言っていた――んだけれど。

「ハヤがぶっ倒れた」

とか、朝一で伝えられた僕等にどうしろと言うんだか。

朝飯時に一番遅く起きてきたと思えば、どうやらハヤ先輩がハヤ先輩らしくくたばったらしい。

三年生は昨日まで詰め込んで勉強会だった訳で、サチト先輩やフウカ先輩に言わせれば当然の事らしい。

「って訳でハヤは部屋でくたばってっから気にしねぇでゲーム大会な」

「気にしないんですか！？」

ユウヤのツッコミに流石の僕も賛同だが。

「あー良いの良いの、ハヤなんてそんなモンだ」

「あっはっはさっちゃんってば慣れてるー」

けらけらと楽しそうに笑うゼン君に三年目ともなればこうなるわ、的な溜息で返事をしたサチト先輩は、「ともかく！　今日は一日遊び倒すからな！」と珍しくも部長らしい掛け声を掛けて僕等を見た。……嗚呼、部長だったか。

「はい、やりたいものある人ー」

「何でも」

「ぶっちゃけ俺達結構遊び倒してたから先輩達がどうかって感じだよな」

カイトの言葉に頷く面々。
それを見て少し考えた風だったのはフウカ先輩、若干俯いた後に顔を上げ、すっと手を挙げてサチト先輩を見た。

「ん、どうしたフウカ」

「意見」

「流石の俺も見れば分かる」

何かあんなら言って良いぜ、と部長風を吹かせてフウカ先輩を差した部長。フウカ先輩は手を下ろし、此の話し合いなんだか何だか良く分からない謎の会議に、

「ゲームしながら考えれば、問題無い」

あっさり終止符を打った。とりあえず僕は、開始数秒で飽きていたらしいシノノメとユウヤがやっていた携帯ゲーム機を見て、一発ずつだけ――本気で首に手刀を入れておいた。

「先ぱーい……入りますよー……？」

「ゼン君、何でそんなに恐る恐るなの」

「ばっかあっ君、もし先輩が寝てたら失礼っしょ？」

「ははっ、気遣いありがとうな、ゼン」

昼過ぎ、ゼン君と二人でハヤ先輩の部屋に来た。

寝てるかもしれないって言われたけど、だったらゆっくり開けて声掛けなきゃいいのに、とか思った僕の考えはどうやら起きていたハヤ先輩には無用だったらしい。

「先輩、大丈夫ですか？」

「嗚呼、何時ものことだから問題無い、ありがとう。……何かあったか？」

先輩は何時も通りの笑顔で、朝方ぶっ倒れたなんて信じられないけれど、其れが何時ものことって此の人どれだけ倒れ慣れてるんだか。

ベッドの上に居るってだけで特に変わりは無い先輩はそう言って首を傾げた。

「あ、何かフウカ先輩がとっておきの入り江に連れて行ってくれるとか何とか……」

「だから、先輩に一声掛けに来ただけです」

「そうか、わざわざすまないな、ありがとう」

畜生此の人人間が出来過ぎてて最早苦しい。

若干申し訳無さそうにそう言った先輩は、「楽しんで来いよ」と僕とゼン君に言った。

「だったらハヤ先輩も行ければ良かったのに、サチなんて超ノリノリでもう部長らしさ零っていうか」

「サチトらしいじゃないか、俺の分までお前達が頼むぞ？」

ゼン君の文句に、くすくすと楽しそうに笑う先輩。本当此の人とサチト先輩が同じ人間ということだけでも解せないっていうのに、先輩を差し置いて出掛けるなんて此の僕が喜ぶと思うかええ。――ただ外出したくないだけだろって言った奴誰だ。

「こうやって、倒れ慣れてる俺みたいな人はな、」

ふと、黙っている僕を先輩が見ていることに気付く。

「気を遣わないで楽しんできてくれる方が嬉しいんだ」

「……」

――まさか、読心術まで心得ているとは……！

「ゼン君」

「んー？」

「行くよ」

「え、何故そんなに乗り気な……え？　じゃ、じゃあ行ってきますハヤ先輩！」

「気を付けろよ」

背後から苦笑する声が聞こえたが、僕は聞いていないということにする。とりあえずとっとと行こうじゃないか、ええと入り江だっけ？

何故だろう、僕はあの手のタイプの人に一生敵わない気がした。

４０２＋夏の合宿編。／五日目２

「楽しかったな、合宿」

「は？　お前は勉強三昧だっただけじゃねぇの？」

ふ、とらしい笑みを浮かべて、ハヤは俺にそう言った。四日間は勉強で、今日は此処に一人で居ただけな癖して、一体何が楽しかったってんだろうか。

「勉強三昧って訳でも無いさ、少しは皆でゲームもしただろう？」

少しって、本当数時間の話だろ。

「第一、遊ぶよか勉強ばっかで超疲れたっつーの。合宿なんて暫く要らねぇわ」

「そうか」

其の一言も何処か楽しげで、ハヤの神経は良く分からねぇ、と毎度ながら思った。同室という訳ではないが、部屋に居るフウカは若干うとうとと船を漕いでいて、今にも寝そうだからとハヤをヒヤヒヤさせている。

「……フウカ、眠いなら、部屋に戻って良いんだぞ？」

「……ええ……もう少し……」

此処に居る、と続くはずだった言葉すら続かないのに、未だ此処に居るらしい。昼間にはしゃぎ過ぎたんだよ、お前。下の奴等とよ……まぁ、俺も大分騒いでたけど。

入り江まで行って、はしゃぎ疲れた奴等は既に部屋に戻って寝ちまっている。まだ九時も回ってない時間だっつのに、部屋を覗いたら真っ暗だった。……俺達以上に疲れてどうすんだよな。

「サチト」

「ん？」

「聞いたこと無かったが……お前、大学はどうするんだ？」

「俺？　……んー、ぶっちゃけ、未だ良く分かってねぇ」

一年からずっと一緒だけど、確かにそういう話をハヤが持ち出して来たこと、無かったな。俺から持ち出すなんてことがあるはずも無く、そういう話をすんのはマジで初めてだ。

「お前はどうすんのよ」

正直、ハヤが大学に行けるのかどうかってのも頭の片隅にあるっちゃあるんだが。まぁ、普段通りの興味本位で俺は聞いてみた。

「行くつもりではいるさ」

「……マジかよ」

「言うと思った」

笑われた、読まれてたか。

「場所は限られてくるけどな、家から一番近い大学くらいなら、恐らく通えるさ。家族も支援してくれると言っている」

「へぇ……」

「身体のことを理由に、やりたいことを諦めたくは無いからな」

「へいへい、向上心旺盛なこって」

呆れて物も言えないけど、其れがハヤだから仕方ないわな。

ハヤが何をやりたくて、どんな道に進みたいのかなんて俺には分からない。でも、少なからず現時点まで、いや、多分これからも雰囲気で進路を決めちまうだろう俺よかはまともなんじゃねぇかと。

「お前も、今からだって遅くは無いさ。頭は足りるだろうし、考えてみろ」

「へいへい、生徒会長様は言うことが違ぇわ。なぁフウカ？」

「……ん？」

「……お前、寝ろよ」

全然頭入ってなかったろ、今の話。

「合宿は終わるけど、」

ふらっふらのフウカを部屋に送るべく立ち上がってから。

「勉強、ちゃんとしておけよ」

ハヤがそんなことを言った。

「決まってないなら尚更、行きたいところが見つかった時、後悔しない様に」

常に病人の癖して、そんなこと言いやがって。――だから俺はハヤには敵わねぇんだと、ずっと知ってたことを再確認した。

しとくよ、勉強。お前が言ったことで、間違ったことなんて無ぇからよ。

４０３＋絶対の信頼性。

「たんだいまーっ！」

「眠い……」

「帰宅時の台詞其れで良いの？」

ユウヤでっす！　今日から二学期が始まりました！　何だか長く感じた夏休みだったなぁ……え？　長かった？　……やだなぁ、俺を騙そうとしたって無駄なんだから！

「おう、お帰り」

リビングに着くなりそそくさとソファにダイブしたアサ君は置いといて、キッチンからした声に俺はもう一度ただいま、と返した。マヒル兄よ、大学はどうしたんだい。

「朝からツッコミたかったんだけど、マヒル兄学校は？」

「ん、今学期ほぼ授業無ぇから、自宅から車で行く」

「そうなの？　てっきりサボりかと」

「アサキじゃねぇんだから」

苦笑しながらそう言ったマヒル兄、アサ君が何か反論したみたいでもごもご聞こえたけど、もごもごとしか聞こえなかったから言い分は「もごもご」ってことにしとこうかな！

「お前達こそ、二年生は大事なんだからサボったりすんなよ」

「俺はサボったりしな……いよ！」

「其の間が兄ちゃんを心配させる要因だってことに気付こうか弟よ」

「僕がサボる訳が無い、教室出るの怠い」

「だから実技教科サボりそうで怖いよ兄ちゃん」

わざわざ起き上がってキメ顔でボケたアサ君は、再びソファへと沈んでいきましたとさ。恐らく本人は至って真面目なんだろうけど、疲れてるならわざわざ起き上がらなくても良いのに……。

マヒル兄は俺達が心底心配なようだけど、大丈夫だと思うよ俺。成績とかじゃなくて、サボったりはしないからさ！　……多分！

「マヒル兄こそ、もう四年生だけど大丈夫なの？」

正直忘れてたけど、マヒル兄って今年就活だよね？　大丈夫なの……なんてマヒル兄に聞くだけ無駄な気がするけど、聞いたって別に良いよね。

けど、まさかまさかのことで、マヒル兄の動きが一瞬、止まったように見えた。

「……え、……マヒル兄どしたの？」

「あ？　何でも無ぇよ？」

「動き止ま……ったよね？」

「んな訳無ぇだろ？　――俺に限って大丈夫じゃない訳無いだろうが」

にっ、と。何時もの笑みで俺に返すマヒル兄、うむ、確かにそうだ。マヒル兄が何かあるなんて考えるだけ無駄だったよね！　何か思うことがあったんだと思うけど、マヒル兄なら大丈夫だろうし、万が一の時はちゃんと言うしね。

「ほら、着替えてから買い出し付き合えよ二人共」

「あ、うん！　今日は久し振りにマヒル兄の手料理だーい！」

「え、鮭のムニエル？」

「何で今食いたいもん言った？　作れってか？」

「俺も食べたい！」

「作るけどな」

うん、此の弟甘やかせっぷりは正しくマヒル兄だ。

４０４＋秋の行事。

「という訳で、文化祭近いです」

其れがハヤサカ先生本日第一声目の一言だった、アサキです。
何時もなら、「はい座って下さいとっとと出席――休み居ませんねはいじゃあ連絡――」とか偉くとんとん拍子で進めるのに（一年の時との差が素晴らしい）、今日は其の一言だけ言って、クラスの動きをフリーズさせた。

「今年の文化祭は少々遅くなりましたが、今月の末にあるのは知ってますね。ですが其の前に生徒会選挙等ありまして、ばたばたすることになると思います」

こっち見るな。

「時間を設けはしますが、どうせ暇なクラスなんですから時間見つけて自主的に動いて下さい」

「相変わらずハヤサカってば放任主義ー。っていうか生徒会選挙なんてどうせ立候補者居ないのにね」

ムラサメを挟んだ向こうでゼン君が苦笑する。そうなの？　って顔でムラサメが僕を見るから、らしいよ、と軽く返しておいた。

「まぁ、生徒会選挙なんてどうせ無意味なので其処の二人、ちゃんと誰が役員になるか決めておいて下さい」

何だ知ってた、と同時に話振られた。

「ハヤサカー、俺とあっ君既に役員ですけど」

「知ってます、顧問誰だと思ってるんですか」

じゃあ何故僕等に言う。

「役職変わったら、ってことですよ。今の生徒会長はクロガネ君、其の後継を出来る人なんてそう居ませんよ」

「俺絶対やだ」

「僕だって無理だよ」

クラスで少々笑いが起きるけど、僕はあまりクラスで目立った立場にはなりたくないので直ぐさま口を閉ざした。

「ハヤ先輩の後って、誰がやんのよ」

ＳＨＲ終わり、ゼン君がふと呟いた。

「……さぁ」

「そりゃハヤ先輩は貧弱だったけど、其れであのスペックって無理でしょ」

「僕の中ではゼン君一択だったんだけど」

副会長だし、やっぱり。

「ゼンならきっと出来るさ」

「ちょ、ミノルちゃんまで何をー」

「わたしは良く分からないけれど、きっと大丈夫よ」

「よく分からないのねムラサメちゃん……」

ゼン君って、普段ナルシシズム発言する癖にこういう時は謙虚である。自信があるのは外見だけなのか、そして僕から言わせれば、君も随分とハイスペックだから安心すればいいのに。

「まぁ、他の三人と話し合って決めるといいさ」

「ええ、きっとしっかり話し合ってくれるわ」

「其の流れで俺、今副会長だからなぁ……ほら、あっ君が目を合わせてくれない」

「ナンノコトカナ」

去年は確かに半押し付けだった気がする。だってうちの兄貴とカイトにハヤ先輩のフォローなんてさせられないし、カトウは委員会入ってたし、そうなるじゃないか。ちなみに僕の思考回路で僕は常に棚の上だよ。

……そうなると本当、ゼン君にやってもらうのが一番良いと思うんだけど。

今言っても適当になっちゃうだろうから、また機会がある時にちゃんと言おうと思った。

４０５＋二組の出し物。（前書き）

会話のみ。

４０５＋二組の出し物。

「今年の出しモンどうすんだ？」

「去年は喫茶店やったよねー！　今年はどうしよっか！」

「そういえばそうだったねえ、あーあ、テナも可愛い服着て喫茶店とかしたかったなあ」

「別に……今年やらないって決まった訳じゃないでしょ？　やりたいならそういう意見を出せば良いじゃないの」

「はいはいはーい！　じゃあテナの意見はあ、可愛い洋服来たあい！」

「其れ意見か……？」

「あははっ、まぁまぁ！　意見は意見だよカイト君！」

「へいへい、……んじゃあ他意見あんのかー、他意見無ぇとただ女子が可愛い服着るだけなんだけど」

「其れ出し物としてどうなのよっ！　申請通るの！？」

「何言ってんだよリョウコ、生徒会は俺達だ」

「あ」

「可愛い服を着れるお店かあ、ええとねえ、ねえねえほのちゃんは何が良いと思う？」

「え？　……そうねぇ、先生は皆が楽しければ何でも良いかな？」

（去年は一週前まで忘れてたけどな……）

（去年どれ程苦労したことか……！）

「また喫茶店でも良いけどよー、去年も二組の奴結構居るだろ？また喫茶店て飽きねぇ？」

「テナは一組だったからあ、何だって良いかなあ？」

「去年は急いだから、ゆっくり出来るならなんだって良いわ……」

「まぁ去年はな、……去年はな」

「ん、皆どうしたの？」

「何でも無いよほのちゃん！　今年は忘れないでくれてありがと！！！」

「ふふっ？」

「つーか、一組って何やんだ？」

「アサ君達のクラス？　何やるんだろうね？」

「アレ、ユウヤ聞いてねぇの？」

「うん、特に。だって興味無いからうちの弟」

「嗚呼……」

「去年はスタンプラリーやったからあ、今年もそういうのになるんじゃないかなあ？」

「え、今年も楽路線に入るの……？」

「だってえ、そうしないと生徒会のお仕事出来ないよお？　去年だってえ、生徒会のお仕事手伝ってたのあー君だけだったしい、あー君とゼン君が其れを考えない訳無いしい？」

「……テナちゃんって、案外良く見てるんだね……」

「奇遇だな、俺も同じこと思った」

「きゃは☆　テナ褒められちゃったあ！」

「はいはい、良かったわね」

「リョウコが冷たあい！」

「で、他意見あるかー」

「カイト君のスルーが華麗過ぎる」

「無ぇならガチでアレだぞ、ガチで喫茶店にすっからな」

「はいはーい！　テナはそれで良いと思いまあす！」

「アンタも立ち直り早いわね……」

「可愛いお洋服楽しみなんだもん」

「俺張り切って作るよ！」

「アンタも何で張り切ってるのよ、どれだけ裁縫得意なのよ……！」

「寧ろユウヤは今年も着れば良いんじゃねぇの？」

「今年も着たらそろそろアサ君に口聞いてもらえなくなる」

「じゃあアサキに着せれば良いんじゃねぇの？」

「カイト君は俺に殺されて来いと言いたいんだね？」

（何其れすっごく見たい……！）

「リョウコお、顔が変だよお？」

「何でもないわよっ！！！！」

「ええっと、そろそろ時間なんだけれど……皆、喫茶店で良いのかな？」

『はーい』

（此のクラス、皆ほのちゃんに侵されてるなぁ……）

ユウヤがツッコミに成らざるを得ない二年二組だった。

４０５＋二組の出し物。（後書き）

二組のクラス委員はロクジョーさんらしい。

４０６＋小さい秋が見つからない。

「秋つったら茄子食いてぇなー」

学校帰り、自転車を漕ぎながらカイトがふとそんなことを言いました、ユウヤでっす！

「秋茄子だねっ！」

「おう！」

暦の上ではとっくに秋だけれど、最近やっと肌寒くなってきて、秋になったって感じ！　秋の味覚は美味しいからつい食べ過ぎちゃうよねー！　っていうか其は其れで良いんだけれど、カイト君はとりあえずそろそろ学ランを着ようか、ワイシャツじゃ寒いって。

「夏にも食えるじゃん、茄子」

「ばっかだなぁアサキ、秋茄子は秋に食うから美味ぇんだろうが」

何時も通りにカイト君の荷台の荷物と化しているアサキが、何時も通りに横座りで本を読みつつ（良い子は真似しちゃ駄目だよ！）そんなことを言う。まぁ、確かに茄子は夏野菜でもあるしねー、でも、やっぱり秋茄子なんだから秋に食べたいよね！

「別に、茄子好きじゃないし」

「……あれ？　アサ君茄子嫌い？」

「普通」

「おま、食事係だろユウヤ」

「アサ君好きとか嫌いとか言わないんだもん……」

文句言わないでくれるのはすっごく助かるんだけど、好きなものすら言わないから作り甲斐が無いというか。……というか良く考えたらうちの家族って皆食事に文句言わないや、マヒル兄も父さんも美味いだの美味しいだのしか言わないし。俺と母さんだけじゃないかな……此処で分かれるか、うちの家族。

「何でも食べんなら良いんでねぇの？　……あ、でもアサキお前、旅館の飯は食わないよな」

「量多い、あとはまずい時ある」

「其れは遠回しにユウヤとかマヒルさんが作る飯は美味いってことか？」

「まずくは無いよ」

「だとよ」

「うん、美味しいって言葉が聞きたいかな！」

「……」

言ってくれない様だ。――まぁ良いんだけどね！　俺めげないし！！　何時か絶対言わせたる……！

「秋っていやぁ、他に何があるっけか」

「柿」

「秋刀魚！」

「……栗」

「さつまいも！」

「……葡萄」

「ええと……銀杏？」

「おい双子、別に俺は古今東西ゲームを強制した覚えは無ぇよ？」

カイト君に苦笑されはしたけれど、俺としてはアサキが其れほどに秋の味覚に詳しかったことにびっくりした。興味無いと思ってたからね！

「後はマツタケとかか？　」

「あー、キノコは確かに食べるかも」

「キノコは野菜炒めで食うのが一番だ！」

「……生で？」

「なぁアサキ、俺今炒めっつわなかったか？」

「どうやら聞こえてないようだ」

「テンメェ……せめて本から目を離して言えよ！」

「前を向いてクダサイ」

出来ればアサキも前を向いて欲しいんだけどね！　二人乗りの時点で若干危ないのに、尚且つ横向きでしかも読者って……アサ君のバランス感覚が良いのか、カイト君が気を遣ってくれているのか。

「あ、ねぇねぇアサ君、アサ君って秋の味覚で一番何が好きー？」

ふと、そんな疑問が過ぎる。全体的に好き嫌いを言わないアサキだけど、秋限定なら何かしらの反応が帰ってくるんじゃないか、という思いから。

「別に無い」

――玉砕したけどね！！！！

「お前なぁ、何かあんだろひとつくらい」

「……」

カイト君が呆れたように言うのを聞いて、何やら考え出した我が

弟。なにかひとつくらい、何でも良いけど何かひとつくらい好きなものを……！　アサキってファミレス言っても頼むもの気分で決めるし、バイキング行っても其の時食べたいものしか食べないから本当好き嫌いが分からない！　此れでも十六年お兄ちゃんやってるんだけどなー！！！！

「……柿」

柿……！？　が好きな――

「――を、マヒルがひとりで食ってたイメージがある」

――では無いようだ。

「だからきっとマヒルは柿が好き」

「知ってる！　っていうか其れはマヒル兄がバイト帰りでゾンビ化してる時に柿出したら黙々と食べてただけでしょ！？」

「うん」

好きなのかどうかイマイチだよね其れだと……！

「ゾンビ化……レイズで一発だな……」

「カイト君、帰ってきて」

カイト君がゲームの世界にトリップしちゃったし家着いたから、此の話はとりあえず此処までにしよう。学校帰りだからって二人共、

何だかライフ削られ過ぎな気がする。

「秋の味覚……ユウヤ」

「ん？」

「マカロニグラタン食べたい」

「うん、全然関係無いね！」

良いよアサ君、君は其れで良い。

４０７＋季節終わりの祭りごと。

アサキです、祭りです、寒いです。

「アサ君何か食べないのー？」

「要らん」

十月も下旬になるという此の時期、一年で最後になろうという祭りが今日行なわれた。朝からゲーム攻略部隊に配属されていた僕はそんなことどうでも良かったんだが、ユウヤが至極行きたそうだったので仕方なく付き添うことになった。どうせならアスカ君とか誘って行けよお前、面倒臭ぇな。

「むあー、イカ焼き食いたいー」

「お前……今たこ焼き食べてるじゃん……」

「イカとたこ様は別物だよアサ君！！」

「何故たこだけ崇める」

人込みの中で器用に身体を捻りながら、イカを丸ごと食い散らかす我が兄貴。ちなみに夕飯食べてから来たんだということを先に述べてから、こいつは此れの前にお好み焼きと唐揚げとチョコバナナを食べたということを告げておこう、――食い過ぎ。

「アサキー、ねぇ食べないのー？」
「夕飯食べたばかりだっての」
「ええ？　もう三十分経ったよ？」
「お前の消化管どうなってんの？」
双子なのに体内機能の違いあり過ぎだろ。
「おーい、あっ君！」
「……」
買うならせめて其れ食い終わってからにしろ、と言ったのは確か一分前程度の話だったんだが、ユウヤがたこ焼きを買っている今。人込みから呼ばれて其方を見れば、案の定知り合いが二人程居た。
「……お前等」
「はろーあっ君、皆のゼン君だよ」
「こんばんはアサキ君！」
楽しげに笑う幼馴染コンビ、又は金髪コンビことゼン君とフドウが居た。まぁ、ゼン君はまぁ良いと思う、うん、良いと思う。ただ

何にツッコミたいかと聞かれれば、フドウが手に持っているチョコバナナにあるんだ。――何で三本持ってんだお前。

「……」

「……あ、此れ、要りませんか……？」

「……」

数歩後ろのゼン君が爆笑を堪えているのが非常に気になる。

「シギ、さっきチョコバナナくじのところで買って、四本当てちゃってさ」

堪え際にそう教えてくれたゼン君は、俺あんましバナナ好きくなくてさ、と言ってから結局耐え切れず爆笑を始めた。片手に一本片手に二本、持ち難そうにチョコバナナを持つフドウ、一本だけ自分って食ったということなのだろうか。

「ボク色んなもの食べたので、一本が限界っす……」

「なけなしの運何処で使ってんだよお前」

「なけなし！？　ボクの運なけなし！？」

「あれ、シギ君にゼンくーん！」

どう見てもなけなしである。

其れから直ぐたこ焼きを買って戻って来たユウヤ、シギ君のチョコバナナを見れば僕と同じく理由を気にして、そしてゼン君と同じ

く爆笑した。

「良かったじゃないシギ君！」

「ううっ、良くないっすよ……ボク此れから帰るまでに手が死んでしまいます……！」

一通り馬鹿にした後、僕とユウヤで一本ずつ貰ってやって――ユウヤは此れで二本目だが――、結局そんなに好きじゃないと言っていたゼン君も貰ってあげていた。やはり良い人なゼン君だ、本当、此れでナルシストじゃなければ完璧なのに。

「そういえば今日カイ君とかは？」

「来てないよ」

祭り事を好むあの馬鹿が来ていないなんて驚くべきことだが、其れには勿論理由ってものがある。

「――今週テストだから」

中間テスト、二年の此の時期にそこそこに危ない点を採った暁にはウミさんが恐ろしいことになる……と、ぼやいていたのを聞いている。そりゃ保護者なんだから仕方ないだろ、そう考えるとマヒルがどれだけ緩いか具合が伺える。良かったなユウヤ、僕は許さんが。

「カイ君大変だねぇ、親と別暮らしで良かったー俺」

「うちもとやかく言う人滅多に居ないから此れが余裕ぶっこいてられるんだ」

「え？　何か言った？」

「黙って食ってろ」

「ふーい」

「……」

祭りの場だから今は許そう、碌でも無い点数を採ったその時、覚えていれば其れで。

４０８＋数種類のドッキングミッション。

リョウコです！　今日からテスト週間です！
テスト週間……だけれど、部活メンバーは皆部室に集まっています。しかもやっていること皆、全然テストと関係無いという。

「シノ！　お前のクラスなんか申請出てないけど良いのか聞いて来い！」

「え、まじすかゼン先パイ。うちのクラス確かアレすから暗幕必要なはずなのにー」

「ハヤ、計算が合わん」

「何だって？　……ユウヤ、カイリ、そっちに書類紛れ込んでないか？」

「え？　俺の方には……無い」

「此れっすか？　ナツメ、持ってけ」

「は、はい……！」

「……大変そうですね」

「そうね」

文化祭の準備で、皆大忙しみたいね……。普段は大抵テレビ前しか使われない此の部室内をフルに使って皆が稼動している、ちなみに私とフウカ先輩はおやつ食べてるだけだけれど――サボってるんじゃなくて、休憩中よ――。

そして生徒会の仕事なら生徒会室でやれという話なのだけれど、臨時で始まったこともあって、皆移動するのを面倒臭がったって感じね。此れも其れも、溜まった書類を今更ハヤサカ先生が持って来たのが悪いんじゃないかしら。……まぁ、先生も忙しいんだから仕方ないけれどね。

「ゼン先パァイ！　うちのクラス書類出したって言ってますけ「じゃあ生徒会室見て来い！」へーイ！」

「ユウヤ、そろそろアサキ起こしてくれないか？　出来れば手伝って欲しい」

「だってよアサキ！」

「……あ？」

「ハヤ先輩がアサ君に手伝って欲しいって！」

「先に其れを言え」

そして、私達とは別に休憩という訳ではなくて、来た当初からずっと寝てて手伝って無かったヒコクアサキがとうとう起こされた。というか結構な騒ぎ方をしてたのに良く寝れてたわねアンタ……！

珍しい素直な寝起きの理由は当然ハヤ先輩の名前からなんでしょうけど、起きられるなら何時も起きればいいのに……と思わないこ

とも無いわ。

「おはようアサキ、お休みのところすまないが頼みがある」

「へい……？」

「此れをハヤサカ教諭かアマギリ教諭の元に届けてくれ」

「あーあっ君！　職員室行くんならこっちも！！！！」

「カイト取って」

「はいよ」

「――平和ね」

「何がですか！？」

ちょっとびっくりした！　お茶啜ってから何言うのかと思ったら遠くを見て平和発言って……フウカ先輩どうしたんですか……？

「皆で仕事、こうやって休む時間がある……素敵」

「フウカ先輩？　……フウカ先ぱーい？」

右斜め上ら辺を見て黄昏始めてしまったフウカ先輩の顔の前で手を振るんだけれど、全く右手が相手にされなかったので手を引くこ

とに。代わりといっては、そんなフウカ先輩の様子に気付いたサチト先輩が楽しそうに笑って答えてくれる。

「去年はもっと酷かったからなー、俺とフウカで走り回ったようなもんだ」

「二人でですか！？」

「ハヤが生徒会室でイロイロやってたから、俺とフウカで全力疾走」

私達は未だ生徒会役員じゃなかったから知らないけれど、本当、お疲れ様と言うことくらいしか出来ないわね。

「まぁ、アサキがちょい手伝ってくれはしたけどな」

職員室にロウペースで旅立った彼の人を思い出しつつ、私はそういえば彼だけクラスが違ったことを思い出す。皆二組で忙しかった中一組のヒコクアサキは何もしてなかったんだったわよね、……あれ、一年前の話なのに何故か懐かしい。

「今年は何やんだか知らねぇけど、ちょいちょい頼むぜー？」

部室の皆に聞こえる声音でサチト先輩が言えば、ハヤ先輩は苦笑し、他の皆は適当な返事を返した。うん、私も来れる時に来ようかな。

「ま、俺が付け加えて何を言いたいかと言えばだな」

そして最後にハヤ先輩が、

「――テストのことを、忘れないでくれよ？」

約数名に痛恨の一撃を放ちました、という。

……わ、私は大丈夫よ？

４０９＋生徒会会議。（前書き）

※今回は会話だけになります。

４０９＋生徒会会議。

「テストが終わったので、重要な話を始めまっす」

「ねぇ」

「はいリョウコちゃん」

「約二名がくたばってるんだけどそれについては……？」

「「……」」

「金曜の数学ズタッたのが尾を引いてるだけだから気にしないで良い、ゼン君続き」

（あっ君ストイックだなぁ……）

「……で、何で今日は集まったのかしら？」

「明日ある生徒会の選挙はどうせ無駄に終わるから、先に話し合いをね」

「あ、……もうそんな時期なのね」

「生徒会長はゼン君でしょ」

「だからあっ君、何で確定事項みたく言うのかな？」

「だって確定じゃん」

「何時から……！」

「私も確定だと……」

「リョウコちゃんまで……！！」

「だってゼン君くらいしか無理でしょ、生徒会長とか。仕事多いし」

「おやーん、ゼン君生徒会役員の中で唯一バイトしてるんだけどなー？」

「良いだろゼンで」

「良いよゼン君で」

「おいこら其処のやる気ログアウト二人組適当にすんな」

「でも、冗談抜きでアナタが一番最適だと思うわよ？　仕事早いしね」

「え、だったらあっ君だって良いじゃない」

「馬鹿みたいに年がら年中寝てやるよ此処で」

（（自覚あるのか……））

「アサキが庶務に居ねぇと他のフォローに回って貰えねぇじゃん」

「そうだよ！　言っておくけど俺は書記以外役に立たないからね！」

「あ、やる気ログインしたわね」

「……分かった、分かったよ俺がやれば良いんでしょ！」

「よしきた」

「やっと折れたねゼン君！」

「当たり前でしょ！　こんな髪色で生徒会長なんてやりたいと思う？」

「染め直せばいいじゃない……」

「直すも何も、ゼン君の髪色元々は紫に近い亜麻色よリョウコちゃん……なんだよ紫っておかしいだろ色素……」

「其れで金茶にしちゃうゼン君もどうかと」

「で、庶務はあっ君だとして」

「ちょっと待って、さっきツッコミ忘れたんだけど僕を庶務に置くのって要は他のこと手伝わせるってことだよね、要はオールマイテ

ィにやらせる気だよね」

『……』

「はいゼン君以外正解だね、うん」

「あははっ、まぁまぁ良いじゃない、手伝ってもらいたい時に声掛けるだけだよきっと」

「そう願いたいね」

「そして後ゆっ君、君は書記だって？」

「勿論！　ノートにお絵描――ごほん、ちゃんとノート取るぜ？」

「ヒコクユウヤ、キメ顔が今更よ」

「じゃあ後は副会長と会計かなー……其処のクラス委員コンビ」

「「はい」」

「あれ、カイトとカトウ、クラス委員……？」

「おう！」

「ええ」

「生徒会なら少しは考えて欲しかったけどね」

「「……」」

（ゼン君が笑顔なのに怖い……）
（ゼン君の皮肉な笑顔なんて珍しい……）

「とりあえず、二人で好きな方選べば良いと思うけど……って、皆どうかした？」

「いえ、別に！」

「何でも無いぜ！」

「同じく」

「うん」

（※本気で怒らせたら怖いことを知っている面々）

「り、リョウコお前計算得意だろ？　だったら会計やれば良いんじゃね？」

「そうね！　私にぴったりね！！！！」

「は、はは！　そうだな！　クラスのことで大変になっても生徒会の方はちゃんとやるよな！」

「ええ！　勿論よ！！」

「そ。なら良いんだけどね、頑張って、二人共」

（必死だなぁ……）
（必死だねぇ……）

「さて、決めることも決めたし、ゲームでもしよっか」

「「賛成！」」

「よし、準備すっかリョウコ！」

「ええ、そうしましょ！」

「あははっ、何だか今日は元気だね、二人共」

（必死なだけだな）

（必死なだけだね）

話し合い時間、約十分。

４０９＋生徒会会議。（後書き）

双子らしい考え一致。

４１０＋夜道にはご注意を。

最近日の入りが早くなったなぁ……、あ、リョウコです！

「もう真っ暗ね……」

「そうだな」

「うわあ、なあんにも見えないねえ」

部活は無いけど文化祭の準備とかで帰りがほんの少し遅くなっただけなのに、外は既に真っ暗で、テナの言う通り街灯の少ない道では何も見えない状態だった。

「でもお、テナもミノちゃんもリョウコも皆目が良いから大丈夫だよねえ」

「そうだな。目が悪いと余計ぼやけてしまうだろう、……アサキは大丈夫だろうか？」

「ヒコクアサキならどうせロクジョーカイリの荷台でしょう？　……あ、休みだったわね」

免疫力の無さ過ぎる馬鹿を思い浮かべて、私はひとつ溜息を吐いた。暗くなったと同時に最近は寒くなったしね……だからって空気読んで休むってどうなのよ彼。

――三人で学校帰りの道を歩きつつ、話題は何やらミノルの話に

なっていた。

「ミノちゃんってえ、将来小説家さんになるのお？」

「小説家？」

何よ其れ、初耳だわ。

興味があってミノルを見れば、ほんの少し恨めしそうにテナを見た。

「こら、あまりその話題に触れるんじゃない」

「ええー」

「え、何々？　すっごく気になるんだけど！」

何の話か凄く気になって、渋々そうなミノルに長らく食いついていれば――ちなみにテナはずっと楽しそうに笑ってたわ――。

「――小説を書いてたことがあってな」

ぼそぼそと呟くように、ミノルがそう言った。

「小説といっても、本当に拙いもので読めたものでは無いんだ。あくまでも趣味、そう、趣味の範疇で昔書いていてだな――」

「あれえ？　最近また書き始めたって言ってたよねえ？」

「……」

ミノルの動きが止まった。テナってば面白いくらい空気読まないわね、……全然良いんだけどね？

「へぇ、良いじゃない。趣味があるって良いことだし、別に私は笑ったりしないわよ？」

とりあえず私が率直に思ったことを言えば、ミノルは私を見てそうか？　と首を傾げた。いいじゃない文学的な趣味で、丁度此の季節にはピッタリよ。

「テナはちょっとだけ読ませて貰ったことあるんだけどねえ、難しかったなあ」

「そういえばそうだったな」

「テナに難しいって……じゃあ私も無理かも……」

どういう風に難しいのかは分からないけれど、私は漫画とかなら未だしも、活字は若干苦手。文学小説なんて一章の最初で疲れちゃうわよ、小説読むのって凄い時間掛かるのよね……。

「ミノちゃんの小説の読者はたあくんくらいだよねえ？」

「たあくん……？」

誰よ。

「私の兄だ、一度部屋に居ることに気付かずその話をしてしまってな、……あの文学野郎……」

「部屋に居ることに気付かれないお兄さんて……」

ミノルのお兄さん……どんだけよ。そして文学野郎、と言ったミノルの声に全く抑揚が無くて笑ってしまった。

「あんな拙い文を人に見せるなど私には堪えられないというのに……！」

あ、わなわなしてる。

「でもミノちゃん、小説家さんは沢山の人に見せるんじゃないのお？」

「……まぁ、そうなのだが」

自分の書いたものを他人に見せるのは確かに恥ずかしかったりするものね、だから私は何も言わないけど、もし将来の夢が小説家なら、ちょっと読んでみたいって気にもなるかも。

「ま、何時か読ませてよ、途中までででもね」

「……考えておく」

頬を掻いたミノルを見て、私とテナは顔を合わせて笑った。

あははっ、楽しみね。

411＋十月末に文化祭。／1

学校内が一段と騒がしいことに虫酸が走ります、アサキです。

「トリックオアトリート！」

「……どうぞ」

目の前で楽しそうにそう言った少年に持っていたお菓子を与える、……ふむ、子供とは本当に奇なり。お菓子ひとつできゃらきゃらと騒ぎやがる。

そんなことを僕が考えているなぞ知らない周りは、ざわざわと騒ぎ散らして僕を不快にさせている。

――はい、今日は文化祭です。

文化祭がハロウィン近くにやるならお菓子でも配っておきゃよくね？　と言ったのはサチト先輩で、其の配るお菓子を持って来たのは無論フウカ先輩。仮装して配るなんて面倒な案を出して下さったのはハヤ先輩なのだが、ハヤ先輩で無かったら僕が其の案を呑むはずがない。向こうでシノノメがミラクルハイテンションなドラキュ

ラ姿を晒しているが……あのテンションに着いていけない人が僕に声を掛ける訳かそうか。

無意味な生徒会選挙も終わり、代替えは済みはしたんだが。どうやらあな三人は卒業まで部活にも、委員会にも参加してくれる様子。しょっちゅうバイトに消える生徒会長殿も暫くは助かるだろうよ。

「トリックあんどトリートお！」

「はいは……何してんだお前」

また餓鬼が来た、と慣れた作業に移ろうとしてたら。あんどって何だあんどって、菓子は頂くが悪戯も欠かせねぇってか、なウェイトレスことドウモトが現れた。

「お疲れ様ね、私達は休憩時間なの」

の、隣には万年無気配なムラサメ姉も居て、此方は普通の制服姿。……まぁ、うちのクラスはアイス売ってるだけだしな。

「他の皆さんは？」

「最初は僕とあいつだけ、後は出払ってる」

「そう」

ムラサメは数度頷いてから、じっ、と向こう――シノノメを見つめる。

「はいはいはーい！　合言葉を言わないとドラキュラさんは皆にあれやこれや悪戯をしかけちゃうよん！　っていうか普通逆じゃね？　ドラキュラは受け取る側じゃね？　とか言ったら駄目だかんねー！！！！」

「――……元気ね」

「弟の友達だぞ」

「……仲良くやれているのかしら」

こんな時まで姉の不安は募る訳か、大変だな。

「という訳でアサキ君、」

「ん」

「――トリックユアトリート」

「どういうことだ」

「あなたのお菓子をぶん投げます」

「ぶん投げるのが悪戯ってか？　ええ投げるってか？」

真顔でボケをかますな、という訳ってどういう訳だ、何なんだどうだと言うんだ……！

「まぁまぁあー君！　テナ達にもお菓子ちょおだいっ！」

「ほらよ、持ってけ泥棒」

「こそ泥で構わないわ、所詮私達はお菓子を掠め取るこそ泥風情……」

ムラサメのテンションが文化祭ということで地味に上がっていることは分かった、うん。

「というかあー君は仮装して配らないのお？」

「何を言う、一般人Ｂの仮装中ではないか」

「Ａは誰なの？」

「多分ハヤ先輩」

面倒なことなんて、僕自身がやる訳ないだろ。

412＋十月末に文化祭。／2

ユウヤだよ！　文化祭ひゃっほーい！
クラスでお茶出してるのも好きだけど、やっぱり自分も楽しまないと文化祭じゃないよね！　ということで、俺は今カイト君と催し周りまくってます。生徒会室前でお菓子配ってた弟も勿論見に行ったけど、……子供相手にもあの無表情貫き通すあいつどうなんだろうね。シノ君を見習うべきだよ我が片割れ。

「あ、ねぇカイト君」

「んぁ？」

「先輩達のクラスって何やるんだっけー？」

食べたいもの食べて遊びたいとこで遊んで――完全迷惑なことに装飾品破壊したとかはアサ君には秘密なんだからね……！――、後行ってないのは何かなーと何の気無しにそう聞いたんだけど。

「お化け屋敷じゃね？」

――とりあえず、お互いの為に聞かなかったことにした。

「あれー、お化け屋敷行かないのー？」

「「！？」」

けれど聞かれていたらしい。誰にだって？　俺だって背後から急に声掛けられたんだから分からないよ！

「やほー」

「な、何だよハクかよ……！」

「びっくりした……！」

「ん？　うん、やほー」

後ろからふと声を掛けてきたのは懐かしさすら感じるコガネイ君でした。はっ君こんなところで何を――って嗚呼文化祭中だよねそりゃ。

「お化け屋敷行けばいいのにー、まぁかくいう俺も怖いのはあんましだけどねー」

「何言ってんだ俺は別に怖いなどと」

「俺は怖いから行かないよ無理だよ怖いよ！！」

強がるってなあに？　其れで恐怖から逃れられる？

はっ君は気の抜け出した笑みを零しながら、「カイリは怖いんだねー」なんて的を射た理解を深めていた。カイト君ってびっくりするくらい分かりやすいからね。

「シギ連れて行こうかなーって思ってるんだけどー、ついでだしアサキも連れてこうかなー」

「あ、うん、アサ君今生徒会の仕事してるから、午後なら空いてると思うよ！」

俺の言葉を聞けばありがとー、と。はっ君はのんびりとしたまま、何処かへ行ってしまった。

「……ハクって感じだな」

「そだね」

ふらふらとしてるだけなのに楽しそうなはっ君を見て、カイト君と俺は後ろ姿にそう思った。

413＋十月末に文化祭。／3

「いらっしゃいませー！　アイスは如何ですかー？」

リョウコです、訳は無いけど一組の前でアイス食べてます。季節関係無くアイスって凄く美味しいわよね。

「アイス下さい！」

「はい！　味は何にするのかな、可愛いお嬢さん？」

一組前ということで、今一組でああやってアイスを売っている彼を見る。私の知り合い且つ一組であれだけ爽やかにアイスを売れるのは一人しか居ないわ。

女の子の前にしゃがみ込み、メニューを見易いようにしてあげているのはワタヌキゼン。他のクラスメイトが「あれをナチュラルにやれるゼンって神か」「あれでナルシストだなんて神様もしてやってくれる」「あれ神が神様にやられてんの？」「あれ？」「あれ？」なんて馬鹿をやっているけれど、アイスを食べているだけのただのお客である私や接客中のワタヌキゼンは全くの無反応だった。……いや違うわワタヌキゼンの目が笑ってない、後でどうなるのかしらあのクラスメイト達。

「アイスありがとー！」

「どう致しましてー、またねー！」

ひらひらと手を振りつつ女の子を笑顔で見送ったワタヌキゼン、
……まぁでも、確かに私だって思うわよ。此れで髪の色さえ完璧なら、ただの爽やかな青年って感じじゃない？　――中身が若干伴わないことも承知済みよ。

「うん、小さい子は素直で良いね」

「あら、アンタにロリコン疑惑掛かってるけど本当だったの……？」

「其の疑惑の根源を絶てば噂って消えるっけ？」

笑顔で洒落にならないこと言ってんじゃないわよ……！

「ま、冗談はさておき」

冗談に聞こえなかったのは私の目が悪いからかしら。こう見えて両目とも2．0よ。

「リョウコちゃんは此の後どうすんの？」

「え、そろそろ時間だし、生徒会の方行くけど」

「……其れまでもしかして時間潰してた……？」

「えぇ、アイス食べたかったしね」

「……カトウちゃんも、大概暇だよね」

失礼ねコイツ。

「例えばだよ？」

テナと違ってウェイトレス姿で校内を歩く勇気なんて無い私は、普通の制服姿でアイスを食べてた訳だけれど――今考えると廊下でなくクラス入っちゃえば良かったわ――、ワタヌキゼンがヤケに真剣に人差し指を立てるから、怪訝に思いながらちゃんと聞いてみることにした。

「こういうちょっとした時間にあっ君のところ行こうとか、……思ったりしないの？」

「……はい？」

つい、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「だってあのあっ君だよ？　些細なアプローチなんか絶対気付かないしだったら少しでも献身さアピールがてら様子見にいくとか！俺割と本気でリョウコちゃんの心配してるからね！」

「……」

真剣なのは何と無く伝わってきた。けど、

「考えたことなかったわね」

よく考えたら、私ってそういうの全く気にしたこと無かったわ。

気付かれないというかもう彼の興味がゲーム以外に向く訳が無いから全然。というより、……あれ？　私本当彼が好きなのよね……？

「うん、頑張らなきゃね！」

「何でアンタが張り切ってるのよ」

「リョウコちゃんが見た目程向上しようとしてないからかな！」

振り向いてもらう努力ってことかしら……？

「ということでリョウコちゃんは向かう！」

「え？」

「丁度入れ替わりなんだから、一言お疲れ、くらい早めに行って言いなよね！」

「え、ちょっとワタヌキゼンアンタ――」

「いらっしゃいませー！」

接客に戻ってしまった彼を遠目に見つつ、私はちょっとだけ、ほんのちょっとだけ溜息を吐いた。

アプローチにアピール、ね……。

――効果なんて多分無いと思うんだけれど、ね。

４１４＋十月末に文化祭。／４

午後だ、アサキだ。
生徒会の仕事も終わったし、午後は自由行動だから暇をしてる。
……けど、やること無いんだよな、帰りてぇ。

「あ！　先パイ先パイあっ君先パイ！」

「何」

そんな僕のやる気無さなんて知らないで騒ぐのはシノノメ、すっかり制服姿に戻って――あのまま移動するんじゃないかとひやひやしたが――僕の横で騒ぐこと早数十分。クラスが忙しいからと付き纏われている訳だが……まぁ、構いやしないか。

「あっちあっち！　あそこのクラスが美味しそうだから行くっきゃ無い行くっきゃないでしょう！！！！」

「……分かった、分かったから引っ張るな、お前引っ張るな……！」

袖というか腕が伸びるから引っ張るな、片腕だけ伸びたらどうしてくれる。
シノノメは屋台盛りだの何だのを扱うクラスの催しに両目をキラッキラさせていらっしゃる。そんなに屋台盛りが食べたいか、寧ろ屋台盛り如きで何故其処まで目をキラッキラに出来るお前。

「オレタコ焼き食いたいッスタコ焼き！」

「お前な、学校の生徒が作ったタコ焼きなんて冷凍食べてる方がマシ――」

「先パイ聞こえちゃうから聞こえちゃうから！！！！」

あーあーナニモキコエナイ！　なんて叫ぶシノノメを見つつ、僕は何の悔いも無かったので気にしないことにした。

「お、アサキ」

「何か珍しい組み合わせだな」

「え？　そんなことないですよオレとあっ君先パイは今も昔もいっつも一緒に居るし仲良しさんって感じ！」

「はいはいどうどう」

「オレは動物か何かッスかさっちゃん先パイ！」

行くところが無くなったから部室にやって来た、ら、ハヤ先輩とサチト先輩に遭遇した。シノノメは相変わらずついて来ていたが、こいつは他に行くところが無いんだろうか。

「先輩達、何してるんですか」

「あ？　ハヤがふらっふらしてたから休憩中だ」

理由が安定過ぎる。

「フウカは今中に居る時間なんだよ」

聞いた訳では無いが僕が無意識に視線を巡らせていたことに気付いたのだろうハヤ先輩がそう教えてくれて、そういえば先輩達のクラスはお化け屋敷やるんだったか、なんて理解する。

「フウカ先パイがお化けとかやったらマジガチ過ぎてオレビビるー！　番町皿屋敷とかやられたらやっばい」

お前失礼だな。

「おう、フウカは確かそんなお化け役だったぜ？」

「『一枚足りなーい』――ってな」

やってんのかい。

「フウカもノリノリというか……着物着るの楽しそうだったな」

「そしてノリノリなんかい」

「アサキ？」

しまったつい口に出た。

まぁ、フウカ先輩が良いって言うなら良いんだろうけど……ううむ、良いのか……？

「ていうかだったらお化け屋敷行きましょうよあっ君先パイ！　お化け屋敷お化け屋敷！」

「は？」

「ね、ね！」

人の腕を引っ張ってこいつは何をしてくれるんだ、先輩達も穏やかな笑顔とか朗らかな笑顔でこっちを見るな。

「あ、其れともアレですか？　あっ君先輩実はビビり？」

「違う、ビビりが周りに多過ぎて違った意味でトラウマなだけ」

「へ？　ビビり多いんか？」

「ユウヤもカイトもカトウも駄目なんですよ、サチト先輩」

あいつ等本当人の首を絞める勢いだからな、其れが怖いわ。

「嗚呼、だったらアサキ、シギもビビりだから宜しく」

そんなん宜しくされたくねぇよ。

ゼンは平気だったかなー、なんてけらけらと楽しそうにするサチト先輩は放って、ハヤ先輩だけに挨拶をしてから部室を後にした。

「あ！　丁度ナツメっちとリョウちゃん先パイが交代の時間だし二人誘ってお化け屋敷行こうあっ君先パイ！」

「……もう好きにしてくれ」

嬉しそうに笑みを浮かべたシノノメを見てから、僕は盛大に溜息を吐いた。

後輩って……こんなに疲れるんですか……？

415＋十月末に文化祭。／5

結果から言おう、要するに死ぬかと思ったアサキです。
鳴呼来たさ、来てやったさお化け屋敷。生徒会室前までムラサメとカトウに声を掛けに行ってから――二人は全力で拒否をしたが、シノノメのマシンガンには敵わなかった――長い行列を並ぶのかと思いきや、先にドウモトと並んでいたコガネイが「あ、アサキー、シギが未だ来ないから此処譲るよー。だからまた後で一緒に入ってなー」と列を譲られ、四人で入れば無論全力で拒否した二人が恐ろしくビビりで（カトウがこうなのは知っていたことだが）なかなか進めなかった。

『一枚足りないー』

『あ、フウカ先ぱ――』

『きゃあああああああ！！！！！！！！』

『わーいフウカ先輩怖ーい☆』

『――……』

あからさまに怖がっていないシノノメはさておき、耳元でカトウに叫ばれ鼓膜が臨終寸前だったのと、ムラサメがザ・硬直で大変だった。おいムラサメ、シノノメに抱き着かれている場合じゃないぞ、動け、お前一番背が高いんだから運べないぞ。というかフウカ先輩の大根役者っぷりも流石だが、其れにビビったお前等もどうなんだ

ええ……！

出口から出る頃にはカトウは叫び疲れ、ムラサメはげっそりしていた。仕事後にお疲れなことだ、だがしかし今お前等が何を言っても僕の鼓膜は震えん、フリーズ中でぐわんぐわんしている。

お化け屋敷に満足した様子なシノノメはそのままムラサメに押し付け、カトウはエノミヤのところに行くからとそのまま別れた。さっきコガネイに後で一緒に入れと言われたことを思い出し、律儀にも電話を入れれば茶道部に居ると言われ仕方なく行ってやった僕。普通に茶ぁしばいている面々を発見し何してやがると思ったが、そういやフドウは茶道部だと毎度忘れる事項に溜息を吐く。

『お化け屋敷より美味しいものの方がいいよなーってことでこうなったんだー』

『あー君此の抹茶美味しいよお！　あー君もほらほら！』

『え、えへへ……あ、今やりますね！』

どうでもいいがお前等、茶室で騒ぐなばかやろう。

其れで済んでいれば僕とてどうにも思わなかったが此のドジ野郎、他二人には上手く出来た癖に僕の時だけトチりやがって抹茶を零し、慌てた結果そのままお湯を被り、あれ此れどういうこと？　の勢いで泣き出し、そして保護者（ゼン君）に連絡を入れると大忙しだった。

謝り倒しなフドウだが僕は別に被害を被っちゃいないから怒ったり怒ったりは――少ししかしてない訳で謝られる筋合いは

無いのだが、平謝りロボットと化したフドウはしょぼんとしながら僕に謝り続け、其れが逆に僕の怒りの沸点を凌駕し、イロイロ大変だった。

で、今に至る。

「文化祭、面倒臭ぇ……」

「まぁアサキ、此れでも飲んで元気出せ」

「ありがと」

僕は二組の喫茶店にやって来ていた。喫茶店なのだから静かだし、此処ならタダ飲みし放題だからな。（※お代はキッチリユウヤに請求されます）

一人で来たのだが、前の席にはカイトが座っている、バーテン姿で。要するに担当時間なんだろう、何故其処に座ったよお前。

「お疲れなこったなぁ、……そういや会うの朝以来か？」

「疲れた、死ぬ」

カイトに会うのは確かに朝以来だ、貰ったコーラを飲みつつ机に伏せる。どうだ器用だろう。

「何か食うか？」

「要らん」

「何しに来たお前」

「疲れた」

「嗚呼そうかい」

もう文化祭も僅かで終わる、一日疲れただけで終わっただと。ぐでる僕を見てけらけらと楽しそうなカイトが暇なのも、お客さんは人が減ってきたのが理由だろう。其処を狙ったという訳では無いが、確かに一人で居るよりはマシか、変な客扱いされるだろう一人なんて。疲れて頭回ってない自分に、僕は相変わらずに溜息を吐いた。

「随分楽しんだみてぇじゃん？」

「うるせぇ、何処がだ」

「全体的に見てだぜ？」

「うるせぇ黙っとけおかわり」

「まさか過ぎるぞお前」

そう言いつつもおかわりを持って来てくれたので僕は遠慮なく其れを受け取った。ふ、なかなか使えるバーテンじゃないか。――口さえ開かなければ。

「ようアサキ」

「あ？」

「――お疲れさん」

「……うるせぇ」

人付き合いは確かに疲れる、畜生、絶対認めない。

415＋十月末に文化祭。／5（後書き）

なんやかんやでカイト氏やユウヤといるのは楽だと気付いたそんな文化祭でした。

416＋無言の理由。／朝

「アサキ、カイリ、おはよう」

カイリだ、朝から怠い眠い以外の単語を発しないアサキと一緒に学校来たら、一組の廊下前にミノルを見つけた。何時ものきりっとした表情で挨拶をされたから返したが、よく見なくてもミノルは廊下に一人で。……何してんだ？

「わたしも居るのだけれど」

「！？」

心内を読まれただと……。ミノルが分身したかのようにすっと横にブレ――たと思ったら違った。背後にシキが居たらしく、抑揚はあるけど淡々とした物言いで俺を見る。

「何してんの」

そして改めて、アサキがそう尋ねる。朝だからすっげぇ不機嫌なのはご愛嬌じゃね。

「まぁ、何も言わずクラスを覗いてみてくれ」

「は？」

ミノルにささっと勧められ、不機嫌なアサキとクラスを覗き込む。

つーかアサキは此処のクラスなんだし覗かずとも入りゃいいのにな……俺もだが。

前扉から一組を覗く、否、結構がっつりクラスを見る。他の一組生徒が俺達を見て何してんだ、って顔を――すると思ったんだが、どうやらそんなことは無ぇらしく、寧ろ俺達を見て少しほっとした様にも見えた。

「奥の席」

シキが促す。奥の席？　……奥の席ってお前其の席はゼ――

「……原因究明だろう？」

「クラスが硬直している原因だけな」

ミノル……自信満々なところ悪ィが――どうしてだ、何でゼンがあんなにドス黒いオーラ発してんだ。

「アサキ、どういうこった」

「何が？」

「……」

嗚呼、お前若干目ぇ悪いんだったか。眼鏡でもコンタクトでもしろや、そして其の何が？　は気付いてる何が？　だろお前。見えなくたって気配で分かるだろうあれは。

「私達が朝来たら既にああだったんだ」

「あの隣に座って居続けられる程、わたしの根性は据わっていない」

隣だもんな、ご愁傷さん。

「って訳でアサキ、君に決めた」

「あれ？　エノミヤお前何時からポケ●ントレーナー？」

「ポ●モンマスターに、わたしはなる」

「混ざってる、ムラサメ海賊王混ざってる」

「まぁ行ってこいよアサキ、折角頼りにされてんだからよ！」

「馬鹿にされてるの間違いじゃね？」

不機嫌ながらツッコミは欠かさないなんて流石だぜアサキ！

「ともかく、普段クラスでもムードメイカー的な役割を担っているゼンがあれでは、クラスの皆も居心地良くないだろう」

冗談はさておきと言わんばかりに、ミノルはひとつ咳ばらい。教室を今一度覗けば、頬杖を突きつつ窓の外をガン見するゼンがいらっしゃるのが見えた。

「放っとけば良いんじゃないの」

「アサキ、お前な……」

「とりあえずショート始まるし、様子見てからで良いでしょ」

其れだけ言って、アサキはずかずかと教室に入って行ってしまった。ミノルもシキもきょとん顔だ。

「……頑張れ、よ？」

「極力な」

「頑張る」

俺は残された二人に、ぎこちなくエールを送っておいた。ま、…俺はあんなドスいオーラ放ってるゼンに近付きたくねぇからクラスに逃げることにするぜ。頑張れよ、皆！

417＋無言の理由。／放課後

アサキだけど。
時はすっ飛んで放課後、結局ゼン君は一日あのままだった。昼休みにフドウに話を聞いたところ、休み前日からあんな調子だったらしい。一体何があったってんだ。
テスト前で下校する生徒が多い中、ゼン君は未だクラスの端の席で窓の外を眺めている。

「……怒ってる、みたいじゃなさそうだな」

「そうみたい」

朝のメンツで廊下から再びクラスを覗きつつ、カイトとムラサメがそう言った。
朝は怒っているように感じていた（らしい）気配がどうやらそうでも無さそうだと悟った面々は、じゃあどうしたのだろうかと様子を伺っている。……僕からしてみれば、朝からゼン君は多分――

「あ、」

カイトの声でクラスを見る、するとゼン君は自分の携帯を見て、慌てた様子は無いけれど急ぐようにクラスを飛び出して行った。

「お、追うか？」

「戻ってくるのを待てば良いのではないかしら」

「其れが良いだろう」

ゆっくりと頷く女子二人を見て、カイト共々クラスでゼン君を待つことにした。

「ストレートフラッシュ」

「なぁアサキ、お前本当どうなってんだ？　なぁどうなってんだ？」

「アサキは本当にトランプの申し子だな」

「そんな申し子は嫌だ」

ゼン君だよ、メールを待っていたのに電話が掛かってきてクラスを出たのは既に三十分以上前。電話を終えてクラスに戻ったら、何でかトランプ中な友人達が居た。

「あ、ゼン」

「……皆どしたの？」

思い出すと、今日皆と全く言葉を交わしていなかった気がする。
っていうか喋ったっけ俺、あれ？
記憶に無いままそう尋ねたら、皆がほっと（あっ君は除く）したように俺を見た。ええと……どしたの？

「お前が何か何時もと違ぇから、皆で心配してたんだよ！」

「え」

「話し掛け辛いオーラ発してたから声は掛けられなかった、すまない」

「わたし達の勘違いなら、其れは其れで良いのだけれど」

……自分がそんなに分かりやすいオーラ発してたなんてゼン君びっくりだよ。
三人の視線を一斉に受け止めながら言うか言うまいか悩んでいたら。

「――で？」

机上のトランプを集めたあっ君が其れを切りつつ俺を見て、

「心配事は、片付いたの？」

と、見事に心中を悟られていたことに気付かされる問いを発した。
他の三人はそうなの？　とでも言う様に首を傾げただけだったけれど、さもつまらないものを見るように――言っちゃ悪いけど、よく

考えたらあっ君は何時もそんなだった――そう首を傾げたあっ君。
別に言いたくないなら言わなくて良いけど、其れだけ言えばトランプを配り出して、再びポーカーと洒落込み出した。

言いたくないことでは無いけれど。言う程のことでは無いと判断した俺は、心配してくれていた風の皆にお礼を言ってから、急いで教室を後にした。
早く帰って、ミヤに教えてあげないといけないことがあるんだ。

418＋無言の理由。／自宅

「ただいまー」

「おかえんなさい」

自宅に着くと、何故か家にユリちゃんが居たよ、ゼン君です。

「ソオが心配するから連れて来た」

「そっか、ごめんね」

「ううん、あたしは大丈夫。其れより――」

何時もは結構気を遣わないような（良い意味で）ユリちゃんが歯切れ悪そうにちらりと此方を見上げるから、俺は黙って笑い、ユリちゃんの横を通り過ぎる際にひとつ頭に手を置いた。

「大丈夫だって、――義兄さん」

『お父さんがたおれたって』

一昨日のバイト中、何度も鳴っていた携帯からミヤがやけに冷静に教えてくれた。姉貴は既に義兄さんのところに向かってて、メールだけが一通『ミヤ頼むわね』、と。

海外単身赴任中の義兄さんが倒れたらしい、原因はさっきまで分からなかったけど、姉貴から入った電話でただの過労だったことが判明した。本当に良かった、義兄さんの身に大事が無くて良かった。

『直ぐにそっち帰るか――ちょっと何出歩いてるのよ……』

『どしたよ姉貴』

『――』

『無視か』

『――ゼン？』

『……義兄さん？』

久しぶりに聞いた義兄さんの声は、以前と変わらず優しかった。倒れて数日間眠っていたとは思えない元気な声で謝罪されから、元気そうで良かったとだけ言ってとっとと寝ろと忠告した。

『心配掛けた？』

『とても』

『やっぱりか、すまん』

『良いから寝ろ、姉貴が会社潰しに行く前に』

不良上がりのようなもんの姉貴が、うちの夫過労死させる気かいと怒鳴り散らす前にこっちに帰してくれ義兄さんや。あんたが大人しく寝れば姉貴も帰って来るだろうから。

「そか、良かったね」

ユリちゃんとリビングに行くと、ソオちゃんとミヤは二人してソファで寝ていた。一昨日からずっと心配しっぱだったから疲れたんだろうな、後で教えてやればいいかなと、数度髪を梳いてやる。

「別に仕事の環境が劣悪とか、そういう訳じゃないらしいよ。たまたま仕事が重なったってだけみたいだから、……良かった」

「ミヤコちゃん、泣かないで偉かったよ」

制服姿のままユリちゃんがそう教えてくれた、代わりに「ユリちゃんもありがとうね」とだけ返したら素っ気なくだけど頷いてくれたから、ふふ、と笑っておくことにする。

「夕飯まで寝かしといてあげようかな」

「……ご飯、あたしが作ろうか？」

二人に毛布を掛けてから。

突然のユリちゃんの申し出に呆ける俺、そんな態度に若干慌てたらしいユリちゃんは、ええと、だって、と前置きを加えてから、バツの悪そうに上目遣いをして言った。

「なんか、ゼンのが疲れてる風だから……」

「俺が？」

こくりと。頷かれて考える。

「……そういや、あんまし寝てない」

電話ではああだったミヤもやはり不安だったらしく、夜寝付くのも遅くて話し相手になってたし、学校でだって全然寝てない——其れどころか滅茶苦茶授業真面目に受けてた——。何時もは暇さえあれば寝てるかゲームしてるから、慣れない勉強なんかして確かに疲れた。

「そんな顔してたら誰だって気付くよ。あんまりシギ兄心配させないでよね、此れ以上縮んだらどうしてくれんの」

シギは別に縮んでないと思うんだけどな。

「そんなあからさま？」

「あたし等にとったらね。ゼン君のことなんてパパママが隠居する前から知ってんだからさ」

「そんなこと言ったらゼン君はユリちゃんが生まれてからずっと知ってるけどね」

人の両親を隠居させないでくれ、ただ単に田舎暮らしで農業したくなっただけらしいから。……あれ、隠居かコレ。

「という訳で、ご飯はあたしが作るよ、ゼン君は二階で寝てきてね。ちなみにカレー一択だけど」

「りょーかい、そうさせてもらうわ」

寝ていないと気付くと眠くなるのが人間というもの、既に某国民的アニメの二択問題を叩き出す０点マニアの小学五年生並のスピードで寝れるくらいには眠い。

「お礼はアイスで良いよ」

「ははっ、ユリちゃんお手軽」

フドウ家で唯一のクール担当の、そんな優しさに感謝しつつ二階へと向かった。

……本当、良かった。

419＋寒空で行こう！

ユウヤでっす！　最近めっきり寒くなってきたけど、カイト君は未だ未だ薄着星人だよ！　其れ故風邪引いて今日休みだけどね。

「何でこんな時期にさ」

「ん？」

「持久走大会やんなきゃなんねぇんだよ」

あれ此れデジャヴ？　何かアサ君去年も同じような文句言ってなかったっけ？　去年は大会の存在意義じゃなくて、大会自体についてだったとは思うけど。

「まぁまぁ良いじゃん！　俺走るの割と好きだし！」

「僕は大嫌いだけどね」

巷で今日は“良い双子の日！”とか言われてるのにどうだい俺達、最早感性が双子じゃないけど？

という訳で本日持久走大会！　去年はトップだったけど今年はどうだろう、カイト君居ないと張り合う人居ないし、今年はアサ君に着いてこうかな。てか気になるんだよね、アサ君って持久走大会とか走ってるの？

「よっし！　今年は調査の年だ！」

「何言ってんだお前」

可哀相なものを見る目で見られた、畜生。

「……ねぇ、アサ君？」

「ん」

「走らないの？」

「何で走んの？」

……え、だって持久“走”大会だよ？

走るコースにやって来て、スタートの合図が鳴ってから早数分。

今年はハヤ先輩がお休みらしく、一人で歩く弟の後に続いているけれど。走らない、一向に走らない、多少早歩きなだけで一向に走らない。

「走らなくても完走出来ればそれで良いだろ」

「最早完走じゃないけどね、ただの完歩だけどね其れ」

「細かいこと気にすんな」

「歩くか走るかって結構違――いったい！　アサキ今の踵が脛に入ったいったい！！」

容赦無いな本当！　ノールックはいけないよアサキ……！

「でもアサ君、少しは走らないと時間が……」

「分かってるよ、制限時間間に合わなくて走り直しなんて絶対にしない」

嗚呼、そういうのはちゃんと頭に入ってるんだね、流石。だったら良いんだけどさ、なんて思いつつ結局後に続いていれば。

「頑張る気配無さそうだけど頑張りなさーい！」

後ろから自転車部隊と化したアマギリ君が現れた。大丈夫かな、此処土手なんだけどアマギリ君落ちないかな。

「トウマ、何してんの」

「何って、応援」

「アマギリ君って何時までうちの学校居るの？」

「ちょっと酷くないユウヤ！　そんなに僕に居なくなって欲しいの！？」

「何を言ってるんだいずっと一緒が良いに決まってるじゃないか！」

「お前等何の話してんだよ」

しまった話が飛んでた。

「大学行きながらだけど、授業もほぼ無いから今年中はずっと居るよ？」

「あと一ヶ月？」

「あ、違うや今年度だった」

暇だねアマギリ君。

「って、僕のことは良いから走りなね二人共！」

「あ、アマギリ君あんまり張り切ると危な――「あ」」

アマギリ君が俺達を放って先に行こうと立ち漕ぎをしようとした其の時、期待を裏切らないというか何と言うか、見事に路肩にタイヤを取られた様子。そのまま自転車ごと――アマギリ君は土手上から落下した。

「うわあっ！！！！」

「……やると思ったよ」

「……俺も」

助けるべき、なのかどうか。っていうか結局なアクロバティック

感満載だったんだけど……大丈夫？

『今誰か落ちなかった？』

『え、うそ、あの人動かないよ！？』

『大丈夫なの……！？』

「――ユウヤ、先行ってハヤサカ先生探して来い」

「ラジャ」

他の生徒の足を止めることになる前にあのドジっ子を回収しなくちゃである、勿論回収するのはハヤサカ先生だけどね。

直ぐ近くに居たハヤサカ先生に事情を説明し、溜息と共にさっきの場所に向かってくれたのを確認してからアサキと合流。持久走という名の散歩は続く様だ。

「ゲーム欲しい」

「マイペースだねとても」

走る気ゼロなんだけど此の子。爽やかな笑みで言ってみたけど、結局アサ君が此の後走り出すことは無かったとさ。制限時間計算しながら早歩き貫くって、どんな計算繰り広げられてるのお前の頭。スキルの無駄遣いだよ……！

まぁ、最初から分かってたことだけどさ。

４２０＊閑話＋これぞまさに作者無双。

はうあーゆー！　二十話振りの作者です！　何だが早いね！

「そうでもなくないか」

「アザイさんの感覚でってことじゃない？」

細かいことは気にしない気にしなーい、本当は二ヶ月くらい経ってる気がするけどきにしないんだから。

「ってことは……三日に一度更新？」

「何だかんだで更新してるんだねぇ」

いや、多分二ヶ月とちょっと経ってるから更新滞ってるぞ☆

「「おい」」

忙しいっていう訳では決して無いです、ただただ他のことに精一杯なだけで……！　それを忙しいっていうんじゃないの？　ってなツッコミは受け付けないから宜しく。

「要するにパロは今回もサボるってことだねアザイさん」

何を言っているのかなユウヤ君、元から誰も期待なんてしていないよ。

「これは自虐的なんじゃなくて面倒臭ぇからそう言ってんだろお前」

ったり前じゃああーりませんか。

「「ダメだこいつ」」

はい！　という訳で本日は晴天也！　今回も今回とてやることは謝罪しか無いけど張り切っていきましょー！

という訳で更新滞ってますすんませーん！

「軽っ」

先にも述べたようにこれと言って忙しい訳ではないけど、他のことやってたりやる気が乗らなかったりやる気が乗らなかったりするだけであり。

「変換ミスったみたくなってるけどね！」

仕方ないじゃない！　人間だもの！

毎日エブリデイ休みなら考えても良いかな！　あ、でもそれはそれで他のことやる時間が増えて更新なんて絶対にしないか。

「ええ……」

「僕が言うのもアレだけど、こいつ面倒臭ぇな」

長期休みの更新が滞るってのが良い例だよ、これ次の長期休みにまた長い話書こうとしてんのに大丈夫かな。

「前々から思ってたけどアザイさんってネタバレの宝庫だよね！　読者さまとかのコメントにもたまにネタバレしてるし！」

「まさか自分の作品のネタも惜しみ無くバラすとは……」

出し惜しみするようなネタなんて持ってねぇし？　というかネタバレしたところで本当にやるか分からないし。

（行き当たりばったりにも程がある）

口に出してというか過去の閑話で言ったかどうかも分かりませんが、基本的朝夜グラフィティ。は無計画更新型日常地盤の何でもありモダンだというコンセプトを元に――

「それも今考えたでしょ！」

何故分かった。

「コンセプトなんて難しい言葉使うからだよ、意味分かってんのか」

コンセプト――広告・企画・新商品などの全体をつらぬく、新しい観点・発想による基本的な考え方。出典：明鏡国語辞典。

「辞書を使うな……」

とまぁ冗談はさておき、無計画連載であることには何ら変わりは無いんだよ。っていうか本当に誤字多いし後で直そうとしたら僕忘れちゃうもんでさぁ。

「最早小説と名乗るのもおこがましい」

うん、その通りだね。マジモノの小説が読みたい人はブラウザバックをオススメします。

「４２０話やってきて今更言うかそれ」

それもそうさな。此処まで読んで下さってる方々はもう今更そんなの気にしねぇよって思ってるよね！　じゃあこれからも気にしないで下さい！　そしてこれからも暇潰し活用して下さる方々！　更新遅くても文句……言ってまで読みたいかね……。

「お前作者ならもう少し強気で行けよ」

「頑張って！　アザイさん！」

じゃあ遅いけど気にしないで下さい、これで良いっすかね。

ですがまぁ、何時も読んでるよーとコメントを下さる方には感謝してるですよ、日本語おかしくなった。

で、なかなか語れたからもう良いかと思ったんだが、最近思い立った不満言って良い？

「え、どうかしたの？」

最近さ、話に顔文字とか、ふざけた間を空けたりだとか、そういう小説“らしからない”ことが出来てない。

「……は？」

最初の方読んでみ？　顔文字使ったり強調の為に間ァ空いてたり、そういう小説でこういうの使ったらアウトだろかっこわらい、なことやってないんだよ！

「あ、あのー……で？」

やりたい！　だって僕は一度だって朝夜。を小説らしく書いてたことなんて無いもの！

「じゃあなんだと思ってるのさ……」

……雑記、的な……。小説風雑記、的な……。

「また無計画な発言だろそれ」

はっはっはその通りさ悪いか！

「いや、本当その辺にしておかないと悪評飛ぶぞ作者」

えー、悪評とかこんな底辺の小説風雑記に飛んできませんよー（・ω・、）

「さっそく顔文字使ったねアザイさん！」

まぁ、悪評飛んだら飛んだだよね。……しかし作品ではなくて閑話で無双し過ぎて悪評飛ぶのは何か違うだろ……！

「あ、作者がやっとツッコミに戻ってきた」

「生きてるか作者」

生きてます、まとめくらいちょっと落ち着きます。

朝夜グラフィティ。は今後もこんな感じでのんびりまったりを乗り越えて小説らしからぬ小説としてやってくつもりですが、それでも良いよ！　仕方ないから善処します、って方はお付き合い下さいね。文句がある方はほらほら、こんなところで文句言ってないで、他の沢山ある素敵な小説の元へ旅立って下さいな。

ってことで今回は作者がはっちゃけ過ぎて長くなったね！　ぐだぐだ閑話、以上です！

「最後だけキャラ違ったな……」

「アザイさんが分からない」

ふふふっ、以上だっつってんだろお前さん達。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6274f/

朝夜グラフィティ。

2011年11月29日23時44分発行